俳諧歳時記

春

俳諧歳時記

春

高濱虛子
藤井乙男
國富信一
武田祐吉
山本信哉
寺尾新
牧野富太郎

改造社

例言

一、本書は「俳諧歳時記」春之部とす。

一、春之部に採用せる季題の選定并びに排列の順序は、専ら解説擔任者の意見に依りたるも、古書校註の部にのみ存する古季題は、編輯部に於て適宜に挿入せり。

一、春之部收載季題の範圍を、他季との區別上便宜示せば、立春より立夏の前日迄の期間より、陽暦一月及び陰暦一月に屬する季題の大部分は、新年之部に入るべきものとして之を控除し、陽暦二月・三月・四月、陰暦二月・三月を按配したるものを採用せり。但し、陰暦一月の季題にして、今日主として陽暦にて二月に行はれ居るものは、新年と特に關係なき限り春之部に編入せられたり。

一、春之部の季題中、新年之部又は夏之部に重出せるもの數ヶ所あるも、こは便宜のため兩者に入れたるものにして、地方により陽暦及び陰暦を採用せるもの相半ばする季題なり。季の判定は兩者を對照すれば判明する様に心掛けたり。

一、本書收載の例句は、句作并びに鑑賞上の便を考慮し、名句集を兼ねしむるため、從來の例を遙かに凌ぐ句數の採擇を乞ひて收容せり。排列は擔任者の意向による。

一、挿畫は編輯部選に高濱氏の選定せられたるものを加ふ。尚、牧野・寺尾兩博士の好意をも得たり。

一、本書の執筆分擔は左の如し。

季題解説・實作注意・例句	高濱虚子
古書校註	藤井乙男
參考	
時候・天文	國富信一
人事	武田祐吉
宗教	山本信哉
動物	寺尾新
植物	牧野富太郎

昭和八年十一月

序

初め改造社から俳諧歳時記の春之部・冬之部の二册を編輯することの相談を受けた時分に、私は多忙でもあるし其任に非ずと云つて辭退した。けれどもたつてとの事であつたので、富安風生・山口青邨二君の助力を俟つことによつて遂に承諾することになつた。兩君もそれ〴〵多忙な境涯に居られるに不拘、計畫・總攬・校訂・整理・選句等のことに任じて私の勞をして極めて尠からしめたことを深謝する。其他ホトトギス同人諸君を初めとして、幾多の人々の解説の勞を分擔せられた事を深謝する。又、井手原太郎君が事務・筆寫等の一切の煩勞を執られた事を深謝する。

尙、春之部の解説に當られた諸君は槪ね左の如くである。

九州 杉田久女君
京都 池尾ながし君
東京 松藤夏山君
新潟 中田みづほ君
松山 酒井默禪君
京都 鈴鹿野風呂君
新潟 濱口今夜君
大阪 皿井旭川君
丹波 西山泊雲君
滿洲 江川三昧君
朝鮮 清原枴童君
堺 山本梅史君
讃岐 村尾公羽君
神戸 五十嵐播水君
東京 赤星水竹居君
東京 麻田椎花君
大阪 森川曉水君

大阪 田村木國君
東京 川端茅舍君
臺灣 山本孕江君
神戸 岩木躑躅君
東京 本田あふひ君
東京 星野立子君
三河 岡田耿陽君
東京 池内たけし君
臺灣 山本岬人君
東京 鈴木花蓑君
大阪 藤田耕雪君
船橋 齋藤雨意君
鎌倉 松本たかし君
北海道 石田雨圃子君
下關 日原方舟君
東京 中村草田男君

この他、二三項究不明なものを依賴したもの、或は報告されたうちから採用したもの等は甚だ多數であつたため、芳名は省略する。

其他、新題の報告・舊題の參考・日々の自然現象の報告・希望・訂正など、各地から熱心に送つて貰つたものは夥しい數に上つた。これ亦一々芳名は記載しない。これらの取捨は全體との調和を考慮して決定した。

尙、「山茶花」からは新題二三を採錄する便宜を得た事を附加し、玆に深謝する次第である。

昭和八年十月

高濱虛子

凡例

一、當方で解說を附した季題は總數七七八項、これを時候・天文・地理・人事・宗教・動物・植物の七部門に分類し、この配列の順序は所信に從つて決定した。新題、舊題の整理も出來るだけ行つた。

一、季題解說は凡て事實を根底とし、一應全國の同人に依囑し、集つたものを再訂三訂し、更に不明なものは何回でも問合せた。地方的なもの、專門的なものは凡てその地方の人、專門の人の言を徵し、若くは實地踏査した。この爲め古題は稍〻面目を新たにしたかと思ふ。

一、新題は北海道・樺太・鮮朝・滿洲・臺灣に亙つて、洽く檄を飛ばして蒐集し、嚴選した。其他、各地からの夥しい報告を取捨し、現行歲時記を涉獵し、新題で收錄すべきものは、一々各作家に解說を求めた。

一、例句は總數一萬餘句、うち左の三十六家、約五千七百句は改造社より必ず加ふべき句として指定されたものであつて、當方の權限外である。

宗因　芭蕉　鬼貫　言水　素堂　來山　浪化　丈草　去來　其角
嵐雪　許六　惟然　北枝　支考　杉風　沾德　桃隣　千代　蕪村
太祇　召波　樗良　也有　蓼太　几董　白雄　曉臺　闌更　士朗
巢兆　成美　一茶　乙二　蒼虬　梅室

但しこれら古句は一句々々定本によつて校合した。

其他の例句は當方で選錄した。其等の出典は一々明にした。

尚、出典は概ね原書名通り明記したが、左の五書は長いため下の如く略記した。

同人俳句集は　同人
懸葵第一句集は　懸葵
ホトトギス雜詠全集は　ホトトギス
續ホトトギス雜詠全集は　續ホトトギス
同全集以後は　ホトトギス誌

高濱虛子

凡例

一、古書校註として引用した書は、既刊の夏之部・秋之部・冬之部と略〻同様であるが、比較的滑稽雜談を採用したところが多い。これは年浪草・栞草など同書の孫引が多いからである。

一、これらの引用書は、凡て原本に據つたが、滑稽雜談のみは、帝國圖書館本の寫本を本として、國書刊行會の刊本を參考照合した。

一、引用文は、紙數に制限あるため、特に必要でない個所は省略した。その場合、中略したものは、（略）と記したが、上略・下略の分は、繁瑣を厭うて、ことわることをしなかつた。

一、引用文は、通讀の便の爲め、送假名の不足を補ひ、濁點を施し、漢字・假名の誤を正し、又間〻假名を漢字にかへもし、漢文は總べて假名交り文に書き下したが、原文には少しの變更もない。

一、註は、既刊夏・秋・冬の三册と同じ標準で、同じ程度に施したつもりである。

一、校正は、遠隔の地にあるため、自ら之に當ることが出來なかつたので、在京の宇田久君に委囑した。

昭和八年十一月

廣島客寓中
藤井乙男識

部類目次

時候……一
天文……四九
地理……一〇三
人事……一三九
宗教……二六二
動物……三五七
植物……四七二

目次

時候

春　一
立春　四
中和の節　六
寒明　七
初春　七
早春　七
春浅し　八
餘寒　八
春寒し　一〇
冴返る　一一
比良の八荒　一二
舊正月　一三
二月　一三
きさらぎ　一三
三月　一四
彌生　一五
仲春　一六
四月　一六
晩春　一六
春分　一六
春社　一七
彼岸　一八
春めく　一八
春ざれ　一九
春まけて　一九
暖か　二〇
麗か　二一
長閑　二二
永き日　二三
遅き日　二六
春の曉　二七
春の朝　二八
春の晝　二八
春の暮　二九
春の宵　三〇
春の夜　三一
朧月夜　三三
木の芽時　三四
花時　三四
蛙の目借時　三五
苗代時　三五
八十八夜　三六
春深し　三六
暮の春　三六
春を惜む　四二
春暑し　四二
夏近し　四三
彌生盡　四三
雨水　四四
啓蟄　四四
清明　四五
穀雨　四六
獺魚を祭る　四六
魚氷に上る　四七
鷹化して鳩と爲る　四七
龍天に登る　四八
田鼠化して鴽と爲る　四八

天文

春日　四九
春の月　五〇
朧月　五三
春の星　五七
春の闇　五七
春の空　五七
春の光　五八
春の雲　五八
東風　五九
涅槃西風　六二
貝寄風　六二
春風　六三
風光る　六六
油風　六六
霾　六八
春雨　七三
社翁の雨　七五
梅若の涙雨　七五
杏花雨　七五
春霖　七六
菜種梅雨　七六
春の雪　七六
雪の果　七九
春の霰　八一
春の霙　八三
春の露　八三
春の霜　八三
忘れ霜　八三
初虹　八五
初電　八五
初雷　八五
春の雷　八六
佐保姫　八七
霞　八八
鐘霞む　九五
陽炎　九五
春陰　九九
花曇　九九
鳥曇　一〇〇

鰊曇　一〇〇
蜃氣樓　一〇一

地理

春の山　一〇三
山笑ふ　一〇四
彌生山　一〇四
燒山　一〇四
燒野　一〇四
荻燒原　一〇五
春の野　一〇五
菫野　一〇六
逃水　一〇六
春の水　一〇六
水溫む　一一〇
春の川　一一一
春の池　一一二
春の湖　一一二
春の海　一一二
春の潮　一一三
春の波　一一四
春の田　一一四
苗代　一一五
春の堤　一一七
春の泥　一一七
冱返る　一一八
殘雪　一一八
雪間　一一九
雪崩　一二〇
雪解　一二〇
雪解雫　一二四
雪しろ　一二四
凍解　一二四
春の氷　一二五
殘る氷　一二五
氷泮　一二五
氷流るる　一二六

人事

爐塞　一二九
釣釜　一三〇
炬燵塞ぐ　一三一
春の炬燵　一三一
北窓開く　一三一
屋根替　一三一
春の燈　一三二
松の緑摘む　一三二
垣繕ふ　一三二
目貼剝ぐ　一三三
大掃除　一三三
紀元節　一三三
天長節　一三四
地久節　一三五
建國祭　一三五
陸軍記念日　一三五
觀櫻御宴　一三六
列見　一三六
御燈　一三六
一夜正月　一三七
二月禮者　一三七
御事納　一三七
二日灸　一三八
出代　一三九
花朝節　一四二
阿蘭陀渡る　一四二
針供養　一四三
繪踏　一四四
寒食　一四五
雁風呂　一四六
大試驗　一四六
卒業　一四六
入學　一四七
苦力來る　一四八
雪割　一四八
野山燒く　一四八
奈良の山燒　一五一
畑燒く　一五一
芝燒く　一五一
磯開き　一五二
磯遊び　一五二
磯菜摘　一五三
桃の節句　一五四
上巳　一五五
雛市　一五六
雛遊　一五七
鏤人　一六二
油下のト　一六三
雛の使　一六二
雛合　一六三
雛流し　一六四
柳の髮　一六四
曲水の宴　一六四
鷄合　一六六
汐干　一六六
踏青　一七一
野遊　一七二
摘草　一七三
梅見　一七四
花見　一七五
櫻狩　一七八
花の宴　一七九
花の踊　一八〇
花筵　一八〇
花筏　一八〇
花篝　一八一
花守　一八一
花の宿　一八一
花の都　一八二
花盗人　一八二
花衣　一八二
花軍　一八三
花車　一八三

花の鈴　一八三
花人　一八四
櫻人　一八四
櫻戸　一八四
吉原の夜櫻　一八五
島原太夫道中　一八五
都踊　一八六
東踊　一八七
蘆邊踊　一八七
浪花踊　一八八
此花踊　一八八
初午芝居　一八八
三の替　一八八
鶯合　一八九
鶯笛　一八九
雉笛　一九〇
雲雀笛　一九〇
駒鳥笛　一九〇
風車賣　一九〇
風船賣　一九一
石鹸玉　一九一
鞦韆　一九二
ボートレース　一九三
野球リーグ戰　一九四
運動會　一九四
遠足　一九四
鬪牛　一九四
どんたく　一九五
觀潮　一九五
凧　一九五
長崎の凧揚　一九八
小弓引　一九八
梅の花衣　一九九
鶯衣　一九九
松がさね　一九九
柳重　一九九
若草衣　一九九
躑躅の衣　二〇〇
菫の衣　二〇〇
藤がさね　二〇〇
櫻衣　二〇〇
山吹衣　二〇〇
早蕨の衣　二〇一
桃の衣　二〇一
小袖納　二〇一
捨頭巾　二〇一
マント脱ぐ　二〇一
胴着脱ぐ　二〇二
春の日傘　二〇二
麥踏　二〇二
耕　二〇三
田打　二〇四
畑打　二〇五
畦塗　二〇七
種物　二〇八
種選　二〇八
種井　二〇九
種俵　二〇九
種浸し　二〇九
種蒔　二一〇
種案山子　二一一
苗床　二一一
苗札　二一二
花種蒔く　二一二
牛蒡蒔く　二一二
甜瓜蒔く　二一三
胡瓜蒔く　二一三
西瓜蒔く　二一三
絲瓜蒔く　二一三
南瓜蒔く　二一三
夕顔蒔く　二一四
罌粟蒔く　二一四
茄子蒔く　二一四
朝顔蒔く　二一五
鷄頭蒔く　二一五
藍蒔く　二一五
麻蒔く　二一六
蓮植うる　二一六
睡蓮植うる　二一六
芋植うる　二一七
木の實植うる　二一七
球根植うる　二一七
苗木植うる　二一七
接木　二一八
取木　二一九
挿木　二二〇
菊の根分　二二一
菊植うる　二二三
萆薢掘る　二二三
慈姑掘る　二二三
若布刈る　二二三
海苔搔　二二四
羊毛剪る　二二五
廐出し　二二六
蠶飼　二二六
蠶卵紙　二二九
春挽絲　二三〇
桑摘　二三〇
桑賣　二三一
茶摘　二三一
製茶　二三四
茶の葉選　二三四
硯石取る　二三五
蜆取　二三五
馬蛤突　二三五
春鮒釣　二三六
鮎汲　二三六
上り簗　二三七
鳴鳥狩　二三七
雀くすべ　二三八
銃獵停止　二三九
八瀬の鹿狩　二三九
木流し　二三九
磯竈　二三九

團扇作り　二四〇
初袷　二四〇
瓜插す　二四一
花菜漬　二四一
山葵漬　二四二
蒸鰈　二四二
白子干　二四二
目刺　二四三
干鱈　二四三
數の子製す　二四四
木の芽漬　二四四
櫻漬　二四五
木の芽和　二四五
木の芽味噌　二四六
蕗味噌　二四六
木の芽田樂　二四六
青饅　二四七
胡葱膾　二四七
鮒膾　二四七
目摩膾　二四八
田螺和　二四八
蜆汁　二四九
洲蛤　二四九
壺燒　二四九
蠶豆腐　二五〇
鬪茶　二五一
枸杞茶　二五一
白酒　二五一
桃の酒　二五二
治聾酒　二五二
山椒の皮　二五三
切山椒　二五三
鶯餅　二五四
草餅　二五四
櫻餅　二五五
菱餅　二五六
椿餅　二五六
蕨餅　二五六
五加飯　二五七
枸杞飯　二五七
菜飯　二五七
白魚飯　二五七
小水葱摘む　二五八
朝寢　二五八
春眠　二五八
春の夢　二五九
春愁　二五九
春の宮　二五九
種痘　二六〇
湯治舟　二六〇
春の風邪　二六〇
雁瘡癒ゆ　二六一

宗教

春季皇靈祭　二六二
神武天皇祭　二六二
新年祭　二六三
春祭　二六三
橿原祭　二六三
春日祭　二六四
宇佐祭　二六七
山王祭　二六七
山王祭榊伐　二七〇
龍田祭　二七〇
松尾祭御出　二七〇
稻荷祭御出　二七一
八幡初卯神樂　二七三
初午　二七三
二の午　二七八
本妙寺詣　二七九
靖國祭　二七九
北野菜種御供　二八〇
薪能　二八一
安良居祭　二八二
伊勢參　二八五
十三詣　二八五
先帝祭　二八六
石山祭　二八七
粟津祭　二八八
平岡平國祭　二八八
水間祭　二八八
大原野祭　二八九
園并韓神祭　二八九
率川祭　二八九
淺間祭　二八九
粟島祭　二九〇
廣峰祭　二九〇
水尾祭　二九一
比良祭　二九一
石清水臨時祭　二九一
一乘寺祭　二九一
一夜官女　二九二
柳祭　二九二
椿祭　二九二
櫻花祭　二九三
花換祭　二九三
鎭花祭　二九四
水口祭　二九四
彼岸會　二九五
踊念佛　二九七
時宗踊念佛　二九七
涅槃會　二九八
餅花煎る　三〇二
開帳　三〇三
佛生會　三〇三
花御堂　三〇四
甘茶　三〇五
竿踊　三〇五
花祭　三〇六
千本念佛　三〇六
壬生念佛　三〇七
嵯峨の大念佛　三〇八
二月堂の行　三〇九

お水取　三一一
御身拭　三一二
道明寺祭　三一三
遺教經會　三一三
經供養　三一四
比良八講　三一四
祇園御八講　三一五
吉祥院八講　三一五
東福寺懺法　三一六
季御讀經　三一六
祇園一切經會　三一六
勸學會　三一七
峯入　三一七
摩耶詣　三一八
鞍馬の花供養　三一九
品川寺鐘供養　三二〇
嵯峨の柱炬　三二〇
藥師寺造華會　三二一
藥師寺最勝會　三二一
般若寺文殊會　三二一
東大寺授戒　三二二
浦佐の堂押　三二二
池上千部　三二二
六阿彌陀詣　三二三
遍路　三二三
お札流し　三二五
染織祭　三二六
湯祈禱　三二六
河豚供養　三二七
義士祭　三二七
猿の口開　三二八
巳の日の祓　三二八
須磨の御祓　三二九
釋尊　三二九
清明　三三一
郡王祭　三三一
春の關帝祭　三三三
媽祖祭　三三三
復活祭　三三三
謝肉祭　三三三
聖母祭　三三三
聖金曜日　三三三
吉野の會式　三三四
吉野の餅配　三三四
積塔會　三三五
辨天堂琵琶會　三三六
聖靈會　三三六
太子會　三三七
常樂會　三三七
御影供　三三八
高雄山女詣　三四〇
御室詣　三四〇
御忌　三四〇
行基詣　三四二
善導忌　三四三
西行忌　三四三
兼好忌　三四四
元政忌　三四五
蓮如忌　三四五
泉涌寺開山忌　三四六
人丸忌　三四六
小野小町忌　三四七
寶朝忌　三四八
利休忌　三四八
お國忌　三四九
光悦忌　三五〇
大石忌　三五〇
梅若忌　三五一
宗因忌　三五二
其角忌　三五二
竹冷忌　三五二
鳴雪忌　三五二
啄木忌　三五三
官幣社例祭表　三五五

動物

獸交む　三五七
春の駒　三五七
馬の仔　三五七
春の鹿　三五七
孕鹿　三五八
鹿の角落つ　三五八
猫の戀　三五九
猫の子　三六二
棹姫鷹　三六三
小鵜　三六三
鳥屋際　三六四
雉　三六四
呼子鳥　三七〇
駒鳥　三七二
赤鬚　三七三
鶯　三七三
雲雀　三八五
麥鶉　三八八
合生　三八九
松毟鳥　三八九
鷽　三九〇
燕　三九一
岩燕　三九五
花鳥　三九五
百千鳥　三九六
貌鳥　三九七
囀り　三九七
鳥交る　三九八
孕鳥　三九九
鳥の巢立　三九九
孕雀　四〇〇
雀の子　四〇〇
鷹化して鳩と爲る　四〇二
田鼠化して鴽と爲る　四〇二
引鶴　四〇二

残る鶴　四〇三
春の雁　四〇三
帰る雁　四〇四
鳥帰る　四〇七
鳥雲に入る　四〇七
水鳥囀る　四〇八
引鴨　四〇八
残る鴨　四〇八
鳥の巣　四〇八
鷲の巣　四一〇
鷹の巣　四一一
鶴の巣　四一一
雉の巣　四一二
鳶の巣　四一二
時鳥の巣　四一二
鶯の巣　四一三
燕の巣　四一三
雀の巣　四一四
鴉の巣　四一四
鵲の巣　四一四
鷺の巣　四一五
亀鳴く　四一五
蛙　四一五
蝌蚪　四二二
櫻鯛　四二三
魚島　四二四
鰊　四二四
鰆　四二六
鱵　四二七
子持鯊　四二七
鯥　四二八
鮊子　四二九
白魚　四二九
黄鯝魚　四三二
菜種河豚　四三三
鱒　四三三
諸子魚　四三三
公魚　四三四
櫻鯎　四三五
柳鮠　四三六
初鰣　四三六
小鮎　四三六
獺魚を祭る　四三七
魚氷に上る　四三八
螢烏賊　四三八
花烏賊　四三八
飯蛸　四三九
寄居蟲　四四〇
榮螺　四四一
蛤　四四一
淺蜊　四四二
海松食　四四三
赤貝　四四三
板屋貝　四四四
帆立貝　四四四
簾貝　四四五
常節　四四五
馬蛤　四四六
貽貝　四四七
馬珂貝　四四七
烏貝　四四八
子安貝　四四八
細螺　四四九
櫻貝　四四九
鳥貝　四五〇
蜆　四五〇
蜷　四五二
田螺　四五二
雀海中に入り蛤となる　四五五
地虫穴を出づ　四五五
蛇穴を出づ　四五五
蜥蜴穴を出づ　四五六
蝶　四五六
鳳蝶　四六二
菜花蝶に化す　四六三
蜂　四六二
蜂の巣　四六五
虻　四六六
獐虻　四六七
蠶　四六八
山繭　四六八
春の蚊　四六九
春の蚤　四七〇
花見虱　四七〇
春の蠅　四七〇
蠅生る　四七〇
春蟬　四七一

植物

梅　四七二
紅梅　四九〇
椿　四九一
初花　四九七
花　四九七
殘花　五一五
初櫻　五一六
櫻　五一七
山櫻　五三一
彼岸櫻　五三四
桃の花　五三六
李の花　五四〇
梨の花　五四〇
杏の花　五四二
巴旦杏の花　五四二
棠梨の花　五四三
海棠　五四三
辛夷　五四四
林檎の花　五四五
金縷梅　五四六
黄梅　五四六
山茱萸の花　五四七
榠櫨の花　五四七

榲桲の花　五四七
櫨子の花　五四八
木瓜の花　五四八
松の花　五四九
十返りの花　五五〇
杉の花　五五〇
銀杏の花　五五一
榧の花　五五一
赤楊の花　五五二
榛の花　五五二
梓の花　五五三
樫の花　五五四
柿の薹　五五四
柳絮　五五五
猫柳　五五五
ライラック　五五六
木瓜の花　五五七
楊梅の花　五五七
長春花　五五七
山櫻桃の花　五五八
郁李の花　五五八
櫻桃の花　五五九
木苺の花　五五九
苗代茱萸の花　五六〇
枸橘の花　五六〇
山椒の花　五六一
黄楊の花　五六一
沈丁花　五六一
三椏の花　五六二
青木の花　五六三
馬醉木の花　五六三
滿天星の花　五六五
岩梨の花　五六五
躑躅　五六六
石南花　五六八
接骨木の花　五七〇
桑の花　五七〇
楮の花　五七一
楝の花　五七一
鈴懸の花　五七二
山楂子の花　五七二
小粉團の花　五七二
小米花　五七四
花筏　五七四
檳榔子の花　五七五
梅の花　五七五
蠟瓣花　五七五
蚊母樹の花　五七六
木蘭　五七六
黄心樹　五七七
紫荊　五七七
連翹　五七八
通草の花　五七九
郁子の花　五七九
山歸來の花　五八〇
藤　五八〇
木の芽　五八四
芽立ち　五八六
若緑　五八六
山椒の芽　五八七
楓の芽　五八七
楤の芽　五八七
枸杞　五八八
芽ばり柳　五八八
柳　五八九
桑　五九九
五加　六〇〇
令法　六〇〇
蘗　六〇一
蔦の若葉　六〇二
葛の若葉　六〇二
萩若葉　六〇二
春の筍　六〇二
竹の秋　六〇三
山吹　六〇三
酴醾　六〇七
大根の花　六〇八
菜の花　六〇八
豆の花　六一二
蠶豆の花　六一三
豌豆の花　六一三
菫　六一三
三色菫　六一六
香菫　六一六
紫雲英　六一六
苜蓿の花　六一八
薺の花　六一八
葱の擬寶　六一九
苺の花　六一九
蒲公英　六二〇
土筆　六二一
薊　六二三
櫻草　六二四
蘩蔞　六二五
九輪草　六二六
洲濱草　六二六
翁草　六二七
一輪草　六二七
二輪草　六二八
春蘭　六二八
蠡實　六二九
黄水仙　六二九
仙臺萩　六二九
若紫　六三〇
纈草　六三一
垣通　六三一
紫羅欄花　六三二
節分草　六三二
藪蕎麥　六三二
化偸草　六三二
熊谷草　六三三
鼠麹草　六三三
一人靜　六三四
剪春羅　六三五

華鬘草 六三五
雛菊 六三五
東菊 六三六
金盞花 六三七
金瘡小草 六三七
勿忘草 六三七
貝母の花 六三八
片栗の花 六三九
山慈姑の花 六三九
いぬふぐり 六四〇
茅花 六四〇
シネラリヤ 六四一
アネモネ 六四一
フリージア 六四一
チューリップ 六四二
シクラメン 六四二
ヒアシンス 六四二
スヰートピー 六四三
オキザリス 六四三
金鳳花 六四三
蕗の薹 六四三
春の蕗 六四五
蓬 六四五
鹹蓬 六四六
牡蒿 六四六
嫁菜 六四七
萵苣 六四八
水苦蕒 六四九
菠薐草 六四九
鶯菜 六五〇
水菜 六五〇
みづな 六五一
薹立 六五一
芥菜 六五二
三月菜 六五二
三月大根 六五三
野大根 六五三
掘入大根 六五三
獨活 六五四
石刀柏 六五五
春菊 六五五
韮 六五六
蒜 六五七
野蒜 六五八
胡葱 六五八
防風 六五九
青麥 六五九
種芋 六六〇
茗荷竹 六六一
酸模 六六一
虎杖 六六二
蕨 六六三
薇 六六五
辣韮 六六六
下萌 六六七
草の芽 六六八
ものの芽 六六九
草の若葉 六七〇
若草 六七〇
春の草 六七二
雀がくれ 六七三
駒返る草 六七三
古草 六七三
若芝 六七四
罌粟の若葉 六七四
菊の若葉 六七四
菊の苗 六七五
杉菜 六七五
末黒の芒 六七六
莚草 六七七
芹 六七七
三葉芹 六七九
山葵 六八〇
慈姑 六八一
烏芋 六八二
ていれぎ 六八二
惠具 六八二
菰菜 六八三
蓴生ふる 六八三
水草生ふる 六八三
萍生ひ初む 六八四
田芥子 六八四
へご 六八五
蘆の角 六八五
蘆の若葉 六八六
角組む荻 六八七
荻の若葉 六八七
芽張るかつみ 六八七
若菰 六八七
鷺苔 六八八
水芭蕉 六八八
鹿尾菜 六八九
海雲 六九〇
若布 六九〇
海苔 六九二
黒海苔 六九四
鶏冠菜 六九四
海髪 六九五
白藻 六九五
青海苔 六九六

春之部

時候

春（はる）

青陽（せいやう）　青春（せいしゆん）　芳春（はうしゆん）　陽春（やうしゆん）　蒼帝（さうてい）　獻節（けんせつ）　三春（さんしゆん）　九春（きうしゆん）

古書校註

【御傘】 春と春、五句去也。問云、誹諧は和漢（一）のごとく去嫌ふと云ひしに、何とて同季を七句は嫌ひ給はぬぞや。答云、是私にあらず。玄旨法印（二）・紹巴法橋（三）などの誹諧に、季を五句去になされしを聞きならひて昔より仕るに、近年宗祇（四）の獨吟の誹諧を見侍れば、皆五句去にして有るなり。先師たちのせられしも、定めて此故にてありつるやと、いよ〳〵殊勝に思はれ侍る。

【滑稽雜談】 前漢書律曆志に曰、春は陽と爲す。萬物始て生る也。又曰、少陽は東方、東は動也。陽氣物動く時に春と爲す。又曰、春は蠢也。物蠢生して乃ち運動す。○公羊傳曰、春とは何ぞ。年の始也。註に、春は天地開闢の端、養生の首也。○和訓義解に云、春をはると訓ずるは、晴るゝといふ義也。冬は陰氣あつく、雪降り雨しげく、晴るゝ事稀也。陽和至りて空らゝかに、日もいろ暉きて晴るゝ也。又木の芽はると云ふこゝろもあれど、前の說よろし。又發始の略語とも云ふ。

【年浪草】 日本釋名（五）に云、一說、はるはある也。冬はよろづなくなりて、春に至りて萬物發生して有となる。又云、張也。草木のめばるなり。初說を用ゆべしと。

註 ○滑稽雜談・年浪草等には春の異名として、太皞・勾芒・蒼天・東君・青陽・韶光・蒼帝・青春・芳春・獻節・青帝・歳始・發春・青皇等に關する解說が附隨してゐる。（一）和漢は、連句の一形式で、和句に漢句を附けるもの。葉草の「和漢之事」の條には、次の如く見えてゐる。「大かた俳諧の法を守るべし、和漢ともに五句を以て限りとす。但し漢の對に至り六句に及ぶべき事。（略）和漢には韻句を漢にすべし。（略）和漢には漢に韻字を用ふべし。」等記されてゐる。（二）細川藤孝、薙髮して玄旨、幽齋と號し、歌學を以て聞えた。貞德の歌道の師。慶長十五年歿。年七十七。（三）里村紹巴、本姓は松村氏。連歌をよくし、秀吉の師となつた。慶長五年歿。（四）飯尾宗祇、種玉庵、自然齋等の別號がある。明應四年新筑波集を撰して連歌道を大成した。文龜二年歿。年八十二。（五）貝原益軒の著。

季題解說 俳句はあらゆるものに春・夏・秋・冬を認める。殊に春は四季の中で最も視野が廣い。春の街・春の庭・春の宿・春の船・春の寺・春の店・春の土・春の驛等、在來の句に現はれてゐるものを數へても際限がなく、今後に詠はれるところのものに至つては到底想像の限りではない。これを身邊の人事に見るも、人の春・妻の春・妹の春・母の春・父の春・春の机・春の鏡・春の化粧等目に觸るるもの悉く春ならざるはなく、更に主觀的にも、春悲し・春惱まし・春樂し・淋しき春・愛しき春等、複雜多岐を極め

てゐる。二月の立春から五月の立夏迄を春と云ふのであるが、新領土では必ずしもこの基準に拠り得ないところもある。併しながら春の三ヶ月、感覺には些しも變りはない。三春は初春・仲春・晩春の總稱であり、九春は春季九十日間の總稱である。

【實作注意】太陰暦においては、大體新年は即ち新春であつた。從つて春といふ言葉が、新年と同義にも用ゐられた。太陽暦の今日となつても、新年の意義の春といふ言葉がそんなに多くはないがまだ殘つてゐる。たとへば御代の春とか、國の春とか、庵の春とか、老の春とか、作者とかいふが如きである。これを本項に述べた「春の座」などといふ場合の「春」とは違ふことを注意しなければならぬ。——天文—佐保姫　新年—初春—

【例句】

春

四日市いつかかへらむ旅の春　　宗因（梅翁宗因發句集）
富士は雪三里裾野や春の景　　同（同）
芭蕉翁に贈る
春も早山吹白く苣苦し　　素堂（俳諧五子稿）
松島の松陰にふたり春死ん　　同（同）
浦の松帆に撫られて幾春か　　來山（續いま宮艸）
蝶蜂の春をかゝゆる日の下り　　浪化（浪化上人發句集）
[illegible]を悼す
なき名きく春や三とせの生別　　去來（去來發句集）
昔かな初音三井寺夢の春　　其角（五元集）
伶人の門なつかしや春の聲　　同（五元集拾遺）
浦島がたよりの春か鶴の聲　　同（同）
乘掛に春の蜜柑やうつの山　　許六（五老井發句集）
ちりぢりに春やほたんの花の上　　支考（蓮二吟集）
春の蝶おもへ旅たつ女の[illegible]　　沾德（俳諧五子稿）
松しまや名にとめられぬ春の旅　　同（同）
うつぼ木の春をさはれむ木魚哉　　蕪村（はなこのみ）
春うたゝ犬君が膝の犬張子　　同（全集）
折釘に烏帽子かけたり春の宿　　同（蕪村句集）
船に痳む我に過たる春の興　　樗良（樗良發句集）
鬼も袖に納る春の道廣し　　也有（蘿葉集）
春の旅菩ておくるあふぎかな　　同（同）
畫に十洲有、小畫に十二景あり
山寺の春や佛に水仙花　　同（同）
行水や春のこゝろの置所　　几董（井華集）
おもしろき谷の有かたやわかの春　　同（同）
春の泊鯛呼聲や濱のかた　　同（同）
門口に風呂たく春のとまり哉　　同（同）

舟かけて草の青きを春の人　白雄（白雄句集）
先ゆくも我もはるの人　同（同）
馬（マヽ）柰に舞入春のすゞめかな　同（同）
卵吸ふ顏に罪なしはるの人　曉臺（曉臺句集）
日くれたり三井寺下る春のひと　同（同）
うつの山一日春と別れたり　同（同）
春の情うち返す三井のあらし哉　同（同）
鳥啼て谷間も春の木立哉　闌更（半化坊發句集）
旅人の米ほしがる古里の春　同（同）
大津畫の鬼も佛も春邊哉　同（同）
田樂に土焦したり春の庭　同（同）
春を見に淺草川をわたるなり　成美（成美家集）
小家みなわが春〳〵とおもふかな　同（同）
かい撫の春やむかしに吾しら髮　同（同）
春の鳥何をおもひぞ胸ふくれ　同（同）
田と畔の廻りくらする春邊哉　一茶（九番日記）
月さして一文橋の春邊哉　同（發句題叢）
寝て起ておろかもこれやはる心　乙二（をのゝえ草稿）
晝の月春は減るとも思はずや　同（同）
水と山はるにして置ところ哉　同（同）
吹ためて風は置やらはるごゝろ　同（同）
雨に鳴尾長もこれやはるの鳥　同（同）
さう鳴は嬉しい事かはるの鳥　同（同）
昔々花咲爺春景色　吐眉（明和二年）
蛙子に尾もなき春と成にけり　白圖（たてなみ）

病中

この春を鏡見ることもなかりけり　子規（子規句集）

草庵

雪の縮を春も掛けたる埃かな　同（同）
古沼の芥に春の小魚かな　同（同）
月の出や山まで灯もす春の町　子角（懸葵）
春の鷄孟宗藪のかたへより　石鼎（ホトトギス）
張り締めて春帯にあるかたさかな　紫雲郎（同）
幕裏を人歩く波や春舞臺　紅醉（同）
日の芝に坐し少年の春を追ふ　耕雪（同）
晝寝さめかてけます春の蒲團かな　元（同）
こゝよりは扇ケ谷（ヤツ）や山の春　たけし（同）
春の旅與謝の海とて下り立ちぬ　夏山（同）

春

ごみ車に烏下りゐぬ春の街　よりに（ホトトギス）
春の人九輪に鎌をかけ忘る　みづほ（同）
添ひ古りし汝も從き來よ京の春　一杉（同）
春の土蒻翡玉も角出して　夜野火（同）
宿屋まで鹿の付き來る奈良の春　白京子（續ホトトギス）
春の徑行きたくなりて行きにけり　耕雪（同）
善峰にいつもの春の時雨かな　雨城（同）
鉛筆を落して來り庭の春　鬼雨（同）

立春（りつしゆん）　春立つ（はるたつ）　春來る（はるくる）

古書校註

【山之井】是はもはら春たつ日なれば、谷うち出づる鶯の笛も、ひいや日かげに聲をかしく、軒のつらゝもとく〳〵と、琴瑟にまがふ音しるく、柳にやつたる梢は、けさ吹く風にしなひをまし、すね木の梅も、さすがにつとゑがほして、よろづのびらかに、ゆたかなる心をしたつ。元日もひとしけれど、いまだ春たゝぬほどなどもあれば、（一）その年によりて少しは心も替るべし。（略）若水とは、內裏に五日前つかたより、御生氣の方の井を就して、ふたをして、主水のかみ（二）けふ奉る事とぞ。是をつゝみ井ひらくともいへり。いまだ春たゝぬとしの元日には、すべき事にあらず。立春の日の事なりとかや。

【滑稽雜談】心儲抄に曰、立春の歌をよまば、今日より春の來るよしを讀む。早春は必ず春立月をさゝず、只春のはじめつかたをば詠ずる也。初春も早春に同じ。（三）私に云、（三）立春とは、これ正月の節なり。大寒の後十五日、斗柄、（四）艮に指すをいふ也。立とは始めて建つ也。又正月朔日より前に立春あるを、年內立春又は除日立春など云ふ。（十二月の部に之を註す）當年の立春去年ありて、來春の立春また正月にある時は、中一年立春なし。是を俗に空穂年といふ。或說に、其年の矢を中に時ふ故、靫年といふ說侍る。覺束なし。

【年浪草】節。○月令廣義に、周天玉衡六問に云、大寒の後十五日、斗柄、艮に指すを立春と爲す。正月の節。立とは始めて建つ也。

註（一）年內立春の場合をいふ。（二）水取司（もひとりのつかさ）。古へ、宮內省被官の司、御井水、醬水、氷室等を掌る。（三）其著の自說。（四）北斗七星の柄杓の柄となるところ。

季題解說　陰曆では一年の時候に二十四氣七十二候なるものがある。一月を二氣とし、一氣を三候とする。その二十四氣の一で、陰曆正月の節、陽曆にて大抵二月三日に當る。二十四氣とは立春（陰正月節）・雨水（陰正月中）・啓蟄（陰二月節）・春分（陰二月中）・淸明（陰三月節）・穀雨（陰三月中）（以上春）、立夏・小滿・芒種・夏至・小暑・大暑（以上夏）、立秋・處暑・

白露・秋分・寒露・霜降（以上秋）・立冬・小雪・大雪・冬至・小寒・大寒（以上冬）をいふのである。陰暦によつた昔は、立春即ち初春であつて、今朝の春・今日の春などといつたものである。俗間ではこの日に立春大吉の符を門戸に貼る習ひがある。朝鮮の習俗では聯を書き柱や壁にべた〳〵と貼るといふことである。

さて暦の上の立春と、立春の感じといふものとのことであるが、暦の上の立春は毎年もちろん定つてゐる。しかし人間も鳥獸草木も、立春の感じ方は各々遲速があるらしい。例へば太陽本位の暦より先に、太陽自身が立春の表情を示して吳れる。けれどもさういふ感じよりも、立春なる言葉は成るべく暦の上の立春に憑據した方が順當と思はれる。暦によつて立春の感情が整理せられる。その時萬物に感應する立春の微妙な遲速が、却つて明白に把握せられるのである。【參照】冬—大寒

【例句】

立春

來る春や寅卯の間と岩城山　宗因（梅翁宗因發句集）
春立や誰も人よりさきへ起き　鬼貫（俳諧七車）
はやなりぬ干物の木の目も春に　杉風（杉風句集）
あけくるや我もつれたち春となる　同（同）
寢ごゝろやいづちともなく春ハ來ぬ　蕪村（落日庵句集）
何事もなくて春たつあした哉　士朗（枇杷園句集）
木莵曳も捨扶持もちぬ春立ぬ　乙二（をのゝえ草稿）
置ざりになるとも知らず春の來る　同（同）
門に貼る立春大吉のお札かな　無事庵（春夏秋冬）
立春や耕人に鳴く蘆の犢　蛇笏（ホトトギス）
立春の日さしわたるお緣側　夢筆（同）
春立や雪の下なる大藥家　都川庵（同）
立春の蔦しばしあり殿づくり　青畝（同）
春立つや二軒並んで種物屋　貞雄（同）
立春や大爐燃えゐる終夜　歌村（同）
おほさかの春は來にけり芝居街　御舟（續ホトトギス）
立春の火桶を抱いて鰥かな　禽江（同）

【參考】立春は二十四節の中の一節である。一年三百六十五日を四季に分つ方法は西洋も東洋も同一であるが、何れも其の季節に當る氣候を表はす樣にしたものである。只異なる點は西洋では春分から夏至迄を春、夏至から秋分迄を夏、秋分から冬至迄を秋、冬至から春分迄を冬として居るが東洋卽ち支那では立春、立夏の間を春、立夏と立秋の間を夏、立秋と立冬の間を秋、立冬と立春の間を冬とした點である。

更に支那では一年を二十四等分して之れを二十四節とし、各節の始めに當る日に名稱を附し其の土地の氣候が判る樣にしてある。而して各季節は交

互に節と中とし、一ヶ月は中を中間として前後の節迄の期間としてである。我國では天保十四年以後少しく之れを改めて一年を二十四等分せず、太陽の軌道を二十四等分したものを用ひて居る。斯様にするときは太陽の軌道が精圓であるため各節氣間の間隔が相異る様になる。卽ち季節を區分すると云ふ考へからは嚴密で宜しいが、節氣間の間隔が相違するため暦が煩雜になる。現に我國で用ひられて居る暦に載せてある二十四節中春季に屬するものは次の如きものである。而して冬至は暦を起す起點となつてゐるが正月節は夫れより四十五日後の立春を以てする。

節氣	名稱	太陽黄經	陽暦日取（概算）
正月節	立春（東風解凍、蟄虫始振、魚陟負氷）	三一五度	二月四日
正月中	雨水（獺祭魚、鴻鴈北行、草木萌動）	三三〇度	二月十九日
二月節	啓蟄（桃始華、倉庚鳴、鷹化爲鳩）	三四五度	三月六日
二月中	春分（玄鳥至、雷乃發聲、始電）	〇度	三月二十一日
三月節	清明（桐始華、田鼠化爲鴽、虹始見）	一五度	四月五日
三月中	穀雨（萍始生、鳴鳩拂其羽、戴勝降桑）	三〇度	四月二十一日

此の季節の名稱たる雨水、啓蟄などは此の暦を編纂した土地の氣候と合せる様にしたものであるから、其の土地に於てこそ意義があつても、他の土地では役立たぬ場合が多い。幸にも東京などでは略之れに近い氣候を示してゐるが、他の土地では異なる事多く、我國の如く北は樺太から南は臺灣に迄も延びてゐる様な國土では寧ろ合致しないのが當然な位である。支那に於ては夙に氣候と云ふ點に留意してゐたものと見え、二十四節氣を更に三等分して一年を七十二候とし、各候にも其の時の氣候を了解せしむる様に東風解凍であるとか黃鶯睍睆などの名稱を附してある。之れなどは眞に其の暦を編纂した地方に於て役立つものである。故に我國に於ては其の名稱の表はす意味に捉はれてはならない。

中和の節

古書校註

【滑稽雜談】 滑稽類書に曰、李泌傳曰、唐の德宗、上巳・九日を以て、皆宴

樂有りて寒食(一)す。上巳同時、二月を以て節と名けんと欲す。泌二月朔を以て中和の節と爲さんと請ふ。又曰、貞元の間、中書門下、中和の節初めて金銀を賜ひ、百官宰相已下に給し、曲江に於て合宴す。(一)獻二生子一。同傳に曰、二月朔、民間青囊を以て百穀瓜果の種を盛り、相問遺して、號して生子(サイシ)を獻ずと爲す。閭里、宜春酒を醸して、以て勾芒の神(二)を祭り、豊年を祈る。百官農書を進り、以て務の本を示す。乃ち令を著して上巳(三)・九日(四)と與に三令の節と爲す。

註 (一)食事に火を焚かぬこと。人事の部參照。(二)勾芒は春の神。(三)三月三日。上巳の節。(四)九月九日。重陽の節。

寒明（かんあき）

季題解說 寒明け 寒の明け 寒明ける

小寒大寒三十日の終る日、即ち立春の前日、または立春の日の春立つ時刻までをいふ。悉しくいへば、所謂二十四氣の内の小寒を寒の入といひ、十五日目は大寒となり、更に十五日を經て寒が明けるのである。大抵二月三日・四日・五日の候である。參照 冬—寒の入(カンノイリ)

例句

寒明

寒明や野山の色の自ラ　月斗（同人）

初春（しよしゆん） 孟春（まうしゆん）

古書校註 【滑稽雜談】禮記月令に曰、孟春の月。【年浪草】元帝纂要に曰、正月を孟春と爲す。〇周書に曰、凡そ四時歳を成す、春夏秋冬各々孟仲季有り。以て十二月に名くる也。

季題解說 初秋、初冬といふと同じく、春のはじめのことである。

實作注意 初春(ハル)といへば新年の意義に使はれてゐる場合もあるが、それとは自ら別である。參照 早春(サウシユン) 新年—初春(ハツハル)

例句

初春

初春のおちつくかたや梅柳　浪化（浪化上人發句集）

梅柳はつ春の眼たしかなり　白雄（白雄句集）

初春や赤裝束の牛童　子規（子規句集）

早春（さうしゆん）

季題解說 春になつてまだ間のない時候のことで、大體立春後二月中くらゐの頃のことをいふ。暦だけに春は立つても寒さはまだ去らず、しかし風物のどこやらに春だなと思はせるものはあるといふやうな頃で、時候の感じとして最も趣の深いうちの一つである。淺き春・二月等ほゞ同意義と考へていゝのであるが、言葉から來る感じは大へん違ふ。たとへば淺き春とい

ふ言葉の響きは截然であるが、早春といふ言葉はそれに春古典的の調をもつてゐるといふべきが如くである。［參照］初春(ハツハル)　春淺し(ハルアサシ)　二月(ニガツ)

例句

早春

早春や山邊を來れば茶の木畑　瑚瑚天　（[illegible]）
早春の意を壺の一枝かな　九品太　（ホトトギス）
早春の流水早し猫柳　泊雲　（同）
早春や月のあがりし麥畠　瓢舟　（同）
早春や藪の上なる大屋島　水聲　（同）
早春や垣間見したる百花園　たけし　（同）
早春や人丸茶屋の緋毛氈　春山　（續ホトトギス）
早春の松に遊べる四十雀　京童　（同）
　　芭蕉庵
早春や西行庵と垣一重　ながし　（同）
早春の庭をめぐりて門を出でず　虚子　（句集　虚子）

春淺し(はるあさし)　淺き春(あさきはる)

季題解説　春になつて日まだ淺いころである。春は暦の上のみで、天地草木尚まだ十分に春色整はず、雪や霰が降つて陽氣が寒かつたり、木の芽も伸びないといつたやうな頃のことをいふ。［參照］早春(サウシユン)

例句

春淺し

病牀の匂袋や淺き春　子規　（子規句集）
西門の淺き春なり天王寺　碧梧桐　（春夏秋冬）
春淺き□峰木曾へ連りぬ　極光閣　（藻葵）
逃げ水の砂に吸はるゝ春淺し　茶山　（同）
先生の軒の干菜や春淺し　古溪　（ホトトギス）
露の臺踏まへて山の春淺き　あふひ　（同）
假住のなれぬ水仕や春淺き　立子　（同）
春淺き飛鳥の路の埃かな　左兵子　（同）
春淺き農園鉢を伏せしのみ　双松　（續ホトトギス）
山莊の春まだ淺し蒸鰈　鴻乙　（同）

餘寒(よかん)　殘る寒さ(のこるさむさ)

古書校註　【滑稽雜談】杜甫の詩に云、澗道餘寒歷二氷雪一。（一〇）黃晉卿の詩に曰、春盡餘寒去卻回。（二）（略）餘寒とは、春にいたりて寒氣殘れるをいへり。和歌題にも多くよめり。六百歌仙、春の空はいつまで冬の名殘とて霞ながらになほさゆるらん　爲經。

【年浪草】杜甫の詩に、春寒花較遲。〇說文に曰、餘は殘也。是餘寒・春寒とは殘る寒さなり。玉葉に、餘寒の心を詠みて、さえかへり山風あるゝ常盤木にふりもたまらぬ春の淡雪　爲家。

註（一）この一節の大意は、「雲の谷間の道を行けば、こゝは春なほ寒くて、氷雪が殘つてゐる。」（二）この一節の大意は、「春も末になつて、再び寒さが戻つてきた。」

季題解說　寒があけてからまだ寒さの殘るのをいふ。春寒とは心持に微妙な相違がある。【[illegible]】春寒しハルサムシ　冬　寒さサムサ

例句

餘寒

關の戸の火鉢ちいさき餘寒哉　蕪村（新五子稿）
猪垣に餘寒はげしや旅の空　太祇（太祇句選）
情なふ蛤乾く餘寒かな　同（同）
四十にも餘る寒さやものゝ怖　召波（春泥發句集）
底たゝく音や餘寒の炭俵　同（同）
思ひ出て藥湯たてる餘寒哉　同（同）
飲過た讀者のつらへ餘寒哉　同（同）
水に落、椿の氷る餘寒哉　几董（井華集）
しら梅に餘寒の雲のかゝる也　同（同）
木の七五三のひら/\殘る寒かな　一茶（九番日記）
寺/\の鐘に都の餘寒哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
棒樫の燒捨てある餘寒哉　同（同）
材木の障らずにある餘寒かな　同（同）
木守の柚ひとつ殘る餘寒哉　同（同）
池浚へまでした寺の餘寒かな　梅室（梅室家集）
橘の實は猶照りて餘寒哉　賀瑞（續明烏）
かき餅の干て反の來る餘寒哉　珍多（月影塚）
ものの少し肩に懸たる餘寒哉　塊人（小弓俳諧集）
穴にのぞく餘寒の蟹の爪赤し　子規（子規句集）
魚市に魚の少き餘寒かな　同（同）
古道に梅一枝の餘寒かな　鳴雪（新俳句）
藪薄き小倉の里の餘寒哉　狙醉（同）
汲水に一片の若餘寒かな　梧月（ホトトギス）
世を戀うて人を怖るゝ餘寒かな　鬼城（同）
舌端に觸れて餘寒の林檎かな　草城（同）
沈丁の蕾をもちて餘寒かな　橹水（同）

參考　氣溫が一年中で最も低い季節は何日頃かと云ふに大概一月末から二月にかけてゞある。之れからは日一日と氣溫は昇り夏に向ふのであるが氣象現象は極めて變動性の多いものであるから三月、四月に入つても未だ氷點下に氣溫が降下する日がある。例へば東京で三月中最も低かつた氣

温を年々觀測して見ると夫れは氷點下三度八分となつて、一年間で最も寒い一月の平均氣温三度一分より遙かに寒い。四月にして見ても月中最低氣温の平均は一度九分で一月の平均氣温よりも低い。之れだけでは斷定出來ぬが確かに三月四月に入つても一月中の暖かい日より寒い日がある事が想像できる。之れは亞細亞大陸に襲來する寒波の影響である。斯樣に春に入つて尙時々出現する寒さを餘寒と云つてゐる。

春寒し（はるさむ）　春寒（しゆんかん）　はるさむ

季題解說 春が立つて後の寒さの謂である。餘寒といふのと大體は同じであるけれども、よく味はふと、寒が殘るといふ言ひ方の言葉――餘寒――と、春でありながら寒いといふ言ひ方の言葉 春寒 ――とでは、言葉から受ける感じに自ら相違がある。そこを嚙みわけねばならぬ。 **參照** 餘寒（ヨカン）　冴返る（サエカヘル）　冬――寒さ（サム）

例句

春寒し

うぐひすの肝つぶしたる寒さ哉　支考（蓮二吟集）
木枕はまだ寒けれど旅寐哉　同（同）
池田から炭くれし春の寒さ哉　蕪村（蕪村遺稿）
春寒し泊瀨の廊下の足のうら　太祇（太祇句選）
はる寒く葱の折ふす畠かな　同（同）
いかづちの後にも春のさむさ哉　召波（春泥發句集）
からびたる竹の寒や春いまだ　同（同）
年寄の腹立春の寒かな　也有（蘿の落葉）
まだ去年の暦も欄に寒さかな　同（蘿葉集）
酢このみの跡から春の寒さ哉　蓼太（蓼太句集）
春寒く二ツ殘りし鷄卵酒　几董（井華集）
よき衣に春の寒さをしのびけり　同（同）
はる寒し風の筵山ひるがへし　曉臺（曉臺句集）
春さむし貧女がこぼす袋米　同（同）
蓮根の穴から寒し彼岸すぎ　巣兆（曾波可理）
はるの寒さたとへば蕗の苦みかな　成美（成美家集）
春さぶし月まつほどの後世がたり　同（同）
ひよ鳥の地に啼春のさむさ哉　蒼虬（蒼虬翁句集）
春寒し荒神松の深みどり　梅室（梅室家集）
春寒し干菜の動く藏の間　其考（三千化）

大要

鈍色の命婦の袴春寒し　子規（子規句集）

同京都

松明もちて春寒さうな仕丁かな　同（同）

月人追悼の句寒へ上りの求めに
月人は逝いて麥人春寒し　同（同）
春寒し鶯を見るガラス窓　鬼史（春夏秋冬）
春寒き韮雑炊や小さき鍋　五城（同）
春寒の風に芽麥の光りかな　菱涯（懸葵）
春寒や隨身門に肥車　鬼城（ホトトギス）
春寒や郊行返す亭を得たり　橙黄子（同）
春寒やきざみ鋭き小菊の芽　久女（同）
春寒くたゞ日當れる諏訪湖かな　濱人（同）
春寒の山影かぶり渡舟かな　紅洋（同）
御手洗や玉砂利ぬれて春寒し　凡平（同）
土手を行くはなれ〴〵や春寒し　大波（同）
春寒や山ふところの清閑寺　王城（同）
春寒や指きづゝけて職やすみ　曉水（同）
そこらまで出て春寒をおぼえけり　三千女（同）
春寒や一かたまりの磯馴松　曉汀（同）
ぽつ〳〵と種送り來る春寒し　夢磨（續ホトトギス）
春寒や貝の中なる櫻貝　たかし（同）
春寒や負ひ眞綿して水仕妻　十夜（同）
春寒や砂より出でし松の幹　虛子（句集虛子）

冴返る（さえかへる）

冱返る（さえかへる）

古書校註

【滑稽雜談】 廣韻に曰、冱は寒凝也（略）これも餘寒の事也。去卻同、又去卻來の三字、共にさえかへると讀むべき也。一旦陽氣いたれども、春寒にさそはれてまた寒く成るをいふ。俳には凍かへるなどいふ、同前の意也。

季題解説

春になつて少し暖かくなりかけたと思ふ間もなく、また寒さがぶり返して來ることをいふ。〔參照〕春寒し（ハルサムシ）　地理—凍返る（イテヨヘル）

例句

冴返る

神鳴や一むら雨のさへかへり　去來（去來發句集）
五六丈瀧冴返る月夜かな　蓼太（蓼太句集）
三日月はそるぞ寒（さ）はさえかへる　一茶（一茶發句集）
冴返るけふにはありけり何年忌　子規（子規句集）
冴返る音や霰の十粒程　同（同）
そら豆の葉の四五枚や冴返る　華溪（懸葵）
一臂缺けて五臂冴返る佛かな　東浦（ホトトギス）
野方村百觀音
冴返る野天に石の御百體　花蓑（同）

冴返る　石据ゑて冴返る庭樹をさまりし　紫雲郎（ホトトギス）
冴返る句會に誰も來ず仕舞　意外（同）
冴返る鵜のおとせし椿かな　田士英（同）

比良の八荒（ひらのはつくわう）　比良八講（ひらはつかう）　はつかう

【季題解説】八講とは法華經八卷を八座に講ずることで、公事根源集釋には、法華經八卷を八人に分ち、朝夕二度づゝ四日間に各一卷づゝを講ずるのを法華八講といふと書いてある。古へ陰暦二月二十四日、江州比良大明神で比叡山の衆徒が法華八講を修した。これが卽ち比良八講の名の起源である。比良大明神といふのは白鬚神社のことである。ところがこの頃不思議にも寒氣が俄に冴返り、湖上に風波が荒れすさむことが多い。今も江州の人々は比良の八講がすまぬと、本當の暖い春が訪れないといひ傳へて、これを比良の八荒といつてゐる。今は法華八講の式が廢れて、白鬚神社ではこの日に神事を行はないが、丁度この頃の寒氣と湖上に激する風波とは、比良八荒の名となつて殘つてゐるのである。〔參照〕宗敎―比良八講（カウノハ）

【例句】比良の八荒　昨日今日比良八講といふ寒さ　光紫朗（續ホトトギス）
鳥居根に比良八講の波たゝむ　柑兒（同）

舊正月（きうしやうぐわつ）

【季題解説】陽曆に對し、陰曆の正月を指して云ふ。近來大都市では全く廢れてしまつて居るが、地方では今日猶廣く用ゐられて居る。農家等は收穫その他の關係から、舊曆に依る方が萬事に便利を感ずるのであるが、これとの取引關係上、地方の中小都市にあつても純然と舊曆を廢する譯に行かず、陽曆陰曆共に併用してゐるのが地方の狀態である。一般商家でも、陰曆の歲暮に餅搗、取引などを濟ましてから舊正月を祝ふのである。横濱の南京街でも毎年二月正月をなし、色々催しものなどがあつて賑かである。〔參照〕新年――正月（シンネングワツ）　舊正月（キユウシヤウグワツ）

【例句】舊正月　ひそやかに舊正月や下屋敷　默禪（ホトトギス）
兄來たる舊正月の丹波より　宇洞（同）
板の間や舊正月の莫蓙敷いて　瓢舟（同）
老母居て舊正月は來つるなり　一壺（同）
古町の舊正月の朝湯かな　同（同）
舊正もしてにぎはしや城下町　樂南（同）
催合井戸舊正月の松飾　きいち（續ホトトギス）
舊正や撫順炭坑總休　胡弓（同）
布子著て舊正月の小百姓　謙郎（同）

二月（にぐわつ）

【[illegible]】陰暦では二月は仲春であつた。太陽暦だとこの月の初めに立春がある。時候で云へば丁度早春に相當する。淺き春と云ふのはこの頃を指すのである。又二八月と並稱して、天候に變化の多い月と見做されて居る。紀元節前後など殊に降雪が多い。陰暦を用うる地方ではこの月の初めの頃に正月を祝ふ。〔參照〕如月（キサラギ）

【例句】

二月

さゝげたり二月中旬初茄子　芭蕉（一葉集）
寒ン丈の寒さもうめの二月かな　浪化（浪化上人發句集）
花の咲木は悶しき二月かな　支考（蓮二吟集）
萬歳の裨子門に待つ二月かな　也有（蘿の落葉）
神事の跡はほとけの二月かな　蓼太（蓼太句集）
元日の醉詫に來る二月哉　几董（井華集）
襖からん二月の雪し稻荷山　吟江（心の花）
旃檀のほろほろ落る二月かな　子規（子規句集）
梅散つて鶴の子寒き二月かな　鳴雪（新俳句）
桑の芽の光り初めたる二月かな　青雉（同人）
面體をつゝめど二月役者かな　普羅（ホトトギス）
切株に鶯とまる二月かな　石鼎（同）
石露の根の雪すゝけたる二月かな　壽亭（同）
裏富士の雪またふえし二月かな　烏啄子（同）
夕竹の光も失せぬ二月闇　草城（同）
巖頭に立てり二月の水波女　微笑子（同）
榕樹（がじゆまる）にうぐひすのなく二月かな　たけを（同）
筆硯に小柄の銹や梅二月　橙黄子（同）
野に出れば風ばかりなる二月かな　青史（同）
夜雨のあと頂見せて二月山　默禪（同）
ほんとうの風邪を引きたる二月かな　月尙（續ホトトギス）

きさらぎ

衣更着（きさらぎ）　如月（きさらぎ）　梅見月（うめみづき）　梅つさ月（うめつさづき）　初花月（はつはなづき）　雪解月（ゆきげづき）　小草（をぐさ）生月（おひづき）　夾鐘（けふしよう）　仲陽（ちうやう）　令月（れいげつ）

【[illegible]】

【滑稽雜談】滑稽類書に曰、仲春は、日月降婁に會し、斗(一)卯に建（サ）すの辰。○晉の樂志云、卯は茂也、陽生じて滋茂するを言ふ也。○奥儀抄(二)曰、きさらぎとは、正月のどかなりしを、此月さえかへりて更にきぬをき

れば、きぬさらぎといふをあやまれるなり。按ずるに、もとはきぬさらぎ也、藏玉（三）さほひめの空に霞のきぬさらぎなかき日かげと此月ぞしる。

【註】（一）陰曆二月の異名として、仲春・仲春・酣中・如月・仲陽・令月・梅見月・小草生月・初花月・むめつさ月・雪消月・梅つ月等に關する物の名を擧げしてゐる　（二）北斗星　（三）藤原清輔の著　（三）藏玉和歌集は、二條良基の撰になるもので、草木・月の異名などの歌を集めたもの。

季題解說　陰曆二月の和名である。平年では二十八日で、閏年では二十九日である。語義は草木の萌し出づる月の意なりといふ。賀茂眞淵は木久佐波利都伎也と說いてゐる。卽ち草木の芽を張り出づるを云ふ義から來てゐるといふのである。又氣更に來る義であるといふ說もある。衣更著とかくのは、更に衣を重ね著るといふ義に解するものであらう。初花月は梅が百花に魁けて咲く月であるからであらう。

二月といふのときさらぎといふのとは、受ける感じが非常に違ふこと勿論である。

實作注意　二月のことを特に和名のきさらぎといふ名で呼んで、一句に詠まうとするやうな場合には、作者にそれだけの用意が十分に整つてをらねばならない。【參照】二月　仲春

例句

きさらぎ

きさらぎの日和もよしや十五日　鬼貫（鬼貫句選）
命ながし其如月の前の顏　素堂（俳諧五子稿）
きさらぎや火燵のふちを枕もと　嵐雪（玄峰集）
如月や松の苗うる松の下　惟然（惟然坊句集）
衣更着のかさねや寒き蝶の羽　同（同）
よし死なばその二月の月花に　杉風（杉風句集）
如月や一日誕す海の凪　几董（井華集）
煠ちるやはや如月の臺所　白雄（白雄句集）
きさらぎや起はぐれしも朝ぼらけ　乙二（をのゝえ草稿）
二月や二十四日の月の梅　荷兮（あらの）
二月や鶯來鳴く石の上　布舟（文車）
山茶花や二月寒き忘れ花　青蘿（鶯巣故）
如月や障子の中の俳諧師　其外（ホトトギス）
如月や花なき庭の羅漢柏　白貧（同）
きさらぎや葉牡丹活けて齋會　櫻坡子（同）
如月や風のまに〳〵草通路　公羽（同）
二月の梅若塚や泥鰌掘　冬衛（同）
二月や園菜ゆでゝ何もなし　茅花女（同）
二月の花なき床に置香爐　つや女（續ホトトギス）
如月の水見えてをる垣根かな　鬼雨（同）

三月（さんぐわつ）

季題解説 陰暦の三月だともう春が深いのであるが、現在は陽暦であるから、三月といへば自然風物も春未だ寒い心持のする時候である。しかし日本は南から北に極めて長い國であるので、北國の三月と南國の三月では、一と月以上も陽氣が違ふ。卽ち北陸から東北にかけては、まだ雪も深く、降雪もあり、雪割・雪除けに忙がしい月であるが、南の國ではもう菜の花が咲き、桃が咲き、蝶が舞ふ。しかし寒國でも雪國でも、三月となればさすがに木々の芽はふくらみ、雪を起して見れば、ものの芽も現はれはじめて居つて、明かに春といふ心持を深くする。

二月より三月寒し又も雪　札幌　子駿

三月の埃の中の酒屋かな　鎌倉　湘海

この二つの句で見ても、北海道と湘南で三月がどんなにちがふかがはつきりして來る。〔參照〕彌生（春）

例句

三月

三月や冬の景色の桑一木　丈草（丈草發句集）

分て此三月しれり石の銘　沾徳（俳諧五子稿）

三月の筆のつかさや白袷　蛇笏（ホトトギス）

彌生（やよひ）

花見月（はなみづき）　櫻月（さくらづき）　花津月（はなつづき）　花月　春惜月（はるをしみづき）　早花咲月（さはなさづき）　夢見月（ゆめみづき）

姑洗（こせん）　季春（きしゆん）　竹秋（ちくしう）　寎月（へいげつ）　嘉月（かげつ）　禊月（けいげつ）

古書校註

【滑稽雑談】清輔奥儀抄に云、風雨あらたまりて、草木いよいよおふる故に、いやおひ月といふをあやまれり。

【年浪草】滑礎類書に曰、季春は、日月大梁に會し、斗、辰に建すの辰。晉の樂志に云、辰は震也。言は、時物動き長ずる也。○此月をやよひといふ事は、春至りて萌出たる草の、此月いよいよ生ふれば、いやおひ月といふ事を、やよひとはいふなり。

註 ○陰曆三月の異名として、姑洗・季春・竹秋・寎月・嘉月・禊月・寢月・花見月・櫻月・春惜月・さはなさ月・花津月・夢見月等に關する解說が附隨してゐる。

季題解説 太陰曆の三月の異稱である。だから實際は現在の四月頃のことである。「いやおひ」——彌生ふる頃の意味で、一切の草木の生ひ出で萌え出づる春闌はな時候を云ふ。日本書紀にはじめて見えてゐる。〔參照〕三月

例句

彌生

神風の彌生はふかし門の竹　去來（去來發句集）

晩春（サンガツ ワンシユン）

妹は先へ行けり彌生山　支考（蓮二吟集）

彌生　ほどもなく父歸り來ん彌生山　闌更（半化坊發句集）
掃溜の草も彌生のけしきかな　鳴雪（新俳句）
死ぬ事を止まれば唯の彌生人　不人（ホトトギス）

仲春（ちゆうしゆん）

古書校註
【滑稽雜談】梁の元帝の纂要に曰、二月を仲春と云ひ、亦仲陽と曰ふ。

季題解説
所謂三春の眞中の候で、早春晩春に對する語である。秋ならば仲秋にあたるわけであるか、季語としては仲秋といふが如く熟しては居らず、言葉の齎らす趣が淺いやうに思はれる。〔參照〕三月（サングワツ）　きさらぎ

例句
仲春　冴え返り冴え返りつゝ春なかば　泊雲（ホトトギス）

四月（しぐわつ）

季題解説
陰暦では四月はもう夏であつたが、陽暦では晩春で、春闌けた感じの深い頃である。〔參照〕夏―卯月（ウヅキ）

例句
四月　山畑の麥のおくれし四月かな　閑寺爐（懸葵）
四月の水に淋しや水馬　紫雲郎（ホトトギス）
牛も馬も四月百姓となりにけり　一壺（同　）

晩春（ばんしゆん）　季春（きしゆん）

古書校註
【滑稽雜談】禮月令に曰、季春の月。
【年浪草】字彙に曰、凡そ末月を季月と曰ふ。云々。　三春の終り故に之を季春と謂ふ。

季題解説
春の終の季節のことで、早春・仲春に對する語である。暮春も行く春も時候としては同じ頃を指してゐるのであるが、言葉がもつ響、それから來る感じは非常に違ふ。晩春といふ言葉の響は堅く強くて、季語として、たとへば行く春とか暮の春とかいふ言葉のやうな匂ひや潤ひは薄いやうに思はれる。俳句を學ぶ人は纖細な神經をもつて、それ〴〵の言葉の味をよく嚙み分けねばならぬ。〔參照〕四月（シグワツ）　彌生（ヤヨヒ）　暮の春（クレノハル）

春分（しゆんぶん）　中日（ちゆうにち）

古書校註
【滑稽雜談】中。○月令廣義に曰、春分は二月の中、驚蟄の後十五日、斗、

卯を指して春分と爲す。二月の中、分は半なり、九十日の半に當る也。故に之を分と爲す。夏冬分と言はず。天地間の二氣を言ふのみ。陽は子に生じ、午に極まる。卽ち其の中分也。春分の氣の初五日玄鳥至る。次の五日雷乃ち聲を發す。芍藥榮の後の五日始めて電す。〇大戴禮に曰、鷹化して鳩と爲る、(一)春分の日を謂ふ也。

注 (一)「鷹化して鳩と爲る」を、啓蟄の第三候とする說もある。啓蟄の項を見よ。

季題解説 所謂二十四氣の一で、陰曆二月の中である。(二十四氣については「立春」の項を見よ。)陽曆では大抵三月二十一日頃に當る。太陽の春分點に達した時の稱で、晝夜の時間が等しい時である。彼岸の中の日であるから、中日と呼ばれる。 **參照** 彼岸 宗教―彼岸會

春社(しゅんしゃ)　社日(しゃにち)　社翁(しゃをう)の雨(あめ)

古書校注 【滑稽雜談】禮月令に曰、仲春の月、元日を擇び、民に命じて社す。鄭玄曰、社稷を祀るの謂也。農事起る、故に之を祀り、以て農祥を祈る。元日は謂ゆる春分に近き前後戊の日、元の言也。(略)〇按ずるに、今立春後第五の戊(一)の日を春社と爲し、立秋後第五の戊の日を秋社と爲す。社を主るの神を勾芒(二)と曰ふ。中華の民俗、此の時を以て后土の神を祀る。〇是は唐に社日とて、春秋に二度土の神を祭る也。土はよく萬物を養ひ五穀を生ず。故に祭る。春は農事よからんことを祈り、秋はその恩德を報ずる心ならん。その日は、立春後第五の戊の日を春社とし、立秋の後第五の戊の日を秋社とす。又社春は土神也。稷は穀神也。土穀の神を祭る也。唐には村民たがひに來往して、酒食に醉飽するとみえたり。張演が社日の詩に、家家扶得醉人歸など侍る。和朝には社日の沙汰なし。然れども農事を祈る事又多し。中にも中春の比、農民の取行ふ水口祭、これ春社に同じ。朝庭には、此の月新年穀の奉幣侍る也。

注 (一)原本に戊とあのは戊の誤。月令廣義にも「立春後五戊日爲二春社一。立秋後五戊爲二秋社一」と見える。(二)春の神。

季題解説 立春から第五の戊(ツチノエ)の日、及び立秋から第五の戊の日〔尙書〕、或は春分・秋分前後に最も近い戊の日〔月令〕を社日といふ。春の社日を春社といひ、秋の社日を秋社といふ。俳諧の方では、春秋二度あるもろ〳〵の事物に對して、春の方は單に春の文字を冠せずとも春のそれとし、秋の方には必ず秋または後の文字を添へて前のと區別することになつてゐる。袷といへば初夏の時に著替へるをいひ、秋の方は秋袷といふが如く、社日も單に社日とだけ云へば春の社日であり、秋のそれは秋の文字を添へて秋社といふ。勿論春の文字を添へて春社といつてもよいのである。支那ではこの日社卽ち土地の神を祀り、五穀の豐饒を祈るので、社日といふのである。春社には種を蒔き、秋社には穀を刈つて田の神を祭る。社公社母とも舊水

を飲まないとかで、この日必ず雨が降るといはれ、これを社翁の雨といふ。また、この日酒を飲むと聾を治すというて治聾酒といふ。[参照] 人事—治聾酒 天文—社翁の雨 秋—秋社

彼岸（ひがん）

彼岸太郎（ひがんたらう）　彼岸中日（ひがんのちゆうにち）

季題解説 春分と秋分とを中日として、その前後の三日即ち七日の間を彼岸の節とし、その間諸寺に佛事を修する。この時分は晝夜の長さ相等しく、春は草が芽を萌し、秋は木の葉がそろそろ散り始め、世俗にも「暑い寒いも彼岸まで」といふくらゐで、季節としてはまことに好適である。この氣候のよい時に彼岸會と稱し、善男善女は寺院に參詣し、祖先の墓參をし、僧侶は連日讀經法話をする。彼岸會のことは印度及び支那にもなく、我が國に於てのみ古くから行はれたものであるやうである。聖德太子の時代に始まつたといひ、また延暦二十五年二月の官符に、諸國の國分寺の僧をして、春秋二中日前後七日、崇德天皇のために金剛般若經を誦せしめたとあるのが、彼岸會の起源であると云はれる。但し彼岸といふ語は梵語の波羅密多であるから、その語としては印度にも支那にもあつたので、大智度論第十二卷の初に、彼岸のことが詳説されてをる。かく彼岸の語は右の二國にあつたが、時節として、佛教修養の好時節として春秋二期の彼岸をはじめたのは我國で始まつたのである。

單に彼岸と云へば春の彼岸のことで、秋のそれは秋の彼岸又は後の彼岸といふ。彼岸太郎といふのは彼岸の入の日のことで、この日雨降れば、その年の稻の稔りがよいと云はれる。又農家はこの日の晴雨で彼岸中の天候をトする。

例句 [參照] 春分　宗教—彼岸會 宗教—彼岸會の項を見よ。

春めく（はるめく）

季題解説 冬の間の降雪もなくなり、寒さは緩み、山川草木風物すべてがいきいきとして春らしくなることを云ふ。天地自然のその心持が、人間の身内にも感應して來るのは固よりである。[參照] 春されば　春まけて

例句

春めく

春めくや氷塊運ぶ馬を見る　旭 邨（懸 葵）
大船の著きて春めく港かな　言 人（ホトトギス）
うちつゞく日和にはかに春めきぬ　器 子（同）
流木や春めく岩に一文字　勤 應（同）
山川の青き蛇籠も春めきて　功（同）
春めきしそゞろ心や衣を裁つ　くに女（同）
葛城の春めく障子明けにけり　沙 魚（同）
春めくや住吉詣久しぶり　盧 公（同）

春めくや田螺のみちに蜷のみち　いさを（同）
春めくや杖に身をのせ弱法師　鬼雨（續ホトトギス）
春めいて子澤山なる庵かな　あふひ（同）
冬野ともどこか春めきゐる野とも　霞人（同）
春めける山河消え去る夕かげり　虚子（句集虚子）
春めきぬストーブの火はほと燃えて　同（續ホトトギス）

春ざれ

古書校註

【御傘】春ざれ・秋ざれ・冬ざれ・夕ざれ、是ばかりにて、夏ざれ・朝ざれと云ふ事は哥にもあるべからず。是は口傳の詞にて、書きあらはす事ならず。只、春なれば・秋なればと云ふ詞と心得よと、哥書の註に先達も書きおかれしなり。惣別哥書の註はつかひ太刀とて、眞實の義をばあらはさぬ法なり。是をあらはせば道淺くなりて破る故にかくのごとし。上人、道を祕するにあらず、祕してつたへんがためなりとは、かやうの事ども也。誠の執心あらば、師說を受けらるべきものなり。他の道は知らず、此の道ばかりは自見ならぬ事也。

【滑稽雜談】仙覺抄に云、春ざれとは、春になればと云ふ心也。春之在者と書きたるは、或は春のあればと讀めるを、故實にて春なればと點ず。のあの返しな、或は春しあればと云ふ、しあの返しさ也。故に、春なればと云ふも、春になればと云ふ心なり。それにとりて、春になりたるを春ざれとよめるも有り。歌、春さればまづ咲く宿の梅の花ひとり見つゝや春日くらさん(一)又春の盛んなれども、春の内にてあればと讀むも有り。歌に、春されば鴨の草ぐき見えずともわれは見やらん君があたりは(二)又春の過ぎたるをも讀める有り。歌、春さればすがる鳴のの郭公(三)ほと〳〵妹にあはず來にけり。(四)

註 (一) 新勅撰和歌集所收。山上憶良の作歌。(二) 玉葉和歌集所收。讀人しらず。(三) 原文には「酢蛾成野之霍公鳥」とある。鳴ののは誤か。(四) 萬葉集卷十所收。作者不明。

參照 春めく　冬―冬ざれ

春まけて

古書校註

【滑稽雜談】萬葉集に云、春設而。又春儲而。春麻氣底。○童蒙抄に云、春まけてゝ心也。○八雲御抄(一)に云、春かたまけて、此の詞一にあらず、夕片設・春かたまけ・冬かたまけなども讀めり。皆心はかはらず。物のありまうけたる體の心にもかよひたれども、歌に、鶯の木づたふ梅のうつろへばさくらの花の時かたまけぬ。此の歌は、あなたにとられてすくなき心也。○歌林良材(二)に曰、かたまけぬ、片設と書けり。物のありまうけたる心也。又かた

かたまけたる心にもいへり。又櫻の花の咲きまうけたる心にもかなへる也。○以上三つの心得也。春まけてはまうけて也。片まけては二義也。童蒙抄の說心得がたし。春まけてかく歸るとも秋風にもみぢの山を越え來ざらめや。

【年浪草】春に向きての意也。春かたまけてともよめり。春かたまけては、春方向て也。春まけては方を略せるなり。まけは儲、又は設の字をも書くなり。おなじ意也。此詞、夏・秋・冬ともあり。〔參照〕春めく

〔註〕(一) 順德天皇の御撰　(二) 一條兼良の著。

暖か（あたたか）　ぬくし　ぬくとし　春暖（しゆんだん）

古書校註

【御傘】日のあたゝかなるは春たるべし。云々。新式にかくの如く載するは、只あたゝかなるといふばかりは雜也と云ふ心を、無言抄にあたゝかと云ふ詞は、おしなべて春に成るといへり。近比無理成る沙汰也。綿衾・人のはだへ・飮物・くひ物などにあたゝかなると云ふ詞は不斷有る事成るを、春に定むる事いはれず。(一)新式に日の暖かなると書きたるにて能く分別すれば、世上の暖氣なるを春と定めたる物也。しかれば天氣・空・風・水・世上・野山などのあたゝか成るは春たるべし。人の懷・寢莚・爐中・湯茶・肌・手足・足袋・ゆかけなどの溫かは雜たるべき事顯然なり。

【年浪草】暖かとは、溫暖にして日和よく、近日の晴朗なる時を云ふ。ぬくい・ぬくとい同じ、暖かなるを云ふ。

〔註〕(一) いはれなし、理由なし。

季題解說

春の陽氣の、溫暖にして肌に柔かく心地よきをいふ。

例句

暖か

此雨はあたゝかならん日次（ヒナミ）哉　其角（五元集）
けふといふけふこの花のあたゝかさ　惟然（惟然坊句集）
あたゝかに此四五日のながめ哉　秋風（眞木柱）
あたゝかになるや椿のほつたほた　飄竹（類題發句集）
あたゝかや菜種花さく川の緣　吟江（推藏日記）
あたゝかな雨が降るなり枯葎　子規（子規句集）
あたゝかに白壁ならぶ入江かな　同（同）

兒范

大船や波あたゝかに鷗浮く　同（同）
赤飯の湯氣あたゝかに野の小店　同（同）
あたゝかな窓に風邪の名殘かな　同（同）
白木蓮の梢雲なしあたゝかき　句佛（懸葵）
遠山に暖き里見えにけり　鬼城（ホトトギス）
暖やとき〳〵ほごしたる芋俵　同（同）

暖や葩に蠟塗る造り花　我鬼（同）
暖や椿の下の水汲場　松毬路（同）
あたゝかに投棄てゝある箒かな　濱人（同）
暖や盥ならべて洗濯女　梧洛（同）
暖に砂つけてゐる二葉かな　併維摩（同）
あたゝかや皆つくばひて苗仕事　菱歌（同）
暖や庇に垂れて松の枝　玉城（同）
あたゝかや芝生にまはす客の下駄　久女（同）
暖や園丁獨りうづくまり　青逸（同）
暖や石にもたれて立話　紅女（同）
暖や我が門まもるよその犬　秋皎（同）
種俵あげて堤の暖や　巴潮（同）
漢江の橋あたゝかに人往來　俚人（同）
あたゝかや藁屋の中の觀世音　京童（同）
暖になりし夜道と思ひけり　菱歌（同）
暖や飴の中から桃太郎　茅舎（同）
折々にぼかり〳〵と暖し　蚊杖（同）
あたゝかき土塊躍る篩かな　一魯（同）
牡蠣殼のつきし垣根や暖し　蔓香（續ホトトギス）
あたゝかや砂に坐りて松露賣　羽公（同）
烏賊の墨つける杜や暖し　耿陽（同）

麗か（うらら）　うらら

古書校註

【滑稽雜談】童蒙抄（一）に云、東行南行雲眇眇、二月三月日遲々と云ふ詩を、ある人の北野に詣でて詠じけるに、少しまどろみたる夢に、とざまにゆき、かうざまに行きて、雲はる〴〵、きさらぎ・やよひ日うら〳〵、とこそ詠ずれと、おほせられけるをおもへば、おそしと云ふ心にもやあらん。○拾穗抄（二）に云、愚按ずるに、うら〳〵は遲々と書き、日のながき心也。○私に云、（三）俗に麗の字を用ゆ。猶考ふべし。

【年浪草】麗は、杜詩（四）に、遲日江山麗、春風花草香と作る。美麗・華麗・妍麗・艷麗・妖麗・婉麗・繁麗等と續く。皆春色の百花咲亂れ、鳥獸山川までもいろめきて、春をかざる意也。

註（一）藤原範兼の著。和歌童蒙抄。範兼は二條天皇時代の人。（二）季吟の著。伊勢物語拾穗抄。（三）其諺の自說。（四）杜甫の詩。

季題解說　春の天氣の打晴れた日、遠くの方はうち霞み、仰げば日の光なごやかに、天地萬象、悉く朗らかに美しく見えわたるやうな有様を云ふ。

例句

麗か

うらゝかや若和布に動く沖の石　碩鼠（類題發句集）
草刈を追ひ行蝶や日の麗　龜岳（四季發句帖）
麗やさし迫らざる用ばかり　車春（同　人）
麗かや博物館を出て芝生　秋皎（ホトトギス）
麗かや乗せて貰ひし荷物船　野風呂（同）
牧うらゝ家に這入りし搾乳婦　曉南（同）
うらゝかや空に留まれる氣球船　花蓑（同）
うらゝかに徒歩往診や蠶の宿　煤煙（同）
うらゝかや天守の窓の明けられし　生紅樓（同）
下手が濟ぐ浪のうねり〳〵麗かに　雉子郎（同）
うららかの大堤防となりにけり　里石（同）
淡路洲本
斑鳩のうらゝに缺けし御判かな　迷水（同）
御室山うらゝ〳〵と低きかな　康之（同）
うらゝかに水櫛つかふ女かな　小提灯（同）
うらゝかや砂糖を掬ふ散蓮華　茅舍（同）
筑前箱崎にて
うらゝかや見えてよりたる唐船碑　禪寺洞（同）
住吉へ妻と歩けばうらゝかな　宍城（同）
うらゝかや通天橋と乳母車　紅朗（續ホトトギス）
麗かや松を離るる鳶の笛　茅舍（同）

長閑（のどか）

のどけし

古書校註

【滑稽雜談】和訓には、沖・融の二字をのどか共、うらゝかともよめり。按ずるに、沖は風水の和也、融は風日の和なるべきか。俗に長閑の二字を用ゆ。出所未考。のどかに靜、二句嫌ふと無言抄（一）に曰ふは、誤のよし御傘に侍る、（二）さも有るべし。

【年浪草】俗に、長閑をのどかと訓ず。長閑はいつまでも隙なること、暫閑に對して云ふ。東坡（三）の詩に、未レ成二小隱一聊中隱、可レ得二長閑勝一暫閑一と。官をやめて無事になることを云へり。俗にのどかと云ふことは、温和・暄和と云ふ字など能くあたれり。寒からず熱からず、天氣よく和ぐ意なり。

【栞草】春の日、ゆつたりと長く、閑かなるを云ふ。

註 （一）連歌の作法書、木食上人應其の著　（二）御傘には「長閑にしづか、二句嫌ひ、寒さなども同じく二句嫌ふ　無言かくのごとし。（略）近代の誤かと存ず。新式の打越を嫌ふべき物の所にあげたる說を用ひらるべし」と見えてゐる。　（三）蘇東坡。宋時代の文學者。

季題解說

空晴れて騒がしからず、おだやかに和暢な天地風物の相である。

春の日はゆつたりと長く閑かである。【参照】永き日(ながき ひ)

例句

長閑

けさは雪雨になりじか春のどか　杉風（杉風句集）
長閑なる御代の姿や要石　桃隣（古太白堂句選）
閑かさは何の心やはるのそら　千代女（千代尼發句集）
長閑さに無沙汰の神社回りけり　太祇（太祇句選）
長閑さや早き月日を忘れたる　同（同）
凡巾白し長閑過ての夕ぐもり　同（同）
鶯に山越見ゆる海のどか　樗良（樗良發句集）
のどけさや津々浦々のおもはるゝ　白雄（白雄句集）
長閑しや麥の原なるたぐり舟　同（同）
遠干潟ふねのみよしの長閑也　同（同）
鶯の聲こまやかに月の光閑なり　士朗（枇杷園句集）
茅屋根に鵜の長閑也鴫の雨　巣兆（曾波可理）
白魚のすこしまがりて長閑なり　成美（成美宗集）
長閑しや大宮人の裾埃り　一茶（七番日記）
辻だんぎちんぷんかんも長閑哉　同（同）
長閑さやはや三日月の出ておじやる　同（同）
長閑さや垣間を覗く山の僧　同（一茶發句集）
長閑さや淺間けぶりの昔の月　同（同）
呼あふて長閑に暮らす野馬哉　同（嘉永版發句集）
のどけしな眞柴にとまる雨後の蝶　群長（古今句鑑）
のどかさや大河を渡る蝶一つ　蒼狐（同）
のどかさや繫ぎもやらで蜊舟　吳扇（文車）
のどかさに物も思はぬ朝寐かな　杜國（類題發句集）
だまされて珠買ふ人や市のどか　雉子郎（ホトトギス）
鳥影に吠えたつ小犬畑長閑　泊雲（同）
長閑さや願事なくて神詣　修山人（同）
長閑さや杌の前の太柱　櫻坡子（同）
南國堂
のどかさの風鐸空に壞れをり　爽雨（同）
留守居して腹の立つ程長閑かな　卜半（續ホトトギス）

永(なが)き日(ひ)

日永(ひなが)　春(はる)の日(ひ)　春永(はるなが)し

古書校註

【山之井】春の日は、めぐる遲さをいひたてゝ、牛にや乘りしとも、砂道やゆくなどもいひ、鷲あし、げほうがしら(一)の影法師をもよせて、永きたとへにしなし侍るべし。

【滑稽雑談】月令廣義に曰、清明白露、晝五十二刻一十分、夜四十七刻五十分。穀雨處水、晝五十四刻一十分、夜四十五刻五十分。（略）和歌・連俳いづれも「長き日」は春也。古詩などの心には、春日より夏日長しとおほく見えたり。白氏文集二十八、「竹院君閑銷ニ永日一、花亭我靜送ニ殘春一」月令廣義の刻限を考ふるにも、三月より初夏の刻限など遂に長し。然れば唐土の夏日長は勿論也、和においても長き日を春と定むる、不審也。或師の曰、春の日の長きを賞する事、只刻限の長きのみにあらず、只日影の融々緩々たる心なるべし。又餘時に對せば、又刻限も初夏に續ぎて長からずや。譬へば、隋書に太史令袁充が表に曰、「隋興日漸長」と云、又潜夫論に、「化國の日は舒にしていと長し、故に民間暇ありて餘力あり。」これらの書のごとく、初夏の日影は春日より長しといへども、少し陽氣勝ち過ぎたり、春日の舒々として長きは、猶賞する所多し。作者此旨を覺悟すべし。俳諧には、只刻限の長短をのみ作る向も侍るべし、尤も害なし。

【年浪草】詩(二)の國風に曰、春日遲々たり。○毛詩(三)に曰、遲々は舒緩也。

注　(一) 外法頭。長き頭をいふ。(二) 詩經。(三) 同上。

季題解説　春分以後少しづつ日が伸び初める。今迄短かかつた日がだんだん永くなり、日中のゆとりが出來かかつた氣がして來る。これを日永といふのである。暦の上で一番日が長く夜が短いのは夏至前後なのであるけれども、氣持としては冬の後を受けた春が最も日の永くなつたことを切實に感じるので、俳諧では春の一日のことをかく日永といふのである。

参照　長閑　遲き日　天文　春日

例句

永き日

永き日を遊び暮たり大津馬　　鬼貫（鬼貫句選）
懺法のあはれ過たる日の長さ　　許六（五老井發句集）
いたづらに不二見て永き日をたてな　　北枝（北枝發句集）
長き日を啼かれぬ鹿の欠呻哉　　蕪村（落日庵句集）
永日やいまだ泊らぬ鷄の聲　　太祇（太祇句選）
扨永き日の行方や老の坂　　同（同）
花になく鳥尾もながし日も永し　　也有（蘿葉集）
長日や宿替の荷の殿ス　　几董（井華集）
長日を羽織着ながら寐たりけり　　同（同）
日永きや柳見て居る黒格子　　白雄（白雄句集）
永き日や鷄はついばみ犬は寐る　　同（同）
うす曇同じ空にて日の永き　　同（同）
永き日に我と禁ずるまくらかな　　同（同）
ながき日やみちのくよりの片だより　　同（同）

母戀し日永きころのさしもぐさ　同　（同）
うら門のひとりでにあく日永かな　一茶　（旅日記）
さあ騷げ日永になるぞ門の雁　同　（七番日記）
永の日を喰や喰ずや池の龜　同　（同）
さぼてんののつぺり永くなる日哉　同　（同）
老ぬれば日の永いにも泪かな　同　（同）
ばか永い日やと口あく烏かな　同　（同）
有がたや能なし窓の日も伸る　同　（同）
日が永い〳〵とのらりくらり哉　同　（一茶句帖）
念佛の中貸取る日永かな　同　（同）
あたら世や日永の上に花が咲く　同　（同）
待ち〳〵し日永となれど田舍哉　同　（一茶發句集）
闇がりの牛曳き出す日永かな　同　（嘉永版發句集）
日永しとひとり思ふや鳩の聲　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
乞食も蝶も日長し下河原　梅室　（梅室家集）
永き日や山王の猿のうつけ顏　嘯山　（新選）
永の日に尻もくさらぬ田螺哉　麻兄　（同）
永き日や又一つれの夕烏　可兮　（恒誠）
永き日や庭におり立ち門に立ち　魯山　（文車）
永き日やとり散したる繪具皿　子聲　（同）
百人の人夫土掘る日永かな　子規　（子規句集）

金州

永き日や驢馬を追ひ行く鞭の影　同　（同）
長安の市に日長し賣卜者　同　（同）
永き日や忽然として椎折るゝ　墨水　（新俳句）
茶を飲んで山を見てゐる日永かな　蕪堂　（同）
山鳥の畑に出てゐる日永かな　愛松　（同）

亡父の三日に

永き日のはや暮れかゝる回向かな　非風　（同）

須磨にて

旅人の貝拾ひ居る日永かな　露石　（同）
船火事の朝ありし午後の日永かな　朱雀　（ホトトギス）
永き日や松曇りたる俳句會　月舟　（同）

東山靈寺

永き日や疊に生えし太柱　瓦全　（同）
腰かけし小さき墓や僧日永　白峰　（同）
永き日や心棒減りて躍る臼　殘雪　（同）
永き日や庭より見ゆる襖の繪　蓍子　（同）
日永さや病よければ大欠伸　怒愛庵　（同）

日永さや宿屋も交る珠數屋町　野風呂（ホトトギス）
永き日や大佛の鐘つゞけさま　秋高（同）
永き日や佛の前の針仕事　[illegible]（　）
（教員室）
地球儀の軸かたむける日永かな　枯柏（同）
永き日や何も置かれぬ違棚　播水（同）
永き日や仕事終へたる畑いぢり　旭川（同）
永き日の樹に生れたる花鳥かな　多佳女（續ホトトギス）
永き日やひつそりとして大厨　[illegible]舎（同）
休業の大露天掘日永かな　古城子（同）
山寺に線香もゆる日永かな　虚子（句集虚子）

遲き日

遲日　暮遲し　暮かぬる

季題解説　春が深くなるにつれて、夜になるのがだんだんおそくなつて來る　夜明けが早く、一日が大變永い、のびやかな、よい心持の時節である。その春の日のことを遲き日といふのであつて、永き日といふと同義である。

參照　永き日（二六）

例句

遲き日

日さしさへまはるが遲し瀨田の橋　宗因（西翁宗因發句集）
暮遲き四谷過けり紙草履　芭蕉（もとの水）
遲き日やしかまのかち路牛で行　素堂（俳諧五子稿）
暮遲し敦賀の津まで比良の雪　同（同）
遲き日や雉の下りゐる橋の上　蕪村（几董判懷紙）
遲き日のつもりて遠きむかしかな　同（蕪村句集）
山鳥の尾をふむ春の入日哉　同（同）
くれかぬる日や山鳥のおとしざし　同（蕪村遺稿）
遲き日や歩を草切る大手前　同（同）
遲き日や都の春を出てもどる　同（全集）
遲日の光のせたり沖の浪　太祇（太祇句選）
遲き日を膝へ待とる番所かな　同（同）
遲き日を見るや眼鏡を懸ながら　同（同）
暮遲く日の通れたる疊かな　同（同）
膝たてゝおそき日みるや天の原　同（同）
泊らばや遲き日の照る奥座敷　同（同）
枕して遲キ日を行のぼり舟　召波（春泥發句集）
遲日を追分ゆくや馬と駕　同（同）
遲き日やひとへかげろふ草履道　几董（井華集）
影遲し魚餌について日三竿　同（同）

泥水もはなをうかめて暮かねし　成美（成美家集）
丸にのゝ字の壁見えて暮遲き　一茶（七番日記）
遲日の神代に似たる翁かな　乙二（をのゝえ草稿）
遲き日に着たら倦うぞかくれ蓑　同（同　）
遲き日の昨日の如く暮れしかな　太郎（同　人）
蘭とりに遲日の山に入りにけり　三射（同　）
聖徳太子法要の時
遲き日も暮るゝ納骨利の雨かな　句佛（懸　葵）
食後遊ぶ濱寺の松遲日かな　泰山（同　）
御佛に遲日の障子貼りにけり　士晉（ホトトギス）
遲き日や日輪ひそむ竹の奥　泊雲（同　）
遲き日やむかしながらの湯治道　青畝（同　）
百花園
ぜんまいは綿をかむりて遲日かな　凡秋（同　）
藏王のたさがりの遲日かな　藏王（同　）
車より放ちし牛や暮遲き　躑躅（同　）
暮れかぬる乙密臺に妓生たち　楊柳影（同　）
ひとり來て句會仕度や寺遲日　爽雨（同　）
紫になる山もある遲日かな　蚊杖（同　）
三條の橋に戻りて暮遲き　播水（同　）
暮遲き東山ある座敷かな　いはほ（續ホトトギス）
渦まける宇治の川波暮遲き　八星（同　）
龍安寺
この庭の遲日の石のいつまでも　虚子（句集　虚子）

春曉（しゆんげう）

春のあかつき　春あかつき　春の曙（あけぼの）　春の夜明け

季題解説　春の夜明のことで、枕草紙の「春はあけぼの」の條のごとき、誰も知るところである。春曉とか春の曙とかいふ言葉そのものが齎らす氣持だけでも、いかにも艷に柔かく、一種獨特の情趣がある季題である。同じ意義でも、これを春の朝といふのとは非常に感じが違ふことを辨へねばならぬ。

參照　春の朝（ハルノアサ）

例句

春曉

春の曙その七もとや秘藏鷹　支考（蓮二吟集）
春曉や棚前過ぐる帆一片　月斗（同　人）
春曉やはるかに白き谿の水　竹陰（同　）
春曉の濱に鯑を買ひにけり　羽山（同　）
春曉や煙崩るゝ松の中　巨籟（懸　葵）
春曉の山澄ます湖の廣さかな　枚々（ホトトギス）

春暁

春暁や[illegible]を楽しむ半間　月舟（ホトトギス）
春暁や端山めぐりて家備蛇　楊童（同）
春暁の右木とも判かぬ一葉かな　紫紅子（同）
春暁の出現れて旅うれし　竹馬（同）
春暁や鑽鳴らして聞鳥　若沙（同）
春暁や木魚の街へ晴一線　静雲（同）
大暁や砂にこぼるゝ松ふぐり　夢雨（同）
春暁や土もたげたる南瓜の芽　春界（同）
春暁や人こそ知らね樹々の雨　草城（同）
春暁や髣髴として佛の灯　雨意（同）
春暁や潮のしぶきし石佛　草餅（同）
春暁やまづ釋迦牟尼に茶湯して　茅舍（同）
春暁や水田の中の梨畠　耿陽（同）
春暁や乳たらしゝゝ乳車　有角（同）
春暁やまろきを見れば茶の畑　盧吼（同）
（一句上句於柏崎諏訪一茶遺蹟）
春暁や雪尙深き俳諧寺　無外（續ホトトギス）
春暁の雀の言葉わかりけり　竹風庵（同）

春の朝

季題解説 春の朝のことをいふ。〔[illegible]〕春暁

例句 春の朝

はるの朝蜆は黒きものぞかし　乙二（たのゝえ草稿）
雨聞て又寐入りけり春の朝　吟江（心の花）

春の晝

季題解説 春晝　春の晝間のことで、明るく、閑かな、のんびりと眠たくなるやうな氣持つものである。

例句 春の晝

春晝や煙のあがる山畠　之水（同人）
春晝の僧形杉に隱れけり　石鼎（ホトトギス）
ぽつかりと春晝朴に月を見し　月二郎（同）
春晝や梯子かけたる洋書棚　青曲（同）
春晝や水夫歩き居る廓町　草秋（同）
ひそやかに遠の松風春の晝　草城（同）
春晝や片方消えたる御燈明　歌村（同）
春晝や映し映れる壺二つ　清三郎（同）

春晝の奈良の大路を連もなく　みづほ（同）

紫式部源氏の間
しみ〴〵とくらき襖や春の晝　十雨（同）

人丸へ蠟燭あげて春の晝　鄰蹊（續ホトトギス）

春晝や障子閉めある中宮寺　橙重（同）

春晝や大鍵さげて案内僧　爽雨（同）

春の暮（はるのくれ）

春の夕（はるのゆふべ）

季題解説 春の日の夕方で、夜のまだ更けない宵のほどをいふ。春の宵と云ふのも同義ではあるが、言葉が齎らす感じは大分違ふやうである。春の宵のやうに浪漫的な感じがないと思はれる。

實作注意 春の暮は暮春のことをいひ、秋の暮は秋の夕のことをいふとの説がある。古人の作には其意のものがあるかも知れぬ。併し今は春の暮・秋の暮共に夕方の義であると定めて置く。**参照** 春の宵（ハルノヨヒ）　春の夜（ハルノヨル）　暮の春（クレノハル）

例句

春の暮

鐘つかぬ里は何をか春の暮　芭蕉（雪まるげ）

入あひのかねもきこえずはるのくれ　同（もゝよ草）

晦日の行燈たてゝ春の暮　北枝（北枝發句集）

春の暮家路に遠き人斗　蕪村（百池遺稿）

誰ためのひくき枕ぞはるのくれ　同（蕪村句集）

にほひある衣も疊まず春の暮　同（同）

春の夕たへなむとする香をつぐ　同（同）

閉帳の錦たれたり春の夕　同（同）

居風呂に棒の師匠や春のくれ　同（蕪村遺稿）

春のくれ筑紫の人とわかれけり　同（同）

うかぶ瀬に杏ならべけり春の暮　同（同）

あち向に寢た人ゆかし春の暮　同（同）

日くれ〳〵春や昔のおもひ哉　同（同）

大門のおもき扉や春のくれ　同（同）

山彦の南はいづこ春の暮　同（同）

春の夕かの絹羽織きたりけり　同（同）

うたゝ寢のさむれば春も暮にけり　同（俳諧品彙）

居りたる舟あかりけり春の暮　同（落日庵句集）

蛤にたゝれぬ鴫や春の暮　同（遺文）

等閑に香たく春の夕かな　同（春慶引）

燭の火を燭にうつすや春の夕　同（新五子稿）

大原の千句過たり春のくれ　召波（春泥發句集）

春の暮

橋守の錢かぞへけり春夕　召波（春泥句集）
花にこそ命惜けれ春の暮　樗良（樗良發句集）
舞か身の人よりかなし春のくれ　同（同）
關札やどなたのとまり春夕　几董（井華集）
僕ヵ妻の絹着て歸る春のくれ　同（同）
今着キし澤庵漬て春ゆふべ　同（同）
雁がねも春の夕暮となりにけり　同（同）
我ためにとぼし遲かれ春の暮　曉臺（曉臺句集）
こゝろほどうごくものなし春の暮　同（同）
古琴やねずみ出て行はるのくれ　同（同）
はるのくれよめり狐のくさの雨　同（同）
はるといへど火ともすほどに暮し哉　同（同）
鶯かぬ風渡りけり春の暮　闌更（半化坊發句集）
ゆふべ〳〵靜まる春の心かな　同（同）
賴朝の獄立つきて春のくれ　成美（成美家集）
下京の窓かぞへけり春の暮　一茶（旅日記）
木兎の面魂よ春の暮　同（同）
羅漢寺のもゝとなりけり春の暮　乙二（をのゝえ草稿）
春の暮かり寐の枕はづれけり　雪居（五車反古）
石手寺へまはれば春の日暮れたり　子規（子規句集）
酒臭き毛氈干しぬ春の暮　露石（新俳句）
雀止らんとす影カーテンに春の暮　又新（ホトトギス）
春夕や傘さげ歸る宮大工　橙黄子（同）
這入り見る西行庵や春の暮　ながし（同）

春の宵（はるのよひ）

春宵（しゆんせう）　宵の春（よひのはる）　千金の夜（せんきんのよ）

諸書校註

【滑稽雜談】東坡(一)詩に云、春宵一刻値千金、花有二清香一月有レ陰、歌管樓臺聲細々、鞦韆院落夜沈々。

【御傘】宵、夕時分にあらず、夜分也、夜の字に五句、連(二)にきらへば、誹には三句去るべき義なれども、二句嫌ふべき也。

注 (一) 蘇東坡。宋時代の文學者。(二) 連歌。

季題解説 春の日が暮れてまだ間もない宵のほどをいふ。春の宵は秋の夜とちがひ、どことなく若々しい華やいだ、なごやかさ、明るさ、艶めかしさがあり、色彩的な感じにみちてゐる。しかも又一面には魅惑的な歡樂的な、刺戟的な、淡い甘い哀愁さへ漂うてゐるやうにも感じられる。千金の夜は春宵一刻價千金の詩句から出てゐる。 参照 春の暮（ハルノクレ） 春の夜（ハルノヨル）

例句

春の宵

筋違にふとん敷たり宵の春　蕪村（蕪村句集）
公達に狐化たり宵の春　同（同）
肘白き僧のかり寝や宵の春　同（同）
漏る雨をひとゝかたるや春の宵　太祇（太祇句選）
くづれくる髷直しけり春の宵　和子（[illegible]人）
御簾越しに短檠ともり春の宵　句佛（[illegible]）
春宵や心置かねば帯輕し　秋刀魚（ホトトギス）
春宵や醉へば醜き己が顔　唖村（同）
春宵の灰をならして寢たりけり　石鼎（同）
わが[illegible]の苦思の[illegible]生[illegible] あはれ深かりし事ども
語り繼ぐ昔春宵の嘘誠　禾人（同）
足袋裏に舞臺の塵や宵の春　かな女（同）
古妻と言ひも棄てまじ春の宵　草城（同）
手燭置く疊廊下や春の宵　綾華（同）
春宵や松にかくれし小提灯　梅史（同）
　臨亭
春宵や水邊の石の置行燈　王城（同）
母もする隱し化粧や宵の春　麻葉（同）
春宵や人形の中の大達磨　木國（同）
花見たき妻のかごとや春の宵　輝陽（同）
春宵や伽藍を鎖す小提灯　夜半（同）
春宵の千日前で掏られけり　秋皎（同）
春宵や光り輝く菓子の塔　茅舍（同）
春宵や泣ひなりて蛾眉ほそし　鼠遊（同）
妻に句を強ひてさびしき春の宵　凍魚（同）
芳年の娘老いたり春の宵　水竹居（同）
麻雀に妻も加へて春の宵　嶺月（續ホトトギス）
春宵の銀座の辻の似顔畫師　三郎（同）
別々に出て行く夫婦春の宵　南風（同）
　琉球旅中
蛇皮線のほろん〳〵と宵の春　畊人（同）

春の夜（はるのよ）

春夜（しゆんや）　夜半の春（よはのはる）

古書校註

【滑稽雜談】　春の夜も短きやうに作る例多し。然れども夏の夜の心とはかはりめ侍る也。よく考ふべし。

季題解說

春の日の暮れて間もない頃を春の宵といひ、それが更けると春

の夜となるのである。夜半の春と技巧的に言つても意義はほゞ同じであるが、感じとしては單に春の夜といふよりも一層更けた夜中の氣持がする。

【同】春の宵(ハルノヨヒ) 春の暮(ハルノクレ) 朧月夜(オボロヅキヨ)

例句

春の夜

春の夜や籠人ゆかし堂のすみ　芭蕉（笈の小文）
春の夜は櫻に明てしまひけり　同（翁草）
（月待がゝ恋にわかれし様）
春の夜の枕嗅やら目が腫レた　鬼貫（鬼貫句選）
春の夜の女とは我むすめかな　其角（五元集）
春の夜や草津の鞭のゆめばかり　同（同）
春の夜に尊き御所を守身かな　蕪村（夏より）
春の夜や宵あけぼのゝ其中に　同（明烏）
春の夜や狐の誘ふ上童　同（蕪村遺稿）
春の夜ややごとなき人に行違ひ　同（落日庵句集）
春の夜の盧生が裾に羽織かな　同（同）
春の夜やたらいをこぼす町はづれ　同（同）
春の夜や宗佐の庭を歩行けり　同（同）
春の夜や女を怖す作りごと　太祇（太祇句選）
夜步く春の餘波や芝居者　同（同）
春の夜もかたぶく月や連哥町　召波（春泥發句集）
春の夜や足洗はする奈良泊　同（同）
春の夜や連哥滿たる九條殿　几董（井華集）
春の夜や柚を踏つぶす小板じき　同（同）
熊坂に春の夜しらむ薪かな　同（同）
春の夜の月も推なり梅柳　曉臺（曉臺句集）
はるの夜の月より明て天龍寺　同（同）
春の夜を雁おひあかす野守かな　同（同）
はるの夜ぞひとつは雁もかへり來よ　同（同）
春の夜や何事もなき三輪の杉　同（同）
はるのよのうそひめ戀ふる梟か　同（同）
春の夜の月に宿かれ花柑子　同（同）
はるのよやぬしなきさまの捨車　同（同）
春の夜や月に移れるさゞれ波　闌更（半化坊發句集）
春の夜や酢を乞に來る隣あり　成美（成美家集）
春の夜のおもはくもあり夜のふね　一茶（旅日記）
はるの夜のねぶたき眼にも峰の松　乙二（をのゝえ草稿）
春の夜の爪上り也瑞巖寺　同（同）
はるの夜や袂の熨斗を思出す　同（同）

春の夜のものにはしたり風の芦　蒼虬（蒼虬翁發句集）
夜の春を伏見の芝居ともしけり　田福（新選）
春の夜はたれか初瀬の堂籠り　曾良（猿蓑）
春の夜や奈良の町家の懸行燈　子規（子規句集）
春の夜や局女の草双紙　同（同）

亡き古白を思ひいでゝ
春の夜のそこ行くは誰ぞ行くは誰ぞ　同（同）
春の夜や繍したる閨の幕　露月（新俳句）
春の夜に人の枕をかくしけり　青々（妻木）
春の夜や紡げる麻の盆に滿つ　溪午（同人）
門の片外しなる春夜かな　朝冷（同）
春の夜のしまひ渡舟やどやと乘る　百年（ホトトギス）
花落ちし椿挿しある春夜かな　かな女（同）
春の夜やいまは用なき刀掛　鬼城（同）
戸にあたる春夜の風や雨やみし　宵曲（同）
かくて老ゆ我が愚恐し夜半の春　せん女（同）
春夜の子起しておけばいつまでも　みどり女（同）
春の夜や寢れば戀しき觀世音　茅舍（同）
春の夜や女に飲ます陀羅尼助　同（同）
春の夜の蒲團の袖を連ねけり　杏坡（同）
妻のほか世に人あらじ夜半の春　泥中（同）
春の夜のいとかすかなる北斗かな　てい子（同）
春の夜や宿屋廻りの土産賣　春雷（續ホトトギス）
春の夜半緣のそこらに猫鳴けり　耕雪（同）
母人は淨るり本を夜半の春　風生（同）

藤田邸にて
春の夜のいちご目出度し牛乳（チ）かけん　虛子（句集虛子）

朧月夜（おぼろづきよ）

季題解說　朧夜（おぼろよ）　參照　天文—朧月（オボロヅキ）

例句　朧月夜

おぼろ夜を白酒賣の餘波哉　支考（蓮二吟集）
居風呂に夢見る朧月夜かな　同（同）
おぼろ夜に梅が香おくる風ほそし　杉風（杉風句集）
朧夜やうたはぬ歌に行過し　千代女（千代尼發句集）
おぼろ夜や松の子どもに行あたり　同（同）
朧夜や見屆たもの梅ばかり　同（同）
朧夜や人彳るなしの園　蕪村（新選）

朧月夜

朧夜やひとりを三つの影法師　也有（蘿葉集）
おぼろ夜や南下りにひがし山　几董（井華集）
朧夜や誰か寐ごて行鹿島舟　白雄（白雄句集）
朧夜やみなあらはれし月ながら　闌更（半化坊發句集）
おぼろ夜や淡路の灯岸の松　同（同）
朧夜やおぼつかなくもほと〻ぎす　士朗（枇杷園句集）
朧夜や吉次を泊し椀一つおと　成美（成美宗集）
朧夜や只一輪の花曇り　知一（月影塚）
朧夜の戸にはさまる〻柳哉　吟江（夢うら）
朧夜や我足音にふりかへり　同（古袋）
朧夜や筵を帆にする淡路嶋　荊花（淡路島）
朧夜や悪い宿屋を立ち出づる　子規（子規句集）
朧夜や玉とぼそを敲く音　芳水（春夏秋冬）
朧夜や隣の園の花白し　丁堂（同）
朧夜の雨がか〻りし羽織かな　石人（同人）
朧夜や石段くらき料理舟　皓火（ホトトギス）
朧夜の塔のほとりの影法師　茅舍（同）

木の芽時

季題解説　春のはじめ萬木の芽が出初める候を云ふ。もちろん南國と東北乃至北海道などとは、非常に時期の相違があるわけであるが、普通「木の芽時」といふ言葉からは、二月末、三月初め頃といふ感じをうける。接骨木などが最も早く芽を出し、欅・楓につゞいて續々と木々が芽を吹く。石榴・百日紅などは最も遲い。参照　植物—木の芽（コノメ）

花時

櫻時　花の頃

季題解説　陽春四月、櫻の爛漫たる時をさして一般に謂ふのであるが、敢て櫻のあるなしに拘はらず、日常挨拶の言葉にもよく使はれる、である。この時季は一番人の心が浮き立つものであるが、また何となく倦怠を覺えもする時である。参照　植物—花（ハナ）

例句

花時

花の時は腕に生疵絶えなんだ　宗因（梅翁宗因發句集）
去年からの此花の比又いつか　鬼貫（俳諧七車）
鞍の上に人もおぼえずさくら時　同（同）
花の頃扇さいたり諸職人　同（鬼貫句選）
たれか見ん櫻の比の野人參　素堂（俳諧五子稿）
雁啼てものに味なや花の頃　來山（續いま宮艸）

死に來て其如月の花の時　支考（蓮二吟集）
さくら咲頃や隱者の古だゝみ　桃隣（古太白堂句選）
花時の人迷ひくる裏戶かな　泊月（ホトトギス）

蛙の目借時（かはづのめかりどき）　めかる蛙

古書校註

【年浪草】是は俗に、蛙のめかる時とて、蛙の鳴く頃、眠りを催ほすを云ふと也。○夫木、（一）つとめすとねもせで夜をあかす身にめかるかはづの心なきこそ。

【栞草】此のめかる蛙とは、目を借ると云ふ心也。夜短く眠りを催ほすを蛙の人の目を借るよしにいへる俗〻諺也。西華集（二）卯花を月夜と見たる山鴉、里は熗爐の匂ふ門々、といへる脇句の評に支考が曰、其の頃蛙のめかり時ならん、日永く夜短かに、いとねぶたくてよし。蔦の松原（三）閑子鳥なくや蛙のめかり時　珍碩。○年浪草・俳諧歲時記などに、只めかり時とのみ出せるは、ことたらず。必ず蛙のめかり時と云ふべし。又此の選、増山井、をだまきなどにも出さず。また元祿年間の句にも題としたる例をみず。今この季を定めんには、支考が評の詞も、珍碩が句も、初夏の部にとりあはせたれば、四月の部に入るべきものならんか。

註（一）夫木和歌集。勝田長淸の撰。（二）各務支考の著。（三）同上。

季題解説　苗代の頃から蛙が盛んに鳴き始める。雄が雌を呼ぶためである。一日中鳴くのであるが、その中でも午前三時頃から午前八時頃までは、溫度低下のため鳴きやんでゐる。

蛙の鳴く期間は稻が大きくなる頃即ち七月の初め頃まででであつて、この間蛙は二番子三番子と仔を生むのである。蛙の鳴く期間中でも、特に菜の花の盛りの頃は蛙の聲を聞いてゐると睡氣を催すことが多い。これは蛙に眼を借りられるためだといふので、この頃のことを蛙のめかり時と稱するのであるといふ。略して「めかり時」とのみいふのは穩かでないといふ說は尤もと思はれる。夫木集に「つとめすとねもせで夜をあかす身にめかる蛙の心なきこそ」とある。参照 動物―蛙（かへる）

例句

蛙の目借時
目は借さじ富士を見る日は蛙にも　也有（羅葉集）

苗代時（なはしろどき）

季題解説　苗代のつくりはじめから、すつかり苗も育ち、そろそろ田植も始まらうといふ時までの間が苗代時である。であるから、この間には初は早春、終りは初夏に近い八事風〻が作ふ。農家では、この頃いろいろの種蒔・種選み・種浸し・田打・畑打で忙しい。特に籾種を浸したり、選んだり、

畦塗り代掻きをやつたり、田掻き馬を使役したり、水から揚げた種俵を日當りに出したり、叉筵を被せて發芽を促したり、中々に氣遣ひの多いものである。その間に田圃には草が萌え、畦には豆が芽を吹き、蛙は鳴きはじめ、芹は花を開き、すつかり麗かな春となり終せる。さうして次に田植時となればもう全く初夏である。〔參照〕地理—苗代註八

例句

苗代時

市中や苗代時の鯰賣　子規（子規句集）

八十八夜

古書校註

【年浪草】運氣指南に曰、八十八夜とは、正月の節、立春の初日より八十八夜に當る。大槩三月の中と四月の節との夾と。云々。

【栞草】立春の日より八十八夜に當るを云ふ。忘霜の條と通はし見るべし。

季題解説　立春から八十八日目に當る日をいふ。大抵五月二日で、また三日のこともある。農家は野良仕事に急がしい時である。蔬菜類は苗が成長し、茶摘は眞盛り、養蠶は初眠頃である。丁度この時分に降霜があつて、桑の芽や蔬菜などが傷められることがある。しかし八十八夜の別れ霜といつて、この日以後は霜がないとせられてゐる。〔參照〕忘れ霜

春深し

春闌　春更く　春闌く

季題解説　木々の花なども一體に葉勝ちとなり、風物の樣子がどことなく、春ももう盛りを過ぎたと感ぜしめる頃のことをいふのである。

例句

春深し

春ふかし伊勢を戻りし一在所　太祇（太祇句選）

公家町や春物深き金屏風　召波（春泥發句集）

葉櫻に山こゝもとのはる深し　白雄（白雄句集）

仙洞御所

山姫の動かす松に春深し　巣兆（曾波可理）

春深く禁裡にそだつ緋鯉かな　鼓竹（倦鳥）

春更けて諸鳥啼くや雲の上　普羅（ホトトギス）

暮の春

暮春　春暮るゝ　春盡くる　春行く　行春　徂春　春の行方

春の果　春のとまり　春の湊　春の末　春の限り

古書校註

【山之井】春のくれには、數奇屋のゐろりも、ねまのこたつもふたぎつゝ、

手飼の猫のより所なげにきて、ねう〳〵と打鳴くさへ、おのづから春したひ顔に聞ゆる心ばへ。盛りなりつる花がつをもしもかきけちて、庭のめぐりもこさびしき氣色。又ゆく春の霞の袖は、しがみつきてもかひなき恨み、函谷のせきとゞめても、(一)鷄鳴にあけゆく春の名殘なさなど、飽かず惜しき心ばへをいひなすべし。

【滑稽雜談】 高辻章長卿の朗詠抄に云、暮春と三月盡とのかはりめ如何。暮春は三月廿七八日比を云ひ、三月盡は晦日の一日に限るべし。○春の暮と云ふ句にも、春暮てなど云ふ句にも、暮春の句あり。又一日の夕を云ふ句侍る也。これ常に云ふ大暮と小暮の差別也、よく〳〵吟味有るべし。兼載師(二)の云、春の湊と申すは、河の海に入るさかひを云ふ也。水のみなとになると云ふ心也と申す、それを春の皆になると云ふ心也。○新古今抄(三)に云、春の湊とは、とまりの事也。春のあつまる所なるべし。湊とは物のあつまる所を云ふ也。湊といふ字はあつまるともよむ也。○了心の說に云、春の湊は水邊也。或師云、極めて水邊にはなけれども、古歌すべて水邊をよせて讀めり。俳諧も同じ也。新古今集、暮れて行く春のみなとはしらねども霞に落つる宇治の柴船　寂蓮法師(四)

註 (一)函谷關の鷄鳴は、孟嘗君の故事をさす。(二)猪苗代兼載といふ連歌師。(三)東常緣の著。(四)藤原定長。僧俊海の子、建仁二年歿。

季題解說 三春を一日に擬らへて、日の暮るゝ如く將に終らんとする春といふこゝろである。「行春」「徂春」「春惜む」「春の別れ」などといふ詩藻的主觀的の言葉に對して、「暮の春」「暮春」「晚春」「春の終」「春の果」などは、同じ季の感じを現はす言葉でも、いくらか現實的、客觀的である。從つて「行春に和歌の浦にて追付たり　芭蕉」といふ風に、作者の情緒を事物に假托して表現する場合には、行春といふ言葉がまことに適切なる働きをなし、又「いとはるる身の恨み寐や暮の春　蕪村」といふ風に一見主情的の如く見えて、その實或る事實を客觀的に描寫した句になると、暮の春といふ言葉の現實味が大變效果を現はして來る。參照 春の暮ハルノクレ　春を惜むハルヲヲシム　夏近しナツチカシ　彌生盡ヤヨヒジン

例句

暮の春

行春にわかの浦にて追付たり　芭蕉　(笈の小文)
行春や鳥啼魚の目は泪　同　(奥細道)
行春を近江の人とおしみける　同　(猿蓑)
　　籬といふ盲に
行春の夜を寐ぬ顏の籬から　鬼貫　(俳諧七車)
どつちへぞ春も米じやに又ねる歟　同　(鬼貫句選)
とゝ川の春やくれ行霞の中　丈草　(丈草發句集)
蔦に乘て春を送るに日雲や　其角　(五元集拾遺)
ちくま河春行く水や鮫の髓　同　(五元集)

けふ限り春の行衞やほかけ舟　許六（五老井發句集）
行春やさて出代のなられもの　同（同）
行春や痳ざめきたなき宵の雲　惟然（惟然坊句集）
行春に底のぬけたる椿かな　支考（蓮二吟集）
遲うくるゝ日もけふ切のわかれ哉　杉風（杉風句集）
返哥なき青女房よくれの春　蕪村（蕪村句集）
行春やむらさきさむる筑波山　同（同）
ゆく春や逡巡として遲ざくら　同（同）
ゆく春や横河へのぼるいもの神　同（同）
まだ長ふなる日に春の限りかな　同（同）
寢佛をきざみ仕舞ば春くれぬ　同（蕪村遺稿）
いとはるゝ身を恨寢やくれの春　同（同）
ゆく春や歌も聞えず宇佐の宮　同（同）
ゆく春や眼に逢はぬめがねうしなひぬ　同（同）
行春のいづち去けんかゝり舟　同（同）
行春やおもき頭をもたげぬる　同（同）
行春や撰者を恨む哥の主　同（平安廿歌仙）
行春や白き花見ゆ垣のひま　同（題林集）
洗足の盥も漏りてゆく春や　同（其雪影）
きのふ暮けふ又くれてゆく春や　同（連句會草稿）
ゆく春やおもたき琵琶の抱ごゝろ　同（五車反古）
歩行〳〵ものおもふ春の行衞哉　同（新五子稿）
けふのみの春を歩行て仕廻けり　同（新選）
下戸の子の上戸と生れ春暮ぬ　太祇（太祇句選）
はるの行音や夜すがら雨のあし　同（同）
行春や旅へ出て居る友の數　同（同）
女見る春も名殘やわたし守　同（同）
狩倉の矢來出來たり暮の春　召波（春泥發句集）
たんぽゝもけふ白頭に暮の春　同（同）
ゆく春やいづこ流人の迎舟　同（同）
ほし衣も暮行春の木の間かな　同（同）
行春に流しかけたる筏かな　同（同）
ゆく春のとゞまる處遲ざくら　同（同）
八專の空たのめなくゆく春や　同（同）
花ながら春の暮るぞたよりなき　樗良（樗良發句集）
放下師の眠のひまに春ぞ行　同（同）
古雛の箱にはぐれて春暮ぬ　也有（蘿の落葉）
ゆく春や花によごれし荷ひ茶や　同（蘿葉集）

ゆく春や一寸先は木下やみ　同（同）
行春や送る門には松もなし　同（同）
ゆく春やたそがれ程の木下やみ　同（同）
春のわかれ蛙ほどなくものもなし　同（同）
寺へ來て鐘つき春のわかれかな　同（同）
掃溜に櫻見る春の名殘かな　同（同）
ゆく春やどちらへ渡る瀨田の橋　蓼太（蓼太句集）
あれ春が笠着て行はきてゆくは　同（同）
行春や一聲青きすだれうり　同（同）
死なでやみぬいたづらものよ暮の春　几董（井華集）
めづらしと見るもの毎に春や行　同（同）
行春や狸もすなる夜の宴　同（同）
還俗のあたま痒しや暮の春　同（同）
草臥て寐し間に春は暮にけり　同（同）
暮んとす春の狂ひや雹ふる　同（同）
大名のひと夜島原くれの春　同（同）
春暮ぬ醉中の詩に墨ぬらん　同（同）
園の戸に鎖おろす春の名殘哉　同（同）
ゆく春や鄙の空なるいかのぼり　白雄（白雄句集）
艸の戸や更行春の青かづら　同（同）
風おもく人甘くなりて春くれぬ　曉臺（曉臺句集）
ゆくはるや駈出しがほの古兜巾　同（同）
行春やつひに根付しさかの松　同（同）
春は行何やらひまの明ごゝろ　同（同）
春の名殘水かくれて香はよもためじ　同（同）
鱗や翌の命をくれの春　同（同）
とりよれぬ春の行方や雲の鳥　同（同）
あさ／＼は寒し春ゆく荻の門　士朗（枇杷園句集）
ゆく春をあはれむ竹の日影哉　同（同）
ゆくはるやおく街道を窗のまへ　成美（成美家集）
竹を見るこゝろとなりて春はゆく　同（同）
よしもなきしる人ふえてはるは行　同（同）
ゆく春を鏡にうらむひとりかな　同（同）
春の山けふはや夏におしかゝる　同（同）
とても行く春ならいそげ草の雨　一茶（旅日記）
ゆさ／＼と春が行くぞよ野べの草　同（七番日記）
やよ虱這へ／＼春の行方へ　同（同）
鳥どもよだまつて居ても春は行ク　同（一茶新集）

暮の春

行春やどれが先立つ草の露　一茶（株番集）
長の春今盡るなり角田川　同（九番日記）
行春は筏の下にかくれけり　蒼虬（蒼虬翁發句集）
着よごれの羽織を春の名殘かな　梅室（梅室家集）
ゆく春やいつ眼をさます小田の鷺　同（同）
ちる花の雪吹や春の行姿　隨風（蘗首途）
行春やけふはことさら雲に鳥　吟江（心花）
行春やおくれていそぐ蝶一つ　同（古き姿）
行春や花ちり不二に雪少し　呉夕（古今句鑑）
行春や蝶々亂る淵の上　鹿鳴（堅並）
行春や櫻もくらき鈴鹿山　乙由（麥林集）
行春のつれなき顔を椿かな　浮木（夜話狂）
行く春のうしろ姿か藤の花　去來妻かな（玉藻）
行春やかゝれ〳〵て萓の丈　文岡（類題發句集）
行春や草伸上り〳〵　淵澄（月影塚）
行春も心得顔の野寺哉　野水（あら野）

春歸人宿寬

行春や紙屑買も歌のきれ　麥浪（三崎志）
仁和寺の邊りにくるゝ春もあらん　我則（續明烏）

会州城にて

行春の酒をたまはる陣屋かな　子規（子規句集）
行春やほう〳〵として蓬原　同（同）
紙あます日記も春のなごりかな　同（同）
行く春や空は淺黄に著莪の花　露石（春夏秋冬）
行く春の梅はちひさき實となりぬ　同（同）
行春や我歌のこる旅の宿　青々（妻木）
畫を描いて勸化に酬ふ暮の春　句佛（懸葵）
老い猫の眼脂ためをる暮春かな　鐵楞（同）
行春や植ゑ傷みせし楓の葉　沈丁（同）
大鍋とのみ呼ぶ陵や暮の春　濱人（ホトトギス）
行春や情を殺して眉こはし　不人（同）
行春や雀の食へる馬の糞　鬼城（同）
行春や親になりたる盲犬　同（同）

舟行

行春や人魚の眇（スガメ）我を視る　蛇笏（同）
春暮るゝ花たき庭の落花かな　たけし（同）
行春や廚の隅の漬蕨　友風（同）
行春や輿の小窓に花鳥彩　橙黄子（同）

人妻となりて暮春の襷かな　草城（同）
生垣に暮春の雨や草の宿　楞童（同）
鼈甲の櫛出來てきぬ暮の春　雨城（同）
徂春の窓に垂れたる袂かな　泊月（同）
塵穴に花も芥も暮の春　同（同）
行春や添水とまれる詩仙堂　王城（同）

比叡

逝春の戒壇院をめぐりけり　同（同）
行春や墓そこゝに桶狭間　貝城（同）
行春や曇りがちなる播磨富士　重峰（同）

高野山にて

行春や茶屋になりたる女人堂　茅舍（同）
行春の光秀藪を通りけり　松鄕（同）
行春や宿場はづれの松の月　不器男（同）
春菊の花もながめや暮の春　陽堂（同）
行春や枕にしたる春曙抄　鄕川（同）
行春や大奥下る權命婦　水竹居（同）
行春や妻のうつせる馬太傳　麥秀（同）

法隆寺玉蟲厨子

行春やほの〳〵のこる淨土の圖　秋櫻子（同）
行春の鐘われてゐるひゞきかな　よりに（同）
行春の舞子の驛のポストかな　鵑村（同）
花提灯挿して春行く柱かな　清三郎（同）
行春の上の渡舟はすたれたり　月堂（同）
いつしかに春はうつりし庭の雨　てい子（同）
行春のをだまき草も雨の中　秋音（同）
行春や藝に身を賣る膃肭臍　茅舍（同）
著莪咲いて大原の春も盡きにけり　霞村（同）
春盡の門邊の馬糞田へ捨つる　八郎（續ホトトギス）
行く春のぼたん櫻の一木かな　たかし（同）
行春を神父と共に惜みけり　きゆう（同）
逝春や狂ひしまゝの體溫器　桂仙（同）

西芳寺

行春や干しならべある庭草履　秋思（同）
行春や妻亡きあとの花畠　倉子（同）
行春や草にしづめる佛達　つな女（同）
旅せんと思ひし春も暮れにけり　虛子（句集 虛子）
此春は徂くにつけても風雨かな　同（同）
行春や到るところに遲櫻　同（同）

暮の春　クローバの花の乏しき暮春かな　虚子（續ホトトギス）

春を惜む（はるをおしむ）

季題解説 惜春（せきしゆん）　春を送る（おくる）　春の名殘（なごり）　春の別れ（わかれ）　春のかたみ

盡きなんとする春を惜しむこゝろである。暮春・行く春などいふのも同義ではあるが、春惜しむといふと、言葉自體に情がこもり、特殊の響きがあるやうに思へる。春惜しむといふ言葉そのものに、既に何ともいへないいゝ氣持が含まつてゐるやうに思はれるのである。〔參照〕暮の春（ハル）

例句

春を惜む

うつふし染といふ書をして、西行がはいかいの板行やみなんとて、發句望みしほどに

それをだにそなたも春をしまずや　鬼貫（俳諧七車）

鶏のとまり時なり春をしき　浪化（浪化上人發句集）

夕日はや春のおしさや疊丈　同（同）

春をしむ座主の聯句に召れけり　蕪村（蕪村句集）

春惜む宿やあふみの置火燵　同（同）

春をしむ人や榎にかくれけり　同（蕪村遺稿）

手燭して庭踏む人や春おしむ　同（題苑集）

吸筒に麥飯かへて春おしむ　同（落日庵句集）

野に山に閑人春を惜みけり　召波（春泥發句集）

鷲尾は親子住居て春おしむ　同（同）

春をしむ人や落花を行戻り　同（同）

苗成が惜みし春の夜明かな　蓼太（蓼太句集）

行燈をとぼさず春を惜しみけり　几董（井華集）

春をしと見やれば落る木の葉有　曉臺（曉臺句集）

鳩鳴くや大事の春がなくなると　一茶（七番日記）

鐘持よ春を逃すな合點か　同（同）

くせ酒の泣ク程春がをしい哉　同（一茶新集）

さほ姫もいく度けふをふりむくぞ　乙二（をのゝえ草稿）

旅に寐て故鄕の春を惜みけり　春武（其雪影）

春をしむ宿や端居の茶漬飯　吟江（夢うら）

彌生十日餘上野にて

櫻見てはや春惜む心かな　同（古學）

春惜む各々水のほとりかな　泊月（ホトトギス）

手をとめて春を惜めりタイピスト　草城（同）

道のべに腰かけて春を惜みけり　素十（同）

九品佛迄てく〳〵と春惜む　茅舍（同）

帆を下げて海原の春惜みけり　今夜（續ホトトギス）

南北に生田の川や春惜む　一葉（同）

歩きつれ憩ひつれつゝ春惜む　たかし（同）

牡丹を惜春畫譜の終りとす　拓水（同）
つくねんと春を惜める盲かな　失明仙舟（同）
春惜む人ひとりなる丸木舟　雲泉（同）
堤防にならんで春を惜みけり　岬人（同）
百姓と話して春を惜しみけり　風生（同）
丹の欄にさへづる鳥も惜春譜　久女（ホトトギス誌）

春暑し（はるあつし）

季題解説　時候は春でありながら、暖かといふところを通りこして、暑いと思ふくらゐであることをいふ。暑いとは云ひながら、矢張り春の氣持には相違ないので、薄暑などとは全く感じが違ふこと勿論である。【參照】夏―暑さ（アツサ）

例句　春暑し
春暑し鹿尾菜をはたく由比ケ濱　三稻（同人）

夏近し（なつちか）

夏隣（なつどなり）　夏隣る（なつとなる）

季題解説　春ももう闌けて、風物漸く夏に入らうとする頃のことを云ふ。鮮滿地方では、春の行くのが實に慌しくて、迎へる夏が酷熱であるためか、夏隣るといふ感じを受けることが、特に強いやうに思はれる。【參照】暮の春（ハルノ）

例句　夏近し
夏ちかの誰も杜によりやすし　成美（成美家集）
大空は淺黄に晴れて夏近し　棟花（新俳句）
夏近や池透き見ゆる枳殼垣　白貧（ホトトギス）
濯ぎ女に蝶が白くて夏隣　一壺（續ホトトギス）
夏近し葱に水をやりしより　虛子（句集虛子）

彌生盡（やよひじん）

三月盡（さんぐわつじん）

古書校註　【滑稽雜談】伊勢物語に云、昔おとろへたる家に、藤の花植ゑたる人有りけり。やよひのつごもりに、その日雨そぼふるに、人のもとへをりてたてまつらすとてよめる、ぬれつゝぞしひてをりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば。（一）闕疑抄（二）に云、三月のつごもりを、春はけふのみと讀みては曲なし。春はいくかもあらじといふ、尤も面白きなり。晦日と云ふに、いく日もあらじと云ふは、相違ふと云ふ人有り、是は歌道を知らざる人のいひごとなり。

【栞草】 三月の晦日を云ふ。春の果・春の限などもいへり。

註 （一）在原業平の歌。（二）細川幽齋の著、伊勢物語の註釋。

季題解說 舊暦の行はれた時代においては、三月晦日は卽ち春の盡きる日であつて、特別の情調があつたわけであるが、太陽暦の今日となつては、三月晦日といふものにさういふ特殊の感じは伴はず、從つて季題として「三月盡」または「彌生盡」なる語を存續する意義は殆どなくなつてしまつた。

參照 暮の春（クレノハル）

例句 彌生盡

明ぬ間は星もあらしも春の持　丈草（丈草發句集）
三月と文に書のも名殘かな　去來（去來發句集）
色も香もうしろ姿や彌生盡　蕪村（仝　集）
おこたりし返事かく日や彌生盡　几董（井華集）
明日よりは身を夏旅の今宵哉　白雄（白雄句集）
鳥の巢に三月盡の嵐かな　秋之坊（類題發句集）
面白き涙なりけり春一夜　淡々（淡々句集）
行燈に三月盡の油かな　碧梧桐（新俳句）
椿掃きし暗に戀の輪や彌生盡　石鼎（ホトトギス）
彌生盡日罌粟こまごまと芽生えけり　久女（同　）

雨水（うすゐ）

古書校註 【滑稽雜談】 素問註に云、雨水の氣、初の五日獺魚を祭る。次の五日鴻雁來る。後の五日草木萌動す。○これ正月の中、立春より後十五日也。每事節氣のふたつ侍る也。【年浪草】 中。○月令廣義に曰、立春後十五日、斗、寅に指すを雨水と爲す也。正月の中雨水中、氣雪散じて水と爲る也。

季題解說 立春の後十五日、斗柄寅を指すを雨水となす。所謂二十四氣の一、陰暦正月の中。太陽暦の二月十八九日頃である。（二十四氣については「立春」の解說を參照せよ。） 參照 立春（リツシユン）

啓蟄（けいちつ） 驚蟄（けいちつ）

古書校註 【滑稽雜談】 節。○月令に曰、仲春の月、蟄蟲咸（ミナ）動き、戸を啓（ヒラ）きて始めて出づと。註に、始めて其の穴を穿ちて出づるを謂ふ也。疏（一）に曰、漢の初、驚蟄を正月の中と爲し、雨水を二月の節と爲す。○素問註に、驚蟄の節、初の五日桃始めて華く。次の五日倉庚鳴く。後の五日鷹化して鳩と爲る。（二）

【年浪草】孝經緯に曰、驚蟄は、蟄蟲震驚起きて出づる也。○禮記疏に曰、(略)前漢の末、始めて雨水を以て正月の中と爲し、驚蟄を二月の節と爲す。

註 (一)禮記疏。(二)異說がある。春分の項を參照せよ。

季題解說 蛇・蟻・地蟲・蜥蜴などは、冬になると多く土中に蟄伏して冬眠するが、この間は丁度死んだやうであつて、全く食餌を取ることなく、春暖の候になつて土中から出て來る。月令に「仲春の月蟄蟲咸な動きて戸を啓き始めて出づ」とある。即ち啓蟄とは蟲類がその穴を穿つて出るのをいふのである。この啓蟄は曆の方では、二十四氣の一に數へられてゐる。(二十四氣については「立春」の解說を參照せよ。)元來曆では、五日を一候とし、三候を一氣とし、二氣を一月とし、四季十二月、即ち一年を二十四氣、七十二候に分けてある。而して啓蟄は春の六氣のうちの一氣に數へられ、陰曆では二月節に、陽曆では三月五日頃にあたるのである。新潟地方では、螟蟲の啓蟄と云ふのが面白い。螟蟲は藁の中で越冬した幼蟲が、五月中旬藁の根本から這ひ出てさなぎとなり、孵化して飛出し苗代に産卵する。後孵化して稻の髓を食害する。幼蟲の出る頃、小學校では子供達の仕事として、藁鳰を搔き分け蟲を採つて驅除させるのである。

實作注意 こゝにいふ啓蟄は時候を指すのであるが、啓蟄といつて直ちに穴を出る蟲を指すこともある。此場合の啓蟄は動物の部の「地蟲穴を出づ」の項に入らねばならぬ。參照 雨水(ウスヰ) 動物―地蟲穴を出づ(チムシアナヲイヅ) 蟄蟲始振(チツチウハジメテウゴク)

例句 啓蟄

啓蟄や人移り來し古館　奄美人 (ホトトギス)

啓蟄のつちくれ躍り掃かれけり　禪寺洞 (同)

啓蟄や庭と畠とけじめなき　櫻坡子 (同)

啓蟄や犬のふぐりは春の花　鬼峰 (同)

啓蟄の地洞然と開きけり　青畝 (續ホトトギス)

水かへて啓蟄の龜覺めにけり　旭川 (同)

清明(せいめい)

古書校註 【滑稽雜談】是三月の節なり。○素問馬玄臺の註に云、季春淸明の節、初の五日桐始めて華さき、(一)次の五日田鼠化して鴽(二)となり、牡丹華さき、後の五日虹始めて見ゆ。(三)○六帖に曰、淸明は三月の節、改火の辰を云ふ。又曰、春は楡柳の火を取り、以て陽氣を順にす。(四)唐歲時記曰、每歲淸明、內園官の小兒、殿前に於て火を鑽り、先得者進上す。上絹三疋を賜ふ。

【年浪草】節。○月令廣義に曰、孝經の緯に云、春分の後十五日、斗、乙に指すを淸明と爲す。三月の節。萬物此に至て皆潔齋にして淸明なり。

註（一）其角の自註に、「[illegible]の花の事、木の花に混ぜず、古俳書に夏の季とす、大に非也。諸書を考ふるに、春に花ある事あきらかなり」とある。夏の部「[illegible]の花」を参看せよ。（二）雪はウツラ、百舌鳥か。（三）天文の部「[illegible]」の條を参看せよ

季題解説　二十四氣の一である。（二十四氣については「立春」の項を参照せよ。）陰暦三月節、太陽暦の四月五日頃に當る。草木萬象この節に至っていよいよ清鮮であるといふところからこの名がある。〔[illegible]〕欣蠶ツイ　宗教

――清明ツイ、

穀雨（こくう）

古書校註

【滑稽雜談】　素問註に曰、穀雨の氣、初五日萍始めて生じ、（一）次の五日鳴鳩（二）其の羽を拂ふ、後の五日戴勝（三）桑に降る。○説苑に曰、温公云、洛人穀雨を謂ひて牡丹の厄と爲す。

【年浪草】　中。○月令廣義に曰、穀雨は三月の中、清明の後十五日、斗、辰を指すを穀雨と爲す。言ふこゝろは雨百穀を生ず。清淨明潔なり。

註（一）其角の附說に「これら七草の若生なれば、春に許用するなり」とある（二）時珍本草に「鳴鳩大如鳩、而帶黃色、三月穀雨後始鳴、夏至後乃止」とあるのを根據として、其角は「時珍が說によらば、月令の鳴鳩は鳴鳩なるべきか。鳴鳩は和俗に云ふかんこ鳥也。かんこ鳥は夏の季也、然れども三月の中旬より鳴くにて侍るべし」と說いてゐる。（三）其角の附說に「戴勝は和國に有らうそ鳥などいふ說も侍れど、慥かなる儀にあらねば、信用しがたし。只名目を爰に記する也」とある。戴勝は三才圖會には「山鵲に似て尾短く、靑色、尾冠倶に文彩有り。花を戴くが如し。故に戴鵀と呼び、又戴勝と稱す」と見えてゐる。

季題解説　二十四氣の一である。（二十四氣については「立春」の項を參照せよ。）春の季節中で一番後のもので、陽曆四月二十日頃にあたる。この頃雨多く、百穀潤ふの義である。萍が生えるのもこの穀雨の頃である。〔[illegible]〕

清明セイ

例句

穀雨　掘り返す塊光る穀雨かな　泊雲（ホトトギス）

獺魚を祭る（かはをそうをまつる）

獺の祭（をそのまつり）

古書校註

【滑稽雜談】　水獺は俗に云ふ河うそ也。又、山獺・海獺あり。俗に又、水獺を河太郎などいへり。それは河童にて別種也。その貌五六歲の小兒の如し。此もの好んで人と相抱き角力ふ、其身涎滑にして捕定めがたし。終に人を水中に引入れて殺すとかや。獺はさにあらずとかや、補益（一）の能あれども、又害多し。此もの、魚を祭るの心あるは、初春の季也。獺と計りは雜也。（略）禮記月令に曰、孟春の月、獺魚を祭る。（一）埤雅に曰、獺鯉を水裔に取りて、四方に之を陳し、進みて食せざる也。世之を魚を祭ると謂ふ。蓋し、自ら其の先を祭るなり。

註 〇これは雨水の第一候。(一)人の氣血を補ひ増す。

季題解説 陰暦に二十四氣七十二候(立春の項參照)といふのがあるが、それによると正月は「立春」及び「雨水」の二氣となつてゐる。一氣には三候があるのであるが、「雨水」に屬する候は、「獺魚を祭る」「鴻雁北に行く」「草木萌動す」の三候である。獺といふ動物は、水中に潜んで、その食物たる魚類を捕つた時は、必ず岸に持つて來て、先づこれを雜然と四方に陳列してなか／＼食はないといふことで、獺が魚を祭るといふのである。時節が丁度魚類の肥える頃といふので、こんな妙な説話も生れて來たものであらう。かういふ季題は、俳句の向上と共にだん／＼影が薄くなつて行く運命をもつものと思はれる。

實作注意 こゝにいふのは時候を指すのであるが、「獺魚を祭る」といつて實際を指す場合もある。この場合は動物之部に入る。參照 動物―獺魚を祭る(カハヲソウヲヲマツル)

魚氷に上る(うをひにのぼる)

古書校註 【滑稽雜談】 月令曰、孟春之月魚上レ氷。是、第三の氣候(一)なり。孟春發陽の氣に乘じて、魚泳ぎ出して、氷にのぼり添ふなり。

註 (一)立春の第三候。

季題解説 七十二候中、立春節第三候に「魚上冰」とある。陰暦正月十一日から十五日までに當る。俳諧辭典(宮本梓石、宮澤朱明共著)には「陽氣至りて魚も氷の上に躍り出づるなりと」とある。

實作注意 こゝにいふのは時候を指すのであるから、實際を詠めば動物之部に入らなければならぬ。參照 動物―魚氷に上る(ウヲヒニノボル)

鷹化して鳩と爲る(たかくわしてはとなる)

古書校註 【滑稽雜談】 驚蟄の節、初めの五日桃始めて華さく。次の五日倉庚鳴く。後の五日鷹化して鳩と爲る。(略)大戴禮に曰、鷹化して鳩と爲る、春分の日を謂ふ也。

註 〇これは驚蟄の第三候。

季題解説 二十四氣の一驚蟄の三候は、「桃始て華く」と、「倉庚(ヒバリ)鳴く」と、「鷹化して鳩と爲る」の三である。卽ち陰暦二月節の第三候に當る。「本朝食鑑」の鷹の項を引くと次のやうなことが出てゐる。「禮月令仲春鷹化爲レ鳩、王制仲秋鳩化爲レ鷹、……然則鷹與レ鳩同氣禪化、……本邦未レ聞ニ鳩鷹相化者一、惟養レ鷹以レ鳩爲レ上、又令ニ鷹雛習ヒ鷙レ鳥、先以レ鳩而教レ之、此皆同氣相應之理矣。」これ等によつて鷹と鳩とがどんなに考へられてゐたかを

ほぼ覗ふことを得るが、要するにかういふ題の詮索は、古句の研究のためとして以外は、現代の俳人には極めて關心薄いことである。

【實作注意】「鷹化爲鳩」といつて時候を指さず、實際を考へることもあらう。其場合は動物之部に入るべきである。〔參照〕動物―鷹化して鳩と爲る(タカクワシテハトトナル)

龍天に登る(りゆうてんにのぼる)

【古書校註】【三才圖會】　本草綱目に云、龍の形に九似有り。頭は駝に似、角は鹿に似、眼は鬼に似、耳は牛に似、項は蛇に似、腹は蜃に似、鱗は鯉に似、爪は鷹に似、掌は虎に似たり。（略）説文に、龍は春分にして天に登り、秋分にして淵に入る。

田鼠化して鴽と爲る(でんそくわしてうづらとなる)

【古書校註】【滑稽雜談】　禮月令に曰、季春の月、田鼠化して鴽と爲る。朱註、鴽は鶉鵪の類なり。（略）鴽は俗に云ふ麥鶉といふ者ならし。

【年浪草】　春秋運斗樞に云、立春雨水、鶉鵪鳴く、是也。鵪と鶉と兩物也。形狀相似て、倶に黑色なり。但し、斑無き者を鵪と爲せる也。今人總て鵪鶉を以て之に名づく。按ずるに、夏の小正に曰、三月田鼠化して鴽と爲り、八月鴽化して田鼠と爲る。

〔註〕○これは清明の第二候。

【季題解説】　陰曆に二十四氣七十二候（立春の項を參照）といふのがある。それによると三月といふ月には「清明」及び「穀雨」の二氣があり、その三月には、「桐始めて華く」「田鼠化して鴽と爲る」「虹始めて見ゆ」の三候があるといふことになつてゐる。田鼠はもぐらもち、鴽はふなしうづらであつて、三月にもぐらもちがうづらとなり、八月には反對にうづらがもぐらもちになると昔の本にあるが、かういふ荒唐無稽なことはも早現代俳句の季題としては適しないであらう。

【實作注意】　「鷹化爲鳩」などの場合と同じく、動物之部の「田鼠化爲鴽」とは自ら區別される必要がある。〔參照〕動物―田鼠化爲鴽(デンソクワシテウヅラトナル)

天文

春日（はるひ）　春の日　春日影　春日（しゆんじつ）　春の朝日　春の夕日　春の入日

季題解説 暖かく、明るく、陽氣な春の日光をいふのである。

實作注意 春の日といへば、春の太陽を指す場合と、春の一日をいふ場合と兩方ある。春の一日の意義であるならば、勿論、時候之部であるべきだが、個々の句に就ては判別し難いものであるので、例句は便宜上一緒にここに掲げて置いた。**參照** 永き日

例句

春日

猫の目のまだ晝過ぬ春日かな　鬼貫（鬼貫句選）
うち晴て障子も白し春日影　同（同）
松に鶴をかきたる繪に
玉爪の金をつかむ春日かな　同（俳諧七車）
はじめて孫をまうけたるよろこびに
鶴龜のあゆみ程よき春日かな　同（同）
しら髪うき今朝の昔の春日かな　同（同）
春の日や庭に雀の砂あびて　同（鬼貫句選）
春の日に見よ半輪の橋の雪　來山（續いま宮艸）
長々としてたよりなき春日かな　浪化（浪化上人發句集）
舟板も春日ぞめぐむ水のあや　沾徳（俳諧五子稿）
春の日や午時も門掃く人心　太祇（太祇句選）
大工先あそむで見せつ春日影　同（同）
春の日數半は枝にかぞへけり　也有（蘿の落葉）
春の日や門ゆく梵論の影法師　蓼太（蓼太句集）
蹇の顏ほがらかに春日哉　几董（井華集）
拔捨し野葱土かはく春日かな　同（同）
春の日や刀あづかる原やしき　白雄（白雄句集）
簾戸に鯛のこけちる春日哉　同（同）
春の日を晉せで暮る簾かな　同（同）
袖だけのまつの中行春日かな　曉臺（曉臺句集）
はるの日や梅のあたりのつゝみ箱　同（同）
どちへ行雲とも見えず春一日　同（同）
春の日や風におそれぬ床ばなれ　闌更（半化坊發句集）
春の日や夕賑ふ海の幸　同（同）
春の日や鷗ねぶれる波の上　同（同）

春日

橋長し人多し實春日哉　蘭更（半化坊發句集）
薪盡て門を出れば春日哉　同（同）
脱捨し田蓑に春の日影哉　同（同）
行とゞく春の日影や蟲の穴　同（同）
あふむけば日いつぱいにはる日かな　成美（成美家集）
はなに寢て起てももとの春日かな　同（同）
春の日や暮ても見ゆる東山　一茶（旅日記）
山鳥の尾に春の日や藤の花　六枳（三千化）
春の日や田の落水に遊ぶ魚　馬光（馬光句集）
松が根に嬰兒眠る春日哉　槐道（竹友）
ふつ〳〵と水のものいふ春日哉　一八（皮こすり）
のびあがりのびあがる春の日足哉　貞行（犬子）
春の日の人何もせぬ小村かな　子規（子規句集）
春の日や樂聲起る塀の中　同（同）
苣の木に雀囀る春日かな　同（同）
蚕の子の足に波うつ春日かな　同（同）
砂濱に足跡長き春日かな　同（同）

金州

鵲の人に糞する春日かな　同（同）
低き木に鳶の下り居る春日かな　同（同）
韓王の行列來る春日かな　同（同）
春日さす庭の小松菜薹立ちぬ　同（同）
ふところに春の入日を入れまほし　佐登女（同人）
或日法廷に春の赤き日沈みけり　末灰（ホトトギス）
大いなる春日の翼垂れてあり　花蓑（同）
藪の穂のさゞめきゆるゝ春日かな　泊雲（同）
とめどなく漏る筧かな春日影　若沙（同）
難波橋春の夕日に染りつゝ　夜半（同）
影踏んで伸びする犬や春日影　石瀞樓（同）
鳥の門を大きく落つる春日かな　泊月（同）
春の日のよき子や母のあとやさき　觀崖（續ホトトギス）
蛸壺の口一つぱいに春日かな　味竿（同）
西山の山寺にあり春一日　虛子（同）

春の月（はるのつき）

春月（しゆんげつ）

古書校註

【山之井】霞の内にぎがめくを、簾ごしの額つき、衣（きぬ）かづき（一）の顏の内なども見なし、みがゝぬ玉、古鏡にもたとへ、内侍のかみの名をもよせ、

しくものもなしとよめる詞を、（二）敷物なきととりなしてもいへり。

註（一）高貴の婦人が外出に用ゐる服、頭背に被り、手を擧げて支へ、深く顔を覆ふ。（二）源氏物語に「朧月夜の内侍の、おぼろ月夜にしくものぞなきと、ながめしほどに、云々」とあるのを指す

季題解説 大體は朧月と同じ感じであるが、觀念が朧月ほど局限されてゐないから、一句に詠み出で得る範圍に自由がある。昔から秋の月はさやけきを賞し、春の月は朧なるを賞づると云はれてゐる。〔參照〕朧月（オボロヅキ）

例句

春の月

春の月琴に物書くはじめ哉　其角（五元集）
さえ〳〵て梅に氣のすむ月夜哉　杉風（杉風句集）
寢返れば雄島なりけり春の月　沾德（俳諧五子稿）
春月や印金堂の木のまより　蕪村（蕪村句集）
ふきといふ草の枕や春の月　蓼太（蓼太句集）
春の月櫻ひと枝ひろひけり　同（同）
春の月山椒の皮にむせてけり　白雄（白雄句集）
くらき方はけぶるがごとしはるの月　曉臺（曉臺句集）
ぺつたりとかすみかゝれり二日月　同（同）
大ぞらにかりがねくらし春の月　同（同）
春の月雉の遠音に傾きぬ　士朗（枇杷園句集）
春の月松にこぼれ竹におろ〳〵す　同（同）
糊すれと鳥がなく也春の月　同（同）
くさの戸や丸くなくともはるの月　成美（成美家集）
かまぼこの煙へだてゝはるの月　同（同）
さゝやかばくもりもぞするはるの月　同（同）
印籠をたづね戻るやはるの月　同（同）
淺川や鍋すゝぐ手に春の月　一茶（旅日記）
春の月さはらば雫たりぬべし　同（同）
ついそこの二文渡しや春の月　同（七番日記）
すつぽんも時や作らん春の月　同（同）
春もまだ子の淋しがる月夜哉　乙二（をのゝえ草稿）
加茂へ來て拾火の沙汰もはるの月　同（同）
長嘯が鼻かむはるの月夜かな　同（同）
いつ暮て水田のうへの春の月　蒼虬（蒼虬翁句集）
玉水も井手もわら家ぞ春の月　同（同）
行燈のいやしき夜あり春の月　同（同）
炭がまのけぶりのはたの春の月　同（同）
竹の葉に袖すれそめて春の月　同（同）
鍋洗ふ水をてらすやはるの月　同（同）

春の月

杖に手を重ねて見るや春の月　蒼虬（蒼虬翁發句集）
暮たれば朧になりぬはるの月　同（同）
一夜かる宿も賞かれ春の月　梅室（梅室家集）
人だかりした跡ぬくし春の月　同（同）
人ならば笑ひざかりやはるの月　同（同）
門口に網やいかりやはるの月　同（同）
春の月雞裂けば曇りけり　素卿（五車反古）
立出て祇園邊りの春の月　如得（花七日）
春の月筏に乘て見る夜哉　魚川（月皮）
幽棲や天晴白き春の月　北虹（新虚くり）
油賣はんと門を出づれば春の月　参木（新俳句）
湖の裾に出でけり春の月　梅屋（同）
春の月阪の上から出たりけり　森々（春夏秋冬）
澤水の野末は低し春の月　青々（妻木）
大榛木横たふ上の春の月　竹陰（同人）
暮れて越す草山一つ春の月　素琴（懸葵）
春月や松の下道花ありぬ　月村（同）
春月や大寄散じ鎖す門　平人（同）
春の月のぼりて晴し森の家　荻聲（同）
山の井のあふるゝ路に春の月　華水（俳鳥）
春の月大地に蓑の力あり　黒瞳（ホトトギス）
森を出て妙にも白し春の月　石鼎（同）
春月や大鋸負へるおのが影　童園樓（同）
春月や女を抱けば鼻玲瓏　草城（同）
玻璃戸越しに春の月見る火桶かな　濱人（同）
春の月纜波に沈みけり　蕪人（同）
春月や人丸神社灯ともりし　躑躅（同）
春月にくらくも見ゆる葎かな　㒵籠（同）
春月や信貴とおぼしき山容　員竿（同）
奈良去るや春月あがる三笠山　都穗（同）
とくいでて春月高し湖の上　秋櫻子（同）
おもひきや春月のぼる藪のひま　同（同）
旅衣脱ぐや春月窓にあり　奄美人（同）
春月に門小さきよ草の宿　淡夢（同）
門並の大生垣や春の月　清紅子（同）
春月を見ながら旅のはなしかな　青楓（同）
春月や小路の奥の東山　岬人（同）
春月や岩を刳りし温泉宿道　風生（同）

まつくらな部上ぐれば春の月　杜人（同）
春月に廓がよひの渡舟かな　無中（同）
春月や宿の前なる本願寺　茅城（續ホトトギス）
春の月古鏡の如くかゝりけり　松郷（同）
ぽつかりと春の月あり梅田驛　紅朗（同）
貴船路や出てゐるらしき春の月　いはほ（同）
伊豆山に來て春月を良しと思ふ　筍吉（同）
せゝらぎの三段ばかり春の月　泊雲（同）
春の月蛤買うて仰ぎけり　虚子（句集虚子）

朧月（おぼろづき）

月朧（つきおぼろ）　朧（おぼろ）（草朧（くさおぼろ）・鐘朧（かねおぼろ）・朧影（おぼろかげ））　朧夜（おぼろよ）

古書校註

【御傘】　おぼろげと云ふ詞、春にあらず。月を結びては、春たるべし。

【滑稽雜談】　白樂天の詩に云、不レ明不レ暗朧朧月。（略）韻會に曰、朧は月出づる貌、朧朧は月明かならんと欲する貌。

【年浪草】　源氏（一）花宴卷、朧月夜の内侍のおぼろ月夜にしくものぞなきとながめしほどに、源氏（二）いとおもしろくおぼしてと云々。

註（一）源氏物語。紫式部の著。（二）源氏物語の主人公、光源氏の君。

季題解説　晝間は霞となる水蒸氣が、柔かく朦朧と月を包んでをるのである。春月といふのもほぼ同じことであるが、朧月といふと殊に月のおぼろおぼろとしてゐる感じが深い。

朧とは春の夜（又は朝などでも）の、朦朧と萬物がかすめる如く見ゆるのをいふのである。朧はたゞに月ばかりでなく、耳に聞ゆる音、例へば鐘の音、溪音などがぼうとおどんで聞えるやうな感じをも云ふ。河、草生等にも朧の感があり、又月のない夜も大都會の上空の灯光の明るく浮んだところには、近代的な朧の感じがあるやうに思はれる。町の騒音と、明るい都會の灯を包む空のおぼろは確かに面白い。

朧夜といふのはおぼろげな月のある春の夜のことである。月は曇りを帶び光がほのかで、ぼうと滲んで見える。一體に薄絹でも垂れたやうな、柔かく甘く、ものなつかしいやうな氣持を持つ夜である。これを朧夜・朧月夜と表現するのである。〔參照〕春の月（ハルノツキ）　時候―朧月夜（オボロヅキヨ）

例句

朧月

辛崎の松は花より朧にて　芭蕉（雜談集）
おぼろ／＼灯見るや淀の橋　鬼貫（鬼貫句選）
猫逃て梅動（ユスリ）けりおぼろ月　言水（俳諧五子稿）
朧月弓戸かへしつ梅の花　同（同）
今更に土のくろさやおぼろ月　來山（いまみや艸）

朧月

是や此日ぐれにつゞくおぼろ月　來山（續いま宮艸）
大原や蝶の出てまふ朧月　丈草（丈草發句集）
たのしさよ闇のあげくの朧月　去來（去來發句集）
手をはなつ中に落けり朧月　同（同）
朧月一足づゝにわかれかな　同（同）
鉢たゝき來ぬ夜となれば朧なり　同（同）
梟にあはぬ目鏡やおぼろ月　其角（五元集）
海棠の花のうつゝや朧月　同（同）
おぼろとは松の黑さに月夜かな　同（同）
富士の朧都の太夫見て譽めん　同（同）
中川やほゝり込んでも朧月　嵐雪（玄峰集）
墨の庚申塚やおぼろ月　許六（五老井發句集）
宵闇も朧に出たりいでゝ見よ　惟然（惟然坊句集）
夕風に何吹あげておぼろ月　北枝（北枝發句集）
呼にやる人も戻らずおぼろ月　同（同）
誰が糸につなぎとめたぞ朧月　同（同）
水くさき空や淡雪おぼろ月　支考（蓮二吟集）
鴈の聲おぼろ〳〵と何百里　同（同）
あれ是を集めて春はおぼろ也　同（同）
青柳に念なかりけり朧月　杉風（杉風句集）
穴の明松風もなし朧月　千代女（千代尼發句集）
拂ふ事松もかなはずおぼろ月　同（同）
言さして見直す人や朧月　同（同）
世の花を丸うつゝむや朧月　同（同）
うすぎぬに君が朧や蛾眉の月　蕪村（明和辛卯春歳旦帳）
朧月大河をのぼる御舟哉　同（紫狐庵聯句集）
さしぬきを足でぬぐ夜や朧月　同（蕪村句集）
よき人を宿す小家や朧月　同（同）
薬盜む女やは有おぼろ月　同（同）
瀟湘の鴈のなみだやおぼろ月　同（同）
女倶して內裏拜まんおぼろ月　同（同）
手枕に身を愛す也おぼろ月　同（新五子稿）
草臥て物乞ふ宿や朧月　同（同）
おぼろ月蛙に濁る水や空　同（同）
奇楠臭き人のかり寐や朧月　同（落日庵句集）
月おぼろ高野の坊の夜食時　同（蕪村遺稿）
辛崎の朧いくつぞ與謝の海　同（橋立の秋）
物音は人にありけりおぼろ月　太祇（太祇句選）

川下に網うつ音やおぼろ月　同　（同）
海の鳴南やおぼろ／＼月　同　（同）
月更て朧の底の野風哉　同　（同）
島原へ愛宕もどりやおぼろ月　同　（同）
歎て行キぬけ寺やおぼろ月　同　（同）
すみの江に高き櫓やおぼろ月　同　（同）
おぼろ月獺の飛込水古し　召波　（春泥發句集）
我影や心もとなき朧月　同　（同）
田園の趣さらにおぼろ月　同　（同）
土とりのあとの溜りやおぼろ月　同　（同）
歸る雁數さへ見えずおぼろ月　也有　（蘿葉集）
更てきく鍛冶の夜なべや朧月　同　（同）
山寺の鐘もうならずおぼろ月　同　（同）
蝙蝠のまぼろし飛ぶや朧月　同　（同）
犬の聲濱手に遠し朧月　同　（同）
翌日の空どちらへならむ朧月　同　（同）
洗濯にうは縮や凡ておぼろ月　同　（同）
また春の日に蚊屋つりて朧月　同　（同）
池水に蛙の波やおぼろ月　同　（同）
三日月のしばらくながら朧かな　同　（同）
若い目に合ぬ眼鏡や朧月　同　（同）
行燈を消して見たれば朧月　同　（同）
障子には夜明のいろや朧月　同　（同）
風鈴も寐しづまりけり朧月　同　（同）
目に鼻に海ほのかなり朧月　同　（同）
捨殘す後家の鏡や朧月　同　（同）
から臼に梅の散夜やおぼろ月　同　（蘿の落葉）
朧月味噌煮る町の匂ひかな　同　（同）
二夜とは斯てもあらじ朧月　同　（同）
折ふしの衛も遠し朧月　蓼太　（蓼太句集）
鹿もよく寐て朧なり奈良の月　同　（同）
南から出たかもしらずおぼろ月　同　（同）
戯男に道踏かへんおぼろ月　几董　（井華集）
あじろ木のゆるぐ夜比や朧月　同　（同）
しやせまじ志賀の山越おぼろ月　同　（同）
落ぬべき西山遠しおぼろ月　同　（同）
埜の朧つばな月夜といはまほし　白雄　（白雄句集）
つく／＼と何おもふ竹の月おぼろ　曉臺　（曉臺句集）

朧月

おぼろ月浪のうき鯛よるさへや　曉臺（曉臺句集）
おぼろ月宇治の山邊を行ひとり　同（同）
おぼろ〳〵ゆき一すぢのほそ江哉　同（同）
築地より風匂ひけり朧月　闌更（半化坊發句集）
興盡て山下る暮の朧かな　同（同）
有明や朧は消えて立烟　同（同）
朧月やなぎの枝をはなれたり　成美（成美家集）
錢嗅き人にあふ夜はおぼろなり　同（同）
段々に朧の月よこもり堂　一茶（旅日記）
朧月夜はあつけなくなりにけり　同（同）
夕ざれば朧作るぞ小藪から　同（七番日記）
夕ざればけちな藪でもおぼろなり　同（同）
すみだ川くれぬうちより朧也　同（墨田川集）
山の井に蓋する音や朧月　蒼虬（蒼虬翁發句集）
山水の何に古びておぼろ月　同（同）
紫陽花の宿はいづこぞ朧月　同（同）
引汐やその有明のおぼろ月　同（同）
朧月夜の更てある九條かな　同（同）
白濱や鶴たつあとのおぼろ月　梅室（梅室家集）
雪のまゝに竹打ふして朧月　青蘿（新五子稿）

奈良にとまりて

町ありく鹿の背高し朧月　雷夫（續明烏）
朧月川には鳥の音もせず　蝶夢（文車）
あとさきに人なき橋や朧月　二日坊素（同）
つぶ〳〵と江に寐る鳥や朧月　文素（新選）
ぼた〳〵と椿の落る朧月　圓水（類題發句集）
白い椿赤い椿や朧月　范孚（同）
川裾に人の聲あり朧月　依風（三千化）
打波に音なき磯や朧月　吟江（心花）
靜かさや朧は月の香のやうに　漁川（卯辰）
雁一羽しらけて歸る朧哉　元川（夜話狂）
だんだらのかつぎに逢ひぬ朧月　子規（子規句集）

須磨

立ち出でゝ蕎麥屋の門の朧月　同（同）
朧月狐に魚を取られけり　同（同）
大佛の日には吾等も朧かな　同（同）
古市の町の古さよおぼろ月　露石（新俳句）
月おぼろ船より捨つる水の音　作人（懸葵）

沈丁の腐つ香甘し庭おぼろ　是夢路（同）
くちづけの動かぬ男女おぼろ月　友次郎（ホトトギス）
朧月今宵もこもるめをと杉　句一歩（同）
風呂の戸にせまりて旅のおぼろかな　石鼎（同）
藥園に伏樋のもるゝおぼろかな　普羅（同）
神代より波と闘へる岩朧　雉子郎（同）
石ころの土と親しむおぼろかな　夢筆（同）
もの丶芽をふまじとありく朧かな　呂柚（同）
花浮けて朧の水やめぐり居る　都穗（同）
草道のそこら水なる朧かな　芝青（同）

春の星

季題解說　春の夜のみに現はれる何々星といふやうに、固苦しく解する必要はない。一般に春夜の何處となく潤んだ空に瞬いてゐる星の謂と解してよからう。春夜の星は冬の寒さから開放された人間の眼には、なごやかな光として美しく映じるやうである。濛々とした大氣のヴエールを透して見る美しさである。冬に見るやうな銳い光がなく、洗はれたやうな美しさとして人の眼に映じる。冬にもさうした夜がないとはいへないが、寒いので美しさとしての印象が薄いのであると思ふ。

例句
春の星
藁屋根のゆるき傾斜や春の星　滿天星（ホトトギス）
ながれ行く雲のたえまの春の星　てい子（同）

春の闇

朧闇（おぼろやみ）

季題解說　月のない春の夜頃の潤んだやうな暗さをいふ。春といふ冠詞の爲めに、五月闇の墨を流したやうな闇ではなく、幽かな情感をさへ包んだ柔かい、なつかしいうすら闇が考へられる。女性的な柔みと神祕とをもつて、夜の我が地球を、大空を、人間を、野や森を、しづかに匂やかに塗りこめてゐるといふのが春の闇の氣持であらう。

例句
春の闇
はや二日昔の雨や春の闇　來山（續いま宮艸）
春の闇八坂神社を拔けにけり　几燈（同　人）
春の闇水に舟々のかたちかな　櫻坡子（ホトトギス）

春の空

春空（はるぞら）

季題解說　春光九十、大氣溫暖な頃の空をいふのであるが、日に依つていろ

いろであらう。中でも白い雲のほのかに流れて、なごやかな日光が地上を照らすやうな日の空や、一片の雲もない碧い空であつても、うす白い色を含んでゐることが春の空を特色づける。かういふやうな空が春には比較的多く眺められるであらう。

例句　春の空

松島の鶴になりたやはるの空　乙二（たつのえ草稿）
春空へ鳶追ひ上げし烏かな　土香（ホトトギス）
春空の尾の上の松を屋根つゞき　麗々亭 鄒踊（同　）
春天に鳩をあげたる伽藍かな　茅舎（同　）
大佛を仰げば雲や春の空　榫花（續ホトトギス）

春光（しゆんくわう）　春色（しゆんしよく）　春の色（はるのいろ）

季題解説　暖かな、柔かい、そして萬物を育成する力強くまばゆい春の陽光をいふのである。しかし、春の日とか春日影とかいふやうな具體的な感じではなくて、春の風光、春らしさ、といつたやうな、陽春そのことに近い感じの方が濃く出てゐる言葉である。

例句　春光

鳥の羽に見初る春の光かな　樗良（樗良發句集）
あめつちや實もはへある春の色　同（同　）
春光や人行く方へ我も行く　飛雨（同　人）
春光やちやん〳〵こ著て庵主　感來（ホトトギス）
春光や下りかぢ取りて流れ鳶　寸七翁（同　）
春光や遠まなざしの矢大臣　禪寺洞（續ホトトギス）

春の雲（はるのくも）

季題解説　春の雲は夏の雲や秋の雲のやうにはつきりした形をなさず、大空一面にどんよりと刷いたやうに現はれるのが普通である。形をなしてゐても影濃く凝ることなく、又ぢつとして動かないといふ感が深い。淡い愁ひを含んだ趣であると思ふ。

例句　春の雲

鳥聲を呑て地に有春の雲　曉臺（曉臺句集）
春の雲横山しるし浪の上　宗長（宗長手記）
おもむろに形つくりぬ春の雲　鴻乙（續ホトトギス）
春雲のかさなるところ富士と思ふ　莫々（同　）

参考　春の雲と云ふ様な特に一定した雲はない。然し冬季には日射が微弱であるため特に地面が温められて上昇氣流を起し、夫れによつて雲を

生ずると云ふ事は無い。然るに一陽來復の春になると日射も増して來る故、其のために上昇氣流を起して雲を生ずることがある。例へば綿の様にフンワリと浮ぶ白い雲卽ち積雲などが夫れである。積雲は春から夏にかけて最も多く現はれる雲で形はムク／＼として居るが底面が平なのが特徴である。

東風（こち）　朝東風（あさごち）　夕東風（ゆふごち）　強東風（つよごち）　あゆの風（かぜ）

古書校註

【滑稽雜談】 禮記月令に曰、孟春之月、東風解レ凍。○總じて一年に十二月廿四節氣侍る。此廿四番に各三候あり。都合是を七十二候と云ふ。是、立春の節の三候の第一也。
東風は春風也。詩歌にも谷風ともいへり。和訓には古知と云ふ。北陸道にては、あゆの風といへり。是をも春に用ふべき事なれども、國語なれば會釋なくては有るまじき由、先哲の制也。（一）榮雅古今抄（二）に云、谷風と云ふは東風の事也。毛詩（三）にも出づ。云々。

註 （一）古今榮雅抄といふ。（二）飛鳥井雅親の著。（三）詩經。

季題解說 春先、東方から吹いて來る嫋々たる柔かい風をいふ。我が國では、春は東北風、夏は東南風、秋は西南風、冬は西北風といふやうに、四季によつて風位がおのづから極つてゐる。俳諧に於ても、夏に南風があり、冬に北風があるやうに、春季に東風がある。春の風といふよりも、言葉がつまつてゐるだけに、言葉のひびきから受ける感じが勁いやうである。單に東風といふのは春の風であるが、初東風は新年に、土用東風、青東風は夏に、盆東風は秋に屬する。 參照 春風（はるかぜ）

例句

東風
のうれんに東風吹いせの出店哉　蕪村（蕪村句集）
河内路や東風吹送る巫女が袖　同（同）
駕に居て東風に向ふやふところ手　太祇（太祇句選）
旅立の東風に吹する火繩かな　同（同）
糊おける絹に東風行門邊哉　同（同）
東風吹とかたりもぞ行主と從者　同（同）
川の香のほのかに東風の渡りけり　同（同）
東風吹や道行人の面にも　同（同）
東風うけて川添ゆくや久しぶり　召波（春泥發句集）
東風ふけよはにふの小屋も同じ雛　一茶（七番日記）
ぬり立の看板餅や東風の吹　同（同）
東風吹やまがきが嶋の注連はりに　乙二（をのゝえ草稿）
東風（トウフウ）吹やふす／＼けむる田中の溫泉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
東風にふるい筆かやつく／＼し　季貞（鷹筑波）

東風

洛外や東風ふく寺の臺處　青々（妻木）
東風吹くや畑に飛ばせし種子袋　岳南（同人）
東風日和鞍おけば馬嘶きぬ　古村（同）
東風の濱人形芝居かゝりけり　的浦（ホトトギス）
東風の馬荷につきさして風車　雨月（同）
東風吹くや耳あらはるゝうなゐ髪　久女（同）
强東風に波みな尖り港口　冬青（同）

嵯峨

ちら〳〵と家並つゞきや東風の藪　青畝（同）
東風吹くや松の中なる測候所　誓子（同）
窓あけて東風の講義となりにけり　同（同）
東風の波かぶつて高き舳かな　橹水（同）
東風吹くや松を柱の壺燒屋　龍男（同）
夕東風や書肆覗き行く軒並に　宵曲（同）
東風吹くや一匹買ひに魚市へ　一壺（同）
夕東風や海の船ゐる隅田川　秋櫻子（同）
綱親や東風に吹かれてふところ手　村家（同）
東風吹くや淺間の煙あちら向　茶仙（同）
吹きそめし東風の障子を閉きけり　たけし（同）
漕ぎ出でて東風眞向の渡舟かな　方舟（同）
東風濱やあまが垣根に行きづまり　巖（同）

ヴエジネ公園

すねて行くをとめや東風の湖ほとり　女次郎（同）
汐さびの重きとびらや東風の宮　潮路（同）
强東風に鳴る三越の玻璃戸かな　文鹿（同）
東風浪や濤を閲みて七小村　洗心（同）

春雷接

東風吹ける何十枚の障子かな　盆城（同）
松島の松の折れたる東風强し　夜詩櫻（同）
吹きそめし東風の窓邊に病快き　あや子（同）
朝東風や出船の舸子の赤褌　水鳴（續ホトトギス）
東風吹くや三輪の山もと六百戸　梅史（同）
淀川の東風に逆らふ荷足船　源泉（同）
回答旗揚げしまゝなり東風の船　方舟（同）
床下へ走り入るなり東風の波　七歩（同）
手拭の吹きとんでゐる東風の宮　みどり女（同）
强東風に吹かれ彳む漁夫かな　虛子（句集虛子）
東風吹くや煙吐かざる煙出し　同（續ホトトギス）

【參考】大陸は暖まり易い代りに冷え易いが、海面は之れに反して暖まり難く冷え難い。夏季には太陽の高熱により大陸は異常に暖められるが、冬季は反對に日射が弱いため暖めらるゝ事少なく、却つて外界へ熱を放射する方が多く非常に冷却する。故に冬季亞細亞大陸の冷却により其の上の空氣の氣溫も著しく低下し、勢力大なる高氣壓を其の上に生ずる。
一方海上は冷え難い故大陸に對して洋上の氣溫は高く從つて大陸と相對的に低氣壓部を生ずる。斯くして風は高氣壓より低氣壓部に向つて吹く故、冬季本邦では大陸から洋上へ向ふ季節風を感ずる。此の風は大陸上の高氣壓と洋上の低氣壓との間の氣壓の差が大きいため極めて強い風となり、冬季本邦では強い西風又は北西風を感ずる。
然るに春先になると日射も增してくる故大陸もそろ／＼と暖められ、其の上の高氣壓は次第に衰へ、却つて弱いながらも洋上に比し低氣壓部を生ずることがある。斯様な場合には洋上から大陸に向ひ弱い東風又は北東風が吹く。之れを春風又は東風（コチ）と稱する。故に東風が吹き出したと云ふことは冬季に特有な氣壓配置が崩れて、そろ／＼夏季の狀態へ移る過渡期即ち春となつたことを示すものである。

涅槃西風（ねはんにし）

【季題解說】陰曆二月十五日、即ち釋尊入滅の日に吹く西風ともいひ、またその前後七日間程に吹き續く西風ともいふ。西方は淨土である。その淨土から釋尊入滅の日に現世へのおとづれとして吹く風である。【參照】春風（ハルカゼ）
宗敎―涅槃會（ネハンヱ）

【例句】
涅槃西風　自轉車に括られ鷄や涅槃西風　楊童（ホトトギス）

貝寄風（かひよせ）　貝寄（かひよせ）

【古書校註】
【滑稽雜談】雜談抄に曰、天王寺法華記にも粗（ほぼ）其の旨ありといへども、未だ詳かならず。二月廿日前後、難波の浦邊に吹く風を云ふ也。佛緣に感動して、龍城の魚鼈鱗介の雜類、難波の浦へ浮み出でて、此の會に値遇し奉る謂れと申し傳へ侍る也。此の沖津風に濱へ吹きよせたる貝を拾ひ取りて、聖靈會供養の造花などに著けて、上宮太子の前へ獻ずと云々。〇此趣、攝陽群談并に春耕が絲切齒にも出たり。予（一）四天王寺公文所秋野紹順の說をきけり。二月十九日、天王寺の公人、六時堂前にて日和乞と云ふことを行ひ、住吉の浦へ郞君子（一）を取りに行く也。是、來る廿二日、聖靈會の曼珠沙華に此の貝を附けて、舞臺の四隅に立てて、舞樂を奏するなり。其の貝の形狀櫻の花に似たり。是を筒花に附くるなり。此の貝、今日此の

浦に寄るは、龍神より太子へ献るとなり。

註 (一)此歌以下は長者の自記である「予」は長者自身を指す。然るに、この貝寄の解説は全文そのまゝ年浪草にも掲げられてある為に、同書によれば「予」は恰も編者を指すものゝ如くなつてしまふのは、年浪草の不備に由るものである。(二)師君子は蘭貝　〔　〕國音に「此の貝此州の海中に多くあり。毎二月廿二日(聖靈)寺の役人住吉の濱に至りて、之を拾ひ取る。二月十八日暴風吹きて後必ずあり。之を貝寄の風と稱す。亦一名なり」と見えてゐる。

季題解説　陰暦二月二十二日、大阪四天王寺の聖靈會の舞臺に立てる筒花は、難波の浦邊に吹き寄せた貝殻で作ると云ふので、この二月二十日前後に吹く風を貝寄と稱へる。この風の吹く時、佛縁に感動して龍城の魚鼈鱗介の種類が難波の浦に浮び出る。その風によつて吹き寄せられた貝を拾ひ取つて、聖靈會供養の造花などに著けて上宮太子の前へ献ずる、と「雑談抄」に見えて居る。按ずるにこの傳説も、北風の多い冬が過ぎ去つて春となるに從ひ、風もだん〳〵南風が吹き初める事實が因となつたものであらう。〔季語〕春風はるかぜ　宗教—聖靈會しやうりやうゑ

例句

貝寄風

貝寄る風の手じなや若の浦　芭蕉　（もとの水）

貝よせやちりしく許り櫻貝　車庸　（類題發句集）

貝寄や磯屋しづかに飯煙　青々　（妻木）

貝寄風や今日の渡舟は正午限　雁來紅　（ホトトギス）

春風（はるかぜ）　春の風（はるのかぜ）

古書校註　【御傘】　連哥には春風々々と二、又春の風と、のゝ字を入れても二句の中なり。但し、のゝ字を入れずして二あれども、のゝ字を入れて二句はすべからざる由也。誹諧には春風二、春の風、折をかへて一、以上三句すべし。

【滑稽雑談】　白居易(一)の詩に曰、今日不レ知誰計會、(二)春風春水一時來。

註 (一)白樂天。この詩は和漢朗詠集所載。(二)豫めはかり知ること

季題解説　面を吹いて寒からず、嬌柳の風と云つたやうな心持の、柔かに暖く吹く春の風のことを云ふ。〔季語〕東風こち　涅槃西風ねはんにし　貝寄風かひよせ　風光るかぜひかる　油風あぶらかぜ

例句

春風

春風や三保の松原清見寺　鬼貫　（鬼貫句選）

春風に白鷺白し松の中　來山　（續いま宮艸）

春風や堤ごしなる牛のこゑ　同　（同　）

春風に吹出されけり水の胡蘆　去來　（去來發句集）

春風の石を引切わかれかな　嵐雪　（玄峰集）

此句は門人なにがしが旅立けるに、餞石をおくるとてかく由されしと也

灸の點ひ敗間もさむし春の風　許六　（五老井發句集）

春風や堤長ふして家遠し　蕪村（夜半樂）
野ばかまの法師が旅や春のかぜ　同（蕪村句集）
片町にさらさ染るや春の風　同（同）
曙のむらさきの幕や春の風　同（同）
春風のつまかへしたり春曙抄　同（蕪村遺稿）
春風に阿闍梨の笠の匂哉　同（同）
春風のさす手ひく手や浮人形　同（全集）
春風や浪を二見の筆がへし　同（鬼子句集）
はる風や殿まちらくる船かざり　太祇（太祇句選）
春風や薙刀持の目八分　同（同）
矢橋乘る娵よむすめよ春の風　同（同）
春風にてらすや騎射の綾藺笠　同（同）
撫あげる晝寢の顏や春の風　召波（春泥發句集）
胡馬も今北やわすれて春の風　也有（蘿葉集）
春風や一度に起る雪の竹　蓼太（蓼太句集）
誰をたか待伽羅ならむ春の風　同（同）
途にあふて手帋披ケば春のかぜ　几董（井華集）
繪草帋に鎮おく店や春の風　同（同）
春風のこそつかせけり炭俵　同（同）
はるかぜや吹れそめたる水すまし　白雄（白雄句集）
うら若き川原蓬やはるの風　同（同）
濱つとや歸るさをふく春の風　同（同）
春風や潮に手あらひ口そゝぐ　同（同）
はるかぜに吹るゝ鴇の照羽かな　同（同）
春風の夜はあらしにみだれけり　曉臺（曉臺句集）
里の子の松葉いたゞくはるの風　同（同）
春風や淺田の小浪あさみどり　同（同）
はる風に吹れて落す羽織かな　同（同）
高圓や峯の春風くも結ぶ　同（同）
雛の尾に見るまてそはるのかぜ　同（同）
はるかぜにおさるゝ美女のいかり哉　同（同）
明る野や兎の尻に春の風　同（同）
春風に雪踏ぬらすや東山　闌更（半化坊發句集）
はるかぜや草木に動く日の光り　同（同）
春風や肩に乘子の蛩ミ　同（同）
明日も出んあすも野に出ん春の風　士朗（枇杷園句集）
はる風やむねにあてたる檜がさ　同（同）
防風で濱は葺なり春の凪　巣兆（曾波可理）

春風

春風や一期さかえし榛の花　集兆（猿蓑可理）
春風のあとさきもみな咄かな　成美（成美家集）
松苗も盾過にけり春の風　一茶（旅日記）
棒先の茶筅かはくや春の風　同（同）
立際に春風吹くや京の山　同（苔むしろ）
春風の夜にして見たる我家哉　同（七番日記）
春風や十づゝ十の石なごに　同（同）
春の風足むく方へいざさらば　同（同）
細長い春風吹や女坂　同（同）
春風に尻を吹るゝ屋根屋哉　同（同）
提灯でたばこ吹也春の風　同（同）
春風や逢坂越る女講　同（同）
ぼた餅や藪の佛も春の風　同（おらが春）
春風のそこ意地寒し信濃山　同（一茶句帖）
春風やとある垣根の赤草履　同（同）
狗が鼠とるなり春の風　同（同）
春風や牛にひかれて善光寺　同（一茶發句集）
宿引に女も出たりはるの風　同（同）
春の風市の月夜の身にそはね　乙二（松のゝえ草稿）
春風や小藪の陰も伊勢海道　蒼虬（蒼虬翁發句集）
子を持ぬ蟹が家はなし春の風　同（同）

別れををしみて

はる風のまことは寒きものなるか　同（同）
春風やわざくれらしき扇折　梅室（梅室家集）
春風や日影流るゝ麥の上　孤桐（新選）
春風や竹動かして鳥一羽　月叟（竹友）
春風にむかふ椿のしめり哉　野坡（[illegible]塞）
春風にいつまで栗の枯葉哉　蝶夢（類題發句集）
春風の水草清き流れかな　宗牧（大宗牧發句帳）
春風に力くらぶる雲雀哉　野水（あらの）

春風春水一時来

氷り居し添水また鳴る春の風　同（同）
春の風石灰舟のよごれけり　柳絮（文車）
薄絹に鴛鴦縫ふや春の風　子規（子規句集）
春風にこぼれて赤し齒磨粉　同（同）
欄間には二十五菩薩春の風　同（同）
春風や水樓に上る舟の醉　同（同）
枯蘆に春風吹けば日高かな　同（同）

門を出で五六歩ありく春の風　碧梧桐（新俳句）

川崎

麥藁の虎が鳴くなり春の風　同（同）

大寺や疊の上の春の風　魯洲（同）

春風や土手を出れば海見ゆる　極堂（同）

温泉に馬洗ひけり春の風　同（同）

春風や鳩舞ひ上る人の中　瓢亭（同）

飯くふて門に出づれば春の風　四方太（春夏秋冬）

女あり出船を招く春の風　瓢雨（同）

藁小屋の一方口や春の風　月村（同人）

春風や佛を刻む鉋屑　句佛（懸葵）

春風や潮花つけし捨て錨　葵鄕（同）

天險に社稷保てり春の風　子猷（ホトトギス）

領土出れば身に王位なし春の風　水巴（同）

春風に雌を將て軍鷄の濶歩かな　濱人（同）

養雞

雄鷄と極まりて赤し春の風　同（同）

海女か乳に卷く廣昆布や春の風　青嵐（同）

父母の墓詣

兄の墓と並びて小さし春の風　泊露（同）

春風の扉押へて石二つ　未刀（同）

手に當る虻流れ行く春の風　あふひ（同）

春風や江沙へ道の自から　橙黄子（同）

春風や戎克の艫の高櫓　孕江（同）

春風にいなゝく驢馬のふぐりかな　木長（同）

春風や張の飛行機宙返り　きよし（同）

すれちがふ渡舟に母や春の風　稻女（同）

春風やみどりすみれの姉妹船　晋平（同）

唐橋や春風吹いて砂埃　池冷（同）

春風や二段に在りし六地藏　青桐（同）

金福寺

春風や蕪村がぬきしばせを句　花笠（同）

春風にそろへてぬぎし草履かな　つる女（續ホトトギス）

春風や道のごとくに長き橋　阿乎美（同）

春風やみな跣足なる島の者　耿陽（同）

茂林寺は藁家なりけり春の風　同（同）

春風や身を逆さまに舟を曳く　すゑ子（同）

春風や春水や早公園に　水竹居（同）

釣絲の見えなくなるや春の風　蚊杖（同）

春風　春風や闘志いだきて丘に立つ　虚子（句集虚子）
　　　春風に向ひて歩く徐ろに　同（續ホトトギス）

風光る（かぜひかる）

古書校註 【滑稽雜談】爾雅に云、春晴日出、而して風を光風と曰ふ。

季題解説 今まで弱かつた日の光が、春になつてだん〳〵強くなつてうらうらと暖ゆく感ずる中に、そよ〳〵と軟風の吹きわたるさまをいふ。風は目に見えないものであるが、あたりが明るいので、風までが何となく光るやうに感ずるのである。参照 春風（ハルカゼ）

例句
風光る
日の春のちまたは風の光り哉　曉臺（曉臺句集）
葉ばかりの椿一樹や風光る　士栖（曉葵）
鮎汲みが濡らせし岩や風光る　碧朗（同）
遠く來し馬の機嫌や風光る　梧月（ホトトギス）
風光る島の中のうつせ貝　野人（同）
裝束をつけて端居や風光る　虚子（句集虚子）

油風（あぶらかぜ）

油増風（あぶらまし）　油交（あぶらまじ）

季題解説 畿内及び中國の船人の詞に、四月、未の方から吹く風をあぶらまぜと云ふ。「俚言集覧」――また二月頃吹く軟風をいふ、と記した書物もある。参照 春風（ハルカゼ）

霾（つちふる）

霾風（つちかぜ）　霾天（つちふり）　蒙古風（もうこかぜ）　黄塵（くわうぢん）

季題解説 滿洲地方では、毎年三・四・五月頃、蒙古風といふ季節風が黄塵を齎し、四・五百米の先さへ見えないくらゐになり、太陽の光は蔽ひかくされてしまつて、晝中でも灯火を要するやうなことさへある。支那人はこれを霾と呼び、日本内地にない滿洲特異の現象である。黄塵の主成分は長石と石灰で、角閃石・黑雲母・輝石・風信子鑛等は從成分である。何れも黄褐色質物を附着してゐる。内外蒙古方面で、龍卷により上空に舞上つた黄塵が、所謂季節風に乘つて流されて來るのであらう。

例句
霾
霾やぽつ〳〵雨の落ちて來し　幽靜（ホトトギス）
霾や杏の花の色もなく　霖雨（同）
霾風や翩々として乙鳥　平凡（同）
霾天の城市の春の駱駝かな　有風（同）
霾風の吹きすさびゐる日さびし　三昧（同）

霾風をやりすごしたる城市かな　　幽　静（續ホトトギス）
霾風やうすれて見ゆる河北の灯　　市（同）
霾風やかたまり移る牧の牛　　道　貫（同）
霾天や黄鶴樓は今日はなし　　鐘　耳（同）

春雨（はるさめ）　春の雨（はるのあめ）　膏雨（かうう）

古書校註

【御傘】春雨こさめといふ、百韵に一也。（一）誹諧には春雨・村雨・こさめ、出がちに折をかへて、さめと二あると知るべし。

【山之井】うそさびしく音もせでふりくるを、さし足かとも疑ひ、（二）藁葺ならぬ家根もなしともいへり。永々と降りつゞくまゝ、櫻の花も象とひとしくうなだれ、柳の眼も、蛇の目ほど、いからかすやうの心ばへをもいひなせり。

註（一）連歌新式の說。（二）原本には、この條下の例句に「ふりくるはさしあしなれや春の雨」と見ゆ。

季題解說　無涯編の歲時記には「鬼貫獨言」の「春の雨はものごもりてさびし」といふ註が引いてあるけれども、草木を芽吹かせ、花の蕾を綻びさせる春雨の感じは、たとひしつとりとはしてゐても、同時に艷つぽく、情濃かなものであるやうに思はれる。〔一題〕社翁の雨　梅若の涙雨　杏花雨　春霖　菜種人梅

例句

春雨

笠寺やもらぬ窟も春の雨　　芭　蕉（千鳥掛）
春雨の木下にかゝる雫かな　　同（小文庫）
春雨や蓬をのばす草の道　　同（草の道）
不性さやかき起されし春の雨　　同（猿蓑）
春雨や蜂の巢つたふ屋根の漏　　同（炭俵）
春雨や蓑吹かへす川柳　　同（芭蕉句選）

獨生晦の雨を
春雨のけふばかりとて降にけり　　鬼　貫（鬼貫句選）

髑骨を乞て、郡山をたちいづる名残に
たよりなや笠ぬぐ後の春の雨　　同（同）
狀見れば江戶も降けり春の雨　　同（同）
生て聞さむればひとり春の雨　　同（俳諧七車）
春雨やもらぬ家にもうどん桶　　來　山（いまみや艸）
春雨や火燵のそとへ足を出し　　同（續いま宮艸）
又けふも人よどしなりはるの雨　　同（同）
春雨や降ともしらず牛の目に　　同（同）
はるさめやぬけ出たまゝの夜着の穴　　丈　草（丈草發句集）

春雨

春雨や何からいはん嵯峨戻り　丈草　（丈草發句集）
石塔もはや苔つくや春の雨　去來　（去來發句集）
春雨やひしきものには枯つゝじ　其角　（五元集）
綱が立てつなが噂の雨夜哉　同　（同）
春雨やはなれ〳〵の金屏風　許六　（五老井發句集）
春雨や枕崩るゝうたひ本　支考　（蓮二吟集）
月花の目を休めはや春の雨　同　（同）
たくましき松も默つや春の雨　桃隣　（古太白堂句選）
もえしさる草何〳〵ぞ春の雨　千代女　（千代尼發句集）
はる雨やうつくしうなる物ばかり　同　（同）
春雨や土の笑ひも野に餘り　同　（同）
春雨にぬれてや水も青う行　同　（同）
春雨や人住て煙壁を洩る　蕪村　（新選）
蓴生ふ池のみかさやはるの雨　同　（津守舟）
春雨やゆるい下駄借す奈良の宿　同　（こゝのまけほろ）
春雨や鶴の七日を降くらす　同　（題央初懷紙）
春の雨日暮むとしてけふも有　同　（蕪村句集）
雛見世の灯を引ころや春の雨　同　（同）
はるさめや綱が袂に小でうちん　同　（同）
春雨やいざよふ月の海半　同　（同）
柴漬の沈みもやらで春の雨　同　（同）
春雨やもののかたりゆく蓑と傘　同　（同）
瀧口に燈を呼聲や春の雨　同　（同）
物種の袋ぬらしつ春のあめ　同　（同）
春雨や身にふる頭巾着たりけり　同　（同）
春雨やもの書ぬ身のあはれなる　同　（同）
春雨の中におぼろの清水哉　同　（同）
春雨や小磯の小貝ぬるゝほど　同　（同）
春雨にぬれつゝ屋根の手毬かな　同　（蕪村五子稿）
春雨や同車の君がさゞめごと　同　（蕪村遺稿）
春雨の中を流るゝ大河かな　同　（同）
春雨や珠數落したる潦　同　（同）
池と川ひとつになりぬ春の雨　同　（同）
粟島へはだし參りや春の雨　同　（同）
春雨に下駄買ふ初瀬の法師哉　同　（同）
春雨にぬるゝ鷹の背中哉　同　（同）
春雨や蛙の腹はまだぬれず　同　（同）
春の雨穴一のあなにたまりけり　同　（同）

春雨や茶めしにさます蝶の夢　同（句集拾遺）
書にいわく待人遲し春の雨　同（書翰）
春雨や丁稚もつれず只一人　同（落日庵句集）
寢た人に眠る人あり春の雨　同（同）
はる雨や風呂いそがする旅の暮　太祇（太祇句選）
はる雨や音もいろ〳〵に初夜のかね　同（同）
はる雨や講尺（釋）すみて殘る燈　同（同）
春雨のふるきなみだや梓神子　同（同）
はる雨や芝居みる日も旅姿　同（同）
春雨や晝間經よむおもひもの　同（同）
春雨やうち身痒かるすまひ取　同（同）
春雨や野老喰ふて見る女あり　召波（春泥發句集）
最前に起きてもよきを春の雨　同（同）
文ぬれしことはりいふや春のあめ　同（同）
迎待ツ母よ娘よ春の雨　同（同）
春の雨あるじは猫でおはす也　同（同）
春雨や財布ぬらして節句前　同（同）
春さめや暮を約せし妻戸口　同（同）
春雨や谷の古葉も流出ヅ　同（同）
春雨の泥や棧敷の階子まで　同（同）
はるさめや柳の雫梅の塵　同（同）
春雨に鐘のうねりや障子越　同（同）
鳥ぬれて猶色ふかし春の雨　樗良（樗良發句集）
夜はうれしく晝は靜なり春の雨　同（同）
花鳥をおもふや夜のはるの雨　同（同）
柳をり〳〵疊にふるゝ春の雨　同（同）
春雨や松に鶴なく和かの浦　同（同）
雪からは雪で落てやはるの雨　也有（蘿葉集）
濡ねども紙衣脱けり春の雨　同（同）
よしあしは麥にかゝるや春の雨　同（同）
珍らしう蚕のくふ夜や春の雨　同（同）
また花の幕も紺屋に春の雨　同（同）
鶯のぬれて啼なり春の雨　蓼太（蓼太句集）
双六を退は昔ありはるの雨　同（同）
春雨や枯るものには蓑ばかり　同（同）
夜暗の傘へあまるや春の雨　同（同）
春雨やあかつき見れば松の雪　同（同）
はるの雨硯に請て假名かゝん　同（同）

春雨

三井寺の鐘きく春の雨夜哉　夢太（夢太句集）
春雨や菜の下なる戀ごゝろ　几董（井華集）
春雨に根氣なき雷の響哉　同（同）
春雨や造化へもどす藁の塵　同（同）
春雨や鼻からくぼむ壬生の面　同（同）
薄はれて春雨けぶる林かな　白雄（白雄句集）
蓑市に誰こみのを春の雨　同（同）
春さめのこゝろながくも降日哉　同（同）
春雨や小桶にかつぐかす小鯛　同（同）
おもひ絶て梅きる宿に春の雨　同（同）
春雨や傘さしつれし讃社　同（同）
たれ／＼か夢うらきかむ春の雨　曉臺（曉臺句集）
春雨や枯木の上を降くらし　同（同）
旅人の夜川や渡るはるの雨　同（同）
はるの雨肝積持をなだめけり　同（同）
春雨や猿子をいだく歯朶の露　同（同）
手はじめは碧の茶山をはるの雨　同（同）
蓴あり藻魚いとよりはるのあめ　同（同）
春雨や老鳥は塒に眠るのみ　闌更（半化坊發句集）
春雨やのたり／＼歸る孕鹿　同（同）
春雨や土あらはれし北の山　同（同）
春雨や編笠着たる物詣び　同（同）
春雨や曉晴て花一ツ　同（同）
大佛のあめを見にゆくはる遠哉　士朗（枇杷園句集）
春雨や斯してをゐて峯の雲　巣兆（曾波可理）
芹生にて芹田持たし春の雨　同（同）
はる雨や簾を卷て鶴御覽　同（同）
はる雨やそこによき居はしくあり　成美（成美家集）
はる雨や博打に隱る夜手ならひ　同（同）
はる雨や窓はいくらもほしきもの　同（同）
春雨はみるふきぬるゝ雫かな　同（同）
はる雨や編笠ごしの音羽やま　同（同）
春雨やふるにさはらぬ茶の煙　同（同）
起／＼や舌もつれしてはるの雨　同（同）
春雨や窓から直ぎる肴うり　一茶（一茶句集）
ほうろくをかぶつて行くや春の雨　同（同）
春雨のいくらもふれよ茶呑橋　同（同）
芝居日と人はいふ也春の雨　同（同）

馬迄も旅籠どまりや春の雨　同　（同）
御守のわらぢかざるや春の雨　同　（同）
はる雨や鰯ののぼる程の瀧　同　（同）
はる雨や猫に踊をしへる子　同　（同）
線香や平内堂の春の雨　同　（同）
茶のゆだる湯の涌口や春の雨　同　（同）
北嵯峨や春の雨夜のむかし作　同　（享和句帖）
きのふ寐し嵯峨山見ゆるはるの雨　同　（はたけせう）
春雨や家鴨よち〱門歩き　同　（旅日記）
春雨や窓も一人に一ツづゝ　同　（同）
春雨や盃見せて狐よぶ　同　（七番日記）
わら苞やとうふのけぶる春の雨　同　（同）
餅缺の石となりけり春の雨　同　（同）
春雨や喰れ殘りの鴨が鳴　同　（同）
しん〱としんらん松の春の雨　同　（同）
梟よつらくせ直せ春の雨　同　（同）
行灯で菜をつみにけり春の雨　同　（同）
春雨や藪に吹るゝ捨手紙　同　（同）
幣振つてとうふ下るや春の雨　同　（同）
春雨やしたゝか錢の出た窓へ　同　（同）
笹の葉の春雨なめる鼠哉　同　（同）
湯桁迄菜を呼込や春の雨　同　（新集）
春雨や腹をへらしに湯につかる　同　（同）
春雨に大欠伸する美人哉　同　（發句題叢）
袖たけの垣の嬉しや春の雨　同　（同）
傘さして箱根越すなり春の雨　同　（一茶發句集）
安堵して鼠も寐るよ春の雨　同　（同）
春雨や相に相生の松の聲　同　（同）
春雨や鼠のなめる角田川　同　（同）
穴藏の中でものいふ春の雨　同　（同）
負弓の數にかゝりて春の雨　同　（同）
餅買に箱提灯や春の雨　同　（嘉永板發句集）
三助がはつせ詣やはるの雨　同　（同）
掃留の赤元結や春の雨　同　（同）
朝市に大肌ぬぎや春の雨　同　（同）
はる雨や木の間に見ゆる海の道　乙二　（たのゝえ草稿）
御法會のらちも取らぬに春の雨　同　（同）
沙汰なしに汐は滿たり春の雨　蒼虬　（蒼虬翁發句集）

春雨

春雨や貝こ古き法隆寺　蒼虬（蒼虬翁發句集）
はるさめや物潜付ぬ書はたご　同（同）
春雨や山路人ほど鶴の聲　同（同）
濱あいたやうに思ふや春の雨　同（同）
はるさめや大和路はこや綿殺火　同（同）
春雨や野になりそふな遠十湯　梅室（梅室宗集）
一日のはる雨竹にたまわけり　同（同）
春雨や杭のかしらに鳥の飯　同（同）
春雨や嵐落來る夜明方　移竹（新選）
傘さして押さし行や春の雨　嘯山（同）
むしろ斤に鷄のつらや春の雨　白圖（堅並）
降にけり馬も寐つきて春の雨　是扇（文車）
鷲のゐる山際青し春の雨　宗碩（大空句帳）
蛛の閭に春雨かゝる雫哉　奇生（あらの）
から鮭のかしら許りや春の雨　越人（曠野木枯）
心よい垣の芽出しや春の雨　里立（桓識）
春雨や露の廣葉のぬれ渡り　吟江（推蔵日記）
切芝をつみゆく舟や春の雨　平砂（古今句鑑）
見えてふる遠山くもり春の雨　素盈（同）
訪ふ人に道で逢けり春の雨　五丸（月夜）
春雨に傘の出て行小船哉　里楊（夜話集）
宇治川やほつり／＼と春の雨　子規（子規句集）
松島の紀行直すや春の雨　同（同）

[illegible]

春雨や心得顏の太郎冠者　同（同）
畑見ゆる杉垣低し春の雨　同（同）
風呂の蓋取るやぽつ／＼春の雨　同（同）
春雨や金箔はげし栗田御所　同（同）
春雨や傘高低に渡し舟　同（同）
傘さして引舟通る春の雨　同（同）
双陸や灘々として春の雨　同（同）
會の日も晴れて又降る春の雨　同（同）

[illegible]

春雨のふるき小笠や霰の句　同（同）
春雨や追込籠に黄なる鳥　同（同）
春雨や小梅へ通ふ渡し舟　其村（新俳句）
牛鳴いて東郊春の雨晴れぬ　狙諦（同）
よもすがら春雨降るや奈良の宿　碌雨（同）

春雨や更けて心の面白き　麥丘（同）
春雨や門の外なる麥畑　四方太（春夏秋冬）
春雨や傘さしかけて送り膳　銀螢（同人）
春雨や見るまに濡れし土饅頭　露月（懸葵）
馬車で弾く伊太利乞食春の雨　金鷄城（同）
青麥の中行く道や春の雨　杏村（同）
ずぶ濡れの供の奴や春の雨　三千里（ホトトギス）
春の雨まだ門に待つ俥かな　仙郭（同）
春雨や餘り靜けき佛の灯　藤六（同）
廻る舟に傘さす春の雨　松聲（同）
むし風呂やのうれんかけて春の雨　屯城（同）
春雨のひねもす丁子ぬらしけり　よりに（同）
くだけたるまゝの椿や春の雨　一水（同）
蓑を著て又薪割れり春小雨　泊雲（同）
草屋根の穴に莚や春の雨　是城（同）
二つ程山の見え居り春の雨　岫雲（同）
春雨や幌より覗く東山　默禪（同）
春雨や生簀の中の手長蝦　方舟（同）
茶屋の傘まだ返さずよ春の雨　へちま（同）
春雨や僧にまゐらす女傘　春野人（同）
濡鹿の睫毛の露や春の雨　花蓑（同）
幕間に春雨傘の使かな　木國（同）
春雨や俥の幌の窓げしき　橙黄子（同）
潮さゐに遠のく泡や春の雨　卜（同）
綠青のふける擬寶珠や春の雨　桐一（同）
春雨や屋根に雲おく摩耶の坊　槇兒（同）
宿立つや春雨止みし三笠山　濱人（同）
法隆寺見えなくなるや春の雨　梅史（同）
結願の春雨傘を打たゝみ　大東（同）
春雨や火鉢にかざす旅衣　華女（同）
押入に祭る佛や春の雨　獺（同）
春雨や紅丸の料理屑　卜山（同）
春雨や波やゝ高き須磨の浦　泊村（同）
大岩に降る春雨や音もなく　蝶紡（同）
春雨の若草山へ傘さして　晩紅（同）
春雨や寺にありたる廓傘　穹平（同）
嫁乘せる利根の渡舟や春の雨　不破（同）
春雨や傘もたゝまぬ業取　唐湖（同）

春雨

陸々の春雨傘の用意かな　桃葉洞（ホトトギス）
場々へ別るゝ借や春の雨　圓星（同）
春雨に出来たる池のもくづかな　村雪（同）
春の雨いつから降りて枕上　同（同）
春雨や無穢にひくき相合傘　美入野（同）
春雨や煙のひまの海地獄　播水（同）
春雨傘寛にもさしてやりにけり　ゐの吉（同）
春雨や薮めぐらして國分寺　砂漠丘（同）
春雨や左阿彌ねかかどの石疊　汀々（同）

祇王寺

筍を掘つてゐるなり春の雨　三山（同）
春雨や東門よりの使舟　春里（同）
春雨や庇の下の夕ながめ　霞村（同）
春雨やつながり見ゆる瀬戸の島　土堂（同）
春雨や松の中なる松の苗　風生（同）
春雨や甌くづしの宿浴衣　梅史（同）
春雨や頬寄せ合ひて驢馬　田々子（同）
女共にまけぬ長湯や春の雨　月尚（同）

あしの湯

軒々の紙の幟に春の雨　多伽女（同）

ホトトギス二百號

本箱に春雨傘を立てかけし　すゝむ（同）
春の雨草履おもたくなりにけり　秀好（續ホトトギス）
面つけてをどつて遊ぶ春の雨　了吹（同）
春雨や庇のうちの蟲柱　寒華（同）
春雨や山うす／＼と町の上　竹甫（同）

京の鶴亭

春雨の露路笠置きぬ軒の下　漾人（同）
春雨や蓬萊丸は沖かゝり　露洲（同）
この寺の屋根の起伏や春の雨　立子（同）
春雨の雲より鹿や三笠山　爽南（同）
春雨や街道よぎる十能の火　鷺鷗（同）
春雨や支那の小學泥造　星童（同）
春雨に左阿彌の傘の仲居かな　青山（同）
春雨にならぶ鹽屋のけむりかな　喜美女（同）
傘さして堰の上ゆく春の雨　泊月（同）
春雨や少し燃えたる手提灯　虚子（句集虚子）
春雨や少し水ます紙屋川　同（同）
亭に入る春雨傘をさせしまゝ　同（同）

宿の者春雨傘を一かゝへ　同　（同　　）
花に消え松に斜や春の雨　同　（續ホトトギス）

【参考者】冬の季節から夏の季節への過渡期が春であつて、定つた風がなく、日射もそろ〳〵強くなりかけた頃であるから所々に局部性の小低氣を生ずる。そのため本邦各地曇天が續き霖雨を作ふ。此の種の雨を春雨と云ふ。此の雨は局部的小低氣に伴ふものであるから豪雨となる事は少なく、シト〳〵と長く降り續く所謂地雨性の降雨である。冬の強い季節風の時期過ぎたとき降る春雨は、春に特有なものであつて一段の風趣を添へるものである。

社翁の雨

【古書校註】【年浪草】提要錄に曰、社公・社母、舊水を食まず。故に社日（一）必ず雨あり。之を社翁雨（二）と謂ふ也。

註（一）立春から第五の戊の日を春社、立秋から第五の戊の日を秋社と云ふ。委しくは宗教の社日の條に掲げた諸説を參看せよ。（二）「社公雨」とした書もある。

【季題解説】春分、秋分に最も近い前後の戊（つちのえ）の日、即ち社日に降る雨をいふ。社公社母は舊水を食まずといふので、社日には必ず雨が降るものとせられてゐる。【參照】春雨　時候―春社

梅若の涙雨

【古書校註】【東都歳事記】今日（一）は梅若丸忌日によりて修行す（二）といへり。柳樹の本梅若山王の社開扉あり。このころ養花天とて、大かた曇り又は雨ふる事あり。この日雨ふるを、梅若が涙の雨といひならはせり。

註（一）三月十五日。（二）隅田川木母寺の梅若塚大念佛を指す。

【季題解説】陰暦三月十五日に降る雨をいふのである。この日は梅若丸の忌日であるが、梅若丸の最後はあまりにも悲しく哀れで、物語を聞くさへ涙を誘はれる。この日の雨は、天が情あつて降らす涙雨であらうとのこころから、世俗で言ひ傳へられたものである。【參照】春雨　宗教　梅若祭

杏花雨

【季題解説】暦の上で一年を二十四氣、即ち立春・雨水・啓蟄・春分・清明・穀雨等といふやうに分つてある。（「立春」の項を參照せよ。）その清明の時節に降る雨を云ふのである。春分から十五日目の四月五日頃の雨である。この清明は七十二候中の、桐始華、田鼠化爲鴽、虹始見の三候に當り、植物が勃然と起つて來る時である。【參照】春雨

春霖（しゆんりん）

季題解説 春の長雨である。花の時分、雨多くして且ついつまでも降り續くことがある。これを春霖と云ふのである。〔参照〕春雨

例句

春霖　春霖の田に羽を濡らす鴉かな　瓊堂（春蛙）

菜種梅雨（なたねつゆ）　菜種入梅（なたねにふまい）

季題解説 花を催す雨、卽ち催花雨である。催花の同音菜花に通ずる故、菜花雨となつたのであるといふ說もあるが、それよりも四月頃、菜種の花の盛りの時分は所謂「花時風雨多し」で、とかく雨風が多いので、からいふ言葉を生じたと解する方が自然のやうである。筍梅雨・筍入梅といふのも同じこころからである。〔参照〕春雨（ハルサメ）　植物—菜の花（ハナノ）

例句

菜種梅雨　瓜苗につく瓜蠅や菜種梅雨　夏樹（同人）

春の雪（はるのゆき）　春雪（しゆんせつ）　淡雪（あはゆき）　沫雪（あわゆき）

古書校註

【御傘】たまりもあへずきゆる故に、あは雪と云ふ。さればあは雪は消ゆとしても冬也。初雪・はつ霜・霰（ハタレ）・みぞれの消は皆冬也。はだれ雪も同前といへり。まだら雪と云ふ心、薄太禮ともかけり。是をあは雪・初雪に准じて、消ゆるを春にならずと無言抄にかけり。その義あたらず。それならば、うす雪も同じ事也。うす雪・はだれ雪等は、消ゆと云はば春たるべし。

【滑稽雑談】八雲御抄に云、淡雪は冬のはじめつかたの雪なり。朱文公曰、草木の花は皆五出なり。雪の花は六出なり。地六水に生ずる義なり。（一）然るに立春の後觀れば、雪皆五出なり。冬は陰に屬し、春は陽に屬す。想ふに陰陽奇偶、天も亦違ふ能はず。（略）私云、雪を六つの花といへる、上の說のごとし。然れども春雪を六つの花といはんは非也。（略）春の雪は二月迄也。

【山之井】猶しぶる空にむかひては、霞の衣の中入れの綿とも見なし、春雨にまじるはなかいらぎ（二）などもいひなす。

【栞草】支考の著はす貞享式に云、淡雪、この名は大昔は春といひ、中昔は冬といへり。今按ずるに、淡雪は冬に用ふべき所以なし。雪の斑らなる形容は、初雪ともいひ、薄雪ともいはん、春の雪の平白ならんも日影にちりて淡雪ならむも、寒氣のあはやかなる故なれば、淡雪は決して春とさだむべし。此等は例の加減とも、例の當用ともいふべき也、云々。又同人の著、廿五ヶ條に云、淡雪は春季もしかるべし、口傳新古の法式有り。云々。、か

くのごとくあれば、春季と定めたるは支考が說にして、翁存在には冬季に用ひられしこと、上に擧ぐるあらの集（三）炭俵集（四）の句にてしるべし。○あわ雪を中古には皆淡雪とかけり。淡はあはの假名也。沫はあわ也。古事記・萬葉みな阿和由伎とあれば、淡雪とはかくべからず。沫雪と書きて、假名もあわゆきと書くべし。

註（一）三才圖會には、朱子の書として、「地六は水の成數、雪は水結びて花となる故六出なり」と見えてゐる。このかたが意原かである。（二）花の如き模樣ある鮫皮。梅花皮。（三）曠野は荷兮の撰になる元祿二年梓行の蕉門俳書。その中に、雪二十句中に、「ちら〳〵や淡雪かかる酒強飯　荷兮」冬の部中に、「あわ雪のとゞかぬうちに消えにけり　鼠彈」の句が見えてゐるのをいふ。（四）炭俵は野坡・孤屋・利牛の撰になる元祿七年梓行の蕉門俳書。その連句の中に、「淡氣の雪に雜談もせぬ　野坡」の前後二句とも雜の句で、この「淡氣の雪」を冬季として取扱はれてゐるのをいふ。

季題解說　春になつて降る雪を云ふ。淡雪ともいふのは、春の雪の消えやすきを指すところである。吹く風もやゝ暖かになつて、木の芽も吹き、櫻の蕾も色づき初め、地には草も萌ゆるといふのに、朝から大片の雪が降ることがある。しかし、ほんとうに冬降る雪とちがひ、水つぽく溶け易く、降るかたはらから消えて行つて、中々積らない。又積つたと思つても半日一日ですつかり消えてしまふ。然し花の上に大雪の積つたことなどもないではない。【関連】雪の果〳〵　冬—雪よ

例句

春の雪

湯屋まではぬれて行けり春の雪　來山（續いま宮艸）
若草の夢かとのみぞ春の雪　浪化（浪化上人發句集）
うぐひすの雫となるや春の雪　同（同）
うぐひすの尾でくるはすや春の雪　同（同）
掃だめを捨かけておく春の雪　許六（五老井發句集）
是まで歟〳〵とて春の雪　支考（蓮二吟集）
淡ゆきや幾筋きゝてもとの道　千代女（千代尼發句集）
吹はれてまたふる空や春の雪　太祇（太祇句選）
春の雪風ふきあれて日の暮る　樗良（樗良發句集）
北枝の梅のさかりや春の雪　也有（蘿葉集）
八重までの梅にはいどし春の雪　同（同）
時雨ほど庭ぬれにけり春の雪　同（同）
傘にふり下駄に消けり春の雪　同（同）
淡雪や側から青き春日山　蓼太（蓼太句集）
淡雪の降すがりけり去年の雪　同（同）
椎の葉に盛こぼすらし春の雪　几董（井華集）
あはれなるか安房の岬か春の雪　白雄（白雄句集）
春の雪しきりに降て止にけり　同（同）
海に見ん春の白雪地にあはき　同（同）

春の雪

はるのゆき扇ではらふ衣紋かな　曉臺　（曉臺句集）
春の雪業平の行ヲ際崩し　同　（同）
春の雪仰向うちの雛かな　闌更　（半化坊發句集）
都邊や小袖に消ゆる春の雪　同　（同）
春もまだむなしき雪の田面哉　同　（同）
日晴には燃るかごとし春の雪　同　（同）
はるの雪鳥のさはらぬ枝もなし　士朗　（枇杷園句集）
旅人よ雪はふれども春の空　同　（同）
紫の袖にちりけり春の雪　一茶　（享和句帖）
春の雪あら蕗敷て降らせけり　同　（七番日記）
黄鳥の啼あて啼や春の雪　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
ぬれ紫の間〳〵やはるの雪　同　（同）
淡雪や葭簀かこひの小料理や　同　（同）
木曾殿にこりよ栗津の春の雪　梅室　（梅室家集）
淡雪や神酒に醉たる朝の内　同　（同）
あは雪や年をこえたる壁の草　同　（同）
つめたさに鶯鳴か春の雪　吟江　（夢うら）
淡雪や一つかみつつ春の草　鼠彈　（類題發句集）
芝浦や藻屑に消ゆる春の雪　叟蟬　（新俳句）
春の雪つけし石榴の枯木かな　滴萃　（同人）
濱荻を燒く火旺ゝや春の雪　一雅　（同）
春雪のしばらく降るや海の上　普羅　（ホトトギス）
春雪や盃を置く戀話　不人　（同）
春雪に歩く人見て幌の中　かな女　（同）
春雪やふたゝびわたる難波橋　櫻坡子　（同）
春雪や加茂の藪の酢茎桶　都穗　（同）
枯蔓につもりてかろし春の雪　泊雲　（同）
溫泉の山に一夜積りぬ春の雪　默禪　（同）
春雪に京離れ浮く東寺かな　暮情　（同）
春雪のふたゝび深し牡丹の芽　草夢　（同）
春雪やお多福風邪のはやりけり　青眼子　（同）
果樹園に淡雪白くつもりけり　巴潮　（同）
物の芽にかゝり消えたり春の雪　董子　（續ホトトギス）
海苔粗朶の少しかづきぬ春の雪　野風呂　（同）
事務室に一日在るや春の雪　李江　（同）
三笠山裏より越えぬ春の雪　七堂　（同）
春雪の屋根に傘し青松寺　閑山寺　（同）
淡雪や春日の巫女の塗火桶　治介　（同）

淡雪や夕暮早き伊賀の町　十五風（同）

袖に來て遊び消ゆるや春の雪　虛子（同）

【参考】酷寒の時降る雪は低温であるため、雪の粉が一つ一つ固い結晶になつて居る。故に極めて小さな氷晶が霏々として降る。然るに氣溫が比較的高いときに降る雪は結晶が融けかゝつて居るため互に密着し合つて大きな塊即ち雪片になる。故に氣溫が高い時程雪片は大きくなる。一方斯樣に大片の雪は解け易くもある。春の雪は斯樣な種類のものであつて、雪片の大きい所謂牡丹雪であるから極めて融け易く春の淡雪の稱がある。斯樣に春は雪が降つても氣溫が比較的高く氷點に近いから雪片は融けかゝつて居る。若し下層の氣溫が更に高いと、高い處で出來た雪片も落下の途中下層の暖かい氣層を通るために融けて雪を交へた樣な雨となる。之れが霙である。故に霙は春に多いものである。

雪の果（ゆきのはて）

名殘の雪（なごりのゆき）　雪の別れ（ゆきのわかれ）　雪涅槃（ゆきねはん）

【古書摘註】【滑稽雜談】凡そ每年、涅槃の時に及びて、多く雪降る。故に世俗、雪涅槃（一）と謂ふ、是なり。

註（一）諺に「雪のはては涅槃」といふ。

【季題解説】春の終雪のことで、大凡涅槃會の前後に降ると云はれてゐる。名殘の雪ともいふのである。多くの場合、積むといふことなく、降つた日のうちに消えてしまふ。【参照】春の雪（ハルノユキ）　宗教―涅槃會（ネハンヱ）　冬―初雪（ハツユキ）

地名	平均（月・日）	最晩（年・月・日）
東京	三・二一	明治三五・四・一〇
落合	五・二二	大正四・六・一五
大泊	五・一九	大正二・六・一四
紗那	五・一九	大正一五・六・一二
根室	五・六	明治二一・六・九
旭川	五・四	明治三三・五・二七
中江鎮	四・二六	昭和三・五・一六
札幌	四・二〇	大正二・五・一四
伊吹山	四・二〇	昭和二・五・七
長春	四・一九	昭和三・五・一六
盛岡	四・一六	昭和四・五・五
函館	四・一五	明治三一・五・二二
岐阜	三・二一	昭和三・四・二四
高山	四・一五	明治三五・五・一二

青森	四・一一	昭和	四・五・四
長野	四・八	昭和	四・五・四
秋田	四・六	明治	二三・五・一四
福島	四・三	明治	二五・五・二
新潟	三・三一	昭和	三・四・二三
相川	三・三一	大正	一五・四・一四
金澤	三・二九	大正	一五・四・二六
大連	三・二八	昭和	三・五・一三
京城	三・二六	明治	四四・四・一九
宇都宮	三・二四	明治	二五・四・二〇
濱松	三・二	昭和	六・四・七
松本	四・七	明治	三五・五・一二
甲府	三・一五	明治	四一・四・九
沼津	二・二五	大正	三・四・四
横濱	三・二〇	明治	三五・四・一二
水戸	三・二四	大正	二・四・九
京都	三・二三	明治	三五・四・一一
境	三・二一	明治	二四・四・七
天津	三・二〇	大正	八・五・一
温泉岳	三・二〇	昭和	五・四・二
廣島	三・一六	明治	三五・四・一三
名古屋	三・一四	明治	三五・四・一一
和歌山	三・九	明治	三五・四・一一
大阪	三・一四	大正	一四・四・五
釜山	三・一〇	昭和	四・四・二〇
大邱	三・一九	昭和	六・四・六
仁川	三・二三	明治	四四・四・一九
平壤	三・二九	明治	四一・四・二四
奉天	四・一〇	昭和	三・五・一五
松山	三・九	明治	三五・四・一一
下關	三・九	明治	二三・四・六
長津呂	三・四	大正	一三・三・一七
福岡	三・四	大正	一五・三・二六
熊本	三・二	大正	一五・三・二六
上海	二・二八	大正	一四・三・二六
八丈島	二・二六	大正	一五・三・二七
高知	二・二五	大正	一五・三・二七
鹿兒島	二・二三	大正	一五・三・二六

潮岬	二・三〇	大正 一三・三・二八
宮崎	二・四	昭和 四・三・一三

例句 雪の果　烏賊柴に名残の雪の荒びけり　天高（同人）

参考 雪の果、名残りの雪は氣象學上から見ると終雪日になる。平均終雪日を毎年觀測して之れを平均して見ると平均終雪日が得られる。平均終雪日は先づ緯度により異り、高緯度の地方程遅れる。次に標高によつても異り高い土地程遅れる。更に海流の狀態も大なる影響を與へ暖流が流れて居る沿岸地方では平均終雪日が早い。又内陸地方は遲く海岸地方は早い。之等地勢・高度及海洋の影響を考慮して、我國に於ける平均終雪日を見ると、九州南部及紀伊半島南部は二月中に終雪するが、それより北は凡て春に入つてからである。即ち九州中部以北と四國南部は三月十日迄の間に終雪し、四國北部、中國西半部、朝鮮南部は三月十日乃至三月二十日の間に終雪する、又紀伊半島及東海地方は三月十日前後、關東地方及中國東半部は三月二十日から月末迄の間、近畿地方は三月二十日前後に何れも終雪する。中部地方は地勢が錯雜してゐるため一概に云へないが太平洋岸は三月十日迄の間、之れより北にゆくに從つて次第に遲れ四月十日迄の間には終雪するが、アルプス地方の山岳地は四月二十日迄降雪を見る。奧羽地方は大體四月十日迄に終雪するが南東は少し早く三月中に終つて仕舞ふ。北海道は南西半部が四月十日から四月末迄の間、北東半部が四月末から五月十五日迄の間に終雪する。而して樺太は五月二十日前後迄降雪を見る。

朝鮮では南部は三月二十日迄に終雪するが、之れより北になると、南西半部が三月二十日乃至三月末、北東半部が三月末乃至四月十日の間に終雪するのである。

昔万延元年三月三日井伊大老が櫻田門に殺された時は江戸は大雪であつたとの記錄がある。それなどは新暦によれば四月上旬に當る故記錄破りの晩雪かも知れない。我國で今迄最も晩く降つた雪は大正四年六月十五日樺太の落合に降つたものである。即ち之れこそ眞の夏の雪である。

春の霰（はるのあられ）　春霰（しゆんさん）

季題解説 春となつて降る霰である。塗畦に當り、ポッポッと疱痕のやうに穴を穿つことなどがある。又、蕗の若葉、梨の雙葉を損ふことがある。

〔参照〕冬―霰。

例句
春の霰　春霰やころがり戻る畑の鶏　泊月（ホトトギス）
御社の檜わだ庇や春あられ　春梢女（同）

春の霙

季題解説 霙とは、雪が地に届かぬうちに、温氣に逢つて半ば解けかけて降つて來るものをいふ。これが春になつて後も降ることがあるのを、春の霙といふのである。〔參照〕冬―霙。

春の露

季題解説 露は秋季殊に美しく、又しげきものであるが、春の曉にも亦萌え出でた草、菖蒲の芽、蘆の角などに、美しい露の玉が結んで居るのを見る。大地から發する水蒸氣が、まだ冷たい早春や春曉の大氣に觸れて、凝つて露となるので、この關係は秋と同じことであるが、露としての感じは、秋の露・春の露ではつきり異るものである。〔參照〕秋―露。

例句

春の露　ささな釉草には置ぬ春の露　也有（蓬萊集）

春の霜

春霜

季題解説 春になつてふる霜のことである。春霜のおくのは八十八夜限りとするといはれる。〔參照〕忘れ霜（次項）

例句

春の霜

曙や麥の葉末の春の霜　鬼貫（鬼貫句選）

初草に心づよさよ春のしも　几董（井華集）

是きりと見えてどつさり春の霜　一茶（七番日記）

土塊を抱きて霜の別かな　小蕾（ホトトギス）

春霜や蓄を抱いて牡丹の芽　幽夢（同）

大焚火春霜除けの茶園かな　茶泊（同）

春の霜木の芽焦がして乾きけり　弱味（同）

忘れ霜

別れ霜　霜の名殘

古書校註 〔年浪草〕八十八夜（略）此時農民種子を撒くの節となす也。凡そ立春より八十八日の夜、必ず霜あり。諸木の花房・嫩芽、之に逢ふときは則ち多く枯る。故に此の前後、葭簾を以て之を蓋ひ、霜氣をして之を侵さしめず。宇治の茶園、特に之を畏る。八十八夜過ぐるときは、則ち霜を防ぐの葭簾を撤す。八十八夜の後更に霜無し。故に之を忘霜、或は別霜と謂ふ。

季題解説 八十八夜（立春より八十八日目）の別れ霜などいふ言葉があつて、大抵その頃霜が置き、又それが霜の終りになる。それゆゑ霜の名殘ともいはれる。この霜は桑・茶・野菜等農作物の芽に甚た害があるので、霜薇ひ

を設けて防ぐ。山城宇治の茶園では殊に春霜を恐れ、葭簀の蔽ひを施しておき、八十八夜を過ぐればこれを除くといふ。「忘れ」とか「別れ」といふ言ひ方には、俳句の季語特有の面白さがあると思ふ。㊂参照 春の霜(ハルノシモ) 時候—八十八夜(ハチジフハチヤ) 冬—霜(シモ) 初霜(ハツシモ)

地名	平均 (月日)	最晩 (年月日)
東京	四・七	大正 一五・五・一六
紗那	六・一二	大正 七・七・一五
敷香	五・三〇	大正 一一・六・二六
旭川	五・二七	明治 二三・七・七
大泊	五・二六	大正 一五・六・一三
根室	五・二四	明治 四四・七・二三
札幌	五・二二	明治 四一・六・二八
中江鎭	五・一五	昭和 二・六・二
盛岡	五・一四	昭和 四・五・二七
函館	五・一四	大正 六・六・七
高山	五・一二	明治 三五・六・二
長野	五・八	明治 二四・五・三〇
青森	五・五	大正 八・五・二七
伊吹山	五・五	大正 一〇・六・四
福島	五・四	大正 一〇・六・四
長春	五・二	大正 八・五・二一
京都	五・一	昭和 三・五・一九
宇都宮	四・二九	明治 四五・五・二五
秋田	四・二九	明治 四五・五・二四
境	四・二三	大正 一五・五・一七
福岡	四・二一	大正 二・五・一一
京城	四・二〇	大正 一五・四・三〇
松山	四・一六	大正 八・五・一六
金澤	四・一六	昭和 二・五・一二
名古屋	四・一三	明治 三五・五・一三
熊本	四・一二	明治 二七・五・二
温泉岳	四・一二	昭和 三・四・二四
新潟	四・八	明治 四四・五・一六
廣島	四・八	明治 二六・五・五
大阪	四・八	明治 三九・四・二九
相川	四・四	大正 一二・五・二

大連	三・三一	大正四・四・二二
釜山	三・二九	大正六・四・二五
下關	三・二六	昭和二・四・二二
鹿兒島	三・二四	昭和四・四・二二
高知	三・二四	大正一四・四・一六
天津	三・二〇	大正一二・四・一九
上海	三・一九	大正一五・四・一〇
潮岬	三・一七	大正一四・四・一六
富江	二・一四	大正一五・四・五
八丈島	二・七	大正一一・三・三〇
布良	二・四	昭和四・三・一六
臺北	一・二〇	明治三九・三・七
新京	五・二	大正八・五・二一

例句　忘れ霜

くま笹のへり取御座や別れ霜　沾德（俳諧五子稿）
花過てよし野出る日やわすれ霜　几董（井華集）
雁小屋のあらはになりぬ別霜　白雄（白雄句集）
鶯も元氣を直せ忘れ霜　一茶（七番日記）
苫あけて見るや夜船の別霜　吟江（推敲日記）
草の王最いため別れ霜　俳小星（ホトトギス）
忘れ霜さつさと掃いて終ひけり　末然（續ホトトギス）
二三本葱の坊主や別れ霜　虚子（句集虚子）

參考　霜も本邦では春季中で大抵終りになる。一年中で霜が最も晩く降つた日を記錄して其の平均をとつて見ると平均終霜日が得られる。平均終霜日は勿論緯度の高い程遲れるが更に海洋の影響が頗る多く、海岸地方では早く終り內地地方では晩い。特に標高の高い土地では晩く迄も霜が降る。

先づ臺灣では一月二十日前後に終るが、其他の地方は大抵春季に入つてから終りを告げる。九州では北部の內陸地方が四月二十日頃でそれが最も晩く沿岸地方は三月二十日前後に終る。四國は三月二十日乃至四月十日頃、中國は三月下旬乃至四月末、紀伊半島は三月二十日乃至四月二十日、近畿地方は三月末乃至四月末に何れも別れ霜が降る。中部地方は山岳地方が標高高いため非常に遲れて五月十五日頃にやつと霜の終りを見るが、太平洋岸は既に二月末に終り、日本海岸でも三月末には終霜を見る。關東地方は北部が四月下旬、南部は早くて二月末に終る。奥羽地方は四月末から五月初旬にかけて終霜するが、沿岸地方は既に四月末に別れ霜を見る。北海道は南西部が早く四月末に終り、北東は遲く五月下

旬に終霜する。更に樺太では五月末に終霜を見、早い所でも五月二十日前後でなければ終りを見ない。

朝鮮は沿岸地方が早く終霜するが内陸程遲い。即ち沿岸地方では三月二十日頃に終霜する。併し内陸地方では、四月下旬に入つて始めて別れ霜を見る。

今迄我國で最も晩く霜が降つたのは明治四十四年七月二十三日北海道の根室へ降つたものである。之れは所謂夏の霜である。又斯樣に季節外れに晩く降る霜を忘れ霜とも稱する。霜害は農家の最も厭む所であるから霜の季節は氣象上でも重要なものである。

初虹　春の虹

〔古書校註〕【滑稽雜談】禮月令に曰、季春の月、虹始めて見ゆ。（一）（略）これを初虹などいふて春也。

〔註〕（一）淸明の候の第三候。時候之部「淸明」の條を參看せよ。

〔季題解說〕春になつて初めての虹を云ふ。普通三月頃のものである。單に虹といへば夏季であるので、春の字を冠して區別するのである。夏の虹よりも格別に優婉の趣が深く思はれる。〔參照〕夏—虹

〔例句〕

初虹　天橋の松のくろさや春の虹　泊雲（ホトトギス）

初虹や川を隔てゝ興聖寺　月華（同）

初電

〔古書校註〕【滑稽雜談】電は雷と氣を同じうして、いざなひひかるの心也。初雷は春分第三の候（一）にて、勿論春也。電を稻光といふ時、初の字なくては雜也。貞德師の御傘に、稻妻は秋也、稻光は雜也。秋分にあらず、雷に面（二）を嫌ふべし、天象にあらずといへり。此說實なるや、よく心惟すべし。歌などには、大略いなづま・稻光、混じて詠ずる趣に見えたり。俳諧においては、電の字を兩用するとも、其の物は別に心得べし。

〔註〕（一）「雷乃ち聲を發す」は春分の第二候、第三候とは誤か。（二）連句の用語。初折の面をさす。

〔季題解說〕春の稻光のことをいふ。單に稻光といへば秋である。〔參照〕初雷　秋—稻妻

初雷

〔季題解說〕春初めて鳴る雷をいふ。三月啓蟄の頃よく鳴るので、地方によつ

てはこれを蟲出しの雷などともいふ。春雷とほゞ同じに考へていゝのであるが、やかましくいへば春雷よりも狹く、その年春はじめて鳴る雷のこととなるので、そこにまた別個の趣を見出すべきである。［參照］初電（春）、春の雷（春）、冬―液雨（冬）

例句

初雷

あしからはまだ出ぬ蟬のとゞろ哉　　巣兆（曾波可理）
初雷やエゾの果迄御代の鐘　　一茶（享和句帖）
初ものや大雷の光さへ　　同（九番日記）
初雷や人參の花光る時　　草駄（同　人）
初雷や尋常なるが二つきり　　泊雲（ホトトギス）
初雷のどろ／＼と鳴る授業かな　　果采（同）
初雷や飯終へて立つ硝子窓　　零餘子（同）
初雷や籠の鷄のくゝと鳴く　　虚子（句集虚子）

春の雷（はるのらい）

春雷（しゆんらい）　蟲起しの雷（むしおこしのらい）　蟲出しの雷（むしだしのらい）　むしだし（新季題）

古書校註

【滑稽雜談】　これ春分第二の候にして、俳諧には初雷又は蟲起しの雷などいへり。月令の次に「蟄蟲（一）咸動き、戶を啓きて始めて出づ」などあれば、さも有らんかし。雷の說多く侍る也。

【年浪草】　月令に曰、仲春の月、雷乃ち聲を發す。（略）紀事（二）に曰、凡そ一春の中、雷始めて聲を發す、是を初雷と謂ふ。京の俗、節分の夜家内に撒く處の熬豆を貯へ置く、初雷を聞くの時、則ち三粒之を食ふ。（略）蟲出、月令に曰、仲春雷乃ち聲を發し始めて電す。蟄蟲咸動く云々。此に本づいて、和俗、之を蟲出しの雷と謂ふ。

註（一）土の中に冬籠りをしてゐた地蟲・蛇・とかげの類。（二）日次紀事。

季題解説　雷は夏に多いものであるが、それがまだ春のうちに鳴るのをいふ。もちろんいつと限つたわけはないが、夜半曉方などの方が特に春雷らしい感じがあるやうである。そして餘りいくつも續けて鳴らず、一つ二つで止むといふのが春雷らしく思はれる。［參照］初雷（春）

例句

春の雷

春雷や筍さぐる裏の藪　　百迷（同　人）
舟で來る友を待つ日や春の雷　　へき（懸葵）
春雷に雫する砂の小松かな　　鳴海（同）
春雷の高々と去りぬ花の上　　としを（ホトトギス）
春雷にお靈屋閉めて廻りけり　　うたゝ（同）
春雷に眠さめて病つのり行く　　春梢女（同）
春雷や夜半灯りて父母の聲　　みさ子（同）
春雷に一條の陽や彥根城　　白江（同）

寢ながらに春雷聞くや句會あと　水竹居（同）
緣側に腰かけをれば春の雷　たけし（同）
春の雷ひゞきし藥袋かな　秋津（同）
再びの春雷をきく湖舟かな　風生（同）
春雷や庭出て消えし原始林道　圭石（續ホトトギス）
三笠山下りくる人や春の雷　百草（同）
硝子戸にはりつく蜂や春の雷　琥珀城（同）
春雷の鳴り過ぐるなり灣の上　虛子（句集 虛子）
春雷や室戸岬なる貴賓館　同（續ホトトギス）

【參考】冬季の氣象狀態、卽ち大陸の高氣壓が日射の增大と共に衰へ始めると春が訪れを感ずる。此の時本邦各地には日射が增したゝめ局部的の小低氣壓を發生するが、特に盆地の樣な四圍山に圍まれた處では日射が强く、上昇氣流は旺盛になり雷雲を生ずる。而して雷雲の發達に伴うて各地に雷鳴を聞く樣になる。

元來雷には熱雷と渦雷の二種がある。渦雷は低氣壓に伴ふものであるから冬季でも低氣壓襲來の際などは之れを聞く事がある。併し熱雷は强烈な日射のために生じた上昇氣流によつて生ずるものであるから冬季には之れを見ることが出來ない。而して日射の增大して來た春先から發生し始める。往時之れを蟲出の雷と稱して居る。之れは春先になつて百蟲穴を出る頃に熱雷が發生し始め、其の期を一にするからである。

上昇氣流が盛んになると上層にゆくに從ひ空氣は冷えて遂に水蒸氣の凝結を起して水滴を生ずる。此の水滴は上昇氣流に伴つて昇騰するが途中次第に融合して大滴となつてゆく。併し大滴の水粒になると最早氣流と共に昇れなくなり遂に落下する。而して之等水滴は落下の際に分裂して小水滴に分れる。此の分裂に際して水滴は陽電氣を帶びる。斯くして帶電した水滴は再び上昇し、又大滴となつて落下するとき分裂して帶電する。斯樣な事を繰返して居る中に雲全體が帶電され雷雲となり、それが次第に發達すると遂に附近の雲又は地面との間に放電する。之れが雷である。

佐保姬（さほひめ）

古書校註

【御傘】さほ姬を名所にきらふと云ふ說、近年京にいひ出したるを、是非の講談する人なければ、田舍迄もそれにしたがふと見えて、無言抄などにも名所に成るべしとかゝれたり。是僻事か。新式にのせぬ義也。これは新式に、名神は名所に非ずと云ふ義理をとりそこなひて、春日の神・住吉の神などを、紹巴の時より名所にせらるゝより、かやうの僻出で來るか（略）

佐保姬・立田姬と申すは、唐には造化の神と名づけて、春秋の花紅葉を作り出す神也。しかるを日本には、春の造化の神をばさほひめといひ、秋の

をば立田姫となづくる也。されども神祇にはせぬ也。佐保姫と申すばかりにて、其の姿なけれども、姫と云ふより姿のあるやうに句を作りて、云とは哥にも讀めども、實躰なき故に、衣類にさへきらはぬ物を、なんぞ名所にきらふべきや。丸(一)の愚か成る心にさへ誤と存ずる間、智恵あらん人は定めて後生に笑はるべきとこそ思ひ侍れ。佐保と云ふを、佐保の山姫と云ふ義を正説と存ぜらるゝか、春の神をさほと云ふは其の義にて之無し。口傳別に之有り。

【滑稽雜談】 もし南の京(二)の時よりいひ習はして、佐保山は東、立田山は西なれば、さほ山の春の景氣、立田山の秋の色を臨びて、山姫の名を、春はさほ姫、秋は立田姫といひはじめたるか。

【栞草】 賦江人楚 春は佐保山の神より事おこりて、さほ山の霞の色によせ、春を染むる神といひ、秋は立田山の神より事おこりて、紅葉を詠ずる故に、秋を染むる神と云ふ也。云々。(略) 新式 佐保姫の衣、衣類にあらず。(霞花などをもみたていふなり。

註 (一) 長頭丸、即ち貞徳自身をさす。(二) 聖武帝。

季題解説 春の野山の造化をつかさどる女神の事である。奈良の都の東、大和國佐保の里にゐます春の女神で、秋の龍田姫(大和國龍田にまつる秋の女神)と相對する神である。古來和歌などに數多よまれ、姿ある如く表現されてゐる。霞や花をそめなしたまふうるはしい女神とされてゐる。〔季〕

時候―春、 秋 龍田姫

例句 佐保姫

佐保姫の額に見ゆれ礒の浪　　巣兆　(曾波可理)
佐保姫の野道に建る小旗かな　　同　(同　)
佐保姫に駒もよまるゝ鼻毛かな　　同　(同　)
佐保姫のたぶさの風か少しづゝ　　乙二　(をのゝえ草稿)
さほ姫といふも正月言葉かな　　同　(同　)
西王毋讃
佐保姫の弟の君とも見られけり　　同　(同　)
さほ姫のやどりとならば軒の松　　同　(同　)

霞

しまひね　白玉ひめ　春のほだし　薄霞　遠霞　八重霞　ひと霞
横霞　叢霞　朝霞　晝霞　夕霞　春霞　霞流る　霞の海　霞の
離霞　霞の波　霞の衣　霞の帶　霞の袖　霞の綱　霞の欄　霞の谷
霞の洞　霞の山　霞の里

古書校註

【御傘】 霞の衣。衣類にあらず。衣の字には五句也。霞の網。水邊にあらず。かすみのあみに似たるといふ事也。霞。そびき物(一)に二句去る也。

霞の谷。山城の名所也。不古の所なれば、むざとにはとりあつかふべからず。霞の海。そびき物なり。水邊に非ず。霞の洞、仙境を云ふ也。院の御所をも申すなり。句によりて差別有るべし。共に春に成る也。霞に霧を結びても春也。

【山之井】杉にかゝりたるを、玄賓僧都の衣（一）かとあやしみ、松にかゝれるを、天女の羽袖かとうたがひ、不動坂にたつを見ては、火炎の煙に見なし、あみだが峯にたなびくを、誓の網といひなす。筆を染めては和哥の浦を心がけ、霞をくみては（三）武藏野（四）を思ひ、又日のかすみはがすみといひては、老いたる人の愁をのべ、はげ山の頭巾はちまきなど見たてゝ、春の眺望をもいへり。

【滑稽雜談】河圖に云、崑崙山に五色水あり。赤水の氣上り、蒸して霞となる。（略）順の和名に云、唐韻云、霞は赤氣の雲也。和名、加須美。○八雲御抄に云、霞は夏もいづも、風しづかなる朝に讀むべしと、俊成いへり。○貞德が式に云、霞は聳物にて、萬葉集には秋に讀みたれど、當代は霧を結びても春也。○私に云、萬葉には霞を秋と讀む也。（五）（略）然れども連俳には、霞を春、霧を秋と定めたり。（略）○錦文（略）○紅綃（略）○瑞彩（略）○以上三つの物は、霞の異名也。又、和名をしまひね、八雲御抄御說、白玉ひね、藏玉集或は又白玉ひめとも云ふ。（六）

【年浪草】天中記に曰、日は霞の實、霞は日の精なり。（略）八重霞は、八雲御抄に、八重は只深き也。必ず八重に非ず、一切の物重り多き限りを八重と號す。（略）雜談抄に、世俗の賞する酒も霞と稱するは、糟を實と云ふ心也。

【栞草】吾邦にて、かすみと云ふものは、漢土に云ふ靄の字にあたれり。（略）○一と霞、横霞、いづれも霞のたなびきたる風情を云ふ。○春のほだし、契沖が曰、春のほだしとは霞を云ふ也。興風（七）の哥、山かぜの花の香かとふふもとには春の霞ぞほだしなりける。（八）

註（一）聳物。連句の用語。雲・霞・霧などを稱す。（二）弘仁帝は毎季白布を賜うたと傳へられる。弘仁九年寂。年八十九。（三）酒を汲むこと。（四）武藏野は大盃をいふ。のみ（飲・野見）つくさずの義。（五）卷二、磐姫皇后の御作、「秋の田の穂上に霧あふ朝霞何時邊の方に我戀やまん」をいふ。（六）赤人の作、「春の山しら玉姫のたつ時はみまくほしげに花たこそまて。」（七）藤原興風。古今集時代の歌人。下總權大掾。（八）後撰和歌集春の部所收。

季題解說 春になると、山谷に水蒸氣が常よりも多く立ちこめて來て、山の中腹あたりに横に筋を引いたやうになり、又野づらなどが一面ぼやけたやうになる。これを霞といふ。霧と霞とは同じものであるが、秋を霧といひ、春を霞として區別してゐる。**參照** 鐘霞む（カネカスム）

例句

霞

小泊瀨や眼鏡も餘所の霞かな　宗因（梅翁宗因發句集）

春がすみつくる東の日記かな　同（同　）

霞

大比叡やしの字を引て一霞　芭蕉（江戸廣小路）
和哥の跡とふや出雲の八重霞　同（もとの水）
春なれや名もなき山の朝かすみ　同（小文庫）
遠う来る鐘のあゆみや春霞　鬼貫（佛兄七車）
あふみにもたつや湖水の春霞　同（鬼貫句選）
遠里や麥や菜種や朝がすみ　同（同）
月なくて晝は霞むや昆陽の池　同（同）
釋迦霞ミけるや生駒は雨曇　言水（俳諧五子稿）
霞けり日枝は近江の山ならず　同（同）
日枝にこそ額の皺は朝霞　同（同）
霞けり消けり富士の片相手　来山（いまみや艸）
出るゝ人無地の帆もなし霞つゝ　同（續いま宮艸）
研かすむ海とや木子の硯彫　同（同）
花を出て松へしみ込む霞かな　嵐雪（玄峰集）
橋桁や日はさしながらゆふがすみ　北枝（北枝發句集）
何の木も霞て烟る小ぬかあめ　杉風（杉風句集）
狂ひても霞を出ぬ野馬かな　沾徳（俳諧五子稿）
鳥は音に嘴先さそふ霞かな　千代女（千代尼發句集）
蝶折〳〵扇いで出たる霞かな　同（同）
高麗船のよらで過行霞哉　蕪村（新選）
指南車を胡地に引去る霞哉　同（蕪村句集）
草霞み水に聲なき日ぐれ哉　同（同）
春のひくき馬に乘る日の霞哉　同（新五子稿）
海越て霞の網へ入日哉　同（全集）
今日は身を船子にまかすかすみかな　太祇（太祇句選）
熊耳に山の名を問ふかすみ哉　同（同）
つぎねふの山睦じきかすみかな　同（同）
ふりむけば灯とぼす關や夕霞　同（同）
大船の岩におそるゝ霞かな　同（同）
望汐の遠くも響くかすみ哉　召波（春泥發句集）
日三竿雨になり行霞かな　同（同）
波の寄る小じまも見えて霞哉　同（同）
心よりたつやしられぬ春霞　樗良（樗良發句集）
うた諷ふ葬士かすむ山邊かな　同（同）
鳥もろとも野に出し我も霞らん　同（同）
殘月に日のうつりつゝ朝霞　同（同）
二丁出て見る我里の霞かな　也有（蘿葉集）
山遠く雨へはちかき霞かな　同（同）

戻りには傘借るけさの霞かな　同（同）
洛陽の朝餉過たり春がすみ　蓼太（蓼太句集）
かすませて子や思ふらん蘆の鶴　同（同）
馬借てかはる〳〵にかすみけり　同（同）
落來るや霞もあへず大井川　同（同）
うしろにも前にも遠き霞かな　同（同）
誰との〻御先追らむ朝がすみ　同（同）
夕霞たき〻の鼓しらべけり　同（同）
比良の雪大津の柳かすみけり　几董（井華集）
夕がすみおもへば隔ッむかし哉　同（同）
三條をゆがみもて行霞かな　同（同）
こたつ出てまだ日の覺ぬ霞哉　同（同）
春のあはれ雉子うつ音も霞けり　同（同）
國にそう霞をはこぶ潮かな　白雄（白雄句集）
醉ざめや鴫を見こしの波かすむ　同（同）
二またになりて霞める野川哉　同（同）
うすみのや夕越くれば雨かすむ　同（同）
より所なくて遠しや野のかすみ　同（同）
筑波根や世のやぶ入か遠霞　同（同）
八重霞日落ていまだ夜ならず　曉臺（曉臺句集）
來て見ればかすみの松に日暮たり　同（同）
霞凝てものあらはなるうなへ哉　同（同）
山くれて霞下せり大炊川　同（同）
水の面にかすむ日の形みえにけり　同（同）
浦くれてかすみながらに火灯りぬ　同（同）
かすみこめて薄むらさきの匂ひ哉　同（同）
海の日の半見るよりうす霞　闌更（半化坊發句集）
山霞み海くれなゐのゆふべかな　同（同）
とし寄のほく〳〵とゆくかすみ哉　士朗（枇杷園句集）
古鳶のきげんなほりぬ朝がすみ　同（同）
朝螺貝の初瀬にこもる霞かな　同（同）
鶯に霞のかゝる夕哉　同（古今句鑑）
霞む日や佛のあかし遅なはる　巣兆（曾波可理）
鯛の汁喰ふて出たれば月かすむ　成美（成美家集）
門さきの枯木もかすむこゝろあり　同（同）
日にあきて龜のとびこむかすみかな　同（同）
かすみ來てまぎれにけらしふる小袖　同（同）
しら浪に夜はもどるか遠がすみ　一茶（一茶句帖）

三文がかすみ見にけり遠目鏡　一茶（一茶句帖）
きぬ〳〵やかすむ迄見る妹が家　同（同）
霞むならかすめと捨し菴かな　同（同）
横乘の馬のつゞくや夕がすみ　同（同）
かすみけり憎い宿屋も迹の村　同（同）
白壁のそしられながら霞けり　同（同）
拍子木や供のかけよる霞から　同（同）
跡供は霞引けり加賀守　同（享和句帖）
京見えて臑をもむ也春がすみ　同（同）
霞み行や二親持ちし小すげ笠　同（旅日記）
かすむ日や夕山かげの飴の笛　同（同）
柱をも拭しまひけり春霞　同（同）
京もはや捨たくなりぬ春霞　同（同）
うら窓にいつもの人が霞む也　同（同）
春がすみ鍬とらぬ身のもつたいな　同（同）
霞む日や花のお江戸の寐あく時　同（同）
夕暮や霞む中より無常鐘　同（七番日記）
けさ程やちさい霞も春ぢや迚　同（同）
古椀がはやかすむぞよ角田川　同（同）
じや〳〵馬のつくねんとして霞む也　同（同）
婆どのゝ舌切雀それかすむ　同（同）
かすむ日や飴屋がうらのばせを塚　同（同）
かすむやら目が霞むやらことしから　同（同）
古郷やいびつな家も一かすみ　同（同）
御佛の手桶の月もかすむなり　同（同）
西山やおのれがのるはどのかすみ　同（同）
すりこ木の音に始まるかすみ哉　同（同）
我里はどうかすんでもいびつなり　同（同）
茶を呑めと鳴子引なり朝霞　同（同）
かすむ日や〳〵とてむだぐらし　同（同）
横がすみ足らぬ處が我家ぞ　同（同）
彼の桃も流れ來よ〳〵春霞　同（同）
妻なしやありやかすんで居る小家　同（同）
春がすみいつち小いぞおれが家　同（同）
笠でするさらば〳〵や薄がすみ　同（同）
呉服やの朝聲かすみかゝりけり　同（同）
梅ばちの大挑灯やかすみがち　同（同）
芝風に笠追なくすかすみ哉　同（同）

さらし布かすみの足しに拵えけり　同　（同）
霞む日やしんかんとして大座敷　同　（おらが春）
誰それとしれてかすむや門の原　同　（九番日記）
盗人のかすんでけゝら笑ひかな　同　（同）
傘の雫ながらにかすみかな　同　（同）
空色の傘もかすむや女坂　同　（同）
しなの路やそれ霞それ雪が降る　同　（同）
霞より引つゞく也諸大名　同　（同）
かすむ日やさぞ天人の御退屈　同　（一茶發句集）
老松や又あらためていく霞　同　（同）
けふも〳〵霞んで暮す小家哉　同　（同）
此門の霞むたそくや隅田の鶴　同　（同）
破鐘のかすめる聲もむづかしや　同　（發句題叢）
茶鳴子のやたらに鳴るや春がすみ　同　（嘉永板發句集）
牡丹餅を喰はへて霞む烏かな　同　（同）
木のほやもかすみ殘さぬ夕かな　乙二　（をのゝえ草稿）
水呑て哀さめたり八重がすみ　同　（同）
霞戸や死んだふりして今日は寢ん　同　（同）
かすむ日やあまき物くふ布留の里　同　（同）
かすむ事わすれて居るか梢ども　同　（同）
朝がすみ掉（棹）の雫のひろがりぬ　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
小橋まで歩行て來たり朝がすみ　同　（同）
鐘の聲田一枚づゝかすみけり　同　（同）
開田や霞めばもとの磯の形　梅室　（梅室家集）
年を經て御堂たちけり霞けり　同　（同）
とりとめぬ蛋が仕事や薄霞　同　（同）
關守も往來も醉ぬ八重霞　同　（同）
いつ出て霞む山のは夕月夜　宗長　（宗長手記）

餞別

雲霞どこまで行くも同じこと　野坡　（炭俵）
我寺の鐘と思はず夕霞　心前　（大發句帳）
いつの間に瀬田は隱れて夕霞　佐十　（春遊）
薄霞野川々々のはづれ哉　素外　（古今句鑑）
一錢の釣鐘撞くや薹霞　子規　（子規句集）

大津畫

大國の山皆低きかすみかな　同　（同）
上市は灯をともしけり夕霞　同　（同）
大兵の野山に滿つる霞かな　同　（同）

霞

東寺の塔南に低く霞みけり　虚舟（春夏秋冬）
湖に吐く水平らかに霞みけり　枯木（[illegible]）
山霞町へ下れば灯ともれり　仇名草（同）
石山寺にて
つぎ／＼に屏をとざす夕霞　盧明（俳星）
神の魚族日々に釣らるゝ霞かな　水巴（ホトトギス）
谷杉の紺折り疊む霞かな　石鼎（同）
島二つ色異にして霞みけり　花蓑（同）
久方の雪嶺見えて霞みけり　同（同）
うす／＼と霞の中の妙義かな　同（同）
北嵯峨や藪又藪の夕霞　躑躅（同）
此頃や霞みて見えぬ撫順城　珂南（同）
籬より麥踏み出でぬ黄霞　素十（同）
耕の人馬々々や遠霞　岡城（同）
長城の一關見えて霞みけり　水歩（同）
三山はまことに鼎や黄霞　行々子（同）
奏樂の航空船や花霞　三海風（同）
二子より畝火は濃ゆし夕霞　句入道（同）
[illegible]
野の中の三帝陵や棚がすみ　不彩（同）
せなの子の眠久しや草霞む　小雀（續ホトトギス）
和歌の浦面舵とつて霞みけり　水竹居（同）
程近き衣笠山も霞みけり　燦々（同）
遠霞してゐる緣に出でにけり　榎松（同）
甲州行
ぽつかりと甲山あり夕霞　耕雪（同）
島三つ巴に霞む浦もあり　花蓑（同）

參考　霞は氣象學上では霧と稱するものである。卽ち學問上では霞と云はない。之れは地面近くにある水蒸氣が凝結し微小な水滴となつて浮遊して居るものを云ふ。

風の靜かな時、地面が外界へ熱を放散して冷却すると夫れに接觸して居る空氣の層が共に冷されるため、空氣中の水蒸氣は凝結して微小な水滴となる。之れが霞である。又空中に細かい塵が澤山層をなして浮んで居るとき之れが外氣へ熱を放散して冷却すると周圍にある水蒸氣の凝結を起して微小な水滴として霞を生ずる場合がある。

何れの場合にしても日中は相當暖められて居た地面や細塵が夜間に冷却するために霞を生ずるのであるから、日中日射が相當强く夜間には可なり冷却する樣な時期になれば霞は出來易い。春や秋は日射が可なり增して來る

が書間が短かいため十分熱せられず夜間は未だ可なり冷えるので霞や霧を生じ易い。春霞と云つて特に春の霧が著名になつたのは一面陰慘な冬から脱したとき日々にかゝる霧が一種の風趣を添へるためもある。

鐘霞む

〔古書校註〕

【御傘】鐘かすむ。夜分にあらず、春也。中比より、かねかすむ、晩鐘の事と心得て指合のくりやうよろしからず。新式にも夜分にあらずと計り出して、夕時分のさたなし。此のかすむ、めに見る霞にあらず。聲の春は長閑にてかすむと云ふ事也。夜は陰分なれば、春とてもかねの聲かすまぬ物也。夕時分に打越を嫌ふのさた用ふべからず。無言抄の説あしし。

〔季題解説〕 春の鐘霞むに對して冬の鐘冴ゆるがある。氣象の相違によつて、鐘の音が冴えて聞えたり、霞んで聞えたりする。それを云つたのである。春は野山に霞が棚引いて長閑である。遠く幽かに傳つて來る鐘の音も、霞んで聞えるやうな氣がするのである。〔參照〕霞。冬―鐘冴ゆる

〔例句〕

鐘霞む

破れ鐘も霞む類ひか鳩の海　吉水（俳諧五子稿）
山寺や撞そこなひの鐘霞む　蕪村（題苑集）
遠霞知恩院の鐘かすむらし　白雄（白雄句集）
婆々がつく鐘もうつすり霞む哉　一茶（新集）
夕暮や嵯峨をうしろに鐘霞む　子鳳（類題發句集）
鶯鳴るや上野の鐘の霞む日に　子規（子規句集）

陽炎

野馬　絲遊　遊絲　陽炎燃ゆる

〔古書校註〕

【御傘】いとゆふ。昔は生類に二句嫌ふ。今はきらはず、遊糸と書く也。詩に、野馬と作るもいとゆふの事也。（略）かげろふ。新式に雜とあれば雜也。此の名に話々有るなり。一には陽炎とて、春の日のあたゝかにさす時、甍のうへなどにちら〳〵と眼にさへぎる物をいふ。又、春草をいふといへり。古今に、（□）今更に雪ふらめやもかげろふのもゆる春日と成りにしものを、とよめるのは陽炎也、さるによりて、連に、もゆるとすれば春也。

【はなひ草】かげろふ。雜也。かげろふのもゆるは春なり、むし（□）の心にしては秋也。

【滑稽雜談】かげろふと名附くる物は、陽炎・蜻蛉・蜉蝣、以上三種と知るべし。陽炎は春たること明かなり。（略）連・俳ともに、いとゆふ又は遊ぶいとなどといへり。是前に註する陽炎の事也。是を古來の俳諧なんどに、生

類の部へ記し侍る、御傘の説にて明らむべし。

【倭謌輪】 陽炎・糸遊、同物二名也。春氣地より昇るを陽炎、或はかげろふもゆるともいひ、空にちらつき又降るをいとゆふといふなり。

註 (一) 萬葉集巻十所收。作者不明。又、讀人しらずとして新古今集にも見えてゐる。
(二) 蜻蛉をいふ。

季題解説 春日快晴の時、低空地上などから、ちら〱、ちら〱と蒸氣の上騰するのが眼に見ゆるのを云ふ。これは一定の距離において初めて見ゆるもので、餘り近づくと見えない。盛んな陽炎は實際焔のやうに見ゆることがある。

例句

陽炎

かれ芝やまだかげろふの一二寸　芭蕉（曠野）
丈六に陽炎高し石の上　同（小文庫）
かげろふの我肩にたつ紙子哉　同（伊達衣）
かげろふや柴胡の原の薄曇　同（猿蓑）
糸遊に結びつきたるけぶりかな　同（雪丸げ）
入かゝる日も糸遊の名殘かな　同（初茄子）
陽炎にむらなしどこか橋所　來山（いまみや草）
かげろふや塚にきそふ墓めぐり　浪化（浪化上人發句集）
陽炎に隣の茶さへすみにけり　丈草（丈草發句集）
かげろふや墓より外に住ばかり　同（同）
陽炎や足もとにつく尿り鶴　去來（去來發句集）
陽炎や小磯の砂も吹きたてず　其角（五元集）
かげろふや破風の瓦の如意寶珠　許六（五老井發句集）
馬の尾に陽炎ちるや昔多葉粉　惟然（惟然坊句集）
かげろふや簀に土をめづる人　蕪村（蕪村句集）
陽炎や名もしらぬ蟲の白き飛　同（同）
陽炎やひそみもあえず土龍　同（蕪村遺稿）
かげろふや夜卜の網干す川の岸　太祇（太祇句選）
陽炎や筏木かはく岸の上　同（同）
陽炎や景清入れし洞の口　同（同）
陽炎や版とりて干す池のふね　同（同）
かげろふや燃えてはしさる物のひま　召波（春泥發句集）
陽炎に兎出てゐる檜原哉　同（同）
かけろふを搔出す鶏の距かな　同（同）
陽炎に美しき妻の頭痛かな　同（同）
鶏にかげろふもゆる垣根かな　也有（蘿葉集）
陽炎の持よせてある屑火かな　蓼太（蓼太句集）
いとゆふにいとしづか也松の風　几董（井華集）

陽炎や酒にぬれたる舞扇　同（同）
まさご路や陽炎を追波がしら　同（同）
かげろふや泥脚かはくくわい掘　同（同）
陽炎やしづかなる日の敷かはら　白雄（白雄句集）
かげろふや一掴づゝすさだはら　同（同）
陽炎のもえて地にたつ松葉哉　同（同）
糸遊にほどける艸の葉先かな　同（同）
いとゆふやものによらねど角櫓　同（同）
糸遊に兒の瞬きやさしさよ　同（同）
陽炎の物みな風のひかりかな　曉臺（曉臺句集）
かげろふにほの有明の月高し　同（同）
かげろふの中來てくらむ戸口かな　同（同）
陽炎やはや水蓼のけしき立　同（同）
かげろふの蜉蝣を育る晴間かな　同（同）
かげろふや卵の虫の巣を出る　同（同）
かくばかり陽炎も胸をさすものか　同（同）
陽炎やはかなきと見る人もなし　闌更（半化坊發句集）
かげろふや消えてはもゆる波の隙　同（同）
陽炎の外は動かぬ景色哉　同（同）
かげろふは眠る狐の魂なる歟　同（同）
陽炎の跡に氣を吐宮守哉　同（同）
陽炎や黑きをもゆる灰汁の糟　同（同）
糸遊によろづ解行都哉　同（同）
糸遊の亂〳〵て靜也　同（同）
陽炎を淋しきものとしらざりき　士朗（枇杷園句集）
かげろふやつぶりと落しかたつぶり　同（同）
かげろふやいせの御祓捨てある　成美（成美家集）
陽炎や世はとにかくに捨にくし　同（同）
陽炎や子をなくしたる鳥の顏　一茶（旅日記）
陽炎や道灌どのゝ物見塚　同（七番日記）
陽炎や貝むく奴がうしろから　同（同）
陽炎に成つても仕まへ草の家　同（同）
陽炎や臼の中からま一すぢ　同（同）
陽炎や緣からころり寐ぼけ猫　同（同）
陽炎や土の姉さま土僧都　同（同）
陽炎やわらで足ふく這入口　同（同）
陽炎や雫ながらの肴錢　同（同）
陽炎や猫にもたかる歩行神　同（同）

陽炎

陽炎や狐の穴の赤の飯　一茶（七番日記）
陽炎に扇を敷て寢たりけり　同（同）
さむしろや錢と榼と陽炎と　同（同）
陽炎や笠へそりおとす月代に　同（同）
陽炎や大の字形に殘る雪　同（同）
陽炎や下駄屋が桐の青葉吹く　同（同）
陽炎や歩行ながらの御法談　同（同）
陽炎や新吉原の昔の體　同（同）
陽炎や手に下駄はいて善光寺　同（一茶句帖）
陽炎の中にうごめく衆生哉　同（同）
陽炎やそば屋が前の箸の山　同（一茶發句集）
よく寢たり陽炎のぼる枕前　梅室（梅室家集）
陽炎や柳に殘る宵の雨　素蘭（月影塚）
杉戸迄陽炎のぼる朝日哉　其體（古今句鑑）
陽炎や砂はきよせし梅がもと　素外（同）
野馬に子供あそばす狐哉　凡兆（猿みの）
陽炎のもえて田に散る椿哉　曲翠（あら野）
陽炎の底で燃ゆるや木瓜の花　蘆文（類題發句集）

[illegible]

陽炎や里は嚀ぬる化粧阪　乙由（麥林集）
陽炎や門口に干す馬の鞍　馬曹（年尾）

[illegible]

陽炎や石の魂猶死なず　子規（子規句集）
陽炎や鰯干したる山畠　鶯洲（新俳句）
陽炎や大盤梯の雪に立つ　明庵（同）
陽炎の目にとゞまりて來りけり　麥門冬（同人）
陽炎や石に下ろせし小鳥籠　たかな女（懸葵）
畑に捨てし下駄の目鼻や陽炎へる　法師（ホトトギス）
陽炎や落第恥ぢて野にある子　雉子郎（同）
陽炎や砂より萌ゆる月見草　秋櫻子（同）
石に坐せば陽炎逃げて草にあり　旭川（同）
かげろひて港は夏をおもはしむ　蓍子（同）
陽炎に木靴をはいて働ける　眉峰（續ホトトギス）
陽炎に包まれ遊ぶ子供かな　虚子（句集 虚子）
舳に陽炎たちて進みけり　同（[illegible]ホトトギス）

参考　降雨があつた後など、濡つた地面が日光に照されると日射のため土中の水分は蒸發し水蒸氣となつて上昇する。元來水蒸氣は空氣よりも輕い瓦斯體であるから地面から蒸發すると直ぐ上昇してゆく。斯くして水蒸

氣の蒸發が盛んになれば地面近くの空氣中で水蒸氣の昇騰氣流を生じ空氣は可なりの擾亂をうける。元來水蒸氣は無色の瓦斯體であるから全く目には見えないが、斯様に擾亂が激しい時は夫れを通して遠くの物體を見ると屈折のため物體の映像か浮動する。此の現象が陽炎である。春季日射の增大と共に此の種の現象が出現し始める故、陽炎は春に特有な現象と考へられて仕舞つた。然し夏でも日射の强烈なときは地表が著しく熱せられるため、それに接して居る空氣は著しく熱せられて上昇し地面附近に於て激しい對流を生ずる。之れによつても陽炎の現象は起るが此の種のものは空氣の擾亂も激しく、陽炎現象も强烈であるため一般には單に前者のみを陽炎と呼ぶ様である。

春陰（しゆんいん）

季題解説 春、櫻の咲く頃の曇りがちな天候をいふ。花曇と同義であるが、言葉の響きから來る感じには自ら相違かある。〔參照〕花曇、ハナグモリ

例句

春陰　春陰や丹塗剝けたる田村堂　篁　雨（同　人）

春陰や鼠が走る塀の下　石　字（同

花曇（はなぐもり）　養花天（やうくわてん）

古書校註

【年浪草】（一）陸放翁が天彭の牡丹の記に曰、半晴半陰之を花曇と謂ふ。

養花天、之に同じ。

註（一）宋の詩人。

季題解説 昔から「花開く時風雨多し」と言つて、花時は兎角天候のすぐれないものである。終日、眞綿を展べたやうな雲が日を遮つて、起居に汗ばみを覺える大氣が續くのである　これを花曇と言つて　としよりや婦女子は頭痛・眩暈を起し易いのである。〔參照〕春陰シユンイン　植物　花ハナ

例句

花曇　伊勢參り都見かへせ花曇　言　水（俳諧五子稿）

花曇南に黑しかはら竈　同（同　）

花曇り田螺のあとや水の底　丈　草（丈草發句集）

花ぐもりこゝろのくまをとりけらし　杉　風（杉風句集）

花曇り朧につゞくゆふべかな　蕪　村（落日庵句菓）

頭痛にも憎まれぬ名や花曇り　也　有（蘿葉集）

立山の雪やよごれて花曇　市　凡（桃首途）

娘等が鮓つくりけり花曇　月　斗（同　人）

城崎へ舟で下りぬ花曇　北　莊（同　）

花曇

門の花靜かに白し花曇　石鼎（ホトトギス）
麥畑の廣く明るし花曇　花蓑（同）
花曇小雀の囀の苔一片　元（同）
唐崎や大枯松も花曇　王城（同）
妻つれて兵曹長や花ぐもり　素十（同）
今日も居る讀書乞食や花曇　田々子（同）

城
弓の窓鐵砲の窓花曇　默禪（同）
板塀の節孔に目や花曇　泊月（同）
ペン皿のうすき埃や花曇　風生（同）
さゞなみの彦根の城も花ぐもり　有風（同）
川甚の大ぼんぼりや花曇　越央子（續ホトトギス）
東山越えて醍醐や花曇　欣宇（同）

三井寺
頰に手をあてし佛や花曇　玲月（同）

參考　冬季は亞細亞大陸に勢力の大きな高氣壓が蟠居し之れから太平洋上の低氣壓部へ強い風が吹く。之れが冬の季節風であつて此の爲め本邦では冬季西或は北西の強風を受ける。併し春になると大陸が暖められるため、其の上の高氣壓は次第に弱り、季節風も衰へて來る。即ち春には定つた風と云ふものが無い。
然も本邦內陸では日射が增して來るため次第に局部的に小低氣壓を生じて來る。即ち盆地の樣に四方山に圍まれた處では他の地方に比して特に日射が強い故空氣も暖められると共に上昇氣流を生じて雲が出來る。斯くして全國的に各局所毎に曇天を釀成することゝなる。之れが花曇りの現象である。斯樣な現象は春のみに限らず、定風の無い秋にも見られる秋霖が之れである。併し春季には特に目立つて見える故花曇りは一般周知の現象として人口に膾炙してゐる。

鳥曇（とりぐもり）

鳥雲（とりぐも）　鳥風（とりかぜ）

季題解說　北國地方で、春季、雁・鴨などの歸る頃、天が曇るのを云ふのである。鳥風とは、これ等の鳥の歸る時、群翔する音が風の如くなるのを云ふのである。〔參照〕動物―鳥歸る（トリカヘル）

例句
鳥曇
行春に佐渡や越後の鳥曇り　許六（五老井發句集）

鰊曇（にしんぐもり）

鰊空（にしんぞら）

季題解說　鰊がとれる時分になると、沖の方から濱邊へかけて、一體にどん

よりと、雲でもなく、霞でもなく、重々しく空が垂れ下がるやうな天候になつて來る。かうなると盛んに鰊が群れて來る。近くの山々にはまだ殘雪が白白と輝いてゐる。たまには淡雪も降るのに、どんよりと曇るので、花曇などとは全く異つた嬉しいやうな、生々とした感じがする。地方に依つて鰊群來の日が違ふので、隨つて鰊曇にも遲速がある。即ち余市・古市方面では三月頃であり、增毛・留萠地方では四月下旬であり、稚内・利尻あたりの北見地方になると、づつと遲れて五月上旬から中旬にかけてこの現象を見るのである。〔參照〕動物―鰊

蜃氣樓（しんきろう）

海市（かいし）　蜃樓（しんろう）　喜見城（きけんじやう）　なごのわたり（[illegible]）　蓬萊島（ほうらいじま）（[illegible]）　狐（きつね）の森（もり）（[illegible]）　きつねだな（[illegible]）　こをながふ（[illegible]）

〔古書校註〕【三才圖會】本綱、（一）蜃は乃ち蛟の屬、狀亦蛇に似たり。而して大なる角有りて、龍狀の如し。紅の鬣腰以下の鱗盡く逆なり。燕子を食して、能く氣を吐いて樓臺城郭の狀を成す。將に雨ふらんとすれば、即ち見ゆ。蜃樓と名づく。又海市と曰ふ。其の脂蠟に和して燭に作る、凡そ百步に香り、烟の中に亦樓閣の形有り。

〔註〕（一）本草綱目の略。

〔季題解說〕我が國では伊勢四日市附近の海上、越中魚津の海邊で、春夏の候、海上遙かに樓閣の形などを現はすのを云ふ。船や景色や人物などがあらはれることもある。昔の人はこれを海底の蛤が氣を吐いて、空中に樓閣を現はすのであると考へてかく呼んだのである。（蜃は大蛤の義である。）外國では伊太利リツギオ市からメツシナの方面に現はれ、Fata morgana（モルガナのお化）と呼ばれるものがある。レクセ地方では Mutate（動く畫）と呼ばれてをり、相似た現象であるといふ。我が國で發現する時期は多く四・五・六の各月である。最初は雲か幕かのやうに現はれて、やがてこれが森林・城郭・橋梁のやうな形に變化するのが普通である。富山縣伏木測候所發表に依ると、蜃氣樓現象はその發現及び存在共に、午後一時乃至二時頃に多く、午前九時以前には極めて少く、午後三時以後また比較的少くなるといふ。また魚津沿岸では、蜃氣樓は荒れ即ち風雨または雨の兆なりと稱して居るが、發現時の氣壓配置狀況などから見ても、早晚天氣の變化を見る形勢を示してゐるから、相當信ずることが出來るし、統計上からもこの現象の當日または翌日翌々日に、降雨のあつたことが多いと云ふ。蜃氣樓の現はれるのは次の如き理由である。その現はれる日は、大概天氣が良く風が穩かであつて、而も海水の冷たい日である。故に氣溫は岸から沖に向つて低下し、下層に冷たく上層に溫かで、從つてその密度は沖の水面に大であつて、次第に上方及び陸岸に近付くに從つて減ずる。そこ

で空氣の密度面は、水平面にあらずして曲面となり、この曲面に當る光の屈折に依つて、陸地の種々な物體の像を現はすものである。然し何れもその像の何たるかを辨ぜないのは、極めて複雜な光學現象の混在するため、像が不明瞭になるからである。砂漠などで、砂が日射に依つて著しく高温となる際に、地平線近くに僞水面を生ずる。ミラージなる現象、即ち我が國に於ける武藏野の逃水、支那の地鏡といはるゝものも、廣義では蜃氣樓と呼ばれる。

【參考】地理─逃水に。

【例句】蜃氣樓

みつけしは非番の廚夫蜃氣樓　誓子（ホトトギス）
出發をのべて海市にあひにけり　無明（ホトトギス）
太刀魚をさげて見てゐる蜃氣樓　了葉（同）
首のべて這ふ駱駝も蜃氣樓　眉峰（同）

地理

春の山　春山

【季題解説】 春になつて、木の芽が吹き草が萌え、枯色が青くなつて來て、見るからに生氣に溢れ、明るく朗かになつた山をいふ。【參照】 山笑ふ　彌生山　燒山

【例句】

春の山

寢仲間に我をも入よ春の山　一茶（旅日記）
降暮しく\けり春の山　同（同）
寢ころぶや手まり程でも春の山　同（九番日記）
手習に越しはむかしはるの山　乙二（をのゝえ草稿）
えぼし着て白川越す日春の山　同（同）
はるの山に取まかれてぞ住れける　同（同）
鶴などはとしよるものをはるの山　同（同）
春の山窓から見ても時うつる　梅室（梅室家集）
土佐が畫や春の裾山緋の袴　子規（子規句集）

六華
春の山春の水御魂鎮まりぬ　同（同）
欄干と平らに春の山低し　同（同）
春の山越えて日高き疲れかな　同（同）
下駄はいて旅する春の山路かな　把栗（新俳句）
春の山草履をはいて上りけり　村家（春夏秋冬）
痩馬に薪積みけり春の山　風光（同人）
頂も餘さぬ畑や春の山　白芽（懸葵）
春山に登りて見ゆる都かな　柳人（同）
嵯峨御室人家をかくす春の山　蛍樓（倦鳥）
春山や家根ふきかふる御社　鬼城（ホトトギス）
春山や驛の笑婦の朝化粧　普羅（同）
春山やわが手ぢからにゆるぎ岩　誓子（同）
廓の灯摧して春の東山　旭川（同）
二尊院障子開くれば春の山　草兵衛（同）
春の山土器投げの一軒家　喜太郎（續ホトトギス）

京河を隔て観音山を望む
観音の御寢姿ぞ春の山　孚江（同）
春山に木樵の居りて小石落つ　草田男（同）

春の山

廻りゐる水車の上の春の山　碧城（續ホトトギス）
春山に魁けて咲く木蘭かな　青崖（同　）
篠刈に逢うたるばかり春の山　暖光（同　）
眼の下に田園都市や春の山　水竹居（同　）
春の山重り合ひて伸びにけり　虛子（同　）

山笑ふ

古書校註

【滑稽雜談】郭煕畫譜に云、（一）春山淡冶にして笑ふが如し。（略）此說より、山笑ふを春とする也。

註（一）年浪草・栞草等は、「春山淡冶而如笑云々」の語の出典を臥遊錄とす

季題解説

春の山をいふ。「臥遊錄」に「春山淡冶にして笑ふが如く、夏山蒼翠にして滴るがごとく、秋山明淨にして粧ふが如く、冬山慘淡として眠るが如し」とあるより出てゐる。〔參照〕春の山

例句

山笑ふ

筆取てむかへば山の笑ひけり　蓼太（蓼太句集）
躊躇ひて人を笑ふ歟はこれ山　同（同　）
福の來る門や野山の朝笑ひ　一茶（一茶發句集）
馬叱つてそれから唄や山笑ふ　秋灰（ホトトギス）
三笠山笑ひゐるなる人出かな　梧生子（同　）

彌生山

古書校註

【御傘】名所にあらず。たゞ春の山と云ふ事なり。〔參照〕春の山

燒山

季題解説

山燒をした後の山のことである。〔參照〕春の山　燒野　人事　野山燒く　奈良の山燒

例句

燒山

燒山の茶屋に書きたる手紙かな　零餘子（ホトトギス）
燒山の或は見えて下り舟　稽水（同　）

燒野

燒野原　燒原　末黑野

古書校註

【御傘】やけ野・山をやく・原をやく・畑燒・荻のやけ原・草をやくなど、皆春也。

【滑稽雜談】凡そ山をやくは、葛・蕨などを茂らせんがためなり、其外、畑野原は、一切の種苗を植ゑる也。

季題解說 野燒をしたあとの黑くなつてゐる野をいふ。早春、里人たちは野や畦を燒く。これは害蟲驅除のためでもあらうが、枯草を一掃して下から萌え出て來る草の生長を容易ならしむるためでもある。また蕨などが多く生えるやうにも燒くといふ。枯草の燒け終つた後に行つて見ると、すでに靑々した草が地にはりついたやうになつてゐる。この萌草は枯草の燃えてゆく火には燒けない。少しもいためられてゐない。かうして燒いたあとの野は、いろいろの線を畫いて斷續數町に亙つてゐることもある。川べりの茨・芒などは半燒になつて殘つてゐる。これを末黑野といふ。〔參照〕燒山(サ)荻燒原(ヲギヤ ハラ) 人事―野山燒く(ノヤマ) 植物―末黑の薄(スグロノ)

例句

燒野

かけまはる夢は燒野の風の音	鬼貫	(鬼貫句選)
三月十日、ばせを翁忌、支考万句興行に		
しのゝめに小雨降出す燒野哉	蕪村	(蕪村句集)
越わびて淋しうなりし燒野哉	白雄	(白雄句集)
川越て鳥の見てゐる燒野哉	闌更	(半化坊發句集)
うしろより雨の追ひくる燒野哉	大魯	(五車反古)
火の絕えて鼠の走る燒野哉	長園	(續明烏)
やさしさは燒野に開くつゝじ哉	三園	(つゝきの原)
ひろがりて物恐ろしき燒野哉	糸女	(新俳句)
赤き雲燒野のはてにあらはれぬ	四方太	(同)
道芝のくすぶつて居る燒野哉	碧梧桐	(同)
末黑野や笠縫邑と道しるべ	子丑	(ホトトギス)

荻燒原(をぎやけはら)　荻の燒原(をぎのやけはら)

古書校註

【滑稽雜談】荻の初生黑き芽あり。是を燒原とも荻のすぐろとも云ふ。皆春也。一說に云ふ、燒けたる跡に生ずるを荻の燒原と云ふ、此の說大いに非也。荻は水草にて、おほくは江河の邊に生ず。適々陸地に生ずれども、燒野などにはあるまじきもの也。〔參照〕燒野(ヤケノ) 植物―角組む荻(ツノグム ヲギ)

春(はる)の野(の)　春野(はるの)　はるぬ　春郊(しゆんかう)

季題解說 春の初めの草木が芽ぐみ始める頃から、百花咲き散つて初夏の嫩葉の頃に至るまでの春の野原を云ふのである。〔參照〕燒野(ヤケノ) 菫野(スミレノ)

例句

春の野　春の野に躊躇て居るわかなつむ(摘み)　鬼貫　(俳諧七車)

春の野

春の野やながきかづらの裾につく　來山（續いま宮艸）
春の野や木瓜は莚の敷合せ　沾徳（俳諧五子稿）
餅酒に慣じて春の野づらかな　白雄（白雄句集）
春の野や鳥うつ人に我うとき　闌更（半化坊發句集）
鞘赤き長刀行や春の野邊　同（同　）
起ふしに跳る春の野山かな　同（同　）
春の野に蛇の出るこそ恨なれ　李夫（新　選）
春の野に心ある人の素顔かな　園女 一有妻（下　葉）（あらの）
背の子の起きて輕さや春野行く　王城（ホトトギス）
漢江の積なりてふ春野かな　魯考（續ホトトギス）

菫野（すみれの）

【季題解説】　菫、蒲公英などの咲き出でた野原のことである。菫は咲き亂れるといふ風に盛なものでなく、むしろもの蔭などに可憐な花を開くが、東南海岸地方などでは、一面に紫菫の咲いて居ることがある。四月頃の光景である。【參照】春の野、植物―菫。

【例句】

菫野　菫野や今見し昔なつかしき　几董（井華集）
菫野やいざ胡坐して笛鑽ん　闌更（半化坊發句集）

逃水（にげみづ）

【古書校註】

【東都歳事記】むさしの丶景物なり。古哥に多くよめり。春より夏へかけて、草々の風にそよぐさまをいふとぞ。積冬はなし。わけて長閑なる春の日、地氣立のぼりて、こなたより見れば草の葉末を水の流る丶如く見ゆるなり。其の所にいたりて見ればなくて、又向ふの方に流る丶がごとし。よりて逃水の名ありと。或は云、道の高下によりて八九月頃霖雨（一）の時、いつとなく水流れて草根沼のごとく、行人またならぬ道をさまよひわたるをもいふと。いづれも昔渺々たる原野の時の事にして、今は人家田畠となりて其の事なし。夫木、「あづまぢにありといふなる逃水のにげかくれても世をすごすかな　俊頼朝臣」

【註】（一）數日降りつゞく雨。（二）夫木和歌集。藤田長清の撰

春の水（はるのみづ）

春水（しゆんすい）　水の春（みづのはる）

【季題解説】　「春水滿四澤」と古詩にもある通り、春の溪谷、河川、湖沼などに滿々と湛へてゐたり、或は豐かに流れたりする水のことをいふ。春は雨

量も多く、山々は雪解したりして一體に水量が多い。殊に冬涸のあとであるから、一層春の水といふ感じが深いのである。また今迄固定してゐた冬の水がぬるみ初め、せせらぐやうなのんびりした感じもあらう。ささにごる春水、噴きでる春水なども詠まれる。〔參照〕水温む

例句

春の水

春の水ところどころに見ゆる哉　鬼貫（鬼貫句選）
春の水輕く能書の手をはしらす　其角（五元集拾遺）
きのふけふ音ぞきこゆる春の水　杉風（杉風句集）
物ゆかし魚の良みる春の水　沾德（俳諧五子稿）
・春の水山なき國を流れけり　蕪村（新選）
橋なくて日暮んとする春の水　同（蕪村句集）
春水や四條五條の橋の下　同（同）
足よはのわたりて濁るはるの水　同（同）
春の水背戸に田作らんとぞ思ふ　同（同）
春の水にうたゝ鵜鷺の稽古哉　同（同）
蛇を追ふ鱒のおもひや春の水　同（同）
重箱を洗ふて汲むや春の水　同（蕪村句集拾遺）
烏帽子着てたれやらわたる春の水　同（題林集）
小舟にて僧都送るや春の水　同（蕪村遺稿）
立雁の足ぬとよりぞ春の水　同（同）
湖や堅田わたりを春の水　同（同）
里人よ八橋つくれ春の水　同（同）
春の水すみれつばなをぬらしゆく　同（同）
晝舟に狂女のせたり春の水　同（同）
ながれ來て池に戻るや春の水　同（同）
ながれ來る清水も春の水にいる　同（全集）
・辨當にすくひあげけり春の水　同（落日庵句集）
古池の水まさりけり春の水　同（同）
渡し場や片足ぬらす春の水　同（同）
堀川や家の下行春の水　太祇（太祇句選）
行舟に岸根をうつや春の水　同（同）
人をとにこけ込龜や春の水　同（同）
しづかさや雨の後なる春の水　召波（春泥發句集）
まな鶴をほとりの友や春の水　同（同）
蛙啼や水玉うかぶ春の水　樗良（樗良發句集）
日は落て増かとぞ見ゆる春の水　几董（井華集）
さす棹の筝にあるや春の水　同（同）
五器皿を洗ふ我世やはるの水　同（同）

夕されは千鳥とぶ也春の水　几董（井華集）
磯山や小松が中をはるの水　同（同）
野も山も冬のまゝじやに春の水　同（同）
雪に折し竹の下行春の水　同（同）
春の水藻臥の鷺も得たりけり　白雄（白雄句集）
鳥の羽をゝれば行なりはるの水　暁臺（暁臺句集）
春の水東寺の西にみる日かな　同（同）
うと／＼し日の影みえて春の水　同（同）
頭巾着て誰やらわたるはるの水　同（同）
めぐり来て襟にかゝる春の水　同（同）
影とらむとすればはるの水黄なり　同（同）
鶏のよごれ来にけり春の水　闌更（半化坊發句集）
あかねさす[illegible]を出けり春の水　同（同）
底のなき柄杓流れて春の水　同（同）
旅僧を布袋かと見し春の水　巣兆（曾波可理）
曲らずにくわゐの角や春の水　同（同）
炭賣と手に手を取りて春の水　同（同）
光琳が畫に汲るゝやはるの水　成美（成美家集）
すぢかひに寝てこ見ゆるや春の水　同（同）
人うつす水のこゝろもはるなるか　同（同）
はるの水まがり／＼のおもしろや　同（同）
家形に月のさしけり春の水　一茶（旅日記）
とく／＼と身の春さそふ山水哉　乙二（をのゝえ草稿）
隣から南へむくや春の水　同（同）
あすの夜は滿月さそへはるの水　同（同）
春の水渡るところやかゞみ山　蒼虬（蒼虬翁句集）
今おりた鳥も見えけり春の水　同（同）
さゞ浪に折ふしなるやはるの水　同（同）
馬殿も一枚まゐれ春の水　梅室（梅室家集）
たふれ木に添てめぐるや春の水　同（同）
日あたりに小魚浮けり春の水　卜水（竹友）

代田南山際望
鳥寒し生駒につゞく春の水　移竹（其雪影）
鐘聲は八ツの軒端ぞ春の水　淡々（淡々句集）

三月三十日八軒屋に至る舟中吟
春の水出茶屋の前を流れけり　子規（子規句集）
下總の國の低さよ春の水　同（同）
春の水一枚石をくゞりけり　鼠骨（新俳句）

木屋町や裏を流るゝ春の水　碧梧桐　（同）
春の水綺麗な砂を吹きあげる　紅緑　（同）
山越えて山無き國や春の水　露子　（春夏秋冬）
春の水めぐるや石の橋柱　青々　（妻木）
針草の先抽ん出ぬ春の水　幸哉　（懸葵）
春水やふるへうつれる家の影　宵曲　（ホトトギス）
嘴に春水こぼす荒鵜かな　梅史　（同）
訪ふ家の見えて渡舟や春の水　枯青　（同）
春の水椿流るゝ影砂に　蕪翠窗　（同）

蛇笏山廬を一人訪ふ

春水を渡りし道の覺束な　たけし　（同）
春の水苔石まろく重れり　發志路　（同）
春水や毛氈かへて詣舟　秋櫻子　（同）
春の水畔の隙より見ゆるかな　北浪　（同）
春水に浮き重なれる柄杓かな　紅醉　（同）
春水に揺れさゝやけるまさごかな　朝暮　（同）
泥うすくかぶれる石や春の水　怒愛庵　（同）
春水を溯るがごとき杭かな　誓子　（同）
舷の李王殿下や春の水　緑童　（同）
春水やもつれほどける鯉の群　旭川　（同）
岨下や馬桶にうくる春の水　夢筆　（同）
春水や上の茶屋より流し屑　素光　（同）
濯女の身づくろひする春の水　王城　（同）
流れたる杓子追ひけり春の水　共人　（同）
一枚の楷捨てある春の水　梓女　（同）
ほそ〴〵と添水にいたる春の水　播水　（同）
春水やつらなり渡る牧の馬　草童　（同）
裏木戸を出て春水に到りけり　くに女　（同）
疊より高く春水いゞやかに　蚊杖　（同）
あてもなく下りし渡舟や春の水　白毫　（同）
春水に置けば流るゝ手桶かな　銀河　（同）
平なる石より落つる春の水　泊月　（續ホトトギス）
筧より筧に落つる春の水　同　（同）
かけ下りて春水近くとゞまりぬ　素方　（同）
春水や顔を並べて子供ども　蚊杖　（同）
片手桶かたむき浮ぶ春の水　旭川　（同）
春水の藻にぶらさがる蝦もあり　播水　（同）
春水に鯉のはねたる音ならん　海人　（同）

春の水

春水の上春水の筧かな　　康之（續ホトトギス）
舟をやる春水ひろきところかな　　莫々（同）
春水に橋をかけんと思ひけり　　夢香（同）
大堰やひろ／＼落つる春の水　　泊月（同）
舟へ下る梯子ありけり水の春　　煤六（同）
硯を洗ふ
墨滓のとけてくもりし春の水　　椎花（同）
牧場の中を流るゝ春の水　　砂土（同）
春水をまたいで上る座敷かな　　上草（同）
春水にひたりてかゝる竹の橋　　蟬人（同）
ひろごりて淺くなりたる春の水　　蕉水（同）
放生の魚沈みゆく春の水　　桃太（同）
うつりたる鹿のあゆめる春の水　　紅蘆（同）
春の水獺の潜けば黄となんぬ　　青畝（同）
春水にはひりて垣をゆひにけり　　未草（同）
一つ根に離れ浮く葉や春の水　　虚子（句集虚子）
春水や菖蒲に似たる唯の草　　同（同）
春水に漂うてをる蘆かな　　同（續ホトトギス）
春水にひたりて咲きぬ馬くはず　　同（同）

水温む（みづぬるむ）

古書校註【御傘】水のぬるむ、春也。清水ぬるむも春也。問ふて云、結ぶ清水のぬるむと云ふ句は春か夏か。答へて云、春也。その故は、水むすぶは雜、清水むすぶは夏也。水ぬるむは春也。今結ぶ清水のぬるむは、去年の夏つめたかりし清水の、この春ぬるむといふ事也。
【滑稽雜談】淮南子に曰、積陰の氣水となる。又曰、それ水は冬に嚮へば則ち凝りて冰となり、春を迎ふれば則ち泮けて水となる。（略）總じて、江湖の河水池井までも、陽和に感じて溫柔なるを云ふ也。

季題解說　冬の酷しい寒さが漸くにゆるんで來て、暖かさうな太陽の光が水に射し込んでゐる水邊に佇つて眺めると、その水の色の濁り方といひ、動き方といひ、何となく少し溫まつてきたやうな感じがするものである。これを水ぬるむといふのである。實際手をつけ口に含んで見ると、寒中の水とは違つて溫んでゐる。野澤の水など、底の方からぶつ／＼泡立つてくる。住んでゐる魚介の類にも亦動きが見える。〔參照〕春の水。

例句

水溫む

流れ合うてひとつぬるみや淵も瀨も　　千代女（千代尼句集）
すゑの世にながれてぬるみ增りけり　　同（同）

水ぬるむ頃や女のわたし守　蕪村（全集）
紅絹裏のうつればぬるむ水田哉　蓼太（蓼太句集）
淵の水深きはふかくぬるむ哉　白雄（白雄句集）
鷺烏雀の水もぬるみけり　一茶（題叢）
汲に出て髮とく水のぬるみ哉　文水（類題發句集）
ぬるみ來る筧の水や比丘尼御所　一標（新選）
遣水もぬるみ來にけり東より　多少（同）
ぬるみけり京の女の化粧水　朧麓（新俳句）
水日々に温みて固し父の辭意　萬有（懸葵）
温む水山容深く浮びたり　衣沙櫻（ホトトギス）
水温む泥に茜や菖蒲の根　泊雲（同）
底の磯のゆるぎそめけり水温む　同（同）
逆る筧の水の温みけり　鈴和尙（同）
流れ出でひろごる藍や水温む　青廷（同）
藥殼茶殼と捨てゝ水温む　風信子（同）
奥書院障子の外の水温む　北人（同）
頃の邊やぬるみそめたる小田の水　風生（同）
舟べりにかたよる子等や水温む　牛莊（寶ホトトギス）
江畔にいくさは歇みて水温む　黑潮（同）
水温む利根の堤や吹くは北　虛子（句集虛子）

春(はる)の川(かは)

春川(はるのかは)　春江(しゆんかう)

古書核註【栞草】花散りてうかめる躰、雪きえて水まさりし躰などよむべし。

季題解説 春になつて、山々の氷雪が漸く解け始め、それが一時に流れ出て水嵩を增した川である。

例句

春の川

ちる花の外は流ずはるの川　桃隣（古太白堂句選）
枕する春の流れやみだれ髮　蕪村（全集）
ひるからは水ますものぞ春の川　蒼虬（蒼虬翁發句集）
一桶の藍流しけり春の川　子規（子規句集）
燕のうき木にむれる春の川　桃雨（新俳句）
春の川淺きに魚を捕へけり　呑仙（春夏秋冬）
春の川游魚左し右すかな　月斗（同人）
春川に舟新しき鵜飼かな　東城（ホトトギス）
春の川棹さし遊ぶつなぎ舟　成外（同）
杭打つや濁り一筋春の川　王城（同）
春川に沿うて舊師の草廬かな　文堂（同）

春の川　春江や半旗かゝげて渡舟守　李王坧殿下薨去　綠童（ホトトギス）

春の池(はるのいけ)

【季題解説】冬涸れきつてゐた池が、雪解水や春雨でなみなみと水を湛へて來る。また冬も涸れなかつた池にしても、水が豐かになり、何となく廣々とした感じをもつて來る。春といふ氣持が池一面のどこかに漂つてゐるやうに思へて來る。春の池が季題となる所以である。

【例句】
春の池　三尺の鯉はぬる見ゆ春の池　仙化（續猿蓑）

春の湖(はるのうみ)

【季題解説】春の海や春の池などと同じやうに、湖も春には春の特別の心持を現はして來る。その、どことなく春らしい感じを浮べて來た湖水をいふのである。【參照】春の海(ハルノウミ)

【例句】
春の湖　垣越しに春の湖見て居たり　翠畝（續ホトトギス）

春の海(はるのうみ)

【季題解説】三春の海である。一般に穩やかに凪いで、麗日に照されるさまなど長閑に美しい。且つ多くの魚類がその中に産卵し孵化し發育する。陸や島々の綠も次第に加はり、陸の色、海の色と相映發して、一層悠長な感じを起さしめるものである。汽船や漁舟の往き來も頻繁となることも自ら想像せられる。【參照】春の湖(ハルノウミ)

【例句】
春の海
などきせぬ岩に烏帽子を春の海　言水（俳諧五子稿）
帆の影にいとふ夕日や春の海　桃隣（古太白堂句選）
春の海終日のたりのたり哉　蕪村（古選張瓢）
むらさきに夜は明かゝる春の海　几董（井華集）
はるの海の眞中有て目覺たり　曉臺（曉臺句集）
春の海邊何に集る人一里　同（同）
古沓の唐までも行けはるの海　成美（成美家集）
春の海淺きとまでに思ひけり　蒼虬（蒼虬翁句集）
島々に灯をともしけり春の海　子規（子規句集）
春の海に橋をかけたり五大堂　漱石（新俳句）
春の海蛤の種撒きにけり　一道（同人）
街道の松に帆を干す春の海　煙雨樓（懸葵）

帆かげれば鷗も黑し春の海　一巴（ホトトギス）
春海や大東ヶ崎桃の村　一水（同）
擶やめてもとの漁師や春の海　朴魯植（同）
この島をぬければ春の海廣し　石郎（同）
船室の鏡にうつる春の海　三堂（同）
泥海と春の海とは沖にあふ　沙美（續ホトトギス）
起重機の手擧げて立てり海は春　誓子（同）
海は春入渠の船のうすき煙　同（同）

春潮（しゅんてう）　春の潮（はるのしほ）

季題解說　春になると、日本近海は北西の季節風が止んで海が穩かになつて來る。そして潮の色が次第に淡い藍色に變つて來て、海水が澄んで美しさを增してくる。特に干滿が眼立つて大きくなる。滿ちた時には、石垣や岸の思はぬ高さまで潮が昇つて來る。潮が影れて來ると云ふ感がする。また干潮になると、干潟を廣々と殘して遠くに退いて行く。潮が落ちて行つたといふ氣持がする。從つて狹い灣內や瀨戶では、激しく音を立てて流れもする。瀨戶內海では殊にこの春潮の特長が顯著である。海上生活者は、陸上の人々が植物の成長を見て春を感ずるやうに、春の潮の變化に接して、はつきり春を意識すると言つてゐる。〔參照〕春の波（たゞ）

例句

春潮

緣の下に春の潮さす生簀かな　秋竹（春夏秋冬）
蛸壺につくほゝづきや春の潮　士栖（同人）
春潮や障子の內の鏡立　亞石（ホトトギス）
春潮に浮びて險し城ヶ島　秋櫻子（同）
　函館港にて
春潮の昆布流るゝくひぜかな　豫風（同）
春潮にゆれつゝつゞく小魚かな　爽雨（同）
舷をこぼしげし蟹や春の潮　鳴子（同）
春潮につひにのりたる芥かな　泊村（同）
傾けば鳴る船底や春の潮　方舟（同）
春潮の滿ち汚れたるところかな　同（同）
春潮をかぶり峙つ沖つ岩　弓人（同）
春潮に流され移る地曳かな　怒愛庵（同）
春潮や生簀の外の遊び魚　耿陽（同）
江の島にありし句會や春の潮　たけし（同）
　早鞆[illegible]
春潮に皆帆をあげて落し來る　東洲（同）
早鞆の渦見に來たり春の潮　筑紫郎（同）

春潮

石段の上に舳や春の潮　晋平（續ホトトギス）

和歌浦にて

春潮や望海樓へ岸つたひ　晴虹（同）

春潮や絲のやうなる海鰻の子　耿陽（同）

真鶴岬

春潮に海女の足掻きの見えずなる　誓子（同）

春潮にころがりもする海膽の毬　今夜（同）

春潮の磯ぎんちやくは安らかに　同（同）

春潮に海牛といふもの這へる　同（同）

近づきし船の高さよ春の潮　里石（同）

春潮や帰に來てゐる門司市長　方舟（同）

春潮やたゝみのごとき大藻屑　章（同）

海女沈むいとまとうねり春の潮　王城（同）

仔をつれて海豚あそべり春の潮　耿陽（同）

春潮や巖の上の家二軒　虚子（句集壺子）

久能山

御廟所や春の潮の音の上　同（同）

春の波（はるのなみ）

春の浪（はるのなみ）　春の河浪（はるのかはなみ）

季題解說　春の波浪は、たとへば沖で大きく搖れてゐるにしても、磯や汀などにひた〳〵寄せては返ししてゐるにしても、いつものんびりした感じ、春の海、春の潮などと相通ずる感じの伴ふものである。また春の河波も詠まれていゝであらう。【参照】春潮（ハルシホ）

例句

春の波

澪竹のゆれてはしざり春の波　鷺石（ホトトギス）

春の波砂にひろごり消えにけり　禾風呂（續ホトトギス）

春の田（はるのた）

春田（はるた）

季題解說　これから鋤き返されようとして未だ紫雲英の咲き擴つてゐるところもあらうし、荒く鋤き起されたところもあらうし、またさゞ波立つて水田が輝いてゐるところもあらうし、といつたやうな頃の田である。【[illegible]】

苗代（ナハシロ）　人事—田打（タウチ）

例句

春の田

春の田へすゝむで行や山の水　梅室（梅室家集）

雷去りし春田の畦の藥鑵かな　呂仙（ホトトギス）

みちのくの伊達の郡の春田かな　風生（續ホトトギス）

ふむ畦の平らに廣き春田かな　三平（同）

雨班の弓的立ちし春田かな　風骨（同）

苗代（なはしろ）　苗代田（なはしろだ）　苗田（なへた）　代田（しろだ）

古書校註

【御傘】春也。水邊に非ず。植物に二句去る也。誹に、苗代を城の字にいひかけたる句ならば、居所に二句也。

【滑稽雜談】題林集(一)に云、苗代と云ふは、春の田を作らんとする時、田をうちかへして、種を種井に漬しつゝ、蒔くべき時になりぬれば、田の中によき所をしめて、苗代垣をしまはし、水まかせ、注連はりて(略)○新古今抄に云、種井より取出して、田に蒔きてはやすを、苗代と云ふ也。代とは苗を生する故也。今時も鷹場に鶴の居る所を鶴の代と云ふ心也。

【栞草】苗代と云ふ名は、もと種をおろす處の田をさして云ふ也。代とは七十二歩を千代といふと有りて、田畝の數也。五百代・千代など云ふ代に同じ。さて轉りて、春田に水を引き種蒔くことの名目となれる也。

註 (一) 和歌題林集。一條兼良の撰。

季題解説　廣く田に植うべき稻苗を、まとめて仕立てる田を苗代といふ。雪のとける頃、すでに第一回の田打を行ひ、その後數回再耕して十分に土を打返して置く。そのうちに、種浸しをやる日頃に、苗代の畦を塗り初め、水を引き、馬を入れ、或は人力によつて代搔きを行ひ、古稻株を取り捨て、施肥を行ひ、土塊碎きをして十分に混和し、二三日放置して田の土の沈靜を待つ。種俵の水揚げをすると同時に、苗代の短册作りを始める。短册は幅三尺許り、溝幅約一尺、深さ四五寸である。代面が適度に土の固結した後、更に周圍と代面の手直しを行ひ、五寸幅、三尺くらゐの板をもつて代面を平坦にし、水を張り、一兩日經て播種を行ふ。この播種には、鎭壓法と水播の二通りがある。五月一日前後に代面の水を排除し、一日乾して、芽出し種を、坪當り約五合、丁寧に粗密なく播きひろげ、左官の鏝をもつて磨りつけ、淺く埋めて水を張りこむのが鎭壓法で、水播は代面の水を排除せずに、種籾を笊の箕に入れ、手で摘んでは水面にばら蒔く。播種後は、雨や氣溫の冷たい日は水を深くし、氣溫の高い時は淺くし、かうして四五日立つと幼芽が綠色を呈し、短册形に青々とはつきりと色づいて見えて來る。次で「水干し」を行ふが、これも溫暖無風の日以外は行はない。これを繰返すうちに、時候も暖くなり、苗も十分伸びて二三寸となるが、この時はなるべく水を淺くして適宜水の交換を行ふ。播種後三十日を經過すると、闊い四五寸の青々とした苗が出來あがる。風が吹けば美しく吹きなびく立派な早苗となつて來る。この頃また螟蟲豫防のために、硫酸ニコチンの液を散布する。これを二回くらゐ行つて、三四日後に田植をはじめる。以上が苗代の一代記である。苗代には、はじめ雀などをおどすために、やはり秋のやうに鳥威しをつけることがある。苗代の青々とした頃、他の廣い田は一面にもう準備が出來て、いつでも植ゑられるやうに水を湛へて居

る。〔參照〕春の田

例句　苗代

なはしろに老のちからや尻たすき　嵐雪（玄峰集）
苗代やうれし顔にもなくかはづ　許六（五老井發句集）
水澄で籾の芽青し苗代田　支考（蓮二吟集）
苗しろを見て居る森の烏哉　同（同）
苗代や鞍馬の櫻散にけり　蕪村（蕪村句集）
苗代にうれしき鮒の行衛哉　同（五子稿）
櫻ちる苗代水や星月夜　同（蕪村遺草）
苗代や立ゐがめても伊勢の神　同（半亭叢書）
苗代や吹く竹掻のはかりごと　同（落日庵句集）
魚ひとつ苗代水を掬すれば　同（同）
苗代や浮世の闇の中に又　同（同）
苗代や日ならで久も通る路　太祇（太祇句選）
宵月や苗代水の細き音　召波（春泥發句集）
里の犬苗しろ水を嗅けり　同（同）
松遠し苗代水に日の當る　同（同）
苗代や螢もいまだ側て居る　也有（蘿葉集）
なはしろに鴫追るゝ礒田かな　白雄（白雄句集）
苗代のかけ水はかる五十串哉　同（同）
行水や苗代小田にせきそむる　同（同）
いとけなき垣や苗代の薄みどり　同（同）
我これたのも苗代と成にけり　一茶（七番日記）
苗代は庵のかざりに青みけり　同（一茶句帖）
苗代の風に力はなかりけり　蓼茶（文車）
苗代や東寺の塔の水鏡　朱廸（類題發句集）
苗代に仁王のやうな足の跡　野坡（同）
苗代や田毎を老が杖の先　沾峨（卅眉庵）
しこまれて苗代馬の歩み哉　山店（小文庫）
空寒し苗代水の澄むうちは　市仙（古今句鑑）
市中や苗代時の鯰賣　子規（子規句集）
御影供このに十日の雨や苗代田　同（同）
苗代や許六の蛙史邦の繪　同（同）
子鴉や苗代水の弱つくろひ　鳴雪（新俳句）
苗代に夕風わたる綠かな　同（同）
たのもしき苗代水のあふれかな　三川（春夏秋冬）
虹の輪の下の苗田のみどりかな　雨六（懸葵）
往診や苗代風にま晴がり　みづほ（ホトトギス）

提灯に水おとなしき代田かな　青畝（同）
苗代や愛宕うつして水ゆたか　三山（同）
百姓の布子甚平や苗代寒　馬塘（同）
苗代に大きな星の流れけり　素人（同）
苗代の水打つてゐる茶店かな　草洲（同）
ゆたかなる苗代水の門邊かな　たかし（續ホトトギス）
ぐみの葉の流れこみくる苗代田　蚊杖（同）

春の堤（はるのつつみ）

季題解説 春色又は春光のみなぎつた土手を云ふ。陽炎も燃えてゐるであらう。摘草の人たちも散らばつてゐるであらう。そこに腰をおろして打仰ぐ空には雲雀が囀つてゐるであらう。

春の泥（はるのどろ）　春泥（しゆんでい）

季題解説 雨中または雨後の路上などが、往き來のためにぬかるみを生ずるのである。敢て路上に限らず、田畑の畦、橋上、その他凡そ人の通り踏むところには生じるのである。泥は四時いつでもあるわけであるが、春は泥土おのづから暖味があつて特別の生彩を生み、何處となくてらてらするやうな感じがあり、また丁度雨が多かつたり、凍解け、雪解けなどで泥濘もはげしかつたりするので、春の泥には特別の季感が伴ふのである。

例句 春の泥

春泥や庵看板ひとつらね　犀州（同人）
包より林檎ころげぬ春の泥　こう女（同）
家の前春泥となる轍かな　蕗翠窟（懸葵）
苗木選る膝に乾くや春の泥　隱仙（ホトトギス）
朝鮮人
春泥に舟にかも似し木履かな　橙黄子（同）
大寺の横春泥の大路かな　蒼古（同）
春泥にうつりて止る電車かな　螢泣（同）
春泥に光りて月は五六日　空茶（同）
新しき足袋も足駄も春の泥　よりこ（同）
春泥や座敷へ運ぶ金屏風　風平（同）
陋巷や障子のすその春の泥　櫻坡子（同）
春泥をつけて小さんの俥かな　一水（同）
ちやん／＼こ著たる小犬や春の泥　感來（同）
春泥に落せし葉書ポストまで　蛙九坊（同）
春泥や小褄からげて一渡り　さくら女（同）

春の泥

春泥やこの路地なべて友禪屋　九老谷（ホトトギス）
春泥を灯に照らしつゝ案内かな　麥村（同）
春泥や低く垂れ行く小提灯　水竹居（同）
落ちて來し飛行機や春の泥　翠山（同）
春泥の屯田通長きかな　ひろし（續ホトトギス）
春泥に蛇嫌しく瀬田の街　都穗（同）
ぽつくりのまはりいつぱい春の泥　小蔦（同）
人消えし廻り扉や春の泥　鹿郎（同）

冱返る（いてかへる）

凍返る（いてかへる）

季題解說　春のはじめ、一旦暖かくなりかけた氣候が、何等かの原因で急にまた寒くなつて、緩んだ地上の凍が再び元に返り、解けた水がまた結ぼれなどすることをいふのである。【參照】時候　冴返る

殘る雪（のこるゆき）

雪殘る（ゆきのこる）　殘雪（ざんせつ）　去年の雪（こぞのゆき）

古書校註

【御傘】雪間・雪のひま・雪の絶ゆる・殘る雪、皆春なり。雪のなごり・雪の雫、冬のよし云ふ人あれどもわろし。雪の名殘と云ふも殘雪の類也

【山之井】帷子雪の村消を、めゆひのかのこまだら（一）と見たて、餅雪の殘れるを、日の鼠（二）のかぶりさしといひたて、山姫の化粧もところはげ、山姥の額綿（バケ）（三）もたぐられけんなどもいひなし、又軒の雪にめに見えぬ鬼瓦も化をあらはし、つくる雪佛は涅槃をまたではてにけりともいへり。

註（一）日かげにて鹿子の斑ある日（二）日月を黒白の鼠に喩へる佛典の故事あり。（三）額帽子。

季題解說　春になつてもまだ殘つてゐる雪のことである。本來は一冬中雪の消えないでゐる北國や、裏日本で初めて言へることで、本當の殘雪といふ感じはそんな地方でなければ味はへないと思はれるが、しかし冬季雪が時々降るくらゐの比較的暖い地方においても、裏庭とか、藪陰とか、乃至は山の岩陰、樹陰などに幾日も／＼消え盡さないで殘つてゐる雪を、時候はもう春になつてから見かける場合などにも殘雪と詠んでもいゝ。たゞ雪國の殘雪とは感じが少し變つたものであるといふだけである。梅見に行つたり、野を燒きに出かけたりして、思はぬところに、ふつくらと塊つて殘つた雪、まだら／＼に殘つた雪、或は鏡のやうに、或は薄汚れして殘つた雪を見かけるとか、また麓からの春色にだん／＼と追ひあげられた遠い連峯の殘雪を眺めた時などは、この上なく趣深く思へるものである。【參照】雪間　雪崩　雪解　雪解雫　冬　雪

例句　残る雪

木枕の垢や伊吹に殘る雪　丈草　（丈草發句集）
踏きやす雪も名殘や野邊の供　去來　（去來發句集）
北山やしさり／＼て殘る雪　太祇　（太祇句選）
家遠き大竹はらや殘る雪　同　（同）
消のこる雪にもあそぶ子供哉　士朗　（枇杷園句集）
雪國の雪もちよぼ／＼殘りけり　一茶　（七番日記）
ふんばつて解ぬ氣になれ松の雪　乙二　（をのゝえ草稿）
舟々の小松に雪の殘りけり　且藁　（春日）
雪殘る頂一つ國境　子規　（子規句集）
藪陰や踏みかたまつて殘る雪　錦山　（新俳句）
殘雪に猶ふる雪のつもるかな　吾空　（春夏秋冬）
殘雪の大風に落つ古巣かな　三幹竹　（懸葵）
殘雪や城の中なる大藁屋　花囚　（ホトトギス）
殘雪や獸の如き谷の柚　蕉迪　（同）
荒礒やたほ雪殘る岩一つ　花蓑　（同）
京の春鞍馬に雪の殘り居り　秋菊　（同）
山形にて
殘雪の堆くある玄關かな　董糸　（同）
寂光院
殘雪や阿波内侍の墓どころ　蚊又　（同）
白樺やのこる古雪萱の中　誓子　（同）
曲り家の南部の屋根や雪殘る　水竹居　（同）
逢坂にかゝれば雪の殘りをり　紅朗　（續ホトトギス）
一枚の餅の如くに雪殘る　茅舍　（同）

雪間（ゆきま）

雪のひま（ゆきのひま）　雪の絶間（ゆきのたえま）

季題解説　冬の間に積んだ雪が、春になつて處々融け消えた隙間を謂ふ。山岳の雪が解けそめると、あちこちの山肌が見えてくる。野原の雪間には、既に芽吹いてゐる草（これを雪間草といふ）がある。滿洲などの大平原では、起伏のあちこちに出來た雪間を放牧の群羊や豚が漁り移つてゐる。

【參照】殘る雪

例句　雪間

杉起て畠を見する雪間かな　其角　（五元集拾遺）
草莖を包む葉もなき雪間哉　同　（五元集）
山鳥の樵を化す雪間かな　支考　（蓮二吟集）
富士を見ぬとしを我目の雪間かな　也有　（蘿葉集）
梅折に飛ばるゝほどの雪間かな　同　（[illegible]の[illegible]）

雪間　春いまだ田毎の雪間〳〵かな　白雄（白雄句集）
馬の尾をむすび揚たる雪間哉　曉臺（曉臺句集）

雪崩（なだれ）　雪なだれ

古書校註　【栞草】春暖により、山より雪のとけ落つるを云ふよし、北越雪譜（一）にみえたり。

註（一）鈴木牧之の著。

季題解説　冬の積雪が春暖に逢うて下から融けはじめ、重量に堪へずして山上から崩れ落ちるのを謂ふ。谷に起る雪崩、山肌をすべる雪崩と、地勢や氣候の變化から、いろ〳〵な種類の雪崩がある。北國山岳地帶での雪崩は、幅五六尺から何十尺と云ふ大小無數の積雪が、大きな響を立てて木を折り石を倒し、雪煙をあげつゝ山肌を崩れ落つるのであつて、天日も爲に暗くなると云ふ實に凄まじいものである。そして時には川を溢らせ、家を埋め、交通を杜絶せしめ、旅人の命を奪つたりすることなどがある。〔參照〕殘る雪ノコルユキ、雪解ユキゲ

例句
雪崩
雪なだれ黒髪山の腰は何　桃隣（古太白堂句選）
雪なだれ妻は爐邊に居眠れり　素堂（ホトトギス）
内陣をふるはせ落ちし雪崩かな　白文地（同）
鹿垣ををどり越えたる雪崩かな　岫雲（同）
雪崩して徑の絶えたる家見ゆる　眠石（同）

參考　雪崩には三種のものがある。風雪崩・底雪崩・氷雪崩等が夫れである。風雪崩は山腹に固く凍つた根雪の上へ更に新らしく粉雪が積つたとき強風が吹くと、其の積んだ粉雪が全體として山腹に沿ふて滑り落ちるものである

底雪崩は山腹に積つた雪が春の暖氣に逢ひ地面が暖まるため底部が先づ解け、ために全體として山腹を滑り落ちるものである。此の種の雪崩は頗る危險であり時としては大被害を生ぜしむる。春季裏日本の沿岸などに此の種の雪崩による被害を度々生ずる。

氷雪崩は氷河が底部から解けて滑り落ちるものであつて前者同樣頗る危險なものであるが我國には氷河が存在せぬ故之れを見ることが出來ない。

雪解（ゆきどけ）　雪解（ゆきげ）　雪解水（ゆきげみづ）　雪汁（ゆきじる）　雪の水（ゆきのみづ）　雪解川（ゆきげがは）　雪解野（ゆきげの）　雪解風（ゆきげかぜ）

古書校註　【御傘】雫と云ふも雪げの水と同じ。雪汁も春也。冬も雪汁はありといへども、大法、春ならでは消えぬものに定りたれば、雫も汁も皆春也。

【滑稽雑談】　奥儀抄に云、ゆきけの水は雪消水也。又雪げの雲は別義也。雪の降らんとて黄雲のたつ也。（略）私云、（一）雪消をけと略して清めるなり、雪氣は濁るべし。

【栞草】　貞享式（二）に、解くるを春とし、消ゆるを冬として分たれしは泥まれたると云ふべし。冬の内にても雪の消えぬにはあらねど、大かた春氣に催されて、冬の氣の去りゆく天地の理りより云々とにて、又打ちまかせて雪消・雪解など云ふ時は春とし、其の取りなしによりては冬と定むべし。既に古式には、解くるも消ゆるも春になしたり。もと同じことなれば、解くる・消ゆるの詞を以て分つべきことにあらず。

註　（一）其諺の自説。（二）各務支考の著。

季題解説　雪國では降り積んだ雪が容易に解けない。それが春になつて暖氣が加はつて解け始める。普通暖國では降つてはすぐ解けるので、この現象は見られない。春の日がきらびやかに照つて、雪解雫が軒に煩りなどするのは印象的である。参照　残る雪（ノコルユキ）　雪解雫（ユキゲシヅク）　雪しろ（ユキシロ）

例句

雪解

すべらすに後さす見よ雪の水　其角（五元集拾遺）
北國の賣家見する雪消哉　沾徳（俳諧五子稿）
雪解や妹が炬燵に足袋かたし　蕪村（蕪村遺稿）
雪どけやけふもよしのゝ片便　同（全集）
色〳〵に谷のこたへる雪解かな　太祇（太祇句選）
踏つけし雪解にけり深山寺　同（同）
白雲や雪解の澤へうつる空　同（同）
老の身のことしも雪に消まけぬ　也有（蘿の落葉）
雪解やや〳〵四百八十寺　蓼太（蓼太句集）
朝駒の朝川わたる雪解かな　白雄（白雄句集）
雪解て沖中川を行方かな　曉臺（曉臺句集）
ゆきとけや深山曇を啼鳥　同（同）
月曇る端山の雪解なくからす　同（同）
白波となり行磯の雪解哉　闌更（半化坊發句集）
雪解迄は往來の踏し野竹かな　同（同）
雪消えて麥一寸の野づら哉　同（同）
山里は麥飯すゝむ雪解かな　巣兆（曾波可理）
雪解や穴のきつねの宦上り　同（同）
里の子が枝川作る雪解哉　一茶（一茶句帖）
門前や子供の作る雪解川　同（同）
世にすめばむりにとかすや門の雪　同（鴫の井）
雪解けてくり〳〵したる月夜哉　同（七番日記）
沙汰なしに雪のとけたる山家哉　同（同）

雪解

片隅に鳥かたまる雪解かな　一茶（七番日記）
庵の雪下手な消やうしたりけり　同（同）
十ばかり鍋うつむける雪解哉　同（同）
門の雪なぶりごかしにされにけり　同（同）
雪どけや鷺が三疋立日に　同（同）
町住や雪とかすにも錢がいる　同（同）
嫁れぬうちに消けり門の雪　同（九番日記）
門畑や米の字なりの雪解水　同（一茶發句集）
雪解や門は雀の十五日　同（嘉永版發句集）
鍋の尻ほしならべたる雪解かな　同（同）
雪どけや近をとまする妹が家　乙二（をのゝえ草稿）
雪解や障子まばゆき横日影　津宜（古今句集）
雪佛きえてあとにも佛の座　重供（毛吹草）

廻文

松の木の雪やはやきゆ軒の妻　秀重（同）
雪解や頭あげたる蕗のたう　青蘿（文車）
七草や戻りに雪の消て又　一瓢（恒議）
雪解や殺生石のあたりより　兀南（春遊）
雪水や濁りて青し萌る草　桃人（安永六）
大原や落る野川の雪の水　伊珊（淡路嶋）
古宮や雪汁かゝる獅子頭　釣雪（曠野）
雪汁や墨染洗ふ山法師　山本氏（大三物）
はしためのかもじ干したる雪解かな　子規（子規句集）
雪解に馬放ちたる部落かな　同（同）
捨舟のひとり流るゝ雪解川　非風（新俳句）
雪解の水濁りたる筧かな　不迷（同）
雪解の北に流るゝ大河かな　花笠（春夏秋冬）
戸にもたす橇の乾きや雪消風　路雪（同人）
藁沓の中に雪汁まはりけり　涼舟（同）
義仲寺の甍に日ある雪解かな　素史（倦鳥）

吉野山中

曇なく夜山は雪の解くるなり　華水（同）
詩仙堂の前の小溝の雪解かな　鼓竹（同）
雪解や西日かゞやく港口　石鼎（ホトトギス）
雪解けて太湖の蝦を取る日かな　禪丈（同）
雪解のはねとぶ泥や松並木　泊雲（同）
大霜の變へる雪解畠かな　同（同）
雪解や渡舟に馬のおとなしき　蛇笏（同）

老いし両親善光寺へ詣る

雪解けし國の佛へ詣るかな　へちま（同）
流し木の岩躍り越えぬ雪解谷　余石（同）
雪解湖の濁に入りし濁かな　汀圃（同）
日々解けてきめ荒き雪の面かな　としを（同）
流木に人あちこちす雪解川　瓢江（同）
谷々の日陰日向の雪解かな　游魚（同）
針金を手摺の橋や雪解川　露泣（同）
蒼空の松の雪解や光悦寺　泊月（同）
山茶屋や雪解の風に旗高く　素十（同）
牛の背に凧一枚や雪解風　俚人（同）
雪解川白妙の富士川上に　花蓑（同）
雪解や岩のり越ゆる大筏　蘭蜂（同）
雪解に穿き汚したる木履かな　些枝女（同）
家鳴りして雪解け落つや爐火もゆる　素月（同）
雪解に馬尿り居る輪卒かな　吉日子（同）
雪解川岩に石菖のあるばかり　其昔（同）
機の窓古雪雨に消ゆるなり　草夢（同）
あちこちに鹿かけり居る雪解かな　雨瀞（同）
故郷の道あらはるゝ雪解かな　漾人（同）
雪どけの庇の下の貴船川　康之（同）
雪解けて索道を薪來初めけり　茂丸（同）
雪解やてらり〱とさるすべり　豐城（續ホトトギス）
雪解のし給ふ宮に詣りけり　夏山（同）
にぎやかに隨身門の雪解かな　行野（同）
方丈の戸樋の奏づる雪解かな　句一歩（同）
大川のどの石段も雪解水　月尙（同）
龍の鬚ひたしてゐるや雪解水　奈王（同）

永平寺

山内に雪解の瀧のかゝりけり　爽雨（同）
雪解や張の廢園ひろ〲と　朱城（同）
雪とけて一ト節枯れし木賊かな　石竹（同）
雪解の鎌倉山も眺めかな　夢香（同）

参考　山々に積つた雪が、春の暖氣に逢つて解けて流れ下るものを雪汁と云ふ。信濃川には、信州の山々からの雪汁が落ち合ひ、爲めに出水を來すことがある。富士山の雪も五月になると解けて落ちる「富士の白雪朝日に解けて」の歌謠にても有名である。併し雪汁は常に出水を伴ふものと限られて居ない。處によつては舟運を便ならしめ、木材を流す用をなすな

どの利便も尠くない。

雪解雫（ゆきげしづく）　雪雫（ゆきしづく）

【季題略解】雪解の滴りを謂ふ。朝開けた日に、軒端の雪雫が輝き落つるのも、或はそれが集つて大戸樋を鳴らすのも、木々の雪雫が光り輝くなどもみな春らしい氣持である。

【季題詳解】雪解雫は雪解の點滴のことで、本來は雪解といふことは冬中雪のある國の現象であるから、やかましく云へば、雪雫も一日や二日降つて積つたやうな雪の解ける雫にはつかへない道理である。しかし今はさう固苦しくばかりも用ひ慣らされてはゐないやうである。【同題】殘る雪　雪解

【例句】
雪解雫

山彦もぬれん木の間ぞ雪雫　　乙二（松窓乙二發句集）
にぎはしき雪解雫の伽藍かな　　青畝（ホトトギス）
緣障子雪解雫のてりくもり　　楊童（同　）

雪しろ（ゆきしろ）

雪濁り（ゆきにごり）　雪汁（ゆきじる）

【季題解説】冬の間積んだ雪が春の暖氣のために融けて、一時に河海や原野に横溢するものを謂ふ。山から雪消水が川へ落ちて、それが集つて奔騰するとき、田畑へ溢れて被害を與へることがある。又海へ押し出たものは、上汐に押されて河口を荒すこともある。雪濁りといふのは雪しろのために河海の水の濁ることである。【同題】雪解

凍解（いてどけ）

凍解くる（いてとくる）　凍ゆるむ（いてゆるむ）

【季題解説】冬中凍つてゐた大地が、春になつて解けゆるむのをいふ。滿洲地方では冬中地下三四尺の間は、凍りついて鶴嘴も立たないやうに固いので、總ての土木工事は春の凍解けを待つてはじめるのが普通である。凍解けの頃になると、曠原は勿論城内の大路も泥濘となつて、支那馬車も轍を沒し步行に難澁するのである。また早春の頃、夜から凍つてゐた大地が、朝日を受けて解けゆるむのや、東風が吹いて急に泥濘になつたりすることもある。「東風凍を解く」といふのはこれである。【同題】氷解

【例句】
凍解

凍解て筆に汲干す淸水哉　　芭蕉（小文庫）
凍解や市日に橋のよごれたる　　也有（羅の落葉）
凍とけや梅のちる場のまたあかず　　同（蘿葉集）
凍とけや梅にわかれて回り道　　同（同　）

凍とけや爰にも捨し足袋片し　同（同）
梅の徑凍解けそめし一日かな　清三郎（ホトトギス）

春の氷

古書校註　【山之井】春の氷は、日足にけやぶられ、風の手につきながさるゝ心ばへ。又とくるとも、隙などもいへり。

季題解説　春寒に當つて水の氷ることがある、これを春の氷と云ふのである。【参照】殘る氷

例句

春の氷
解々て纔に春の氷哉　紅魚（月影つか）

殘る氷

浮氷

季題解説　春になつて、池沼・河海・田圃などにまだ融け殘つてゐる氷を謂ふ。江河や海洋の壯んな流氷がひとしきり終ると、あちこち殘つた氷が波間にまぎれ浮いてゐる。池沼や田圃の隅にも融け殘つた氷が輝いてゐる。かうした氷もいつの間にか、春の日に全く融けて終ふのである。【参照】春の氷

例句

殘る氷
消えさうな氷が浮いてをりにけり　百刀雄（續ホトトギス）
薔薇色の暈して日あり浮氷　花蓑（同）

氷解

氷解く　解氷

古書校註　【御傘】氷のひま・とくる・ながるゝ、皆春なり。殘る氷、春に非ず。薄氷・薄くなり行く氷・氷くだくるも、皆冬なり。
【滑稽雜談】禮記月令に曰孟春の月、東風凍を解く。（一）
【年浪草】霜・雪・氷の消ゆる、解くる、打ちまかせては春也。初雪・初霜の消ゆる、初氷の解くるは冬也。（略）今式（二）に云、氷とくるも春なり。氷とけずといひても春なり。くだくるは冬と。云々。

註（一）立春の節の第一候である。（二）連歌今式。

季題解説　春になつて、池沼河海や田圃などに張りつめてゐた冬の氷が融けるのを謂ふ。田圃や池沼の氷がなくなると、水底に芽ぐむものが見えてくる。港の氷が日にくだけると、出入の船で賑はつてくる。遼河や鴨綠江などの解氷は實に壯觀である。氷面が緩みそめると、先づ重量車の通行が止められ、續いて人馬や橇の渡河禁止の布告が出るのであるが、これを犯して毎年江流に陷る人が澤山ある。解氷近くなると、頻りに凄い響を立てて

龜裂が出來、氷上に水が漂ひそめて、遂に大汐の落汐時にどうと解けて流氷が始まる。五六日して流氷が熄むと開河となり、濁流を舳艫や戎克が遡航し始めるのである。滿洲地方の主なる江河の解氷期は次の通りである、鴨綠江（新義州附近）三月十五六日頃、遼河（營口附近）三月十六日頃、松花江（ハルビン附近）四月十五六日頃、松花江（吉林附近）四月七八日頃、嫩江四月十五六日頃。（→「凍解」「氷流るる」）

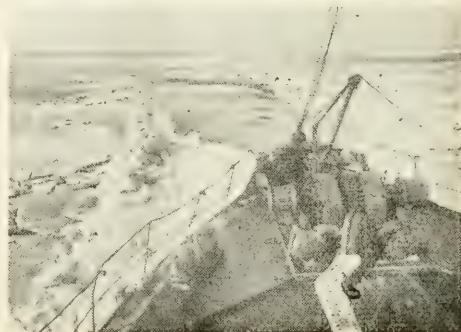
例句

氷解

勢ひあり氷消ては瀧津魚　芭蕉（新虛栗）
鶯にほろりと筏の氷かな　北枝（類題發句集）
葭の根をめくりて解る氷哉　吟江（夢占）
氷解けて古藻に動く小海老かな　子規（子規句集）
氷解けて櫻咲くなり榛名山　同（同）
解氷や江舟いまだ揚げてあり　三昧（ホトトギス）
氷解けて障子に映る水輪かな　軒水（同）
解氷の第一船の著きにけり　葉舟（同）
山沼の氷さけびて解けそめぬ　縷川（同）
氷江のとけてながれて藍ぼかし　烏頭子（續ホトトギス）
解氷や土手歩きゐる山羊の群　三昧（同）

氷流るる（こほりながる）

流氷（りうひよう）　浮氷（ふひよう）

季題解說　流氷は季題としては春の部に屬するか、春に限つたことはない。河川では結氷の初期、海洋では天候の變化のため、冬でもこれを見ることがある。然し江河や海岸において、豪壯な流氷を見るのはやはり春になつてからであつて、感じはどうしても春のものである。流氷は北海道・樺太・沿海洲・朝鮮の沿岸から、渤海灣にかけて多い。鴨綠江新義州附近の流氷は、大なるものは徑三十米厚さ十二糎内外で、水面一帶を被ひ、每時一浬半位の速さで流下してゐるが、上汐のため再び上流に押戾され、上下に浮流する間にその大部分は解消するのである。大同江における流氷の特徴は、その徑が厚さに等しくて大ならず、遠望すれば球狀に見える點にある。遼河の氷塊は泥土を含み、黃色に汚れてゐる。海洋における流氷は、干潟又は陸沿ひに、固定した氷の一部が汐の干滿の際その緣端が削ぎ取られ、汐流又は風に連れ水道を上下に浮流するのである。それが爲め、これ等の流氷は附近一帶の海面を覆ひ、海上一面に結氷してゐるやうな觀を呈することもあれば、又風のため遠く沖合に吹き流されることもある。渤海灣における流氷は、遼河口から秦皇島に至る大陸沿岸に沿うて、幅二十浬の間が最も甚しい。岩石を重疊したやうな氷塊もあれば、不規則な蓮葉狀又は龜甲形に切れ切れになつたのもある。その一つ〳〵は徑五米乃至二十米位

の廣さで、表面に凹凸が多く、恰も蜂の巣の如く穴の開いたのもある。これ等の氷塊が相連り、徑一・二千米乃至三千米の集團をなして浮動してゐる。一度風浪が起れば、氷塊の相搏つ音、打ちたぐる沫、盛り上る氷塊など、實に凄じいものがある。蒼々としてゐる海水に、遼河の泥土で汚れた氷塊の漂つてゐるのも、この邊の特徴である。船舶が流氷に襲はれて遭難することは度々あつて、舟人の恐るゝ所である。江河の流氷は普通一週日くらゐで終る。流氷が少くなると、江舟の往來が繁くなり、河口には汽船が這入り、港には繋る船の數が遽かに增える。滿洲地方の主なる江河の流氷期は次の通りである。

鴨綠江は三月中旬から三月下旬。
松花江は四月上旬から四月中旬。
嫩江は四月中旬から四月下旬。

參照 氷解

例句

氷流るる

草ともに氷流るゝ野川哉　蝶夢（類題發句集）
流氷や日向ぼこして渡舟守　綠童（ホトトギス）
流氷をあなどりて出す渡舟かな　俚人（同）
流氷にいためし戎克かゝりけり　三昧（同）
　北上川
流氷やところ定めずかゝり船　櫓水（同）
流氷や宗谷の門波荒れやまず　誓子（同）
流氷に迎れし赴任また遲る　雨石（同）

爐塞（ろふさぎ） 爐を塞ぐ、爐の名殘（ろのなごり）

古書校註

【滑稽雜談】白氏文集、春爐に別るゝの詩。（略）是は冬より開きたる茶爐或は火燵父は閨爐裏などを、温氣漸徹しに塞ぐなり。茶爐は是に替ふるに四月より風爐を用ふる也。是に准じて外の火爐も、三月の末に閉づるならし。唐にもさあるにや、其の爐に別るゝなどの作侍る。

【年浪草】寺院及び市中各々爐を置き寒を禦ぐ。冬十月より三月晦日に至りて、則ち止む。之を爐を塞ぐと謂ふ。

季題解說

前年初冬以來用ひて來た爐を、春暖至つて閉づることをいふ。もとは三月晦日を例としたものである。爐の跡は通例疊を入れ代へるか、或は木で爐の蓋を作つて篏めておく。茶の湯では、爐を閉ぢた後は風爐を据ゑ用ひる。〔參照〕炬燵塞ぐ（コタツフサグ） 冬「爐」 爐開（ロビラキ）

例句

爐塞

爐ふさぎや念佛掃出す臺所　支考（蓮二吟集）
爐ふさぎや床は維摩に掛替る　蕪村（蕪村句集）
爐塞で南阮の風呂に入身哉　同（同）
爐塞でたち出る旅もいそぎ哉　同（蕪村遺稿）
爐ふさぎや老の機嫌の俄事　太祇（太祇句選）
爐ふさぎや旅に一人は老の友　召波（春泥發句集）
物ぐさく爐塞ぐとしも見えぬ也　同（同）
爐塞で主おかしや力あし　同（同）
爐ふさぎや招隱の詩を口ずさむ　同（同）
爐塞や泊り人のある其夜から　也有（蘿の落葉）
爐ふさぎやひとつにしまふ藥鍋　同（蘿葉集）
爐ふさいで二日もどらぬ主じ哉　蓼太（蓼太句集）
爐ふたひで棊といふ病うつりけり　几董（井華集）
表具師が無沙汰嘶りつ爐の名殘　同（同）
爐の蓋にはや蝶どもが寢たりけり　一茶（七番日記）
ぬり塞ぐ爐にも吉日さわぎ哉　同（一茶新集）
爐ふさげといふ人けふもまたありぬ　乙二（をのゝえ草稿）
爐塞の空のけしきや青疊　萬子（類題發句集）
爐塞や疊の下の節の豆　意程（同）

爐塞

爐塞で見れば櫻は咲にけり　東瓦（花櫻帖）
爐塞ぎに庭へ出て見る若緑　子規（[illegible]）
爐塞いで青く小さき疊かな　三川（新俳句）
爐塞いで上野の山に登りけり　把栗（春夏秋冬）
爐塞いで淋しき[illegible]家や[illegible]待つ　素子（ホトトギス）
爐塞ぐや疊に生まる蠅一つ　[illegible]（同）
塞ぐ爐の蓋をいやしむ疊かな　行果（同）
爐塞ぎの髪の埃を梳きにけり　由里女（同）
爐塞いで淋しき部屋を去らでゐる　耕雪（同）
爐塞いで浮世繪の軸かけにけり　雄月（續ホトトギス）
爐塞いで人にくれたる庵かな　虚子（句集虚子）

釣釜（つりがま）

季題解説　茶道でいふことで、三月中旬から初夏風爐を据ゑる迄の間、爐の切つてある眞上の天井の蛭釘に、鎖または自在を掛けて釜を釣ることをいふ。即ち寒氣の和らぐに從つて、爐では暖か過ぎ風爐では未た寒いといふ時分に釣釜となすのである。

炬燵塞ぐ（こたつふさぐ）

炬燵（こたつ）の名殘（なごり）

季題解説　春の寒さも大したことがないといふやうになると、置炬燵は片づけられ、切ごたつは塞いでその上に疊を敷き、起居の便利なやうにする。地方により家々に依り遲速があらうが、早くて彼岸頃、遲くも四月一二日ごろであらうか。〔季題〕爐塞ぎ　春の炬燵（はるのこたつ）　冬　炬燵（こたつ）

例句

炬燵塞ぐ　炬燵なき蒲團や足ののべ心　子規（子規句集）

春の炬燵（はるのこたつ）

季題解説　春になつても寒さはなか〳〵去らない。二月・三月の大半は寒い日がちである。そのため春になつても炬燵の間は繁昌する。置炬燵も仕舞はれない。庭の有樣など何時となく蕭殺の氣分から放れてゐるやうにも眺められるが、家の内ではまだ炬燵が必要である。さういふのが春の炬燵である。昭和八年は殊に寒さが長く、三月末までも炬燵を放れ得ない所も隨分多かつたであらう。〔季題〕炬燵塞ぐ（こたつふさぐ）　冬―炬燵（こたつ）

例句

春の炬燵

殘る火燵まだ山里はこたつかな　鬼貫（俳諧七車）
朝夕にせゝる火燵や春のたし　丈草（丈草發句集）
花さかぬ山はとり置く巨燵かな　也有（[illegible]葉集）

寝るときめてあまりにあつし春火燵　土音（ホトトギス）
喪を籠る母と二人や春火燵　四字路（同）
多摩川に水光亭の春火燵　京童（續ホトトギス）
火燵して御山の坊の四月かな　九十九（同）

北窓開く

〔季題解説〕冬の寒さが全く去ると、今まで寒風の吹き入るのを防ぐために閉め切つてゐた北側の窓を開ける、それをいふのである。今までの鬱屈した氣分から開放されて、家の中が俄に晴れやかになつた氣がするであらう。その時期はもちろん所によつて違ふわけであるが、概ね彼岸前後であらう。

〔季題〕冬　北窓閉す

〔例句〕北窓開く

うぐひすにとらばや庵の風ふせぎ　千代女（千代尼發句集）
北窓をあけてめつらし宮の屋根　綾華（ホトトギス）
北窓の土を崩して開きけり　茨雲洞（續ホトトギス）

屋根替

葺替

〔季題解説〕北陸地方など雪の多い國々では、屋根を葺くのに瓦を用ひず、專ら板・藁・茅等を用ふる、晩秋から家を埋めて降り積む雪や、朔風のためにとかく屋根が損はれ勝ちなので、雪解と共にその破損を繕ひ、また新しく葺き替を行ふのである。南海西海など雪の少い暖國も田舍はもちろん藁葺であるが、この地方の藁屋根は數年も十數年も風雨に堪へる。或は半分づつ葺き替へたりすることもある。それも春に限らず、寧ろ材料の新麥藁が出來て後、晩夏初秋の農閑期に適宜行はれたりするやうである。材料には茅萱も用ひられる。

〔例句〕屋根替

屋根ふきは下からふくぞ星下り　支考（蓮二吟集）
屋根替の埃やどうと梅に落つ　鴻城子（ホトトギス）
屋根替や障子鎖して雨隣　尚青（同）
屋根替の萱つまれあり雨の庭　手古奈（同）
谷底の水車も屋根の葺かれけり　千々里（同）
屋根替の門をくゞるや詩仙堂　藤園（同）
家根替の大仕掛せしお寺かな　桐南子（同）
わが家をひねもす葺いてゐたりけり　草火（同）
屋根替ふる家におりゆくお山かな　大梯（續ホトトギス）
屋根替の埃かむりし天女かな　有風（同）
お屋根替はじまりにけり紫宸殿　兎月（同）

屋根替

町筋に葺きかはりたる藁屋かな　風生（續ホトトギス）
屋根替もすみぬパカチも蒔かれけり　正蜂（同）
葺き替えて煙上れる藁屋かな　青邨（同）
屋根替や井戸の端なる絲欅　虚子（句集虚子）
屋根替の一人さびしや頰被　同（續ホトトギス）

春の燈（はるのひ）　春燈（しゆんとう）

季題解説　寒燈といふと、寒い冬の燈を思ふ。それと同じやうに、春燈といふと暖かい春の灯を思ふ。草木もだん〳〵と芽ぐんで來、百花が咲き亂れる頃、家の中の調度も春めいてゐて、その中に灯つてゐる灯火は特に濃艷な感じがするものである。

例句

春の燈
春の燈油盛りたる宵の儘　召波（春泥發句集）
春深く蔀に透るともし哉　同（同）
春の燈に探し物する手匣かな　柿赤（同人）
春の燈に枕の小豆こぼれけり　一央（同）
春燈に置く尺八の穴赤し　たけし（ホトトギス）
泥濘に春の灯うつるホテルかな　喜太郎（同）
春灯や女は持たぬ喉佛　草城（同）
樂書の羅なくなりし春灯　春楠女（同）
春燈のいま晴きとは思はずや　蛇王（同）
春の灯や油もらひて旅かゞみ　せん女（同）
食堂（ジキドウ）の春のともしや南蠻寺　桑陰（同）
（句會）春灯に切りこぼれたる骨牌かな　文虹（續ホトトギス）
まん中に泊雲樣と春灯　竹堂（同）

松の綠摘む（まつのみどりつむ）

季題解説　三四月頃、庭園の松の若綠の伸びたのを、適當に摘み取ることをいふ。ずん〳〵伸びる松の綠をそのまゝに捨て置くと、木が弱つたり、枝振りが崩れてしまつたりするので、餘り長くならないうちに綠を適當に折つたり、また摘み取つてしまつたりするのである。斯くして綠は枝になり、古葉は延び切つてしまつた夏になつて、松の手入（夏季）をすることゝなるのである。

垣繕ふ（かきつくろふ）

季題解説　田舍では多く生垣で屋敷を圍つてゐる。山から切り出して來た雜

木の柴を手頃の厚さに立て並べ、添木をあてゝ垣に結ぶのである。この垣は二三年もすると朽ち破れる。殊に冬季雪の爲めなどで損傷することが多い。家々では春になると之を修理するのである。あたゝかい日を浴びながら、終日柴を取りかへたり、繩でしばつたりしてゐるのは、いかにも山家の春らしい感じがする―山國の町などでは年中行事になつて居る。

目貼剝ぐ（めばりはぐ）

【季題解說】 滿洲地方では、極寒の候に備へるため窓の隙間を目貼する。春になるとこれを一齊に剝ぐのである。奉天地方の黃塵の多い所では、この黃塵が隙間から這入るので、春も遲くなつてから目貼を剝ぐのが普通である。

大掃除（おほさうぢ）

春の大掃除

【季題解說】 大掃除は多く春と秋とに行ふ。中でも春は長い間の冬にとぢこめられた後であるから、必ず大掃除をして家も人もさつぱりとはれ〴〵した氣持になるのである。

紀元節（きげんせつ）

梅花節（ばいくわせつ） 梅佳節（ばいかせつ）

【季題解說】 四方拜、天長節、明治節と合せて四大節とすること、皆人の知る通りである。神武天皇御卽位の第一日の佳辰を紀念申上ぐる日であつて、陰曆正月朔日を太陽曆に換算して二月十一日をあてられたのである。この祝日を御治定になつたのは明治五年である。建國三千年の昔を偲ぶ祝日が、丁度雪を凌いで百花の魁をなす梅花の綻びそめる季節に當るといふことも、偶然ではないやうな感じがしていかにも目出たい。【參照】 建國祭（ケンコクサイ） 宗教 橿原祭（カシハラマツリ）

【例句】

紀元節

高千穗に見ゆる雪や紀元節　嚴美（同人）

机上なるかるた一片紀元節　元（ホトトギス）

惚れて買ふ小鯛五つや紀元節　岳居（同）

萬葉に東歌（アヅマウタ）あり紀元節　秋櫻子（同）

幕張つて古き宮居の紀元節　旭川（續ホトトギス）

いくとせの前にも雪の紀元節　貴水（同）

氷上の小屋にも旗や紀元節　帆影郞（同）

咋燒ける宇陀の小邑も紀元節　李青（同）

【[illegible]】 紀元は、年數を起算する基準となすもので、我國には古來斯るもの無かつたが、明治五年十一月九日改曆の擧あり、尋いで同月十五日布告

を以つて神武天皇即位を以つて紀元と定められた。日本書紀に依れば、神武天皇辛酉の年正月元日大和の國畝傍橿原の宮に於いて即位あらせられた。この日を陽暦に換算すれば二月十一日となるのである。初めてこの日を祝日と定められたのは、明治五年で、當時の舊元旦なる一月二十九日を用ゐてゐたが、六年三月これを紀元節と改稱し七年より二月十一日を用ゐる事となつた。

天長節（てんちやうせつ）

【季題解説】聖上御誕辰を祝しまつる祝日で、宮中では御祭典がとり行はれ、文武百官の參内奉祝、官衙學校の拜賀式、奉祝觀兵式、外務大臣主催の大夜會等が擧行される。天長節なるものの起原は唐の玄宗皇帝の時の千秋節にあり、次で天長節と改めたといふことである。我が國では光仁天皇の御代から始つて居るが、その後は明治大帝の御代まで、國を擧げて奉祝するといふ風にはとり行はれなかつたものらしい。明治元年に九月二十二日を天長節と定められたが、同六年に太陽暦を御採用になつたので、十一月三日を天長節とされた。從て明治時代の俳句などでも、天長節を詠じたものは悉く菊花節として秋天高く晴れわたつた心持が主となり、天長節といへば菊が香り木犀の匂ふといふやうな時候をすぐ思ひうかべられるものであつた。大正天皇の御代にあつては、御誕辰が八月三十一日で、天長節は八月三十一日となつたけれども、御祝日としての酷熱の時候の不便から、別に天長節祝日なるものを十月三十一日に定められた。次で、今上天皇は、四月二十九日陽春の候に御降誕遊ばされたので、現在の天長節は明治大正時代と全く變り、春光麗かな時節といふことが衆人の頭の中に浮んで來る。しかし明治に生れたものは、明治時代の天長節の感じが中々ぬけきらぬやうである。また近年の青少年には、秋の季節に就て詠まれた古い天長節の句に對して、妙な感じを覺えるかもしれない。明治天皇の御威徳を偲びまつるため、現在、明治天皇天長節は明治節として奉祝される。

【例句】

天長節

明治大帝天長節

晩稻刈る天長節の小村かな　虚子（句集虚子）

大正天皇天長節

菊佳節支那代表の祝辭かな　丈草（ホトトギス）

今上天皇天長節

柴笛の天長節の兵士かな　千代（同　）

【参考】名義は、老子に「天長地久、天地所㆓以能長且久㆒者」とあるに因る。其の起源は、玉海と言ふ書に唐の太宗皇帝以來代々其の誕生の日に侍臣貴戚を内庭に召し宴會を催し、玄宗皇帝開元十七年これを千秋節と稱し、天寶七年これを天長節と改めたと傳へてゐる。我が朝では、續日本紀に光仁

天皇の寶龜六年九月壬寅、勅して、十月十三日は天皇御生誕の日なるに因り天長節と爲すと見え、明治維新後は、明治元年八月二十六日に、九月二十二日は聖上の御誕辰なるにより天長節とする旨布告あり、後明治六年に至りて十一月三日に改められた。大正天皇の御代には、八月三十一日を天長節とし十月三十一日を天長節祝日と定められ、今上陛下の御代には、四月二十九日を天長節とせらるるのである。

地久節（ちきうせつ）

【季題解說】 天皇の聖誕を天長節といふのに對して、皇后宮の御誕辰を地久節といふのである。「天長地久」の語は老子から出てゐる。地久節は公定せられた國家の祝日ではないが、今日では三月六日で、國民は萬壽を慶祝し奉らなければならぬ。女學校はこの日課業を休む。地久節の起りは明治七年五月二十七日、明治天皇の皇后御誕辰の吉日に臣僚を召され、兩陛下の御陪食を仰せつけられたのに始まり、その後御儀式に大同小異があり、漸次定備して今日に至つてゐる。この日拜賀のため參內する範圍は、宮中席次第一階第一乃至第十六の者及び宮內高等官であつて、拜賀後豐明殿において酒饌を賜ふのを例とする。

【參考】 此の名義も老子の天長地久の句から出て居る事、天長節の條に說明する如くである。一般の大祭日では無いけれども女學校などで奉祝するのは明治七年以來の事である。

建國祭（けんこくさい）

【季題解說】 紀元節の日に、國民擧つて建國の昔を偲ぶために擧行せらるゝ國民祭のことである。大正十五年に永田青嵐氏・丸山鶴吉氏等の發起で創められた。東京では上野公園・芝公園、その他七ケ所に、都下何十萬といふ人が集つて莊嚴な式を濟まし、續いて靜肅な行列で市中を練り歩き、二重橋前に集つて、皇城を拜し萬歲を唱へて散會するのである。追ひ〳〵地方でも行ふやうになつてゐる。 【參照】 紀元節セツゲン

陸軍記念日（りくぐんきねんび）

【季題解說】 奉天戰役を記念する日である。明治三十七八年戰役中の掉尾の大會戰が滿洲奉天を中心として行はれ、我が軍の大捷に歸して戰役の運命を決した、その奉天占領の日を記念して、毎年三月十日、東京及び各地の偕行社において祝典を擧げ、煙火とか相撲などの催しがある。戰役の際用ひた堅パンを嚙りながら、今日生き殘つてゐる老將軍の追懷談を聽いたならば、感慨無量なものがあるであらう

[illegible] 奉天の役は、明治三十八年二月二十三日、鴨綠江軍まづ行動を開始し、三月一日より總攻擊に移り、三月十日奉天府を占領して、明治三十七八年戰役の結末を早からしめた大戰であつた。依つて爾來この日を陸軍記念日とする。

觀櫻御宴（くわんあうぎよえん）

[illegible] 毎年四月中旬を期して、宮內省において擧行せられる年中行事の一つである。明治十四年四月、吹上御苑において內外の臣僚を召され、兩陛下臨御のもとに櫻花を賞せられたのに始まり、翌々年からは濱離宮と變つたが、恒例として毎年行はれて大正五年に及んだ。ところが御召を受けるものの範圍がだん〳〵多くなつて、濱離宮では狹過ぎるやうになつたので、大正六年以後は新宿御苑と御變更になつた。當日は別に改つた御儀式等があるわけではなく、御日取や御召の光榮に浴する者の數等も年々宮中の御都合によつて決定せられるのである。大抵三時頃、兩陛下略式鹵簿で行幸啓あり、苑內を御一巡の後、設けの休所で諸員に茶菓を賜はるのを例とする。苑內は一重櫻は殆どないが、丁度八重櫻と海棠と山吹とが盛りで美事である。[illegible] 秋　觀菊御宴　植物・櫻

列見（れけん）

[illegible]【滑稽雜談】 江次第に曰、列見、二月十一日、諸司長上撰人を成し、太政官列見す（略）公事根源に曰、列見、十一日、上卿・辨・少納言・外記・史などまゐりて、太政官にて六位以下の藝能あるものをえらびて、式部・兵部の二省より率してまゐれるを、上卿のそれをめしよせて、器量容儀を見る心也。（一）挿頭の華を上卿已下冠にさす。大臣は藤の花、納言は櫻の花、參議・六位みなつくり花なり。非參議（二）以下は時の花を挿す。

註（一）古へ、草木の花枝を冠にさすもの。後には造花を用ひ、神事、式事等に冠に加へた。
（二）四位以上の人で無官のものをいふ。

[illegible] レケンと讀む。二月十一日に上卿以下太政官に著座し、六位以下の藝能ある官人にて式部兵部二省の選んだものを召し寄せて、其の器量容儀を見る。これ定考の爲に備ふるのである。續日本紀「大寶元年六月癸卯始補三內舍人九十人於二太政官一列見」とある。

御燈（ごとう）

[illegible]【滑稽雜談】 先代舊事紀に曰、三月三日、天皇司山頭に命じ、壇場を北山の峰に築き、七七束の薪を七處に積みて、天燈と爲す。而して、北斗の七神に獻じ奉る。天皇內に在して、齋戒北面し再拜して、敬を致し信を將し給

ふ。（略）公事根源に云、是は天子の北斗に燈明を奉り給ふ也。昔は北山靈巖寺など云ふ所にて、高き峰に火をともして北辰に供せられける由、一條院の御記などに見えたり。まへ一日に御卜の事有り。今は御燈の儀はたえて、由の御祓ばかりぞ侍る。御殿に北むきに御座を敷きて三度御拜あり。兩段再拜なる例も侍れども、それは僻事也。大かた御拜のありなしの事也。長暦の比、沙汰ありて宇治の關白（一）に仰せありける、由の御はらへなれば御拜は有るべからざる由申さる。その理り有るによりて、御拜はなし。延暦十五年三月に始めて北辰を祭らる。○此儀、又九月三日にも侍り。然れども始めを以て正とすれば、御燈とばかり春也。

註 （一）藤原頼通 道長の子 永承中、宇治の別業を捨て丶寺と爲し平等院と名づく 承保元年薨。年八十三。

參考 燈を獻じ北極星を祭ること。北辰菩薩陀羅尼經に、北極星を妙見菩薩といひ、衆星中の最勝にして神仙中の仙となすよし見ゆるに因る北極星、北辰といふ。京都に都せられてより、北山の靈巖寺の高き峰に御燈を揭げて北辰を祭らせらる。後、月林寺・圓成寺を用ゐさせられ、次いで靈巖寺に復した。後は御燈を揭ぐること無く、唯宮中にて御禊あり、北に向つて拜せられるのみとなつた。三月三日及び九月三日に行はれる。

一夜正月（いちやしやうぐわつ）

季題解說 男は四十二歲を大厄としてゐるので、その厄年に當つた者は、厄拂の意味で、陰暦二月一日か或は二月一日から十五日迄の間に、もう一度正月をする風習がある。それを一夜正月といふのである。この意味の一夜正月は今は殆ど廢滅に歸してゐるといつてもいゝが、しかし二月の一日に雜煮を祝つて、親族へ禮廻りに行くといふ風習は、今でも物堅い舊家などには殘つてゐる。これは厄年に限らず每年行ふのである。參照 新年―正月（シヤウグワツ）

二月禮者（にぐわつれいしや）

季題解說 正月に事故があつて、年始の廻禮をしなかつた場合に、二月の朔日に廻禮に步く風習がある。芝居者とか、料理屋など、正月が特に多忙な稼業の人の間に今も行はれてゐる。參照 新年―禮者（レイシヤ）

例句 二月禮者　女の子つれて二月の禮者かな　圭岳（同人）

御事納（おことをさめ）

古名傍題 事納（ことをさめ）　ことはじめ　お事汁（ことじる）　むしつ汁（しる）　從弟煮（いとこに）

【東都歲事記】 二月八日。正月事納め。家々笊目籠を竹の先に付けて屋上に立つる。或は事始めといふ。

【栗草】武江の俗、二月八日を事納とし、十二月八日を事始といひて、（略）牛房・芋・大根・赤小豆等の六種を煮て汁とし、これを六質汁と名づく。（略）十二月八日を年頭嘉祝の事はじめとし、二月八日を事納とするは、近世の誤也。（一）

【用捨箱】昔は寺々只一食にて、朝夕一度しけり。次第に器量弱くして、非時と名つけて日中に食し、後には山（二）も奈良も三度食せり。夕めをば事と山にはいへり。末中の時はかりに非時して、法師原坂下へ下りぬれば、夕方寄合うて事と名つけて、我々世事して食すと云へりとあるは、世俗に食物を事といふによれり。按ずるに十二月は日の短き頃にて、年の暮せはしくなる故に、八日を限り二食となるが當時の僧家の風俗にして事納と稱へ、二月八日は日も漸く永くなれば、八日より三度食する故に事始めといひしにあらずや。

註（一）江戸總鹿子に「十二月八日事納、二月八日事始」と見えてゐるのを、新增大全には暇して「殊更に今日を事始めといふは、彌々心得がたし。十二月八日を始めとして、二月八日を納といはゞ可ならんか」と論じてゐる　又甲子夜話には「二度とも事はじめとも、事納めともいひて、さだかならず」等見える。（二）比叡山。

【季題解説】陰暦二月八日の農家の行事である、關東地方で、この日に笊だの目籠だのの類を戸口に掛けたり竿に吊つたりして揭げ、元日以来用ひたところの芋・牛蒡・大根・小豆・豆腐・蒟蒻の六種を味噌汁にして食べる習俗があつた。これをお事汁或はむしつ（六質の意であらう）汁といつた。また追々に入れるのを「甥々」に洒落て、從弟煮ともいつたのである、などといふ珍說もある。とにかく、二月八日をもつて一年中の農事を始める日として、「事始」の行事があつたのである。この事始に對して、十二月八日を事納めとし、事始と同じくお事汁を作つたり笊を吊したりして、一年中の農事の終つたことを祝した。然るに江戸においては、二月八日の農家の事始に對して、同日に「正月事納」といふ俗があつた。これは正月の儀式の積きがすべて終へる日で、年神の棚をもこの日に撤去するといふのであつた。この事納に對して、十二月八日に「正月事始」があり、この日から正月の仕度に取りかゝるといふことになつてゐた。要するに二月八日の行事には二種あつて、農家では農事始めであり、江戸では正月の事納めであつたわけである。今日にはどこでも餘りかういふ習俗を聞かないやうである。【季題】

冬—事始二八八

二日灸（ふつかやいと）　ふつかきう　春の灸（はるのやいと）

【古書校註】

【俳諧初學抄】二月二日にする也。八月二日にもいたし侍る也。かくの如く兩度ある事は、はじめを本とする故に春也。

【日次紀事】今日（二）男女各々點灸す。是を二日也伊豆（ヤイト）と謂ふ。中華の書に、八月朔日、針灸に宜しといふ事、之に依りて誤りて二日を用ふるか。凡そ民間點灸の時、口唱して、當病有り、其處を燒く、人神當に去るべし。相傳ふ、此の語、聖德太子の言ひ給へる所也、と。

【年浪草】八月二日も亦同じく和俗大人・小兒、各々點灸す。是をも二日也伊登と云ふ。其の效驗他日に倍すと云ふ。中華歲時記に、此の日、朱を以て小兒の額に點すと謂ふ。名づけて天灸と爲し、以て疾を厭ふ。今京師祇園の社頭に、老婆朱印を以て、小兒の額に印して狗子と稱す。然るときは則ち疫を免ると云ふ。和俗二月・八月、共に二日を以て點灸す。是を二日灸と稱す。是亦天灸の微意か。

季語解説

考（一）二月二日。

舊暦の二月の二日と八月の二日に灸を据ゑると、灸の效能がいつもの倍であるとか、息災になるとかいふので、灸師の所へおろして貰ひにゆくもの、或は自分で据ゑるものが多い。据ゑる場所は大抵脚の膝頭の外側の方の凹んだところで、俗に「さんり」といふ灸である。芝居のお染久松野崎村に、この「さんり」を据ゑるところがある。「さんり」のことは徒然草にも、「四十以後の人、身に灸を加へて三里をやかざれば上氣の事あり、必ず灸すべし」とある。逆上引下げの效能があるものと見える。

例句

二日灸

鶯の灸に二日やいとかな　召波（春泥發句集）
二日灸花見る命大事也　几董（井華集）
隱れ家や猫にもすゑる二日灸　一茶（おらが春）
また嬉し二日灸の過し春　乙二（をのゝえ草稿）
待となき二日灸の來りけり　大夢（新選）
ほつこりと山の夕日や二日灸　木丹（古今句鑑）
痞足に二日灸のあはれなり　格堂（春夏秋冬）
灸すんで善き茶を煎ず二日かな　ゝ人（同）
やまの娘に見られし二日灸かな　石鼎（ホトトギス）
うそ〳〵と眼つぶる老や二日灸　老圃（同）
蟲わかす腸焦けよ二日灸　比呂志（同）
閉めきりて母と娘や二日灸　駝王（同）
子を負うて据ゑてくれたる二日灸　あふひ（續ホトトギス）
しにほくろふゆるばかりに二日灸　竹坡（同）
先人も惜しみし命二日灸　虛子（句集虛子）

出代（でがはり）

新參（しんざん）　古參（こさん）　御目見得（おめみえ）

古書校註

【日次紀事】雲嶠類要に云、秦人、宋家の婢を得て、一子を生む。之を惡み、

乞うて隣家に與ふ。隣家大に富貴なり、本家貧し、後二月二日を以て暇歸す。後復本家富み、隣家貧し。和俗二月二日を家僕の交代の節とすること元此に本づくか。八月二日は二月二日に准じて之を用ふるか。近世、三月五日を用ふ。

【日本歳時記】 國俗奴婢を求むるに、今日より來年二月二日までを以て期とす。京都は三月五日より九月十日に至り半年を以て期とす。寛文八年（一）幕府令して出代の期を三月五日と定められたり。

【滑稽雜談】 （二）和俗の奴婢を求むるに、今三月五日より秋九月十日を以て、半季を期とす。昔は二月二日・八月二日に是侍りし也。今猶田舍は二・八月を期とする所多し。往古も、春時に奴婢を實買しけるにや。日本紀なんども、三月の說に、奴婢の制法侍ると見ゆ。漢朝にも嵩速の制、季春の月に行ふならし。凡そ奴婢を求むるに、祿の少なきもの、才辨あるものをしひて好むべからず、質實なる者をえらびて召仕ふべし。（略）此の儀春秋にありといへども、始めを以て正とすれば、出がはりとばかりは春也。後の出替は秋なるべし。

【東都歲事記】 二月二日。信濃・越後より舊年來り仕へし奉公人、主家の暇を得て國へ歸る。

註 （一）東都歲事記には、三月五日、奉公人出替りの條下に、「今日僕婢舊主を辭し新主に仕ふ。江戶奉公人出代りの事、以前は二月二日なりしが、明曆三年丁酉正月十八日の大火によりて、其の年三月五日に出代りすべき由、公より御沙汰あり、夫より改まりて三月五日になれりとぞ」とある。附記して參考に供する。（二）滑稽雜談の出替の條には、二月二日と三月五日とに重出してゐる。

【季語解説】 江戶時代における半季奉公人の交代定日のことである。その期日は時代によつても、また地方によつても相違してゐたやうである。最も古くは節分と盆とを期して行はれたといふことであるが、後年には江戶は三月三日と九月朔日を定めとし、これを半季奉公といつた。京阪は九月を用ひず三月とした。みな期日をもつて出替る定めであるか、出替を次の半季に延長することも出來た。今日ではかういふ定まつた風習はだん〳〵崩れて來てゐるが、しかし京阪地方の舊習を尊ぶ家では、今でも四月に出替が行はれてゐる。所に依つては、婢僕の里へ餅を搗いて贈る慣習もあるが、これも追々廢れてゐるやうである。また京阪では、目見得の日から主家に寢泊りすると永く續かぬと言つて、一旦宿下りして翌日から勤め始める習俗がある。【[illegible]】秋　秋の出代アキノデカハリ

【例句】

出代

出替りや人置く世話も連衣から　其角（五元集拾遺）
出がはりや幼心にものあはれ　嵐雪（玄峰集）
出がはりや共門ドに誰辰の市　同（同）
出代やかゝらかさ提て夕ながめ　許六（五老井發句集）
出代や哀れすゝむる奉加帳　同（同）

出替りの當言つらし臼に杵　支考（蓮二吟集）
出代や春さめ〴〵と古葛籠　蕪村（蕪村句集）
出代やきのふからいふいとまごひ　太祇（太祇句選）
出代や厩は馬にいとまごひ　同（同）
親に逢に行出代や老の坂　同（同）
出替りの疊へおとすなみだかな　同（同）
出替や朝飯すはる胸ふくれ　同（同）
出代や人の心のうす月夜　召波（春泥發句集）
出がはりや松の色なる乳母一人　也有（蘿葉集）
出代や菜つみ水汲む乳母一人　同（同）
出がはりや汲む井ももとの水ならむ　同（同）
出がはりや花は身にまつ人ごゝろ　同（同）
出代や人浮雲の二日月　同（同）
出代や行燈に殘す針の跡　同（同）
出代の伊達やこゝろの淺黄うら　同（同）
出代に其連もあり猫の戀　同（同）
出代やかはる箒のかけどころ　同（同）
出代や足から馴染む草履取　同（蘿の落葉）
梅を見た目は出代て桃の花　同（同）
出がはりや四月へまたぐ大男　蓼太（蓼太句集）
出がはりや飛鳥井蹴て櫻町　同（同）
出代の跡濁さじやぬか袋　几董（井華集）
出がはりし身のかたづきや草枕　同（同）
出がはりの一日にせまる誠かな　白雄（白雄句集）
出がはりの酒しゐられて泣にけり　同（同）
出代や君が花田の五六尺　曉臺（曉臺句集）
出代の市にさらすや五十貝　一茶（嘉永版句集）
梅の木に何か申て出替りぬ　同（七番日記）
出代や直ぶみをさるゝたりはな　同（九番日記）
出代や汁の實なども蒔て置ク　同（一茶發句集）
牛の氣に入らで出替る男哉　吳一（類題發句集）
出代や櫛笥を探す窓の月　移竹（新選）
出代りて聞くや遠寺の鐘の聲　嵐山（同）
出代の茶漬食らべてまかでけり　於仁六（新俳句）
出代や脚絆をはいて哀れなり　みどり（同）
出代のおのが膳拭くなごりかな　青々（春夏秋冬）
出代や妹なれども似てもゐず　花女（同人）
出代や倉より出づる涙顔　翠光（同）

出代

木曾川の水汲む里に出代りぬ　禽化（懸葵）
出代の甕に水滿たす誠かな　月舟（ホトトギス）
出代や主實褒へて情深し　里星（同）
行李負ふ父の後の出代女　月歩（同）
出代の再び但馬女かな　不彩（同）
出代りし部屋の中なる箒かな　草餅（同）
出代りて僧となりたる便かな　句鳴（同）
新參を連れたまはりぬ京の母　諸人（同）
出代女背柱に倚りかゝり　雨園子（同）
出代の父母に仕ふるたよりかな　莉花女（ホトトギス）
出代やたがひに遠賀の川筋女　千葉城（同）
新參と語れる妻も國訛　蘇城（同）

花朝節（くわてうせつ）

古書校註

【日次紀事】中華、二月十五日を花朝の節と謂ひ、中秋に敵す。

【滑稽雜談】花朝といふは、春の最中にて、百花競ひ開く時なれば、是を遊賞するの名なるべし。

阿蘭陀渡る（おらんだわたる）

紅毛渡る（こうもうわたる）　オランダ渡り（わたり）　オランダ下り（くだり）

古書校註

【東都歳事記】二月廿五日頃、紅毛人五年に一度參府こかびたん壹人、筆者一人、都合二人なり、當月の末到着し、本石町三丁目、長崎屋源右衞門（一）か方に泊し、三月上旬登城す。古來は毎年來りしが、近來五年に一度となる。又、かびたん、筆者の外に、外科壹人來りしが、是も文政以來改りて二人となれり。蘭人來朝の始めは慶長十九甲寅年なりと、江戸名勝志にいへり。三月朔日、阿蘭陀人參府の年、今日の登城せしが、近來は日定まりなし。道すがら見物多し。

註（一）其角の「一輪の花咲ば鶯鳥不言」（五元集）といふ句には、「長崎屋源右衞門宗に紅毛來貢の品〳〵、奇なりとして」といふ前書が附いてゐる。

季題解説　德川時代に、長崎在留の阿蘭陀の甲比丹（カピタン）一人、筆者一人計二人が、毎年（後には五年に一度となつた）二月二十五日、江戸に出府し、三月四日頃將軍に拜謁したことをいふのである。本石町三丁目の長崎屋源右衞門方を定宿としてゐた。

【[illegible]】オランダ人が東洋貿易に著目したのは、桃山時代の頃であつて、慶長年間には日本に來り、その十四年よりは平戸に於いて貿易を開始した。寬永十七年よりは長崎を根據として我が國に對する貿易を獨占するに至つ

たが、これはオランダ人は、幕府の最も忌み嫌ふ基督教を傳播することなかりし故である。

針供養（はりくやう）　針祭る（はりまつる）　納め針（をさめばり）

古書校註

【栞草】婦人、針の折れたるを集めて、淡島の社へ納め、一日糸針の業を停む。是を針供養と云ふ。其の由來いまだ詳かならず。

季題解説　陰暦二月八日に、一年中使つてゐた針の折れたのを集めて淡島神社（和歌山縣加太淡島神社、東京淺草の淡島神社のどちらでも行はれる。）へ納めに行き、一日裁縫を休む。由來はつきりしないが、支那から傳つた俗であるといはれてゐる。この日、女達は用ゐ古した小さい裁縫箱に針を一ぱいに入れたり、紙に包んだり、小さな罐に入れたりして、夫々蠟燭を上げて拜んでは納めるのである。淺草淡島神社針供養の實地を見に行つたところによると、お堂の中には、寄進の千羽鶴が天井から澤山に下げてあり、めいめいの名などが下かつてゐる。上げた蠟燭の前には豆腐が盆にのせて置いてあつて、人々はそれへ持つて來た針をさす。これは、一年中堅いものを縫ひ續けて來た針を、今日は柔かなものに刺して休めるといふ意味があるさうである。蠟燭の灯つてゐる奥には、今日だけ一日御本體の開帳がある。御本體は支那から渡來したもので、お雛樣の元祖であると傳へられてゐる。女雛がたつた一つ、中央に安置してある。大體さういふやうな實況であつた。なほ京都では針供養は十二月八日に行ふことになつてゐる。

例句

針供養

針供養すんで芝居に行きにけり　南鵾（同人）
芝居見たき火鉢に凭りぬ針供養　かな女（ホトトギス）
供養針髷にはさみて詣でけり　秋皎（同）
色あせし針山まつるねもごろに　栂童（同）
玉章の袂こぼるゝ針供養　月尙（同）
ひとり來て夜の格子に針納め　豐水（同）
華やかに來て去る娘等や針納め　莉花女（同）
片づけて子と遊びけり針供養　つる女（同）
裝ひて若き師匠や針供養　白川（同）
母と娘と二人きりなる針供養　十夜（同）
待針の梅も櫻も供養かな　あい子（續ホトトギス）
恭しく豆腐に刺しぬ供養針　妙子（同）
ひらめける一つがありぬ供養針　梅子（同）
母と娘のほそきたつきの針祭る　化城（同）

針供養　色さめし針山並ぶ供養かな　　虚子（句集 虚子）

繪踏（ゑぶみ）　踏繪（ふみゑ）　寺請證文（てらうけしようもん）

【栞草】〔香山港稿〕肥前長崎・五島・大村・平戸、此處にて、男女に限らず、繪ぶみす。是は邪宗（一）を禁ぜしめ給ふによれり。

註　（一）切支丹宗。

江戸時代、耶蘇教信者でないことを證せしめるため、庶人に踏ませた耶蘇の像のことを踏繪といふ。踏繪には銅板・木板の二種があつて、銅板には長方形のと楕圓形のとあるが、いづれも長さ六寸横四寸ばかり、高さ一寸餘り、繪圖には聖母耶蘇を抱く圖や、十字架上の耶蘇像等いろいろある。木板はやゝ大きい。常は長崎奉行所と、江戸吉利支丹屋敷とにのみ藏してあり、踏繪は主に長崎で行はれた。正月四月頃、老弱男女一人殘らず跣の兩足でふませられたものである。終れば、連名の一書を奉行所へ差出した。また九州の諸大名には踏繪を貸し下げて行はせた。長崎その他へ漂着の船にも繪踏をさせて、その後でなくては上陸させなかつた。最初は紙の踏繪を使用してゐたものであるが、後に木版に改め、それでもすぐ摺り減るので銅板にしたものである。寛永五年以來長崎奉行所で毎年行はれたこの行事も、安政四年、オランダ人の請と、世界の大勢に鑑みて中止された。シーボルト著「ニッポン」の挿繪に踏繪の寫生圖がある。それを見ると、正月の餅を飾つてある會所に麻裃の役人が坐り、疊の上に置かれた踏繪を町人が踏んでゐる。圖の片方に遊女らしい女が畫かれ、帳面を繰る町方の男、島臺等正月らしい有樣が寫されてゐる。寺請證文といふのは、佛寺に戸籍を作ることをまかせ、「當時の檀徒たるに相違なし」と記入させて、佛教徒たることの證明としたその證文である。

繪踏

踏み減りしさまおそろしや踏繪板　　圭史（同　人）
石段に濃き海見ゆる繪踏寺　　水鳥（ホトトギス）
海の日の欄干として繪踏かな　　青邨（同　）
宣教師只れし繪踏のカードかな　　仙者（同　）
そのかみの繪踏の寺の太柱　　風生（同　）
繪踏して生き殘りたる女かな　　虚子（句集 虚子）

寒食　杏の粥

古書校註

【滑稽雜談】　荆楚歳時記に曰、冬至を去ること一百五日、疾風甚雨あり。之を寒食と謂ふ。（略）事文類聚に曰、初學記に曰、琴操、晉の文公介子綏と倶に亡す。子綏腓股を割きて以て文公に啖はしむ。文公國に復りて、子綏獨り得る所無し。龍蛇の歌を作る。文公之を求む。背て出でず。乃ち左右の木を燔く、子綏木を抱いて死す。文公之を哀れみ、人をして三月五日は火を擧ぐるを得ざらしむ。（略）諸書に異説多し。之を略す。按ずるに、中春の火を禁ずるは周の制也と。此の説宜也。和國に寒食の儀なし。作意にも其の心得肝要ならし。焚煙。（略）これも寒食の義におなじ、周禮の説（一）を正とすべし。俳に作らんには心得あるべし。寒食粥（略）・杏酪餳（略）・麥酪（略）・桃花粥（略）・青精飯（略）・總てこれらの食類（二）は、寒食三日の間、人家に竈火を焼かず。故に、これらを製して糧となす者也。

註（一）周禮には「炬氏。仲春火を國中に禁ず。註、季春將に火出でんとす」とある。（二）年浪草には、杏粥・麥粥・青精飯・桃花粥の四種を擧げ、栞草は栞草の誤かと疑つてゐる。栞草には、杏の粥・棗の粥・楊花粥・青精飯・青飢飯・桃花粥を擧げて説いてゐる。

季題解説　支那におけるその起原については いろ〱異説がある。この行事が我が國に傳はり、冬至から百五日目に當る日に火斷ちをする風習があつたのであるが、今日は殆ど廢れてゐる。しかし「火斷ち」といふことが何かの祈願のために、禁厭として行はれることは今でもあるやうであるから、さういふ風の新らしい意味を、昔の寒食の感じに假托して考へるのも面白い。その意味の季題として残していゝであらう。

例證俳句

寒食

寒食や竈下に猫の目を怪しむ　其角（五元集拾遺）
今案ずるに寒食の家には白身番　同（同）
寒食や竈をめぐるあぶら蟲　太祇（太祇句選）
寒食に火くれぬ加茂を行や我　同（同）
介子推お七がやうになられけむ　同（同）
寒食や饐に馴れたるひとり住　召波（春泥發句集）
寒食のこれをもいとへ唐がらし　成美（成美家集）
里人みな湯仰す寒食の上人と　耐雪（ホトトギス）
良寛上人
寒食や竈の中の薪二本　虚子（句集虚子）

參考雜記　晉の文公未だ公とならざる時、諸國を周流する事十九年宋に至りて大いに饑う、從ふ所の介子推股を割きてこれに食はしむ。已に公となるや從亡の者狐偃趙衰顛頡魏犫を稱し子推に及ばず。子推の從者書を宮門にかけて云はく龍あり矯々たり頃らく其の所を失ふ。五蛇之に從ひ天下を周

流す。龍餓ゑて食に乏し、一蛇股を割く。龍淵に歸り其の土壤に安んず。四蛇皆穴に入り各處あり。一蛇穴無く中野に號ぶ。公悔いて子推を求めしかど得ず、子推山中に隱れ、遂に火を放ち自ら焚死す。後人これを悼みて寒食を始めたと言ふ。但し周書に、司烜氏、仲春以二木鐸一徇二火禁於國中一とあり、注に三月清明の節候、火氣を禁ずるは周の舊制なりと見える。

雁風呂　雁供養

古書校註

【栞草】秋雁の渡る時、小さき木をくはへ來る。是を海上に浮べ、其の上にて羽の勞を休む。其の木を、南部外ヶ濱邊に落しおき、又春その木をくはへ歸るに、殘れる木多くあるは、人に捕へられ又は死せし雁のあれば也。故にその木を拾ひ、供養の爲めに風呂を焚きて諸人に浴せしむと云ふ。

註　〇滑稽雜談には時珍本草の「落雁木」の說等を擧げて、八月の部に收め、「これら秋に許用すべし。鴻書・鴈字・鴈陣・鴈行・鴈の使などの詞皆秋也。然し乍ら、春のあしらひ有りては又皆春に成るべし」と記してゐる。

季題解說　雁の北方に歸る時分、奧州南部外ヶ濱附近で、海邊に落ち散つた木片を拾ひ集めて風呂を立て、諸人に浴せしめるのをいふのである。これは秋に雁の群が海を越えて來るとき、波の上で翼を休めるため啣へて來た木片を、陸に著くと落して置き、明春再びその木片を啣へてゆくのであるが、濱邊に殘つてゐる木片の多いのは、冬の間に內地で人に捕へられたり、または死んだりした雁が多いからであるといふところから、浦人がこれを憐んで雁の供養の心で風呂を沸かすのであるといふ。時代離れはしてゐるけれども、いかにもあはれの深い季題の一つである。〔參照〕動物―歸る雁

大試驗　學年試驗　卒業試驗

季題解說　小試驗卽ち學期試驗に對する大試驗卽ち學年試驗、または卒業試驗である。今日は小學生でも小試驗大試驗とはいはなくなつて、入學試驗・進級試驗・卒業試驗などといふ言葉をつかふが、三月の進級試驗・卒業試驗は大試驗といふ文字によつて一番よくその心持があらはされる。冬を終へ春を控へての試驗勉強には、苦しみのうちにも何となく希望と花やかな心持がひそんでゐるやうに思はれる。

例句

大試驗

大試驗今終りたる比叡かな　播水（ホトトギス）
大試驗きのふとなりし野川かな　月士（續ホトトギス）
大試驗山の如くに控へたり　虛子（同）

卒業　卒業式

季題解說　小學校・中等學校・專門學校・高等學校・大學等、皆三月末に卒

業式を行ふ。これ等種類を異にする諸學校の卒業生は、もちろん年齢、境遇等千差であるけれども、規定の修學過程を終了したる安堵と歡喜とを同じうしてゐる。同時にまた、卒業式といふものには、いよ〳〵親しい母校に別れ去るといふ、嬉しいなかにも淋しいやうな感じも伴ふであらう。

參照 入學(ニフガク)

例句

卒業 誰もかも卒業したる天氣かな　草人星（ホトトギス）
卒業や偕となるべき志　杉洞（同）
卒業やわが樂書もそのまゝに　水鳥（同）
卒業や平八渡舟今日限り　雅州（同）
老僕や卒業式の鐘をうつ　九二緒（同）
玄關を日夜守りて卒業す　みづほ（同）
喜んでくれる父母なく卒業す　都穗（同）
業卒へて看護婦となる愛(カナ)しさよ　誓子（同）
校塔に鳩多き日や卒業す　草田男（同）
卒業や六法全書ぼろ〳〵に　莫々（續ホトトギス）
司厨夫の夫婦の情卒業す　松風（同）
卒業の看護婦人の子を抱くも　誓子（同）

入學(にふがく)

入學試驗(にふがくしけん)　入學式(にふがくしき)　新入生(しんにふせい)

季題解説 毎年春、諸學校に學生生徒が新らしく入ることを云ふ。小學教育は義務教育であるから、就學年齢に達すると、兒童は小學校に無試驗で入學させられるものであるが、著名な私立小學校又は官公立師範學校附屬小學校等では、小學校でも選拔試驗を行ふのが常である。中等學校以上では普通選拔試驗（入學試驗）の上、優秀なもののみが入學を許可せられるのが實際である。入學試驗は、小學校・中等學校では、普通三月二十五六日頃に、專門學校・大學等ではそれよりもやゝ早く行はれる。入學の當初に入學式が行はれる。入學式は、小學校では四月一日、中等學校では四月五日、高等學校以上では四月八日の頃に行はれるのが普通である。參照 卒業(ソツゲフ)

例句

入學 これはさて入學の子の大頭(ツムリ)　誓子（ホトトギス）
入學や昆布干したる學びの舍　同（同）
入學兒席定まれるめでたさよ　盈江（同）
入學や里子をつれて大原女　紀衞呂（同）
入學兒桑の細道さきだちて　紅蔭（同）
入學や石人のある一人道　綠童（同）

入學

あはれにも愚なる子や入學す　古青（ホトトギス）

入學の翡翠の耳輪かはゆらし　ひでを（續ホトトギス）

苦力來る（くりーく）

季題解說　毎年支那奥地乃至山東方面から出稼に來る苦力（支那人の勞働者）の大群は、冬季になると若干の儲けを懐にして歸國し、春になると復たぞろ〳〵と一團をなして渡來する。それが滿洲は勿論朝鮮方面まで行くが、大連ではこの光景が殊更目に立つのである。殖民地におけるこの支那人生活の一面は、季節に伴ふ風物の見逃すことの出來ない一つである。

雪割（ゆきわり）

雪割夫（ゆきわりふ）

季題解說　雪國において、三四月頃になつてもまだ積雪が街路に殘つてゐるのを、大鋸などで挽き割ること、またその作業をする人をいふ。その雪は通りに敷き擴げて消えるのをまつたり、または河などに流したりする。

參照　天文—雪の果

例句

雪割　雪割夫役場の法被著てゐたり　凍魚（ホトトギス）

野山燒く（のやまやく）

山燒く（やまやく）　野燒く（のやく）　草燒く（くさやく）　野火（のび）　山火（やまび）

古書校註

【滑稽雜談】　時珍本草に云、粳は水旱二稻有り。南方土は下にして塗泥多し、水稻に宜し。北方地は平にして、惟々澤土、旱稻に宜し。西南夷も亦山地を焼きて、旱稻を種するもの有り。之を火米と謂ふ。○順和名に曰、畬（ヤイハタ）、刀永反、火田也。耕さずして火種することと也。（略）○これらの所說のごとく、毎春、山野をやくを云ふ也。

【年浪草】　月令に曰、仲春の月、川澤を竭すことなかれ、陂池を漉すことなかれ、山林を焚くことなかれ。註。三つの者の禁、皆生を傷くる意を謂ふ。云々。然れども田畑を焚くは、作物の害となる虫の根をたつ意なり。野山を焼くは諸草の能く生ずる爲なり。○爾雅翼に云、野人今歳山を焚くときは、則ち來歲草木繁生すと。云々。かくの如きの說によらば、田畑山野、倶に冬の内焼くべきか。畿内多く春に至りて焼く、又往昔冬も焼きたるや。○萬葉、（一）冬隱春乃大野乎焼人者焼不足香文吾情熾。

註　（一）萬葉卷七、「冬隱り春の大野を燒く人は燒き足らねかもわがこゝろ熾く」作者不明。

季題解說　二月になると諸所で野や山を焼くことが多い。かうして枯れた雜草や雜木を焼き拂つておくと、わらびやぜんまいなどの生え出ることも早いし、またこれを採り易くもある。害蟲驅除にもなる。その灰は肥料に

もなる。火を失することもある。
箱根山上仙石原あたりの野燒は、雄大な周圍の景色と相俟つて壯觀を極める。朝鮮では鼠火といつて、陰暦正月十四日の夕方から野を燒く。これは一種の競技であるが、さうしたのでなくとも一般にこの日に燒くといふ。子供たちが大勢集つて、夜遲くまで燒くのである。幾つもの組に別れて、松明やうの火種を持つて、あちこちと田野の枯草に火をつけて廻る。非常に壯觀であるとのことである。【參照】奈良の山燒(ナラノヤマヤキ)　畑燒く(ハタヤク)　芝燒く(シバヤク)
地理―燒野(ヤケノ)　燒山(ヤケヤマ)

【例句】

野山燒く

野とゝもに焼る地藏のしきみ哉　蕪村　（蕪村句集）
もの焚た乞食の火より燒野哉　同　（新五子稿）
野をやくや荒くれ武士の煙草の火　太祇　（太祇句選）
野を燒や小町が髑髏不言　几董　（井華集）
山燒や有情非情ももとの土　白雄　（白雄句集）
山燒やほのかにたてる一ッ鹿　同　（同）
野火つけてはらばうて見る男哉　一茶　（旅日記）
寐よ子供やける山から鬼が來る　同　（七番日記）
寢がてらや咄がてらや山を燒く　同　（同）
おれがのは野火にもならで仕廻けり　同　（同）
山燒の明りに下る夜舟哉　同　（同）
くゝつけた人も詠める山火哉　同　（一茶句帖）
出て見れば南の山を燒きにけり　子規　（子規句集）
小さき山眞丸く燒け了りたる　霽月　（新俳句）
草燒くや眼前の風火となりぬ　裸馬　（同）
手拭にのこる野燒の匂ひかな　百迷　（同）
一山を燒けば夜々燒く四山かな　てい　（懸葵）
岬燒のもどりの子等のうしろより　竹後　（倦鳥）
寐んとすれば山燒の火の窓明り　殘雪　（ホトトギス）
興福寺の提灯そこに燒くる山　濱人　（同）
山燒や搖れて下り來る小提灯　飛隼　（同）
齒朶裏の底燃えくゞり山火かな　泊雲　（同）
野火消しの戻りがや〳〵籬外　同　（同）
夕土間を掃くやはる〳〵燒くる山　彌廣　（同）
燒くる山笠置とき〻てなつかしや　春野人　（同）
山燒く火檜原に來ればまのあたり　秋櫻子　（同）
多摩川の堤燒きゐるわたし守　同　（同）
彌勒寺の棟の左の山燒くる　靜雲　（同）
山燒や賽の河原へ火のびたり　誓子　（同）

野山燒く

山燒や奈良の裏町人通り　嘯魚（ホトトギス）
明らかに風鐸見えて山燒くる　水峡（同）
山燒を見つゝ故郷の馬車にあり　乙女（同）
山燒のうつる障子を開きけり　旭川（同）
山燒の麓に暗き伽藍かな　櫻朶（同）
草燒くや流れそめたる飛鳥川　同（同）
山燒やみな鼻よせて神の鹿　十夜（同）
古き世の火色ぞ動く野燒かな　蛇笏（同）
佛像は塑彫り上る野火の月　同（同）
草燒や葛蔓帶してやま男　碧菁（同）
二階閉める時野火見えぬ日は淋し　呂柚（同）
阿蘇の野火あらはれ失せし夜汽車かな　偉邦（同）
夕野火や父を迎ひにそこらまで　成外（同）
厩戸に遠野火あかりある如く　泥中（同）
野火消して闇となりゆく人數かな　杜季子（同）
野を燒くやふところにある水滸傳　一杉（同）
犬つれて少年野火にふるまへる　鬼童（同）
次の野を燒くべくと勢子率てゆきぬ　左兵子（同）
草燒や畑遊べる岸の鼻　王城（同）
草庵に客あり草を燒きにけり　たけし（同）
秋篠や野火の中なる御陵道　草夢（同）
湖を渡る燦山火かな　北湖（續ホトトギス）
眞黑きチチハル城や野火明り　杜陵（同）
野火消えてたちまちくらき厩かな　土司夫（同）
山燒の火に照らさるゝ馬醉木かな　七堂（同）
橋の人二階の人や野火を見る　花蓑（同）
野火明りありて通へる渡舟かな　梧朗（同）
俳諧の浮間ケ原を燒きにけり　あふひ（同）
草燒いて眉毛こがして來し子かな　榮吾（同）
薊の座野燒のあとにほしいまゝ　其行（同）
燃えてゐる萑をあとに野火走る　聖樹（同）
野火のあと枸杞の實高く灯りをり　煤六（同）
野を燒いて歸れば燈下母やさし　虚子（句集虚子）
むさし野の浮間の原の草を燒く　同（續ホトトギス）

參考　萬葉集卷二、高市皇子薨ぜし時の柿本人麻呂の長歌の中に「捧げたる旗の靡さは、冬ごもり春さり來れば野ごとにつきてある火の風のむたなびくが如く」云々。又卷七、作者未詳「冬ごもり春の大野を燒く人は燒き足らねかもわが心燒く。」

奈良の山燒　三笠の山燒

季題解説　奈良の嫩草山の芝を燒く行事で、遠近の人が見物に集まりなかなか盛なものである。二月十一日紀元節の午後六時三十分から始まる。從て當日午後五時迄には登山の人拂をしてしまふのである。消防隊は早くから山裾に高張を立てゝ屯して、焚火をしながら時刻の至るのを待つてゐる。その間煙火を打ち上げる。點火して後は揚げ花火の外に仕掛花火をやる。合圖の太鼓で一齊に火を點ずるのであるが、點火には小松明を針金の先に括り、消防隊が一人々々その松明で點火して行くのである。この行事は昔東大寺と興福寺の境域について所屬の爭議が起り、他の五大寺の仲裁で兩寺立會の上、山を燒いて媾和して以來、毎年の例となつたものであるといふ。参照 野山燒く　地理 ―燒山

例句

奈良の山燒

三笠山燒

山燒くと佛の庭の人ゆきゝ　三山（ホトトギス）

三笠山燒けつゝ仕掛花火かな　敬子（續ホトトギス）

三笠山

松を守る高張のありお山燒　つとむ（同）

畑燒く　畑燒　畦燒

季題解説　地下にゐて春地上に出てくる蝗・浮塵子・螟蟲等の卵や幼蟲を殺すために、畠や藁や草や藤豆の蔓などに火を放つて燒くのである。これは一面その灰を肥料に役立たせるといふ目的にも叶ふのである。三月中行はれる畦燒きと云ふのがある。やはり目的は同一で、萱や草の枯れてゐるのに火をかけて燒くのである。参照 野山燒く　芝燒く

例句

畑燒く

たね瓶やぐるりにうつるやけ畑　浪化（浪化上人發句集）

水の上の吹きよわめゐる畦火かな　青畝（ホトトギス）

ひとすぢの畦の煙をかへりみる　素十（同）

めら〳〵と畦火かゝりぬ比翼塚　知廼（同）

百姓のぬつくと立てる畦火かな　櫻坡子（續ホトトギス）

大黄の燒けのこりたる畦火かな　鏡川（同）

畦燒くや鳶流れ來てかゝづらふ　一壺（同）

枯笹にたけりうつりの畦火かな　風生（同）

芝燒く

季題解説　早春の頃、山の芝・土堤の芝・畦の芝等を燒くことを總稱して云ふ。蟲や黴菌を殺すためでもあり、また灰が肥料となるからでもある。區

劃をつけて注意して焼かないと大火事を起すことがある。【季題】野山焼く　畑焼く

【例句】
芝焼く　僧も出て焼かるゝ芝や二尊院　　播水（ホトトギス）

磯開き（いそびら） 海草の口開き（かいさうのくちあき）

【季題解説】一般に食用海藻類は何れの地方でも、その發育繁殖を計るために、或る一定期が來るまで採集を禁ずるのが普通であるが、その採集の禁を解くこと、或は解禁の日を口開きといひ、その日村中學つて磯へ出ることを磯開きといふ。紀州地方では磯開きには各戸總出で、法螺貝を合圖に一齊に掻き始めるのであるが、なかなかの壯觀で一つの見ものであるといふ。口開きの日は、別段縣令といふやうなもので各地劃一的に定まつた譯ではなく、村々により、また年々の海藻の發育狀態により多少の遲速があるが、村人は德義的に口開きの日まで決して海入をしない。その日取りは海藻の種類によつても違ふので、南紀地方では、たとへば、岩海苔は舊正月頃、鹿尾菜は寒中乃至寒明後二月下旬頃まで、海蘿は彼岸過から四月に天草は最も遲く晩春初夏といふが如きである。通常は「天草の口開き」とか、「海蘿の口開き」とかいふやうに使はれる。口開きの日を選ぶには、潮わたり、時の都合のよい、そして日和續きの凪ぎの日を見定め、決まると村中へ觸れ歩く。村人は袋を作つたり、海草を掻く道具とか、浮桶（天草採に用ふ）とかを用意してその日を待つて居る。その日には一般に出仕事や畑仕事を休み、女子供は同時に磯遊びに出掛けるのである。口開き、磯開きの定めのある磯では、一般にこれが濟むまでは漫に磯遊びに行かないことになつてゐる。口開き前に磯を荒されないやうにするためである。

【參照】磯遊び（イソアソビ）

磯遊び（いそあそ）

【季題解説】野遊び、山遊びといふが如く、潮の退いた磯邊に遊ぶ春の行樂をいふのである。廣くいへば潮干狩のうちに包含されてもいゝものであるが、その間多少の相違がある。實際、砂濱のない斷崖續きの南紀沿岸などの磯遊び――同地方では事實磯遊びといひ習はしてゐる――の趣といふものは、品川・大森や堺・住吉などの遠淺の海で貝拾ひをする一般の潮干とは大分違つたものである。紀州の磯遊びは、鹿尾菜や岩海苔の「口開き」頃から始まり、舊の三月三日の大潮前後において最も盛んに行はれる。一家打ち連れ立つたり、近所を大勢誘ひ合せたりして、おむすびや酢の辨當を携へるのもあれば、或は鍋釜だの醤油だのを提げて行き、岩窪に竈を築き潮木を焚いて、獲物の魚介を調理して樂しむといふやうな連中もある。

行先は、附近でも形勝とせられてゐる何岬とか何島とかいふやうな、たつぷり一日がゝりくらゐの場所を選び、單に潮干の獲物をあさるといふよりも、久しぶりで一日の氣晴らし、遊山をするといふ氣分が多分に含まれてゐる。磯遊びの獲物、卽ち所謂「磯もの」の重なるものは、五色石とか珊瑚の片とか、海松・海百合・菊目石、その他珍らしい貝殼の類、海ほうづきの類、それから喰べられるものでは、流れよつた若布・岩海苔・あをさ・岩にくつついた貝類（なかにし・あかにし・にな・嫁の皿・瓜貝・からす貝など）などである。尤も「磯もの」は狹い意味で、この最後の食用になる小貝類（榮螺・鮑などははいらぬ）だけにいふこともある。この意味の所謂磯ものは、採つて來るとそのまゝ砂出しをして鹽茹でにし、縫針で中味を出して食膳に上す。種類により、特にあまいのや、少し苦味をもつたのや、いろ〱あり、總じて香しい磯の匂ひがあつて風味のよいものである。春先になると、裏町の駄菓子屋などに茹でたのを笊に盛つて賣つてゐるのを見掛ける。子供たちはそれを一錢二錢と買つておやつに喰べる。本業の漁師たちはずつと早く寒の中から彼岸頃まで磯ものを漁り、蜑の妻が平籠に入れて呼賣をして歩く。漁師の磯もの漁りはまた特殊の情景である。卽ち潮時が夜間である時を選び、暗い干潟のところ〲に、焚火をしたり石油ランプを點じたりして、磯ものを誘ひ寄せて箒のやうなもので掃き取るのである。火を焚いて暫く待つてゐると、濡れた岩の上を夥しい卷貝が火のほとりへ匍ひ寄つて來るといふことである。紀州あたりでは、この磯ものが出始めると「春が來た」といふ感じが誰にもするといふ。〔參照〕磯開き（イソビラキ）

例句

磯遊び

海人の子の黑さや春の磯遊び　可白（藤首途）

沖合に鯨見えしと磯遊　六村（續ホトトギス）

磯遊けふの一日のつゝがなく　三山（同　）

磯菜摘（いそなつみ）

古書校註

【年浪草】八重垣（一）に云、磯邊のわかな也。若菜の題によめり。新古、けふとてやいそなつむらんいせ島や（二）はちしの浦の海士の乙女子　俊成。若菜十二種の内、水雲あり、海藻の類も磯菜ならんか。

註（一）和歌八重垣、有賀長伯の著。（二）新古今集には「一志の浦の」と見えてゐる。

季題解説

長い間の冬籠りから解放されて、磯に出て見ると汐がぬるみ、鷗が舞ひ、礁にはくさ〴〵の磯菜が生ひ茂つて居る。そこゝの岩に蹲んで子供等が之を摘むに餘念がない。まことに長閑な風景である。〔參照〕磯遊び（イソアソビ）　摘草（ツミクサ）、

例句
磯菜摘　魚に飽く蜑が日比や磯菜つみ　露休（竹の友）
咲いてゐる磯ぎんちやくや磯菜摘　塵外（山茶花）

参考　古今集に「こよろぎのいそ立ちならし磯菜つむめざし濡らすな沖にをれ浪。」磯菜は海藻のこと。古語になといふは、魚菜の何によらずいふ。

桃の節句（もものせつく）　桃花節（たうくわせつ）　桃の日（もものひ）　雛節句（ひなのせつく）

古書校注
【山之井】けふは曲水宴のまねびといひて、桃の花と柳の枝を、銚子・瓶子などにつけつゝ、人にもこのさゝをもり内祝ひにも用ふ。是を俳諧には、桃の酒といひ傳へぬ。たゞ又もゝの花計りをも、あるは股、あるは百の數などによせて、けふの發句にしたるも侍る。よもぎのあも（一）つく事は、からの文にもあめると見ゆれば、おんぞろか（二）是もけふの題なり。すべて節供などいふ折は、園の桃には王母（三）をよせて、三千年の齢をあやかり物とことぶき、門の柳には、えんめい（四）が名をかりて、命を延ぶと祝ひなして、其心ばへ有るべきわざにや。
【滑稽雜談】仙源ノ節。王維（五）が詩集桃源行に云、春來遍是桃花水、不レ辨二仙源一何處尋。○けふの節を桃源、又は仙源などいふは、是等の桃花の故事也。
菅家文草（六）三月三日の詩序に曰、春の暮の月、月の三朝、天花に醉へり、桃李盛んなり。詩に云、煙霞遠近應二同戸一、桃李淺深似二勸盃一。
【年浪草】月令廣義に曰、唐の德宗、上巳を以て令節と爲す。桃花の節、之に據るか。（略）世諺問答（七）に曰、太康年中に山氏建山自然武陵といふ所に至りて、桃の花水に流れしをのみしより、三百餘歳に及べりと云々。令節と云ふも宜なり。
野客叢書（八）に云、今、五月五日を重五と曰ひ、九月九日を重九と曰ふといふときは、則ち三月三日も亦宜しく重三と曰ふべし。

註　（一）餅。（二）おろそかの意、いふもおろか。（三）西王母。（四）淵明（延命）。（五）唐の詩人。（六）菅原道眞の詩集　この詩序和漢朗詠集にも見ゆ。（七）一條兼良の著。（八）宋の王楙の著。

季題解説　五節句の一つで、三月三日の雛祭のことをいふ。陰暦によると、丁度桃の咲く頃であるし、桃花を挿して雛に供へ、桃花酒を酌みなどするので、特に桃の節句・桃花節・桃の日などと稱するのである。菊花節などと云ふよりも、鄙びて優しく聞こえ、桃源なども聯想され、暢びやかな感じがする。［参照］上巳（ジヤウシ）　雛遊（ヒナアソビ）　柳の鬘（カヅラ）　曲水の宴（キョクスヰノエン）

例句
桃の節句　節句明けてはまぐり煮出す障子哉　鬼貫（俳諧七車）
桃の日や蟹は美人に笑はるゝ　嵐雪（玄峰集）

草の戸も餅に搗く名を節句哉　也有（蘿葉集）
餅に搗ぬ草くふ牛も節供哉　同（同）
三月は薺も花の節供かな　同（同）
桃の日や雛なき家の冷じき　几董（井華集）
桃の日や下部酒もる蒸鰈　白雄（白雄句集）
烏賊の鬚ながるゝ小家の節句哉　曉臺（曉臺句集）
みよしのゝ里にも桃の節句かな　梅室（梅室家集）
沖の石日にあたゝまる節句哉　鯉走（千鳥掛）
桃柳くばりありくや女の子　羽紅（猿蓑）

上巳（じやうし）　重三（ちようさん）

古書校註

【日次紀事】俗に節供と稱す。年中五節供の一員也。中華、元上巳を用ひ、魏以後、但三日を用ひて、復巳を用ひず。本朝も亦之に從ふ。

【滑稽雜談】羅山文集に云、月令廣義に謂へらく、上巳は十幹の己也。辰巳の巳に非ず。蓋し二月晦日巳午に當るときは、則ち三月上旬巳の日有らず。故に知りぬ、十幹の己にして、十二支の巳たらざるを。然りと雖も、今に至りて、三日を推して己節と爲すは國俗沿襲、(一)因循(二)の習なり。○五雜組に曰、己の字、原訓止に作る。陽氣の此に止るを謂ふ也。○惠鎭家集の詞に云、曲水の宴は、我國には顯宗の御時始まり、家には寛弘・寛治の頃いできし事になん申し傳へたれど、其の後はきこえぬを、道を得給へるしるしにおこし行はんとて、文人・伶人(三)申し定めて、既に三日とぞ侍りしを、熊野火事(四)二日夕に聞えしかば、のべられけるになん。上の巳の日を取りても行ふ例あれば、十二日にはなど聞えし物を、詩句は徒らに文人の心にをさまり、柏子はむなしく伶人のたふさに殘りて、神なり又かみなりともいはず。

註 (一)昔からのしきたりにより從ふこと。(二)古い習慣を固守すること。(三)樂人。(四)「土御門御宇建永元年の事也。二月廿八日に熊野本宮炎上はべり」と其詳は附記してゐる。

季題解說 俗にじやうみとよむ。五節句の一、三月三日の節句をいふ。古代は三月上旬の巳の日を以て行はれたから、この名があるが、中世後は三月三日を以て佳日とせられたのである。それで重三ともいふ。この日兒女ある家では、男女一對の小人形を飾り、白酒菱餅などを供ふ。即ち雛祭である。なほ臺灣ではこの日上巳祭を行ふが、上巳祭は玄天上帝の誕生日を祀る祭事であつて、雛祭とは全く違ふ。**參照** 桃の節句（モヽノセック）　雛遊（ヒナアソビ）　宗教―巳の日の祓（ミノヒノハラヒ）

參考 支那の俗、三月上巳の日は、古來陽の極りし不祥日とせられ、水濱に行きて祓除した。後三日を以つてこれに代へた。漢書志に言ふ、「三月上巳、間人皆禊二於東流水上一、自洗濯祓除、章方事、平原徐肇以二三月一初生二三女一、至二三月一而俱亡、一村以爲レ怪、相携之二水濱一盥洗、遂因二流水一

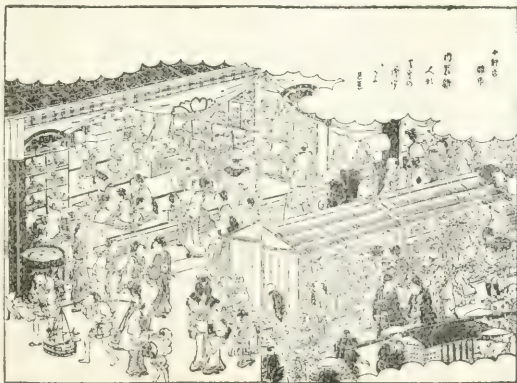
以濫觴、曲水起二於此一」とある。但しこの三女を失ひしより起るとするは附會の説であるといふ。

雛市（ひないち）　雛店（ひなみせ）

古書校註

【東都歳事記】　今日（一）より三月二日迄、雛人形同調度の市立つ。街上に假屋をしつらひ、雛人形諸器物に至る迄、金玉を鏤め造りて商ふ。是を求むる人晝夜大路に滿てり。中にも十軒店を繁花の第一とす。（略）十軒店本町・尾張町・人形町・淺草茅町・池の端仲町・牛込神樂坂上・麴町三丁目・芝神明前。元祿の惣鹿子に中橋の雛市を誌せり。今（三）はなし。

註　（一）二月廿五日。（二）本書の刊行は、天保九年戊戌

季題解説　雛や雛の調度を賣る市である。今日東京では、三越・松屋・白木屋あたりのデパートは大抵二月一日から雛を賣り始めるが、昔から雛人形で有名な日本橋十軒店では、二月十五日頃から雛市が立つ。十軒店も今は以前ほどの賑はひはないやうであるが、然し雛市らしい情景を見ようと思へば、東京ではやはり十軒店の外ないであらう。先年上州澁川の町に立つてゐる雛市を通りがゝりに見たことがあつたが、その地方特有の雛を並べた店が深山出てゐるさまを大へん面白いと思つた。かういふ田舍の雛市の方が、今日では寧ろ興味が深いやうに思ふ。都會のはたゞ美しいといふばかりである。【参照】雛遊ビ

例句

雛市

雛店の灯を引頃や雨の音　蕪村（落日庵句集）

雛店に彷彿として毬かな　召波（春泥發句集）

手のひらにかざつて見るや市の雛　一茶（一茶發句集）

手にとればはやにこ〳〵と賣雛　梅室（梅室家集）

雛市や山の奥にも女の子　津富（古今句鑑）

雛店に立ちふさがれる漁師かな　耿陽（續ホトトギス）

雛遊　ひひなあそび　ひた事　雛祭　雛の節句　雛　ひいな　初雛

古雛　譲雛　立雛　絲雛　豆雛　京雛　都雛　鴨川雛　室町雛

吉野雛　三輪雛　琉球雛　木彫雛　土雛　小米雛　菜花雛　紙雛

繪雛　懸雛　内裏雛　帝雛　女夫雛　官女雛　隨身雛　奴雛

五人囃子　雛箱　雛葛籠　雛壇　雛棚　雛屛風　雛の間　雛の宿

雛の宴　雛の客　雛の膳　雛の盃　雛の酒　雛菓子　雛の調度

古書校註

【御傘】　ひいなともいふ。鳥の名も同じ文字也。しかれば折をかへて誹には二句有るなり。又、田舍をひなともいふ。ひなの都・ひなの別・ひな人・あまさかるひなともよめり。（略）丸（一）おもへらく、人形のひな・鳥のひな・田舍をいふひな、皆各別ながら、いづれも二句づゝあらば、六句のひな、耳にたちてかしましかるべし。さやうの事は有るまじければ、若し六句迄出る會あらば、作者になりて用捨有るべき義也。さりながら、連に一句の物は誹に二句する習なれば、法度をやぶる理はなきことわりにまかせ、兼ねて制すべき事にあらず。

【山之井】　ひいな遊びといふ事、正月のあひだは、つちに三尺ほり埋むなどいひて、あまがつ（二）やうの物には手をだに觸れず。けふの節供を待ち出て、大領のまなむすめ、長者のおとひめも、ちひさやかなる屛風のうちに、折櫃だつ物、おつぼなどとりまかなひ、ひいなのとのと姫君に、柳のかづらをかけさせ、桃色のべゞにうちさうぞかせつゝ、（三）あなたこなたとし侍る。なやらふとていぬき（四）がこぼちしを、むづかり給ひけるは、元日とかや聞ゆるを、此の都のことわざは、いつの世に何者のいひ始めけんはしらず。

【日次紀事】　今日良賤の兒女、紙にて偶人を製し、是を雛と稱し、之を玩ぶは、元贖物の義にして、乃ち祓の具なり。或は母子と名づく。蓋しこの物を以て、母子の身體を撫で、水邊に於て之を解除し、或は桃花酒を飲むも、亦禊の事を修する微意か。

【滑稽雜談】　先代舊事紀に曰、敏達天皇二年春正月、侍從雛像を勸め奉る。太子聖德、親ら雛の形を取り、其の男の像・女の像を分ち、内儀・外儀を定めて、男女の別を見はし、之を立て之を位し、先皇の禮を以て諸童と遊び給ふ。言語動靜、并に古禮を以て之を教へ慰となす。既にして語り給はく、この遊は大夫の遊に非ず。向後幼女の遊とせよと。（略）源氏紅葉賀の卷に云、ひいなの中の源氏の君。云々、是若紫の雛遊びし給ひし事也。（略）雍州府志に曰、城殿といふ者、姓駒井氏、元三韓投化の人、始めは近江東坂本邊駒井に住み、京師に來住し、始めて扇幷に雛、天兒・犬張子等を製し、

禁裏に獻ず。（古來より雛とばかりは春にならず、あそぶとか祭とかの詞を入れて春也といへり。さも有るべし。近世其の沙汰なし、考ふべし。天兒は雛也。

註　（一）長頭丸。卽ち御傘の著者貞德。（二）木偶の類。（三）桃色の衣をきせての意。（四）源氏物語若紫の卷にある女童の名。

季題解説　五節句の一つである三月三日の節句に、雛人形に種々の調度を添へて飾る遊びである。上代には雛祭はなかつた、雛は昔支那で、上巳の祓に用ひた形代などから始つたものである。日本では天兒或は這子といふ人形やうのものを、子供の三つになる迄祓に用ひ、これに萬の凶事を托して祈つたこと等から轉化して、藤原時代には宮中で雛あそびをされたことが源氏物語・紫式部日記・枕草紙などにも見えてゐる。これ等の書物によると、當時は三月のことと限らず、また今のやうな雛と遊び、すべて紙雛の立雛であつたやうである。そして祓の人形を舟に乘せ、陰陽師の祓の後にはことごとく水に流したもののやうに見える。後三月上巳の節供を雛遊びの期と定めるやうになり、室町時代以來、三月三日諸臣參賀して祝ふやうになつた。そして夫婦の人形、卽ち坐雛を用ふるやうになつた。元祿・享保からます〳〵盛大となつてゆき、文化文政、天保頃は雛祭の隆盛期をなしてゐる。これは一つは十一代將軍が妾五十餘人、女兒頗る多く、ために民間にも雛祭が盛んとなつたものであるらしい。その後黑船渡來、御維新等で世間が騷しく、一時五節句も影を潛めた形であつたが、日淸役後、五月の尙武の節句と共に再び盛になつて來てゐる。昭和二年三月三日、アメリカから國際親善の使節、靑い眼のお人形が渡來し、これを正客として神宮外苑で一大雛祭が行はれたり、我が國の雛祭も追ひ〳〵外國にまで紹介せられつゝある。昔の雛は殆んど紙雛に綵どりをしたもの、卽ち主に立雛に限つたやうであるが、室町時代の坐雛から、始めて疊の上に毛氈などを敷いて雛人形を飾り、屛風・貝蛤・這兒・天兒・行器・繪櫃・お駕籠等を飾るやうになつた。德川時代からは雛段を高く設け、人形・白酒・菱餅を供へるやうになり、その後期に至つては、宮廷紫宸殿に似せて造り、内裏雛や調度類も蒔繪を施したりして、次第に豪奢な雛祭とはなつたものである。雛の種類は甚だ多く、陶製（淸水、伏見産）・布裂製（琉球雛）・糸製（さつま糸雛）・木彫雛（奈良）・皮製（三河かつらこ）・紙製（菜の花雛）等いろいろある。普通雛祭には、親王雛（内裏雛）・雪灯・白酒壺・官女三人・五人囃・矢大臣・使丁・菓子・左近の櫻・右近の橘・菱餅・雛の調度いろ〳〵、人形等、壇上に飾り、雪灯を灯し、子女の友達など招いて、樂しい一夜を雛の前で過すのである。雛の御馳走には、豆いり・胡葱膾・美しい雛菓子・菱餅・お白酒・桃の花、その他子供の喜ぶ御馳走をいろ〳〵作る。普通飾る雛も、靜御前・高砂・潮汲、その他澤山あるが、今日は大人の愛藏する

頗る凝つた藝術的な小さい雛が澤山出來てゐる。女兒の行末を壽ぐ意味だけでなく、美術的な見地から言つても雛祭は誠に美はしい行事である。立派なお座敷の雛祭もいゝが、また賤が伏屋の古めいた雛飾りなど、なかなかにあはれが深い。 参照 桃の節句 上巳 雛市 雛の使 雛合 雛流

例句

雛遊

太裏雛人形天皇の御宇とかや　芭蕉　（江戸廣小路）
草の戸も住替る代ぞ雛の家　同　（奥細道）
振舞や下座に直る去年の雛　去來　（去來發句集）
綿とりてねびまさりける雛の貌　其角　（五元集）
雛くれぬ人を初瀬の棧敷かな　同　（同　）
もどかしや雛に對して小盞　同　（同　）
傳へ來て雛の寶や延喜錢　同　（同　）
見てのみや盜まぬ雛は松浦舟　同　（同　）
おはしたに木兎もあり雛座敷　同　（同　）
雛やそも碁盤にたてしまろがたけ　同　（同　）
ひなやその佐野の渡りの雪の袖　同　（同　）
段のひな清水阪をひと目かな　同　（同　）
折菓子や井筒に成て雛のたけ　同　（同　）
雛のさま宮腹々にましまける　同　（同・）
かつらぎの神はいづれぞ夜の雛　同　（五元集拾遺）
世忘に我酒かはん妵が雛　同　（同　）
上坐ほど雛のすがたの新なり　同　（同　）
紙雛のさらさらしさよ立すがた　同　（同　）
うまず女の雛かしづくぞ哀なる　嵐雪　（玄峰集）

上巳

隣々雛見廻るゝ小家かな　同　（同　）
三月の三日平氏やひなあそび　許六　（五老井發句集）
明星の東へちろり夜の雛　支考　（蓮二吟集）
千代といふ鶴にも雛の道具だて　杉風　（杉風句集）
手とゞかぬ琴にもてなす雛かな　沾德　（俳諧五子稿）
舟肴や馬に附行雛の箱　桃隣　（古太白堂句選）
鑓もちや雛のかほも戀しらず　千代女　（千代尼發句集）
轉びても笑ふてばかり雛かな　同　（同　）
とぼし灯の用意や雛の臺所　同　（同　）
たらちねの抓までありや雛の鼻　蕪村　（五車反古）
古雛やむかしの人の袖几帳　同　（蕪村句集）
箱を出る貞わすれめや雛二對　同　（同　）

雛遊

雛祭る都はづれや桃の月　蕪村（蕪村句集）
雛の灯にいぬきが袂かゝるなり　同（蕪村遺稿）
ところも手は露の光や紙びゝな　同（同）
細き灯に夜すがら雛の光かな　同（落日庵句集）
桃ありてます〳〵白し雛の殿　太祇（太祇句選）
紙びなや立そふべくは袖の上　同（同）
掃あへぬ桃よさくらよ雛の塵　同（同）
下手の焚くひなの竈ぞ賑はしき　同（同）
雛の宴天井に雲畫せん　召波（春泥發句集）
有常は娘育てゝ家の雛　同（同）
雛の宴五十の内侍醉れけり　同（同）
紙雛のたひや合羽に桃の花　也有（蘿葉集）
櫻さく宿やよし野の内裡雛　同（同）
横に見る影法師はなし紙雛　同（同）
お細工の不形を雛の上座敷　同（同）
ひなの日や藏から都遷しけり　同（同）
脊縫は屏風に暗し雛祭　同（同）
立待は花にも有か紙雛　同（同）
おのこりの桃やいぬきか雛祭　同（[illegible]の落葉）
桃櫻白髪の雛もあらまほし　蓼太（蓼太句集）
消かゝる燈もなまめかし夜の雛　同（同）
三日四日の細みも雛の月夜かな　同（同）
つれ〴〵と月見て立り紙雛　同（同）
雪信が屏風も見えつ雛祭　几董（井華集）
うら店やたんすの上のひな祭　同（同）
雛酒や汐干を語る國家老　同（同）
雛の日や翌旅にたつ客もあり　同（同）
紙雛はあるがうへなるみやびかな　白雄（白雄句集）
蠟燭のにほふ雛の雨夜かな　同（同）
みなあらた產家に隣る雛かざり　同（同）
旅人の窓よりのぞくひひなかな　同（同）
世の雛にみな折とりそ遲ざくら　同（同）
雛の間にとられてくらきほとけ哉　曉臺（曉臺句集）
醉ざめやほのかにみゆる雛のかほ　同（同）
齋坊を今朝は雛の一座かな　同（同）
すゞめ子も來るや雛の膳まはり　士朗（枇杷園句集）
呑雛は花見る顏に書にけり　成美（成美家集）
煙たいとおぼしめすかよ雛顏　一茶（旅日記）

み肴に櫻やよけん雛の前　同（七番日記）
けふの日もがらくた店の雛哉　同（同）
御雛をしやぶりたがりて這ふ子哉　同（同）
へな土でおッつくねても雛かな　同（同）
煤け雛然も上座を召れけり　同（一茶句帖）
生酔の張り番なさる雛かな　同（九番日記）
古い雛いつち上座にましましける　同（同）
浦風にお色の黒いひゝなかな　同（嘉永版發句集）
花咲カぬかた山かげも雛まつり　同（同）
雛の君あづまくだりをなされける　乙二（をのゝえ草稿）
梨の木のかげに幾代の雛かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
あら壁に雛落つく燈かな　同（同）
寶盛が侘し姿を雛哉　梅室（梅室家集）
誰か來て遊ぶや雛の烟草盆　車來（初便）
雛に留守預けて出たり汐干狩　利久（月影塚）
葛城の紙雛寒し山かづら　淡々（淡々句集）
煤けたる壁にほのくらし紙雛　雪芝（ありそ海）
昔男昔女や紙雛　乙兒（類題發句集）
雛祭鼠のひきし小盞　來靑（夢隨筆）
雛の影桃の影壁に重なりぬ　子規（子規句集）
おびたゞしく古雛祭る座敷かな　同（同）

皇太子妃冊立

伏して念ふ雛の如き御契　同（同）
小田原へ雛買ひに行く小雨かな　肋骨（新俳句）
百姓の馬繋ぎけり雛の店　秋竹（春夏秋冬）
古雛や貝の剝げたる貝屏風　無事庵（同）
竹田の淡墨の雛掛けにけり　滴々（同人）
灯ともせば皆額丸ろき雛かな　六皂子（懸葵）
岩に垂るゝ汐木櫻や雛の宿　照葉（同）
雲深きさまに雛を祭りけり　黒鍬（同）
雛屏風に近江の海のけしきかな　虚明（俳鳥）
窓に月のありけり雛は既に知る　水巴（ホトトギス）
襖の裏見えてあはれや痩せ雛　淺茅樓（同）
隅田川の明るき部屋の雛かな　亞石（同）
一幅の繪雛の春や草の宿　橙黄子（同）
雛流し椿したゝか瓶に挿す　濱人（同）

玉泉花にて

御佛に隣りて雛の灯かな　春梢女（同）

雛遊

衣手の松の色はえ木彫雛　秋櫻子（ホトトギス）
古妻のひゝなつくりす遊かな　公羽（同）
雛の間や使ひ慣れにし伊豫訛　默禪（同）
たゞ掛けて杓子ひゝなのおもしろし　井山（同）
雛の座にカチ〳〵山の屏風かな　虚吼（同）
かくし子に雛を祭りぬ比丘尼寺　只管（同）
昇降機しづかに通る雛の前　墨石（同）
夫婦して俳句作るや雛の宿　たけし（同）
降り出でし雪見に立てり雛の前　泡水生（同）
雛の灯の躍りて外は風雨かな　其月（同）
古ひなや華やかならずろうたけれ　久女（同）
雛段やはる〴〵在す内裏雛　たかし（同）
いとけなき佛の前の雛かな　立子（同）
口かるく開きておはす雛かな　百日紅（同）
はまぐりのめらとの雛でありにけり　てい子（同）
かくし子のみめうるはしきひゝな哉　一杉（同）
雛の灯のとぼるを見つゝ雨やどり　青火（同）
雛段の大蛤の鳴きにけり　義王（同）
貝雛と貝をとぢたる別かな　たゝし（同）
古雛の何か失せゆく雛をさめ　つや女（續ホトトギス）
水臺の古りにし反古や雛をさめ　たかし（同）
看護婦の持寄祭る雛かな　今夜（同）
奥高麗に送られし雛つゝがなし　丁子（同）
ひらかれてこぼるゝ箱や雛屏風　雨意（同）
雛の箱つみ重ねたる別かな　茂葉（同）
人をらぬ雛の座敷を通りけり　長（同）
引汐にはしりながるゝ雛かな　あい子（同）
大原路のとある草家の雛祭　富太郎（同）
雛の間の夜の衾を運び去る　和香女（同）
招かれて去年の雛がなつかしく　つる女（同）
あづかりし娘もありて雛祭　白山（同）
雛の間の天井にゐる鼠かな　波津女（同）

薩摩・帖佐土雛
十の指紅に染まりて雛作　牧也（同）
雛の首挿し違へたるをかしさよ　無患（同）
雛の宿兵士の宿となりにけり　虚吼（同）
古雛を今めかしくぞ飾りける　虚子（句集虚子）

【參考】雛の事は、齋宮女御集・源氏物語・枕草子等に見えてゐるが、い

づれも人形遊びの意で、三月三日にこれを祭ることは見えない。崇神天皇の御時、和珥坂の少女の歌に「ひめなそびすも」とあるをその濫觴とする說あれども、これは別義であらう。三月三日に雛祭を行ふのは、寛永六年明正天皇御卽位に因み、國母東福門院によつて始められたのであるといふ。今日行はるゝ如き形式の雛祭は、或はこれに始つたでもあらうが、もと雛人形を祭るは、これに酒食を供して人界の災害を攘はうとする習俗より出たもので、三月三日にこれを行ふやうになつたのも、全然禊祓と關係なしとは云はれないであらう。

鏤人

古書校註

【栞草】 唐の時、三月に鏤人・蒸餅と云ふあり。鏤人は此方にいふ雛人形のたぐひなるべし。

油花卜

古書校註

【滑稽雜談】 圖經に曰、池陽上巳の日、婦女薺花を以て油を點じ、祝ひて之を水中に灑ぐ。若し龍鳳花卉の狀を成せば則ち吉也。之を油花の卜と謂ふ。

註 ○滑稽雜談三月の部に出で、この項の前に「錢龍宴」、後に「蠶市」「蚺蛇衣」が見え、その終りに「是等の數箇條、和國において沙汰なければ、作意も適々に有るべきや、工夫あるべし」と其諺が說いてゐる。

雛の使

雛の駕籠

季題解說 元祿の頃、節句の禮とて雛人形を乘物に乘せ、白酒の樽・草餅の行器などを釣臺に乘せて親類へ贈つたことをいふ。雛人形の乘物は鋲打で蒔繪を施し、朱の總を附けなどした。これを雛の駕籠と云つた。俳諧日本國に、「奥深き疊の上のありがたさ」といふ句に「雛の使の酒の弱足」と附けてある所から見れば、豪奢な元祿頃の雛祭の一風景として、雛の贈答の美しい有樣も偲ばれ、面白く思はれる。今日かゝる風習が行はれてゐるかどうかは判明しない。 參照 雛遊

例句

雛の使

春風にこかすな雛の駕籠の衆　　荻　子（猿　蓑）

ひなの駕花のかげよりみえそめぬ　　士　朗（枇杷園句集）

雛合

季題解說 雛祭の前後に行はれる遊びで、大體に人形を比べ合つて遊ぶことと解していゝ。今も一部の階級には殘つてゐるかも知れないが、一般には

廢れてゐる。しかし極彩色を施した貝殼などに入れてある豆雛の男と女とを合せる遊びは今も行はれてゐる。參照 雛遊(ヒナアソビ)

雛流し(ひなながし)

季題解説 雛を流すといふことは、雛の起源である形代を水に流す祓除から來てゐることであらう。今日この俗はどこにもあることではないやうであるが、相州愛甲郡敦木邊では、古雛の損じたのを川(相模川)に流す古俗があつたといふことである。田舍を歩いてゐると、道端の木の洞とか、畑の畦などに、古雛を納めてあるのは見かけることがある。紀州加太地方には、古雛を各地で流すと必ず淡島神社の渚に漂著するといふ傳說がある。

參照 雛遊(ヒナアソビ)

例句

雛流し

男の雛の俯向きたまひ波の間に　誓子　(ホトトギス誌)

流し雛冠をぬいで舟にます　同　(同)

柳の鬘(やなぎかつら)

古書校註【年浪草】酉陽雜俎に曰、唐の制、三月三日、侍臣に細柳圈を賜ふ。言ふ心は、之を帶すれば、蠆毒を免るとなり。このゆゑに、柳鬘をかくるなるべし。又一說に、陶淵明、桃柳を好みて柳五本の内に住みて、齡を延ぶ。依つて五柳先生と稱す。本邦にも是を嘉儀に取り傳へて、世俗上巳に柳を桃に必ずさしまじへ、雛祭にも供し、髮にも挿す也。

季題解説 唐の俗として、三月三日の節句に、葉のついたまゝの柳の枝を帶ぶれば疫疾を除くと稱し、髮に挿して飾りとしたといふ。これが我が國にも傳つて、柳桃をさし交ぜて雛に供へ、また髮に挿んで嘉儀とするやうになつたのである。或はまた陶淵明が桃柳を好み、これを植ゑて齡を延べた故事から出てゐるともいふ。參照 桃の節句(モモノセック)

曲水の宴(ごくすゐのえん)

きよくすゐのえん　めぐりみづのとよのあかり　曲水の遊(ごくすゐのあそび)

羽觴(うしやう)　流觴(りうしやう)　盃流し(さかづきながし)　巴字盞(はじさん)　鸚鵡盃(あうむはい)

古書校註【滑稽雜談】日本紀に曰、顯宗天皇の元年三月戊辰朔、己巳、後苑に幸して曲水の宴を爲し給ふ。同二年春三月壬辰朔、癸巳、後苑に幸して曲水の宴を設け給ふ。是の時、公卿・大夫・臣・連・國造・伴造、盛集して宴を爲す。羣臣頻りに萬歲を稱す。(略)公事根源に云、曲水の宴は周の世よりはじまりけるにや、文人ども水の岸になみゐて、水上より盃をながして、

我が前を過ぎざるさきに詩を作りて、その盃をとりてのみける也。羽觴(一)を飛ばすなどいふも、此の事なるべし。又上巳のはらへとて、人みな東流の水上にてはらへするよし、漢書などにしるせり。(略)荊楚歳時記に曰、三月三日、泗人並に江渚池沼の間に出で、流杯曲水の飲を爲す。是も曲水の事なり、和歌・連俳なんどに、盃をながすなどいふも此の事也。この曲水の盃には鸚鵡貝を用ひるよし、諸書に見えたり。○塵添壒囊抄に曰、曲水の地勢は巴の字に似たり。此の會は、周の世の先より始まれり。其の後久しく絶えたるを、魏の文帝の時、又興し給ひける也。高卑をいはず、詩の善惡遲速によりて、臣下の才を試みん爲と也。

【年浪草】(二)むかし王卿など參りて、御前にて詩を作り講ぜられけるにや、御溝水(ミカハ)に盃をうかべて、文人以下これをのむよし。康保の御記(三)にのせられたり。又雄略天皇元年三月上巳日、後苑にみゆきして、めぐり水のとよのあかりきこしめすと日本紀に有り。

註 (一) 雀の形をした盃、一說に羽を飾つた盃。(二) 公事根源の所說。(三) 村上帝の御代の記。

季題解説　盃を曲折した水流に浮べて詩歌を作る遊戲である。この遊びは、我が國でも中世の頃、主上の出御もあつて貴族の間に盛に行はれたことが歷史に載つてゐるが、もとは支那に起つたもので、六朝から隋唐の頃などの貴族や文士等の遊びであつた。三月三日の節句に、庭園内の曲水の上から盃を流し、下に至るまでの間に一詩を賦し、詩が出來なければ罰盃を飮むといふ遊びである。王羲之の「蘭亭序」に、會稽山陰の蘭亭に文人四十餘人が會合して、流觴曲水の遊びをなしたとあるのは有名な話である。我が國では曲水の宴會を訓で、めぐりみづのとよのあかりともいつてゐる。巴字盞といふのは曲水の形の巴字に似たところから起り、また鸚鵡盃といふのは鸚鵡の形に似た貝があつて、よく水に浮ぶのでこれを盃に用ひて流したところからいふのである。參照 桃の節句　上巳

例句

曲水の宴

曲水にあの氣遣ひは茶碗かな　其角（五元集）

曲水や筧まかする宿ならば　同（同）

曲水に病後の僧の苦吟哉　召波（春泥發句集）

曲水や江家の作者誰〳〵ぞ　同（同）

曲水はとても日和のゑんならん　白雄（白雄句集）

曲水の宴　きよく水やまさに小貝の跡むすび　白雄（白雄句集）
曲水に秀句の遲参氣色あり　曉臺（曉臺句集）
筆添ておもふ盃流しけり　一茶（一茶句帖）
曲水やどたり寢ころぶ其角組　同（同　）
盃よ先流るゝな三日の月　同（發句題叢）
川下や果は鬮とりの小巵　同（嘉永板發句集）
曲水や岸にも月の小盞　黑花（月影塚）
曲水や草のむしろに重硯　平砂（古今句鑑）
曲水や桃の落花の片流れ　鳴球（春夏秋冬）
曲水や椿も流れ來りけり　虛子（句集虛子）

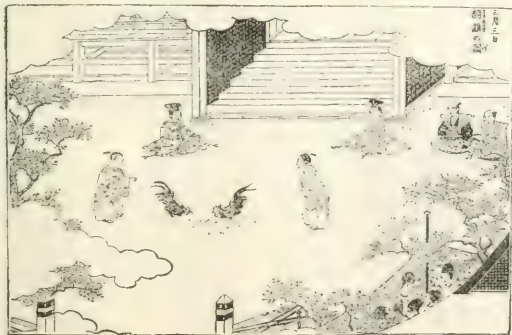
【參考】 曲水のこと、上巳の條に出てゐる、日本書紀顯宗天皇元年三月の條に後苑に幸し曲水の宴すとあるを、本朝に於ける初見とする。翌年の條にもあつて、群臣に宴を賜つた事が見える。この日文人を召して詩を賦せしめ、上流より觴を流して詩を作り得し者、流れ來る觴を取つて酒を飮む寛治五年三月、關白藤原師實が、六條の水閣で行つたのは、最盛儀であつたと傳へる。

鶏合（とりあはせ）　鬪鷄（とうけい）　勝鷄（かちどり）　負鷄（まけどり）

【古書校註】

【山之井】　禁中に鷄のけづめ強きをえりて、かた〴〵より奉らせ給ふを、おまへの白洲にて、蹴合はさせ給ふ事もけさ侍(一)る。からやうの事どもは、いさゝか其の日のあひしらひなくば、季なしといへるしらぬ俗難もや侍らん。

【月次紀事】　禁裏清涼殿南階の前に闘鷄あり。其の鷄、諸家中・雲客之を出さる。仙納彌市、此の事に預り勝負を決す。是も亦行事と稱す。(二)

【滑稽雜談】　闘鷄は周の世より始まり、民間に及ぶ。唐の玄宗これを翫ぶ由也。皆是、清明の頃おほく戲れとなす。和俗、又三月三日に、しきりに翫ぶ事也。いづれの代にか、禁裏・院中なんどにも御覽有りし由侍れど、いまだ慥かなる說を聞き侍らざる也、此の儀、又上巳には限るべか

らざるか。

註（一）三月三日。（二）其諺の說に、「當代禁裏においては、淸涼殿のほとり、櫻の御庭と云ふ所にて行はるゝ。檢非違使の下使に火丁と云ふ者出でて鷄を合はす。凡そ十番なり。鷄は內々縫座の公家より奉られて、年每に行はるゝといへども、內々の沙汰にて別の仔細なし。打ちまかせたる公事には侍らずかし」と見えてゐる。

季題解說 牡鷄を合せて鬪はしめ、勝負を爭ふのであつて、昔は禁裡でも淸涼殿南側に鬪鷄の戲を行はせられたものである。一體草の萌えはじめるころになると、人がさせなくても、鷄の牡は二つ寄ると眼を瞋らせ、首の羽を逆立て、頭を地にさげて相向ひ、機を見て相手を蹴倒さうと爭ふ習性のあるものである。勝鷄は得意になつて、屹度首をのばし羽搏をして高らかに時をつくり、負鷄は鳴かないで畑の中や草の間に去る。鬪雞を遊戲とし、或は賭博の目的でやることが、全國に流行して居た時は、强い鷄をもつて盛な勝負をしたものである。今でも警察の目を忍んで人目を避け、裏庭や空地で、疊や戶板のかこひをして四方から人がとり圍み、血みどろの鬪をやらせるものがある。禁裡の鬪鷄は古く支那から傳つたことで、朱雀天皇の御宇に鬪鷄十番があつたことなど歷史に載つてゐる。

例句 鬪鷄

勝鷄の世は若衆に抱れけり　言水（俳諧五子稿）
順禮はよ所に拜むやとり合　其角（五元集）
鷄の獅子にはたらく逆毛かな　同（同）
鶴を畫く雲井の空や雞合　太祇（太祇句選）
勝雞の抱く手にあまる力かな　同（同）
鷄合左右百羽を分チけり　召波（春泥發句集）
鞘のしはがれ聲に名乘けり　同（同）
雌は笑止な顏や鷄あはせ　也有（蘿葉集）
あげくには泣出す子あり鷄合　同（同）
とり合せ目もみえず成て哀也　曉臺（曉臺句集）
鬪雞を鞄に入れて行きにけり　南鷗（同人）
鬪鷄抱いて宵に裏戶出でにけり　九爾（懸葵）
敵の家に鷄を合せて食事かな　月舟（ホトトギス）
勝鷄の嘴剖つてうたひけり　左右亭（同）
鷄の影をどり重なり鬪へり　羽公（同）
鷄合人輪もろ共移りけり　啼魚（同）
負鷄のとさか沈みぬ草の中　木長（同）
鷄合す砂丘のかげの人輪かな　砂漠丘（同）
木のまたに童見て居り鷄合　三洲（同）
鷄合はす人輪の外の兒を拾ふ　不美（同）
いだきたる賭鷄時をつくりあひ　炎雨（續ホトトギス）

參考 倭名類聚抄に「鬪鷄、玉燭寶典云、寒食之節、城市多爲二鬪鷄之

戯一（闘雞此[illegible]）」とある。支那にては古く列子・左傳に闘鷄見え、本朝にても日本書紀雄略天皇の巻に見え、又闘鷄稲置・闘雞國造の氏姓が傳つてゐる。三代實錄元慶三年二月二十八日の條には「天皇於弘徽殿覽闘雞」とあり、室町時代に入りては三月三日にこの事が行はれた。世諺問答に「もろこしの事にや、明皇と申す御門たはぶれに鷄を闘はしめ給ひしに、程なく位につき給ひしより小兒五百人をえらび、治鷄坊といふ所を建てゝ鷄をたかはせられしとかや。またかの明皇は、乙酉の歳生れ給ひしゆゑ、闘雞をこのみ給ひし由東城老子傳と申すものにみ侍りし」。禁祕御抄に「幼主時小鳥合幷鷄闘常事也。予細無定樣、又遣馬部吉上取小家小鳥鷄流例也。如此興遊幼主御時事歟」とみゆ。

汐干（しほひ）

汐干狩（しほひがり）　汐干船（しほひぶね）　貝掘る（かひほる）　汐干潟（しほひがた）　干潟（ひがた）

古書校註

【御傘】　**潮は鹽海の事也。連には三色にわかちて（一）一づつするなり・誹には潮をのけて残る二色の鹽、いづれなりとも折をかへて二句もあるべし。**

【日次紀事】　今日（二）海潮大いに乾く。泉州堺の浦特に甚し。故に、諸人競ひ集りて、蛤蜊を拾ひ、小魚を執る。洛の人も亦之に赴く。

【滑稽雜談】　貞德師云、潮干とばかりは雜也。住吉の潮干は春也。此の説によつて古俳書に、住吉の潮干と記せり（三）今日の潮干、住吉に限るべからず。諸國の海上も此の日には潮干る事侍り。然れども住吉の浦は景色もすぐれて、其上京都近き海濱なれば、京家の貴客或は逸士に至るまで、此の地に來りて、貝ひろひ藻をかきて遊興となせり。之に依りて、此の所潮干を眺望する第一の壯觀の地なれば、住吉の潮干名高き物か。又は武州江戸品川の潮干など、江戸にちかければ、又眺望の興おほかめる。（略）常に潮後三日は潮勢大なれば、汐勢も又大なり。ことに又三月は時において春也。陽の中たれば、今日潮の干す事すぐれたるならし。潮は汐の滿てるを云ふ。汐はしほのかわくを云ふ。又、朝を潮と云ひ、夕を汐と云ふ説も侍る也。猶、此の道の識者に尋ぬべし。

【東都歳事記】　當月より四月に至る。其の内三月三日を節とす。南風烈しければ汐乾兼ぬるなり。凡そ潮汐の來去は國所によつて大いに違へり。又四季にて遲速あり。月の大小によりても一定しがたし。或人云、今世に朔日を六時四分の滿と心得たるは大坂の汐なり。朔日正六時を滿と定めて可なりといへり。芝浦・高輪・品川沖・佃島沖・深川洲崎・中川の沖。早旦より船に乘じてはるかの沖に至る。卯の刻過ぎより引き始めて、午の半刻には海底陸地と變ず。こゝにおりたちて蠣蛤を拾ひ、砂中のひらめをふみ、引き殘りたる淺汐に小魚を得て宴を催せり。

註（一）三色に分つとは、「鹽、只一、時に一、潮一、以上三也」といふ例をいふ。（二）三月三日。（三）毛吹草には「住吉潮干」は見えてゐるが、たゞ潮干といふ名稱は擧げてゐない。

【季題解説】 陰暦三月三日前後、潮の干ることが最も甚だしい。俗にこれを大潮と云ひ、行樂の一つとして、干潟に出て蛤・淺蜊などの貝を拾ひ、或は貝を掘つて遊ぶ。大潮の時に限らず、その時節になれば津々浦々で行はれる。沖には春霞が棚曳き、ふりかへる陸の山々には盛りの花がぼうと白い。潮の遙かに退いた干潟の遠近に、赤い裳裾がちらばつてゐる風情などは眺めるだけでも大へんいゝ。泉の堺の浦など昔から有名であるが、東京灣殊に品川沖の汐干狩なども馴染が深い。【參照】蛤 淺蜊

【例句】

汐干

上巳

龍宮もけふの鹽路や土用干　芭蕉（六百番發句合）
青柳の泥にしだるゝ潮干哉　同（炭俵）
岸陰やけふは汐干の淡路山　鬼貫（俳諧七車）
汐干には淀まで淺し水車　言水（俳諧五子稿）

骨臭餞別

汐干つゞけけふ品川を越る人　素堂（同）
海士の子の神子町に行汐干かな　來山（いまみや艸）
上り帆の淡路はなれぬ汐干哉　去來（去來發句集）
汐干也たづねて參れ次郎貝　其角（五元集）
親にらむ比目魚を踏ん汐干かな　同（同）
紀國の鯛釣つれてしほ干かな　同（同）
江島や旦那跡から汐干貝　同（五元集拾遺）
貝つるや白洲の末の流れ松　同（同）
しほひくれてこ蟹の裾引なごり哉　嵐雪（玄峰集）
けふの汐干讃岐が嘘を沖の石　杉風（杉風句集）
帶ほどに川も流れて汐干かな　沾德（俳諧五子稿）
貝もなき磯辿り行汐干哉　桃隣（古太白堂句選）
青柳のけふは短きしほ干かな　千代女（千代尼發句集）
拾ふもののみな動くなり鹽干潟　同（同）
海士の子に習らはせて置汐干哉　同（同）
蝶〳〵のつまたてゝ居る汐干かな　同（同）
ぞうり買小家うれしき汐干哉　蕪村（落日庵句集）
二里程は鳶も出て舞ふ汐干哉　太祇（太祇句選）
御供してあるかせ申汐干哉　同（同）
まてといふ貝や汐干の置みやげ　也有（蘿葉集）
よそにきく潮干や瀨田の蜆取　同（同）
帆ばしらにあたら風ふく潮干かな　同（同）
獵師には蒔で逢ふたる潮干かな　同（同）
遠眼鏡には帆もはしる潮干かな　同（同）
蛤の茶屋も吐べき潮干かな　同（同）

汐干

さそふても蝶は野に居る潮干かな　也有　（蘿葉集）
川魚の海へ買るゝ潮干かな　同　（同）
誰が袖ぞ汐干に見ゆる沖の石　同　（蘿の落葉）
海中に忘水ある汐干かな　同　（同）
ふり返る女ごゝろの汐干かな　蓼太　（蓼太句集）
落かゝる日に怖氣だつ汐干哉　几董　（井華集）
ひや〳〵といくり踏しる汐干かな　白雄　（白雄句集）
濱揚の牛はるかなる汐干かな　同　（同）
春干潟人の歩みのすぐならず　同　（同）
あと先の小舟をちから汐干狩　同　（同）
歩み來ぬ岬のなりに汐干狩　同　（同）
誰か有汐干うつさば河原松　曉臺　（曉臺句集）
汐干ともしらで過ゆく波間哉　士朗　（枇杷園句集）
西行は汐干を見てもなかれけり　成美　（成美家集）
歸らうといふまで人の汐干かな　同　（同）
汐干潟雨しと〳〵と暮かゝる　一茶　（旅日記）
女から先へかすむぞ汐干潟　同　（同）
青空のとゝはづれ也汐干潟　同　（一茶句帖）
人眞似に鳩も雀も汐干哉　同　（發句題叢）
松の聲けふの汐干も暮ぬべし　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
犬も出て汐干の川を渡りけり　同　（同）
神風といふかぜの吹汐干かな　梅室　（梅室家集）
此夕月一つ見る汐干哉　鶯文　（京水）
赤裏を著た貝もある汐干哉　和汐　（桃首途）
けふ汐干淡路の鐘も聞ゆべし　渭白　（新選）
やね舟の遠くも來ぬる汐干哉　津富　（句鑑）
汐干狩硯に似たる貝も哉　沾義　（吐屑庵）
手を洗ふ潦あり汐干潟　米翰　（[illegible]隨筆）
墨吐て烏賊の死居る汐干かな　子規　（子規句集）
汐干より今歸りたる隣かな　同　（同）
夕鴉浪に追はるゝ汐干かな　雪腸　（新俳句）
少女子や汐干の蟹にはさまるゝ　古洲　（同）
別莊の裏を人出る汐干かな　極堂　（春夏秋冬）
鰕はねて女驚く汐干かな　別天樓　（同）
潮干狩袋の貝が鳴きにけり　郊雨　（同人）
海苔粗朶の上に掘りぬ汐干舟　雨青　（[illegible]葵）
汐干舟はや上げ汐の波の上　竹後　（倦鳥）
汐干潟遠く見て著く渡舟かな　蓼雨　（ホトトギス）

賣りに來る大蛤や汐干狩　怒愛庵（同）
汐干潟望んでかくる襷かな　爽雨（同）
はるかにも殘る一人や汐干潟　大波（同）
わだつみの遙かの波や汐干潟　夢仙（同）
松原を打連れ來たり汐干潟　越南樓（同）
汐干岩藻をうちかぶり現れし　素十（同）
沖なるや鵜のとまりたる汐干岩　秋櫻子（同）
ぬるき汐つめたき汐や汐干狩　風生（同）
艦の銅鑼響き亘りぬ潮干狩　溫石（同）
岩かげや何に興じて汐干妻　淸三郎（同）
ひろ〳〵と町裏かけて干潟かな　瓢舟（同）
鵜のとりの近く來てゐる干潟かな　竹舟（同）
足許に眞水流るゝ汐干かな　乞合（同）
わが採るは日こぼしばかり汐干貝　淸子（同）
汐干潟貝割といふ鳥飛べり　刺花（同）
しみ出づる水美しき干潟かな　耿陽（續ホトトギス）

三溪園

園内を汐干の人のゆきゝかな　佺子（同）
汐干狩して居る上の紀三井寺　渭月（同）
汐一纏さげて潮湯の廊下かな　爽雨（同）
沖船の動きをぬけり汐干潟　虚子（句集虚子）
汐干狩潮の流に板渡す　同（續ホトトギス）

踏青（たふせい）　青きを踏む　あをきふむ

古書校註

【滑稽雜談】　詩註に曰、蜀人正月の半、士女遊嬉、踏青と曰ふ。○黃山谷（一）の詩に曰、白々紅々相間開、三々五々踏靑來。○これらの句、踏靑ならし。初春より中春迄の詞ならし。千首。唐人の立出て遊ぶ道のべにけふ春草の靑きをやふむ　公方貴。

【年浪草】　輦下歲時記に曰、唐人上巳、曲江都を傾け、禊飮踏靑す。○盧公範饋飾儀に云、三月三日踏靑鞋履を上ぐる。（略）是、唐の俗上巳士女遊戲を爲せるを謂ふなり。

註（一）宋の詩人。

季題解說　古へ三月はじめの巳の日（上巳）に、山野へ出て靑草の上で遊宴を催した支那の古事から來てゐるといひ、また一說には正月八日野に出て遊樂する習ひがあるのをいふといふ說もあるが、今日では、三月三日等に限らず、春の野邊に出て靑々した草を踏みつゝそぞろ歩きするくらゐの意味で、大體春の野遊びのことと考へていゝ。**參照**　野遊び

例句 踏青

踏青や裏戸出づれば桂川　鳴雪（春夏秋冬）
踏青や鹿従き登る三笠山　布山（ホトトギス）
踏青や踏みそめたる華人の子　杜陵（同）
踏青や指を栞に何の本　素風郎（同）
青き踏んで心足りぬる別かな　松君僊（同）
踏青や六田の上の瀬うちわたり　松坡郎（同）
遊女の帯の細しも青き踏む　難波 多佳女（續ホトトギス）
踏青や石人石馬埋もれる　三昧（同）
踏青や古き石階あるばかり　虚子（句集虚子）

参考 春の散歩である。歳華紀麗譜に「二月二日踏青節、初郡人游賞、散於四郊、張公詠以爲、不若聚之爲一、乃以是日出萬里橋、爲綵舫數十艘、與賓僚分乘之、鼓吹前導、後遂爲故事」とみえ、又劉禹錫の詩に「昭君坊中多女伴、永安宮外踏青來」

野遊（のあそび）　ピクニック

古書抜註【栞草】「夫木春部、野遊、都人宿をかすみのよそにみてきのふも今日も野邊にくらしし」後京極攝政　貞享式「野遊と云ふことは、素より川狩の名類ながら、平句(一)の雜は勿論にて、春秋の二に用ひることは、例の衆議によるべきなり。」

註 (一)連句の用語。一巻の連句中、發句、脇、第三、又は定座の句以外の附句の稱。

季題解説 春の日、野原に出て草を摘んだり、四方の春景色を眺めたりして樂しく遊ぶことをいふ。四月は暑からず寒からず、日は永いし、野遊びの一番いゝ時候である。**参照** 踏青（タフセイ）

例句 野遊

女つれて春の野ありき日は暮ぬ　子規（子規句集）
野遊に疲れ落つる日火の如し　春葉（ホトトギス）
野遊や妻かゝそめの頬かむり　羊原（同）
野遊や序詣の乳地藏　常山（同）
野遊につゝじを掘つてきたりけり　小いとゞ（同）
野遊や乘れば著きゐる渡舟　久規（續ホトトギス）

参考 萬葉集巻十に野遊と題して作者未詳の歌四首あり、その一に「ももしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝにつどへる」この歌の四五句を「櫻かざしてこの日くらしつ」として新古今和歌集に入る。古事記中巻に「こゝに七媛女、高佐士野に遊べるに、伊須氣余理比賣その中に在りき、こゝに大久米の命、その伊須氣余理比賣を見て、歌もちて天皇に申し

けらく、大和の高佐士野を七行く孃子ども誰をしまかむ。」この伊須氣余理比賣は、後に神武天皇の皇后に立たれた方である。

摘草（つみくさ）　草摘む（くさつむ）　土筆摘（つくしつみ）　菜摘（なつみ）

古書校註

【年浪草】通俗志（一）に云、雜菜・薺菜、雜也。摘むは春といへり。品々摘みまぜたる摘草を云ふなるべし。春は諸の嫩ばへを摘みて蔬とする物多し。是若草の類。

【菜草】春月嫩艾を採りて菜になし食ふ、或は麪に和して餛飩となす。云々。一切鬼氣を治す。［大和本草］よもぎを灸治に用ひる故、もえぐさと云ふを略してもぐさと云ふ。三月三日に採るを上とす、次に五月五日にとる。（二）

註（一）俳諧通俗志。児島胤矩著。（二）五月は藥狩といふ。

季題解説　春の野に萌え出でた雜菜・草花などを摘むことで、花見・汐干狩など丶共に、最も樂しい春興の一つである。いくらかの寒さはあつても、吹く風どことなく柔かに、打霞む野邊に友垣と睦びあひながら嫁菜・蓬と摘みゆくことは誠に心ゆくことである。摘草のことは支那の詩經などにも見え、我が國では萬葉の古くから貴賤都鄙を問はず行はれ、歌にも多くよまれてゐる。崇德院御製「春來れば雪消の澤に袖垂れてまだうら若き若菜をぞ摘む」や、應神天皇御製「いざこ等野蒜摘みに蒜摘みにわが行く道の香くわし」等によつても、昔の摘草の情景を偲ぶことが出來る。摘草は全國いたるところで見られるが、東京附近では荒川・江戸川・多摩川等の堤や、葛飾田圃・安房の南海岸等殊に多い。大きな袋を持つたり、淺葱の風呂敷を腰に卷いたりして、東京に出すのだと蓬をせつせと摘んでゐるものもあり、家族連れの土筆摘、或は嫁菜・蒲公英・野蒜・れんげ草・櫻草・菫等を採る、負籠・手籠の子女もよく見掛ける。［參照］磯菜摘イソナツミ

例句

摘草

句	作者	出典
君火をたけ我菜をつむも藪の中	沾德	（俳諧五子稿）
つみ草や馬のはぜきぬ馬場の末	太祇	（太祇句選）
摘草やよそにも見ゆる母娘	同	（同　）
つみ草や背に負ふ子も手まさぐり	同	（同　）
摘艸やいとはしたなき包もの	召波	（春泥發句集）
摘草や印籠提し尼っ公	几董	（井華集）
草摘やうれしく見ゆる土の鈴	一茶	（旅日記）
里の子や草摘んで出る狐穴	同	（七番日記）
溝ひとつまたぎ歩行や雜菜摘	蒼虬	（蒼虬翁發句集）
摘草に未だ日の高き嬉しさよ	麥人	（春夏秋冬）
草摘の歸りの町のともりけり	ともも代	（同　人）
蓬摘む土堤に泥舟著きにけり	桑青	（[illegible]）

摘草

草摘に問へば手兒奈の墓はそこ　蝌魚（ホトトギス）
草摘むや人の上など偲びつゝ　あきら（同）
橋詰や摘草飽きて水鏡　廣胖（同）
摘草や俊基卿の墓ほとり　たけし（同）
摘草や上り下りの川蒸汽　白夏（同）
摘草の兒に山男おつかなや　木仙（同）
摘草や長良堤を一筋に　夢茶子（同）
摘草や嬋姸として人の指　青邨（同）
摘草や手賀の渡舟に道をとり　卿人（同）
草摘の母をかこみて坐りけり　富士郎（同）
摘草や寞より見たる東山　いはほ（同）
草摘の負へる子石になりにけり　茅含（ホトトギス）
摘草や朝鮮の子と日本の子　百日紅（同）
摘草や龍遠くありかへり見る　あふひ（同）
大笊と小笊と持ちて草を摘む　水竹居（同）
草つむや慶長よりの道しるべ　野風呂（同）
すかんぽをみんなくはへて草摘めり　たかし（同）
淀の子はバケツを提げて草摘みに　洎月（同）
門前の堤を下りて草を摘む　虚子（句集　虚子）

参考 萬葉集卷一、卷頭、雄略天皇御製「籠もよみ籠もちふぐしもよみふぐしもちこの岡に菜摘ます兒」とある菜は、野草と見てよい。

梅見（うめみ）

觀梅（くわんばい）　梅見茶屋（うめみぢやや）

季題解説 梅は東海、南海の地方では既に十二月一月の候に、その他の地でも一般に二月頃には開花するので、時候としてはまだ寒さの相當強いうちに梅見をすることになる。冬の間にまだ稀な梅を探つて歩くことは、探梅と稱して冬の季に扱ふが、春になつての梅見でも青い草などあまり見えず、木の芽も十分綻びてゐないくらゐのことが多

い。しかしさういふ中に梅の花が咲いて居るのを見ると、はつきり春になつたといふことを感ぜしめられる。名のある梅林はもとより、名もない山路や村里の梅の花を尋ねて歩くことは、昔から日本人のやつて居る風流である。新潟とかもつと寒い雪國では、梅は雪の消えた後、卽ちやつと三月の末か四月にならねばふくらまないし、四月にもなれば椿や櫻も一時に咲くので特に梅見といふこともなく、所謂梅見といふ格別の心持も著しくない。咲いた梅も溫氣に乾いて、東海の寒を冒して咲いたやうな淸洌な氣品に缺けて居るやうである。［參照］植物―梅（ウメ）　冬―探梅（タンバイ）

例句

梅見

御秘藏に墨を摺らせて梅見哉　其角（五元集）
下駄かりてうら山道を梅見哉　蕪村（連句會草稿）
さむしろを畠に敷て梅見哉　同（蕪村遺稿）
むくつけき僕倶したる梅見哉　同（書翰）
樂燒の窯にぬくもる梅見かな　瓜牛（同人）
語りつゝ鶴にしたがふ梅見かな　みづほ（ホトトギス）
ほんの今折られしあとの梅を見る　躑躅（同　）
床下を畝のはしれる梅見茶屋　爽雨（續ホトトギス）

花（はな）見（み）

お花見　觀櫻　花巡り
花の幕　小袖幕　花見衆
花見客　花見船　花見酒
花見樽　花見茶屋　花床几
花見手拭　花見硯
花見扇　花見笠　花疲

季題解說　櫻花を賞する習は隨分古くからあつたが、平安朝時代には、專ら貴族の行樂とせられ、武家時代に至つても、なほ平民の與らぬものであつた。それが江戸時代の泰平の世となつて、士人の花見がいよ／＼盛となるに連れ、商人もこれに準ずるやうになり、今日となつては日本全國津々浦々、都會は都會のやうに、田舍はまた田舍らしく、それ／＼お花見の行樂をし

ないところはなくなつた。櫻花が國花であるだけに、お花見はまことに四時行樂の随一である。浮き〳〵とした所謂お花見氣分は、外の花を見るのとは違つた格別のもので、假裝や變裝なども花見で始めて面白い。花見に關する季語の如きも數限りなく擧げられるが、重なものはそれ〳〵項目を擧げて註してある。〔參照〕櫻狩　花の宴　花の踊　花筵　花筏　花篝　花守　花の宿　花の都　花盗人　花衣　花軍　花車　花の鈴　花人　植物—花

例句

花見

あふ坂のせきたても行く花見哉　宗因（梅翁宗因發句集）
ながむとて花にもいたし頸の骨　同（同）
武藏野やつよう出て來た花見酒　同（同）
貴なるやつこ花見るや誰哥のさま　芭蕉（蕉翁句選拾遺）
菜畠に花見顔なる雀かな　同（其便）
くさまくらまことの華見しても來よ　同（茶草子）
四つ五器の揃はぬ花見心かな　同（炭俵）
花見にとさす舟遅し柳原　同（芭蕉翁全傳）
骸骨のうへを粧て花見かな　鬼貫（鬼貫句選）
恥しの老に氣のつく花見かな　同（同）
小座頭や花見ぬまでもよしの山　來山（續いま宮艸）
一本をくるり〳〵と花見かな　浪化（浪化上人發句集）
肩くまの猿も芝見の日和哉　同（同）
うか〳〵と來ては花見の留主居哉　丈草（丈草發句集）
塗樽の塵に立よる花見かな　同（同）
山からは花見もどりや枕もと　同（同）
落こむや花見の中のとまり鳥　同（同）
何事ぞ花見る人の長刀　去來（去來發句集）
知る人にあはじ〳〵と花見哉　同（同）
花見にもたたせぬ里の犬の聲　同（同）
よし野山またちる方に花めぐり　同（同）
酒を妻妻を妾の花見かな　其角（五元集）
山里は人をあられの花見かな　同（同）
わたり徒士見立る比の花見かな　同（同）
車にて花見を見ばやひがし山　同（同）
花見かな母につれだつ盲兒　同（同）
傀儡の鼓うつなる花見かな　同（同）
此雨に花見ぬ人や家の豆　同（同）
屋形舟花見ぬ女中出にけり　同（五元集拾遺）
大井川船宿るごとし花の旅　嵐雪（玄峰集）

春慶のぜんすへ渡す花見かな　許六（五老井發句集）
麓から花見土産や坊が母　支考（蓮二吟集）
めづらしや内で花見のはつめじか　杉風（杉風句集）
追付てぬけかけ恨む花見かな　沾徳（俳諧五子稿）
たいらなる山や花見の足だまり　同（同）
曉の風を見かけて花見かな　桃隣（古太白堂句選）
道くさに蝶も寐させぬ花見かな　千代女（千代尼發句集）
傾城は後の世かけて花見哉　蕪村（蕪村句集）
小冠者出て花見る人を咎けり　同（同）
花の幕兼好を覗く女あり　同（同）
半ば來て雨にぬれゐる花見哉　太祇（太祇句選）
ことしまた花見の顔を合せけり　召波（春泥發句集）
脱かけの袖や花見る舞子ども　同（同）
定りの花見の日あり家の風　同（同）
善悪の女ある花見もどりかな　也有（蘿葉集）
蝶も付き乞食もつくや花戻り　同（同）
筏士の嵯峨に花見る命かな　几董（井華集）
慮外して簾かづきたる花見哉　同（同）
かしこくも花見に來たり翌は雨　同（同）
土佐が畫の顔に扇やはな見幕　曉臺（曉臺句集）
花戻り錢落したる坊主哉　闌更（半化坊發句集）
道命とうしろあはせの花見かな　巣兆（曾波可理）
かし鳥のあたりに今剃は花見哉　同（同）
扇借せ花見出て來る鼻の先　同（同）
重箱に鯛おしまげてはな見哉　成美（成美家集）
剃捨て花見の眞似や檜笠　一茶（一茶句帖）
赤髪にきせるをさして花見哉　同（同）
花見るもあぶなげのない所哉　同（旅日記）
ない袖を振て見せ〳〵花見哉　同（七番日記）
江戸聲や花見の果の喧嘩買ひ　同（九番日記）
今の世や猫も杓子も花見笠　同（發句集）
さる人は病氣をつかう花見かな　同（希杖本句集）
うつくしき手で錢をよむ花見哉　蒼虬（蒼虬翁句集）
陸尺の大袖ふつて花見かな　梅室（梅室家集）
侍の定家やう書花見かな　同（同）
錢もたぬ心の鬼も花見かな　同（同）
まぼろしを誘ふてけふの花見かな　同（同）
煩惱としりつゝ花の山めぐり　同（同）

花見

花を見る人の袂に縁つけん　移竹（發明からす）
女どち留守居圍とる花見哉　里夕（芦分船）
一僕とぼく〳〵ありく花見哉　季吟（綾錦）
一日は花見のあてや旦那寺　清圃（續境藁）
あすといふ花見の宵のくらさ哉　[illegible]口（炭俵）
山寺に傘返さばや花見ばや　棟堂（新俳句）
鳴神や花の戻れの寐入ばな　一央（同人）
一つ杭に繋ぎ合ひけり花見船　零餘子（ホトトギス）
母つれて花見の喧嘩避けにけり　蛇錫（同）
我も母子彼も母子や花を見る　同（同）
饂飩うつて庭の花見や一家族　優梨子（同）
お花見や朝の天氣に欺されて　東子房（同）
松山を皆越えて行く花見かな　閑堂（同）
途に來て吉野の花を仰ぎ見る　みづほ（同）
賑かな花の幕外通りけり　鯨波（同）
欄干に折れかゝりゐる花の醉　泊月（同）
花の幕落花の中に孕みをり　九呂甕（同）
花の幕はづしかゝれるところかな　良彦（同）
母人や腰を叩いて花疲　寸七翁（同）
駈け落ちし花見疲の聟かな　ながし（同）
醍醐寺の小坊主もゐて花床几　野風呂（續ホトトギス）
花床几あまさず掛けし兵士かな　十七星（同）
土手につく花見づかれの片手かな　よりに（同）
池に來て鳩の水飲む花見かな　水竹居（同）
わたされし花見手拭はれがまし　一豐（同）
花の幕かけはなれたる河原にも　花蓑（同）
花の幕吹かれあがれば多摩の水　まつに（同）
雨傘をつんでのぼるや花見舟　いはほ（同）
おとなへばみんな花見の支度かな　光波（同）
空いてゐし床几にかけぬ花疲れ　夜半（同）
下り來て有馬の町や花疲れ　一帆（同）
座蒲團にはなれ坐りて花疲れ　播水（同）
白粉の面目にさらす花見かな　虛子（句集虛子）
花疲れ眠れる人に凭り眠る　同（續ホトトギス）

櫻狩（さくらがり）　櫻見（さくらみ）

古書校註

【滑稽雜談】清輔奧儀抄に云、拾遺集歌。さくらがり雨はふりきぬおなじ

くばぬるとも花のかげにかくれん。(一)此のさくらがりを、或人先達の申しゝは、さと云ふはあといふ詞也。さくらがりて、あめはふり來ぬとよめると申せど、いかゞぞ聞ゆ。さくらがりは、櫻を尋ね求むる也。何をももとむるをばかく云ふ也。しゝがり・鷹がりなどいふめり。又古今にも素性が歌の詞に、たけがりに北山にまかりけるにとあるは、松茸もとめにこそ侍るめれ。中頃の人の歌にも、春霞はなぞの山を朝たてば櫻がりとは人の見るらん。

語 (一)讀人しらず。

季題解說 野山の櫻を尋ね歩き觀賞することをいふ。花見といふのと意味は變らないのであるが、古文學に現はれる言葉であるだけに、言葉の響きにどこか古風な一種格別の感じが伴つて聞えるのである。また或る一ところの花を見るのでなく、どこと定めず眺め歩く心持もある。**參照** 花見(ハナミ)

櫻人(サクラビト)　植物—櫻(サクラ)

例句

櫻狩

櫻がりきとくや日々に五里六里　芭蕉(笈の小文)
似合しや豆の粉めしに櫻狩　同(芭蕉句選拾遺)
思ひ出す木曾や四月の櫻がり　同(熱田三歌仙)
さくら狩けふは目黑のしるへせよ　其角(五元集拾遺)
殿は狩ッ妾餅うるさくら茶屋　嵐雪(玄峰集)
賭にして降出されけり櫻がり　支考(蓮二吟集)
產着て菜の花持や櫻狩　杉風(杉風句集)
さくら狩古き手代や飯奉行　召波(春泥發句集)
永き日を幕にたゝむや櫻狩　也有(蘿葉集)
來た道を又奥にせん櫻がり　蓼太(蓼太句集)
大坂の遊女かしらずさくら狩　几董(井華集)
年よりも皆丈夫なり櫻狩　完笑(桃箔遺)
なほ極む上の醍醐やさくら狩　梅史(ホトトギス)
翠黛とひもすがらある櫻狩　夜半(同)
焚火して當りしこともさくら狩　たけし(續ホトトギス)
大原にしるべの寺や櫻狩　漾人(同)
みちのくの春は短しさくら狩　もん女(同)

花(ハナ)の宴(エン)

古書校註

【栞草】花をみて酒盛する也。類聚國史　弘仁三年二月、神泉苑に行幸ありて、花をみ給ふ。文人に命じて詩を賦し祿を賜ふ。花宴の節これより始れり。

季題解說 櫻の花を賞しながらの酒宴であつて、古くから朝廷において行はれた。類聚國史に「弘仁三年二月、神泉苑に行幸ありて、花を見給ふ。文

人に命じて詩を賦し、祿を賜ふ。花宴の節これより始れり」とある。下々(シモジモ)の花見の宴には、この言葉はどうもしつくりしないやうである。〔参照〕花見(六十)　植物―花(八)

花の踊(はなのをどり)

〔季題解説〕花見の人々の興に乗じて踊ることであるが、花見の宴の興催の手踊などもその一つとして差支へない。要するに花の下で即興的に行はれる踊の總稱である。〔参照〕花見(六十)　植物―花(八)

花筵(はなむしろ)

〔季題解説〕花見筵の詞である。花の下に、或は花の散り来る木陰に筵を敷いて打集ひ、携帯の行厨を開き酒を酌む、その筵をいふのである。栞草を見ると「落花の上に坐するをもいひ、又、花見のしきものをもいひ、又花見の席をもいふといへり」とある。〔参照〕花見(六十)　植物―花(八)

〔例句〕花筵

花むしろ一けんせばやと存ふ　宗因（俳諧百韻）
片尻は岩にかけたり花むしろ　丈草（丈草発句集）
小筵や花草臥のところどころ　一茶（一茶句帖）
小言いふ相手もあらば花筵　同（九番日記）
花見莫蓙捲くに蟇鳴りにけり　斤千（同人）
山の端の此所にも花の一むしろ　春蕾（ホトトギス）
捨てゝある花の筵に憩ひけり　菊甲（同）
先達も馴番も睦び花筵　野風呂（ホトトギス）

花筏(はないかだ)

〔季題解説〕筏に花の散りかゝつてゐるのをいふ。〔参照〕花見(六十)　植物―花(八)

花篝(はなかがり)

〔季題解説〕京都では毎年四月一日から祇園に花篝が焚かれ、都踊が始まる。花篝といふと直ちに祇園の夜櫻を思ひ出させるほど、祇園のそれは有名である。花篝の焚かれる頃は、所謂花冷でなかなか寒いことがよくある。花篝に立ち寄つてゐる人々の顔の、赤く染つてゐるのなども亦面白い。今日では京に習つて花篝の焚かれる處が他にもあるが、到底祇園の風情には及ばない。〔参照〕花見(六十)　植物―花(八)

〔例句〕花篝

現れし面すげなや花篝　若沙（ホトトギス）

花の上に月は澄みゐる篝かな　青畝（同）
折からの風にくらしや花篝　梅東（同）
花篝今宵かぎりに焚きにけり　たけし（同）
花篝いぶるがまゝの片障子　萬戸（同）
雨空をながめて花の篝守　宵火（同）
おとろへて火のいろ赤し花篝　浪月（ホトトギス）
煙草の火一ぷくつけぬ花かゞり　たけし（同）
花篝歌仙の額を照らしける　秋琴女（同）
母の手をとればつめたし花篝　多佳女（同）
芋棒が出て水うてり花篝　一杉（同）
あらはれて鹿よぎりけり花篝　昴（同）
花篝祇園の社たゞ暗し　虚子（同）

花守（はなもり）

季題解説 櫻の花の番人をいふ。大連や旅順の園丁はみな支那人である。花見衣を著飾つた群集の中を、汚れた支那服に腕章をつけて見廻つてゐるのは、如何にも滿洲の花守らしい。〔參照〕花見（春）植物―花（春）

例句

花守

一里はみな花守の子孫かや　芭蕉（猿蓑）
花守や白き頭をつき合せ　去來（去來發句集）
花守や人の嵐は昔ばかり　千代女（千代尼發句集）
花守の身は弓矢なきかゞし哉　蕪村（から檜葉）
花守のあづかり船や岸の月　太祇（太祇句選）
としどしや花守などの薪一駄　士朗（枇杷園句集）
花守や夜は汝が八重櫻　一茶（發句題叢）
花守の不沙汰が小田の芹あらし　乙二（松のしづえ草稿）

花の宿（はなのやど）　花の戸（はなのと）　花の窓（はなのまど）　花の扉（はなのとぼそ）　花の寺（はなのてら）

季題解説 櫻の花の咲いてゐる家。或は花の咲いてゐる旅宿をいふ。〔參照〕花見（春）櫻戸（春）植物―花（春）

例句

花の宿

かり出すとはや横に寢た花の宿　宗因（西翁宗因發句帖）
花の戸やひそかに山の月を領す　石鼎（ホトトギス）
なかなかに電話も引きて花の坊　梅史（同）
花の茶屋ならびあまりて水の上　和香女（同）
今はまた八重の盛や花の茶屋　暮雨（同）
年々を繪馬堂借りて櫻茶屋　陵路子（同）

花の宿

花の宿けはしき梯子あがりけり　蕉人（ホトトギス）
雨聞いて枕につきぬ花の宿　枌童（同）
忘れゐや湯婆くれし花の宿　みの吉（同）
稚兒達に晝風呂わきぬ花の寺　石鼎（同）
山内に中學もちて花の寺　うしほ（同）
屋根を掃く僧に挨拶や花の寺　青雲（同）
花の寺遊べる人に夕勤　桐一（同）
師の僧の疊に杖や花の寺　紅朗（同）
花の界の郵便受にホトトギス　碎壺（ホトトギス）

花の都（はなのみやこ）

花の帝都（はなのていと）　花洛（からく）　花の京（はなのきやう）

【季題解説】都の美稱で、たゞ一國の帝都といふに同じといふ解釋もあるが、季題としては、花をもつと具體的に考へて、花の雲で埋まつた我等の帝都、世界的な櫻花の都東京を思ひうかべたい。また平安朝千年の舊都たる花の名所、京都を考へてもよい。花洛などといふ言葉は京都の方が當ることはもちろんである。尚また「古への奈良の都の八重櫻」或は「奈良七重七堂伽藍一の奈良」、「青丹よし奈良の都はさく花の匂ふがごとく今さかりなり」と讃へられた萬葉の古都奈良を花の古都として加へるのもいいであらう。

【參照】花見、植物―花。

【例句】

花の都

傘さして駕かく花のみやこ哉　蓼太（蓼太句集）

花盜人（はなぬすびと）

【季題解説】櫻の枝を欲しく、盜み折る人である。花の枝を手折つて平氣で擔いで行く花盜人は、罪のない盜人である。風流な盜人である。壬生狂言に花盜人といふのがある。【參照】花見、植物―花。

【例句】

花盜人

門たきは花盜人のこゝろかな　士朗（枇杷園句集）
山の月花盜人をてらし給ふ　一茶（おらが春）
花盜人ほゝゑみながら折り呉れぬ　みづほ（ホトトギス）

花衣（はなごろも）

花見衣（はなみごろも）　花の袖（はなのそで）　花の袂（はなのたもと）

【季題解説】花時著る女の美しい著物、または花見衣裳のことである。古義には櫻襲、即ち表が白で、裏が蘇芳色をした襲の色目のことを花衣といつたものであるが、今一般には、花見に著てゆく色彩豊かな女の衣裳を花にたとへてかくいふやうである。或はまた櫻花の散りかゝつた衣のことをも花衣と稱する場合もあるやうである。一體にこの頃の女の衣裳は昔より色彩が

華美であるが、殊に春の花見衣には目のさめるやうな美しいものがある。元祿の頃、花見小袖といつて、絢爛な刺繍などの小袖を花見幕に打ちかけたりする風俗があつたが、これも花衣の一つであると思はれる。〔參照〕花見(ハナミ) 植物―花(ハナ)

例句選句

花衣

墨染もよしや飾らば花の袖　宗因（梅翁宗因發句集）
きても見よ甚べが羽折花ごろも　芭蕉（貝おほひ）
落日の魚に袖なし花衣　鬼貫（俳諧七車）
友猿の友ぎらひする花衣　其角（五元集）
ざれありく主よ下人よ花衣　同（同）
筏士や蓑をあらしの花衣　蕪村（蕪村句集）
花衣ぬぐやまつはる紐いろ〳〵　久女（ホトトギス）
留守の戸の鍵を袂や花衣　爽雨（同）
賴まれし母の仕事も花衣　一水（續ホトトギス）
花衣そのまゝ下りる廚かな　くに女（同）

花軍(はないくさ)　花合せ(はなあはせ)

古書校註

【栞草】天寶遺事　長安、春時遊賞を盛にして、士女花を鬪はす。栽ゑ挿むに奇多きを以て勝とす。千金を用ゐて、名花を市ふ。庭に植ゑて春時の鬪に備ふ。〔參照〕花見(ハナミ) 植物　花(ハナ)

花車(はなぐるま)

古書校註

【年浪草】開元遺事に曰、楊國忠、子弟春時名花を移して、木檻の中に植ゑ、下に輪脚を設けて、挽くに綵繩を以てす。至る所、自ら移春檻と號す。〔字彙に曰、古へ聖人轉蓬を觀て、以て車を造り、重きに任せて遠きを致す。少昊の時、牛を加へ、禹の時に、奚仲、馬を加ふ。幡車は是俗に御所車と謂ふ。〕〔花見車は花ある所へ乘りて行く車をいふなり。〕〔參照〕花見(ハナミ) 植物―花(ハナ)

花の鈴(はなのすず)　護花鈴(ごくわれい)

古書校註

【年浪草】天寶遺事に曰、寧王春時紅の絲を紉ひて繩となし、金鈴に綴り、花の梢に繋ぎ、鳥鵲の翔り集ること有れば、園吏をして掣せしめたる鈴の索を以て之を驚す。護花鈴と號す。〔匠材集に云、花に鈴を付けて鳥を追ふと云ふ是也。〕〔參照〕花見(ハナミ) 植物―花(ハナ)

花人（はなびと）

季題解説　櫻人とほゞ同じく、花を見る人の略である。また花のやうに美しい装の人の意味ともなるが、今日一般には、花見る人の意に解されてゐる。花を見る人は、或は首に揃ひの花見手拭を掛けたり、造花の簪を髪にさしたり、或は目鬘を著けたり、白粉を塗つて變裝したり、或は重箱を提げたり、瓢簞を肩にしたり、千差萬別であるが、もちろんさういふ特異の風體をしないたゞの花見の人も詠まれてゐる。〔季題〕花見（ハナミ）　櫻人（サクラビト）　植物　花（ハナ）

例句

花人　花人をらつみてひとりまつの雨　曉臺（曉臺句集）

花人の去りて掃除やお城番　琢人（ホトトギス）

花人になり行く北野あたりかな　紅醉（同）

圓山夜景

花人に雲割れ月の出でにけり　董絲（同）

醍醐寺

花人のおもひ〳〵の雜木杖　柑兒（續ホトトギス）

花人の提灯落ちて路に燃ゆ　水鳴（同）

花人の上に靜な老木かな　虛子（同）

櫻人（さくらびと）

季題解説　連俳等の古義からは、櫻の花のやうに麗はしい人といふ意味らしいが、花人といふと同じく、櫻の咲くほとりに居る人、花を眺め歩く人、花をかざし歩く人、櫻の咲く頃、美はしい裝ひの人々等、もつと櫻花といふものを現實に人に結び付けて考へた方が面白いと思ふ。〔季題〕花見（ハナミ）　櫻狩（サクラガリ）　花人（ハナビト）　植物—櫻（サクラ）

例句

櫻人　夜桃林を出てあかつき嵯峨の櫻人　蕪村（蕪村句集）

醉て猶眼涼しやさくら人　几董（井華集）

[illegible]百年忌

花といふ論定りぬさくら人　同（同）

櫻人堤の上と下とかな　素吼（同人）

櫻戸（さくらど）

季題解説　栞草を見ると「（哥林良材）櫻の木にてつくりたる戸也。松の戸、杉の戸の如し。〇一説、戸の近邊にある櫻の咲きたるをいふ、只櫻のあるほとりの宿なり」とある、前解に從つては殆ど季題としての意義がない。季語として存置せしめる以上、やはり後說の意にとり、花の戸・花の宿と

いふのと同義、即ち櫻のあるほとりの宿と同じであると解すべきであらうか。【參照】花の宿（サ）

【例句】

櫻戸　櫻戸や腰にはつけぬ鑑わらび　蓼太（蓼太句集）

吉原の夜櫻

【古書拔萃】

【東都歲事記】 當月中、（一）吉原仲の町往還へ櫻を植う。青竹にて垣を結ひ、黃昏より、ぼんぼりに燈燭を點ずるが故、花に映じて一入らるはし。櫻を植ゑる事は、寬延二己巳の春より始まりしよし、（三）增補惣鹿子にいへり。（）此里は四時繁昌たりといへども、此の頃は萬客日夜に群集し、その光景筆端の及ぶ所にあらず。花をつらねたる詩歌、遊女の秀吟等あまたあり。

【註】（一）三月。（二）この時堺町中村座で助六狂言の中に此の體をうつして殊に評判となつたのである、その淨瑠璃は「春の寬樓」である。

【季題解說】 毎年櫻花の頃、東京吉原遊廓の引手茶屋の前に櫻を植ゑ、青竹の垣を結ひ、雪洞など灯し連ね、茶屋は軒毎に提燈や花暖簾を吊り、所謂春宵一刻價千金の色を添へる、これを吉原の夜櫻といひ、その間嫖客が殊に雜沓する。昔は四月一日を花開きと稱し、三十日に至つてこれを撤したといふことである。廓の風習は世と共に移り變り、夜櫻も一時廢絕したが、今も全くないではなく、その季節の吉原には、昔ながらの廓の春の風情がある。【參照】植物—櫻（サクラ）

【參考資料】 吉原大全に、仲の町へ花を植る事「花を植る事、昔は無かりしに、寬保元酉の年思ひ付てうゑ初たり。もろこしにてはけいせいを花街あるひは花柳苑など稱して、花と柳はらゆる事なり。さすればこの里に花をらゆる事古實にかなひて誠に繁榮のしるしと言ふべし。大門口より水戶尻まで青竹をもつて欄干をつくり、桃櫻朝霞に色を交へ、春風にかほりて衣にうつる風情、げに群玉瑤臺の仙境もいかでかこれにまさるべき。」

島原太夫道中

【季題解說】 四月二十一日、我が國最古の遊廓と稱せられる京都島原遊廓の太夫が、綺羅を飾り八文字を踏んで廓內を練つて行くのである。花車や花籠の車を童女が引くあとを、盛裝を凝らした太夫が禿引舟をつれて悠々と練り歩く。下駄は三本齒の黑塗で、下男はうしろから大きな傘をさしかける。最終のものは傘止太夫といつて、太夫中の名妓がなる掟である。何分古式があるので、一擧一動もなかなかむつかしいものである。當日は早くから大門を鎖すが、群衆は廓內に滿ちて居る。一昨年（昭和六年）までは多く傳手に依つて入つたが、昨年からは滿洲軍慰問の名で、一圓の入場料を徵集

してゐる。

【例句】島原太夫道中

傘止の薄雲太夫現れし　　済山人（ホトトギス）
道中は日傘さの雨の桟敷かな　　十夜（同）
道中の案内状のはなちらし　　ながし（同）
傘止の噂ばなしや京の宿　　すゑを（續ホトトギス）
太夫待つ桟敷の群集おとなしき　　虚子（句集 虚子）

都踊（みやこをどり）

【季題解説】現在京都には祇園甲部、先斗町、上七軒、島原、宮川町、祇園乙部、七條新地、北新地、中書島、撞木町の十遊廓があるが、その中の第一位であり、藝妓の數、青樓の最も多いのは祇園新地である。この祇園新地は、遠く織田豐臣時代に祇園、智恩院等、東山方面への參詣者遊山者のために、その通りである四條通に茶店を出し、茶汲女を置き、休憩者に茶を汲んで出したのに起り、後にはその茶汲女が三味を彈き、又は遊女に類した事をしたのが濫觴である。その後種々の變遷を經つゝ、茶汲女も次第に發達し、茶店も又酒を饗し遊興をさす樣になり、果は茶汲女も藝妓、娼妓と區分される樣になつて名も變つた。

幕末の頃には祇園の花街はいよ／＼繁昌を加へたが、明治二年御遷都のために京都はばつたりと不景氣となり、その不景氣に祇園花街も稍々衰へた。明治五年、時の京都府知事長谷信篤、參事槇村正直兩氏は京都の衰頽挽回のため博覽會を京都御所内仙洞御所で催し、又祇園新地にも働きかけて景氣挽回の相談を持ちかけた。これが都踊の始まりである。

此の時、當時有力者であつた四條花見小路角万亭主人杉浦治郎右衛門氏は種々畫策の上、都踊興行を案出した。即ち祇園新地の藝舞妓を舞臺に上せて舞踏せしめ入場料をとる案であつた。一は京都發展の一助ともなり、又衰頽した祇園花街復興のためである事勿論である。その當時は開國日尚ほ淺い時で、文明開化といふ詞などの大流行の時であつたので、前記槇村正直氏作詞で各世界國名を讀み込んで歌謠詞とし、田中咲松が囃子の手をつけ、杵屋庄三が三味線の手を拵へ、片山春子が振附をした。場所は新橋小堀松の屋席であつた。三月十三日に始めた所、觀客日々充滿の有樣で、五月晦日まで八十日近くも永く興行した。

翌六年はその松の屋席では狹隘のため、花見小路西側に歌舞練場を新築し、そこで興行した。大正二年にはその東側に岩乘な演舞場が改築された。現在は四月一日より三十日までの三十日間の興行とし、一日五回興行、（但し日曜大祭日等六回催す事もある）出場妓は一番、二番、三番、四番の四組として、五日目にはまたもとの妓が出番となる仕組である。特等一等の客は開幕前、その日その日の茶席に侍る一妓のお手前を拜見し、茶菓の饗

應をうける。舞臺には兩花道があり、その兩花道の後方が地方と囃子方の席になつてゐる。地方十人、太鼓小鼓大鼓鉦の十人、兩花道からは十六人づつの踊子が「都踊はヨーイヤサ」の掛聲と囃子につれて練り出す。舞臺は種々の背景が變り、また踊子の持物も變る。絢爛目も覺むるばかり、まことに花の京都の一名物である。外人にはチエリーダンスで通つてゐる。なほこの第一日より四日まで、卽ち踊子、地方、囃子方が一組から四組までが始めて舞臺に出る日の午後三時頃に、特別その出番の妓の家族を招待して踊を見せる事になつて居る。これを「しうらい」と呼ぶ。語義は判然しない。その切符を「しうらい劵」と呼んでゐる。〔參照〕秋―踊(ヲドリ)

〔例句〕

都踊

お千代お加代今なき都踊かな　洛山人（ホトトギス）
明日限りの都踊に誘はれし　淺茅樓（同）
都踊景をかさねてたけなはや　淸三郞（同）
傘さして都をどりの簞守　夜半（同）
都踊果てたる妓より電話かな　喜一郞（同）
灶きしむる都踊の茶の間かな　野風呂（續ホトトギス）
來よと云ふ都踊の三の組　十四坊（同）

〔參考〕其の起源は明治五年、此の地に博覽會ありし時、土地の繁榮策として時の府知事長谷信篤、參事槇村正直等祇園町の樓主を會し旨を諭し一力樓杉浦某率先して當時事にあたり、祇園町の歌舞師片山春子等をして一種の踊を工夫せしめて其の三月假に林下町松家席にて開場した。翌年規模を廣めて演舞場を建設したのである。

東踊(あづまをどり)

〔解說〕東京の新橋藝妓が新橋演舞場に演ずる春の踊で、京都の都踊や大阪の浪花踊などに對し、東京の花やかな見物の一つにならうとしてゐる。四月一日から二十日まで、夕方から始まつて二回興行である。期間中は築地から木挽町あたり、綺麗な大提灯が軒々に吊るされ、都踊氣分が巷に漂ふ。〔參照〕秋―踊(ヲドリ)

〔例句〕

東踊

灯(アカリ)つく東踊のみちしるべ　秀好（ホトトギス）
なでつける東踊のよべの髮　くに女（同）
この春も東踊ももう二日　秀好（續ホトトギス）

蘆邊踊(あしべをどり)

〔解說〕大阪南五花街遊廓の年中行事の一で、毎年四月一日から二十四日迄、夕方から始めて毎夜四回間演せられる。これは藝妓の技藝奬勵の機關であつて、役員達が主唱となり、明治二十一年、難波新地五番町（舊豐國

神社御旅所跡）を選んで演技場を新築し、同年十一月、平瀬露香翁の作歌で浪花風流澪標踊の第一回が開演せられて以來、連續して行はれてゐるのである。〔季題〕秋・踊。

【例句】
蘆邊踊　道ばたに蘆邊をどりの二階かな　夜半（ホトトギス）
かんばせに蘆邊踊のはねの雨　同（同）

浪花踊（なにはをどり）

【季題解説】大阪新町と北の新地南部の春の踊で、新町は四月、北の新地は五月に開く。從つて浪花踊だけでは、新町であるか北の新地であるか判らない。大阪では「新町の浪花踊」または「北の浪花踊」といふ。尤も北の新地は五月に開くために、暦の上からいへば夏季になるが、踊の實質は全然春の踊であり、夏季として扱つては全くその感じが出ない。〔季題〕夏・北陽浪花踊。詳しくは秋・踊。

【例句】
浪花踊　舟も挿すなにはは踊の花かざし　美津手（ホトトギス）
やがて又浪花踊の灯の中に　千鶴子（同）
舞の手や浪花踊は前へ出る　左右（同ホトトギス）

此花踊（このはなをどり）

【季題解説】大阪堀江遊廓の春の踊で、毎年三月中に催す。關西におけるこの種の踊の中で、一番最初に幕を開けるのはこの踊である。〔季題〕秋・踊。

初午芝居（はつうましばゐ）　初午狂言（はつうまきやうげん）

【季題解説】初午の日に、役者が自分の宅で弟子を招待して宴を開き、自分は下役をして弟子達にいい役を勤めさせ、平日の勞を犒らう習ひがあつた。これを初午芝居といふ。「劇場新話」の芝居年中行事に「二月初午踊狂言の初日也、京大阪にては初午芝居とて江戸の舞納め狂言の如く、素人交りの狂言あるよし、江戸にも操芝居の薩摩座・土佐座などにはあれども、大芝居にて此事なし、さて樂屋中皆て稲荷祭執行し、此日樂屋にて田樂を燒、醬油のつけやき也、是味噌を付るといふ事を忌てなり」とある。これで大體初午芝居の故事がわかるであらう。〔季題〕宗教・初午。

【例句】
初午芝居　初午や寒声よみは芝居から　其角（五元集拾遺）

三の替（さんのかはり）　三月狂言（さんがつきやうげん）　彌生狂言（やよひきやうげん）

【季語考証】
一【劇場新話】三月三日、新狂言替る、尤も曾我狂言二番目なり。是を三の

替といふ。顔見世狂言を始として、春狂言は二の替なり。それ故、此の替を三の替といふ也。

[illegible] 「替」は「替り狂言」の意である。今日の言葉としては、二の替とか三の替とかいふのは、同じ座、同じ座組で、藝題だけ替へて二度目、三度目と引續き興行する芝居のことであるが、季題としては、芝居道の古格に從つたもつと狹い意義の名稱であつて、三の替は專ら「三月狂言」「彌生狂言」のことを稱してゐる。一體芝居道では、一年間の興行の順序、期間、式例等が昔は隨分やかましかつたものであつた。時代によつて變遷し、また江戸と上方とで多少相違もあつたが、大體十一月に第一回の興行があり、これが言はば芝居の春であつて、顔見世興行と呼ばれた(後には正月に顔見世興行があつたこともある)。翌年正月の第二回興行が初春狂言と呼ばれたが、これを京阪では二の替といつた。そして三月の第三回興行即ち「三月狂言」「彌生狂言」のことを三の替ともいつたものである。今日は芝居の古格が廢れてしまつたから、三の替りなどといふ言葉はぴつたりわれ〳〵の頭に來なくなつてしまつた。

「劇場新話」の芝居年中行事に「三月三日、新狂言に替る、尤曾我狂言二番目也、是を三の替りといふ、顔見せ狂言を始として、春狂言は二の替り也、夫故此替りを三の替りといふ也、」とある。また「守貞漫稿」に、「三月興行、俗ニ三月芝居ト云、蓋京坂ニテハ三ノ替リト云、江戸ニテ三月芝居ト云、」とある。要するに、二の替り、三の替りといふのは、もと京阪でいはれたことのやうである。

鶯合（うぐひすあはせ）

[illegible] 鶯を籠に入れて持ち寄つて、鳴き合はせさせて、互にその聲の優劣を競ふことをいふのである。鶯の飼養は文献に徴すると隨分古いもので あるが、足利時代、茶道華道などと共に最も隆盛を極めた。今日も每年四月の五日前後に、東京では盛んな啼合會が開かれ、全國の愛鶯家が、いづれも籠に美しい裝ひを凝らして名鳥を持寄る。判者は、第一吟調の品格、第二音の艷、第三玉結び、第四聲の幅と、一々資格を鑑査した上、最優等のものに賞狀が出る。「優等正の一」といふ位がつくと、飼主の得意は非常なもので、金屏をめぐらし、金の高蒔繪の鳴壺に飾り、人を招いて祝宴を張つたりするといふ。[illegible] 鶯笛 動物 鶯

鶯笛（うぐひすぶえ）

[illegible] 【年浪草】 枕草子に有り。(一)わらはべなどの笛に作りて吹くもの也。鳥の事にあらず。

【嬉遊笑覧】鶯笛は、犬子集(二)に、けふははや鶯笛もねの日かな　讃身の上(三)に、春のしらべの琴の音に鶯笛のその聲は　云々。

註　(一)枕草子に鶯笛の事なし、思ひちがひであらう　但し、栞草には「徒然草にあり」と見える。(二)松江重頼撰。(三)山岡元隣の作。

季題解説　短い青竹の管で作つた玩具の笛で、管の上に同じ青竹で作つた小さな鶯をくつつけてある。形も風雅である上に、指で管の兩端を押へ、指頭を開閉しながら吹くと、鶯の鳴聲のやうな音色が出るので、兒童のみならず大人までも喜んで弄ぶのである。昔からあつたものらしく、梅花の候にはどこの梅林にも賣つてゐる。　參照　鶯谷、動物—鶯

例句

鶯笛　親子して鶯笛を吹きにけり　婆羅　(讀ホトトギス)

雉(きじ)笛(ぶえ)

季題解説　雉の聲、即ち雉の雌の聲に擬し、雄鳥を誘ひ捕へるために吹く笛である。鉛で造つたのもあれば、また桃の實に穴を穿つて造つたのもある。　參照　動物—雉(キジ)

雲雀(ひばり)笛(ぶえ)

古書校註

【年浪草】雲雀笛とは、雲雀を捕ふる爲に吹く笛也。(一)

註　(一)西鶴の一代男の中にも「小兒弄びの内にひばり笛をとりそろへ」とあるのに徵すれば、後には小兒の玩具の一となつたものか。

季題解説　雲雀を誘ひ捕へるために、その鳴く音に擬して作つた笛である。篠竹を三四寸に切つてつくる。　參照　動物—雲雀(ヒバリ)

駒(こま)鳥(ぶえ)笛

季題解説　駒鳥を鳴かすため、その音に擬して作つた笛である。篠竹を長さ三四寸に切つた一端を斜に削つて造る。これで河鹿をも馴らし鳴かせるといふことである。　參照　動物—駒鳥(コマドリ)

風車賣(かざぐるまうり)

風車(かざぐるま)

古書校註

【雍州府志】所々是を作る。然れども祇園町を本とす。春の初多く之を造る。片細竹を以て小花輪を造り、青紅の紙片を貼り、花蕋の狀に擬し、一莖竹頭に挿す。風觸るれば則ち花輪悉く轉舞す。自ら春初發生の氣有り。

【滑稽雜談】毛吹草に云、山城の國祇園の風車。(此のもの、春初に風に利あり。小兒女の翫ぶ物也。今世にも洛の祇園の社の前に、風車を作り商

ふ也。今は絶えてなし。

季題解説 風車はいろ紙または色を塗つた鉋屑、最近は多くセルロイドで組合せ、これに柄をつけ、風の力で廻る仕掛の玩具である。花の時分に、公園の入口とか橋の袂とかで、春風に廻しながら賣つてゐる時、最もよく風車の氣分が出る。

例句 風車賣

其中の廻りそめたる風車　凍月（ホトトギス）
風車堤に挿して賣りにけり　咲青（同）
風車まはり消えたる五色かな　花蓑（同）
風車目覺めたる兒にまはりけり　美知女（同）
疊目に立てしうなゐの風車　逸峰（續ホトトギス）

參考 草根集（正徹の歌集）に寄レ車戀「手に取ればそなたより吹く風車めぐりあふべきしるしとぞみん」後奈良院御撰何曾に「嵐は山を去て軒のへんにあり」とあるは風車のこと。梅園日記に「風車、小兒の玩具の風車はふるくよりありしもの也。長谷寺觀音驗記に、鳥羽院御宇、當寺に法師丸と云ける小童ありき。少より父に別て、貧母一人育くみけり。七歳になりける保安三年の秋の比、同樣成者七八人集り、面々風車を持て遊びけれ共、此法師丸には作りてとらする者なし、浦山しさの餘に、母に泣悲て乞ければ、自ら作て取せたりけれ共敢て廻らざりければ又母を責けり」云々。

風船賣（ふうせんうり）

風船（ふうせん）　風船玉（ふうせんだま）

季題解説 紙または薄い護謨で、普通は球狀であるが時にはまた魚形などに作り、吹いて膨らませなどして空中に飛ばする玩具である。日かげが暖かく春風のそよ／＼吹きわたる巷などには、風船賣の媼さんは風車賣とともになくては叶はぬ景物の一つである。

例句 風船賣

風船のはやりかしぎて逃げて行く　花蓑（ホトトギス）
風船や花間を飛んで高からず　草夢（同）
ごむ風船花のおもてをあがりをり　夢香（同）
春泥に風船うつり上りけり　稻女（續ホトトギス）
風船や多摩の横山越ゆるらし　菫糸（同）
風船や庵の樹木に來てかゝる　波津女（同）

石鹸玉（しやぼんだま）

たまや　水圏戯（すゐけんぎ）

季題解説 石鹸水を小さな管に浸して輕く吹けば、液は氣泡となつて五色に映え乍ら飛ぶ。むくろじの實を溶いた液でもいゝ。液の濃度や管の大小などで、玉の大きさも速度もさま／＼である。群がり出て慌しく散る小さな球、ゆつくりと出來てふわ／＼と浮く大きなたま、これが春風に流れて空

や木の影などが映るところは、まことに長閑な春の景趣である。なかなか消えない玉の行方を靜かに眺め追ふのも面白いが、何に觸れたといふのでもないのにぱつと跡方もなく消え失せるのも面白い。街頭でも賣つてをり、子供たちがその周圍を圍んで嬉々としてゐるのなどはいかにも春らしい。上方では四季を通じて、氏神の祭禮の日の子供の遊戯の一つである。

例句　石鹼玉

陋巷の童聚めつ水圈戯　桑陽（同　人）
わがふきて國一つあり石鹼玉　思桂（ホトトギス）
石鹼玉よろぼひ出でし無風かな　誓子（同　）
しやぼん玉群り飛んで芝廣し　霞村（同　）
しやぼん玉うつる景は東山　星川（同　）
しばらくは草の上なる石鹼玉　玲水（同　）
流れつゝ色を變へたるしやぼん玉　たかし（ホトトギス）
しやぼん玉雀の背に上りけり　木園（同　）
にくまれて一人遊びの石鹼玉　壽々女（同　）
向きかへて育たぬ石鹼玉育てけり　椎花（ホトトギス誌）

鞦韆（しうせん）　秋千（しうせん）　ふらここ　ぶらんこ　ゆさはり　半仙戯（はんせんのたはむれ）

古書叢話【滑稽雜談】古今藝術圖に曰、北方の戎狄、寒食に至り、鞦韆戯を爲す。以て輕趫を習ふ。後中國の女子之を學び、乃ち綵繩（一）を以て木に懸け架を立て、士女その上に坐立し、之を推引す。之を鞦韆と謂ふ。（二）荊楚歳時記に云、春節、（三）長繩を高木に懸け、士女袪服（三）してもその上に坐立し、之を推引す。名づけて秋千と曰ふ。楚俗、之を施鉤と謂ふ。（略）これらの所說、秋千と云ひ、千秋と云ひ、鞦韆と云ひ、又は施鉤・胥索と云ふ、すべて和國の小兒の戯とするふらこゝの事也。此の儀また戯の一事にあらず、春は陽氣さかんなれば、血氣を舒暢するの謂ひ也。故に、生を養ふの理ありて、半仙戯と云ふ。

【年浪草】天寶遺事に曰、宮中寒食に競ひて鞦韆を立つ。今宮嬪笑ひて宴樂と爲す、明皇（四）呼びて半仙の戯と爲す（略）和名抄に曰、鞦韆、和名由左波利。綵繩を以て空中に懸け、以て戯とするなり。

註（一）色をつけた綱。（二）寒食の節。（三）美しい著物をきること。（四）唐の玄宗。

季節解說　今日では、社寺の境内・公園・校庭等に常設されてゐるが、やはり子供達が元氣に遊戯するのは、ほか〳〵と暖くなつてからのことであり、その震動に依つて起るきしりには、暢びやかな春らしい響がある。尤も因緣を調べれば、支那の古俗で寒食の日に宮殿にこれを作り、宮嬪が嬉戯したところから、春季とせられるのであるといふことである。

例句

鞦韆

ふらこゝの會釋こぼるゝや高みより　太祇（太祇句選）
鞦韆や隣みこさぬ御身體　同（同）
ふらんどや櫻の花をもちながら　一茶（一茶句帖）
ふらこゝを下り來し人や松に消ゆ　草千（ホトトギス）
ふらこゝの我を咎むる人もなし　秀濤（同）
鞦韆や屋根の上なる畝傍山　櫻朶（同）
いみじくも反りたる沓や鞦韆に　微笑子（同）
鞦韆や舞子の驛の汽車發ちぬ　誓子（同）
鞦韆にわが子の番の來るまで　きよし（同）
鞦韆をすてたる人と連れだちぬ　夜半（續ホトトギス）

參考　この事、漢土より出づ。事物紀原に「古今藝術圖曰、北方戎狄愛ニ習輕趫之態一、每レ至ニ寒食一爲レ之、後中國女子學レ之、乃以ニ綵繩一懸レ樹立レ架謂ニ之秋千一、或曰、本山戎之戲也、自ニ齊桓公北伐ニ山戎一、此戲始傳ニ中國一。一云、正作ニ秋千字一、爲ニ秋遷一非也。本出レ自ニ漢宮祝レ壽詞一也。後世語倒爲ニ秋千一耳」。有名なのは蘇軾の春夜の詩に「春宵一刻直千金、花有ニ清香一月有レ陰、歌管樓臺人寂々、鞦韆院落夜沈々」。本朝にては、倭名類聚抄に鞦韆に由佐波利の訓を傳へて、當時早くこの戲ありしことを知る。顯昭の袖中抄に「梅が枝にゆさはりしたる鶯よ梅のむばらにしりあへふたへ、顯昭云、ゆさはりとは、ゆさふりと云あそび也。はとふと同音也」と見える。

ボートレース

端艇競漕（たんていきやうそう）　競漕（きやうそう）

季題解説　端艇の競漕で、秋季にもあるが、多く春季に催されるので春季に扱ふ。各學校・銀行會社等の實業團體で行ふが、關東では隅田川の大學のレースが最も有名である。丁度櫻の盛りの四月上旬で、墨堤一帶にボートレース氣分が漂ふ。關西では琵琶湖瀨田川の京都帝大のものが名高い。いづれも華やかな應援が見事である。日暮れてレースが行はれるやうな時には、舳にそれぞれ赤・白・青等の燈火を點じ、その燈明の先後によつて勝敗を決するのである。ランチの審判船が大抵競艇の後から隨いてゆく。ボートを入れてある建物を艇庫といふ。

例句

ボートレース

競漕や天幕あふつ婦人席　晴江（ホトトギス）
競漕や午後の風波立ちわたり　秋櫻子（同）
競漕の雨となりけり櫻餅　素十（同）
競漕の空しき艇庫潮さしぬ　誓子（同）
競漕のしるべの旗や芦の中　のぶほ（同）
競漕や川の眞上の輕氣球　東洋（續ホトトギス）

ボートレース　夕日影競漕會の勝とかや　虚子（句集 虚子）

競漕のすみたる川の荷船かな　同（同）

野球リーグ戰（やきゆうリーグせん）

［季題解説］東京六大學野球リーグ戰のことである。毎年春秋二季に亙つて明治神宮球場に爭覇し、天下の野球フアンを熱狂せしめる。春は大概四月上旬から五月にかけて行はれる。試合が始まるとラヂオは全國に向つて實況を中繼放送する。街頭、ラヂオ屋の前に人垣をつくつてゐるのなども野球狂時代の添景である。今では、單にリーグ戰とのみいつてもこの六大學野球リーグ戰を意味し、神宮球場といつただけでも立派な季感を持つ言葉とさへなつてしまつた。

［例句］春の野球リーグ戰（はるのやきゆうリーグせん）

運動會（うんどうくわい）

［季題解説］春の時候のよい頃になると、一般に學校とか會社とか諸團體とかでは、或は校庭に、或は公園遊園地に、或は廣い野外等に、それ〴〵の趣向それ〴〵のプログラムで、運動競技・遊戯等の會を催して一日の愉快をつくす。就中、小學校の生徒とか、會社工場の下級從業員達とかにとつては、これが一年中の大きい樂しみの一つなのである。秋にも催ほされることが多いが、たゞ運動會といへば、俳句では春の季題として扱ふのである。

［例句］運動會　首里城に運動會のある日かな　英池郎（ホトトギス）

遠足（えんそく）

［季題解説］陽春の好氣節に、學校生徒、官廳・會社・工場の若い從業員達などが一團となつて、指導者に連れられて辨當を携へなどして、遠く郊外に出たり山野に遊んだりして、一日の行樂をすることをいふ。遠足そのことは四時いつにでもあつていゝわけであるが、春に一番多く、また、最も遠足らしい氣持のするのも春であるので、春季の部に屬せしめるのである。

［例句］遠足　遠足の子のちらばりし三笠山　靜堂（續ホトトギス）

鬪牛（とうぎう）

［季題解説］伊豫の國の南部地方宇和島地方では今日なほ鬪牛の風習が行はれてゐる。スペインの鬪牛などと思ひ合せて、田舎の小さな規模の鬪牛といふことも興味あるものである。

［例句］鬪牛　鬪牛の木戸番醉うて喚き居り　柳之（山茶花）

どんたく

松囃子

季題解説 筑前の三大行事（どんたく・山笠・放生會）の一つである。その起原は博多の古老は、平重盛の薨去直後追福のため催されたものとしてゐるが、實際は南北朝頃成立したので、正月の門ほめとして踊られた一種の風流から來たものと考へられる。舊幕時代は正月十五日松囃子として行はれたもので、明治に至り、二月十一日紀元節に行はれ、また日清戰爭後、十一月二十一日鎭魂祭當日、招魂祭の催と合併して擧行されたこともある。その他二三、時日の變更されたこともあるが、現在は四月三十日、五月一日の兩日擧行される。まことに晩春の行事として應はしい氣分のものである。この日は福岡全市を擧げて歡樂境と化するのである。稚子、惠比須・大黑・福祿壽の三福神は、それぞれの當番町があり、これは年々廻り當番である。稚子は曳臺、三福神は馬に、そして幾つもの傘鉾が從ふ。これ等に從ふ當番町の人々は、たちつけ姿で熨斗目の肩衣をつけてゐる。これ等はどんたくの主流をなすもので、博多の氏神櫛田神社に勢揃ひをし、豫定の道順を練り歩く。稚子は要所々々では臺上で舞ふ。稚子の謠といふのがあるが、謠曲を俚化したやうな、初心者の謠に一脈通ふところのあるやうなものである。その謠は「から衣、から衣、裙野の原の姬小松、ひけば千歳も我袖に籠るぞ目度き、この御代の春ぞ目出たき、梅が枝も梅が枝も花さきてこそにほひけれ、思へば春ぞ類なき、梅をいざやかざさん」といふのであるが、これに對して三福神のものは、能に於ける狂言のやうな詞が選ばれてゐるやうである。この稚子三福神は定格のものであるが、その他は思ひ思ひの山車・假裝、種々の趣向を凝らし、三味・鼓・鉦など道囃をなしながら歩く。

例句

どんたく　どんたくの杓子叩も聞飽きし　ゐの吉（ホトトギス）

どんたくをまつばかりなる老鋪かな　原城（同　）

觀潮

季題解説 淡路と四國の間の鳴門海峽は峽口が狹く、大小無數の岩礁が散在してゐる上、潮の流れが極めて早いので、潮の干滿によつて海峽一帶到るところに潮の渦が出來て壯觀を呈する。これを鳴門の渦潮といひ、古來有名である。春、潮の干滿最も甚しい所謂潮時には、淡路福良港・四國撫養港等からの觀賞者が相つぐ。これを鳴門の觀潮といふのである。

凧

紙鳶　いかのぼり　いか　四角凧　六角凧　鶴龜凧　重ね扇凧　軍配凧　時計凧　奴凧　勘平凧　烏賊凧　鳶凧　鴨凧　蟬凧

繪行燈凧　行燈凧

古書校註

【日次紀事】當月（一）より三月に至り、兒童紙鳶を造り、風に乘じて之を揚ぐ。是を伊加能保里と謂ひ、或は多古と稱す。

【滑稽雜談】紙鳶の說、往昔心さし或は軍用とし、或は保養の理侍る也。當世に至りて、兒童の翫ぶのみならず、大人奢侈の間に紹索を裁製して相賞す。都にては、いかのぼりと稱す。東國にては章魚といへり。又鳶のぼりなどいふも是也。風箏は紙鳶に鈴などやうの物を附けて、よく風に鳴る物也。他季にては風に過不及あり。春風に時を得たり

【年浪草】韓信が造る所。高祖陳豨を征する時、未央宮の遠近を量る。（）續博物志に云、今紙鳶に糸を引きて上し、小兒をして口を張り之を仰き視せしめて、小兒の內熱を洩らさんとの爲也。本邦に於て亦小兒盛んに之を弄ぶ。小兒に於て益無きに非ざる也。

【俳諧歲時記】烏賊幟と名づけたるは、はるかに後の事にや。其の形烏賊に似たるよりの名なるべし　江戶の俗、章魚と云ふは、烏賊に對しての名也。伊豆より三河迄の間は五月上ぐる。其の製、三河尤も巧み也

註　（一）二月。但し年浪草には「孟仲季三春の間」と改めて以下の文を引く。

季題解說

割竹或は丸竹を組合せて色々の形を造り、それに紙を貼り、風を受けて上昇するやうに絲目をつけ、麻絲などで空高く飛揚せしめて遊ぶ玩具である。種類が極めて多く、それぞれの名をもつて呼ばれてゐる。大凧は兩翼を絲で後に反らせ、風受の部分を圓るやうに作られてゐる。また、なめし革・藤などを竹に弓形に張つた「うなり」を凧に負はせて、飛揚と共にうなりを立てるうなり凧がある。これも地方により、ぶんぶん凧・むそ等と呼ばれてゐる。長崎の凧揚は特に有名で、四月十日（昔は舊曆三月十日であつた）、金比羅山・風頭・合戰場・じゆんでいかんのん等で、はた合戰がある。このはたはよく枯れた二本の割竹を適當に削り、十字架に結びつけ、横骨の兩端を少しく下方に彎曲させて、竹の四端を細絲で張り、上部の角が稍鈍く、下方の角が稍鋭い四角形を作り、これに西の內のやうな強質の紙を貼つたものである。大きさは畫半枚くらゐなのが普通大で、大小いろいろある。このはたには繪や字を書くことは稀で、多くは色紙の纖張に依つて「×」、斜に一つ縞・二つ縞・三つ縞・井桁・横一・山形・片菱・きり餅など變つた模樣が選まれる。兩角に紅白の小さい紙總をつけるだけで、尾をつけない。絲目は竹の交叉のところと下端に、やゝ前こごみにつけるので、上下左右自由自在に飛翔せしめることが出來る。掛はたには絲目から十間くらゐビードロ（硝子の粉を糊で煉り、麻絲・針金などに塗り固めたもの）をつけ、また小さい鎌などを絲に結びつけて、對手のはた絲にからませ、切つて飛ばすのである。切れて飛ぶはたを切れはたとい

ふ。この切れはたを拾ふのも亦一風景である。市中にははた屋が出來、はた揚場にははた賣が出る。そして人々は毛氈や筵を用意し、凧合戰を見ながら持參の辨當を開き酒を酌んで樂しむ　精靈流し、諏訪のお宮日と共に、昔から長崎の三大行事とされてゐる。
凧揚の期節は全國まち〳〵で、新潟・三河の一部・埼玉の寶珠花等、五月の節句に揚げるところもあり、子供等は小春日和などにもよく揚げてゐるが、それはほんの僅で、一・二月に揚げるところは、東京・大阪を始め相當多く、長崎・九州の大部分・金澤等、三・四月頃に限り揚げる地方も少くない。本來凧は春風に揚げるものので、感じから言つても、のんびりとした春らしさがあり、凧に春風・東風などゝ書くのもこの意味に外ならない。新年に揚げるのは、新年の行事と見るよりも、春になつたといふ舊暦の新年の氣持が存續してゐるやうに思はれる。【參照】長崎の凧揚(ハタアゲ)

【例句】

凧

松に世話かゝる階子やいかのぼり　也有（羅葉集）
常世へはやらぬ絲あり凧巾　同（同）
几巾空見てものはおもはざる　白雄（白雄句集）
いかのぼりきれての後の風ぬるし　同（同）
たこみつよつ山邊の長か夕詠　同（同）
夕ぞらや几巾見に出し酒の醉　同（同）
切てやるこゝろとなれやいかのぼり　曉臺（曉臺句集）
松かせのうしろになりぬ凧　同（同）
凧ひかへて渡る小川哉　舍羅（類題發句集）

漁村

蜑の子や竹に付たる凧　風洗（其袋）
凧高し鏡が浦は眞ッ平　子規（子規句集）
きれ凧の廣野の中に落ちにけり　同（同）
大凧に近よる鳶もなかりけり　同（同）
人の子の凧あげて居る我は旅　同（同）
大凧のたてかけてある小家かな　鳳嶺（新俳句）
走る子よ紙鳶の上るが嬉しさに　潮水（春夏秋冬）
宿取りて二階に居れば凧　露月（同）
落ちたりし凧取りに行く人の家　秋竹（同）
大凧に引かれて丘を下りけり　青山（同人）
凧店に北風の鳴る夜市かな　南畝（蓼葉）

多武峰

あがりきて忍坂(オシサカ)の凧峰をちかみ　菁子（ホトトギス）
大琵琶に浪立てれども凧日和　三山（同）
大凧をかついで通る漁師かな　夏山（ホトトギス）

凧
わかの浦に来てうち踊む凧日和　梅史（續ホトトギス）
凧の雲揚合の雲にとなりたる　月上（同　）
道芝をたぐりためたる凧の絲　虛子（句集　虛子）
凧籠の中よりあがりけり　同（ホトトギス）
猿まはし紙鳶あげの子を見てゐたり　同（續ホトトギス）

【參考】古へ紙老鴟(シラウシ)といふ。七修類纂に「紙鳶、本五代漢隱帝與李業所造、爲宮中之戲者」とあつて、古くから支那に行はれたことが知られる。物類稱呼に「紙鳶いかのぼり、畿内にていかといふ、關東にてたこといふ、西國にてたつ又ふうりうと云、唐津にてはたこと云、長崎にてはたと云、上野及信州にてたかといふ、越路にていか又いかごといふ、伊勢にてはたと云、奧州にててんぐばたと云、上州にてたこと云、上がたにてはいかをのぼすといふ、江戸にて、たこをあぐるといふ、東海道にて、たこをのぼすといふ、相州にてたこをながすと云。」江戸時代には明暦元年以後しばしば禁止せられたが、しばしば禁止せらるゝのは、實際に禁令が徹底せぬものと見られる。

長崎(ながさき)の凧揚(はたあげ)

【季題解說】【季題】凧(たこ)

小弓引(こゆみひき)　雀小弓(すゞめこゆみ)

【古書校註】【栞草】著聞集　延長五年四月、彈正親王、内裏にて小弓を射させ給ひける。酒宴果てゝ、夕になりて、清涼殿の東の廂にて、又小弓の勝負あり云々　本朝軍器考　揚弓・雀小弓と類して、二物ともに公家に玩ぶ遊興の器にして、武家の用にあらざるものなるべし。

註　○山州府志に「雀小弓は近世亦之を翫ぶといひしは天和年間の事にて、其後すたれたるにや聞えず」とあり、嬉遊笑覧に「小弓は即ち揚弓なるべし、雀小弓は殊に小きものと聞ゆ」二水記に、享祿二年二月三日年時參內、御揚弓あり」と記し、小弓といはず、專ら揚弓といひ、小弓、はた雀弓にのみいへり」とある。

【季題解說】古へ三四月頃、宮中で堂上人などが小弓で勝負を爭つた遊戲である。古今著聞集・東鑑等の文獻に徵することが出來る。小弓といふのは遊戲に用ひる弓で、揚弓などの類である。雀小弓といふのは、生きた雀を絲で括つて吊しておいて、小さい弓矢を番へて射とる遊びである。近く迄田舍にはあつたといふことである。

【例句】
小弓引
小弓引廂に雨を催しぬ　五城（春夏秋冬）
美しき額の汗や小弓引　虛子（句集　虛子）

【參考】西行の歌、「篠ためて雀弓いるをのわらは額ゑぼしのほしげなる

かな」とある。これは童幼の遊びである。大人の遊戯としては雍州府志に「近世亦玩之」と言ってあるのは天和年間の事であるから其の頃用ゐたものであらう。

梅の花衣（うめのはなごろも）

古書校註

【滑稽雑談】清巌正徹の誹物に曰、梅がさねの衣は、表濃紅、裏紅梅、次第にをめる、梅のから衣ともいへり。又曰、一重梅、表白く、裏紅、此の衣は年の内霜月の末より著る也。雪の下の紅梅(一)と稱して著る也。(以上もしほ草)(一)これらをすべて梅の花衣などいへり。又、(二)梅花を折りて頭に挿めば、二月の雪は衣に落つ、などいへる心も侍る。

註 ○春一月の部に出づ。年浪草には「子日衣」の條下に說く。(一)「紅梅」は二月「櫻衣」の條下にある。(二)以下は和漢朗詠集に所收。

鶯衣（うぐひすごろも）　鶯の袖（うぐひすのそで）

古書校註

【滑稽雑談】藻鹽草に云、鶯の袖、腋紅ひたる衣の袖也。東小袖と云ふも同じ事也。(略)鶯の袖・鶯衣、此の二つの物は衣の色にあらず。縫腋の衣を云ふ也。鶯と云ふ名にて春也。

註 ○春一月の部に出づ。

松がさね（まつがさね）　若みどり（わかみどり）　子日衣（ねのひごろも）

古書校註

【滑稽雑談】藻鹽草に云、松かさねの衣は、表青く、裏紫もあり、又青きもあり。此の衣をば年の始に著る故に、若みどりともいふ。又子日衣ともいふ。

註 ○春一月の部に出づ。

柳重（やなぎがさね）　柳衣（やなぎごろも）　花柳衣（はなやなぎごろも）　青柳衣（あをやなぎごろも）　柳のきぬ（やなぎのきぬ）

古書校註

【滑稽雑談】藻鹽草に云、柳重(表白裏青)・花柳衣(表白裏青)・青柳衣(表青裏濃青)

註 ○春一月の部に出づ、年浪草には「柳のきぬ」と見えてゐる。

若草衣（わかくさごろも）

古書校註

【滑稽雑談】藻鹽草に云、若草の衣、表薄青、裏濃青、正月初頃までは仔細なし。

註 ○一月の部に出づ。

躑躅の衣（つゝじのころも）

古書校註

【滑稽雑談】つゝじの衣、表白・裏紅。もちつゝじ、表紫・裏紅。いはつつじ、表紅・裏紫。白つゝじ、表紅・裏紫。

【年浪草】桃華（一）の御説に、面蘇芳、裏青か。三月之を著す。臺記（二）に曰、躑躅の下重、面蘇芳、裏紅。

註　○滑稽雑談の説は藻塩草に據つたもので、二月の部に、年浪草の説は三月の部に見えてゐる。（一）一條兼良のこと。（二）藤原頼通の日記。

菫の衣（すみれのころも）

古書校註

【滑稽雑談】すみれの衣、表紫・裏薄紫。壺すみれ、表紫・裏薄青。

註　○春二月の部に出づ。藻塩草の所説に據つたもの。

藤がさね（ふぢがさね）

古書校註

【滑稽雑談】藤がさね、表紫・裏薄紫。しら藤、表うす紫・裏こき紫、此の衣は二月・三月・四月、祭より先までは、更衣ならずして用ふ可し。

註　○春二月の部に出づ。藻塩草の所説に據つたもの。

櫻衣（さくらごろも）

古書校註

【滑稽雑談】藻塩草に云、二月、さくらの衣、表白裏紫。紅梅、表紅裏紫。松櫻、表紫裏薄紫。薄花櫻、表白裏紅　かば櫻、表紫うら青、此の衣雙あるべし、但し、かさねなきよしさたあり。

【年浪草】道済院殿（一）御抄に曰、面白、裏青か。關白大臣等、春之を著す。

註　○滑稽雑談の説は二月の部に、年浪草の説は三月の部に出づ。（一）三條西實隆。

山吹衣（やまぶきごろも）

古書校註

【滑稽雑談】（一）山吹の衣、表朽葉裏黄也、かさねにも有り。花山吹、おもて黄裏薄萌黄。青山吹、面青裏黄、此の衣二月にも用ひる事あり。

【年浪草】山吹衣。又花山吹と曰ふ。桃華の御説に、面薄朽葉、裏黄、冬より三月に至る。（略）裏山吹。桃華の御説に、面黄、裏紅。（略）又青山吹といふ。

註　○春三月の部に出づ。藻塩草の説に據つたもの。

早蕨の衣

古書校註

【滑稽雜談】早蕨の衣、表むらさき裏青、此の衣近代用ひたる人なし、名ばかりか。

註 ○春三月の部に出づ、藻鹽草の說に據つたもの。

桃の衣

古書校註

【滑稽雜談】藻鹽草に曰、三月、もゝの衣、おもてから紅・うら紅梅、或は、表白・裏紅もあり。

註 ○春三月の部に出づ。

小袖納　花衣を藏ふ

季題解說 花見衣を藏ることをいふ。嵯峨や御室と浮かれ廻つた花見の小袖に、匂ひ袋でも入れて、簞笥の底深く納める時には、誰しも一種の哀惜を感じるであらう。昔の都人には俗に「京の著倒れ」といふ諺さへある通り、衣裳には思ひきつて贅澤を盡したものであるが、特に花見の小袖には意匠を凝らして、應擧とか、大雅堂とかいふやうな當代の名匠に繪を畫かせたものを、その儘小袖に仕立てゝ著て出ることが流行り、春の花見は丁度今の帝展・院展を街頭に見るやうなものであつた。從つてさういふ立派な衣裳を仕舞ふ時分には、朋輩や近所の人達がその評判の小袖を拜見に出掛け、お茶でも饗はれて互に春を惜んだといふことである。小袖納めは恐らくその時代に生れた季題であらうと思ふが、併し今日に當嵌め一見ても、婦人達が花見衣裳を仕舞ふ時の心持は少しも變つてゐないと思はれる。【參照】花衣(ハナゴロモ)

捨頭巾

季題解說 寒い頃寒さを防ぐために用ゐた頭巾を、春暖くなつて用ゐなくなるのをいふ。【參照】冬 頭巾(ヅキン)

マント脱ぐ

季題解說 道を步いてゐるとか、堤に腰を下したり人の家の緣に腰かけたりするとかの場合、厚ぼつたい外套を暑くるしく覺えて、假に脫いで小脇に抱へたり、かたへに置いたりすることをいふ。春の或る時候を適切に感ぜしめる一つの事象である。【參照】冬― 外套(グワイタウ)

胴著脱ぐ（どうぎぬぐ）

【季題解説】 全く春の時候となつたので、冬の間著物の下に著てゐた胴著を脱いでしまつて、再び用ゐなくなることをいふ。長い間暖く心地よく著馴れて來た胴著であるが、ほか／＼暖かくなると、身體がむし／＼して胴著など邪魔に思へて來る。そして、いよ／＼脱いでしまふと、急に背中が小寒く淋しくなつたりもする、などゝいつたやうな氣持のものであらう。【參照】冬—胴著。

春の日傘（はるのひがさ）

春日傘（はるひがさ）

【季題解説】 春の日燒は癒り難いと言ひ傳へて、婦女子が春のうちから外出に用ゐる日傘をいふのである。遠出遊山の時には、一種の風除にもなつて、強い花嵐にさし堪へてゐる風情をほゝゑましくも眺めることなどがある。今日は日傘と言つても、多くパラソルで、それも年を逐うてはやりすたりが甚だしくなつてゆく。春日傘は總體に淡彩色で、華かな中にも楚々としたものが自ら夏の日傘とは異るやうである。【參照】夏—日傘。

【例句】 春の日傘

春日傘浮名の顔をかくしけり　十二星（同　人）
草に置けば生るゝ風や春日傘　董　糸（ホトトギス）
牧の牛に傾け行くや春日傘　蛃　魚（同　）
シネマ出てさしかたむけぬ春日傘　楊　童（續ホトトギス）

麥踏（むぎふみ）

麥を踏む（むぎをふむ）

【季題解説】 麥は芽を出すと、少々の寒さくらゐにはこたへず、盛んに萌えるものである。餘り芽ばかり伸びてもひよろ／＼高くなつては、結實に面白くない。そのため足で踏みこゞめて伸びるのを押へるのである。また冬朝霜のために浮き上つたのを踏んで根を壓へ鎭める目的で行ふのである。その時期は春まだ淺く、山には雪があり、頬を吹く風も冷たい頃である。麥を踏むといふことはする地方もあり、あまりしない地方もあるやうである。【參照】植物—麥青むなど。

【例句】 麥踏

出はやな誰か野邊の麥踏に　白雄（白雄句集）
麥踏や日は山里にうつくしく　蛩樓（漁　火）
麥踏や百姓せねば食へぬ僧　俳小星（ホトトギス）
麥踏に追はれて烏かあと鳴く　同（同　）
麥踏やむき振替へて向ひ風　泊雲（同　）
江畔の風荒き麥踏みにけり　俚人（同　）

降れば去に舞るれば出でて麥を踏む　春畝（同）
麥踏や心すゝまぬ病上り　柿紅（同）
麥踏や背の子もしたる頬被　木母寺（同）
麥踏むや囚人鎖もち合ひて　陽水（同）
一家不和の皆麥踏に出たりけり　岳居（同）
麥踏の大鳥を見て目もすがら　素十（同）
父に從き母につく子や麥を踏む　草餅（同）
都府楼址にて
霜下りて麥踏去ればわれも去る　清三郎（同）
麥踏の踏みとまりたる晝の月　あふひ（同）
杖ついて麥を踏みゐる媼かな　露文（同）
麥踏や背の子供の風車　ひさ女（同）
麥踏の影へなへとついて行く　玉虬（續ホトトギス）
みどり兒をふところにして麥踏める　對洲（同）
麥踏のうしろにあがる千鳥かな　羽公（同）
麥を踏む太き草履をつくりけり　猿鳴子（同）
麥踏んで戻りし父や庭に在り　虚子（句集虚子）
風の日の麥踏遂にをらずなりぬ　同（ホトトギス誌）

耕（たがやし）

春耕（しゆんかう）　耕人（かうじん）　耕馬（かうば）　耕牛（かうぎう）

古書校註

【滑稽雜談】先代舊事記に曰、農耕は天下の大務なり。皇田を耕すは則ち良辰を擇び、當日には國造の地頭田面に出で、八民八方に畏り、或は國司、或は國造、或は縣主、或は地頭、田に下りて三たび禮し一身ら耒を執り、之を耦すこと八たび、民、各々かくの如くす。その次第と爲すは年の長を以てす。

季題解説

寒國など一毛作地では、稻を收穫するかしないうちにもう雪に見舞はれ、田は刈取られたまゝ雪の下に年を越え、それが雪解の後、夏の田作に備へるため鋤き返される　これが所謂春耕である。しかし暖國では殆ど二毛作で、濕田等の外は稻を刈りとつた後は畑として普通麥の裏作を行ひ、その刈取りは六月初旬となり、田植のために打返す仕事は夏季になる。それで春麥の中とか、その他穀菜を植ゑる用意に田畑を打返すのが春耕となるのである。〔參照〕田打（タウチ）

例句

耕

萬倍のことはじめなり墾田（アラキハリ）　浪化（浪化上人發句集）
耕すや親に似ぬ子の仁しらず　支考（蓮二吟集）
ふり上る鍬の光や春の野ら　杉風（杉風句集）
耕や鳥さへ啼ぬ山かげに　蕪村（續明烏）
耕や五石の粟のあるじ貞　同（蕪村句集）

耕すやむかし右京の土の艶　太祇（太祇句選）
耕に馬持る身のうれしさよ　召波（春泥發句集）
たがやしやいづこ道ある谷の底　同（同）
耕や矢背は王氏の孫なりと　同（同）
十津河や耕人の山刀　同（同）
鋤鍬も今を春邊の田面かな　闌更（半化坊發句集）
耕や世を捨人の檐端迄　大魯（明烏）
耕して神と佛につかへけり　思桂（ホトトギス）
渡舟の馬に耕の馬嘶けり　農生（同）
耕すや朝見し雲を午後に又　梅史（同）
のけぞりに耕馬の向をかゆる人　元（同）
耕牛のふと大蹄を揚げにけり　蕪村（同）
飛行機のまきびら落ちぬ耕せり　たけし（同）
耕人の腰をかけたる書堂かな　左人（同）
耕人よ樂浪瓦出でずや　亭々（同）
はるかなる松よりかへす耕馬かな　凡秋（同）
笄のきらり／＼と耕せり　卿人（同）
耕してありぬ青砥が屋敷跡　王城（同）
織るごとき燕の下にたがやしぬ　樂生（同）
耕人や牛を枕に眠りたり　姥黄（續ホトトギス）
礎に佇ち春耕と語りけり　奇北（同）
耕牛になかれて腹のへりにけり　仙者（同）
耕すや女貞のころの烽火臺　星童（同）

田打（たうち）

田を打つ　田を返す　田を鋤く、　田掻（たがき）　田掻馬（たがきうま）　田掻牛（たがきうし）

古書校註

【御傘】田の字・色の字・穂の字・鳴子・ひたもる・かゞし・そうづ・鹿をおふなどの詞入れば、皆植物に二句去りて秋也。たゞ田に、鹿のなく、又は狩をする・鷹がねなど結びても植物にはならず。（略）田をかへす、立春也。

【滑稽雑談】（御傘に云、田をかへすは春也。田をすく、同じ心にて侍る。（略）夫木　そろひおふる野澤のあら田打ちかへしいそげる代はむろの種かも　隆源法師

【栞草】田を犂くは、来耜を用ひて土をかへし、田をひらく也。かへす・打つ、ともに同じ。

季題解説　春に来耜をもつて土を打返し、土塊を細かく砕いて田を拓くこと、またその田打をする人をいふ。牛馬を用ゐたり、また人力を以つてし

たりする。多くは草を踏み入れて肥料とする。この田打が田植の準備をなすのである。【參照】耕　畑打　畦塗

【例句】

田打

債とらで象も田をかへす動かな　鬼貫（俳諧七車）

ひとおもひ碎くに手なき田槌哉　支考（蓮二吟集）

足と鍬三本あらふ田うちかな　也有（蘿葉集）

鍬の手の鎌へは遠き田打かな　同（同）

揚るとき鷺は誘はぬ田打かな　同（同）

山畑の繪に

艸〳〵の根を逆さまに田打哉　闌更（半化坊發句集）

田やかへすへたら〳〵と谷の底　巢兆（曾波可理）

二渡し越えて田を打ひとり哉　一茶（九番日記）

六里來て田をうつあたり中尊寺　乙二（をのゝえ草稿）

子を獨もりて田を打つ孀哉　快宜（あらの）

萬歳をしまうて打てる春田かな　昌碧（同）

春旱

股も張りさけよと計り打つ田かな　土音（ホトトギス）

日曜にやらねばならぬ田打かな　晩紅里（同）

子を連れて田打戻りの夫婦かな　樫子（同）

落柿舍に煙草憩みの田打かな　癡洲（同）

鞍馬道

戀敵かの山鼻に田を打てり　紫陽花（同）

このあたり女ばかりの田打かな　北山（同）

田打賃人の馬のと拂ひけり　とん幸（續ホトトギス）

畑打（はたうち）

畑を打つ　畑返す　畑鋤く

【古書校註】

【滑稽雜談】○御傘に云、畑打は春也。○和俗にも畑の字を用ふ。是火田の二字を合する也。火田は耕さずして火種する也　また打つと云ふは、山野の地を横截して、是を截帖といふもの也と云ふが如く、諸の種を蒔くべき爲に鋤耕するの義也。

【季題解説】

春、畑または陸田を打返すこと及びその畑打をする人をいふのである。冬の間大方休んでゐた野良仕事が再び忙がしくなつて來る、その第一歩である　【參照】田打

【例句】

畑打

畑打音やあらしのさくら麻　芭蕉（花摘）

うごくとも見えで畑うつ男かな　去來（去來發句集）

はた打よこちの在所の鐘が鳴　蕪村（蕪村句集）

畑打

畑打や木間の寺の鐘供養　蕪村（蕪村句集）
畑うちや法三章の札のもと　同（同）
畑うつやうごかぬ雲もなくなりぬ　同（同）
畑打や細きながれをよすがなる　同（新五子稿）
畑打や我家も見えて暮かぬる　同（同）
畑うつや道問人の見えずなりぬ　同（蕪村遺稿）
畑打の目にはなれずよ摩耶が嶽　同（同）
畑打や耳うとき身の唯一人　同（同）
畑打や峯の御坊の鶏の聲　同（同）
畑に用に打出の鍬や小槌より　同（蕪村句集拾遺）
畑うつやいづくはあれど京の土　太祇（太祇句選）
蹇脚や畑打休ム日なたぼこ　召波（春泥發句集）
雉一羽たつ畑打のくさめかな　也有（蘿葉集）
畑うつや大藤内が丸はだか　蓼太（蓼太句集）
畑をうつ翁が頭巾ゆがみけり　几董（井華集）
年〳〵や里の山畑うちのぼり　曉臺（曉臺句集）
畑うちや嗚呼陵のまつの陰　同（同）
畠打や穴のきつねに餅居て　巣兆（曾波可理）
鎌倉の世から畑うつおとこかな　成美（成美家集）
棒切でつゝいておくや菴の畠　一茶（七番日記）
畠打の眞似して歩く烏哉　同（同）
打畠や世を立山の横つらに　同（同）
門前や半分打ておく畠　同（同）
山畠や人に打せてねまる鹿　同（同）
門畠や一鍬づゝに腰たゝく　同（九番日記）
畠打や鍬でをしへる寺の松　同（同）
畑打や子が這ひ歩行くつゝじ原　同（嘉永版發句集）
畑打や田鶴啼きわたる邊り迄　同（同）
畑打の尻つき合す日暮かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
畑打や昔は滋賀の都人　乃露（類題發句集）
畑打や襦袢も杭にきせて置　卜章（春莖）
日一日同じ處に畠打つ　子規（子規句集）
雲無心南山の下畑打つ　同（同）
畑打や大根花咲く傍に　同（同）
日あたりや江戸をうしろに畠打つ　鳴雪（新俳句）
畑打つて戻る潮來の小舟かな　狙醉（同）
山門の奥に畑打つ法師かな　虵堂（同）
畑打の梅散る風を寒がりぬ　博麗（懸葵）

戻り來て足音もなし畑打　花蓑（ホトトギス）
大男の佛男や畑打　鬼城（同）
畑打つやかゞやき出でし沼の面　手寒（同）
畑打に道問ふほかはなかりけり　誓子（同）
山の端に畑打ちすがる一人かな　麻美人（同）
だき捨つる石に眼くらむ畑打　翠城月（同）
畑打つやひたすら土をいつくしみ　丈葦（同）
天近く畑打つ人や奥吉野　青邨（同）
畑打や一人憩ひて一人打つ　ゐの吉（同）
乙訓の四方の藪なり畑打　夜半（同）
畑打や〳〵人どなりて遲くまで　助二郎（同）
四手網治めて畑打ちにけり　筑城（同）
畑打つ魚見櫓の子もとかな　きゆう（續ホトトギス）
御陵にこだまかしこし畑打　ぎんが（同）
畑打を見てゐては掃く座敷かな　富久子（同）
畑打は女ばかりの漁村かな　菊子（同）
畑打の一人の囚徒日を仰ぐ　重子（同）
畑打に夕波遊び暮れにけり　虛子（句集　虛子）

畦塗（あぜぬり）

塗り畦（ぬりあぜ）

季題解說　田を打ち終つた後、その田の畦を塗りつけること、つまり水田のぐるりから水が洩らないやうに土をもつて塗り固めることである。てらてらと春日に光るきれいな畦がだん〳〵塗り立てられてゆくのを見てゐるのも面白いものであるし、塗り固められた畦が白く乾き割れて、塗り込められた杉菜などが、その壁のやうな面からもう莖をあげてゐるところなども特殊の景色である。〔參照〕田打。

例句

畦塗

疇ぬりや蓑ふりすゝぐ流れ川　荊口（類題發句集）
疇ぬりの泥より出でゝ蓮花草　琴木（同）
畔塗るや塊生きて居し泥の中　土音（ホトトギス）
畦塗や擡げる草を塗りつぶし　うたゝ（同）
塗畦の上なる笠や去に支度　念腹（同）
ふところへとび込む泥や畦を塗る　先頭（同）
ほゝけたる茅花の畦を塗りにけり　夏山（同）
老の腰尚も曲げてぞ畦塗れる　泊雲（同）
塗畦に鷺つんのめり下り立ちぬ　月踏（同）
うつくしく田毎の畦の塗られけり　夢香（同）
畦塗やいづこへうせし水戸の石　桐南子（同）

畦塗

畦塗に燕が水輪落しけり　秋櫻子（ホトトギス）
塗畦にあるあしあとは青鷺か　棋六（同）
塗畦の裏門道となりにけり　村家（同）
御本山二十重の畦を塗りかたむ　茅舍（同）
草悲し泥をかうむり畦となる　東子房（同）
塗り終へし畦にうつりて[illegible]るもの　楊童（同）

参考 畦、古語にあといふ。大祓の詞等に畦放ちとあるは畦を破壊する罪である。倭名抄には畔を久路と訓してゐる。「小山田のをだのなはしろみほすとてあぜきる程に日は暮れにけり」。

種物（たねもの）

物種（ものだね）　花種（はなだね）　種寶（たねだから）　種袋（たねぶくろ）

季題解説 五穀・蔬菜・草花類などの種子を、前年中よく乾燥して叺とか紙袋とかに入れ、温度の餘り變化のない處に吊して一冬貯へて置く、これが種物である。これを春になつて取り下して蒔くのである。〔下題〕種選（たねえらみ）　種井（たない）　種俵（たねだはら）　種浸し（たねひたし）　種蒔（たねまき）　種案山子（たねかゞし）

例句

種物

鎌倉へ京のもの種送りけり　槇女（ホトトギス）
懐にせし物種やキネマ觀る　禪寺洞（同）
何や彼の物種混じる小箱かな　ちとせ（同）
種袋一筆書いてもらひけり　山々（同）
煙の如き松葉牡丹の種とかや　大愚（同）
物種をうるや田無の町はづれ　つる女（同）
花暦註にありし種物屋　椎花（ホトトギス）
樓門の物種賣や二月堂　濱子（同）
種袋風もてあそぶ庭のうち　青邨（同）
向ひ合ふ出町柳の種屋かな　朱朗（同）
落ちてゐる種註文の端書かな　二葉（同）

種選（たねえらみ）

種選る（たねえる）

季題解説 前年取入れた籾を春三月彼岸前後に俵から出し、本田に必要だけのものを選り別けて後、桶に鷄卵の鈍端部の浮き上る程度の濃度の鹽水をつくり、種選用の籠をもつて所謂種選みを行ふのである。後清水で良く洗つて俵に入れて、池・川・桶等に浸す。その期間は七日間である。しかしまた籾ばかりでなく、一般の物種を選り分くることにいつてもいゝであらう。〔參照〕種物（たねもの）

例句

種選

種選るや妻聞き出せる雨の音　曉華（ホトトギス）

臍蓋やまろばせて選る大豆種　土音（同　）

種井（たねゐ）　種池（たねいけ）　たなゐ

【古書校註】【滑稽雑談】種井も春也、種米を俵にして、初春に漬る水の事也。夫木
賤の男が苗代垣をあせ置きて今ぞたね井にたねおろしつる　國信。
【年浪草】種井とは種を漬る井を謂ふ。

【季題解説】籾を蒔く前に種籾を水に浸すのであるが、それは種籾の俵を普通田の片隅などにある井戸の中へ、二三週間も投じておくのである。その井戸を種井といふ。また籾種を池に浸けることもあるが、其の場合にはそれを種池といふのである。【參照】種物（タネモノ）　種浸し（タネヒタシ）　種俵（タネダハラ）

【例句】
種井　おがたまの木に縄さげし種井哉　支考（蓮二吟集）
ひら〱と蛭すみわたる種井かな　蛇笏（ホトトギス）
雨水の濁りさし込む種井かな　白山（同　）

種俵（たねだはら）

【季題解説】稲の種籾を入れて、種井、種池、種田等に浸けてある俵をいふ。
【參照】種物（タネモノ）　種浸し（タネヒタシ）　種井（タネヰ）

【例句】
種俵　よもすがら音なき雨や種俵　蕪村（蕪村句集）
種俵緋鯉の水につけてあり　立子（ホトトギス）
種俵蠑螈が乗ってあがりけり　來子（續ホトトギス）

種浸し（たねひたし）　種かし（たねかし）　種つける　種ふせる

【古書校註】【年浪草】紀事（一）に曰、二月土用中、吉日を擇びて、農民蓄穀の種を水田に浸す。○和漢三才圖會に曰、凡そ田を作るに、彼岸の前十日に穀を水に漬す。彼岸の後十日に取出し種を下ろす。
【註】（一）日次紀事。

【季題解説】八十八夜の前後に、苗代に蒔くべき稲の籾種を、俵のまゝ、池とか井手とか或は汲み置きの水、時には微温ある水などに浸して、種のふやけるのを待つのを種浸しといふ。浸す種も、一度にがりを混じた水に入れ、浮き上つた不良の種は除いてしまふ。かうして種選びの済んだのを浸すのである。【參照】種物（タネモノ）　種井（タネヰ）　種蒔（タネマキ）

【例句】
種浸し　種かしや太神宮へ一つかみ　其角（五元集）

種浸し　古河の流引つゝ種ひたし　蕪村（連句會草稿）
種浸し徑をふさいで居りにけり　穀雨（ホトトギス）

參考　たねかしとも言ふ、攝州住吉郡にたねかしの社あり、神名式にいふ多米神社と傳ふ。かしは神代紀に爲飯をいひかしと訓んでゐる、水に浸すを言ふ。拾遺和歌集十一戀に「けさかし侍ける女のさらに返ごとし侍らざりければ、藤原實方朝臣、わがためはたな井のし水ぬるけれど猶かきやらむさてはすむやと」。又散木弃歌集（源俊頼）に「秋刈りしむろのをしねを思ひ出でて春ぞたな井に種をかしける」、顯昭の散木集注に「たな井とは種をひたしておく井なり。それをばたな池ともいふ也。其種つけておくをば種かすともいふなり。又たねこすともいふなり。なはしろがきの上より種をまきいるゝをばたねこすと申とかや」。

種(たね)蒔(まき)　種(たね)おろし　籾(もみ)蒔(まき)く　種(たね)籾(もみ)

古書校註　【滑稽雜談】御傘に云、種蒔、春也。稻の種の事也。○私云、（一）其の外諸菜蔬の種も、春分にまく物は多し。勿論春也。萬葉集に、ゆだね蒔とよめるも（二）五百種也、只無名の種蒔は、苗代の事と心得べき也。

註　（一）其意の自說。（二）卷七に、ゆだね蒔く荒木の小田を求めむとあゆひいでこぬれぬ此の川の瀨に。作者未詳。

季題解說　稻の籾種を苗代に蒔きつけることをいふ。他の穀菜花卉の種を蒔くのは、物種蒔くといひ、或は藍まく、麻まく、花種まくといふ風に、蒔く畑物の名を出していひ、種蒔と區別する。籾種は水に浸してほとばかしたのを、春の彼岸後十日目頃に蒔くのを普通とする。一週間くらゐ經つと苗を生ずる。參照　種物(タネモノ)　種案山子(タネカガシ)　花種蒔く(ハナダネマク)

例句

種蒔

舞鶴や天氣定めて種下し　其角（五元集）
水鳥の歸ていづこ種おろし　白雄（白雄句集）
雁は歸鴨はいづこへ種おろし　同（同）
山畠や種蒔よしと鳥のなく　一茶（旅日記）
我蒔た種をやれ〳〵けさの露　同（發句集）
鵠ゆるく種蒔く人の頭上飛ぶ　句佛（懸葵）
種蒔くや先づ神の座に一抛り　土音（ホトトギス）
蒔く種を瓠に抱く翁かな　橙黃子（同）
指先を流るゝ如し種を蒔く　泊月（同）
手を落つる種見えぬまで暮れゐたり　松夢（同）
種蒔の尼とも見ゆる頰被　義王（同）
又曇る那智の御山や種を蒔く　呑界（同）
種袋驢馬に負はせて蒔きにけり　岳南（同）

炭斗のごときものより種蒔ける　夜半（同）
今蒔きし籾華やかや藪の影　泊雲（同）
水くゞる小さき音や籾を蒔く　一枚女（同）
たのしみな津島祭や籾をまく　彩虹（同）
たちまちに走る濁や籾を播く　穣葉子（同）

上州に遊びて
籾を蒔く折から吹雪せしことも　たけし（同）
屋根よりも裏畑高し種を蒔く　旭子（續ホトトギス）
種蒔くや皇靈祭の服のまゝ　和堂（同）
古桝の漆光りや種おろし　一壺（同）
阿蘇見えぬ阿蘇の村々種下す　紫朗（同）
かたことゝ進む陸稻の種蒔機　圭石（同）
おもむろに足をかはして種を蒔く　陽花（同）
種を蒔く心づもりのありにけり　東子房（同）
手をこぼれて土に達する迄の種　虚子（句集　虚子）

種案山子（たねかがし）

季題解説　春種を蒔いたのを、鳥が來て啄むのを威すために、案山子を立てるのを種案山子といふ。多くは苗代に用ふるもので、秋の案山子と較べると簡略であつて、苗代の上に絲を縱横に張り、それに白い羽毛、布片類を吊したものなどが多い。中には秋の案山子のやうな、念の入つた作り人形もある。〔參照〕種物（タネモノ）　種蒔（タネマキ）　秋―案山子（カカシ）

苗床（なへどこ）

種床（たねどこ）　溫床（をんしやう）　冷床（れいしやう）

季題解説　苗床とはすべて植物の苗を仕立てるための假床のことであるが、最も多く廣く利用されるのは、野菜、草花類の苗を養成する床である。この苗床には冷床と溫床の二通りあつて、冷床といふのは特に釀溫裝置を施さないで、露地に直接設けた苗床のことであり、溫床といふのは特別に釀溫裝置を設け、その中で苗を育てる苗床のことである。冷床の造り方の大要は、先づ日當り風通しのよい位置を選み、そこに短册形の平床を築き、肥料と土砂とを適當に混合したものを三四寸の厚さに敷き均らして、その上に種を蒔く。これに適した野菜は甘藍・花椰菜・萵苣・玉蜀黍・セロリー・パセリー・葱などである。溫床の方は、位置は大體冷床と大差ないが、これにも高設溫床と低設溫床との二つがあり、前者は低濕な場所に設くるもので、溫熱を發こす釀熱材料を地上に高く積み重ね、その四方を木の框・コンクリート・煉瓦などで圍ひ、上を硝子または油障子で覆ふ方法であり、後者は地面を掘り下げ、その上に釀熱材料を踏み込み、その他は前者

と同じく四方は框、上は障子で覆ふ方法のものである。これに適した野菜は瓜類・茄子・トマト・蕃椒・苗藷などである。この外簡單なものは、四方を板、藁、炭俵などを以て圍ひ、上も障子を用ゐず蓆類で被ふにとどむる場合もある。從つて規模にも大小あり、樣式も區々で各地必ずしも同一ではない。〔參照〕苗札ナヘフダ

例句

苗床
苗床や風に解けたる類かむり　みどり女（ホトトギス）
苗床やきれいに掃いて大藥家　東子房（續ホトトギス）
苗床の緣に腰かけ話しをり　越央子（同）
苗床やおなじ二葉の茄子胡瓜　雨意（同）
苗障子霰なか〳〵やまぬかな　三重史（同）
苗床や雨よけ日よけ怠らず　俳小星（同）
苗床を這ででむしや小糠雨　泊雲（同）

苗札（なへふだ）

季題解說　野菜、草花類の種を、苗床、花壇、土鉢等に下した場合、或は苗や芽を根分けなどした場合、またそれらの苗が出揃ふと、ものによつては二度も三度も植ゑ替えたりするが、さうしたいろ〳〵の場合に間違はないやうに、苗の品種とか、名稱とか、その他必要と思ふ事項を書き記して立てゝ置く小さな木札のことである。〔參照〕苗床ナヘドコ

例句

苗札
苗札の夕影長く曳きにけり　てい女（ホトトギス）

花種蒔く（はなだねまく）

季題解說　秋草の花種を蒔くことである。專門家は大概苗床を拵へてそれに種を蒔くが、一般の家庭では、花壇、前栽、土鉢の夫々に直かに種を蒔いたり、蜜柑の空箱などに土を入れ、油粕を交ぜてそれに種を下したりする。秋蒔と春蒔とあるが、春蒔は春の彼岸前後に播くのが普通である。この頃では郊外の、ちよいとした庭や畑のある家など、慰みに草花を蒔かぬことはないくらゐである。〔參照〕種蒔タネマキ

例句

花種蒔く
いたつきや窓べりに蒔く花の種　柚史（ホトトギス）
花の種そよ〳〵風に蒔きにけり　樫子（同）

牛蒡蒔く（ごばうまく）

季題解說　四月半ば頃に蒔くのを普通とする。牛蒡の種蒔は柿の芽に牛蒡の種三粒乘り得るくらゐの時が最もしゆんであるといはれてゐる。

【例句】牛蒡蒔く　痩土にしたゝか蒔きぬ牛蒡種　草秋（ホトトギス）

甜瓜蒔く

【季題解説】大抵三月中旬、即ち彼岸の入頃に蒔く。【参照】南瓜蒔く　夏―甜瓜

胡瓜蒔く

【季題解説】胡瓜は普通二月中旬下種する。天候が悪いと、ずつと遅れることもある。温床蒔（フリーム蒔）は藁や木の葉を積み合せて醞釀させ、周圍に板、硝子戸又は油紙などを被せて置く。一週間くらゐで適常温熱の出た頃藁鋪の中に下種する。それから一週間程して發芽する。それから又三週間経つてから別に移植して後、五月の二日から八日位の間に（地方人は八十八夜頃と云ふ）露地即ち本畑に移植するのである。これは温床蒔であるが、はじめから本畠に蒔くもの即ち露地蒔は、四月十五日頃下種し、十日くらゐの後發芽する。新潟地方では露地蒔のことを小屋つくりといふ。胡瓜の二葉のよく肥えてみづ／＼しいのはまことに見る眼たのしいものである。【参照】夏―胡瓜

西瓜蒔く

【季題解説】西瓜は大抵四月上旬頃に直播をする。距離は三尺位離し、地は直徑一尺まはりぐらゐ深く掘つて、充分施肥をしきこみ、その上へ土を被せ、眞中に二三粒づつ蒔き、また土を薄く被せ、切藁を覆ひおくを普通とする。【参照】夏―西瓜

絲瓜蒔く

【季題解説】四月上旬から八十八夜の間に地へ直播する。一二尺づゝ距離をおいて、肥料を先きにしきこみ、その上へ二三粒づゝ蒔いておくと、後から肥料をやるよりよく利いて、實りがよいといふ。【参照】秋―絲瓜

【例句】絲瓜蒔く　種箱の絲瓜拾うて蒔きにけり　靜雲（ホトトギス）
年々や子規忌のための絲瓜蒔く　村家（同）

南瓜蒔く

かぼちやを蒔く　ぼうぶら蒔く

【季題解説】南瓜は大抵三月上旬から四月中旬へかけてまく。先づ地を深く

掘つて充分原肥を施しておき、二三粒づゝ蒔き、その上へ切藁を覆うておくをよしとすること、他の瓜類と同じ。 参照 秋―南瓜

夕顔蒔く（ゆふがほまく）

季題解説 夕顔は觀賞用の花夕顔と、乾瓢或は炭斗、水汲等を製する果實を採るためのものとある。花夕顔の種子は、丸形で茶褐色をして光澤がある。四月頃、素焼の鉢や平箱等に朝顔を植ゑるやうに淺く直蒔にし、細目の如露で灌水をして置く。乾瓢等にする瓠瓜の種子は南瓜の種子に似て、それ程丸味がなく、稍長方形をなし白色である。主に畑に蒔き、また所謂夕顔棚を作る場合は棚の周りに蒔き、空地、石垣等に這はせるためその邊に播かれるものもある。播種の時期方法は地方により多少の違ひはあるが、大體神武天皇祭を標準とし、その前後に種を蒔く。苗床を作る場合は一反歩について凡一坪を當つるものであるが、多くは直蒔である。先づ畑をよく耕して適當な間隔を置き、指先で穴を作り、食指一關節くらゐの深さに、一ヶ所に一寸くらゐの距離に二粒宛蒔き、腐熟堆肥を薄く撒布し、その上に麥稈を敷く。播種後一週間くらゐで發芽するから麥稈を取り除く。更に二週間くらゐで本葉二、三枚生ずる。この時發育のよい方一本を殘して、他の一本は根元から摘み切つて間引くものである。播種後は土の乾燥に注意し、鼠、鼴鼠、雀、雉等の害に氣をつける。 参照 瓢箪蒔く　秋―夕顔の實

例句
夕顔蒔く　夕がほの種うらや誰古屋しき　曉臺（曉臺句集）

瓢箪蒔く（へうたんまく）

瓢蒔く

季題解説 瓢箪蒔きは俗に云ふ鞍蒔といふ方法で、畦でなく六尺置きくらゐに二尺四方くらゐの土を小高く積み、其上を平に踏みつけて、そこに蒔くのであるが、あまり用途が多くないので、自家用として果樹などの間作にすることが多い。都會の人が慰みに蒔いたりもするが、鼠や蟲害を防がねばならぬので仲々手數がかかる。時期は大抵三月上旬から四月中旬頃までである。 参照 夕顔蒔く　秋―瓢箪

例句
瓢箪蒔く　轉勤や遲れて蒔きし瓢種　豐水（ホトトギス）

茄子蒔く（なすびまく）

なす蒔く　茄子床

古書校註 【三才圖會】白き者は味美ならず。黑き者は之に次ぐ。紫の者最も良し。小にして多く子を結ぶ者を、俗呼んで錫枚茄と曰ふ。皆二月に種を下ろ

し、芒種（一）の前後に移し栽う。

註（一）陰暦五月の節、小満の後十五日目。

季題解説 茄子の播種に床播と直播とある。床播は三月はじめ頃温床をつくり、腐蝕壌土を厚さ四寸位床面に敷き込んで温度の上るのを待ち、一坪二勺の割合で撒播して、その上に種子の厚さに砂を被せる。一週間後に二葉が現はれ、二回假植をやつて本葉九枚目の幹から蕾が出る、この頃（六月はじめ）本畑へ定植する。直播は、畦巾二尺八寸位に數回耕し、消毒乾燥し、土塊の破砕を行ひ、施肥を充分にして、畦の上に一尺くらゐの間隔に、丸く素足で叮嚀に踏みつけたところへ播種し砂を覆せる。そのあとも輕く踏みつけて置く。十五日くらゐ經つと細長い二葉が出る。参照 夏―茄子（ナスビ）

朝顔蒔く（あさがほまく）

季題解説 四月二十日頃から五月末迄は何時蒔いてもよいが、やはり八十八夜前夜が最も可とせられる。十日間くらゐを隔てて數回に蒔けば、絶えず新らしい花が見られるであらう。種蒔の床土は肥料と底深を忌むから、砂糖の空箱に、少し許り土の混じつた砂を七八分入れて播種すればよい。種はどちら向きでも構はない。四五分の深さに蒔き、表土の乾かぬ程度に灌水するをよしとする。参照 夏―朝顔（アサガホ）

例句 朝顔蒔く

世にあれば蕣もまくばかり也　一茶（七番日記）
早さびし朝顔蒔といふはたけ　同（狭藁集）
朝毎にあさがほ植んひとつゞゝ　乙二（をのゝえ草稿）
置火燵ありて朝顔蒔く日かな　あふひ（ホトトギス）
蒔くところありて朝顔蒔いて置く　花蓑（續ホトトギス）
朝顔を蒔きたる土に日爛干　青邨（同）

鶏頭蒔く（けいとうまく）

季題解説 雞頭、葉鶏頭とも春の彼岸に蒔く。前年の種がこぼれて自生することも多い。しかし同じ土地を好まず、また植ゑいたみをするから、年年所を變へて豫め定めたところへ蒔き、砂を飾ひ掛けて置けばよい。参照 秋―鶏頭（ケイトウ）

藍蒔く（あゐまく）

藍植う（あゐうう）

古書校註

【滑稽雑談】 蘇頌圖經に云、藍は人家蔬圃に畦を作り、種まきて、三四月に至りて苗を生ず。()これらの類、(一)皆春分に蒔く也。餘種、稱量すべ

からず。この二物、(二)古き俳書に之を載せ、故に茲に之を註す。

【三才圖會】京俗ハ藍を上と爲す。攝州東成郡の産も亦勝れたり。(略)三月種を下ろし、四月苗を植う。

註 (一)麻・藍の二つを指す。

【栽培方法】藍は彼岸頃冷所に砂蒔にする。即ち最初畝を造つてその上を拵へ、種を蒔いて砂を掛ける。四五寸に成長した時、本畠に移植する。藍には油粕など最もよい肥料とする。

【例句】
藍蒔く　藍植うや婿ながらも一長者　禪寺洞（ホトトギス）

麻蒔く（あさまく）

【古書校註】【滑稽雑談】古語拾遺に曰、長白羽の神をして麻を種して、以て青和幣となさしむ。(一)藏器本草に云、麻、早春種するを春麻子と爲す。小にして毒有り。晩春種するを秋麻子と爲す。薬に入れて佳なり。【年浪草】時珍が曰、麻、二月種すべし。(二)大和本草に曰、麻は宿根より生ぜず毎春實をまく。上世には麻仁を五穀とす。月令に食麻とあるは麻仁なり。今は食はず。日本紀・古語拾遺に、麻を植ゑし事あり。日本上代よりあり。

【季題解説】麻は大抵三四月頃種を蒔くと。古い頃から栽培せられたものであるが、今日では一般的ではなくなつた。

【例句】
麻蒔く　麻まくやきた高嶺のかふり物　踏青（三千化）
油斷麻蒔き時季になりけり　青々（春夏秋冬）
何時も來る人をたのみて麻を蒔く　柳山（ホトトギス）

【參考】萬葉集卷七、藤原卿（藤原房前か）の作「麻衣著ればなつかし紀の國の妹背の山に麻蒔く吾妹」

蓮植うる（はすう）

【季題解説】四五月頃、池田を掻きまぜ、蓮根の小さいのを一節くらゐに切り、これを泥に六七寸許の深さに埋め、挿しておくのである。蓮根の太い上等のところは食つてしまひ、細く先の方の細い切つ端の一節づゝで、充分種蓮に役立てることが出來るものなのである。【參照】夏—蓮へ

睡蓮植うる（すゐれんう）

【季題解説】三月頃、池沼または鉢泥の中へ油粕等の施肥を仕込んでおき、まだ嫩芽の出ぬ睡蓮の根分して植ゑる。これは種を蒔くといふわけにゆか

ぬから、結局根を分けるのである。〔参照〕夏—睡蓮スイレン

芋植うる

〔季題解説〕里芋、八頭、唐の芋等の芋植は普通三、四月頃に行はれる。前年收穫した子芋を種芋とし、深く耕された畑に三尺置くらゐに畝を立て、その畝に約一尺五寸くらゐの間隔に堆肥、馬糞など元肥を施して、種芋を頭を上に向けて置き、鍬で土を覆ふのである。種芋は親芋についた儘、水排のよい穴の中に埋めたり、叺に入れたりして貯藏するのである。時としては、畑の隅の空地などに土を高く盛つて芋を生け、藁を被せてあるのを見受ける。これは四月末頃、土の中で五分乃至一寸くらゐの芽を出すので、掘り出してその儘植ゑるのである。その他水田に植ゑる水芋や、若芽を伸ばす芽芋等特殊な植ゑ方をするものもある。〔参照〕秋—芋イモ

〔例句〕芋植うる

種芋を植ゑて二日の月細し　子　規（子規句集）
芋植ゑし日に降りそめて雨十日　同　（同　）
芋植ゑて圃らかなる月を掛けにけり　虚　子（句集虚子）

木の實植うる　このみ植うる

〔季題解説〕春先二三月の候、雪解を待つて、櫟、樫、橡、團栗、松の實、その他さまざまの木の實を苗床に蒔くことを云ふ。これは普通野菜や草花などの種を蒔くのと區別して、木の實植うると稱したものである。被せる土の深さは普通三寸くらゐである。松の實等はばらばらに蒔いて、淺く土を被せておくのである。〔参照〕秋—木の實キノ

球根植うる

〔季題解説〕球根は掘り出して冬の間蘭つておき、春に土におろし、春から夏に咲かせるのを普通とする。尤も今は秋に植ゑることも多いやうである。季題としては、單に「球根植う」といふ言葉を遣ふよりも、たとへば百合植うとかいふやうに、それぞれの草の名を冠するのが適當であらう。〔参照〕秋—球根植るキウコン

〔例句〕球根植うる

百合植ゑて土かけ過ぎし思ひかな　蚊　杖（續ホトトギス）
竹立てゝ百合根の土をふまじとぞ　久　女（同　）

苗木植うる

〔季題解説〕杉、檜等の植林用苗木は、二三月頃山間へ一間くらゐ間隔をおい

て植ゑるものである。一人が土を掘ると、跡から他の一人が次々に苗木を植ゑて歩く。稍々成長したら適當に間引いて、丈夫な苗木を育て、下枝を拂ひ、或は下草、藤蔓等を除いてやることが必要である。果樹の中、桃、梨等は秋の末に植ゑるが、蜜柑の苗木に限つて三月はじめ頃に植ゑる。溫暖な傾斜地などを選ぶ。その他觀賞用の庭樹、花樹等の苗木は、四月頃雨量の多い頃に植ゑるといふことを農學校の教師から聞いた。

接木（つぎき）　接穗（つぎほ）　砧木（だいぎ）

古書校註

【滑稽雜談】和俗、又春分の前後木を接ぐの節とす。その法、接穗のよきを選ぶべし。二年に成る嫩枝の肥えて盛なる、陽に向へるを用ふ。接目のしめやう緩からず急ならず、接穗の皮は接臺の皮に對し、接穗の骨は臺の骨に對すべしといへり。諸木多くは春分に之を接ぐ。牡丹は秋分に之を接ぐ、椿は梅雨の時又土用に之を接ぐ。他物又此類侍る。多分に依りて、春の季に之を用ふ。

【年浪草】燕居筆記に云、接頭、小箆子、壓木、盤砧等の文字あり。○新撰六帖の歌、見ればかつもとの木の花はちりはてて八重咲きかはるつぎ櫻哉　右大辨入道光俊。

季題解説　元來植物の子實は、母樹の特性を遺傳する力が不確實であつて、變性し易く且つ母樹より劣るものであるから、接木の方法によつて樹種の改良または繁殖を計らねばならぬのである。接木は一つの樹の枝梢または芽を切りとり、小刀で接合部を平滑にして、他の樹幹に緊密に接ぎ合せて生育させるものであつて、接ぐ方の枝または芽を接穗といひ、接がるる木を砧木といふ。その方法に切接または剝接・挿接・合接・割接・呼接・芽接・根接等がある。いづれも春の彼岸前後を適當とする。參照　取木　挿木

例句

接木

捨ものに梨の接穗や山屋敷　芭蕉（もとの水）
見たいもの花もみぢより接穗かな　嵐雪（玄峰集）
小刀のそれから見えぬ接木哉　支考（蓮二吟集）
垣越にものうちかたる接木哉　蕪村（蕪村句集）
菜畠にきせる忘るゝ接木哉　同（蕪村遺稿）
紅梅の火加減もよき接木哉　同（落日庵句集）

家内して覗からせし梭木かな　太祇　（太祇句選）
穗は枯て梭木の臺の芽立けり　同　（同）
梭佗ぬ世になき一穗得てしより　同　（同）
ひと眞似のおぼつかなくも梭穗哉　同　（同）
雨露に仕あげはわたす梭木哉　也有　（蘿葉集）
もとよりもも丶代に桃の梭木哉　同　（同）
そ丶こしきあるじが梭木おぼつかな　几董　（井華集）
庭中にあるじ酒くむ梭穗哉　白雄　（白雄句集）
花か實か梭木をさめる人心　曉臺　（曉臺句集）
梭木して花さくと夢に見たりけり　成美　（成美家集）
雑巾をはやかけらる丶つぎ木哉　一茶　（七番日記）
山烏おれがつぎ木を笑ふ哉　同　（同）
むだ草に伸勝たれたるつぎ木哉　同　（同）
庭先や梭木の弟子が茶をはこぶ　同　（同）
たのみなきおれがさしてもつぐ木哉　同　（一茶句帖）
夜に入れば直したくなる梭穗哉　同　（旅日記）
餅腹をこなしがてらのつぎ穗哉　同　（おらが春）
齒も持たぬ口に啞へて梭穗哉　同　（一茶發句集）
木鋏のおそろしげなり梭穗時　乙二　（をの丶え草稿）
山際や梭木ばかりの一品　萬頃　（蕪題）
柹の木へ梭穗くはへて上りけり　子規　（子規句集）
零落や竹刀を削り梭木をす　夜涼　（同人）
梭木して四五日旅の行李かな　蒼石　（懸葵）
灯ともして桑の根梭や家毎に　奇容　（同）
乾坤の間に梭木法師かな　普羅　（ホトトギス）
大幹を切りて明るき梭木かな　紫江　（同）
柹梭ぐや一枚廣き油紙　地藏尊　（同）
垣外に川かゞやける梭木かな　駝王　（同）
法川も閑になつたる梭木かな　月侚　（同）
藁屑に遊ぶ蝶ある梭木かな　ながし　（同）
高梭木月の纖きに藁頭巾　一壺　（同）
鐘ついて梭木の莫蓙の戻りけり　舍利弗　（續ホトトギス）
梭木の芽一葉大きくほぐれけり　草秋　（同）
老の杖梭木畑にもなかりけり　木國　（同）
門内にすぐ梭木ある園生かな　盧子　（句集盧子）

取（とり）木（き）

季題解説　樹の枝に疵をつけて、そこへ土を巻き、油紙で包んで置いて、

その土の中へ根が出るのを待つて親樹から離し取るのであるが、この方法で取り易いのは無花果、桑、木通、葉蘭、ゴム等で、取る方法に、壓取、高取、筒取、伏取等いろ〳〵ある。油紙でなく、竹の皮で卷き、水苔などを入れて置くのもある。樹の性質に應じて多少づゝ方法が違ふ譯であるが、枝垂梅などは、疵をつけた枝を地中へ埋めて取るので、これは呼び椄と唱へてゐるから椄木の部類に入るのかもしれない。【参照】椄木　挿木

挿木（さしき）　挿穗（さしほ）

【季題解説】母樹の枝を切り取つて土に挿し、根を生ぜしめて別に獨立した一本の苗木たらしめる方法である。時期は樹によつて違ふが、大體春芽の出る前、即ち彼岸から八十八夜迄の間をよしとする。葉の出てをる枝の、餘り上枝でない部分を三節くらゐの長さに切り取り、その一節を地中に挿しておくのである。どんな木でも大抵は挿木によつて芽を出すものであるが、挿した後には適當に水を灌ぎ、日光の直射を遮る等の手當を加へてやらねばならぬ。挿木の方法には、節挿、割挿、埋挿等いろ〳〵ある。節挿といふのは、赤土に少し砂を交ぜて塊とし、挿穗の下端に著けて行ふものである。割挿といふのは、挿穗の下端を縦に二筋または四筋に割り、割目に土を挾んで行ふものである。埋挿といふのは挿穗の三分の二まで土に挿入するものである。その他床挿といつて當年生の健全な枝梢を五六寸程切り、下端を少し斜に削つて、餘り乾燥しない地の中に挿すといふ方法もある。【参照】取木　椄木

【例句】

挿木

捨やらで柳さしけり雨のひま　蕪村（蕪村句集）
古箸に人をよけたるさし木哉　召波（春泥發句集）
さし柳はかなきものゝ氣力哉　曉臺（曉臺句集）
揚土にしばしのうちのさし木哉　一茶（七番日記）
苗代にかくておきたしさし柳　同（同）
六月のゆうべをあてやさし柳　同（旅日記）
さし柳翌は出て行く庵也　同（同）
忘れたる頃に芽をはるさし木哉　吟江（心の花）
かむせある笊に底なき挿木かな　俳小星（ホトトギス）
さし木みな夕影長き水邊かな　櫻坡子（同）
枝折りて地に挿すを親木ぢつと觀よ　月舟（同）
引ぬいて見て又さすやばらさし木　あふひ（同）
挿木すや影曳き添うて水邊なる　若沙（同）
對の葉の出てきよらかな挿木かな　同（同）
草中にひろごる水や柳挿す　草秋（同）

菊の根分（きくのねわけ）　菊分つ（きくわかつ）

古書校註

【滑稽雑談】菊志に曰、仲春老根を取りて、宿土を淨め去り、雨過ぎて之を分つ。土肥宜しからざる時は、則ち擁頭す。仍ち箔を以て覆ひ、日色を經ること勿れ。晨を凌ぎて水を澆ぐ。之を分秧と謂ふ。○玉函方に云、三月上寅日、苗を採るを、名づけて玉英と曰ふ。○時珍本草に曰、甘菊、始め山野に生じ、今は則ち人皆之を栽植す。○これらの所説のごとく、二三月、その苗をわかち植う。菊苗とばかりも春也。

【年浪草】月令廣義に曰、菊花穀雨の時、根を堀起し、壯嫩を剖き撰び、根有るもの單に種ゑ、禿白あるもの亦種うべし。活す。但し其の根上に浮起せる白翳一層を去ることを要す。乾潤土を以て種ゑ、築實す。雨中に分け種うべからず。濕泥をして根に著けしむるときは、花茂げからず。早く分くるも宜しからず。（略）菊經に曰、清明・穀雨の間、苗二寸五分許に延びたる時、苗分けすべし。天氣よき日、宿木を抜き宿土をふるひ落し、苗の肥えて一本立なるを分つべし。髮根の多少も撰ぶべからず。苗分は早き宜し。

季題解説　春になると、菊の株根から地上に芽が吹き出て來る。そして一日一日に殖えひろがつて行く。それを根分して育てるのであるが、根分の時期は清明後から穀雨前をよしとされてゐる。根分の手順は簡單なもので、先づ地植のものならばスコツプで株全體を掘り上げる。鉢植のものならば鉢の縁を叩いて鉢から土を抜き取る。そして根を傷めぬやうに土を振り落して根をほごすと、鬚根のある紐のやうな長い太根が現はれる。これが親根であつて、その親根から幾本もの細根が分れて芽を出してゐるのである。その細根のついた芽を親根から取り離して、一本々々植ゑる。これを菊の根分といふのである。かうして根分した芽の根元を適宜に切り落して、その穗を挿して置く方法を挿芽といふが、大菊を作るにはこの挿芽によつて仕立てることになつてゐる。「菊植うる」といふのは、冬、根分して假床に植ゑて保護して置き、春になつて圃地に定植することである。〔參照〕菊植うる（カキウ）　秋　菊（キク）

例句

菊の根分

白菊と札の付いたる根分かな　古白（新俳句）
鍬の先昏くなりけり菊根分　涼斗（同人）
日を包みし一片の雲や菊根分　丈蘭（ホトトギス）
菊根分仕事の妻の手は借らじ　みとり女（同）
土抱いてころげし蟻や菊根分　淺茅樓（同）
干傘のがばと反りぬ菊根分　ひさし（同）
菊根分螻蛄の躍れる篩かな　漁吉（同）

菊の根分　住みつかでふたゝび菊の根分かな　莉花女（續ホトトギス）
つとめよりかへりておそき菊根分　公羽（同　）
根を分けて並べし菊の色は違ふ　蚊杖（同　）
菊の根を分てば萩の茂りかな　虚子（句集虚子）

菊植うる

季題解説　〔参照〕菊の根分　秋—菊

例句
菊植うる　消折は十日も遅し植る菊　乙二（をのゝえ草稿）
菊の名は忘れたれども植にけり　生林（あらの）

薯蕷掘る

野老掘る

古書校註
【滑稽雜談】順の和名に云、薢、和名、土古呂。俗に薯字を用ふ。漢語抄に野老の二字を用ふ。（略）ことに東國の產よろしといへり。正月に用ふる事、野老の說なるべし。〇拾遺集に、春ののへまかりけるに、つぼさうぞくして侍りける女どもの野邊に侍りけるをみて、何わざするぞと問ひければ、野老ほるなりといらへければ、春の野にところもとむといふなるはふたりぬばかり見出でたりや君　賀朝法師。

季題解説　薯蕷科の蔓生草本。到るところの山野に自生するが、栽培もする。春、舊根から細い蔓を出して他物に卷きつく。その長さ十數尺に及ぶ。葉は互生し、心臟形で葉柄が長い。花は白色で小さい。根は指くらゐで「やまのいも」のそれに似てゐる。地中を匍つて岐を分ち鬚根が多い。野老といふ名はこの鬚から來てゐるといふ。根を喰べると苦くて少しあまい。これを薄く切り、よく煮て水に浸し、苦味を去つて飯に雜ぜて食べる。山で野生の野老を採ることを「野老掘る」といふのである。藥用にすることが多い。〔参照〕新年—野老

例句
薯蕷掘る　山寺のかなしさつげよ薢ほり　芭蕉（笈日記）

慈姑掘る

季題解説　水田に植ゑた慈姑の、莖も葉も糸程に枯れたのをたよりに、泥中の慈姑を掘ることをいふ。いつといふさだめなく、たゞ春となつて掘る。越後高田の俳人の報告に、「當地方では稻を刈つてしまつてから、刈田の中に殘つてゐる慈姑を掘る。腰まで泥田に埋れて、這ふやうにして掘り廻る。別に慈姑田といふやうなものはなく、大抵稻田の中に交へて植ゑてある」云々とある。〔参照〕植物—慈姑

例句

慈姑掘る

掘りあてし泥の胴木や慈姑掘る　泊雲（ホトトギス）
くわゐ掘るや莖朽ち消えて絲程に　同（同）
泥籠を押しすゝみつゝ慈姑掘る　兎月（同）

若布刈る

若布取　和布刈　和布舟

季題解説　和布は舟で出て刈るのを普通とする。和布は全國の近海に產し、和布刈の始まる時期も地方々々で多少趣を異にするが、早鞆和布で名高い關門海峽の和布刈は、門司の早鞆岬にある和布刈神社の和布刈神事が終つた翌日から始まる。卽ち舊曆元旦からである。舷に浮べた箱眼鏡を覗きながら、潮の底の礁に生へた和布を刈り取るのであるが、深いところでは長い綱の先に重りを著けた丈夫な熊手のやうな物を舟で曳きながら刈取りもする。春とはいふものゝまだ風も冷たく、漁師は布子に著ぶくれて頰冠をしてゐる。夫婦して漕ぎ出るものもあれば、少年一人で鎌の竿を操つてゐるものもあり、海峽は和布刈の小舟で賑ふのである。引き揚げた和布は淡褐色のみづ〳〵しいもので、直ぐ舟底の生簀に投げ込まれる。かうして二月一杯に採れる和布はみな古葉の和布であるが、三月に入つてからは、和布莖と稱して新芽の和布が採れる。」この和布莖は上等の料理に使用されて、價も高いが極めて珍重される。幾十艘の和布刈舟が、潮の流れのまにまに、或は離れ或は並び、競ひ刈る鎌は縱橫に捌かれ、潮に濡れた竿はぎらぎらと日に輝くといふやうな光景を眺めてゐると、早鞆の春が來たといふことをしみ〴〵感ぜしめられる。**參照**　植物―若布

例句

若布刈る

わかめ刈竹枝のとば習けり　召波（春泥發句集）
わかめ刈乙女に袖はなかりけり　同（同）
和布を刈や霞くむかと來て見れば　巢兆（曾波可理）
波の上を走る波あり若布とり　染水（ホトトギス）
桶一つ乘せて早春の若布舟　元（同）
船底に切り逃がしたる若布かな　丈蘭（同）
友舟の高き舳や若布刈　鵲城（同）
岩間にいまだある日や若布刈舟　眞人（同）
若布舟加太の波間に飯食へり　梅史（同）
帆を上げて馳せ加はりぬめかり舟　泊月（同）
加太の海の波のり舟ぞ若布刈　左右（同）
手をのべし波の向ふの若布かな　鴻一（同）
鎌先を流れてひろき若布かな　嘗子（同）
若布刈竿あやつりながら話しけり　欣卓（續ホトトギス）

若布刈る　若布刈[illegible]若布か[illegible]中に[illegible]わたり　南意（[illegible]ホトトギス）
浪がしら刈りし若布の漂へり　虛子（句[illegible]虛子）

海苔搔（のりかき）

海苔採る（のりとる）　海苔汲む（のりくむ）　海苔麁朶（のりそだ）　篊（ひび）　篊除る（ひびとる）　海苔干す（のりほす）　海苔漉く（のりすく）　海苔簀（のりす）　海苔席（のりむしろ）

[illegible]　普通單に海苔と稱するのは淺草海苔（あまのり）のことである。淺草海苔は我が國沿海の諸方に產する。ふのり・てんぐさ等と共に紅色の色素を持つてゐて、所謂紅藻類に屬する。藻類の中でも褐藻類は餘り深くない海中に產し、紅色藻は深い海中に生ずるのであるが、淺草海苔は例外で割合に淺い所に產するので、木の枝などを海中に立て、養殖することが出來るのである。これを篊立てるといつて、晩秋の候の仕事である。冬から春へかけて海苔搔きを終ると、この篊は撤去される。海苔採りは多く小舟に乘り出して行くので、その樣は丁度水田で舟にのりつけて稻の世話をしてゐるやうである。　參照　植物—海苔（のり）

[illegible]

海苔搔

海苔掬ふ水の一重へ宵の雨　蕪村（新五子稿）
のり柴も風が吹ぞやあさぼらけ　乙二（をのゝえ草稿）
行方の海苔柴多き月夜哉　同（同）
海苔取の手を波に見て春の海　青牛（三島志）
海苔搔の觸の長さよ夕日影　素丸（百番句合）
海苔麁朶に海苔つく頃や小糠雨　竹子（春夏秋冬）
海苔舟や相傾けて搔き競ふ　念腹（ホトトギス）
海苔[illegible]に淡路のすがたとこしなへ　仲太（同）
潮[illegible]さし礁に踞み海苔をとる　波品（同）
海苔舟の棹さし出づる籬かな　夜半（同）
海苔搔のあまた出てゐて岩がくれ　王城（同）

海苔桶のくろ〴〵として小けれ　橙黄子（同）
海苔舟の百艘ほども居るとかや　泊月（同）
笊の目を噴き出す汐や海苔洗ふ　夢香（同）
濱人にならうて海苔をとりにけり　ひろ子（同）
いにしへの田鶴の浦曲や海苔をとる　葵人（同）

和歌の浦

田鶴去りて浦の海苔採はじまりぬ　櫻坡子（續ホトトギス）
海苔採のあちらこちらの話聲　木國（同）
帆をあげて海苔舟迅くなりにけり　大琴子（同）
海苔舟のあつまつて入る細江かな　冬青（同）
海苔汲や杉田の梅はまだ咲かず　水竹居（同）
海苔掻くや小さな岩も一となすり　たけし（同）
浪騷ぐ岩あらはれて海苔を掻く　青鄕（同）
老の手のほとびて白し海苔の桶　虛子（句集虛子）
てのひらの上そよ〳〵と流れ海苔　同（同）
岩の上に傾き置きぬ海苔の桶　同（同）
女漕ぐ海苔船ばかり和歌の浦　同（續ホトトギス）

羊毛剪る（ひつじのけきる）

季題解説　羊は性質溫順、群棲を好む獸で、家畜として飼養せられ、牡は普通頭に一對の小角を有つてゐる。體毛は卷縮してゐて柔軟である。これを剪り採つて羅紗、毛布等の毛織物の料とする。剪毛の時期は地方により、またその年の氣候によつて遲速はあるが、春季一回づつ行ふのを普通とする。滿洲地方では淸明節（陽曆四月上旬）から始め、穀雨節（陽曆四月下旬）迄に終る。また北部蒙古卽ち外蒙呼倫貝爾及び察哈爾等寒い地方では、晚春五六月頃に剪毛してゐる。幼少な緬羊は絨毛が少く、且つ春剪毛すると、夜間の冷氣または雨露のために發育を害され、發病斃死するの虞れがあるので、春は剪毛を行はず、僅かに抓子で搔き採るにとどめることもある。剪毛方法も亦各地方によつて種々の方法がある。滿洲地方では、花鋏のやうな形をした布切鋏で剪るのと、熊手のやうな鋏製抓子で生體から絨毛を搔き採る方法とがある。剪毛には暖かい日を選び、鹿埃の少い場所または農家の前庭の收穫物干場を掃除し、豫め羊の體を洗ふことなく〳〵、汚れたまゝ橫臥させ、膝で羊の頭を抑へ、左手で前左胸側部を攫み、右手の鐵で頸部から背部腹部等に沿つてだん〳〵に剪毛した後、更に反對の側に臥かし、前と同じ方法を繰返すのである。終ると、羊は何等手當を施さずしてそのまゝ放牧する。熟練したものは一日に五十頭內外の剪毛をするといはれる。かうして剪毛した羊毛は、一枚づゝ連ねて繩狀に撚り、またはその一頭分づゝを丁寧に折りたゝみ、五六頭分を麻繩で束ね、更に麻袋

に入れて保存するのが普通である。また抓子で切る方法は、羊を横に臥させ、縄で前肢と後肢とを縛り、右手に抓子を取り、毛並みに従つて搔き採るのである。

【例句】

羊毛剪る　刈られたる毛に埋れし羊かな　青朱草（雑ホトトギス）

厩出し（うまやだし）　まやだし

【生活解説】雪深い国では、冬は牛馬を出すこともなく、春雪解けの頃になつて始めて厩から出して、野山に放ち遊ばせ、蹄を固めさせるのである。

【参照】冬―馬下げる（ウマサゲル）

蚕飼（こがひ）　養蚕（やうさん）　春蚕（はるご）　桑蚕（くはご）　掃立（はきたて）　毛蚕（けご）　蟻蚕（ありご）　飼屋（かひや）　睡眠期（すゐみんき）　蚕籠（こかご）　蚕棚（かひこだな）　上簇（あがり）　捨蚕（すてご）　蚕時（かひどき）　蚕飼時（こがひどき）

【生活解説】

・【滑稽雑談】先代旧事記に曰、蚕を養ふの法、養屋の西北に於て、一の祭棚を設け、注連を曳きて常に蚕神を祭る。かねて桑の大葉を取りて、陰干（カゲホシ）・布干（シキホシ）と為し、之を籠箱の中に納め、之を祭棚の上に安んず。繭、蚕蝶を出す時に至り、其の干葉を取りて棚上に置き蚕種を産ましむ。産みをはりて、種子を以て籠箱に納め、老桑を以て錦帛に包し、同じく祭棚に安んず。（略）時珍本草に曰、蚕は朁に從ひ、其の頭身の形に象る。虫に従ふは其の繁きを以て也。俗に蚕の字に作るは非也。蚕は音腆、蚯蚓の名也。蚕風を病みて死す。其の色自ら白し。故に白殭と曰ふ。而して朽ちざるを殭と曰ふ。再び養ふ者を原蚕（一）と曰ふ。蚕の屎を沙と曰ふ。皮を蛻と曰ひ、甕を繭と曰ひ、蛹を螅と曰ふ、音鬼。蛾を羅と曰ひ、卵を蛻と曰ふ。音免。蚕初めて出づるを䖼と曰ふ、音苗。蚕蓐を遶と曰ふ也。蚕は種類多し。大小白毛斑色の異有り。其の蟲陽に属し、燥を喜び濕を悪む。食して飲まず。三眠三起、二十七日にして老ゆ。卵より出でて䖼と為り、䖼より蛻けて蚕と為り、蚕より繭、繭より蛹、蛹より蛾、蛾より卵、卵より復び䖼となる。亦、胎生の者有り、母と老を同うす。蓋し神蟲也（略）和に生ずる者、所説のごとく、春初に至りて蛹より蛾を生ず。俗に蝶と云ふ。此の者紙に卵をへり附くる也。此の卵より䖼出づ。和に蟻子と云ひ、ちひさき蟻のごとし。此の䖼に新芽の桑を細かに剉きて振りかけぬれば、是を喰ひて蚕の形と成長する也。古書の説のごとく、殊に不浄を忌む者なれば、蚕屋并びに棚などには注連を引き、あたらしき薦を敷きまうくる也。年始正月十五日は蚕屋掃（二）とてあり。養ふ者、蚕を呼びて姫と称す。據あるか。總てこの者神代より説あれども、養蚕し、絲取る事、專ら欽明天皇の

御宇より始まると聞ゆ。

【年浪草】蠶飼、先代舊事紀に曰、養屋の門の戸內西北に一樹の桑を植ゑて、樹下に方一步の籬を造り注連を曳き、老蠶死するときは、則ち繭餠・醴酒を以て之を祭り、而して死蠶をして、帶と與に桑下の籬中に置かしめよ。小兒をして侵さしめざれ。蠶子生じては、雨を帶ぶるの濡葉を養ふこと勿れ。養婦は血經・死產・忌服に觸るゝこと勿れ。忌服なる者を家に入れ、亦之に觸れしむること勿れ。沉麝薰臙香をして之に中てしむること勿れ。家鼠に食を施して、之に中らさらしめよ。

【三才圖會】養蠶の法、每仲夏、繭を取りて之を收む。半月にして繭の中の蛹蛾に化して出づ。蛾を紙に放てば、則ち卵を紙に遺して蛾死す。紙を取り櫃に收む。翌年三月、桑の芽の生ずる比に至りて、藏する所の紙を出せば、則ち卵孵りて蚕と爲る。略小さき蟻に似て微黑色、半月を歷て則ち白色の黑點有る者に變ず。初生の者には桑の嫩葉を用ひて之を養ふ。稍々長ずる者には桑の葉杙乾して剉まざるを用ひて之を養ふ。將に衣を脫がんとする時、葉を食せざること半日許り頗ふの狀に似たり。旣に皮を脫ぎて蛻と成り、五月の初め將に繭を作らんとする時、筱簇を用ひて棚と爲し之に放ち、桑を食はずして身白色に透明る者を擇び取りて棚中に投ず。

註 (一)夏蠶・秋蠶の部參照。(二)[illegible]の自說に「當世に[illegible]には不[illegible]を[illegible]、蠶育には[illegible]きて、初子の日、飼屋を立て、棚などたまうけしつらふとなん」と見えてゐる。詳くは新年の部參照。

【季節的生活】 蠶には日本種、支那種及び歐羅巴種の種別がある。また一年一回發生する一化性と、二回發生する二化性とがあり、前者は繭質絲質共に最も良好で、溫帶地方及び春季の飼育に適するものである。飼ひ方にはいろいろあり、だん／＼進歩して昔とは大分違つて行くやうである。夏と秋に飼育されるものは、それぞれ夏蠶秋蠶と呼んで春蠶と區別されてゐる。四月中旬蠶紙から孵化した幼蠶即ち毛蠶は、生育と共に約一週間每に一回宛四回の脫皮をなし、その度每に一晝夜宛眠に入り、その一眠每に一齡を加へ、五齡期になつて上簇し初めるが、それと同時に最早や全く桑を食はず、全身透明となり、一二粒の糞が體內に滯つて居るのが透けて見ゆるほどになる。上簇後二日目には早やうす／＼と形づくられた繭の中で、せつせと働いて居るのが見えるが、だん／＼繭が厚くなり、約七日の後繭掻きをし收繭する。繭の中の蛹は、上簇後二十日で發蛾し、産卵を終えて斃死するのである。

蠶は掃立後二十九日の上簇までの內、四眠まではさほど手間もいらないが、五齡期に入ると所謂食ひ盛りで、次から次と桑を與へねばならず、そのため數人の者が終日つききりで、立ちまはらなければならぬほどの忙しさである。これが七日ほど續くと一齊に上簇し初める。かやうに目のまはる思ひをしてその結束をつけると、疲れきつた身に漸く一息つくことが出來る。この前後十日間くらゐは、養蠶家は殆ど寧日の無い有樣である。

の忙しさをさして、蠶ざかりとか蠶時とかいふのである。掃立期は桑の出の遲速などによつて多少違ふが、ほゞ四月中旬であるから、この蠶時は五月上旬頃になる。蠶ざかりといふのは、蠶時のうちでも特に忙しい頂上をいふ心持であらう。〔參照〕蠶卵紙（たね）　春挽糸（はるひきいと）

〔例句〕

蠶飼

今年より蠶はじめぬ小百姓　蕪村（新五子稿）
神棚の灯は怠じ蠶時　同（新花摘）
髪結ふて花には行ず蠶時　太祇（太祇句選）
蠶飼ふ女やふるき身だしなみ　同（同）
人疎し蠶飼ふ女賢ならん　曉臺（曉臺句集）
我儘に這はで飼るゝ桑子哉　蘭更（半化坊發句集）
信濃路や宿借る家の蠶棚　子規（子規句集）
蠶飼する此頃妻のやつれかな　同（同）
雨の戀蠶棚の下に語りけり　青々（春夏秋冬）
ランプ二つ釣りて草家や蠶飼ふ　六皂子（ホトトギス）
蠶室や脱ぎとばしある上草履　助二郎（同）
情婦斬の噂はやなしかひこ掃く　星城（同）
高嶺星蠶飼の村は寢しづまり　秋櫻子（同）
この村の貧乏寺の蠶飼かな　柏蛙（同）
玉襷蠶棚の端にかゝるかな　たけし（同）
桑園に大霜害の蠶村かな　茶泊（同）
飼屋時計一番汽車に合せけり　素水（同）
草屋根に煙突つけし飼屋かな　桂香（同）
草屋根の二階づくりの飼屋かな　同（同）
あかつきの灯の魂ぬけの飼屋かな　兎徑子（同）
屋根の上を山水走る飼屋かな　東子房（同）
桑仲びて牕吹隱さふ蠶飼かな　櫻坡子（同）
蠶休の師木野分校桑の中　無門（同）
索道の桑すべりくる飼屋かな　一叉（同）
見えてゐる飼屋明りの徑かな　櫻朶（同）
御佛に憚りもなき蠶飼かな　辰生（同）
吉野路の花も果なる蠶飼かな　虛栗（同）

吉野路

見覺えの飼屋の前に歩をとゞむ　冬男（同）
火の山をまのあたり見る飼屋かな　まさ子（同）
蠶屋障子狐色にぞともりける　了咲（續ホトトギス）
道端に後向きなる飼屋かな　菖蒲園（同）
蠶屋障子右し左す影法師　俳小星（同）

戸口より梯子かゝれる飼屋かな　鹿郎（同）
蠶棚たつ大佛壇のた右かな　爽雨（同）
學問の襖一重に蠶飼かな　同（同）
蠶の神の養蠶訓をうつばりに　同（同）
蠶屋の窓谷をへだてゝ如意輪寺　北山（同）
唯をかし笑ひくづれて蠶屋の内　あふひ（同）
彌陀の灯の消ゆるときなき蠶飼かな　秋津（同）
掃立や香久山ぎはの一在所　櫻朶（同）
桑册の入りかはり著く飼屋かな　魯植（同）
大勢の子供もありて蠶飼かな　長（同）
蠶い戸を立てゝ灯れる蠶飼かな　同（同）
蠶休や髮など結らて姉妹　柿紅（同）
本栖湖
千木もちて神代のまゝの飼屋あり　梅史（同）
嫁ぎ來て月日は早き蠶飼かな　俳小星（同）
尼寺
み佛をうつし申して蠶飼かな　亂調子（同）
飼屋の灯いつもの如く竝びけり　夏山（同）
蠶屋草履犬がくはへて行きにけり　ひでを（同）
門前に蠶飼の家や深大寺　漾人（同）
ふるさとの貧乏寺も蠶飼かな　同（同）
蠶飼女の高麗笄の淋しけれ　兎徑子（同）
額襲の額そのまゝに飼屋かな　壺天洞（同）
母の手のにはかに缺けし蠶飼かな　鷄二（同）
人影の立ち塞がりし蠶窓(コマド)の灯　虚子（句集虚子）
傾きし蠶屋に突立つ蠶棚かな　同（續ホトトギス）

參考　養蠶は支那で古くから行はれてゐた。伏羲、蠶を化して糸とすとも、黃帝の四妃西陵氏、始めて蠶を養うて絲としたとも傳へてゐる。日本では、古事記には須佐之男の神の殺した大氣津比賣の神の頭より蠶を生ずといひ、書紀には迦具土の神が埴山姫を娶りて稚産靈(ワクムスビ)を生む。この神の頭上に蠶と桑とを生じたといひ、又一書には月夜見の尊の殺した保食(ウケモチ)の神の眉の上に蠶を生じたとも傳へる。しかし要するに漢土から入つて來たことと思はれ、仲哀應神諸帝の朝にその記事が見える。昭和六年の全國養蠶戶數二、一一九、六〇三戶。收繭數量九七、〇七二千貫。價格二億七千五百五十八萬圓。

蠶卵紙(たねがみ)　種紙(たねがみ)　さんらんし

季題解說　蠶の蛾に卵を產みつけさせた紙のことである。蠶の蛾は繭を破

まゝ蠶に與へるやうになるのである。傭女が大勢で唄を唄ひながら桑を摘むこと、夜分提灯をつけて桑を摘むこと、雨に濡れた桑を摘んで來て縁や軒端に乾かすこと、泥によごれた摘み葉を拭くことなど、桑摘みにもいろいろの趣がある。〔参照〕桑賣（クワウリ） 植物―桑（クワ）

[illegible]

桑摘

桑つみや畑うつ夫と打語り　千川（類題發句集）
通雨あなどり濡れて桑を摘む　桃孫（ホトトギス）
夜桑摘む提灯水に映り居り　樹人（同）
桑摘に妻をかせとの手紙かな　蘆馬（同）
利根越えて終日桑を摘みにけり　岳居（同）
桑つむや夜目にもしるき千曲川　蘇莪（同）
桑摘や置提灯に傘うまる　櫻坡子（同）
桑摘むや日輪浮む靄の中　不郎（同）
新田のお新の唄ぞ夜桑摘　春峰（同）
はるかなるシグナルの灯や夜桑摘む　木欒子（續ホトトギス）
桑摘みにおはれどうしの跣足かな　明平（同）
桑摘と秋篠寺へ道連るゝ　木圃（同）
桑摘や朝な〳〵の大屋島　白帆（同）
藏王に雨きて桑を摘みあへる　和鄕（同）

桑賣（くはうり）

[illegible] 養蠶用の桑を賣ること及びその賣手のことである。養蠶を自分ではあまりしないで、桑を賣って商賣にするために桑畑を作る人もあれば、自家で使ふ餘り桑を賣ることもある。また畑で賣ることもあれば、葉を籠に詰めたのや枝を刈つたのを貫目にかけて賣ることもある。桑値は繭の相場の變動につれて、亂高下があるわけで、馬鹿々々しく値段の釣上げられる場合もあらうし、捨値でも買ふ人が無いやうな場合もあらう。〔[illegible]〕桑摘（クワツミ） 植物―桑（クワ）

[illegible]

桑賣

桑賣の後追うて町の問屋まで　侏小星（ホトトギス）

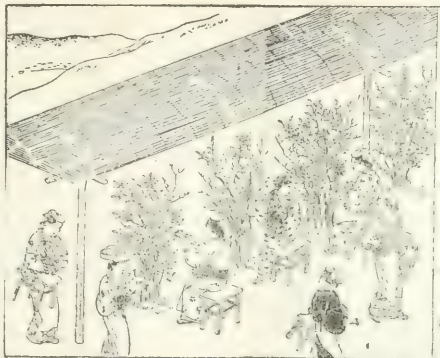
茶摘（ちやつみ）

一番茶（いちばんちや）　二番茶（にばんちや）　茶摘時（ちやつみどき）　茶摘女（ちやつみめ）　茶摘唄（ちやつみうた）　茶摘籠（ちやつみかご）　茶摘笠（ちやつみがさ）
茶山（ちやま）　茶園（ちやゑん）　茶畑（ちやばたけ）

[illegible]

【滑稽雜談】大和本草に曰、茶の葉中華より本邦にわたる事、中古よりの事也。久し。順和名抄、茶茗を載せたり。順は村上帝の時の人也。菅原敎光茶の讃あり。朝野羣載に見えたり。敎光は白河院の時の人也。茶の種子

を日本に栽ゑし始は、いつの時か分明ならず。葉上僧正宋に入り、重ねて種をわたせし出也。始めて渡すにあらず。葉上僧正は榮西なり。千光國師と號す。此の時又好き茶の種をわたせるならん。榮西初めて茶を甚賞し、喫茶養生鈔を作り、茶の功をほむ。或說(一)に、千光國師入宋の時、茶の種をとり來り、筑前の國背振山に植ゑ、是を岩上茶と云ふ。上京して明惠上人に、宋より來れる茶子をあたへ、栂尾に植ゑしむ。鳥鼠同穴集に、後鳥羽院の御宇、明惠上人茶の實を宇治と栂尾に植ふといへり。

一說、宇治の茶(二)は、將軍足利義滿公(三)大内氏に命じてうゑしむるより始る。點茶は臼にて引きたるを椀に點ずる也。日本に昔は賤民も點茶を用ひて、煎茶は稀也。中華又之に同じ。近代は點茶は稀也。○私云、當世諸國の產多し。殊に栂尾今はおほく高雄之を製す。・宇治を第一・二とす。茶を摘むに三月節を以て候とす。宇治の手始と云ふは、おほくは三月一日・二日・三日也。但しその節の遲速、その年の寒暖によれり。三月中より以後は煎茶也。爾雅に云ふ茗也。所によりて五月以後ふたゝび摘む者、二番茶とす。(略)毛吹草に曰、聞茶・茶つむ・同手始と三月部に侍る。近來の俳書に新茶を春にのせたり。甚だ非なるべし。

【年浪草】本朝食鑑に曰、凡そ茶を採るの候は八十八夜也。氣候の遲速に隨ひて、八十八夜の前後宜しと爲す。(略)手始、宇治の茶師、馬場氏信俊が云、初めて茶を摘む、之を手始と謂ふ。凡そ三月朔日或は三日と。(略)兎道舊記濱千鳥に曰、長井亭信入道伊勢太神宮に詣す、婆子有り、蓬餅を亭信に與ふ。亭信之を問ふ、婆子答へて曰、云々。是に於て亭信青茶と云ふ事をして古田織部宗屋に進む。古田之を好み、愛して後小堀遠江守白茶と云ふ事を好む。茶事昔にかへると云ふ心諺にて茶の一名昔と云ふ。初昔とは摘み初める茶と云ふ心、後昔とは摘初めて後の日の極茶と云ふ心也と云傳ふ。

註 (一)「東鑑」の所說である。(二) 宇治の茶摘は、「狂歌咄」にも、「宇治の里にそこら小園多く造りて芦簾を入置きたるは、八月十六夜の初霜より茶園に霜覆ひする爲なり。土をそゝりやしなひを入れ、草を引き虫を拂ひ云々、彌生の頭、木の芽わづかに出れば、茶つみの女

共、手ごとに籠をもちて、摘みたるをとり集め籠に入れ、焙爐をかけ、茶師の家々數十人の女鐵漿黑く薄けさうして、赤まへだれして、ひとやうに出でたち打ちならび、鳥の羽もちて、聲をかしく曲おもしろく歌うたふて、上中下の茶の葉を撰りわくれば云々」と、その風俗を述べてゐる。（三）「雍州府志」にはこの説を採る。

季題解説 茶の芽は四月上旬から摘み始め、八十八夜（五月二日頃）後二三週間をもつて、その最も盛な季節とする。梢の端の嫩芽の全く開かない内に、その下葉一枚を殘し、上の三葉もしくは四五葉を採るのである。これを三葉かけ四つ葉かけといふ。三葉かけは上等、四つ葉かけ以下は中下等となる。葉は必ず指先でとり、折つてはいけない。出遲れの葉は殘し置かねばならぬ。最初から十五日間を一番摘とし、その後二三十日經つて二番摘をする。近來は三番摘四番摘までもする。その度が重なる程木が痛むのは勿論である。大正九年五月二十日、皇后陛下宇治へ行啓の際、宇治茶の產地木幡と宇治で、茶摘を上覽に供したことがある。その時、古來の宇治の茶摘唄の「投げ節」を知つてゐるものが無かつたので「みきやぶし」を唄はせたが、その唄さへも七十二歲の嫗がたつた一人しか知らなかつたとのことであつた。しかし茶摘の風俗は昔のまゝに仕立てた。即ち赤襷、赤前垂に紅白染分けの手拭を被らせ、また普通りの口徑七寸、深さ五寸、口の周圍二尺五寸、約五十匁入の茶摘籠を赤紐で首に掛けさせ、二十人の摘婦と十人の歌子が歌つたのであつた。近來女の仕事も多くなり、摘子などなくなつたため、茶摘も次第に機械力に待つやうになり、從つて茶摘のなつかしい情調もなくなつて行くばかりである。茶摘の規則はなかなかむづかしいものである。雨天でも摘まず、曇天でも摘まず。朝摘んでこれを蒸して、焙つて、緩めず怠らず、夜に入つても眠らずに夜の內に焙り舉り、好い壺に詰めて竹の皮で口を蔽し置くといつた具合のものである。〔參照〕茶の葉選（チャノハエリ） 製茶（セイチャ） 夏・新茶（シンチャ）

例句

茶摘

摘けんや茶を凩の秋ともしらで　芭蕉（東日記）
宇治に來て屛風に似たる茶つみ哉　鬼貫（俳諧七車）
蔓の根やあけてゆり出す茶つみうた　去來（去來發句集）
百姓も麥にとりつく茶摘哥　同（同）
柴舟の里は茶摘ミの水けぶり　其角（五元集拾遺）
菅笠を着て覗き見る茶摘哉　支考（蓮二吟集）
一とせの茶も摘にけり父と母　蕪村（新五子稿）
世を宇治の門にも寢るや茶つみ共　太祇（太祇句選）
三日月に木間出はらふ茶つみ哉　同（同）
屋ね低き聲の籠りや茶摘哥　同（同）
若菜野は花にして見て茶摘哉　也有（蘿葉集）
摘〳〵て人あらはなる茶園哉　闌更（半化坊發句集）

り扱いて良い茶のみにするのである。これを茶の葉選といふ。葉の選場では、向ひ合つたり、或は背合せになつたり、或は並んで坐つたりして、その前に茶の葉を置いて選つてゐる。 [參照] 茶摘(チャツミ) 製茶(セイチャ)

硯石取る(すずりいしとる)

[illegible]

【滑稽雜談】 毛吹草に曰、(一)三月三日の鹽干に、土佐の國の西寺の御崎の海底より、硯石を出す事侍る。其の潮干の時刻におよんで、西寺の僧海上に出で、經を讀誦する由侍り。今世多く國司・領主の采地となりて、猥りに石を取るにあらざるよし。總て今日の潮干和漢同じ。然れ共、詩歌にも未だ此の事侍らず、唯俳諧を好む者、取りて是を詠す。

[註] (一) 毛吹草の四季詞、三月三日の條に「土佐海、鹽干(ツカダ)に硯石取る。同日」と見えてゐる。

○硯石を取ることは、陸奧の小島(?)の海にも行はれた由を、其書は潮干の項の中に述べてゐる。

蜆取(しじみとり)

蜆搔き(しじみかき)

[illegible] 蜆は笥簾に長い竹の柄をつけたものを水底深く挿し入れ、搔き廻して採るのが普通のやうである。水の深いところでは潜つて採る。 [參照] 動物-蜆(シジミ)

[illegible]

蜆取

みづうみの淺瀨見えつゝ蜆取　召波（春泥發句集）

蜆掘るや關屋の村の[illegible]　子規（子規句集）

[illegible]舟に安火を積みにけり　三木（同人）

蜆搔くや橋の菜華に[illegible]向き　寶村（ホトトギス）

舟行や右に左に蜆舟　凡平（同）

蜆舟小錨あげて移りけり　芒趾（同）

大淀やぼつりと一つ蜆舟　柳窓（同）

晩鐘や石山かたまりもどる蜆舟　夕洋子（同）

馬蛤突(まてつき)

馬蛤釣(まてつり)

[illegible] 馬刀を捕るには、竹の削つた串の先きに少し節を作つたものを用ひたり、また鐵等の鉤の形をしたものを用ひたりして突くのである。これを穴に沿ふて素早く挿しこみ引揚げると、貝は竹または鐵針を挾んで、竹の先の節または鉤にしかと摑まつて引出されるのである。一度突き誤まると、砂深く潜入してしまつてなか〳〵捕ることが出來ない。だから素人には馬刀突はむつかしい。馬刀の穴は干潟も少し沖の方に出ないとないやう

である。〔參照〕動物—馬刀貝。

〔例句〕

馬蛤突　一の洲へ都の客と馬刀とりに　鬼貫（鬼貫句選）

汐干に　水薹の馬刀かき寄ん筆の鞘　嵐雪（玄峰集）

濱の子の馬刀のつきかた習ひつゝ　稻女（續ホトトギス）

春鱚釣（はるきすつり）

〔古書校註〕【東都歳事記】春鱚釣の事、江戸には往古知る人なし。寛文のころ、上總の國の船頭五大力仁兵衞といへるもの、鐵炮洲に於て、初めて多くのきすを釣得たり。其の後岩崎兵太夫といへる水府の人、是につゞいて春鱚を釣り、世上に流布せしといへり。凡そ釣の時節は、温涼・風雨・陰晴・潮の清濁によりて年々遲速あり。春釣は大概三月末四月に入りて、朝より晝迄の間と、夕方を時刻とし、六月土用に入りて止む。〔參照〕夏—鱚。

鮎汲（あみくみ）

汲鮎（くみあゆ）　小鮎汲み（こあゆくみ）

〔古書校註〕【年浪草】紀事に曰、大井川にては、木柄を以て鰷魚を取る。是を掛鰷と謂ふ。

【栞草】鮎いまだ長ぜざる時、小綱を以てこれをとる。或は二夫長縄をもち、縄の上に重々ときびしく小石塊をつなぎ、相曳きて小石川を下る時は、鮎石の磨におどろきて落つ。一夫下流に立ちて、扇網を持ちて、二夫の至るを待つ。二夫近づくにしたがひ相依りて結び合するが如く、團様するときは、鮎扇網に入る。半ば網を擧げ、小杓を持ちて鮎を汲む。是を汲鰷と云ふ。

〔季題解説〕鮎は川を遡る性質のもので、四月中旬から次第に川上へ〳〵と遡る。この時よせ網をもつて一ところへ寄せ置き、玉網で汲んで捕ることをいふ。播州加古川の上流加東郡瀧野といふところは、川一杯が瀧のやうになつてをる、その瀧壺のところへ四月花の頃、小鮎が澤山集り、短い瀧即ち急流を越えようと飛びひらめく、そのところへ筵を敷いておくと、飛び越え損つた小鮎が夥しく筵へ落ちる。また玉網を入れても澤山に捕へることが出來、絕好の見ものである。京阪神から遊客も多い。〔參照〕動物—若鮎（ワカアユ）。

〔例句〕

鮎汲　小鮎汲む戀の心や立結び　支考（蓮二吟集）

鮎汲の終日岩に翼かな　蕪村（新五子稿）

汲鮎や青山高く水長し　召波（春泥發句集）
鮎汲や喜撰が嶽に雲かゝる　几董（井華集）

上り簗（のぼりやな）

古書校註

【御傘】春也。若鮎ののぼるやな也。
【滑稽雜談】順和名に、魚簗、和名夜奈。（略）これは夏月に營むといへども、春にいたりて河水にさかのぼる魚を取る爲にまうくるを、のぼり梁と稱するならし。海上にはせぬ事也。湖水などには侍る者也。一說に云、上り魚梁・下り魚梁に、春秋の差別なし。春・夏に通じて歌にはよめり。
【三才圖會】今の魚梁は、多く竹簀を以て左右に立て、上濶く下狹くして空口なり。別に薄を曲げ篭の如くにし、底無く、繩を編みて底と爲す。魚梁の空口を承くる者は、卽ち筌なり。魚流に隨ひて入り、又簀を以て扉の如くして、魚入るときは順にして障無く、出づるときは逆にして出去るを得ず。
【年浪草】上り簗は若鱗の河水にさかのぼるを逐下して、魚簗に入るゝを云ふ。

季題解說

春の川魚は川下より川上へ泝り、秋の川魚は川上より川下へ下るものである。その川上へ泝る魚を追ひ上げて捕る仕掛の簗をいふ。丹波地方では、大竹の節に小さい穴をあけ、竪に一寸くらゐにへぎて入口を棕櫚の細繩でかゞり、一尺巾くらゐの口徑として、夜中に淺瀨に漬けその兩方は小石で堰いて、魚が瀨に上るのをその竹の中におびき入れて捕へる方法があるが、これは簗の最も簡單なものである。簗は簀を用ひて仕掛けるものが多い。　夏―魚簗（ナヤ）　秋―下り簗（クダリヤナ）

例句

上り簗
魚肥えたり七十二灘上り簗　子規（子規句集）

鳴鳥狩（ないとがり）

聞する鳥　覓狩　見する鳥　朝鳥狩　朝鷹　泊り山　泊り狩　鈴子挿す鷹　繼尾の鷹　白尾の鷹　白斑の鷹

古書校註

【御傘】に鷹がりは冬也。たか狩とばかりも、鷹とばかりも皆冬也。小鷹は秋也。小鷹とは、はい鷹・つみ・悅哉・くちさし・はこのりをいふ也。皆秋也。朝鷹がりは春也。
白尾鷹。繼尾の鷹とも云ふ。同じ事也。春に成るなり。春鷹をつかふ時、政賴、尾さきを鶴のきみしらずと云ふ白羽にて繼ぎかへたる事あり。其の心は、鷹の心におのが尾の白きを殘雪と見て、深山へいぬる心なからしめんとの謀なり。

【滑稽雑談】　西園寺殿の鷹百首抄に云、一條院御宇、行幸、御狩の鷹、古山をおもひて氣色あしかりければ、其の時源正頼「師御鷹の上の尾二つを切りて、白き尾にて繼げり。鷹尾の上の白きを見て春を忘れ、いまだ雪のある心地有りけり。御門御ふしんありし時、正頼卿勅答の歌、きさらぎの尾上の雪はしらねども心まかせに尋ねてぞゆく。是より始まるといへり。是を繼尾の鷹とも白尾の鷹とも申すにて侍り。

朝鷹。是は鷹の名にあらず、狩の名也。只かには、朝鷹狩と云ふべし。○西園寺鷹百首抄に云、聞きふせ鳥、春也。夕にればさなきとて、雉のなくを聞きて、早朝に狩立てあはする也。〔藻鹽草に云、聞きふせ鳥、春也。謂て當時は、朝狩は遠嶽などには春に用ふる也。又鳴鳥狩とも云ふ。是も春也。〔是等の心持春也。狩場の雉、冬也。雉をむすびては春也といふ事、連歌の書に記したり。只、心得がたき詞也。此の狩の說にて發明すべし。(略)

鈴子さす鷹。鷹百首抄に云、是もとまり山・泊り狩にあり、鳥にかけたる鈴に、鈴の子と云ふ物を鈴にさして、鳴らざるやうにして鷹をすゑて、よりて狩立て合はす也。鳥を驚かさじとの儀也。是を鈴子さすと云ふ、春也。又一說に、只鈴をさすを鈴子さすと云ふともいへり。〔鷹書に曰、鈴子さすとは、鈴のならざるやうに、冬は紙綿を鈴に入れ、春は木を削ぎてさす也。鳥にあはする時は、紙綿を抜き、木をふきて放すといへり。然らば冬も春も、子を指すと聞ゆ。春に限らず、冬にもいふ詞にや。一說、春は鈴に袋をきせて音を止むといへり。異說あれど、古來より春に許用す。泊り山、泊狩、いづれも春にて侍る也。

【年浪草】　泊り山とは、山野に出でて、宵に雉子の鳴く所を聞置きて、未明に行きて雉子を捕らするを泊山とも、聞鳥狩とも、聞きすゑ鳥とも、朝鷹とも云ふ。〔古今要覽に云、春は鷹の心山へ歸らん事を思ふゆゑに、鷹の羽の君しらずと云ふ羽を繼いで、いまだ雪の降りたるやうに見すれば、山へ歸る心を忘ると也。是を繼尾・白尾などと云ふ也。

【栞草】　繼尾は、古し繼尾の鷹と云ふものあり、鵠の尾を以てこれを接ぐ。何の用と云ふことを知らず。近世、尾羽損傷し、或は短小なるもの、他の鷹の尾を以てこれを接ぐ。〔[illegible]〕冬—鷹狩

【[illegible]】　西園寺相国（藤原公経）鷹百首（群書類従第三百五十七卷）に「とまりやまかりに出ぬと人もみよ朝ノ立てぬ宿のけぶりを」とあり、鷹狩百首抄には「泊山泊狩にて、鷹に懸けたる鈴に鈴子と言ふものを指して、鈴の鳴ぬ様にして鷹をすゑて狩りして合はする也。鳥を驚かさじとするの義也」云々と註してある。

霜くすべ

【[illegible]】　桑が芽ぐむ頃なほ霜が降りることがある。若し一朝厳しい霜に

あへば桑は傷められて葉の發育が惡く、その害が甚しい。これを防ぐ爲めに有明近くから籾殼、松葉などを焚き、くすべて煙幕を作り桑畑一面に覆ふのである。霜の下りるのは、よく晴れて星のきら〳〵輝く冴えた夜が多いので、さういふ時に行ふのである。曇つてゐる夜は行はない。

【例句】

霜くすべ　桑の枝にかけしランプや霜くすべ　春梢（山茶花）

銃猟停止（じゆうれふていし）

猟名残（れふなごり）　名残の猟（なごりのれふ）

[illegible]　銃砲を用ふる狩猟は、雉・山鳥・[illegible]・狸・鹿・[illegible]等特殊の鳥獣については二月末日限り、その他一般の鳥獣については四月十五日限りで猟を禁止せられる。銃猟期限の終り頃になると、また一年の間は出來なくなるといふので、お名殘の猟に出掛けるものが多い。

八瀬の鹿狩（やせのしかがり）

[illegible]

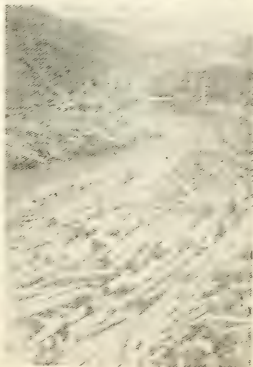
【日次紀事】八瀬の土民、毎年今日（一）鹿狩を爲す。今は則ち亡ぶ。

註（一）二月二日。

木流し（きながし）

[illegible]　冬季伐つた木はそのまま谷川に轉がして置くのであるが、春になつて雪が解け、雨が降つて、谷川の水も増して來ると、それに乘じて木を流し初める。溪川から出した木は本流に流して、下流の一定の場所まで運ぶのである。木を留める堰が流木で一ぱいに埋まつて居り、水が烈しく流れ落ちてゐる樣など壯觀である。時には増水の爲めにこの堰が切れて、みんな流してしまふことなどもある。

[illegible]　初筏（ハツイカダ）

磯竈（いそかまど）

[illegible]　三重縣志摩の漁村では、舊正月も過ぎると若布刈が初まる。そして濱々には幾つもの磯竈といふものが出來る。之は若布刈の海女のあたる焚火圍ひであつて、磯焚火とも言つて居る。十四五人もあたれる位の大きさに、周圍を圓く篠竹で丈餘の高さに圍ふのである。入口は東に向つて小さく作られる。海女は四季を通じて焚火するけれども、夏になれば磯竈は取

り拂はれる。夏は岩かげ、岩襖などの中に焚くけれどもこの團がない。春寒に限られるのである。

例句

磯竈

たち列ぶ志摩の濱邊の磯竈　雪村（ホトトギス誌）
潮垂るゝ海女がはせくる磯竈　同（山茶花）

團扇作る（うちはつくる）

季題解說　夏季用ゆる團扇や扇を製造することをいふ。製造中の團扇をたくさん並べて春日に干してある景色などに季感が深い。團扇の製造の忙しいのは追々需要期の近づく春季のことであるので、團扇作るを春季に屬せしむるのである。丸龜團扇は昔から名高い。當地方ではだいたい十月に作りはじめて、翌年七月末頃に終るのを例としてゐるが、忙がしいのは春で、徹夜することも稀でないといふ。骨と張に大別して、それをまたこまかく分けて、專門に仕事をするので一つ團扇を作るのに十數人の手を經るわけであるが、骨の部に「團扇編む」「日串拾ふ」、張りの部に「團扇張る」「團扇干す」「團扇つむ」「溢する」くらゐにわけてゐる。また春三月間くらゐ地方に出て、團扇を張る娘が多く、その娘たちは自分で働いて自分の婚資を得てゐる。參照 夏 團扇（ウチハ）

例句

團扇作る

訪へば團扇づくりのあろじかな　壽子（ホトトギス）
隣へも干さしてもらふ團扇かな　同（續ホトトギス）
ゐねむりもして貼られゐる團扇かな　迷水（同）

初筏（はついかだ）

初筏式（しよはつしき）　筏祭（いかだまつり）

季題解說　日本內地でも、冬の間に伐採した木を春になつて流し始めるのであるが、鮮滿地方、殊に鴨綠江及び松花江等においては、上流の森林は晩夏から初冬にかけて大仕掛けに伐採する。その伐採せられた木は適當の長

さに造材し、地曳出または山落しなどで一定の箇所に集積して、更に牛曳、橇、軌道などに依つて江岸に運んで編筏し、三月末乃至四月上旬の解氷を待つて流下するのであるが、支流の堰止を幾回も乘り越えて本流に出て、百數十里を流れ／＼て新義州や安東縣或は吉林に到着するのである。その解氷後初めて流れ來る筏を「初筏」といふ。初筏は流筏事業の事始めであり、製材事業の原料の初荷の到着でもある。流筏が順調に行はれた年は豐年であり、洪水その他天災地變で、筏に故障の多かつた年は凶年である。從つて初筏が無事に到着するといふことは、その年の吉凶を卜する緣起でもある。新義州ではこの初筏をことほぐために祭りをする。これを「筏祭」或は「初筏式」ともいふ。初筏が新義州に到着すると、木材關係の官民有志が盛裝して江岸にその筏を迎へる。筏は徐々に渚に寄せられ、束帶姿の神官が祭主として修祓の儀を行ひ祝詞を上げる。一通り式が終ると、筏に供へた神饌を撤し、神酒はこれを筏の上から鴨綠江の波に注ぐのである。かくして長江の平安と流筏の無事殷賑を江神に祈るのである。

例句

初筏　初筏統軍亭の杙より　實柿（ホトトギス）

魞挿す（えりさす）

季題解說　魞を挿すのは大抵二月上旬から三月中旬までのことである。他地方にもあるが、琵琶湖などで殊に盛んである。その樣子は、先づ魞場と定めた湖中へ、幾多の曲折を作りつつ幾本もの青竹を突挿して骨組とし、この骨竹の外側から魞簀を突挿しつつ張りめぐらしてゆく。そしてこの魞簀と骨竹とを繩を以て括りつけて、大風波にも耐ゆるやうに仕立てるのである。鯉などの大魚を漁る大魞を一つ挿すのには一ケ月餘の日數がかかる。この大魞の中へ幾艘もの舟が這入つて、大網を打つて魞の中の魚を漁るのである。**參照**　冬—魞簀編む（エリスアム）

例句

魞挿す　挿し終へて魞の中漕ぐおもむろに　碧城（ホトトギス誌）

花菜漬（はななづけ）

季題解說　まだ蕾のあひだの菜の花を、糠味噌に淺漬けした食品である。ぽつぽつ綻びそめた黃金色の花か、葉菜を染めたりして、野趣の溢れたものである。たま／＼用ひてをる箸をも染めることがあつて、茶漬にも溫飯にもよろしい。仄かな匂も咲いてゐる花菜と同じである。

例句

花菜漬　花菜漬つけ込んである法事かな　曉水（泉）
こま／＼と花たくさんや菜種漬　同（同）

山葵漬（わさびづけ）

季題解説　山葵は辛味の優れたものが喜ばれるのであるが、新山葵は辛味、香氣共にすぐれてゐる。山葵漬はその新山葵を、莖も葉も根も殆ど全部切り刻んで粕に漬けて製するのである。それを曲物なり蓋物なりに密閉して置けば、いつまでも保存することが出來て、茶漬等に添へて食へば格別の風味がある。靜岡の名産となつてゐる。參照 植物　山葵

例句
山葵漬　ほろ〳〵と泣き合ふ尼や山葵漬　　虚子（句集　虚子）

蒸鰈（むしがれひ）

古書校註
【滑稽雜談】　和俗、おほく王餘魚を加礼比と稱す。順も亦朱匡記の趙王の說を傳へ、劉淵林か說の如く和名抄に記せられたるか。時珍が其の狀を說くに及びて、是を考ふるに和産の幾須古に治定せり。鰈とばかり、季定めがたし。其の內、蒸鰈と稱して春月に賞する者、是鰈の一種也。(一)
【三才圖會】　若狹及び越前より出づ。大さ尺許りの者、鹽水を以て蒸して半熟せしめ、取り出して陰乾すること數日にして炙り食ふ。(二)

註　(一) 滑稽雜談には「蒸鰈」の項を、二月の部及び三月の部に重出してゐる。(二) 三才圖會の鰈の條下に見えてゐるが、同書にはこの外に、鼠鰈・石鰈・癩子鰈・白水鰈・目白鰈・木葉鰈等を列擧して、それ〴〵說述してある。

季題解説　鰈といふ魚は脂肪の少ないのを特色としてゐるのであるが、その最も新鮮なものを完（マヽ）のまま鹽水でさつと蒸して、天日で程よく乾して製するもので、炙つて喰べる。或は數日陰干しにして製するのであるともいふ。古來酒客の賞美するところのものである。

白子干（しらこぼし）

季題解説　地曳または舟曳網で漁つた鰯の子を煮て乾したもので、俗に「ちりめん」といひ、目刺よりやゝ遲く市場に出る。また半乾や煮たそのままのものを、大阪地方の商人は「釜揚げ」と稱して、どん〳〵取引をしてゐるのである。いづれにしても食法極めて簡單で、各方面で喜ばれる春の食品の一つとなつてゐる。

目刺（めざし）

古書校註
【滑稽雜談】　これ和俗の白魚を採りて、魚目を細き竹串を以て數頭を貫き、

編みて鯁（ひび）となす。呼びて目刺と名附く。春月相賞する者也。是も古來より春に許用す。

【三才圖會】竹串を以て眼を貫き相聯ね、曝乾して鹹（かん）に作る。俗に目佐之と云ふ。

註 〇三才圖會の説は鱠殘魚（しろいを）の條下に見えてゐる。

季題解説 小鰯を大釜で程よく炊き揚げて、眼に竹串を通して天日に乾し固めて製したものである。その様あだかも眼を貫きたる感があるので、かく稱せられるのである。乾し固める際に串から脱落したものを、俗に「串落ち」と稱して量賣にする。春未だ寒い頃から市場に出て、ひろくどこの厨へもはいる。その譯は、永く貯へて置いても、上等であればあるほど、味が變らぬといふ重寶なものであり、そして價も廉いからである。火に掛けて燒く時、全身から油を吹いて燃えあがるくらゐのが上等で美味なのである。

例句

目刺

剃刀の如く乾きし目刺かな　蒲公英（同人）
尾頭の炭になりたる目刺かな　琴水（同）
目刺燒く妻に不憫をかけにけり　曉水（ホトトギス）
住みつかでまた引越や目刺燒く　枴童（同）
目刺燒くや一つ違ひの女房と　零餘子（同）
獨り燒く目刺や切にうち返し　溫亭（同）
ほろ〳〵と腸にがき目刺かな　なかし（同）
わだつみの色をとどめし目刺かな　桐蔭（同）
天井を銜ける目刺の煙かな　九老谷（續ホトトギス）
親の居て子に盗まする目刺かな　曉水（同）
夕寒し目刺燒く爐に手をかざす　月倚（同）

參考 倭名類聚抄に「鰒、唐韻云、鰒（音佐、今案、和名乎佐）以レ竹貫レ魚出ニ復州界一」とこれに就いて、狩谷棭齋の箋注倭名類聚抄に「按古以ニ竹籤一貫ニ魚尾一乾レ之、故名ニ乎佐之一、猶下今俗貫ニ魚目一故呼中米佐之上、又主計寮式有ニ與治魚刺一、蓋此所レ載與知乎佐之卽是、然則乎佐之魚插歟。」

干鱈（ひだら）　ほしだら

古書校註 【滑稽雜談】多識篇には黃顙魚をたらと訓ず。一説には大口魚は、爾雅に云ふ鮵と一種にて、たらといへり。何れも據あるならし。東醫寶鑑に云ふ、腸の味佳なる説、和産の者く雲腸とて賞す。陸佃が鱈の説も、此の魚の腸を以て賞するの謂ならし。所において冬月出づる者也。俗是をさらしかわかして干鱈と稱し、春初に賞味する也。乾物を季に用ひる事稀なりといへ

ども、生鱈を冬に用ひて、又相續いて干鱈を春に許用す。鱈鱈は雜の由、古老の說也。句作も心得有るべし。此の字の出所詳かならず。然れども俗又鱈の字を用ふ。冬月用するの謂か。然れども俗に貫ひて通用すべし。

【年浪草】乾呉魚、白色なる者を上と爲し、黃を帶びたる者之に次ぐ。世に傳ふ、角力を好む者、常に嗜むと云ふ。多く食するときは則ち其の力倍すと。朝鮮國より來る者肉厚く、味亦佳なり。

註 ○年浪草の說は三才圖會の引

季題解說 鱈を開いて薄鹽にして、適宜に乾したものである。この頃東京邊では、鮭の燻製などと同じやうに、パラフィン紙に包んで、二三寸くらゐの長さの切身にして、乾物屋などで賣るやうになつた。火で炙つて縱に細く割き、味醂や醬油などにつけて食べる。和漢三才圖繪を見ると「色白きものを上とす。黃を帶るものを次とす。世に傳ふ、角力を好むもの常に嗜くといふ。多く食ふ時は其力倍す」云々とある。 參照 冬―鱈（タラ）

例句 干鱈

商人や干鱈かさねるはたりく　太祇（太祇句選）

干鱈やくつゝじの柴や燃んとす　几董（井華集）

軒うらや干鱈かけたる鹿の角　曉臺（曉臺句集）

信樂の茶うりがさげし干鱈哉　同（同）

ほし鱈の虱ほろつく春日影哉　句空（類題發句集）

數（かず）の子製（こせい）す　鯡（にしん）の子取（こと）る

古書校註 【三才圖會】數子、鯡の子也。腹を割き鯑を出して之を乾す。黃白色を上と爲す。腐りて久しき者は色赤褐に變ず。臘月歲始及び婚家、以て規祝の肴と爲す。

季題解說 先づ漁獲した鰊を三四日經つてからつぶす。そして眞子は眞子、白子は白子と別々にして、海水を張り湛へた大きな槽に數の子を入れ、一日に四五度ぐらゐ水を換へる。これは數の子が腹から出たばかりではこぼれ易いので固めるためと、黃金色のあの美しさを出すためである。これを繰り返すこと三四日して初めて槽から上げて水をきり、筵の上にならべ干し、一日に五六度竿などでひつくり返して乾かし、色と固さが適當になつた時を見はからつて貯藏するのである。時期は三月頃である。 參照 動物―鰊

例句 數の子製す

櫂をもて干し數の子をひろげけり　雨圃子（ホトトギス）

木（こ）の芽漬（めづけ）　木（こ）の芽煮（めせき）

古書校註 【雍州府志】木目漬、洛北鞍馬の土人、春末夏初、通草の葉を採り、忍冬

の葉・木天蓼の葉と合し、細かに之を剉き、鹽水を以て之を漬し、然る後陰乾して之を用ふ。

【滑稽雜談】庭訓往來に曰、鞍馬の木の芽漬、云々。顯註密勘に云、くらまの木芽漬は、通草のつるの若葉をとりて喰ふをいふ。（略）所說の通草ならば、草の類也。木芽の名、いぶかし。然れども古人の註しおかれたる物によて、爰に記す。一說、諸木の春芽を採りて、鹽藏するの名ともいへり。

季題解說 通草の嫩葉に忍冬、またゝびの葉を少し混入し、約一ヶ月程蔭干にし、これを鹽漬として小さく刻んだものである。昔から鞍馬の名產として知られてゐたが、今から凡そ五十年以前から廢れて、現在は見ることが出來ない。只物ずきの人が家庭用として、山椒の芽を淺く鹽漬とし、木の芽漬と稱んでゐるとのことである。鞍馬では前記の木の芽漬に代つて、木の芽煮といふのが今名物となつてゐる。山椒の葉に蕗、昆布、椎茸等を入れ、煮て刻んだものである。 **參照** 植物—山椒の芽

例句

木の芽漬　蓋とれば去年の香もあり木芽漬　宜石（類題發句集）

參考者 倭訓栞に、きのめづけ、顯注密勘に、木芽漬はあけびのわか葉也、鞍馬にありといへり、續詞花集に歌有」續詞花集にある歌といふは、同集卷二十「鞍馬の別當のしたしき人のもとより芽漬といふもの、このほどおほかた見えねばえたてまつらずといへりけるに、壽乳母、いとほしや鞍馬のめづけいかなればふつと見えずといふにかあるらむ」雍州府志に「木目漬、洛北鞍馬土人、春末夏初採二通草葉一、與二忍冬葉木天蓼葉一合、細剉レ之以二鹽水一漬レ之、然後陰乾用レ之、倭俗草木萠芽謂レ目」

櫻漬（さくらづけ）　花漬（はなづけ）　櫻湯（さくらゆ）

季題解說 八重櫻の蕾を鹽漬にしたものである。それを茶碗の中に入れて熱湯を注ぐと、湯の中で櫻の花が開く。鹽氣があつて、香もある。その湯を櫻湯といふのである　またアンハンの頭に燒き込んであることもある。

參照 植物—櫻（サクラ）

例句

櫻漬　下臥に漬味みせよ鹽さくら　其角（五元集）
　櫻湯の龜甲罇の茶碗かな　久女（續ホトトギス）

木の芽和（きのめあへ）

季題解說 山椒の芽を摘んで、擂鉢で擂つて、砂糖と味噌を入れて味をつける。その中へ筍や烏賊などを入れて交ぜ合せた料理である。まことに季節の感じの深い喰べものゝ一つである。 **參照** 植物—山椒の芽（サンシヨウノメ）

木の芽味噌（きのめみそ）

[季題解説] 山椒の芽を味噌に交ぜて擂鉢で擂り、味醂や煮出汁などを入れて味をつけた嘗めものである。[参照] 植物—山椒の芽サンセウノメ

蕗味噌（ふきみそ）

[季題解説] まだ傘の開かない若い蕗の薹を摘みとつて水洗ひをし、生のまゝ（茹でてもいゝが生の方が風味がよい）擂鉢でよく擂り潰し、これに白味噌に砂糖、味のもと等を入れてまた擂り交ぜて作る。少し苦みがかつた風味と香ひがあつて、早春のよい嘗物である。咳、健胃、痰等にもきくといふ。

[参照] 植物　蕗の薹フキノトウ　夏—蕗フキ

木の芽田樂（きのめでんがく）　このめでんがく　田樂（でんがく）

[古書校註] 【嬉遊笑覧】田樂は、田樂の曲に鷺足とて、竹馬の如きものを一本立てゝ乘ることあり。その形に似たるをもて名とすることは誰もしれり、されども田樂の豆腐のきりかた、昔は今の如くにはあらず、古圖をみるに丸く切りたるなり。今の茄子のしぎ焼の形に似たり。但し一切づつ串にさすなり。これを後には四角に切りたる儘にて角を落さず、串は半ばまで割りかけたり。是を爐中の灰に立置きてあぶり焼くなり。此のさま田樂のすがたなり。

[季題解説] 豆腐を四角または短册形に切つて、よく水氣を去り、竹串に刺して、焦げぬやう火で炙つて乾かし、別に木の芽、味噌、砂糖等を擂り交ぜて作つた木の芽味噌を、この豆腐に裏表とも塗りつけ、もう一度焼いて製する。單に田樂ともいふ。野趣もあり、またなかなかうまくもある。田樂の味噌は白味噌よりも、岡崎八丁味噌などの方が澁味があつて結構である。火加減、焼加減で、上手に焦かさぬやうにしなければ妙味はない。豆腐の水氣を絞るには、乾いた灰の上にガーゼのやうな布を置き、豆腐をその上に乘せ、輕く重石しておくのが一番いゝ。[参照] 植物—山椒の芽サンセウノメ

[例句] 木の芽田樂
田樂に串の青さぞ好もしき　秋蘿（ホトトギス）
田樂の味噌落しけり花衣　木犀（同）
田樂や山吹咲いてよい茶店　鼓天（雑ホトトギス）
田樂や花の過ぎたる嵐山　筍吉（同）

[参考] 豆腐百珍に「木の芽田樂、温湯を大盤に湛へ、切るも串にさすも、其湯の中にてする也。やはらかなる豆腐にても色くおつるなどのうれへなし、湯よりひきあげすぐに火にかくる也。味噌に木の目匂ひなり、[illegible]のか

た入れを二分どほりみそにすりまぜれば尤佳也。多く入れば甘すぎて却て
よろしからず。」

青饅（あをぬた）　あらぬた

古書校註

【年浪草】芥の葉青きを用ひて、酢に合はせ、魚膾に和して之を食ふ。俗に
云、阿乎乃太、是なり。

季題解説　芥菜（カラシナ）、胡葱（アサツキ）などを青く茹で、魚の肉と一緒に酢味噌で和へたもの
を青饅といふが、また青いほうれん草、そら豆、芥菜等を青く茹でて擂り
潰ぶし、これに白味噌、白砂糖、酢等をり交ぜた青色の美しい酢味噌に、
魚肉や烏賊など和へた料理をも青饅といふ。これは色が青くて春先などの
食品としてまことに美しいものである。

胡葱膾（あさつきなます）

季題解説　東京邊でいふ「あさつき」は北九州邊では「わけぎ」ともいつ
て、葱より細く美しく、早春から三月いつぱいが、柔くて丁度食べ頃であ
る。胡葱膾は、胡葱（アサツキ）をさつと青く茹でたものと、淺蜊のむき身とを酢味噌
で和へたものである。三月三日の雛に供へる。小倉邊では淺蜊の代りに名
物の馬蛤貝（マテ）を主につかふ。

鮒膾（ふななます）　山吹膾（やまぶきなます）

古書校註

【日次紀事】正月より三月に至りて、專ら近江の鯽魚、是を源五郎鯽魚と
謂ふ。傳へ云、漁人源五郎始めて之を執る。其の大なる者は、膾鮒と稱し、
之を截り、膾と爲すに堪へたり。京師・近江の人專ら之を賞す。

【滑稽雜談】時珍本草に云、膾は創切（一）して成す。故に之を膾と謂ふ。凡
そ諸魚の鮮活なる者を、薄く切りて血鯹を洗ひ淨め、沃しに蒜・韲・薑・酢等
五味を以て之を食ふ。○杜甫の詩に云、鮮鯽銀絲鱠。○和俗、又春に至り
て鮒魚の膾を賞す。

註（一）割切の誤か。

季題解説　鮒の膾である。鮒の眞の味は寒中にあるといつて、その頃よく炙
つて食ひ、或は煮浸にしたり、洗肉（アラヒ）にしたりして用ひるのであるが、琵琶
湖の源五郎鮒（夏頃鮒（ゲゴブフナ）の訛轉といひ、或は源五郎といふ者が始めて捕つた
とも傳へられる。）は、春夏の候多く捕れて、味もまたよく、これを膾にし
たものは格別の作品で、到底鯉や鯛などの膾の比でないといはれてゐる。
その製法によつて「叩き膾」と「子守膾」の別がある。鮒の小なるものを
選び、鱗を去き、頭を切り落し、鰓と腸とを去り、庖丁の刃の方で細かに

叩いて、井鉢に移し、これに大根擦を加へ、酢を掛けて交ぜ合したものを「鮒の叩き膾」といひ、また、鮒を三枚におろし、腹骨と小骨と去つて刺身に作り、鰤を添へて皿に盛り、山葵酢を添へたものを「鮒の子守膾」といふのである。山吹膾といふのは、鯛膾（一説に白魚）を山吹の花を敷いた上に盛る料理であるとのことである。

例句

鮒膾

梅ほどの寒み持けり鮒なます　蒼虬（蒼虬翁句集）

舟中に冷たき酒や鮒膾　四方太（春夏秋冬）

參考　四條流庖丁書に「一膾の事、山吹なますと云は半面魚膾の事也、かれいの子をいりて、あへて參らする。よりて山吹の如なると申傳侍る」又庖丁聞書に「一山吹膾といふは初夏の膾也　鮒を作り、山吹の花改敷の上にもり出なり、口傳。」

目摩膾（めすりなます）　眼こすり膾（めこすりなます）

古書校註【倭訓栞】山東の人蛙を捕へて熱湯に投じ、皮を剝ぎて芥醋に和して食ふ、是を目摩膾といふと本朝食鑑に記せり。宋書に蝦蟆膾と見えたり。愚按ずるに、蝌斗の四足を生じたるとき、芥醋に投じ和すれば、前足を以て眼をこするものなりとて、眼こすり膾といふと聞けり。いまだ目撃せざる事なり。

參考　一葉集に芭蕉の句と傳ふる「蛙子は目すり膾を啼く音かな」があり、元祿十年刊の本朝食鑑にも見えて、當時かやうないかもの食の存したことが知られる。

田螺和（たにしあへ）

古書校註【三才圖會】土人之を取りて水盤に養ひ、泥を吐出さしめ煮熟して、肉に蒜味醬を和して食ふ。味美なり。多く食へば久しく腹痛せしむ。

季題解説　田螺は煮付にしたり、付燒に作つたりする外、春、胡葱等と一緒にぬたにして野趣を味ふ。採取した田螺は、先づよく煮沸して中の肉を拔き出し、腸を去り、十分に洗つて、各種の調理に供するのである。かうして煠でた田螺の肉を、煮出汁と醬油とを以て淡味に下煮をし、山椒味噌に和へたものを「田螺の木の芽和」といふ。こり〳〵として、一種の風味がある。【參照】動物―田螺（春）

例句

田螺和

なつかしき津守の里や田螺あへ　蕪村（蕪村句集）

片口のわぶと答へよ田にしあへ　召波（春泥發句集）

はづかしと客に隱すや田螺あへ　几董（井華集）

蜆汁（しじみじる）

【季題解説】蜆貝の味噌汁である。蜆は味噌汁にして食べるのが普通であるが、これは黄疸の藥にもなるといふ。東京の隅田川の業平蜆とか、江州の熱田蜆とかは古來有名である。【參照】動物―蜆（シジミ）

【例句】

蜆汁

八重櫻咲きけり芋に蜆汁　子規（子規句集）

牛島や櫻に早き蜆汁　同（同　）

鉢植の梅散りにけり蜆汁　奇峰（春夏秋冬）

花にまだ早き京都や蜆汁　默鳥（ホトトギス）

大風に閉す障子や蜆汁　みどり女（同　）

洲蛤（すはまぐり）　醋蛤（すはまぐり）

【古書校註】【滑稽雜談】古來は醋蛤といはずしては雜也。さも有るべき也。然れども、是も醋を結びて春と云ふ道理なし。只此の節醋蛤とて、至つてちひさき蛤の別種なるを都市におほく賣る者あり。民戸是を賞す。殊に二月初午の日、洛南稻荷の會にて貴賤踵をめぐらし、彼の地に於て是を賞す。俗に云、初午の日稻荷にて醋蛤を喰へば、鬼氣に犯されずといへり。かやうの俗事に任せて、猶春に許用せり。

【年浪草】攝州住吉の洲崎蛤多し。漁者とりて殼を捨て其の肉を升に盛りて市に賣る。醋に和して是を膾とす。故に洲蛤とも醋蛤とも云ふなり。攝州大坂の士人、專ら正月賞して之を食ふ。

【季題解説】攝津國住吉の洲崎は昔から蛤の名産地で、これをむき身にし、枡に盛つて賣る。その蛤を醋にして食ふから醋蛤と稱へ、住吉の名物であつた。現在の住吉神社の神前、高燈籠のあたりが昔の所謂洲崎の海で、今は埋立てられて、廣大な住吉公園となつてしまつてゐる。從つて蛤も次第にずつと沖でなくては取れぬこととなり、それもほんの少ししか取れず、形も小さく名ばかりである。今日洲蛤として社前の土産店で賣つてゐる蛤は、皆伊勢方面から來るものであるといふ。蛤のことを土地の人はつなぎ貝といひ傳へて居るさうである。住吉踊の俗謠に、「神明穴から大神宮さんをうち拜む。野かけの天神五大力。麥藁細工につなぎ貝。赤前垂が出てまねく。」云々とある。【參照】動物―蛤（ハマグリ）

壺燒（つぼやき）　榮螺の壺燒（つぼやき）　燒榮螺（やきさざえ）

【古書校註】【三才圖會】榮螺、和名佐左江、（略）肉味甘くして硬く厚し。腸尾を去り

て、切りて醬油を和し、再び殼に盛り之を煮熟して食ふ。之を壺焼と謂ふ。(略)或は生きながら炭火に投じ、靨(フタ)開くを俟ちて、醬酒を和し煮て食ふ。膓苦くして亦佳なり。之を苦焼(ニガヤキ)と謂ふ。【嬉遊笑覽】壺やきはつぼいりといふ。〔寛永發句帳〕霞くむそのつぼいりやにし肴。

季題解說 榮螺の肉を介殼から出して刻み、三葉、芹、銀杏等と一しよに殼に入れ、煮汁を注いで殼のまゝ直火にかけて焼く。そしてそのまゝ膳部に乘せるのが榮螺の壺焼である。殼のまゝ火に掛け、またそのまゝ膳に上すといふことが野趣があつて面白い。元來は生きた榮螺の中へ醬油を注いで直火にかけたものであらう。昔は江の島の名物であつたが、今日では參詣人の雜踏するやうな神社などには大抵どこにもある。花見の茶屋などにもよくある。 **參照** 動物―榮螺(サザエ)

例句

壺焼

壺焼や濱親分の梅屋敷　合歡朗(ホトトギス)
壺焼や冷海を下に赤礫　月舟(同)
壺焼や障子潮風に飛ばんばかり　青畝(同)
壺焼や屋根貫きし松の幹　軒石(同)
壺焼や庇尻なる沖の島　螺堂(同)
壺焼や波のしぶける一柱　同(同)
戸一枚松に立てかけ壺焼屋　默鳥(同)
壺焼や軍艦見えてよい茶店　學軒(續ホトトギス)

蟹豆腐(かにどうふ)

季題解說 東京の料理屋で聞いてもはつきりせず、京阪で調べたところでも珍らしい方の料理の由で、普通の人は知らない。しかし土佐あたりでは盛んに食ふといふことである。蟹の肉をつぶして水で漉し、豆腐を摺つて汁をつくり、それを煮つめ、適當に切つて食するものであるらしく、春季に最も多いといふ。天明に出來た書に「豆腐百珍」といふのがある。その中にも蟹豆腐といふのはなく、「苗鰕(エビ)拔乳(トウフ)」といふのがある。「生の苗鰕(エビ)を割刀にてたゝきよく細末にし、擂鉢にてするはあしく、別にとうふをよくすりて右のたゝき苗鰕をよくまぜあはせ(中略)油煮にして味つくる也。苗鰕なき時節は海鰕を淪てたゝき用ふ」とある。この調味法と大差あるものでなからう。この「豆腐百珍」は今では珍書だが、別に「豆腐百珍續篇」があることは豆腐百珍の卷末に、續篇近日出來とあるので想像せられるが、續の方は聞いたこともなく見たこともない。或はこれに蟹豆腐の名稱があるのかも知れぬ。

聞茶

利茶　嗅茶　茶の試み　茶試し　茶を試む　茶香服

古書校註

【滑稽雑談】 凡そ宇治の茶家十一家、毎年公方家へ茶を獻ず。先は當月上旬茶摘の手初めして、是を製し、打ちて壺に納めて、試と號し、禁裏・院中・公方家、其の外諸國の大名・小名、又町人・富家の類迄、茶を買求むる人の方へ相餽れり。是を茶の試み、又は嗅茶・聞茶、或は茶賦りなど。俳諧において、春に許用するならし。

【年浪草】 利茶・嗅茶とは、倶に茶の香氣を嗅ぎて、其の氣味の善惡を辨ふる也。茶人の所謂茶香服と稱する類の如し。凡そ茶に眞香有り、蘭香有り、清香有り、純香有り。表裏一の如きを純香と曰ひ、生ならず熟ならざるを清香と曰ひ、火候均停なるを蘭香と曰ひ、雨前純具なるを眞香と曰ふ。更に含香・浮香・間香・漏香有り、此れ皆不正の氣なり。

季題解説 今年新に製造した茶を、まだ市場へ出ない前に、茶の香味・風味を鑑別するのを嗅茶、または利茶といふ。茶の湯では「茶香服」といふものがある。これは種々の茶を飲んで、茶の銘を當てる一種の遊びである。が、これは必ずしも春季に限つたことではない。 參照 茶摘、製茶

枸杞茶

枸杞摘む

季題解説 仲春頃、鬼枸杞の嫩芽を摘みとり、製茶の如く製して飲用に供する。これを枸杞茶といひ、藥效があるといふことである。 參照 枸杞飯

植物—枸杞

白酒

お白酒　白酒賣

古書校註

【雍州府志】 白醴酒、今處々にて是を製す。もと筑前博多の練酒に倣ひてかもす酒店の製とあれば、今の中汲か。又并びて山川酒六條油小路酒店にて釀す。山間水多くは白くして濁る。此の酒その色に似て甘美なり。因りて名づく。夏目之を造るとあるは白酒なるべし。今も山川酒といへり。

【年浪草】 本朝食鑑に曰、醇は白酒の甘き也。和名、之良加須と云々。或は醨の字を用ふ。倭俗、三月三日節物として雛祭に供ず。

【栞草】 雛祭に供ず、されども、句作によりて三春にわたるなり。

季題解説 三月の雛祭に用ふる非常に濃い白色の混成酒である。甘味豐かであるけれども、多少の醉を發する。製法は種々あるが、要するに糯白米を蒸し、これに米麴等を加へ、味醂か燒酎に混じ、時々攪きまぜて得た味醂醪を、その儘少許の清酒を加へながら、碾で碾いたものである。田舍では桃の花酒といつて、桃の花の小枝を德利の口に括りつけて注ぐところがあ

る。關東では山川白酒といひ、關西では東白酒といひ、また利休・雪月花などの銘をつけるものもある。昔は白酒賣といつて擔ひ桶に入れて賣り歩いたもので、歌舞伎十八番の助六に出る白酒賣など、われ〳〵の眼にも馴染が深い。

例句

白酒

大風にしめし障子やお白酒　月舟（ホトトギス）
白酒やもらひためたる小盃　鬼城（同）
老ぼれやふるひ零しゝ濃白酒　木母寺（同）
白酒や盃の繪の妹背雛　山史（續ホトトギス）
白酒や女の子ばかりの子澤山　スミ子（同）

參考　童蒙酒造記に「白酒之事、一餅米上白一斗、地酒貳斗仕込樣以下練酒同前也。濃き薄き遣計也。一又法に、餅米上白六升五合、白花麹壹升五合、地酒壹斗、右餅米蒸し釜より直に入れる、能包、翌朝あけて搔也。其後は一日に二度宛搔也。日數七日めに石磨にて引て直に賣る也。」

桃の酒

桃花酒　桃の盃　御酒古草

古書校註　【滑稽雜談】　蘇頌圖經に曰、太清草木方に云、酒に桃花を漬けて之を飲めば、百疾を除き顏色を益す。○孫思邈が千金方に曰、三月三日、桃花一斗一升を採り、井花水三斗・麹六升・米六斗、之を以て好く炊きて、酒に釀し之を飲めば太だ宜し。○孟詵が食療本草に曰、三月三日、桃花を採りて之を水服すれば良し。○此外諸書に載せたり。其の説おなじ。又本草を見れば、桃花はひとへなるを用ふべし。千葉の花を服すれば、衂血出でて止まずと也。又桃花酒は仙家なんどにも用ふるにや。

【年浪草】　御酒古草とは、三月三日、内裏の御美酒に入れらるゝ桃なり。

季題解說　古來支那では、桃は邪氣不祥を拂ふ仙木としてゐる。三月三日、桃の花を酒に浸して飲めば、病を除き顏色を美しくするといふやうな意味から、この桃花酒を汲み雛にも供へる。恰も菊花を浮べた酒を菊酒といふやうなものである。桃の盃は桃の花を泛べ飲む盃、或は桃花酒を飲む盃の意である。御酒古草は昔三月三日、内裏で御酒に浸して用ひられた桃花のことをいふ。今日は桃花を酒に浸して用ふることなど餘り聞かない。

例句

桃の酒

桃花盃疊のうへを流めり　召波（春泥發句集）

治聾酒

古書校註　【滑稽雜談】　石林詩話に曰、世に言ふ、社日（一）酒を飲めば、耳聾を治す。

註　（一）春社。立春より第五の戊の日。

季題解説　立春から五日目の戊の日を春の社日、春社といひ、この日に酒を飲むと聾が治るといふ云ひ傳へがあつて、今でも農家などで、耳の遠い子供に酒を飲ませてゐるのをよく見受けることがある。その酒を治聾酒といふのであるが、酒は有合せのものでよく、別段治聾酒といふ特定の酒がある譯ではない。

例句　治聾酒

治聾酒の醉ふほどもなくさめにけり　鬼城（ホトトギス）

治聾酒に醉かたまけて老母かな　青畝（同）

山椒の皮（さんせうのかは）

からかは　山椒の皮剝ぐ

古書校註

【滑稽雜談】蜀椒とは、俗に云ふ山椒也。本草綱目にも、其の實を用ふる説有りといへども、木皮を喰ふの説見えざる也。蘇頌が圖經にも、木の高さ四五尺といへり。和産には、まゝ大木あり。此の木の大小に限らず、此の木の皮を剝取りて、和俗の菜となすに、煮熟し、或は鹽藏して賞す。尤も尋常ありといへども、春初やう〳〵諸木の性實せざる時を以て採るによつて、初春に是を押すか。作者心得あるべし。青山椒・山椒の子などいへば夏也。

【雍州府志】洛北鞍馬の土人、山椒の木、大小を擇ばず各々三寸計りに之を切り、大釜に入れて之を煮、其の皮を剝ぎ、莨條を以て之を插み、市中に賣る。又丹波より出づる者あり、皮厚くして味劣れり。

【年浪草】椒樹の皮、外面は粗皺灰黑、裏面は光滑青白、其の粗皺を刮り去りて用ふ。其の味辛辣、椒味減ぜず。（略）洛の鞍馬山の産、皮薄く香多く、味亦佳なり。遠州山中の産、二荒山中の産、倶に厚くして氣辣し。

季題解説　山椒は芽も葉も果實も辛味を有し、香氣強く食料として珍重せられるが、その樹皮も亦賞用せられる。この皮は外面粗糙で、灰黑色の皺襞を有してゐる。この粗皺の部分を刮り取つて用ふるのであるが、山椒特有の辛辣な香味がある。山椒の木を三寸許りに切つて大釜に入れて煮沸し、その皮を剝いだのを市中に賣つてゐる。これを求めて水に浸し、刀を以て麁皮を剝り、細かに剉き、醬汁に漬けて食用とするのである。洛北鞍馬産は皮薄く香高く、味亦佳であるが、他地方のものは皮が厚くて味も劣つてゐるとのことである。

切山椒（きりざんせう）

季題解説　米の粉に、山椒の實と砂糖を加へて搗き交ぜて、細かく切つた餅である。淡紅と白とに染めてある。山椒の香味があつて、お茶受けによい。

鶯餅（うぐひすもち）

【季題解説】　青黄粉をまぶした餅菓子である。色が鶯の羽色に似せてあり、また形もちよつと鶯に似せてある。春になるとどこの餅菓子屋にも出る。

草餅（くさもち）　草の餅（くさのもち）　蓬餅（よもぎもち）　母子餅（はゝこもち）

【古書校註】

【滑稽雜談】　三代實錄に曰、田野に草有り。俗に母子草（一）と名づく。二月始めて生ず。莖葉白く脆し。三月三日、婦女これを採り、蒸し搗きて糕となす。傳へ一歳事と爲す。和國においては、舊事記、或は三代實錄なんどを考ふるに、用ふべからず。○これらの說多く侍れども、周の幽王の說（二）を昔は母子草を用ひて餅を作れり。是、母子そろひて恙なしと云ふ說なるべし。又歳時記（三）を見れば、中華にも鼠麹を採用せり。今世おほくは艾を擣きて餅とす。是、本草の說によれり。さもあるべし。草の餅・艾餅、皆おなじ事也と心得べし。

【年浪草】　先代舊事記に曰、三月三日、艸の餅を三輪大神に奉る。並に、八神殿及び三の神器に奉る。而して天皇に獻じ、諸王・諸卿に給ひて、季を賀し節を正し、敬を累ね信を淳くす。

註（一）本草に「母子草　鼠麹草也。時珍曰、二月苗を生じ莖葉柔軟く葉の長さ寸許にして、白き茸あり。鼠の耳の毛の如し　小さき黄花を開く。穗をなし細き子を結ぶ。大和本草、鼠麹草、又佛耳草と云ふ。上巳の日これを用ひて粿（だんご）に和す。」（二）幽王が曲水の宴を設けてゐる時、或人粿を作つて獻じた。王は之を試みて後、宗廟に薦れば世は太平とならうと言うたのを後へ相傳へて、三月三日には粿を作つて祖廟に獻ることになつたといふ十節録記載の說をさす。（三）荊楚歳時記に「鼠麹の汁を採りて蜜に和して粉にし、之を龍舌粿と謂ふ。以て時氣を厭す」と見えてゐる。

【季題解説】　餅草即ち蓬の葉を摘んで、灰を入れて茹で上げ、これをごく細かく刻んで餅の中へ搗き込む。また餅でないときは、米の粉とじようしん粉と混ぜて、程よくこねてこれを蒸籠で蒸す。蒸けたときに取り出して、細くした餅草を入れて十分に捏ね合せると眞青な草餅が出來るのである。鹿兒島の草餅は、砂糖を融かし、その中へ白玉粉とじようしん粉とを入れて捏ね、それに同じく細くした餅草を入れて捏ね合せ、それぞれの形に揺へてから蒸籠で蒸す。蒸し上がると青くなく黑ずんでゐるが、香りは惡くない。草餅は三月三日の雛壇にはなくて叶はぬものである。また草餅の草は、昔は專ら母子草を用ひた。母子餅の稱ある所以である。今日でも蓬に交ぜて母子草をつかふことがある。【[illegible]】植物—蓬。母子草（ハハコグサ）

【例句】

草餅　雨の手に桃とさくらや草の餅　芭蕉（桃の實）

鶯の來て染つらん艸の餅　嵐雪（玄峰集）

草餅に我若衣うつれかし　蕪村（俳諧百歌仙）
春の野のものとて燒や草の餅　也有（蘿葉集）
たち屑も女なりけり草の餅　蓼太（蓼太句集）
下草の桃にはなれず蓬もち　同（同）
花に來て詫よ嵯峨のゝ艸の餅　几董（井華集）
匂はしや誰しめし野のよもぎ餅　白雄（白雄句集）
草餅を先吹にけり筑波東風　一茶（七番日記）
ふや〳〵の餅につかるゝ草葉哉　同（同）
とてもなら餅につかれよ庵の草　同（同）
おらが世やそこらの草も餅になる　同（同）
草餅を鍋でこねても祝ひけり　同（一茶句帖）
眼ざむるや枕の先の草の餅　蒼虬（蒼虬翁發句集）
旅人や馬から落す草の餅　子規（子規句集）
灰吹いて燒きふくれるや艾餅　月村（同人）
吉野山
草餅や山駕籠過ぐるまた一挺　一轉（ホトトギス）
草餅や庇にのれる風暖簾　炎雨（同）
草餅をたべて再び濯ぎけり　樂南（同）
草餅や足もとに著く渡し舟　風生（同）
うぶすなに茶屋一軒や草の餅　木魚生（同）
草餅を供へて古き佛達　南山洞（同）
草餅や並べる茶屋の中の茶屋　丹楹（續ホトトギス）
草餅に染まれる杵を干しにけり　規水（同）
草餅や籬の外の二渡舟　月華（同）
草餅の出そめし茶屋に憩ひけり　坡牛（同）
今もある紺屋の脇の草餅屋　草餅（同）

櫻餅（さくらもち）

古書校註

【嬉遊笑覽】　近年隅田川長命寺の内にて、櫻の葉を貯へ置きて、櫻餅とて柏餅のやうに葛粉にて作る。始めは粳米にて製りしが、やがてかくかへたり。

季題解説　櫻の葉でくるんだ餅菓子の一種であつて、春になるとどこの菓子屋にも現はれる。櫻餅の皮は饂飩粉で出來たのよりも、白玉粉で出來たものの方が見掛も美しく、味も上品ださうである。櫻餅は江戸時代から向嶋長命寺畔の茶亭のが名物となつてゐるが、近頃は大へん下品に味が落ちたとのことである。しかしそれは他の櫻餅がだん〳〵上品に凝つてきたせゐかもしれぬ。滋養品といふわけではないのであるから、花鳥諷詠の使徒は、少しまづいくらゐは我慢して、やつぱり墨田川を渡り長命寺のほとりの茶

屋に休んで、昔からの名代のを味はつて見るがいゝであらう。

例句

櫻餅

淺草に住めど門居や櫻餅　南蠻寺（ホトトギス）
圖書館の中の茶店や櫻餅　手古奈（同）
雨だれにあたり來し日や櫻餅　雄月（同）
立ちて見るかどの喧嘩や櫻餅　夢仙（同）
分けのぞくのれんの顔や櫻餅　櫻坡子（同）
己が頬見ゆといふ婢や櫻餅　行亭（同）
坂もとの櫻餅屋に一憩み　枴童（同）
足もとに蝶々とべり櫻餅　風生（同）
櫻餅いつのほどより降りいでし　今年竹（續ホトトギス）
言問も橋がかゝりぬ櫻餅　越央子（同）
櫻餅誰がもたらせし句會かな　李江（同）
櫻餅買うて戻りて一人者　萩峰（同）
三つ食へば葉三片や櫻餅　虚子（句集 虚子）

菱餅（ひしもち）

季題解説 紅と白と綠と三種の餅を、同樣に菱形に切つて、三枚重ねたものである。この餅を、同じ形に造つた足付の臺に盛つて、雛の節句に雛壇に飾る。餅は黃その他の色を加へて、五枚重ねとすることもある。これは桃の葉にかたどつたものであるといはれてゐる。

椿餅（つばきもち）

季題解説 椿の葉を二枚合はして包んだ一種の餅菓子である。餅は道明寺糒を用ひ、中に餡を入れる。大きさは椿の實くらゐに作り、よく蒸籠で蒸して、椿の葉を表を外にして上下にあてるのである。綠深く厚みのある滑らかな葉に夾まり、ぶつ〳〵した皮を被つた純白な餡ものである　餅菓子屋の店頭には晩春現はれる。

蕨餅（わらびもち）

季題解説 秋、蕨の根を掘つて、これを打ち碎いて澱粉即ち蕨粉をとる。（この方法は葛粉を採るのと同じである。）蕨粉に米の粉を加へ、捏ねあげて蕨餅をつくるのである。春、花の頃、山の茶店などで、婆さんを相手に澁茶をすゝりながら食ふなど興がないでもない。

例句

蕨餅

掌に殘る鹿の涎や蕨餅　梅史（ホトトギス）

青かつし貴船の茶屋の蕨餅　漾人（續ホトトギス）

五加飯（うこぎめし）

[illegible]　五加茶（うこぎちや）　五加木の芽を摘み、これを茹でて炊きこんだ飯をいふ。【參照】植物—五加木（うこぎ）

【例句】五加飯

喰ておいきやくていかしませ五加木飯　鬼貫（俳諧七車）

西行に御宿申さんうこぎ飯　一茶（花實發句集）

枸杞飯（くこめし）

[illegible]　枸杞の春の嫩芽を摘み、菜飯、五加飯などの如く、飯に炊き込んだものをいふ。【參照】枸杞茶（くこちや）　植物—枸杞（くこ）

菜飯（なめし）

[illegible]　【百飯集】菜飯、菜を摺りて其の汁にて炊くべし。鹽少し入るゝもよし。又菜を細かく刻みて、ざつと熱湯を通し、鹽少し加へ、焚き立ての飯に交ぜ合はすもよし。

[illegible]　菜を細く刻み、さつと熱湯を通し、鹽を少し加へて焚きたての飯に交ぜ合せたものである。江州日川、遠州菊川の宿の名物であつたといふことである。大石良雄も菜飯と田樂が好物で、今も一力の大石忌にはこを供へるさうである。新潟から東北地方にかけても、農家などでこれを食べるが、儉約を主とする食べものので、所謂かてもの—饉饉の年にとつてたべるもの—の意味から來たのか、「かて飯」と呼ばれて居る。

【例句】

菜飯　桐柳民濃に菜飯シかな　嵐雪（玄峰集）

青精飯

鶯の鳴いて菜飯の吹きにけり　湯雨（續ホトトギス）

山宿の高野豆腐と菜飯かな　蓬馬（同）

[illegible]　本朝食鑑に「集解、凡飯有二數種一、菜飯者用二生蕪菁葉一細剉、合レ米煮作二燒乾飯一、其味甘美而香、能下レ氣寛レ胸、不レ使二食氣停滯一、又有下用二蕪菁根一細剉和レ米作レ飯者上、此亦味甘而香、能下レ氣寛レ膈也」

白魚飯（しらうをめし）

[illegible]　松茸飯や筍飯を焚くやうに、白魚を雑ぜて炊く御飯である。【[illegible]】動物—白魚（しらうを）

小水葱摘む（こなぎつむ）　鴨舌草摘む（こなぎつむ）　蕹草摘む（こなぎつむ）

古書校註【滑稽雜談】蘇恭本草に云、靑菜、所在之有り。水傍に生ず。葉は澤瀉に似て小く、花は靑白色、亦蒸し啖ふに堪へたり。江南の人用ひて魚を蒸して食ふ。甚だ美なり。五六月莖を採り、曝乾して用ふ。(中略)按ずるに、なぎと稱する物三種あり。浮薔・澤桔梗・水葱、皆以てなぎと稱す。一類の別種にや。上の二物は紫碧花を開き、水葱は白き花開きて、又夏月に之有り。三才圖會に云、浮薔の一種、白花あり。然らば浮薔・水葱は同種にや。澤桔梗は蕹と爲さず。別種也。古歌多く水葱を詠ず。

季題解説　細水葱ともいふ。一年生草本で、春水中、水田などに生える。高さ五・六寸位、形は水葵に似て稍きやしやである。葉は尖つたハート形、柄長く數本叢生又は分岐し、柔かである。萬葉集の「醬酢に蒜つきかてゝ鯛もがも吾にな見せそ水葱のあつもの」の歌や新六帖に「春雨のふりみふらずみ袖ぬれて深田の畔にこなぎつむなり」等と詠まれてゐる通り、昔は春の小川や水田に出てこなぎの嫩葉を摘み、羹などにして賞味され、供御にも奉つたものゝやうであるが、今は食用にする人も、從つて之を摘む人もないやうで、せいぜい花を賞づる位のものである。花期は夏秋の頃である。

朝寢（あさね）

季題解説　春眠不覺曉といはれるくらゐで、春は寢心地のいゝものである。朝寢の最も心地よいのも春である。言葉からして、つひ俗に陷つてしまひ易い題であるから、實作にはそんな點を心しなければならぬ。〔參照〕春眠（シュンミン）　夏－晝寢（ひるね）

例句　朝寢

鶯に廣庭持ちて朝寢かな　濱人（ホトトギス）
勤行の母人人なる朝寢かな　天山（同）
塵取をうつ雨だれに朝寢かな　小提灯（同）
讀みさしの土佐日記ある朝寢かな　隆子（續ホトトギス）
鴨川の水音を聞く朝寢かな　逸節（同）
俳諧の朝寢好もし草の宿　夢筆（同）
天井に何か音して朝寢かな　耿陽（ホトトギス誌）

春眠（しゅんみん）　春の眠り（はるのねむり）

季題解説　春眠不覺曉などいふ詩句にもあるやうに、四季を通じて春の夜、または春曙の眠り心地のよさは誰も同じである。必しも夜の就床にのみ限らず、居眠りとか、假枕の丸寢なども詠まれていゝであらう。〔參照〕朝寢

アサネ 春の夢ハルノユメ

例句

春眠

手枕や春眠覺むる事勿れ　綠童（ホトトギス）
鬢掻くや春眠さめし眉重く　久女（同）
春眠やゆうべのまゝの筆硯　うしほ（同）
春眠や煙上げゐる煙草盆　久路（續ホトトギス）

春の夢（はるのゆめ）

季題解説 睡眠の趣味といふやうなものが沁々味はれるのは春以外にない。随つて夢を見るといふことの趣味も、やつぱり春のものに相違ない。その夢が若し悲しい夢だつたら、その悲しみに浸つて思ふ存分泣き明して見たい。樂しい夢だつたらいつまでも夢の中の人になつて醉つてゐたい、といふやうに、夢を樂しみ、夢を追ふ心持になれるのもやつぱり春なればこそである。羸弱の身を抱いて、倫敦の街に亞片を求めて歩いた夢の詩人フランシス・トムスンのやうな人こそ、まさしく春夢を樂しむ詩人と云ふべきであらう。〔参照〕春眠シュン

例句

春の夢

春の夢氣の違はぬがうらめしい　來山（續いま宮艸）
逢はぬのみ贓遠き別を春の夢　樗良（樗良發句集）
春の夢さめて隣のはなしかな　成美（成美家集）

春愁（しゅんしう）

季題解説 春の物思ひである。春といふ時節には、誰でも華やかな中に一種の哀愁を誘はれるといつたやうな氣持がする、それをいふのである。秋や冬などには知らない特別の愁思である。

例句

春愁

春愁や草を歩けば草靑く　月斗（同人）
男肥えて何春愁ぞ樂器彈く　清一郎（ホトトギス）
春愁や讀みても見たる草雙紙　迂公郎（同）
春愁やよりくる猫をかい抱き　默鳥（同）
春愁やこの身このまゝ旅ごころ　よりに（同）
春愁やからたちのとげやはらかき　正子（續ホトトギス）

春の宮（はるのみや）

[illegible] 【御傘】春宮坊の事也。東宮とも書く也。とうぐうと聲にいふ句は雜也。春の宮といふ句は春に成る也。

【滑稽雜談】　紹巴いろは式に云、春の宮は東宮の事也。式に春になるべきといへり。覺束なし。會席の作爲によるべし。（略）太子の正位を東にかまへて、其の宮と申し奉るを、春の宮と云ふ也。又楚辭幷びに神異經に青帝とて、春を領する造化の神舍と云ふ說も、又通ずべき歟。

【年浪草】　月令廣義に曰、春宮は一に青宮と曰ふ。（略）禮記に曰、春宮は太子東宮也。（略）夫木。吳竹の園よりうゑる春の宮かねても千代の色はみえにき　後京極。

種痘（しゆとう）　植疱瘡（うゑはうさう）

季題解説　痘瘡（疱瘡）を豫防するために行ふところのもので、ワクチン豫防接種の一つである。「種痘の種」即ちワクチンを痘苗と云ひ、人の痘瘡の膿胞内の液汁を何代も犢に植ゑ繼いで、最後の犢の皮膚に出來た水泡から採つた液である。種痘は法令で强制されてゐるが、第一期種痘は出生より翌年の六月までに行ひ、第二期種痘は數へ年十歲の時に行ふ。俳句の上で種痘を春としたのは、第二期種痘は多く學校醫の手によつて、一學期の初め頃に行はれる事實に基くものと思はれる。

例句

種痘
白粉の殘る腕に種痘かな　桃　崖（同人）
彌陀の前に種痘待ちゐる腕かな　禪寺洞（ホトトギス）
美しく血色見え來し種痘かな　秋櫻子（同）
かはる〲種痘に行きし船頭かな　けんじ（同）
金巡査椅子にひかへし種痘かな　迦　南（續ホトトギス）

湯治舟（たうぢぶね）

季題解説　別府温泉で、一家族或は數家族が、湯治期間中の食料品・世帶道具等を積み込んだ自分の持舟を波止場の中に繫留し、旅館につかずにその舟から金盥、手拭等を提げて陸に上り、共同温泉に浸つて湯治をする習がある。この舟を湯治舟といふ。春の別府港内に、百隻近くも湯治舟が舳を並べて繫つて居るところは、寔に長閑な景色である。

春の風邪（はるのかぜ）

季題解説　梅が咲いても餘寒が嚴しい。その頃には油斷をして風邪を引き易い。春といふ字が冠さつてゐると、冬の風邪と違つて何となく艶つぽく聞える。

參照　冬　風邪（せカ）

例句

春の風邪
春の風邪毛布累ねて病みこもる　金　童（ホトトギス）
洟かめば飯粒出たり春の風邪　盧　吼（同）

面白う笑うてをりぬ春の風邪　仲穂　（續ホトトギス）

雁瘡癒ゆ（がんがさい）

季題解説　雁瘡といふのは學名でなく、また精確な意味でこれに該當する皮膚病もない。しかし言葉の意味を考へて見ると、秋雁が來る頃に痒くなる瘡といふことに相違なく、濕疹の內の或る種類、及び痒疹が稍これに相當する。濕疹は皮膚病中では最も多い疾患の一つで、小兒に最も屢々來り、次に老人に多く、若年者壯年者には比較的に少い。不潔その他の皮膚の刺戟によつて來り、屢々遺傳黴毒によるものと誤解せられる。はじめ皮膚面が充血し腫脹し、次に小さい結節卽ち丘疹を生じ、この丘疹が水疱に變じ、水泡が破れてたゞれとなり、始終じく／＼してゐる。また顏や頭などでは結痂を作つたりする。通常非常に痒いものである。老人に來ることの多いのは、清潔を怠り勝ちであるのと、皮膚そのものが弱くなつてゐるのによるものである。濕疹全體としては汗の分泌の多い時期に多いのであるが、或る種類には秋から初冬にかけて增惡し、春になるとよくなるのがある。これが卽ち雁瘡に相當するもので、「雁瘡癒ゆ」が春とせられる所以である。痒疹の方は殆どすべての場合に小兒殊に二三歲の幼兒を冒すものである。

實作注意　「雁瘡癒ゆ」の季題でいかなるものを考へたらいゝかと云ふと、大人の場合には矢張濕疹を考へ、雁瘡なる名稱から想像せられるやうな、結痂を作る、じく／＼した、そして痒みのある吹出物として作つたらいゝと思ふ。そして痒疹といふ小兒特有の吹出物も、やはりこれに當ることを知ればよからうと思ふ。　**季題**　秋―雁瘡（がんがさ）

宗教

春季皇靈祭（しゆんきくわうれいさい）　皇靈祭（くわうれいさい）

[illegible] 三月二十一日又は二十二日、天皇、皇靈殿において御歴代の皇靈を親ら祀らせ給ふ宮中大祭の一である。この日は所謂春の彼岸の中日で、佛教各宗の寺院では彼岸法會を修し、民間では彼岸供養のとりやりをする。農家では種蒔の農事が行はれる。（[illegible]）秋→秋季皇靈祭[illegible]

神武天皇祭（じんむてんわうさい）　神武祭（じんむさい）

[illegible]【日次紀事】神武天皇御忌。和州畝傍山に陵あり。或は當月十一日を用ふと言ふ。（一）

註（一）三月七日の條に見えてゐる

[illegible] 神武天皇崩御の日たる四月三日をもつて神武天皇祭とする。天照大神が天孫瓊々杵尊を日向にお降しになつてから、彦火々出見尊、鸕鷀草葺不合尊と、御三代この國で我が國土を治められたが、神武天皇に至り、親しく東征の軍を起して大八洲平定のことを遂げさせられ、大和橿原の地に宮殿を營み給ひて、人皇第一代として我が日本帝國の基を肇め給ふた。天皇は紀元七十六年三月十一日、御壽一二七歳（又は一三七歳と傳ふ）をもつて崩ぜられた。御陵は大和畝傍山東北にある。明治四年に四月三日をもつて大祭日の一に指定あらせられた。

神武天皇祭には、宮中において天皇御親祭あり、御陵には勅使を遣はされ、各神社では遙拜式を行ふ。丁度各地から花のたよりの來る時分で、鄙も都も人の出盛る祭日である。

[illegible] 毎年四月三日宮中皇靈殿に於いて天皇親ら神武天皇の御神靈を祀り給ふ御祭儀なり。儀式執行に先ち、勅使を奈良縣高市郡畝傍町の畝傍山東北陵に差遣して幣帛を奉らしめ給ふ。當日皇靈殿に於いては早朝より御殿の裝飾をなし、朝御饌を供し奉る。時刻至りて御扉を開き神饌並びに御幣物を供し奉る。親王以下西の幄舎の床に着く。次に陛下賢所の綾綺殿に臨御し給ひ、御束帶御手水畢りて皇靈殿に進ませ給ふ。卽ち掌典長御先導申し上げ、侍從御裾・御劍・御笏を捧げて隨從し奉る。次いで陛下内陣に入らせ給ふ時、外陣に伺候する掌典二人左右より御幌を開く。陛下御拜の間着床の諸員皆起立す。御拜畢りて綾綺殿に入御し給ふ。次に皇后陛下・皇太子・皇太子妃兩殿下の御拜あり。此の間着床の諸員皆起立す。次に親王

以下の拜禮あり。畢りて神饌及び御幣物を撤し、御扉を閉づ。畢りて各〻退出す。午後より夕の御祭典あり、宮内の官員着床、次に祝詞を奏す。陛下再び綾綺殿に臨御、御直衣を着させ給ひ御拜在らせらる。此の間着床の諸員皆起立す、畢りて陛下入御し給ふ。次に雅樂師階下に進み、掌典賢木を人長に授け、此れより東遊を舞ふ。畢りて人長賢木を掌典に渡す、掌典之を女官に付して獻上せしむ。次に神饌を撤し、御扉を閉づ。畢りて各〻退出す。以上にて祭儀を終る。又此の日全國官國幣社以下各神社に於いては遙拜式を行ひ、諸官省以下各學校及び一般人民等は業を休みて以て敬意を表す。

神武天皇祭は、孝明天皇萬延元年三月十一日に御陵祭の事始り、勅使を御陵に參向せしめ、天皇清涼殿の東庭に於いて御遙拜あらせられしを以て嚆矢とす。その後中絕せしが、明治元年再興され、同五年十一月改曆の詔勅に依りて四月三日を定日とし、同四十一年皇室祭祀令制定せられてより大祭となり、爾來年中恆例の祭祀として今日に及べり。

祈年祭（きねんさい）

【出典及校註】【滑稽雜談】江次第頭書に曰、神祇令に云、仲春祈年祭は義解に謂へらく、祈は猶禱のごとし。歲災作（オコ）らず、時令順度ならしめんと欲し、（一）卽ち神祇官に於て之を祭る。故に祈年といふ也。周書に曰、祈年は豐年を求むる也。天武四年二月甲申、祈年祭之を始む。神祇式に曰、二月四日。（略）公事根源に曰、祈年祭、四日、大かた祈年の祭・月次兩度・新嘗會をば四箇の祭とて、國の大事とする也。（略）祈年祭と云ひて、年ごひの祭と讀み侍る也。

註（一）原本誤字あり、今改訂す。

春祭（はるまつり）

【語釋及解說】春季、各地方に行はれる諸神社の祭禮の總稱である。單に祭といへば夏の祭のことであるので、特に春の字を冠してこれを區別し、また秋の祭は秋の字を冠して別に扱ふ。【參照】夏 祭。

【例句】

春　祭

春祭弓射る里の慣ひかな　眠　郎（懸　葵）

面つけて戻り來し兒や春祭　了　吠（ホトトギス）

橿原祭（かしはらまつり）

【語釋及說明】大和三山の一である畝傍山の麓（奈良縣高市郡白橿村大字畝傍）

に鎮座したまふ官幣大社橿原神宮の祭典である。每年二月十一日、紀元節の日に執行される。神宮の祭神は神武天皇と媛蹈鞴五十鈴媛皇后である。明治二十三年、神武帝の皇居の跡を標せんために、京都御所の一部を移して造營したのである。神苑四萬餘坪、伊勢神宮につぐ森嚴宏大な神宮である。【[illegible]】人事・紀元節[illegible]

春日祭（かすがまつり）　申祭（さるまつり）

【[illegible]】

【御傘】春日祭、二月上申日也。十一月にあれ共、初の祭を正とする故に春也。

【日次紀事】此日（二初申日、南都春日大宮祭。大中納言の中、穢無き人を撰ばれ、上卿と爲す。前夜京を出でて、南都に赴く。夜に入りて奉幣の儀を勤めらる。左右の馬允神馬に疋を牽く。翌午の前に京に歸りて之を奏す。上卿往還の間、雨ふらざるを吉事と爲す。祭の前、春日社家、祭日の支干を南曹の辨に告ぐ。朔日より關白氏の長者、幷びに斯の事に預る諸家、門外に僧尼・重服の輩、門內に入る可からずの札を建つ。[illegible]同じく大原野春日祭、吉田春日社も、亦粗々この儀あり。

【滑稽雜談】公事根源に曰、（略）是も二月十一日に行はる。先づ未の日使たつ。近衞の中少將つとむ。よろづかもの祭のごとし。府の官人摺袴著て舞人つとむ。使無名門の前に參りて、事の由を奏す。舞人ものゝ音をいだす。藏人出で、祿のうちぎ一くだり給ふ。當日の曉内侍むかふ。藏人出し車奉る。上卿・辨亦けふに同じくむかふ。（略）春日の御祭とは、別宮祭にて冬也。御祭とは俗にいひならはせり。

圖（二）二月。

【[illegible]】奈良春日野の官幣大社春日神社の祭禮である。春日神社の祭神は所謂春日四所明神であつて、即ち武甕槌神・經津主神・天兒屋根命及び比賣神の四柱である。藤原氏の氏神であつて、藤原氏が代々皇室の外戚であつたがため、行幸御幸等の例も尠なからず、藤原氏上卿の參詣は甚だ盛んであつた。祭禮は昔は每年陰曆二月、十一月の

雨度、上申日に行はれ、伊勢神宮及び山城國一の宮賀茂神社に次いで最も盛大な祭禮であつた。應仁の亂中亂後、諸社の祭祀は悉く停止せられたにも拘はらず、この祭のみは決して止められることがなかつたといふ。今日は陽曆三月十三日が祭祀の定日となつてゐる。古の祭儀はまことに美々しいものであつた。先づ前儀として、數日前の齋女の河頭の祓がある。祭の當日は齋女、祭使等が參向し、列見、祓、著到殿の儀等を經た後、官幣及び中宮、東宮並びに藤原氏、諸官、諸家の使の幣を神前に奠へ、物忌がこれを神殿に納める。これより先、社頭にあつては、神祇官人が神庫を開いて鉾・劍・鏡・弓の四種の神寶を取出し、神殿の前に陳列する。これが祭儀中の重儀で、昔これによつて春日神の來臨を冀うた名殘である。それから獻饌の儀があり、また神馬を奉り、走馬・東遊・大和舞等を行ひ、上卿・辨・史等直會殿に着座、直會を受け、見參の儀あつて、賜祿の後社頭を退き、梨原に歸著する。梨原では終夜宴を張り、面縛の儀を行ふ。檢非違使の判官に命じ、假に定めた犯人を捕へ來らしめ、櫃中に賊物のあることを白狀せしめ、これを出して官人をして分捕せしめ、翌朝またこれを行ひ、また判官を馬から引き落し、衆人にこれを蹴蹈ましむる惡戲をなし、淀に至つて雷鳴陣を立て、近衞部の下部に配衣を著せて雷公と名け、春日明神の使と稱し、祭使たる藤氏の榮達を祝せしめた。これを還元の儀といふ。現今の儀式も昔と大差がない。

【例句】

春日祭　渡御先の鹿追うてゐる舍人かな　橙青（續ホトトギス）

【參觀】

毎年三月十三日奈良縣（大和國）奈良市高畑野町官幣大社春日神社に於いて行ふ祭なり。祭禮執行に先ち三日前に辰ノ日立榊式を行ふ、即ち春日山内の榊を採りて神前にて祓ひ、了りて之を一ノ鳥居に立つ。次の日巳日祓式と午日御酒式とを行ふ。此日より神職潔齋の爲め社務所に參籠す。祭禮の當日早朝より社殿を裝飾す。午前八時宮司以下の神職本殿に到り神饌を供し、祝詞を奏上し、神饌を撤し、神寶を奠じ、最後に御扉を開く（但し本社にては開く型のみにて開かずと云ふ）此の時獻する神饌を御扉開の神饌と稱す、次いで宮司一人神前に伺候し、禰宜以下の神職勅使を迎ふる爲め二ノ鳥居に下行し、鳥居の傍祓戸社に神饌を供し、祝詞を奏上し、勅使の修祓に備ふ。此の時勅使の一行八時半に上卿發遣の間に着き準備をなす、次に九時愈々齋館を出て、參進し、一ノ鳥居に出づ、此處にて奉行の列見あり、その參向の列次左の如し。

警部（騎馬）　走雜色　退紅（褐）　白丁　御幣櫃　白丁
警部（騎馬）　走雜色　退紅（褐）　御幣櫃白丁　白丁（具床）
衞士　白丁（笞）　口付　内藏寮官人（騎馬）　雜色　白丁（笠）　白丁（同馬
雜色　白丁（胡床）
馬部　馬部　馬部　馬部　馬部　口
樋）　馬部御馬馬部　馬部御馬馬部　馬部御馬馬部　馬部御馬馬部

付
右馬寮官人（騎馬）　調度掛　調度掛　白丁（傘）　白丁（胡床）　白丁（御馬捕）　口付　左馬
寮官人（騎馬）　調度掛　調度掛　白丁（傘）　白丁（胡床）　白丁（御馬捕）　走雑色　走雑色　口付　召使
（騎馬）　雑色　雑色　白丁（傘）　白丁（胡床）　舎人　舎人　上卿（騎馬）　居飼　居飼　馬副　馬副　馬副　馬副　随身　随身
随身　随身　雑色　雑色　白丁（傘）　白丁（胡床）　白丁（御馬捕）　舎人　舎人弁（騎馬）　居飼　雑色　雑色
雑色　雑色　白丁（傘）　白丁（胡床）　白丁（傘持）　警部（騎馬）　警部（騎馬）

以上九十人餘の行列恰も藤原時代の行裝を目前に見るが如く、上卿の黒袍を初とし色とりどりの裝束を着け粛々として進む。かくして一ノ鳥居より二ノ鳥居に着くや、上卿のみ一人鳥居内に入り、以下の諸員鳥居外にて同じく下馬す。時に神職等之を迎ふ。内藏寮官人・衞士等直ちに幣櫃を奉じて幣殿に入る。上卿・辨鳥居内にて胡床に着き淺沓に改めて祓戸前に進みて座に着く、禰宜結纒・人形・洗米等の祓物を土器に入れ折敷に載せて進め、大祓詞を讀む、次に上卿・辨禰宜の進むる大麻にて修祓し、社前の儀を終る。次いで着到殿の儀とて、參列する人々の名を記入する式を行ふ、終りて祭庭に進み慶賀門より參入し、四方の廻廊内に勅使の一行・神職等列立す。

祭庭の狀は、神職の位置より石階七八段下りし大杉の根元に四臺の神饌の棚を設け、之に種々の供物を片碗・片盤・耳土器等に盛りて載す、又傍に食薦・酒樽を置く、次いで宮司以下四名の神職食薦を執りて中門内に入る、次に上卿・辨大杉の下に進みて棚を持ち中門を入りて第一殿に供ふ、かくの如く勅使自ら神饌を獻進するは他に見ざる例なり。次に神職酒樽を舁ぎて第一殿と第二殿との間、第三殿と第四殿との間に立て、又缶を各殿毎に立つ、かくて神饌を供へ終れば宮司禰宜を從へて中門内に入り、先づ四殿の樽の濁酒を土抔に酌み、缶の淸酒を他の土抔に酌む。因に此の濁酒は、舊くは神社の酒殿にて釀し、之を一宿酒と稱へ、淸酒を社釀酒と稱へしが、今は濁酒を社釀酒と云ひ、淸酒は普通のものを用ふ。次に内藏寮の官人の取出せる幣物を宮司以下神職神前へ進る、此の時上卿幣殿の座に着きて祭文を奏す、宮司了るを待ちて冠に木綿蔓を懸け、上卿の座前に進み祭文を受け神前に納む。次いで地方官拜禮、次に左右馬寮官人の御馬牽廻あり、弓箭を持てる官人先に立ち各々馬部四人にて之を牽く。次に直会殿にて上卿・辨に饗饌の儀あり、時に幣殿の北方に當る林檎の庭にて和舞始まる。終りて見參の儀、賜祿の儀等あり。賜祿は上卿及び辨に祿を賜ふものにして今は眞綿を賜ふ、之を受くる場合は左肩に懸けて一拜し、悦びを示し、恰も舞ふが如き所作をなす。かくて上卿以下退下し、禰宜以下の神職之を二ノ鳥居に見送りて式を終る、時に午後一時頃なり。

春日祭は、社記に仁明天皇嘉祥三年九月初めて行はれしが如く記せども、三代實錄一天安二年十一月庚申日〇三の條に「停二平野春日等祭一焉」と見え、それ以前に行はれたるを知るべし。而して又同書、貞觀元年二月丙申日〇十の條に「春日祭如レ常」とあれば、舊くは二月・十一月の上申の日に行ふものにして本祭を一に申祭と稱するは之に依るものなり。然るに現今は三月十三日を以て定日となす。此の祭はその費用極めて莫大なるが爲め、藤原氏の衰頽せる足利時代には用途の便なく、殊に應仁の亂後は祭日を延引する等の不祥事を生じたり。然れども當時諸社の祭祀悉く停止せる中にありて、獨り此の祭のみは中絶することなく以て今日に至れり。

宇佐祭（うさまつり）

季事解説　豐前國宇佐町官幣大社宇佐神宮の御例祭で、三月十八日に行はれるものをいふ。宇佐の宮は千二三百年前から鎭座し給ひ、一の神殿應神天皇、二の神殿（中央）比賣大神、三の神殿神功皇后を齋き祀り、古來朝廷の崇敬厚く、伊勢大神宮と共に二所の宗廟と並び崇められ、歴代御即位の時や、天變國難の御時は奉幣使を遣はされた。その後、櫻町天皇の朝から六十年に一度奉幣せられるやうになつた。明治五年官幣大社に列せられ、現今は十年に一度づゝ奉幣の勅使が下向される。昔は寺領七十萬石、時に盛衰があつたが、全國八幡宮の宗廟として尊敬され給ふた。三殿とも所謂八幡造りの御屋根、金の樋、總丹塗の壯大な御宮で、昔ながらの森林につゝまれ、神々しい靈地である。孝謙天皇の神護景雲三年、和氣の清麻呂公が神勅を承けて、道鏡を斥けたことは餘りにも有名である。三月十八日の例祭には、知事が奉幣使として參向し、おごそかに祀りを行ふのであるが、土地の人々の話によると、この例祭には、宇佐の土地としては格別賑ふといふやうなことはなく、むしろ夏八月の御神幸祭の方が昔から有名でもあり、遠近數萬の參拜者で非常な賑ひを呈するのださうである。阿部みどり氏の「宇佐祭へ夜通し人やなく蛙」の句を例句としてゐる歳時記があるが、三月十八日の例祭は夜通し參拜するといふやうなことは少しもなく、これは八月の祭である、と土地の人は云ふてゐる。

山王祭（さんわうまつり）

日吉祭（ひよしまつり）　午（うま）の神事（しんじ）　未（ひつじ）の御供（ごくう）　猿（さる）の神供（じんく）

[illegible]　【滑稽雜談】中申日。（一）神社啓蒙に曰、日吉社、淡海國滋賀郡坂本邑に在り。祭る所の神七座、攝屬社十四座。大宮の大己貴命。二宮は國常立尊・神皇産靈尊。（略）公事根源に曰、此の社は松尾の社と同體なり。云々。（二）當代の祭禮、（略）先づ三月廿八日榊伐とて、叡山にて是を切りて、大津四ノ宮の拜殿に送る。此の榊を日吉祭の日、大津の驛より坂本へ送る。此の榊

に警られ、數百の松明、高張提灯に御道筋を照され給ひつゝ、八丁餘の急坂を下山せられるので、血を見ねば納まらぬといふ勇壯な行事である。翌十三日は宵宮の神事で、御輿入、獻茶祭、花渡式、未の御供獻備式等次々に行はれ、午後七時夕闇迫る頃、各所に篝が焚かれ、最も興味ある四社神輿出御の御儀がある　十四日は午前八時から西東兩本宮で官幣例祭が行はれ、供進使の參向などがある。桂奉幣、大榊還幸が濟んだ後、午後四時からいよ〳〵七社神輿出御の式が始まる。神職が本宮神輿前で東遊の歌を奏上し終ると、七基の神輿は西本宮、東本宮、宇佐宮、牛尾宮、白山宮、樹下宮、三宮の順に下坂本村の濱に著御、こゝから船に御して唐崎に神幸される。神輿が唐崎沖に著御になると、粟津の里（膳所町）から御供船を進め、粟津御供獻備が行はれる。終つて本宮船で打つ太鼓を合圖に、七社の神輿船は一齊に競漕を始める。時既に夜に入り、數百の燈火は湖上を照し、得も云はれぬ景趣を現出する。翌十五日は酉の神事で、これは大祭が無事に終つた御禮の儀式である。

尙、日吉神社の分靈奉齋神社は全國に約四千社もあるので、それ〴〵山王祭の行はれる向も多いことと思はれるが、中でも東京と飛彈高山の日枝神社山王祭は有名である。東京は祭日が六月十五日で夏祭になつてゐる。これは東京山王祭として本祭と區別すべきであらう。高山の山王祭は本社と同じく四月十四日に試樂祭、十五日に本樂祭が行はれ、十四日御旅所では夜祭がある　町内では山車曳、獅子舞、鶴頭樂等の催物があり、非常な賑ひを呈するが、十數臺の山車は殊に見事である　【參照】山王祭榊切（サカキキリ）

【參考】毎年陰曆四月中申の日、近江國滋賀郡坂本村官幣大社日吉神社に於いて行ふ祭禮なり。世に之を山王祭と稱す。又十一月中申の日に行ふ祭を臨時祭と稱す。山王祭は執行に先ち、四月廿日、山門座主宮より奏聞を爲し、勅許ありて其の旨を執行代へ傳達すると共に關係者一同へ下知狀を送る。午日に攝社八王子祭を行ふ。是を午の神事と云ふ。卽ち二宮・八王子・三宮及び十禪師等の七神輿大宮の拜殿へ渡御の儀式にして、警固の公人鎧に身をかため、大刀を提げて神輿の先轅を持つ、是を駕輿丁の表張と云ふ。此の時神前にて獅子舞、田樂あり。後ち神輿を拜殿より舁下し、列を作りて大宮の拜殿に入る、是を宵宮おとしと云ふ。未刻座主の宮より幣使御幣七本をもつて大宮に參向し、幣を七社の神輿に移して祝詞を奏上す。次に神馬を牽く、此時神輿に桂の枝を莊（カザ）るなり。次に大津四宮の大榊を神人供奉し、列をなして上坂本の榊の宮に至り、更に大宮に移す。次に三院の棧敷前にて獅子舞田樂あり。是より三院別當を初め上坂本濱分の使者、或は鎧を着け衣をまとふ者三百人、之に七社の駕輿丁七百人を加へて、七社の神輿を春日の岡へ舁出す。申刻神輿辛崎へ渡幸あり。神馬七匹、七社の御鉾之に續く、大宮の鉾には猿田彥の面を掛く。社家二人衣冠騎馬にて供奉す。神輿七本柳に到り御船に乘奉る、此時速なるを勝とし、艤船

に掛ろや香や引き乘せ、船人數十人にて沖へ漕出す。辛崎より五丁餘り南方にて船を列し神酒を供へ、奉幣祝詞あり。是の時御供船の僧、神輿船に向ひて御膳を供へ、「次第に之を海へ流す。音樂あり。其屋形の上に猿に扮裝したる者七人、面を被りて遊戯す、猿は山王の使者に因りてなり。其後、神輿船より太鼓を打出し、愈々還御となつて終了す。此の祭禮は、日吉山王貞應二年十一月二日記に據れば、延暦十年四月より始めて行はれたるなり。然るに國史には其の證なく、後朱雀天皇長久四年六月に、始めて内藏寮の例幣に預りたること見え、其の後續史愚抄の後陽成天皇の條に「天正十九年四月十三日、戊申、日吉祭如レ形、爲二社家一行レ之、自二元龜元年一所レ廢也」とありて、元龜二年に織田信長が、延暦寺僧徒の專横を抑制せんと欲して、比叡山を燒燬せしより、自ら廢絶せしを、是歳に至りて再興したるなり。爾來今日に及ぶまで退轉あることなし。

山王祭榊伐（さんわうまつりさかきやり）　榊取（さかきとり）　榊入（さかきいり）

【季題解説】滋賀縣坂本官幣大社日吉神社の祭儀は、山王祭と稱して古來甚だ有名であるが、榊伐はこの時行はれる社神の一である。即ち四月一日頃、祭儀に用ひる大榊を境内の山奥から伐出すが、これを榊伐といふのである。四月三日（もと陰暦四月上亥の日）この榊に神靈を乘り移らせる神事を行ひ、夜に入つて、大津四ノ宮町天孫神社からこの榊を舟でお迎へに來る。これを「榊取」といふ。この榊は四月十四日山王祭の當日、再び天孫神社から日吉神社へ奉還される。これを「榊入」といふのである。〔季圖〕

山王祭（サンノウマツリ）

龍田祭（たつたまつり）　龍田風の神祭（たつたかぜのかみまつり）　瀧祭（たきまつり）

【季題解説】四月四日、奈良縣生駒郡三郷村立野鎭座、官幣大社龍田神社の例大祭をいふのである。祭神は天御柱命（志那都比古神）、國御柱命（志那津比賣神）の二柱で、風を司る神である。龍田祭は龍田風の神祭ともいひ、四月四日及び七月四日の兩度行はれたが、現今では七月四日は別に風鎭祭（かぜしづめのまつり、又はふうちんさい）と名づけて、六月二十八日から引續き私祭として行はれるやうになつた。例大祭は官祭で幣帛供進使の參向、巫人の神樂などがある。また土地の人はこの祭を瀧祭と唱へて、龍田川岩瀬の傍りで魚（ざこ、またはねごといふ）を捕り、神に獻る風習がある。

松尾祭御出（まつをまつりおいで）　松尾神幸祭（まつをしんかうさい）

【古書抜萃】【日次紀事】此の月（二）第二の卯日、松尾祭の御出。酉の日、七條御旅所

に能有り、是を七夜能と謂ふ。

【滑稽雜談】是又祭は四月なれば、御旅も夏なり。此の神の神輿七基にて、旅所もあまた所侍る。就中西七條の旅所を第一とするにや。御出より七日にあたる酉日、此所にて法樂の能をつとむ。神官・社人爰に來て拜見をなし、神輿二基へ神供を獻じて、幣をさゝげ奉るなり。總て神の御出と申す詞を考ふるに、古語にて侍る也。大神宮神事供奉記に曰、向ふの山へ御出に成り奉る。云々。是を據とするか。松尾の神緣四月部に註す。(二)此の御旅所七日開の能は三月也。四月にかゝる事なし。第二の卯廿四日にありても晦日也。廿五日に有るをば用ひざるなり。

註 (一) 三月。(二) 陰曆四月、夏の部參照。

季題解說 京都市右京區官幣大社松尾神社の神幸祭は四月下卯の日であつて、俗に松尾お出祭といふ。神幸祭に對する還幸祭は五月上酉の日であるので、俗に、うか〳〵とお出、とつとゝお還りといつてゐる。神社の祭神は大山咋神と市杵島姬命の二柱で、古事記に既に「葛野の松尾に座す」とある如く、上古から大山咋神は松尾山に鎭座ましましたのである。大寶元年、秦忌寸都理が勅命を奉じて現在の所に社殿を創立したので、昭和八年を去る千二百三十二年前である。桓武天皇平安奠都の際、賀茂の神と相對して皇城鎭護の神社とせられた。神は酒の神である。神輿七基、桂川の舟渡御が見物である。壹基は京極川勝寺三宮神社へ、壹基は京極郡の衣手神社へ、五基は西七條御旅所に渡御になり、翌五月還幸祭までこゝに駐輦されるのである。供奉の人々は冠等に葵と桂をつける。なほ還幸祭の時は舟渡御はなく、桂の橋を渡つて還御なるのである。昔は三月下卯、四月上酉であつた。

稻荷祭御出(いなりまつりおいで)

稻荷のお出　稻荷神幸祭

古書校註

【日次紀事】第二午の日、稻荷祭の御出。新御供は社家毛利氏調進す。此の日七條高瀨橋の東に豫め大松炬を建つ。土人傍に在りて、神輿の來るを見れば、則ち火を點ず。神輿五社、本山(一)を出でて、大和大路より七條通を歷て、九條の御旅所に入る。其の間、七條通高瀨橋の東に豫め大松炬を建つ。土人傍に在りて、神輿の還幸を待ち、日暮に及べば則ち火を點じて、之を送る。社家幷びに氏子供奉す。御旅の間、四月第二の卯日に至る。其の中、諸人群集す。凡そ旅所の散錢・散米は、田中釆女幷びに生島右京之を受納す。此の二人はこの邊の土地の主也。

【滑稽雜談】稻荷祭は四月上卯日なれば、御旅と云ふも夏の部なるべし。御出は三月なれば、春の部に註せり。(略)神輿御旅所にいます事二十日也。此の内一基の賽錢を、北野大將軍の社家是を領す。餘の四社は旅所の

神人是を守らずとも稱して、二十日禰宜と申す也。

【年浪草】　此の神二の午の日御出、三の卯の日還幸あり。故に世俗の諺に云、うま〳〵と御出、うか〳〵と御歸と云ふ。

註　（一）稻荷山。

【季題解説】　京都市伏見區深草の官幣大社稻荷神社の神幸祭は、四月末の午日（もとは陰曆三月末の午の日）に行はれる。これを稻荷お出祭といふ。還幸祭は五月上卯の日（もと四月上卯日）で、俗にうまうまとお出、うかうかとお還りといふ。祭神は倉稻魂神（宇迦之御魂神、宇迦之賣、宇賀御魂神とも書く）、猿田彦神、大宮女神である。和銅四年秦伊呂俱の創建、延喜式に名神大社に列し、天慶三年正一位に進められた。それで官幣大社稻荷神社といふより、正一位稻荷大明神といふ方が名高い。日本一の繁昌神で、賽錢の上り高は他にならぶものがない。倉稻魂神は須佐之男命の女、大年神の妹で、母は大市比賣（一說に伊裝諾尊の女、大國御魂神の子ともいふ）で、即ち女神である。一說には保倉神または豐受比賣神と同體との說もある。稻荷祭ははじめ、秦氏の一族が祝禰宜となつて擧行してきたが、平安朝から面目一新、年を經るとともに盛大になつた。安永年間速水恒幸が改革し、一時は滑稽な行列となつたのを非常に眞面目なものに改めた。今日の行列は本社を出御、本町を北へ、七條を西へ、大宮を南へ、九條を油小路へ、九條油小路の御旅所に入る。この日から還幸祭までを御旅中といひ、この附近一帶雜閙を呈する。この行列が七條大橋を渡御の時、七條大橋の松明殿では賀茂磧で大篝を焚いたが、今はこのことがない。この祭の五基の神輿は洛中は勿論、日本でも並ぶものもない立派なもので、駕輿丁三百人を一基に要するといふ。近年はその重みに堪へず特別な車體を設け、その車體に神輿を取りつけてワツサワツサと舁いでゆくのである。

【參照】　初午

【參考】　毎年四月第二の午の日、京都府（山城國）紀伊郡深草町稲稻、官幣大社稻荷神社に於いて行ふ祭なり。古くは三月中の午の日に行ひたり。その儀、先づ當日の朝、社司神祇伯に到りて勅裁の綸旨を請く。午刻に及びて神供をなし、五基の神輿（上社・中社・下社・田中社・四大神是なり）を舁出して神前に並ぶ。次に社司の祝詞ありて神璽を各神輿に納め、田中社の神輿には假面を袋に納めて之を飾る。是より御出と稱して神幸の儀あり。之に奉仕する駕輿丁は、五社の敷地の五箇村より勤むと云ふ。その道筋は、伏見街道を北へ出で、七條通・堀川を經て、九條の御旅所に到るものにして、その途次神輿賀茂川橋通過の時、松明殿と稱する神社にて大炬火を焚くを例とす。斯くて渡御の後ち、神寶は本宮に歸り、神輿は四月中卯日に至るまで御旅所に留り座す。其の間諸人の參詣夥しく、神樂の音絕間なし。沿道には見世物軒を陳ね、或は茶店を構へて行客を招き、酔を勸むる等、その殷賑眞に言語に絕すと云ふ。斯くて四月中の卯の日（今は五月第二の卯の日を用ふ）

に至れば、辰刻に本宮より社司各々騎馬にて神器を具して御旅所に到り、五基の神輿に社移しの祝詞を奏す。次いで巳刻に及びて各々御旅所を發して東寺に到り、此處にて寺僧より奉幣の儀ありて、直ちに大宮通を北へ、七條・松原・寺町・五條橋を經て伏見街道大佛前に到り、暫時休息し、夫より本社に還幸す。

此の稻荷祭は既に平安時代より行はれたるが如く、古き繪卷物の內に記されたり。然るに應仁年中一時中絶し、其の後は纔に神輿の渡御あるのみにて、而も散錢の落たるを拾んとする乞食の群、多數附從ふが故に、俗に乞食祭などの惡名を生じて衰微するに至りしが、安永年中、速水恒幸と云ふ者、深く之を歎じ、聽て上記の如き盛大なる祭典を復興せりと云ふ。然るに後世に及び祭典中種々の支障を來し、往時の如き神幸の途次に於ける松明殿の大炬火も焚かれず、今日に至りては遂に昔時の盛大なる祭儀を見る事能はず。

八幡初卯神樂（やはたはつうのかぐら）

古書校註

【滑稽雜談】社家說（一）に云、二月初卯の神樂は、宇多帝の御宇、敦實親王始めて行ひ給ひ、其の作法のおぼえ、內侍所の神樂と同じ。八幡の神樂には、人長（二）の枡拾ひといふ事侍る。樂人神前の敷石の上に三尋木を敷き、其の上に薦を敷きて座とす。笛・ひちりき・和琴・笏拍子にて神樂をうたふ。早韓神・其駒（三）にて、人長の翁あり。巫女人長の跡につきて鈴を振る。神樂をはりて行道あり。山神樂には、堂上方を諸翁の役者とす。八幡には其の儀なし。總じて八幡に卯の日を用ふることは、貞觀元年己卯、初めて男山へ遷座ありし故にや。然れども此のゆゑを以て、卯の日を用ふるといふ事、社記たしかならず。

註（一）石淸水八幡社。（二）神樂の舞人。（三）神樂の曲名。

初午（はつうま）

午祭（うままつり）　初午詣（はつうままうで）　福參（ふくまゐり）　一の午（いちのうま）　稻荷詣（いなりまうで）　蟲の鈴（むしのすず）　御簾の錢（みすのぜに）　お山廻り（おやまめぐり）

古書校註

【日次紀事】初巳午の日、稻荷社詣。俗に初午詣と稱す。又福參と謂ふ。（略）今日農民の參詣特に多く、門前の家々、百穀の種幷びに雜菜の種を賣り、又大小の陶器を賣る。其の大なる者を轉法と謂ふ。（略）其の小なる者を都保々々（ツボツボ）と謂ふ。（略）參詣の男女之を買ふ。（略）凡そ倖參の男女、神前に投ずる所の散錢、偶々簾間に留るあれば、則ち其の人福を得ると爲し、再び其の錢を請得て、家珍と爲す。

【[illegible]】　紀貫之集第一に云、延喜六年、月次の屏風に、二月初午いなり詣したる所、獨のみ我こえなくにいなり山春の霞の立ちかくすらん。此神へは七度詣る例あり。拾遺集に、瀧の水かへりてすまばいなりやま七日のぼりししるしと思はむ。(一)枕草子にも七度と侍る。

眞如堂初午詣

神社便覽(二)に曰、洛北今出川邊に寺有り、眞如堂と號す。今世東山に移す。此の寺の縁起は十夜の下に註す。此の寺一宇あり。辨財天白狐に跨るの像を安して、稲荷と名つく。毎年二月初午の日を以て、男女貴卑、集を爲す也。(註・當世猶此の像をあがむ。二月初巳午の日開帳にて、參詣多し。)

【年浪草】神社啓蒙(三)に曰、稲荷の社は山城の國紀伊の郡に在り。京城を去ること東南一里許り、祭る所の神三座、下の社は大山祇[illegible]中の社は倉稲魂、上の社は上祖神。云々。元正帝の御宇、當社影向の日、偶二月初午の日なり。故に今に至りて此の日を用ふ。[illegible]雍州府志に曰、當社の出現は和銅四年二月九日也。此の義に從ひて、長暦を以て之を推する時、其の日偶初午の日に當る。然れども今は九日を用ひず、初午の日を用ふ。故に俗初午詣と稱し、又福參と謂ふ。云々。今諸國初午の日を用ひて、稲荷を祭る者、之に據る。

【栞草】武江にても此の日王子・妻戀・三圍・眞崎等の社を始とし、武家・市中とも鎭守の稲荷を祀り、灯燭をかゝげ鼓吹し舞ふ。近くては雲間の霹靂(四)の如く、遠くては蒼海の波濤に似たり。江戸の賑はひ耳目を驚かすに堪へたり。

【東都歳事記】千社參りと號して、稲荷千社へ詣るもの、小き紙に己が名所を記したる札をはりてしるしとす。此の族殊に多し　何れも中人以下の態なり。(略)二午・三午、古例により、又は初午の日さはる事あれば、今日いなり祭を行ふ所あり。尤も武家に多く、町には大かた初午に執り行ふなり。

註　(一)原本には「稲荷のほくらに、女の手にて書き付けて侍りける」と詞書が見えてゐる。讀人しらず(二)白井宗因の著(三)同じ人の著　寛文十年刊(四)急な雷鳴

【[illegible]】　俳句の方で初の文字を冠したものは概して正月となつてゐる。十二支でも初子、初甲子、初寅、初卯、初巳等皆正月となつてゐる。しかるに初午のみは二月上の午の日を稱してゐる。昔は陰暦でも矢張り二月であつた。この日、各地稲荷神社は小祠に至るまで、幟を立て、太鼓を打ち、祭典を行ふ。諸人前日の巳の日から午にかけて多く參詣する。初午を二月に行ふのは、稲荷神社の本神ともいふべき京都稲荷神社の祭神倉稲魂命は、天明天皇和銅四年二月十一日、京都本山の南端稲荷山の三峰に垂跡し給うたので、神の出現の紀念日が丁度二月上の午の日に相當するといふところから、二月に初午を行ふのである。初午は各地の稲荷、王子、妻戀、三圍、信田、瓢箪山等で行はれるが、特に本神ともいふべき京都市伏

見區稻荷神社では、最も盛大に行はれる。午の日、午前十時頃から、宮司以下の神官によつて神前で祭典があり、詣人に驗の杉を授與する。昔は詣人が稻荷山の神杉の枝を折つて家苞としたが、江戸末期に廢つたのを近年神社で再興し、授與するやうになつたのである。沿道や境内の出し店等數百軒の店では、土細工の布袋、狐、鈴、西行、角力取、遊治郎、娼婦、土藏、積米、柚轉法、玉の落し箱等の稻荷人形を賣つてゐる。特に布袋は家家で毎年小さいのから一個づゝ買うて荒神棚に供へ、毎年大きいのを順々に供へる。柚轉法は柚の恰好をした納器で、子供は煎豆、霰餅などの入物として弄ぶ。攝津國轉法の海岸から製出したのが始まりで、かくいふのださうである。單に轉法とだけもいふが、柚子の形のが多いので柚轉法といふ。近來は酒樽等の形のが多い。單につぼともいふ。諸物を入れるからであらう。また鈴は果樹に掛けて置くと害蟲を除くといはれ、これを蟲の鈴といふ。この日參詣の人が賽錢を投げてそれが神前の御簾の目に留ると、福があるといつてその賽錢を乞ひ受けて歸つたが、今は神前も網張となり、そのことも廢れた。京都の市民は昔はこの日、油揚と菜の汁を喰つたが、今は畠菜の辛子和を喰ふ。本殿の後方稻荷山には數千の攝社末社眷族があつて、初午の前日、巳の日から徹夜午の日にかけて、一里餘のお山廻りをする人で混雜する。お山廻りは毎月の巳、午の日も相當の參詣者があるが、初午の時は特に多く、深草青年團か出て警固をする程である。このお山廻りを單にお山をするといつてゐる。このお山の、一番高い峯が三の峰で、もと本社はその頂上にあつたか、永享十年、今の山麓に鎮座なつたのである。初午に參詣出來なかつた人は次の午に參詣する。これを二の午といふ。その月に尙午の日ある時は三の午といふ。〔季〕稻荷祭御出（イナリノマツリオイデ）

二の午（ニノウマ）

例句

初午　はつうまに狐のそりし頭哉　芭蕉（末若葉）

初午

いの字より習ひそめてや稲荷山　其角（五元集拾遺）
金冊や冬青にさしても稲荷山　同（五元集）
はつ午のみやこをさしてきつね哉　北枝（北枝發句集）
爰に露初午道の小篠原　支考（蓮二吟集）
直奏の神は初午さしもぐさ　同（同）
初午や妻の影ふむ素浪人　沾徳（俳諧五子稿）
はつ午やあたりの乳母は夕月夜　同（同）
初午やその家／＼の袖だたみ　蕪村（日發句集）
初午や物種賣に日の當る　同（蕪村遺稿）
はつ午や鳥羽四塚の鷄の聲　同（五車反古）
初午や羽織の紐をワすれ草　同（落日庵句集）
はつ午やものの間初る一の橋　太祇（太祇句選）
初午や狐つくねしあまり土　同（同）
初むまや足踏れたる申分　召波（春泥發句集）
初午や去來の繪馬は古狐　也有（蘿葉集）
はつ午に初鶯の寒さなし　同（同）
初午や柳はみどり小豆めし　同（同）
初午や官位に化たる庄屋殿　同（同）
初午や太鼓に花をいそがせる　同（蘿の落葉）
初午や七ツの年のくぐり道　白雄（白雄句集）
はつ午や假そめゆけば七ところ　同（同）
初午の日和は梅に柳かな　同（同）
はつ午や小鷹をつかむ舟上り　同（同）
はつ午や梅見ぬ年の梅を見に　同（同）
初午に疱瘡かろき世なみ哉　同（同）
花の世を無官の狐啼にけり　一茶（おらが春）
初午や鍵をくはえて御戸開　野坡（類題發句集）
初午や和銅の錢の稀に今　存義（新選）
初午やけふは酒賣る寺の門　沾峩（吐屑庵句集）
初午に鶯春亭の行燈かな　子規（子規句集）
初午の森は小さし田の向ふ　其村（新俳句）
初午や狐の穴に灯のともる　墨水（春夏秋冬）
初午の幟立てたり麥畑　井村（同）
初午や皆お泣きたる辛子和　車春（同人）
かきよせて箕にとる賽錢や一の午　泥中（ホトトギス）
初午や踏み固まりし藪徑　寸七翁（同）
賽錢に敷ける毛布や一の午　春野人（同）
初午や運の狐に人だかり　豐水（同）

初午の太鼓たたいて遊ぶなり　たけし（同）
初午の伏見の藪の往來かな　旭川（同）
積薪に行燈かけて午祭　本目子（同）
初午や婢どもより供物　たけし（續ホトトギス）
初午や焚火してゐる稻荷驛　春雷（同）
初午や實にくさ〳〵の供物　水竹居（同）
藪中に黃色な旗や午祭　青邨（同）
神主の肴さげたり一の午　虛子（句集虛子）

【參考】毎年二月初午の日に全國の稻荷神社に於いて行ふ祭なり。初午とは初午祭の略稱にして、一に午祭と云ひ、或は稻荷祭とも稱す。此の日、京都府（山城國）紀伊郡深草町稻荷に坐す官幣大社稻荷神社に於ける祭典は、最も殷賑を極め、其の沿道に於いては、穀物及び野菜の種子を販賣し、或は田炮（テンパウ）（一に傳法に作る）と稱する土燒の茶碗「つぼ〳〵」と稱する燒物及び稻荷人形と稱する土細工の人形・布袋・狐等を賣る。又神社・寺院等の境内に安置せる小祠に於いては、神主を招きて神樂を奏し、幣帛を捧げて之を祭り、或は邸内に奉祀せる祠にては、神前に供物・燈火をささげ、旗幟を樹て、飾物を造り、その前に兒童を集めて之に菓子を與へ、一日中大鼓を敲かしむる等、廣く全國的に行ふ祭なり。又此の日、人々初午詣・稻荷詣或は福參と稱し、神社に參詣して、家内安全、五穀豐饒の祈願を爲し、京都地方にては上記の種子・燒物及び土細工等を購ひて歸ると云ふ。此の稻荷詣は、既に、平安時代より鎌倉時代にかけては、平日より盛に行はれたるものにして、當時の日錄に散見する所なり。而して大鏡に八「きさらぎの二日はつむまといへど、甲午最吉は、つねよりも世こぞりていなりまうでにのゝしりしかば」云々と見えたるによれば、初午の日は平日よりも特に參詣人多かりしことを知るべし。かくの如く初午詣は、古くより存する行事なれども、其の起原を詳にせず、ただ僅かに諸國圖會年中行事大成二月二初午稻荷參の條に「山城國紀伊郡飯成山にあり○中夫當社の神、始三峰に垂跡し給ふ時、二月初午の日たるによつて、今に至り、例年是日を以て、初午詣亦巳午ノ市とも稱し」云々と見えたるのみなり。

又稻荷祭の最も盛なりしは、江戸時代にして、當時は將軍家を初め、武家及び町人に至るまで、皆之を尊崇せり。即ち德川大奧にては、江戸城内吹上の苑山里の庭に、二代將軍秀忠、日光より奉遷せる吾妻稻荷を祀り、武家は屋敷毎に鎭守の社を設け、町人は市中の社に參詣し、又劇場にては初午狂言を行ふ等、寧ろ現今の遠く及ばざるものありき。

即ち德川大奧にては、毎年初午の日に祭典を執行し、赤飯・菓子等を供へ、年寄代參するを例とせり。御目見以上は初午の祝儀を陳べ、三家・三卿其の他家門の姬君よりは、御供餠・鮮魚・目錄を供ふ　又神慮を慰め、兼て御

臺所の慰に供へんために、狂言師を召し、又お末の女中より達藝の嗜ある者を選びて狂言を催し、御目見以上・以下一同に拜觀を許すを例とす。演藝所は對面所庭先に舞臺を設け、紅白の幕を以て之を圍む、先づ最初に、祝儀鶴龜の舞あり、次に勸進帳・三河萬歲・大津繪の滑稽味を有する振事等あり、尋いで女中共の新趣向の茶番、並にお末の相撲等ありて、此の日の催物を終り、最後に褒賞の物品を賜りて、各〻部屋に引上ぐる習なり。

又江戶町内の祭には、前日より繪馬賣・大鼓賣等、市中を往行して賑ひ、當日は各神社の境内に、地口行燈を連ね、之に川柳・狂歌・滑稽畫等を書きて、參詣人をしてその頤を解かしむ。殊に有名なるは王子稻荷にして、同社は關東稻荷の總司社たるを以て、祭禮最も壯大にして、神輿の渡御及び行列には、德川將軍寄進の古武器を使用し、その扮裝極めて古雅なりと云ふ。當時の參詣人は千社參りとて、各〻稻荷へ一々納札を行ひ、又繪馬及び神田紺屋町の小宮島居を製する店より島居を購ひて、之を奉納する風ありき。又神社にても或は黑札と稱し狐惑を避る札を出し、或は感得の寶珠を拜せしめ、又神應湯とて疱瘡の神藥を施す等、特殊の行事をも加ふるに至れり。

又劇場にては、此の日晝の狂言を終りてより、芝居守護の稻荷明神を祀り、鉦・大鼓にて舞臺を囃し立て、一座の役者、揃ひの衣裳を著け、舞臺に現れて御千度を打ち、次に踊り狂言を催す。之を初午狂言と稱し、毎年の例となす等、江戶時代の稻荷祭は單に祭禮のみに止まらず、當時の世相たる町人階級の劫興に依りて生せる稻荷信仰と結合して特殊行事をも併行せるを以て、祭禮の繁華はその極點に到達するに至れり。

狐に關する記事は、既に日本紀・續日本紀等に見え、之を祥瑞として取扱ひ、それ以後の諸書には、怪貴を生む靈妙なるものとして記されたり。此の見解は、轉て、狐が神靈を有するものとの信仰を生じ、此處に神社の使はしめとして、尊崇せらるゝに至れり。而して狐と稻荷との結合は、大殿祭の祝詞に見ゆる、屋船豐宇氣姬命は、俗に宇賀能美多麻(倉稻魂)と稱し、稻の神にして同時に稻荷の祭神として祀らるゝが、此の神の別名を、御食津とも稱する所より、之に同音の漢字を宛て、三狐神と記し、更に之を狐の神なりと誤りしものなり。現今に於ける稻荷祭神は、全く狐と一體に考へられ、五穀の祭神たる本義を忘却して、社殿の内外、境内の構造の如きは、著しく此の傾向を現はし、殊に供物に至りては最も此の意を如實に物語るものゝ如し。

二の午（にのうま）

季題解說　二の午（にのうま）　二月第二の午の日である。京都市伏見區の稻荷神社において、初

午に準じて祭禮が行はれる。その賑かさは初午と大差がない。祭神が農に縁故深い神であるので、參道には物種子を賣り、農家の參詣が多い。また土人形の狐や鈴など賣ることも、初午の時と同樣である。由來初午に詣でなかつたものが二の午に詣でるといふけれども、信心家は二度ともに、三の午があればそれへも詣でる。伏見の二月は節分・初午・二の午と參詣者が群をなして雜沓を極める。二の午は伏見稻荷に限らず、全國大小の稻荷社においても同樣行はれる。〔參照〕初午（ハツウマ）

例句

二の午

一の午二の午詣り重ねけり　　せん女（ホトトギス）

二の午や幟の外に何もなし　　つる女（同）

本妙寺詣（ほんめうじまうで）

古書抄註

【栞草】初午の日。（江州三上山の邊に舊跡あり。今も二月初午詣あり。此の本妙寺、山門に屬して天台宗也。織田家の兵火にかゝりて、山門一旦亡滅の時、江州邊の末寺も共に同祿す。これも又其の一寺なるべし。相傳ふ、近江の國野須郡、百足山本明寺、本尊馬頭觀音也。今舊跡三上山の中に有り。堂宇僅に二間四面。里俗の說に、本尊は俵秀鄕が守り本尊也と。御長一尺ばかり。毎年二月初午開帳有り。鰐口の銘に、百足山本明寺と有り。其の麓の平林に三上明神の社有り。是を以て思ふに、本明寺觀音は三上明神の本地佛なりしにや。堂前に三十三間の矢場あり。初午の日、今に至つて弓矢莊嚴とし、里民も弓を商ふ。參詣の人これを買ひて奉納す。本尊平日は秘佛にして、初午の日或は三十三年を開帳の期とす。當日初午の外は、北さくら南さくら村の百姓四十人ばかり、講を結びて、一村より六人づつ各々十二人を年頭とし、萬事を支配す。本尊、南村にゐます時は、北村より封を付け、北村にゐます時は、南村より封を付けて、互に尊敬の意を示すと也。初午の日、節分の豆と十二銅を捧げて、諸人祈願すと云ふ。

註　○本條の解說は滑稽雜談に載せる所を簡略にしたものである。但し滑稽雜談には本明寺と書く。

靖國祭（やすくにまつり）　招魂祭（せうこんさい）

季節解說　四月三十日、東京麴町區富士見町鎭座靖國神社の春季大祭をいふのである。靖國神社は明治二年、明治天皇が「忠魂を慰むる爲に神社を建てて永く祭祀せむ益忠節を推でよ」との叡慮によつて創建せられたものである。祭神は鳥羽、伏見役以來、日清、日露、世界大戰その他の戰役に戰歿した護國の英靈十二萬四千六百五十二柱（昭和七年四月現在）を合祀

せられたものである。初め招魂社と云つてゐたが、明治十二年六月四日靖國神社と改め、別格官幣社に列せられた。祭事は大祭の前日が例祭祓、翌五月一日が直會で三日間行はれる 大祭の日は勅使の御參向、陸海軍人、遺族、各學校、少年團等の團體參拜がある。時恰も陽春で、境内には八重櫻が爛漫と咲き、紅白の幔幕を張り、夜は篝火が焚かれ、春日燈籠や雪洞が澤山灯り、その間を白丁が往來してゐたりして神々しい。大前には各宮家や、大臣その他の奉獻品が山のやうに積まれ、賽錢は階段を埋むるばかりである。陸軍で角力・能その他奉納の催がある。また晝夜花火が揚り、殊に夜はこれを見物する人で九段坂は一杯である。尚一の鳥居を這入ると、兩側には曲藝・拳鬪・柔道・劍舞・舞踊等の興行物や露店なども出て、參詣者が雜沓を極める。

北野菜種御供(きたのなたねごく)

、梅花御供(ばいくわごく) 梅花祭(ばいくわさい) 天神御忌(てんじんおんき)

古書校註

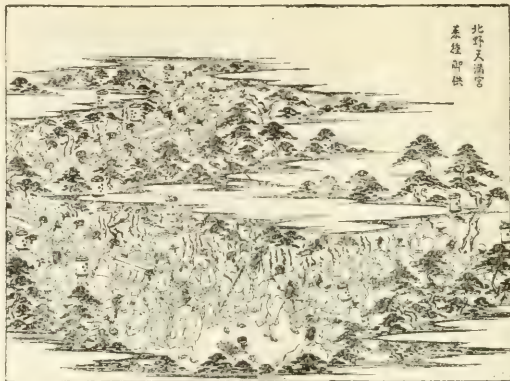
【日次紀事】 禁中聖廟法樂、和歌御會あり。六月も亦然り。今夜、西の京の御供田を預る家、大小の御供を北野社に獻ず。宮司老少相向ひ並び立ち、幣殿より神前階下に至る。手毎に之を傳ふ。宮司一老、巫女文子と與に、各々直に之を取りて神前に供す。是を手供と謂ふ。又轉供と稱し、或は菜種の御供と號す。供物の上に黄菜花を挿す。故に爾云ふ。或は歲に依りて、菜の花未だ開かざれば則ち梅花を挿す。

【滑稽雜談】 心敬僧都連俳に志深く、北野聖廟にて連歌を始む。ある人曾に、煙と云ふ附句秀吟なる事、天滿感應ましまして、手爾乎葉の大事、立水の卷・臥浪の卷の二書を授け給ふと云々。其の前句、人を迯りてかへる野のするゑ、附句、身はいつの煙のためにのこるらん。斯く附けられしを神も感應あり、夫より連俳、此の神を尊敬し奉るとなん。焚燈庵に心敬僧都の祠を立て、煙の宮と云ふ。此の僧都は叡山住心院の住職なりと。

註 ○日次紀事のこの項は二月廿五日の條下にある。

季節解說

二月二十五日、京都北野神社の中祭である。人皇七十四代鳥羽天皇天仁二己丑年、勅旨に依り、菅原道眞公薨去の命日二月二十五日に初めて行はれ、爾來八百二十餘年今に絕ゆることなき祭事である。古例に據れば、二月二十三日神事入と稱し、西京の御供田を預る社人一同が、西京安樂寺一之保御供所（俗にほととぎす天神ともいふ）に參籠し潔齋し、二十四日大小二鉢の獻供を調整、二十五日酉の刻に至つて御供所を出門し、松明、箱提灯、高張等に行列を整へつゝ、御本社神殿内に運び入る。社人一同は熨斗目麻裃帶刀にて供奉する。北野宮の政所曼珠院宮より出張の檢使役及び社務職、社人、宮仕、伶人、威儀を正して定めの位置に就き、奏樂中に宮仕神前に獻備し、奉幣祝詞を奏り、式終つて順次退出する。この梅花の御供の調整は明治六年、一之保御供所が廢せられたと同時に一時神官に

委ねられたが、明治四十年、西京社人末裔の組織する七保會に依つて再興せられ、現在では會員一同、二十四日早朝、潔齋別火して北野社務所に參集し、此處で調整唐櫃に納め、神殿石之間に置き、二十五日獻供する。昭和三年には、更に古式に則る途中行列をも加へることとなつた。祭事に用ふる御供は二鉢の神供及び香立瓶子であつて、神供は白米四斗を二度蒸しとし、型につき込み、桶狀の器に、大鉢には二斗七升、小鉢には一斗三升を山盛りとする。香立は二箇の三方に大は四十二箇、小は三十三箇の紙筒をのせ、これに三杵米一斗を配し、上に梅花の枝を挿す。瓶子は高さ一尺三寸五分朱塗、梅松の金蒔繪を施したもの二本に、黑酒白酒二升を盛り、口に雄蝶雌蝶の折紙を附す。香立に挿す梅花は往昔菜種の花を用ひたので、俗に菜種の御供ともいふのである。然し祭員の衣冠には今尙菜種の花を挿むとのことである。この御供は熱病、厄除、牛の熱病に效があるといつて、諸人に授與せられる。

薪能（たきぎのう）

古書校註

【日次紀事】 今日（一）より南都興福寺南大門薪能始まる。元、是興福寺夜中の法會の間、寺僧の奴僕、春寒に堪へずして、門前に於て火を焼き、其の光に就きて偶々俳優（二）を爲し、長夜の戲と爲す者有り。其の後、金春・觀世・保生・金剛四座の業と爲る。近世四座の中、兩座は東武に在り、南都休暇の兩座之を勤む。今七日、二座交々之を勤め、八日も亦かくの如し。九日に至れば則ち初日の一座衆徒に告げて、若宮の前に於て藝を施す。其の日、次座は門能を勤む。十日も亦、次座かくの如し。玆の宮に於ての能を終り、十一日より十三日に至り、兩座相交々門能を勤む。七日の間に雨降れば、則ち十四日臨時に之を勤む。

【滑稽雜談】 薪能、或は芝能と曰ふ。（略）大和名跡考に曰、此の能起りは、昔西金堂の修二月會より出でたり。

【年浪草】雜談抄に云、近世金堂或は南大門の修二月會の沙汰なし。然れども、每年霜月若宮の祭禮の時に、江戸より猿樂等諸々罷り上り（略）能をはじむる也（三）

註（一）二月七日（二）能（三）冬の部、若宮後日の能を參照せよ。

季題解說　昔は春であつたが、今では冬である。參照　冬　薪能の條

例句

薪能

引からげ九郎や片荷薪の能　宗因（[illegible]宗因發句集）
傘や薪の夜のありとをし　其角（五元集）
地鼠のもえしさりなる薪かな　沾德（俳諧五子稿）
僧脇の顏をそむける烟哉　蝶夢（類題發句集）
笛方のかくれ貌なり薪能　碧梧桐（春夏秋冬）
風ふいていぶる薪や薪能　月兎（同　）
芝能や鹿の子連るゝ煎餅賣　北洲（蟻葵）
薪能もつとも老いし脇師かな　虚子（[illegible]集　虚子）

參考　陰曆二月七日より十日に至る四日間奈良縣（大和國）興福寺門前及び官幣大社春日神社の攝社春日若宮の社前に於いて行ふ能樂なり。一に芝能とも稱す。即ち七日の夜より興福寺南大門の芝生にて行ふが故に此の稱あり。當夜、先づ堂前に篝を焚き、能三番を催す。金春・寶生・金剛・觀世の四座、二座づゝ交替して之を勤む。八日の儀も亦此の如し。次いで九日に至りて此日より若宮社前に於いて同じく金春・寶生・金剛・觀世の四座、二座づゝ交替して之を勤む。即ち七日に興福寺にて勤めたる二座の者、九日に至り衆徒に告げ、若宮の前に到りて行ふ。十日は同じく他の二座之に代りて勤むるものなり。

薪能は俗說に、昔猿澤の池の邊に土穴生じ、風煙立ち騰りて此の毒氣に觸るゝ者極めて多し、依つて薪を焚き漸く鎭むることを得たりと云ひ、是をその起原となす。然れども、當寺は古くより修二月會と稱し、一七日の間晝夜の行法を修し、國家安泰を祈ることありしが、その夜中の法會に於いて、寺僧等嚴寒に堪へずして、門前に於いて火を焼きて暖を取り、偶々その光を賴りに餘興の歌舞を演せしが、いつしか恒例となりしものなり。併して足利初期に於いて法會は既に廢絶せるにも關らず、餘興の能のみ却つて盛大となり、續ては金春・寶生・金剛・觀世の四座の業と爲るに至れり。かくて足利末期に及び一時中絶せしが、二代將軍德川秀忠の世に至りて、再興せられたり。然るに後ち再び中絶し、維新後に至りて一時復興せしも、今は全く廢絶せり。

安良居祭（やすらゐまつり）　安良居花（やすらゐばな）

古書校註

【日次紀事】今日、（一）安樂花の神事あり。辰の刻計り、上賀茂南上野村

の土民、烏帽子素袍を著け、或は又異體の粧を爲して、各々先づ一村の捴堂（一）に聚る、（略）是より先、光念寺の北上の御前の社に詣で、各々異口同音に安樂花と唱へ、大鼓幷びに横笛、其の節を助く。然る後、大源菴の社下の御前の社に往きて、各々踊躍（三）をなして後、上野村の捴堂に歸り、是より第一の庄屋の前に於て躍り畢りて各家に歸る。（略）又、上賀茂の梅辻・岡本・河上、三箇村の土民、今宮に詣でて、各々踊躍すること上野村の如し。（略）傳へ言ふ、春時多く疫癘の行はるゝは、今宮の疫神也。故に踊躍をなして、神靈を勸め之を祭る者なり。或說に、是花鎭の祭にして、落花を惜み風雨無きことを祈る者也。故に安樂花と唱ふと云ふ。一說には、今日高雄山神護寺の法華會、動もすれば魔障有り。故に躍を催して邪魔を和ぐ。故に安樂花とは、法華會平安に了畢するを祝ふ義なり。即ち、西行法師の詠歌（四）有り。

【滑稽雜談】 高雄法華會。十日 日本後紀に曰、延暦二十一年正月丙子、國子祭主和の弘世、最澄法師を高尾寺に屈して、天台の法門を講ず。又十餘の名德を延て、始めて法華會を行ふ。○羅山文集に曰、（略）傳教南峯の巖窟に於て、修練すること數日、一猿有り、來りて山の芋を捧げ、閼伽を供す。一旦猿谷に墮ちて斃す。俗猿が窟と號する是也。傳敎之を憐み、經を寫して之を弔ふ。每年三月十日、今に到りて之を祭る。下略。○當山緣起に曰、やすらひ花は、三月十日、紫野に人おほく集まりて、高雄は法華やすらにはてよといふべきを、かくはやすとかや。○俗に傳ふ、高雄の法華會は殊勝の法會なれば、障なきためにや、此の神祭を行ふと云ふ。（略）此の法華會も、今は名のみのやうに侍るぞかし。

やすらひ花。十日（略）百錬抄に云、久壽（五）二年四月、近日京中の兒女、風流を備へ鼓笛を整へ、紫野の社に參る。世に之を夜須禮と號す。勅有りて禁止す。○一說には、前に註す高雄法華會より起る也ともいへり。（略）一說、此の祭は寂蓮が興行せる所なり。今土人の囃に唱ふる歌も、寂蓮の作也。云々。

【年浪草】 高雄法華會。（略）或る書に云、弘法大師始めて授戒灌頂の儀を興す。其の式一卷大師の筆する所にして、其の時之に預るの人、各其の名を載せらる。傳敎大師等も亦其の列に在りと。云々。是弘法大師筆する所といへども、疑ふらくは後世僞り書けるもの也。類聚國史・日本後紀・帝王編年紀に、既に傳敎大師本邦灌頂の始祖たること明けし。凡そ天台宗灌頂、勅會に行はるゝ時は、公卿著座ありて、奉行・堂童子・執綱・執蓋の參役あり。殊に一身阿闍梨の欵狀を奏上の儀等、其の式嚴重なり。殊に國史にも載せらるゝ也。國史を以て證とすべし。其の上高雄に於て法を改め玉ふこと、傳敎大師尤も先にして、弘法大師は後なり。是又國史の趣也。疑ひ惑ふ可からず。

註 （一）三月十日。（二）捴堂とは、村に事あるとき、村民がそこに集つて相談する堂で、平

常は傾をたのんで守らせてある。（三）をどり。（四）夫木集に「高麗山あはれなりけるつとめかな安樂花とつゞみうつなり　西行」。（五）近衛天皇の年號

季題解説　四月十日（昔は陰暦三月十日であつた）、京都市上京區今宮神社内攝社玄武社の祭禮である。警固の者（素襖、熨斗目、鬼格挿）・鉾持三人（白丁）・氏子總代一人（風折烏帽子直衣姿）・御幣・錦蓋（キンガイ）（擔、松、竹、梅、山吹等を飾る。右、氏子黒地牡丹紋附褄を首に仕す。左、氏子）・羯鼓少年二人（烏帽子、赤熊、白小袖、牡丹蝶文様半袴、緋縮緬打掛、錦手甲紫襷）・鬼四人（白小袖、白袴、緋縮緬打掛、白鉢巻。二人は黒毛、鉦打つ。二人は赤毛、太鼓打つ）・素袴男二十人（頭取二人は鶴龜松竹を文様の素袍、他は二つ引文様素袍、刀を逆にかたげ、扇子を開き持ち「やすらひ花」の歌を合唱す）

この順序で、鬼と羯鼓少年は樂を奏し躍りながら歩き、今宮神社を出て附近を廻り、午後四時神社に歸著、社前で躍る。この祭は長保三年五月九日を起原とし、今日まで幾變遷して傳つてゐる。京都ではこの祭を春の魁とし、諸社で祭禮がある。太秦の牛祭とともに、「見るも阿呆見ぬも阿呆」といふ實に時代ばなれのした一奇祭である。この祭の錦蓋（花傘といつてゐる）の下に入ると疫を除くといつて、諸人競つてその傘の下へ這入ることが行はれる。當日朝午前九時、社では本社、三座攝社等に花椿（櫻椿に幣を添へたもの）を供し、八つの御饌（赤飯を折敷に盛つたもの）を西の座へ供へる。祭終つて行列の人が歸宅し、地藏寺へ參詣する。和尚は一同に珠數を戴かす。翌日衣類を整理し、鬼汁（味噌汁、大豆の浮し。鬼と呼ぶ鹽鰤の骨を椀に入れて汁の身とする）を饗し、素袍の酌人で酒をくむ。祭は宮中の鎭花祭から轉化したものだともいふので、安良居花ともいふ。又安良比、安良日、安須禮とも書く。囃しの「やすらいはなや」云々の唱歌は寂蓮法師の作と傳へられてゐる。

例句

安良居祭

やすらひの花よ踏れなあとなる子　曉臺（曉臺句集）
安良居の稚兒の袴や濃紫　桐一（ホトトギス）
安良居の花傘見ゆる二階かな　明水（同）
安良居の鬼を圍みて囃しけり　草園（續ホトトギス）
安良居の十人の笛よく揃ふ　都穗（同）

伊勢參(いせまゐり)　伊勢參宮(いせさんぐう)　おかげまゐり　脫參(ぬけまゐり)

古書標註

【日次紀事】今月(一)より四月に至るまで、伊勢參宮の徒多し。其の間、人の臣子たる者、君父に告げずして參詣する者、是を脫參と謂ふ。凡そ親戚朋友參宮する人を粟田口に送り、其の歸るに及びては又之に迎ふ。是を坂迎と稱す。逢坂の邊りに出でて之を待つ義也。各々酒肴を携へ、相共に醉を盡して歸る。參宮人家に歸りて後、御秡幷びに、伊勢白粉・陟釐(アヲノリ)・弱海布(ワカメ)・麩海苔・鰹節・鮑・熨斗・鯨等の器物、菅笠・編笠・筆・笛・柄杓具・杓子等の類を以て、方物(二)と爲し、親戚・朋友に贈る。俗に之を宮笥(こや)と謂ふ。今は、他邦より故鄕に歸る時、方物を携へて人に贈るを、總て宮笥と謂ふ。然る後、又坂迎の人の爲に饗す。

註 (一)二月。(二)その地方の名產。

季題解說 伊勢參宮卽ち伊勢國兩大神宮に詣づることで、上古は臣下庶民の參宮は禁ぜられてゐたが、後だん〳〵緩んで來たのである。「春日」に荷兮の句「春めくや人樣々の伊勢參り」とあり、也有の「旅の賦」に「春は乘りかけの鈴なりて、浴衣染の花やかなるは參宮の都道者か」とあるやうに、德川時代には、貴賤上下の別なく四季の參拜者が多かつたが、殊に人の心も浮き立つて一般に遊山氣分になる春の頃が盛んで、全國各地から、思ひ〳〵に裝を凝らし馬の鈴の音勇ましく集つて來たものである。平生から伊勢講なるものを作つて參宮の費用を拵へた。太太神樂を奉る費にもあてられるので、この伊勢講はまた太太講ともいはれた。まだ關西線の出來ぬ前などは、美々しい服裝に旗を押したてゝ道中をしたもので、町外れ村外れまで送り迎へするといふ有樣であつた。おかげまゐりは、ぬけまゐり又ぬけさんぐうとも言ひ、江戶時代、主人または父兄に告げることなく、沿道の人々のお惠みに依つて參詣したからその名があるのであつて、江戶時代に一つの流行であつた。

例句

伊勢參

講中の籤にあたりて伊勢參　清河（ホトトギス）

圖らずも伊勢參宮のあたりくじ　婆羅（續ホトトギス）

十三詣(じふさんまゐり)　智慧詣(ちゑまゐり)　智慧貰(ちゑもら)ひ

季題解說 京都附近の俗、童男童女、齡十三歲となれば大人の仲間入をしたのだから、その大人の智慧を貰ひ、福德を授かるためといふので、右京區嵯峨法輪寺の虛空藏菩薩に參詣する。これを十三參、智慧貰ひ、智慧詣などいふ。法輪寺は聖武天皇の天平六年の建立で、今昔物語等にも見えてゐる。本尊虛空藏菩薩は日本最初の虛空藏菩薩で、日本三虛空藏の隨一であ

る。丁度この日は嵐山の櫻滿開の頃で、花見の人の雜閙の中を、著飾つた男女の子供が兩親眷族その他丁稚小者などに手を曳かれて參詣する有様は、また一風變つた趣である。この十三參は安永二年に興つたことで、昭和八年で百五十餘年にしかならない。この日境内で十三種の菓子を賣つて、十三歳の者は必ずこれを虛空藏尊に供へて一人で喰つたが、今は寺で形ばかりの煎餅を賣つてゐるに過ぎない。また寺ではこの日の前後智慧の箸を授與する。歸途渡月橋を渡るとき後を向くと折角貰つた智慧がなくなるといつて、必ず橋の間は後を振り向かないことになつてゐる。四月十三日は虛空藏菩薩の縁日であるのと、年の十三歳とがこんがらかつて十三日となつたが、今日ではその前後の日曜の方が多い。昔は三月十三日であつた。

例句

十三詣

門通る十三詣櫻餅　　都穗（ホトトギス）

十三の口紅さして詣でけり　　鴉汀（同　）

左右の手をとられ十三詣かな　　淸山人（ホトトギス）

先帝祭（せんていさい）

季題解説　下關市阿彌陀寺町紅石山麓鎭座赤間宮において、四月二十三、四、五日の三日間に行はれる古式の祭儀である。この宮の由緒を尋ねると、壽永四年平家滅亡の秋、御入水あらせられた安德天皇の御尊骸を赤間關紅石山麓阿彌陀寺に奉葬したが、建久二年勅して御陵上に御影堂を建立し、阿彌陀寺を勅願寺とせられて、永く天皇の御冥福を祈らしめ給ふたのに創まり、明治維新の後阿彌陀寺を廢し、御影堂を改めて天皇社と稱せられ、更に明治八年官幣中社に列し、社號を赤間宮と定められて今日に及んでゐるものである。先帝祭の由來は、はじめ朝廷において、先帝會と稱して安德天皇のために法會を行はしめられたのが、七百餘年も廢絕することなく繼續し、阿彌陀寺廢止の後は先帝祭と改められたが、祭儀は依然として渝らず、たゞ祭日の陰曆三月二十三日乃至二十五日が陽曆の該當日に改つただけである。三日のうち殊に中の日二十四日には、午後一時には市內の中島組と稱する漁夫の內選ばれたるもの數名、廡の大紋、立烏帽子姿で參進し、玉串を奉奠する古式があり、これについで、市內稻荷町の遊女が女﨟及び官女の裝で參拜する古式がある。女﨟は十二單の上に裲襠を著け、官女は白衣に緋袴を穿ち、檜扇をもち、禿、稚兒等を從へて列を正して神社に到り、修祓を受け、玉串を捧げ、撤下の神饌を拜戴して退下するのである。この道中を見物するため遠近より參集するもの數萬、市內は非常な雜閙を呈し、先帝祭といへばこの遊女の行列の一事をもつて代表することゝなつてしまつた。縁起によると、平家の遺臣中島四郞太夫といふものが、市の西端王城山に潜伏して平家再興を謀つたが志を得ず、生活に窮して木を璽

つて船を造り、海に漁つて口を糊しつゝ、御影堂に禮拜を怠らず、殊に先帝會には服裝を改め威儀を正して參拜した。これが中島組參拜の濫觴であるといふ。また遊女の道中については、建禮門院の女官たちが壇の浦の濱邊に救ひ上げられ、苫屋に寄食したが、もとより野人の業に從ふすべもなく、山野の草花を折つて港の船に鬻ぎ、僅かに糊口の資とした。しかし先帝を慕ひ奉り、常に御影堂に詣でゝ阿閼を汲み香草を手向け、先帝會には昔ながらの服裝で參拜してゐた。その後官女たちの遺族は跡を絶ち、女官たちを助けた苫屋は稻荷町に妓樓を起したが、官女たちの哀切な心情を思ひやり、またその忠敬な風習のあとを絶つことを憂へて、同家の遊女等をしてこれに代へ、後世に傳へんことを遊女たちに諮つてそのことを興したのが、今日に連續してゐるものであるといふ。

例句

先帝祭

海を渡つて先帝祭の詣で人　飛雨（同人）
行春や壇の浦人雜仕役　指月城（ホトトギス）
八文字踏む足もとの春埃　阜鶏（同）
萎れたる牡丹をもてる禿かな　晴（續ホトトギス）
先帝會近づく男波女波かな　螢雪（同）
各々の太夫の前の煙草盆　乞合（同）
太夫待つ遊女はかりの一棧敷　久保晴（同）
合戰の屏風みてゐる禿かな　同（同）

石山祭（いしやままつり）

古書校註

【栞草】江州石光山石山寺は眞言宗にして、御室に屬す。本尊如意輪觀音、聖武帝の勅願、良辨の開基也。今日（二日）の祭は石山寺の鎭守三十八所明神（伽藍境內）新宮大明神（寺邊の村に有り）近津尾八幡宮（國分村にあり）の祭にして、古式は朔日より三日に至る。まづ、朔日、三十八所明神の拜殿に於て神祭あり。神輿東寺崎へ渡御、一山の衆徒出仕。二日、新宮に於て仁王八講を修す。三十八所に於て神輿に饌を供す。晩景に及びて能藝あり。長命大夫これをつとむ。獅子舞骨無（ホネナシ）狂言と云ふ。衆徒各公文所に出仕す。三日、神輿渡御、龍藏權現において獅子舞獻供あり。其の間馬場において競馬を催す　駿馬幷びに御者を貫主より出す。其の兩側に綾法師列立す。各花笠をいたゞき太刀を佩き大口をきて、五人或は十人左右に執綱して競馬の勝負を決す。勝方に白布を給ひ、又獅子舞にも祿一計を賜ふ。今は古來の祭式退廢す。朔日に新宮・八幡の兩神輿、神宮の拜殿に出御、神樂あり。三日兩神輿渡御、三十八所の拜殿において、衆徒法樂の奉幣あり。次に神酒を供じ、畢りて還幸なり。

註 (一) 三月三日。

粟津祭(あはつまつり)

古書校註

【滑稽雜談】是も石山祭の日におなじ。粟津と云ふ所、今明かならず。大津松本村の東、木曾義仲寺の邊をも粟津と申す。又膳所の別方(べつぱう)と申す所に、粟津の森とて侍る。又石山へ參る路次の松原をも、粟津松原と申す。是兼平塚に近き所なり。神社は別方村の粟津の森に有る由也。祭は石山と混じて分明ならず。いづれの神を祭るにや、古俳書に記し侍る故之を註す。猶考ふべし。

【年浪草】江州粟津祭は、鳥居川の御靈の祭禮也。今民家微にして祭祀すること能はず。此の祭更に知る人無し。按ずるに、日本紀に曰、天武天皇、粟本の軍を討ちて、之を追ひ給ふ。(略)粟津と勢田との間に鳥居川邊か、此處に大友の皇子の靈を祭りて御靈と號す。此の祭、古へ三月三日なり。今斷絶す。里人言ふ所の御靈祭、或は國法村の洞權現山庄村の牛頭天皇也。其の義未だ詳かならず。考ふべし

平岡平國祭(ひらをかくにむけまつり)　平岡(ひらをか)の宮叩(みやたたき)

古書校註

【滑稽雜談】神社啓蒙に曰、河内國平岡(一)社記に云、二月一日は平國祭なり。暮に及びて山に入り木を採り、拜殿樓閣を叩き、各趨り歸る也。水速氏神主、祝詞を申し、拜して退く。社家口訣有り。○これを俗に平岡の宮叩といへり。猶此所の神人に尋ぬ可し。

註 (一) 枚岡とも書く

水間祭(みづままつり)　水間(みづま)の貸錢(かしせん)

古書校註

【滑稽雜談】泉州志に曰、龍谷山水間寺の緣起に云、水間寺は、聖武天皇の勅願に依りて、行基僧正、天平年中に開闢する所なり。本尊は正觀音也。(一)二月初午を以て會日と爲す。相傳ふ、此の日歩を運ぶ者は四十二歲の厄難を消除し、且つ福德を得るなり。(略)(二)古來此の寺に於て、初午の貸錢とて、參詣の男女、鳥目を借りて來り、商賣の通寶(三)となす時は、利を得ること神のごとしとて、請ひて餘の錢に交へ遣ふとなり。翌年又初午の日、是を返納するには十倍を以て償ふといへり。是を水間の貸錢と申し侍る也。

註 (一) 年浪草の引用によれば、この間に「行基四十二歲にして之を造る」と入つてゐる。
(二) 以下其磧の自說 (三) 通貨

大原野祭（おほはらのまつり）

古書校註

【滑稽雜談】神社啓蒙に曰、大原野の社は、山城國乙訓郡に在り。城を去ること西四里許り、祭る所の神は春日社に同じ。（略）江次第に曰、大原野祭、右大臣宣す。春日祭式に據り、平野・梅宮祭式を以て彌縫して之を行ふ。式に曰、春二月上卯、冬十一月中子日。先づ行事座に著き、膳を居う。辨藤、藤・源氏后之を備く。氏后在らざる時は、氏の長者之を備く。次に氏人・上卿參入、辨幷びに外記。史、舍の前に出立ち、著到の殿に著く。次に氏人・陪・同當等同じく座に著き、一獻、官司勸盃す。氏人著到の座也。次に卜串、次に神官參著す。卜畢つて神官退く。次に外記卜串を進む。上覽畢つて退く。（略）公事根源に曰、大原野の祭、上卯日、是も年二度也。此の神社は后宮のまゐらせ給はんため、春日の本社遠きによりて、都ちかき所にうつし奉らる。されば大原野の行啓などと申す事の侍るにや。

園幷韓神祭（そのならびにからかみのまつり）

園韓兩神祭（そのからふたかみまつり）　園神祭（そののかみまつり）　韓神祭（からのかみまつり）

古書校註

【滑稽雜談】延喜式神名帳に曰、宮内省に座す神三座。園神社・韓神社二座。○雍州府志に曰、舊宮内省に在り。後禁庭に移す。古へ毎年春二月・冬十一月、丑日之を祭る。參議一人祭所に就きて事を行ふ。式は西宮・北山兩抄に詳なり。相傳ふ、延暦年中遷都の時、將に處を他處に易へんとす。神託に曰、唯斯の地然り。當に皇基を護るべしと。今斯の社無し。惜しい哉。

註 ○栞草には「園韓兩神祭」と題されてある。

率川祭（ゐさかはまつり）

古書校註

【滑稽雜談】上酉日。（一）延喜式に曰、大和國添上郡率川に座す大神神御子社、率川阿波神社。（略）此の社、今世春日社より西二十町餘、子守町といふ所にあり。俗に子守宮と稱す。○公事根源に曰、此の祭は春日祭の明る日行はる。神祇令にのする三枝祭とおなじかるべくば、四月にてあるべし。藤氏南家の口傳に、率川社は右大臣是公の建立といへり。

註 （一）陰暦二月。○夏の部、三枝祭の條を參照せよ。

淺間祭（せんげんまつり）

古書校註

【滑稽雜談】今式に淺間（センゲン）祭を淺間（アサマ）祭として、信州とす。信州淺間別當に尋

ぬるに、二月祭なし。四月八日始めて山の口開と稱して、諸人參詣す。此の日を祭禮とも緣日とも云ふ。淺間明神・諏訪明神南社詣、本地普賢菩薩云々。今式に信州と記すは誤れり。

【栞草】廿二日 〔駿州阿部郡、淺間の祀也。年中の祭祀、朝儀を摸して八十三度あり。今は名目のみ存す。しかれども二月廿二日の祭禮は、今に至りて嚴重也。府中宮町より狂言練物等を出す。此の日社の外にて箕を商ふ。近鄕のもの必ず之を買ふ。

粟島祭（あはしままつり）

古書校註

【滑稽雜談】神社啓蒙に曰、粟島神社、紀伊國名草郡蚊田の地に在り。祭る所の神一座、少名彥名命。（略）俗に傳ふ、粟島の神は婆利塞天女と申し奉り、十六歲の春三月三日、三十二枚の齒黑を鐵漿にて染め、住吉明神に后嫁し給ふ。此の時紀の御碕より住吉の浦まで、海潮悉く干潟となりて、道路をやすく通しけると也。故に今に至りて、三月三日住吉の潮干と云ふ事侍る也。其の鐵漿の石壺、今に粟島の社內に侍る。然れども此の神女淋熱の病ありて、住吉明神之を送還し給ふ時、離別の記念に神樂あり。太鼓を送り給ひぬ。故に今世、住吉の神樂にはな鼓を闕くと云傳へ侍る。此の神女粟島に歸り、夫婦の道に障ある事を歎き、形代を作りて夫婦の道をまなび戲び給ふ。是今の雛遊びのよつて起る所なり。此の神ことに婦人の病をすくふ因緣ある故に、是を祈る婦女、雛を作りて奉るならし。かうやうの說世に專ら云ふ所なれども、かつて據なき孟浪（一）の說にして、敢へて信用し難し。然れども佛道を好む者は、これらの俗說をもまた捨つべからず。今の神社は役の行者の勸請といへり。三月三日に祭をなすこと、件の俗說に隨ふにや。

註（一）でたらめ。

廣峰祭（ひろみねまつり）

古書校註

【滑稽雜談】神社啓蒙に曰、廣峯神社、播磨國飾磨郡廣峯山に在り。卽ち國府姬路の傍一里許り。祭る所の神三座、素盞烏命一座、稻田姬一座、八王子一座（略）素盞烏尊始めて此處に跡を垂れ給ふ也。當代に至りて諸人羣をなし、近國近鄕の農家、ことに年穀を祈り申す也。每歲三月三日幷びに十八日を祭禮の式日として、同國姬路の城主より、兩日の祭に數疋の神馬を獻ず。殊に十八日には走馬ありて、社官廿餘家の者衣冠にてこれを行ふ。十八日は、往昔吉備大臣の天王へ逢ひ奉り給へる日（一）なれば也。

註（一）吉備大臣が唐から歸朝の日、この地で素盞嗚尊にあひ、帝に奏してこの地に社を建

てたといふ故事。

水尾祭（みつのをまつり）

古書校註

【滑稽雜談】神社啓蒙に曰、水雄神社、丹波國桑田郡愛宕山傍に在り。祭る所の神一座、清和天皇。(略)今世猶御骨を納むる處前山にあり。此の村の神祭には、帝の御國忌の日を用ひず。三月九日也。(一)是他神を合せ祭るにや。猶尋ぬべし。

註(一)日次紀事には、四月三日、又中の卯の日と見えてゐる。

比良祭（ひらまつり）

古書校註

【年浪草】江州比良村の祭、三月十五日。神輿二基、山王十禪師・飛梅天神兩社の祭祀也。十禪寺は南比良村の鎭守、天神は北比良村の鎭守、兩社の社一ケ所にあり。村は南北十町餘を隔つ。又南小松村の鎭守八幡、北小松の鎭守十禪寺・八幡、合せて兩村三社の神輿三基、同月同日之を祭る。是をすべて比良祭と稱す。此の邊、往古一圓山門領なり。故に多く山王を崇め祭る。此の說白髭廟壽院實宣の記也。

石清水臨時祭（いはしみづりんじのまつり）

古書校註

【滑稽雜談】三月中午日、南祭(一)と云ふ。江家次第に曰、石清水臨時祭。天慶五年四月廿七日に起り、平將門亂逆の報賽也。使は播磨守源允明朝臣、舞人十人。(略)天祿二年三月八日臨時祭、其の以後每年之を祭る。(略)續古今集、朱雀院の御時、石清水の臨時の祭を始めて行はせ給ふとて、召されける時の歌。松もおひ又も苔むす石清水行くすゑ遠くつかへまつらん　紀貫之。○社家者流の說に云、此の祭、後光嚴院の文和年中の頃迄侍りしとなん。今は絕え侍る。

註(一)加茂の祭を北祭と言ふに對する言葉。なほ石清水放生會(夏)を參照せよ。

一乘寺祭（いちじようじまつり）

古書校註

【日次紀事】洛東一乘寺八大天王祭。村人、烏帽子・蘇芳(一)を著けて、各々襷を懸け、高聲に有幸有幸と呼びて、神幸を勸む。凡そ諸神社の祭禮、神幸の時供奉の諸人、手を擊ち或は扇を擧げて、各々樂哉樂哉（ワイワイ）と唱へて、神輿を勸む。凡そ處々の神幸、皆此の儀有り。蓋し樂哉は上古の神語也。

今俗に建仁寺の叢西の事と謂ふは、是誤り傳へたるか。
【滑稽雜談】此の神社は往古一乘寺の鎮守也。今世は此の寺總べて土地の名となり、士人是を氏神とす。例祭三月五日也。昔は六日に後宴の能ありしと也。故に古伊書に記し有る由侍り、當世六日の儀なし。
【年浪草】一説に、昔宮、當日競馬七番許り、宵は馬場に於て走馬し、當日は旅所の前に於て社人各之に乘る。祭日神鉾出づ。云々。

〔注〕○昔は七里祭と云つて、此の日各社・一乘寺・修學寺・藪里・修學院寺・小原・山端・高野各郷の祭があつた。今は修學寺・高野・一乘寺の三村となり、五月五日に行はれる。夏の部をも參照せよ。(一)菜袍の假字。

一夜官女（いちやくわんによ）　一時女﨟（いちじぢよらふ）

〔季題解説〕大阪市西淀川區野里町の住吉神社で、毎年二月廿日の午前中に行はれる奇祭で、氏子の中から抽籤で十歳から十二三歳くらゐの少女七人を選び、官女に扮せしめ、くさぐさのお供へ物を持たせて神殿へかしづかせるのである。昔は夜中に行はれたのであるが、明治四十年から朝に改めたものである。官女の扮裝も昔は遊女の姿をしてゐた。

柳祭（やなぎまつり）　柳さん（やなぎさん）　柳詣り（やなぎまゐり）

〔季題解説〕舊正月五日、伊豫温泉郡湯山村に鎮座する通稱柳天王、即ち郷社柳素鵞神社の春祭であつて、開運除疫の神とせられてゐる。太古、大巳貴命は素盞嗚尊の女思姫命を娶り給ひ、專ら田甫を耕し、嘉禾を培殖し、醫藥疾病の法を定め、國々を歴巡して温泉を發見遊ばされた。そして我が饒田津の石湯を發見なされると、更にその源泉を探らうと山深くこの地に分け入らせられ、「我者湯備來」と即ち此處に曾て父神に在す素盞嗚命の御巡幸を偲び奉り、神祠を建て祭祀を營み遊ばされたのであると傳へられる。後世里人これを「也奈來」と訛り、轉じて「やなき」即ち柳の文字を當てたのであるといふ。現在前宮は湯山村字末に在つて、奥宮はこれから奥十八丁の柳にある。道路嶮惡で、雨雪の日藩主の代參が困難であるため、神靈をこの地に勸進したのであるといふことである。

〔例句〕
柳祭　連添ひて柳祭の戻りかな　默禪（ホトトギス）

椿祭（つばきまつり）　椿さん（つばきさん）　椿詣り（つばきまゐり）

〔季題解説〕伊豫温泉郡石井村に鎮座する縣社伊豫豆比古命神社の祭禮である。舊正月八日九日の兩日に亙つて行はれ、八日の夜は夜もすがら賽者絶えざる有樣である。舊記によると、上古の世、伊與主命がこの石井浦の津

膓に御船を寄せられたのを、潮鳴栲綱老翁がこの所に居合せて、御船から投げ上ぐる纜を手繰り、巖鼻に繋いで命を迎へ奉つた。沖船の留つた所を船山と稱し、老翁の居合せた所を居相と稱するのである（現在の居相）。居相の津脇さん卽ちつわきさんを後世椿さんと稱ふるのである。境内に相殿末社がたくさん有る。本社前の巖の上にある奏者神社は、潮鳴栲綱翁であつて、巖頭に船を繋ぎ迎へ奉つてより後「翁が執事の形となられたわけなのである。現在里人參拜の際、先づこの前に額づき「參拜に參りました」と本社に取次を乞ふのである。また廻廊の南側に響石がある。耳を當てると海上の浪音が聞えると云ふ。今の世に船頭舟人の神と祀られ、また伊豫の神と崇められ、緣起の神として數萬の參詣を見ることも故なきにあらざるやうに思はれる。

例句

椿祭　春雪や十日に成る椿祭　默禪（ホトトギス）

城下見や椿祭の戻り道　同（同）

櫻花祭（あうくわまつり）

季題解說　豐前宇佐神宮において、四月十日（昔は四月初から一週間）、神苑の櫻花の盛りの頃ある中祭である。寶物殿の築地の古い枝垂櫻は丁度盛りであるし、その花かげの舞樂殿に幕を引きめぐらして、奉能の催しがあり、また外苑には紫幕四本柱の上依も築かれ、櫻の參道には櫻花祭と記した雪灯（ボンボリ）を立てつらね、吳橋から宇佐の町へかけては紙の小旗など連ね、遠近から參拜者も多く、花見がてらの人々で大に賑ふ。神事は十日一日丈けであるが、四月三日の神武天皇祭頃から、そろ〳〵能樂もあり雪灯も立つて賑つてゐる。

例句

櫻花祭　櫻さく宇佐の吳橋（くれはし）うちわたり　久女（ホトトギス）

花換祭（はなかへまつり）

季題解說　越前敦賀町鎭座國幣中社金ケ崎宮の祭事である。同社は櫻花の名所で老木が多く、全殿花に埋むばかりであるが、その花盛りの前後の晴天十日間を限つて行はれる。この間毎夜社前で造花の枝を賣る。これを買うた人々は、宮の石段を上り下りしたり、社殿をめぐつたり、玉垣に沿つたりして、行き交うてゐる人々に「花替へませう」といつては造花の交換を行ふのであるが、午後九時を期して止めの合圖の太鼓がうち鳴らされる。各々替へ合つた花を社殿の前に持ちよる。禰宜がその日の當選花をいひ渡す。それによつてその日〳〵の幸運者が定められ、一等・二等・三等と

それぞれ神鏡その他が授與されるのである、近郷近在よりも參拜者多く、なかなかの賑ひである。

例句

花換祭　花換ゆる鷗ケ崎の茶屋の婢と　行路（ホトトギス誌）

鎭花祭（はなしづめまつり）

古書校註

【誹諧初學抄】花の咲く比、疫神分散して人をなやます事あり、かれをしづめん爲なり。

【滑稽雜談】公事根源に云、是は大神・狹井の二祭をいふと神祇令にのせたり。（略）（一）或說云、宇多天皇、寛平九年三月七日に始めて行はるゝと云ふ。大神とは三輪の御神にてまします。狹井の社は、三輪の社二町北の地也。今は絶え侍るなり。

註（一）以下其說の首讀。

季題解說

「神道各目類聚抄」に、延喜式云「鎭花祭神二座、大神ノ神一座、狹井ノ神一座」とあり「令義解」に「季春鎭花祭、謂、大神狹井二祭也、在二春花飛散之時一、疫神分散而行レ癘、爲二其鎭遏一必有二此祭一、故曰二鎭花一」とある通り、古昔神祇官において陰曆三月の花の散る時分に、疫癘を鎭めるために、大神、狹井二神を祭ることが行はれたのである。現今では大和春日神社の攝社水谷神社鎭花祭がある。昔は四月五日に行はれたが今は五月五日に行はれる。この祭は伏見天皇正應元年四月に始まつてゐる。丁度藤の花の咲く頃であるので、藤花を捧げ、獻饌・五色の散紙及び奉幣があり、神樂を奏する。これが水谷神樂である。新拾遺集に「長閑なる春の祭のはなしづめ風をさまれどなほいのるらし」といふ歌がある。〔參照〕夏―水谷の能（ミヅヤノノウ）

例句

鎭花祭　神歸り其座や袖の花鎭　言水（俳諧五子稿）

水口祭（みなくちまつり）　水口の幣（みなくちのぬさ）

古書校註

【滑稽雜談】雲聚玉蘂（ウンジユギヨクズヰ）は、俊賴說に、田の水口祭に、幣串に豆を貫きて立つるを云ふと也。當世農家、春にいたりて種をおろし、苗代をかまふの前、その田に幣を刺して神供を調へ、之を水口祭といふ。此の遺風ならし。○八雲御抄に曰、うずの玉かげとは、是田つくる時、田の神祭るとて、いぐしたてみわすゑ（一）などするに、大豆をつらぬきて、うず（二）のやうにするといへり。

【栞草】凡そ稻苗、水を得ざれば枯る。故に苗代水を引くの祭と云ふ。○

旱損・水損のうれへあらせじとて、苗代の水口に幣など立てて祭る也。

註（一）齋串立て神酒を供へ（二）髱葉。古へ葉の上に盛した食物。

季題解説 四月苗代田をつくると、苗代水の豊かであるやうに祈るこゝろから、その田の水口に藁で造つた五十串にさゝやかな幣を夾み、午頭天王を祭る。地方によつては牡丹の花、躑躅・青柳の枝など、その時の花を挿し添へたりする。

例句雜句

水口祭

小魚まで遊ぶ水口祭り哉　柳几（類題發句集）

水口や濁りにしまぬ幣の丈　平砂（古今句鑑）

水口を祭るくさぐさ蓑のうち　泊雲（ホトトギス）

水口祭る神酒たなそこにすゝりけり　村家（同　）

手を洗ふ水口祭終へにけり　紫陽花（續ホトトギス）

彼岸會（ひがんゑ）

彼岸詣（ひがんまうで）　彼岸參（ひがんまゐり）　お中日（ちうにち）　彼岸團子（ひがんだんご）

古書校註

【日次紀事】　凡そ京師の俗、彼岸中、偶ゝ親戚の忌日に逢へば、則ち茶菓を供して之を祭る。其の祭餘の菓を以て、互に相贈り、或は親戚・朋友を請うて茶菓を饗す。彼岸中、菓子を稱して茶子と曰ふ。（略）彼岸中、專ら佛事をなす。（略）男女毎夜頭人の宅へ聚り、彌陀像を掲げ、鉦を鳴らし、高聲に彌陀號を唱へ、其の終り高く音を揚げて急に之を唱ふ。是を責念佛と謂ふ。

【滑稽雜談】　玄門和尚心經講釋筆記に曰、波羅密多、譯して到二彼岸一と す。（略）彼岸は金剛經に、生死は此岸と爲す、涅槃は彼岸と爲す、煩惱は中流と爲す、とあり。即ち般若の一心三觀によつて、生死の此岸より、煩惱の中流を渡り、涅槃の彼岸に到るなりと云々。（略）年齋拾唾に曰、二季の彼岸といふこと、吾朝にて中古に始まりたる事、天竺・震旦に曾て沙汰なし。天上驗記幷びに彼岸功德經等、おほくの正經目錄に入りたる事なし。故に二中を選びて佛道を修行すること、其故なきにあらず。提謂經等に說き給ひし春秋八王日を、二日とりて用ふる歟。八王日とは、立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至也。此の日は天地陰陽交り調ひて、然も帝釋輔臣天下をめぐりて、罪を施す日なり。其の中の春分・秋分とは、二・八月の中也。春分は天地和煦して萬物成長し、秋分は秋律よく調ひて萬物成就せり。此の時を修道すれば福をいたすと云ふ。（略）時正は、彼岸功德經に二・八月七日晝夜同時に在りと說き給ふ日にて、彼岸の中日を云ふとなり。中日は年中の晝夜の少しも長短なく同じ故、時の正しきを以て云ふなり。

【東都歲事記】　彼岸。春分の初日より三日に當る日を初日とす。七日の間、諸寺院佛事を修し說法等をなす。この間參詣多し。俗家にても佛に供養し、僧に嚫す。（一）

同中日。時正。()增上寺、淺草寺、山門を開き諸人の登るをゆるす。

註 (一) 原本にはこの間に六阿彌陀詣・札所參の項に關する句數がある。六阿彌陀詣は別項を參照せよ。

季題解說 參照 時候—彼岸(ヒガン)

例句

彼岸會

何まよふひがんの入日人だかり　鬼貫（鬼貫句選）
まけよ蒔け佛の種も彼岸から　同（俳諧七車）
精進すなといはれし親の彼岸哉　來山（いまみや艸）
くもりしがふらで彼岸の夕日影　其角（五元集拾遺）
渡し舟武士は唯のる彼岸哉　同（五元集）
くゝだちの花うちこは(ぼ)す彼岸哉　支考（二吟集）
蝶〻も袖脫かけて彼岸かな　同（同）
さくら咲ひとえに彌陀のひがん哉　同（同）
命婦よりぼた餅たばす彼岸哉　蕪村（蕪村句集）
善根に炙(すゑ)居てやる彼岸かな　太祇（太祇句選）
起〻に蒟蒻賣ふ彼岸かな　同（同）
燕來てなき人問ん此彼岸　同（同）
らばかゝのさくらを覗く彼岸かな　同（同）
傾城に菎蒻くはす彼岸哉　几董（井華集）
信濃路は雪間を彼岸參りかな　也有（蘿の落葉）
吹つれて梵論(ボロ)も彼岸の步み哉　白雄（白雄句集）
山邊には櫻の芽を摘ひがんかな　同（同）
正月のこゝろ崩るゝ彼岸かな　成美（成美家集）
我國は何にも咲かぬ彼岸哉　一茶（七番日記）
ばくち小屋降りつぶしけり彼岸雨　同（同）
あゝ寒いあら〳〵寒い彼岸哉　同（九番日記）
ついて來た犬も乘る哉彼岸舟　同（一茶新集）
彼岸とて袖に這する虱かな　同（嘉永板發句集）
珠數さげて鍬の柄ねぎる彼岸哉　依中（三千化）
疱瘡の神へ彼岸詣のついでかな　子規（子規句集）
母の命日の前に詣りて
毎年よ彼岸の入に寒いのは　同（同）
牡丹餅の晝夜を分つ彼岸かな　同（同）
山門に錢ひろひたる彼岸かな　不迷（新俳句）
暮遲き彼岸の餅の餘りかな　青々（春夏秋冬）
彼岸會の鐘が聞ゆる畠かな　開古城（同人）
彼岸會や供華(ト)の菜種の眞ッ黃也　三幹竹（懸葵）
山寺の扉に雲遊ぶ彼岸かな　蛇笏（ホトトギス）

お彼岸や音羽の瀧のにぎやかに　誓子（同）
野佛に椿挿しある彼岸かな　博亮（同）
人ごみに蝶の生るゝ彼岸かな　耕衣（同）
逢ふごとに母老いましぬ彼岸餅　波留女（同）
洛中に鐘打ち合へる彼岸かな　つき子（同）
彼岸會や法衣をぬげば友來る　狂笑（同）
彼岸寺兵卒一人見えにけり　陽澤（同）
彼岸會や疊に杖をゆるさるゝ　紅隣（同）
彼岸會や身内の下駄を一纏め　幸叢（同）
お彼岸や池をめぐりて詣人　夜半（同）
杖にかさね老の兩掌や彼岸坂　靜雲（同）
うと／＼と彼岸の法話ありがたや　同（同）
餘寒尙去るや去らずにお中日　默禪（同）
剃りたての尼のつむりやお中日　氐人（同）
お彼岸の踏まれもせずにかたゐかな　曉水（續ホトトギス）
彼岸會の賽錢賣や鳥邊山　千畝（同）
道端の墓にも彼岸詣かな　未曾二（同）
牡丹餅の鹽の利きたる彼岸かな　溫石（同）
手に持ちて線香賣りぬ彼岸道　虚子（句集虚子）

踊念佛（をどりねんぶつ）

古書校註

【年浪草】毎歳彼岸の中日に、攝州四天王寺念佛堂にて此の事あり。天筆の名號とて、廿八菩薩の畫像を揭げて念佛修行あり。相傳ふ、良忍上人、洛北鞍馬の毘沙門天より感得の御影なりと。今日平野大念寺來りて、法事を修行す。法會なかば大和・河內の道心者（一）來りて、各々十德を著し、鉦に紉を付けて手に持ちたゝく也。踊るにはあらず。一心不亂に念佛して誠に感に絕えて踊るが如く見ゆる也。

註 （其諺の所說を襲用したものである。なほ時宗踊念佛を參照せよ。（一）佛道に歸依した人。

參照 時宗踊念佛（ジシウヲドリネンブツ）

時宗踊念佛（じしうをどりねんぶつ）

古書校註

【滑稽雜談】五條橋の西に在り。所謂御影堂也。一遍上人第二世應阿、自ら彌陀の像を作りて本尊と爲す。毎歲二季の彼岸、踊躍念佛を作す。（略）寺を新善光寺と號す。

【栞草】中世以來、尼を携へて、寺中みな扇を製して、これを四方に鬻ぐ。

世に御影堂扇と稱するは是也。【[illegible]】頭念佛ノ件

涅槃會

涅槃忌　涅槃の日　涅槃像　寢釋迦　涅槃會　涅槃圖　佛の別れ　二月の別れ　去りし佛　雙林の夕　鶴の林　鶴林の夜半　涅槃寺　涅槃西風　釋迦の鼻糞

古書校註

【山之井】釋尊跋提河の邊にて、薪盡き（一）給ひし日なれば、あるとあらゆる寺々に、涅槃の繪像を掛けて、宗々の行ひ侍る。是をなおすなみだやばだい川とも、鼻たれて鳴くやねはん象ともいへり。すべて此の經のていなどあるべし。

【御傘】佛の別。二月十五日也。涅槃とばかりも春也。

【日次紀事】佛滅日。凡そ三佛三祖の忌、（二）諸禪刹悉く之を修す。（略）洛内外の諸寺院は、涅槃像を掲げて各々法事を修す。民間には、舊臘造る所の餅花を再び熬りて佛に供す。俗誤りて釋迦の鼻屎と謂ふ。實は花屑なりと云ふ。

涅槃像。凡そ涅槃像の圖、世人美しと稱ふる所の者は、東福寺明兆畫、同じく三聖寺吳道子畫、高臺寺顏輝畫、大德寺松榮畫、妙覺寺古法眼元信畫、本法寺長谷川等伯畫、淨土宗報恩寺顏輝の圖等なり。凡そ毎年この時に及びて多く雪降る。故に俗・雪の終りは涅槃會と謂ふ。

【滑稽雜談】拾芥抄に曰、二月十五日、南都興福寺の常樂會。云々。（略）常樂會も涅槃會に同じ。涅槃とは寂滅なり。天竺にては佛になるを涅槃と云ふ。夫を唐土のことばに飜譯して寂滅と云ふ。寂とは圓寂の義、滅とは滅度の義なり。是一切の煩惱を滅し盡して、諸業まどかに止みたるを、圓寂とも寂淨とも云ふ。是不生滅の悟りなるゆゑ滅度と云ふ。然れば寂滅とも涅槃とも同意なり。今日を佛滅日とも云ふ。四月八日佛誕日、臘月八日佛成道日、是を三佛日とも云ふなり。諸宗毎寺院涅槃の法會を修す。攝州四天王寺に於ても常樂會と云ふ。

餅花煎。京師或は畿内の俗、正月用ふる所の餅花を貯へ置きて、二月涅槃に煎りて供物とす。又正月の餅を霰の如く切りて、煎りても用ふ。此の霰の名目は、表袴の紋、窠に霰の形に似たるの名なるべし。又蓬を入れて餡を製し供するを、何れも名附けてはなくそと云ふ。名義未だ詳かならず。疑ふらくは花供のあやまりなるべし。餅花を供する略語にや。

【年浪草】世諺問答に云、釋迦如來下天のはじめをたづぬれば、淨飯王の后に降誕して、七日に其の母摩耶夫人うせ給へり。十九にして出家、三十にして成道し給ひ、十八年法の恩を報ぜん事をおもひて、一夏九旬に法を說き、終に裟羅樹の間にして、涅槃に入給ひし佛のありさまを繪像にうつし、二月十五日に入滅し給へば、けふ掛くる也。（略）○涅槃像に五十二類・

天道・人道・地の三十六禽、恒河の鱗魚（ウロクヅ）、天地の間に生を受くるもの、皆愁歎の形容を畫く也。是を二月の別れ、佛の別れ、去りし佛など申す也。

註（一）日次紀事には、涅槃像の次に續けて、大雲院・嵯峨釋迦堂・栂尾・南都興福寺・同二月堂・攝州天王寺・泉涌寺の七項目を設けて、それぞれに涅槃法事を記いてある。（二）佛滅を薪盡きて火消ゆるにたとへいふ。（三）三佛の日は、佛滅日・佛誕日（四月八日）・佛成道日（臘月八日）、二祖の忌は、達磨忌（十月五日）・各寺院の開山忌をいふ。

季題解説　釋迦牟尼が沙羅雙樹の下に入滅した日は二月十五日である。（四月八日、二月八日、二月十五日、九月八日等の異説がある。）この日各寺院では、涅槃像を掲げ遺教經を誦して涅槃會を營む。我が國では壽廣和尚が山階寺で營んだと、今昔物語に出てゐる程で、餘程古くから行はれてゐたものらしい。今日では二月（妙心寺等）、一月遲れで三月（東福寺・泉涌寺等）、二月遲れで四月（大雲院等）に行はれ、または陰暦で行つてゐる寺もある。この法會を涅槃會といひ、營む寺を涅槃寺といひ、この日を涅槃の日、涅槃忌といふ。釋迦入滅であるから、佛の別れ、また、去りし佛といひ、二月十五日であるので二月の別れといふ。涅槃の有様を描いた圖及び

京都大雲院の涅槃會

木像を涅槃像・涅槃繪・涅槃圖・寢釋迦等といふ。この圖は五十二類、天道・人道・地の三十六禽、恒河の鱗魚、すべて天地に生を受けたるもの皆愁歎の有様を描く。その最も著名なものを京都東福寺のそれとし、最大なるものを泉涌寺のそれとする。全部木像で現したのが四國にあるさうである。東福寺のは兆殿司の筆で、縱八間、横四間、應永十五年六月、齢六十七歳の時の作で、頗る雄大な作である。三月十四・十五・十六日の三日間一般に拜觀せしめる。尙この東福寺の圖には猫がゐるので名高い。普通の涅槃像には猫がゐないのは、釋尊入滅の日、天から藥袋が下つて沙羅の枝に懸つた。ところが誰も取りに上る者がない。その時一疋の鼠がその藥袋の紐を切るべく幹を上ると、下にゐた猫が飛びついてその鼠を喰つたので、釋尊は藥を與へられることなくて入滅した。それで猫はその圖から除かれたのである。兆殿司も同じく猫を描かずに、毎日せつせとその涅槃像を描いてゐたが、或る一色が足らないではたと當惑した。ところがその時、毎日兆殿司

の繪を描く時は一心に見てゐる一疋の猫があつた。兆殿司が色に困つたところから戯れに猫に向つて、「お前もこの圖の中に入れてほしいならば、この足らない色を取つて來い」といつた。猫はその日から見えなくなり、或る日その色を啣へて歸つて來たので、やつと像が出來上つた。それで猫を書き入れたのであるといはれてゐる。その繪具の出た所は東福寺の東南で、今は繪具谷といふ。泉涌寺の像はもう一層大きく、本堂にさへ掲けることが出來ないで半分折つて掲げ、二三年以前から拜觀せしめてゐる。また大雲院は特別な行事をする。四月十五日午後二時頃から、惠心僧都作の長さ二尺三寸の釋迦像を輿に乘せ、衆僧が香華を捧げ、散華をしながら樂を奏して、本堂から羅漢堂に遷し、法事がある。その後本堂に還座し、法事を行ふ。これは釋尊の葬儀に擬したもので、開山貞安上人から興つて今日に至つてゐる。〔常樂會の項、及び嵯峨柱炬の項を見よ〕釋尊入滅の時、沙羅雙樹（沙羅樹が相對してゐる故に雙樹といふ）が、枝葉悉く垂れて釋尊を覆ひ、その葉白く變じ白鶴の如くなつたので、雙林の夕・鶴林の夜半・鶴の林などゝいふ。當日詣者に粥を供するので涅槃粥といふ。京都の市民はこの日、霰餅と豆を煎つて喰ふ。これをお釋迦樣の鼻糞といふ。鼻糞は花供御が轉じたのだといふ説もある。〔行事〕嫁花煎る　常樂會　嵯峨柱炬　遺教經會　〔天文〕涅槃西風　雪の果

例句

涅槃會

さるほどに千々に物こそかな佛　宗因（梅翁宗因發句集）
神がきやおもひもかけず涅槃像　芭蕉（曠野）
ねはん會や皺手合する珠數の音　同（續猿蓑）
薹立を折てさとるに早し涅槃粥　言水（俳諧五子稿）
鼠とる涅槃の猫とながめけり　同（同）
寢姿を佛の恥やけふ迄も　來山（いまみや草）
うめにまた鶯もどる涅槃かな　浪化（浪化上人發句集）
つけかうて鶯もどすねはんかな　同（同）
海棠の斷を悟れねはん像　其角（五元集拾遺）
涅槃會や嘘を月夜と成に鬼　蕪村（百池遺稿）
涅槃會や樹に後の世の種袋　同（落日庵句集）
西行の慾のはじめやねはん像　同（同）
こゝろゆく極彩色や涅槃像　太祇（太祇句選）
ねはむ會に來てもめでたし嵯峨の釋迦　同（同）
おそろしの掛物釘やねはん像　同（同）
涅槃會や禮いひありく十五日　同（同）
天人の肘に泪やねはん像　召波（春泥發句集）
山寺や誰も參らぬねはん像　樗良（樗良發句集）
涅槃會や梅散るまでは佛在世　也有（蘿の落葉）

金色の、茶は今さくや涅槃像　同（蘿葉集）
花に啼縮になく鳥や涅槃像　同（同）
涅槃會やされども雁は生別れ　同（同）
蚊時なら嘸來て啼ん涅槃像　同（同）
起て居る佛はさびしねはん像　同（同）
下手の繪を笑つ泣つ涅槃像　同（同）
花はまた遺言にして涅槃かな　同（同）
涅槃會の仕回ひや寺の夕烟　同（同）
寺町や猫と涅槃の戀無常　同（同）
ねはん會や遲れてひとつ飛胡蝶　蓼太（蓼太句集）
一休は何とおよるぞ涅槃の日　几董（井華集）
ねはん會や往來の人をひまの駒　白雄（白雄句集）
涅槃會や身は寺入の穀つぶし　同（同）
磯なれし松も見らるゝねはんかな　同（同）
梟のつらも佛のわかれかな　同（同）
去年より今年佛の別かな　同（同）
涅槃會や雲下り來る番羽山　曉臺（曉臺句集）
古寺や泪に兀るねはん像　闌更（半化坊發句集）
かゝる世に出ても詫ず涅槃像　同（同）
これほどに見事に死ねば佛哉　士朗（枇杷園句集）
盗人の返しにゆきぬ涅槃像　同（同）
薪買にゆくひととへばねはん哉　同（同）
蒲公英の天窓そつたるねはん哉　一茶（七番日記）
涅槃像錢見ておはす兒もあり　同（西歌仙）
御佛や寢ておはしても花と錢　同（おらが春）
寢ておはしても佛ぞよ花が降る　同（一茶句帖）
小うるさい花が咲とて寢釋迦哉　同（同）
相伴に我等もころり涅槃哉　同（同）
ぽつくりと死ぬが上手な佛哉　同（同）
辻堂や掛つ放しのねはん像　同（同）
花のところへ雪の降る涅槃哉　同（一茶發句集）
御ねはんやとりわけ花の十五日　同（嘉永板發句集）
廣大な事で泣れずねはん像　乙二（たのゝえ草稿）
燈のかげもにほへねはんの經の紐　同（同）
ねはん像ひまゆく駒も見ゆる也　同（同）
こしらへて泣や涅槃のからし和　梅室（梅室家集）
御冥加に凸ふまれつねはんの日　同（同）
此外に御さくらやねはん像　同（同）

牛の子の庭に出初る涅槃哉　伊珊（淡路嶋）
涅槃會や戻りに拾ふ鹿の角　巴靜（三千化）
涅槃會や浴室は皆裸蟲　乙由（菱林集）
蕣は今二葉也ねはん像　同（同）
結構な林の中にねはん哉　湖雀（けふの昔）
山寺の涅槃參りや晝下り　鳥跡（年尾）
大幅はいとゞ悲しきねはん哉　素丸（百番句合）
はし近く涅槃かけたる野寺哉　樹鳳（續明烏）
ねはん會や茶袋かけし梅の枝　吟江（行雲日記）

眠猫圖

鼾すなり涅槃の寺の裏門に　子規（子規句集）
山寺や鼠の喰ひし涅槃像　松宇（新俳句）
藪寺の涅槃におくれ白椿　吾空（春夏秋冬）
受附に墨する僧や涅槃寺　晨路（同人）
涅槃會に雪垣拂ふ田寺かな　三幹竹（懸葵）
霞む樹に藥袋や涅槃像　鼓竹（倦鳥）
靜なる歎きのさまや涅槃像　蟹樓（同）
はなやかに詣でゝ暗し涅槃像　村家（ホトトギス）
涅槃像動かし去りし風なりし　溫亭（同）
大寺や何處まで這入る涅槃佛　同（同）
わが好きな猫がをらぬや涅槃像　月尙（同）
天彥の烏がかなし涅槃像　青畝（同）
あらかんの口開きそろひ涅槃像　同（同）
葛城の山懷に寢釋迦かな　同（同）
涅槃像掛けどほしなる書院かな　素香（同）
涅槃像さはり拜みし盲かな　櫻朶（同）
ねもごろに尼の繪解きや涅槃像　水鳴（同）
浮世繪のくろき漢の寢釋迦かな　夜半（同）
大顏をむけたまふなる寢釋迦かな　同（同）
お障子の人見硝子や涅槃寺　靜雲（同）
涅槃圖の裏にましますす阿彌陀佛　ちかし（同）
波立てる抜提河あり涅槃像　たけし（續ホトトギス）
むかしから貧乏寺や涅槃像　草餅（同）
魚浮いてかなしきかなや涅槃像　鴻乙（同）
內陣に涅槃の月のかゝりけり　松彩子（同）
襖なる四季の草花や涅槃像　草兵衞（同）
舌吐いて牛の歎ける涅槃像　龍男（同）
ねん顏の三十路人なる寢釋迦かな　草田男（同）

日照るとき魚介交り來涅槃像　青畝（同）
大いなる幅解けてきて涅槃變　同（同）
獸に靑き獅子あり涅槃像　夜半（同）
蠟涙の岩が出來けり涅槃像　鬼橋（同）
けだものゝ口あけ古りし寢釋迦かな　鹿影（同）
しろ〳〵と寢釋迦の額の胡粉かな　虛子（句集 虛子）

餅花煎る（もちはないる）

季題解說 京畿の古俗で、正月に用ひた餅花を貯へて置き、涅槃會即ち陰曆二月十五日に煎つて供物とする。或は正月の餅を霰のやうに切つて用ひもする。俗に「はなくそ」といふ。〔參照〕涅槃會（ネハンヱ）

開帳（かいちやう）　開龕（かいがん）　出開帳（でかいちやう）

季題解說 神佛の厨子の扉帳を開いて、祕佛などを親しく信徒に拜ますことをいふ。その祕佛等を他の地に移してそこで拜觀せしめることを出開帳といふ。この開帳、出開帳は多く三月、四月または五月等、時候のよい時に行つて參詣者の便をはかる。

例句 開帳

山里や騙り佛の出開帳　竹叟（同人）
どの花の幹にもびらやお開帳　躑躅（ホトトギス）
大寺の中の一寺や出開帳　ながし（同）
炎上をまぬがれたまひ出開帳　楞童（續ホトトギス）

佛生會（ぶつしやうゑ）　灌佛（くわんぶつ）

季題解說 灌佛會・釋尊降誕會・誕生會・龍華會・浴佛節・花まつり等皆同じことである。四月八日、釋迦の誕生日に寺院等で行ふ儀式である。藍毘尼園にて誕生の時、八大龍王が歡喜のあまり甘露の雨を降らして產湯せしめたといふ故事から、誕生佛に甘茶を灌ぐので、灌佛會とか浴佛節とかいふ名のある所以である。關西では一ケ月遲れの五月八日に行つてゐるところもあり、田舍では今尙陰曆四月八日に行ふ向も少くない。〔參照〕花祭（ハナマツリ）花御堂（ハナミダウ）甘茶（アマチヤ）竿躑躅（サヲツツジ）夏—佛生會（ブツシヤウヱ）

例句 佛生會

麥飯や母にたかせて佛生會　其角（五元集）
灌佛や捨子則ち寺の兒　同（同）
灌佛にまたうす〳〵と橫目かな　越南樓（ホトトギス）
灌佛に杓打ちあてぬもたいなや　麻葉（同）
灌佛や句會なじみの阿彌陀池　水鳴（同）

佛生會

發誕生佛へ一すぢに　ゝ石（ホトトギス）
灌佛の晨鐘つける童子あり　朱人（同）
灌佛のたらひの紋の葵かな　月士（同）
灌佛の右手より乾きたまひけり　夏山（同）
灌佛や母のしたしむ蓬の湯　稚女（續ホトトギス）
灌沐の淨法身を拜しける　久女（同）

花御堂（はなみだう）

【季題解説】　四月八日の佛生會に、灌佛を行ふ爲めに作られる小さな御堂で、主にお寺の本堂入口、山門等に設けられる。御堂は大概四本柱の四阿のやうな造りで、屋根は種々の花で美しく葺かれ、堂の中に浴佛盆（水盤）を置き、浴佛盆の眞中に、右手を高く上げ左手を下げた半裸形の釋迦の銅像を安置し、浴佛盆には甘茶を湛へ、小さな柄杓を添へてある。參詣者は隨意に柄杓をとつて御釋迦の像を浴せしめるのである。甘茶の中にはよく賽錢の銅貨が沈んでゐたりする。

屋根を葺くのに用ひられる花は椿・櫻・連翹・木蓮・辛夷・菜の花・あざみ・豆の花・其他いろ〳〵の花で、それ〴〵の趣向を凝らされ感じのいゝものである。東京附近の二、三のものを書いてみるならば、芝增上寺では毎年山門内左側に造られ、朱の漆塗の臺や柱は大分古く、所々塗が剝げてゐる。屋根は全部、花、蕾、葉のよく付いた一重椿の枝そのまゝで厚く葺いてあつて氣持のよいものである。浴佛もよく出來てゐる。鎌倉建長寺のは屋根は總て棕櫚の葉葺であつて、これも潔い感じで、いかにも禪寺らしい。圓覺寺のは見事な大花御堂であり、八重櫻、海棠、椿、連翹等大きな枝のまゝで葺いてあり壯觀である。片瀨の龍口寺の御堂は、屋根は總て濃い菜の花で、屋根の四つの角のところに椿の花を並べ、棟は杉の葉、四簷には馬醉木の花房を垂らしてある。藤澤遊行寺のものは菜の花を主に色々の草木の花をあしらひ、角切三の字紋を現してある。市中の末寺、田舍の野寺など、花が少ければ少いで又趣のあるものである。【參照】佛生會ブツシヤウヱ

花祭ハナマツリ

【例句】

花御堂

御堂葺く花とりに行く水べかな　月舟（ホトトギス）
中程に凄れし藤や花御堂　紫雪（同）
ある寺の障子ほそめに花御堂　素十（同）
四方より杓にぎはしや花御堂　十雨（同）
屋根替のさなかの寺の花御堂　鹿郎（同）
一人去り一人立寄り花御堂　無明（同）
菜の花の色こそ濃けれ花御堂　夏山（同）

子供等のゐるばかりなり花御堂　萍花（續ホトトギス）
花御堂四の柱の見えにけり　夜半（同）
針子居るまづしき寺や花御堂　草秋（同）
葺きまつる芽杉かんばし花御堂　久女（同）
鉦を打つ有髮の僧や花御堂　金市（同）
青木の實卍にくめり花御堂　奈王（同）

甘茶（あまちゃ）

五香水（ごかうずゐ）　五色水（ごしきずゐ）

【[illegible]】釋尊降誕會の時に、花御堂の中に安置してある誕生佛に甘茶を灌ぎかけるといふ行事は、何となくお伽噺的の興味があつて面白い。その日、寺々では、甘草を煮て作つた甘茶を大きな壺や桶などに入れて置いて、乞ふ人々に汲みとらせる。これを貰つて來て眼を洗ふと眼病が癒るといふ迷信から、善男善女が空瓶や土瓶や德利などを携へて甘茶を貰ひに寺へ行く。お婆さんが孫に土瓶を提げさせて、杖を傾けながら庫裡へ入つてゆく、といふやうな風景が今でも至る所のお寺に見られる。お寺によつては甘茶でなしに五香水・五色水といつて、五種類の香を溶かせた五色の水を作つて、これで灌佛をする所もあるが、普通は甘茶を用ひる。【参照】佛生會（ブツシヤウヱ）花御堂（ハナミダウ）　竿躑躅（サヲツツジ）

【[illegible]】

甘茶

底抜けし柄杓もありて甘茶佛　光王（ホトトギス）
ねもごろに老の灌げる甘茶かな　汀郎（同）
草葺の門を這入りぬ甘茶寺　夏山（同）
甘茶佛すこしまがりて立ち給ふ　たけし（同）
み佛の産湯かはりてにほひけり　青畝（同）
人の世の樋の落ちたる甘茶かな　有風（續ホトトギス）
里寺や甘茶の日とて賑へり　迷子（同）
ゆれあへる甘茶の杓をとりにけり　素十（同）
裏山に鶯鳴くや甘茶寺　青邨（同）

竿躑躅（さをつつじ）

花の塔（はなのたふ）

【[illegible]】京阪地方では、四月八日釋尊降誕會の日に「てんとう花」と云つて、家々で物干竿の先に躑躅の枝を縛りつけて、庭や戸口に立てる風習がある。山間地方では躑躅の代りに石楠花を用ひる所もあるが、大體は躑躅にきまつてゐる。釋尊降誕會は都會では大抵新暦で行はれてゐるが、竿躑躅は都會でも多く舊暦でやつてゐる。隨つて陰暦四月七日から八日の朝にかけて、花賣が「てんとう花〳〵」と云つて町々を賣り歩くのが例となつてゐる。【参照】佛生會（ブツシヤウヱ）

花祭

季題解説 四月八日、釋迦牟尼佛降誕を祝福する目的で、佛教各宗寺院で修する法會である。大阪では天王寺の花祭などが殊に盛んである。寺内の石の舞臺の上に設けた灌佛の釋迦像や白像を中心に、朝から善男善女が押しかけ、各派の僧侶は胸に櫻花の記章をつけて斡旋につとめ、國歌の合唱があり、少年少女たちが美しい花を獻じたり供物を捧げたり、僧侶の歎德文奉讀、皇國安泰の默禱などがあつたりする。一方には甘茶の接待がある。東京では日比谷公園で花祭がある。その他、ところによつて稚兒が練りまはつたり、舞や踊があつたり、思ひ思ひの趣向をこらして樂しむのである。元は淨土宗に限つてこの祭があつたのであるが、今は一般的になつた。

〔參照〕 佛生會　花祭

例句

花祭

一山のあまたの沙彌や花まつり　句一歩（ホトトギス）
花祭化粧もなかの稚兒溜　雨圃子（同　）
オルガンを彈ける御僧や花祭　月倘（續ホトトギス）
忠孝の額かゝげあり花祭　風外（同　）

千本念佛

古書校註

【日次紀事】 當月、（一）千本引接寺閻魔堂大念佛あり。是も亦融通念佛の餘流也。每年堂前の普賢象櫻の花開くを期と爲し、寺僧一枚を折りて所司代に獻ず。卽ち米三斛五斗を賜ふ。是を以て七箇日の念佛の料と爲す。一說にこの法事は、もと每年刑死の人の爲に、追薦を修する者也。故に所司代より米を施せらると。

【滑稽雜談】 定覺上人（二）三所に開發すとは、千本・嵯峨・壬生にて侍る由也。如琳上人は、其の後絕えたるをば再興し給へると也。殊に千本には、如琳上人遺教會などをもはじめ給ふ也。此の寺の櫻に普賢堂・普賢象の二說侍る也。舊說には皆堂の義をいふ。今世俗又此の花種を、すべて普賢象と云ふ也。此の花の盛りに及びて、所司獻上の翌日より十日の間、念佛幷びに俳優を行ふ。此の寺在家にならびて境內せばし。壬生などにはまたおとり侍らん歟。然れども千本念佛とて、洛西の壯觀也。

【年浪草】 此の所を千本と云ふ事、昔篁の窟の日藏上人、冥土に至りて約すること有り、其の御爲に、千本の卒都婆を船岡山に立てて、供養を修す。此の處船岡に續く。仍りて名づく。〔參照〕 壬生念佛　嵯峨の大念佛　遺教經會

註 （一）二月。（二）山門櫻川の記の所說。栞草には「開基定覺上人、鐘の銘に顯然たり。定

覺のことは遺教經にみゆ」とある。

壬生念佛（みぶねんぶつ）　壬生狂言（みぶきやうげん）　壬生踊（みぶをどり）

古書校註

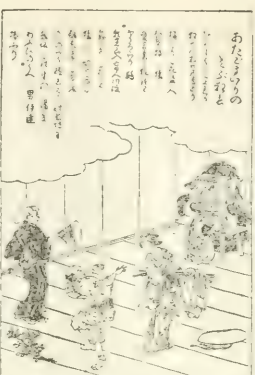
【日次紀事】壬生地藏堂大念佛。今日(一)より廿四日に至りて、壬生地藏堂大念佛あり。是も亦融通念佛の餘流也。午時、土人俳優をなす。是諸人の睡を醒さんが爲也。

【滑稽雜談】當世なほ是を行ひ、幷に此の村の土人俳優をなして、參詣の衆人の眼をさます。是又融通念佛の餘流なり。其の俳優に用ふる假面は、佛工定朝が彫刻せる者三面侍り。然れば此の俳優の儀も、往昔より侍りけるにや。此の會場において、俳優の面をまねびて、張ぬきの面をつくりて是を商ふ。參詣の兒女是を競ひてもとむる也。俳佛の猿・桶取の女の面抔いへるを根元とす。當世に至りて、人物畜類の假面、稱計すべからず。

【年浪草】壬生祭。通俗志、壬生念佛に並記せり。然れども別に祭なし。鎭守祭は五月十三日也。和俗神事佛事をいはず、所に預りて執行するを其處の土人祭と稱して、親戚を招きて饗應す。壬生祭と云ふも亦壬生念佛を云ふべし。

註 (一) 三月十四日

季題解說

四月二十一日から五月十五日まで二十日間、京都市中京區壬生寺で無言の念佛狂言がある。これを壬生狂言といひ、この間、寺で行ふ法會を壬生念佛といふ。寺は眞言律で、昔は寶幢三昧院または地藏院といつて、江州三井寺の僧快賢僧都の開基、正曆二年の草創である。本尊は地藏菩薩でこの二十日間開帳をする。壬生狂言は境內北方の高殿建の舞臺で演ぜられ、田樂に類した手眞似足眞似ばかりの無言のものである。この狂言の起源は、圓覺上人が蒙昧の者を菩提の道に導く方便として創めたもので、無言劇としたのは科白の聞えない後方多數の人達にまで、充分わけのわかるやうに仕組んだものであるといはれる。今日では新作も出來て、面白可笑しく見せるのが主となり、能狂言から脫化したのも多い。古い番組は桶取、炮烙

割・道念・閻魔角力・猿・花盗人・花折・熊坂・大原女・釣狐・餓鬼貢・腹鼓・愛宕參・酒倉・棒振・節分・紅葉狩等であるが・現今は五十何番になつてゐる。この間境内に張子の面店が出て、竹に銀紙を張つた鬼・振棒・長刀・刀などを賣る。この面を壬生の面といひ、狂言中に叩く銅鑼の音を壬生の鉦といふ。【[illegible]】千本念佛(センボン)　嵯峨の大念佛(サガノダイ)

【[illegible]】

壬生念佛

頃ぞ花揚屋の[illegible]壬生念佛　　言水（俳諧五子稿）
永き日をいはでくるゝや壬生念佛　　蕪村（蕪村遺稿）
墨染のうしろすがたや壬生念佛　　太祇（太祇句選）
狂言は南無ともいわず壬生念佛　　同（同）
山吹やいはでめでたき壬生ねぶつ　　召波（春泥發句集）
孫どもにすゝめられてぞ壬生念佛　　素外（古今句鑑）
菜の花に高き舞臺や壬生踊　　四方太（春夏秋冬）
壬生念佛すみて菜の花月夜かな　　四明（懸葵）
大勢の尼が見に來し壬生念佛　　ながし（ホトトギス）
午飯を食ひに歸るや壬生念佛　　喜舟（同）
肩脱ぎて赤き襦袢や壬生念佛　　桐一（同）
舞臺父子供まかせや壬生念佛　　牧春（同）
年々に[illegible]染の面や壬生念佛　　野風呂（同）
狂言の札またかはる壬生念佛　　暮情（同）
蝶々のとんでねむたし壬生念佛　　池冷（續ホトトギス）
ゆるやかに間なくひまなく壬生念佛　　野風呂（同）
壬生念佛舞臺の下で仰ぎけり　　虚子（句集虚子）

嵯峨の大念佛

【[illegible]】

【日次紀事】今日（一）より是を始む。亦融通念佛の餘流也。午時、上人堂上に於て俳優をなす。是諸人の夢を醒ます爲也。

【滑稽雜談】今世に至りて、猶釋迦堂において上人此の念佛を行ふ也。一說、龜山院文永年中、如琳上人此の念佛を行ふ由傳へたり。猶千本念佛の所に委註す。（二）此の會の俳優も、おほくは壬生・千本におなじ。假面を懸けて勤む。千本に相似て鉦を發し、狗をいふ也。十日の間、優戲を行ふは三日也。開闢の日、乃至十三日、又結願の日行ふ也。

【註】（一）三月九日。（二）千本念佛の項に掲げた滑稽雜談の所說を參照せよ。

【[illegible]】四月十一日から十五日まで、嵯峨清涼寺釋迦堂で大念佛法會を營む。（昔は三月九日から十五日までゞあつた）その十一日・十三日・十五日の三日間、壬生狂言と同じ無言狂言がある。その狂言の起原は、開山圓覺上人が早く父に別れまた母にも捨てられ、母に逢ひたさのまゝ、融通念佛

を弘め、外僕に異裝の振舞をして踊つて念佛したところ、その群集の中から母が出て來て巡りあつたと傳へられるその故事から出てゐる。謠曲の百萬はこのことに因んで作つたものである。〔參照〕千本念佛（センボンネンブツ）　壬生念佛（ミブネンブツ）

〔例句〕
嵯峨の大念佛
嵯峨念佛松に凭り見る花疲れ　ながし（ホトトギス）
嵯峨念佛鐘撞堂に立ちて見る　青蘆（同　）

二月堂の行（にぐわつだうのおこなひ）　修二會（おたいまつ）

〔古書校註〕

【誹諧初學抄】　奈良の都にあり。二月一日より十四日までなり。水取とて若狹〳〵といひて祈れば、常は水も無き井戸より、必ず水わき出づる也。その水にて墨をすり、札を押す也。

【日次紀事】　牛王加持の行法有り。今日（一）より七日に至る。是を上七日と謂ふ。二月堂觀音像大小二體有り。上七日は大像觀音前に於て、法事を修す。八日より十四日に至れば、則ち是を下七日と謂ふ。是小觀音の法事也。七日の夜、又十二日の夜、共に水屋の井に於て、牛玉を貼する所の水を取る。凡そ年中用ふる所の水、此の兩夜之を汲みて桶に蓄（二）ふ。古へ實忠若狹の國箚飯明神の詫宣に依りて、水を枯井に取りて牛玉を貼す。七日・十四日の夜、水必ず枯井より涌出すること、今の井水の常に滿てるが如し。今夜水を取る咒師は、實忠に准ふ者也。東大寺の僧、各々朔日より十四日に至るまで二月堂に參籠す。晝夜、行法有り。是を籠りと謂ふ。其の僧忌服有る者、並びに疾病有る者は之を勤むること能はず。十人或は十五人より二十人に至る。年に依りて多少あり。相傳ふ、籠りの僧多ければ則ち其の年吉有りと。參詣の男女、所願有る者は佛前に止宿す。是も亦籠り、或は通夜と稱ふ。今夜、（三）東大寺二月堂行法出仕の僧、室より廊下を歷て堂に入る。有髮の者、大松炬を取り、先づ寺僧啓行して堂を巡り、曉に至りて水を取る。十二日の夜も亦然り。

【滑稽雜談】　靈符とは乃ち牛王也。〇或說に云、牛王と云ふこと、牛玉と書くは誤なり。元來璽也。璽是を草に書く。筆法僅かに上に餘るを以て、牛玉と二字に書き來れるなり。

〔註〕（一）二月一日。（二）原本に畜と誤る。（三）二月七日の夜。

〔[illegible]〕
奈良東大寺において國家安穩を祈禱する行法である。三月一日から十四日まで（昔は陰曆二月一日から十四日まで）、衆僧が參籠して晝夜嚴肅な行法を修するのであるが、參詣の人も所願あるものは佛前に止宿して、所謂「籠り」をする。しかし高貴の方と雖も女の參籠は許されない。大松明行法に參籠する僧侶を練行衆と呼ぶ、人員は最少人數を十一名と限定す。人選は每年十二日十六日、開山良辨忌法會の席で、東大寺別當華嚴管長が定める。二月十八日から、堂童子が別火といつて日常

使用の火とは別の常燈より得た火で食事を作る清らかの生活に入る。此日が修二會の事始とでも云ふべき日である。そして二月十九日から(一)注連縫ひ、(二)試別火、(三)惣別火、(四)大中臣の祓を行ふ。(五)三月一日參籠になつてから、授戒に初まつて、(六)德火、(七)食堂作法、(八)神所と例時、(九)六時、(一〇)實忠忌、(一一)過去帳、(一二)走りの行法、(一三)小觀音(一四)牛王日、(一五)籠松明、(一六)御水取、(一七)達陀の妙法、(一八)涅槃講等と順次種々の行が行はれて終るのである。これ等の行の中、惣別火中は夕方に法螺貝の吹合せがある、(禁裏大喪の際は之を禁ぜらる)。これは毎年十二月山内諸院で吹き始め練習する。これを師走貝といふのであるが、別に季題として面白からうと思ふ。籠松明は二十貫からの大松明で、廊下の石段から舞臺に運び、車輪に廻すので火車である。これも季に入るべきかと思ふ。

參照　御水取

參考資料　毎年三月一日より二七日の間、奈良縣(大和國)東大寺二月堂に於て修する行法なり。舊くは陰曆二月朔日に行ひたるを以て、一に修二會と稱し、此の堂を二月堂と稱するに至れり、

その儀先づ前年十二月十六日開山良辨僧正の忌日法要の席上に於いて、東大寺別當職より選定せられたる參籠僧卽ち練行衆十五六人、前月二十日より別火生活とて日常使用の火を聖水にて消し、二月堂觀音寶前の常燈より移し來れる火を以て煮物をなす、之を試別火・惣別火と云ひ、又寢食を別にし、日夜精進潔齋をなす、之を前行と云ふ。三月一日常燈の點ずる頃に至りて、六時(日中・日沒・初夜・半夜・後夜・晨朝)の行法中、日中・日沒の勤行を修し、終りて一旦參籠所へ下る、午前七時大佛殿より初夜の刻報ぜらるゝや再び上堂す。その狀、十二人の童子三間餘の青竹に杉葉を付けたる大松明十二本を擔ひて先驅し、練行衆下座の者より順次階段を上りて禮堂に參入す。世俗之をお松明と稱し、此の行法の別名となすと云ふ。次いで初夜・半夜・後夜・晨朝の勤行を修す、卽ち大中臣祓・授戒・一德火及び一萬三千七百餘所の大明神を勸請すべき神名帳の讀上げ等の行法あり、以下午前二時或は三時に至る間苦行を續け、一日の勤行を終る。尙ほ此の會中、食堂に於いて食作法と稱する食前に行ふ法式あり、卽ち練行衆の入室、着席に皆次第を有し、型の如く配膳あり、咒願了りて始めて食を採り、了りて法の如く室を出で、堂に入りて行法に從ふものにして十二日間之を繰返して行ふ。但し十二日夜の松明を特に籠松明と稱す。是は京都・大阪・奈良方面の信者中より奉納するものにして、周圍一尺二三寸、長さ四間の根節を有する青竹の先端に、折板を結び、その裾を檜の青葉にて包む、而して此の籠中には杉の枯葉を入れて火を點ず。故に此の夜の壯觀は他のそれに比して全く言語に絶するものありと云ふ。

十三日午前二時頃に至りて水取の行法を行ふ。卽ち十二日後夜の勤行半頃

に及び、練行衆中の四職の一なる咒師（所謂密教の擔當者にして香水を加持し、龍神を勸請し、或は道場の結界等を掌る練行衆中の最も重き役）、大松明を抱ふる童子を從へて先頭に立ち、次に四職以外の平衆の第三席以下の人々牛王杖と稱する長き楊の枝をつき法螺貝・金剛鈴等を持ち、手松明を持つ童子及び仲間を從へて本堂の南出仕口より戸外に出づ、軈て本堂の南側の青石段上に進むや、諸衆一齊に法螺貝を吹き、咒師散杖を以て香水を加持し、雅樂の音にて石段を下り、閼伽井屋（一に若狹井とも云ふ）の東寄なる良辨杉の下の遠敷明神の小祠に參詣し、一同祈請す、次に咒師堂童子を引連れ阿伽水を汲む、此の時咒師に隨伴せる諸衆阿伽井屋の入口に整列して警護をなし、時々法螺貝を吹きて本堂との連絡を劃り、且つ阿伽水を運ぶ合圖をなす。此の音數回、諸衆元の如く列を作りて本堂に還る、かくて汲まれたる阿伽水は之を御香水と稱へ、內陣の須彌壇下の五箇の壺に貯へ、一年間佛事の用に供せらると云ふ。因に此の水取を行ふ時期は、關東にて「暑さ寒さも彼岸まで」と云ふが如く、奈良附近住民の寒暖分岐の一標準とせられたり。以上にて二月堂に於ける行法を全く終了す。

此の行事は、二月堂緣起に依ると、東大寺の開山良辨僧正の弟子實忠和尚が、攝津の難波に於いて海中より觀世音の尊像を得、二月堂を創建して之を安置し、天平勝寶四年二月一日初めて悔過を修せしより、爾來千數百年間一度も中絶することなく今日に及ぶと云ひ傳へたり。

御水取（おみづとり）

季題解説 東大寺二月堂の行のうちの一つである。三月十二日（眞夜中の二時即ち十三日の午前二時前後）、咒師を先頭に北座衆之二以下の衆が、牛王杖といふ長い楊の枝を突き、法螺貝金剛鈴等を持ち、童子に手松明を持たせ、仲間を從へて南出仕口から出る。咒師は一抱もある長さ一丈ほどの大松明（ハスと稱する松明）を童子に抱へさせ、青石段上に進む。此所で諸衆は一聲に法螺貝を吹き、咒師は散杖を以て香水を加持し、奏樂の音も靜々と段を下り、良辨杉の下にある小さな祠に參詣し、諸衆と共に一向に祈願するのである。かくて咒師は童子を連れて閼伽井屋に入り、若狹國遠敷（ニフ）明神を祈請して、御香水を汲取るのである。これは堂の創者釋實忠に若狹國の遠敷明神が遙かに閼伽井を供與したといふ傳說から來てゐる。音無川は若狹の國小濱町を流れてゐる小川であるが、若狹にもこの傳說があつて、今尙二月堂へ水を送る式を行つてゐる。小濱町から約一里、音無川の上流に一小祠があつて、その境內を流れる川水は澱んでゐる。其處へ夜の十二時頃、手松明を焚きながら小濱の町民及び附近の人々が集つて式を行ふのであると、その地の神主の實話である。さて咒師に隨伴した諸衆は、本堂と閼伽井屋の入口に列んで警護の任に當り、時々法螺貝を吹き、本堂と閼伽

井屋との連絡を計り、閼伽を運ぶ合圖をするのである。かくすること數回の後、法螺の音高く、諸衆は例のやうな列を作つて本堂に運るのである。この水で牛王の靈符を賦して參詣の人に與へるのである。このお水取の式は昔から世間に廣く知れ渡つてゐて、修二會全體を意味するやうになつてゐる。【[illegible]】二月堂の行法

[illegible]

御水取

水とりや氷の僧の沓の音　芭蕉（小文庫）

水取や提灯を借る東大寺　虚明（俳鳥）

水取のあとに殘しゝ春の泥　古泉（同）

水取や鐘につきたる火屑みち　實雨（ホトトギス）

水取の鐘の聞ゆる泊りかな　行々子（同）

水取や僧のたむろす影法師　六村（續ホトトギス）

水取のいたくほぐれし法衣かな　直堂（同）

水取や格子の外の女人講　櫻坡子（同）

御身拭（おみぬぐひ）

[illegible]

【日次紀事】嵯峨清涼寺、釋迦御身拭あり。諸人群集す。今日開帳し、寺僧は各々白巾を以て佛像を拂拭す。俗是を御身拭と謂ふ。

【年浪草】御身拭の起りは、此の堂建立の人、七日參籠のうちに本尊告げ玉ふ。汝が父今生を畜生に轉じ、此の堂の材木をひく牛となる。獨增に善をなし、佛果を得せしむべしと也。急ぎ此の牛をこひ得て堂の側に繋ぎ、父の思ひをなして養ひしが、三月十九日をはりける。佛果を得させん爲、牛の衣を以て如來を拭きて、赤栴檀の薫りをうつし、牛に著せ葬りけり。其の後年毎に今日如來の妙香をうつして、衆生煩惱の不淨を清むと也。

[illegible]　四月十九日、京都嵯峨清涼寺釋迦堂の行事である。本尊栴檀瑞像釋迦牟尼如來は、優塡王の御願で毘首羯摩の作、釋尊三十七歲の御姿の模作、一千三百七十六年天竺において衆生化益、後支那に移し、六百一年衆生濟度。一條天皇永延元年、奝然大師歸朝、五台山清涼寺造營、三國の土を以て境を築き、瑞像を本尊と崇め奉る。この瑞像の扉を開き、白巾を以て拭き奉る儀式である。午後二時、紫衣の老僧が御身拭の由來を傳へ、一場の說敎がある。それが濟むと煌たる百目蠟燭明りに、御身拭の法要がある。脇師も美々しき法衣をつけ、息のかゝらぬやう口覆をなし、右から香水に浸した白木綿を渡すと、老僧はそれで立ち塞がるやうにして、上から下にかけて靈像の全身を懇に拭ひ奉ること數十回、約十五分間かゝる。この御身拭の幾十反の白布は、歿後の經帷子に用ひるので、善男善女が珍重する。その法要中讀經は續けられ、鉦鼓の音が高い。寶鏡を吊して照し奉るから、遠くからもよく瑞像を禮拜し得る。終るとさきの老僧は一皆さん

の心も釋迦牟像の如く淸らかでせう、歸られてもこの心を持して居て貰ひたい」と希望をのべ、諸人の唱名のうちに御閉帳となるのである。

例句

御身拭

御身拭淨土や北の越後布　　吉水（俳諧五子稿）

御僧のその手嗅たや御身拭　　太祇（太祇句選）

乘物で僾婆夷も來るや御身拭　　召波（春泥發句集）

ばゝ嗅の肩ぬぐ空や御身拭　　几董（井華集）

堂に拂ふ袖の落花や御身拭　　秋翠（懸葵）

道明寺祭（だうみやうじまつり）

古書校註

【年浪草】當寺は河内國志紀郡土師（ハン）村に在り。故に又土師寺と曰ふ。（略）天暦年中菅靈を北野に祭る時、此の所にも亦社を建てゝ之を祭る。二月廿五日祭禮の儀有り。（一）雜談抄に云、當寺奥の天神と申すは、天穗日命の宮也。菅靈の社と二社合せ、此の廿五日に祭るを、道明寺祭と云ふ。云々。世に所謂道明寺糒（ホシイ）と云ふは、此の寺の比丘尼の手業なり。

參考

道明寺は大阪府下道明寺村（舊、河内國志紀郡土師村）に在る。土師寺ともいひ、高野山を本山とする伽藍であつて、菅原道眞公の氏寺であつた（道明は菅公の名であるといふ）。當時中興の住持覺壽尼は菅公の伯母であつたので、菅公筑紫へ左遷の時この寺に一泊して、鷄の曉の別れを惜み歌をのこされたと傳へられ、里人は今日に至るまで鷄を飼ふことを忌むといふ。道明寺のある地は元、野見宿禰の所領地で、土師の里と稱し、道明寺は土師寺ともいつて土師神社と一しよであつた。北野天滿宮の創建された時、菅公の靈を合祀し、道明寺天滿宮と稱した。明治初年、神佛分離の時から、道明寺は天滿宮の境内から別居して、今あるやうな尼寺となつた。道明寺では二月二十五日、菅公の祭を營み、菅公自作と稱する木像を開帳する。

遺教經會（ゆゐけうきやうゑ）

訓讀會（くんどくゑ）、遺教會（ゆゐげうゑ）　千本念佛（せんぼんねんぶつ）

古書校註

【日次紀事】千本大報恩寺。遺教經會始まる。今日（一）より十五日に至る。東山智積院の僧徒之を勤む。此の寺に藤原秀衡（二）建つる所の堂、幷びに、能登守平敎經（三）幼少の時の手習の寮有り。倭俗、筆法を學びて手習と謂ふ。一說に、秀衡の堂、敎經の室、古へより有る所にして、多く廢頽せるを近世再び之を興すと。或は云、猶聞中納言光隆卿の家司、岸高捨、千本の地に大報恩寺を建て、如琳上人を請ずと。然らば則ち秀衡の堂、敎經の寮は皆謬傳か。每年斯の時、雪降り風烈し。故に兒童の諺に、雪經に

參らんよりは、寶前に參らんに如かずと謂ふ。云々、遺教、雪と倭語相近し。故に爾云ふ。是、離寒附熱の謂也

【滑稽雜談】抑々千本釋迦念佛と云ふは、二月中旬遺教經會に附きての事也。文永年中如輪上人を始といへども、實は往昔惠心僧都の高弟定覺上人と云ふ。是此の釋迦念佛の始祖也。普亂名號大念佛と云ふ。一旦中絶して二百五十年後、龜山院の御宇、文永年中、如輪再興す。（略）訓讀會は、即ち遺教經を訓讀するの謂也。此の經、釋尊涅槃に入るの前、佛弟子の爲に說き、以て遺誡の經と爲す也。

註　（一）二月八日。（二）鎭守府將軍、陸奧守　義經のたよつた人。文治三年歿（三）敦盛の子。壇の浦で義經と一騎討をして死す。年二十六。

季題解說　遺教會の遺教といふのは、佛垂般涅槃略說教誡經の略名であつて、その內容をなすのは、佛が鶴林において涅槃に入られるに際して、苦集滅道の四諦について疑惑を起さぬやう、弟子達に與へられた最後の垂訓である。それ故、涅槃會とこの經會とは深い關係をもつ譯である。遺教經會が貞治二年、足利尊氏の命によつて始められたといはれる京都五辻七本松の大報恩寺（千本釋迦堂ともいふ）の法要は、昔は二月八日から十五日（佛涅槃に入りし日）まで勸修され、遺教經を訓讀したのであるが、現今は三月十五日一日だけ修せられてゐる。參照　涅槃會　千本念佛

經供養

夢殿の經供養　緣の下の舞

季題解說　經文を寫して佛前に供へ、佛事のいとなみをすることである。多くは一切經についていふのであるが、また一部の經について供養會を修することもある。佛像に對する開眼供養とか、佛殿に對する慶讚會に相當するもので、支那では梁の武帝の時行はれた。開題供養といふのも經供養のことで、法然上人行狀畫圖卷三十六に、聖覺法印を招いて經論の開題供養を營まれたことを記してあるなどがこれである。その他日本でも諸寺で行はれたことが古書に見える。例へば祇園一切經會（三月十五日）、宇治一切經會及び石淸水一切經會（共に三月中）等では、經供養の佛事を每年の恒例として修した。また大阪四天王寺では三月二日に行はれた。俳諧で經供養といふのはこの夢殿の經供養のことを言つてゐるやうである。この日同寺では、聖德太子の像を夢殿から西の口に遷し、禮拜囘向して經を供養し、緣前の聖靈院で樂人舞樂を奏した。俗にいふ緣の下の舞といふのがこれである。然し今は何れも廢絕して行はれてゐない。參照　祇園一切經會

比良八講

古書校註　【日次記事】江州比良明神社、古へは今日、（一）比叡山の僧徒法華八講を

修す。今に至りて、比良八講と稱ふ。此の日、湖上多くは風烈しき故に、往來の船急事にあらざれば則ち出さず。

【滑稽雜談】山家僧(一)の說に曰、白鬚神社の上の山に、重法寺と云ふ寺有りて八講を行ひける由侍れど、當代に於て、寺も廢壞し、八講も行絕す。又一說に、比良の天神の法樂に、山門の衆徒之を修す。云々。兩說俱に舊記に見えず。元亨釋書第九叡山法然の傳に、比良の明神聽經の儀侍れど、是も八講の起りとも定めがたし。山家の後說に云、天神法樂の儀はさもあるべし。今日菅神正當の宿齋の日也。其の上傳へて云ふ、往古此の講會に影向の神は、廿四日に至りて本宮に歸座し給ひ、此の日湖水を遊行し給ふ故、湖水波あらく、山上嵐はげしく、湖上にちり一本すゑず、是をひら八講の荒と稱す。是又菅神歸滑のしるしなりとも申し傳へ侍る。當代行絕し侍れば、其の實說詳ならずかし。(略)これらの因緣によつて、比良社の地にも靈祠を建て、菅神の御忌の八講を行はれしにや。靈祠の蹟いま猶存せり。[參照] 祇園御八講 吉祥院八講 天文—比良の八講

[註] (一) 二月廿四日 (二) 天台僧。

祇園御八講

[古書校註]

【滑稽雜談】拾芥抄に曰、二月八日、祇園御八講。云々。○今絕えて此の儀無きか。抑も御八講の法事は敕會にて行はる。法華經宸筆の儀あり。今、台宗(一)に於て修行する法なり。八講とて、法華經二十八品に結經・無量壽經を加へて、三十日三十口の式あり。八講境とて、兩境相對して之を飾る。講師・問者を定め、右座は佛名をふし附に唱へ、左座は法華八卷の大意を論ず。別に論題を設け論義あり。其の外伽陀・唄・散花等の法式嚴重なり。天台一宗にて修行勿論なり。或は禁庭の御八講には、興福寺・東大寺・延曆寺・園城寺四箇大寺の碩德を召さるとかや。光明皇后の御歌、法華經は菜摘み水くみ薪こり我得し事をつかへてぞえし、此の御歌をふし附に唱ふることもあり。提婆品に、採二薪及菓蓏一隨時恭敬與の例とて、薪の行道とて、天子自ら御行道ましく、薪・菜籠・水桶等、六位の藏人三人之を役す。捧物・行香等の儀あり。悉く記す可からず。祇園御八講、定めて台宗別院の時、敕會行はれしにや。今、社內慈慧大師(二)の像を安置して、遺跡分明なり。

[參照] 比良八講

[註] (一) 天台宗の寺。(二) 天台宗の座主。元三大師、良源のこと。永觀三年寂。

吉祥院八講

[古書校註]

【滑稽雜談】菅家長者の記に云、加賀國富墓莊、件の莊は、古へより

主無し。荒廢の地也。然りと雖も仁者山を樂むの因緣有るに依つて、宣旨を申請して、神領に施入せしむ。永く法華八講の料所と爲る、云々。〇公事根源に曰、二月廿五日は、天滿大自在天神のかみあがり給ひし御日なり。夢のつげありて、鳥羽院天仁二年より、吉祥院にて八講あり。菅家のともがら參りて是を行ふと。云々。〇公事根源集釋に曰、吉祥院、菅家の氏寺、天神の祖父淸公建立、東寺の西南にあり。八講料所加賀國にあり。〇當世此の處はあれど、八講は絶えけるにこそ。［參照］比良八講ヒラノハッカウ

東福寺懺法（とうふくじせんぽふ）

【日次紀事】今日、（一）東福寺方丈懺法。明兆の畫く所の觀音三十三幅を揭ぐ。

【滑稽雜談】慧日山東福寺、洛の東南門前の街道に在り。橋有り、北を一ノ橋と名づけ、愛宕郡の堺也、南を二ノ橋と名づけ、卽ち稻荷の社前也。二月每に、方寸（二）の紙に方字を書き、當寺の內同聚院より出だし、火災疫病を除く。今日初午、方丈に明兆の畫觀音三十三幅の像を揭げて、懺法を修す。開基は國師。聖一國師（略）懺法とは、天台大師或說に運法を作り給うて、六時（三）に六根の罪を懺悔するの法をなすなり。今日の修行是なり。

［註］（一）二月初午の日。（二）一寸四方。（三）晨朝・日中・日沒・初夜・中夜・後夜。

季御讀經（きのみどきやう）　行茶（ひきちや）

【年浪草】江次第頭書に曰、春秋二季百僧を南殿に請じ、大般若經を讀ましむ。其の內御前僧廿口を定めて、御殿に於て仁王經を讀ましむ。納言・參議各一人南殿に著きて事を行ふ。自餘皆御殿に候す。貞觀（一）の御時、季每に之を行ふ。元慶（二）の天皇踐祚の後、二季に之を修す。〇公事根源に曰、二月・八月、大般若經を百數にて講ぜらる。四ケ日の事にて、第二日には行茶とて、僧に茶を給ふ事あり。天平元年四月八日にはじめらる。行茶はヒキ茶とよむべしと。

［註］（一）淸和天皇。（二）陽成天皇。

祇園一切經會（ぎをんいつさいきやうゑ）

【年浪草】拾芥抄に曰、三月十五日、祇園一切經會。〇雜談抄に云、此の會式當世沙汰なし。社家に尋ぬれども、更にしれず。神供所に只經行堂の名侍りて、供物を調ずる由、此等其の遺意にや。〇按ずるに、當社往古山門に屬す。一切經會叡山より修行ありしにや。［參照］經供養クヤウ

勸學會（くわんがくゑ）

古書校註

【滑稽雜談】 春秋兩度行はれける。始を以て正とすれば、勸學會として春也。

【年浪草】 朗詠の注に曰、眞林寺月輪院（一）にして行ふ也。天台の大衆法華を誦す。記典の備者も詩聯句を成す。康保年中に、大内記慶保胤（二）狂言綺語の罪をほろぼさんとて、文道先達の學徒をすゝめて、三月・九月の十五日毎に行ひ始められ侍り。

註 （一）勸學會は右寺の他、月林寺・觀林寺・隨願寺等でも行はれた。（二）大内記は官名、慶は慶滋の姓を略したもの。

峯入（みねいり）　順の峯入（じゆんのみねいり）　順の峯（じゆんのみね）

古書校註

【滑稽雜談】 雍州府志に曰、往昔、役の行者の入峰の跡を慕うて、熊野より大峰に入り、吉野に出づ。是を順の峰入と謂ふ。爾後、大蛇大峰より出でて道を擁す。之に依りて入峰年久しく絶ゆ。然るに醍醐寺の聖寶自ら斧鉞を執り、吉野山より大峰の後山に入り、蛇の尾より始めて寸々に之を截ち、遂に熊野に出づ。是を逆の峰入と稱す。云々。○此の說を見る時は、順逆の名は行道の品を云ひ、さらに春秋の差別なし。又一說に云、春は雪深きゆゑに順道に行く事ならず、吉野より入りて熊野にいづ、逆道なり。故に逆の峰入は春也。俳諧に順の峰入を春と用ゐる儀、心得がたし。只峰入とばかりは秋也。逆の峰入は春也、當世は春時において入峰のさたなし。皆秋也。往昔は春も有りけるにや。金葉集。もろともにあはれと思へ山ざくら花より外にしる人もなし　大僧正行尊。此の歌は、大峰へ入り給ひて詠じ給ふとはべれば、春月に入峰の侍りしにや。

【年浪草】 春秋の峰入、春は之を順の峰と謂ふ。本山方之を勤む。聖護院御門室に於て之を檢按せらる。三井の長吏增譽僧上其の始也。權大納言經輔卿の息にして、三山別當職の始也。云々。山とは熊野三所也。秋は是を逆の峰と謂ひ、當山方之を勤む。三寶院御門室に於て之を行はる。是天台・眞言兩流、春秋之を行はる。

本意解說 信心のために大和國大峯山に登ることを峯入といひ、五月から八月までのことである。山は一に山上ケ嶽といつて、奈良縣吉野郡にあり、標高五・七五〇尺、頂上に大峯山本堂がある。參詣者は兜巾（トキン）・鈴懸の山伏姿が多いが、始めての參詣者は新客といつて、白衣白帶・白脚絆・草鞋穿であり、二年目から山伏姿になるのが普通である。五月に山開があり、九月の山閉までの間、京阪神地方からの參詣者は山道を蜿々と蟻のやうに續く。昔は役の行者入峯（ニフブ）のあとを慕つて、紀伊熊野から前鬼（ゼンキ）・後鬼（コウキ）と登つて、

大峯葛城に出るのを順の入峯といひ、京都左京區聖護院門跡がこれを檢挍し、毎年四月であつた。然るに大峯篠山道りに大蛇が棲んで道を妨げるので、京都伏見區醍醐寺の開山聖寶、自ら斧鉞を執つて吉野から大峯に入り、大蛇を退治して熊野に出たので、これを逆の峯入といつて、熊野三寶院門跡がこれを司り、秋九月のことゝなつてゐた。しかし今日は三寶院は六月七日京都發となり、聖護院は七月となつた。そして兩方共各吉野から入り、逆の峯入のみとなつた。一般の入峯は今日では、上市から洞川まで自動車に乗るのが多くなり、吉野からのも寂れつゝある。この洞川からも勿論逆の峯入の方である。參詣者は古へは、入峯前十日間別屋精進したといふが、今日でもなほ二三日乃至一週間は精進し、京都方面ならば清水寺音羽瀧に打たれなどして身を淨め、出發以來參詣するまで決して魚肉等を食はない。山中の行場廻りは隨分危險を冒して修行するのである。今日は勿論順逆などとはいはず、たゞ時々行はれる奥がけのみは喧しくいはれる。この奥がけは大峰より熊野へ出ることである。三寶院・聖護院等の京都出發の時は、參詣者の山伏と見送の山伏とがならんで數十町の長きにも達するのである。

右やうの次第で、昔は順の峯入は春に、逆の峯入は秋に屬してゐたのであるが、今後はすべて夏の季題として取扱はるべきものである。【季題】秋—逆の峯入

例句

峯入

峰入や一里をくるゝ小山伏　芭蕉（もとの水）
みね入や篠にかぶるゝ道ありと　白雄（白雄句集）
峯入やおもへば深き芳野山　同（同）
峯入や心たよりの貝を吹く　蜃樓（漁火）
吉野泊
散歩すや峰入道を少しほど　たけし（ホトトギス）
峰入の檜原ゆくなり手提灯　穀雨（同）

摩耶詣（まやまうで）

摩耶參（まやまゐり）　摩耶昆布（まやこんぶ）

古書校註

【滑稽雑談】佛母摩耶山忉利天上寺、攝州菟原郡畑原村山の上に在り。一名佛母山。天武天皇の時、天竺の法道仙人來朝して之を建つ。（略）伽藍坊舍三百餘、攝州第一の名刹と爲す。後興廢有り、今纔に存す。云々。○孝德帝大化元年草創、爾來二月初午を以て詣日とし、諸人羣をなす。此の日近國の人、專ら飼馬の無難を祈るとて、馬をひいて參らせ、土産に昆布を調へ歸る。是を摩耶昆布と云ふなり。

季題解説　神戸市背に再度・摩耶・六甲と屏立してゐる摩耶山上にある佛母

摩耶山忉利天上寺は、大化元年草創、攝州一の大伽藍と稱せられ、本尊は十一面觀世音で、靈驗特に著しいといはれる。神戸在住の中華民國人にも信仰者が多いやうである。二月初午の日、參詣の人が相踵ぐのであるが、殊に飼馬の無難を願ふといふので、もと近郷から馬を曳いて參詣した。その土産に絲に通した昆布を買つて戻る。これを摩耶昆布といふ。明治上期頃までは、この馬を曳いて詣ることがあつたか知らぬが、その後これを聽かず、見たこともない。

鞍馬の花供養（くらまのはなくやう）　花供養（はなくやう）

季題解説　「花咲かば告げんと云ひし山里の、使は來り馬に鞍、鞍馬の山の雲珠櫻、手折枝折をしるべにて、奥も迷はじ咲きつゞく」と謠曲鞍馬天狗にうたはれる雲珠櫻は、雲珠上人が植ゑたからかく呼ぶのであるとも、また雲珠櫻といふ櫻の一種類であるとも云つてゐるが、この雲珠櫻の盛の頃、京都洛北鞍馬山の鞍馬寺で花供儀法會を修するのである。起源はいつの頃よりか定かでないが、昔は前後十日間の法會中相當參詣者も多かつた。大宮人などは雲珠櫻を手折つてかざして家づととした。その後いつの頃よりか參詣者も少くなり、寺でもたゞ儀法を修してゐるだけとなつた。この寺の本尊多門天は、六十一年目の丙寅の年に限つて開扉することになつてゐる。大正十五年は丁度この六十一年目の丙寅に相當するので、花の四月開扉した。

雲珠櫻は櫻の一種類といふ說もあつたが、現在ではその老木は枯死し、今はその子か孫の樹が僅かにそれと殘つてゐるが、これは普通の山櫻で、何等變つた種類ではない。それでこの開扉の年に寄附者があつて、山道八町にずつと若木を移植した。また本堂の改築を計畫し、その工事もこの開扉の機會に着手された。同時に登山路の改築も計畫された。かうした關係からこの花供儀法會を盛大に修する事となつた。各信者講中は思ひ〳〵に餘興を催し、舞囃子・謠曲・狂言・點茶・活華・稚兒練供養・山伏姿の男稚兒の參詣などがあつて、その後年々に盛大に營まれてゐる。

現在は四月十八日より廿四日の一週間修し、その間每日何等かの餘興があり、脇立の開扉があり、結願日には魔王大僧正の開扉がある。尙昨年からは、その昔大宮人等が雲珠櫻をかざしとして家づととした事をかたどつて、寺では造花の櫻を授與する事となつた。參詣者がその花枝をかざしとして下山する有樣は、昔の春を偲ばせて面白い。

例句

鞍馬の花供養

つきかはる鐘のひゞきや花供養　羽公（ホトトギス）
花供養雨やどりして待ちにけり　泊月（同　）
ひれ伏して拜む女や花供養　虚子（句集虚子）

品川寺鐘供養（ほんせんじかねくやう）　鐘供養（かねくやう）

【季題解説】五月五日、東京市南品川品川寺において修する同寺大梵鐘の供養である。歳時記に凡そ五月より夏季としてゐるが、嚴密にいへば立夏即ち五月六・七日より夏であるから、五月五日はまだ春である。殊に道成寺などの連想もあり、鐘供養といへば櫻花爛熳の候を連想する。同寺の大吊鐘は明治維新の騷ぎのうちに一旦海外に渡り、昭和五年四月二十六日無事横濱着、我が國に返されたといふ由緒深いもので、鐘供養はその歸來を永久に記念するために始められた行事である。

【例句】

品川寺鐘供養

品川寺

代り撞く鐘鳴り止まず鐘供養　まさを（ホトトギス）

撞きあまるはずみの鐘の鐘供養　楢男（同　）

町人の來てはつくなり鐘供養　虚子（續ホトトギス）

嵯峨の柱炬（さがのはしらたいまつ）　嵯峨御松明（さがおたいまつ）

【古書校註】

【日次紀事】（一）嵯峨釋迦堂、前に大積松兩基を建つ。暮に及びて火を點ず。地下人、各々積松を巡り、口に彌陀の號を唱へ、節を撃ちて踊躍す。是則ち、西域に於て、釋迦を葬るの遺意也。世に柱積松と謂ふ。

【滑稽雜談】釋迦堂は五台山清涼寺と爲す。本堂は大覺寺の西三町許りに在り。

註（一）これは、二月十五日の條下に見えてゐる。

【季題解説】三月十五日の夜、京都市右京區嵯峨五台山釋迦堂清涼寺において、釋尊茶毘の遺意を表して三基の大炬火を燃やす行事である。この日は本堂に涅槃の圖を掛け、境内及び山門附近に露店が軒を列ね、雜閙を極める。夜になると梵鐘が絶えず鳴り、八時頃から信者や一堂の僧を引具して、方丈が本堂で釋迦念佛を稱へる　九時になると方丈、一山の僧、信者講中、嵯峨消防隊と列を正して、本堂から炬火の前に來る。そして豫て用意してあつた高さ二丈五尺くらゐ、松の枯枝や竹で朝顏形に組立てられた三基のお炬火に火が點ぜられる、火は見る〳〵炎々と燃えあがる。三基の炬火はそれ〴〵、早稲、中稲、晩稲に譬へられ、附近の百姓達はその燃方によつて今年の豐凶を占ふのである。尚その燃え上る時、嵯峨十三ヶ字の大高張を立てる。その高張の竹竿の長短によつて、十二ヶ月の米價の高低を占ふので、京都・近江・丹波附近の米商人は押しあつて待つてゐる。この大炬火の燃える樣は實に壯觀で、一時に火の手が上り、火の粉が一堂の屋根々々に映る景色は實に美しい。しかしものゝ二十分程で燃え落ちると、寺内は

一時に眞暗となり、その暗がりの中を群集は雪崩を打つて歸路につくのである。昔は二月十五日であつた。〔參照〕涅槃會ネハンヱ

〔例句〕

清凉寺

山門に見張りの僧やお松明　　ながし（ホトトギス）

お松明すみたる鐘や藪をゆく　　比古（同）

藥師寺造華會（やくしじざうけゑ）

西京（さいきやう）の造（つく）り花（はな）

〔古書校註〕

【滑稽雜談】藥師寺造華會、一日（一）より七日まで。（略）此の會は堀川院の御宇、嘉承二年より始まりし也。此等の修二月會にて法會を勤め、その上種々の造花を、三寶へくやうせらるゝ也。彼の興福寺内の東金堂の二月會にも、むかしは造花を獻ぜし也。當代かの寺には絶え侍り、今世藥師寺に絶えず行はるゝ也。此所を西京と稱す。故に俗に西京の造り花と稱す。此の花は年中に製へ置きて、此の會に用ゐるよし、毛吹草に侍る。

註（一）陰暦二月一日

藥師寺最勝會（やくしじさいしようゑ）、

〔古書校註〕

【滑稽雜談】公事根源に曰、天長七年淳和御宇より、藥師寺にて、毎年七箇日最勝王經を講ぜらる。○一說に云、淳和帝天長七年、中納言直世卿これを奏聞して、始めて行はるゝと。云々。此の說は、資治表（二）などにも侍らず。然れども天下の三會（二）のひとつにて、往昔は嚴重の法會なりし。

【栞草】七日より十三日に至る七ケ日の法會也。藥師寺は大和國高市郡にあり。天武九年十一月創す。持統・文武の二帝、繼いで壯觀妙絶といふ。

（三）馬琴が野州の藥師寺と註したるは誤なり。

註（一）元亨釋書の年表。（二）正月・宮中御齋會、三月・藥師寺最勝會、十月・興福寺維摩會を天下の三會といふ。（三）馬琴の「俳諧歲時記」の所說。

般若寺文珠會（はんにやじもんじゆゑ）

〔古書校註〕

【滑稽雜談】大和名所記に曰、當寺は聖武天皇の御建立。敕書の大般若經を塔底に納め、其の上に十三級の塔を建給ひしより、般若寺と號す。云々。○此の寺にて毎年三月廿五日、文殊會とて法事を修せらるゝなり。按ずるに、弘法十三佛功德の配當にも、三月廿五日を以て文殊に配せらるゝなど、擬とする賦、朝家において、文殊會とて東寺に行はれしは、七月八日にて侍りし由なり。

東大寺授戒

古書校註

【滑稽雑談】凡そ授戒は、毎年三月十一日、始めて之を行ふ。（略）公事根源に云、是は三年に一度有り。孝謙天皇東大寺に戒壇を建て、天子以下菩薩戒をうけ給ひき。是より東大寺の受戒といふ事はじまりき。云々。（此の事、説のごとく昔行はれしこととなり。總じて出家の登壇受戒は、尋常にも侍る事なれば、作意に依りて春にも極めがたし。只、作者の心得肝要なるべし。

浦佐の堂押　押合祭

季題解説

「押して押されて、押されて押して、七押八踊夜は更ける」と謡はれる有名な新潟縣南魚沼郡浦佐村、普光寺毘沙門天の押合祭は、毎年三月三日の夜（昔は正月三日）行はれる。三十貫目以上、高さ六七尺の大蠟燭數本を灯しつらねた盛んな火光を浴びて、五間四面の堂中で二三百人くらゐの男が赤裸に褌一つ、素足に草鞋をはいて、堂脇の瀧壺に飛び込み水垢離をとつたばかりの體で、サンヨウノ〳〵の掛け聲勇ましく揉み合ひ押し合ひ、體が乾くと再び瀧壺に飛び込んでまた押しあふのである。かくすること數回、廚子堂の正面御簾の中の毘沙門天を近々と禮拜することを競ひ合ふのである。またこの押合の最中に供物の餅を蒔き空俵を蒔く。これを押しあつて拾ふ。それからまた御神酒・盃・提灯などを押合の群集中へまくことなどがあつて、最後に「さゝらすり」といふ儀式がある。これは山長といふものが肩車に乘つて群衆の中へ押し入り、「御前に黒雲が降り給ふ」と唱へる。衆一齊に「何んだとて下つた」と問ふ。山長「米が降るとて降り給ふ」と答へ、手にしたサヽラをするのである。これを見物する參詣者は、日暮から始つた押合は十一時過ぎ漸く終るのである。近郷はもとより長野・上州・群馬方面から何萬とつどつて來る。昔は女も押合つたが今日は女はしない。ともかくまだ寒い北越の深夜に、赤裸の善男が信仰に燃えて、水垢離をとつて體をもみあふ有様は壯快なものであるさうである。撒いた盃を拾つた人はその家必ず幸福あり、提灯の骨一本でも田の口へ挿し込んでおけば、稔りがよく害蟲がつかぬなどゝいはれる。大蠟燭の蠟が體に流れかゝつても決して火傷しないなどともいはれる。

池上千部

古書校註

【栞草】長榮山本門寺は武州千束の郷池上村に在り。開山日蓮上人、毎年三月十九日より廿八日迄、法華經千部千口讀誦す。此の節參詣多し。當寺

は日蓮上人終焉の地也。但し、遺骨は身延山へ葬るとぞ。

六阿彌陀詣

古書抜註

【東都歳事記】六體ともに行基菩薩の作なり。彼岸中、都鄙の詣人道路に滿つ。五番、下谷廣小路（天台）常樂院（田畑へ廿五丁）。四番、田畑（眞言）與樂寺（西が原へ廿丁）。三番、西が原（眞言）無量寺（豐島へ廿五丁）。一番、上豐島村（禪宗）元木西福寺（沼田へ十五丁、此の間舟渡し）。二番、下沼田（眞言）延命院（龜戸へ二里半）。六番、龜戸（禪宗）常光寺。宮城村性翁寺彌陀如來の像は、行基菩薩六阿彌陀の末木を以て造り給ふ所なり。世俗木あまりの彌陀といふ。沼田延命院より三丁、千住町へ通る土手下にあり。六阿彌陀巡禮の輩は、かならず當寺へ詣づるなり。

註 ○なほ山の手六阿彌陀等・西方六阿彌陀等に就いての解説が附隨してゐるが省略する。

季題解説　彼岸の入及び彼岸中に、阿彌陀如來に參詣すると利益があるといふので、六ヶ寺の阿彌陀を本尊とする寺々へ參詣することがある。これを六阿彌陀詣といふのであるが、しかし京都にはその事がない。東京の六阿彌陀は下谷廣小路常樂院・田端興樂寺・西ヶ原無量寺・豐島西福寺・沼田延命院・龜戸常光寺である。また東京西方六阿彌陀といふのは芝西大久保大養寺・麻布飯倉善長寺・芝三田春林寺・高輪庄中堂横町正覺寺・白金正源寺・目黒祐天寺である。また山の手六阿彌陀といふのは麹町十丁目心法寺・四谷寺町西念寺・青山南町龍泉寺・同梅窓院・同北町高德寺・同善光寺である。

參照　彼岸會（一）

遍路

古書抜註

四國巡り　一國巡り　島四國　遍路宿

【嬉遊笑覽】寛平の帝、（一）御出家ありて、眞言を益信僧正に受けて灌頂

せさせ給ひ、（略）專ら桑門（一）の御行樣なりしが、御行脚のことはなかりし。花山院御發心（二）の後、國々を御修行ありし、是ぞ始めなるべき。今の三十三所觀音順禮もこの法皇より權輿すといへり。（略）また、高野大師を念ずる輩は、四國邊路を廻る。

註（一）宇多法皇。（二）僧侶（三）御出家なされること。

季題解説　四國遍路といつて、阿波・土佐・伊豫及び讃岐の四國に散在してゐる札所八十八箇寺の靈場を巡拜する徒を呼ぶのである。それは弘仁の昔、弘法大師が普く巡錫された寺々であつて、今日その鴻德を慕ひ、功德を感謝し、併せて己れの冥福を祈る信仰の旅である。全道程三百餘里、日數四十日を要し、宗派に拘らず、老若男女を問はず、只管その修業に喜び出づるのである。遍路は主として徒歩による旅であるから、その服裝も至つて輕く、携帶品なども信仰上または旅行上必須のもののみに限つてゐる。婦女子の裝束も男子とあまり變りはないが、男子が質朴な縞物か白裝束であるに交つて、さすがに若い娘達はその服裝も華やかで、たとへば紺飛白とか派出なセルの著物とかに、白木の納札挾みを胸高にかけ、鬱金や淺黃色などの手甲脚絆をつけ、同じ色の姉さま冠りの上に眞白な菅笠を冠り、緋の腰廻しもあらはに裾を端折り、白木の杖をついた姿など、單調ではあるが際立つて鮮かで、菜の花や青麥・紫雲英などに綴り綴られた田舍道を、かく著飾つた華かの女遍路たちが絡繹として續く情景はなかなか綺麗なものである。一般に三月頃から次第にその數を增し、四月の初め、だんだん陽氣がよくなると共に一時に競ひ出て、頓に遍路姿に賑ひを呈するのであるが、やがて一盛りのあと、五月上旬、日ざしも何となく初夏らしくなると、また忽ちのうちに凋れて來て、遂にその姿は見られなくなり、遍路の期節が終るのである。これは實に四國の田舍の春を飾る特異な情景であり、野趣の深い、豐かな鄉土色の現はれである。遍路はまた同じ信仰の旅である「巡禮」とよく混同されるが、巡禮は所謂西國巡禮であつて、風俗習慣その他全然特殊なものであり、遍路のやうな色彩も季節感もない。また遍路といへば、實際にその姿に接しない他國の人達の内には、乞食物貰と同視し、襤褸でも纏つた不潔な姿を想像するが、それは大變な誤りで、凡そ今の遍路に出づるほどの者は、いづれもみな立派な家庭の人達であつて、身を潔め衣服を改め、身心共に清々しい精進の徒ばかりなのである。遍路の出盛る頃には、各部落々々の同じ信仰の人達が、善根宿といつて見知らぬ遍路の一夜の泊りを引きうけたり、また攝待と稱へ茶菓や糧米を供し、餅・壽司、さては手拭・紙など身のまはりのものなどいろいろ攝待をするので、遍路はつぎつぎとこれ等の志を受けながら旅を續けて行くのである。遍路の修業には、八十八個所全部を巡拜する外に、その内一國の札所のみを限つて巡拜する「一國巡り」がある。また讃岐小豆島には八十八個所の札所が島内に遷してあり、これを巡拜するのを「一島四國」と

稱へるのであるが、日程凡そ七日と云ふ手頃の旅でもあり、「本四國」に劣らぬ賑ひを呈する。［參照］お札流し(オフダナガシ)

［例句］

遍路

親遍路泣きすがられて通りけり　公羽（ホトトギス）
若うしてたのしみ出づる遍路かな　同（同）
百姓のひまなよすぎや遍路宿　婆羅（同）
山宿や上り框の遍路笠　默鳥（同）
部屋々々の夕勤行や遍路宿　寂門子（同）
遍路笠傾け合ひて別れけり　主一（同）
道ばたに足のべて居る遍路かな　今夜（同）
遍路ゐて室戸の道ををしへけり　まもる（同）
潮の香のきざはしのぼる遍路かな　七草（同）

室戸岬
汐げむりあがりし磯に遍路道　十雨（續ホトトギス）
憩ひつゝ肩うちあへる遍路かな　爽雨（同）
石段をひろがりのぼる遍路かな　同（同）
うみやまを越えねばならぬ遍路かな　左右（同）
船上る遍路の杖の一束ね　自然生（同）
わらんぢも作りへんろの宿もする　波川（同）
明暮に遍路の見ゆる書齋かな　明穗（同）
五六人荷馬車に乘りし遍路かな　一朗（同）
あがりたる船を忘れし遍路かな　鹿郎（同）
香煙に絶ゆることある遍路かな　公羽（同）
遍路笠ぬぎかさねたる夫婦かな　咲青（同）
遍路より歸りし母を圍みけり　たき子（同）
遍路宿あやめの水に水ぐるま　春水子（同）
御遍路もかはらけ投げや談古嶺　九華（同）
假名書のつたなき遍路日記かな　茂一（同）
門前に杖を洗へる遍路かな　泊月（同）
大杉のもとをあゆめる遍路かな　波津女（同）
稀に見る逆の遍路や室戸道　虛子（同）

お札流し(ふだなが)

［季題解說］　四國八十八ケ寺の內、松山地方の十ケ寺に納めた遍路札を高濱沖に流す行事であつて、陰曆三月二十八日に行はれる。十ケ寺とは、四十四番岩屋寺・四十五番大寶寺・四十六番淨瑠璃寺・四十七番八坂寺・四十八番西林寺・四十九番淨土寺・五十番繁多寺・五十一番石手寺・五十二番太山寺・五十三番圓明寺である。［參照］遍路(ヘンロ)

お札流し　舟々へ流すお札を積みにけり　里石（ホトトギス）

漕ぎ出でゝお札流しの詠歌かな　同（同）

染織祭（せんしよくさい）　呉服祭（ごふくまつり）

季題解說　昭和六年始めて京都に行はれた行事である。京都の染物同業組合・西陣織物組合・縮緬組合・生絹組合・半衿商組合・染呉服同業組合等が春、地方の顧客を吸引する策の一として、見本市を催し、なほ呉服同業の祖ともいふべき漢織呉服の神を勸請し、同業繁昌を祈願するために、市及び商業會議所を動かして染織講社を組織し、四月第二日曜に行列行進するのである。

まづ同講社は各組合思ひ〳〵に衣裳を新調し、意匠を凝らし、前日の土曜日には岡崎公園に祭場殿を設け、神を勸請し、各組合員、市及び會議所議員が參拜する。當日は午前零時までに、各行列員が府廳前に參集、列を整へて烏丸通を四條へ、河原町を二條へ、祭場岡崎で解散して終る。今昭和八年の第二日曜は雨天であつたため、翌月曜に日延べされた。行列は勿論年々相違があるが、大抵先登は第一工業學校の生徒である。樂隊を自動車に載せ、その自動車はお手のものの染織科で意匠を凝らして裝飾する。續いて花自動車・人形自動車が行進する。女優を呉服の神に扮せしめて登載するものもあれば、藝妓を官女に扮せしめて載せたのもある。それから屋臺・囃子自動車等が續き、思ひ〳〵に、組合々々が各組合員と共に行進するのである。丁度花の盛りの時ではあり、見本市に誘はれて入洛した地方人もあり、市民もその年〳〵の流行意裳を見ようと行列の通る大通に群集する。今日では秋の時代祭と共に、京都の二大新行事の一となつた。

例句

染織祭　花にゐて染織祭を見てゐたり　湖石（續ホトトギス）

湯祈禱（ゆきたう）

季題解說　伊豫國道後溫泉は太古からその名を知られてゐるが、今日行はれてゐる湯祈禱といふ行事はそれほど古いことではないらしい。この行事は毎年三月廿・廿一日の兩日に行はれ、同溫泉神の湯前に在る靈の石に神樂を奉奏し、終つて種々の餘興を行ふこととなつてゐる。湯祈禱の由來は同社の社殿に揭げてある額に明かである。その文句は次の通りである。

「嘉永七年甲寅霜月五日地震ふて天の下四方の國に鳴神のひゞきわたりし、溫泉忽ち不出なりて香絶ぬ故こゝをもて溫泉の町の家ごとより千本の木を移し植奉り老たる幼き男女百々たび千度歩はこび祈ぎ奉るなかにも若きすくよかなるかぎりは赤裸となり雪霜の寒きを厭はず雨風のはげ

しきを於かして三津の海へにみつきしまたは御手川迺清きなかれに身をきよめ夜ことと日毎に伊佐波の岡の湯月の大宮出雲岡那類此湯神社に參りて溫泉をもとの如くに作り惠み給へと祈り奉りしに大御神たちも清き心を見て給ひけるしるしを下し給ひて明る安政二年きさらぎ廿二日といふに湯氣たち初め日ならずしてもとのごとくに成ぬ依てそのかへりまをしのしるしにと人々の名を記し加計まくもかしこき瑞の大前にさゝげ奉るに那無。

例句

湯祈禱　湯祈禱や湯ざらし艾賣れること　默禪（ホトトギス）

河豚供養（ふぐくやう）

季題解説 下關は河豚の本場と云はれるだけに、河豚の賣買や料理によつて、つまり河豚によつて生計を立てゝゐる者が非常に多い。これらの人々が集つて、毎年三月下旬河豚の季節の終りに、河豚の追善供養を行ふのが所謂河豚供養である。場所は壇の浦に面した魚百合といふ料亭で、この日は遠く東京や大阪方面から、下關の河豚で河豚料理を營む人達も馳せ參ずる。料亭の大廣間に祭壇を設けて、僧侶を招じ讀經して供養を營むのであるが、引續き小舟を仕立てゝ海峽の沖合に漕出で、生きた河豚數十尾を海に放つて放生會を行ふのである。近年河豚料理が盛んになるに連れ、年々盛大に催される。この供養會が終ると、河豚の賣買や料理が行はれなくなり、料亭も河豚看板を下ろすのである。

義士祭（ぎしさい）

季題解説 「ぎしさい」と讀む、二月四日、大石良雄以下赤穗義士四十餘人に死を賜うた命日である。この日はお寺だけで御經を上げ、御祭事がある。義士祭典は四月一日から三十日まで、高輪泉岳寺で行はれる。道筋には義士祭と書いた寺の高張や町家の提灯が連り、幔幕が張られる。期間中毎日大石良雄の念持佛摩利支天の御開帳がある。特に初日・中日・滿散の三日と日曜祭日には、大般若や特別の御祈禱があり、寺寶の陳列觀覽も許されるので參詣者が殊に多い。赤穗の縣社大石神社では二月四日に義士御命日祭を、花岳寺では同日義士命日法會を營む。

實作注意 義士祭と間違はれ易いものに、十二月十四日の義士討入記念の催がある。義士の事蹟を偲び武士道を鼓吹するため、民間で行はれるもので、講演や提灯行列などがある。特に陰暦當日は泉岳寺の庭で一般に開放して行はれ、終夜甘酒の接待があり、焚火などして賑かである。一般ではこれを義士會と稱んでゐる。大石神社では十二月十四日義士追慕祭を、花岳寺では義士追慕會を營む。［參照］大石忌（オホイシキ）冬　義士會（ギシクワイ）

猿の口開（さるのくちびらき）

古書校註

【滑稽雜談】　これは安藝の國宮島にある祭也。此の島尤も獼猴多し。每年二月・十一月、申の日を限りて、同國島の八幡の社司、七日の間は祓を行ひ、申の日に至りて此の島に來り、猿の口明の神事を行ふ。此の日より後、此の島の獼猴聲を發すといへり。又十一月上申日、件の社司、祓神事を行ふ事、二月のごとし。是を猿の口止の神事といふ也。此の後獼猴聲を入るゝ也。

巳の日の祓（みのひのはらひ）

古書校註

【滑稽雜談】　宋書に曰、後漢、虞といふ者あり。三月上辰二女を產む。二月の中に三女を產む。並に育たず。俗以て大忌と爲し、其の日に至りて其の家を諱み、皆東流水上に於て、（一）祈禳をなす。○韻語陽秋に曰、上巳水上に於て洗ひ祓ひて、宿垢を除去す。之を祓禊と謂ふ。○風俗通に曰、按ずるに、周禮、女巫歲時に以て疾病を祓除する、禊は潔なり。故に水上に之を盥潔（二）するなり、巳は祉なり。邪病已に去りて介祉を祈る。（略）これらの故事、和國にも往昔は有りし由也。此の日を女の節供とする事、女巫の祓禊を用ひる心にや。又女兒の今日雛遊びをなすも、是祓の具の形代也。源氏物語の須磨の御祓なども思ひ合はすべし。

【年浪草】　朗詠に曰、（三）源周年より起り、魏文を思ふ。（四）（巳の日の祓、除周の世に起り、魏の世より三日を用ふ。）

註（一）いのり祓ふこと。（二）洗ひきよめること、（三）和漢朗詠集に「本、巳の字を成す初め三日、源は周年より起りて後漢に出」。（四）同書に「巳字を書して曲勢を知り、魏文を思ひて以て風流を翫ぶ」

參考　陰曆三月巳の日に行ふ祓を云ふ。三月は辰の月なるが故に、巳を除日とし、不淨を除かんが爲に祓を行ふものなり。主上の御儀は、祓の前日、陰陽頭より奉れる人形に、女房衣を着せて御枕頭に置く。當日巳の刻に至りて、主上之を以て御身を撫でさせ給ひ、次いで御息を吹きかけ給ひて、之に災厄を托し、御常用の御單衣などの撫物と共に內侍に賜ふ。次いで內侍之を臺盤所の妻所より出す。殿上の侍臣之を受け、河原に到りて祓の式を行ひ、河瀨に流し棄てて祓を終る。

我が國に於いて、巳の日に祓を行ふ事は、支那の風俗を移せるものにして、漢書には古くより記されたり。此の事の初めて我國史に見えたるは、類聚國史延曆十一年三月丁巳の條に「幸二南園一禊祓、命二群臣一賦レ詩云々」とあるを以て嚆矢とす。次いで翌十二年三月辛巳にも此の事あり、爾來引き續きて行はれたるものなり。而して巳の日の祓は、主として初の巳の日に行はれたるを以て、上巳の祓と稱せり。俳句の季語に、須磨の御祓として載

する所の、源氏物語に見えたる祓の如きも、之に外ならず、即ち同書巻十二須磨の巻に源氏須磨へ左遷の時、恰も三月朔、巳の日に當りければ、海上に出で軟障(幕)を引き廻らし、陰陽師を召して祓させ、船に人形を載せて流されし由見えたり。然るに後世は、主として三月三日を用ふるに至り、新撰字鏡示部禊の條下に「三月三日巳を得て上巳となす、之を上巳の祓といふ」と記されたり。

元來巳の日の祓は、朝廷并に幕府及び搢紳家等に皆之を行ひたるものにして、初めは上記類聚國史の記事の如く、天皇親ら水邊に御幸して祓はせ給ひしものなりしが、平安朝の中世に至り、世上一般奢侈浮華の風興るに及びては、一種の遊興の如くなり、當時の大宮人は、難波の海上に、善美を盡せる大船を浮べ、祓具等も黄金製を使用せし由、榮花物語等の書に見えたり。而して鎌倉時代のはじめ頃迄は、天下一般の行事なりしが如く、百練抄承久二年三月三日の條に「天下男女、向二河原一修二解除一相二當上巳一希代事也」と見えたり。而して當時將軍家に於ては、上巳の祓以外に、中巳の日にも祓を行ひたり、即ち東鑑四十九正元二年三月辛巳(十四日)の條に「將軍家中巳御祓、爲親朝臣奉レ仕之一」とありて、之を中巳の祓と稱したるなり。爾來室町江戸幕府之を行ひしが、現今にては殆ど上巳祓としての意義を忘れ、祓の人形の雛人形のみ發達して、三月三日の雛祭として上下一般に之を行ふことゝなれり。

須磨の御祓

古書校註

【御傘】 春也。巳の日のはらへ同じ。

【滑稽雜談】 源氏須磨の卷、知らざりしおほ海の原へながれ來てひとかたにやは物は悲しき。源氏。これ、源氏の須磨へ左遷の時、三月の朔日巳の日にて、浦邊にて舟に人形を立て給ひて、祓具として祓をし給ふ。是巳の日の祓也。是によつて連歌には、須磨の御祓を春に許用す。參照 巳の日の祓

釋奠　釋菜　おきまつり

古書校註

【滑稽雜談】 公事根源に曰、釋奠上丁日。是は年に二度、二月と八月とにあり。若し日蝕・國忌・新年の祭などにあたれば、中の丁にあり。大學寮にて行はる。孔子并びに十哲の影をまつらるる。あくる日、釋奠の胙をまゐらす。藏人もちて朝餉のまへにすゝむ。藏人又一人御手水の間の方の簀子にて、あれはなにぞの物といふ。藏人答へて、ふんやのつかさの奉れる昨日の釋奠の胙と、文字をながくいひて、高く捧げ持ちて簾中に入る也。また先聖とは孔子をいひ、先師とは顏回をいふ。いにしへは周公を先聖といひ、孔

子を先師と申しける。云々。或書に云、一條兼良公云、明る日釋奠の宴盛を群臣に給ふ。稱して總明といふ。言は、是をくらへば人をして聰明ならしむる也。(俗におきまつりと云ふ。祭る所の物を僕置の心ならし。)

【菜草】續日本紀文武天皇、大寶元年二月丁巳、始めて釋奠を行ふ。〔禮記王制〕菜を釋き幣を奠めて、先師を禮す。わくかせわ大學寮にて、これを行はる。孔子及び十哲の影を祀る。上卿は少納言、文章博士、孝經・禮記・毛詩・尚書・論語・周易・左傳、年廻りにこれを講ず

【東都歳事記】中の丁の日 湯島聖堂釋典。庶人は拜する事ならず。先聖・先師・九哲をまつらる。又宋の六君子(一)の畫像を掛けらる。(略)本朝釋典の始は、文武天皇の大寶元年に始まり、吉備大臣入唐の後、潤色によりて、釋奠の禮彌〻備はりしが、應仁の亂以後中絶す。然るに寛永十年癸酉、林道春先生鈞命を蒙り、上野に一廈(二)を經營して先聖并びに十哲の像を置く。是を先哲殿といふ。元祿四年辛未二月、當所へ移され、年々釋奠の式たえず行はる。釋奠の制、委しくは東涯先生(三)の制度通等を見るべし。

註 (一) 程明道・程伊川・邵康節・張横渠・周茂叔・朱文公。(二) 一室。(三) 仁齋の子、儒學者、元文元年歿、年六十七。

季題解説 陰暦二月及び八月の上丁の日に行はれる孔子の祭である。即ち禮記文王世子篇に「凡學、春官釋奠于其先師」とあつて、學校で先聖先師(周公又は孔子)を祀る禮である。釋は舍(オク)である。菜は蘋蘩の類である。蘋蘩(蘋はウキクサ、蘩はシロヨモギ)の類を供へ舍くのみで、牲牛幣帛をすゝめない輕い祭禮の意である。支那では後漢以後は孔子を祭ることの特稱となり、遂に都鄙の大典となつた。我が國には儒學と共に渡來し、大寶元年、文武帝が大學寮に御親幸あり、釋奠を舉行あらせられてから、代々朝廷及び諸國の盛儀となつてゐた。應仁亂以後、皇室の衰微と共に廢絶したが、徳川時代に至り、幕府が江戸湯島に聖堂を建て、釋奠を舉行し、諸藩もこれに倣つて行つた。然るに明治維新後又々廢絶したのを、明治四十年孔子會が起り、古禮に擬して典禮を行つた。朝鮮や支那では今でも盛んであるらしい。臺灣では、

臺南聖廟の釋奠

臺南の孔子廟をもつて宏莊第一とする。

我が國では多久の釋奠（春四月十日、秋十月十四日）は古來頗る有名である。佐賀縣多久の聖廟は我が國最初の聖廟であつて、而も今日我が國における最古式の釋典を毎年春秋二回擧行してをる點からいつても、特筆すべきものと思はれる。元來舊幕時代の學校は、幕府の昌平黌をはじめ、各藩皆儒學であつて、孔子像を學校に安置し、春秋二季に祭禮をした。これ即ち釋典であるが、この多久も佐賀藩の家老多久氏の采邑で、元祿初年に聖像及び四哲の像を作り、學校に頗る立派な聖廟を造つて、これを安置した。たゞ本藩は佐賀藩に遠慮して釋奠をせず、本藩もまた幕府に遠慮してゐた。然るに幕府はこれに刺戟されて昌平黌に釋典を起したと稱せられる。頗る由緒のある聖廟である。春四月の釋典には、百餘人參列し、祭官九人は支那式の服裝で廟内において祭を行ふ。背から傳來の道具を用ひ、初めに獻饌獻爵、次に祭文、獻詩をよみ、奏樂につれて俯伏したり起立したり拜禮したりする。時間が二時間餘もかゝる。明治四十二年、聖廟大修理が成つた。新築の多久圖書館には、聖廟關係の書類器具等すべて保存されてゐる。祭官は主にこの地方の小學校長や學者達で、豫備の人數も備はり、平常から式典の禮式を習つてゐるといふ。［參照］秋―秋の釋奠（アキノセキテン）

例句

釋奠

釋奠や並びをろがむ老儒生　　木長（ホトトギス）

釋奠やすなはち開きし廟門扉　　左人（同　）

釋奠の扉々をしめかゝる　　令邑（續ホトトギス）

清明（ツイミヤア）　祭墓（きいぼ）

季題解說　清明節の前後十日間、臺灣人は祖先の靈を祭り、且つ各々葷酒、菓飯等を携へて行つて墓前に陳べ、香を上げ、順次墓前に跪いて三叩の禮を爲し、畢つて箔紙を燒き、鞭砲を放ち、終りに紙錢と稱して黃唐紙に錢形を捺した紙を墓の上に置いて歸るのである。これを掛紙又は壓紙といふ。臺灣人の墓參は一年中此の一回のみであるから、此の日は頗る賑ふのである。［參照］時候―清明（セイメイ）

郡王祭（ぐんわうさい）

季題解說　鄭成功を祀る縣社開山神社（臺南市）の祭禮である。鄭成功即ち國性爺の誕生日、陰曆一月十六日に行ふ。別に鄭氏祭ともいふ。この祭典は總て日本式の儀式を以て內地人、臺灣人合同で行ひ、內地人側では、奉納の擊劍、大弓、里神樂等內地の祭典同樣に行ひ、臺灣人側は、この神を氏神とした街々の人々は家に體牲香燭を供へて祀り、街上では支那芝居等を演ずるので、當日はなか／＼の賑はひを呈する。

春の關帝祭　武聖祭

季題解說　孔子祭の後十日して關帝祭を行ふ。支那の武將關羽を祀つたもので、關帝廟は文彼の文廟に對し武廟ともいふ。文廟と同じく、臺南にある武廟が臺灣全島中第一と稱せられてゐる。釋奠同樣、春秋二回に祭典が行はれるのである。〔參照〕夏―關帝祭

媽祖祭

季題解說　媽祖即ち天上聖母の誕生日が陰暦三月二十三日に當るので、この日媽祖祭を行ふことになつてゐる。臺灣人のこの神に對する信仰の强いことは非常なものであつて、臺南州北港に在る代表的な媽祖廟天朝宮の春期開帳祭典に際しては、賽者實に數十萬に及び、臨時列車を續發して尙足らないくらゐである。その宮を天后宮といひ、各地にその廟があり、また家の内にも奉祀する。祭日には綵を結び、燈を懸け演劇を行ひ、熱鬧する人々は牲醴、放炮、焚香、燒金をなし、三叩九拜、家内の平安と家運の隆盛を祈る。本來金刀比羅樣の如く、航海安全を祈る神であつたが、つひに一般に祭祀を行ふに至つた。しかしやはり船乘ホ特に信仰深く、信者は難船覆沒の厄がないといふ。尤も北港と臺南の媽祖は、陰暦三月十三、十四日を開帳日とする。〔參照〕秋　菩薩祭

例句
媽祖祭　媽祖祭眞先きにある龍の旗　美鳥女　（ホトトギス）

復活祭　イースター　昇天祭

季題解說　耶蘇復活記念の祝節であつて、降誕節と共にキリスト教會の最も喜ばしい日として祝せられる。期日は春分又は春分の一日後に來るべき所謂逾越の月の第十四日の日の直ぐ後の日曜日といふことであるので、復活節は三月二十二日より早かるべからず、また四月二十五日より遲かるべからざることとなる。尙ほ判り易く云へば、春分後最初の滿月ある週間の日曜日をあてるといふことになるのである。日曜日は基督が復活昇天の日であるところから、復活祭をまた昇天祭とも云ふ。〔參照〕聖金曜日

例句
復活祭　水に日の惠みに浸し昇天祭　月舟　（ホトトギス）
　　　　復活祭の和蘭風車止めてあり　七星　（續ホトトギス）

謝肉祭　カーニヴァル

季題解說　耶蘇復活祭前四十日間の精進を四旬齋といふのであるが、四旬齋の前の遊樂祭を謝肉祭といふのである、正確にいへば、四旬節の初日即ち

聖灰日前三日間を指すのであるが、通常四旬齋前三週間から既にカーニヴアルと稱する。語源は「肉に告別する」の意で、つまり四旬節に入るといふので肉食を禁ぜられるので、その前に盛宴を張り、肉食告別式を開かうといふのである。この遊樂祭は基督教會の制定したものでなく、遠く古代の埃及羅馬等にあつた遊宴的祝祭の遺物の一である。今日でも佛國、伊國、スペイン等の羅馬舊教國では、この期間、宴飲、舞踏、奏樂を行つて歡を盡すのみならず、昔のやうに假面を被り、山車を出し、お祭騒ぎをし、風俗上如何はしい馬鹿騒ぎまでする。敬虔な基督教徒は勿論これに加はらないで、その期間聖堂に參詣して經業に從事する。

聖母祭（せいぼさい）

季題解説 聖母に關する教會の祝日には次の如きものがある。

(一)聖母マリヤの御やどりの大祝日……………十二月八日
(二)聖母マリヤの誕生日の祝日……………九月八日
(三)聖母マリヤの御告の大祝日(Annunciation)……三月二十五日
(四)聖母、聖エリサベツ御訪問の祝日……………七月二日
(五)聖母御淨の祝日(Purification)……………二月二日
(六)聖母被昇天の祝日……………八月十五日
(七)聖母の淨き御心の祝日……………約八月二十七日
(八)聖ロザリヨの祝日……………十月第一日曜

右の内(三)は受胎告知の日であり、(五)はマリヤが基督を抱いて始めてエホバの神前に詣でた日である。茲に掲げた聖母祭の期日は一定しないが、受胎告知日即ち三月二十五日を以て、聖母の祭の日に充てることが最も多いと云ふことである。要するに、聖母は神の御獨子を産み育て奉る幸福と光榮とを持ち給へること、その御人格のなみ／＼ならぬことは聖書に明かで、基督教徒はその日に特に祈をさゝげて聖母を祭るのである。

聖金曜日（せいきんえうび）

季題解説 耶蘇の苦難及び死の記念日であつて、初代教會においては、十字架の祭または救の日などゝ稱せられた。初代教會はこれを斷食及び悲哀の日として守つた。それは十字架はキリスト贖罪の最後の業であつたけれども、これがためにキリストに苦痛を與へ、且つ一時たりとも弟子等に失望を與へたからである。この日の祭はすべて嚴肅と悲哀の調とを以て行はれた。今日でも羅馬、希臘の二教會は最も嚴肅にこれを守り、終日鐘樓の鐘を鳴らさず、常燈明を點さず、十字架を始め聖壇の諸具は凡て黑布で覆ひ、僧侶の外一般の人々はマスに與らすと云ふ。期日は復活祭と同じ週の金曜日である。金曜日は基督が磔刑に處せられた日であるから、特にこれを記

けたのである。【参照】復活祭（フツクワツサイ）

吉野（よしの）の會式（ゑしき）　花會式（はなゑしき）　鬼踊（おにをどり）

古書校註　【年浪草】吉水院の寺說に曰、三月の會式に子守・勝手兩明神の神輿、本堂へ渡御、三尊兩社の寶前にて、舊記には、一切經會修行とあれども、中古以來仁王會修行、法事畢りて兩神輿還幸。又云、三月花の頃を總べて花會式と古來より言傳ふる事ながら、山中行事に日數等もなく、花會式と云ふまでにて、所の花見のみ也。

季題解說　舊曆三月十一日、十二日、今日では四月十一、十二の兩日、吉野の藏王堂（金峰山寺）で法會を行ひ、法華經千部を修する。昔、役の行者がこの日鬼を濟度したといふ傳說によつて、講中の者鬼踊といふ一種の舞踊をする。折柄花の眞盛りの頃であるから、吉野會式々々と日にはするけれども、法事のことなどは忘れてしまつて、花見に狂ふことは法隆寺會式などのそれと同じである。參照 吉野の餅配（ヨシノノモチクバリ）

例句　吉野の會式

花會式かへりは國栖に宿らんか　石　鼎（ホトトギス）

藥師寺にて
花會式悔過の法とぞ申さるゝ　無　明（同　）

吉野（よしの）の餅配（もちくばり）

古書校註　【滑稽雜談】吉水考物に云、二月會式と申すは、正當とて、當二月より來る五月まで、長日不退の行人、寺僧方を華供といひ、滿堂方を懺法と稱し、右華法・懺法の兩行人、二月朔日本堂へ出仕、御供・神酒獻備、捧幣等之有り。本堂の廣庭にて、夥しく餅をまく事也。世俗是を吉野の餅まきと云ふ。餅配も此の事を云ふ。其の外滿山の堂社殘らず御供・神酒・餅等獻備あり。右に附いて正月下旬三日の間、華供・懺法の兩頭坊より施行の儀あり。近國の貧人・乞丐夥しく來り集ると。云々。○雜談抄に云、攝州平野大念佛寺の本尊、一佛十菩薩の畫像に供する元朝の餅鏡を、歲首に吉野山藏王の神人參りて、此の鏡餅を乞ひ請けて、扨藏王權現に備へ、供養式終りて、此の餅を破碎して、多くの米にまじへ炊きて、又餅となし、今朔日本堂に於て、諸人に施す。是を餅配と云ふ。又吉野山中の僧俗へ殘らず賦る也。此の節下使の家婦、曲輪に入れ戴きて、院々家々へ配ると云ふ。

季題解說　吉野藏王堂の行事であるが、今日では古老に聞いてもはつきり知つて居ない。藏王堂坊中の寺で、二月朔日の會式に餅を搗いて、寺々や在家へ配つたのをいふのであるとも記し、また四月の花會式に、鬼踊の後、何十石といふ餅を搗いて、餅撒きがあつたのをいふのであると記した歲時

記もある。【参照】吉野の會式ヨシノ

例句 吉野の餅配　餅配大峯の杣も下り來よ　小酒（杉の實）

積塔會（しやくたふゑ）　石塔會（しやくたふゑ）　積塔（しやくたふ）　座頭積塔（ざとうしやくたふ）

古書校註

【日次紀事】　石塔會。今日（一）盲人・撿挍以下衆分に至るまで、各々（二）清聚庵に聚り、光孝天皇の皇子、雨夜の御子の爲に、石塔會を修す。宿忌の頭人撿挍、經營を設く。座上には守瞽神の畫像を掲ぐ。而して衆盲之を拜す。其の後大瓶の酒を酌み、盲人六派の中に四人を撰み各々平家を說かしむ。守瞽神は日吉二十一社の中、十社を取りて之を祭る。俗守瞽神を誤りて宿神と稱す。此の畫幅は常に總撿挍の宅に安置す。其の人死すれば則ち此の畫幅及び萬事は次の撿挍に與奪す。盲人琵琶を彈ずるに依りて、妙音辨財天を尊崇す。（略）相傳ふ、雨夜の皇子（三）日盲ひ給ひし故に、衆盲を愍み給へり。明日は皇子の忌日也。衆盲各々心經を誦し、宿忌を修す。天皇も亦上賀茂の封境の中に、田地若干を置きて、歸する所の無き盲人を惠み給ふ。今其の田、社司の有と爲れり。故に遠方より盲人始めて京師に到りて、未だ宿を定めざる者は、先づ賀茂の社家に寓する也。今日、（四）盲人石塔會當日、總撿挍宅、清聚菴の僧に請うて、齋を施す有り。然る後、撿挍各々四條川邊に出づ。而して石を以て塔を建て、香華を奉じて之を拜す。故に專ら石塔と稱ふ。

【滑稽雜談】　琵琶の此の國へ來ることは、仁明天皇の御宇、嘉祥三年三月に、掃部頭貞敏入唐して、廉妾夫に三曲を傳へて持來せるなり。（略）薩戒記（五）に、應永中、院中に於て琵琶法師を召す事見えたり。○當世絕えず行ふ。都鄙遠近の衆盲、此の會に臨みて官位をすゝむ。故に撿挍・勾當は申すに及ばず、其の以下にある所の官に進む衆盲輩をなせり。

【栞草】　（六）千梅が曰、雨夜の皇子薨じて後、諸の座頭、墓に每年石を積みて、弔ひ祀りし遺風なりとぞ。

註（一）二月十六日。（二）京都高倉綾小路にあった　（三）東都歲事記に「世に光孝天皇御子とあるは誤にて、同じ天皇の御弟なり」といふ。又天夜を雨夜につくる」と記してゐる。（四）二月十七日。（五）中山定親卿の應永二十五年より嘉吉二年に至る日記。（六）以下は「隻錦輪」の所說の引用。

季題解說　古へ二月十六日に盲人撿挍以下衆分が、京都市高倉佛光寺上ル清聚庵に集合して、雨夜の皇子のために琵琶を彈じ、平家五段を語つた行事である。この雨夜の皇子は歷史上無かつた人のやうであるが、光孝天皇の皇子で特に盲人を愍み給ふたといはれるので、その忌日である二月十七日の前日、その御墓のある清聚庵で行つた。卯の刻に一老（是を職といつた）が守瞽神を守護して庵に著し、十老、撿挍、勾當、城方、都方の衆分列

席、有髪の素袍の男がこの守督神の像を掛ける。この守督神は山王二十一社の中、十社の神だといつてゐる。この時盲人、神を拜し、酒宴を開き、盲人は互に名を呼びあつて酒を酌む。後琵琶をとつて平家を語つたとのことである。この日勾當三人、四條河原で石を積んで塔を組み、皇子を弔つた。今はこの行事は勿論、清聚庵といふ寺も、雨夜皇子の御墓もない。盲人を總稱して座頭といひ、その取締を一老といひ、二老、三老と十老に及ぶ。十人が京都に居つて盲人の司となつた。十老は即ちこの十人である。城方、都方といふのは、平家を語つた盲人の始まりが如一撿挍といふ人で、その弟子城一といふ人の後の派と、覺一といふ人の後の派が、毎年交替で役を受持つたその役の稱である。また六月十九日に、同じく皇子を弔ふ行事があつたが、それは座頭納涼といつた。［參照］辨天堂琵琶會ベンテンダウビハヱ　夏―座頭の納涼ザトウノスヾミ

辨天堂琵琶會べんてんだうびはゑ

【東都歳事記】本所一つ目辨天堂琵琶會。今朝（二）十二座の神樂あり。巳刻より瞽者本社の內陣に集會し、琵琶を彈じ平家を語り、未刻に終る。當社は、元祿の頃、杉山撿挍信一の勸請なり。（略）今日京師五條坊門の北、清聚庵には盲人集會し、（略）琵琶會修行あり。（略）江戸もこれにならひて、今日びはゑを行ふなり。［參照］積塔會シヤクタフヱ

（一）二月十六日。

聖靈會しやうりやうゑ　貝かひの華はな

【日次紀事】聖德太子忌。是を聖靈會と謂ふ。攝州天王寺中、太子の像幷びに舍利塔を肩輿に遷して、六時堂に安置し、一舍利・二舍利以下、十二坊の僧徒を合せ、堂前の舞臺に於て大法事有り。寺中第一臈の僧を一舍利と稱し、第二を二舍利と稱す。これ舍利を預るに因りて言ふ者也。

【滑稽雜談】今世に於て、太子忌を修する地多し。然れども天王寺を以て第一とす。毎歲二月廿二日を以て正當とす。是廿二日は、南嶽惠恩大師の忌日也。恩公は陳の大建九年六月廿二日也。太子は是恩大師の再誕なる義

を示さんために、今日を用ふるか。

【[illegible]】聖徳太子の御鴻徳を讃嘆し奉る舞樂中心の會式であつて、太子の御削せに係る四天王寺において毎年嚴修される。太子は推古帝三十年二月二十二日に薨去遊ばされたから、この日勤修するのが慣例であつたが、今日では暦やその他の關係から、四月二十二日に行はれてゐる。明治初年廢佛運動のため一時中絶したが、同十七年以後復活されて、現在では天王寺三大法要の一となつてゐる。式は未明四時、樂人の裝束の儀から始つて、種々複雜な次第を經、終るのは夜に入つてからである。日出頃、佛舍利の玉輦と太子の鳳輦とを六時堂に遷し奉る式がある。渡御の列は左右に分れ、舞臺上を並列して進む。それから法要と舞樂とが始まる。その間大行進が行はれる。式が終つて玉輦は金堂に、鳳輦は太子堂に還御される。舞樂が行はれる石舞臺の四隅には、高さ二丈の紅紙作りの曼珠沙華を立て、その杖に燕をつける。また花には信貴山の苔と、難波の浦に吹き寄せられた徑一寸程の貝とを付けてある（貝の華）。左右には徑一丈程の大太鼓が建てられる。式には全山及び末寺の僧徒が出仕する。勿論一般參詣者も夥しい。

【[illegible]】太子會（シヤイヱ）天文―貝寄風（ヨセカ）

太子會（たいしゑ）

【[illegible]】昔太秦の廣隆寺において修せられた聖徳太子の御忌日の會式である。太子が薨じ給うたのは、推古天皇三十年二月二十二日であるから、廣隆寺ではこの日太子會を修したのであるが、現在では廢れてゐる。廣隆寺は太子の開基遊ばされた精舍で、推古天皇十二年、歸化人秦川勝によつて造營されたといふ。それがため廣隆寺で太子會が勤修されたのであるが、現在この會式が廢れてゐることは、飛鳥時代の一山の堂宇が悉く燒失したこと共に惜しむべきである ―― [illegible]

【例句】

太子會

太子會や松の下なる小便桶　蛇鍋（ホトトギス）

常樂會（じやうらくゑ）

【[illegible]】奈良興福寺、大阪四天王寺で修する涅槃會を常樂會といふ。常樂は常樂我淨の略である。常、樂、我、淨は佛の證得した四德である。故に涅槃會を常樂會ともいふのである。昔は勿論陰暦二月十五日であつたが、今日は三月十五日に行はれる。諸國同寺年中行事大成に「十五日南都興福寺常樂會、東金堂に閻浮檀金の釋迦像あり。厨子に安ず。其の扉に涅槃會を畫く。相傳ふ瓦勢金岡が筆なりと云ふ。今日其の扉を開く。」云々。

【[illegible]】涅槃會（ネハンヱ）

【例句】

常樂會

肥桶に落つる椿や常樂會　暮情（ホトトギス）

御影供（みえいく）

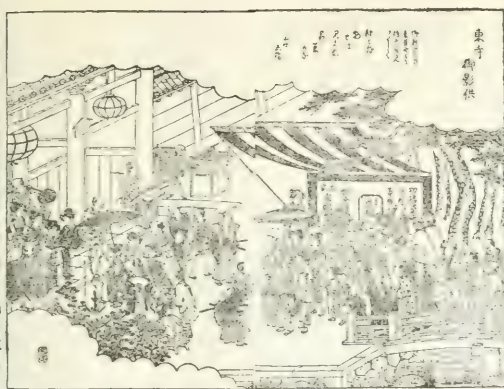
古書校註

【滑稽雜談】 今世弘法大師の御影供を行ふ所おほしといへども、東寺を以て第一とす。京都の貴賤男女羣集せり。其の會場において、放下・御まひ・物うり・茶店・酒棚市をなせり。商人・職人・百姓に至る迄、今日は暇となし、東寺・御室・高雄などへ參詣をなす也。これ大師の高德の及ぶ所ならし。

【年浪草】 弘法大師の御影供也。承和(一)二年三月廿一日入定。今に至りて、此の日仁和寺其の外眞言家の寺院、大師の像を安置するの處々、皆御影供を修す。就中、諸人御室・東寺へ詣づる者多し。

註 (一) 仁明天皇の年號。

季題解説

四月二十一日、京都東寺その他眞言宗各寺院で、弘法大師の正忌を營むのを御影供といふ。俗に「太閤は秀吉にとられ、黄門は光圀にとられ、大師は弘法にとられる」といふ如く、單に大師といへば弘法を指す程であるが、同じ大師でも、圓光は御忌といひ、立正は御會式と云ひ、見眞は報恩講、智者の場合は大師講といふ。弘法は名は空海、姓は佐伯氏、名は眞名、光仁帝寶龜五年讃岐に生れた。延暦二十三年入唐して惠果阿闍梨に學び、また華嚴、六波羅密經等を罽賓の僧般若三藏に得、悉曇の傳を曇貞和尚に受け、大同元年歸朝して眞言宗を傳へた。詔により宮に入り、碩師を會して弘法を論じ、諸師は屈服した。弘仁七年高野山に金剛峯寺を創め、承和二年三月二十一日、六十二歳で入寂した。空海はまた書を善くし、所謂三筆の一であるが、彫刻にも長じてゐた。いろは歌はその作であると傳へられる。著はすところ文鏡祕府論、祕密曼陀羅十住心論がある。延喜二十一年諡されて弘法大師といふ。昭和九年は

丁度千百年の遠忌に當る。諺に「日本の生死不思議の人が三人ある。生あつて死なきは弘法、死あつて生なきは天滿天神、生も死もなきは人丸」といはれ、**高野山の詠歌にも**「ありがたや高野の山の岩かげに大師は今もお

はします」とある。東寺は京都市下京區大宮八條下ルにあつて、八幡山教王護國寺祕密傳法院といふのが正しい名で、俗に東寺または左寺といふのである。眞言宗の總本山である。はじめ桓武天皇が大納言伊勢人を造寺の長官として朱雀門の東西に二寺を造營せられ、嵯峨天皇弘仁十四年、西寺を守敏に、左寺を空海に賜はつたもので、今の東寺は卽ちこれである。寺域三萬坪、南大門、蓮華門、慶賀門、八足門があり、堂塔に金堂、講堂、食堂、大師堂及び本邦第一の高塔五重塔等がある。延元元年新田義貞が足利尊氏をここに圍んだのは名高い史實である。東寺では、正忌三月を新曆になつてから四月に改め、大師堂（御影堂または西院といふ）で、大師の像を開扉して、百味飲食（オンジキ）を供へ、管長以下大衆誦經行道して莊嚴な勤行式を營む。先づ祭文を讀み、散華、對揚、唱道、諷讚、中興後讚の式があり、四回の奏樂がある。弘法大師攝家行實記に「延喜十年三月二十一日、勅使少納言某に仰せて、今より已後永代の式として東寺の灌頂院に於て大師の御影供を修すべき旨宣下し玉ふ、是れ卽ち東寺御影供の濫觴なり」とあつて、その紀元も古い。大師堂は大師存在の頃からの住房であつたといはれ、寺中第一の古建築である。毎月二十一日は東寺附近數十町から境内にかけ數千の店が出て、十萬餘の參詣者があるが、特に四月の御影供は雜鬧甚だしく「二十萬の參詣者がある」といはれる。この日境内灌頂院の門は開かれて、堂前井上の繪馬を拜觀せしめる。この池は神泉苑の神龍池に通ずるといはれ、一尺五寸位の馬を描いた繪馬が三枚掲げてある。中央の一枚は今年一月に掲げられたものであるが、その馬の出來榮によつて本年の米作豐凶を占ふので、ここは特に雜鬧する。外二枚は昨年及び一昨年のもので、三年後には徹する。その馬の頭の出來のよい時は早稻が豐作といひ、胴の太いときは中稻がよいといふ。また馬が荒れてゐるときは風が烈しいなど、てんでに百姓等は評してゐる。またこの日、灌頂院境内の土を掘つて虎杖の根を探してゐる人たちを澤山見受けるが、これはこの日掘つた灌頂院の虎杖は百病に驗があるといふからである。高野山金剛峰寺では三月二十一日に行ふ。この寺ではこの二十一日より前十七日に御衣加持のことがあつて、御衣井の靈水で衣を染め、一山の諸德これを加持して、御影供當日、大師の像の御衣を更へることをするといふ。昔は三月二十一日に女人禁の京の西山高雄山神護寺に女人の參詣を許した。これも大師御影供からである。しかし勿論高雄は現今女人禁でもないのでこのことは絕えた。［參照］

高雄山女詣（タカヲサンニョニンマウデ）　御室詣（オムロマウデ）

［例句］

御影供

御影講や顱の青き新比丘尼　許六（五　井發句集）

精心の多き大工や御影講　同（同　）

御影講の蓮やこがねの作り花　蕪村（里虹　追善）

御影供やひとの問よる守敏塚　太祇（太祇　句選）

御影供

北面の御堂かしこし御影供　　召波（春泥發句集）

御影供や老て見まかふ角力取　　毛條（五車反古）

大原女や御影供詣での頰被　　只管（ホトトギス）

高雄山女詣（たかをさんをんなまうで）

古書校註

【滑稽雜談】元亨釋書に云、天長（一）二年、敕して高尾神願寺を以て空海に賜ふ。改めて神護國祚眞言寺と名づく。（略）祕密眞言の道場なれに、今日御影供を行はるゝ也。尋常は女人禁制の境地也。御影供一日はこれをゆるして、參詣をなす也。此の地に楓樹多し。秋末黃葉の時、第一の壯觀也。當寺に、弘法大師・紀僧正・文覺などの所持什寶墨蹟等侍る也。〔[illegible]〕御影供(ミエイク)

註（一）淳和帝の年號。

御室詣（おむろまうで）

古書校註

【滑稽雜談】帝王編年記に云、仁和四年八月十七日、仁和寺金堂を供養す。先帝に奉爲し創立する所也。云々。按ずるに、先帝は光孝、今上は宇多也。○壒囊抄に云、此の寺は法皇（一）、醍醐天皇昌泰二年十月十四日、御出家ましまして、法名空理と申せしなり。是より密教に歸し給ひて、佛院を改めて御室と號せり。○此の地も祕密信仰の道場なれば、密宗の開祖大師にしましませば、御影供を修せらるゝ也。此の境ことに又櫻花の樹おほし。洛西の第一壯觀なれば、盛花の時群集す。もとより廿一日は御影供なれば、一には參詣のため、一には花樹見物を催して、貴賤踵を銜く（二）也。〔[illegible]〕御影供(ミエイク)

註（一）宇多法皇。（二）群れ集ること。

御忌（ぎよき）

法然忌(ほふねんき)　御忌詣(ぎよきまうで)　御忌の鐘(ぎよきのかね)　御忌小袖(ぎよきこそで)　辨當始(べんたうはじめ)

古書校註

【日次紀事】（一）今曉、知恩院の住職、自ら轉供を取りて、法然像前に備ふ。其の餘三箇寺、（二）も亦然り。今日或は知恩院門主堂に入れば、則ち法然上人の前に於て、音樂有り。

【滑稽雜談】これ日域淨土の開祖法然上人の御忌也。（略）東山知恩院は大谷寺と申して、吉水の坊跡にて、淨土總本寺なれば、後柏原・後奈良院二帝より、法然上人の御忌を修すべきよしの敕書侍り。其の上に當將軍家の崇信ましませば、別して御忌の式嚴重也。其の上元祿十年丁丑正月十八日、

法然を圓光大師と諡し、寶永八辛卯年五百年忌の時、東漸と加號を賜ふ綸旨なんども、皆此の寺にて行はるゝ也。傳へ言ふ、遠留(三)此の法會退轉ありしを、當所一心院の開山稱念上人此の地に來るの初、影前にて一七日の別時念佛を修せられけるより後、諸末寺の僧徒を集め、十八日の初夜より廿五日の日中まで、毎日三時の法則丁寧也。此の會中、末時の長老たち三僧を選びて、初讃と申す役儀をつとむ。其の料おの／＼八木(四)十三石を納め、本寺に奉ると云へり。外の三箇の本寺、又御忌を行はるゝ事、粗ゝ相似たり。殊更知恩院は境內せばからず、放下師或は舞まひの輩、又は土産の景物等の賣買散在せり。都鄙の參詣群集をなす。誠に年始の壯觀なるべし。

【菜草】京の俗、御忌詣を遊覽の始めとして、辨當はじめと云ふ。十月、東福寺の開山忌を終として、辨當納と云ふ。

註 (一)一月二十五日。(二)光明寺・智恩寺・淨花院。(三)往昔。(四)米。

季節解説 四月十九日から二十五日まで七日間、淨土宗本院、殊に京都東山知恩院で行はれる圓光大師の忌日法會をいふ。圓光大師は長承二年四月七日、美作國久米南條稻岡で生れた。名は源空、十五歳で皇圓に從て受戒し、後叡空に就いて密乘を稟け、法然坊と號した。洛東吉水に住し、專修念佛及び圓頓菩薩の戒法を說いたが、今の知恩院山中勢至堂は即ちその舊趾である。後圓光の號を賜はつた。建永中、事に依つて讃岐に竄せられ、建曆元年ゆるされて還つた。建曆二年正月二十五日、前記勢至堂で入寂した。後代の諸帝、東漸、慧成、光覺、慈教等の大師號を贈られた。この法會も永く退轉してゐたが、一心院の開山稱念上人が再興して今日に及んでゐる。知恩院は華頂山と號し、淨土宗鎭西派の總本山である。昔は正月であつたが、今は前記四月に知恩院で行つてゐる。まづ十八日夜、阿彌陀經を誦し行道を修する。これを經の紐解といふ。この日から二十五日まで、末寺の僧侶は皆本山に集つて各讃偈を勤めるが、殊に長老三人を選んで、初讃といふ役を勤めしめる。この御忌は特に京都でも參詣多く、俗に衣裳競べと

いふ程、皆綺羅を飾つたもので、呉服屋はこの御忌詣の衣裳を見てその年の流行を定めた程であつた。近年はかうした贅澤をなるべく是正するため、この會中の華頂婦人會などは特に黒の紋附といふ定めであるが、始めは綿服も直ちに羽二重、錦紗と贅が進み、裾模様姿の婦人達で殊に美々しいものになつてしまつてゐる。昔は正月であつたので、この御忌を遊山の始といふ意味で、辨當始の稱があつた。京都西九條では、その祖先が法然上人の祈禱のため病氣平癒したといふので、御禮心から農民が毎年田ケ本山へ水菜を贈つたものである。東京芝増上寺でも四月に營まれ、參詣人が多い。

例句

御忌

御忌まゐり都ぞ錦珠數袋　言水（俳諧五子稿）
人の世やのどかなる日の寺林　其角（五元集）
御忌やよふ靈岸樣と渡し守　沾徳（俳諧五子稿）
難波女や京を寒かる御忌詣　蕪村（蕪村句集）
御忌の鐘ひびくや谷の氷迄　同（同）
拾ひあげて櫻に珠數や御忌の場　太祇（太祇句選）
嫁入せし娘も多し御忌詣　同（同）
八郡の空の霞や御忌鐘　召波（春泥發句集）
氣にむかばねぶつ申せよ御忌の場　几董（井華集）
着だふれの京を見に出よ御忌詣　同（同）
御忌の鐘死なぬ藥もありときけ　乙二（をのゝえ草稿）
冷々と疊廣さよ御忌の鐘　楊童（ホトトギス）
消ゆる鐘におつかけ打つや御忌の寺　木國（同）
御忌の寺へ橋高々と架けかはり　仙溪（同）
霞み居る比叡や鞍馬や御忌詣　冬星（同）
引いて來て松まだ植ゑず御忌の寺　玉垣（續ホトトギス）
石狩に沿へりし村の御忌の鐘　夢城（同）

行基詣（ぎやうきまうで）

[illegible]

【栞草】二日（一）○攝州河邊郡昆陽村、崑崙山昆陽寺は、四十五代聖武帝天平五年草創、開山行基みづから藥師の像を作りこゝ安置す。天正年回錄（二）す。今僅に小宇を搆へ、本尊及び開山の像をおく。八町東に池有り。昆陽の池と云ふ。池中の鯽みな一眼也。池の魚を祭りて行波明神と號す。二月二日里民參詣す。是を行基參りと云ふ。○行基、姓は高志氏、泉州大鳥郡の人、百濟國王の胤也。天智七年に生る。十五歳にして薙染す。

註（一）二月。（二）火の神。轉じて火災に遭ふこと。

季題解説 陰暦二月二日は行基の忌日である。行基は大和藥師寺の僧、俗姓高志氏、和泉の人。十五歳で出家し、慧基、道昭、智通等に學んで具足戒を受け、諸國を遊化して寺院を艸開し、傍ら開墾疏通架橋等の工事に盡力した。聖武帝の時、勅を奉じて東大寺の建立、國分寺の創建等の事に從ひ、その功を以て封九百戸を給せられ、一躍大僧正に叙された。その創建寺の中の一寺である兵庫縣川邊郡稻野村寺本の崑崙山昆陽寺では、この日開山忌を修し、本尊の開帳をし、諸人が參詣する。これを行基詣といふ。寺は所謂猪名の笹原を行基が開拓して建立したもので、眞言古義派に屬し、行基作の藥師佛を本尊とする。その寺は回祿して僅かに小宇を殘すのみである。寺の東數町のところに俗稱大池といふ池がある。行基が開鑿したと傳へられる昆陽池卽ちこれであつて、その池の鮒はみな一眼であるといふ俗説がある。現今では會式は四月二日・三日に改めて行つてゐる。また開帳は六十一年目に行ふといふ。

善導忌（ぜんだうき）

古書校註

【日次紀事】 東山禪林寺善導忌。知恩寺中、善導院亦之を修す。(一)

【栞草】 唐の終南山悟眞光明善導大師の忌日也。隋の煬帝太業九年癸酉に生れ、唐の高宗永隆二年三月十四日遷化す。春秋六十九歳。

註 (一) 二月十四日の條。

季題解説 善導大師の忌日を勤修する法要である。大師は隋末唐初の名僧で、日本淨土敎の開祖圓光大師が「遍依善導」と皈敬した一事によつても、その佛敎史上の位置が察知せられる。唐の永隆二年三月十四日の入寂と傳へられてゐるから、淨土宗寺院のなかでは、毎年同日に法要を修する寺院もある。しかし特殊な忌日に際して嚴修する方が普通である。その最近の例は昭和五年春、法然門下の諸本山（京都では知恩院、永觀堂禪林寺、黑谷金戒光明寺・百方遍知恩寺・清淨華院・京極誓願寺・粟生光明寺等）を初め、門末諸寺院で盛大に修せられた同師一千二百五十年大遠忌である。淨土宗系統でも眞宗の方は敎儀上の關係から、特に善導忌を修することは稀である。最も善導忌と緣の深いのは西山三派（禪林寺・誓願寺・粟生光明寺の諸派）である。儀式には大師の像を正面に安置するほか、他の法要と異るところはない。

西行忌（さいぎやうき）　圓位忌（ゑんゐき）

古書校註

【日次紀事】 西行法師忌。東山雙林寺に塔有り。上賀茂西念寺維御堂、并びに竹田西行寺も亦之を修す。

を友とした。和歌文章に長じ、兼ねて書に巧みであつた。當時歌界の四天王の一に數へられてゐた。伊賀國見山の菴室で、觀應元年のこの日、六十九歳で歿した。徒然草の著があり、權大僧都を贈られた。手枕の野邊の草葉の霜枯に身は習はしの風の寒けさ」の歌から手枕の兼好の異名があつた。京都には吉田、雙ヶ岡等の舊跡があるが、忌日は修されたことを聞かない。雙岡は兼好が豫て葬地をこゝに卜し、櫻樹を植ゑ、「ちぎりおく花とならびの岡のへにあはれ幾世の春をすごさむ」と詠じたといふいはれの地である。

元政忌（げんせいき）

【古書校註】

【日次紀事】 深草瑞光寺元政忌。日蓮宗にして、詩文を能くす。（一）

註（一）寛文八年二月十八日、四十六歳にて歿す。

【人物解説】 二月十八日は元政上人の忌日である。元政は俗稱石井吉兵衛、日政、日峰妙子、不可思議空子、幻子等と號した。京都の人であるが、始め井伊直孝侯に仕へ、十九歳の時佛道を泉涌寺に學んだ。井伊侯に從つて江戸に在る時、吉原三浦屋の二代目高尾と契り、高尾自殺後諸行の無常を悟つて發心し、深草に瑞光寺を建立してこゝに住む。寛文八年二月十八日入寂した。年四十六。詩歌茶道に長じ、扶桑隱逸傳、元々唱和集等著書も多い。家集を草山集、谷口山詩集といふ。世に石井常右衛門といふのはこの人であると傳へられる。瑞光寺は俗に元政庵とよび、京都伏見深草にあつて、深草元政の住庵の遺跡や、元政の墓がある。墓は竹三幹を立てゝ印としたので、未だ三本の竹のみを生やしてある。同寺は現今三月十八日に忌を修し、遺品の展觀があり、茶事がある。上人の辭世に曰く「深草の元政坊は死なれたりおのれながらもあはれなりけり」。

蓮如忌（れんによき）

【季題解説】 淨土眞宗の名僧蓮如上人の忌日勤修の法要である。上人は本願寺第八代の法主で、諡號を慧燈大師といふ。明應八年三月二十五日、山科本願寺において入寂。著書には「正信偈大意」「御文章」などがある。每年東本願寺では三月二十四日から二十五日へかけて、西本願寺では五月十三日から十四日へかけて、それぞれ蓮如忌を營む。しかし例年は比較的簡單に營み、特殊な忌日即ち大遠忌には盛大に勤修する。尤も山科本願寺別院（東西とも）では、前說の由緒もあつて蓮如忌を特に重視し、每年盛大に勤修してゐる。從つて普通に蓮如忌といへば、後者を指してゐると見てよい。この法要には京都の本山から御堂衆（ダウ）といふ勤行專門の僧が十數名も派遣されるのが例となつてゐる。參詣者は近畿の信者が主である。末寺では每年勤めるところと勤めないところがあり、國によつて異る。例へば大和

では特に中宗會と呼ばれ、吉野郡飯貝村本善寺において盛大に勤修されてゐる。

【例句】

蓮如忌

蓮如忌や山科しろき花大根　蕪墨窟（ホトトギス）
蓮如忌の胡粉ぬりたる佛花かな　はまじ（同）
蓮如忌やをさな覺えの御文章　風生（同）

越前吉崎別院

蓮如忌や舟路陸路の賑はひて　月尚（同）
蓮如忌の數珠肩衣やふところに　一杉（續ホトトギス）
蓮如忌の大逮夜なる渡舟かな　荷芳（同）
蓮如忌の人をのせ行く牛車　二葉（同）

泉涌寺開山忌（せんゆうじかいさんき）

【古書校註】

【日次紀事】　泉涌寺開山俊芿（シュンジョウ）忌。正法國師と稱す。安貞元閏三月今日（一）寂す。

【栞草】　洛の東山に在り。中興の開山俊芿が忌を修する也。釋書に云、俊芿字は不可棄、肥の後州飽田郡の人、母は藤原氏、生れて數日にして樹下に棄つ。三日を經て鳥獸の害なし。同姝往きてこれをみ、祥兒とし、抱き歸りて母に付す。十八にして落飾、建久二年四月入宋、五月の初宋の江陰軍に着す。建暦改元の年歸朝、嘉祿元年十月宋の日、泉涌寺において、重閣講堂を建て、明年の春、華構落成す。嘉祿三年閏三月七日、右脇して逝す。年六十二。云々。法會は八日、或は九日修すと云ふ。

註（一）八日の條にある。

人丸忌（ひとまるき）　人麿忌（ひとまろき）

【古書校註】

【日次紀事】　古へ官家御影供を修す。今に於て、和歌を好む人、多くこの日歌會を修す。南都櫟本・柿本寺に塔有り。或は言ふ、和州初瀬の邊りに有る所の歌塚は、是人丸が墳墓也と。洛西鳴瀑妙光寺中に、人丸堂有り。木像は傳へ云ふ、俊頼の作る所也。

【滑稽雜談】　徹書記物語に云、三月十八日は人丸忌日にて、むかしは和歌所にて、毎月十八日歌會有りしと云々。（略）大和名所記に云、歌墳は、今世和爾の南、櫟本社鳥居の内に柿本寺有り。其の東に墳有り。（二）これらの所説異にして、一決し難し。石見國にも濱田柿植野とて、在所に人丸の滅する舊跡侍る也。扨此の人丸を祭るの儀、其の儀式家々の侍る也。おほくは又能因法師の相傳ふる式を用ふるといへり。總べて人丸の御事、おぼ

ろげにしり明らむ事あるべらかず。識者の口傳を請ひて決すべし。

【采草】人丸終焉の地は石見國也　神祠は高角の山上にあり。世に高津と稱す。この祭祀中絶して、御影供の儀なし。靈元帝の御宇に及びて、勅して絶えたるを興し、廢れたるを擧げて、從一位を授けたてまつらると。

註（一）以下其諺の自說。

季題解說　山邊赤人とならんで歌聖と崇められる柿本人麿の忌である。その忌日については廣文庫の「人麿の忌日」の項を見ると「正徹物語、下十四（人丸の御忌日は祕することとなり、去る程におしなべてしりたる人は稀也、三月十八日にてあるなり）」とある。史上確とはわからないのであるが、普通は陰曆三月十八日とせられ、播州明石の柿本神社（俗に人麿神社といふ）では、四月十八日に人丸祭を行つてゐる。神輿の渡御などあつて相當に賑はふ。柿本神社はまた石見國美濃郡高津村にもある。もと人丸寺といつて、人麿の廟であつたのを近年改めて神社としたのである。寺は眞福寺といつて、今日はこれを神社と別つてゐる。人麿は一に人丸に作り、傳系詳かでない。持統、文武の兩朝に仕へたといふが、生歿の年月の如きも明かでなく、誕生地も石見、近江、大和の三說があつていづれとも定かでない。齡二十歲の頃宮中に仕へ、晚年官位の低い一地方官として石見國に下り、五十歲くらゐで任地で歿したらしいと云はれる。人麿の作品で注意せられることは宮廷の歌人として公に詠まれたものゝ多いことで、その最も得意とする長歌は概ねそのたぐひに屬する。思想も格調も共に雄渾で、内に敬神崇高の精神に溢れ、誠に堂々としたまた非常に情熱の高い抒情詩であることが、その歌を特色づけてゐる。人麿が出て、和歌は眞に文學としての獨特の地位を得たとさへいはれてゐる。

例句

人丸忌

石見のや月も朧の人丸忌　召波（春泥發句集）
土佐が畫の人丸兀げし忌日かな　子規（子規句集）
人丸忌けふ浦人の何をして　蜃樓（漁火）
高坏に紅き干菓子や人麿忌　暮情（ホトトギス）
石見潟凪ぎて霞むや人麿忌　初九（同）
瀨戸物の人麿のあり人麿忌　水竹居（同）
人麿とつたふる像をまつりけり　秋櫻子（同）
緣端にさしおく筆や人丸忌　風生（同）
歌人祭らず里人たゞ祀る社あり　虛子（句集虛子）

小野小町忌（をののこまちき）

古書校註

【日次紀事】市原に塔あり。相傳ふ、小町は觀音の化身也。故に此の日（一）を用ふ。南都帶解地藏寺にも亦墓あり。

（一）三月十八日。

實朝忌（さねともき）

【季題解說】陰暦一月二十七日、源實朝の忌日である。實朝は建久三年八月九日の誕生、兄頼家の後を襲うて年僅十二歳で鎌倉三代將軍となつた。二十七歳の時右大臣に任ぜられ、翌承久元年正月二十七日、鶴岡八幡宮にその拜賀の儀を行ひ、夜陰に及んでの歸途、石階の砌において、甥、當宮別當阿闍梨公曉のために斬られて亡くなつた。時に年二十八歳。翌日、鎌倉大御堂勝長壽院（現在廢滅）の傍に葬る。家臣追慕して出家するもの百餘人に及んだのも、實朝の資性温雅で、諸將士の親愛するところとなつてゐたからである。實朝は勤王の志厚く、思想時流に卓絶してゐた。二十五歳の時渡宋を計畫し、宋人陳和卿に命じて唐船を造らせ、船成つて由井が濱に試みたが、船が大きくて浮ばず失敗に歸した。また文學を好み、十四歳にして始めて十二首の和歌を詠じ、その後十八歳の時から藤原定家の教を受けたが、萬葉集を得てその影響を蒙むり、家集金槐集は蒼古雄勁、獨自の調をなしてゐる「もののふの矢なみつくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原」箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ」等は最も人口に膾炙してゐる。現在鎌倉扇ケ谷壽福寺において毎年實朝忌を修してゐる。壽福寺は松高く苔清らかな寺である。

【例句】

實朝忌

梅寒し祀る鎌倉右大臣　　月斗（同人）

壽福寺の老梅冱てつ實朝忌　　風可（同　）

利休忌（りきうき）

【古書校註】

【日次紀事】　千利休宗易忌　大德寺聚光院之を修す。則ち牌及び墓有り。利休其の石珍奇也　相傳ふ、二條院の御陵舟岡山に在り。陵上に石塔有り。利休其の九輪を取りて、己の塔と爲す。今存する所是也。其の餘悉く洗手水鉢と爲す。今分散して寺中に在り。僭踰（一）の罪嘆ずるに堪へたり。宜なるかな、其の咎に逢へりと。（二）。

（一）僭上踰越　（二）秀吉より死を賜はつた。

【季題解說】二月二十八日は利久の忌日である。利久名は宗易。和泉堺の人。茶道を紹鷗に學び、豐臣秀吉に仕へて恩遇をうけた。天正中、秀吉が北野に遊んで盛んに茗讌を行つてから、茶道は大に榮えたが、利久はその中興の祖と稱せられる。後年故あつて死を賜つた。或はその女吟子を秀吉に望まれたのを拒んだからだとも傳へられる。利久の子宗淳、その子宗旦、その子宗左宗室と、子孫みなその業を繼いだ。宗左の末は千家表流、宗室の末

は裏流となり、京都小川頭に兩家とも茶道の宗家として今日なほ榮えてゐる。當日またはそれに近い日曜等に、この宗家で利久の忌日が修される。まづ利久の像を掲げ、當主自ら獻茶をし、器具すべて故人の遺物を用ひ、社中一同來集の上盛大な茶事が行はれるのである。また利久の墓のある上京區大徳寺聚光院でも嚴かな法事がある。東京品川東海寺少林院でも法事があり、茶事があつたが、この方は日も一定しないやうである。

例句

利休忌

利休忌や間毎にかはる床の花　　可尚（ホトトギス）

釜型の墓に香炷き與四郎忌　　梅史（續ホトトギス）

お國忌（くにき）

季題解說　四月十五日、歌舞伎元祖出雲お國の忌日である。お國は足利の末葉永祿元年、出雲國杵築に生れた。父を三右衞門と云ひ、家は代々出雲大社の宮鍛冶を勤め、苗字を中村と稱して居た。彼は其生家が大社と特別の關係がある爲め、幼少の頃から大社の巫女となり、神樂舞を奉仕したのである。性來艷麗の容色を備へ、而も當時彼の才能は有名なる女豪淀君をして、舌を卷かしめたときさへ云はれた程であつた。永祿の末京都に上り、偶ゝ足利義輝の營に於て神樂舞を奏した。其時彼の美しい肌、豐かなる頰、そして魅力に富んだ眼と、美しい聲とは、彼有名な林羅山をさへ驚嘆せしめたと云はれる。

其富時蒲生家の浪人に、名古屋山三郎と云ふ者があつた。風流遊蕩を以て艷名を擅にして居た。彼は此山三郎と意氣相投じて遂に夫婦となり、歌舞伎」を創造するに至つたのである。

文祿の役豐臣秀吉朝鮮征伐の爲め、肥前國名護屋に在るとき、偶ゝ彼は地方を巡業して同地に到り、陣中に於て彼得意の藝題、大森彥七鬼女の段及平維盛紅葉狩を演じて上覽に供した所、感賞斜ならざりしと云ふ。此時諸將士等は皆芝草の上に敷皮を敷いて見物したので、爾來、歌舞伎を芝居と稱するに至つたと云ふことである。彼の最も人氣を集めたのは、慶長八年四月の頃、京の四條河原の芝生の上で演じた時である。當時恰も鼎の沸くが如き人氣であつて、お國の歌舞を觀なければ肩身が狹いとさへ云はれる程であつた。後彼は場所を轉じて、五條橋の東詰北野の天滿宮の東手、三條繩手の東方、祇園の町後等の舞臺で演ずることゝなり、始めて歌舞伎と稱するに至つた。歌舞伎とは諧謔又は好色といふ意味の俗語から起つた語であると云はれて居る。彼は京都のみならず、後に江戶に下つた時には、物見高い江戶ツ子は上下を擧げて、花と玉とに例へて大に喝采したと云ふ。夫れから中村勘三郎、嵐千作等の弟子も出來、又遊女の中にも彼に師事する者が尠なくない樣になり、佐渡島正吉、村山左近、岡本織部、北野小太夫、出來島長門守、杉山守殿、幾島丹後守など、多數の女優が輩出した。有名

なる花魁葛城太夫も舞臺に上つたと傳へられる。歸郷後法號を智月と稱し、朝夕法華經を讀誦し、念佛三昧に餘生を送り、八十七歳の高齢を保ち、正保元年四月十五日歿し、蓮臺庵に近い宇太鼓原といふ處の墓地に葬つたといふ。彼に一女があり、母の名を承けて二代お國と稱し、洛東祇園南林に於て男女打雜り芝居を演じ、三世お國も亦寛文年間、五條橋西詰に於て芝居の太夫元を爲したと云ふ。

彼の苗字は中村であつて彼が歌舞伎の元祖であつた關係上、後世俳優中に中村の苗字を名乘る者が多數輩出した。彼の最初の弟子であつた猿若勘三郎も、當初中村の苗字を名乘り、又其後寛永元年、歌舞伎興行の免許を得て、泉州堺に中村座、後猿若座と改稱す）を起したのも皆之に因んだものである。

光悦忌（くわうえつき）

季題解説 二月三日は本阿彌光悦の忌日である。光悦は刀劍鑒定家で、傍ら諸藝に達してゐた。姓は本多氏、徳文齋、また自得齋と號した。書は初め青蓮院宮尊朝法親王に學び、道風、佐理の風を加味し、終に一家をなし三跡に亞ぐといはれ、繪は狩野永徳を師として土佐風を交へ、共に一家をなした。これを光悦派と稱し、その畫風は進んで光琳風を生んだのである。また蒔繪、陶造に妙を得、茶道を好み、晩年は京都市上京區鷹ケ峰に寺を建て、こゝに住んで光悦寺と號した。また鷹ケ峰に鑛坑を穿つなど、土地の人も光悦を非常に德とした。寛永十四年に年八十一歳をもつて他界した。光悦寺に墓がある。二月又は三月の日曜をトし、茶人光悦寺に集り、光悦忌を修する。

大石忌（おほいしき）

季題解説 三月二十日、京都東山區祇園町萬亭（一力）で、昔大石良雄が遊興したといふ傳説によつて、謝德のため法要を營み、義士の遺墨遺品及び各名士より寄贈の書畫を展觀して諸氏を招待する。この日法要の後、師匠（現今は松本さだ）及び名妓の舞の手向があり、招待者には手打蕎麥を振舞ひ、抹茶を饗する。勿論その接待役は日頃出入の祇園の名妓舞妓達であるので、一際華やかである。**參照** 義士祭ギシマツリ

例句 大石忌

山科より老尼も參り大石忌　紫雲郎（ホトトギス）
春雨やのれんくゞれば大石忌　青楓（同）
來吉も老いて達者や大石忌　比古（同）
小さなる揮毫の一間大石忌　野風呂（續ホトトギス）
べにがらのあがりがまちや大石忌　泪雨（同）

梅若祭　梅若忌　木母寺大念佛

古書校註

【栞章】　武藏の國葛飾郡墨田川梅柳山隅田院木母寺の緣起に云、往昔吉田少將惟房卿の男七歲の時父におくれ、愁傷のあまり、遂に有爲の門に入らんことを願ひ、叡山月林寺に登りて修學す。十二歲にして野人の爲にあざむかれて、東海の旅におもむく。病にかゝりて終に貞元（一）元年丙子三月十五日、此の處に早世す。忠圓阿闍梨適々に會し、無上菩提の作業をなし、常行念佛を修す。それよりこのかた、今に至りて大念佛會あり。道路にまかせて塚を築き、柳を植ゑ、（二）今日諸人群參す。

【東都歲事記】　隅田川木母寺、梅若塚大念佛。今日（二）は梅若丸忌日によりて修行すといへり。柳樹の本梅若山王の社開扉あり。（略）梅若は十六日ぞあはれなると古人のいひしも宜なり。翌日は詣でぬる人もなく、寂然として鳥の聲波の音のみといひしは、寬延（三）のむかしにして、今は夫にまさり、四時繁昌の地となりて、殊更花のころは、貴賤雅俗となく日每にこの地に游賞し、靑葉にいたりてもなほ往來たえやらず。

註（一）冷泉天皇の年號。（二）三月十五日。（三）桃園天皇の年號。

季題解說　謠曲墨田川にある哀れな物語の主梅若丸の忌日である。明治二十三年頃まではその命日たる陰曆三月十五日に行はれたが、今は四月十五日に隅田川畔木母寺で梅若忌が修せられる。當日は一般法會の外に木母寺の大念佛があり、附近には植木市など立つて參詣者が多い。この大念佛といふのは六ヶ敷いものださうで、附近の人や新井藥師その他近郊から、その道の念佛衆が十人ほど集り、午前十時頃から夕刻まで雙盤念佛を唱へるのである。雙盤といふのは鐘の名で臺に吊してある。それが四臺と太鼓が一つ、一度に五人づゝ交替で鐘鼓を打ちながら、念佛に節をつけて和唱するのである。念佛衆といふのは、別に法衣を纏ふのではなく、普通のみなりをしてゐる。その人々がかん〳〵かん〳〵鐘を叩いて唱名するのは哀感をそゝるものである。木母寺は元梅若寺と云つて、梅若丸のために建つたお寺である。淺草から鐘ヶ淵通ひの乘合自動車に乘り、梅若前といふところで降りると、道路から一段低い民家の中に一字がある。それが木母寺である。御堂には赤緒の鐘が懸り、大提灯が吊され、木母寺、梅若丸、隅田川二十一ヶ所十番の御詠歌の額など懸つて、千社札がべた一面に貼られてゐる。寺に向つて左手の入口に、石の玉垣を繞した塚があり、塚の頂に小祠がある。これが梅若塚で、その始め里人が塚の印に植ゑたと傳へられる柳はある筈もないが、若い柳が枝垂れて忌日の頃は大きな芽をほぐらせてゐる。塚には柳の外に葉の乏しい一本の老松と、紅白の八重椿、珊瑚樹などが茂つてゐる。梅若神社と云つた頃は梅若祭と云つたであらうが、今は梅若忌と云ふと木母寺ではいつてゐる。

〔參照〕天文　梅若の涙雨

梅若忌

梅若忌足袋に目落し話しゆく　みさ子（ホトトギス）
手すさびに結ぶ柳や梅若忌　妙子（同）
鉦たゝく盲の父や梅若忌　素十（同）
梅若忌鉦の音すこし變りけり　みの介（同）

宗因忌

三月二十八日、俳人西山宗因の忌日である。宗因、名は豊一、通稱二郎、安昔齊、一幽子、向榮庵、西翁、梅翁、梅花翁の別號がある。始め肥後加藤家の侍臣であつたが、主家沒落の後京都北野に幽棲した。武藝に達してゐたので、諸侯からの招聘もあつたのを一切斷り、探幽の女を娶り、連歌を里村昌琢に、俳諧を松永貞德（一說には重頼ともいふ）に學んだが、後年大阪に移り、天滿宮で獨吟百句を吐き、別に談林派を立てた。江戸に來住し、天和二年のこの日に歿した。年七十八歳。東京日暮里養福寺に葬つたが、大阪天滿西寺町西福寺にも碑がある。著書に廿日草、四人法師、十會集、たうがらし百韻、釋教百韻、大阪獨吟集、天滿千句等がある。

其角忌　晉子忌　晉翁忌

陰暦二月三十日、元祿の俳人其角の忌をいふのである。この時節になれば、各地の俳句會で其角忌の題詠など行はれることがよくある。其角の菩提寺たる芝區二本榎上行寺では、三月三十日に特に供養があり、また其角の流れをくむ其角堂の一門が集り、各自獻句をなし、連句を作りなどして其角忌を修する例となつてゐる。其角は本姓竹下であるが、母方の姓榎本を名乘り、また寶井とも晉とも自ら稱してゐた。寶晉齋・狂雷堂・晉子・善哉庵・交合庵・六病庵・螺舍・雷柱子・渉川等の別號がある。幼名源助、江戸の生れである。芭蕉の門弟でその十哲の一人に數へられ、當時の俳壇に活躍し、幾多の力作と、虚栗集・蛙合・いつを昔・花摘集・雜談集・句兄弟・新山家・枯尾花・類柑子・五元集等の著書をのこし、その俳名の高いことは世人のよく知る通りである。其角は儒・醫・禪・詩・書・畫等各方面に精進の力した跡が窺はれるが、一面酒豪であり、芝神明町の家守と口論し、諸道具を自ら負ふて嘲りながら立去つたとか、門人の惡戯に對し、日蓮作の佛像を持佛堂から盜み出して、佛の首を繩で括り廁に吊して歸つたといふやうに、放膽一轍なところもあつたやうである。日本橋茅場町の荻生徂徠の隣へ移り住んだ時、「梅咲くや隣は荻生惣右衛門」の即吟をなしたことなども人口に膾炙したことである。その家のあとといはれる料亭「きかく」の門口に、今も其角の井といふのが殘つてゐる。

【例句】　其角忌　凍てつゞく日に梅かたし晋翁忌　蘆　仙（鷄　聲）

竹冷忌（ちくれいき）

【季題解說】　三月二十日、角田竹冷の忌をいふのである。名は眞平、聽雨窓とも號した。安政三年五月二日、靜岡縣富士郡加島村に生れ、大正八年六十四歲で歿した。牛込區會、東京市會、衆議院等の議員となつたり、會社の重役なども務めてゐた。明治二十八年に秋聲會を起し「秋の聲」「卯杖」等の俳諧雜誌を創刊した。その遺業「竹冷文庫」は古俳書を集めて俳壇に貢獻するところが少くない。

鳴雪忌（めいせつき）　老梅忌（らうばいき）

【季題解說】　二月二十日、內藤鳴雪翁の忌日である。翁、本名は素行、老梅居とも號した。松山の藩士で、弘化四年四月十五日江戸に生れた。一時、文部省參事官となつたこともある。四十六歲、俳諧を子規に學ぶや、一歲を出でずして早くも一家の風格を示したと稱せられる。漢詩・漢學の才もあり、また晩年には特に哲學の書を愛讀してゐたやうである。大正十五年二月二十日「たゞ頼む湯婆一つの寒さかな」の句を遺して、東京麻布の自邸に歿した。行年八十。歿する前までもいつも元氣で朗らかで、氣輕く諸所の句會などに出席し、一流の諧謔をとばしたりして誰からも親しまれた。墓は青山墓地に在る。著書は「老梅居雜話」「鳴雪俳話」等。「元日や一系の天子富士の山」「馬方の馬にもの言ふ夜寒かな」「初冬の竹緑なり詩仙堂」などの句が最も有名である。

【例句】

鳴雪忌　正宗寺
豆腐味噌生姜飯や鳴雪忌　默　禪（ホトトギス）
世に送る我が句拙し鳴雪忌　流　石（續ホトトギス）
料峭に獨ありけり老梅忌　巽　（同　）

啄木忌（たくぼくき）

【季題解說】　明治四十五年四月十三日、若くして逝いた情熱の歌人石川啄木の忌である。啄木は本名一（ハジメ）、明治十九年岩手縣岩手郡澁民村の古刹寶德寺に生れた。盛岡中學卒業後、小學校教員、新聞記者等として、東京・北海道等に轉々の生活をなし、最後に東京朝日新聞の校正係となつたが、間もなく病歿した。時に年二十八歲。彼は「最も多く悲しみ、最も多く喜び、最も變化に富んだ閱歷を經て、最も複雜な心理內容を有する人、それが即ち一番幸福な人、一番えらい人、一番生き甲斐のある人である」ことを標

語とし、そして彼自らこれを實行したともいはれてゐる。はじめ新詩社に加つて詩を作つたが、後、短歌に沒頭し、獨特の口語的發想法による新しい歌調を創成して、若い歌人の讃仰の的となつた。「東海の小島の磯の白砂に吾れ泣きぬれて蟹とたはむる」の歌の如きは、今日の文學青年で誰も知らぬものはないくらゐ有名である。歌集に「一握の砂」「悲しき玩具」があるが、詩・評論・小説等の作が多く、啄木全集三巻が梓に上つてゐる。

例句　啄木忌

北上のとはの流や啄木忌　虹三（ホトトギス）

畑中の道を迷へり啄木忌　草火（續ホトトギス）

官幣社例祭表（春季）

官幣大社例祭

神社	祭日	祭神	鎮座地
枚岡神社	二月一日	天児屋根命・比賣神・武甕槌命・齋主命	河內國中河內郡枚岡村
鵜戸神宮	二月一日	彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊	日向國南那珂郡鵜戸村
橿原神宮	二月十一日	神武天皇・媛蹈鞴五十鈴媛皇后	大和國高市郡畝傍町
春日神社	三月十三日	武甕槌命・齋主命・天兒屋根命・比賣神	奈良市春日野町
廣田神社	三月十六日	撞賢木嚴之御魂・天疎向津媛命	攝津國武庫郡大社村
宇佐神宮	三月十八日	譽田別尊・比賣神・大帶姫尊	豐前國宇佐郡宇佐町
大和神社	四月一日	倭大國魂神・八千戈神・御年神	大和國山邊郡朝和村
松尾神社	四月二日	大山咋神・中津島姫命	京都市右京區松尾山
平野神社	四月二日	今木神・久度神・古開神・比咩神	京都市上京區平野宮本町
廣瀨神社	四月四日	若宇迦賣神	大和國北葛城郡河合村
龍田神社	四月四日	天御柱命・國御柱命	大和國生駒郡三鄕村
稻荷神社	四月九日	倉稻魂命・猿田彥命・大宮女命	京都市伏見區深草藪之內町
大神神社	四月九日	倭大物主櫛𤭖玉命	大和國磯城郡三輪町
香取神宮	四月十四日	齋主命	下總國香取郡香取町
日吉神社	四月十四日	大山咋命・大己貴命	近江國滋賀郡坂本村
平安神宮	四月十五日	桓武天皇	京都市左京區岡崎町
建部神社	四月十五日	日本武尊	近江國栗太郡瀨田町
熊野坐神社	四月十五日	家都御子神	紀伊國東牟婁郡本宮村
諏訪神社（上社）	四月十五日	健御名方富命	信濃國諏訪郡中洲村
伊弉諾神社	四月廿二日	伊弉諾尊	淡路國津名郡多賀村
多賀神社	四月廿二日	伊弉諾尊・伊弉冊尊	近江國犬上郡多賀村

官幣中社例祭

神社	祭日	祭神	鎭座地
梅宮神社	四月三日	酒解神・大若子神・小若子神・酒解子神	京都市右京區梅津
大原野神社	四月八日	武甕槌神・齋主命・天兒屋根神・比賣命	山城國乙訓郡大原野村
金鑽神社	四月十五日	天照大神・素盞嗚尊	武藏國兒玉郡青柳村
生田神社	四月十五日	稚日女神	神戶市下山手通一丁目
吉田神社	四月十八日	武甕槌命・齋主命・天兒屋根命・比賣神	京都市左京區吉田神樂岡町

別格官幣社例祭

神社	祭日	祭神	鎭座地
四條畷神社	二月十二日	楠木正行	河內國北河內郡甲可村
野田神社	三月五日	毛利敬親	山口市野田
護王神社	四月四日	和氣淸麿・廣蟲	京都市上京區櫻鶴圓町
東照宮	四月十七日	德川家康	駿河國安倍郡久能町
靈山神社	四月廿二日	北畠親房・顯家・顯信・守親	岩代國伊達郡靈山村
尾山神社	四月廿七日	前田利家	金澤市西町
小御門神社	四月廿九日	藤原師賢	下總國香取郡小御門村
上杉神社	四月廿九日	上杉謙信	米澤市南堀端町
靖國神社	四月卅日	明治維新前及以後殉國者	東京市麴町區富士見町

動物

獸交む（けものつるむ）

季題解説 春になつて諸獸の交尾することをいふ。

例句 獸交む　大なる人輪の中や牛交る　泊雲（ホトトギス）

春の駒（はるのこま）　若駒（わかごま）

季題解説 春になつて春の野に遊ぶ馬を云ふ。

實作注意 新年人事の「春駒」と混同してはならない。春駒といふのは、春駒舞のことか、または馬首の形に青竹の足をつけた子供の玩具の一である。 **参照** 新年－春駒ハルコマ

例句 春の駒

あぶなしやひよ／＼ら瓢箪春の駒　宗因（梅翁宗因發句集）

信濃路の駒は春もや木曾踊　同（同）

しぼじりの尻も居らぬ春の駒　芭蕉（もとの水）

引かへて燕をはたのに春の駒　其角（五元集拾遺）

馬の仔（うまのこ）　馬の子生る（うまのこうまる）　孕馬（はらみうま）

季題解説 馬は春期發情し、交尾し、受胎後約一ヶ年で仔が生れる。四月頃が最も出産率が大である。日本内地の馬の飼育總數は百五十萬頭内外で年々生れる幼馬は十萬餘頭である。主要產地は北海道、東北六縣（殊に岩手・福島・青森）、九州（殊に鹿兒島・熊本・宮崎）などである。仔馬が親馬にくつついて歩いてゐるのなど面白い情景である。 **参照** 春の駒ハルノコマ

春の鹿（はるのしか）

季題解説 春季の鹿は色あせて醜い。牡は角も缺き、牝は子を孕み、脱毛のために斑らに剝げてゐる。 **参照** 孕鹿ハラミジカ　鹿の角落つシカノツノオツ　秋－鹿シカ

例句 春の鹿

うら／＼と草はむ春の野鹿かな　白雄（白雄句集）

野の空をうけてありくや春の鹿　乙二（をのゝえ草稿）

春鹿の眉ある如く人を見し　石鼎（ホトトギス）

松風に耳欹つる春の鹿　枴童（同）

孕鹿（はらみじか）

古書校註

【滑稽雜談】 本草に、鹿九月にして一子を産むの說、(一)未だ詳かならず。年を經るの鹿、多子を産むこと、往々にして之あり。然れども二子に過ぎざるか。

註 (一)時珍本草に「鹿は性淫也。一牡常に數牝に交はる。牝姙むこと凡そ九月にして一子を産む」とあるのをいふ。

季題解說 鹿は十月・十一月頃交尾し、六月・七月頃に仔を生む。孕んだ鹿は二月になれば、お腹が膨れて見える。つまり人間と同じに、五ケ月で外から分かるわけである。八箇月間子を腹に持つ。仔は一匹産まれるだけである。 參照 春の鹿(ハルノシカ)

例句

孕鹿

一つ居てはらめる鹿にせんべかな　果菜（ホトトギス）
近よるややをら起きたる孕鹿　助二郎（同　）
孕鹿もとのところにふせりけり　翠郭（同　）
つまづいて紛れあひけり孕鹿　數歩（續ホトトギス）

鹿の角落つ（しかのつのおつ）

落し角（おとしづの）　忘れ角（わすれづの）

古書校註

【滑稽雜談】 禮記月令に曰、仲夏の月、鹿角解つ。仲冬の月、麋(一)角解つ。疏に曰、鹿夏至を以て角を隕して陰に應じ、麋冬至を以て角を隕して陽に應ず。是鹿・麋の差違也。(略)時珍本草に曰、鹿の角夏至に則ち解つ。(略)これらの諸書を考ふるに、皆夏に至りて角を落せり。然るに連・俳、古來より共に春に許用し、袋角を夏に用ひ來れるは俳諧の掟ならし。此者和においても、おほくは初夏に落す者也。しかれども先達の春とさだめ置かれし事、故あるべし。識者によつて明らむべし。

【年浪草】 凡そ鹿の角は春生じ夏長し。秋堅く冬脫つ。春に至りて角を解すの義、未だ詳かならず。

註 (一)和名は於保之加。

季題解說 鹿の角は春四月頃に落ち、初夏に血塊（「袋角（フクロヅノ）」といふのが即ちこれで、一面に皮を被つてをり、まだ骨質でなく血管が通つてゐる）が出來てだん〳〵角を再生する。再生する度に角の大きさと枝の數を增すので、その枝で鹿の年齢を知ることが出來るといふ。この角は牡鹿が闘爭に用ふる武器であつて、秋季牝を爭ふ時にはこの角で激しく闘ふといふ。奈良では、秋紅葉の盛り前に角切を行ふ。 參照 春の鹿(ハルノシカ) 秋―鹿の角切(シカノツノキリ)

例句

鹿の角落つ

雨の降日にひろいけり鹿の落角　白雄（白雄句集）

影や見る水やのむ鹿の角おちて　同（同）
さをしかに手拭かさん角の迹　一茶（七番日記）
人鬼の見よ〱鹿の角落る　同（一茶句帖）
角落てはづかしげ也山の鹿　同（同）
小男鹿の落した角を枕かな　同ノ（嘉永板發句集）
谷川や拾ふて戻る鹿の角　吟江（推敲日記）
夕月や角なき鹿のうづくまる　三子（春夏秋冬）
山裾や草の中なる落し角　虛子（句集虛子）

猫の戀（ねこのこひ）

猫の妻戀　戀猫　猫のさかり　うかれ猫　猫の思ひ　猫の別れ
春の猫　猫の夫　猫の妻　孕猫

古書校註

【滑稽雜談】此者陰獸也。然らば陽氣に又犯されて交合を好む。是を猫の妻乞と云ふ。又さかる・つるむなど、皆春也。遊牝の字を、さかり・つるむとよめり。

【年浪草】春は牡、牝を喚び、秋は牝、牡を喚びて乳む。大抵春秋二度子を生む。

季題解說　交尾期にある猫、猫の交尾期におけるあらゆる振舞をこれ等の言葉であらはして居る。秋にも交尾期は來るが、早春、むしろ寒中から寒明けの頃、さかんに雌戀ひをはじめる。（春は牡牝を呼び、秋は牝牡を呼んでさかるとか云はれるが、實際はそんな區別はないやうである。）寒い月の冴えた夜、おぼろ月のかゝつた晩、或は暖かい日のあたる庭等に、喧ましく鳴き立てる戀猫は、戀のために人を怖れず、雨風に怯えず、物凄いまでに見える。一疋の猫の妻に數尾の牡猫が集り鳴き寄つて、その聲は嬰兒の泣くがごとくであつたり、或は鬪つて居るかのごとき激しい憤りの聲をたてることがある。その頃には、猫といふ猫は碌々家に落ちつかず、夜晝となく牝を戀ひ歩き、食事もとらない。そして一週間も十日も全く家を留守にした後、憔悴して歸つて來る。

例句

猫の戀

猫の戀へついの崩より通ひけり　芭蕉（江戶廣小路）
まとふどな犬ふみつけて猫の戀　同（茶草子）
麥めしにやつるゝ戀か猫の妻　同（猿蓑）
猫の戀やむとき閨の朧月　同（己が光）
日南にも尻のすわらぬ猫の妻　鬼貫（鬼貫句選）
つま猫の胸の火やゆく潦　言水（俳諧五子稿）
兩方に髭がある也猫の妻　來山（いまみや艸）
ひき窓や猫の舟橋戀の闇　同（續いま宮艸）

猫の戀

のら猫やうかれ行ほど松の中　丈草　（丈草發句集）
竹原や二疋あれこむ猫のこひ　去來　（去來發句集）
うき友にかまれて猫の空ながめ　同　（同）
呼出しに來てはうかすや猫の戀　同　（同）
足跡をつまこふ猫や雪の中　其角　（五元集）
京町の猫かよひけり揚屋町　同　（五元集拾遺）
椎木の榊もそれかあかり猫　同　（同）
飯くへば君が方へと訴訟猫　同　（同）
耳ふつてくさめもあへず鳴音哉　同　（同）
なれも戀猫に伽羅焼てうかれけり　嵐雪　（玄峰集）
田作りの口で鳴けり猫の戀　許六　（五老井發句集）
羽二重の膝に倦て（たへて）や猫の戀　支考　（蓮二吟集）
うき戀にたゝばや猫の盗ミ喰　同　（同）
聲たてぬ時がわかれぞ猫の戀　千代女　（千代尼發句集）
ふみ分て雪にまよふや猫の戀　同　（同）
聲眞似る小者おかしや猫の戀　太祇　（太祇句選）
草をはむ胸安からじ猫の戀　同　（同）
おもひ寐の耳に動くや猫の戀　同　（同）
諫めつゝ繋ぎ留にけり猫の戀　同　（同）
濡れて來し雨をふるふや猫の妻　同　（同）
嚙れしが思ひもすてず猫の聲　同　（同）
歸來て灰にもいねず猫の妻　同　（同）
髭につく飯さへみへずねこの妻　同　（同）
木づたひにいどみより來ぬ猫の夫　召波　（春泥發句集）
思ひかね夜は寐ぬ猫の眠哉　同　（同）
よく見れば乞るゝ妻やこちの猫　同　（同）
猫の戀接木折らして別けり　也有　（蘿葉集）
猫の戀屋根にあまりて椽の下　同　（同）
うらみ寐の猫やおもひの煙出し　同　（同）
こがるゝも十日ばかりや猫の戀　同　（蘿の落葉）
井戸掘の騒ぎとなりぬ猫の戀　同　（同）
柊ふむ夜半も有べしねこの戀　蓼太　（蓼太句集）
濡たらば露とこたへよ猫の戀　同　（同）
おもひ寐の尾に蚍もしつ猫の戀　同　（同）
鏡見ていざ思ひきれ猫の戀　同　（同）
寶家のいせが軒ばや猫の戀　几董　（井華集）
轉び落し音してやみぬねこの戀　同　（同）
琴の緒に足繋がれつうかれ猫　同　（同）

猫の戀六日年越し更にけり　白雄（白雄句集）
氷ふむ猫やゆく〳〵戀死ん　同（同）
このほどやうとくなりゆく猫の妻　同（同）
戸をあけてはなちやり鳧猫の戀　同（同）
戀ねこのほだしも廿日ばかり也　曉臺（曉臺句集）
こひ猫やわが古寺になき別れ　同（同）
けふははや忘れにけりな猫の妻　闌更（半化坊發句集）
一ッ家の猫も啼ゐる春邊哉　同（同）
どこぞでは婆〻にやならんたけり猫　巣兆（曾波可理）
山猫も戀は致すや門のぞき　一茶（旅日記）
梅が香にうかれ出けり不性猫　同（同）
のら猫も妻かせぎする夜也けり　同（同）
のら猫も妻乞ふ聲は持にけり　同（同）
化そなら手拭かさん猫の戀　同（七番日記）
庵の猫玉の盃そこなきぞ　同（同）
蒲公英の天窓はりつゝ猫の戀　同（同）
あれも戀ぬすつと猫と呼れつゝ　同（同）
鼻先に飯粒つけて猫の戀　同（同）
淨はりの鏡見よ〳〵猫の戀　同（同）
むさし野や只一つ家のうかれ猫　同（同）
うかれ猫どの面さげて又來たぞ　同（同）
うかれ猫奇妙に焦げて參りけり　同（同）
庵の猫しやがれ聲にてうかれけり　同（同）
面の皮いくらむいてもうかれ猫　同（同）
山猫も作り聲して忍びけり　同（九番日記）
戀猫のぬからぬ皃でもどりけり　同（同）
夜すがらや猫も人目を忍戀　同（同）
うかれ猫天窓はりくらしたりけり　同（同）
寐て起て大欠して猫の戀　同（一茶發句集）
おどされて引返しけりうかれ猫　同（嘉永板發句集）
汚れ猫それでも妻は持に鳧　同（一茶句帖）
雛追てすぐにころがるゝ男猫哉　乙二（たのゝえ草稿）
猫の戀馬蘭がくれに覗きけり　蒼虬（蒼虬翁發句集）
淺茅生の隣も見えて猫の戀　同（同）
ねこ老ぬ只一夜のおもひより　梅室（梅室家集）
五器の内妻にもわけぬ牡猫かな　同（同）
なま壁に爪とがんとすうかれ猫　同（同）
笠著せてやらん雨夜の猫の妻　班象（集尾琴）

猫の戀

猫の妻子安の塔にこもりけり　木兎（心一つ）
鎌倉も別の事なし猫の戀　南隣（小文庫）
手をあげてうたれぬ猫の夫哉　智月（卯辰集）
物音にかひなき猫の別れ哉　吟江（推敲日記）
竹緣を踏みわる猫の思ひかな　子規（子規句集）
五器の飯ほとびる猫の思ひかや　同（同）
戀猫の泥に尾を曳くやつれかな　蓼洲（新俳句）
戀猫や萑の中に啼いて居る　四方太（春夏秋冬）
戀猫の鈴を鳴らして戻りけり　秋窓（同）
猫の夫やさしく鳴いて戻りけり　句堂（懸葵）
戀猫のどう〳〵として藪の月　石鼎（ホトトギス）
春の猫舐りまはすや皿躍る　和香女（同）
猫飼うて戀をせらるゝ怖ろしさ　素風郎（同）
南座の屋根より降りぬ春の猫　暮情（同）
一力の塀を渡りぬ春の猫　都穗（同）
戀猫の鈴を鳴らして走るあり　怒愛庵（同）
雨だれの中をゆきゝや春の猫　螢雪（續ホトトギス）
つくばひの水を飲むらしうかれ猫　蓬丈（同）
老猫の戀のまとゐに居りにけり　虚子（句集虚子）
戀猫をあはれみつゝもうとむかな　同（同）

猫の子（ねこのこ）

子猫（こねこ）　猫の親（ねこのおや）　猫の産（ねこのさん）

季題解説　猫は殆ど四季に子を生むが、單に猫の子といへば春である。暖かな緣側などに懶げに大きい腹をした親猫、もうお產がすんで、いくつもの目のあかぬ猫の赤ん坊を抱へた親猫から、お產床の中の子猫、お產床から這ひ出して親を追ふ子猫、躓いて倒れる子猫、人に遣る子猫、貰ふ子猫捨てられる子猫、これ等は皆、春から暮春にかけて、どこの家にもよく見られるものである。猫の子がお腹に宿つてゐる時日は約二ケ月間である。

【參照】猫の戀（ネコノコヒ）

例句

猫の子

猫の子のくんづほぐれつ胡蝶哉　其角（五元集）
猫の子も妻こはぬ間ぞ人の愛　沾德（俳諧五子稿）
松原に何をかせぐぞ子もち猫　一茶（七番日記）
猫の子や秤にかゝりつゝざれる　同（同）
人中を猫も子故の盗み哉　同（九番日記）
舐らする指に猫の子まろびけり　露舐（同人）
もらはれてゆく猫の子に鈴つけぬ　節子（同）

猫の子を捨てるにきめぬ今日も雨　村家（ホトトギス）
旅に得し消息のはし猫初産　よりに（同）
猫の子や貌なめ合つて籠の中　冷石（同）
猫の子のつく〴〵見られなきにけり　草城（同）
ひたすらに子猫の世話や庵の妻　幼瞳（同）
猫の子の這ひ廣がれる疊かな　感來（同）
舟漕ぐを見かけて子猫洲に啼けり　岳居（同）
あとの人も溝の子猫を覗きける　諸人（同）
猫の子の皆集りし白さかな　落葉女（同）
生れたる子も黒猫や草の宿　萬紅堂（同）
四つ足の堪へるあゆみの子猫かな　左右（續ホトトギス）
屑籠の倒れて出でし子猫かな　迷水（同）
草深く子猫の鈴の聞えけり　湘南（同）
猫の子や長柄の橋の中ほどに　三四郎（同）
いだきたる子猫は輕し綿のごと　阿乎美（同）
猫の子の貰はれてゆくお寺かな　月路（同）
猫の子の貰ひてのある名殘かな　長（同）

棹姫鷹（さをひめだか）　さほ鷹（たか）　乙女鷹（をとめだか）　山鷹（やまたか）

古書校註

【滑稽雜談】　鷹連歌抄に二條基房公云、さほ姫鷹とは、去年の若たかを春取りたるを云ふ也、云々。又或說に云、春雉につかふ鷹を山鷹と云ふ也。是に於て、さほ姫鷹と云ふよしも侍り。又乙女鷹といふも、春鷹をいふと、鷹書に見え侍る也。三百首、さほ姫のひすいのたつる髮なれや柳の水の春雨ぞふる　定家。

【篗纑輪】　さほたかともいふ。春神の氣を受けたるにていふとぞ。一說に鷹の雛をいふ。參照　人事—鳴鳥狩（ナイトガリ）　冬　鷹（タカ）

小鵊（こやまがへり）　片山鵊（かたやまがへり）

古書校註

【滑稽雜談】　鷹書に曰、鷹の二月・三月に巣より出づるを云ふ也。鷹三百首、春部、足引の小山がへりのあら鷹をもぎ立ちぬれば春のくれ行く　定家。

【松鷗軒記】　小山がへりの鷹とは、去年の昔鷹の次の春にとられたるを云ふ也。年こえぬれども、毛もせざるあひだ、山がへりとはさだめ難きまゝに、小山歸りと名付くる也。又年をこしたる間、山がへりの名とは云ひがたし。初春に片山がへりと云ふ也。參照　秋—鷹の塒出（トヤデ）　冬—鷹（タカ）

鳥屋際（とやぎは）

俳書例句

【滑稽雜談】鷹書に曰、夏近くなりて、鷹の瘦せるを鳥屋ぎはと云ふ也。鷹三百首、春部、春ふかみ鳥屋ぎは近くなる鷹のまた取りのこすふる雉子哉　定家。○此の二箇條、（一）春の鷹詞なり。よく〳〵吟翫して作意あるべし。［参照］小鳹　夏　鷹の塒入　冬　鷹

註（一）小鳹（こやまがへり）、鳥屋際の二項をいふ。

雉（きじ）

雉子（きゞす）　きゞす　すがね鳥　からうい雉　きうしう雉　みかど雉　きんけい　ぎんけい　をたが雉　ほくろ雉　しま雉　燒野の雉子

雉打つ

古書校註

【山之井】野山やく比は、足よわの妻子をのけかねて、道の嶮岨を、けんけんと鳴きかなしみ、鷹にあふても獵師を見ても、泪のほろゝ隙もなく、萬おそれおほく哀なる物とぞいひならはし侍る。されば子を思ふきじは泪のほろゝとも、鷹にあふてけんをとらるゝなどもいへり。

【御傘】きじ一、きゞす一、折をかへ野鷄一、以上三句皆春也。かりばの雉子は冬也。聲・鳴く・音をたつるなど云ふ詞を入れゝば春也。春は宵に雉子のなく所を聞き置き、未明にゆきてとるを、鳴鳥狩とも、聞きする鳥とも、朝鷹かりとも云ふ也。かりばのとりと計りいへども雉子の事也。

【滑稽雜談】總じて雉は春也。狩場にむすびて冬と春との違あり。只狩場にむすびたる雉は冬也。それに聲をむすびては春也とは、彼の聞きする鳥・鳴鳥狩の心を云ふ句也。雉子、只雉の事也。雉と云ふ句に、子の字を書添ふるは誤也。雉子はきゞす也。萬葉には雉の一字をきぎす、和の異名には、雉をすがね鳥といへり。歌に、あはれにも子をおもふとてすがね鳥野べをやく火の灰と成りぬる　貫之。躬恒抄、雉也。此の者雛を愛する事切也。野燒にも子を思ふて飛ばずとなん。又山の梁と云ふ。藻鹽草に、みよしの山のうつぼり鳴く聲にことしも春のうつるとぞ思ふ。山梁の雌雄（一）と云ふよりよめるか。未だ詳かならず。一說、此の歌は燕をよめりと。猶尋ぬべし。

【年浪草】徒然草に云、鳥には雉さうなき物なりといへり。日本には雉を鷹よりまさりて用ゆ。婚禮（二）にも雉を用ふ。○和名に曰、木々須。一に云、木之。

【栞草】華蟲、又野雞と云ふ。漢の呂公の諱を雉といへり。よつて雉を野雉と云ふといへり。（略）雉、雄は頂に雙びたる角毛あり。頭・頸・胸・腹、翠黑色にして光あり。頰・眼紅に、背靑くして尖り、背翮彩斑色也。腰に

長き綠の毛あり。尾長くして文采あり。翅短くして蒼黒斑也。脛・掌、雞に似て勁し。雌は黄赤黒斑にして、文暗く尾短し。

註 (一) 論語にある語。(二) 原本、香禮に作る。

季題解説 本邦特有の鳥類であつて、形態雄偉、色彩華美であるのみならず、獵鳥として極めて趣味深く、肉も亦美味であるので、古來洽く人に知られてゐる。雌雄著しく色彩を異にし、雄は脊は黒色・銅赤色・黄色より成るところの複雜な斑紋を呈し、雨覆羽及腰以下の部は灰青色または灰綠色で、上尾筒の羽毛は分裂して毛狀をなしてゐる。雄のその他の部分は主として黒色で、金綠乃至紫色の強い光澤を有してゐる。後頭部には二個の耳狀羽が起立し、顏は大部分皮膚が裸出して美しい赤色を呈してゐる。尾は著しく長く、楔狀をなし綺麗な十數個の竹節狀斑がある。雌は雄よりも小さく、全身淡黄褐色で、一面に黒斑がある。本州・四國・九州の山間部に極めて多く、地方によりて羽色に多少の差異がある。主として朝鮮にゐる「からいきじ」は白色の頸輪がある。春になると雄は雌を呼ぶために盛に鳴く。秋冬にも鳴くことは鳴くが、それは友を呼ぶといふくらゐのもので聲も低い。所謂ケンケンと鳴くのは春である。文語ではこの聲をほろ〳〵と言ひ現はし「雉のほろゝ」などといふ言葉がある。鳴くと同時に羽はたきをしてツッと四五十間もかけつてまた鳴く。極めて敏速である。畑ものなどの蔭をかけるのであるから姿は見えない。雌の聲はシーといふやうな極めて低い聲である。また危險の身に迫つた時の聲は、ケケッケンといふやうにけたたましい。それからまた遠くに銃聲などがあり、警戒するといふやうな場合はケケッケケッといふやうに短かく鳴く。山畑や時としては人家近い畑などにも來て餌をあさる。昔から燒野の雉子、夜の鶴といつて、わが子のためには命を忘れる親の愛情の深さに譬へられてゐる。

參照 人事—鳴鳥狩(ナイトガリ)

(からいきじ)

例句

雉

姨石に啼かはしたる雉子哉　芭蕉（もとの水）
父母のしきりに戀し雉子の聲　同（曠野）
蛇くふと聞けばおそろしきじの聲　同（勸進牒）
ひばり鳴く中の拍子や雉子の聲　同（猿蓑）
聞は誰ソみねのあらしや雉子の聲　鬼貫（俳諧七車）
ゆかしさのあて〳〵しきや雉子の聲　同（鬼貫句選）
尾をひけば草にとらるゝ雉子哉　言水（俳諧五子稿）
何の葉の影ぞねぢむく雉子のてり　丈草（丈草發句集）

雉

雞のおかしがるらんきじの雛　去來（去來發句集）
瀧つぼもひしげと雉子のほろゝかな　同（同）
人うとし雉をとがむる犬の聲　其角（五元集）
うつくしき顏かく雉の距かな　同（同）
なれも其子を尋るか雉の聲　同（同）
塗顏の父はなからや雉の聲　同（同）
世の中は何かさかしき雉子の聲　同（五元集拾遺）
一と鹽の聲きぞあらん南部雉　嵐雪（玄峰集）
鳥散す檜木の中や雉子の聲　惟然（惟然坊句集）
山のはゞ啼ひろげけり雉のこゑ　同（同）
岩穴をぬけてなきけり雉の聲　北枝（北枝發句集）
傾城の昔寐はいたく雉子かな　支考（蓮二吟集）
雉子も世に追立らるゝ廣野哉　沾德（俳諧五子稿）
隱すべき事もあれなり雉子の聲　千代女（千代尼發句集）
耳遠い事でもあるかきじの聲　同（同）
きじ啼て土いろ〳〵の草となる　同（同）
若くさや尾の顯はるゝ雉子の聲　同（同）
兀山や何にかくれてきじの聲　蕪村（日[illegible]句集）
きじ啼や草の武藏の八平氏　同（蕪村句集）
きじ鳴や坂を下りの驛舍　同（同）
日ぐるゝに雉子うつ春の山邊かな　同（同）
柴刈に砦を出るや雉の聲　同（同）
龜山へ通ふ大工やきじの聲　同（同）
むくと起て雉追ふ犬や寶でら　同（同）
木瓜の陰に皃類ひ住むきゞす哉　同（同）
雉打て歸る家路の日は高し　同（五車反古）
雉鳴やこゝいなのめの朝日山　同（蕪村遺稿）
きじ啼や御里御坊の苣畠　同（同）
河内女の宿にゐぬ日や雉の聲　同（同）
ゆた〳〵と畝へだて來る雉子かな　太祇（太祇句選）
雉子追ふて呵られて出る畠哉　同（同）
うつくしき男もちたる雉子かな　同（同）
背のひくき木瓜に身を置雉子哉　召波（春泥發句集）
いで其頃竹拔五郎きじの聲　同（同）
菜の花のあけぼの寒し雉子の聲　也有（蘿葉集）
深草や鶉にかりて雉子の聲　同（同）
鐵砲の跡にまめなり雉子の聲　同（同）
一夜寐た妻に尾やひく雉の聲　同（同）

鶯に歌も習はで雉子の戀　同（同）
木がくれや檜に青のこす雉の聲　同（同）
錦木にその尾立る歟雉の聲　蓼太（蓼太句集）
聲しぼる諸羽に雉のあぶらかな　同（同）
あけぼのや櫻をふるふ雉子の聲　同（同）
卵にはあぶなき雉のほろゝかな　同（同）
虹の根に雉啼雨の晴間かな　几董（井華集）
紅裏は屋敷女中歟遠雉子　同（同）
きじ鳴や暮を限りの舟わたし　同（同）
三井寺の鐘はくるゝに雉子の聲　同（同）
雉子の尾の飛さにみたる野風かな　白雄（白雄句集）
きじ啼て嵐の野土けぶるかな　同（同）
日や暮る尾をうちかひて枝の雉　同（同）
鹿垣に畚かけ込きじすかな　同（同）
もがきてや爪根あらはに網の雉　同（同）
羽やたゝで峡の橋ふむ夕きじす　同（同）
山里や馬艚にきじの歩みよる　同（同）
痩てたつ春の行衞や岡の雉子　同（同）
人の親のやけ野の雉子うちにける　曉臺（曉臺句集）
夜のありか又鳴かはすきじす哉　同（同）
つま戀やひと羽に雉子の山移り　同（同）
ねむり／＼さして行方や雉子の聲　同（同）
三弦の川舟過てきじの聲　同（同）
きじ鳴やうしろは須磨の藻鹽草　同（同）
夜をこめて關屋にさむし雉子の聲　同（同）
茨五尺雉子のとまりあらはなり　同（同）
雲ひくし日暮てくれぬ雉子の聲　同（同）
草による駒驚かす雉子哉　蘭更（半化坊發句集）
顔かくす雉子に日のさす野中哉　同（同）
何事の寐覺なるらん夜の雉子　同（同）
聲たてゝ水飲む谷の雉子かな　同（同）
雉子啼てうらなき町としられけり　同（同）
目を覺す雉子も有らんきじの聲　同（同）
曙や里はくだかけ野は雉子　同（同）
飛退て雉子啼けり野べの杭　同（同）
雉子のみ曇らぬ雨の野面かな　同（同）
かへり來て啼か燒のゝ雉の聲　士朗（枇杷園句集）
ほろゝとは花に雉なく拍子哉　同（同）

間うつりしては〻なくきじす哉　同（同）
松もとの雉聞えけり蓮のあと　同（同）
雉子が啼餅屋の春戸も塔の辻　巣兆（曾波可理）
高茅の刈らぬ裏戸も雉子の聲　同（同）
二葉より互鎮咽すきじの聲　同（同）
廣畑に雉もまだなき雉子かな　同（同）
艸の雨土器屑になく雉子　成美（成美家集）
魚提て松やまゆけばきじの聲　同（同）
寝脇にいさみをつける雉子哉　一茶（旅日記）
雉うろ〱〱門を覗くぞよ　同（七番日記）
雉と臼寺の小書は過にけり　同（同）
大莚雉を鳴せて置にけり　同（同）
雉鳴くや道灌どのゝ馬先に　同（同）
山雉子や何に見とれてけろりくわん　同（發句題叢）
きじなくや見かけた凶のあるやうに　同（一茶句帖）
さをしかの背中借りてや雉の聲　同（同）
駕籠先や下にの聲ときじの聲　同（一茶發句集）
夕雉の走り留りや礒の海　同（同）
雉子鳴やきのふ枯れし千代の松　同（同）
まてば來るきじすの外は松の風　乙二（をのゝえ草稿）
鶯の日はくれにけりきじの聲　同（同）
野のけしき年〱雉子の遠音哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
雨のきじ流石に聲の遠くなる　同（同）
ひる過や命投出す雉子の聲　同（同）
大瀧や小瀧のさまもきじの聲　同（同）
瀧つぼに入よと見えてきじの聲　同（同）
雉子雲雀啼や十歩の杖のうち　同（同）
きじ啼や嶋の夕は近いもの　同（同）
ほろ〱と雨かゝりけりきじのこゑ　同（同）
きじ啼や永い居酒も一しまひ　同（同）
朝雉子のはしり出たり二尊院　同（同）
如才なく雉子は居るなり小松原　同（同）
朝きじの歩行て下る小坂かな　同（同）
とつかけて雉子啼ふもと〱哉　同（同）
夜は山へ歸ると見えてきじの聲　同（同）
行先の見えてあるのに磯のきじ　同（同）
苅あとのするどき篠やきじのこゑ　同（同）
山陰の田も乾たか雉子の聲　梅室（梅室家集）

ところとの間の雜種を天鵞と云ふ。

ぎんけい（銀鷄）(Chrysolophus amherstiae LEADB. 支那西部及び西藏の原産、近年我國に輸入され、諸所で飼育されてゐる。概ね銀白色で甚だ美麗な色彩を有する雉。

をながきじ Syrmaticus reevesi (GRAY) 支那の中部・北部の原産。我國に近年輸入さる。尾は二メートルに達するものもある。體は大きく、概ね橙黄色を呈し、黑色の鱗狀斑があつて美しい。

呼子鳥（よぶこどり）

古書校註

【御傘】 古今の大事なれば、傳受せざる人はむざとせぬ事なりと、近代連歌師に制するげに候。誹諧には傳受せずとも、正躰をしらずとも、春の暮がたになく鳥也と心得てすべし。其の子細は、むかし連歌師はこれを憚らず。すでに宗養は三十九歳にして死去あれば、古今未だ傳へざる人也。獨吟にも、鳴きてかへれば又よぶこ鳥、といふ句あり。その上、和歌の題に、よぶこどり常に出せり。更に憚る事にあらざる也。大事の春の景物を人にさせぬは、道をせばむる道理あり。

【はなひ草】 春也。傳受の物也。

【滑稽雜談】 八雲御抄に日、喚子鳥、春の物なり。(一)つれ〴〵草に曰、よぶこ鳥は春の物なりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかにしるせるものなし。眞言書の中に、喚子鳥なく時、招魂の法をば行ふ次第あり。これは鵺なり。（略）貞德抄に云、櫻井基佐(二)の心敬法師(二)にあひて、大原に行く夜話の雙紙一帖あり。その中に、猿、(三)遠近のたづきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな　讀人知らず。由鳥、たれをこひ待兼山のよぶこ鳥をこの鏡に影をうつして　俊惠。山つぐみ、つひに身のかぎりあるてふ世の中に誰呼子鳥さして啼くらん　貫之。鶯、色うすく散りぬる花の陰てたれ喚子鳥朝な〳〵なく。宮内卿　郭公、來る人もなこその關のよぶ子鳥越えてわかるゝ野ぢの玉川　俊成。（野槌に云、長谷川式部少輔守尚所にて、常緣・宗祇・基綱の相傳の書を見侍りしに、喚子鳥は人をもいふ、猿をもいふとあれど、猿といふがよきなりとしるせり。(略) これらの所說、一決しがたし。兼好の招魂の法と云ふ事を述給ひしも、呼子鳥の口傳に相似たる所侍るならし。必竟、古今三鳥(四)の傳を受けずして批判すべき事にあらず。傳受なき人は、作意にも遠慮あるべき事にや。しかし俳諧は俗說を用ひるものなれば、古今傳受なくとも、これらの所說に隨つて、猿とも、人とも、春の鳥とも心得て作意あるべきか。

【年浪草】 或書に云、呼子鳥は唐に喚起鳥とて、春の中つがた、なく鳥にて、詩にも作るなり。爰には、つゝ鳥の事也。つゝ〳〵と鳥の子を呼べば來るゆゑとも、又土くれ鳩をも云ふ。又杲鳥とて四月の部、郭公の來るさ

きに啼く鳥なり。此の鳥は、はこ〳〵と啼くゆゑ、呼子鳥と云ふ。又人をも云ふ。賤女が若菜とらんとて深山に入り、道にまよひてたがひに呼ひしらふを云ふ。或はこだまをも云ふと。分別すべからず。

【栞草】此鳥のこと、古今集三鳥の一などいひて、諸書に說々あり。或は猿の事といひ、或は山鳥也といひ、又は山鵲、又は鶯・郭公など、さまざまの鳥にあてゝいへど、みなたしかならず。（略）眞淵翁曰、よぶこ鳥は春の暮より夏かけて啼く鳥也 此の聲は、人を呼ぶがごとくきこゆるにより て呼子鳥と云ふ。鳩に似て羽も背も灰色にて、腹はすゞみ鷹のごとく、足は鳩より少し高し。又曰、かほ鳥と云ふもこの鳥也。今俗のかんこ鳥と云ふもの也。喚子鳥の字音より、となへ誤れる也。

註（一）連歌師。（二）聖護院の院室。連歌の上手。文明七年寂。（三）古今和歌集春部所収。讀人しらず。（四）百千鳥の註參照。

季題解說 言海に「深山に棲む。形ハイダカに似て大さ鳩の如し。全身黑文灰黑相雜はり、腹は淡黃にして白黑文あり、尾は灰赤にして白點あり、目の邊赤くしてキザあり、嘴尖る。指は前後各二、尖りて黑し、聲物を呼ぶ如し。一名フフドリ・ホホドリ・郭公鳥・カンコドリ」などあつて、くわくこうどり、かんこどりの部には呼子鳥に同じと註してある。北隆館發行の動物圖鑑くわくこうの條に「羽色は一見ハイダカの如き色彩を有し」とあるのと符合する。同圖鑑には、呼子鳥の項はない。そして同圖鑑索引中にある「くわくこう」の古名異名の中に、「呼子鳥の名を見出すのみである。これから見て、郭公鳥以外の實在の鳥でないらしい。慈元抄に「昔或者鶯に子をとられて、山中に追ひ入りて尋ね行けるに、つひに思ひ堪へかねて死したりし、其靈魂鳥となりて、子は子はとなく、是を喚子鳥と云へるやらん」とある。古今要覽には、「此鳥四月のころにかつこうと鳴く聲甚高く、淸みて山谷に震響す。卽ち郭公と自ら呼ぶなり、俗に誤りてかんこどりと呼ぶ。此鳥深山ならでは居ず、故に俗諺に幽閑なることをかんこどり鳴くといふ。されば古よりほとゝぎすを郭公と書するは非也。その形鶏に似て大さ鳩の如し、尾長く目は鷹に似て淡黃褐色也、郭公は淡赤にしてきざあり、背黑く下の本黃色、末尖りて鳩に似ず、脚は黃色にして赤皺あり、その指前二後二、その爪尖りて黑し。全身黑文灰黑交り、吻と腹は淡黃にして白黑文あり、喉下は微に淡黑を帶び、尾づゝ赤褐色にして端淡青色、尾は灰赤にして白點あり、尾の端白し、農夫此の鳥の鳴くを聞きて豇豆粟等を下種する候とす。此鳥大なれども柴鶺鴒又頰白の巢にて子を育すといへり」などある。徒然草の第二百十段に、「呼子鳥は春のものなりとばかり云ひて、如何なる鳥とも定かに記せるものなし」云々とあつて、この時代から春季の鳥と定められてはゐたが、實體は知られてゐなかつたのである。その他、呼千鳥には諸說があるが、もし呼千鳥と郭公と同一の鳥だとすると、夏の季に入るべきであらう。しかし傳說の鳥として、やはり春の部に

形目白鳥に似て肥え、鷙黒くして黄色、腹灰白、眼纎く、背細く尖り、背・脚・掌共、灰黒色、眉に毛有り、灰白長さ二三分、吻に三鬚有り、長さ四五分、雌及び未だ老いぬ者は其毛短し　鳴くときは則ち尾を搖かす。冬月啣啣と曰ふが如く、人の舌鼓に似たり。立春に至り、始め一囀り、季春にして止る。其の聲清亮圓滑、飛啼するときは則ち急にして長く、法華經と曰ふが如し。或は古計不盡と曰ふが如し。或は月星日と曰ふが如し。（三光と云ふ）

【東都歳事記】　立春の十五六日目頃より新哢を發す。（略）根岸の里。里諺に關東の鶯は囀りなまりあれども、この邊の鶯は京のたねにて、一入聲うるはしき由、古へよりいへり。

【年浪草】　○匂ひ鳥。藏玉、山里は雪きえすでに匂ひ鳥梅はおそきにねをひらきつゝ　讀人しらず。○歌よみ鳥。本朝一人一首に曰、孝謙天皇の御宇、大和國高間寺の侍兒死して鶯となり、庭樹に來て、初陽毎朝來、不遭還本栖と囀る。この音を文字に寫せば歌なり。初はるのあした毎には來れどもあはでぞかへるもとのすみかに。是鶯の歌を詠じたる例也、故に歌よみ鳥といふならし。○鶯の琴。未だ詳かならず。疑ふらくは鶯の琴にや。（略）○經よむ鳥。其聲、妙典の題目を唱ふるが如し。

註　○鶯の異名は年浪草中の目名のみを右に掲げておいたが、なほこの他に漢名の部には、黄鳥・黄栗留・黄鶯・黄鸝・報春鳥・金衣鳥・歌黄等を掲げて、それぞれ解説を附してある。その他諸書を渉猟すればなほ幾多の異名があるが、總て略することゝする　（一）枕草子に鶯が禁中に鳴かぬ事をいつてゐる。（二）年浪草の條を見よ。（三）百首中にたゞ一つ許すものとの意。（四）天台の座主。歌人。嘉祿元年寂。年七十一。

季題解説　鳴禽類の小鳥で、我が國の特産と稱せられる。形は雀または目白に似て肥え、背は青黄褐色、腹は灰白色、眼裂纎く、嘴細尖にして蒼黒、脚掌共に灰黒色である。吻に三鬚あり、眉に三毛があつて灰白である。藪などに棲んで小蟲を食とし、早春より美聲を放つて囀る。昔から立春前後聲あり、季春無聲、啼則搖尾と記されてゐる。鳴く聲は清朗圓滑で、節多きこと、人の洽く知る通りである。人家に愛養するのを飼鶯と云ふ。冬の内鳴くのは所謂さゝ鳴きである。六七月の頃には毛羽がぬけて新毛を生じ、俗にこれを鳥屋といつて、この時から後は鳴かない。冬の間は雌雄二三十羽も叢林中に群居するが、春になると皆離散してしまひ、冬群居した林中には雌雄各一羽だけが残る。鶯は二羽三羽など諸聲に鳴くことがない。鳴くものは雄で雌は鳴かない。雌は形色ともに雄と違はないが雄よりも少し小さく、脚が至つて細い。

例句
鶯
うぐひすや眞丸に出る聲の色　宗因（梅翁宗因發句集）
鶯や餅に糞する椽の先　芭蕉（葛松原）
うぐひすや柳のうしろ藪の前　同（續猿蓑）
鶯や茶袋かゝる庵の垣　同（續寒菊）
うぐひすの青き音を鳴こすゑかな　鬼貫（俳諧七車）

うぐひすに内藏賣てなんといふ　同　（同）

狩野著〻が男上に梅をかきたる繪に

うぐひすよいつをむかしの雪のこゑ　同　（同）
鶯よ花はちるとも飛まはれ　同　（鬼貫句選）
鶯や梅にとまるはむかしから　同　（同）
うぐひすの鳴けば何やらなつかしう　同　（同）
うぐひすに問めや梅の假名づかひ　來山　（いまみや艸）
小雨して竹にうぐひすなよ竹に　同　（續いま宮艸）
疊束なあれうぐひすと聞つゝも　同　（同）
日とひ〳〵梅にうぐひす嬉しやな　同　（同）
ほのかなる鶯きゝつ羅生門　同　（同）
朝附日うぐひす黄也砥とり山　同　（同）
ぬしや待うぐひすの啼賣やしき　同　（同）
うぐひすや去年の榾に聞寐入　同　（同）
うぐひすに朝日さす也竹格子　浪化　（浪化上人發句集）
うぐひすの柳にそまる小雨哉　同　（同）
うぐひすの啼やくまなき大座敷　同　（同）
鶯や屋敷づたひの竹の風　同　（同）
うぐひすの年の關こす花心　同　（同）
うぐひすや谷のこゝろで藏の間　同　（同）
くりからの鶯ふかし谷のつて　同　（同）
鶏やまだうぐひすは夜中藪　同　（同）
うぐひすや茶の木畑の朝月夜　丈草　（丈草發句集）
うぐひすにとらばや花の風ふせぎ　同　（同）
鶯の啼や餌ひらふ片手にも　去來　（去來發句集）
うぐひすか人の眞似るか梅が崎　同　（同）
うぐひすの朝日まつ音や谷の底　同　（同）
鶯や内のも啼ば野から來る　同　（同）
うぐひすの音づよになりぬ二三日　同　（同）
黄鳥のなく〳〵そとに樂寐かな　同　（同）
鶯や雀よけ行枝うつり　?同　（同）
鶯や十日過ても同じうめ　其角　（五元集）
うぐひすに藥敎ん聲のあや　同　（同）
鶯の身を逆にはつねかな　同　（同）
うぐひすよいで物みせん杉鉄　同　（同）
鶯や氷らぬ聲を朝日山　同　（同）
うぐひすの曲たる枝を削りけん　同　（同）
うぐひすや遣路ながら禮返し　同　（同）

うぐひすや都ぎらひの竹の奥　同　（同）
鶯やよし野の沙汰に氣もつかず　同　（同）
うぐひすや初音に聞くは幾所　同　（同）
うぐひすや冬共儘の竹もあり　同　（同）
鶯や梅にも問ずよそ歩行　同　（同）
うぐひすは人も寐させて初音哉　同　（同）
黄鸝や聲からすとも富士の雪　同　（同）
黄鳥のもゝに倦るか竹の奥　同　（同）
うぐひすの枝ふみはづす初音哉　蕪村　（蕪村遺稿）
家にあらで鶯聞かぬひと日哉　同　（同）
啼あへて鶯飛や山おろし　同　（同）
うぐひすや笠社の里はづれ　同　（同）
鶯や梅ふみこぼすのり盥　同　（同）
うぐひすや前峠をはなれかね　同　（同）
うぐひすはやよ宗任が初音哉　同　（同）
鶯や野中の墓の竹百竿　同　（同）
うぐひすの啼やあちら向こちら向　同　（同）
けさ來つる鶯と見しになかで去る　同　（同）
鶯や堤を下る竹の中　同　（同）
鶯の麁相がましき初音かな　同　（蕪村句集）
鶯を雀歟と見しそれも春　同　（同）
鶯ややかしこ過たる軒の梅　同　（同）
鶯の日枝をうしろに高音哉　同　（同）
鶯の聲遠き日も暮にけり　同　（同）
うぐひすや家内揃ふて飯時分　同　（同）
鶯の二聲はなく枯木かな　同　（春慶引）
我宿の鶯聞ん野に出こ　同　（同）
うぐひすの枝末を掴む力哉　同　（書・翰）
笠にうぐひす啼やわすれ時　同　（同）
うぐひすのわすらるゝばかり引音哉　同　（同）
うぐひすや茨くゞりて高う飛　同　（連句會草稿）
撞木町鶯西へ飛きりぬ　同　（同）
うぐひすの二聲耳のほとり哉　同　（同）
鶯のあちこちとするや小家がち　同　（明烏）
うぐひすの鳴やちいさき口明て　同　（はなしのみ）
春もやゝあなうぐひすよむかし聲　同　（新五子稿）
鶯に終日遠し畑の人　同　（同）
うぐひすの鳴やうどのゝ河柳　同　（同）

鶯

留主守て鶯遠く聞夜かな　蕪村　（新五子稿）
鳥來て鶯餘所へいなしぬる　同　（同）
鶯ハ花月の坐ハ蛙かな　同　（落日庵句集）
鶯や巣には本鈴を懸殘し　同　（同）
鶯や耳ハ我が身の邊りなる　同　（同）
うら道を來て鶯の初音かな　同　（同）
低き木に黄鳥啼や晝下り　同　（題苑集）
鶯の目には籠なき高音かな　太祇　（太祇句選）
江戸へやるうぐひす鳴や海の上　同　（同）
うぐひすや葉の動く水の笹がくれ　同　（同）
うぐひすや聟に來にける子の一間　同　（同）
うぐひすの聲せで來けり苔の上　同　（同）
うぐひすや君こぬ宿の經机　同　（同）
うぐひすや月日覺へる親の側　同　（同）
鶯につめたき雨のあした哉　召波　（春泥發句集）
うぐひすの聲あはせけり春の奥　同　（同）
鶯の聲は戸にあるあした哉　同　（同）
うぐひすや瀰蓮水を湛ゆる　同　（同）
無人境うぐひす庭を歩りきけり　同　（同）
鶯の古聲したふ初音哉　樗良　（樗良發句集）
しのゝめやうぐひす啼て松の風　同　（同）
うぐひすやよきほどヅヽの聲の間　同　（同）
曉に鶯なくや裏のやま　同　（同）
うぐひすや春の山里風けぶる　同　（同）
黄鳥の啼やきのふの今時分　同　（同）
鶯の次第にうつる枝高し　也有　（蘿葉集）
うぐひすを見て居て聞かぬ初音かな　同　（同）
鶯やわが足あとを啼き消やし　同　（同）
鶯や五斗の揖節をのがれかね　同　（同）
うぐひすの七ッにしまふ寒さかな　同　（同）
うぐひすも宿あつらへよ籠つくり　同　（同）
うぐひすや耳に千鳥の凍とけ　同　（同）
鶯や土へは下りぬ身だしなみ　同　（同）
鶯や名は雲雀より上に啼　同　（同）
うぐひすの側には鳥のありてなし　同　（同）
うぐひすは吃るあいだを音色かな　同　（同）
鶯の笹葉につゝむはつ音哉　同　（同）
鶯の頭巾をとをす初音哉　同　（同）

うぐひすに耳出せ跡の頬かぶり　同（同）
うぐひすを夜るにして聞く朝寐哉　同（同）
鶯に竹かして梅になく雀　同（同）
鶯に手まりつきやむ初音かな　同（同）
うぐひすや近江の君の雪礫　同（同）
黄鳥や二聲めには餘所の藪　同（同）
うぐひすの九ッねりて初音哉　蓼太（蓼太句集）
鶯の鳴そこなふてかくれけり　同（同）
うぐひすや月の星のと日和乞　同（同）
鶯の朝隈きくるはつ音かな　同（同）
鶯の中に戸明ぬ都かな　同（同）
端居して鶯に顔見しらせん　同（同）
鶯の音にふくるゝ襟折〳〵は　同（同）
うぐひすの卯時雨に高音哉　几董（井華集）
鶯の隣へ迯てはつねかな　同（同）
うぐひすやいせ路を出る脺彫　同（同）
羽洗ふ鶯も見ゆ番屋河　同（同）
鶯の脛にかゝるや枯かづら　同（同）
鶯の二度來る日あり來ぬ日がち　同（同）
鶯のたつ羽音して高音かな　同（同）
初音して鶯下りぬ日のもと　同（同）
うぐひすや小太刀佩たる身のひねり　同（同）
鶯や日の出の後の霜ぐもり　同（同）
うぐひすに松明しらむ山路哉　同（同）
うぐひすの訛かはゆき若音かな　同（同）
鶯よ何がこはうて迯じたく　同（同）
うぐひすの影ぼし見えて初音哉　同（同）
飛鳴に鶯の機嫌しられたり　白雄（白雄句集）
うぐひすにすげなき黄のかつら哉　同（同）
鶯に闌すこしある屋敷かな　同（同）
鶯のしら目にふくむはつ音哉　同（同）
水あびて鶯となき春はらかな　同（同）
かならずよ鶯きかばやまの入　同（同）
鶯の胸毛をこぼす春みなみ　同（同）
うぐひすの今朝たく柴にとまりけり　同（同）
横に日のうぐひす見こむ書の小口　同（同）
けふはとく初音うぐひすねぐらせよ　曉臺（曉臺句集）
鶯の嘴あらひせり紙や川　同（同）

鶯をきくにもきはる華かな　成美　（成美家集）
うぐひすのうすぐろくなるゆふべ哉　同　（同）
うぐひすのかくれあらはゝ見えずなりぬ　同　（同）
うぐひすや浮世にすまば中二階　同　（同）
うぐひすのなく音を額にかけにけり　同　（同）
鶯やふた聲ほどは案のうち　同　（同）
住し藪の鶯かいま聲すこは　同　（同）
鶯ももどりがけかよおれが窓　一茶　（旅日記）
鶯よこちむけやらん赤の飯　同　（同）
鶯や何のしやうもない門に　同　（同）
三日月やふはりと梅にうぐひすか　同　（七番日記）
鐵の橋に鶯鳴くや小梅村　同　（同）
鶯にあてがつておく垣根哉　同　（同）
鶯の袖するばかり鳴きにけり　同　（同）
鶯や田舎廻りがらくだんべい　同　（同）
鶯があるもといふ日つきぞ　同　（同）
鶯が春ニ浴びるぞ割下水　同　（同）
山崎や山鶯も下々客　同　（同）
袖垣にたゞ止つてもうぐひすぞ　同　（同）
咄賃に鶯鳴て居たりけり　同　（同）
鶯も添て五文の茶代哉　同　（同）
月ちらり鶯ちらり夜は明けぬ　同　（同）
鶯よけさは鯛太郎事一茶　同　（同）
そこに居よ下手でもおれが鶯ぞ　同　（同）
鶯や垣踏で見ても一聲　同　（同）
来るも／＼下手鶯ぞおれが垣　同　（同）
鶯がぎよつとするぞよ咳ばらひ　同　（同）
うぐひすや男法度のおくの院　同　（一茶句帖）
鶯の馳走に掃し垣根かな　同　（同）
鶯のまてに啼けりつんぼ庭　同　（同）
鶯や彌陀の浄土の東門　同　（同）
鶯のまてに歩行や紅屋敷　同　（同）
鶯も親子づとめや梅の花　同　（九番日記）
鶯はとんぼ返りも上手也　同　（同）
鶯や品よくとまる竹の葉に　同　（同）
鶯やよくあきらめた籠の聲　同　（嘉砂子）
鶯の鳴たけ借りし明地かな　同　（一茶新集）
鶯や子に人中を見せおてし　同　（同）

鶯

鶯や雀はせゝる報謝米　一茶（一茶新集）
鶯ののにして鳴くや留守御殿　同（一茶發句集）
袖下は皆うぐひすや小關越　同（同）
黄鳥や泥足ぬぐふ梅の花　同（同）
鶯や黄色の聲で親を呼ぶ　同（俳林良材集）
今の世も鳥は法華經鳴にけり　同（おらが春）
鶯の目利して啼く我家かな　同（嘉永板發句集）
是程の上鶯を田舍かな　同（同）
鶯やものゝ芽をはむこゝろなき　乙二（をのゝえ草稿）
木がくるゝ人うぐひすよ〳〵　同（同）
うぐひすを吹や小城のあまり風　同（同）
鶯や田つらより來て見へずなる　同（同）
反故燒て鶯またん夕ごゝろ　同（同）
うぐひすのはつ影うつる紙帳哉　同（同）
鶯やはらみ雀はくるしいか　同（同）
鶯の老にくらぶる老もなし　同（同）
鶯や茶刀投て出るあるじ　同（同）
うぐひすやさゝ啼交る雌づたひ　蒼虬（蒼虬翁發句集）
日馴るゝや鶯垣のうらおもて　同（同）
鶯の庵相や笹葉踏はづし　同（同）
うぐひすや去年の初音も此あたり　同（同）
鶯の川浪かぶるところかな　同（同）
うぐひすの手がら額なり聲の隙　同（同）
鶯やおどろを潜る身のほそみ　同（同）
うぐひすの骨折きくや桑ばたけ　同（同）
鶯や隣まで來て隙の入る　同（同）
うぐひすの夕啼聞や朱雀口　同（同）
なが〳〵と鶯きくや船の窓　同（同）
鶯や裸まいりの行木の間　同（同）
ひと吹雪黄鳥こゆる堤かな　同（同）
黄鳥の踏で行けり小かはらけ　同（同）
黄鳥の心も見ゆるはつ音哉　同（同）
黄鳥のよき聞場なり池の面　同（同）
黄鳥の引て出たり田毎の日　同（同）
鶯のくせおぼえけり影ぼうし　梅室（梅室家集）
うぐひすや人は汐時しらぬ里　同（同）
鶯も拜まれて居る朝日かな　同（同）
うぐひすもつゞいて飛や馬に鞭　同（同）

鶯や二ころ聞ば見たくなる　同　（同　）
柴をれば鶯かへる夕べかな　同　（同　）
うぐひすの寝に行かたを拜けり　同　（同　）
鶯も來さふな二十五日かな　同　（同　）
鶯やほうと鳴ねばならぬ負　同　（同　）
うぐひすも驚く午時の時計かな　同　（同　）
よく聞ば飼鶯ぞ森のおく　同　（同　）
尾を反す鶯やがて鳴にけり　同　（同　）
鶯の七五三に聽する榊かな　同　（同　）
うぐひすや松の中なる若松に　同　（同　）
鶯や妻もあらふに一羽づゝ　同　（同　）
うぐひすや河はばよりは聲ちかし　同　（同　）

　耳無の杜

黄鳥や耳の果報を算ふ事　同　（同　）
黄鳥の名所がましや小枝橋　同　（同　）
黄鳥の影たゝみこむ屏風かな　同　（同　）
鶯の雪踏落す垣穂哉　一桐　（猿蓑）
鶯や下駄の歯につく小田の土　凡兆　（同　）
我庭の梅に鶯珍らしう　素外　（拍掌千句）
鶯も水あびてこよ神の梅　龜洞　（あらの）
鶯に水汲みこぼす朝哉　梅舌　（同　）
鶯の留守にも梅は匂ひけり　乙由　（麥林集）
鶯や椿の中をこそつかす　幽泉　（泊船）
鶯の黄杉の葉白く降にけり　才丸　（江戸ペンケイ）

　出谷

鶯や枝は干菜のかけ殘し　東水　（三山雅集）
鶯に杖あたゝまる山路哉　紫紅　（焦尾琴）
鶯や道々こぼす谷の土　吟江　（夢占）
鶯の海むいて鳴くすまの浦　卯七　（去來抄）
神の灯に籠の鶯啼そめぬ　祥然　（魁春）
行灯を見に鶯のだまりけり　巴雀　（八仙傳）
鶯や門はたま〳〵豆麩賣　野坡　（炭俵）
鶯をあと先にきく小橋哉　保吉　（新選）
鶯に藥を飾ふ隣哉　雨江　（文車）
鶯や山をいづれば誕生寺　子規　（子規句集）
鶯の淡路へわたる日和かな　同　（同　）
　妻におくれたる秋虎がもとへ
鶯や朝寐を起す人もなし　同　（同　）

鶯や洞然として昼霞　虚子（句集虚子）
　　　　　　　　大正三年作にて
鶯の聲の大きく静かさよ　同（同）
鶯のないて雀のとびにけり　同（同）

雲雀（ひばり）

雲雀（ひばり）　姫雛鳥（ひめひなどり）　告天子（ひばり）　叫天子（ひばり）　天鷚（こうり）　天雀（ひばり）　初雲雀（はつひばり）　揚雲雀（あげひばり）　落（おち）
雲雀（ひばり）　朝雲雀（あさひばり）　夕雲雀（ゆふひばり）　諸雲雀（もろひばり）　友雲雀（ともひばり）　雲雀野（ひばりの）　雲雀の巣（す）
雲雀（ひばり）の床（とこ）　雲雀籠（ひばりかご）

古書抜註

【滑稽雑談】　和訓義解に云、日のはれたる時、高く上りて鳴く也。ひはるはるといふ也。雨天にはのぼらず。（一）夏月に及びて猶高くあがる也。ねりひばりと云ふ。尤も夏に許用す。毛をかふる事也。中華、告天子等の名も、高くあがる類の謂也。和名、雲雀と呼ぶ。引く所未だ詳かならず。只雲端にのぼるの謂。又鷚鳥の二字をひばりと訓ず。是は鷚の名にて、ひばりだかと云ふ者也。此の鳥の義にあらず。只字を假用するのみ、其の物は別と知るべし。

【年浪草】　三才圖會に曰、告天子、褐色、鶉に似て小さし。海上叢草の中、多く之有り。黎明の時、天晴霽に遇へば、則ち且つ飛び且つ鳴き、直に雲端に上る。其の聲連綿として已まず。一に叫天子と云ふ。（略）雲雀骨とは、瘦せたるを云ふ。諺に、瘦せたる人を雲雀に譬ふるも是也。

【栞草】　ひめひな鳥　雲雀の異名なり。「秘藏抄」春の野に姫ひな鳥ぞあがるなる霞の中に聲聞えつゝ。（一）

註　（一）颶風の作歌。

季題解説　雀を少し大きくしたやうな鳥で、色は茶つぽく、黒の斑紋があり、腹は白い。特長としては、後指の爪が非常に長い。冬の間は、北風の吹きすさぶ川原の枯葎の間や藪の中等をこつそり飛び廻つてゐるが、草が萌え暖かになりかけると、時を得顔に獨得の歌舞を始める。その聲は朗かで、ちいちく〳〵囀りながら中天高く上り、暫く舞ひ囀つた後、始めて歌をやめて落下する面白い習性を持つてゐる。田圃や野原に巣くひ、そこから舞ひ上ることが多い。野遊の人も田畑に働く人も、この雲雀を聞いてどれくらゐ興を催し慰められるか知れない。また、雲雀は飼鳥として、丈が高く上方が網になつたひばり籠に愛育され、往来織るが如き市中でも囀つてゐる。晩春、麥の中や叢等に巣を營み、卵を産み雛を育てる。雲雀捕は、餌を漁つて自分の巣に出入するところを、途中に細

雲雀

ちる梅の片空かけてなくひばり　乙二（たのゝえ草稿）
閉つ戸を出るや空に囀ごばり　蒼虬（蒼虬句集）
大橋の木より揚るひばりかな　同（同）
嬉しげに揚る羽ぶりや初雲雀　同（同）
それさうにしては居直る雲雀哉　同（同）
ひとつづゝおのが田を持雲雀哉　同（同）
田八反ひばり十丈庵五尺　梅室（梅室家集）
雑木を見おろすのみのひばり哉　同（同）
すさまじき野杉の上や鳴ひばり　魯山（文車）
原中や落ぎは見えて鳴く雲雀　清峨（吐屑庵句集）
暮遅き日も頂上のひばり哉　巣兆（古今句集）

二月二十六日朝夢中一句を得たり

から臼に落て消えたる雲雀かな　子規（子規句集）
市川の渡し渡れば雲雀かな　同（同）
揚雲雀茶畠よりもついと立つ　墨水（新俳句）
野の道や塀の中から揚雲雀　秋竹（同）
籠の中に粟くひこぼし鳴く雲雀　碧梧桐（春夏秋冬）
島雲雀揚けて湾中舟なき日　句佛（[illegible]集）
嶺原や雲雀鳴きをる雪の上　冬葉（同）
夕空や雲雀鳴きゐる一ヶ所　荻聲（同）
閣守の軒に飼ひたる雲雀かな　くに女（ホトトギス）
いみじくも見ゆる雲雀よ小手のうち　爽雨（同）
村芝居雲雀流れて上にあり　花蓑（同）
雲雀籠かつぎて行くは旅のもの　素十（同）
雲雀籠驢馬に負はせて來りけり　一福（同）
雲雀籠いくつも釣りて渡舟守　草餅（同）
雲雀野や月影さして暮れきらず　竹聲（續ホトトギス）
茶店より出でて仰ぎし雲雀かな　月華（同）
谷空に釣り出してある雲雀籠　草田男（同）

麥鶉（むぎうづら）

古書校註

【滑稽雜談】禮月令に、季春の月、田鼠化して鴽と爲る（…）。（略）これ俗に云ふ麥鶉といひて、麥熟する比、鳴く者也。其の形鶉に似て斑なし。高く飛ばずして田野にあり。其の鳴聲卑々と云ふ。又卑微ともきこゆ。又一名あひふ。此者秋にいたりては住むと。鳴といへる類とも傳ふ。不審也。只鶉は俗に云ふ麥鶉と心得べし。（略）。百首抄に云、麥の陰鶉なりといへり。

【[illegible]】春草麥の中に子を哺する鶉也。

【年浪草】本朝食鑑に曰、三四月、田麥長き時、之を取る者を呼びて麥鶉と號す。云々。鶉又秋に見るべし。

註 (一)「田鼠化して鴽と爲る」は清明の節の第二候。

季題解説 晩春生長した草麥の中にゐて子を哺む鳥である。その子を哺して鳴くのを「ひゝなき」と云ふ。田麥の長い時捕るといふところから麥鶉といはれるのであらう。参照 合生(アヒフ)

例句

麥鶉 砂ふるへあさまの砂を麥うづら　白雄（白雄句集）
麥鶉雎をよぎりぬ庵の前　花蓑（ホトトギス）

合生（あひふ）

ひひ鳴（なき）

古書校註

【篗纑輪】あいふと云ふは鶉の雌をいふ也。雌は囀りなし。子を哺する時なくを、ひゝなきと云ふ。

季題解説 麥鶉の雌のことである。雄鶉の鳴かぬ時に、このあひふをかけて雄に慕はせて鳴かせるといふ。ひゝ鳴きといふのは、その雌鶉の鳴くことであつて、囀りではなく子を哺む時の聲であるといふ。参照 麥鶉(ムギウヅラ)

松雀鳥（まつむしり）

まつくぐり

古書校註

【篗纑輪】京師の小鳥肆にたづぬるに、菊いたゞきの類の小鳥にして、甚だ殞ちやすく、籠の中に育ひがたしといへり。予(一)例に春旅行するに、東三河より遠州路に至りて、並木の松に蟀の聲の如く喧しく鳴くものあり、擔夫にこれをとへば、松むしり也と答ふ。袋井・掛川・日坂までの間、殊に多し。されども是は鳥にあらず、蟲也。

【年浪草】京師の鳥肆に問ふに、啄木鳥を云ふといへり。一年西近江の大浦の出生の婢を仕ふ。彼の大浦の兒女の唄に、松雀鳥が戀の晉いつか木の根が絶えずかや、と唄ふ由を聞けり。此の唄も啄木鳥のやうに聞ゆ。されども俚語の云ふ所、證とするに足らず。越後國には、菊戴鳥に似たる小鳥を苔毛鳥と云ふ。下野山中に、松むしと云ふ、此の者、春松の緑を食ふゆゑに、松の末葉に集る。彼の松むしは、松むしりの下略ならん。

註 (一) 千韜、即ち篗纑輪の著者　明和六年歿

季題解説 我が國に産の中最も小さい鳥であるところの「きくいただき」の類である。形は雀より小さいくらゐである。翅は灰色である。山中に棲み、春松の緑の立つ頃、人家に近く出て來て松の緑を食ふのでその名があるといふ。性質は臆病で飼養しにくい。

例句

松雀鳥　葉でまたみどりに入るや松むしり　惟然（惟然坊句集）

鷽（うそ）

鷽鳥（うそどり）　琴彈鳥（ことひきどり）　鷽の琴（うそのこと）　鷽姫（うそひめ）　照鷽（てりうそ）　雨鷽（あまうそ）

古書校註

【滑稽雜談】俗に鷽の字をうそと訓ず。義詳かならず。詩註には雅鳥と云ひ、又鸒鳥と云ふ。順和名にも鸒、和名、比衣土里。一名、鷽鳩、鷽斯二音、と和せり。按ずるに、鸒のことさまに通ひてきこゆ。今見るに、此の者大さひゐ鳥のごとく、赤き毛ありて毛冠侍る。いかさま一類にや。

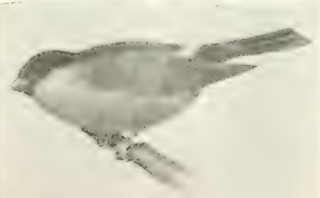
【三才圖會】鷽の狀、鶯より肥大にして、頭眞黑、雨の頰頸に至りて深紅、背短くして黑く、背胸及び翮灰青にして微赤を帶ぶ。翅尾黑し。其の聲圓滑にして短く、鳴く時は聲に隨ひて雨脚互に擧げて、琴を彈きて、手を搖かす如し。故に俚俗宇曾琴を彈くと稱ふ。或は形麗はしく聲艶かなるを以て、宇曾姬と曰ふ。雄は晴を呼び、雌は雨を呼ぶ。

【年浪草】大和本草に曰、雄をてりうそと云ひ、紅し。雌をあまうそと云ひ、あかゝらず。嘯くが如し。故に名づく。

季題解說

雀よりも大きく文鳥に似てゐる。嘴が太くて黑い。頸から頰へかけて美しい紅色を呈し、背や腹の羽毛は鼠色、頭と尾は黑い。毎年秋に山淺く出て來るのを、囮で捕へて飼養する。奥山に行けば春鳴き囀つて居るであらう。その囀る聲は音樂のやうに圓滑であり、聲に隨つて雨脚を互に擧げ、丁度琴を彈く手を動かすやうであるので、俗に「鷽が琴を彈く」と云ひ、琴彈鳥の名もそれから出てゐるといふ。また琴姫ともいふのは、その聲が艶であり、形が麗はしいからであるといふ。雄は晴を呼ぶので照鷽と云つて紅く、また雌は雨を呼ぶので雨鷽と云つて紅くない、などとも云はれてゐる。

例句

鷽

照雨や瀧をめぐれば鷽の啼く　白雄（白雄句集）

鹿垣にうそ啼里のやすみかな　同（同）

鴉のなくもかまはずうそのこゑ　蒼虬（蒼虬翁發句集）

鷽のこゑきゝそめてより山路哉　式之（猿蓑）

參考

うそ　Pyrrhula pyrrhula griseiventris, LAFRESNAYE. 雀科。

亞細亞の東北部に產し、冬季には、本邦にも渡來し、樺太から九州までに、之を見るを常とするが、かやうに渡來するもの以外に、本邦内の山地に常住し、こゝで蕃殖するものが少しはある。兎に角この鳥が春鳥と認められてゐるのは、陰曆一月の頃、甚だ盛んに渡來するためで、時には大群となつて飛來し、花蕾を食害することがある。體形は雀に似て稍ゝ大きく、頭上、眼先、腮、翼、尾羽等は黑色で光澤がある。喉、頸の左右兩側は赤

く、背面と腹面とは青灰色である。別亞種あかうそ Pyrrhula pyrrhula rosacea (SEEBOHM) は腹面が紅色である。

燕(つばめ)

乙鳥(つばめ)　玄鳥(つばめ)　つばくら　つばくらめ　つばくろ　琉球燕(りうきうつばめ)　腰赤燕(こしあかつばめ)　しやうどう燕(つばめ)　雨燕(あまつばめ)　雨鳥(あまどり)　飛燕(ひつばめ)　溜燕(ためつばめ)　川燕(かはつばめ)　里燕(さとつばめ)　群燕(むらつばめ)　諸(もろ)燕(つばめ)　燕渡(つばめわた)る

古書校註

【滑稽雜談】　禮月令に曰、玄鳥至る。註に曰、玄鳥は燕也。（略）藻鹽草に曰、燕は隔にかはりて來る者也。又、吉日をえりて巣くふ物也。夫妻の間の祝言物也。二人の女もたざる也。○和訓、つばめ・つばくら・つばくらめ。是土はむの略也。韓語也。土をはみて巣作る也。本草に啣泥と云へり。又我朝の燕は、越海を渡りて常磐國へ往來するよし侍り。唐の烏衣國の説是に似たり。又渡海に倦みて水に入る者、和國には飛魚となれり。故に是を燕魚と稱す。淮南子の蜃に化する説（一）相近きか。此の者、其の後雛を巣立せしめて、秋に至り十二の燕子を引きつれて、巣作りせし屋宇の主人に相見せり。是を禮燕と云へり。陳史にいへる馬樞が几案にいたるの儀、（二）思ひ合はすべし。又石燕と云ふ事侍り。順和名に曰、鷰、和名豆波久良米。湘州記に曰、零陵山に石燕有り。雨過ぐれば則ち飛ぶ。生燕の如し。雨止めば則ち石と爲る。また本草に、石燕と云ふ一種あり。是は冬月巖穴に乳する燕也。異名、日めもす鳥。

【三才圖會】　燕は玄き衣、白き頸、赤黃の頷(おとがひ)。春來り秋去る。雁鳧と表裏たり。其の飛び翔けるや、甚だ捷く、直に翻り仰むき、亦能く飛ぶ。他鳥の能はざる所なり。故に鷹鷂敢て敵せず。

註（一）淮南子に「燕雀海に入り、化して蛤となる」といふ說。（二）陳史に「馬樞茅山に隱る。白燕一雙有り、庭樹に巣くふ。時に一たび几案に至る、春は來り、秋は去ること三十歲」と見える。

季題解說

一番よく人の知る渡鳥である。體は細長く、羽は脊中が艷々とした黑色、腹が白、額と喉のところが栗色で、胸の界に黑い筋がある。嘴は扁平で、開けば極めて口が大きいから、飛びながら蟲を捕へることが出來る。足は弱くて、歩くことは不得手である。尾は特有な裂け形をしてゐて二つに叉狀にわかれて居る。燕尾服といふ名が、燕のこの形から來たことは言ふまでもない。しかし中國以南には、腰赤燕といひ、少し大形で胸も白黑の霜降りとなり、胸や腰に赤味のある燕が居る。燕は春來て秋には暖い南國・印度・馬來・濠洲等に去る。禁鳥で誰も害しないから人に馴れ、巣はよく人家の梁、または社寺の軒蔭などに、泥を集めて巧みに造られる。商家などでは、この鳥のためにわざ〳〵巣の造り易いやうに板をうち添へて置く。普通のつばめの巣は盃狀だが、腰赤燕は德利形の巣をつくる習性

がある。翅の力は非常に強い。速力も早く極めて敏捷である。東海道に「燕」といふ列車のあるのもこの故である。鳴聲はせはしくやかましい。この燕は家燕ともいはれ、海岸溪流などに棲息ふ「いはつばめ」とは形態上區別されて居る。燕がはじめて目につくのは、大概四月の初旬頃からである。秋南へ去る頃は、海岸の電線などに何千何萬といふつばめが群れならんで、海の方を眺め、飛び去る用意をしてゐる。うすら寒い風が吹き、空模様の怪しい頃に、南へ旅立つこの鳥の姿を見ることは憐れなものである。【季題】若燕。

【例句】

燕

盃に泥な落しそむら燕　芭蕉（笈日記）
すゝぼりてごみ燒家に啼燕　同（芭蕉句集拾遺）
壁土の家する木曾のつばめ哉　同（同）
藁屋根に烏見ぬ日ぞぬれ燕　言水（俳諧五子稿）
山の邊や風より下を行燕　來山（續いま宮艸）
燕の雁に問てや鳴まはり　丈草（丈草發句集）
遊ぶとも行ともしらぬ燕かな　去來（去來發句集）
茶の水に塵な落しそ里つばめ　其角（五元集）
燕やかろき巢を曳几巾　同（同）
階子からとふさに及ぶつばめ哉　同（同）
海面の虹をけしたるつばめかな　同（同）
傘に塒かさうよぬれつばめ　同（同）
山の端に乙鳥をかへす入日かな　同（五元集拾遺）
川燕繕さす邪魔と見ゆるかな　同（同）
簾に入て美人に馴るゝ燕かな　嵐雪（玄峰集）
柳にはふかでおのれ嵐の夕燕　同（同）
乙鳥や赤土道のはねあがり　惟然（惟然坊句集）
乙鳥につゐて這入や箱廻し　支考（蓮二吟集）
燕や庭は日出たき日に柞　同（同）
舍りして笞とはならぬ燕かな　千代女（千代尼發句集）
乙鳥來てあゆみそめるや舟の脚　同（同）
つばめ啼て夜蛇をうつ小家かな　蕪村（新虛栗集）
大津繪に糞落しゆく燕かな　同（題林集）
つばくらや水田の風に吹かれ貌　同（蕪村句集）
大和路の宮もわらやもつばめ哉　同（同）
乙鳥や去年も來しと語るかも　同（新五子稿）
細き身を子により添るつばめ哉　同（蕪村遺稿）
ふためいて金の間を出る燕哉　同（同）
飛魚となる子育るつばめ哉　同（同）

花に啼聲としもなき燕哉　同　（全集）
揮筆の墨をこぼさぬ乙鳥哉　同　（落日庵句集）
來るとはや往來數ある燕かな　太祇　（太祇句選）
古き戸に影うつり行燕かな　召波　（春泥發句集）
酒藏につばめ吹るゝ夕かな　同　（同）
幢の佛間へ道入乙鳥哉　同　（同）
張ものゝ紅くゞるつばめかな　也有　（蘿葉集）
燕やはなし聲する壁隣　同　（同）
空に飛ぶ身を土に住む燕かな　同　（同）
柳うへはこゝとをしへて燕かな　同　（同）
鐘樓へはこりて這いらぬ燕かな　同　（同）
失ひもせぬ子に狂ふ乙鳥かな　同　（同）
乙鳥や誰か呼返し／＼　同　（蘿の落葉）
來た日からもふ忙しき燕かな　同　（同）
乙鳥や轍の小魚つかみゆく　几董　（井華集）
つばくらや夜の酢買の驚かす　同　（同）
むら燕牛の胯ぐら潜りけり　同　（同）
燕や流のこりし家二軒　同　（同）
乙鳥や雪に撓みし梁の上　同　（同）
軒燕八聲の鷄を聞おらめ　白雄　（白雄句集）
人住て燕すみなす深山かな　同　（同）
はしり帆の帆綱かいくゞるつばめ哉　同　（同）
つばめ舞宿や日高に高木履　同　（同）
子母錢や置て巢立る軒乙鳥　曉臺　（曉臺句集）
燕の面なぬらしそ浪がしら　同　（同）
花の隙さましに來たか夕つばめ　同　（同）
鹽木つむ中を燕の往來哉　士朗　（枇杷園句集）
乙鳥の煤にもならぬ小貝かな　同　（同）
雨晴れて燕並ぶ垣根哉　同　（三籟）
つばくらに殘す築地や檀木町　巢兆　（曾波可理）
片里や宿なし乙鳥暮いそぐ　一茶　（旅日記）
島／＼も佛法ありて燕哉　同　（同）
婆見やれあれよ乙鳥がまめな皃　同　（七番日記）
なぜおややら隣の乙鳥はとくに來ぬ　同　（同）
目を覺せあこが乙鳥も參たぞ　同　（同）
いざこざをじつと見て居る乙鳥哉　一茶　（七番日記）
燕もおれが門をば嫌ふけな　同　（一茶句帖）
乙鳥子のけいこにとぶや馬の尻　同　（同）

とれも〳〵口まめ乙鳥哉　一茶（九番日記）
大佛の鼻から出たる乙鳥哉　同（同）
ふらんどにすり違ひけりむら乙鳥　同（同）
乙鳥の泥目ねぐふぼたん哉　同（一茶新集）
夕乙鳥我には翌のあてもなし　同（發句題叢）
朝起の古風を捨ぬ乙鳥哉　同（一茶發句集）
馬のみゝすぼめて通すつばめかな　梅室（梅室家集）
家はまだ見かけぬ軒の乙鳥かな　同（同）
藪中の裏戸おぼえし燕かな　同（同）
奥山や雪ある門へ來る乙鳥　同（同）
巣離れて柳にやすむ燕哉　玄泉（芦分船）
燕や花なくなりし三軒屋　百池（五車反古）
谷へ飛ぶ土器追ふて燕哉　民歌（春遊）
ほそ〳〵とごみ燒く門の燕哉　恕誰（炭俵）
老僧の手爐をはなれし燕哉　合志（蕉尾琴）

金州

戰ひのあとに少き燕かな　子規（子規句集）
出女の聲の中飛ぶ燕かな　同（同）
日光の向ふ上りに燕かな　同（同）
川中や島田金谷の燕　同（同）

送別

燕のうしろも向かぬ別れかな　同（同）
藍壺に泥落したる燕かな　同（同）
首途の日に見初めたる燕かな　同（同）
海苔篭に遊ぶ漁村の燕かな　同（同）
馬市や人の中飛ぶ燕　香羅（春夏秋冬）
燕や裾のちぎれし大暖簾　一笠（同人）
梁に吊る用心草鞋つばくらめ　山扇（同）
燕に土盜まるゝ左官かな　三千里（ホトトギス）
飛燕蒼し花も過ぎたる嵐山　はじめ（同）
新しき黒き頭のつばめかな　虚吼（同）
乙鳥や伏家こちたき舊市街　蒼苔（同）
戸細目に風雨の燕入れにけり　花門（同）
機織や燕きたるといそしめり　秋櫻子（同）
燕やすだれつらねし廓町　青椒（同）
裾高に著て洗濯やつばくらめ　草城（同）
乙鳥はまぶしき鳥となりにけり　草田男（同）
燕や菟道の古道このあたり　播水（同）

つばくらの來そめし門を掃きにけり　とよ子（續ホトトギス）
みちのくは草屋ばかりやつばくらめ　青邨（同）
風浪のはげしき利根やつばくらめ　草葉子（同）
つばくらを叱りて格子しめにけり　蘆生（同）
燕來て病人絶えぬ今年かな　素方（同）
燕や小鹽の山は高からず　いはほ（同）
燕を見かけしがまた雪模樣　みづほ（同）
飛び溜る燕の聲を打あふぎ　草田男（ホトトギス誌）
町いつか村になりたる燕かな　虚子（句集虚子）
燕のゆるくとびをる何の意ぞ　同（續ホトトギス）

岩燕（いはつばめ）

季題解説　普通の「つばめ」より少し小さく、脚は趾まで全部白い羽毛で包まれてゐる。家の中にも巣くふが、多くは海岸溪流の岩壁または洞窟に巣を營む。日光の華嚴の瀧邊で夥しく見るのはこの種であるといふ。羽色は背と腮のところ黑く、腹は白く、尾は比較的短くきれ込みも淺い。日本全國に擴がつて居るし、春來り秋去ることも普通の燕と變りはない。〔參照〕燕

花鳥（はなとり）

季題解説　花の樹に宿る鳥、櫻にとまる鳥、花に來る鳥を指す言葉でもあり、或はまた、單に花と鳥とを結びつけていふ言葉にもなる。櫻樹にもよく鳥が來るものであるが、花と限らず、連翹でも桃でも木蓮でも、すべての花樹と解した方が鳥が生きて來るやうに思はれる。昔の繪畫や工藝美術品にも、花と鳥とは常に切り離せぬ自然界の好一對として、因緣をもつてゐるやうである。〔參照〕植物—花

例句　花鳥

花鳥に何うばゝれて此うつゝ　鬼貫（鬼貫句選）
花鳥の古びぬうちよ初月忌　浪化（浪化上人發句集）
御用よぶ丁兒かへすな花の鳥　其角（五元集）
華鳥に悟ればもとの白髮哉　支考（蓮二吟集）
斧朽し跡に翅を花の鶴　同（同）
月花の梟と申す道心者　同（同）

花[illegible]

花鳥に囀く山や東向　　桃隣（古太白堂句選）
見事なる旅の相手や花に鳥　　同（同　）
花鳥のまことを筆のはやし哉　　曉臺（曉臺句集）
花鳥のこゝにあつまる林かな　　蒼虬（蒼虬翁發句集）

百千鳥（もゝちどり）

古書校註

【御傘】此のもゝ千鳥の事は、古今集の三鳥（一）の中にて祕傳ある事也、連に春の季に定めておかるゝ尤もおもしろし。もゝ千の鳥といふは、さへづるとなくは春になる[illegible]かゝさるか、この道理明かなれば、こゝにしるさまほしけれども、ことごとしく長く申さねばならぬ事にて候まゝ、筆を擱くもの也。

【滑稽雜談】八雲御抄に云、もゝちどり、是は鶯に限らず、是春百千鳥の囀る也。但し鶯に詠ずる例有り。古今集灌頂に云、口傳に云、百ちどりとは何ごとと云ふに、鶯と云ひ傳ふ。鶯は百千鳥の其のひとつ也。別して鶯を百千鳥と云ふにはあらず。然れば猿丸の歌に、萬葉十六、我門のえの實もむればむ百千鳥ちどりは來れど君ぞ來まさず。榎の實むればむと讀むゆゑに、鶯にはあらず。凡そ春になれば、一切の小鳥、温和の天を悦び鳴囀る也と謂へり。已上。〇古今栄雅抄に曰、鶯といふ。又春來りて、おほくの鳥の來り囀るとも云ふ。兩説也。（二）定家の云、鶯にあらずとも一定しがたし、又鶯にも限るべからず。百千鳥のひとつも、先づ鶯か。百花に柳櫻のぞくべからずといへり。以上。猶師説の口傳を受くべし。

【栞草】鶯のことゝ云ふ説はわろし。

註（一）呼子鳥・稲負鳥、及び百千鳥の三鳥をいふ

現代語譯

春の諸鳥が、[illegible]前に囀つてゐることをいふ。春の山や杜にゆくと、鶯や眼白や頰白や四十雀などのいろいろな小鳥が群れ囀つて、丁度百千の鳥が合奏してゐるかのやうに聞こえる。即ちそれである。【[illegible]】呼子鳥[illegible]

例句

百千鳥

七十賀に
つく杖のしちくにあゆめもゝ千鳥　　鬼貫（俳諧七車）
河上は柳かうめか百千鳥　　其角（五元集）
三めぐりに並ぶ花や百千鳥　　祇風（[illegible]稲　二）
百千鳥鶯が墓とつたへけり　　風生（ホトトギス）
百千鳥鳥居立たせる山路かな　　青畝（同　）
百千鳥山門いたく傾ける　　奈王（續ホトトギス）
高くにもある木の瘤や百千鳥　　風生（同　）
今年また枝も下ろさず百千鳥　　無門（同　）

貌鳥（かほどり）　貌よ鳥（かほよどり）　杲鳥（はこどり）

古書校註

【御傘】　春也。いろ〳〵の説あれ共、たゞうつくしき鳥と心得てすべし。連歌には一座一句の物なれば、誹諧には二句すべき儀ながら、聲によむべきやうなければ、たゞ一句にて置くべし。又、貌よ鳥といふ物有り。かほ鳥とおなじ鳥成りともいへり。又、別共いへり。哥學して知給ふべし。知らざる人は、誹諧にも御無用也。

【滑稽雜談】　八雲御抄に云、貌鳥は春日山によめり。片戀する者といへり。よる昔たえず戀すといへり。まなくしばなく春の野の（一）と云へり。源氏物語若菜の卷にも有り。是其の鳥と定るか。但し定家之を知らずといふ。之を推すに、只うつくしき鳥か。未だ之を決せず。○歌林良材に曰、かほ花、うつくしき花也。かほ鳥同じ。○仙覺抄に云、此の鳥かほ〳〵と鳴く、聲を名とせり。（略）○師説に云、又みゝづくをかほよ鳥と云ふと也。按ずるに、湖月抄（二）に云、貌鳥は深山にある者也。常陸國に杜若をかほ花と云ふ。此の花咲く時鳴くといへり。これらの説、一決しがたし。仙覺抄説、又杜若の咲く時なくといへるは、彼の蚊母鳥にやと云ふ説あれど、定家卿の説に極むべし。（略）或は云、雌の方よしといへり。尋ぬべし。連歌の式に云、かほ鳥はかはせみの事也。萬葉集云に、容鳥（かほどり）、同十に杲鳥（かほどり）。但し、貌鳥・貌よ鳥、同じことなり。猶口傳有り。

萬水一露（三）　若菜上卷に曰、杲鳥　箱鳥、或は貌鳥の異名と。云々。貌鳥は梟の一名也。又云、雄略天皇の御時、美作國つるぎ山と云ふ所に、相見乙人と云ふ人の婦、子をおひて山中をゆくとて、鷲にとられて、はやこ〳〵と呼びしに、死したるゆゑに、はこ鳥とは云ふ也。はことは、はやこと云ふ心也。○藻鹽草に曰、箱鳥或は呼子鳥、又かほ鳥と云ふ。唯うつくしき鳥か。○古今榮雅抄（四）に曰、よぶこ鳥、はこ鳥と云ふ。此の鳥の鳴く聲、人をよぶに似たり。實說喚子鳥と。云々。

【年浪草】　貌鳥・貌よ鳥・杲鳥は一物にして、何鳥を云ふとは定め難きにや。

註　（一）萬葉集卷十所收の歌、容鳥（かほどり）のまなくしばなく春の野の草根の繁き戀もするかも　作者不詳。まなくしばなくは、絶え間なく鳴くの意。（二）源氏物語湖月抄　北村季吟の著。（三）源氏物語の註釋、連歌師永閑の著。（四）飛鳥井雅親の著。

囀り（さへづり）　囀る（さへづる）

古書校註

【年浪草】　廣韻に云、囀は韻也。鶯鳥の鳴く也。○又知戀切鳥鳴く也。詩にも千囀・百囀なとと作る。古今、もゝちどりさえづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく。（一）

註　○滑稽雜談には「囀」は一月の部、「水鳥囀」は一月の部に見えてゐるが、共に未完の稿

の如くである。（二）古今集、春の部所載、讀人しらず

[illegible]　荒涼たる冬を拔け出た温い明朗な春の表徴である。再びめぐつて來た春を喜ぶ可憐な鳴禽類は、その調べさまざまな囀りで、川沼から、山野から、空から、明るさと和やかさとを運んでくれるのである。〔參照〕百千鳥（モモチドリ）

〔例句〕

囀り

囀るや爰に數ならぬ村雀　宗因（梅翁宗因發句集）
それは又それはさへづる鳥の聲　鬼貫（鬼貫句選）
囀もかへりがけなる小鳥かな　浪化（浪化上人發句集）
四十雀池にさひづるや麥の節　同（同）
囀りを世にや讓りて松の琴　千代女（千代尼發句集）
囀に獨起出るや泊客　召波（春泥發句集）
囀るや藪も障子も木々の影　淡々（淡々句集）
囀りや野は薄月のさしながら　嘯山（五車反古）
囀や日向の火鉢閑自き　九天（同人）
囀りや篶溜り居る峠口　荻浪（懸葵）
泥の裾かゝげ歩くに囀れり　古泉（倦鳥）
囀るや藪の中なる車井戸　十八公（ホトトギス）
囀やピアノの上の薄埃　はじめ（同）
囀や筧の中に居て一羽　默禪（同）
囀にかぶさり啼くや山鴉　橙黃子（同）
囀の書堂出て來し偉かな　鳥公子（同）
囀の一羽は下りて手水鉢　泊月（同）
囀や峰より落つる雪解水　絕海（同）
囀を身にふりかぶる盲かな　青畝（同）
一羽來て囀やみし梢かな　星濤（同）
囀や只切株の海とのみ　念腹（同）
囀や一王朝の墓の數　今夜（同）
山の鳥來て囀ればおひるかな　鳥頭子（同）
囀の糺の森を拔けにけり　朱泥（續ホトトギス）
囀のいつしか蟲を銜へをり　今夜（同）
囀の移りて障子木影なし　栁童（同）
囀りの大樹の下の茶店かな　虛子（句集虛子）

鳥交る（とりさかる）

鳥（とり）つるむ　鳥（とり）つがふ　鳥（とり）の妻戀（つまごひ）

〔古書校註〕

【年浪草】書堯典に日、仲春厥の民は折る（ワカ）。鳥獸は孳尾す。（）孔安國が傳に云、乳化を孳と日ひ、交接を尾と日ふ。

季題解説　鳥類の情慾を發し孳尾するのをいふのである。鳥は年に一回だけ、雌が雄を熱心に迎へる期間がある。これを婚期とも云つてゐる。婚期が近づくと、春情を誘發興奮させるために、生理的に囀り歌ふやうになる。鶯・雲雀などは稍〻早く囀り始めるが、普通は四・五月頃からである。その他羽毛の變化を來したり、特異な姿態運動をしたりする。孔雀や七面鳥が羽毛を擴げて誇示したりするのも、皆異性を誘ふために外ならない。雀の交るのなど、普通どこにでも見られる通りである。參照 孕鳥

例句

鳥交る

村深し燕つるむ門むしろ　几董（井華集）
竹に來てつるむ鳥あり詩仙堂　青々（妻木）
大いなる御法の庭や鳥交る　たけし（ホトトギス）
いつまでも殘る椿や鳥交る　漾人（同）
すゝけたるまつくろ雀交みけり　諸人（同）
交み鳥羽つくろうて飛去れり　虛吼（續ホトトギス）

孕鳥（はらみどり）　子持鳥（こもちどり）

季題解説　陽春諸鳥の孕めるのを云ふ。一般に云へば、鳥類の蕃殖期は春の初めから夏の終り迄である。この間は一年中で食物の最も豐富な時期であつて、蕃殖にも便宜である。また平生は植物性食物をとつてゐる鳥類でも、蕃殖期には昆蟲類の如きを好むやうになる。月で云へば三月から七月に及ぶ。鳶・雉・山雉・雲雀・鶯・鵙・四十雀・烏等皆同じである。燕・鶉・鳩・雀などはもつと長い。孕み鳥の一腹の卵の數は先づ三乃至六個である。然し水鶏・鷸・雉・鶉などは七八個以上を産する。鴨や千鳥は四個が一腹である。産卵は、多くは一年に一回である。産卵する場所は、最も原始的な鳥類、卽ち駝鳥・キヴイ等は全く巢を造らず、木の根の凹みまたは砂漠の砂の中に産卵する。ウミガラスの如き海鳥は海岸の岩石の上に産卵する。千鳥の中にも、海岸河原にちよつと地を掘つて産卵するものがある。カハセミは穴を掘り、その中に魚の骨を布いて産卵する。啄木鳥は高い樹幹に穴を穿つて産卵する。鳰は水面に浮游する巢、乃ち鳰の浮巢中に産卵する。雉・鶉・鴨・鴫・鰺刺・雲雀等は地上に巢を造り産卵する。燕雀類は樹上に巢を營んでゐる。孵化に要する日數は、小鳥では十日乃至二週間內外である。參照 鳥交る　孕雀

鳥の巢立（とりのすだち）　巢立鳥（すだちどり）

季題解説　參照 鳥の巢

例句

鳥の巢立　巢をたちて鳥の心はあともなし　成美（成美家集）

鳥の巣立
塊も心おくかよ巣立鳥　一茶（株番日記）
我宿は何にもないぞ巣立鳥　同（一茶發句集）
又むだに口あく鳥のまゝ子かな　同（一茶句帖）
から口を又も明そよまゝ子鳥　同（九番日記）
巣の鳥の口あくかたや暮の鐘　同（發句題叢）
鷹巳に巣立ちし松のさるをがせ　星城（續ホトトギス）

孕雀（はらみすずめ）　子持雀（こもちすずめ）

【古書校註】

【年浪草】本朝食鑑に曰、雀の性最も淫也。春二三月、秋八九月孕みて卵を生む。其の卵斑有り。瓦甍檐間の罅隙、（一）堂社の破簷、（二）朽木の空穴に巢くひて卵を伏す。小なる者を黄雀と號す。雛の口黄にして未だ黒からず、故に名づく。

註（一）さけめ、すき間。（二）破れ穴。

【季題解説】雀は二三月頃交尾して孕み、巣に籠る。この期間中は雌が自身で食を漁るが、雄雀は雌を保護してをり、少しでも人が近付くとやかましく騒ぐ。【參照】孕鳥、雀の子（スズメ）

雀の子（すずめのこ）　黄雀（きすずめ）　子雀（こすずめ）　親雀（おやすずめ）　春の雀（はるのすずめ）

【古書校註】

【滑稽雜談】雀の子四時に産するよしなれども、古來より春に許用する所専ら也。彼の源氏物語若紫の卷に、むらさきのうへ雀の子を飼給ふを、いぬきといふ童にがして、紫の上むづかり給ふなど書けるも、三月晦日の頃にも聞えたり。是は春に據ある故也。其の上此の鳥に限らず、陽和の時に婬して孳尾する者也。殊に春に至りて子を産する事多ければ、尤も春なるべし。

【季題解説】雀の雛は嘴が黄色なので黄雀とも云ふ。一腹に生れる卵は五六個で、四月終頃に生れるが、卵は十一日目に孵化し、十五日間くらゐで巣立ちする。新潟地方で巣立鳥を見受けるのは大抵九月始めが普通で、稍が一寸も伸びた頃である。雀の子は巣立ち頃よく地に落ちて猫に捕られたり、子供に押へられたりする。巣立後一週間程で普通に飛べるやうになるが、夏頃まではやはり親が蟲を捕へ子雀に與へてゐる。【參照】孕雀（ハラミスズメ）

【例句】

雀の子
すゞめ子と聲鳴かはす鼠の巣　芭蕉（韻塞）
人に逃げ人に馴るゝや雀の子　鬼貫（鬼貫句選）
人の親の烏追けり雀の子　同（同　）
雀子やあかり障子の笹の影　其角（五元集）

飛かはすやたけ心や親すゞめ　蕪村（蕪村句集）
落て啼く子に聲かはす雀かな　太祇（太祇句選）
雀子や並ビ居つゝも黄ナル背　召波（春泥發句集）
すゞめ子や書寫の机のほとり迄　同（同）
人の手に巣へ戻されつ雀の子　同（同）
雀子や餘寒の蠅を追まはし　蓼太（蓼太句集）
僧に成兒にはくれじ雀の子　几董（井華集）
父母のありかを竹になくすゞめ　士朗（枇杷園句集）
夕暮や親なし雀何と鳴　一茶（七番日記）
赤馬の鼻で吹きけり雀の子　同（同）
夕暮や雀のまゝ子松に鳴く　同（同）
雀子を遊ばせて置く疊哉　同（同）
我と來てあそべよ親のない雀　同（同）
雀子のはや喰逃をしたりけり　同（同）
草の戸やみやげをねだる雀の子　同（同）
雀子やお竹如來の流し元　同（同）
雀子や佛の肩にちよんと鳴く　同（同）
さあござれこゝ迄ござれ雀の子　同（同）
大勢の子に疲れたる雀哉　同（同）
子ども等に腹こなさする雀哉　同（同）
痩たりな子につかはるゝ門雀　同（同）
開帳に逢ふや雀もおや子連　同（同）
それ馬がノヽといふ親雀　同（同）
雀の子そこのけノヽ御馬が通る　同（一茶句帖）
踏ぞめは千代の竹也雀の子　同（同）
ひよ子から氣が强い也江戸雀　同（九番日記）
慈悲すれば糞をする也雀の子　同（同）
むだ鳴になくは雀のまゝ子哉　同（同）
雀子のはやしりにけり隱れやう　同（發句題叢）
竹にいざ梅にいざとや親雀　同（同）
雀子や川の中にて親を呼ブ　同（嘉永板發句集）
雀子や家のうしろはあさぢ原　乙二（たのゝえ草稿）
子をよぶかすずめの聲のふとくなる　同（同）
わりなしや痩て餌運ぶ親雀　御風（續明烏）
いそがしや晝飯頃の親雀　子規（子規句集）
竹縁や來つゝなれにし雀の子　得中（新俳句）
雀子や親も來てゐる草の中　吾空（春夏秋冬）
雀の子摑みゐる手を嚙みにけり　竹樓（同人）

雀の子

味噌搗いて汚れし臼や雀の子　　蕪樹（同　人）
家根葺が巢ぐるみくれぬ雀の子　　桃丘子（同　）
草の中に巢立ち雀のかくれけり　　ともゑ（陸　奥）
子雀を四五日飼うて放ちけり　　温亭（ホトトギス）
からうじて吹かれとまりぬ雀の子　　仲太（同　）
子雀に餌をやる窓の別かな　　よりに（同　）
親雀餌をもとめつゝ雨しげき　　千朵（同　）
子雀の中の一つが親雀　　青江（續ホトトギス）
子雀の眺められをり芝の上　　虚子（同　）

鷹化して鳩と爲る

季題解説　参照　時候—鷹化して鳩と爲る（タカクワシテハトヽナル）

例句

鷹化して鳩と爲る

新鳩よ鷹氣を出して憎まれな　　一茶（一茶句帖）

田鼠化して鴽と爲る

季題解説　参照　時候—田鼠化して鴽となる（デンソクワシテウヅラトナル）

例句

田鼠化して鴽と爲る

飛鶉鼠のむかし忘るゝな　　一茶（一茶句帖）
田鼠や春にうづらの衣がえ　　梅室（梅室家集）

引鶴

歸る鶴　鶴歸る

古書參註

【滑稽雜談】引鶴と云ふ事、或書に云、牛時庵（一）が說に云、天子御狩に出御ありて鶴を得給へば、是を百官にわかちて賜はる、是を引鶴と云ふ。鶴の足らざるには鴨を引賜はる、此の事を傳とす。其の證、御傘に雜とありと。云々。又一說に云、通俗志に春とす。是は春は諸鳥音うるはしく囀るによりて、鶴は聲うるはしく、引く事も春はいよ〳〵長し。よつて引鶴といひ引鴨と云ふ。古歌に、住吉長尾浦にて、引鶴の聲に萬代契りにし御代もなが尾の浦の長閑さ、此の歌にもなが尾といひかけたる、聲の事なるべしと。云々。老鼠湖十說は、引くはかへる事、鶴・鴨の類、冬より春まで多く集り居て、春は引きてかへる也。云々。此の說しかるべし。（略）合戰の場にも、進退を驅引と云ふ。鶴・鴨冬集り春散ずる來往を云ふべし。

註　○諸書共、引鶴・引鴨を一つにして述べてゐる。（一）松木淡々。

季題解説　我が國に飛來する鶴はおもに西比利亞邊から來るものである。

毎年十月中旬または下旬頃、強烈な西風を利用してとび來り、翌年三月上旬頃、東風の烈しいのに乘じて西北指してとび歸る。これを引鶴または歸る鶴といふのである。鶴は姿が優雅で鳥中の王と稱せられ、維新前迄は極く普通の鳥で内地の諸地方に飛來してゐたが、明治初年頃濫獲の結果、近年では殆ど跡を絶ち、僅かに鹿兒島縣阿久根と、山口縣熊毛郡八代村との二箇所に渡來するのみの狀態となつた。他の地方で鶴の棲息のことの傳へられるのは、眞の鶴ではなくて、鶴に似た鸛(コウノトリ)または大鷺であるといふことである。朝鮮における引鶴の實見者の話によれば、十羽くらゐから七八十羽くらゐ一群となり、雁のやうに鈎にはならず、列を作つて空高く〳〵飛び去るが、方向を變へる時、翼がキラリと光つたりするその美しさなどはたとへやうがないとのことである。〔參照〕殘る鶴(ノコルツル) 鳥歸る(トリカヘル) 冬―鶴渡る(ツルワタル)

〔例句〕

引鶴

傳奏の雲井にかへる鶴見哉　沾德（俳諧五子稿）

詩盟今皆白髮や鶴歸る　へき生（ホトトギス）

歸鶴高し氷相搏つて流れけり　綠童（同）

引鶴の百羽にあまるみ空かな　帆影郎（同）

鶴の列蟠へて去りゆきにけり　硯心（續ホトトギス）

註。荒崎には每冬數百羽の鶴渡來す、天然記念物たり。

このたびは鍋鶴にして歸りけり　帆影郎（同）

殘(のこ)る鶴(つる)

引(ひき)のこる鶴(つる)

〔古書校註〕【年浪草】これ二月の部引鶴の處に記す如く、二月に引きて歸る鶴の三月迄も引殘りたるを云ふ。

〔季題解說〕早春に大陸へ歸らずのこつてゐる鶴のことをいふ。今日鶴の飛來する地方として僅かに存してゐる鹿兒島縣阿久根村及び山口縣八代村の鶴についてはこの事をきかない。恐らく皆歸り去るものであらう。朝鮮の俳人の談によれば、森林等に據つて引き殘り、巢を營むものが極く稀にはあるとのことである。尙、朝鮮では至るところに鶴が來るから、特に鶴の名所といふやうなところはなく、展望のきく大平澤などに非常にたくさん群れて餌をあさつてゐるのを見るさうである。〔參照〕引鶴(ヒキヅル)

春(はる)の雁(かり)

殘(のこ)る雁(かり)

〔季題解說〕春になると、雁は北地に歸るものであるが、まだ歸らぬ時分の雁を春の雁といふのである。又傷ついたかどうかして、歸らずにそのまゝ殘つてゐる雁を殘る雁といふのである。〔參照〕歸る雁(カヘルカリ) 秋―雁(カリ)

例句

春の部

水田かへす鍬も柱やのこる鴈　其角（五元集）
沖に降る小雨に入や春の雁　召波（春泥發句集）
つれに來よもしも遠路に殘る雁　也有（蘿葉集）
ゆき果しとおもへば雨夜の聲ひとつ　曉臺（曉臺句集）
つくづくと海見て居るや春の雁　闌更（半化坊發句集）
砂はむと蒲人いへり春の雁　同（同）

歸る雁（かへるかり）

歸雁（きがん）　雁歸る（かりかへる）　行く雁（ゆくかり）　去る雁（いぬるかり）　雁の名殘（かりのなごり）　雁の別れ（かりのわかれ）

古書校註

【山之井】花もじを見すてゝいぬるをうらみ、越路の雪女とや見りしとざれかけ、ゐなかなどにさそらひては、古郷にかへるを羨み、友をしのぶ心を催され、返事はいかにととおむる心ばへをもいひ侍る。猶霞がくれにゆくを、じゝめる文字と見なし、さほひめの懸想文などもいひなせり。

【御傘】殘雁とは、秋越路に殘りてわたらぬをも、春かへり殘るをも云ふ也。雁の題には殘花を夏に出せども、連俳には春に成る也。

【滑稽雜談】月令曰、孟春の月、鴻雁來る。(一)註云、孟春鴻雁來ると言ふは、南より北に來るなり。(二)(略)(三)順和名云、鴻(略)一種名、加利)(略)和訓義解云、加利とは、其鳥の聲、隔里々々と鳴く、故に云ふ。又此鳥、よく時候を知りて歸るゆへに、かへりの中略也などいへり。然れども、かりかりとなくと古歌にも侍れば、前の說勝るべきか。(略)私云、俗に雁を唱へて雁金と稱す、萬葉集に、雁の音、又は雁金などよめる、皆鳴きごゑの事也。此もの第一は、其聲を賞する故に也。其鳥をさして云ふ時は、加利とのみ呼ぶべき也。又、一種雁金と云ひ侍るありと、下に註す。萬葉十九。見歸鴈、宿禰家持（三）燕來時衛成奴等雁之鳴者不鄕思都追雲隱喧。(略)北へ行く鴈・かりの別・かりの名殘など皆春也。來るを正とすれば、鴈とばかりは秋也。

【年浪草】今はの鴈、今はとは、今はかくせんなど云ふ心、今はかへらんと、おもひたつありさまをいふなめり。

註（一）雨水の中の第一候。（二）我國ならば、歸歸又は雁去るとでもいふべき所であるが、支那では南より北に來ると考へる方が妥當である。（三）つばめくる時になればかりがねは國思ひつゝ雲がくれ鳴く

季題解說　雁は秋分に寒地より來り、春分に歸るとせられてゐる。それ故に單に雁といへば秋季となつてをり、春の雁といふと、春北地に歸る雁のことになつてをる。雁風呂のことなど思ひ合せ、同じく北地に歸る鳥の中でも、雁の別れは殊更にあはれの深いもののやうに思はれる。（季寄）春の

例句　雁（ハルノカリ）　鳥歸る（トリカヘル）　秋―雁（カリ）

雲に隔つ友にや雁の生わかれ　芭蕉（芭蕉翁全集）
雨たれや曉がたに歸る雁　鬼貫（鬼貫句選）
夜通しに何を歸鴈のいそぎがた　浪化（浪化上人發句集）
歸る空なくてや夜半のやもめ鴈　丈草（丈草發句集）
歸るとてあつまる雁よ海のはた　去來（去來發句集）
歸る雁米つきも古鄕やおもふ　其角（五元集拾遺）
順禮に打まじり行歸雁かな　嵐雪（玄峰集）
かへる雁闇とひ越る勢なり　同（同）
笑ふぞよ花を見捨て歸雁をはゝ　杉風（杉風句集）
きのふ去にけふいに鴈のなき夜哉　蕪村（蕪村句集）
歸る鴈田ごとの月の曇る夜に　同（同）
鴈行て門田も遠くおもはるゝ　同（さびしをり）
花に去ぬ雁の足あとよめかぬる　同（蕪村遺稿）
歸る雁有樂の筆の餘り哉　同（落日庵句集）
歸る雁きかぬ夜がちに成にけり　太祇（太祇句選）
行雁の高キや花につりあはず　同（同）
飛ビむめにもどらぬ鴈を拜みけり　同（同）
北ぞらや霞て長し雁の道　召波（春泥發句集）
あたゝかな雨間を雁の呼夜哉　同（同）
風呂の戸をあけて鴈見る名殘哉　几董（井華集）
歸る鴈みな菱喰に見ゆるなり　白雄（白雄句集）
我こゝろ聲せで鴈のかへれかし　同（同）
追聲にうしとや歸る小田の鴈　同（同）
歸る雁蝦夷か矢先に待るゝな　曉臺（曉臺句集）
春寒し北貝の日向歸るかり　同（同）
西山や日の上を行雁のすぢ　同（同）
わかれ〳〵まつ山越えて歸るかり　同（同）
啼こゑの母ありときこゆ雲に雁　同（同）
降雨は夜を行鴈のなみだかも　同（同）
雨夜の鴈なきかさなりて歸るなり　同（同）
病雁も殘らで作の渚かた　闌更（半化坊發句集）
いま一度堅田に落よかへる雁　士朗（枇杷園句集）
三夜二夜聲絕て空に雁一ツ　同（同）
歸りかねて雁なく芦の二葉哉　同（兒の手）
草山や潮じめりにかへる鴈　成美（成美家集）
かへる鴈はら〳〵になりて見ゆるなり　同（同）
はたご屋は夜も戸たてずかへる鴈　同（同）
門口の灯し霞みてかへる雁　一茶（旅日記）

帰る雁

行雁やきのふは見えぬ小田の水　一茶（旅日記）
兀山を見知つておけよかへる雁　同（同）
立雁のぢろ〳〵見るや人の顔　同（同）
かへる雁汝はいつくの月を見ん　同（同）
田の雁のかへるつもりか帰らぬか　同（同）
げつそりと雁はへりけりよしず茶屋　同（同）
玉川や月の下よりかへる雁　同（同）
雁起よ雪がとけるぞ〳〵よ　同（七番日記）
雁行な今錠あける藪の家　同（同）
夕暮や雁が上にも一人旅　同（同）
いささらば〳〵と雁のきげん哉　同（同）
卅日なき里があるやら帰雁　同（同）
有明の雁になりたや行雁に　同（同）
かしましや江戸見た雁の帰り様　同（同）
金輪際来ぬふりをして雁立ぬ　同（同）
泣な〳〵それ程までで帰る雁　同（同）
かしましき雁もいに風立にけり　同（同）
釣人のほんの門より帰る雁　同（同）
帰る雁花のお江戸をいく度見た　同（同）
立際になるやさつさと帰る雁　同（同）
雁どもは帰る家をば持たげな　同（同）
帰り度雁は思ふやおもはずや　同（同）
雁行な小菜もにがや〳〵ほけ立に　同（同）
鳴な雁いつもかれは同じ事　同（一茶句集）
夜仙して鳴たる雁よなぜ帰る　同（九番日記）
ひとり身やだまりこくつて雁かへる　同（同）
雁にさへとり残されし栖哉　同（同）
行がけの駄賃になくや小田の雁　同（発句題叢）
寝た跡の尻も結ばす帰る雁　同（嘉永版発句集）
江の空や帰らぬうちは雁のもの　乙二（をのゝえ草稿）
月のある夜を惜みきて雁の行　同（同）
行かたにゆけ〳〵雁にぞ遂れける　同（同）
只ひとつ雁は行なり石部山　蒼虬（蒼虬翁句集）
浦の夜は秋ほど雁の帰るなり　同（同）
別れとて寝耳に入ぬ雁の声　梅室（梅室家集）
にくけれど我田に肥て帰雁　同（同）
田を賣て手打ば雁も帰りけり　同（同）
行雁や人は田へ下り畑へ出　尺五（月影塚）

行雁と啼かはしけり小田の雁　吟江（行雲日記）
切り干しの大根贅たゝむ歸る雁　牧童（懸葵）
歸りあへぬ雁に大雪到りけり　瓦全（同）
讃江
行雁や火桶に火ある渡舟　綠童（ホトトギス）
行雁や遼河の方へみちをとり　杜陵（同）
雁歸る今宵は低くわたるなり　一我（同）
塗柄杓かざして仰ぐ歸雁かな　帆影郎（續ホトトギス）
かすかなる歸雁のあとを見送りぬ　あふひ（同）
古麁朶にもたれて居れば歸る雁　拓水（同）
山寺や障子の外を歸る雁　虛子（句集虛子）
一本の枯木がくれの歸雁かな　同（續ホトトギス）

鳥歸る

歸る鳥　小鳥歸る　小鳥引く

古書校註

【御傘】春なり。三月の末に諸鳥の古巢にかへる事也。たゞ日の暮れてねぐらにかへる鳥などの句は春にならず。

【年浪草】千載。花は根に鳥は古巢にかへるなり春の隣（一）をしる人ぞなき　順德院

註（一）隣はとまりの誤。

季題解説　秋冬の候に我が國に渡つて來た雁・鴨の類や・山雀・四十雀・鶸その他の小鳥類の如き候鳥が、春北方に歸るのを云ふ。引くといふのも歸ると同じ意である。參照 鳥雲に入る　引鶴　歸る雁　引鴨　天文　鳥曇

例句

鳥歸る
歸るとて梅に一夜や四十雀　支考（蓮二吟集）

鳥雲に入る

雲に入る鳥

古書校註

【滑稽雜談】式連歌書に曰、雲に入る鳥、春と也。歸る事と有り。宗養（一）は雜也。問へば、三月盡の詩に、落花浦風鳥入レ雲、（二）此の心より云ふ說侍れど、中古當世に用ひらるゝ句、未だ聞かずと。養は中古の名師也。之に隨ふべしと也。○竹馬抄に曰、雲に入る鳥と云ふは、かへる事也。雲に入るひばりとも。按ずるに、當代專ら連・俳ともに春に用ふるなり。

【年浪草】雲に入る鳥は雁を云ふなり。

註（一）慶長中の人、宗牧門の連歌師。（二）花落隨レ風の誤。

季題解説　暮春の頃、北地に歸る鳥の姿の、雲際遙かに見えずなりゆくことを云ふ。參照 鳥歸る

〔例句参考〕鳥雲に入る

朝立や鳥見かへれば雲に入　浪化（[illegible]）
鳥雲にゑさし獨りの行方かな　其角（五元集）
鳥雲に入て松見る渚かな　白雄（白雄句集）
鳥雲に入る熊谷の住かな　士朗（[illegible]句集）
入れば入る我も出羽の雲に鳥　乙二（をのゝえ草稿）
鳥雲に入る熊谷の堤哉　士朗（同）
鳥雲に再び重き病かな　果采（ホトトギス）
長々に江流西す鳥雲に　橙黄子（同）
鳥雲に我は杖抱く渡舟かな　はじめ（同）
鳥雲に驢馬は居睡る堤かな　一我（[illegible]ホトトギス）

水鳥囀る（みづとりさへづる）

〔季題解説〕春、水禽類の鳴くことを云ふ。〔季題〕囀り（六）　冬―水鳥（[illegible]）

引鴨（ひきがも）

鴨歸る（かもかへる）　歸る鴨（かへるかも）　行く鴨（ゆくかも）

〔季題解説〕鴨は雁などと同じく、主として北海道・樺太・東部西比利亞等の寒帶地方で夏期に繁殖し、八九月頃から順次内地に渡來し、各地の海岸・湖沼・河川等に群棲越冬して、翌春三月上旬から五月上旬頃に、再び繁殖地に歸つてゆく。これを引鴨といふのである。〔季題〕残る鴨（のこるかも）　鳥歸る（とりかへる）

冬―鴨（かも）

〔例句〕引鴨

小田に降る雨見ても引小鴨哉　乙二（をのゝえ草稿）
引鴨の又たつ沼の渡船かな　格堂（ホトトギス）

残る鴨（のこるかも）

引残る鴨（ひきのこるかも）

〔季題解説〕春になつても北地に歸らずに殘つて居る鴨をいふ。〔參照〕引鴨（ヒキガモ）

夏―通し鴨（とほしがも）

〔例句〕残る鴨

殘る鴨何番の花置火燵　子規（子規句集）
青き藻を一筋肩に春の鴨　素風郎（ホトトギス）

鳥の巣（とりのす）

巣籠（すごもり）　巣隱（すがくれ）　巣鳥（すどり）

〔古書校註〕【御傘】春也。古巣もおなじ。水鳥の巣は夏也。鶴の巣・鷹の巣は雜也。蛛のす・蜂のすも雜也。巣の字は鳥・蟲の名をかへて一坐に三句すべし。

【滑稽雑談】 總じて鳥の巣は春也。鳥の名をさしていふには、その鳥により、て春ならざるも有るべし。只、鳥の古巣に歸ると云ひ、鳥歸るなどいふも、巣にかへる事にて春也。水鳥の巣は夏也。又大鳥の類は皆雜也。其の故は、鶴・鴻・鷲・鵰などの巣は、作り始めてより幾年も同じ所にあり、其の鳥も四時ともに巣居する也。外の鳥は四季に往來渡歸の事侍りて、巣も又毎年かはるゆゑ也。總じて諸鳥の季を持つと雜に成るは、此の義にて推知すべし。

【年浪草】 按ずるに、巣の綿密なるや、鷦鷯・燕最も勝れたり。杜鵑は自ら營むこと能はずして、鶯の巣を假り用ふるも亦一智也。鳥鶉・文鳥・鴿の如き者は樊の中に孳む。

季題解説 鳥類が主として卵を產み、雛を育てるために作る床である。鳥の内でも時鳥・郭公・筒鳥など巣を作らぬ鳥もあり、また鳰のやうに水上に浮巣を作る鳥もゐるけれども、多くは春產卵に先だつて、樹上・巨樹の空洞・藪・叢・畑作・斷崖・人家などに巣を作る。材料や形狀は鳥によつて違ふが、その最も精巧なのは鶲・雲雀・葭切・三十三才・目白等で、百舌・鵯等もやゝ巧である。雀は巧にも粗雜にも作る。これ等は多く椀形に草の莖・葉・苔・植物の纖維などで作る。鳩の巣は最も粗雜で、木の小枝や萩の枝やうのものを並べたに過ぎない。巣の上の卵は落ちさうで、その簡單なのが物哀れにも見えるが、反つて淸楚な感じもする。鴉の巣は大樹の上に懸け、大きくはあるが粗雜である。鳥は皆用濟の古巣はその儘にしておいて、毎年新しい巣を營むのである。鳥が巣に籠るのを巣籠とか巣隱といひ、雛が成長して巣を離れるのを巣立とか巣立鳥とかいふ。 **参照** 鳥の巣立　鷲の巣　鳩の巣　雉の巣　鳶の巣　時鳥の巣　鶯の巣　燕の巣　雀の巣　鴉の巣　鵲の巣　鷺の巣　夏—鶉の巣　水鳥の巣

例句

鳥の巣

古巣只あはれなるべき隣かな　芭蕉（續深川）
あなかまと鳥の巣みせぬ菴主哉　太祇（太祇句選）
鳥の巣や誰か髮もじの一摑　召波（春泥發句集）
此殿の古巣たづねつ鳥二ツ　同（同）
鳥の巣に引かるゝ去年のかゝしかな　也有（蘿葉集）
鳥の巣の明れば暮る日數かな　白雄（白雄句集）
巣つくるやにくき鳥も親ごゝろ　同（同）
巣鳥落ぬ木末にかへすよしもがな　同（同）
鳥の巣となしけり妹が髮の落　闌更（半化坊發句集）
鳥の巣や或は木蔭艸の蔭　同（同）
鳥の巣や梅うのはなもしらぬ内　同（同）
鳥の巣やひとつ太きはほとゝぎす　同（同）

こゝろこめし巣作を鳥獣共の鬼　闌更（半化坊発句集）
何となく見らるゝ鳥のから巣かな　成美（成美家集）
おとされし巣をいく度見る烏哉　一茶（旅日記）
鳥の巣のあり／＼みゆる榎哉　同（同）
鳥の巣や突おとされし朶に又　同（同）
鳥の巣もはやいく度目の榎哉　同（同）
鳥をとる鳥のすみかも焼れけり　同（同）
鳥の巣や翌は切らるゝ門の松　同（一茶句帖）
鳥でさへ巣を作るぞよ鉄太郎　同（九番日記）
焼たるも残るも古巣かへる鳥　乙二（をのゝえ草稿）
山門へ養しにかよふ巣鳥かな　梅室（梅室家集）
巣の鳥の顔出してゐる夕日かな　麦人（春夏秋冬）
鳥の巣に法のともし火うつり鳬　青々（妻木）
風鐸の中より垂るゝ巣藁かな　麻葉（ホトトギス）
凌霄の鳥の巣ひゝなかへりけむ　青邨（同）
鳥の巣や江畔のポプラ伸びやまず　橙黄子（同）
鳥の巣に一かたまりつ伏家かな　枴童（續ホトトギス）
濯女にものを落せる巣鳥かな　杵魯植（同）
鳥の巣の落ちたるまゝにして置きぬ　茂樹（同）

鷲の巣

【季題解説】 鷲は「鷲鳥、最も猛く強くして鳥類の王と稱す。形甚だ大く鋭し、背と翅とは黑くして白き斑あり、腹は白くして竪に黑き斑あり。深山の大樹に棲み、魚・狸・犬などを攫みて食とし（言海）」、はげわし・いぬわし・をじろわし等の類がある。亞細亞大陸に最も多い。我が國にも或る種のものは各地に棲息する。その巣を營む所は概ね絶壁である。「我國にも産するイヌワシは鼠・兎、有蹄類の仔や獵鳥を引攫つて絶壁の己が巣に持ち歸る（實動物の實驗）」とある。或る人の朝鮮に於ての實驗談に次のやうなのがある。全羅北道群山沖の小列島のうちの、七八戸の住民がゐる小島の出島に、干潮時には歩いて行ける所があるが、削り立てたやうな絶壁で、島民たちも用を持たぬので行かない。植物採取に行つた或る一行が腰繩をしてその頂に登つて行つたところ、柏か這つたやうに枝を擴げてゐる下、直徑三尺ばかり、枯枝などで織つた巣を發見した。時秋であつたので巣の中には何もなかつたが、たゞ鷄卵よりも大きな卵の穴のあいたまゝ腐穢したものが殘つてゐた。初めその附近に藥香が落ちてゐたので、こんなところに島民が來るのかと不審したが、一行のうちの一人がそれは鷲などの啄み來つたものであらうと云つたが、巣を發見するに及んで、その言葉は僞でないやうに思へた。舟の破片らしい一尺あまりの木片が二ツ三ツ巣の中にあ

るなど、全く鷲鳥の巣らしく思へた、その後、濟州島に於て瞥見した――春の末であつたと思ふ、この時は巣中の雛を見たのであるが、遠くからで巣はよく判らなかつた――鷲の巣と場所などの酷似があり、全く鷲の巣に間違ひないと思ふ、云々。〔[illegible]〕鳥の巣(冬・鷲)

例句解説

鷲の巣

越より飛騨へ行とて籠のわたりのあやうきところ／＼道もなき山路にさまよひて

わしの巣の樟の枯枝に日は入ぬ　凡兆（猿蓑）

鷹の巣　巣鷹

古書校註

【滑稽雜談】連歌新式增抄に云、鷹の巣春也。御傘に曰、鷹の巣春也。〇ある人云、貞德師の御傘に記し給ひしは、おそらく筆者の誤なるべし。鷹の巣は春に治定したり。定家卿鷹よせの春の部に、白百首、日のもとの山てふ山にかくる巣に白鷹の子のなどなかるらん、生れくる日やかはりけん春よりも守りたてたる鷹の巣まきり。これらの說、これらの儀をしり給はぬ貞翁にはなし。筆者の誤か。又鷹の巣もたゞ鳥なれば雛といひ說侍れば、貞德は雛と云ふ義を執り給ふにや。猶俳諧など作らんには、句作に有り、又工夫して作意あるべし。

【三才圖會】鷹窩に生ずる者は、好みて眠り、木に巣くふ者は、常に立雙ぶ。巣を取りて人家に育つる者を巣鷹と曰ふ。

季題解説　猛禽類の多くの種類の中には、習性が全く同一でなく、或ものは樹上・岩上等に營巣し、また他のものは叢叢の內の地上に産卵するものもある、と「動物の驚異」にある。純正鷹類のうち、チウヒと稱する中形の鷹は沼澤の地を好んで棲み、叢叢に巣を造る、と同じく「動物の驚異」に記されてゐる。朝鮮全羅南道の麥德山中において或る人の見たといふのは、おほたかなどの巣であらうか、同山上絕壁上、松樹に巣くつてゐたが、もとより人などの容易に近づける場所でないから、巣の構造など知ることは出來なかつたが、矢張り枯枝などの無造作なものであらう、とその人は話してゐた。〔[illegible]〕鳥の巣(冬・鷹)

鶴の巣　鶴の巣ごもり

季題解説　鶴は人跡絕えた山中の喬木の上などに巣を營む。昔からお目出度いものとされてゐる。內地では、動物園においての外見ることは出來ないが、嘗て朝鮮咸鏡南道惠山両將軍峰での目擊者の談に依ると、崖の上の樹の頂にあつたさうで、矢張り枯枝を集め束ねてゐるらしく、また猿をがせなどで、枯枝を點綴してゐるやうな風にも見えたが、何分高い所なのではつきりは見えなかつたといふことである。鶴は一產から二卵を產み、

回それが雌雄となるものであるとかいはれてゐる。[参照] 鳥の巣(春)

[例句]
鶴の巣　　　天王寺動物園
そのよしをしるして鶴の巣籠れる　並木（ホトトギス）

雉の巣

[季題解説] 雉は春の末になると、山に入つた麥畑、桑畑または淺い山の小松の生ひ出た堤上などに粗雑な巣を營む。雨などの防げる場所を選むさうである。例へば小松山であれば、小松の下枝をさしのべてゐる下の地面に、自然の枯草を利用してゐるといふ風である。小鳥の巣に見るやうな叮寧な巣の構造でなく、ほんの申譯のやうに、草などをちらしかけてゐるだけの巣である。卵は通常十二顆であるといふ。[参照] 雉　鳥の巣(春)

[例句]
雉の巣　雉子の巣を見屆け置きて樂しめり　朝雪（ホトトギス）

鳶の巣

[古書校註]【滑稽雜談】此の者また春に至りて、雌雄相交はり、巣を作る事專らなり。しかれば巣とか、さかるとか、つるむとか續べ作る也。鳶と計りは勿論春也。
【年浪草】鳶の巣は樹の上に有り。木の枝を以て組合せて巣をなす。

[季題解説] 鳶は大木の梢に枝を寄せ集めて巣をつくる。[参照] 鳥の巣(春)

[例句]
鳶の巣　鳶の巣としれず梢は鳶の聲　北枝（北枝発句集）
鳶の巣を指さす札のたちにけり　今更（ホトトギス）

時鳥の巣

[古書校註]【滑稽雜談】説文に曰、杜鵑は蜀王望帝の化する所なり。今に至りて巣に寄り子を生む。百鳥其の雛を哺せんとする、尚、君臣の如し（略）和國にも郭公の巣と云ふ者別になし　外の鳥の巣に卵をわるといへり。（略）歌林良材に云、いまの世にも、まれまれ、鶯の巣より、時鳥の雛を得る事ありといへり。

[季題解説] 時鳥は自分で巣を營むことなく、鶯や頰白などの巣の中へ産卵するといはれてゐる。實際見たといふ人の話もまた聞かない。卵は鶯に孵させた上、鶯の雛を虐待するといふのであるから、ずゐぶんひどい鳥のわけではある。賴政の歌に「うぐひすのこになりにけるほととぎすいつれの音にかなかんとすらん」といふのがある。[参照] 鳥の巣(春)　夏—時鳥(夏)、

鶯の巣

【季題解説】鶯は三月中旬から巣をかける。竹葉を啣んで来て造り、内には棕櫚の毛を布いて衾褥とする。茂樹竹林中に多い。源氏物語には鶯のすだち松とある。一窠にはその一番の巣には雄多く、巣の内五羽あれば三四羽は雄である。二番までは雄多く、三番四番末の子となれば、だん〳〵雌勝ちになる。五六月の頃まで産む。初めの子は丈夫で聲が大きく、末の子は弱くて聲が低いといふ。【參照】鶯（ホトトギス） 鳥の巣（春）

【例句】

鶯の巣　鶯の巣などなきかと山仕事　嘉壽登（ホトトギス）

燕の巣　巣燕

【古書摘註】

【滑稽雑談】時珍本草に曰、燕（略）巣を營むに、戊巳の日を避く、春社に來り、秋社に去る。其の來るや、泥を啣へて屋宇の下に巣くふ。

【三才圖會】人家に往來して、窠くふ處を求む。人之を覺り、藁を束ね、徑り三四寸許り、盤の如くにして豫め巣の形に作り、家内の棟の下に縋げて之に與ふ。則ち、燕喜んで巣を營む。凡そ一たび巣を營むの家は、歳歳忘失せずして來る。其窠の周密なること言ふべからず。泥を用ひて、髮毛或は稈心を和し、宛ら蛮塗の如し。其の智、巧婦鳥（一）に勝れり。

註（一）みそさざい。

【季題解説】燕は普通四月初旬南方より來り、多く人家の梁などに巣を作り、夏季雛を育て、九月十月頃南に去る。巣を營むのは丁度代掻きの時分で、塗畦のほとりなどに泥を啄みに降りる燕を見ることが多い。燕は一般に舊巣を愛慕するもので、巣を毀たないでおくと、翌年も亦同じ巣に來る。琉球燕は沖繩以北には渡らず、腰赤燕は我が國には餘り多くは來ない。後者は屋壁の高所に徳利形の巣を作つて雛を育てる。しやうどう燕は海濱または河岸等の土砂に穴を掘つて産卵するので、砂潜燕の名がある。【參照】鳥の巣（春）　燕（春）

【例句】

燕の巣
わりなしやつばめ巣つくる塔の前　蕪村（新五子稿）
巣を守る燕のはらの白さかな　太祇（太祇句選）
巣乙鳥の下に火をたく雨夜かな　白雄（白雄句集）
巣燕に雑巾かけし柱かな　同（同）
巣の燕朝寐の中に鳴にけり　嘯山（新選）
去年の巣の土ぬり直す燕哉　俊似（あらの）
古壁の蓮曼陀羅や燕の巣　青々（妻木）

灯さば巣安からぬに巣にある燕　孤笑（同）
巣燕の糞受け笠や酒肆の軒　草魁（ホトトギス）

雀の巣（すゞめのす）

〔季題解説〕 巣引雀（すひきすゞめ）
雀は藁、鳥の抜羽等をもつて巣を構へる。巣はつくり出してから四五日で完成する。瓦の隙間とか、廂裏とか、古木の空洞などに造ることが最も多い。藁しべが軒庇から垂れさがつてゐるところなどをよく見るものである。〔参照〕鳥の巣(付)　孕雀(付)　雀の子(付)

〔例句〕
雀の巣
巣はあだに軒の雀の塒高き　白雄（白雄句集）
蟬丸のつり燈籠に雀の巣　呼来（ホトトギス）
彌陀の手へ雀の卵もどしけり　羽公（同）
雀の巣浮間の橋の橋桁に　花蓑（續ホトトギス）
天人を覗く眼鏡に雀の巣（東照寺古塔）　羽公（同）

鴉の巣（からすのす）

〔季題解説〕 鴉は欅などの大木の頂に巣を造る。四月の中旬から巣を構へ初め、木を組み草の根を敷き、その上に柔かい毛を葺いて造り終るのである。鴉が大へん騒ぐことがあるが、これは鴉の毛を抜きに來るのである。鴉は親子の愛情が大へんに深いものである。春の間は親が子に食物をもつて來るが、九月頃になると子が親を食べさすと云ふことである。〔参照〕鳥の巣(付)

〔例句〕
鴉の巣
巣に下りし鳥にゆるゝ梢かな　橙黄子（ホトトギス）

鵲の巣（かさゝぎのす）

〔季題解説〕 鵲は燕雀の類。形、鳩より稍大で尾長く、體色紺碧、腹白く、肩より腰へかけて白條があり、飛翔する時、背面の紺碧の中に白色の半蛇の目形を現はして美しい。春、ポプラなどの樹上に巣を營む。枯枝を綴つたもので、鷺のやうに粗雑でない。この巣は朝鮮到るところにあつて、小さな部落があればそこに鵲の巣がないことはない。廟などの側にも多く見かけられ、風致を添へてゐる。所謂七十二候の一に「鵲始巣」といふのがある。十二月節の第二候である。〔参照〕鳥の巣(付)　冬―鵲始巣(付)

〔例句〕
鵲の巣
鵲が巣を懸けにけり栗老木　圭史（同人）
鵲の巣をいとなめる日數かな　丹重子（ホトトギス）
鵲の巣やかたみに動く二つの尾　すゞえ（續ホトトギス）

鷺の巣

【季題解說】鷺は春、樹上に枯枝などを集めて巣を營む。一說には、鷺も時鳥の如く我が巣を造らず、鵜の巣に卵を産んで鵜をしてかへさしめるといふ。朝鮮全羅南道咸平郡校郷里に、鷺の巣の名所がある。場所は南を受けた小山の裾のなぞへで、北はその小山の肩に依つて塞がれてゐる。こゝに二丈餘の櫟か榎かゞ數十本あつて、その梢に極めて粗雜な巣が造られてゐる。枯死してゐるのではないかと思はれるやうなあからさまな梢に、危げに枯枝を集めた巣が乘つてゐるのである。一樹の梢に五個或は七個と造られて、總數三百餘と數へられるが、隣接した松樹にもなほ巣が營まれてゐる。こゝのは青鷺であるが、巣を守つてゐるもの、餌をあさつて飛び去り飛び來るもの、非常な壯觀である。いろ〳〵な鷺の動作は見てゐて飽きないものがある。〔季題〕鳥の巣

【例句】

鷺の巣

五位の子の巣にゐて人に動かざる　耕雪（ホトトギス）

鷺の巣に見覺えぬ樹はなかりけり　鳧石（同）

龜鳴く

龜の看經

【古書校註】【栞草】「夫木集」川越のをちの田中の夕闇に何ぞときけば龜のなくなり　爲家。

【季題解說】龜は春聲を發して鳴く、これは雄が雌を呼ぶためである、などとあつたり、また鳴くのではなくて龜が水を含んで呼吸する音である、などとも坊間の歲時記に載つてゐる。さういふことが果してあるのかどうか判然しない。夫木集にある爲家の「川越のをちの田中の夕闇に何ぞと聞けば龜のなくなり」といふ歌が典據とせられてゐるやうである。馬鹿げたことのやうではあるが、しかしこれを詩人的に考へれば、春の季題として古くから、なれてゐる「龜鳴く」といふことを空想する時、一種浪漫的な興趣を覺えしめるものがあるのである。

【例句】

龜鳴く

龜鳴くや皆愚かなる村のもの　虛子（句集虛子）

蛙

かへる　金線蛙　赤蛙　土蛙　葉蛙　初蛙　晝蛙　夕蛙　遠蛙

蛙の歌　筒井の蛙　井手の蛙　無蘇の蛙　蛙合戰

【古書校註】【山之井】ふれ〳〵となきて雨をこふといへば、天蟾といふといへど、むぎわらの屋に、世を捨てすむ尼にもとりなし、露の玉をかづきの簑にもい

ひかけ、苗代に引きこもり、井のうち氣にて、でんどをしらぬ心をもし侍る。又水にすむかはづの哥よむといふ事は、ふみにも見えしに、いくさなどをもす(一)といふめれば、おのが口から蛇にものまれて命をかろんじ、文武に道のかはつかなともきこえ侍りし。

【滑稽雜談】　蛙。(略)和名かへるとは、土を懷み、一夕に本の所に還るの謂也。蝦蟇の字の說、是に同じ心也　上に註する時珍が說(二)をみるべし。(略)八雲御抄に云、かへるとは、隱題の外はよまず。但し後撰の歌にかへるとよめり。

蠹。(略)俗にかはづ・かへる同じやうにいへど、少異あり。尋常の蛙、池沼などにあまた鳴集るに、井手の河に蠹を持來りて、其の池に放つ時は、衆蛙悉く聲を紛ふといへり。然らば異類なること明か也　傳へ云、龜山院の帝、瑞龍山南禪院は此の帝の御禪室也　此所の池に井堤のかはづを放されて、今世尙存す、尤も蛙はかへる、蠹にかはつと申すにて侍る。然れども蛙の字を通用して、かはづとも讀むべし。

蛤蟆。(略)此のものよく氣を吐く。故に和俗、いきがへると稱すべきを、唱へよろしきに依りてひきと稱す。又ふくがへるとはひきの通音か。又氣をふくの敵也とかや。一說に、此の者春に成りがたしといへり。さも有るべし。然れども冬月見えず、春に至りて土穴を出づ　その初を正として春に許用せり。

田父。(略)靑蛙。(略)蟾蜍より以下三種は、句作によりて春になり、春にならざる儀有り。古人の夏に作り、秋に作られたる句など侍る。作者心得べし。

【年浪草】　長明無名抄に云、井手の蛙と申す事こそやうある事にて侍れ。世の人思ひ侍るは、たゞかへるは皆かはづといふとぞ思ひて侍るめり。それもたがひ侍らず　されどかはづと申すかへるは、外には更に侍らず、只この井手の川にのみ侍るなり。色くろきやうにて、いと大きにもあらず、よのつねのかへるのやうに、あらはにをどりありくことなども侍らず。常には水にのみすみて、夜ふくるほどに、かれが鳴きたるは、いみじくこゝろすみて、哀れなる聲にて侍ると云々。○古今の序に、花になくうぐひす、水にすむかはづといふは、此の井手のかはづ也、尋常の蛙の事とのみおもはゞ、心おとり侍るべし。京師に此をこのむの人々、井手のかはづを籠に入れて飼ひおくを見侍れば、無名抄の說のごとく、色黑くちひさき蛙にて、外には見え侍らずかし。

【栞草】　無聲の蛙とは、江戸小石川、無量山壽經寺傳通院の開山、了譽上人(三)聖冏和尙、勸學のさまたげ也とて、一山の蛙を封じこめ給ひしより、當山の蛙今に聲なしと云傳ふ

註　(一) 著聞集に、後堀河帝の御時、高陽院殿の南にある堀に、蝦蟇數千群をなして相戰ふたといふ傳へがある。その他、蛙合戰は古へから諸書に記載されてある。(二) 時珍本草に、「俗言、蝦蟇土を懷む。取りて他處に置けば、一夕にして其の所に還る。或は之を還ふと雖

も、常に栗うて返る。故に喚蛙と名づく」とある。（三）應永年間叙。

季題解説 昔から俳諧には最も縁の深い動物の一つである。實際、早春の雨の夜などに、どこか遠くの田圃から初蛙の聲をきゝつけた時など、季節の感じを甚だ深からしめるものである。春からずつと夏へかけて、雨によく晴によく、晝によく夜によく、田圃の情趣に缺くことの出來ない景物である。最も喧しく鳴き揃ふのは春の交尾期で、雄がその所謂歌嚢を張つてさかんに雌を呼び立てる時分である。本邦産にも種類はいろ／＼あるが、この頃は食用蛙も輸入せられた。蛙の種類でも、青蛙（雨蛙・枝蛙）・河鹿蛙・蟾蛙は夏季となつてゐる。〔參照〕蝌蚪　夏　青蛙　蟾蛙　河鹿　時候　蛙の目借時

例句

蛙

歌の道になれもさし井出の蛙哉　宗因（梅翁宗因發句集）
歌の作ほりかねの井の蛙かな　同（同）
古池や蛙飛こむ水のをと　芭蕉（春の日）
から井戸へ飛そこなひし蛙かな　鬼貫（鬼貫句選）
是こゝへ蛙の飛んだ足の甲　同（俳諧七車）
蛙啼この夜忘るな旅まくら　同（同）
蓮池に生れてもとの蛙哉　言水（俳諧五子稿）
玉川や蛙流るゝ馬の沓　同（同）
蛙〳〵土のけに見ん歌の種　來山（いまみや草）
何の役にたゝでつらるゝ蛙かな　同（續いま宮艸）
取つかぬ心でうかぶ蛙かな　丈草（丈草發句集）
松風をうちこして聞蛙かな　同（同）
一畔はしばし啼やむ蛙かな　去來（去來發句集）
田の畔や虹を背負てなく蛙　同（同）
いくすべり骨折岸の蛙かな　同（同）
よしなしやさでの芥とゆく蛙　嵐雪（玄峯集）
春なれや田の青のりになく蛙　許六（五老井發句集）
角大師井手の蛙の干ぼしかな　同（同）
田を賣ていとゞ寐られぬ蛙かな　北枝（北枝發句集）
田の庵やかはづ飛かふ四ばしら　同（同）
おしあふて鳴ときこゆる蛙かな　同（同）
我がもみと蛙鳴らん西行田　支考（蓮二吟集）
山の井や墨のたもとに汲蛙　杉風（杉風句集）
蛙鳴てその蓑ゆかし濱づたひ　千代女（千代尼句集）
雨雲に腹のふくるゝかはづかな　同（同）
青雲雀呼戻したる蛙かな　同（同）

踞はふて雲を伺ふかはづかな　千代女　（千代尼發句集）
苗代の色紙に遊ぶかはづかな　蕪村　（蕪村句集）
日は日くれよ夜は夜明ヶよと啼蛙　同　（同）
月に聞て蛙ながむる田面かな　同　（同）
閣に座して遠き蛙をきく夜哉　同　（同）
連哥してもどる夜鳥羽の蛙哉　同　（同）
獨鈷鎌首水かけ論のかはづかな　同　（同）
およぐ時よるべなきさまの蛙かな　同　（新五子稿）
うかれ出て背〳〵の蛙かな　同　（同）
風なくて雨ふれとよぶ蛙哉　同　（同）
彳めば遠くも聞ゆかはづかな　同　（蕪村遺稿）
飛込て古歌洗ふ蛙かな　同　（落日庵句集）
居直りて孤雲に對す蛙哉　同　（同）
火を打ば古井にかこつ蛙哉　同　（同）
諸聲やうき藻にまとふむら蛙　太祇　（太祇句選）
蛙居て啼やうき藻の上と下　同　（同）
こもり江や雲母うく水に啼蛙　召波　（春泥發句集）
西行の席さはがしき蛙かな　同　（同）
いづちともなくや蛙の在所　同　（同）
はじめから聲からしたる蛙かな　同　（同）
江の蛙生駒の雲のかゝる也　同　（同）
四五升の水にも住てかはづ哉　同　（同）
橋守に須磨の千鳥や啼蛙　也有　（蘿葉集）
溜池や去年の落葉に啼蛙　同　（同）
溝ひとつ人を飛ばせてなく蛙　同　（同）
見付たり蛙に臍のなき事を　同　（同）
池を田に埋てももとの蛙かな　同　（同）
浮しづむ身を泣くらす蛙かな　同　（同）
井の内や山吹しらでなくかはづ　同　（同）
をよぐ田も飛ぶ田も有て蛙哉　同　（同）
花にいる日をかりたがる蛙かな　同　（同）
蛙啼ころや野守の鏡にも　同　（蘿の落葉）
つちくれにうごく物みな蛙かな　蓼太　（蓼太句集）
亭の燈の水にうらく時かはづかな　同　（同）
もとの藺に疊も荒て蛙かな　同　（同）
傾城の物ほすかたや鳴かはづ　同　（同）
種室の夜〳〵にえる蛙かな　同　（同）
桐油嗅き駕に蛙を聞夜哉　几董　（井華集）

飛〳〵に芹の葉伸や鳴かはづ　同　（同）
啼蛙神もはじめて鳴ル夜かな　同　（同）
三日月の影踏濁すかはづ哉　同　（同）
酒星を見に出て蛙きく夜かな　白雄　（白雄句集）
瞬（マタタク）やあしたの小田のかはづども　同　（同）
はづ蛙水にはなかぬ夜聲なり　同　（同）
脱すてしみのにをかしき蛙かな　同　（同）
飛ちがふ蛙くらしや雨の噂　同　（同）
蓬生に身をうち付てなく蛙　曉臺　（曉臺句集）
箸にかはづの小腕おさへたり　同　（同）
果なしや今朝に成てもなく蛙　同　（同）
へしをれの河竹傳ふかはづ哉　同　（同）
月の夜や石に登りて啼蛙　闌更　（半化坊發句集）
山里や盥の中に鳴蛙　同　（同）
並び居て鍬にかゝるな田の蛙　同　（同）
腹動く蛙にうつる夕日かな　同　（同）
蛙啼田の水うごく月夜哉　同　（同）
夕雨や水田溢てとぶ蛙　同　（同）
山もとや蛙啼江も家の間　同　（同）
むし追て日南へ出たる蛙哉　同　（同）
今土を出てまじ〳〵と蛙かな　同　（同）
蛇は串にさゝれて啼蛙　同　（同）
浮しづむ夜のけしきを啼蛙　士朗　（枇杷園句集）
人もふえかはづもふへて山家哉　同　（同）
我からと藻屑の中に啼蛙　巣兆　（曾波可理）
かたむきに田螺も聞や初かわづ　同　（同）
蛙なくそばまであさる雀かな　成美　（成美家集）
蕗の雨おのが二月となく蛙　同　（同）
かはづ鳴里の雨夜も小百年　同　（同）
つるべにも一夜過ぎけりなく蛙　一茶　（享和句帖）
かりそめの嫁入月夜や啼蛙　同　（同）
蛙なくや始て寐たる人の家　同　（旅日記）
草陰にぶつくさぬかす蛙哉　同　（同）
影ぼうし我にとなりし蛙哉　同　（同）
我を見て苦い顔する蛙哉　同　（同）
花びらに舌打ちしたる蛙哉　同　（七番日記）
象潟や櫻を浴てなく蛙　同　（同）
なく蛙溝の菜の花咲にけり　同　（同）

夕ぐれに尻を並べてなく蛙　一茶（七番日記）
草蔭に蛙の妻もこもりけり　同（同）
夕空をにらみつめたる蛙哉　同（同）
むき／＼に蛙のいとこはとこ哉　同（同）
草の葉にかくれんぼする蛙哉　同（同）
いうぜんとして山を見る蛙哉　同（同）
疱瘡のさんだらぼしに蛙哉　同（同）
ことしや世がよいぞ小蛙大蛙　同（同）
痩蛙まけるな一茶是にあり　同（同）
火の粉迸ふ草のはづれや鳴く蛙　同（同）
大蛙から順々に坐どりけり　同（同）
庵崎や亀の子笊に鳴く蛙　同（同）
蛙鳴く／＼や狐の嫁が出た／＼と　同（一茶句帖）
鶺鴒の尻ではやすや鳴蛙　同（同）
叱つてもシヤア／＼として蛙かな　同（同）
親分と見えて上坐に鳴蛙　同（同）
おれとして白眼くらする蛙かな　同（同）
産さうな腹をかゝへて鳴蛙　同（同）
もとの坐について月見る蛙哉　同（同）
小蛙も鳴なり口をも／＼に連　同（同）
なむ／＼と蛙も石に並びけり　同（九番日記）
とや申なからとや又とぶ蛙　同（同）
高うはムリますれど木から蛙哉　同（同）
蕗の葉にとんで引くりかへる哉　同（同）
天文を考へ顔の蛙哉　同（同）
めい／＼に鳴き場を坐とる蛙哉　同（同）
傍杭に江戸を詠める蛙哉　同（一茶[illegible]集）
じつとして馬にかゞる蛙哉　同（同）
榎まで春めかせたり鳴蛙　同（発句題叢）
めでたさの煙揃えてなく蛙　同（一茶発句集）
玉川や先御先へととぶ蛙　同（同）
其聲でひとつ踊れよ鳴蛙　同（嘉永版発句集）
麻の種三粒持てもきく蛙　乙二（をのゝえ草稿）
のり喰に鼠は来るになく蛙　同（同）
ふむ苔の匂ふさうなり鳴かはづ　同（同）
立よれば松の月夜や鳴蛙　蒼虬（蒼虬翁発句集）
まだ聲も古葉の下の蛙かな　同（同）
松の根にひとつ聲よき蛙かな　同（同）

次第して啼や四隅の田の蛙　同（同）
布干せばまばゆき貝の蛙かな　梅室（梅室家集）
初かはづ麻の二葉にさし向ひ　同（同）
鴨の來る水筋たえて鳴蛙　同（同）
子を持て靜なものはかはづ哉　同（同）
樋口から落て息つく蛙かな　同（同）
井も桶も蓋して蛙聞夜かな　同（同）
限の雨をしぼり出しては鳴蛙　同（同）
そもそもといふ行義にて初かはづ　同（同）
鳴たてゝ鷺を歩ます蛙かな　同（同）
蛙なくや小雨ふる夜の月明り　魚淵（文車）
蛙鳴く曙寒し馬の上　臥雲（有誠）
萍のうく朝夕をなく蛙　月居（新十家）
池のある屋敷も多し鳴蛙　太無（太無句集）
我庵は田中ぞ四方に鳴蛙　水月（安政六百）
夜に入れば蛙ばかりの近江哉　和樂（[illegible]叢）
草の戸や晝も堅田の遠蛙　素樸（同）
菅守の燈細し鳴蛙　曲肱（類聚）
流木に尻幣寒き蛙哉　移竹（五車反故）
鼻かんでふと耳遠し鳴蛙　北元（[illegible]つひえ）
松山堀端
門しめに出て聞て居る蛙かな　子規（子規句集）
夜越えして麓に近き蛙かな　同（同）
[illegible]
蛙を愛す蛙露石を愛すかな　同（同）
[illegible]何れか勝せよといふ
鉋屑に蛙は勝と樂叢判　同（同）
[illegible]に題す
貫之の蛙芭蕉の蛙かな　同（同）
古沼や蛙が鳴けば鷺がとぶ　南竹（新俳句）
萬葉の講義聞く夜や鳴く蛙　三允（春夏秋冬）
夕蛙筍煮えてきたりけり　曉夢（同人）
燈に飛んで草家の蛙深みどり　秋灯（ホトトギス）
蛙鳴く月の田の面をさゞめかし　泊雲（同）
近くより鳴きはじめたる蛙かな　王城（同）
遠蛙星の空より聞えけり　花蓑（同）
山門の前の茶店や夕蛙　三千女（同）
濯水に流れつきたる蛙かな　相人（同）

蛙

提灯に道きゝはるゝ蛙かな　麥村（ホトトギス）
夜の園くわい〳〵と鳴く蛙かな　青邨（同）
その山にセロつかまつる蛙かな　烏頭子（同）
加藤洲の小學校や晝蛙　楳六（同）
子供等に夜が来れり遠蛙　青邨（續ホトトギス）
草に置て提灯ともす蛙かな　虚子（句集虚子）
だん〳〵と行く田の蛙聞え來る　同（續ホトトギス）

蝌蚪（くわと）

おたまじやくし　蛙の子（かへるのこ）　蛙子（かへるこ）　蛙生る（かへるうまる）　蝌蚪の紐（くわとのひも）　數珠子（じゆずこ）

[illegible]

【滑稽雜談】本草釋名に曰、活師山海、活東爾雅、玄魚古今注、懸針同、水仙子當名。○格物論に曰、蝌斗は蝦蟇の子也。形圓にして尾有り、雷震を聞けば、則ち尾脱して脚生ず。（略）和に生ずる蛙子、また所說のごとし。是を去らんときは、かの棗の如くなる物を、取りて捨つれば、蛙生せず。又北菊とて花咲かざる菊を灰となして灑げば、悉く滅する也。然れども、害なからんには、益なきにや。

季題解説

蛙は春水中に卵を生む　その卵は紐状に長くつながつてゐるのもあり、また單卵のものもある。十日許で孵化する。だん〳〵四足の形が出來て來、同時に尾が短かくなつて行き、とう〳〵取れてしまふ。蝌蚪の間は水の中だけに住んでゐるが、蛙となつて水陸兩棲となるのである。蛙の卵がすき透るどろ〳〵の粘膜につゝまれて、古池や水田などにどつさり塊つてゐるのは、季節の感じが深いとはいふものゝ、一見氣味悪いくらゐのものであるが、孵つてひよろ〳〵泳ぎ出したお玉杓子は、滑稽味を帶びて愛すべきである。しかしそれとても池や田が眞黒くなるほどになると少し凄い。〔春四〕蛙[illegible]

例句

蝌蚪

橋板や濡らし乾かす蝌蚪の水　たけし（ホトトギス）
友を食むおたまじやくしの腮かな　元（同）
喜べる様に泳ぎて蝌蚪一つ　としを（同）
佇むやさと打ち曇り蝌蚪の水　王城（同）
蝌蚪の池溢れんとして降りやまず　春野人（同）
蛙の子尾を震はして沈みけり　水鳴（同）
蝌蚪一つ落花を押して泳ぐあり　泊月（同）
蝌蚪生れて敵火の溝におよぐなり　誓子（同）
蝌蚪一つ鼻杭にあて休みをり　立子（同）
蝌蚪の池わたれば佛居給へり　秋櫻子（同）

流れ來て次の屯へ蝌蚪一つ　素十（同）
落椿一つ〳〵に蝌蚪の陣　鬼峰（同）
干枯らびしお玉杓子や地藏尊　只管（同）
足のびて蝌蚪にもあらずなりにけり　今夜（同）
見て居れば人も見に來る蝌蚪の水　三千女（同）
吸殼による蝌蚪のありまた一つ　夢香（續ホトトギス）
蝌蚪追うて流るゝ花と其影と　公孫子（同）
蝌蚪のためこの一枚の田はありぬ　卿人（同）
蝌蚪生れていまだ覺めざる彼岸かな　たかし（同）
天日のうつりて暗し蝌蚪の水　虛子（句集虛子）

櫻鯛（さくらだひ）　花見鯛（はなみだひ）

古書校註

【滑稽雜談】此の者鯛とばかり押用ひて季にならず。春陽を得て紅鰭赤賓色を增す。是櫻鯛と稱す。またさくら魚(一)などいへり。

【年浪草】本朝食鑑に曰、歌書に謂ふ、春三月櫻桃の花開きて、漁人多く之を採る。故に櫻鯛と曰ふ也。○六新行くはるの堺の浦の櫻鯛あかぬかたみにけふやひくらむ　爲家。

註（一）其註の說、或は誤か。櫻魚は別項にあるが、それと紛らはしい。なほ「日次紀事」三月の條下にも、「此の月西海に多く鯛魚を執る、是を櫻鯛と謂ふ」と見えてゐる。

季題解說　鯛の產卵期は、節分後八十日から百二十日頃までであると稱せられるが、この時分に鯛は鱗の紅色がますます鮮かとなり、肉は肥えて脂がのり、味はひ最も佳である。時節が丁度花時に當つてゐるので、俗にこの時分の鯛を櫻鯛または花見鯛といふのである。或はまた體色美しく櫻色であるから櫻鯛と呼ばれるのであるともいふ。鯛の漁獲では瀨戸內海は名高いが、鯛の見物としては房州鯛の浦のやうなところは他には珍らしいであらう。【[illegible]】魚島。

例句

櫻鯛

からし酢にふるは泪かさくら鯛　宗因（梅翁宗因發句集）
いかに見る人麿が眼には櫻鯛　同（同）
津國の何五兩せんさくら鯛　其角（五元集）
櫻鯛大宮人はかざさねど　也有（蘿葉集）
腸を牡丹と申せさくら鯛　几董（井華集）
內海の波濃かや櫻鯛　味嵐（同人）
水道の水のはげしさ櫻鯛　草城（ホトトギス）
再緣といへど目出度し櫻鯛　麻葉（同）
こま〴〵と白き齒並や櫻鯛　茅舍（同）
櫻鯛かなしき眼玉くはれけり　同（同）

食へば乃ち愈ゆ。

【季題解説】 體は長く偏長してゐる。一見まいわしに近い形をしてゐるが、まいわしは日本全國に産するのに反し、鰊は北日本だけにしかゐない。まいわしよりも形が大きくて、鰓骨に卵形の齒帶がない。體の上部は晴色であるが、側部及び下部は淡色である。春の彼岸頃から産卵のため沿岸に群來し、潮の穏やかな海邊の藻の中に卵を生み、終ると再び外海に去る。大體時期を定め、間隔をおいて群れ來るもので、これによつて走り鰊・中鰊・後鰊と稱せられる。その終りは八十八夜前後であるといふ。所謂鰊群來は物凄いほどの勢のもので、殆ど危害を顧みざるかのやうであり、漁獲容易で、忽ち海邊に鰊の山が築かれるといふくらゐである。にしんとは二親、即ちかずの子の親だからとか、また二身、即ち身を二つに分けて干されるからであるとかいふ話もあるが、覺束ない。割合に多量に産するので、貧乏人などに多く食はれる。近來鯡は北海道からだん／＼樺太の方へ移住してゆく傾向があると云ふ。

【[illegible]】 北海道釧路、十勝地方の海岸では秋鯡が取れる。春の鯡よりも形が小さく、食用にならず肥料になる。（參照）天文—鰊曇（春）夏—身缺鰊（ミガキニシン）

【例句】

鰊

拾ひためし畚の鰊や砂まみれ	泉々	（同人）
鰊漁濱の櫓の嵐かな	炎天	（[illegible]）
どんよりと利尻の富士や鰊群來（クキ）	誓子	（ホトトギス）
唐太の天ぞ垂れたり鰊群來	同	（同）
たゞよへる海髪（ウゴ）のひしめく鰊群來	同	（同）
女等のむすび食ひつゝ鰊負ふ	不倦堂	（同）
うろくづにまみれし馬車や鰊汲む	たけし	（同）
休校旗たてし學校鰊群來	迷人	（同）
鰊釜みがき据ゑたる海邊かな	同	（同）
八方に兼べる鱗や鰊汲む	甫意	（同）
時化あとの鰊拾ひの中にあり	默々子	（同）
鰊炊くけむりのなかの増毛灣	句雨	（續ホトトギス）
ぬかるみに頭刺したる落鰊	鶯虹	（同）
はねてゐる鰊の山の鰊かな	千代吉	（同）
膝つゝむ古き筵や鰊裂き	雨圃子	（同）
鰊割く代への刃をかたはらに	夢城	（同）

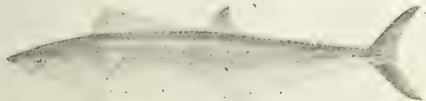
鰊馬車續々海に乘入るゝ　春洋　（續ホトトギス）

参考　にしん（Clupea pallasii Cuvier & Valenciennes）北海道・樺太方面に饒産する魚で、我國で漁獲される魚類中、産額では主位を占めるもので、殊に北海道では最も重要な魚である。一名カドと稱し、カドの子が轉じて數の子となつたと云ふ。北海道西岸で孵化した幼魚はその年は宗谷海峽・千島列島間を經て太平洋に出、南下して金華山沖に至り、第二年には、春季北上して、初夏の頃北海道の南岸に、夏鰊となつて來集し、秋から冬にかけては再び南下して金華山沖に至る。第三年の春には再び前と同じ道を通つて北上するが、秋季には金華山沖には行かないで、千島列島南を通つて、樺太東海岸の沖に出で、冬季にはこゝから南下し、大部分はオコック海で越冬するが一部分は宗谷海峽を通過し、北海道の西海岸に至り、終にこゝで産卵する。第四年オコック海を北上し夏をこゝで送る。その一部は樺太の東海岸に産卵のため赴くものゝやうである。大部分はこれに反して秋になれば南下し、遂に宗谷海峽に入る。第五年には前年にここに到着したものと共に春鰊となり、産卵のため、沿岸近くに來游する。産卵區域は朝鮮にまで及ぶ。夏になれば北上し、秋になれば南下して翌春の産卵の準備をする。第六年以降第十三年まで同じことを毎年くりかへすのである。但し、第七年以降著しく數量を減じ、十三年のものゝ如きは甚だ稀である。

鰆（さはら）　馬鮫魚（さはら）　狹腰（さごし）　いぬさはら　たいわんさはら　鰆網（さはらあみ）　鰆船（さはらぶね）

古書校註　【三才圖會】按ずるに、馬鮫魚は頭尖り眼大きく腮硬く鱗無く青色、背に青斑圓紋有り。又背文無きも之有り。肚白く背に硬刺あり。尾に岐有り。尾端に刺有りて、鱵大鱭鰣の如し。其の大なる者三尺許り、春月盛に出づ。故に俗、鰆の字を用ふ。形狹長し。故に狹腹・狹腰と稱するか。其の小さき者尺許り、色最も青く、並びに肉白くして甘溫、脂多く味厚美なり。膾・炙・膊・腌　皆佳し。

季題解説　體は細長く、大きいのは三尺餘に達する。脊は眞黄で蒼黑い斑點があり、腹は蒼白色である。齒は鋭くて疎生してゐる。主に東海西南海の外洋を群游し、水面高く六七尺も飛揚することがある。晩春産卵期になると内海港灣に入り來り、その頃多く漁獲せられるところから、文字も俗に鰆に作るのである。「さはら」は「狹腹」であつて、この魚の形狀から來てゐるといふ。

参考　さはら（Cybium niphonicus Cuvier & Vale

SCIENNES. 小なるを「さごし」と稱す。南日本の沿海に普通な魚で、冬期は深部に去るが、晩春には沿岸に來集して産卵する。大なるは體長一メートルに達し、重量六キログラムに及ぶ。體形は稍〻鰹に似てゐるが、これよりも細長い。體色は背部藍黑色で綠色の金屬光澤がある。體側に蒼黑色の斑點が七縱列に並んでゐる。側線に多數の分枝がある。

いぬさはら、うしさはら Cybium chinense Cuvier & Valenciennes. 體長二メートル體量百十キログラムに達するが、脂肪多く、不味である。側線に分枝がなく、體側中央部に二列の斑點がある。主として南日本に産するが沿岸近くに來游しない。

たいわんさはら Cybium guttatum Cuvier & Valenciennes. 臺灣の南部西海岸から印度洋・濠洲方面に分布して居り、普通の鰆に似てゐるが、舌上に齒があること等の點で區別される。

鱵（さより）

【[illegible]】 針嘴魚（さより）　竹魚（さより）　細魚（さより）　水針魚（さより）　針魚（はりを）　さいより（前越）　長（なが）いわし（薩摩）

【[illegible]】 【三才圖會】 針口魚、口針に似て頭に紅點あり。腹の兩旁、頭より尾に至り白路有りて銀色の如し。身長く、尾に岐あり。長さ三四寸、二月の間、海中より出づ。

【[illegible]】 形は大體鰆に似て長さ一尺許り、背は青綠、腹は銀白、體側に太い蒼色の縱線が走つてゐる。鱗細かく體闊く、頭小さく眼が大きい。上喙短く尖つて劍のやうである。我が國では西海南海に多く、東北海に至るに從つて少ない。針魚の名はその形狀から來てゐる。上等な魚として賞味せられてゐるが、膾にするのを最も佳といはれる。

【[illegible]】 鱵

五 六 匹 厨 に 光 る 鱵 か な　　草　駄（同　　人）

汐先に見えはじめたる鱵かな　　耿　陽（續ホトトギス）

たえ〴〵に鱵つゞける波間かな　　同　　（同　　）

【[illegible]】 さより細魚 Hyporhamphus sajori (Temminck & Schlegel). 北海道から九州・朝鮮まで廣く分布する沿岸魚。六月頃海岸近くに來集して海藻其他に卵を産みつける。體は細長く下顎甚だしく突出してゐる。背鰭は遙に後方に位する。背面は青綠色であるが下面は白く、側面に濃青色の縱線がある。肉白く味淡白である。游泳は活潑ではないが、敵に追はれると、水面上に數回連續的に跳躍する。

子持鯊（こもちはぜ）

【[illegible]】 好んで河口や潟にゐる鯊も、冬になるとだん〳〵海中に出て、やゝ深みの靜穩な所で靜養して卵の成熟を待つ。二三月頃になれば卵は充分

成熟する。黙りきつた銀色の腹壁を透して黄金色の卵が窺はれ得るやうになる。この頃のものを子持鯊と云つて賞味する。又、群集してゐるため、よいアジロに中れば餘程澤山釣れることがある。當に寒の明ける時分、陽氣が暖くなり、河水も亦自ら海水より温くなつて來ると、再び海岸或は河口に近く移つて來て、アマモ等の柔軟な藻に放卵した後、その大半は斃れるのである。〔同上〕秋・鯊

鯥（むつ）　鯥五郎（むつごらう）　鯥掘る（むつほる）　鯥掛け（むつかけ）　鯥曳網（むつひきあみ）　鯥袋網（むつふくろあみ）

季題解説　鯊科に屬し、體は圓筒狀で微小な鱗をもつてゐる。目の位置高く且つ突出してをり、兩眼接近して下眼瞼が發達してゐるので容易に目を蔽ふことが出來る。體色、背部は青褐色で白色の斑點が密布し、腹部は淡色である。體長はトビハゼよりも遙に大きく、六七寸に達する。五月中旬から六月中旬に亙り、潟地下五尺位の穴の中に産卵し、體長一寸くらゐに成長して地上に匍ひ出す。晩春から初夏にかけて活動し、十一月頃から翌年三月頃迄は地下五尺位の所に冬眠する。捕魚の方法に掘り取り、掛け釣り・曳網・袋網があり、何れも佳味が多い。大牟田・佐賀間の沿岸泥海の淡鹹相交はる淺海に棲息し、有明海特産と稱せられるが、朝鮮及び支那の一部にも分布するといふ。腹鰭を以て砂泥及び海底を匍匐し、揚げ舟などに登ることがある。木に登る魚としての名ある所以で、日に透すと紫に見ゆる。潮先が來ると蛙のやうに跳躍し、水に入れば敏捷に游ぐ。干潟となつて匍つてゐるところは鷹揚に見ゆるけれども、極めて敏感であつて、人が近づくのを知ると潟深く潛つてしまつて容易に捕へることが出來ない。五六間の距離を隔てゝ匍匐してゐるのを、徑五分長さ三寸くらゐの傘の轆轤のやうに尖つた特殊の掛け針を用ひて引つ搔く。これをよくするには五年乃至十年の修練を要するといふことである。肉は美味で蒲燒き味噌汁等によろしく、産地に近い山間部では、不時の客にもてなすために活けて置く。明治大帝の御賞美あらせられたことはよく世人の知るところで、近くは秩父宮殿下陸大生として九州路へ御假泊の砌り、御食膳に上したところ、殊の外愛でさせられたと承る。

例句　鯥

むつ飛ぶや沖にかゝるは鮪船　　泥古（ホトトギス）

潮先におのおの匍へる鯥五郎　　眉下（ホトトギス誌）

鮊子（いかなご）　玉筋魚　かますご　こうなぎ　たいわん鮊子　しわ鮊子　鮊
子醤油

古書校註

【三才圖會】　玉筋魚　俗に以加奈古と云ひ、又加末須古と名づく。（略）其の大さ一二寸、鱗無く、白色にして背微に青し。梭子魚の形に似たり。然れども本より是別種にして、春の末腹に子有り。凡そ春分の時、攝州一の谷に始めて多く之を取る。

季題解説

多く西南海に産する近海魚である。體細長く四五寸、長い脊鰭を有し、微細な鱗を被つてゐる。色は蒼白く銀色を帶び、腹部がやゝ淡い。稚魚は白色である。春の産卵期になると群をなして淺海に來、砂の中に潛み棲む。脂肪が強いので煮て油を取り、所謂鮊子醤油をつくる。いかな子といふのは「如何なる子」のことろであつて、何魚の子とも知れぬといふところから來てゐる名であるとかいふ。畿内でこれを「かますご」といふのは、形が梭魚に似てゐるので、その幼魚と誤認してゐるのださうである。

例句

鮊子　いかなごに鳥がつきぬいざ舟よ　　天高（同人）

参考

いかなご　Ammodytes personatus (Girard). 各地の沿岸に産する、細長き魚。體長二〇センチに達する。體は、その形錐の如く、色も概ね銀白色であるが、背面は淡青褐色を呈してゐる。口吻尖り、下顎突出す。次の如き近似種がある。

たいわんいかなご　Embolichthys mitsukurii (Jordan & Evermann). 鹿兒島から臺灣まで分布し、腹鰭がある。

しわいかなご　Hypoptychus dybowski Steindachner. 北日本に産する。腹鰭がなく、背鰭と臀鰭とが對してゐる。

白魚（しらうを）　しらを　しろを　膾殘魚　玉餘魚　銀魚　白魚網　白魚舟
白魚𩸽　白魚汁

古書校註

【三才圖會】　膾殘白、玉餘魚、銀魚、俗に白魚と云ふ。（略）江海の交（二）に生ず。伊勢・志摩・參河・肥後・備前多く出づ。攝・播も亦之有り。凡そ立春の初めに出づ。人之を賞す。二三月腹に子有り、味稍々劣れり。生は青色を帶び、水を離るれば則ち白し。之を煮れば則ち徭々潔白なり。頭尾尖

りて身肩く、骨有り。皮骨無く、煮て食へば軟かにして甘美なり。上膳(二)に供す。或は竹串を以て眼を貫き連ねて曝乾して鱠に作る。俗に目佐之と云ふ。一種に氷魚有り。

【滑稽雑談】此ものの諸國に産多し。然れ共、尾張名古屋より出づるものを上品とす。東海にも昔はなかりしを、當將軍家に至りて、名古屋より魚苗を取りて、武州品川表の内海に入れさせ給うて、當代は江戸の海にも白魚産すといへり。

【東都歳事記】白魚、淺草川の名物なり。初春海にあり。二月より川へ入る。二三月頃子を砂石の間に生む。その子秋にいたり下流し、江海に入りて生長すといふ。

注　(一)目ざしにせうとするところ。(二)上等な食物。

季題解説　長さ二三寸の近海魚で、全國の沿岸多少は皆これを産する。體は長く延び、尾部は頭部よりも濶い。吻尖り口濶く、下顎は上顎よりもやゝ突出してゐる。頭部は扁平で圓錐形をなしてゐる。鱗は一見ないやうであるが、背部後方にのみ少しあつて剝離し易い。體色は透明、銀白色で微青色を帯び、透かせば腸を見ることが出來る。眼のほとりに銀色の輪をもつてゐるものがあるが、これを俗に銀星と稱して珍重する。白魚は味が極めて輕く上品であり、姿が美しくあはれなので、早春の膳に上せて最も愛好せられる。春、産卵のために群つて河に上り、蘆荻の間に放卵する。これを漁するには四つ手網・刺網などを用ひる。篝火燃ゆる佃島の白魚網は、江戸名所圖繪などでわれわれの眼にも親しみ深いものであるが、だんだん昔のことになつてしまつた。漣立つた早春の霞ケ浦あたりに、帆をつらねた白魚船なども趣が深い。三河豐川の河口前芝地方に産するものも昔から有名である。【參考】冬—白魚初漁の項

例句

白魚・藻にすだく白魚やとらば消ぬべき　芭蕉（東日記）
白魚に價あるこそ恨なれ　同（をだまき）
明ぼのやしら魚白きこと一寸　同（笈日記）
鮎の子の白魚送る別かな　同（伊達衣）
白魚や黒き目を明く法の網　同（韻塞）
しら魚や目まで白魚目は黒魚　鬼貫（鬼貫句選）
白魚やさながらうごく水の色　來山（續いま宮艸）
白魚や海苔は下邊の買合せ　其角（五元集）
白魚や漁翁が前にはあひながら　同（同）
白魚の色かはるもの川げしき　同（五元集拾遺）
白魚やきよきにつけてなまぐさき　太祇（太祇句選）
白魚に餘寒の海やいせ尾張　召波（春泥発句集）
しらうをゝめづるや老のうん呑に　同（同）

しら魚やつきまとはるゝ海の塵　同（同）
青海苔にさく白魚のさかり哉　也有（蘿葉集）
白魚やそれとしる火の凄からず　蓼太（蓼太句集）
しら魚や波わけのぼる友ぢから　同（同）
白魚やさぞな都は寒の水　几董（井華集）
美しや春は白魚かいわり菜　白雄（白雄句集）
しら魚やうき世の闇に目をひらき　曉臺（曉臺句集）
しらうをの骨身を洩すかゞり哉　同（同）
隣同志白魚買ん夕月夜　巣兆（曾波可理）
しら魚やしらぬ葉に盛舟の上　同（同）
しら魚はお僧すこしはまゐられよ　成美（成美家集）
一泊りまづ白魚の馳走かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
百錢の白魚消るばかりなり　梅室（梅室家集）
白魚の眼にも見ゆる歟不二筑波　同（同）
白魚や初雪程のもらひもの　古由（月影塚）
白魚やいさゝかくもる薄氷　湘雨（三千化）
白魚や塵撰る男口おもし　又翁（反故集）
白魚の白き匂ひや杉の箸　之道（炭俵）
ふるひよせて白魚崩れんばかりなり　漱石（春夏秋冬）
白魚や蘭を描ける黒地椀　青々（妻木）
河口に白魚波むや沖津浪　指月城（ホトトギス）
白魚にからみて細き藻屑かな　王城（同）
抄ひ網桶にたゝいて白魚取　公羽（同）
腰蓑に水玉走る白魚とり　右衛門（同）
はらわたのありてめでたき白魚かな　耿陽（同）
水迅く生簀の白魚廻り居る　清三郎（同）
白魚船もどり來りし焚火かな　雨意（續ホトトギス）
白魚汲むはなはだ長き柄杓かな　巽（同）
うす／＼と藍の走れる白魚かな　孚水（同）
外海は荒れてゐるなり白魚とり　播水（同）
白魚網かたみに揚りせはしなや　同（同）
白魚の漁火となん雪の中　花蓑（同）
鰯網に沖藻と交じる白魚かな　虚子（句集虚子）

〔參考〕　白魚 Salangichthys microdon（BLEEKER）半鹹水に好んで棲む。その腦も發達甚だ低く、腎臟も未發達の狀態のまゝに殘つてゐる。筋肉は生きてゐる時は殆ど透明であるが、死ぬと白色となる。その纖維も甚だ原始的である。我國の白魚は凡て一種に屬すといふ人もあり、之を數種に分つべしと主張する人もあるが、こゝには一種としておく。

る。産卵期の外は群居することがない。肉は赤く、脂肪に富み、うまい。殊に春が美味である。

【例句】

夕川や鱒にうたれし簗の蜂　　闌更（半化坊發句集）

【參考】 鱒類については本邦の魚學者間に分類上の意見一致せざるを以て、假に次の分類を採用して置く。

ほんます、さくらます Oncorhynchus masou (Brevoort) 日本海・北海道・三陸地方に多産す。孵化後約一ケ年間河川に滯留して後海に下る。滿三年で成熟し、河川を遡つて産卵する。但し、一生、海に下らざるものがある。

べにます Oncorhynchus nerka (Walbaum) 鮭に甚だよく似てゐるが、肉が深紅色、躰は鮭よりも細長く、鱗が大きい。千島に多産し、現今、カムチヤツカ方面では、殆どこれだけを捕へて罐詰として輸出する。

ますのすけ Oncorhynchus tschawytscha (Walbaum). 鮭鱒中の最大種、本邦では樺太・千島で漁獲される。最大のは躰一メートル半、重量六〇キログラムに達す。

諸子魚（もろこ）

諸子（もろこ）　諸子鮠（もろこはえ）　初諸子（はつもろこ）

【古書校註】【篗纑輪】 諸子魚。湖水の小魚也。長さ三寸を限とす。鱗に光ありて美魚也。其の味、脂多し。湖水佳品の內也。江西坂本に、もろこ川と云ふ有り。此の魚尤も多し。故に名とす。大和本草に云、西州にもろこあり、油身魚と云ふと記せり。あぶらめは其の鱗鰱の尾に似て、鰱魚といへり。大さ七八寸、其の味甚だ佳品也とぞ。是もろことは大いに異也。大和本草の說かなはず。又もろこは黃鯝魚なるべしなどいへり。是もたがへり。黃鯝魚はわたこ也。江州の俗わたかと云ふ。大なるもの七八寸、是も湖水に甚だ多し。もろこは三寸にみたず、大小なし。又柳もろこと云ふ一種有り。活法の書に、柳葉魚と出せるもの是なるべし。形もろこに少しもたがはずして、背黑く腹に黑筋ありて、柳の葉の如し。凡そ此のもの湖水に多く有りて、早春子みつること他魚にすぐれて、腹すこしもあることなし。依て染子なり。此の魚おそらくは他州に有るべからず、江湖の産魚なり。

【季題解說】 鮠の一種たる淡水産の小魚である。體はやゝ長く、僅に側扁し、柳もろことか、柳葉魚とかの稱あるくらゐで、形が丁度柳の葉に似てゐる。體の上部は暗灰色、下方は白色、淡い鉛青色の一縱帶が體の側面を走つてゐる。體長二三寸。琵琶湖の諸子魚は一番美味であると稱せられる。ほんもろこが此處から多く産出せられる。江州坂本にはこの魚が最も多いといふので、もろこ川といふ川さへある。もろことといふ名は卵が多いからであ

るといふことである。鮒やたなごなどと共に、子供たちと最も親しい雑魚の一つである。〔參照〕黄鯛魚

〔例句〕

諸子魚

一雨の濁りさし來ぬ初諸子　青茅（同人）

うたかたをあげてかたまる諸子かな　梧洛（ホトトギス）

葭の芽をめぐり遊べる諸子かな　生紅郎（同）

初諸子魚分けて少くなりにけり　平陽（續ホトトギス）

〔參考〕 もろこ、諸子（Gnathopogon mayedae (JORDAN & SNYDER).
南日本の河川に産し、殊に琵琶湖に多い。細長い魚で、口に短い鬚がある。躰は背面暗灰色を呈し腹面白色、側面には淡蒼白色の縱條が走つてゐる。

公魚（わかさぎ）

鰙（わかさぎ）　鮹（わかさぎ）　若鷺（わかさぎ）　櫻魚（さくらうを）　ちか（東北地方）　あまさぎ（山陰）　雀魚（すずめうを）（岐阜）

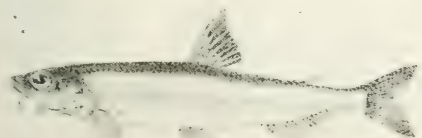
〔古書校註〕

【篗纑輪】櫻川の謳に、さくら魚ときくもなつかしやと作れるを考ふるに、常陸國櫻川、霞が浦の邊りには、かく名ある魚のあらんとおぼえて、予（一）先年筑波登山して、彼の邊一見せし時、好事のものに尋ねはべるに、答へて云、いかにもこの國にて、むかしより櫻魚といひつたへたる魚あり。春暖をえて此の河へ多くのぼるを、網をもてすくひとる。則ちこの浦の名産、若さぎと云ふ魚是也。

【年浪草】本朝食鑑に、鮠の集解に曰、江東別に若鷺と云ふ者有り。相似て一種に非ず。美賞す。云々。是櫻魚なり。常陸國櫻川・霞が浦邊、春暖の節此の河へ多く上ると、千梅が篗纑輪にもいへり。予（二）年々の春、常州の人より櫻魚を送る。其形狀白魚に似て又異なり。

【栞草】〔運歩色葉〕國栖の註に、又鼓司、吉野の人の名なり。吉野の櫻落ちて水にいり、魚となるゆゑに、櫻魚といふとみえたれば、活法の書、これらに因みて出すか。

註 （一）千梅。篗纑輪の著者。（二）篭文。年浪草の著者。

〔季題解說〕 體長二・三寸くらゐ、形は稍〻長く、小鮎に似てゐる。色は青みを帶び、側部に銀色の縱線が通つてゐる。霞ケ浦では漁獲が非常に多い。春先、風の強い日に、白帆を並べて横ざまに走つてゐる漁舟を澤山に見るが、それは帆曳きといふ公魚を捕る網舟である。霞ケ浦の公魚の禁漁は、一月二十日から二月二十日迄で、帆曳きは四月一日から七月二十日迄禁じられてゐる。春淺い頃、湖岸の漁家を訪れる

と、庭一杯に筵干にした公魚を摑んで來て、お茶受に出されるのに遭遇することがある。漁家は玉造町・牛渡村などに多い。公魚は主に煮干にされて市場に出る。美味である。

【參考】わかさぎ、公魚 Hypomesus olidus (PALLAS). 背鰭の後方に脂鰭を有すること、產卵期に河川を遡ること、稚魚が海で育つこと等鮭鱒類と甚だ似てゐるが、胃の構造が甚しく異なるため、別科に入れてある。體色は背面淡蒼色、腹面白色、體長は一五センチに達す。三月頃產卵する。本邦の河川、湖沼に普通であるが、海との往復不可能な湖沼にも移植され、大いに蕃殖してゐる。

櫻鯎（さくらうぐひ）　櫻石斑魚（さくらうぐひ）

【古書校註】

【篗纑輪】正字未だ詳かならず。鯎の字を用ひ來れる俗字也とぞ。この魚處々に有り。先づ江湖に多し。五六寸より、大なるもの七八寸、背黑く腹鰭赤し。信州諏訪の湖水にて赤魚といひ、箱根にて赤腹と云ふ。其の外處處にありて、春花さきちるころ取るものを、櫻うぐひといふなり。

【滑稽雜談】是和に云ふます也。正月の節會に奏する腹赤の贄も、此の鱒の魚なり。又一種、俗に川鱒と稱する者、鯇（ウグヒ）と云ふ者也。其の形鱒におなじ。鱒より小くして味薄し。櫻鯇といふ。其の赤章鱒より薄く、櫻色の如し。依りて名附く。是も春に用ふ。鯇是也。

【年浪草】本朝食鑑に曰、鯎（ウグヒ）、美と訓ず。或は美古比と曰ふ。又赤腹と稱す。狀佐比に似て鱗細かに頭小く、腹嘴倶に赤く、肉に細刺あり。味ひ淺く美ならず。此泥味有り。常に山川湖澤の間に在り。今、箱根の關邊の山店、山女の炙を販ぐ。云々。是山女魚に非ず。赤腹と稱する者にして卽ち鯎也。

【季題解說】鯎は石斑魚とも書き、全國到るところの河川湖沼に棲んでゐる。體狹長圓錐狀で、大きいのは一尺餘りにも達する。背は黑く腹は白く、側腹に淡紅暗色の一線が走つてをる。あまり美味な魚ではないが、群居して游いでゐる樣は綺麗である。春上流に遡つて蘆荻の間などに產卵するが、その時分には腹の色が殊に美しい鮮紅色になるので、櫻時または櫻のやうに美しい色の意味で、春の鯎を櫻鯎といふのである。

【參考】うぐひ Leuciscus hakonensis GÜNTHER. の雄が、春の生殖時期に、鮮紅色を帶ぶるを以て、櫻うぐひと云ふ。うぐひは秋冬の頃には河川を下つて海水と河水との混合する半鹹水中に棲み、翌春再び川を上るのが普通である。體は鮒に類してゐるが、これよりも長く、上顎は下顎よりも突出してゐる。鮎にも稍ゝ似てゐるので、奸商が、鮎と稱して賣ることがある。あかはら・あかうを等の名もあり、大なるものは、まるたと稱せられることもある。因に學名は、普通 L. hakonensis と書かれてゐるが、

これは明に命名者の誤記であるとの判定から、前記のやうに書かれるやうになつた。種名の意は、「箱根産」である。箱根のみならず、本邦の河川・湖沼に廣く分布してゐる。

柳鮠（やなぎはえ）　鮠（はえ）　はや

古書校註

【栞草】春夏多く出で、其の大さ二三寸、水中を行くこと至つて速し、故にはえと名づく。其の柳の葉に似たるものを、柳鮠と云ふなり。

季題解説　大きさ三四寸くらゐの淡水産の小魚である。泳ぐことが極めて迅いのではやとも云はれる。柳鮠といふ名は、形が柳の葉に酷似してゐるところから來てゐる。諸子魚（モロコ）などと同類で、形は鮎に似て小さい、鱗が荒く、色白く、背は薄黒くて青みがあるが、雄魚は産卵期になると紅色が現はれる。

例句

柳鮠

春の水に秋の木葉を柳鮠　嵐雪（玄峰集）
鮠つるやゆらぐ筏を踏みわたり　素十（ホトトギス）
柳鮠蛇籠になづみはじめけり　秋櫻子（同）
水門に少年の日の柳鮠　茅舍（同）
柳鮠さばしる水をかちわたる　風生（同）

初鮒（はつぶな）

古書校註

【滑稽雜談】冬月より賞すといへども、稍湖水の産は春に至つて出づる也。古來は初鮒・鱒鰌ばかりを春として、鱒とばかりは許用せず。當世作意工夫あるべき事也　此の者所在多しといへども、江州湖水のもの第一也、就中その大なる者源五郎鮒と稱す。傳へ云ふ、古へ湖邊の漁人、源五郎と云ふ聟を持ちて秘藏の餘り、此の漁人獵に出で、網裏に雜魚と、なるを得ては、聟の源五郎へ相送りける。故に其の大なる物を呼びて、源五郎鮒と稱する也。此の者、古歌によめる名所多し　近江にては堅田鮒とよめり

【年浪草】早春初めて漁人之を得て市に賣る。之を初鮒と謂ふ。

季題解説　早春初めて漁獲して市に出される鮒をいふ。【參照】夏　源五郎鮒（ゲンゴロウブナ）　濁り鮒（ニゴリブナ）　冬　寒鮒（カンブナ）

小鮎（こあゆ）　若鮎（わかあゆ）　鮎の子（あゆのこ）

古書校註

【御傘】夏也。若鮎は春也、さび鮎。おち鮎は秋也。鮎の子は春也、干鮎・鮎の鮨等は雜なり。

【滑稽雜談】崔禹錫が食經に曰、鮎、貌鱒（ウナチ）に似て小、白皮有り、鱗無し。

春生じ、夏長じ、秋衰へ、冬死す。故に年魚と名づくる也。（略）夏長ずるを正とし、鮎とばかりは夏也。小鮎・汲鮎・若鮎は春也。此の者春生じて水を泝る者なれば、のぼり鮎も春也

【三才圖會】 鰷に二三月初めて生ず。江海の交に在り。大さ一二寸、未だ鱗骨を生ぜず、潔白にして惟黒眼を見るのみ。呼んで小鰷と曰ふ。

季題解説 鮎の産卵期は十月頃で、稚魚は出水に隨つて海に下り、翌年春川を遡つてその年に産卵する。産卵するとひどく衰へ、流れを下つて海に落ちたり、時には斃死してしまひ、深淵に止まつて越年するものは極めて稀であると稱せられる。年魚の名ある所以である。小鮎といふは、その三四月頃川を遡る二寸位の鮎を云ふのである　鮎といふ魚は元來上品できやしやな感じのものであるが、それが若鮎となると、一層優にやさしく、纖細な趣が深いものである。〔参照〕人事　鮎汲　夏　鮎

例句

小鮎

わか鮎や谷の小笹も一葉行　蕪村（新五子稿）
挑灯で若鮎を賣る光かな　太祇（太祇句選）
若鮎や水さへあれば岩の肩　同（同）
鶯に似ぬ足を小鮎の笑ひけり　也有（蘿葉集）
蓼はまだつぼな穗に出て小鮎鮓　同（同）
鮎々と折敷に見せる小鮎哉　召波（春泥發句集）
若鮎の鰭ふりのぼる朝日かな　蓼太（蓼太句集）
若鮎の小太刀遣ふて逃にけり　同（同）
水かへば駒のひま行小鮎かな　同（同）
花の散る拍子に急ぐ小鮎哉　一茶（七番日記）
わか鮎は西へ落花は東へ　同（同）
笹陰を空頼みなる小鮎哉　同（同）
わか鮎やとらるゝ穴を逃所　同（同）
若鮎や川瀨に雨の降がごと　貝錦（新選）
よく見れば小鮎走るや水の底　吟江（推蔵日記）

石手川出合渡

若鮎の二手になりて上りけり　子規（子規句集）
玉川や小鮎たばしる晒し布　同（同）
鮎いまだ上らずといひぬ多摩の里　同（同）
小鮎釣る橋より上の渡りかな　同（同）
錯落の岩わたり來ぬ小鮎つり　蒼玉子（ホトトギス）

獺魚を祭る

季題解説 〔季題〕時候　獺魚を祭る　カハウソウヲマツル

【例句】獺魚を祭る
獺の祭見て來よ瀬田のおく　芭蕉（花摘）
獺の祭すむとき雨はるゝ　花叟（新俳句）

魚氷に上る（うをひにのぼる）

【季題解説】【參照】時候ー魚氷に上る（ウヲヒニノボル）

螢烏賊（ほたるいか）　まついか

【季題解説】所謂頭足類十腕目に屬する軟體動物であること烏賊と同じ。唯特徴としてその胴・頭・腕・總べて腹面に小發光器を鏤め、腹面の尖端には三個の大發光器を有し、强烈な光を發する。眼球の周圍にも亦數個の發光器がある。産卵は春である。我が國の沿海、殊に富山灣・相模灣はその好漁地である。就中富山灣滑川町附近が名高く、その産卵期になると、夜の海上一面に、丁度豆電氣を撒布したやうに明滅頗る美觀であるといふ。食料の外肥料にも供せられる。【參照】花烏賊（イカ）　夏　烏賊（カイ）

【例句】螢烏賊
螢烏賊つぎ〳〵櫂にもつれつゝ　迷人（ホトトギス）

花烏賊（はないか）　櫻烏賊（さくらいか）　こういか　しりやけいか

【季題解説】その名の如く、櫻咲く頃の烏賊を云ふのである。烏賊は軟體動物中頭足類十腕目に屬し、囊狀の胴と、十觸手と、厚い菱形の甲羅とを有する。胴の長さ幅共に三寸餘、その左右兩側に狹い鰭がある。頭部は比較的大きい。十觸手の中二本は長い。體の背面は一樣に暗黑色で、腕の突端は美しく紅色を帶びてゐる。腹面中央に深い溝がある。體中に烏賊の墨といふ黑い液汁を含み、外敵に襲はれる時はこれを吐きちらし、身を晦まして逃げる。肉は生食または煮食し、乾して鯣に製する。【參照】螢烏賊（ホタルイカ）　夏ー烏賊（カイ）

【例句】花烏賊
ひだるさに酒が利くなり櫻烏賊　甲龍（同人）

【參考】花烏賊　春の産卵期に沿岸近く來て捕へられる烏賊を總稱するもので、動物學上ハナイカ Metasepia tullbergi（APPELLÖF）を指すのではない。このイカは本州から九州へかけて、內灣の沿岸に産し、腕の先端紅く、胴はきんちやく狀で、甚だ美味であるが、産額は多くない。春の産卵期に沿岸近く來るものは通常次の種類である。
こういか Sepia esculenta HOYLE. 東京附近で「まいか」と稱せられるもので、本州・四國・九州に廣く分布する。春沿岸に來て、竹しび其他のものに卵を産みつける。胴の形はスリッパー狀である。舟形の甲を有し

てゐる。產額甚だ大である。
しりやけいか Sepiella maindroni DE ROCHEBRUNE. 胴の末端には、黃・赤の彩色があつて、恰も發火してゐるやうなのでこの名がある。南日本に普通。新鮮のまゝ又は甲附鯣として賣られる。

飯蛸(いひだこ) 望潮魚(いひだこ)

古書校註

【滑稽雜談】 閩書に曰、鱆魚、一名望潮魚、紫色、腹圓くして頭無し。頭は腹の下に在り。足多くして長し 皆口の上に環れり。圓き交有り。星の如く聯り凸に起る。腹内に白き粒有り。大麥の如し。味美なり。〇大和本草に云、鱆魚は飯蛸也。

【三才圖會】 按ずるに望潮魚、章魚に類して小く、凡そ五六寸許り、其の頭鳥卵の如し。頭中は白肉に滿つ。煮て食ふ。其の肉の粒々、蒸飯の如く、味も亦然り。故に飯蛸と名づく。足も亦軟かにして美なり。正二月盛に出づ。播州高砂の產は頭中の飯多し。攝・泉の產は飯無き者亦相半ばす。季春に至り、則ち魚瘦せて飯無し。余月は全く無し。東北海には亦曾て之無し。之を取るに紫螺貝を繫ぎて之を投ずれば、則ち久しくして鱆貝に入る。此の鱆にも亦頭と股との中間に萬鵶の如き者之有り。

季題解說 軟體動物の頭足類八腕目に屬する。身長は腕を加へて六七寸許、頭・胴・脚共に背面に鮫肌を呈し、等大の圓い疣狀突起を密生してゐる。また眼の周圍には數個の肉刺あり、體色變化が多い。しかし通例灰紫色で、眼の前方に一個の大きな圓い黃金色の眼點がある。腕は略々等長で、頭胴の長さの二倍餘に當り、二列の吸盤を備へてゐる。雄の第三右腕は交接器である。主として內海の砂泥の中に棲息し、體軀を穴の中に沒し、口を上に脚を四方に擴げて潛伏し、浮游して來る小魚小蝦等を捕へて食ふ。二三月頃產卵する。卵は白色小粒で飯粒に似て居る。その名のある所以である。食用に供して珍重せられる。播州高砂の產は殊に飯が多いと稱せられてゐる。

例句

飯蛸

飯蛸のあはれやあれではてるげな　來山　(いまみや艸)
飯蛸のをのれ足くふ河內哉　沾德　(俳諧五子稿)
　老てもはるは嬉しく
飯蛸の飯より多し遊ぶ事　乙二　(をのゝえ草稿)

參考 いひだこ Polypus fangsiao (D' ORBIGNY) 本邦及び支那の、淺海・內灣等の砂泥地に棲み、胴及び腕を合して僅に二〇センチに過ぎぬ小形の章魚。卵が米粒に似てゐるので、この名がある。之を捕へるには釣るか、小形の蛸壺・あかにし等の空殼を海底に下し、この中に潛入するのを待つて引き上げて行ふ。

寄居蟲（やどかり）

がうな　きしやごのおばけ　かみな　サムエル寄居蟲（やどかり）　おに寄居蟲（やどかり）　をか寄居蟲（やどかり）

古書校註

【滑稽雑談】和訓義解に云、加美奈とは加備美奈也、貌蟹に似て蝸の殻にやどる物也　又借蝸の略語也。（俗にやどかりと稱するも也、これらの心也。）此の産、勢州或は土州などに出づ。蝸に限らず、他の螺殻を負ふ者侍る。寄居の名尤も也

【年浪草】三才圖會に曰、按ずるに即ち文蛤・鳥蛤等の殻間に寓生す。形小蟹に似て白色、碁石より小なり。身柔軟なり。蓋し寄生木と相類す。春曙抄に云、ちひさき貝の中にやどりすむ虫也。（長明方丈記に云、がうなは、ちひさき貝をこのむといふ、是なり。

季題解説

蝦と蟹との中間の形をなしてゐる。即ち頭は蝦の如く、螯（はさみ）は蟹に似てをり、蜘のやうな足に爪があり、巻貝に宿を借つて海濱に棲み、いそぎんちやくと共棲する。自分の體が生長するに從ひ、他の大きな貝を求めて住み替へ、これを負ふて速かに走る。【季題】冬　鱈場蟹（たらばがに）

例句

寄居蟲

水盤の底掻いてゐる寄居蟲かな　豐馬（同人）
潮引きて漂ひ走る寄居蟲かな　博亮（ホトトギス）
流れつゝよろめき歩む寄居蟲かな　凡秋（同）
觸合うて相とゞまれる寄居蟲かな　耿陽（同）
又一つがうなとなりて歩きけり　芳子（ホトトギス）
あばらやをひきずつてゆく寄居蟲かな　白汀（同）
いそぎんちやく寄居蟲を抱きてをりにけり　柳浦（同）

参考

がうな、東京附近では、おばけとも云ひ、藝州では、はひでことと云ふ。今は、やどかりの名が廣く用ひられてゐるが、古語の「がうな」をそのまゝ用ひてゐる地方もある。海中に棲むものもあり、陸上に生活するものもあるが、幼蟲時代は、いづれも海中に浮游してゐる。即ち陸棲のやどかりも、卵が孵化する頃になれば海へ下り、海中へ幼蟲を放つのである。最初の幼蟲は、ゾエアと云ひ、他の蝦や蟹の同期の幼蟲と、甚だよく似てゐるが、このゾエア期には數期があつて、次第に、その大きさを増して行く。次にグラウコトエ期に達するに及んで、がうな特有の形態に近くなり、大抵は腹部が螺旋狀に屈曲する。但し蝦のやうな腹を、成體となつた後も、有してゐるものもある。がうなの棲む貝は種々雜多で一定してゐない。自分の體に適合する空殼ならば、何の殼でも棲家とする。介殼ばかりでなく、海綿や、竹の筒に棲むものもある。性貪食で、植物性動物性の食物を手當り次第食ふ。嗅覺と觸覺とは發達してゐるが、視覺は甚だ低級であり、明

晴はよく判別するが、形狀はよく〳〵近くへ來なければ、之を認めることが出來ず、また視覺上の記憶も甚だ惡い。呼吸は鰓で行ふ。陸棲のがうなでも同樣であるが、陸棲のものでは、鰓を包む皮膜の內面が厚くなつて居り、こゝでも呼吸を營むことが出來るやうになつてゐる。本邦產のがうなは約七十種あつて、椰子蟹も、この內に含まれ、輸出罐詰の原料として有名なタラバガニ（鱈場蟹）も同族に編入される。主な種類を左に揭げる。

サムエルやどかり Eupagurus samuelis STIMPSON. 海岸に最も普通な小形の寄居蟲。鋏の先白く、他の體部は概ね靑黑色。

おにやどかり Aniculus aniculus (FABRICIUS) 稍々大形、通常サザエ・ウヅラガヒなどの空殼に棲む。二尋乃至十尋の淺海に多い。體は概ね赤褐色で、黃色の縞があり、鋏及び步脚に、剛毛が數環列をなして叢生してゐる。

をかやどかり Coenobita cavipes STIMPSON. 小笠原產のやどかりとして東京にて販賣されてゐる陸棲種。

榮螺（さゞえ）

季題解說 拳螺（さゞえ） 榮螺子（さゞえ）

拳螺科に屬する軟體動物である。我が國の東海より西南海に廣く分布して居るが、內海等には比較的尠なく、多く外海に面する海底の岩礁に棲息し、四五月頃に繁殖する。貝殼の形態は拳狀を呈し、殼質は重厚である。六段の螺層は各周壁に二列の突起を有するものと、有しないものとがある。殼表は暗靑色に多少赤味を帶び、殼口內面は眞珠光澤を呈する。その肉を刻み、煮汁と共に再び介殼の中に入れて燒いたものが壺燒である。關東では江の島が榮螺の壺燒を名物としてゐる。東京では花見の茶店などでもよく喰べさせる。

例句

榮螺　蜈のり榮螺の洞に潜てけり　杉風（杉風句集）

蛤（はまぐり）

古書校註

【滑稽雜談】蛤の長圓大小によりて別種あり。此の者、尋常產すといへども、春初に賞する者なれば、近來春に用ふるか。古來は雜蛤といはずしては雜也。

【年浪草】攝州住吉の浦の汐干、凡そ三月三日より七日までなり。汐干見物の輩、泥中の蛤をとるを、方言に、にじると云ふ。足にて踏み、或は棒の先にて突きて蛤蜊の在る所を知るをにじると云ふ。

【三才圖會】蛤海濱に在りて形栗に似たり。故に俗、蒲栗（はまくり）（略）勢州桑名の炙り蛤名を得、泉州堺浦の產は小にして味美なり。阿波の產は殼

厚くして扁大、四五寸の者有り。石灰を和して煮れば、則ち殼の色鮮明にして琢き成す者の如し。奢藥等を貯ふるに甚だ佳し。又極大なる者を撰み取り、裏に花鳥人物を畫き、其の陰陽を取り合せて、以て女子の弄遊と爲す。之を貝合と謂ふ。婚禮に必ず之を用ひて、和合の義を象る。參州の產は最も厚く堅なり。工人切磋(二)して碁子(ゴ)と作す。

註 (一) きりみがくこと。(二) 圍碁に用ゐる白石

季題解説 殆ど全國的に、淺海の砂中に繁殖してゐて、その千差萬別の彩色ある滑らかな殼・形・また風味に至つては、貝類中の王座を占めてゐるのである。それかあらぬか、日出度い贈答にも多く用ひられる。いろ〳〵因緣づけられて、婚禮の儀式、雛の節句には缺くことの出來ないものになつてゐる。料理法としては、蒸蛤・燒蛤・蛤汁・蛤飯・蛤鍋、その他種々樣樣調理することが出來る。殼は藥の入物、碁石の原料等用途が甚だ廣い。蛤の介殼は左右からぴつたり合ひ、幾萬の貝殼があつても、別のものとは齟齬して決して合ふといふことがないので、昔これを割符に用ひたことがあるといふ。參照 人事—潮干(シホヒ)

例句

蛤
見せばやな浦の蛤鎌でとる　來山（續いま宮艸）
蛤のしかもはさむか玉柳　其角（五元集）
蛤や波つまづけとならべ見る　乙二（松のゝえ草稿）
蛤や口をあくれば京の水　梅室（梅室家集）
蛤の動くと見れば燒けにけり　紫江（同人）
蛤に汐吹き貝も干ばかり　春冠子（ホトトギス）
蛤の海紫に乾きけり　虛子（句集虛子）

參考 はまぐり Meretrix meretrix LINNÉ. 全國に廣く分布し、淺海の砂泥中に生活す。紐狀の粘塊を吐きて、體重を減ぜしめ、潮流に從つて海底を移動す。この際、足卽ち俗に舌と稱する部分を動かしつゝ漂ひ行く。かくして蛤の養殖を圖る目的にて一定の區域に蒔きつけ置くも、その場所を遠く離れて他へ移動す。これを蛤が脫けると云ふ。坊間に流布する龍宮の圖には、蛤から吐き出されたる樣が描いてあるが、これはこの粘塊の吐出などにその源を發するのであらうか。かやうに脫出するを以て、竹簀を以て圍んで之を防ぐことがある。

淺蜊(あさり)

鬼淺蜊(おにあさり)　殼淺蜊(からあさり)　淺蜊賣(あさりうり)　淺蜊汁(あさりじる)

古書校註 【三才圖會】按ずるに、淺蜊は形色蛤蜊に似て小さし。其の大なる者一寸、小なる者四五分、灰白色有り、紫斑・黑斑・花紋の畫有り。處々皆之有り。たゞ攝・泉・播(サス)・播州には希に有るのみ。東海極めて多し。民間日用の食と爲す。亦極めて賤し。竹串に貫き日に曝し他方に鬻ぐ。其の腸中に珠有り。

之を尾張眞珠と謂ふ。

季題解説 靜かな内海等に多く産する。貝の形はやゝ三角形で細い輪層があり、色は表面は淡蒼色、白色及淡黑色の斑紋が出てゐる。條紋は縱橫に現はれてゐる。大きさは五分乃至一寸くらゐである。肉は美味である。

參照 人事 潮干(シホヒ)

例句

淺蜊

あさり貝むかしの劒らさびぬ　其角（五元集拾遺）

泥はもとの海へ目指つあさり貝　白雄（白雄句集）

われがちに數あるものを蜊とり　同（同　）

淺蜊よりきしやごの貝の多かりし　俊子（ホトトギス）

參考 あさり Paphia(Ruditapes)philippinarum ADAMS & REEVE. 本邦各地のみならず、フイリツピン群島にも産すること、種名の示す通りである。河川の流入する鹹度低き淺海の砂泥中に棲み、春より秋まで産卵をする。小さな貝を採取して、稍ゝ深き所に蒔きつけ、生長を速かならしめた後之を採る、所謂養殖が盛んに行はれて居り、牡蠣に次ぐ多産の貝である。介殼の模樣の多種多樣なのは、人のよく知る所であるが、稀に白色のものがある。この白色のあさりは一方の殼だけが、その一端着色してゐる。

おにあさり Protothaca jedoensis LISCHKE. 介殼は圓形に近く、殼表には布目狀の脈がある。本州の太平洋沿岸・四國・九州に分布してゐる。

海松食(みるくひ)　西施舌(みるくひ)　海松貝(みるがひ)

季題解説 介殼はやや楕圓形で大きく、徑四五寸から六七寸、輪層を有してゐる。色は表が暗褐色で、内が白い。殼の口に海松の芽生が附著して、恰も海松を食ふが如き樣をしてゐるからこの名がある。海中の岩と岩との間に棲息し、みるくひの棲むところには海松が多い。東眼殊に渥美灣の篠島、北間賀島附近に多く産殖する。漁夫は舟の中から箱眼鏡で海底を覗きつつ、長い柄のついた銛で突いて捕る。長く突出したその水管だけが喰べられる。

赤貝(あかがひ)　蚶(きさ)　血貝(ちがひ)

古書校註 【三才圖會】 蚶、和名木佐、俗に赤貝と云ふ。（略）蚶、處々に皆之有り。殼の外黑く、内白くして、肉正に赤し。之を煮れば倍して赤し。筋膜有りて柱を纏ひ、其の柱大いさ榛の子の如くにして、白色なり。其の腸、黑有り、赤有り。凡そ江海の水淺き處に、數千群生す。之を蚶山(アカヽヤマ)と曰ふ。但し、攝・播の産味勝れたり。

季題解説 殼は暗褐色で甚だ硬く、長さは三寸くらゐである。形は脹れた心臓形をなし、表面は四十條程の放射線を具へ、鱗片狀の表皮を被つてゐる。肉は鰓とともに紫赤色で、美味である。鮨に用ひられることが最も多い。血貝ともいはれるのは、その肉の色からである。常に靜穏な灣内の泥地に棲息してゐる。千葉縣検見川產のものが上乘とされてゐるとのことである。

参考 あかがひ Anadara inflata REEVE. 南日本に廣く產する普通な貝。肉は甚だ赤味を帶びてゐるが、これは血色素（haemoglobin）を含有するためである。

板屋貝（いたやがひ）　牛邊蚶　杓子貝（しやくしがひ）

古書校註 【三才圖會】車渠・海扇、俗に帆立貝と云ひ、又板屋貝と云ふ。（略）車渠は北海・西海に多く之有り。外は黃白色、又紅斑を帶べる者有り。縱に溝有り。其の溝淺くして濶し。木の片を以て作り成す者の如く、車の渠（一）に彷彿たり。又板屋葺の形に似る。俗呼んで板屋貝と曰ふ。（略）其の殼、上の一片は扁くして蓋の如く、蚶・蛤の輩と同じからず。大なる者は徑一二尺、數百群行し、口を開きて、一の殼は舟の如く一の殼は帆の如くにして、風に乘じて走る。故に帆立蛤と名づく。（略）殼を採りて大阪に送る。竹柄を夾みて杓子となす。

註 （一）荷車の輪の棧　○三才圖會所說のは、板屋貝と帆立貝とを混同せり。

季題解説 帆立貝科に屬し、紅褐色で、扇を擴げたやうな形の二枚貝である。大きさ三四寸くらゐ、やゝ帆立貝に似てゐる。この種の貝は左右の貝殼が平等でなく、右側は貝のやうに膨らみ、左の殼は平らで板屋根のやうだといふので、こんな名前があるのであらう。蓋のやうな平らな方の貝は用に立たぬが、放射狀の太い線（肋）のある膨らんだ貝の方は、よく田舍などで杓子に代用する。故に杓子貝ともいふのである。竹の柄のついたこの杓子がよく荒物屋などに見受けられる。西洋では十字軍の帽子や外套につけて從軍徽章の代りにしたとある。我が國では全國的に分布した貝であるが、殊に東海に多い。肉は食用に供せられる。〔一[illegible]〕

帆立貝（ほたてがし）

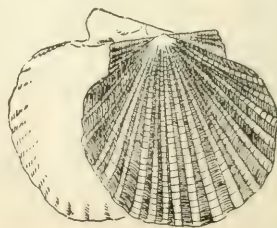
参考 いたやがひ Pecten laqueatus SOWERBY. 全國に廣く分布し、介殼の中、右殼を貝杓子とするので杓子介とも稱へられる。左殼はほぼ平く、十三條の太い放射肋がある。

帆立貝（ほたてがひ）　海扇（うみあふぎ）

季題解説 帆立貝科の貝で、板屋貝とよく似た形態であるが、づつと大き

く、板屋貝が杓子なら、帆立貝は皿や小鉢といふところであり、また實際にも食器として皿や小鉢に用ひられる。放線肋は三十條内外、色は淡紅褐色をしてゐる。二三月頃産卵する。北海道から奥羽地方の寒海の、波の比較的靜かな、五十尺から百尺くらゐの深さの海の沙底に、半ば埋もれて棲息する。常に兩殼片を頻繁に開閉し、急に水を排出する勢ひで、水中を跳躍するといふ。その貝柱は、食用として頗る美味である。

［同出］夏　海扇曳

例句

帆立貝　黒海苔は跡へ游ぐや帆立貝　谷羊（類柑子）

參考　ほたてがひ Pecten (Patinopecten) yessoensis JAY. いたやがひと屢ゝ混同されるが、これより大で、左殼上の放射肋は約三十條である。奥羽・北海道等の寒海産である。

簾貝（すだれがひ）

季題解說　蛤科に屬し、長橢圓形の二枚貝で、殼の前端部は殼頂の直下に於て弱い彎入をしてゐる。後端部はやや長く延びてをり、殼表には殼頂を中心に粗い輪脈を有し、脈間はやや廣い溝をなしてゐる。肉褐色の地に栗色斑の放射帶があり、この放射帶は所々で斷續するが、濃色で著明である。その文樣が簾に似てゐるといふのでその名がある。本州・四國・九州等の海に産するが、紀州吹上の濱は産地として古來有名である。

例句

簾貝　すだれ貝雫の高濱見し人か　其角（五元集拾遺）

參考　すだれがひ Paphia evglypta PHILIPPI. 本州から九州までの淺海に産し、殼は柿實狀で前後に長いが、殼頂部は前方に偏在し、その直下の前面に少しく凹んでゐる。殼表には、顯著な脈がやゝ疎に並んでゐる。

常節（とこぶし）

小鮑（とこぶし）　鰒魚（とこぶし）　ながしこ　萬年鮑（まんねんあはび）　萬年貝（まんねんがひ）　千年貝（せんねんがひ）

季題解說　鮑の一種である。形が小さい鮑に酷似してゐるが、大きくならないので萬年鮑などと稱せられ、目出度い料理の一つとせられる。軟體動物中の腹足類櫛鰓目に屬してゐる。貝殼は橢圓形で、殼口は大きく、殆ど貝の全部を占めてゐる。殼は帶黃綠赤色で彫刻が密である。鮑貝に似て、外線に沿ひ六乃至八個の稍低い穿孔を有する。殼の内面は美麗な虹彩を放つてゐる。大きさは長さ二寸餘、幅一寸五六分、高さ三分くらゐで、近海の岩石の下面等に棲息してゐる。春日捕られて食用に供せられるが美味であ

る。しかし鮑のやうに生では用ひない。九月末から十月末までが産卵期で、雌雄異體である。分布は殆ど全國的である。

馬蛤　馬刀　竹蟶　馬刀貝　剃刀貝　あかまて

古書校註

【滑稽雑談】和訓義解に云、萬天とは左右也。左右をまてと云ふ。此の貝左右に口あるがゆゑ也。かの眞手結びと云ふも、左右を結ぶを云ふ也。秘藏抄、汐ひれば蛋のまてだにし隙もなし我くふ事もしる人もなし人丸。躬恒云、馬刀串とは、あまの海の汐干潟に、すなごの中にまてと云ふ物有るを、簾の竹のほどなる物をもて、馬刀の穴に指入れて引出せば、附きて出づる也。それを云ふと。(略)後撰の歌に、蛋のまてかたと詠めるは、(一)蟶にはあらず。清輔奥儀抄に註せり。扨このもの、俗に馬刀と心得たり。馬刀は江湖にあり。海に生ずるは蟶なり。いづれも春に許用すべし。此の貝、干潟の泥水に居て泡をふくもの也。それを細き竹串にてさす。手ばやにて隙なきもの也。

【年浪草】陳藏器が云、(二)蟶は海泥中に生ず。長さ二三寸、大いさ指の如し。兩頭開く。○時珍が曰、蟶は、丑貞切、乃ち海中の小蚌也。其の形長短大小一ならず。江湖の馬刀・蜮・蜆と相似たり。其の類甚だ多し。閩粤の人、田を以て之を種ゑ、潮泥推沃を候ひて、之を蟶田と謂ふ。其の肉を呼びて、蟶腸と爲す。

註(一)後撰集、源英明朝臣の歌。「いせの海あまのまてかたいとまなみながらへにける身をぞ恨むる」(二)拾遺本草の所說。

季題解説　東海から西南海に産する。左右同形同大であるところの薄い剃刀狀の介殼をもつてその身を包み、形はさながら竹管の如くである。貝の色は外面は蒼黄色、内面は淡黄色である。長さ三四寸、前方の孔から食物を攝取し、後方の孔からは細い水管を出してをる。常に内海の砂地に棲んで、地下數寸の處に潜み、外敵の來襲に遭へば直立して二三尺の深いところに潜り込む。その潜むや甚だ迅く、これを捕るには馬刀突といつて、針金で作つた一種の銛をもつて突いて捕るのであるが、なか〳〵手練を要する。干潮の時は前方の孔から潮を噴く。まては眞手で左右のこと、この貝は左右に口があるからまて貝の名があるのであるといふ。参照 人事—馬蛤突

例句

馬蛤

そこに馬刀妥は三日月瀉帆浪　支考（蓮二吟集）
馬刀串にあはれは馬刀のちから哉　白雄（白雄句集）
都人は黒木とや見ん馬刀一把　曾北（類題句集）
蛤の上に一把や馬刀の貝　青々（妻木）

馬刀貝の汐を吹きゐる處かな　　助二郎（ホトトギス）

企救の女や喪髪にのせし馬刀の桶　　普士枝（續ホトトギス）

馬刀貝のだまされて吹く潮かな　　杉花（同　）

【參考】まてがひ Solen gouldi CONRAD. 介殼は長狹で、一名かみそりがひと稱するが、英語でも同樣で razor-clam と云ふ。本州から九州まで廣く分布してゐる。

あかまて Solen gordonis YOKOYAMA. 前種に類するが、やゝ短く、介殼の内面は地色が白色でこれに桃色を混じてゐる。南日本の淺海産。干潮時にはこの介は砂に潜んでゐるが、砂の表面に水管の跡即ち俗に「目」と稱するものを殘す。この目に食鹽を入れると、急に下から出て來る。その機を外さずに之を捕へることが出來る。尙滿潮時には馬刀介突で漁することも前種と同樣である。

貽貝（いがひ）　淡菜（たんさい）　[illegible]（いがひ）　黒貝（くろがひ）　玄貝（くろがひ）　いの貝　ひめ貝　にたり貝

【古書校註】

【三才圖會】貽貝は參州・勢州多く之有り。殼蚌(一)に類して灰黑色、内蚶(二)に類して微赤。海人之を食ふ。或は纖く切り、曝乾して以て他方に送る。味美ならず、微臭氣有り。

註（一）ながた貝。（二）赤貝。

【季題解說】烏貝に似た海産の二枚貝である。貝は楔形で長さ三四寸くらゐであるが、時とするとかなり大きいのがある。殼質重厚で、殼頂は全く、前方に偏し、前端は直線であるが、後端は丸味を帶びて膨れてゐる。殼表には多くの輪脈があり、黑褐色であつて、澤山の海藻類が密着してゐることが多い。殼の内面には紫紅綠色の彩があり、甲斐絹の樣な光彩を放つてゐる。産卵期は一月から三月頃の間で、殆ど全國的に分布してをり、潮流の急な、數尺乃至數十尺くらゐの深さの海底の岩礁に、貝絲を以て著生々活をしてゐる。肉は美味で味噌汁などにして賞味し、また乾して支那へ輸出せられる。殼からは劣等の眞珠が出來るとのことである。

【參考】いがひ Mitilus crassitesta LISCHKE. 全國に廣く分布し、殼頂に近き肉中から生じた貝絲（茸毛）を以て、岩石等に附着してゐる。介殼の形はやゝ三角形、表面は黑く、内面は眞珠色の地色に紫赤線を混じてゐる。肉は生食し、又は乾製して支那に輸出する。

馬珂貝（ばかがひ）　うば貝（がひ）　おほとり貝（がひ）　ありそ貝（がひ）　りうきうばか貝（がひ）

【季題解說】亞三角形の二枚貝で、形や大きさは大體蛤に似てゐるが、蛤よりも脹れてをり、また殼表には殼頂を除き、腹緣に近づくに從つて顯著な、やゝ太い多くの輪脈がある。殼表は黃褐色で、殼頂より腹緣に向ふ所の數

條の濃色帶が放射狀をなしてゐる。殼の內面は白色であり、套痕の彎入は月形をなしてをり、後端部は淡紫色を呈してゐる。動物體の足長く且つ赤く、屈曲してをり、往々これを用ひて跳躍する。産卵期は主として夏季で半ある。本州・四國及び九州等に分布し、比較的鹹度の高い淺海の砂質を好んでゐる。肉は主に乾製して食用に供せられるが、むしろ內柱の方が肉よりも賞美せられる。

鳥貝（とりがひ）

季題解說 茶貝の一種である。殼は白色で稍よごれ色、內面の緣邊は紅色をしてゐる。大きさは普通徑三寸くらゐで、中には五・六寸にも及ぶのがある。殆ど圓形に膨れてゐて、殼面には殼皮を少し殘した處から緣邊に向つて、放射狀に肋線がある。內海や灣內の水深三・四間くらゐの沖合、砂泥中に溫度の高いところを好んで棲息する。瀨戶內海各地、殊に周防日良居村・三田尻附近、安藝の吉浦・大屋・阪村などでよくとれる。十一月から晩春まで採れるが、三・四月が時期で最も盛である。採取は多く帆曳で、俗に貝こぎといふ鐵製の熊手のやうなものへ、袋をつけて海底に入れ、帆走して砂泥を掻き廻し、袋の中に貝が這入る仕組になつてゐる。美味であつて、普通酢の物・付け燒・鮓の上置等に用ひられる。

子安貝（こやすがひ）

貝子（ばいし）　寶貝（たからがひ）　はちおやうだから

古書校註 【三才圖會】本綱に、貝子は貝の類の最も小さき者、赤蝸狀の如し。長さ寸許り、色微白赤、紫黑なる者有り。今多く穿ちて小兒に與へて戲弄とす。北人は用ひて衣及び氈帽に綴りて飾と爲す。（略）其背腹皆白く、背隆く龜の背の如く、腹の下兩つに開き相向ふ。齒刻有り、魚の齒の如く、其の中の肉蝌蚪の如くにして、首尾有り。（略）按ずるに古へ未だ錢有らず、貝子を以て貨と爲す。故に寶貨の字、皆貝に頭す。秦に至りて貝を廢し錢を行ふ。而して後賤しめらる。勢州に多く之有り。相傳ふ、婦人臨産に掌に握れば産み易し。故に子易貝と名づく。

季題解說 所謂たからがひの一種で小貝に屬するが、しかし相當大きなものもある。その介殼は略ゝ卵形で美麗な深紫色の斑點を有する。幼貝には三・四階の螺層を數へ得るが、生長すればその痕跡を印するのみである。貝の長さは二寸許りで、殼口は狹長線狀を呈し、殆ど殼の中央部を縱貫して居る。昔支那でこの貝殼を貨幣となしたと云ふので、寶貝と云ふのである。その大きな物には種々な彫刻を施し、綺麗であるの

で裝飾用にも供せられてゐる。また古來分娩の際産婦がこれを手にすれば安産するとの迷信がある。子安貝の名はこれから生じたのであらう。南海・琉球・臺灣等の暖海に多い。軟體動物中、腹足類櫛腮目に屬する。

【例句】子安貝　子安貝二見の浦を産湯かな　其角（五元集拾遺）

【參考】こやすがひ、はちぢやうだから（Cypraea mauritiana LINNÉ.）寶貝の一種で、栗色の地色に淡色の小點が散布してゐる。我國ではこの介は安産の守として古來貴ばれ、産婦に之を握らせる。現今、この介及びこれに類似の寶貝の色層を利用して浮彫となし、ブローチ・帶留等に製する。

細螺（きさご）　きしやご　ぜゞかい

【季題解説】馬蹄螺科に屬し、二三分から五六分くらゐの圓錐形の小卷貝で、殆ど全國に分布し、泥砂の海岸淺所に棲息する。圓錐殼には高めのものと、ゝ稍扁平のものとがあり、螺表の色彩紋様も亦さまざまであるが、白地に赤褐色や黑褐色の綺麗な雲形の斑紋を有し、これに褐色と白色との交互した數條の細帶を施して居るものが多い。酢貝遊びには厚い饅頭形の蓋を用ふ。細螺彈きはその貝を集め指で彈いて勝負を爭ふ小兒の遊戲である。

櫻貝（さくらがひ）　花貝（はながひ）　紅貝（べにがひ）

【古書校註】【滑稽雜談】櫻貝と稱する者一種侍り。至つてちひさき櫻色したる貝也。此の外、梅の花貝と云ふも侍り。歌にも皆よめり。只花貝とのみもいへり。いづれも春也。一説にはいづれも一種に限らず、只春陽の節、これらの貝類艷色をます、すべて花貝・櫻貝と、いづれをいふとわかつ事なしといへり。好む所にしたがふべし。

【栞草】今櫻貝と稱するもの、恰も櫻の散りて、地に敷くがごとし。

【季題解説】鎌倉由比ヶ濱などでは、浪打際に貝殼が打上げられてあるやうな日ならば、一年中いつでもその中に必ず櫻貝はある。しかしやはり春の頃が一番澤山にあるから、春のものになつてゐるのであらう。淡桃色ですき透つた小さい綺麗な貝である。櫻の花瓣のやうな感じであるところからこの名が起つたものであらう。澤山の貝の中に交つて乾いてゐるのや、波にひたひたと浸つて濡れてゐるのや、まだ二枚の貝が離れずに同じ形の美しい貝が繋がつてゐるのなどを、波打際で拾ふ時の氣持はまたとなくよい。

【例句】櫻貝
江の嶋にむれつゝ人や櫻貝　機夕（穀隣筆）
いさゝかの風にも飛びて櫻貝　湘海（ホトトギス）
櫻貝ひろはんとすればひるがへる　同（續ホトトギス）

櫻貝　二三枚重ねてうすし櫻貝　たかし（續ホトトギス）
　　　ひく波のあと美しや櫻貝　同（同）
　　　拾はんとすれば波來る櫻貝　耿陽（同）

【參考】さくらがひ Tellina (Angulus) nitidula Dunker. 南日本の淺海に産し、介殼の兩面とも美しき紅色を呈し、表面は甚だ光澤がある。櫻の花瓣に似てゐるのでこの名がある。貝細工に用ひられる。べにがひ Tellina consanguinea Sowerby. 前種と混同されることが多いが、後端部が強く突出してゐるので區別される。前種と同樣に殼は紅く美しい。南日本の産。

烏貝

【季題解說】介殼は左右同形、楕圓形で膨脹し、表面は烏貝といふ名の如く黑色、內面は眞珠色または薄紫色を呈してゐる。大きさは三四寸で、到る處の湖沼・河川に産する。肉は泥臭くて喰べられない。貝類のうちで、どこかグロテスクな感じのする貝である。

【例句】
烏貝　われからと雀はすゞめからす貝　其角（五元集拾遺）
　　　水底に畦あり越ゆる烏貝　岳居（ホトトギス）
　　　烏貝泥にまみれて乾きけり　泥子（同）
　　　舌出してゆるぎそめたり烏貝　雄月（續ホトトギス）
　　　くはへゐる藁一すぢや烏貝　松青子（同）

【參考】からすがひ Cristaria plicata Leach. 本州及び北海道に分布する淡水産の介。殼皮は黑色が普通であるが綠色を帶ぶるものがある。幼時ではこの綠色が特に著しい。眞珠を生ずるが、色は餘り美しくない。俗間では、からすがひと混同してゐる介類を少し左に揭げる。
かはしんじゆがひ Margaritana margaritifera Linné. 良質の眞珠を生ずる。介殼の內面は美しい眞珠光澤がある。殼皮は褐色又は黑色。主として北海道・樺太等の寒地に産する。
ぬまがひ、どぶがひ Anodonta lauta Martens. からすがひよりも小で、介殼は丸味を帶び、薄質である。本州・九州の湖沼に産する。殼皮は幼者と雖、黑色なので、容易に區別される。

蜆

蜆貝　眞蜆　大蜆　大和蜆　瀨田蜆　蜆賣

【古書校註】【滑稽雜談】海水の者、江湖の者侍る。諸國の産あれども、江州湖水の者上品也。春月より初夏の比迄、殊に嘉味とす。土人是を取るに、小舟に乘りて梳連と云ふ物を以て攪き擧ぐる也。其の貝の甲縮むが如し。故に和名

しじみと稱す。萬葉六。住吉乃粉濱之四時美開藻不見隱耳哉戀度南。（一）作者未詳。

【年浪草】江河皆之有り。蚌(ドブガヒ)の屬にして圓く小なり。其の大なる者、一寸許り。兩頭の上に白禿斑有り。武州江戸近所多く之有り。大にして味佳し。江州勢田の產も亦名を得たり。

註（一）住吉の粉濱の蜆あけも見ずしのびてのみや戀ひわたりなむ。

季題解說 貝の外面は黑褐色、內面は紫色、あさりに類して小さく、殼表の輪層が判然としてゐる。多く池・沼・河・湖などの淡水または半鹹水の泥中に棲む。ひろく全國どこにでも產するが、就中近江の產など古來有名である。產地に依つて、それ〴〵勢田蜆とか、新田蜆とか、諏訪蜆とか名前は違ふが、大體みな同じである。和へ物・汁・佃煮など種々調理されて美味である。しかし棲む所に依つて味の差がある。例へば大阪の樣に船舶の出入頻繁な河の蜆は泥が多く、油臭くてまづい。年中いつでも喰べるが、春がしゆんとせられる。參照 人事―蜆取(シジミトリ)

例句

蜆

野田村に蜆あへけり藤の頃　鬼貫（鬼貫句選）
一升はからき海より蜆かな　其角（五元集）
石一ツ淸き渚やむき蜆　同（同）
むき蜆石山の櫻ちりにけり　蕪村（蕪村遺稿）
待日には來であなかまの蜆うり　几董（井華集）
土舟や蜆こぼるゝ水の音　白雄（白雄句集）
すり鉢に薄紫の蜆かな　子規（子規句集）
手に滿つる蜆うれしや友を呼ぶ　同（同）
蜆川ほどなく潮のさしわたり　刺花（ホトトギス）
故里や昔ながらの蜆川　虎耳草（同）
新しき杭うちそへて蜆川　菁果（同）
瀨田蜆藤咲きしかば甘からん　十七星（同）
新しく小さき桝や蜆賣　耿陽（同）
せゝらげる笊の中なる蜆かな　同（續ホトトギス）
とぎあげて漆の如き蜆かな　諸人（同）

參考 蜆の主な種類は次のやうである。

ましじみ Corbicula leana Prime. 蜆の中、最も普通なもので、北海道を除く各地の河川に產し、殼頂は大抵侵蝕されて、白色の稜柱層が露出してゐる。夏期產卵し、八月の候が最も美味と云はれる。所謂土用蜆はこれである。

やまとしじみ Corbicula japonica Prime. 前種に似てゐるが、殼は更に丸味を帶び、殼表は漆の如く黑き皮膜を被る。北海道から九州まで產し、殊に中國及び九州に多い。

せたしじみ（Corbicula sandai REINHARDT. 琵琶湖及びこれから出る河川に特に産する。瀬田特産の意でこの名出づ。殼頂やゝ膨出してゐる。殼表は橙黄色又は黒褐色を呈する。

蜷（にな）

みな　河貝子（かはにし）　びんな（佐渡）　びんろうじ（能登）　にだ（[illegible]）　あげまき（肥前・筑後地方）

古書校註

【滑稽雜談】和訓義解に云、美奈は水鳴也。此の者水中にてなく者也。水鳴の略語也。（略）古抄に云、蜷の腸くろきゆゑに、黒きといふ枕詞也。徒然草に云、みなむすびとは、絲をむすびかさねたるが、蜷といふ貝に似たればいふ也と、あるやんごとなき人作られき。になといふは誤也。

【年浪草】和名抄に曰、崔禹錫が食經に曰、河貝子、和名、美奈。俗に蜷の字を用ふるは非也。音卷、連蜷は蟲の屈する貌也。〇庖厨本草に曰、禁裏の御簾に付きたる總角の結びたる狀の如し。故に、肥前・筑後の俗は、此の貝あげまきと云ふ。

【栞草】古へは、みなと云ふ。今専らになと唱ふ。

季題解說　川や溝などに産する貝類の一種である。海螺といつて海に棲む種類もある。殼の長さ一寸餘、筍狀で螺層長く、各螺層の中央に一列の小突起がある。また形が丁度禁裏の御簾についた總角の結んだ樣に似てゐるといふので、あげまきといふ俗稱もあるのである。殼は田螺より厚く、色は概ね黒色で、また斑紋のあるものもある。酒粕で煮などして食用に供せられるが、うまいものではないといふ。

例句

蜷

石垣につきゐる蜷や落ちもする　助二郎（ホトトギス）
新堰の垢づきそめし小蜷かな　青畝（同）
漣に見えずなりたる蜷の石　夏山（同）
水底に蜷の這ひたる月日あり　野風呂（同）
大小の小なる蜷も負けず這ふ　一壺（續ホトトギス）
蜷の水蓮如詣のうつりけり　賓水（同）
鰌出て蜷におどけて見たりけり　一壺（同）

田螺（たにし）

まる田螺（たにし）　おほ田螺（たにし）　つぶ（越後）　たつび（能登）　たつぼ（北國・房州・駿河・相模・伊勢）　たがひ（土佐）　田螺（たにし）鳴く　田螺取（たにしとり）　田螺賣（たにしうり）

古書校註

【滑稽雜談】韓保昇本草に云、狀蝸牛に類して尖長、青黄色、春夏之を採る。和産又說のごとし。

【三才圖會】田螺、和名太都比、俗に太仁之と云ふ。（略）二三月、腸の内に子を抱く。三五子有り。其の大いさ米粒ばかり、而して母の形に備ふ。

母半殼を出づれば則ち子之に隨ふ。泥中に蟄めく。土人之を取りて水盤に養ひ、泥を吐出さしめ煮熟して、肉に蒜味噌を和して食ふ。味美なり。多く食へば久しく腹痛せしむ。相傳へて曰、長途の行人、田螺を煮乾して之を貯ふ。毎に一筒食へば異郷の水飲に中らざらしむと。又云、田螺の肉を用ひて糊と爲せば、破れたる磁器を繼ぐに永く離れずと。

季題解説　蝸牛を大きく長くしたやうな形で、殼は蒼黑色をしてゐる。古い池や田などの深い泥の上皮に住んでゐる。殼は水黴か藻のやうなものが一面について、ぬる／＼としてゐる。暖かい春の日がさして、水の澄んだやうな日には、水底を蠢動して泥の上にうね／＼と所謂田螺の道を描く。里人たちは泥に踏み込んで籠に拾ふ。喰べるには先づ殼のまゝ茹でる。そして細い針で蓋の間をつきさして引張ると、容易く身が引出される。身は黑い紫がかつたところに、半分白いところが付いてゐる。醤油と干山椒を入れて煮たり、または和へ物にする。また養殖鯉の餌にも用ひられる。

例句

田螺

袖よごすらん田螺の海士の隙をなみ　芭蕉（芭蕉句選拾遺）
飯貝や雨に泊りて田螺聞　同（もとの水）
やはらかな水に角琢ぐ田螺かな　來山（いまみや艸）
背戸中はさえかへりけり田螺がら　丈草（丈草發句集）
入替る鰌も死ぬに田にしがら　同（同）
引馬の中に交るや田螺とり　支考（蓮二吟集）
着たかひもなき古蓑や田螺掘　桃隣（古太白堂句選）
拾ひのこす田螺に月の夕べかな　蕪村（夏より）
そこ／＼に京見過しぬ田にし賣　同（蕪村句集）
靜さに堪へて水澄たにしかな　同（同）
鳫立て驚破田にしの戸を閉る　同（同）
揚土の小雨つれなき田にしかな　同（新五子稿）
鍬そゝぐ水や田螺の戸々による　同（蕪村遺稿）
よく聞けば桶に音を鳴田にし哉　同（落日庵句集）
田螺みへて風腥し水のうへ　太祇（太祇句選）
泥澄てそこらに見ゆる田螺哉　召波（春泥發句集）
賣る田にもなまぐさ添て田螺哉　也有（蘿葉集）
暖一重川にもすまで田にし哉　同（同）
潮干とはしらぬ里にも田にし取　同（同）
早乙女の笠きぬうちや田螺取　同（同）
海士の手にしらぬしわざや田螺取　同（同）
早乙女のよごれ習ふや田にし取　同（同）
賣捨に出るやきのふの田螺取　同（同）
田にしわる野口の嫗のにくきかな　白雄（白雄句集）

田螺

苞の田にし田へ戻すべら雨をなけ　白雄（白雄句集）
親なしと咎ふ淀野の田螺うり　曉臺（曉臺句集）
水口にころがりを打田にしかな　同（同）
田にし鳴小田にたむぼゝ打ほけぬ　同（同）
鍬笊に盛ればこぼるゝ田にしかな　巣兆（曾波可理）
柴の戸や泥かけて行田螺とり　同（同）
鳴く田螺鍋の中ともしらざるや　一茶（七番日記）
さゞ波や田螺がにじる角大師　同（同）
青芝ぞ爰迄ござれ田螺殿　同（同）
小盥や今むく田螺辷り遊ぶ　同（同）
夕月や鍋の中にて鳴ク田にし　同（一茶發句集）
たつ鴫の腋からおとす田螺哉　梅室（梅室家集）
水澄みて泥に道ある田螺哉　里東（三千化）
ぬり立の疇をゆり出る田螺哉　十丈（古選）
水口へよりてものうき田螺哉　移竹（新選）
這ても行ころんでも行田にし哉　雁宕（同）
水口に集まつて來る田螺かな　子規（子規句集）
から〳〵と崖に捨てるや田螺殼　蒼苔（春夏秋冬）
道に上げし田螺を牛が踏みにけり　雪間女（同人）
板橋をまた盜まれし田螺鳴く　梅村（懸葵）
田螺鳴く溝を流るゝ玩具かな　零餘子（ホトトギス）
塗畦に蓋を開けたる田螺かな　躑躅（同）
蓋をせし田螺のあげし濁かな　季發（同）
おほばこに落ち乾きたる田螺かな　あきら（同）
すり鉢にふか〳〵和る田螺かな　萬戸（同）
水を見る田螺の道のあるばかり　たけし（同）
水底にむくと起きたる田螺かな　中成子（同）
どこまでも波ある水や田螺採　千止（同）
夕やけの美しかりし田螺かな　淡月（續ホトトギス）
雛段に供へありけり田螺汁　露子（同）
水の面の田螺の甲羅乾きけり　柑兒（同）
一つゞつ濁りを持てる田螺とり　あふひ（ホトトギス誌）

參考　まるたにし Viviparus (Idiopoma) malleatus Reeve. たにし類は凡て胎生なので、これをその屬名としてゐる。六月から七月まで幼貝を生み、全國到る處の水田・湖沼に棲んでゐる。甚だ丸味のある種類。
おほたにし Viviparus (Idiopoma) japonicus Martens. 本州から九州まで分布し、高さ六十五ミリに達する大形種。

雀海中に入り蛤と爲る

古書校註

【滑稽雜談】禮記月令に曰、爵大水に入りて蛤と爲る。○陶氏本草に曰、雀大水に入りて蜃と爲る。蜃は卽ち蚌也。○爾雅翼に曰、雀淮に入りて蛤と爲り、雉海に入りて蜃と爲る。

地蟲穴を出づ　啓蟄

古書校註

【滑稽雜談】仲春の月、蟄蟲咸く動く。戸を啓きて始めて出づ。註、始めて其の穴を穿ちて出づるを謂ふ也。○俳書に云ふ地蟲出づるとは、總じていふ時は、地中より陽氣を得て、蟄蟲の出づる事ならし。別けていふ時は、俗に地蟲とて別に一種侍る也。是蛴螬なり。此の蟲の出づるも、勿論春なるべしや。

註 ○時候の部「驚蟄」を參照せよ。

季題解說　蛇・蜥蜴・蟻などが、冬季土中に蟄伏して食もとらず、まるで死んだやうな所謂冬眠の狀態にあつたのが、春暖になつて始めて地中から出て來るのをいふ。二十四氣の一たる驚蟄（陰曆二月節）は卽ちこの義から出てをるのである。參照 蛇穴を出づ　蜥蜴穴を出づ　時候―驚蟄

例句（地蟲穴を出づ）

今出し地蟲哀れめ道の中　闌更（半化坊發句集）
蟻出るやごう／＼と鳴る穴の中　鬼城（ホトトギス）
兄弟や地蟲の穴にうづくまり　泊雲（同）
風吹いてあゆみとゞむる地蟲かな　俳維摩（同）
地蟲出て一日のきげんわろさかな　青畝（同）
地蟲出て金輪際をわすれけり　同（續ホトトギス）
つられたるかなしき地蟲這ひにけり　きよし（同）
啓蟄の蟻が早引く地蟲かな　虛子（句集虛子）
別莊に來て啓蟄の蟲を友　同（續ホトトギス）

蛇穴を出づ

古書校註

【滑稽雜談】蛇の出づるや春を以てす。出れば則ち物を食ふ。蛇は春夏を以て晝と爲し、秋冬を夜と爲す。其の蟄するや冬を以てす。蟄すれば則ち土を含み、春に至つて吐出す。參照 夏 蛇　秋―蛇穴に入る

例句

けつからな御世とや蛇も穴を出る　一茶（九番日記）
蛇穴を出る大澤をめぐりけり　春雷（ホトトギス）

蛇穴を出づるを見にき浄瑠璃寺　芹　香（ホトトギス）
蛇穴を出でぬ佛に侍りぬ　青　畝（ホトトギス）

蜥蜴穴を出づ　石龍出づ

註　二月「蛇穴を出づ」に續いて掲げる。

古書校註

【滑稽雜談】和名とかげ、此の者の行く事、餘の蟲にすぐれてはやし。とかげるの略語也。（略）此者おほくは此月頃（二）に蟄戸を開きて、田園おほくは山地に出る也。〔[illegible]〕夏　蜥蜴。

蝶

蝶々　かはびらこ　胡蝶　白蝶　黄蝶　烏蝶　山蝶　初蝶　狂ふ蝶　ぬる蝶　胡蝶の夢

古書校註

【山之井】てふ〳〵は、菜の葉にとまり、花に宿りて、餘念なげ成るひるねのけしき、羽衣のたもとをひるがへし、雪をめぐらしつゝ舞ひたはるゝ有様、猶、莊周が夢（一）をよせて、こてふの夢の百年めなどもいへり。

【滑稽雜談】格物論に曰、蝴蝶、一名蛺蝶、一名野蛾。又一種、大いさ蝙蝠の如く、或は黑、或は赤、或は青斑、鳳子と名づく。一名鳳車、一名鬼車。○古今註に云、橘蠹蝶と化す。○爾雅翼に曰、菜中の青蟲蝶と爲る。（略）上來の所說、みな物の化也。俗に菜の花蝶に化するとは、一説による歟。胡蝶の胡は粉にて、鬚の事也。又鬚をいふ時は、胡の字色黑きと云ふ義也。粉を云へば、胡の字白き義也。黑白一向に論ずべからず。蜂の胡蜂と云ふ時は、全體黑き也。總て蝶は春に限らず、夏秋に至り、冬は陳蝶などとて、尤も四季皆あり。然れども其の生ずる始、又花の香を愛する時、みな春也。古人皆又春に諷詠多し。（略）八雲御抄に云、蝶は春さま〳〵の花の咲くより、秋花の散る迄の物也。たゞ蝶とも云ふ。なべては、こてふといふ。こてふといふは、蝶來と云ふに似たり。○藻鹽草に云、詩に一生梅花に近づくことを得ずとはいへれど、只今梅の時分これあり。

註（一）莊子、夢に胡蝶に化したといふ故事。莊子の齊物論に「莊周夢に胡蝶となる。栩々然として胡蝶なり云々」とある。

季題解説

たゞ蝶といへば春季のものとなるが、春の蝶の他に、夏の蝶・秋の蝶・冬の蝶・凍蝶等が時候時候によつて區別される。春一番早く現はれ、またどこにも居るのは紋白蝶である。初蝶の現はれる時期は、年により處によつて多少の差があること勿論であるが、大低三月中である。それから紋黄蝶が現はれ、以後日本にだけでも五百餘種類の蝶が見られる。一般に、春の蝶は單色小形であるが、夏になると同じ紋白や紋黄でも大形となり、色彩や紋が複雜となつて來る。その他の蝶でも、夏には大柄で華麗な所謂揚羽蝶のいろ〳〵な種類が多くなつて來る。蝶は蛾と違つて、晝間飛びあ

るいて夜は休む。また觸角も一般に羽毛狀でなく棍棒狀であり、花や草にとまる時も概して翅を合せ疊む習性がある。勿論羽を擴げたまゝ休む蝶も少くない。ぜんまいのやうに卷いてゐる長い嘴を花深くさし込んで蜜を吸ふ。蝶の種類によつて、その好む植物が凡そ決つて居る。花でなく木の汁や馬糞などを好むものもある。ことに卵を產みつける場合には、柑橘の葉とか山椒の葉などを愼重に選んでとまるものである。中には濕陰の地を好むのがあるが、大抵はよく日の當る穩かな天候を好み、荒天の日は草や木の蔭に潛んで休む。晩春から夏にかけては大きい揚羽蝶、秋は蜆蝶、せゝり蝶等が目につく。春の蝶としては白蝶黃蝶を主として詠ふやうである。しかし揚羽蝶・烏蝶等も、特に夏蝶といはぬ限り、春の蝶の部に入る。

〔參照〕鳳蝶（アゲハテフ）　菜花化蝶（ナノハナテフニクワス）　夏　夏の蝶（ナツノテフ）　百合化蝶（ユリテフニクワス）　秋—秋の蝶（アキノテフ）　冬—冬の蝶（フユノテフ）

例句

蝶

世の中や蝶々とまれかくもあれ　宗因（梅翁宗因發句集）
もしなかば蝶々籠の苦をうけむ　同（同）
君や蝶我や莊子が夢心　芭蕉（百歌仙）
もの好やにほはぬ草にとまる蝶　同（京羽二重）
てふの羽の幾度越る塀のやね　同（芭蕉句選拾遺）
もろこしの俳諧とはん飛ぶ小蝶　同（同）
蝶の飛ぶばかり野中の日かげ哉　同（笈日記）
起よ〳〵わが友にせんぬる胡蝶　同（已が光）
くろい蝶あれでも花にめづるかな　來山（いまみや草）
散花にねてゐて蝶のわかれ哉　同（續いま宮草）
散花をよい相手也蝶の舞　同（同）
古文よむ人も一日花に蝶　浪化（浪化上人發句集）
いそがしい機てよう寢るや花の蝶　同（同）
夕日影町中にとぶこてふかな　其角（五元集）
てふしるや獅子は獸の君なりと　同（同）
蝶とぶや猿をよび込む原屋しき　同（同）
藁屑に花を見すてしこてふかな　同（同）
聖堂にこまぬく蝶の袂かな　同（同）
百とせはねるお藥のこてふかな　同（同）
ねぶる蝶夜る〳〵何をする事ぞ　同（五元集拾遺）
酒くさき人にからまる胡蝶かな　嵐雪（玄峰集）
寐るところありて行らめたつ蝴蝶　北枝（北枝發句集）
蝶〳〵や裾から戻る位山　千代女（千代尼發句集）
をしなべて聲なき蝶も法の場　同（同）
蝶〳〵や何を夢見て羽づかひ　同（同）

蝶〳〵やをなこの道の跡や先　千代　（千代尼發句集）
わか風で我吹おとす胡蝶かな　同　（同）
うつゝなき抓ごゝろの胡蝶哉　蕪村　（蕪村句集）
伊勢武者のしころにとまるこ蝶哉　同　（新五子稿）
島原の草履にちかきこてふかな　同　（同）
釣鐘にとまりて眠る胡てふ哉　同　（蕪村遺稿）
雪隠を出れば驚く小蝶哉　同　（落日庵句集）
伏勢の鎧にとまる胡蝶かな　同　（同）
見初ると日々に蝶みる旅路かな　太祇　（太祇句選）
寄添て眠でもなきこてふかな　同　（同）
堀川の畠からたつ胡蝶かな　同　（同）
蝶飛ぶや腹に子ありてねむる猫　同　（同）
聲立て居代る蜂や花の蝶　同　（同）
地車に起行く草の胡蝶哉　召波　（春泥發句集）
はかなしや蝶の羽染る鳥の糞　同　（同）
屋根ふきのあがれば下るこてう哉　同　（同）
たはれ來よ袂に入ん飛胡蝶　樗良　（樗良發句集）
晝ばかり來てあだぼれの蝶憎し　也有　（羅葉集）
蝶々や花盗人をつけて行く　同　（同）
菜畠のあまり野に散る胡蝶かな　同　（同）
植木屋の置て行たる胡蝶かな　蓼太　（蓼太句集）
蝶〳〵や乞食の夢のうつくしき　同　（同）
つまむかと酢味噌を迯る胡蝶哉　同　（同）
舟につむ植木に蝶のわかれ哉　几董　（井華集）
さむしろや蝶も巻込俄あめ　同　（同）

尋三百夢二什選

草の戸や薬を嘗に蝶の留主　同　（同）
蝶とぶやあらひあげたる流しもと　白雄　（白雄句集）
袖に來て袂にきへつみちの蝶　同　（同）
はつ蝶のちいさくも物にまぎれざる　同　（同）
酒くさき人に蝶舞すだれかな　同　（同）
から鮭にてふ舞晝の厨かな　同　（同）
二羽になりて蝶かへすたる野中哉　同　（同）
夕風や野川を蝶の越しより　同　（同）
蝶とんで風なき日ともみえざりき　曉臺　（曉臺句集）
搦はれて行風情ありかぜの蝶　同　（同）
ともし火にこがるゝ蝶を夢路かな　同　（同）
風止て蝶の出て來る野原哉　闌更　（半化坊發句集）

木〻小草いろ／＼の中に黒き蝶　同　（同）
ぬるゝ日をそこねもやらず蝶の羽　同　（同）
蝶飛や小狐狂ふ岡のはら　同　（同）
日の影や眠れる蝶に透通り　同　（同）
川波やあやふく越る蝶も有　同　（同）
道のべや馬糞の胡蝶花の蝶　同　（同）
つまゝうとすれば蝶ゆき蝶とまる　士朗　（枇杷園句集）
禪門にをくれては飛胡蝶かな　巣兆　（曾波可理）
草臥や身をたふれたる蝶の中　成美　（成美家集）
とびたちてもろきは蝶のこゝろかな　同　（同）
ひら／＼と墓原までもはるの蝶　同　（同）
蝶まふや薪一把も門ふさげ　同　（同）
あたふたに蝶の出る日や金の番　一茶　（旅日記）
通り抜ゆるす寺也春のてふ　同　（同）
湖の駕から見えて春の蝶　同　（同）
ちり紙に漉込るゝな風のてふ　同　（同）
葭簀あむ槌にもなれし小てふ哉　同　（同）
蝶とぶや二軒もやひの痩畠　同　（同）
糸屑にきのふの露や春のてふ　同　（同）
文七とたがひ違ひに小てふ哉　同　（同）
あか棚に蝶も聞かよ一大事　同　（同）
初蝶の一夜寝にけり犬の椀　同　（同）
肘まくら蝶は毎日來てくれる　同　（多羅葉集）
馬柄尺の御紋に暮る小蝶哉　同　（七番日記）
蝶とんで我身も塵のたぐひ哉　同　（同）
むつまじや生れかはらば野べの蝶　同　（同）
蝶とぶやしなのゝおくの草履道　同　（同）
蝶が來てつれて行けり庭のてふ　同　（同）
糞汲が蝶にまぶれて仕廻けり　同　（同）
鐵砲の三尺先の小てふかな　同　（同）
うら住や五尺の空も春のてふ　同　（同）
蝶來るや何のしやうもない庵へ　同　（同）
泥足を蝶に任せて寐たりけり　同　（同）
蝶小てふあはれ疲れて歸るかや　同　（同）
犬と蝶他人むきでもなかりけり　同　（同）
笛役は名主どのなり蝶のまひ　同　（同）
やよや蝶そこのけ／＼湯がはねる　同　（同）
蝶とぶや横明りなる流し元　同　（同）

蝶

大猫の尻尾でじやらす小蝶哉　一茶（七番日記）
麦に菜にてん〳〵舞の小蝶哉　同（同）
それがしが供する蝶よ一里程　同（同）
一筵蝶もほされて居りにけり　同（同）
蝶〳〵のふはりとんだ茶釜かな　同（おらが春）
葎からあんな胡蝶の生れけり　同（同）
てふ飛や煮しめを配る蕗の葉に　同（一茶句帖）
草庵の棚捜しする小てふ哉　同（同）
おとなしや蝶も淺黄の出立は　同（同）
善の綱しつかり蝶のすがりけり　同（同）
風呂水の小川へ出たり飛ぶ胡蝶　同（同）
寝仲間に我も這入ぞ野邊の蝶　同（同）
人穴を見とゞけに入る小てふ哉　同（九番日記）
御坐敷の隅からすみへ小てふ哉　同（同）
ヲンヒラ〳〵蝶も金比羅參哉　同（同）
木の陰や蝶と休むも他生の縁　同（一茶新集）
蝶飛ぶや此世にのぞみないやうに　同（發句題叢）
門の蝶子が這へばとびはへば飛ブ　同（一茶發句集）
氣の毒やおれをしたうて來る小蝶　同（嘉永板發句集）
蝶寐るや草ひきむしる尻の先　同（同）
蝶のぞく宿なら覗け道のほど　乙二（たのゝえ草稿）
舞蝶を門にたてこむ上野かな　梅室（梅室家集）
草の葉にとりつく雨の胡蝶哉　虎國（我庵）
行春や笹に吹かるゝ蝶一つ　可椎坊（恒の誠）
てふ〳〵や加茂の芝生に日もすがら　存義（觀隨筆）
葛飾の橋の下行くこてふ哉　飛鯨（同）
蝶飛で野末に人の遊びけり　趙鳧（たてなみ）
ひら〳〵と蝶々黄なり水の上　子規（子規句集）
蝶々や山なき國をとんで行く　秋虎（新俳句）
白き蝶黄なる蝶に謂つて曰く妻にせん　修竹（同）
湖に吹きおろされし胡蝶かな　雪腸（同）
生垣にそうてひら〳〵蝶黄なり　三川（同）

筑後客中

礎に蝶眠りけり桃林寺　紫影（同）
あまた居てはなれ〳〵の蝶々かな　鬼史（春夏秋冬）
くたびれて山吹にとまる胡蝶かな　瀾水（同）
藁を打つ石なめらかや蝶飛べり　婆羅（懸葵）
初蝶にかたまり歩く人數かな　素十（ホトトギス）

蝶々や草に寢て讀む本に影　孤村（同）
濱風になぐれて高き蝶々かな　石鼎（同）
麥のびて蝶あまた來る机かな　村家（同）
大阪の街中に見し蝶々かな　櫻坡子（同）
蝶漸く風の萱葉をのがれ出し　はじめ（同）
瀨の石に翅合せ居る蝶々かな　二笑（同）
塊にしがみ吹かるゝ蝶々かな　默骨（同）
草の蝶吹かれながらもとりついて　紅女（同）
をり／＼は傘の内なる蝶々かな　蕙花壇（同）
蝶々や慶會樓の古柱　色葉（同）
雙蝶の一つを雀啄みし　よりに（同）
蝶々とぶ淡路通ひの船の上　春山（同）

龍安寺

方丈の大庇より春の蝶　素十（同）
草の戶や吹き下されし蝶一つ　一巻子（同）
江の島の橋の裏より蝶々かな　南魚（同）
まのあたり大屯霞む蝶々かな　岬人（同）
筥崎や松の梢の春の蝶　ちかし（同）
蝶々の皆居なくなる時のあり　みづほ（同）
いつまでもとまらぬ蝶や貴船川　友次郎（同）
山蝶や祠庇に久しくも　紅朗（同）
山蝶や雨にうたれて搖るゝ菌朶　ひろせ（同）
樂浪に生れし蝶の舞ひ立ちぬ　花子（續ホトトギス）
初蝶やはづしかさねし苗障子　三重史（同）
蜆蝶とびつくごとくとまるなり　諾人（同）
つく杖の銀あたゝかに蝶々かな　たかし（同）
蝶々の追はれたること忘れけり　みづほ（同）
川の蝶影もはためき渡りけり　旭川（同）
蝶の空七堂伽藍さかしまに　茅舍（同）
一蝶に雪嶺の瑠璃流れけり　同（同）
塵取の中より立ちし蝶々かな　ひろ女（同）
溫室の中にも居りし蝶々かな　一宿（同）
鳥籠に入れられてあり烏蝶　迷水（同）
壽司折に山蝶の來てとまりけり　拓水（同）
蝶々の草にかくるゝ夕日かな　虛子（句集　虛子）
蝶々のもの食ふ音の靜かさよ　同（同）
草に殖え麥に殖えたる蝶々かな　同（同）
日輪を飛び隱くしたる蝶々かな　同（同）

蝶　[illegible]出でゝ蝶々低くとびにけり　虚子（續ホトトギス）

鳳蝶（あげはてふ）

揚羽蝶（あげはてふ）　揚羽（あげは）　黄鳳蝶（きあげは）　烏鳳蝶（からすあげは）　黒鳳蝶（くろあげは）　紋粉蝶（もんしろてふ）　紋黄蝶（もんきてふ）　黒蛺蝶（かみきりてふ）　麝香鳳蝶（じやかうあげは）　あかたては

季題解説　蝶の中で最も大きい美しい蝶で、花や葉にとまる時、翅を揚げてとまる。普通は黒地に黄の斑紋をもつて居る。身體長八分乃至一寸くらゐ。前翅は長方形、後翅は半圓形で、左右に翅を開くと、三寸餘のものはよくある。鳳蝶の前身は俗に「柚子ぼう」といふ柑橘にゐる青い蟲である。觸ると角をにゆつと出す臭い蟲である。鳳蝶のうち、黄揚羽は翅黄色く斑あるもので、一番早く出る。烏鳳蝶は翅が漆黑で、翔る時翅の脊が深碧瑠璃に輝く。この大きい蝶がひら〳〵と若葉しかけた山間や樹間を翔る有様は、晩春の風物として印象深いものである。鳳蝶は一般に、花が散つて、晩春かへるでの花が咲きそめる頃から現はれる。殊に漆黑の鳳蝶は夏中とび續けて、夏蝶の感じの深いものである。鳳蝶の種類は頗る多いが、中でも特色のあるのは、麝香鳳蝶と稱して、翔る時麝香のやうな芳香を發する類のものである。これは長崎鳳蝶の一種であつて、雄は漆黑、雌はやゝ暗灰黑色である。飛翔力が鈍いので捕へ易い。雌は雄の芳香を慕つて飛びよつてゆくのである。蝶の生命は生れ出てから十日間か三十日くらゐのもので、われ等の目に絶えず觸れるのは、生れ替り死に替りしてゐるのであるといふことである。　参照　蝶（てふ）

参考　あげは、鳳蝶　Papilio xuthus LINNÉ.　樺太から臺灣まで甚だ普通な蝶。翅には黑斑と黑條とが多い。

きあげは　Papilio machaon hippocrates FELDER.　前種に似てゐるが、翅は黄色部が多い。北海道から琉球まで分布する。

くろあげは　Papilio protenor demetrius CRAMER.　本州から沖繩まで分布し、翅は凡て黑く、雄では稍ゝ紺色の光澤がある。

もんしろてふ、紋粉蝶　Pieris rapae LINNÉ.　樺太から九州・朝鮮まで甚だ普通。翅は白いが、前翅は端黑く中央に二黑點があり、後翅にも一黑點がある。

きてふ　Eurema hecabe LINNÉ.　本州から臺灣まで分布する最も普通な蝶。翅は黄色で、その緣が黑い。

あかたては　Pyrameis indica HERBST.　蛺蝶科に屬する蝶。北海道から臺灣まで分布する。前翅は黑色の地色に白斑があり、後翅は地色暗褐色で、外緣は橙赤色を呈してゐる。

菜花蝶に化す

季題解説 菜の花の盛りとなる頃から、紋黄蝶なども盛にとびはじめ、花か蝶かと思はれるやうになるので、所謂雀が蛤に化したり、鰻が山の芋と化したりすると同じやうな意味に、こんなことを云ひ出したものであらう。實際でも畑土にこぼれて居ると思つた菜の花が、そのまゝとび立つて、あつ蝶だつたのかと吃驚することもあり得ることである。**參照** 蝶 夏 百合化蝶

蜂

蜜蜂 熊蜂 黒雀蜂(地蜂 土蜂 竹蜂 穴蜂) 雀蜂(山蜂) 赤蜂 足長蜂(こしきり蜂) 似我蜂 馬尾蜂 ぬか蜂 蜂の劍 蜂の陣

古書校註

【滑稽雜談】 總て蜂と計りは雜にして、蜂の巣は春也。是古來の掟なれど、此の者又花の香を愛する也。蝶に同じ。必竟蝶に類して季を定めんに、咎あるまじ。巣の結びは勿論なり。(略)總じて蜂は、おのれが種類異なる者は、たがひに相鬪ふ者也。近會、洛の東粟田山神明の社森にて、山蜂と家蜂と巣を爭うて、兩種相鬪ふ。毎日蜂の死するもの幾千萬といふ事をしらず。

【年浪草】 蜂、數品之有り。蜜蜂・土蜂・大黄蜂・竹蜂・赤翅蜂・蠮蜂、是なり。(略)埤雅に曰、化書に蜂甚毒尾に在り。頴無く鋒の如し。故に之を蜂と謂ふ。蜂に君臣の禮有り。

【栞草】 蜜は夏月蜂の脾の中に貯へて、已が冬籠の食物とせんが爲なり。自然に脾を結び貯ふるを山蜜と云ふ。熊野にては山蜜といひて上品とす。又大樹の洞中に貯ふるを木蜜と云ふ。家に養ふを家蜜と云ふ。凡そ蜜を釀す所、諸國にあり。紀州熊野を第一とす。

季題解説 昆蟲類に屬する小飛蟲で、種類が極めて多い。六脚二翅で、はつきりと頭・胸・腹の三部が分れてゐる。その腰は俗に蜂腰などの言葉がある通り、甚だしく縊れてゐる。尻に毒ある蜂があつて人を刺す。蜂の劍または蜂の針といふものこれである。肢は發達して步行に適し、前肢は食物などを持つことが出來る。普通蜂を飼ふといへば、蜜蜂を飼ふことである。蜜蜂は一群に一匹の女王蜂、少數の雄蜂及び多數の職蜂がゐる。そしてこれ等は皆異つた職分を有し、整然たる社會生活を行つてゐる。女王と職蜂とには針があるが、雄蜂にはない。女王は卵を產み、且つ社會の主となつて全員を統率する。職蜂は巣を營み、蜜を集め、兒を育て、外敵を防ぐ等一切の仕事をする。雄蜂は遊惰で殆ど働かず、たゞ生殖のためにのみ存し、秋になると職蜂のために逐はれるか、または刺されてしまふ。蜂は飼主やその知人を見知ると云ふ。見知らぬ者や、また飼主でも氣に逆らふと刺すものであるから、飼主等は十分注意して、蜂が怒つて飼主を刺してもその

まゝにしておく〳〵と云ふ

（季題）蜂の巣（夏）

例句　蜂

明ぬ日の風鈴は蜂のやどり哉　言水（俳諧五子稿）
似我蜂にならぬ子もなき御法かな　沾徳（同）
蜂蜜に根はうるほひて老木哉　蕪村（[illegible]記）
山蜂や木丸殿の雨の中　同（蕪村遺稿）
出舟や蜂うち拂ふみなれ棹　同（同）
人追ふて蜂もどりけり花の上　太祇（太祇句選）
腹立て水呑蜂や手水鉢　同（同）
木ばさみのしら刄に蜂のいかり哉　白雄（白雄句集）
六尺の人追ふ蜂の心かな　闌更（半化坊發句集）
似我蜂や己が姿もかへり見ず　同（同）
軒の蜂くつともいはぬくらし哉　一茶（七番日記）
一畠まんまと蜂に住れけり　同（同）
蜂の子の蜂になること遅きかな　子規（子規句集）
蜂の蜂花の一木に溢れけり　枯木（懸葵）
蜂なんど構はぬ田舍くらしかな　古泉（壬申句鈔）
蜜蜂の分封近きゆきゝかな　今夜（ホトトギス）
蜜蜂を飼うて本家と新家かな　同（同）
蜜採るや蜂の機嫌にさからはず　同（同）
曇日に木瓜震はせて蜂這へり　石鼎（同）
水吸へる蜂の水輪の小さよ　染水（同）
蜜蜂やしきりに飛んでたのもしき　素十（同）
塊を頂き出でし土蜂かな　あふひ（同）
蜂の尻ふわ〳〵と針をさめけり　茅舍（同）
蜂守や蜂のゆきゝにほゝかむり　羽公（同）
さげて來て木の根にえもの置きし蜂　阿乎美（續ホトトギス）
蜂の毒まはりて顔の歪みけり　蒼舟（同）
うなり落つ蜂や大地を怒り這ふ　虚子（句集虚子）

參考　くろすゞめばち（黑雀蜂） Vespa singulata japonica SAUSSURE. 地蜂、土蜂、穴蜂とも稱せられ、信濃及び美濃で、この蜂の子を食用に供する。體は蜜蜂とほゞ同大で、體は黑く、細毛が生へてゐる。土中に巣を造り、その入口には土砂を堆積して居り、一見蟻の巣の如き觀がある。

すゞめばち Vespa mandaria SMITH. 山蜂、熊蜂とも稱せられ、球形又はこれに類する形の大きな巣を、樹枝の下、軒下などに營む大形の蜂。屋外に作られ雨露にさらされたこの巣を、露蜂房と稱し、藥用に供する。

馬尾蜂 Euurobracon penetractor SMITH. 長さ十五センチに及ぶ長き産卵管を有するを以てこの名がある。雌はこの産卵管を樹幹に挿入して卵

を産みこゝに潜伏せるボクトウ蛾の幼蟲に、寄生せしむる。體は概ね黄赤褐色である。

じがばち Ammofila infesta Smith. 樺太から九州まで廣く分布する。七八月頃地中に巣を營み、しやくとりむしを捕へて幼蟲の食物に供する。體は概ね黒色であるが、腹部の第一・第二節は狹く長く、この部分は大抵赤褐色を帶びてゐる。

くまばち Xylocopa appendiculata Smith. 本州より九州・朝鮮まで廣く産し、支那にも分布する。腹部は丸く黒く、胸部も丸味があつて黄色毛が生へてゐる。

蜜蜂の主な品種を擧げると次の通りである。

日本種 Apis indica japonica Rodochkoffsky 東洋種の中の一亞種で、體強健で、よく寒氣に堪へ、性質温和であるが、採蜜量が少い。歐洲種(歐洲及び米國にて飼育するもの)に比べて體が小く黒味がゝつてゐる。

イタリア種 Apis mellifera lingustica Spinola. 歐洲種の中の一亞種。イタリーの原産で、能く蜜を集め、大群を作るので、最もよく人に飼はれる。體も大きく、黄金色を呈してゐる。

北歐種 Apis mellifera mellifera Linné. 寒氣に堪へる力が大であり、繁殖力も大である。體色は概ね黒い。

蜂の巣（はちのす）　蜂窩（はちのす）　巣蜂（すばち）

季題解説 蜂は大體五月中に巣を構へる。巣は蜂の種類によつていろ〳〵に違ふ。蜜蜂は飼育せられるから別として、足長蜂は木の枝に多く巣を構へる。その巣は單筒であつて直徑四寸くらゐ、穴は二三十である。十匹くらゐから二十二・三匹群住する。熊蜂は五月中旬、軒または木に、鋭利な歯をもつて穴を穿つて卵を産みつけ、その口を泥で覆ふ。てんぐ蜂は五月中旬、直徑二尺餘に及ぶ圓い巣を營む。ぬか蜂は藁塚や木の根などに巣を造るが、その大きさは一尺程に及ぶ。野生蜜蜂は茅葺屋根に巣をつくり、泥で塞ぐ。併し俳句では從來蜂が春季である爲め、蜂の巣をも春季のものとして取扱つてゐる。 參照 蜂（ハチ）

例句

蜂の巣

七賢のあと蜂の巣や籔の中　也有（蘿葉集）
蜂の巣や討手に向ふ頰かぶり　同（蘿の落葉）
蜂の巣に愛源八の宮居かな　几董（井華集）
蜂の巣も人だのめなる軒端かな　白雄（白雄句集）
蜂の巣をひとうちにして晝寢哉　成美（成美家集）
蜂の巣や走りて過る兒二人　吟江（心の花）
親蜂の巣を取られたる怒かな　桂堂（春夏秋冬）

蜂の巣

つぎ／＼に巣を出る蜂や雨のひま　涼荷（同　人）
蜂の巣や釣り古したる吉野籠　翠湖（ホトトギス）
蜂の巣を焼いてしまへば雨のふる　田士英（同　）
おとがひに蜂の巣かゝる矢大神　素月（同　）
巣を抱いて動かぬ蜂や雨の中　春甃（續ホトトギス）

虻（あぶ）　花虻（はなあぶ）　牛虻（うしあぶ）　やまと虻（あぶ）　ひめ虻（あぶ）　しほや虻（あぶ）　あをめ虻（あぶ）

古書校註

【滑稽雑談】時珍曰、蝱、翼を以て鳴く。其の聲蝱々、故に名づく。○段成式曰、南方の溪澗中、水蛆多し。長さ寸餘、色黒し。夏の末變じて蝱と爲る。人を螫す、甚だ毒あり。○和に生ずる者、木生・水生の二種の者也。人を螫し毒する事、説のごとし。二三月より生じて、夏月に存す。然れ共古來より春に用ふ。

【年浪草】大和本草に曰、本草に木蝱あり、蜚蝱あり。陶弘景が曰、木蝱は蝱に似て小也。血を噉ふ、是草木に多き虻なり。蝱の形にして大いに黄色なり。艸木の花を吸ふ。云々。此のもの二月も出づ。（一）千梅は蚊蝱と續きたる文字に拘りて、彼の一種大にして小蟬の如く、綠色にして利く刺す蜚蝱の如く思うて、二月に出づるを誤りとする也。

註（一）雙編輪の著者。以下その所説。

季題解説　昆蟲類の雙翅類に屬し、後翅は變じて平均棍となり、口は吻狀をなしてゐる。全體として蠅に似てゐて、蠅より遙に大きい。體は黒く、胸背に三條の黄色い縱毛線がある。翼を虻々と鳴らすところから、その名があるといふ。虻の唸りを聞くと、いかにも春晝といふやうな感じが深い。幼蟲は草根・朽木などを食するけれども、牛馬の體內に寄生するものもゐるといふことである。花の蜜を吸ふのを花虻といひ、牛馬の血を吸ふのを牛虻といふ。　參照　獐虻（ノロアブ）

例句

虻

此虻をたばこで逃すけぶり哉　其角（五元集拾遺）
馬は眠犬は追なる門の虻　白雄（白雄句集）
舞すくむ蝱や地にそふ影久し　同（同　）
それ虻に世話をやかすな障子窓　一茶（七番日記）
山道や斯う來い／＼と虻が飛ぶ　同（一茶句帖）
道連の虻一つ我もひとりかな　同（同　）
神風や虻が敎へる山の道　同（一茶發句集）
張かへし窓の障子や虻の聲　吟江（心の花）

虻一つ鳴いて居るなり鐘の中　墨水（春夏秋冬）
句集もて虻と闘ふふしどかな　元（ホトトギス）
虻を搏つ掌に大いなる馬の腹　藤郎（同）
また一つながるゝ虻にしたがひぬ　青畝（同）
虻の輪の二つとなりぬ花の前　王城（同）
虻の王花をつかんで静まりぬ　同（續ホトトギス）
大空に懶き虻の舞ひ隠る　青畝（同）
虻のあとしばらく何も來らずに　素十（同）
大空に唸れる虻を探しけり　たかし（同）

參考　うしあぶ、あかうしあぶ Tabanus chrysurus LOEW. 本州及び北海道に廣く分布し、體は概ね黒褐色であるが、肢が雄では全體黃赤色を帶びることが多い。牛馬の血液を吸ひ、疾病の媒介をするといふ。

やまとあぶ Tabanus rufidens BIGOT. 北海道から九州まで廣く分布する。體は概ね黃褐色で、體長二〇ミリに達する。

はなあぶ Eristalis tenax LINNÉ. 世界に廣く分布し、一見蜜蜂に似て居り、普通に花上に見られる。虻と稱せられるが、實は蠅の一種で、この幼蟲は尾長蛆といひ、糞尿や汚水中に生活してゐる。この幼蟲を乾燥したものを漢方醫は五穀蟲と云ふ。成蟲は體長一五ミリ。概ね黒褐色、腹部に工の字形の黒斑がある。

ひめあぶ Silvius dorsalis COQUILLETT. 北海道から薩南地方まで廣く分布する。體は概ね黃色であるが、腹部はその末端に至るに從ひ赤色を帶び、肢は黃赤色で、美しい。

しほやあぶ Promachus yesonicus BIGOT. むしひきあぶ科に屬し、我國に最も普通な虻で、蟲を捕へて飛翔する。體長二八ミリに達する。體は稍々圓筒狀で、概ね黒色である。

あをめあぶ Ommatius chinensis FABRICIUS. 本邦に廣く產し、印度にも分布する。しほやあぶと同じく、むしひきあぶ科に屬し、同樣の習性を有する。體は概ね褐色を帶びてゐる。

獐虻（のろあぶ）

季題解説　雙翅類の昆蟲である。體は蠅より大きく、色は灰白色で、胸背に三條の黃色線を具へ、腹背の中央に縱線がある。雌は強い口吻をもつてをり、人畜を刺し血を吸ふけれども、雄は花間を飛んで花蜜を吸ひ花粉を吸ふ。獐虻はその繁殖上、他の虻とは大いに趣を異にする點がある。それは晩夏初秋の候、獐の毛端に卵を産みつけ、孵化した幼蟲は獐の皮下膩に喰ひ込み、蛹となつて越冬し、陽春、更に成蟲となり翅を生じ、始めて獐の皮下膩から外皮を喰ひ破つて外部に飛び去るのである。**參照**　虻アブ

蠶(かひこ)　蠶(こ)　お蠶(こ)　桑子(くはこ)

古書校註

【滑稽雜談】　蠶物語に云、昔北天竺の舊仲國の大王霖夷と申奉る。其の娘を金色皇女と名づく。繼母の所爲にて、桑の木の空穂舟に乘せて海に流す。吾朝常陸の國豐浦の湊にいたる。權大輔と云ふ者、是を怪みて舟を開くに、此の皇女を得たり。其の由を聞きて是を扶持せり。程なく此の皇女死して後、蠶の形と變ず。是を養ふに、かの空穂舟の木桑なるを思ひて、桑の葉を以てこれを飼へり。後に此の蟲絲を吐く。大輔此の絲をとりて絹として、世に此の種を廣めけるとなん。又一說に云、欽明の皇女かぐや姬、常陸の國筑波山に飛去りて神と現じ、託して曰、吾は舊仲國霖夷大王の女なり。此の國において蠶の神と現ず。云々　これらの說、草紙・物語などに侍る。

註　○人事、養蠶の部に擧げた滑稽雜談その他の說を參照せよ。

季題解說　參照　山繭(ヤママユ)　人事―蠶飼(コガヒ)

例句

蠶

浴して蠶につかふ心かな　召波　（春泥發句集）
月更けて桑に音ある蠶かな　同　（同）
葉隱れの機嫁伺ふ桑子哉　太祇　（太祇句選）
太布の袂に馴るゝ桑子かな　蘭更　（半化坊發句集）
さまづけに育られたる蠶哉　一茶　（七番日記）
村中にきげんとらるゝ蠶哉　同　（同）
蠶醫者〳〵するむすめ哉　同　（一茶句帖）
姑のひとりごといふかひこ哉　湘水　（淡路島）
首あげて人なつかしの蠶かな　紅綠　（春夏秋冬）
一桑に色かはりたる蠶かな　南村　（ホトトギス）
つらなりて流れ來りし捨蠶かな　泊月　（同）
岸草に蠶すがりはしつれども　水陽　（同）
裏川や蠶流しの雨となり　刺花　（同）
流れきし團扇の上の捨蠶かな　縷川　（同）
逡巡として繭ごもらざる蠶かな　虛子　（句集虛子）

山繭(やままゆ)　山蠶(やままゆ)　天蠶(やままゆ)　樟蠶(しよさん)　桑蠶(くはご)

古書校註

【滑稽雜談】　爾雅の說の蚅蠋の類は、和に云ふ山繭とて、自然生の者にて、春に限るべからず。本草の原蠶は晚き者にて、夏子也、二番子と稱する者也。

季題解說　山繭蛾の幼蟲で、その黃綠色を帶びた體は普通の蠶に比して短小である。樫・椚等の葉を食べ、淡綠色の縊れのない大きい繭を結び、絲量

も多く、これから採取した絹絲は强靱で光澤がある。一種變つた趣のある山繭紬・山繭縮緬等の山繭織はこの絲から織られたものである。［參照］蠶（カヒコ）

［參考］野蠶の中、主なるものは次の通りである。

やままゆ（天蠶）Antheraea yamamai Guérin の本州及び北海道に產してゐるが、この飼育を行つてゐるのは信州の一部だけである。幼蟲は、櫟葉を食したのが最も良質の絲を產し、栗、楢等を食したものゝ絲質は甚だ劣つてゐる。天蠶の絲は染色し難いが、光澤よく强いので貴ばれる。成蟲はその前翅頂が尖つて居る。

くすさん（樟蠶）Dictyoploca japonica Butler. 栗蟲又は白髮太郎・テグス蛾などの名で呼ばれる。北海道から臺灣まで產し、支那にも分布する。幼蟲は老熟するに從ひ長白色を叢生する。その絹絲腺から、テグス類似品を作る。

くはご（桑蠶）Theophila mandarina Moore. 普通の蠶によく似てゐるが、色が暗色である。北海道から臺灣に至るまで產し、支那にも分布し桑の葉を食ふ。成蟲の翅は概ね暗褐色。

春の蚊（はるのか）　春蚊（はるか）　初蚊（はつか）

［季題解說］晩春頃から出る蚊をいふ。夕餉の灯などに、ぶうんと一つ浮き出た春蚊はなか〳〵趣深いものである。
しかし臺灣では、蚊は盛夏には却つて少なく、春の方がその襲來に惱まされることが甚しいさうである。さうなると全く春の蚊といふ感じではなくなつてしまふ。［參照］夏―蚊（カ）

［例句］

春の蚊

三月に蚊の聲まじる閏かな　浪化（浪化上人發句集）
軒簾卷き古びたる春蚊かな　蕋聖窟（ホトトギス）
春の蚊になき寄られたる面輪かな　草城（同）
團欒の家に出そめし春蚊かな　清三郎（同）
ともしびを遲々と離るゝ春蚊かな　同（同）
食卓の花より浮きし春蚊かな　雄月（同）
春の蚊やかはすともなき肱枕　曉水（續ホトトギス）
春の蚊や佛づとめの眉ちかく　健五（同）
硯屛の蔭より出でし春蚊かな　風生（同）
端近く膝抱き居れば初蚊かな　雨意（同）
春の蚊の酒肴の上をとびにけり　櫻坂子（同）

春の蚤（はるのみ）

季題解説 疊の敷合せや、床板の塵埃或は蒲團の縫目等で、假眠狀態のまゝ越年した蚤は、三四月頃氣温が高まると、俄かに眠りから醒めて、春慶色に輝く體を跳躍させるのである。また蛹であつた幼蟲が殼を破つて、弱々しくも燈下のまどゐに跳ねてゐるのなどを見るのである。**参照** 夏―蚤（のみ）

例句
春の蚤　春の蚤うすべり這うてかくれけり　石鼎（ホトトギス）

花見虱（はなみじらみ）

季題解説 元來虱は春夏秋冬を問はず、不潔にして居ればわくものであるが、冬季又は春季、衣服の著替怠りがちの候にわき易いものである。そして、冬季は何處となく薄黑い體色をしてゐるが、春暖に隨つて自ら白色鮮明に變つて、內臟機關が透視出來るやうになる。また活動も活潑になつて、外面例へば衣類の袖口や襟元へ這ひ出たりすることがたま〳〵ある。それが丁度お花見時分であるので花見虱といふのである。

例句
花見虱　ほのかにも色ある花見蝨かな　曉水（續ホトトギス）

春の蠅（はるのはへ）

季題解説 越年した生きのこりの蠅も、新らしく孵つた蠅もひつくるめて春先に見る蠅を春の蠅といふ。家のうちでも、いつも暖かい部屋とか厨の竈わきなどには、冬中一つ二つの蠅は居るものであるが、春暖かになると、緣側の日南や庭に萠えた草の上や石の上などに、たま〳〵一つ二つの蠅を見かける。總じて大きい蠅が春よく目につく。**参照** 蠅生る（はへうまる）　夏―蠅（はへ）

例句
春の蠅　冴えかへり又居ずなりぬ春の蠅　虛子（句集虛子）

蠅生る（はへうまる）

季題解説 春暖くなつて、越年の卵が蛆となり、蛹となり、蠅となつて來ることである。春の蠅といふのも大體同じ心持であるが、蠅が冬の間殆ど氣がつかなくなつて居るのに、春先になると、ふと蠅の居ることに氣がついた時、蠅がうまれて居るなといふ感が深くするものである。**参照** 春の蠅（はるのはへ）　夏―蠅（はへ）

例句
蠅生る　筍の皮より蠅の生れけり　王樹（同人）

苦力の脱ぎ置くぬのこ蠅生る　海扇（ホトトギス）
一つ扨て生れてさみし蘭の蠅　青畝（同　）
鉤の蛸蠅・生れてはとまりけり　枴童（續ホトトギス）

春蟬（はるぜみ）　松蟬（まつぜみ）

季題解說 五月頃から蟲のやうな聲で、たどしやん／＼と、木深い森、ことに松林の高いところなどに鳴き初める。蟬の一種で、形は蜩によく似てゐる。入梅になると不思議に鳴かなくなり、七月に入つてからまた鳴き出すやうである。

實作注意 夏季に入る可きものである。春蟬の名がある爲めに誤つて春季とした歲時記もある。既刊夏之部にも春蟬（春季）とある爲めに、こゝに掲げはしたが、夏である。參照 夏　蟬 三七

例句

春蟬　春蟬や虎杖しやぶる山家の子　栖乙（懸葵）

植物

梅

好文木　花の兄　春告草　匂草　香散見草　風待草　香栄草　初名草　野梅　白梅　臥龍梅　青龍梅　残雪梅　残月梅　小梅　豊後梅　枝垂梅　飛梅　鶯宿梅　箙の梅　老梅　梅が香　梅暦　梅園　梅の宿　梅の主

古書校註

【山之井】　かをりをめでゝは龍脳の梅花によせ、蘭麝の窓の梅ともつゞけ、古木は沈の榾、朽木の伽羅にたとへ、霞をむすびてはふせごの煙にいひたて、雪を香爐の灰など見なす。又薄墨の綸旨梅、枝やり梅や十文字などもいへり。花の兄といひては、太郎月にひらく共、惣領の家をつぎ木かとも、世にやたちえのなど、其えんを求む。彼の菅原の神木なれば、から梅を渡唐の天神、紅梅をみき天神の御顔にもよそふべし。猶又在中将は、梅の花ざかりに高子の御事を忍び、蘇子瞻は、散りこし花に李節推(一)を思ふ。是等の古事も、其のより所ならんかし。(略)又、梅暦といふ事、其のかずおほく見え侍る。されどたび〳〵梅暦などいひ出でぬれば、詞つまりて聞きにくしなど、かたぶきあへる人〳〵も侍りし。都て詞は、誰も知りて優なるぞよかめる。

【滑稽雑談】　萬葉集に、うめとも、むめともいへり。順の和名にも、うめと訓ず。

【栞草】　梅数品、あげて計ふべからず。中華には大庾嶺、梅多し。名勝の地とす。日本にては、山州日野・梅ケ畑・鞍馬・高雄・伏見の梅林、その外諸州に多し。(略)飛梅・江梅・紅梅・鶯宿梅・越中梅・箙の梅・とめこかしの梅・未開紅・鐺梅・八重梅・櫻梅・座論梅。○異名、好文木・このはな・花の兄・春告草・匂草・香散見草。(略)難波梅。中花にして淡白く千葉なり。○豊後梅。大花にして白く、八重にて淡紅なり。○軒端の梅。中花にして深紅也。紫のごとし、單葉なり。洛の寺町、誠心院の境内なる小式部の墳墓にあり。つたへ云ふ、和泉式部の愛せし處の木なりと。○行幸梅。大花にして紅なり。千葉○綸旨梅。これは行幸梅と同じものかといへり。

註　(一)東坡の愛した美少年。

季題解説　薔薇科に屬する落葉喬木で、原産地は中央亜細亜である。日本には野生なく、古く支那から渡來したものであることは、山林に一本の自生がないことでも判る。尤もこれには異説もある。早春百花の魁をなすとい

ふので、古來これを賞美した詩文は甚だ多い。しかし古事記にはまだ梅の文字なく、萬葉集に至つて始めて梅の字を見出すのである。それは柿本人丸の「梅の花さける岡邊に家居れば乏しくもあらず鶯の聲」といふ歌である。それ以前には單に花と稱したらしい。王仁が作つたといふ「難波津に咲くやこの花」の歌は梅を詠んだものと言はれてゐる。梅見の御宴は既に奈良朝から行はれてゐる。紫宸殿の前の左近の櫻も天德年中紫宸殿炎上の前は梅であつたといふ。梅にはかなり種類が澤山ある。色から見れば、紅・白・淡紅であるが、重瓣もあれば單瓣もあり、大輪もあれば小輪もある。

野梅（ヤバイ）（のうめと讀むべからず）は最も多く分布されてゐる梅で、正しい五瓣白色である。古來文學に現はれたのは皆この野梅で、後世幾十種の變種を生んでゐる。小梅には甲州梅と信濃梅とがある。花は中輪で白の一色である。實は甲州梅は細長く、信濃梅は小さいが肉が多い。何れも野梅に比して小形である。臥龍梅は龜戶の名木臥龍梅の種子の分布したもので、名の起りは枝幹地を這ふ特性からである。水戶光圀の命名で、花は白の單瓣、間々淡品もある。青龍梅は蕚の色淡綠色、花は純白、氣品高雅、元井上筑後守が培養し、この名を命じたものと傳へられる。殘雪梅は一名を衣更着（キサラギ）と呼び、枝は銅色を帶びて雅致深く、花は單瓣白色で香氣が深い。殘月梅は蕾の時の紅色が開くに從つて薄らぐところからこの名がある。正月頃から開き、花の覆輪が大きい。薫雪は野梅の一種で花の形美しく、雪を欺く白色で、香氣が高いところから珍重され、冷泉家からこの名をつけられたといふ。その他加賀白・叡山白・玉光梅・照水梅・山人・白妙・淺香山等。寒梅・八朔梅・冬至梅は冬である。（以上主として金井紫雲著「花と鳥」に依る。）

〔參照〕紅梅（コウバイ）　人事―梅見（ウメミ）　夏―青梅（アヲウメ）　冬―冬の梅（フユノウメ）

梅

〔例句〕

浪速津にさく夜の雨や梅のはな　宗因（梅翁宗因發句集）
梅さくやにほふがうへの萩茶碗　同（同）
されば爰に談林の木あり梅の花　同（同）
梅のはなとんでおごらぬ小宮哉　同（同）
盛なる梅にす手引風もがな　芭蕉（續山井）
此梅に牛も初音と鳴つべし　同（江戶兩吟集）
るすに來て梅さへよその垣ほかな　同（桒集）
さとのこよ梅おりのこせうしのむち　同（同）
またもとへやぶの中なるむめの花　同（同）
旅がらす古巣はむめに成にけり　同（鳥の道）
梅白しきのふや鶴をぬすまれし　同（孤松）
梅咲てよろこぶ鳥のけしき哉　同（芭蕉句選拾遺）
梅折て椿に迷ふたもと哉　同（もとの水）
古郷の梅や浪花の二年越　同（同）

蒟蒻のさしみもすこし梅の花　芭蕉（小文庫）
手鼻かむ音さへ梅のさかり哉　同（卯辰集）
香にほへうにほる岡の梅のはな　同（有磯海）
梅の木になほやどり木や梅の花　同（曠野）
御子良子の一もとゆかし梅の花　同（猿蓑）
梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　同（同）
のうれんの奥物ゆかし北の梅　同（菊の塵）
月まちや梅かたげ行小山伏　同（芭蕉翁全傳）
春もやゝけしきとゝのふ月と梅　同（蕉獅子）
人も見ぬ春や鏡のうらの梅　同（己が光）
梅が香につつと日の出る山路哉　同（炭俵）
梅が香に追ひもどさるゝ寒かな　同（荒小田）
梅が香に昔の一字あはれ也　同（笈日記）
かぞへ來ぬ屋敷々々のうめ柳　同（一字幽蘭集）
うめ柳さぞ若衆かな女かな　同（武蔵曲）
風が吹梅のつぼみはしつかりと　鬼貫（鬼貫句選）
鶯が梅の小枝に糞をして　同（同）
山里や井戸のはたなる梅の花　同（同）
梅散てそれよりのちは天王寺　同（同）
宿替に鼻毛も抜ぬ梅の花　同（同）
駒引の跡猶はやし梅の陰　同（俳諧七車）
雨雲の梅を星とも昔ながら　同（同）

一切經堂の繪馬に

梅が香や衆生にみちて軒の聲　同（同）
雁啼て夜のつるべにむめのはな　同（同）
としひとつ又もかさねつ梅の花　同（同）
笠に杖面影さがすむめの花　同（同）
つかみさしどこやら梅の不足顔　言水（俳諧五子稿）
梅のはな名によびよくてにほひ哉　來山（いまみや艸）
三味線も小哥ものらずうめの花　同（同）
野や里や梅見るまでは落つかず　同（續いま宮艸）
白梅もつきそへば又にほひかな　同（同）
梅さそふあらしの月や宵のくち　同（同）
草の戸や藪ともいはずむめの花　同（同）
きふのけふ風のかわきやうめの花　浪化（浪化上人發句集）
出てゐるや梅のつぼみに三日の月　同（同）
山畑のうめ菩行菜の古び　同（同）
蓑の毛に雪のけしきや梅の花　同（同）

卓散(タクサン)についてもたらず梅の花　同　（同）
引馬のたえぬや梅の築地陰　同　（同）

初會

月雪の場とりも廣しうめの花　同　（同）
うぐひすに墨のひなたやうめの花　同　（同）
梅が香にくらさもまじる山路哉　同　（同）
うぐひすの爪にもかけずうめの花　同　（同）
梅とひてその梅おがむなみだ哉　同　（同）
うめが香やひる盗人の去だあと　同　（同）
額あらふ流やうけてうめの花　同　（同）
指折て五度やむかしの梅の花　同　（同）
竹簀戸のあふちこぼつや梅の花　丈草　（丈草發句集）
待ことは梅にあるかも茶摺子木　同　（同）
梅がゝや湯立の跡の炭の切　同　（同）
片屋根の梅ひらきけり烟出し　同　（同）
水仙に作事は濟で梅の客　同　（同）
うめの花ちり初にけり灘追風　同　（同）
梅が香にまよはぬ道のちまたかな　同　（同）
酒賣のもどりは樽に野梅かな　同　（同）
高潮や海より暮てうめの花　去來　（去來發句集）
梅が香や山路分入る犬のまね　同　（同）
痩はてゝ香にさく梅のおもひかな　同　（同）
たゝく時よき月みたり梅の門　其角　（五元集）

元日、嵐珠噴あてし人の、句を祝へといふに

夜光る梅のつぼみや貝の玉　同　（同）
外様まで手向の梅を拜ミけり　同　（同）
梅寒く愛宕の星の匂かな　同　（同）
百八のかねて迷や闇のうめ　同　（同）
腕押のわれならなくに梅の花　同　（同）
篝木のゐくいは是にやみの梅　同　（同）
うめがゝや乞食の家も覗かるゝ　同　（同）
梅の花旦那を待て庭にあり　同　（同）
あぜを越目あても梅の匂かな　同　（同）
こつとりと風のやむ夜は藪の梅　同　（同）
なつかしき枝のさけ目や梅の花　同　（同）
守梅の遊びわさなり野老賣　同　（同）
さす枝のゆき届かぬや繪馬の梅　同　（五元集拾遺）
小袖着せて俤句へむめが妻　同　（同）

宿の梅概いかばかり青かつし　其角　（五元集拾遺）
黑の梅春やむかしのむかし哉　同　（同　）
三日月の命あやなし闇の梅　同　（同　）
むめ一輪一りんほどのあたゝかさ　嵐雪　（玄峰集）
輪に結ぶ梅をぬけたる月夜哉　同　（同　）

臥龍梅

白雲の龍をつゝむや梅の花　同　（同　）
こぼれ梅かたじけなさのなみだ哉　同　（同　）
この梅を遙に月のにほひかな　同　（同　）
梅干じや見知つて居るか梅の花　同　（同　）
梅が香に濃花いろの小袖かな　許六　（五老井發句集）
豆腐やもむかしの顔や軒の梅　同　（同　）
ちりしほやはぜうる里の梅のはな　同　（同　）
梅が香や粉ぬかちりゆく臼のあと　同　（同　）
梅が香や客の鼻には淺黄椀　同　（同　）
しづかさのうへの靜や梅花　惟然　（惟然坊句集）
梅さくや赤土壁の小雪隱　同　（同　）
うめの花赤いは〳〵あかいはな　同　（同　）
梅花あの月ながら折ばやな　同　（同　）
新壁や裏もかへさぬ軒の梅　同　（同　）
梅散て觀音艸の道の奥　同　（同　）
うめがゝや垣をへだつる草履取　北枝　（北枝發句集）

亡師百日の忌

とひのこす數やうめの花　同　（同　）
髭白きかたうど得たり梅の花　同　（同　）
手拭を籠に納めて闇の梅　同　（同　）
しら玉や梅のつぼみも一包ミ　支考　（蓮二吟集）
薪つむ軒の富貴や梅の花　同　（同　）
梅に梅里へをりなば木薬屋　同　（同　）
ほのかなる梅の雫や淡路島　同　（同　）
香利や梅より外に立盡し　同　（同　）
枯た歟とおもふだに扨梅の花　同　（同　）
むめが香にあかるゝ紙子坊主哉　同　（同　）
鶯の蹴立によるか梅の雪　同　（同　）
日當りの干潮に散るや梅の花　同　（同　）
雪の賦や銀杏の間にこぼれ梅　同　（同　）

常陸の國足洗ひといふ所に行暮て

椽に寐る情けや梅に小豆粥　同　（同　）

咲そめし梅のほそ風しづかさよ　杉風　（杉風句集）
むめが香やふるき軒端の杉の風　同　（同）
紙衣着て梅手折ぬる人のあり　同　（同）
梅ちかき庇柱やもたれもの　同　（同）
とぼ〱と日は入切てむめの花　同　（同）
そのゝ梅老木に花のしづかなり　同　（同）
水次しむめや齢のながからむ　同　（同）
花いづれ精進日にはしろき梅　同　（同）
足跡を野中の梅のあるじ哉　沾徳　（俳諧五子稿）
折て後貰ふ聲あり垣の梅　同　（同）
梅折れば鼻をさし出す弟かな　同　（同）
ひと筋は瀧のながれや梅の花　桃隣　（古太白堂句選）
梅咲や何が降ても春ははる　千代女　（千代尼發句集）
梅が香や風のあい〱木にもとり　同　（同）
梅の花咲日は木々に雫あり　同　（同）
むめがゝや石もかほ出す雪間より　同　（同）
梅がゝや戸の開音はおぼえねど　同　（同）
咲事に日を撰ばずや梅の花　同　（同）
梅がゝや尋ぬるほどの枝にさへ　同　（同）
梅が香や鳥は寐させてよもすがら　同　（同）
梅の月浪の間に〱二見かな　同　（同）
うめが香やことに月夜の面白し　同　（同）
梅がゝや谷へむかひに行戻り　同　（同）
手折らるゝ人に薫るやうめの花　同　（同）

追悼

梅ちるやまつのゆふべも秋の聲　同　（同）
なごり〱散までは見ず梅の花　同　（同）
梅がゝや朝〱氷る花の陰　同　（同）
梅が香や何所へ吹るゝ雪女　同　（同）
梅がゝにつれ立日さへまだ寒し　同　（同）
野邊の梅白くも赤くもあらぬ哉　蕪村　（蕪村遺稿）
風鳥の喰ひこぼすや梅の花　同　（同）
塊に笞うつ梅のあるじ哉　同　（同）
一羽來て寝る鳥は何梅の月　同　（同）
かはほりのふためき飛や梅の月　同　（同）
梅が香の立のぼりてや月の暈　同　（同）
散るたびに老行梅の梢かな　同　（同）
白梅やわすれ花にも似たる哉　同　（同）

松下の障子に梅の日影哉　蕪　村（紫狐庵聯句集）
みのむしの古巣に添て梅二輪　同（同）
梅が香に夕暮早き麓哉　同（月並發句帖）
梅がゝやひそかにおもき裘　同（書　翰）
水に散て花なくなりぬ岸の梅　同（同）
梅遠近南すべく北すべく　同（同）
傀儡の赤き頭巾やうめの花　同（同）
こちの梅も隣の梅も咲にけり　同（同）
源八をわたりて梅のあるじ哉　同（几董初懷紙）
舟よせて鹽魚買ふや岸の梅　同（連句會草稿）
梅咲て小さくなりぬ雪丸げ　同（同）
江の梅に龜の甲干す書間哉　同（同）
二もとの梅に遲速を愛す哉　同（蕪村句集）
出べくとして出ずなりぬうめの宿　同（同）
宿の梅折取ほどになりにけり　同（同）
隈〳〵に殘る寒さやうめの花　同（同）
うめ散や螺鈿こぼるゝ卓の上　同（同）
梅咲て帶買ふ室の遊女かな　同（同）
燈を置ヵで人あるさまや梅が宿　同（同）
梅咲ぬどれがむめやらうめじややら　同（同）
小豆賣小家の梅のつぼみがち　同（同）
うめ折て皺手にかこつ薫かな　同（同）
しら梅のかれ木に戾る月夜哉　同（同）
白梅や鶴裳を着てうたゝ對す　同（同）
しら梅や北野の茶店にすまひ取　同（同）
白梅や墨芳しき鴻臚館　同（同）
しら梅や誰むかしより垣の外　同（同）
具足師が古きやどりや梅の花　同（新五子稿）
御勝手に春正が妻か梅の月　同（同）
鳴瀧の植木屋が梅咲にけり　同（同）
一輪を五つにわけて梅ちりぬ　同（全　集）
無緣寺の日をなつかしみ梅花　同（同）
筵帆に香をうつし飛岸の梅　同（同）
白梅に明る夜ばかりとなりにけり　同（常盤の香）
梅咲ぬワれらが宿のとろゝ汁　同（落日庵句集）
能き價うらめや宿の梅の宵　同（同）
片足ハ麥へよけあふ梅の花　同（同）
かげろふの火加減もよし梅花　同（同）

ぬす人の梅やうかゞふ夜の庵　太祇（太祇句選）
枕香の梅をみよとの旅路かな　同（同）
梅活て月とも侘んともし影　同（同）
虚無僧のあやしく立り塀の梅　同（同）
春もやゝ遠目に白しむめの花　同（同）
な折そと折てくれけり園の梅　同（同）
此日ごろ梅にながるゝ野河哉　召波（春泥發句集）
宮高き人のにがみや梅花　同（同）
うめ生て是より瓶の春いくつ　同（同）
梅白く藪の緣にさす枝哉　同（同）
梅ぼしの酒しほすゝめ寺の梅　同（同）
梅折て斜にし見る木曲哉　同（同）
梅の月源氏の噂女房達　同（同）
梅折ば先夕月のうごく也　同（同）
醍醐出て二度に囉ひぬ梅二本　同（同）
二日目に葛家は成りぬうめの花　同（同）
短册と伏見の梅を一荷かな　同（同）
梅花美人來れり漸二更　同（同）
咄されぬ梅のあるじや道心者　同（同）
歸さの棒の片そぎんめの花　同（同）
白梅や春毎に見てめづらしき　樗良（樗良發句集）
谷口やこゝろすゞしき梅の花　同（同）
むめが香に誰も來ぬこそうれしけれ　同（同）
匂ひして隣の梅の見えぬかな　同（同）
暮る日や庭の隅よりうめの影　同（同）
白梅や謦て這入らるゝ身どの　同（同）
しら梅や垣の內外にこぼれちる　同（同）
んめの花なかばひらきて盛かな　同（同）
梅が香や折とる心はづかしき　同（同）
梅が香や風にみだるゝ絲のごとし　同（同）
門あげて朝から梅のにほひ哉　同（同）
梅が香におどろく梅のちる日哉　同（同）
風流や窓の白梅軒の竹　同（同）

兒子が妻の身まかりけるに
まぼろしに瘦顏見えて梅白し　同（同）
うぐひすの摺餌もほへむめの花　也有（蘿葉集）
桃ちりぬ梅さへ殘る世をいかに　同（同）
色も香もしる鳥ぞしる梅のはな　同（同）

鶯は休めて梅に月もよし　也有（蘿葉集）
とふとさや痩たる梅の影ぼうし　同（同）
北はまだ雁も見むかず梅の花　同（同）
北は又やみに隠れて梅の花　同（同）
此村に一えだ咲きぬ梅のはな　同（同）
春戸までの野心つきぬ梅の花　同（同）
八重の名は霞にも遅し梅のはな　同（同）
闇の香を手折れば白し梅の花　同（同）
下駄の泥たゝく垣根や梅の花　同（同）
梅が香や耳かく猫の影ぼうし　同（同）
花散に葉ゝなき梅の又寒し　同（同）
匂はぬに散らぬかはりか梅の花　同（同）
こゝまでの下駄の跡ありむめの花　同（同）
矢場もまだ片肌寒し梅の花　同（同）
鶯の糞ちり交てうめの花　同（同）
梅のちるあたりや炭の明俵　同（同）
うめ咲や火鉢にもどる置巨燵　同（同）
開帳の札たつ梅のさかり哉　同（同）
雙紙干す枝から咲や梅の花　同（同）
芳野にもよき弟ありうめの花　同（同）
梅さきぬ盗んだ人の垣根にも　同（同）
梅久し王母が桃も弟ぶん　同（同）
梅の花さくやとろゝの雪間より　同（同）
ぬすまれぬ日が畑にありむめの花　同（同）
散までを雁にも見せて梅のはな　同（同）
窓の梅眼鏡はづせば匂ひけり　同（同）
茶にいけぬ頃日梅のさかりかな　同（同）
餅黴て北に咲けりむめのはな　同（同）
飛はせじと垣にや結ひて梅の花　同（同）
蝶の目にはじめて赤し梅の花　同（同）
梅が香や柳のうごく度毎に　同（同）
折るための下駄なら借さじ梅の花　同（蘿の落葉）
梅替る垣や娘のあちらむく　同（同）
貫はふと這入れば梅は隣かな　同（同）
羽根つくや簞ふるほどの梅咲ぬ　同（同）
垣ゆひに一枝乞ひぬ梅の花　同（同）
尋ねたる枝こゝにありむめの花　同（同）
梅が香の岩にしむ時水の音　蓼太（蓼太句集）

むめがゝや心づよくも厚氷　同（同）
詩にねぢれ和歌に匂ふや梅花　同（同）
香について廻ればもとの梅花　同（同）
梅が香の外にこぼらぬ宿は何　同（同）
むめ咲やとまるもの皆にほひ鳥　同（同）
梅枝をはつれて寒き入日かな　同（同）
むめがゝや衣桁にうごく袈裟衣　同（同）
松梅に暮と正月二月かな　同（同）
道々も此木這てやむめのはな　同（同）
梅ちるや京の酒屋の二升樽　几董（井華集）
咲散らいざしら梅の伏見人　同（同）
をちこちや梅の木間のふしみ人　同（同）
墻を踰で罪得べしこの梅が宿　同（同）
白梅にこにそも氷雨の降日哉　同（同）
梅寒し奴にくるゝ小盃　同（同）
ぬつくりと寐て居る猫や梅の股　同（同）
から鶯や梅の中行懐手　同（同）
野梅咲て擢哥きこえずなりにけり　同（同）
埒もなき荆が中の野梅かな　同（同）
梅がゝに狂ふがごとし月の雲　同（同）
大事がる柿の木枯て梅の花　同（同）
畊さぬ穴に見らるゝ野梅哉　同（同）
木に残るこゝろや手折梅の花　同（同）
梅の春顔かくばかり白かつし　同（同）
梅の窓に毛氈ひくや毛唐人　同（同）
見ぐるしき畳の焦や梅の影　同（同）
富家も乏き家もうめさきぬ　白雄（白雄句集）
夜の梅寐んとすれば匂ふなり　同（同）
加はれる朧月の梅花郁ゝたり　同（同）
梅をりに舟よぶ多摩の渡かな　同（同）
馬の子の家にかへるや梅寒し　同（同）
捨氷院々の梅さかりなり　同（同）
朝夕や何れとならば夜のうめ　同（同）
梅が香や鮒ひつかけし釣の絲　同（同）
宿の梅といはるゝ宿よ松もよき　同（同）
ますら男の梅が香袖に射矢哉　同（同）
磬鳴て梅をらんこゝろうせてけり　同（同）
梅ゆひし藁假そののにほひかな　同（同）

うちひらけよき日あたりやうらの梅　白雄（白雄句集）
ひとゝして酒のみならへ夜のうめ　同（同）
便せよ麓はうめのくらま山　同（同）
人にものおもふ顔たき里の梅　同（同）
むさしのに松梅多きところ哉　同（同）
麦のたけ梅紅に春ふけぬ　同（同）
もどかしき梅二三日の莟かな　曉臺（曉臺句集）
梅咲て十日にたらぬ月夜かな　同（同）
火ともせばうら梅がちに見ゆる也　同（同）
曉のうめおかふくむ板戸かな　同（同）
御文庫のこなたおもてや梅の花　同（同）
かなぐつて捨る蔓ありうめのはな　同（同）
長嘯の名残もあらむをかの梅　同（同）
梅折て僧歸るかたは雲深し　同（同）
突立てぬしなき杖や梅かもと　同（同）
うめちるや草堂に僧歸し行　同（同）
我宿のうめはいつさく梅の花　同（同）
梅市を出て懐に梅のつぼみ哉　同（同）
梅林によるのほこりや薄ぐもり　同（同）
うめがゝやつぼみはさまるはかま腰　同（同）
水潜る節くれうめのした枝哉　同（同）
うめに月月をうらなる夜なりけり　同（同）
梅に月朗詠うたふ人あらむ　同（同）
梅が香やおもふことなき朝朗　蘭更（半化坊發句集）
梅咲や藪に捨たるすみだはら　同（同）
山陰や畑の中にむめの花　同（同）
軒の梅そば犬の吼にけり　同（同）
日の影や我肉ゆるき梅が下　同（同）
夕暮や飼猿下りて梅の月　同（同）
折音は誰ぞや寐覺に梅匂ふ　同（同）
梅の月消えて窓もる匂ひかな　同（同）
梅咲て門は海老やくにほひ哉　同（同）
痩骨に梅が香うつる朝かな　同（同）
花さいて梅をらぬ日はなかりけり　士朗（枇杷園句集）
江の上や二人してをる梅のはな　同（同）
白梅の大げしきなる野中かな　同（同）
釣のいとも香に匂ひけり梅の花　同（同）
うめがゝや藪の中まで掃ちぎり　同（同）

貫之の草のまくらぞうめの花　同（同）
梅がゝやかたじけなくも宵月夜　同（同）
眼も鼻もひらかせ給へうめの花　同（同）
からびたる影や藪木のうめの花　同（同）
散うめはみな墨染の匂ひかな　同（同）
山にふるき春あり梅の下傳ひ　同（同）
とりわきて蕎麥粉の爐や畠の梅　巣兆（曾波可理）
皿鉢の寒いうちなりうめの花　同（同）
とし毎に圍爐裏借るなり梅の主　同（同）
すべつても梅にすがらん杉田みち　同（同）
舟曳や五人見事に梅を嗅　同（同）
梅散るやなにはの夜の道具市　同（同）
蠣家根の出村へむくも梅の春　同（同）
うめ散や蛤貝の蝶つがひ　同（同）
柿壺や奥に老木の梅の花　同（同）
十團子に氣のつく梅の莟かな　同（同）
今出た歟花の梅田を梅の花　同（同）
村上の蜜柑召けり梅の花　同（同）
さくと見てふた夜過しぬ風の梅　成美（成美家集）
咲梅にひかりあはすや貝のから　同（同）
假家に名ふだかけけり梅の花　同（同）
人すめば水もこぼれて藪のうめ　同（同）
野の杭の人とも見えてうめの花　同（同）
ふる家や賣そこなふてうめの花　同（同）
古澤や牛にかゝるゝうめの花　同（同）
淺くさや梅すくなくてはるの空　同（同）
うめが香を袂に入れてそら寝かな　同（同）
梅がゝや灯心かけし軒のつま　同（同）
うめが香の家一ぱいに小雨かな　同（同）
東海道のこらず梅になりにけり　同（同）
梅に立や錢なき詩人淸く痩て　同（同）
梅咲けど鶯啼けどひとり哉　一茶（享和句帖）
丘の梅けさ見し枝もなかりけり　同（同）
梅守に舌切らるゝなむら雀　同（同）
袖すれば祟る杉ぞよ梅の花　同（旅日記）
梅の花見倒し買の手にかゝる　同（同）
ちる梅のかゝる賤しき身柱哉　同（同）
あれ梅といふ間に曲る小舟哉　同（同）

梅

来るも〳〵下手鶯よ窓の梅　一茶（旅日記）
梅か香やおろしやを這す御代にあふ　同（同）
梅か香やどなたか来ても缺茶碗　同（同）
蒲焼の香にまけじとや梅花　同（同）
梅咲くや見るかげもなき門に迄　同（同）
あさぢふや犬の盆子も梅の花　同（同）
それそこの梅も頼むぞ斧おろし　同（同）
梅咲くやあわれことしももらひ餅　同（同）

亀戸天満宮

御櫻御梅の花松の月　同（同）
梅の木のある顔もせぬ山家哉　同（旅双紙）
藪の梅主なし狀のさらさるゝ　同（七番日記）
月の梅の酢のこんにやくのとけふも過ぬ　同（同）
我梅やとにかく薄き衆生縁　同（同）
もゝんじの出さうな藪を梅の花　同（同）
畠の梅したゝか犬におどさるゝ　同（同）
渓の梅忽然と咲き給ひけり　同（同）
梅さくや我にとりつく不性神　同（同）
叢の梅よんどころなく咲にけり　同（同）
下戸村やしんかんとして梅の花　同（同）
幼子や掻々したる梅の花　同（同）
膳先へ月のさしけり梅の花　同（同）
門の梅不性〳〵に咲にけり　同（同）
梅が香やあつたら月か宗うらへ　同（同）
不性犬寐て吼るなり梅の咲く　同（同）
がら〳〵やびい〳〵うりや梅の花　同（同）
梅咲くや現金酒の通帳　同（同）
子地藏よ御手出し給へ梅の花　同（同）
梅が香よ湯の香よ外に三日の月　同（同）

一茶坊和守圖

そら錠と人には告よ梅の花　同（同）
小坊主よも一つ笑へ梅の花　同（同）
關守りの灸點はやる梅の花　同（おらが春）
藪尻の賽錢箱や梅の花　同（一茶句帖）
梅の花愛を盗めとさす月か　同（同）
梅折や天窓の丸い影法師　同（同）
菰剝げば早赤〳〵と梅の花　同（同）
ちさい子の麻上下や梅の花　同（同）

梅さくや地獄の門も休み札　同　（同）
梅散れば取て仕舞ふやかざり井戸　同　（同）
梅咲やしなのゝおくも草履道　同　（同）
黒塗の馬もいさむや梅の花　同　（同）
あながちに丸くならでも梅の月　同　（九番日記）
羽折きた女も出たり梅の花　同　（同）
梅さくや手垢に光るなで佛　同　（同）
梅が枝や欲にや希ぬ三ケの月　同　（同）
梅さくやごまめちらばふ猫の塚　同　（同）
笠着るや梅の咲日を吉日と　同　（一茶發句集）
我もけさ御僧の部なり梅の花　同　（同）
梅が香や平親王の御月夜　同　（同）
梅咲や唐土の鳥の来ぬ先に　同　（同）
赤いぞよあのものおれが梅の花　同　（嘉永板發句集）
餅組も一ざしきなりうめの花　同　（同）
梅に月いやみからみはなかりけり　同　（同）
鳥の音に咲うともせず藪の梅　同　（同）
咲たりな江戸生ぬきのうめの花　同　（同）
梅に月待れて出るもうと〳〵し　乙二　（たのゝえ草稿）
むつまじき神の宿にはうめの花　同　（同）
ものふりぬ梅の鳴子の鳴あたり　同　（同）
川風のさらば吹こせうめのうへ　同　（同）
かはる瀬の月の輪わたり梅の花　同　（同）
子を呼に出て子を連て梅ゆふべ　同　（同）
梅さけば茶の實植るときく日哉　同　（同）
うめの花これや小家は繪にも書　同　（同）
山間の空を嬉しとさく梅か　同　（同）
鬼つらや井戸のはたなるうめの花　同　（同）
丈艸が宿や梅待茶摺小木　同　（同）
大津繪は梅にうつらぬ寒かな　同　（同）
きのふ見しこゝろには似ずうめの花　同　（同）
ふそくなく夜に入ものや梅の花　同　（同）
眞中に窓ある家や梅の花　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
すくなきは庵の常なり梅の花　同　（同）
山里や梅の咲日もあればこそ　同　（同）
大日枝や小日枝の下の梅の花　同　（同）
山水の走りとまりやうめの花　同　（同）
人の見るが表なりけり野路の梅　同　（同）

折かけて人呼で居る野梅かな　蒼虬（蒼虬翁發句集）
家に添ふた跡もあるなり岨の梅　同（同）
大空に近いけしきやうめの花　同（同）
山間や白梅すこし家すこし　同（同）
しらうめやまだ風あらき岩の注連　同（同）
春の夜のみじかくなるも梅の花　同（同）
近よればまばらに成ぬさとの梅　同（同）
梅林夜を啼わたる鵶かな　同（同）
うめひと木夕山近く見ゆるなり　同（同）
梅の花ものにかくれぬけしき哉　同（同）
うめさくや木かげの柴もへる時分　同（同）
みちて来る潮やみつよつ梅の花　同（同）
藪川やうら戸〳〵の梅のはな　同（同）
つぼみからすき間も見えず嶇の梅　同（同）
あるはつの朝月見えずうめの花　同（同）
何の木も斯くは咲まじ梅の花　同（同）
世の中の願はしらず月とうめ　同（同）
すき間なく冴かへりけり月と梅　同（同）
雪とけたばかりの庭や月と梅　同（同）
酒賣らぬ根は捨に月と梅　同（同）
空のないけしき成けり月と梅　同（同）
人のいとま蕣も過て月とうめ　同（同）
立退て見てもはなれず月と梅　同（同）
梅さくや旅人山へかけのぼる　梅室（梅室家集）
祖父が田は四隅もなくてうめの花　同（同）
ほそ道の末はしれけり梅の花　同（同）
千代までの杖にと梅の立枝かな　同（同）
をる梅にいさみのなきも泪かな　同（同）
人だかりするや山家の梅の月　同（同）
此ごろや朝茶夕酒うめの花　同（同）
梅かつぐ一人にせまし渡しぶね　同（同）
山里や垣のはしらもうめの花　同（同）
おひ分や鎭先家の梅のはな　同（同）
花賣が梅につめたき雫かな　同（同）
垣通す枝のさきにもうめの花　同（同）
日は西に梅ほろ〳〵とこぼれけり　同（同）
飯焚て梅をりゆきぬ庵の友　同（同）
くせにして梅にもたすや釣瓶竿　同（同）

山鳥の尾にひく梅のにほひかな　同　（同）
神の守るやうでをられぬ野梅哉　同　（同）
すゝみ出て膝にのせけり梅の影　同　（同）
里も暮野もくれ山の梅白し　同　（同）
桑の樹も氣力ましけり梅の中　同　（同）
梅がゝや木履のぬげぬ畠中　野徑　（蕉尾琴）
夜の梅燭臺けして匂ひけり　大鷲　（文車）
梅一木一木づゝあり谷の寮　滄波　（同）
梅咲てものあたらしや杉の箸　しら尾　（同）
燈火も匂ふばかりや梅の花　沾峨　（吐屑庵）

貫之の梅に

梅がゝや慮外ながらも旅旁　閑女　（玉藻）
白壁をうしろに梅の月夜哉　楚山　（鶴春）
立出て見れば春也梅の月　大瑞　（竹の友）
蜘の巣に梅一片の光かな　花天　（伊丹句台）
浦里や櫓を立かけし梅の花　白龜　（花七日）
水たまり梅ちる庭の詠め哉　宗砌　（大發句帳）
梅白く咲けり門に僧一人　乙由　（麥林）
寺の名や忘れて梅の花盛り　李由　（小文庫）
此春も鐘樓は出來ず梅の花　吟江　（古き姿）
梅寒し座は緣とらぬ莚疊　沙明　（淡路嶋）
二もとや枝さしかはす梅の花　良水　（年尾）
梅の散る所こそあれねぶか畑　風篁　（桃の實）
鉢の梅待も二粒三粒哉　移竹　（新選）
這梅の殘る影なき月夜哉　野坡　（千鳥掛）
蝶一つ風に吹かるゝ野梅哉　登方　（恒誠）
八重の梅殘る枝なく咲にけり　乙外　（古今句鑑）
水鳥の嘴に付たる梅白し　野水　（あらの）
灰捨てゝ白梅うるむ垣根哉　凡兆　（猿蓑）

旅中口吟

岡あれば宮宮あれば梅の花　子規　（子規句集）
梅を見て野を見て行きぬ草加迄　同　（同）
崖急に梅ことごとく斜なり　同　（同）

弘道窟

烈公の冠正し梅の花　同　（同）
梅林の遙かに見ゆる水田かな　同　（同）

小集

床の梅散りぬ奈良茶をもてなさん　同　（同）

梅

墨竹の上に瓶梅の影を印す　子規（子規句集）

[illegible]

茶に匂ふ葵の紋や梅の花　同（同）
田螺なく小山田の梅咲きにけり　鼓道（若葉俳句）
聖堂のうしろに古し梅の花　同（同）
棕櫚の葉に枇杷の葉に梅の落花かな　碧梧桐（同）
梅林に入る奏の間の小径かな　同（同）
ちらほらと花つく梅の臥木かな　鳴雪（同）
磯づたひ梅咲く蜑が垣根かな　墨水（同）
墓原に梅咲きにけり海津寺　極堂（同）
三日雨四日梅咲く日誌かな　漱石（同）
夕飯のこげつく頃や梅の月　瓢亭（同）
片側は梅咲く垣の田圃かな　愚哉（同）
畦道や黍殻積んで梅の花　一寸（同）
門側桶の梅筆に赤し比丘尼寺　君蒼（同）
蘆舟につむや一本の梅しろき　青々（妻木）
薬香を乾かす梅の日向かな　初子（同人）
薬束の積みよせてある野梅かな　紫江（同）
一冬の柴の残りや梅の下　石鼓（同）
林中にひゞく流れや梅白し　鱸江（懸葵）
梅林に遊び暮れしが月上る　琅玕（同）
提げ来る灯に白梅の高きかな　鳳蹊（ホトトギス）
岡の上に今日静かなる谷の梅　芸城（同）
梅の中に敷石別れ堂頭へ　静雲（同）
梅林やある木は飛んで畑の中　木兆（同）
湯の神の石階高し梅の花　よりに（同）
白梅の散りたまりゐる小松かな　同（同）
梅林にさしかゝりたる瀬音かな　播水（同）
つぶ／＼と蕾むゆかしき枝垂梅　青畝（同）
しろ／＼と畠の中の梅一木　同（同）
岡本の梅の茶店の暖簾かな　虚吼（同）
梅林の崖より少年手擧げし　木圃（同）
背戸場の梅いたみつゝ咲きにけり　大果（同）
ありなしの客に火桶や梅の茶屋　せん女（同）
梅林や明日ある能の假舞臺　ゝ石（同）
梅林やいづこともなく夕煙　淺茅樓（同）
梅寒し老幹岩のはざまより　秋皎（同）
梅茶屋の緋まろべるふとんかな　爽雨（同）

垣透きて見ゆる障子や梅屋敷　無字（同）
みづ〳〵し久米の子に梅手折らせん　耕雪（同）
刈萱の束ね寄せある梅の花　風生（同）
鷄を追へば廻れり梅のもと　あふひ（同）
梅の宿都府樓瓦賣るとあり　菁果（同）
野梅折る蕾はら〳〵こぼれつゝ　橙黄子（同）
ころ〳〵と湯のわく音の梅の庵　京童（同）
盆梅のしだれし枝の數へられ　たかし（同）
かたまりてさびしかりける野梅かな　行人（續ホトトギス）
梅咲いて波おとなしき濱役所　惠葉（同）
大久保も繁華となりぬ梅の花　青邨（同）
夜の畦を偃ふ梅ありて行きがたし　秋櫻子（同）
九州の至るところの野梅かな　すゝむ（同）
梅林や何匹となく四十雀　花蓑（同）
窯裏に煤けし梅のさかりかな　末翁（同）
世嗣梅仕立てゝ父の逝かれけり　風外（同）
下枝にほの〴〵と咲き梅遲し　春眠（同）
梅の宿湯番代りてゐたりけり　今更（同）
洗髪乾く間あそぶ梅白し　楞童（同）
梅に在り紅梅に在る文日かな　たかし（同）
白梅の少し青しと思はるゝ　蚊杖（同）
紅白の梅の散りこむ潦　越央子（同）
梅林やきら〳〵と茅渟の海　圭草（同）
負籠をせぬ人ぞなき梅の村　夏山（同）
筵道炭俵道梅屋敷　自得（同）
ひとならび草の座はあり臥龍梅　みづほ（同）
もてなしの床几一つや梅の丘　播水（同）
臥龍梅礎は疊みに疊みたる　青畝（同）
行燈をかけし後架や梅の宿　一杉（同）
故鄕の梅が下なる小溝かな　虚子（句集虚子）
嵯峨として野梅の枝の花少な　同（同）
多摩の山左右に迫りて梅の里　同（續ホトトギス）
年違ふ三人の姿や梅の宿　同（同）
東より春は來ると植ゑし梅　同（同）

參考　うめ　Prunus Mume, Sieb. et Zucc.（いばら科）支那原產にして觀賞用として廣く栽培せらるゝ落葉喬木なり、樹の高さ二三丈に達し葉は卵形にして先端細く尖り緣邊に鋸齒を有す、早春葉に先ちて花を開く、白色を常とすれども又紅色、淡紅色等あり、五瓣多雄蕊一雌蕊にして香氣

甚だ可なり、花に一重と八重とあり、果實は核果にして梅雨の頃熟す、酸味多し、實を鹽漬とし食用とす。

紅梅（こうばい）　末開紅（みかいこう）

季題解説　梅にも紅梅があるので、心が許せる。同じ梅の花でも、紅梅だけは俗世間のものといふ感じがする。何となく親しみがある。あたたか味もある。春寒料峭などといふ感じはちつともない。白い梅が男だとしたら、紅梅は女である。長い髪を簪のやうに飾つて、あどけなく咲き装つてゐる紅梅の花には、如何にも賑々しい感じがある。等しく紅梅といふうちにも種類はいろいろあるが、何れも白梅より少し花期が遲いやうである。【[illegible]】

梅〻

例句

紅梅

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ　芭蕉（[illegible]華の巻）
紅梅のやがてといふて日數かな　浪化（浪化上人發句集）
紅梅に我影おかししろ紙衣　杉風（杉風句集）
紅梅やけふは涅槃に香をさゝげ　同（同）
紅梅は頰すまする妻戸かな　同（同）
紅梅やかの銀閣寺やぶれ垣　沾德（俳諧五子稿）
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺　蕪村（蕪村句集）
紅梅の落花燃らむ馬の糞　同（同）
紅梅や入日の襲ふ松かしは　同（蕪村遺稿）
紅梅や黄鳥とまる第三枝　同（書翰）
紅梅や古き都の土の色　同（落日庵句集）
紅梅や公家町こして日枝山　太祇（太祇句選）
紅梅の散るやわらべの番つゝみ　同（同）
紅梅や大きな彌陀に光さす　同（同）
紅梅に羽根つく音の名ごりかな　也有（蘿葉集）
紅梅や神のこゝろも堅からず　蓼太（蓼太句集）
紅をねぢれて梅のしぼりけり　同（同）
紅梅に睡れり衛士の久五郎　几董（井華集）
紅梅に衣もどし行や盜人等　同（同）
紅梅や照日降日の中一日　曉臺（曉臺句集）
はなみちてうす紅梅となりにけり　同（同）
紅梅や檜垣くづれておぼろ月　同（同）
紅梅にいともかしこし御鷹宿　巣兆（曾波可理）
紅梅に大根のからみぬけにけり　成美（成美家集）
紅梅にほしておくなり洗ひ猫　一茶（七番日記）

紅梅やうつとしかれば二本まで　同（嘉永板發句集）
紅梅や住あれたれど雌造り　蒼虬（蒼虬翁發句集）
しほらしき薄紅梅や花のしべ　同（同）
菅廟夜詣
紅梅や夜すがら燈す的の中　淡々（句集）
溫泉の町に紅梅早き宿屋かな　子規（子規句集）
六嚢
紅梅に牛の涙も氷るらん　同（同）
咲てから薄紅梅となりにけり　祖邦（新俳句）
紅梅の目に〳〵赤き蕾かな　煙霞郞（同）
紅梅や娘を人に逢はさゞる　靑嵐（春夏秋冬）
築山の紅梅水に映りけり　紫人（同）
紅梅のしだれしだれに縈むすび　紫水（ホトトギス）
近づけば紅梅の色褪せてあり　富久子（同）
紅梅や人の若さの妬まるゝ　美智子（同）
紅梅やそりかへりたるやまと菩　浙水（續ホトトギス）
紅梅の花の了へたるうてなかな　すゝむ（同）
紅梅の蕾いくつもこぼれをり　みづほ（同）
紅梅の紅の通へる幹ならん　虛子（同）

椿（つばき）

山茶（つばき）　山椿（やまつばき）　藪椿（やぶつばき）　乙女椿（をとめつばき）　白椿（しろつばき）　赤椿（あかつばき）　八重椿（やへつばき）　伊勢椿（いせつばき）　唐椿（からつばき）　玉椿（たまつばき）　千代椿（ちよつばき）　つらつら椿（つらつらつばき）　花椿（はなつばき）　落椿（おちつばき）　散椿（ちりつばき）

古書校註

【山之井】　つばきは、やちよもかはらぬ色をめで、玉椿といふを、玉によせて、琥珀珊瑚にもいひなす。椿餅とは、葉のわきに、白くふくれ出でたる物なり。木に餅のなりたるためしなどいひ侍りし。猶いせ椿・とびいりなど、其の名につきたる作意あめる。（略）椿の花は其の品々數へがたく、奇怪不思議の名ども此比聞え侍る。俳諧の道の廣さの德なれば、何事にてもいふべかめれど、もし知らぬ人疑ひ侍らば、作者の損にもなりぬべし。又珍らしき名を集めて、わざと百句などつらね出でむは別の事なりかし。猶其の花のあるじのついさう（二）などに、坐敷一さんにいひたらんは、又興有るべきわざにや。

【御傘】　椿、雜也。花を結びては春也。たとひ花の字なくとも、花の心ある句躰ならば、春に成るべし。連に一句の物なれば、誹には二あるべし。猶、椿市・椿餅は此の外に有るべし。椿の油・椿のあくなどは二句のうちたるべし。

【滑稽雜談】　和訓義解に云、和名つばきとはあつばの木也。上のあもじを略せる也。本草に、その葉厚く硬しと云ふ說に合す。（略）深冬に開く物又

多し。春に至りて咲けるを正とす。早咲椿はすべて冬季也。名月椿など、秋にも用ふべき也。

【栞草】 山茶、海石榴等をつばきと訓ず。〔一〕單の葉赤きものを山椿と名づく。これ乃ち本源なり。白・紅粉・絞り・紅、或は白相半ばす。八重・千瓣の種枚擧せず。秋より蕾を生じて、春花を開く。冬開くものを早椿と名づく。人以てこれを賞す。

列々椿。萬葉「巨勢山乃列々椿都良々々爾見乍思奈許湍乃春野乎」、〔二〕此の歌より作例となれり。つらつらとは、木の數本列なり生ひたる椿を云ふ也。○唐椿。葉狹く長く色淡くして澤ならず。葉の紋横細かにして、皺zに似たり。其の花重瓣、大きくして正紅なり。いはゆる蜀茶これなり。○玉つばき。八千代の玉つばき。「莊子」大椿と云ふもの有り。八千歳を以て春とし、八千歳を以て秋とす 云々 後拾遺 君が代はかぎりもあらじ玉椿ふたゝび色は改まるとも これ莊子にいへる大椿を以て、山茶に准へたる也。○二階椿。伊勢椿。花形のかはりたる別種の名なり。○落椿、散椿。

註 〔一〕單從 お世辭 〔二〕こせ山のつらつら椿つらつらに見つゝ思ふなこせの春野を。

季題解説 山茶科の常綠喬木である。日本及び支那のものであるが、我が國でも青森附近を限り、その以北には自生することがないといふ。咲き初めはよく大風の吹く三月頃からであるが、櫻の花が終り山吹が盛りだといふ時分まで咲き續けるのである。和漢三才圖會には「其蘤厚く大きに艷美なること牡丹芍藥に亞ぐ」とある。櫻や山吹のやうに花びらだけが散ることなく、花全體が地に音を立てゝ落ちるのが特徴で閑なものである。三才圖會はこれを「唯恨むらくは其萎むとき甚醜く其落るも亦脆きのみ」などと記してゐる。花は白・赤・紅白入り交つたもの、八重・一重と種類が澤山ある。京都の椿寺は老樹の椿を以て可成有名である。又大島が椿の名所であることも、洽く人の知るところである。供華に用ひても、活花として忌む人が多いのは、花の落ちる樣をわるく解釋して、御幣をかつぐ爲めであらう。

山椿即ち藪椿は野生種で椿の本源であるが、栽植しても趣は最もこれが多いやうに思はれる。玉椿・千代椿は椿の美稱である。つらつら椿といふのは栞草に依ると、萬葉の「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつおもふなこせの春野を」の歌から作例となつたので、木の數本列なり生ひたる椿をいふ、とある。

伊勢椿・唐椿、その他種類は極めて多い。椿の實からは油を製する。又櫻の葉で包んだ櫻餅があるごとく、椿の葉でつつんだ椿餅がある。[illegible] 人事―椿餅 ツバキモチ 冬―冬椿 フユツバキ

例句

椿　飛人やかの海底のたま椿　宗因 (寺島宗因發句集)

鶯の笠おとしたる椿かな　芭蕉（猿蓑）
葉にそむく椿や花のよそごゝろ　同（もとの水）
近水や椿ながるゝ竹のおく　同（同）
落ざまに水こぼしけり花椿　同（芭蕉句選）
此槌のむかし椿か梅の木か　同（芭蕉句選拾遺）
富士に行き椿にかくれ家に出づ　同（芭蕉句解）
水入て鉢にうけたる椿かな　鬼貫（鬼貫句選）
庭前に白く咲たる椿かな　同（同）
谷川に翡翠と落る椿かな　素堂（俳諧五子稿）
汲溜て玉に聲あり花つばき　來山（いまみや艸）
玉椿はしらも石になりかゝり　同（續いまみや艸）
花鳥の空に目のつく椿かな　浪化（浪化上人發句集）
鵯の觜いるゝつばきかな　同（同）
いちどきに涙も落る椿かな　同（同）
末廣にのする產衣や玉椿　同（同）
一むしろちるや日らの赤椿　去來（去來發句集）
玉椿晝とみえてや布施籠　其角（五元集）
鋸のからき目見しを花つばき　嵐雪（玄峰集）
椿踏む道や寂寞たるあらし　支考（蓮二吟集）
鳥の音も絶ず夜陰の赤椿　同（同）
鳥の巣に蓋してをけば椿哉　同（同）
これもその千代のしら玉花椿　杉風（杉風句集）
黴のつく餅わるころの椿かな　同（同）
鳥に落て蛙にあたる椿哉　桃隣（古太白堂句選）
あちきなや椿落うづむにはたずみ　蕪村（蕪村句集）
古庭に茶筌花さく椿かな　同（同）
玉人の座右にひらくつばき哉　同（同）
椿落て昨日の雨をこぼしけり　同（蕪村遺稿）
はらはらと霰降過る椿哉　同（同）
沓おとす音のみ雨の椿かな　同・（全集）
古井戸のくらきに落る椿哉　同（落日庵句集）
散てある椿にみやる木の間かな　太祇（太祇句選）
我庭を瓶に憐む椿かな　召波（春泥發句集）
里の子が拾ひ首する椿かな　同（同）
落なむを葉にかゝへたる椿かな　同（同）
山茶花は贋で有たと椿かな　也有（蘿葉集）
墓場にはさくらも見えず椿かな　同（同）
岩角に兜くだけて椿かな　蓼太（蓼太句集）

鳥の背白玉椿きはつきし　白雄（白雄句集）
葉おもてにかまくら椿咲にけり　同（同）
飽てたゞ鴨の吸花つばき　同（同）
なか〳〵にはゞ散つきよ赤椿　同（同）
赤椿咲し眞下へ落にけり　曉臺（曉臺句集）
村はしや竹につらなる梅椿　闌更（半化坊發句集）
片〳〵は椿で持ちし小家哉　一茶（株日記）
かまくらや昔どなたの千代椿　同（發句集）
我門に凍我慢してさく椿　同（一茶句帖）
月させどよく〳〵閑き椿かな　乙二（たのゝえ草稿）
花椿鬼門射る矢のむけ所　同（同）
鵜のやどる下の椿も咲にけり　蒼虬（蒼虬翁發句集）
春中ゝ花の相手や赤椿　同（同）
幹見れば二木なりけり落椿　同（同）
椿にも一筋つきぬ山のみち　梅室（梅室家集）
つばき落鷄鳴椿また落る　同（同）
椿おちて池の夕浪立にけり　同（同）
船あてゝおく〳〵やあまりにちる椿　同（同）
花さくやことしも折らぬ椿杖　同（同）
落ざまに水打こぼす椿哉　一艇（小弓）
曉のつるべにあがる椿かな　荷兮（あらの）

竹林深く宮も小暗し
野の宮の後に灯す椿哉　雁背（新選）
瀧口にたまりて落る椿哉　古用（翁反古）
掃て後塵あたらしや落椿　仙桂（韜隱筆）
散中に苔のたえぬ椿哉　吟江（心花）
つぎわけに咲けるや如意の玉椿　氏重（犬子）
碎けずに奥山椿流れけり　柳居（春の遊び）
藪椿木を割音にちりにけり　吟江（夢占春の部）
家こぼつ埃の中や赤椿　壺仙（文車）
赤門を入れば椿の林かな　子規（子規句集）
ぬかりたる森の阪道椿踏む　同（同）
赤い椿白い椿と落ちにけり　碧梧桐（新俳句）
一本の椿さかりや墓の中　墨水（同）
折りたれば枝のみじかき椿かな　夫水（同）
鶯の鳴く時落つる椿かな　格堂（春夏秋冬）
日はぬるく山行く顔に椿かな　素史（倦鳥）
門前のお染椿が咲きにけり　閑古城（同人）

一枝にかたまり咲きし椿かな　大盧（懸葵）
朽ち凹む藁屋根埋めぬ落椿　湘山（同）
葉を打つて落ちし花あり崖椿　石鼎（ホトトギス）
椿の下に皆まんまるや僧の墓　静雲（同）
椿山高からずして登りけり　亜石（同）
流れそめて渦従へり落椿　岩沙（同）
仰向きに椿の下を通りけり　たけし（同）
大揺れに揺れて椿や風の中　磊石（同）
椿寺いにしへの藥賣りにけり　嘲水（同）
落椿谿へ掃き落す處かな　岬人（同）
掃きめぐる大樹の蔭や落椿　春一路（同）
流れ來し椿に土橋わたりけり　秋櫻子（同）
落椿熊手にかけてあらけなや　同（同）
眞下に九頭龍川や山椿　絕海（同）
樋の口をほとばしり出し椿かな　泊月（同）
人まれに來ては見て去る椿かな　同（同）
女房の牛引きいでし椿かな　同（同）
大風にもまれどほしの椿かな　穭水（同）
落椿水くゞりゆくほのかかな　三巴女（同）
崖椿流水くらきところかな　李江（同）
八重椿紅白の斑のみだりなる　花蓑（同）
ことごとく咲いて葉乏し八重椿　同（同）
石段や烈風にとぶ落椿　櫻坡子（同）
落椿砂を起して流れけり　草餅（同）
莽端に流るゝ椿見えにけり　月童（同）
門川や流れ椿に添ひ歩く　朱朗（同）
落椿雨のはれまを泉汲む　手古奈（同）
こゝに來て風なくなりし椿かな　同（同）
巖の間を波とめぐれる椿かな　眉峰（同）
落椿客去にし卓に拾はせつ　ゐの吉（同）
いま一つ椿落ちなば立ち去らん　たかし（同）
古池にかゞやき落ちし椿かな　夢香（同）
兒等何時ものぼり折り居る椿かな　泊雲（同）
花もてる瀧のほとりの椿かな　漾人（同）

六　島

島人や椿の山に樵りゐる　豐水（同）
馬宿や椿にかけし油壺　桂香（同）
掃きよせて箕一ぱいの椿かな　茂葉（同）

椿

しがらみにくづれぬけたる椿かな　青嵐（ホトトギス）
掌に椿の玉や御陵守　萬と（同）
椿道綺麗に昔もくらさかな　茅舎（同）
落椿沈みかけしか流れけり　虚空（同）
馬の眼に映りて落つる椿かな　陽堂（同）
日あたりに掃き出されたる椿かな　三猿郎（同）
藪中に石段ありて落椿　雨圃子（同）
三つ四つお吉の墓の落椿　迷子（續ホトトギス）
曇りきて椿の色の改まる　王城（同）
濡緣に積りし雪や落椿　ひろ子（同）
ながれ來てしがらみつくる椿かな　夢香（同）
崖椿白き幹をば打隱し　草田男（同）
杜の中はや落れてゐる椿かな　七里峽（同）
額にはり頰にはりて子の椿姫　禪寺洞（同）
流れゆく芥の上の椿かな　良一（同）
仰向けに流れゆきけり二椿　東子房（同）
炭斗の花活となる椿かな　つや女（同）
みんなみの海湧立てり椿山　たかし（同）
遲れゐし雪どつと來し椿かな　同（同）
どうだんにみなのつて居り落椿　梅史（同）
海渡り來て暖き椿かな　泊月（同）
落椿して新しくせゝらげる　あふひ（同）
島の子の蜜を吸ふなる花椿　きゆう（同）
夜も晝も暗き花瓶の椿かな　何蝶（同）
眼白來て椿の花にかぶされる　耿陽（同）
無の一字かけたる床の椿かな　椎花（同）
かげりたるばかりの道や落椿　立子（同）
噴煙のにほふ椿の茶店かな　爽雨（同）
厠かる人の置きたる椿かな　木國（同）
落ちて皆轉る花や椿坂　虚子（句集　虛子）
大木の間にありぬ風椿　同（續ホトトギス）

参考　つばき（山茶）（Camellia japonica, L.）（つばき科）庭園に觀賞用として栽植すれども、又山地に自生する常綠喬木なり、幹の高さ一二丈に達し、其嫩き部も平滑にして毛を有せず、葉は橢圓形にして尖り光澤ありて厚く、細鋸齒を有す、春日赤色の肉厚き花を開き、花後圓き果實を結び秋に開裂し暗黑色の種子二三を吐く、種子より油を採る、自生の品をヤブツバキ又はヤマツバキと稱す、一重咲きなれど園藝品には種々の變品あり。ツバキを椿と書くは和字である。

初花（はつはな）

季題解説 今年初めて咲いた櫻の花をいふ。**参照** 花六

例句

初花

はつ花や急ぎゆほどに是ははや　宗因（梅翁宗因発句集）
初はなやまだ松竹は冬の聲　千代女（千代尼発句集）
初はなや花の邊の落葉かき　曉臺（曉臺句集）
はつ花をふもとにおきて後瀬山　蒼虬（蒼虬翁発句集）
はつ花や夜は力なき犬の聲　同（同）

花（はな）

花笑ふ　花の笑み　花の笑まひ　花の紐解く　花房　花の輪　花片　花盛　花錦　徒花　花の陰　花の本　花の奧　花の雲　花明り　花の虹　花の雪　花吹雪　飛花　落花　花散る　花の瀧　花屑　花の塵　花の淵　花の浪　花の柵　花の鏡　花の粧　花の顏　花の脣　花の肌　花の姿　花の香　花の笠　花を待つ　花の跡　花の形見　花の名殘　花を惜む　風の花　月の花　花朧　花埃　花を主　花を友　花冷え　花の雨　花の風　花の露　花の山　花の庭　花の門　花便　花の主　花の友

古書校註

【山之井】花とは櫻をいへど、たゞおしなべて千草萬木のうへにもわたり侍る。花のもとの一刻の宴は、千金にも換へがたく、ちる事の惜しさには命をもかろんじ、夜はよの目もあはず花を思ひ、まどろみては夢にも見、ねごとにもいひ、ひるは一日家路をも忘れて見ありき、暮るゝを悲しみ、明くるを悦ぶ。雨露を親といひ、風嵐をあだかたきとせり。猶しぼめる顔は、西施が胸なやみしよりいとおしく、花のゑみには、貴妃すら百の媚を失ひ、孔子も倒れまどひ、釋尊も腰うちぬかれ給ふべしなどやうに、めで慕ふ心をほいといへり。

【御傘】花。一座四句の物なれば、誹諧には五句すべき事なれ共、誹にも四句する也。其の故は、和漢にも四句なればかくのごとし。去嫁の大法、誹諧は和漢に准ずる故也。さり乍ら、誹諧には花洛・落花など聲にいひて、花と面をかへて今一つすべき事なりといへども、正花五つあれば、花の句賞翫にならざるにより、聲によみたる句も花四本の内なり。花に櫻は付侍る。されども前句の正花、櫻めきたる句躰ならば、同意に成る間、無用に侍る。櫻に花をはかたく付くべからず。連哥には櫻と花と面

をきらひ、誹諧には七句兩つる也

花紅葉。正花なれども雜也

花の雲。正花也。植物也。聳物也。花の雲、可二分別一物の所に入れたり。花を雲と見たるも、雲を花と見たるも、共に花の雲といふにより、植物・そびき物、兩方に嫌ふが尤もなれば、誹にも新式のごとく用ふる也。

花の瀧。正花也。(略) 瀧のごとくの落花をも、又、花のおり交りて落つる瀧をも、又、花の中に落つる瀧をも申す詞なり。山櫻咲き初めしより久堅の雲井にみゆる瀧の白絲、是等は落花の心少しもなきに、花のちるを花の瀧といふと、一篇に心得たるはあしき也。(略)

花の波。正花也。(略) 波の花は正花に非ず。白波のはなに似たるをいふなり。植物にあらず。

花の雪。正花也。植物に三句、ふり物に非ず。雪の花、植物にあらず、ふり物也。

【去來抄】 卯七曰、花に定座ありや。去來曰、定座なし。花の句はたかひに大切と讓り合ひ侍る故、裏十一句・十三句にて出す。十句・八句は短句なり。十三句目おのづから花の句となり侍る也。當流には此の說を用ふ。卯七曰、花を引上げて作るはいかに。去來曰、花を引上ぐるは二品有り。一つは一座に賞翫すべき人ありて、其の人に花をと思ふ時、其の句前にいたりて、前句より春季を出して望む也。是を呼出しの花と云ふ。又一つは一座の貴人・功者抔は他に讓るべき人もあられば、よきをり來る時は、呼出しを待たず花をなす。又兩吟の時は互に一本宛の句主なれば、讓退に及ばず。何方にてもひき上げて作する也。扨、散もなく花を呼出すは、ものゝ過にして、花主の罪にあらず。また故もなくみづから引上ぐるは、くわんたいの作者也。是等の事は隔心の會の式なり。常の稽古には兎も角も有るべし。人にふりかへたる花あり。これは花一句と思ふ人の句所あしきときは、我句を前にふりかへて花をわたす也。

卯七曰、猿みの集に、花をさくらにかへらるゝはいかに。(二) 去來曰、此の時、予、花をさくらにかへんと云ふ。先師曰、故いかに。去來曰、凡そ、花はさくらにあらずといへる、一通りはする事にして、花筆・茶の出花などを、はなやかなるによる。花やかなりといふもよる所有り。必竟花はさくらをのがるまじと思ひ侍る也。先師曰、さればよ、古へは四本の内一本は櫻なり。汝が云ふところも故なきにあらず。兎角作すべし。されど尋常の櫻にては、かはりたる詮なからんとなり。予、絲ざくらはら一ぱいに咲きにけり、と吟じければ、句、我まゝなりとわらひ給ひけり。

【滑稽雜談】 昔は嶽にも櫻を以て花と云ふ。中世以來、櫻をさして花とよめり。これらの說のごとく、和俗の花と呼ぶ者は櫻なり。

註 (一)滑稽雜談には、二月の部に、催花の項、三月の部には、花の項に續いて、造花・餉花・花瓶・花帳・花[illegible]・花[illegible]・花[illegible]・探花使・花の宴・花[illegible]・花車・花の都・花姿・花の鏡・花の波・花の露・

花の雪・花の雲・花の山の諸項が見えてゐる。年浪草にはこの他に、同じく三月の項に、花盛・花曇・花錦・花の雲・花笑ふ・花の顔・花の肌・花の粧・花の暦・花ぶさ・葩・花の宿・花の窓・花の扉・花の戸・花心・心の花・詞の花・花衣・花の袖・花の袂・花がたみ・花皿・花筵・花桶・花生・花入・花筒・花瓶・花見車・花笠・花の隱身・花蔓・花半穗・花の盃・花の輪・雨花・花の踊・花の縁・花の香・はな〳〵し・飛花・落花・花の主・花のあるじ・花守・花園・花圃・花嫁・花聟の諸項が見えてゐる。（一）猿蓑所載の連句に、名殘の裏の花の定座の句に「糸櫻腹一ぱいに咲きにけり」といふ去來の附句があるのをいふ。

季題解說 花と云へば櫻花のことである。花に關する季語は甚だ多い。玆にその中の主なるものについて解說を試みよう。花の雲は、遠方から見た花が雲のやうに見えるのをいふ。花吹雪といふのは、風に吹かれた花が雪のやうに散るのをいふ。花屑・花の塵は、共に散り敷いてゐる花びらのことである。花の雨は、花に降り注いでゐる雨のことである。花冷えは、花時にしば〳〵來る時候の寒さをいふ。花衣・花人・花疲れ・花埃は何れも花見の見が略されたものである。花篝・花雪洞・花灯は何れも夜櫻に景を添へるためのものである。殊に花篝は花のほとりに焚く篝火であつて、京都の圓山公園にあるものが最も有名である。

人事—花見（ハナミ）　時候—花時（ハナドキ）　天文—花曇（ハナグモリ）　**參照** 初花（ハツハナ）　殘花（ザンクワ）　櫻（サクラ）

例句

花

江戸を以て鑑とす也花に樽　宗因（梅翁宗因發句集）
花や是春宵一刻ふる手形　同（同）
な折りそとしかるに一枝の花の庭　同（同）
淨瑠璃も語り出しかの花の友　同（同）
花では御名をばえ申す舞の袖　同（同）
さきの日に見しやそならぬ花ざかり　同（同）
これもいかに佐夜の中山花の晝　同（同）
闇は名のみ花に名こその御意はなし　同（同）
世の中のうさ八幡ぞ花に風　同（同）
花はちり寺はこんりうじぶん哉　同（同）
花にあかで壁はいつまでも一夜庵　同（同）
あととはむ他力本願の花の友　同（同）
いざ馬士等はや吾妻見む花盛　同（同）
風便や花ちりゆのよし野山　同（同）
かいしきの花も折敷と云つべし　同（同）
觀音のいらかみやりつ花の雲　芭蕉（末若葉）
散花や鳥もおどろく琴の塵　同（同）
花にうき世我酒白く食黑し　同（虛栗）
花の雲鐘は上野か淺草歟　同（續虛栗）
鸛の巣もみらるゝ花の葉越哉　同（同）
先しるや宜竹が竹に花の雪　同（江戸廣小路）

花

鶴の毛のくろき衣や花の雪　芭蕉（のぼり鶴）

うぢ山や外様しらず花盛　同（大和順礼）

花ざかり山は日ごろのあさぼらけ　同（小文庫）

花に明ぬなげきや我が哥ぶくろ　同（[illegible]山井）

春風に吹出し笑ふ花もがな　同（同）

夏ちかしその口たばへ花の風　同（同）

阿蘭陀も花に来にけり馬に鞍　同（江戸蛇の鮓）

花に酔り羽織着てかたな指す女　同（[illegible]深川）

樫の木の花にかまはぬすがたかな　同（曠野）

月花もなくて酒のむひとり哉　同（同）

花のかげ謡に似たる旅ねかな　同（同）

花咲て七日鶴見るふもと哉　同（一橋）

花に遊ぶ虻な喰ひそ友雀　同（[illegible]の原）

蝙蝠も出よ浮世の華に鳥　同（[illegible]集）

いざ落花眼裏のほこりはらはせん　同（[illegible]歌仙）

猶見たし花に明行神の顔　同（信夫摺）

さびしさや花のあたりのあすならう　同（陸奥衛）

しばらくは花の上なる月夜かな　同（初蝉）

花を宿にはじめ終りや二十日程　同（同）

此ほどを花に禮いふわかれかな　同（芭蕉句選拾遺）

世にさかる花にも念佛申けり　同（同）

のみ明て花生にせん二升樽　同（同）

龍門の花や上戸の土産にせん　同（笈の小文）

酒のみに語らんかゝる瀧の花　同（同）

何の木の華ともしらず匂ひ哉　同（名月集）

紙衣のぬるとも折む雨の花　同（一幅半）

鐘消て花の香は撞夕かな　同（都曲集）

土手の松花や木深き殿作り　同（芭蕉翁全傳）

四方より花吹入てにほの波　同（卯辰集）

花の山二町のぼれば大悲閣　同（もとの水）

花の陰硯にかはるまる瓦　同（同）

支考東行餞別

此こゝろ推せよ花に五器一具　同（葛の松原）

西行の庵もあらむ花の庭　同（芭蕉句選）

九重の肰より花のこぼれけり　鬼貫（鬼貫句選）

又もまた花にちられてうつら〳〵　同（同）

うつろふや陽の花に陰の花　同（同）

盛なる花にも絶ぬ念佛かな　同（同）

何くれと浮世をぬすむ花の陰　同　（同）
又ひとつ花につれゆく命かな　同　（同）
咲からに見るからに花のちるからに　同　（同）
武士も見ながら散す花の風　同　（同）
花散て又しづかなり園城寺　同　（同）
昔見よやゐなかの花の黒き事　同　（俳諧七車）
我ひとりむれつゝ花の旅がらす　同　（同）
樹の奥に瀧も音して花や咲　同　（同）
花の香やむかしの袖に源氏雲　同　（同）
目うつりや花にむせたるよしの山　同　（同）

人麿影供に
白雲は幾代の花の歌ぶくろ　同　（同）
折よしと花もほゝゑむ軒端かな　同　（同）

或人の老母九十の賀に
世の花や百の峠の九十から　同　（同）
花と見てをられぬ水に石の雲　同　（同）
筏の床嵐の花や敷ふすま　言水　（俳諧五子稿）
下戸花に腹を切べし芳野越　同　（同）
行くものは隔夜ばかりぞ花の陰　同　（同）
はや花に女夫物くふ後堂　同　（同）

芭蕉居士の舊跡を訪ふ
志賀の花湖の水其ながら　素堂　（同）
至れりや杉を花とも社とも　同　（同）
宿からん花にくれなば貫之の　同　（同）
折事も高根の花や見たばかり　来山　（いまみや草）
花ちりてよい古び也一心寺　同　（同）
錢賣の花にまじるも都かな　同　（續いま宮草）
吹風を見よとて花の狂ひかな　同　（同）
花咲て死とむないが病かな　同　（同）
散る時はちるでもつたる神の花　同　（同）
鳥も啼鐘は花よりとつとらへ　同　（同）
花いけてそこに丸寐や刀鍛冶　同　（同）
梟もたちのく花の夜明かな　浪化　（浪化上人發句集）
嫁星もうへにくづるゝ花の空　同　（同）
馬おりやいざ先花に旅衣　同　（同）

夕里が亡妻をいたむ
こたへたる花にも泣か二七日　同　（同）
身におくも心のみのや花の雨　同　（同）

花

花咲て日自の旗や廿日ほと　浪化　（[illegible]十人集）
白妙に月夜鳥や花の果　丈草　（丈草發句集）
角入た人をかしらや花の友　同　（同）
ちるかたは志賀にしておけ滝の花　同　（同）
水垂にうつるや花の人出入　同　（同）
花ちるや鼬あひたる岩の穴　同　（同）
死だとも留主ともしれず庵の花　同　（同）
夕ばへや花の波こすあらつゝみ　同　（同）
小疊の火燵ぬけこや花の下　同　（同）
笠松に舞もどりけり花の友　同　（同）
木啄や枯木をさがす花の中　同　（同）
小鍋ほす尼なつかしや窓の花　去來　（去來發句集）
咲花にうき世の人や神せゝり　同　（同）
花をまつ日數によごすころもかな　同　（同）
散錢も用意顔なり森の花　同　（同）
木の空の天狗も今は花の友　同　（同）
立枯の殘り多さよ花の中　同　（同）
花に今眠入けり志賀の浦　同　（同）
此／＼と花の名殘や筆扇　其角　（五元集）
花に籠そこのきたまへ喧嘩買ひ　同　（同）
植木屋の亭主留守なり花いまだ　同　（同）
池を呑犬に人あひ花の影　同　（同）
ちる花や踏皮をへだつる足の心　同　（同）
花に酒僧とも侘ん鹽ざかな　同　（同）
花を得ん使者の夜道に月を哉　同　（同）
我奴落花に朝寢ゆるしけり　同　（同）
花は都物くるゝ友はなかりけり　同　（同）
花にこそ表書院でお月代　同　（同）
花に來て都は暮の盛りかな　同　（同）
はな盛りふくべ蹈わる人も有り　同　（同）
花に逢て親達よばん都かな　同　（同）
寐よとすれば棒つき廻る花の山　同　（同）
御近習や花のこなたにかたをなみ　同　（同）
緣からはこなた思ふや花の庭　同　（同）
地藏や花の外には松ばかり　同　（同）
賜息にあの花をれと山路哉　同　（同）
傳奏にものかは見ばや花の門　同　（五元集拾遺）

大佛嗔うづむらん花の雪　同（同）
德利狂人いたはしや花故にこそ　同（同）
かんざしやちり行花のおもしにも　同（同）
花提けてやり手がひとり寺參り　同（同）
彫レ笛縫レ嚢花に晴せん浮世哉　同（同）
泣てよむ短册もあり花は夢　同（同）
花風や天女負れて步渉り　同（同）
花さかば告げよ尼上の斧おろし　同（同）
白鳥の酒を吐らんはなのやま　嵐雪（玄峰集）
あしおもや爪あかりなる花の山　同（同）
逢坂は關の跡なりはなの雪　同（同）
女中方尼前は花の先達か　同（同）
雲雪と仇名も云はじ花ざかり　同（同）
富士を見ぬ哥人もあらん花の山　同（同）
新發意が花折あとや山颪　同（同）
稚好の莚おりけり花ざかり　同（同）
手習の師を車座や花の兒　同（同）
花に風かろくきてふけ酒の泡　同（同）
普化去りぬ匂ひ殘りて花の雲　同（同）
年ゝに倘いそがしや花ざかり　許六（五老井發句集）
春死なば花に迷はん後の闇　同（同）
から居るも大せつな日ぞ花ざかり　惟然（惟然坊句集）
古沓や花の旅出の拾ひばき（？）　同（同）
酒部屋に琴の音せよ窻の花　同（同）
文臺に扇ひらくや花の下　同（同）
梟のしらみ落すなはなの陰　北枝（北枝發句集）

春日奉納

此神の山なればこそ花に鹿　同（同）
鐘つきを誰も見によるはなの山　同（同）
白妙に花やさくらの枝くばり　同（同）
會下僧の旅だつ跡や花の雲　同（同）
柿の袈裟ゆつり直すや花の中　同（同）
湖やこゝろはしりて四方の花　同（同）
燒にけりされども花はちりすまし　同（同）
異見して花に別るゝ狐かな　支考（蓮二吟集）
朝鷹の濡て出るや華の中　同（同）
日晴ては落花に雪の大井川　同（同）
笑ふのが正門ならめ花の山　同（同）

花の跡南へむけし杖の先　　支考（二二吟集）
鳥あと云れて安し花の中　　同（同）
花三八、ャ情ケノ一
花にそゝぐ泪やしでに艮り　　同（同）
凪なぎや花にとられたつ市の魚　　杉風（杉風句集）
待花に小寒い雨のさした哉　　同（同）
このもしや花の中なるしはの庵　　同（同）
花盛り大渡中となりけらし　　同（同）
雨に散る花やみぞれにかへるかと　　同（同）
ひとり居て独物いふはなつもと　　同（同）
眞盛牢も見落す谷もはな　　同（同）
花に氣のとろけて戻る夕日哉　　同（同）
笑れに行ば花に老の皺　　同（同）
花に散まに吹れ行はなの果　　同（同）
散りしあと咲ぬ先こそ花戀し　　同（同）
花にあけ松に暮れたる閑所哉　　同（同）
つれたちて道はくれしや野邉の花　　浩徳（俳諧五子稿）
ます影もなつかし花の連歌堂　　同（同）
鶺の尾に訴状はなし花の友　　同（同）
日こそあれ花に家路は五町程　　同（同）
ついこけて寐るとの鐘や花の陰　　同（同）
むまや路や泥も嫌はで落る花　　同（同）
花は咲け湖水に魚は住ずとも　　桃隣（古太白堂句選）
波鮎の網に花なしさくら川　　同（同）
赤松の木末や乗垂花の瀧　　同（同）
土浦の花や手にとる筑波山　　同（同）
額にて拂や三笠の花の塵　　同（同）
何國まで花に呼出す昔狐　　同（同）
見遥れば墨染に成花になり　　千代女（千代尼発句集）
どち見んと花に狂ふやよしの山　　同（同）
百とせの枝にもどるや花の主　　蕪村（双林寺千句）
石高な都よ花のもどり足　　同（新五子稿）
雲を呑て花を吐なるよしの山　　同（同）
花刈りて身のドやみやびの木笠　　同（花鳥篇）
空にふるはみよしのゝ櫻蝿幾の花　　同（[illegible]羅念佛）
散花の反古に成や竹はゝき　　同（全集）
花の雲五色の雲のうはがさね　　同（同）
ゆく水にちればぞ贈る花の雲　　同（同）

花の香や嵯峨のともしび消る時　同（蕪村句集）
花に來て花に居眠るいとま哉　同（同）
花に舞はで歸さにくし白拍子　同（同）
居風呂に後夜きく花のもどりかな　同（同）
花に暮て我家遠き野道かな　同（同）
嵯峨へ歸る人はいづこの花に暮し　同（同）
花の御能過て夜を泣ヶ浪花人　同（同）
かくれ住て花に眞田が謠かな　同（同）
玉川に高野の花や流れ去　同（同）
なら道や當歸ばたけの花一木　同（同）
ねぶたさの春は御室の花よりぞ　同（同）
花を踏し草履も見えて朝寢哉　同（同）
花ちるやおもたき笈のうしろより　同（同）
阿古久曾のさしぬきふるふ落花哉　同（同）
花ちりて木間の寺と成にけり　同（同）
祇や鑑や花に香炷ん艸むしろ　同（蕪村遺稿）
花にくれぬ我住む京に歸去來　同（同）
下やしき僧都の花も隣けり　同（同）
花に來て鱠をつくる嫗哉　同（同）
みよし野に花盜人はなかりけり　同（同）
花ざかり六波羅禿見ぬ日なき　同（同）
かり寢するいとまを花のあるじ哉　同（同）
身に更に散かゝる花や下り坂　同（同）
ちりつみて筏も花の梢かな　同（同）
烏帽子脱て升よと計る落花哉　同（同）
久平に逢ふやお室の花ざかり　同（同）
草臥てねにかへる花のあるじかな　同（隱口塚序）
月光西にわたれば花影東に歩むかな　同（四季文集）
花散月落て文斯にあら有がたや　同（文集）
鶯の適〳〵啼や花の山　同（連句會草稿）
水吸に鼠出けり瓶の花　太祇（太祇句選）
口たゝく夜の往來や花ざかり　同（同）
筏士よ足のとまらぬ花ざかり　同（同）
付まとふ内義の沙汰や花ざかり　同（同）
あるじする乳母よ御針よ庭の花　同（同）
實是は只引ことをまめなる男云云
死れたを留守とおもふや花盛　同（同）
齒を鳴し句成て立り花の陰　同（同）

ちる花の雪の草鞋や二王門　太祇（太祇句選）
華の色や頭の雪もたとえもの　同（同）
舟橋の勅使まうけや花の雲　召波（春泥發句集）
いで花に昔粮包め我は酒　同（同）
哀れなる痩地の麥や花の道　同（同）
焼火かと夕日の數や花に鐘　同（同）
落る花ひとかたならぬ夕かな　同（同）
落ながら雨の日頃や落る花　同（同）
菴の雨花相似ざるきのふには　同（同）
仁和寺やあしもとよりぞ花の雲　同（同）
西陣や花に夫婦のにしめもの　同（同）
いとゞしく花に怠る箒哉　同（同）
花踏て戻る公卿の艸履かな　同（同）
花を照らし月又花にくもる哉　樗良（樗良發句集）
花ざかり鳥のたよりに曇けり　同（同）
四方の花に心さはがしき都かな　同（同）
ちる花やまぎれて見えぬ人の顔　同（同）
引組で薄たり花に酒の醉　同（同）
しつかさや散るにすれあふ花の音　同（同）
もろ人や花を分入花を出す　同（同）
雲高く風たえて花のあらし山　同（同）
めざむるや花吹おろす大炊川　同（同）
食さわけて樂みたれり軒の花　同（同）
人のあたま花に隱るゝ榮かな　同（同）
花に狂へ墨には染ぬ蝶の袖　也有（蘿葉集）
花高し懸る春の朝霞　同（同）
月にのべて花に短し猿の臂　同（同）
見て回れ枝つく國の花ざかり　同（同）
名は竹と呼ばせて花のあるじかな　同（同）
顏に似ぬ花は木うりも背負けり　同（同）
鳥宿す花やこゝろに針はなき　同（同）
花踏だ香に捨かねるわらぢかな　同（同）
蛇にならふより蝶となれ花の陰　同（同）
くもらずに花も見立る首途哉　同（同）
散る花に踏べからずの札もなし　同（同）
無掃除の日を來て見たし寺の花　同（同）
鐘つきや花折らぬ手を嘗まるゝ　同（同）
こちの花咲て隣に醉人かな　同（同）

下戸と鬼ばかり出せ花の大江山　同　（同）
花ちりてもう一葉まつ笹かな　同　（同）
をれ〳〵と折せて花のあるじ哉　蓼太　（蓼太句集）
長閑さは夜にこそあれ花ざかり　同　（同）
花散て猶永き日と成にけり　同　（同）
かばかりの花に置らむ夜の霜　同　（同）
是ほどにちらずばたゝじ花の陰　同　（同）
身にしみて音聞花の雨夜かな　同　（同）
落たるを拾ふ鳥なし花ざかり　同　（同）
芝居皆やすむでもなし花盛　同　（同）
歌一首もたぬ山なし花の雲　同　（同）
紅葉より花にかしこし奈良の鹿　同　（同）
しら雲やちる時花のよし野山　同　（同）
めづらしや芳野を下りて花一木　同　（同）
花喰に鮎ものぼるかよしの川　同　（同）
ちる花をあつめて瀧のみかさ哉　同　（同）
苔清水花かきわけて結びけり　同　（同）
むかし誰枝はねてや蜂の花　同　（同）
君見ずや花に我等がおとし文　几董　（井華集）
來たか來い見ずに置てもちる花ぞ　同　（同）
百花咲てかなしび起るゆふべ哉　同　（同）
花過て雨にも疎くなりにけり　同　（同）
雲水の香をせきとめて花の塚　同　（同）
晴るよと見ればかつ散雨のはな　同　（同）
女犬して住持降しぬ花に鐘　同　（同）
廿とせの小町が眉に落花かな　同　（同）
植木屋の花うれぬ間に盛かな　同　（同）
花競ふ寺としもなしひがし山　同　（同）
二日見ていかさま花のよし野山　同　（同）
さむしろに錢置花のわかれ哉　同　（同）
花手折美人縛らん春ひと夜　同　（同）
挿木に餘所の花ちるうらみ哉　白雄　（白雄句集）
地祭や松のひま又花のひま　同　（同）
椎寺も雨の降かに花のあめ　同　（同）
ちからなき旅して花に墓參　同　（同）
花にけぶり軒の嫉なしと詠りけり　同　（同）
日の匂へ小瓶に椒酒花ぞかし　同　（同）
鐘つきを畫にかく花の麓かな　同　（同）

花

寺々を通りぬけけり花ざかり　白雄　（白雄句集）
水かさや香をのみ花の口おしき　同　（同）
花のもとたちされば四方は夕曇り　曉臺　（曉臺句集）
なか／＼に寒きぞ花にたのみある　同　（同）
春の哀れ花の東に見る夜かな　同　（同）
夕雨やはなのあたりをうちかくす　同　（同）
花に暮て岩に角なし鈴鹿山　同　（同）
春の花法りのたすけと見るまでぞ　同　（同）
けふ來ずばきのふの花のあらし山　同　（同）
花に歎き又花を呵す天龍寺　同　（同）
戀々とはなにしづめりあらし山　同　（同）
花は根に我に五尺の地を得たり　同　（同）
おもへたゞ心はなれてはなもなし　同　（同）
ちるは／＼嵐に峰のはなのこゝろ　同　（同）
我／＼も花に袖する御室哉　闌更　（半化坊發句集）
活て居て望の日の花備へけり　同　（同）
時なれや花の中なる翁堂　同　（同）
夕暮や花に猪追ふ嵐山　同　（同）
花に並ぶ松風光る夜と成ぬ　同　（同）
雨そぼ／＼花の梢に猿の尻　同　（同）
湖てるやまた吹入ぬ四方の花　同　（同）
道のため花に寐初よ岩まくら　同　（同）
いざ行ん魂花に染るまで　同　（同）
留主に來ても居よき花の軒端哉　同　（同）
起／＼に花見るやどの菜汁哉　士朗　（枇杷園句集）
散來るを花と見てこそ日はさむれ　同　（同）
蝶鳥もみなやすげなり花のかげ　同　（同）
よきことはいひたきものよ花のかげ　同　（同）
よきほどに花のかげある山路かな　同　（同）
花七日ものもくはさぬ嵯峨の宿　同　（同）
淋しかれとけふこそおもへ花のかげ　同　（同）
花に鉦いかなる聖のほろぶらん　同　（同）
年／＼に花の見やうのかはりけり　同　（同）
花の木にむすびかけたる菴も哉　同　（同）
はなの事いひ／＼もどる山路哉　同　（同）
花の雲これらも閑ならざるや　同　（同）
花とりやさらでも竹はみどり也　同　（同）
年々や花守る宿の薪一駄　同　（寛　立）

鵜の枯す木の間の花の咲にけり　巣兆（曾波可理）

歸るさに松風きゝぬ花の山　同（同）

椀家具も音せで花の小鹽山　同（同）

宿かりてまた見ん花のあらし山　同（同）

先花の大山崎やひがし山　同（同）

ちる花や帶しめ直す石の上　同（同）

寢ごゝろも燕持兒や門の花　同（同）

四阿を馬屋にしけり花の雨　同（同）

はなやさく心にかゝる夜着の襟　成美（成美家集）

あはたゞし今日花さくと人はいふ　同（同）

ねるほどは風ふく花の木の間かな　同（同）

花の中大事にもてよ桶の水　同（同）

なれながら芽をはる花の下枝哉　同（同）

貧乏が追ふても來ぬぞ花の陰　同（同）

おもふ事花にまびれて何もなし　同（同）

朝飯を過すや花の鐘がなる　同（同）

ものいふもいやなりけふは花の陰　同（同）

へなへとするや小橋もはな心　同（同）

なまなかにかへる家ありはなざかり　同（同）

花のなかすこしちれともおもふなり　同（同）

ねぶき眼をひらけば花の浮世哉　同（同）

石川や飛わたりするはなごゝろ　同（同）

宮さまもおよらぬさうな花に風　同（同）

ちるはなの中にたちたる此身かな　同（同）

花を折こゝろいく度もかはりけり　同（同）

頤に杖する花と身はなりし　同（同）

出ぎらひの身をふり埋め花の雪　同（同）

掛乞の顔もわすれてはなの陰　同（同）

うす壁や鼠なく夜もはなの空　同（同）

をれぬすめとても花には狂ふ身ぞ　同（同）

杖とたのむ人あらば花も見やうもの　同（同）

踏ところ草鞋にかゝるはなの塵　同（同）

たのむなり花の跡とふ竹の杖　同（同）

さつとちるはなを拍子やもどりあし　同（同）

灯ともすにこれはいつまでちる花ぞ　同（同）

ちるはなや舞も出べき腰あふぎ　同（同）

父ありて母ありて花に出ぬ日哉　一茶（一茶句帖）

咲花を當に持出す佛かな　同（同）

かならずよ迹見よそはか花の雲　同（同）
夕暮や鳥とる鳥の花に來る　同（享和句帖）
あたゝ雨の黄ふりにけり花の山　同（同）
又けふも逢ひそこなひぬ花の山　同（同）
花さくや朝めしをそき小商人　乙二（をのゝえ草稿）
ちる花や脚布（ハバキ）してゆく道のほど　同（同）
花の雪ふすまかぶりし夜に似たり　同（同）
木ゝ股の哀なりけり夜のはな　同（同）
華に見ゆる花の山風ふきにけり　同（同）
四五文の油買ふ夜の花しろし　同（同）
どこの花どこの芝生か死どころ　同（同）
花はいつ笈負ふつれは出來にけり　蒼虬（蒼虬翁發句集）
花に鳥退屈しらぬ齡かな　同（同）
脈取て見るや花の夜只ひとり　同（同）
小寒きはさすがに花の盛り哉　同（同）
朝日さへ心おかれて花ちらへ　同（同）
翌は花の盛りぞと見て此夕　同（同）
花の雨おぼつかなくも暮にけり　同（同）
花に來てしばらく遣ふ扇かな　同（同）
人音や花のあとなる石ひろひ　同（同）
庵の花遅くて雨をのがれけり　同（同）
たのしさや花に貰のひとひねり　同（同）
油斷して門たゝかれな花の朝　同（同）
ひし〳〵と心に花のひゞき哉　同（同）
夜は花に木莵啼てひがし山　同（同）
じり〳〵と寄るや夕の花と水　同（同）
日は峰にかくれて花のさかり哉　同（同）
上京や桶屋がおけも花の枝　梅室（梅室家集）
雲ばかり見るまで入ぬ花の奥　同（同）
松風もたしかに吹て花ざかり　同（同）
花と松ひとり〳〵に向ひけり　同（同）
いつとなく花になりけり峯の雲　同（同）
見えそむる花にいそぐや花の中　同（同
寐をしみの二人出あひぬ花に月　同（同）
花といへば早幻に嵯峨御室　同（同）
跡もどりして鐘きくや花の中　同（同）
灯につくや花の香雨の音　同（同）
花に眼のちりてあぶなし丸木橋　同（同）

色外にあらはして花の往來かな　梅室（梅室家集）
羽織きて花折さふな女かな　同（同）
あるうへに灯置たし花に風　同（同）
にぎはしや竹には雀花に客　同（同）
折て來た花にたかるや一在所　同（同）

つくばね櫻に題す
翅ある花や雲にも入るたぐひ　同（同）
旅鶯にうしろ窓なし花の中　同（三山集）
松風にうれしき花の高み哉　巴風（花つみ）
花咲いて近江の舟の機嫌かひ　智月（玉藻）
これは／＼とばかり花の吉野山　貞室（笈の小文）
花にせきとめらるゝ岩間哉　紹巴（大發句帳）
けふちるやあすかの川の花盛　同（同）

追懐
生殘る人を敎への花寶哉　沾魚（父の恩）
ふわ／＼と花の明るき障子哉　標堂（靑十家）
峯よりも散くる花や坂おとし　恩鳥（太夫櫻）
花折て蜂に追るゝ山路哉　狂風（芦分船）
花盛根笹分入深山哉　何鳥（花七日）
散る花の向ふに見ゆる御堂哉　姑射（同）
四方から花のちり込住居哉　誰蟄（小弓）
朝戸出や落花戸を打嬉しさに　婆雪（花櫻帖）
花にぬれて樽に綿衣をぬぎかけし　子規（子規句集）
釣鐘の寄進出來たり花盛　同（同）

悼[illegible]
其まゝに花を見た目を瞑がれぬ　同（同）
錢湯で上野の花の噂かな　同（同）
觀音で雨に逢ひけり花盛　同（同）

[illegible]に題す
此上に落花つもれと思ふかな　同（同）
京に來てひたと病みつきぬ花盛　同（同）

鼠骨出獄を賀して來る
いたわしさ花見ぬ人の瘦せやうや　同（同）
千本が一時に落花する夜あらん　同（同）
花の夕鐘の黑さよ大きさよ　飄亭（新俳句）
朝の雨花は一重ぞあはれなる　鳴雪（同）
よき人の番傘さして花の雨　露月（同）
虹の上に虹が出で來つ花の雨　戸井（同人）

堂の裏の忘れ帯や花の雨　信夫（同）
花の屑筏の尻に溜りけり　夜白（同）
雷が曇らす山の花の冷　風可（同）
巖ヶ根の瀞にたまりし落花かな　まさを（同）
口あいて落花眺むる子は佛　句佛（懸葵）
花の中競馬見に行く人のみぞ　竹の門（同）
我家は花より古し馬も無事　牛喆（同）
學寮の曉磬花に響きけり　勿言（同）
舟べりに浮藻波打つ落花かな　たか女（同）
花の山夕日あたれば紫に　華水（倦鳥）
朝鮮へ明日發つ花に遊び居る　雉子郎（ホトトギス）
花風に立ちて眼つぶる女かな　零餘子（同）
釣り上ぐる大雪洞や花の上　躑躅（同）
花の上の電線に居る工夫かな　四楓（同）
花風の埃に赤きポストかな　元（同）

京都滿開

深き夜の玻璃戸を搏ちて花嵐　播水（同）
花だより京の舞妓の繪葉書に　誓子（同）
男をみなとかたみに花の留守居かな　董雨（同）
花は早北へ移りし京都かな　泊月（同）
灯を入れて花提灯や賣れにけり　青雲（同）
花だより遠忌滿座の京都より　綾華（同）
笑止さや坐り潰せし花の面　一宿（同）
花深く軒を並べし茶店かな　春湖（同）
けふの花に只何事もなかれかし　せん女（同）
花時化や雨戸を閉めし小料理屋　富女（同）
かつぎ行く都大路の花行燈　春雷（同）
總立ちの花の渡舟の人數かな　四字路（同）
花は早なかりし大和めぐりかな　今夜（同）

吉野

厠借りて谷恐しや花の山　大春（同）
をどり居る一寸法師花の山　稻女（同）
働けば工場の花もちりにけり　月舟（同）
傘について御室の花やほされけり　鬼城（同）
夕風や落花吹き返し吹き返し　水子（同）
座蒲團の落花拂うて坐りけり　界堂（同）
月の面の梢はなるゝ落花かな　木國（同）
烈風に花一房の落花かな　立子（同）

花

案内者の門押しひらく落花かな　七草（ホトトギス）
大原や落花の中の柴車　水竹居（同）
高きより散りくる花や貴船みち　王城（同）
花片の鐘にふれたる靜かかな　照葉女（同）
花屑を掃いて拾ひし小錢かな　孝（同）
嗽ぐ御裳川の花の塵　深杉（同）
花屑をたゝみこ渡舟著きにけり　兎足（同）
伏籠の雛にかゞみぬ花吹雪　みどり女（同）
隱栖や一樹の落花掃くばかり　枕山廬（同）
花吹雪走りたまりぬにぎやかに　蘆水（同）
花吹雪うら坂よりも五六人　夢香（同）
花の雨門つけぬれて通りけり　芒趾（同）
傘かしげ一年生や花の雨　靜雲（同）
花の雨俥忽ちなかりけり　都穗（同）
花の雨洛中通る裾からげ　俳維摩（同）
花の雨とまれかくまれ吉野まで　星洲（同）
とぼ／＼とつきくる妻や花の雨　稻女（同）
さし合へる左阿彌の傘や花の雨　俳星子（同）
いさぎよく濡るゝ支度や花の雨　新樹（同）
三條に宿とりいそぐ花の雨　いはほ（同）
花冷の闇にあらはれ篝守　素十（同）
夜の花に雨來んとする晴雨計　楞童（同）
花更けて北斗の杓の傾伏せる　誓子（同）
南に花すこしある紀三井寺　泊月（續ホトトギス）
指させる小鹽櫻や花の中　播水（同）
花よりもうつくしき雲かゝりけり　秀好（同）
三月の昇給もなく花咲きぬ　無腸子（同）
一艘や花をよそなる釣支度　砂村（同）
一本の横川の花の靜けさよ　古山子（同）
花の灯のあかゝともしび永明寺　盆城（同）
乙寄の雨だれ四方の花に落つ　同（同）
旗だより花だよりとも申さんか　たけし（同）
花の月おぼつかなくも懸り居り　耕雪（同）
國境の花のつぼみに雪とかや　玻瑠子（同）
庵すや名所の花に埋れて　如水（同）
ひもすから遠き落花や杉の坊　句一歩（同）
ありやなし落花踏みたる下駄のあと　喜太郎（同）
山吹の花もまじれる落花かな　其昔（同）

花びらのはしる九輪の面かな　犀川（同）
山門や花も過ぎたる箒あと　鄭躅（同）
花屑にとまる添水や詩仙堂　野風呂（同）
苔の上の落花にあつる箒かな　波留女（同）
島々の花のたよりの遲速かな　きゆう（同）
花の雲見おろす坊のたゝずまひ　木國（同）
礪波野の家ほつ〳〵と花になり　花笠（同）
藤原の塔殘りをり花の上　旭川（同）
からたちの垣縫うてゆく落花かな　立子（同）
屋根舟の庇の下の花の山　同（同）
吹かれ來て昏き水面へ落花かな　月士（同）
遙なる峰に湧きたつ落花かな　泊月（同）
藪の面を流れつゞける落花かな　播水（同）

奈良

吹き上げて良辨杉の落花かな　白川（同）
御僧に道をたづねぬ花の山　藍女（同）
花吹雪大杉樣のうしろにも　紅醉（同）
花吹雪谷にしづもるときありぬ　籬外（同）
城壁のかげよりもまた花吹雪　夕陽斜（同）
火燵して方丈樣や花の雨　桂樹樓（同）
花の雨ひとりはぐれて戾りけり　渡舟（同）
こみあへる人丸茶屋や花の雨　無風（同）
花の雨京都の驛の暗さかな　夢筆（同）
花の雨手つたぎ走る舞妓かな　影津（同）
割烹著つけて使や花の雨　六角牛（同）
花冷の大きな軒によりにけり　慶翠（同）
花冷の雨手をかざす篝かな　栗吾（同）
花冷の庇かたまつてゐたりけり　橙青（同）
山寺の寶物見るや花の雨　虛子（句集 虛子）
ぬれ緣にいづくとも無き落花かな　同（同）
竹藪をはづれて花の嵐山　同（同）
咲き滿ちてこぼるゝ花もなかりけり　同（同）
花の雨降りこめられて謠かな　同（續ホトトギス）

殘花（ざんくわ）

殘る花（のこるはな）　名殘の花（なごりのはな）

古書校註

【年浪草】雅章卿口決抄に曰、殘花と出したるは、春の中に久敷く殘るをいふ也。夏の題に、餘花と出したるは、夏まで殘る花の事。おそ櫻同じ事。

夏木立の中に有るをいふべしとなり。しかれば殘花・青葉の花杯にして、餘花・若葉の花は夏なるべし。混ずべからず。〔[illegible]〕花・夏―餘花

初櫻（はつざくら）

季題解説　その年初めて咲いた櫻のことであるが、また一種の早咲きの櫻の名ともなつてゐる。この早咲きの櫻は主もに一重である。栞草を見ると「一花は端山より咲て奥山に至り、紅葉は奥山より染て端山に至る、其冷暖において遠近の差別あれども、感ずる處は前後あるにあらず、凡そ櫻の初めて開くもの、皆單葉、山櫻・彼岸櫻・燕櫻のたゞひなり」とある。〔[illegible]〕櫻（サクラ）　初花（ハツハナ）

例句

初櫻　藥師寺大付會

初ざくら折しもけふはよき日なり　芭蕉（芭蕉句選拾遺）
咲みだす桃の中よりはつ櫻　同（續猿蓑）
顏に似ぬ發句も出よはつ櫻　同（同）
鳥はまだ口もほどけず初ざくら　鬼貫（鬼貫句選）
七夕に契りおきてし初ざくら　同（俳諧七車）
行女江戸に夫あり初櫻　言水（俳諧五子稿）
供觸も折にこそよれ初ざくら　去來（去來發句集）
沓足袋や鐙にのこる初ざくら　其角（五元集）
初ざくら天狗のかいた文見せん　同（同）
寐時分に又みん月か初櫻　同（同）
初ざくら鮒の料理を好まれて　北枝（北枝發句集）
はつざくら足輕町のはづれから　同（同）
菜を喰ひに來むといひつゝ初櫻　沾德（俳諧五子稿）
人の氣もかく窺はし初ざくら　同（同）
だまされて來て誠なり初櫻　千代女（千代尼發句集）
見る人も麁相なりやはつざくら　同（同）
明ぬれどいよ〳〵白しはつざくら　同（同）
見て戻る人には逢ず初櫻　同（同）
唯かへる心で出たにはつざくら　同（同）
けふ來ずば人のあとにか初ざくら　同（同）
きしろとは男なりけりはつ櫻　同（同）
旅人の鼻まだ寒し初ざくら　蕪村（題林集）
ちるなどゝみえぬ若さやはつ櫻　太祇（太祇句選）
雨風のあらきひまより初櫻　樗良（樗良發句集）
人傳に聞て待けりはつざくら　同（同）
開帳の日も早めけりはつ櫻　也有（蘿葉集）

咲をさへおどろくに散はつざくら　几董（井華集）
散と見し夢もひとゝせ初櫻　同（同）
野送りして歸りあひけりはつざくら　曉臺（曉臺句集）
戻りなば人にも告ん初ざくら　闌更（半化坊發句集）
簗かけて一夜明たり初ざくら　集兆（冒波可理）
何ごともなき世の中やはつざくら　成美（成美家集）
袖たけの初花櫻咲にけり　一茶（發句題叢）
月をさへたのむけしきやはつ櫻　蒼虬（蒼虬翁發句集）
谷底に鹽賣る聲や初ざくら　同（同）
藪ごしの月夜にあへり初ざくら　梅室（梅室家集）
木陰にははや菜ありはつ櫻　同（同）
ひしへと木を伐る傍に初櫻　同（同）
水茶屋の薄緣青し初櫻　繁士（京水）
溝の上に薪積む里の初櫻　鼓竹（倦鳥）
手賀沼のほとりへ出でぬ初櫻　すゝむ（續ホトトギス）

櫻

櫻花　あうくわ　夢見草　仇名草　かざし草　吉野草　たむけ草
曙草　若櫻　老櫻　遲櫻　櫻陰　櫻吹雪　櫻の浪　散る櫻　朝櫻、夕櫻　夜櫻　千本櫻　田櫻　礒櫻　嶺櫻　庭櫻　門櫻　家櫻
宮櫻　櫻苗　一重櫻　八重櫻　牡丹櫻　御所櫻　姥櫻　熊谷櫻
普賢象櫻（普賢堂櫻。普賢像櫻）　楊貴妃櫻　昭君櫻　虎尾櫻　不斷櫻　雲珠櫻　臨霞櫻　伊勢櫻　江戸櫻　淺黄櫻　朱櫻　樺櫻
緋櫻　法輪寺櫻　桐ケ谷櫻　有明櫻　布引櫻　曙櫻　手鞠櫻
匂櫻　雲井櫻　西行櫻　墨染櫻　泰山府君　九重櫻　奈良櫻
秋色櫻　右衞門櫻　左近櫻　金平櫻　歌仙櫻　孝子櫻　深山櫻
染井吉野　里櫻　櫻月夜　櫻雨　櫻山

古書校註

【山之井】　春は櫻にうからかされて、人の心はひようたんになり、楠の木玉ともなりて、野山をとびまはる心ばへ。火櫻は待ちこがるゝとも、やく火とぼすともいひ、絲櫻はよれつもつれつ、離れがたしとも、くりかへし傾くめもなやなどもいひ、墨ぞめの櫻には、平仲がそら泣きし顏をよそへ、普賢象には末つむはなのさきをもいひなす。猶伊勢櫻は神祇をよせ、彼岸櫻には釋教の緣をむすびなど。（略）梅櫻は春の景物、哥連俳の命なれば、其の作意あるべし。とく、おそく、まり、匂ふ折節にそへて、其の數多あなる花の名どもを、人々普く見なれ、聞き及び侍れば、いかほどもいひ出でな

んに興有るべし。それさへ犬櫻は、花さかぬ故の名なりといへど、麝香の犬櫻など、匂ひをさへめで侍れば、又有る物にこそ侍らめ。そもさだかに見ぬ程は、せぬがかちにぞ侍るべき。兒櫻といふも、小櫻といふべきを、其のこと同じければ、かうやうにいひ來れり。是等は、さのみ嫌ふべきわざにもあらず。誹諧躰のひとつにても侍るべし。

【御傘】櫻、只一。遲櫻・山櫻などに一、紅葉に一、遲櫻・山櫻ならで、只櫻と二ありてもくるしからず。誹には此の外に櫻の字一ありて以上四也。

家櫻。春也。植物也。居所也。

いぬ櫻。春也。植物也。是は櫻に似たる木にて、花もさかず、又さけ共ちひさき花にて、いやしき木也と。云々。然るを、犬筑波にも、くゝりしていざみにゆかん犬櫻。などゝまことの櫻のやうに用ゐられたり。誤か、覺束なし。但し俊頼の哥に、山陰にやせさらぼへる犬櫻追ひはなたれて引く人もなし。かくの如くあれば誹言にはあらざるべけれ共、連哥に終に聞かざる物なれば誹言に成るべし。

【滑稽雜談】私云、總じて櫻は、一重は春分の後（彼岸の比）開く。八重は十日程遲し。兼好が花の盛は立春より七十五日といへり。され共京のひとへ櫻、六十日餘にて咲く。八重は七十五日といふべき也。年の寒温に因りて遲速侍る者也。吉野山は皆一重にて、京より四五日も早し。洛西嵐山はよしの種にて、ひとへ櫻也。（略）江戸には上野に櫻多し。武城の壯觀也。

【栞草】「大和本草」文選沈休文が詩、山櫻發きて燃えんと欲すとは、果木の名也。花朱色、火の燃えんとするがごとし。王荊公が詩に、山櫻石を抱きて松枝に映ず、司馬温公が詩に、紅櫻零落して杏花開く。これ中華に櫻と云ふは、朱花也　日本の櫻は中華になきよし、延寶年中、長崎に來りし何淸甫いへり。朝鮮にはありと。云々。

初櫻。花は端山より吹きて奥山に至り、紅葉は奥山より染みて端山に至る。其の冷暖において、遠近の差別あれども、感ずる處は前後あるにあらず。凡そ櫻の初めて開くもの、皆單葉、山櫻・彼岸櫻・姥ざくらのたぐひなり。

彼岸櫻。小白單葉、春分の後、彼岸に開き、餘の花に先だつ。一名、小櫻。

一重櫻。一重櫻は、春分の後花をひらく。彼岸櫻より十日ばかり遲し。又八重櫻に先だつこと十日ばかり也。尤も、處の寒温によりて遲速有るべし。凡そ櫻は一重を以て本とす。故に、たゞ櫻とのみ稱するは一重のことなり。

絲櫻。「大和本草」樹、彼岸櫻と同じ。枝長く絲の如くにして下り垂る。花うるはし。彼岸ざくらより、花稍〻おそし。

姥櫻。「羅山拾稿」この花繁榮にして、枝上葉なきが如し。老婆多く齒落て無し。齒と葉と和訓相通ず。故に是を姥櫻と云。

兒櫻。山櫻の一種なり。又小櫻の類にて別種也と云ふ。按ずるに、山櫻のうちに、紅色を含みて、美しく愛らしき花あり。故に兒櫻の稱あるか。

熊谷櫻。「大和本草」高さ尺に過ぎずして、花さく。長じて四五尺に過ぎず。

彼岸櫻にさきだちて、八重の好花ひらく。櫻の先登也。花色白くして小紅を帶びたり。按ずるに、源平の合戰に熊谷次郎直實、攝州一の谷の先登して名をあらはすこと、平家物語等に記せり。此の種、餘種の櫻に魁るを以て、是を熊谷櫻と云ふ。

山櫻。一重櫻の一種。山野平林に自ら生ず。梅に野梅と云ふが如し。

八重櫻。「詞花集」に、いにしへのならの都のやへざくらけふ九重に匂ひぬる哉　伊勢大輔。此の歌より、八重櫻をよみ初めけるとなん。徒然草に、八重櫻は、奈良の都にのみ有りけるを、此頃世に多くなり侍りける。云々。

普賢象櫻。横川ヵ詩序　普賢堂は、天下第一なり。世に傳ふ、鎌倉に堂あり、普賢これに安ず。其の地に櫻有り、俗に普賢堂と云ふ。或は普賢象といふ。和訓鼻と花と音同じ。花の白くして、かつ大なるもの、菩薩の乘るところの白象の鼻の如しと。兩說いづれが是ならん。

楊貴妃櫻。興福寺の僧玄宗と云ふもの愛せし故名とす。一說に、此の花大輪にして紅色を含み、海棠に似たり。故に、海棠の睡りといへる故事より名とすともいへり。

奈良櫻。「沙石集」に、奈良の都の八重櫻ときこゆるは、當時も東圓堂の前に有り。上東門院、興福寺の別當に仰せて、かの櫻をめしければ、掘りて車に入れてまゐらせけるを、大衆、名を得たる櫻を左右なく奉らるゝは僻事なりとて、打ち止めき。女院きこしめして、奈良法師は心なきものと思ひたれば、わりなき大衆也。眞に色ふかしとて、さらば此櫻をば我櫻と名付けんとて、伊賀國余野と云ふ庄をよせて、花がきの庄と名付けて、かきをせられたり。

鞍馬の雲珠櫻。袖中抄　唐鞍の雲珠に似たれば、鞍馬の緣に云ふ也。

虎尾櫻。此の樹の類、かならず枝條屈蟠して、花の莖みじかし。枝上に花も葉も斑にして、虎ふの如し。故に、虎尾の名有り。

鹽竈櫻。此の花至つて艷色あり。其の樹葉ことにうるはし。

秋色櫻。東叡山淸水堂のうしろ、井のかたはらに有り。一名、大般若櫻とも云ふ。小網町菓子屋の娘秋と云ふもの、十三歲の時花見に來て、井のはたの櫻あぶなし酒の醉　秋色、かくいひしより此の名有り。秋色は秋が俳名也。其角の門人にして、此の句人口に膾炙せり。

伊勢櫻。此の花、緋櫻の種也。至つて遲く咲きて、花をはりに近し。終と尾張と訓通ず。尾張の國に近きは伊勢國也。因りて伊勢と名づく。

江戶櫻。遲櫻也。葉少し赤し。花大輪にして、莖長く下にたる。この種、關東に多き故に名とすとも云ふ。

右衞門櫻。江戶四ツ谷柏木村、延正寺藥師堂の前に有り。昔武田右衞門と云ふもの、此の櫻を愛せり。當處柏木村にして、右衞門が愛せし櫻なれば、後人、源氏物語の柏木の右衞門に假借して名づくと云ふ。

迺波櫻「和名抄」朱櫻（和名波迺加）一名（迺波佐久良）。〇季吟曰、山櫻も

庭櫻も、その山に咲き、庭にさくを云ふを、名木のやうにしたつるは、あしきことなり。

家櫻。季吟日、人の家に咲く櫻也（略）

犬櫻。小白花にして、みるにたらず。櫻の屬にしていやし。故に犬櫻と云ふ。すべて似て非なるものに、犬の字を付けていふもの多し。犬蓼・犬豌豆・犬桁、又一番鎗・二番鑓に似て非なるを、武家に犬鎗と云ふ。或は犬筑波集の類、みな同じ。

樺櫻。大和本草　樺をかばざくらと訓めるは非也。かばざくらは一重也。多識篇　加倍波、今云ふ加波佐久羅、（）樺櫻は山櫻の屬、古今に、かにはざくらといへる是なり。

淺葱櫻。大輪にして八重也。色は淡青にして、白色をふくむ。異なる色也。

夢見草。藏玉　植ゑおきてたとへにやみる夢見草あすともしらぬけふのいのちに。

あだな草　同上　あだな草いかなる人のうゑおきてかゝるうきよにちるをみすらむ。

かざし草。もゝしきの大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふもくらしつ、と云ふ古哥より名づけたり。

吉野草。櫻の異名也。吉野を第一とするゆゑの名なるべし。

左近の櫻。南殿の櫻（俗に左近のさくらと云ふ　禁秘抄南殿の櫻は、紫宸殿の巽角に有り。（）南殿の櫻は、本は梅なりしを、後植失して、天德のころ改めて櫻を植ゑられしよし、歷代編年集成　にみゆ。

櫻人。連歌新式　櫻人、うたひものならで、櫻のあたりに居る人をも櫻人といへり。うたふさま、又聲などいふ事入らずして、うたひものにはあるべからず。○櫻人、催馬樂の呂歌なり。

櫻田。連歌新式抄　深山櫻のことを云ふ也。田のいねなども、一本などは生ぜぬもの也。その如くおほくある也。新式秘抄　櫻田は何ぞと宗砌にとふ返事によめる、さくら田はうゑ物也とおもふべしみやまざくらのことをいふ也。○又櫻田、紀伊國の名所にあり。

櫻戸。歌林良材　櫻の木にてつくりたる戸也。松の戸・杉の戸の如し。○一説、戸の近邊に櫻の咲きたるを云ふ。只櫻のあるほとりの宿なり。

季題別解説　春の櫻と秋の菊とは共に日本の代表花で、宮中でも觀櫻會・觀菊會を年中の二大行事として居られるくらゐである。日本では花と云へば櫻のことであると云ふ習慣になつてゐる。從つて俳句の場合でも、例へば初櫻・櫻狩・遲櫻などと櫻の字を使ふ場合と、初花・花見・花曇などと、單に花と云ふ字で櫻を現はす場合と二つになつてゐる。東京では、上野公園淸水堂のわきの彼岸櫻から花だよりがはじまる。花の盛りは勿論年によつて遲速はあるが、例年は四月七・八日頃である。花に關する季語が甚だ豐富であるごとく、櫻の字にちなむ季語も頗る多い。たとへば、櫻狩・櫻人・

櫻茶屋・朝櫻・夕櫻・夜櫻・櫻月夜・磯櫻・嶺櫻・庭櫻・門櫻・家櫻・宮櫻・櫻吹雪・櫻の衣（櫻重ね・櫻衣）・櫻戸・櫻苗（櫻の苗木）・若櫻・老櫻等である。〔季題〕花・初櫻・山櫻・彼岸櫻・櫻狩

例句

櫻

御鎮座の床めづら也伊勢櫻　宗因（梅翁宗因發句集）
物がたりの人も待ちけり伊勢櫻　同（同）
おことこそ風狂亂の姨ざくら　同（同）
今つくばや鎌倉宗鑑が犬ざくら　同（同）
殿風や東西〳〵江戸ざくら　同（同）
風吹ば尾細うなるや犬櫻　芭蕉（續山井）
命ふたつの中に活たる櫻かな　同（菊の香）
さまざまの事おもひ出す櫻かな　同（笈日記）
芳野にてさくら見せうぞ檜の木笠　同（同）
扇にて酒くむかげやちる櫻　同（同）
鸛の巣にあらしの外の櫻かな　同（焦尾琴）
木の下に汁も鱠も櫻かな　同（ひさご）
年々やさくらを肥す花の塵　同（芭蕉翁全傳）
聲よくばうたはむものをさくらちる　同（鹿島紀行附錄）
櫻より松は二木を三月越　同（奥細道）
奈良七重七堂伽藍八重櫻　同（泊船集）
姥櫻さくや老後の思ひ出　同（佐夜中山）
去年も咲ことしも咲や櫻の木　鬼貫（鬼貫句選）

八十賀に

うたてやな櫻を見れば咲にけり　同（同）
さくら咲遠山見こせ眉の八　同（俳諧七車）
雲やにほふ海もさくらも富士の枝　同（同）
山鳥やさくらをしぼる夜の雨　同（同）
咲花やとしの下手なる遲ざくら　同（同）
花垣や雲も和光の八重ざくら　同（同）
家づとや櫻のあゆむ小松原　言水（俳諧五子稿）
夜ざくらにあやしやひとり須磨の蜑　同（同）
灯心に火ざくら近し二月堂　同（同）

桑門友元がもとの一木のさくらに書つけぬ

そめば花そまねは櫻はねつるべ　同（同）
入相の黒みを染ぬさくら哉　同（同）
待ておのれ櫻たゝきし水馴掉　同（同）
腮杖に阿呼さたまる櫻かな　同（同）
木の間行袚に散しさくら哉　素堂（同）

茶出の叟が左近の櫻かよ　素堂　（俳諧五子稿）
九重もなら茶がはやるさくら咲　來山　（いまみや艸）
今までは所の名なりさくら塚　同　（同）
山鳥の帶せぬなりやさくら咲　同　（續いま宮艸）
うちあけて障子わするゝ櫻かな　同　（同）
櫻咲てこの宮早う夜が明る　同　（同）
としぐに名に枝の出る櫻かな　同　（同）
神かぜやせめてさくらの噂でも　同　（同）

滿月庵によばれて

冷汁にふたをつけたる櫻かな　浪化　（浪化上人發句集）
朝立の目に有明と櫻かな　同　（同）
なら漬の根本とはん八重櫻　同　（同）
眞先に見し枝ならんちるさくら　丈草　（丈草發句集）
朝ざくら芳野ふかしや夕櫻　去來　（去來發句集）
灌頂の闇より出てさくらかな　其角　（五元集）
さくらちる彌生五日は忘れまじ　同　（同）
鐘かけてしかも盛りのさくら哉　同　（同）
明星や櫻さだめぬ山かづら　同　（同）
あだなりと花に五戒の櫻かな　同　（同）
八ツ過の山のさくらや一沈み　同　（同）
いさゝくら小町が姉の名はしらず　同　（同）
いなづまのやどり木なりし櫻哉　同　（同）
浮助や扈從見に行く櫻寺　同　（同）
文は跡に櫻さし出す使哉　同　（同）
佛とはさくらの花に月夜かな　同　（同）
散る時を斗に買はん磯ざくら　同　（五元集拾遺）
猿の寄る酒屋きはめて櫻かな　同　（同）
口ひるを魚に吸はるゝさくら哉　同　（同）
これはくと計り散るも櫻かな　同　（同）
京中へ地主のさくらや飛ぶ胡蝶　同　（同）
花はよも毛蟲にならじ家櫻　嵐雪　（玄峰集）
見物にちり交りたるさくらかな　許六　（五老井發句集）
百石の小村をうづむさくらかな　同　（同）
これ斗り嗅のまぜらぬさくらかな　同　（同）
苗代の水にちりうくさくらかな　同　（同）
とにかくに胸うごく若木櫻かな　北枝　（北枝發句集）
似た事のかゝる櫻に海近し　支考　（蓮二吟集）
浮鯛の名やさくら散る三四月　同　（同）

瓢簞より駒の出たる圖に賛

櫻や咲瓢簞出ていさむ駒　杉風　（杉風句集）

櫻蒟蒻いかなる人の何を以てさくら　同　（同）

畫の君うつゝを咲り夢ざくら　同　（同）

世の中をされ畫さつとのさくら哉　沾德　（俳諧五子稿）

花は櫻まことの雲は消にけり　千代女　（千代尼發句集）

短册は風をあつかふさくらかな　同　（同）

晩鐘を空におさゆる櫻かな　同　（同）

月の夜の櫻に蝶の朝寐かな　同　（同）

明ぼのゝさくらに成て朝日かな　同　（同）

見ぬものを見るより嬉しさくら花　同　（同）

馬下りて高根の櫻見つけたり　蕪村　（蕪村句集）

花に遠く櫻に近しよしの川　同　（同）

嵯峨ひと日閑院樣の櫻哉　同　（同）

手まくらの夢はかざしの櫻哉　同　（同）

木の下が蹄のかぜや散さくら　同　（同）

門口の櫻を雲のはじめかな　同　（新五子稿）

足弱の宿かる宿歟遲櫻　同　（同）

風聲のおり居の君や遲櫻　同　（同）

山守の冷飯寒きさくらかな　同　（題苑集遺稿）

櫻ひと木春に背けるけはひ哉　同　（蕪村遺稿）

ちるは櫻落るは花のゆうべ哉　同　（同）

柏木のひろ葉見するや遲櫻　同　（同）

たのまれてさくら見に行男かな　同　（全集）

白樂天櫻も見ずにいなれたり　同　（落日庵句集）

山姥の遊びのこして遲櫻　同　（同）

時鳥不圖思ひけり遲ざくら　同　（同）

塀ごしやさくら斗の庭の躰　太祇　（太祇句選）

船よせてさくらぬすむや月夜影　同　（同）

むかひ居てさくらに明す詞かな　同　（同）

情なの蒼さくらやひなの前　同　（同）

いろ〳〵の名は我言はずさくらかな　同　（同）

宵月や船にもさくら打かたげ　同　（同）

咲出すといなや都はさくら哉　同　（同）

塵はみなさくら也けり寺の暮　同　（同）

したゝかなさくらかたげて夜道かな　同　（同）

朝風呂はけふの櫻の機嫌哉　同　（同）

身をやつし御庭みる日や遲櫻　同　（同）

櫻

京中の未見ぬ寺や遅櫻　太祇（太祇句選）
京へ来て息もつきあへず遅ざくら　同（同）
遅櫻験なる聖住おはす　召波（春泥発句集）
過行ば又見えそむる櫻哉　樗良（樗良発句集）
油断して花に成たる櫻かな　同（同）
一時やあたら櫻の咲みだれ　同（同）
見かへればうしろを覆ふ櫻かな　同（同）
散さくらつらくもまさる見事哉　同（同）
開帳の庭にほしがる櫻かな　也有（蘿葉集）
鉢米にゑり出して行く櫻かな　同（同）
香は今も櫻見せたる檜の木笠　同（同）
頃日は埃とて掃くも櫻かな　同（同）
無筆には縄ばりしたるさくら哉　同（同）
鳥ならぬ身にも惜むかちる櫻　同（同）
短尺の鳥おとさるゝさくらかな　同（同）
掃く人の折る人叱るさくらかな　同（同）
また風のにくみ残りや遅櫻　同（同）
一本にかたまる人やおそ櫻　同（同）
袷縫ふまとに盛やおそ櫻　同（同）
酒はもう懲りた人あり遅櫻　同（同）
麥一畝蹈るゝ櫻さきにけり　同（同）
花守が下戸で折らせぬ櫻かな　同（同）
世の中は三日見ぬ間に櫻かな　蓼太（蓼太句集）
我宿の櫻わすれてくらしけり　同（同）
割あまる都の外はさくらかな　同（同）
物惜む老に見よとやちるさくら　同（同）
夜ざくらや三味線彈て人通　同（同）
ひとつかみしら雲贈る櫻かな　同（同）
宿かして是へとちるやゆふ櫻　同（同）
うごかせば月こそ出れちる櫻　同（同）
早蕨の爪はじく間ぞちるさくら　同（同）
けふばかり老につもらじ散櫻　同（同）

庚辰の如月六日家を失ひける時
ちり果て火宅を出たり家ざくら　同（同）
長き日の背中に暑しおそ櫻　几董（井華集）
門賣の花屋が手よりちる櫻　同（同）
夜櫻に青侍が音頭かな　同（同）
打とけて我にちる也夕ざくら　同（同）

雲を踏山路に雨のさくら哉　同　（同）
咲出てあらせはしなの櫻かな　同　（同）
月のあかき夜はたのみある櫻哉　同　（同）
勅額のたふとくかすむ櫻かな　同　（同）
底たゝく春の隅より遲ざくら　同　（同）
いとまあるけふまだ咲ぬさくら哉　同　（同）
遠近やほの〴〵さくら風ぞなき　白雄　（白雄句集）
夕櫻夕越いざやひとへやま　同　（同）
松さくらまかせごゝろのみちのく路　同　（同）
世はさくら門は鯛賣日和かな　同　（同）
神こゝに控櫻も咲にけり　同　（同）
酒の科家ざくらにて日暮たり　同　（同）
ちる櫻嵐に答ふことばなき　同　（同）
夕風や汐木のさくらちりやすき　同　（同）
瓶に酒いづこはあれど家ざくら　同　（同）
をちこちの櫻に舫ふ筏かな　同　（同）
人戀し灯ともしころをさくらちる　同　（同）
花とながめさくらとながめ日は暮ぬ　同　（同）
引あみの磯山ざくらちるを見む　同　（同）
目にいたきけぶりの末や夕ざくら　曉臺　（曉臺句集）
夜ざくらにむかし泣よるひとり哉　同　（同）
風のさくら祈も終に見直さず　同　（同）
雨のさくらきのふをおもふ現人　同　（同）
さめ〴〵と涙ふくめり朝ざくら　同　（同）
鳴呼さくら枳ともならで江の東　同　（同）
をらばをれ遲かれ疾かれ散さくら　同　（同）
散をこそ夜のさくらの誠なれ　同　（同）
花と我とわれと櫻の影ふたり　同　（同）
深山路やさくらは花にあらはるゝ　同　（同）
千日の櫻さき出ぬ叩鉦　同　（同）
寒くあれど走井のさくら咲にけり　同　（同）
半天やさくらにかゝる月の暈　同　（同）
散につけさくらに年を語り合　同　（同）
うへもなき此世のさくら咲にけり　同　（同）
をとつ日の花の中より遲ざくら　同　（同）
ほつとりと咲しづまりぬおそ櫻　同　（同）
磯山やさくらのかげの美さご鮓　同　（同）
影すむやうぐひながれて散櫻　同　（同）

我に續てうろたへものや夕櫻　曉臺　（曉臺句集）
むかし今のにほひいたゞく櫻かな　同　（同）
家ざくら有明の月と見て立ん　同　（同）
下臥やさくらをいだく月の暈　同　（同）
西寺のさくら告來よ老鼠　同　（同）
君きぞと待か御坂のおそざくら　同　（同）
花のうへに海少あれいせ櫻　同　（同）
きさらぎの有明ざくら見果けり　同　（同）
手向山有明ざくら咲にけり　同　（同）
櫻咲これぞ和國の景色哉　闌更　（半化坊發句集）
入山の櫻咲たつ朝日かな　同　（同）
御車や櫻が下の牛の聲　同　（同）
根をよけて火焚ケ櫻に狂ふ人　同　（同）
世を捨る山陰もなきさくら哉　同　（同）
行暮て櫻にむせぶあらしかな　同　（同）
したはしきものや櫻に白拍子　同　（同）
磯山や櫻過行釣小舟　同　（同）
雨の日や旅人越る櫻山　同　（同）
咲ば散散ば咲つゝ此さくら　同　（同）
散かゝる櫻抱けり酒の醉　同　（同）
町中に櫻分入るや知恩院　同　（同）
散さくら我醉顏に冷たかれ　同　（同）
散果し櫻に啼や山がらす　同　（同）
櫻にも人にもうつる心かな　同　（同）
櫻過茶の花越て金閣寺　同　（同）
一日もかけずに來てや散さくら　同　（同）
櫻咲さくら散つゝ我老ぬ　同　（同）
燒鹽の辛洲のさくらけぶりけり　士朗　（枇杷園句集）
世を捨にありくさくらの山路哉　同　（同）
松さくら一木置なりあらし山　同　（同）
このもしき庵やさくらにさひかへり　同　（同）
つく〲と見てをれば散る櫻哉　同　（同）
暮そめて小屋したしき櫻哉　巢兆　（曾波可理）
挑灯のてれんも見えぬさくら哉　同　（同）
朝の間にさくら見て來て老にけり　同　（同）
村雨の若葉をいそぐさくらかな　同　（同）
片瀬からこゝろにかけし櫻かな　同　（同）
白魚の爰等（ママ）で孕むさくら哉　同　（同）

いくとせも花に風吹さくらかな　同（同）
しなばやと櫻におもふ時もあり　成美（成美家集）
咲からに繩を張れし櫻哉　一茶（旅日記）
本降りのゆふべとなりし櫻哉　同（同）
かいはいの口すぎになる櫻哉　同（同）
穀つぶし櫻の下にくらしけり　同（同）
うしろから犬のあやしむ櫻哉　同（同）
古き日を忘るゝなとや櫻咲　同（同）
ばゝが餅爺が櫻咲にけり　同（同）
米踏みも唄をば止めよ櫻ちる　同（同）
ちる櫻けふもむちやくちやくらしけり　同（同）
御佛もこち向玉ふ櫻哉　同（同）
天の邪鬼踏れながらもさくら哉　同（七番日記）
上人は芹と見たる櫻哉　同（同）
よるとしや櫻のさくも小うるさき　同（同）
死支度致せ〳〵と櫻哉　同（同）
散る櫻肌着の汗を吹せけり　同（同）
老ぬれば櫻も寒いばかり哉　同（同）
憎い程櫻咲かせる屑家哉　同（同）
散櫻よしなき口を降り埋よ　同（同）
から〳〵と下駄をならして櫻哉　同（同）
誰も居ぬうしろ座敷の櫻哉　同（同）
櫻花何が不足で散りいそぐ　同（同）
櫻見て歩く間も小言哉　同（同）
あのくたら三百文の櫻哉　同（同）
時に范蠡なきにしもあらずさく櫻　同（同）
傘にべたり〳〵と櫻哉　同（同）
何櫻かさくら花もむづかしや　同（同）
此やうな末世を櫻だらけ哉　同（同）
迷子のしつかり掴むさくら哉　同（同）
櫻さく大日本ぞ日本ぞ　同（同）
髭どのゝ鍬かけ櫻咲にけり　同（同）
隙あれや櫻かざして喧嘩買　同（同）
留守寺にせい出してさく櫻哉　同（同）
けんどんなつむりにざぶと櫻哉　同（同）
塗下駄の方へと櫻ちりにけり　同（同）
小座敷や端折おろせばちる櫻　同（同）
大馬に尻こすらるゝ櫻哉　同（同）

御祓謝と出した柄杓へ櫻哉　一茶（七番日記）
櫻へと見えてじん〳〵ばしより哉　同（同）
夕ざくらけふも昔に成にけり　同（同）
夕櫻箱ぢやうちんで見たりけり　同（同）
欲垢のぼんの凹へも櫻かな　同（一茶句帖）
苦の婆婆や櫻が咲ばさいたとて　同（同）
櫻〳〵と唄はれし老木かな　同（同）
石佛風除にしてさくらかな　同（同）
善の綱惡のさくらの咲にけり　同（同）
さい錢にあほり出さるゝ櫻かな　同（同）
寢むしろや櫻にさます足のうら　同（同）
一本のさくら持けり婆婆の役　同（同）
夜ざくらや美人天から下るとも　同（同）
江戸櫻花も錢だけ光るなり　同（同）
さくら花晋子の落書まがひなし　同（九番日記）
拍子拔して散りかゝる櫻哉　同（同）
天からでも降つたるやうに櫻かな　同（同）
未練なく散るも櫻はさくら哉　同（同）
櫻花見るも義理也京住居　同（同）
夜目遠目にておくまいか櫻花　同（同）
小筵や錢と小蝶とちる櫻　同（同）
飴ン棒にべつたり付し櫻哉　同（同）
世の中をあつさりあさぎ櫻哉　同（一茶新集）
つき合はむりにうかるゝ櫻哉　同（同）
垣添やことし花もつわか櫻　同（同）
出切手を指にむすぶや庭櫻　同（同）
見限りし古郷の山の櫻哉　同（享和句帖）
夕櫻家ある人はとくかへる　同（同）
氣に入た櫻の陰もなかりけり　同（發句題叢）
世の中を木のもとにする櫻哉　同（同）
㡀くさき笠も櫻の降日哉　同（發句集）
棒突が隠でをしへる櫻かな　同（同）
君が代の大飯喰うてさくら哉　同（同）
一夜さに櫻はさゝらほさら哉　同（同）
下〳〵に生れて夜も櫻哉　同（同）
人聲にぼつとしたやら夕ざくら　同（嘉永板發句集）
降から氣毒がるや遲ざくら　同（あみだかさ）
十日樣九日さまのさくらかな　同（名なし草紙）

茶屋むらの一夜にわきし櫻かな　同　（おらが春）
有明は雫になりしさくら哉　乙二　（をのゝえ草稿）
さりとては齡かたぶくさくらかな　同　（同）
墨縄にうつくしうちるさくら哉　同　（同）
ふるさとにくらぶればちる櫻哉　同　（同）
櫻もちて人は歸るに旅のそら　蒼虬　（蒼虬翁發句集）
松山のこなたに午刻の櫻かな　同　（同）
我さくら見て居る嵯峨の小家哉　同　（同）
なか〳〵に夜深く見ゆる櫻かな　同　（同）
すわるより早名殘あるさくら哉　同　（同）
道〳〵もさくら見て來て嵐山　同　（同）
山水や櫻やしなふ夜の音　同　（同）
明た夜はとりかへされず散櫻　梅室　（梅室家集）
人去ば一ゆるみしてちるさくら　同　（同）
馬士にゆるされて折櫻かな　同　（同）
散かけし人にしたしむさくらかな　同　（同）
深草は露の里なり遲ざくら　同　（同）
雪國にそも無量壽の櫻かな　同　（同）
遠里にあらし聞えて遲ざくら　同　（同）
此頃や空は淺黄に櫻さく　畝波　（花七日）
家櫻散りそむる日や精進日　十口　（花七日）
つばきまで折そへらるゝ櫻哉　越人　（あらの）
櫻さく里を眠りて通りけり　夕楓　（同）

石清水臨時祭

沓音もしづかにかざす櫻哉　荷兮　（同）
曉の山に門ある櫻哉　松井　（新選）
井戸端の櫻あぶなし酒の醉　十三才　秋色　（江戸砂子）
宇都の山折かけてある櫻哉　芦夕　（錦繡緞）
筏士の笠うつくしき櫻哉　嵐水　（續虛栗）
知恩院の一重櫻は咲にけり　信德　（新式大成）
遲櫻靜かに詠められにけり　子規　（子規句集）

松山十六日櫻

うそのやうな十六日櫻咲きにけり　同　（同）
柳北が寄附せし土手の櫻かな　同　（同）

京華日報發刊祝

千萬言一時に開く櫻かな　同　（同）
山深み櫻咲くなり椎の中　墨水　（新俳句）
一本の櫻に多きともしかな　㮾堂　（同）

舟で見る櫻の中の喧嘩かな　桃雨（新俳句）
櫻さけて斧提げて樵夫戻りけり　元市（同）
泉水に箒くつるゝ櫻かな　鐵石（同）
料理屋の櫻はすこし遲れたり　紅綠（同）
散る花の中や一本遲櫻　煙霞郎（同）
櫻ちる堤に對す二階かな　樂天（同）
散るかな／＼と櫻ゆすりけり　林の男（同）
遲櫻茶を摘む女五六人　其村（同）
淺茅生や膝折る庭に櫻ちる　珊々（同人）
夜櫻や篝に人の裏表　四明（懸葵）
入學に卒業に吹きし櫻かな　流舟（同）
櫻花風に動かぬ重たさよ　あふひ（ホトトギス）
寂靜まりし三聯隊の櫻かな　衣沙櫻（同）
花の色もほのかに老木櫻かな　鬼城（同）
八重櫻地上に畫く大伽藍　同（同）
玻璃戶あけて櫻明りや夕化粧　春梢女（同）
谷杉に櫻明るし鞍馬寺　王城（同）
夜櫻や梢は闇の東山　同（同）
嶺櫻のちよい／＼見えて九十九折　子悠（同）
山駕籠の待ち侘びゐるや夕櫻　白江（同）
咲き初めし秋風嶺の櫻かな　朱城（同）
夜櫻や遠ざかり來て顧る　風生（同）
梅櫻重なり咲ける草家かな　迷人（同）
藪の上櫻はるかに見えにけり　寿浦（同）
花遲く御宗尼達のうす著かな　普羅（同）
石槌の裏山深し遲櫻　助二郎（同）
坂本に下りてまだある遲ざくら　兎月（同）
貴船川遡るにつれて遲ざくら　比古（同）
夜櫻の淋しき枝や武者小路　かな女（同）
夜櫻や二階灯りて大藥家　はじめ（同）
既にして夜櫻となる篝かな　草城（同）
ちら／＼と老木櫻のふゞきかな　青畝（同）
爛漫や猫かけ登る夜の櫻　虛吼（同）
人居りて堤のはての遲櫻　青邨（同）
夜櫻のこゝらあたりの靜かさよ　三千女（同）
夕庭に牡丹櫻のゆらぎかな　よりに（同）
仁和寺や鬱金櫻はまだ見頃　兎月（同）
しばらくは人のたえまの夕櫻　武（續ホトトギス）

裏に猫表に犬や夕ざくら　虛吼（同）
灯らぬ方は寂しきさくらかな　くに子（同）
八重櫻ちぎつて落す風に逢ふ　青邨（同）
一本の櫻盛りや馬柵の中　眺人（同）
櫻咲く奈良縣廳は殿づくり　山央（同）
宇治橋に枝さしのべし櫻かな　待一路（同）
くれがたのすみしそらなる八重ざくら　てい子（同）
一もとの姥子の宿の遲櫻　風生（同）
たもとより低き花あり八重櫻　草兵衛（同）
夜櫻の大石垣にぶつかりぬ　旭川（同）
夜ざくらに鹿も遊んでをりにけり　兎月（同）
東福寺あたりの山の遲櫻　雨城（同）
杉の奥ある一坊の遲櫻　句一歩（同）
にごりゐる大堰の水や遲櫻　東子房（同）
ころ〳〵と牡丹櫻の吹かれくる　富士子（同）
大搖れの牡丹櫻の横枝かな　止有（同）
金屏におしつけて生けし櫻かな　虛子（句集虛子）
舟すゝむまゝに浦戸の櫻かな　同（續ホトトギス）
行く雲に西行櫻うち仰ぎ　同（同）

山櫻（やまざくら）

大山櫻（おほやまざくら）　小櫻（こざくら）　兒櫻（ちござくら）　吉野櫻（よしのざくら）

季題解説　櫻の原種であつて變種が多い。花は單へで白く、疎らに枝につき、花季が早い。花咲くと共に新葉が出る。白山櫻と紅山櫻の二種がある。木の高さは二三十尺位である。大體に於て吉野櫻に似てゐるが、花梗の平滑な點と、花梗に毛を生じない點とが異つてゐる。花の趣は染井吉野などよりも遙かにあはれ深いやうに思はれる。新潟縣五泉町小山田と云ふ處には、風除けとして田の周圍に並植してゐるが、その理由は山櫻は價格に於て經濟的であり、又籬を倒にしたやうに直立し、枝と枝との間に無駄がなくて風除けに適するからである。小山田の櫻は小高い處から眺めると丁度碁盤の面のやうである。參照　櫻（サクラ）

例句

山櫻

うかれけり人やはつ瀨の山ざくら　芭蕉（續山井）
草履の尻折りて歸らん山ざくら　同（江戸蛇の鮓）
哥よみの先達多し山ざくら　同（もとの水）
うらやましうき世の北の山櫻　同（北の山）
山ざくら象戲の盤を片荷かな　同（百歌仙）
植る事子のごとくせよ兒櫻　同（續連珠）

山櫻

谷水や石も哥よむ山ざくら　鬼貫　（鬼貫句選）
日よりよし牛は野に寐て山ざくら　同　（同）
人々におなじさまなし山櫻　言水　（俳諧五子稿）
ゆき〳〵て蹴の根ひくし山櫻　同　（同）
見かへれば寒し日暮の山ざくら　來山　（續いま宮艸）
杰の目にあまるもつなし山ざくら　同　（同）
世の事はいざ耳なしの山櫻　同　（同）
鳶の輪の崩て入るや山櫻　丈草　（丈草發句集）
植足しに三切の供や山ざくら　其角　（五元集）
茶もらひに此晩鐘を山ざくら　同　（同）
其彌生その二日そや山ざくら　同　（同）
浮世木を麓に咲ぬ山ざくら　同　（同）
小坊主や松にかくれて山ざくら　同　（同）
山ざくら猿をはなして梢かな　同　（同）
二筋の道は角豆か山ざくら　同　（同）
饅頭で人をたづねよ山ざくら　同　（同）
土取りの車に添ふややまざくら　同　（五元集拾遺）
隙な手の鑓持寒し山ざくら　同　（同）
山櫻鏡こひしき僧あらん　同　（同）
山ざくら身を泣うたの捨子かな　同　（同）

頼光山入之贊

なまぐさき風おとすなり山櫻　嵐雪　（玄峰集）
筆とるは硯やほしき兒ざくら　同　（同）
茶のはりにそしつてちるや山ざくら　許六　（五老井發句集）
世の中を見きつてちるか山櫻　同　（同）
風流の國主なるらむ山ざくら　北枝　（北枝發句集）
男あり妹に見居りて山ざくら　支考　（蓮二吟集）
蜜の香や七ッ曲りて山櫻　桃隣　（古太白堂句選）
ふか入のした日の脚や山ざくら　千代女　（千代尼發句集）
何にすれて端〳〵青し山櫻　同　（同）
女子どし押てのぼるや山ざくら　同　（同）
哥屑の松にふかれて山ざくら　蕪村　（蕪村句集）
剛力は徒に見過ぬ山ざくら　同　（同）
暮んとす春をゝしほの山ざくら　同　（同）
錢買て入るやよしのゝ山ざくら　同　（同）
まだきとも散りしとも見ゆれ山櫻　同　（同）
みよし野のちか道寒し山櫻　同　（同）
海手より日は照つけて山ざくら　同　（同）

飢鳥の花踏こぼす山櫻　同（新五子稿）
喰にも散てめでたし山ざくら　同（題苑集）
人間に鶯鳴や山ざくら　同（蕪村遺稿）
平地ゆきてことに遠山櫻哉　同（同）
さびしさに花咲ぬめり山櫻　同（同）
象の目の笑ひかけたり山櫻　同（落日庵句集）
材木の上にあらしや山櫻　召波（春泥發句集）
むかし道見上て過ぬ山ざくら　同（同）
北谷は南谷はいま山ざくら　同（同）
やま櫻うつぼに折て歸也　同（同）
須磨寺のめしのけぶりや山ざくら　同（同）
雲でなし使は來たり山櫻　也有（蘿の落葉）
やまざくら麓に花の出店かな　同（蘿葉集）
持て贈るみやげの雲や山櫻　同（同）
辨當で夢見歩行や山ざくら　蓼太（蓼太句集）
日暮には寺のものなり山ざくら　同（同）
秋といひし哀をすまの山ざくら　几董（井華集）
けふ來ずて見ぬ友ゆかし山櫻　同（同）
淵青し石に抱つく山ざくら　同（同）
松伐しあとの日なたや山櫻　同（同）
かはり果し杖よわらぢよやま櫻　曉臺（曉臺句集）
醉覺て廻ればの月の山ざくら　闌更（半化坊發句集）
椿突も餅を賣りけり山櫻　一茶（旅日記）
山櫻髮なき人にかざさるゝ　同（同）
山櫻花にけかちはなかりけり　同（七番日記）
小うるさや山の櫻も評判記　同（同）
蕗の葉に煮〆配りて山櫻　同（同）
小坊主や親の供して山櫻　同（一茶發句集）
山櫻皮を剝れて咲にけり　同（嘉永板發句集）
柴になるほどはのがれて山櫻　蒼虬（蒼虬翁發句集）
日暮るや杉に抱こむ山櫻　梅室（梅室家集）
山櫻丹波の風はまだ寒し　雅因（新選）
雉の聲も聞ゆる山櫻　凡兆（猿蓑）
山櫻小川飛びこす女哉　普全（炭俵）
山櫻ちるや小川の水ぐるま　智月（同）

上野

黒門に丸の跡あり山ざくら　子規（子規句集）
傘さして馬に乘りけり山櫻　極堂（新俳句）

山櫻

丈山の木像古りぬ山ざくら　瓢亭（新俳句）
足弱を馬に乘せたり山櫻　漱石（同）
杖買ふて休む茶店や山櫻　灞水（春夏秋冬）
山櫻車停めて美めにけり　月斗（同人）
蛙田や遠山櫻日に白む　水棹（懸葵）
駒鳥に鶏應へて山櫻　雲餘子（ホトトギス）
つや〳〵かに濡れたる巖や山櫻　凡平（同）
負ひし荷に縋りやすむや山櫻　石楠花（同）
馭者臺にさして散りけり山櫻　和香女（同）
山櫻一人遅れて憩ひけり　泊月（同）
山ざくら散りたる石に憩ひけり　青邨（同）
山ざくらかつぎ歸りし草廬かな　夏山（同）
大歩危や岩に傾く山櫻　王城（續ホトトギス）
湯女が行く崖に道あり山ざくら　青邨（同）
石一つ抛げし谺や山櫻　泊雲（同）
またあがる奉納の繪や山櫻　紅醉（同）
釣人の笠置く巖や山櫻　同（同）
子を負ひし男に逢ひぬ山櫻　夏山（同）
おくれ來る人のかざせる山ざくら　鹿郎（同）
行手なる日の落方の山櫻　虚子（同）

參考　やまざくら Prunus serrulata, Lindl. var. spontanea, Mak（いばら科）山地に自生する落葉喬木にして、又往々栽培せらる、幹の高さ二三十尺に達し、樹皮横理あり、赤褐色の葉を互生し、倒卵形にして葉頭鋭尖をなし、葉緣に尖鋸歯あり、葉面竝に葉柄に毛なし、花は四月頃新葉と共に出で、花軸短くして略繖形をなし、其小梗平滑にして毛を有せず、櫻色の五花瓣にして蕚に毛なし、花後小なる球形の核果を結ぶ、熟して紫黑色となる。この變種に大山櫻・兒櫻・里櫻等あり、山櫻を白山櫻と云ふは不用の稱なり。

彼岸櫻（ひがんざくら）　枝垂櫻（しだれざくら）　絲櫻（いとざくら）　犬櫻（いぬざくら）

季題解説　春の彼岸の頃咲く櫻の一種である。多く單瓣であるが、稀に複瓣

のもある。花の色は白と淡紅とある。幹は餘り巨きくなく、花も亦普通の櫻に比して小さい。枝の姿態が婉柔であつて、普通の櫻とはまた違つた柔かい感じのする花である。絲櫻・枝垂櫻もこの種に屬する。川越の名刹喜多院には、有名な枝垂櫻がある。〔參照〕櫻（サクラ）

例句

彼岸櫻

いとざくらこや歸さの足もつれ　芭蕉（續山井）
半日の雨より長し絲櫻　同（もとの水）
身をひねる詠めなりけりいと櫻　其角（五元集拾遺）
膝木よる長女（ヲサメ）いやしや絲櫻　嵐雪（玄峰集）
むすばれて蝶も晝寐や絲ざくら　千代女（千代尼發句集）
影は瀧空は花なりいとざくら　同（同）
ゆき暮て雨もる宿やいとざくら　蕪村（蕪村句集）
いと櫻灯は孤の書院哉　同（新五子稿）
その寺の名はわすれたり絲ざくら　召波（春泥發句集）
こもりくの蜂にさゝれないと櫻　几董（井華集）
絲ざくら身にふるゝ日はあらし哉　闌更（半化坊發句集）
大象もつなぐけぶりや絲ざくら　一茶（九番日記）
捨草鞋彼岸櫻のこぼれけり　東雲（新俳句）
絲櫻風もつれして散りにけり　泊露（ホトトギス）
方丈の障子の隙や絲ざくら　巴水樓（同）
三段となるところある絲櫻　夜半（續ホトトギス）
甍より枝垂櫻へ雀かな　山史（同）
下枝に杖や庇や絲櫻　虛子（同）

參考　ひがんざくら　Prunus subhirtella, Miq.（いばら科）觀賞の爲め通常人家に栽植せらるる落葉小喬木なり、幹は直立し高さ凡一二丈、枝葉繁茂し、小枝は滑澤なり、葉は有柄、互生、倒披針形にして尖り重鋸齒ありて毛を帶ぶ、花期は三四月頃、淡紅色にして枝上に滿ち、二三繖形をなして出で、花徑凡一寸許あり、萼は下部稍膨れ花梗と共に細毛あり、五花瓣、多雄蕋あり、子房、花柱共に毛なし、花後小圓實を結び熟して紫黑色なり、此種は所謂ヒガンザクラの本家にして、我邦中部より以西の地に普通なる、而して大木となる、エドヒガンも通常ヒガンザクラと呼べど、全く別の種なり、枝垂櫻は此變種なり。

桃の花　三千世草　三千歳草　白桃　緋桃　源平桃　枝垂桃　西王母　桃畑　桃林　桃園　桃の宿　桃見

古書校註

【滑稽雜談】總じて、草木の名、或は花より名附け、或は實より名附け、又木形・根色、乃至其の功より名を得る者也。此の内、花と實の境をよくよく心得て、作者の季に了簡すべき所也。此の者、桃とばかり云へば實の方也。花とか色・香などのあしらひ肝要也。これらの字を出さずとも、花と聞え、實と聞分くるは、句意にて心得べき也。此の者、和産にも種類多し。薄紅・濃紅・白桃・緋桃・日月桃・垂絲桃也。日月桃は俗に云ふ源平桃にて、紅白相交る者也。又西王母とて、其の樹三四尺を過ぎず、葉長くして繁し、紫花を開く者有り。諸種所在に得る。城州伏見の桃林、今世の壯觀也。

【年浪草】月令に曰、仲春の月、桃始めて華さく

註　○なほ年浪草には、桃の異名として三千世草・御酒古草等を擧げ、又種類として、油桃・日月桃等を擧げて、夫々解説を附してある。栞草には「絳桃・緋桃・碧桃・金銀桃・源平桃・江戸桃・中桃・冬桃・一歳桃・毛桃・姫桃・西王母・油桃・日月桃・三千世草など、この種類并びに異名等、各品多の理に附き一々尋ぬべし」と見えてゐる。

季題解説　桃は薔薇科に屬する植物である。木の高さ丈餘に達する落葉樹である。葉は披針形で長さ四五寸に達する。花は薔薇科であるから五花瓣五萼片である。萼筒に多數著生する雄蕋を有する。しかし重瓣のものもある。花の色は通常云ふ桃色即ち淡紅色であるが、白色のものもあり、濃紅色のもあり、また源平桃といつて紅白咲きかけるものもある。開花期は通常四月下旬である。

實のなるのは一重の桃の花にである。果實を收穫するために畑に作られることが多い。觀賞愛用せられるため庭園に栽培せられる。雛祭にもなくてはならぬものである。專ら花を觀賞する花桃と、果實を採るのを目的とする桃とは別種であるといふことである。

桃の葉を煎じた湯に浴すれば、汗疹・濕疹などに有效であると稱せられる。

【季題】人事　桃の節句（春）　秋　桃の實（秋）

例句

桃の花

我衣にふしみの桃の雫せよ　芭蕉　（菊の香）
舟足も休む時あり濵の桃　同　（韜庫集）
煩へば餅こそ喰はれもゝの花　同　（芭蕉句選拾遺）
古寺の桃に米ふむ男かな　同　（もとの水）
たゞ一夜桃に宿かる木幡哉　同　（同　）
軒うらに去年の蚊うごく桃の花　鬼貫　（鬼貫句選）
桃の木へ雀吐出す鬼瓦　同　（同　）

角菱の餅にありとも桃の花　同　（俳諧七車）
桃の花けふより水をさかな哉　来山　（いまみや艸）
菜畑や境てりあふもゝの花　浪化　（浪化上人發句集）
曙やことに桃花の鶏のこゑ　其角　（五元集）
花さそふ桃や歌舞妓の脇踊　同　（同）
菓子盆にけし人形や桃の花　同　（同）
燕にすさめられてや庭の桃　同　（五元集拾遺）
おの〳〵の桃の席や等持院　嵐雪　（玄峰集）
つぼふかき盃とらむ桃の花　北枝　（北枝發句集）
布子着て夏より暑し桃の華　支考　（蓮二吟集）
まいら戸に顔見ゆるやと桃の花　同　（同）
餅喰はぬ旅人はなし桃の花　同　（同）
船頭の耳の遠さよ桃のはな　同　（同）
伏見のや臥て見る桃又類ひ　同　（同）
九牛が毛桃の花や稲荷前　同　（同）
桃咲や花のあり数鳥おとし　杉風　（杉風句集）
酒によしことぶきによし桃の花　同　（同）
白桃は節句のあとの盛かな　同　（同）
百姓の茶の濃いらちや桃の花　沾徳　（俳諧五子稿）
宿〳〵は富士の家中か桃の花　同　（同）
蝿も来てけふあたゝけし瓶の桃　同　（同）
書舟に乗るや伏見のもゝの桃　桃隣　（古太白堂句選）
白桃や雫も落ず水の色　同　（同）
富士の笑ひ日に〳〵高し桃の花　千代女　（千代尼發句集）
それほどにかはかぬ道やもゝの花　同　（同）
よし野から鳥も戻るや桃の花　同　（同）
桃咲やよしのゝこゝろ捨てから　同　（同）
里の子の肌まだ白しもゝの花　同　（同）
桃咲や幾度馬に行あたり　同　（同）
隠れ家も色に出にけり桃の花　同　（同）
もゝさくや名は何とやらいふ所　同　（同）
桃の色目におさまりて富士見かな　同　（同）
戸の閉てあれど留守なり桃の花　同　（同）
商人を吼る犬ありもゝの花　蕪村　（百池遺稿）
桃の花ちるや任口去てのち　同　（續桃の巣）
さくらより桃にしたしき小家哉　同　（蕪村句集）
家中衆にさむしろ振ふもゝの宿　同　（同）
喰ふて寝て牛にならばや桃の花　同　（新五子稿）

桃の花

雨の日や都に遠きもゝの宿　蕪村（新五子稿）
交へ折て白桃くるゝうれしさよ　同（同）
照り返す伏水のかたやもゝの花　太祇（太祇句選）
地借衆へ一枝づゝやもゝの花　同（同）
あながちに木ぶりは言ず桃の花　同（同）
劉阮の桃に泊るや撞木町　召波（春泥發句集）
風呂に見る早き泊りやもゝの花　同（同）
立よりて莒な荒しそ桃の花　同（同）
雛しらぬ山家や桃に傀儡師　也有（蘿葉集）
桃のさく頃や湯婆にわすれ水　同（同）
尼寺や雛にはならで桃の花　同（同）
萬歳の畑うつ頃や桃の花　同（同）
名を呼べば口紅はげて桃の花　同（同）
もゝとよむ百里や花の旅ごゝろ　同（同）
桃咲や牛のよだれもやまと哥　蓼太（蓼太句集）
鯛を切鈍きはものや桃の宿　几董（井華集）
もゝ咲ぬ誰喰さしの實生より　同（同）
加持すとて群來る人や桃の宿　同（同）
家あるまで桃の中みちふみいりぬ　白雄（白雄句集）
里の桃蠶掃おろす日にあへり　同（同）
うちそむき木を割るもゝの主かな　同（同）
香に花につゝまれぬ春を桃櫻　同（同）
あかつきや人はしらずも桃の露　同（同）
かぎりなや堤より見るもゝの花　同（同）
關守は〳〵いづこもゝのはな　曉臺（曉臺句集）
四五尺の桃花さきぬ草の中　同（同）
神垣にもゝみる里はなかりけり　同（同）
桃つら〳〵花盡る迄水長し　同（同）
桃の花ひとり古人を名乗せず　同（同）
うはさせば桃に王母が影さゝむ　同（同）
桃の花折手はづれて流しけり　同（同）
月による氣色ともなくもゝの花　同（同）
此ごろは夜雨〳〵や桃の花　同（同）
伏見にと日暮れて來たりもゝの花　士朗（枇杷園句集）
放下師が雪をかほらせ桃の花　巣兆（曾波可理）
桃咲や西瓜畠のあらおこし　同（同）
寢過すや麥のあさ露桃のあめ　成美（成美家集）
はら〳〵や桃のちるときをしいもの　同（同）

福蟾ものさばり出たり桃の花　一茶（旅日記）
桃の門猫を秤にかける也　同（同）
苦桃も節句に逢ふや赤い花　同（七番日記）
麥などもぼちや〳〵肥て桃の花　同（一茶新集）
桃咲やぼつぼとけぶること〻し塚　同（同）
よき雨のはれて戸口の桃の花　蒼虬（蒼虬翁發句集）
も〻の花こ〻ろ安さに見て歩行　同（同）
さし植の素性はなれず桃の花　梅室（梅室家集）
人の手にあればめでたし桃の花　同（同）
木母寺の先は桃さく在處かな　同（同）
桃さくや宇治の糞船通ふ時　程已（鶴墨）
桃さくや山を背負し村つゞき　潭蛟（新選）
戸を明けてあれど留守也桃の花　素園（同）
石を切る山の麓や桃の花　湖柳（五車反古）
垣をゆふ老ゆたか也桃の花　衞助（菊香）
相井戸に隣は近し桃の花　厚州（恒誠）
澤山に桃の初花咲きにけり　素登（古今句鑑）
山寺や筧の水に桃の花　野人（新俳句）
桃の花遠くに眺め歩きけり　石菖（同人）
山間の桃にこま〴〵人家在り　皐山（ホトトギス）
枝伐ればころがす瓜や桃畑　蛇笏（同）
葛飾や桃の籬も水田べり　秋櫻子（同）
小蓑蟲桃の花びら動かして　耕雪（同）
紀の川の繞り流れぬ桃畑　穀雨（同）
源平桃地にも紅白散りみだれ　花蓑（同）
われも去り雀もとびぬ桃の花　諸人　同
桃咲けど茶店なければ人も來ず　香雲（續ホトトギス）
二三日淡路くもりて桃咲きぬ　章（同）

音戸瀬戸
瀬戸を擁く陸と島との桃二本　虚子（句集虚子）
植木屋の裏の貸家や桃の花　同（續ホトトギス）

參考　もも Prunus Persica, Sieb. et Zucc. var. vulgalis, Maxim.（いばら科）　蓋し支那原産にして、廣く栽培せらる〻落葉樹なり、幹の高さ一丈餘に達す、葉は披針形にして邊緣に鋸齒を有す、四月初旬、葉に先ちて淡紅色の花を開く、又白花或は咲き分け等の異品あり。花梗なく蕚に毛あり、五瓣にして多雄蕋なり、果實は核果にして外面に毛を有し、核は大にして表面に皺あり、果實を食用とす、ツバイモモ、「水蜜桃」等は皆桃の變種なり。

李の花（すもものはな）　李散る（すももちる）

古書校註

【滑稽雜談】和產、二三月に白花を開く、中華の詩賦には其の作多し。我朝にては愛すくなきか。關東の者花うるはしと云ふ。和歌にもあり。

季題解説　李は四月下旬花開く、桃の花より少し遲い。

薔薇科に屬する落葉樹の喬木であつて、枝幹共に梅に似てゐる高さ丈餘に達する。花は五瓣で梅の花に似てゐて白く、桃の花よりは花瓣が薄くて白い。花が落ちて葉が生ずる。果實は梅の實に似て少し小さく、つやつやしてゐる。すももといふ名はその酸味の強いところから來てゐる　【參照】巴旦杏の花（はたんきやう）　夏・李

例句

李の花

月中の盜人落よ李花白し　几董（井華集）

韮の葉にこぼれて白き李かな　孤松（新俳句）

參考　すもゝ Prunus salicina, Lindl.（いばら科）栽植せらるゝ落葉樹なり、高さ一丈餘に至る、葉は長卵形又は廣披針形にして、邊緣に細き鈍鋸齒を有す、花は長き花梗を有し、通常三箇づゝ集生す、春日開花し白色なり、果實は球形の核果にして、熟すれば通常赤色を呈す、又黄色の品あり、ボタンキヨウ、ヨネモヽ、トガリスモヽ、等はこの變種にして、西洋スモヽ、は所謂「プラム」にして全く別種なり。

梨の花（なしのはな）　梨花（なしはな）

古書校註

【山之井】花とは思ひ梨、眉をならぶる花も梨などやうに、其の名をそへてもいひ、色白くさき侍れば、ちりしく庭や銀なし地とも見なせり。

【御傘】春也。實は秋也、梨の木と計りは雜也。

【滑稽雜談】二三月花をひらく。其の樹高ければおほく實らず。石を附けて枝を撓め下げて宜し。三月風あれば實らず。故に、風なしといふ心にて果を呼びてなしと稱すと、義解に見えたり。

【栞草】時珍が曰、二月白花を開く。雪の如くして六出す、上巳に風なければ實を結ぶこと佳なり。（略）○軒の妻梨。軒ばに生ひたるを云ふ。○苧

生の浦梨。伊勢國芋生の浦、梨の名所也。

季題解說 梨は薔薇科に屬する落葉植物である。花は白色、五花瓣、五蕚片で、蕚筒に密着してゐる多數の雄蕊を有する。葉は卵形で先端が尖り、緣邊に細かい鋸齒がある。木の高さは五六尺より數丈にも達する。一つの芽から多數の（大體七つから十四までの）柄を出し、柄の先が蕾となり、花となる。花は五日間位で散る。元來梨は我が國では果實を得んがために栽培するのみであるが、支那ではその花を翫賞し、詩歌文章に盛んに取り入れてゐる。まことに梨棚の花の盛りは一面の雪のやうに美しい。東京地方では多摩川べりに、橫山を背景とした梨畑の風景が殊に美事である。梨にも和洋兩種があるが、花は殆ど同一である。栽培法の進步に隨つて、その種類・名稱は益〻多きを加へつゝある。**參照** 秋―梨子 棠梨

例句

梨の花

ありのみのありとは梨子の花香哉	鬼貫	（鬼貫句選）
杖ついた人は立けり梨子の花	同	（同）
梨の花らるはし尼の念佛まで	言水	（俳諧五子稿）
梨の花水こひ鳥や幾めぐり	同	（同）
龍頭まで雨にしぼるや梨の花	浪化	（浪化上人發句集）
忍ばする妾に似たりなしの花	許六	（五老井發句集）
馬の耳すぼめて寒し梨の花	支考	（蓮二吟集）
甲斐がねに雲こそかゝれ梨の花	蕪村	（蕪村句集）
梨の花月に書よむ女あり	同	（同）
長き日にましろに咲ぬなしの花	同	（全集）
實の爲に枝たわめじな梨の花	太祇	（太祇句選）
折る人に秋の慾なし梨子の花	也有	（蘿葉集）
いざ春に生のうら梨花は今	几董	（井華集）
あだ花と聞ばけだかし梨のはな	同	（同）
朝雨や簾ごしなる梨の花	白雄	（白雄句集）
滴せばしづくと絕むなしの花	曉臺	（曉臺句集）
隱家や梨一もとの花曇	闌更	（半化坊發句集）
夕月や畠はるかに梨の花	梅郊	（古今句鑑）
梨の花さくや昔の小野の宿	汶村	（へんつき）
鞦韆の影靜かなり梨花の月	子規	（子規句集）
梨花白し此頃美女を見る小家	同	（同）
落第の人を送るや梨の花	同	（同）
麥荒れに梨の花咲く畠かな	同	（同）
梨の花既に葉勝や遠みどり	風生	（ホトトギス）
梨咲くと葛飾の野はとの曇り	秋櫻子	（同）
梨棚の跳ねたる枝も花盛	たかし	（續ホトトギス）

【参考】なし Pirus serotina, Rehd. var. culta. Rehd.（いばら科）通常廣く培養せらるゝ落葉樹にして、高さ二三丈に達する喬木なれども、採果用のものは、枝を矯め、又は剪除して灌木狀に仕立てらる、葉は卵圓形にして先端尖り、緣邊に纖細の鋸齒を有す、五月頃新葉と共に白色五瓣花を開く、果實は秋日に至りて熟し、大形の漿果にして、外面に小斑點を有し、中に黑色の種子を藏す、食用とす。

杏の花（あんずのはな）　からももの花（はな）　杏散る（あんずちる）

【古書校註】【年浪草】大和本草に曰、其の花うるはし。唐音を呼んであんずと云ふ。一種、花紅にして八重なるあり。俗名六代。其の木ひくき時花を見るによし。長じては切るべし。平重盛公の孫六代、年長じて切られしなり。故に名あり。

【季題解説】薔薇科の落葉果樹である。樹の高さ丈餘、葉は廣橢圓形又は卵形で先きが尖つてゐる。春日、梅に次いで開花する。花は帶紅白色の五瓣花で、形は梅花に似て稍ゝ大きい。果實は圓くて黃熟し、肉と核とが離れ易い。砂糖漬とせらるゝことが多い。花の八重であるのは實らない。特に花あんずと稱せられる　【参照】天文　杏花雨（キヤウクワウ）　夏　杏（アンズ）

【例句】

杏の花

からもゝの花やくすしの一構　暮四（類題句集）
山梨の中に杏の花ざかり　子規（子規句集）
都督府の杏咲くなり門の內　同（同　）
杏花吹ておかめの面のうるゝかな　小酒（杉の實）
雨斑や杏の下の小酒盛　雨意（ホトトギス）
山峽に住む三軒や花杏　英村（續ホトトギス）

【参考】あんず Prunus Armeniaca, L. var. Ansu, Maxim.（いばら科）支那原產にして庭園に栽培する落葉の果樹なり、高さ一二丈、葉は廣橢圓形或は卵圓形にして尖り葉柄長し、春日、ウメに次いで開花す、帶紅白色の五瓣花にしてウメより稍ゝ大なり、萼片は背反す、果實は圓くして黃熟し、萼は果肉と離れ易し、果實を生食すべく乾杏を製す、種子は藥用とす。和名をカラモモともいふ。

巴旦杏の花（はたんきやうのはな）　ぼたんきやうの花（はな）

【季題解説】ぼたんきやう・よねも、などはすもゝの變稱であつて、花・葉・木・すもゝと同様である。【参照】李の花（スモモノハナ）　夏—李（スモモ）　巴旦杏（ハタンキヤウ）

【例句】

巴旦杏の花

巴旦杏の花のさびしき我家かな　藤一郎（ホトトギス）

棠梨(やまなし)の花(はな)　鹿梨(しかなし)の花(はな)　聖靈梨(しやうりやうなし)の花(はな)

古書校註

【采草】時珍が曰、棠梨は野梨也。處々の山林にあり。其の樹梨に似て小さく、二月白花を開く。

季題解説　山野に自生する薔薇科の落葉喬木で、梨の原種であると云はれる。高さ二三丈に達し、枝に針を有し、葉は圓形乃至楕圓形で、緣に微かな鋸齒を有し、その裏面と葉柄に軟毛を密生する。晩春の頃、葉腋及び枝梢に梨の花に似た白色の花を簇生する。金柑くらゐの大きさの球狀果を結ぶ。その果は食べれば食べられるが澁くてまづい。聖靈梨といふ名のあるのは聖靈棚に供するからである。〔參照〕梨の花(ハナノハナ)　秋—棠梨(ヤマナシ)

海(かい)棠(だう)　ねむれる花(はな)

古書校註

【山之井】ねぶれる花といひ侍れば、人の目はさむる詠(ナガメ)をいひはやし、胡蝶の友なる心をもいへり。又、海道にもそへ、除仝が巣つくれる故事をもよせ侍る。

【滑稽雜談】時珍本草に曰、海棠、二月花を開く。五出。初め臙脂の如く、點々然として、開けば則ち漸く纈暈と成る。落つれば則ち宿壯淡粉の如き有り。○和において眞の海棠なしといへり。中華に眞の櫻なきに同じ。俗に海棠と稱するは、林檎の花也。此の樹に雌雄あり。雌は花吹き實る。雄は花開きて實なし。此の花大略海棠の說に似たり。和において海棠と稱すべし。

【年浪草】唐の楊妃が傳に曰、明皇嘗て太眞妃を召す。妃酒を被りて新に起く。帝曰、此れ乃ち海棠の睡り未だ足らざるのみ。○海棠の異名、睡れる花、此に出づるか。

季題解説　薔薇科の落葉植物で、觀賞用として庭園に栽培せられる。高さは三四尺から丈餘に及ぶのもある。葉は數葉簇生し、長卵形、長楕圓形で先が尖り、鋸齒を有する。嫩葉は赤味を帶びてゐる。春日、新葉と共に長梗を垂れて咲く風情がいかにも濃艶である。蕾は紅であるけれども、花は紅白半ばしてゐる。丁度林檎の花によく似てゐる。普通にあるものは多くは重瓣であつて雌雄蕊不完全であるから、實を結ぶことは稀である。果實はさんざしに似て小さく圓い。

古く支那叉は朝鮮から渡來したものと云はれてゐるが、支那ではこの花を賞してゐることが多くの文獻に徵せられる。この花を「ねむれるはな」と稱する出典は唐楊貴妃傳に存する。關東では鎌倉の妙本寺（島村はじめ氏の墓のある寺）の庭の海棠が老木でみごとである。新宿御苑の海棠も中々美しい。

例句　海棠

海棠の雨見よとてやとまりがけ　沾徳（俳諧五子稿）
海棠や綺子着て居る寺若衆　桃隣（古太白堂句選）
海棠や白粉に紅をあやまてる　蕪村（蕪村遺稿）
したり尾の日や海棠の幾ねむる　也有（蘿葉集）
海棠や折られて来てもまださめず　蓼太（蓼太句集）
海棠や花の中よりうす紅葉　同（同）
棠の影さす摂は夕月夜　几董（井華集）
海棠や誰が置たる椅枕　暁臺（暁臺句集）
海棠や斥ざせし儘の玉簾　闌更（半化坊発句集）
海棠の朝の香たゝむ屏風かな　梅室（梅室家集）
海棠の静かにちるや石畳　吟江（心花）
海棠に大名とまる日は高し　子規（子規句集）
植木屋の海棠咲くや棕櫚の中　碧梧桐（新俳句）
海棠に人知れず夜の雨降りし　柳風（ホトトギス）
海棠やかきくらし降る法の雨　風生（續ホトトギス）
海棠や陪膳延の廊の庭　花蓑（同）

辛夷（こぶし）　木筆（こぶし）　山木蘭（やまもくれん）　幣辛夷（しでこぶし）

古書校註

【山之井】にぎりこぶし、順のこぶしなどもいへ、おきあがりこぶし、おしあひこぶしと、いひかけてもつらぬべし。

【滑稽雑談】（一）格物論に云、辛夷、木の高さ數尺、葉は柿に似て長し。初出筆の如し。正二月花を開く。落ちて子無し、夏秋再び花を著く、花の如くにして小なり。一名、侯桃、一名、木筆。（陳藏器本草に曰、北人呼びて木筆と爲す。其の花最も早し、南人呼びて迎春と爲す（略）和産も説のごとし。初出は筆の形也、花開きて木蓮花に同じ。二三月に咲く也。

【采草】千梅（二）曰、柿の葉に似て紫の苞紅焔あり、又白花のものあり。小幣の如し。故に幣こぶしと云ふ、紫のもの木蓮に似たり、香氣蓮の如く蘭に近し。

註（一）滑稽雑談には「木筆の花」として出してある。（二）篗纑輪の著者。

季題解説　山林や園地にある落葉喬木で、大きいのになると高さ丈餘にも

及ぶのがある。葉一つない枯木のやうだと見てゐると、四月に入つて枝頭がふくらんで、筆の穗のやうな尖つた苞が出來る。濃いかば色で毛茸がある。それが程なく青みを帶びた白色の花と開く。その初めて開くさま、小兒の拳のやうだと云ひ、蓮花に似て居ると云ひ、木蓮に似て少し小さいとも云ふ。一片をとれば盞の如くで、六瓣である。四月も半ば頃になると、開ききつてしまつて先きに開いたのが萎みかけて汚なくもなつて來る。同時に花のつけねあたりからはじめて鮮かな新葉が立つ。その葉は倒卵形で、基脚は鋭角、先端が突出して居る。實は赤く想思子(唐小豆)に似てゐる。年が淺いのには實がないといふ。頭面目鼻の病に效があるといはれてゐる。

【例句】

辛夷

雉子一羽起てこぶしの夜明哉　白雄(白雄句集)
木末踏みちに辛夷の白き哉　同(同)
風なくて散るゝ花のこぶし哉　巴水(新題林句集)
唐人の辛夷を畫く座興かな　子規(子規句集)
草の戸の燈影に白き辛夷かな　月斗(同人)
辛夷早庭木へかけて散りそめし　たけし(ホトトギス)
眞白に行手うづめて山辛夷　素十(同)
一むきに蕾ならびて辛夷かな　立子(同)
村口の彌勒の辛夷花ざかり　犀川(續ホトトギス)
二本の辛夷の花のつゞきたる　虛子(ホトトギス誌)

【參考】 こぶし Magnolia Kobus, DC. (もくれん科) 山林に生ずる落葉喬木なり、高さ二三丈に達す、葉は倒卵形にして基脚鋭角、先端少しく尖出す、早春新葉に先ちて白色の大なる花を開く、果實は長さ二三寸の彎曲せる長軸に着き、開裂すれば其種子絲を以て懸垂す。

林檎(りんご)の花

【古書校註】

【滑稽雜談】 宋の馬志か開寶本草に曰、林檎樹柰に似て、二月粉紅花を開く。子も亦柰の如くにして差し圓し。

【年浪草】 庖厨本草に曰、本草を考ふるに、一名文林、其の果よく禽を林に來らす。故に林檎と名づく。又唐の高宗の時、李謹五色の林檎を貢す。帝大いに悅びて、文林郎とす。或說に、和俗の海棠と稱するもの林檎なり。其の木雌雄あり。花美なるは實を結ばず、花美ならざるは實あり。眞の海棠本邦になきは、中華に眞の櫻なきがごとしとなり。

【[illegible]】 薔薇科の落葉果樹、青森・北海道など寒い土地によく育つ。葉は橢圓で細鋸齒があり、裏面が白い。春の終りに海棠に似た形の、紅い暈のある白い花を開く。花の咲く頃に葉がひろがる。【季題】夏 林檎。

【例句】

林檎の花

霜かきが竹虎がくれや花林檎　几董（井華集）

こゝ雨で林檎の花の終りけり　草堂（續ホトトギス）

街中や林檎の花に辻樂師　北湖（同　）

【參考】 りんご　一名　わりんご　Malus pumila, Mill. var. dulcissima Koidz.（いばら科）通常人家に栽培せらるゝ落葉の果樹にして寒地を好む、其の高さ一丈餘に達し、葉は楕圓形にして鋸齒あり、裏面に軟毛を有す、春日、葉出でゝ後開花す、花は白色にして、紅暈を有し、果實は圓形にして直徑一寸内外、夏の末に至りて熟す、味甘酸にして食すべし、近年西洋種を輸入し、東北地方に於て大に栽培す、ワリンゴに比して大形の美果を生じ、味甚だ佳なり、セイヤウリンゴ（苹果）と稱す。

金縷梅（きんさく）　銀縷梅（ぎんろばい）

【季題解説】 金縷梅科の落葉木本で、山野に自生するが、觀賞用として庭園に栽培される。高さ三四十尺餘に達するものがある。葉は質厚く、稍々皺縮して、楕圓形又は倒卵形をなし、少しく歪形になつて邊線の上半部のみ波狀を呈し、長さ一寸五分乃至三寸ばかりある。葉柄があつて互生する。早春、葉に先つて開花するが、普通三四個づゝ節々に簇生する。蕚は四裂で淡紫色をなし、内面は黄色である。花は黄色の四瓣で、縷の如く細長く（金縷梅の名ある所以である）長さ六七分ある。雄蕊は四本あつて甚だ短い。

北越雪國ではこの花が魁けて咲いて頗る美觀である。まんさくといふ名稱はまづさくの訛であるといふことである。材は强靭で雪舟に使はれる。

黄梅（わうばい）　迎春花（げいしゆんくわ）

【古書校注】

【年浪草】 大和本草に曰、迎春花、俗に黄梅と云ふ。小樹なり。然れども本草濕草の下に載せて曰、高き者二三尺、方莖厚葉、葉初生の小椒葉の如くにして齒無し。面青く背淡し。云々。言ふ所わうばいと同じ。正月に黄花を開く。故に迎春花と名づく。花のかたち千梅に似たり。故に國俗黄梅と云ふ。

【季題解説】 ひひらぎ科の觀賞用

落葉小灌木で、梅といふよりむしろ連翹に近い。莖は細く連翹と同樣蔓のやうに撓み、地につけば根を出す。葉は複葉で三つづゝの小葉からなる。花はおしろいの花の形のやうに盆狀をなし、花中二雄蕊を有する。葉の出ない枯木のうちに、早春、六瓣鮮黄色の花を開く。春の花の中で最も早く咲くところから迎春花の漢名がある。

參考 わうばい Jasminum nudiflorum, Lindl.（ひひらぎ科） 支那原產にして通常觀賞用として栽培せらるゝ落葉小灌木なり、莖は細く稍々蔓狀を呈し、數尺に達し地に着けば根を出す、葉は複葉にして、三箇の小葉より成る、花期は早春にして、新葉に先ちて開花す、花冠盆狀をなし、花中に二雄蘂あり、色は鮮黄色にして芳なし。

山茱萸（さんしゆゆ）の花（はな）

季題解說 山茱萸科の落葉木で、丈高きは一丈餘にも達する。葉の形は梅に似てゐる。早春、葉に先つて美しい鮮黄色の細花を開く。花は小さな二三分計りの繖狀花で、一苞に數花攢簇する。夏紅い實を結ぶ。參照 夏―山茱萸（サンシユユ）

榠樝（くわりん）の花（はな）　からぼけの花

季題解說 薔薇科の落葉喬木である。葉は林檎に似て細かい刻みがある。三月末から四月初に花咲く。花は五瓣淡紅色である。幹の高さは五六間にも達する。木肌年々剝落して雲紋狀の痕を殘す。丁度百日紅に似てゐる。材の質は堅緻であるから用途が廣い。果實は支那梨子に似て凹凸があり、香りが高い。秋熟する。咳・仙氣・腰痛等の藥用とし、砂糖で煎じて飲むが、澁くて不味である。しかしよく砂糖で煮れば食べられないこともない。棚簞笥などに入れて置けば、かんばしい香がしてよろしい。參照 秋―榠樝（クワリン）

榲桲（まるめろ）の花（はな）

季題解說 薔薇科の落葉喬木である。歐洲の原產、高さ七八尺。樹姿は林檎に似てゐて、節に瘤がある。葉は互生し、卵形又は橢圓形で葉の裏に毛茸が密生する。
花は春、五瓣の淡紅色のものをひらき、果實は砂糖煮にして食用に供する。榠樝などもこれによく似て居る植物である。參照 秋―榲桲（マルメロ）

參考 まるめろ Cydonia oblonga, Mill.（いばら科） 歐洲原產にして所々に培養する落葉の果樹なり、莖の高さ七八尺に達し枝多し、葉は互生し、卵形或は橢圓形にして其裏面に毛茸を密生す、春日、枝の頂端に淡紅色の花を生ず、五瓣にして下位子房を有す、果實は圓く二寸餘に達し、外面毛茸を被る、味は甘酸にして生食すべく、罐詰にす。

樝子の花　草木瓜

季題解説　木瓜の一種である。いたるところの山野に自生し、丈け低く、草の中に埋まるくらゐであるので草木瓜と稱せられる。花は赤く一五瓣、形は一寸梅の花に似て大きい。果實は黄熟し、梅の實大で凹みがある。喰べると甚だ酸つぱい。［參照］木瓜の花　秋―樝子

例句

樝子の花

かたまりて花と蕾や花樝子　凡秋（ホトトギス）

草中にしどみの花や花びらや　千止（同）

みちたのししどみの花や若萩や　東子房（續ホトトギス）

しどみ摑る力こめつゝ笑ひをり　たかし（同）

參考小解　くさぼけ　一名　しどみ（Chaenomeles japonica, Lindl.）（いばら科）山野に自生する落葉の小灌木にして、莖は通常一尺内外、枝に針を有し、葉は倒卵形をなして鈍鋸歯を有し、闊き宿存性の托葉を有す、早春葉に先で淡赤色の美花を開く、花後圓實を結ぶ、其大さ直徑七八分、夏日黄熟し酸味多し。

木瓜の花　緋木瓜　白木瓜　更紗木瓜　蜀木瓜　廣東木瓜　唐木瓜

古書校註

【滑稽雜談】　蘇頌が圖經に曰、木の狀柰の如し。春の末花を開く。深紅色。（略）和訓義解に云、もけ、又ぼけ、俱にもくくわの轉語也。（和産所說のごとし。）又種類多し。長春木瓜、十月より紅花を開く。唐木瓜、三月、初花白く、中比淺紅、後深紅なり。草木瓜、闌地錦と云ふ、花赤色也。其の外淀木瓜、花紅、實無し

【栞草】　世に木瓜と稱するもの、本草の註にあはず。是木桃にして木瓜にあらず。近頃唐木瓜と云ふもの有り。乃ち眞の木瓜也。

季題解説　薔薇科に屬する落葉樹である。高さ六七尺、幹に刺があり、葉は一寸海棠に似て居る。三月末、葉に先だつて開花する。單瓣と重瓣とあり、花の色は白で緣が淡紅であつたり、又全く紅いのも多い。實は楕圓形で黄熟する。

木瓜は支那の原産で、種類が甚だ多い。花容頗る野趣に富んで居り、園養して愛される。林や堤に自生してある矮小なしどみ（草木瓜）といふ種類は殊に野趣が深い。更紗木瓜の白地に紅を散らした濃艷さ、蜀木瓜のやゝ朱を帶びた濃紅の色、廣東木瓜の大輪にして雄大なる、孰れも庭園植物として愛翫に耐へるものである。［參照］樝子の花　秋―木瓜の實

例句

木瓜の花

紬きる客に取つけ木瓜の花　許六（五老井發句集）

軍場にむかしがたりや木瓜の花　也有（蘿葉集）
革足袋や野はあたゝかに木瓜の花　錢芷（讃塞）
川縁や芥のかゝる木瓜の花　牛晁（たてなみ）
雉にばかり孵へりし雛や木瓜の花　牛喆（懸葵）
木瓜咲いて巣架に孵へる毛蟲かな　蕪州（同）
花木瓜に風また變る堤かな　亞石（同）
花木瓜の梢に殘りて花屋かな　うしほ（同）
雫折の木瓜共まゝに花つけし　磊々（同）
花木瓜を登るとかげを見たりけり　富女（同）
木瓜白し夕の人となりて去る　東子房（續ホトトキス）
湖の見えぬときあり木瓜の雨　不知火（同）
近づけば大きな木瓜の花となる　立子（同）
この木瓜に寺奉公も久しけれ　山彦（同）
木瓜の木に苔あり梅の木に似たり　虛子（同）

參考 ぼけ（Chaenomeles lagenaria, Koidz.（いばら科）支那原産にして庭園に栽培する落葉の觀賞用灌木なり、莖の高さ六七尺に達し、葉は長楕圓形を呈し簇生す、春日、葉に先ちて花を開く、花の色は種々あり、其深紅色なるをヒボケ、白色なるをシロボケ、紅白雜色なるをサラサボケといふ、皆艷美なり、花を賞する外果實は楕圓にして長さ二三寸藥用に供す。

松の花（まつのはな）

季題解說 松の新芽とは同時に花を附著してゐる。然しその花は眺めて花盛とか、滿開とか感じるやうな種類のものでない。大抵は緣側や庭前やその他に、何時の間にかこぼれて溜つてゐるのを見て、初めて松の花が咲いたなと氣つくのである。然しそれはひそかに隱れてゐるやうな感じでは決してない。老松の多い池上本門寺山などでは、四月一杯は境内の乞食の膝を埋めるほど松の花は盛んにふる。さういふ旺盛な景色を現じるのである。一體松の花は一枚のうちに必ず雌雄を異にしてゐて、雌花は澤山の鱗片から成つて新芽の頂に二三個かたまつて生じ、又雄花は穗狀をなして新芽の根下に簇り生ずるものである。雄花は盛りを過ぎて散りとんでしまふが、雌花に生ずる毬果は長くくつ著いてゐて松毬となるのである。〔參照〕十返りの花（新年）　若綠（春）

例句
松の花
すつと立木草の中に松の花　鬼貫（俳諧七車）
東山お男子ならけたをよろこみを、云々
初聲を鶴とも聞かめ松のはな　同（同）
非戸揺てまつうつろふや松の花　同（同）

まだ六山の味覺えねどまつの花　蕉然（蕉然句集）
三むかしつもる日はなし松の花　千代女（千代尼發句集）
吹つもる薗出なほして松の花　同（同）
線香の灰やこぼれて松の花　蕪村（夏より）
松の花柳の花は手にもとる　白雄（白雄句集）
風ひとふき酒にけぶれる松の花　同（同）
夕風に松の花ちる薄曇り　冬李（類題發句集）
春深し松の花ちる城の堀　車蟻（續明烏）
風呂沸くやしんと日あたる松の花　楞童（ホトトギス）
漸くに雨あがるらし松の花　青邨（同）
しばらくは障子たてきり松の花　怒愛庵（同）
松の花吹きたゞよへる緣に腰　つや女（續ホトトギス）
老松の花のこぼるゝ御庭かな　耕雪（同）

十返り（とかへり）の花（はな）

季題解說　「松の花」をいふ。「藻鹽草」の中に「松の花十かへりの花とて、十年に一度花吹く」とあるところから此の名がある。松は松柏科植物に屬し、四月頃に開花する。植物學上、雌雄同株というて、同一の枝に必ず雌雄を異にする花を開く。雌花は若い枝、即ち一松の綠」の上部に大抵二個著き、赤紫色を呈する球で、澤山の鱗片狀の雌蕊から成つて居る。そしてこの雌花は特別のもので、他の植物の子房にあたるものは一枚の鱗片である。その鱗片の內側のもとにある小さい二つの球が即ち胚種である。雄花は若い枝の基部に簇生し、黃色の俵の形をしてゐる。單に多くの雄蕊のみから成り、その一つの雄蕊は鱗片狀をなし、その外側に二つの大きい葯がある。熟すれば、葯は裂けて中から黃色の煙の如き多數の花粉を飛ばす。花粉には氣囊があり、輕く飛び散り易い。風媒植物である。雄花は脫落するが、雌花は長く止つて青松毬となり、越年して成熟し、翅を著けた果實を生ずる。更にそれから一節下の枝わかれの部分には褐色の松毬がある。これは一年前のものである。かゝる果實を毬果といふのである。〔參照〕松の花（マツノハナ）

例句
十返りの花
十かへりのころゑやたえせん松の花　鬼貫（俳諧七車）

杉（すぎ）の花（はな）

季題解說　松柏科に屬する常綠の喬木、幹の高さ二十丈、周圍丈餘に及ぶものもある。葉は細く短くして針の如く尖り、小枝に集まり生ずる。花は三月頃開き、雌花と雄花とは別で一株に二樣の花を著ける。雄花はその形米

粒の如く、又雌花は小さい松子に似てゐる。この實は秋成熟すると鱗片が碎けて內から種子を飛ばすのである。材は建築器具などに用ふること人の知る通りであるが、特に脂氣の多いものを木香と云ひ、清酒に香氣を著ける料とする。樹皮は屋根を葺き、葉は抹香・線香・香油などの原料となる。

【參照】秋―杉の實

【例句】

杉の花　大杉の花の盛の天龍寺　旭川（ホトトギス）

【參考】すぎ（Cryptomeria japonica, D. Don.（まつ科）我邦の原產にして、邦內到る所に栽植せらるゝ常綠喬木なり、今屋久島等に自生を見る、幹の高さは數十尺周圍丈餘に達す、葉は小形の針形をなし、少しく彎曲せり、春日、雌花と雄花とを同株に生じ、秋日指頭大の毬果を結ぶ、雄花は米粒狀をなして多く黃粉を吐き、雌花は小球狀をなして綠色なり、材を種々の用途に廣く利用す。

銀杏の花　公孫樹の花　ぎんなんの花

【古書校註】

【年浪草】時珍が曰、銀杏は其の葉鴨掌に似たり。因りて鴨脚と名づく。宋の初め、始めて入貢す。改めて銀杏と呼ぶ。其の形小杏に似て、核の色白きに因りて也。今白果と名づく。梅堯臣が詩に、鴨脚綠李に類す、其の名葉に因りて高しと。歐陽修が詩に、絳囊初めて入貢す、銀杏中州に貴ぶと。是なり。高さ二三丈、葉薄く縱理儼に、鴨掌の形の如し。刻缺有り。面綠に背淡し。二月花を開きて簇を成す。青白色なり。二更に花を開き隨つて卽ち落つ。人之を見ること罕なり。

【季題解說】公孫樹科の落葉喬木で、高さ二三丈から六七丈にも達して天を摩してゐるもののあることは周知のことである。社寺の境內に多く、人家の庭園にもある。街路樹にも多く用ひられる。有柄の扇形の葉が晚春に綠美しく、秋日黃變することも皆人の知つてゐるところである。雌雄異樣であつて四月頃花を開く。雄花は穗狀、雌花は柄があつて頂に通常一二箇をつけてゐる。果實は秋に至つて熟する。ぎんなんと云つて食用に供するもの卽ちこれである。材は木理緻密で黃色を呈し碁盤・算盤などに用ゐられる。

この樹、樹頭北を指すが故に方位を知るに便ありと稱せられる。【參照】秋

秋―銀杏

例句

銀杏の花　廻廊に降るはいてふの花とかや　措大（ホトトギス）

參考　いてふ（Ginkgo biloba, L.（いてふ科）支那原産の落葉喬木なり、蓋し日本には昔時同國より渡りしものならん、幹の周圍一丈餘、高さ十丈に達することあり、葉は有柄にして扇形の葉面を有し、秋日黄變せるもの頗る美觀なり、四月頃、新葉と共に單性花を異株に生じ、雄花は穗狀をなして稍ミクワの花に似、雌花は柄ありて頂に通常一二箇を着く、秋末球狀黄色の實を結ぶ、臭氣ある肉を去りて白色の種子を出し食用に供す、所謂銀杏これなり。熟する前果内に精蟲を生ず。

榧の花

季題解說　かやは山に自生する一位科常綠喬木であるが、また觀賞用として庭園にも栽植される。幹の高さ數十尺に達し、葉は濃綠色の扁平針狀互生である。雌雄異株、四月頃花を開く。その花は餘り注意をひかず、知つてゐる人が少ないが、花の色、形など松の花に似てゐるといふことである。果實は脂肪分多く、油を採る料ともなる　材は緻密で光澤があり、木理美しく強い香氣があり、克く水質に耐へるので建築・造船の料とせられるが、殊によい碁盤は榧材に限るといふことになつてゐる。【季節】秋―榧の實に

實作注意　既に本書の冬の部にも這入つてゐるけれども、それは間違ひであらう、

例句

榧の花　月もるや榧の花ちる土手の上　舊國（續選發句集）

赤楊の花　はりの木の花

季題解說　はんのきははりのきの音便である。榛の字を當つるものがあるが、榛ははしばみであるといふ說は正しいやうである。樺科の落葉喬木で、山野、主として濕地に自生するが、地方に依つては水田の畦畔附近に栽植して稻架にすることがある。高さは五六丈にも達する。葉は楢に似て長橢圓形で尖頭、邊緣に淺い鋸齒を有する。早春の頃葉に先立つて暗紫褐色の花を開く。單性花、

雌雄同株、雄花は圓筒狀葇荑花で下垂してゐる。鱗片内に一二花を有する。雌花も亦短小な葇荑花をなして上向し、多數の鱗片より成つてをり、紅紫色を呈する。「俳句に現はれたる植物」歌原蒼苔著 には二月頃開花とある。果實は松毬に似て小さく、鱗が密に重層してゐる。樹皮及び果實は染料となる。材は建築器具等に用ひられ、或は火薬用の炭となる。〔參照〕榛の花ハシバミノハナ

〔參考〕はんのき 一名 はりのき Alnus japonica, Sieb et Zucc.（かばのき科） 山野に自生する落葉喬木にして、主として濕地に生じ、地方によりては水田の畦畔附近へ多く栽植し、稻掛けとす、高さ二三丈に達し、葉は楕圓形若くは長楕圓形にして尖頭、邊緣に淺鋸齒を有す、早春、葉に先ちて暗紫褐色を呈する單性花を同株に開く、雄花は圓筒狀葇荑花をなして下垂し、鱗片内に一二花を有す、雌花も亦短小なる葇荑花をなして上向し、多數の鱗片より成り紅紫色を呈す、實は楕圓形にして、小鱗は密に重疊す、古來より果實を染料に供す。

榛の花（はしばみ はな）

〔季題解說〕 はしばみは山地に自生する樺科の落葉灌木で、高さ七八尺（植物圖鑑）とも、落葉喬木、幹の高さ二三丈（廣辭林）ともある。葉は丸い心臟形で先きが尖り、鋸齒を具へ、葉柄によつて互生してゐる。春日花を雌雄同株に開き、雄花は長穗狀をなして垂れ、雌花は通常相集つて枝芽より出る。雄花は暗褐色、雌花は綠色である。果實は總苞で包まれ、種子を喰べると栗に似た味ひがある。〔參照〕赤楊の花ハンノキノハナ

〔例句〕
榛の花 いつよりぞ榛の花房打垂れぬ 白桐（ホトトギス）

〔參考〕はしばみ Corylus heterophylla, Fisch. var. Thunbergii, Bl.（かばのき科） 山林に自生すれども、又人家にも栽植さるゝ落葉灌木なり、幹の高さ一丈内外、葉は甚だ廣くして殆んど圓形をなし、基脚心臟形にして先端尖り、邊緣に不齊の重鋸齒を有す、春日開花し、雄花は黃褐色にして長く穗狀に垂れ、雌花は少數相集りて芽鱗中より出で、紅紫色を呈す、果實は葉狀の總苞によりて下部を包む、果實は採りて食料に供すべし。

梓の花（あづさのはな）　よぐそみねばりの花

季題解説　樺の木科に屬する落葉喬木である。本州・四國・九州の山地に自生する。幹の高さ三十尺、周圍五六尺に達する。樹皮は灰色に赭黑色の斑點があり、外皮は離脫し易く、葉は長卵形。春おそく穗狀で綠褐色の美しくない花をひらく。昔から此木は梓弓を作り、又版木として用ゐたものである。

元來この植物に關しては種々異說があつて、古い植物書には、のうぜんかつら科の「きささげ」を梓としてゐるものもあるが、これは蔓性で弓にも版木にも使用出來ない。又或る植物學者は「あかめがしわ」を梓であると斷定したが、あかめがしわも亦弓や版木に適せず、東大牧野博士は百方調査の結果、信越地方及び大和方面の方言からヒントを得て、遂に大正十四年刊行の同博士著「日本植物圖鑑」に「あづさ」を正名、「よぐそみねばり」を別名として初めて發表掲載された。

參考　あづさ　一名　よぐそみねばり　Betula ulmifolia, Sieb. et Zucc.（かばのき科）山地に自生する落葉喬木なり、幹の高さ三丈周圍五六尺に達す、樹皮は灰色にして赭黑色の斑點を有し、外皮は容易に離脫す、樹皮に一種の臭氣を有す、葉は長卵形にして先端尖り、基部は淺き心臟形をなし、緣邊に不齊の鋸齒を有し、十對乃至十二三對の支脈を具ふ、幼時は兩面に毛を有すれども後に至れば只裏面の脈上にのみ有り、春日、綠褐色の單性穗狀花を出す、果實は長さ一寸許りの穗をなす、古昔この材を以て弓を製せしと云ふ。昔より之れを梓とするは最も非なり。

樫の花（かしのはな）

季題解説　樫の樹はよく生垣や風除けに植ゑられてゐる。雌雄異株で、五月の初め頃から褐色の花が咲くが、格別注意を引くやうな花ではない。しかしそれが道ゆく人にほろほろ散りかかる頃には一種の風情がある。

參照　秋―樫の實（カシノミ）

柹の蔕（かきのたう）

古書校註　【年浪草】雜談抄に曰、和俗、柹の花を呼んで柹の蔕と稱す。云々。按ず

るに、柿の花三月未だ開かず、依つて宗瑞は、柿の秧(ワカバ)といへれど、柿の臺は京畿の俚諺にて、柿の花を云ふ。本草の説も四月花を開くといひ、元より四月の季なるべきを、季吟が增山井に三月に出す。是より秧の説を云ふにや。京畿の兒童、柿の花の蔕拔け落ちたるを拾ひ集め、藁稭(ワラシベ)に貫ぬき連ねて玩弄す。是を柿の臺を繋ぐといへり。花に治定せり。〔參照〕夏―柿の花(カキノハナ)

柳絮(りうじよ)　柳の絮(わた)　柳の花(はな)

〔季題解説〕楊柳は春日、葉に先だつて暗紫色、穗狀の花を開き果を結ぶ。この果が熟して飛ぶ絮が柳絮である。これは內地でも見るが滿洲地方に殊に多い。柳絮は翩翻と風に從つて白雪のやうに大空から地上に下るのもあれば、又煽られて昇るのもある。道ばたの窪地には一ぱい溜つてゐる。固まつてころがつてゐるのもあれば、水面に浮いてゐるのもある。風のない日でも、或はあたりに楊がない所にでも、柳絮は翩翻として漂うてゐる。滿洲地方では四月の終りから五月にかけて多い。〔參照〕柳(ヤナギ)、猫柳(ネコヤナギ)、夏―葉柳(ハヤナギ)

〔例句〕　柳絮

柳絮月の面を流れけり　伊昔紅（ホトトギス）
吹かれつゝまろげかたまり柳絮かな　幽靜（同）
柳絮飛ぶや江舟岸をすれ／＼に　幸叢（同）
峽舟や柳絮飛び去り飛び來り　雨意（同）
江畔や柳絮を浴びて洗濯女　茨雲洞（同）
大いなる迅き柳絮を見やりけり　綠童（同）
靜かにもこずゑはなるゝ柳絮かな　烏頭子（同）
なかぞらにほぐれわかれし柳絮かな　同（同）

北陵行

香煙に來ては去りゆく柳絮かな　三昧（續ホトトギス）
柳絮散る妓生は朱の柱かげ　木長（同）
葉陰より生れ流るゝ柳絮かな　寄雨（同）
水草し降りし柳絮をのせて去る　岬人（同）
くたぶれて草に坐れば柳絮かな　乾壺（同）
欄干にやすむ柳絮もありにけり　みづほ（同）
甕市の甃にたまれる柳絮かな　幸叢（同）
柳絮飛ぶ奉天市街にぎやかに　古城子（同）

猫柳(ねこやなぎ)　えのころやなぎ

〔季題解説〕池塘、河畔、溪谷の瀨床などに多く野生してゐる柳の種類であ

る。雌雄異株である。初め二月頃は、厚い皮を冠つてゐるが、暖くなるに隨つて、大きく肥え、自ら皮を脱ぐのである。その形態に猫を思はするものがある故に、此の名がある。主として活花・佛華などに使はれる。これは雄花の方であるが、雌花は實を生じ、後に柳絮を飛散する。〔參照〕柳ヤナ　柳絮リウヨ

例句　猫柳

猫柳水光りつゝ暮れにけり　北湖（ホトトギス）
枯枝は芥かざしぬ猫柳　橙黄子（同）
並びたる杙の絶間の猫柳　同（同）
戀塚の花筒にある猫柳　桂樹樓（同）
溫泉の川の湯氣立ちこめて猫柳　岬人（同）
一つ〳〵のけぞりにつけ猫柳　麦城（同）
猫柳みどりの蕋を吐いて咲く　青邨（ホトトギス）
猫柳添水の水に浸けてあり　いはほ（同）
川甚の離座敷や猫柳　水竹居（同）
猫柳四五歩離れて暮れてをり　素十（同）

參考　ねこやなぎ Salix gracilistyla, Miq.（やなぎ科）川邊等に自生する落葉灌木なれども時に人家に植ゑることあり、樹の高さ五六尺に達す、葉は長楕圓形にして稍ゝ厚く、邊緣に微細なる淺鋸齒を有し、先端短く尖り、葉柄の基脚不正形の托葉を有し、葉面に毛茸を生じ、殊に裏面は灰白色を呈す、雌雄異株なり、早春葉に先ちて開花し、雄花は黄花粉ある紅色葯の雄蕋を有し、花穗は柔滑絹絲狀の白毛を密生す、果穗は長さ二寸許ありて果皮に毛多し。

ライラック

季題解說　むらさきはしどい、またはしどいともいふ。南洋原産の木犀科落葉灌木で、觀賞用として庭園に培養される。葉は卵狀心臟形全邊で對生し、晩春の頃、圓錐花序に小花を綴る。花は四裂筒狀で淡紫・白・紅紫色等があり、香氣甚だ強く、香水の原料に供せられる。

例句　ライラック

うしろより縋り匂ひぬライラック　盆城（續ホトトギス）

木瓜の花

季題解説 春四月、大きな掌狀の葉の長い柄の間から淡黄色の花が咲く。花は普通雌雄異株、稀には同株であることもある。雄花は長い花梗を有し、花冠は漏斗狀、先端が五裂してゐる。雄蕊は十個。雌花は膨大で柱頭は五裂してゐる。果實は八・九月の交に熟し、品種に依つて形狀を異にするが、普通卵圓形、長楕圓形等をなしてゐる。

楊梅の花

古書校註

【滑稽雜談】 順の和名に曰、楊梅。和名、夜末毛々。○枕草紙に云、見るに異なる事なき物の、文字に書きてこと〴〵しきもの、楊梅。

【栞草】 樹の高さ丈餘、葉は瑞香・水楊の如くにして、細く厚く、深青、冬を經て凋まず。二月に花を開き、三月・四月に實を結ぶ。

季題解説 楊梅科の常綠喬木で暖國に自生するが、庭園にも植ゑられる。高さは數丈にも達する。葉は互生し、概ね枝頭に集まつて輪生の狀をなし、長楕圓狀倒披針形で通常全邊がある。稚木の葉には鋸牙を持つてゐる。雌雄異株で、春、葉の間に黄白色(或は褐色とも)の小花を開く。長さ六七分、松の花に似てゐる。夏日球形の甘美な漿果を結ぶこと人の知るところである。樹皮は藥用又は染料となる。**參照** 夏―楊梅

參考 やまもも Myrica rubra, Sieb. et *Zucc.*(やまもゝ科)暖國に自生多しと雖も又栽植することある常綠喬木なり、幹の高さ數丈に達し、幹の直徑三尺内外に至るあり、葉は長楕圓狀倒披針形にして厚く通常全邊なり、稚木の葉は鋸牙を有す、雌雄異株にして春日褐色の花を開き、夏日紫赤色の核果を熟す、其大三四分乃至五六分、球形をなし多數の突起を有す、果實を生食し、又樹皮を染料に供す。

長春花

月季花　庚申薔薇　四季咲薔薇

古書校註

【年浪草】 時珍が曰、月季花は、處々人家に多く栽ゑて之を插む。亦薔薇

の類也。青き莖、長き蔓、硬き刺あり。葉は薔薇よりも小にして、花は深紅の千葉厚瓣なり。月を逐うて開放して實を結ばず。〔大和本草に曰、玫瑰の花・纏絲花・金罌子・牡丹薔薇・野薔薇、皆、月季花の類なり。

季題解説　庭園に栽培して觀賞する常綠の灌木である。薔薇の一種であつて、莖の高さ四五尺、莖・葉ともに刺が有る。葉は三乃至五個の小葉から成るところの羽狀複葉であつて、平滑で光澤がある。小葉は楕圓形で鋸齒が有る。四季を通じて紅色又は白色の美花を開く。單瓣と重瓣とがある。早春より開き花期が長いので長春花の名がある。又四季咲薔薇とも稱せられる所以である。

山櫻桃の花

古書校註

【年浪草】花彙に曰、八閩通志に云、梅桃、木の大なる者は丈に近し。春花さく。形止渇に似て小さく、白色紅暈、最も繁密枝に滿つ。其の葉圓尖にして欅葉の如く、頗る狹少なり。細齒及び小毛あり。實を結ぶ、一枝數十顆、大さ脆櫻桃の如し、夏月熟して珊瑚に類す、鮮瑩愛すべし。

季題解説　薔薇科に屬する落葉樹である、相當大木にもなるといふことであるが、人の脊丈くらゐのを多く見るやうである。枝條肌粗く、葉は櫻に似て小さく、微毛を被つてゐる。晩春葉に先立つて淡紅の蕾を生し、開けば白く小さい梅花のやうである。六月初めに實を結ぶ。實は眞圓くて庭梅に似てゐる。一枝數十顆をつけ、甚だ可憐である。子供などが喜んで採つて喰べる。野趣の深い植物で、古い農家の庭先き、井戸端、垣の邊などに見つけた時一番山櫻桃らしい氣持かするやうに思はれる。山櫻桃といふと、過ぎた昔の子供の時分のことゝか、田舍の實家とかを想ひ出すといつたやうな、そんな氣持の花なり實なりである。〔參照〕夏―山櫻桃ウメ

例句

山櫻桃の花　ゆすら梅まばらに咲いてやさしけれ　松葉女（續ホトトギス）

參考　ゆすらうめ Prunus tomentosa, Thunb.（いばら科）支那原産にして庭園に栽植する落葉灌木なり、莖の高さ七八尺に達し、枝葉繁茂し若き莖に毛を密生す、葉は卵形或は楕圓形にして鋸齒あり、細毛を有す、春日葉に先ちて白色の花を開く五瓣花なり、果實小にして圓く、熟すれば深紅色を呈し光澤あり、食ふべし。

郁李の花

庭梅の花　こうめの花　にはざくら

古書校註

【滑稽雜談】大和本草に曰、消梅は梅の最小なるなり。其の花皆下にむか

ふ。甲斐・信濃より出づ。故に信濃梅とも甲州梅ともいふ。〇これらの說のごとし。其の花外の梅に殿れて開く。白色也。一重又は八重も侍るならし。以て此の月に之を押す。

【年浪草】和漢三才圖會に曰、庭梅・正字未詳。叢生して高さ三四尺、三月花を開く。形梅に似て小さく、白色にして紅色を帶ぶ。蘂黃にして甚だ繁く、艷美也。花落ちて葉生ず。（略）小梅の花と庭梅と同じきか。

季題解說 觀賞用の落葉小木で薔薇科に屬する。高さ一二三尺、葉は廣披針形で鋸齒を有する。春日、葉のまだ出ないうちに淡紅白色五瓣の小さい花を著ける。果實は圓く熟して紫赤色となる　櫻桃より小さい。食べられる。この植物の重瓣花を開くものを特ににはざくらと云ふ。又記して曰く「三月開花、形似梅小、白色帶紅色、蕊黃而甚繁、艷美也。花落て葉生ず」と。

參考 にはうめ　一名　こうめ　Prunus japonica Thunb.（いばら科）觀賞用の落葉灌木なり、莖の高さ五六尺、葉は廣披針形にして鋸齒を有す、春日葉に先ちて多くの花を開く、淡紅色時に白色の小花にして五瓣より成り、果實は圓く、熟すれば赤色を呈す、本種は一にこれをコンメと呼ぶ、シナノウメの一名コンメと混同すべからず、此一變種にして重瓣花を開くものを特にニハザクラといふ。

櫻桃の花　支那實櫻の花　チエリー

季題解說 薔薇科の落葉喬木である。幹は横紋があつて灰紫色である。葉は鋸齒を有し、互生する　日本にはもとなかつた木である。專ら果實を賞するもので、花は輪も小さく、貧しくて賞するに足りない。白色であるが蕾は淡紅色を呈する。支那種は三月に、歐羅巴種は四月に開花する。六月、實を結ぶ。その實は即ちチエリイ、さくらんぼと稱せられる。〔參照〕夏—櫻桃の實

參考 しなみざくら（櫻桃）Prunus pseudo-Cerasus, Lindl.（いばら科）支那原產にして、時に我が邦に栽植せらるゝ落葉灌木なり、幹の高さ數尺乃至一丈許にして基部より叢生する傾きあり、葉は橢圓形にして互生し邊緣に重鋸齒を具ふ、春日枝上に淡紅色の繖形狀に花を開く、五瓣多雄蕊にして萼に毛あり、稍ゝ彼岸櫻の態あり、果實は橢圓形にして長さ四五分、長柄を有し熟して紅色なり。

木苺の花

季題解說 木苺は山野や路傍に自生する灌木で、高さ二三尺から五六尺にも及ぶ。莖葉共刺が多い。葉は多くは五裂して楓に似てゐるので「もみぢいちご」ともいふ。晩春初夏の頃深綠の葉の間に純白な五瓣花を開き、甚だ感じがよい。〔參照〕夏—木苺

木苺の花　よく見れば木苺の花よかりけり　虚子（續ホトトギス）
　　　　　木苺の花をあはれと眺めゐる　同（同）

苗代茱萸の花（なはしろぐみのはな）

たはらぐみの花

考證

【滑稽雜談】　大和本草に云、胡頽子、國俗ひぐみと云ふ。木の高さ六七尺、枝柔か也。葉は梨に似て長く狹し。表青く裏白し。十二月・正月花咲く。花の形丁香のごとく下り垂れ、夏月實熟す。食ふ可し。實小にして長し。貝多し。核に稜多し。核横にして堅からず。核の内絲の如し。云々。又山茱萸と云ふ。京都の方言なはしろぐみと云ふぐみあり。苗代する時實熟す。中華の人云ふ、是則ち山茱萸也。土地肥痩有り。故に日本に有る所肉少しと云ふ。葉厚く堅し。冬凋まず。枝強し。實は山茱萸に似たり。これ誠に山茱萸なるか。未詳。〜按ずるに、古哲皆胡頽子を以て苗代ぐみと云ふ。篤信は山茱萸と云ふ。然らば此の者は七八月に實を結ぶと本草に云ふ。苗代に應ぜざる也。考ふ可し。

【年浪草】　和漢三才圖會に曰、胡頽子、大抵三種有り。其の葉と實と、皆少異有るのみ。一種、春月苗を種うる時に當つて實熟す。大いさ、小さき棗の如くなる者を、苗代胡頽子と名づく。

季題解說　山野に自生する常緑樹で、莖の高さ七、八尺、枝多く、稍ゝ蔓生である。表面は深緑色、葉裏は褐色か銀色の鱗甲を密布してゐる。早春、小さい實の先に細長い漏斗形の白い花をつける。俵形の實がだん〳〵に大きくなると花は落ちる。〔同題〕夏―夏茱萸　苗代茱萸

例句

苗代茱萸の花　宵闇や苗代ぐみの咲きそめし　小提灯（ホトトギス）

枳殻の花（からたちのはな）

季題解說　枳殻、俗に「げず」、へんるうだ科枸橘屬の落葉灌木である。原産地は支那であるが、今は全國到る處、生籬にされてゐる。刺の多い枝をさし交し密生するもので、普通幹の高さ五六尺から老木は丈餘に達するものもある。生垣の枳殻は大概高さを刈揃へてあるが、春四月頃、淡緑色の艷のいい柔い葉を一面にふき、純白、五瓣の香ひのよい（蜜柑の花に似た）花をいつはいつける。或は芽をふかぬ中から咲きいづるものもある。まつ青な枸橘垣が白い花を雨にこぼしてゐるのは美しいものである。實は梅の實大で丸く、熟すると黄色になるが食べられない。幹は柑橘類の砧木とする。〔同〕夏―柑類の花　秋―枸橘の實

例句

からたちの夕の花に出でにけり　夕陽斜（ホトトギス）

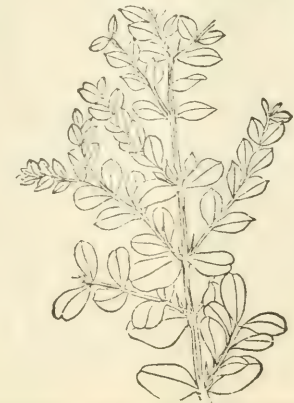
病院の枳殻の垣の花咲きぬ　白虹（同）

山椒（さんせう）の花（はな）　はなさんせう

【季題解説】山椒の花は、木の芽がふくとすぐに――四月初頃――みどり色の粟粒のやうな小花がむらがつて咲く。

又花山椒ととなへる方のものは、葉の形、花の様も普通の山椒と少しも違はないけれども、此方は發芽が早く、普通のものより大きく、決して結實しない點が違ふのである。そして嫩芽の出るのが十數日早いので、農家では普通の木の芽のない時、之をつみとつて市場へ出すものである。此の花山椒は花も葉も共に食用とする。が決して實らぬ。【參照】夏―山椒の花（ハナサンセウ）青山椒（アヲサンセウ）　秋―山椒の實（サンセウノミ）

黄楊（つげ）の花（はな）　あさま黄楊（つげ）の花（はな）　姫黄楊（ひめつげ）

【季題解説】暖國の山地に自生する常綠の木で、高さ三四尺乃至一丈位、普通楕圓形又は卵形の葉が對生してゐる。花は淡黄色で、春、枝頂葉心に簇生する。果實は豆粒大である。材は黄色で、質極めて緻密、用途が廣い。伊勢の朝熊山に多い。「あさまつげ」の名さへある。姫黄楊一名「くさつげ」といふのは、矮小な園藝種である。

【例句】黄楊の花

花つげや垣ともならず一ところ　みさ子（ホトトギス）

大蛇に蹴られてちりぬ黄楊の花　燕子（同）

黄楊の花二つ寄りそひ流れくる　草田男（同）

沈丁花（ちんちやうげ）　丁字（ちやうじ）　瑞香（ずゐかう）　芸香（うんかう）

【古書校註】

【滑稽雜談】大和本草に曰、本草の芳草門に瑞香有り。和に云ふ沈丁花と同じ。本草、木を草類にのせ、草を木類に載する事多し。灌木類の山礬、花は相似て同じからず。○私云、瑞香の説、格物論に盡せり。（…）

【年浪草】又一名、芸香。芸は盛多なり。老子に曰、方物芸々是也。此の物山野に叢生して甚だ多く、而も花に香馥多し。故に名づく。○又一に捉

花と名づく。江南の野中極めて多し。野人葉を採り灰を焼きて紫を染むる黝と爲す。礬を借らずして成る。予因つて以て其の名を易へ、山礬と爲す。

注（一）植物論の說とは、「丁香、樹の高さ三四尺、枝幹婆娑として、葉厚く深綠色。（略）花紫にして丁香の如し」云々とあるのをいふ。

季題解說　瑞香科、支那原產の觀賞用常綠灌木である。高さはせいぜい四五尺ばかりにしかならぬ。木振りは丸く毬のやうに茂るのが常である。枝葉繁茂し、葉は披針形で厚く、緣に鋸齒無く、葉の面には光澤がある。冬、雪の中からもう花の用意をし、葉の間に蕾が簇つて生ずる。その蕾の間が隨分長い。蕾の外側は紫赤色だが、咲くと內面は白く極めて香氣高い。香りは沈香・丁香を兼ねるといふ。數間離れて馥郁と匂ふ。邸のうちにあつても塀外から匂ふ。純白な花をつける種類もある。葉に斑のある種類もある。

例句　沈丁花

沈丁の花となりたる白さかな　草　餅（ホトトギス）
沈丁の葉ごもる花も濡れし雨　秋櫻子（同　）
沈丁の香にいつまでも待たせけり　彩　虹（同　）
門ふかく沈丁の香に這入りけり　たけし（同　）
沈丁の咲きはじめたる白さかな　立　子（同　）
あしもとにありて匂へる沈丁花　藍　村（續ホトトギス）
春ちかき沈丁のあり窓の下　てい子（同　）
ひそかにも沈丁の香のなかれをり　もと女（同　）
沈丁花春の月夜となりにけり　虛　子（句集虛子）
沈丁に篩さはりて匂ひけり　同　（雑ホトトギス）

參考　ぢんちやうげ Daphne odora Thunb.（ぢんちやうげ科）支那原產にして通常庭園に栽ゑて觀賞せらるゝ常綠灌木なり、莖の高さ三四尺、枝葉繁茂し、葉は披針形にして其質厚く、全邊にして光澤を有す、冬日葉間に蕾を攢簇し、春に至り開花す、色は內面白色外面紫赤色にして香氣強く、時に白花の品あり、花後實を結ばず。

三椏（みつまた）の花（はな）

結香（むすびき）の花（はな）

季題解說　落葉性の灌木で瑞香科（ヂンチヤウゲ）に屬する。諸國に野生するがまた栽培もせられることも多い。箱根へ行くと萱原の中などで多く見かける。小涌谷

三河屋の梅林の三椏の花は美事である。

莖は高さ通常六七尺であるが、老木は丈餘に達するものもあるといふことである。枝は三叉をなしてゐるので、その名がある。葉は廣披針形で互生し、革質で厚く全邊である。秋の末落葉の後、枝梢毎に一團の花蕾を下垂し、春季に至り葉に先だつて開花する。花は黄色の筒狀花からなり、兩全で八箇の雄蕊を有する 用途としては莖の内皮を製紙の原料とする。

[參照] 冬―三椏蒸す

[參考] みつまた Edgeworthia papyrifera, Sieb. et Zucc. (ぢんちやうげ科) 外國輸入の落葉灌木にして、今は諸國に栽培せらる、高さ六七尺枝は皆三叉をなす、葉は廣披針形にして、互生し全邊なり、秋末に落葉して梢枝毎に一團の蕾を下垂す、春日葉に先だつて黄色の花を開く、筒狀蕚を有し 頭狀に集る、樹皮の纖維は製紙の原料として名あり。

青木の花

[季題解説] 山茱萸科に屬し、山地の稍〻陰地に自生する常綠灌木であるが、觀賞用として庭園にもよく植ゑる。殊に、下蔭でも枝葉が衰へないところから、喬木の根方とか樹間などにあしらつて植ゑられることが多い。木の高さは五六尺で、直立する。葉は長橢圓形の尖つた光澤のある鋸葉で(三四寸位)對生である。觀賞用のものには葉の著しく細長な種類もある。田舍では、この嫩葉を味噌漬にして食用にすることがある。花は仲春、淡いえび茶色の小花がむらがつて咲く 實は眞赤で艶々しく美しいが、花は極めて淋しく地味である。花の盛りは四月中頃である。

青木の觀賞用のものには淡黄色斑入葉のものがある。又實を結ぶ木と結ばない木とあつて、この實を結ばない方を植木屋は「ばか」と云ふ。

[參照] 冬―青木の實

馬醉木の花

あせぼ　あしび　あせみ

[古書校註]

【滑稽雜談】 馬醉木の花。萬葉集二十に曰、山齊花。○見安に云、あしびはあせみ也。云々 ○仙覺抄に云、足引の詞祕說に云、山齊と云ふ木、殊にさかふる木なる故に、此の集第七卷の歌には、あしびなすさかへし君がほりし井のいはゐの水はのめどあかぬかも、とよそへ讀めり。山は高く圓くなれば、山を云ひ出で人諷詞に、あしびと云ふ木なれば、あしびきと云ふ。○藻鹽草に曰、馬醉木、馬此の葉を食ふときは則ち死す。故に馬醉木と云ふ。○大和本草に曰、外品 馬醉木、葉は忍冬の葉に似たり。又しきみの葉に似て細也。味苦く澀る。春の末青白花開きて下にさがる。少し黄色を帶ぶ 微毒あり。馬此の葉をくらへば死す。西土の俗は、この木をよ

しみしぼと云ふ。私云、所詮皆僻なる出書未詳。しかれども古歌おほくあしび・あせみと讀みて、馬の毒なる事を云ふ。萬葉には馬醉木をおほくつつじと和し、山齊の字をあしびきと和す。いづれも出書未考。此の者調伏の護摩木とすといへり。夫木集の光俊が歌に、おそろしやあせみの枝を折りさきて南に向ひいのるいのりは、とよめるもその心にや。俗にあせぼといへり。

【栞草】山谷に生ず。高きもの二三丈、小さきは一二尺、みなすこし鋸の如き齒有り。淺緑色、硬くして枝椏にあつまり生じ、枝葉茂盛す。其の葉狹く長し。花芽を出し、春小白花を開き房を作す。（略）相傳ふ、馬此の葉をくらへば醉ふ、故に名づく。

季題解說 常綠灌木で、ちよつと楊梅の木の感じがある。葉は椎の葉に似てやゝ細長く、葉のへりに小さな鋸齒がある。十一月頃からもう花ごしらへを始め、仲春・晩春・初夏にかけて、小さな壺の恰好をした白い花穗を垂れる。地味な風雅な花で、近くに寄ると香がする。山野に多く見受けられるが、寺社・庭園・料亭等に觀賞用としても植ゑられる。箱根の曾我兄弟の墓附近の左右の山にもたくさんあるが、富士五湖あたり、特に青木ヶ原原始林中には、更に多く、丈餘に及ぶものも少くない。奈良の春日神社境內にも多い。元來馬醉木は有毒植物で、葉は煎じて驅蟲劑等に用ひられる。馬醉木といふ名は、馬が喰べると昏醉するといふところから來てゐる。

例句

馬醉木の花

人聲に鹿かくれけり花馬醉木　蒿公（驢葵）

二月堂

來しかたや馬醉木咲く野の日のひかり　秋櫻子（ホトトギス）

馬醉木より低き門なり淨瑠璃寺　同（同）

草庵の塵掃きおとす馬醉木かな　青邨（同）

神の鹿あしびのみちの遙かより　王城（同）

あしび見て寺印いただく列にあり　章（同）

あしび散る女犯の朝ありにけり　一杉（同）

奈良

鹿の尻あしびがくれに何時までも　泊雲（同）

物賣女馬醉木の花をくゞり來る　巴潮（續ホトトギス）

鹿いつか見えずなりけり馬醉木道　基女（同）

奈良に来て天長節や花馬酔木　水竹居（同）
春日野の馬酔木の花は倚盛り　虚子（同）

【參考】あせび　一名　あせぼ　Pieris japonica, D. Don.（しやくなげ科）山野に生ずる有毒なる常緑灌木にして、高さ通常四五尺を常とすれど、深山には丈餘の大木あるを見る、葉は革質にして光澤を有し、細長くして小鋸歯を有す、早春穗をなして小なる壺狀の白色花を垂る、葉を煎じてその毒汁を以て菜園の蟲を殺すに用ふ。

満天星の花（どうだんのはな）　満天星躑躅（どうだんつつじ）

【季題解説】石楠科に屬し、山地に自生する落葉灌木であるが、又庭にも植ゑて普く觀賞に供されてゐる。圓く鋏を入れて毬のやうに造られることが多い。莖の高さ七八尺。四五月頃、新芽と共に數個の花梗を抽き出し、白色の愛らしい壺狀の花を垂れ咲く。葉は秋紅葉して美しいし、又その針金のやうに細い枝が枯れ枯れに交錯してゐるところなども哀れの深いものである。

どうだんには又「紅どうだん」、一名瓔珞どうだん）と稱して、紅色の小壺狀花をなすもの。「さらさどうだん」（一名風鈴つゝじ・瓔珞つゝじ）と稱して、高さ一丈餘に達する、白色又は紫紅色の淡色釣鐘狀の小花をたれ咲くもの、その他白満天星・小紅どうだん・ちちぶどうだんなど別種類が頗る多い。箱根・日光・九州では雲仙・英彦山、其他全國到るところの高山に自生し、秋の紅葉をほこるものも此のどうだんつゝじである。瓔珞つゝじは雲仙が名所である。

【例句】満天星の花
觸れてみしどうだんの花かたきかな　立子（ホトトギス）

【參考】どうだんつつじ Enkianthus perulatus, C. K. Schn.（しやくなげ科）山地に生ずる落葉灌木なれど、又觀賞用として人家に栽培せらる、莖の高さ七八尺、枝椏細く、多く分岐して簇生し、葉は倒卵形にして細鋸歯あり、殆ど輪生狀に枝端に生ず、春日新葉と共に數箇の花梗を抽き白色壺狀の小花を下垂す、葉は秋に紅葉し甚だ美なり。和名は燈臺躑躅の意にて其結び燈臺の脚が其小枝に似たるより此名生ぜり。

岩梨の花（いはなしのはな）

【季題解説】石楠科の常緑小灌木で、富士・日光などの高山に生ずるといふ。莖は地上に臥して高さ四五寸位、葉は互生、長楕圓形で緣邊に褐色の刺毛があり、歪細の鋸歯のやうになつてゐる。表面は綠色で光澤があり、裏面は淡黄色で中肋に褐色の細刺毛がある。春、梢上に淡紫色の鐘狀花數個をつける。果實は小球狀肉質で赤く熟する　【季題】夏　岩梨實

躑躅（つゝじ）　杜鵑花　やまつゝじ　もちつゝじ　こめつゝじ　きりしま　うんぜんつゝじ　れんげつゝじ　みやまきりしま　あかきりしま　りうきうつゝじ　ごえふつゝじ

古書校註

【山之井】春の日永なる比ほひ、人も小隙をえて、食籠・小筒やうの物、似合ひ〳〵にさげありくめる。ひんがし山のべに、ひらへいとに(一)咲きみちたるを、天も花に醉ふべき酒のつゝじとも、下戸の目につく餅つゝじなどもいひすて、賀茂の山邊に日をくらして、白き赤き紫の、色々手折りてかざせるを、小袖も段のつゝじとも、又山を包むやだん袋、などいひかけて、そこらの興をも催し、猶岩つゝじの色にそみ、蓮花つゝじの香にめづる心ばへに、其の名につけたる作どももあるべし。

【御傘】木也。(略) つじが花も、つゝじが花といふことを中略したる名なれども、あかきかたびらの名に成りたれば、春の季にならず。かたびらにひかれて夏の句に成るなり。

【滑稽雜談】大和本草に曰、躑躅、大小霧島其の外種類多し。三月花を開く。山州・攝州・河州に多し。山にも紫つゝじ・淀川つゝじ・紅つゝじ有り。本草に、毒草羊躑躅の附錄に山躑躅を載せたり。凡そ躑躅・杜鵑花は草に非ず小樹也。故に今改めて木類となす。○今按ずるに、萬葉には石管自・茵花など書く。上二つは訓を借る。茵は茵芋と本草に侍る。和名抄に、をかつゝじ・につゝじと云ふ。赤き者か。又馬醉木をも、つゝじともあせみとも訓ず。今俗おほくあせみと用ふる也。總て篤信がいへるごとく、本草を始めとして、和歌において八雲御抄幷びに藻鹽草、皆草類部とす。順和名には木之部に入れられたり。和產は木に類する故にや。中華の產はさなき故、毒草に錄するか。考ふ可し。

【采草】千金翼方　羊この花をくらへば、躑躅（テキショク）して斃れ死す。故に、しかと云ふ。一說に、羊の性至孝也。此の花の赤き者をみて、母の乳と思ひ、躑躅して膝を折りて之を飲む。故にしか云ふ。

註　○なほ滑稽雜談には、羊躑躅・山躑躅・茵芋の三項を擧げて解說が附してある。又年浪草には、その他、蓮華躑躅・淺黄躑躅・黄躑躅・平戸躑躅・瓔珞躑躅・段躑躅・岡躑躅・映山紅等を擧げてゐる。(一)一面に。

季題解說　到るところの山野に自生し、觀賞用として栽培せられることも多く、普く人に知られた花である。種類が非常に多く、春から夏にかけて開花する。石楠科の灌木で、葉は落葉するものと、しないものとある。花は漏斗狀の合瓣花で五片に分れ、蕊が明かである。花の色は紅・緋・紫・黄・白・絞等いろ〳〵ある。躑躅の名所としては、先づ雲仙嶽に指を屈すべく、花時は全山躑躅といつてもいゝくらゐに咲き滿ち、頗る美觀を呈する。主

にきりしま・みやまきりしまで、殆ど赤である。その他霧島山・八ケ岳山麓・那須・赤城・箱根・鬼和野原・保津川・舘林等數限りもない。

〔參照〕夏 皐月躑躅(さつき)

例句

躑躅

つゝじ生て其陰に干鱈裂女　芭蕉（熱田三歌仙）
裾山や虹吐くあとの夕つゝじ　同（もとの水）
ひとり尼わら家すげなし白つゝじ　同（芭蕉句選拾遺）
さし覗く窓へつゝじの日足かな　丈草（丈草發句集）
吹立に柴のならぬや躑躅山　同（同）
且夕のはしゐはじむるつゝじ哉　其角（五元集）
小鳥居は薬守の神かつゝじ山　同（同）
亦是より木屋一見のつゝじ哉　同（同）
水呑を烏帽子にきせん岩つゝじ　同（同）
白つゝじまねくやうなり角櫓　嵐雪（玄峰集）
つゝじ野やあらぬ所に麥畑　蕪村（氷餅集）
つゝじ咲て石移したるうれしさよ　同（蕪村句集）
近道へ出てうれし野の躑躅哉　同（同）
つゝじ咲て片山里の飯白し　同（同）
岩に腰我頼光のつゝじ哉　同（同）
大文字や谷間の躑躅もえんとす　同（中居七部集附錄）
石工の指やぶりたるつゝじ哉　同（蕪村遺稿）
大原や躑躅の中に藏たてゝ　同（同）
道を取て行をめくればつゝじ哉　同（書翰）
華稀に老て木高きつゝじ哉　太祇（太祇句選）
小一月つゝじ賣來る女かな　同（同）
白雲の根を尋けり岩つゝじ　召波（春泥發句集）
蒼には皺を見せたるつゝじ哉　同（同）
躑躅さく谷やさくらのちり所　也有（蘿葉集）
香久山に赤ひもの干すつゝじかな　同（同）
山守の持佛のぞけばつゝじかな　同（同）
旅籠屋の夕ぐれなるにつゝじ哉　蓼太（蓼太句集）
人の代に成て見上るつゝじかな　同（同）
雪踏にて辿る山路のつゝじ哉　几董（井華集）
山城や紫つゝじかぎりなき　白雄（白雄句集）
片畑のつゝじときるゝ巖かな　同（同）
今さらに蔦あさましや岩つゝじ　同（同）
逆さまに咲や端山の花つゝじ　闌更（半化坊發句集）
夕山を根こぎて戻るつゝじ哉　同（同）

躑躅

流れ波陸にひたすつゝじかな　巣兆（曾波可理）
山櫻や温泉壺に活し花つゝじ　同（同）
百兩の石にもまけぬつゝじ哉　一茶（一茶新集）
さきの世は朱雀の鬼かつゝじ賣　乙二（をのゝえ草稿）
なまなかにつゝじ植てぞ山ごゝろ　同（同）
關屋にも佛壇あつてつゝじ哉　雁宕（古選）
垣なくて妹が住居や白つゝじ　同（新選）
合羽干日影に白きつゝじ哉　不流（淡路嶋）
　伊勢太山寺
蒟蒻につゝじの名あれ太山寺　子規（子規句集）
紫の夕山つゝじ家もなし　同（同）
旅人のつゝじ引拔く山路かな　同（同）
大磯や庭砂にして松つゝじ　同（同）
躑躅山茶店出したる村の者　碧梧桐（新俳句）
黒谷の裏門はいるつゝじかな　同（春夏秋冬）
折りとればつゝじの枝の蟻多し　繞石（同）
賑しくつゝじ挿しけり墓の前　竹樓（同人）
戻り來てつゝじ浸けおく山井かな　枯木（懸葵）
咲きて皆おなじまろさや庭躑躅　七夕（ホトトギス）
比叡道へ出る禿山のつゝじかな　灯家（同）
須磨の山源平躑躅咲きにけり　愁愛庵（同）
躑躅咲く山の險しさまのあたり　嵐峰（同）
徑塞ぐ大塵取や躑躅園　四十雀（同）
方丈の障子をそむるつゝじかな　都穗（同）
きりしまや葉一つなき直盛り　風生（同）
木がくれにつゝじ映れる流かな　莉花女（續ホトトギス）
用水の流れて速き躑躅かな　水竹居（同）
端折りて婆さまづれや山つゝじ　夕陽斜（同）
たそがるゝ大紫といふつゝじ　素十（同）
人立つや水の上なる花つゝじ　同（同）
病よくなりて嬉しや庭つゝじ　俊子（同）
山躑躅活けてありけり小町寺　正子（同）
辻堂のつゝじを代へて置きにけり　好子（同）
ぼきと折りて萎花多きつゝじかな　虚子（句集虚子）

石南花（しやくたけ）

石楠花（しやくなげ）　しやくなぎ　しやくなん

古書校註

【滑稽雜談】　時珍本草に曰、石間陽に向ふの處に生ず、故に石南と名づく。

○和俗、これを呼んでしやくなぎと稱し、又和名をとびらの木、又とづらと云ふ。或說に云、此の木を除夕に家の戸に挿して鬼を逐ふと也。故にとびらの木と云ふ也。

【年浪草】花彙に、秘傳花鏡に曰、處々深山中これあり。大和金剛山最も多し。樹大なるもの丈に過ぎず。枝條柔軟なり。葉蓬萊紫に類して厚く長し。面深綠色、背に毛茸ありて茶褐色なり。四月枝梢に花さく。數十集り生ず。粉紅色、筒子六出。形閙羊花に似たり「大いさ寸餘、頗る榮觀に堪へたり。（雜談抄に、とびらの木と云ふは大いに誤れり。深山四五月花咲く。七八九集り咲きて芍藥の花の如し。予京都・江戸に移し植うるに、二月末三月始花を開く。五出、形躑躅花の如くにしてあつまり咲く。宗爽が說、和の石南とは同じからず。考ふ可き也。

【季題解說】山地に自生する石楠科の常綠灌木、高さは七八尺に及ぶのが常であるが、高山に生えるものは幹が地に蟠屈してゐるといふ。葉は長橢圓形革質、上面は滑澤、下面は褐色の毛茸に富んでゐる。梢頭に淡紅色の花を開く。五瓣又は七八瓣で簇り咲く。花の形つゝじに似て少し大きく非常に美しい。和漢三才圖會には「和州葛城、紀州高野及深山谷中有之、日光黒髮山は中禪寺湖の華表より上の方絕頂に至るまで石楠花極めて多く、年々四五月花盛の頃は、上り三里の間滿山皆花にて、其華麗なること吉野の櫻と伯仲すべし」などとある。

【例句】

石南花

石楠花を採れば下山を雲慕ふ　涙史（ホトトギス）
石楠花や峰より谷へ日一筋　波の穗（同）
石楠花や再び濃霧おそひたる　句龍子（同）
奥四萬の石楠花山にぶつかれる　しげる（續ホトトギス）
石楠花や阿里山俱樂部すぐそこに　きよし（同）
石楠花の紅の蕾のゆるみたる　椎花（同）

【參考】しやくなげ Rhododendron Hyminanthes Makino. var. pentamerum, Makino.（しやくなげ科）山地に自生する常綠灌木にして、幹の高さ七八尺に及べども、高山に生ずるものは、莖幹地上に蟠屈す、葉は革質にして長橢圓形をなし、上面は滑澤にして、下面は褐色の毛茸に富む、葉形大にして長さ五六寸に及ぶものあり、初夏梢頭に淡紅色の花を簇生す。十雄蕊と一雌蕊とを具へ、甚だ艷美なり。元來支那の石南は我がシャクナゲには非ずして別の木なり、和名は先人の誤認より出づ。

接骨木（にはとこ）の花（はな）　たづの花　みやつこぎ

古書校註

【年浪草】和漢三才圖會に曰、接骨木、人家籬落に之を植う。三四月小白花を開き、攢生して朶を作す。年を經る者に實を結ぶ。攢簇して赤し。○花彙に曰、野黄楊に似たり。醫學正傳に出づ。春初花を發す。細碎なり。簇生して五出、淡黄色の花あり。後乃ち葉を出す。接骨木に異ならずと。云々。兩説、花色幷びに花を發するの時不同といへども、三才圖會は滿開の時をいひ、花彙は花の初生をいへり。茶席其の外花器に挿すには、多く花の初生を稱す。野黄楊・接骨木は猶尋ぬべし。

季題解説　原野に自生する落葉灌木であつて、忍冬科に屬する。往々觀賞用として庭園に植ゑられる。高さは一丈餘、枝條は四方に繁り、幹は捩れ曲り、中心に髓が通つて居る。早春、新芽を開き　緑白色の小さい貧しい花を著ける　その花が散つてから葉が出る。年古きものは實を結ぶ。實は小球形で赤い。花を乾燥して、筋骨挫傷又は打撲傷の濕罨法に用ひると效があると云はれてゐる。

參考　（にはとこ）Sambucus racemosa, L. var. Sieboldiana, Miq.（すひかづら科）原野に自生する落葉灌木にして、高さ一丈餘に達し、材は柔にして大なる髓を有す、葉は羽狀複葉をなして對生し、毛なし、早春新芽を開き、白色小花を多數攢簇す、花冠深く五裂し、五雄蕊、一雌蕊を有す、花後赤色の小なる漿果を結ぶ、枝葉を民間藥に使用す。

桑（くは）の花（はな）　やまぐはの花

季題解説　もと山野に自生する桑科の落葉樹であるが、全國到るところ桑畠として培養される。養蠶の盛んな上州・信州邊では、五月上旬まだ四山に雪がありつゝ、盆地のみ春が來て、桑の海は新芽をふき、嫩葉がひらくと同時に、淡黄緑色の小花を短く穗狀にたれて咲く（北九州邊では桑の發芽は四月中旬、花は四月廿日過ぎである）桑の實は六月はじめ、うれるに從つて赤から紫黑色となり、甘い野趣あるものである。桑の種類は甚だ多いが、春秋二回に嫩芽をふき、養蠶用として盛んに摘まれる。信州邊では呂（ろ）桑（う）といつて葉の見事に大きい桑をよく栽培する。桑の樹の太いものは床柱或は器具類に製して賞美し、桑の實は生のまゝ食し、或は桑酒につくる。

又葉を乾燥して桑茶を製し、嫩葉を油揚として食用に供すると書いてある木もある。〔參照〕桑　夏　桑の實

楮の花　かぞの花　かずの花　こぞの木の花　かみの木の花

季題解說　桑科に屬する落葉亞灌木である。桑に非常によく似た木で、葉も赤桑の樣に粗面で長楕圓形、鋸齒を有し、互生する。そして下部の葉には大きい切込みがある。晩春初夏の候に雌花と雄花とを異株に生じ、暗紫色の雌花は球狀に、黄白色の雄花は穗狀に集つて居り、果實も桑の實の樣で赤く熟する。この樹皮（靭皮纖維）を剝ぎ取つて和紙を漉くため、處々に栽培して居るが、また山間などに自生して居るのをよく見かける。梶の木は楮によく似て居るが、葉・莖に小異あり、その他總べて稍々大形である。〔參照〕夏　楮の花

樒の花　莽草の花　かうしばの花　からの木の花　はなの木　はなしば

古書校註　【滑稽雜談】大和本草に云、莽草。是しきみ木也。本草毒草部に載すといへども、宗奭が說よく樒に合へり。樒と莽草と別物なるや、審かならず。○私云、右所說の者、一類二種と心得べきか。よく宗奭が說に合へり。此の者、順和名にも莽を木部に載せて和せられたり。釋家採りて佛に供し、又樹每葉を搗篩ひて抹香とす。常談して葉を花と云ふは、樒に限るといへり。然らば萬花に通じて正花になるべき作侍る。樒と名をさゝば、花を結びても正花にあらず。考ふべし。

【栞草】「萬葉」於久夜麻能之伎美我波奈能奈其等也之久々々伎美爾故悲和多利奈無。（一）「和漢三才圖會」木樒の葉は槐に似て長く、摘めば略椒氣あり。六月細き白花を開き實を結ぶ。（二）

註（一）萬葉卷二十、「奧山の樒が花の「なの脫か」ごとやしくしく君に戀ひわたりなむ」大原眞人今城の作。（二）此には六月開花とあるが、古歲時記は何れも二月の部に擧げてある。

季題解說　木蘭科の常綠喬木で二丈餘のものもある。はなしばと云つて、佛前・墓などに供へる花で、寺院墓地などによく植ゑてある。花は淡黄白色の多瓣で、靜かな割合美しいが憐れな花である。一月末か二月はじめ頃から晩春初夏迄、常綠長楕圓形のかたい葉の間から、短い花梗をたれて六七花位づゝむれ咲き續ける。花期が頗る長いので、花を夏季に誤り傳へてゐるものもあるが春が正しい。樹皮や葉は香氣があるので、きざんで線香の原料にする。實は頗る有毒、誤つて食べると吐瀉痙攣して死する事がある。然し又用ひ方によつては健胃劑ともなる。〔參照〕夏　樒の花

例句
樒の花　古桶や二文樒も花の咲　一茶（發句題叢）

門前の花屋の樒咲きにけり　麥人（新俳句）
石山や石にさしたる花樒　青々（妻木）
　高野山にて
こぼるゝやゆふべ明りに花樒　無錫（ホトトギス）
花しきみおしゆんの墓に供へあり　すみれ（ホトトギス）

参考 しきみ　一名　はなのき　Illicium religiosum, Sieb. et Zucc.（もくれん科）暖地に自生する常綠樹なれども、亦寺院墓地等に栽植せらる、高さ一丈餘に達する小喬木にして、葉は長楕圓形をなし、全邊平滑にして互生し、一種の香氣を有す、春日葉腋に短梗花を出し、淡黃白色の花を開く、花瓣は細長く、後輪生せる蓇葖を結ぶ、有毒植物の一にして、世俗生枝を佛前に供す。

鈴懸の花

プラタナスの花

季題解說 篠懸は篠懸科の落葉喬木、高さ三四丈に達するといふ。葉は互生した大葉で、通常五裂片である。各裂片は更に缺刻及び鋸齒があり、邊緣不齊である。大體楓の葉の形に似てゐる。四月頃葉腋から花枝を抽き、黃綠色の細花が攢簇する。花後に直徑一寸ばかりの褐色の球狀果を結ぶ。一梗に三四顆を著けてぶらさがる狀が山伏の著くる篠懸の球に似てゐる。街路樹として賞用されることは人の知るところであつて、東京市の如きは街路樹の大半がこの木で統制されてゐる。畿内では小米櫻のことを篠懸と呼んでゐると或る歲時記に載つてゐる。

参考 すずかけのき　Platanus orientalis, L.（すずかけのき科）小亞細亞附近原產の落葉喬木、高さ三四丈に達し、葉は互生せる大葉にして、通常五裂片をなし、もみぢ葉の態あり、各裂片は更に缺刻及び鋸齒を有し、邊緣甚だ不齊なり、葉柄の基脚に稍ゝ廣き歪卵形の托葉を具ふ、春日淡黃綠色の花を生じ、後直徑一寸許りある粗糙の球形果を生じ、一梗上に三四個を着けて下垂す。街路樹として最も可なり。
○普通に植ゑあるはスヾカケノキとアメリカスヾカケノキとの間種なるモミヂスヾカケノキにして、スヾカケノキは少なし。之れを篠懸と書くは非にして、鈴懸けか鈴掛けかにすべきなり。初め命名者の松村任三氏が、山伏の房を篠懸と誤まりしより此字を書くやうなりしも、元來篠懸は衣の名なり。

山樝子の花（さんざしのはな）

季題解説 薔薇科の落葉灌木で、庭園に栽培される。莖の高さは五六尺。支那の原産。枝葉が茂り、針のやうな枝がところどころに現はれる。葉は楔形で鋸齒を有し、新らしい芽が出る時、同時に單瓣花を簇生する。花は春咲いて白色五瓣、梅花の形に似てゐる。赤又は黄の直徑六七分の果實がなるが、食用にはならぬ。藥用に供せられる。

小粉團の花（こでまりのはな）

鈴懸の花（すゞかけのはな）

古書校註

【滑稽雜談】〔篠懸の花〕大和本草に曰、鈴掛、小木、叢生す。春將に終らんとする時、白花を開き房を爲す。酴醾にさきだつ。又小手鞠とも云ふ。下毛の類也。○弘に云、所説のごとく、深春一窠より叢生す。葉は柳の葉に似て鋸齒あり、其の花開いて房を爲す。白色にて節間あり。山伏の袈裟の房に似たり。俗袈裟を誤りて鈴掛と稱し、此の花の名とす。鈴掛は山伏の道行衣の名也。又此の花團々として鈴の如し。之を名づくにや。

【年浪草】和漢三才圖會に曰、木の高さ四五尺、葉狹く長し。棣棠花の葉に似たり。其の花形、粉團花に似て小さく白し。其の大いさ寸半許りに過ぎず。一蕚の大いさ、豆粒許也。俗に、小手毬と云ふ。

季題解説 繡毬花ともかく。支那原産。薔薇科の落葉觀賞用小灌木で、高さ四五尺に達する。幹はあまり太くならず、根から幾本も簇生して來る。葉は廣披針形又は長楕圓形で互生し、不齊の疎い鋸齒がある。新葉が現はれると間もなく、葉の間から繖形状に多數一と塊になつた小蕾群が現はれ、四月頃、小さな眞白な五瓣花で、一つ一つは梅花の形のものが毬形にあつまり咲く。これがどの枝にも玉をつけたやうな形となり、枝も撓むばかりにたくさんに著く。その半弧形を描く枝の風情などは又なくあはれ深いものである。

參照 夏―繡毬花（テマリバナ）

例句

小粉團の花

すゞ懸を誰野にすてゝ猿いばら　浪化（浪化上人發句集）
顔よせて鏡くもりぬ團子花　時子（ホトトギス）
小でまりのたれかゝりたり稽古本　莉花女（續ホトトギス）
抱きよせて雨の小でまり括りけり　いち子（同）

〔參考〕　こでまり Spiraea cantoniensis, Lour.（いばら科）蓋し支那原産にして今庭園に栽植せらるゝ落葉の小灌木なり、高さは四五尺に達し、幹は通常細くして新條は稍々傾垂せり、葉は廣披針形若くは長橢圓形にして互生し、不齊の鋸齒を有す、春日新葉と共に枝梢に白色の小花を繖形狀に排列し、略毬狀を呈す、五瓣にして花後小なる乾果を結ぶ。

小米花（こごめばな）　小米櫻（こごめざくら）　ゆきやなぎ　こめやなぎ　笑靨花（ゑくぼばな）

〔古書校註〕

【年浪草】和漢三才圖會に曰、小米花は小樹にして叢生す。高さ三四尺、葉狹く長く薄し。縱理有り。二三月白花を開く。大いさ粟許り、蒸せる糯の如し。故に呼んで小米花と名づく。又胡蘿蔔の花に似て、圓く匾く小なる者也。○大和本草に、笑靨花の字を出す。花鏡及び遵生八牋等に見えたり。花細かにして豆の如し。花の頭少しくぼし。故に笑靨と名づくといへり。

〔季題解説〕　薔薇科の落葉灌木で、山地にも自生するが庭園にも栽培される。莖の高さ四五尺、叢生する。葉は細長く、緣に微に鋸齒がある。春も早く、まだ葉があまり出ない先に眞白い小花が綴がり咲く、さながら雪のやうで、そのため「雪柳」ともいふ。小米花の名稱もその外觀から來たものである。

〔例句〕

小米花

小米花奈良のはづれや鍛冶が家　萬　乎（續　猿　蓑）
升程な庭といふべし小米花　紅　霞（類題發句集）
日は上に盛り上りたる雪柳　古　泉（壬申句集）
小米花花瓶の肩に散りこぼれ　山不鳴（ホトトギス）
一筋や走り咲きたる小米花　花　蓑（同　）
つまびらか小米の花のありにけり　仰　子（續ホトトギス）

〔參考〕　ゆきやなぎ　一名　こごめばな Spiraea Thunbergii, Sieb.（いばら科）河邊の岩上に生ずるも、また庭園に栽培せらるゝ落葉灌木なり、莖の高さ四五尺にして叢生し、葉は狹披針形にして、微に鋸齒あり、春日新葉の未だ延びざる時に於て、白色の小花を攢簇し五瓣にして花梗長し。

花筏（はないかだ）

〔季題解説〕　五加木科の落葉灌木で、高さは大抵四五尺である。葉は卵形で先

端が尖り、細かい鋸齒があつて互生してゐる。その葉の表面の中央に、淡い綠色の花がお菓子を載いたやうに乘つかつてゐる。それが如何にも筏の上に花が乘つてゐるやうな感じがするので、花筏といふ名を誰かゞ附けたものである。雌木雄木があつて、雌花の方は花がすむとその跡がだん〳〵黑くなつて、南天の實ほどの大きさになる、然し食べられない。葉も嫩葉の時分にはヒタシモノにして食べるさうである。生駒山その外京阪地方ばかりでなく我日本には大抵の山に自生してゐる。［參照］人事―花筏(ハナイカダ)

檳榔子(びんらうじ)の花(はな)

季題解說 いたゞきに五六枚の葉を持つて、ひよろ〳〵と長い檳榔子が芳香を散つて咲く頃は、臺灣の春も酣である。
幹は單幹、圓筒形、通直、環紋を有し、高さ五、六尺、小葉は披針形、總葉形は三稜形をなして短い。葉鞘は圓筒形。肉穗花は最下部の葉腋から出て多數分岐する。雄花は數多く、蕚は小さく、三裂する。花瓣は三、長橢圓形、雄蕊は六つある。雌花は單一か又は二、三個づゝ分岐した花梗の基部に著生する。蕚及び花瓣は各三で肉質、心臟形、共に永存する。柱頭は短くて三裂し、三角形をなしてゐる。果實は依形、長さ一寸五、六分、成熟すれば黃色を呈する。

桷(ずみ)の花(はな)　姬海棠(ひめかいだう)　こりんごの花(はな)　こなしの花(はな)　やぶりんごの花(はな)

季題解說 本州中部、日當よい山地に自生する落葉樹で、幹の高さは五六尺から二三丈、花も葉（橢圓形で緣に缺刻と鋸齒がある）も海棠によく似てゐるが、花期が海棠よりずつと遲く、四月末から五月にかけて、白色五瓣、淡紅をさつと刷きかけた花を開く。海棠ほど紅くなく、ほんのりうす紅がかかつてゐるのみである。中には花の白色の野生もあるといふことである。花の後小さい實を結び、秋霜が下りる頃、紅い美しい實を點々とつゞける。甘酸つぱくてうまいものである。黃色い實のもある。松本邊にはこの花が山に大變多いが、寒地なので、花は五月末でなくては盛りにならない。日當りのよい土地を好む。［參照］海棠(カイダウ)

蠟瓣花(とさみづき)　土佐水木(とさみづき)　しろむら

季題解說 金縷梅科の觀賞木本で、土佐に野生があるためこの名があるが、普通庭園に栽培される落葉灌木である。莖の高さ七八尺に達し、葉は橢圓形で基脚心臟形をなし、質厚く葉脈が著しく、下面に毛を帶びてゐる。春日葉に先だつて可憐な淡黃色の五瓣花を、七八個穗狀に垂らして開く。萼は紅色で芳香をもつてゐる。この花に似て小形なものに「日向水木(ヒウガミヅキ)」がある。

蚊母樹の花（いすのきのはな）　むしくさの花　まさかきの花　瓢木の花（ひよんのきのはな）

【季題解説】 柞・棑・梼等とも書く。金縷梅科の常緑喬木で、暖地に自生し、観賞用として栽培せられる。高さ二十餘尺となるものがある。葉は長楕圓形で互生する。梢枝は葉間に一種の小蟲のため嚢狀の膨れた部分が出來て中に幼蟲が居る。蟲はやがて孔を穿つて飛び去る。蚊母樹といふのはこれがためである。空殻は外面茶褐色でその孔を吹けば笛のやうに鳴る。ひよんの木の名がある所以である。四五月頃新芽を出し、枝梢に深紅色の花を簇生する。花は細花で花冠がない。後ち長楕圓形の蒴果を結ぶ。材は器具を作るに適し、殊に櫛材として有名である。その灰は陶器の原料に用ひられる。【季題】夏—蚊子木ノ實　秋—蚊母樹ノ實

木蘭（もくれん）　木蓮（もくれん）　しもくれん　もくらに　紫木蘭（むらさきもくれん）　白木蘭（はくもくれん）（はくれん）　更紗木蘭（さらさもくれん）

【古書摘註】 【年浪草】 大和本草に曰、玉蘭花。（略）國俗紫を木蓮華と云ふ。花の色あしゝ。白を白木蓮と云ふ。白花を好しとす。酉陽雜俎續編に、木蓮華、葉は辛夷に似て、花は蓮華に似る。（略）冬春へ、三月に開く。

【季題解説】 木蓮とも書くのは、花の形がやゝ蓮花に似てゐるところからである。花は白と紫とあつて、白木蘭を「はくれん」と呼んでゐる。花の咲くのは三月頃で、梅と櫻の中頃である。支那原産の落葉喬木で、一丈から三丈位の大木がある。大形な六瓣の花で、葉に先だつて花を開き、今枝花ばかりの盛觀を呈する。紫木蓮の花は暗紫色でデカダン的な美觀を呈し、白木蓮の花は純白で清淨な感を與へる。山の中で白木蓮の大木を偶々見ることもあるが、多くは庭園に培養せられる。日比谷公園には花壇の一方に白木蓮が林をなして植ゑられてある、田舍に行くと貧乏寺の庭などに紫木蓮のとほうもない大きな木を見ることがある。

【例句】

木蘭

木蓮や雀子落つる砂の上　句瑠璃（懸葵）

木蓮や數へやめたる花の數　元（ホトトギス）

木蓮や花ぐもりして薄みどり　暮情（同）

木蓮の落ちくだけあり寂光土　茅舍（同）

木蓮の花よりはなつ光かな　照葉女（同）

木蓮の窓一杯にゆれにけり　牧也（續ホトトギス）

木蓮の戻りも同じくもりかな　七三郎（同）

曉に似たるゆふべや木蓮花　秋史（同）

大空に木蓮の花のゆらぐかな　虚子（句集虚子）

[illegible] もくれん　一名　しもくれん Magnoliaili flora, Desr.（もくれん科）支那の原産にして、庭園に栽培する落葉樹なり、莖の高きもの丈餘に達し、葉は倒卵形凸頭にして上面平滑下面細毛あり、大形にして、長さ三寸乃至五六寸に及ぶ、三四月の頃、暗紫色の大なる花を開く、六瓣花にして花徑三四寸、花瓣は卵狀長橢圓形にして、長さ凡三寸許あり、萼は三片ありて、形小さく綠色なり。

黄心樹（をがたま）　黄心樹木蘭（をがたまもくれん）

[illegible] をがたまはをがたまのきの略稱である。木蘭科の常綠喬木で、暖地に自生するが、よく神社等にも植ゑてある。春二月半ば、すでに長方形常綠の葉の茂みの間から、辛夷に似て苞を被つた小蕾を出し、三月中旬から四月半ば頃まで、青みがかつた白色の、辛夷を小さくしたやうな花を仰むけに咲く。花は細長い蘭の如き形の多瓣。四月はじめから散りはじめる。その常綠の葉は昔から[illegible]の代用として神前に供へることもある。材は器具、床柱等に、葉は香料に用ひる。樹の大きなものになると高さ數十尺、直徑二三尺のものがあるといふことである。花の散つた後には小さい實を結び、秋赤く熟して美しい。をがたまの花を夏季とするのは誤であるし、六瓣といふのも違つてゐる。夏、五月頃から咲く類似のものは一唐をがたま一と稱するものであるらしい。

紫荊（はなずはう）　すはうの花

[illegible]【滑稽雜談】　蘇枋の花。（略）和國に生ずる所、紫荊花也。（略）此の者又和に生ずるやいまだしらず。俳諧にいふ所、多く紫荊花ならし。又草中の芫花（クワンクワ）（一）相似たれば、紫荊樹と稱す。誤るべからず。

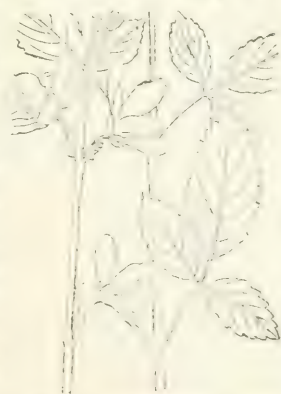
[illegible]（一）芫花（しけいじゆのはな）の項には、「和に頭痛花と云ふ。其の花の香氣堪へがたし。又しけい樹の花と云ふ。紫荊樹は蘇枋木の花也。上說の如し。此の花蘇枋の花に似たり。故に之花に名づく。花落ちて葉を生ずる也。」と見えてゐる。

[illegible] 支那の原産で、我が國では專ら觀賞用として庭園に栽植する。荳科の落葉本木で、高さ一丈餘に達する。葉は心臟形、先端尖つて光澤を有し互生する。春日葉の出ない中に、莖の節々に紅紫色の美しい蝶形花を簇生する。花後、長さ二寸幅四五分位の扁平な莢果を結ぶ。元來この植物の日本名は、熱帶地方に產する蘇枋から出て居るのである。蘇枋は我が國には產しない。この蘇枋の材から赤色の染料が取れるので、それに比して「はなずはう」の名を呼んだものである。俗に蘇枋の字は當てるけれども、印度や南洋に產する染料蘇枋と、我が國の花ずはうとは別種のものである。

連翹（れんげう）　いたちぐさ　いたちはぜ

【古書校註】

【滑稽雜談】順の和名に云、連翹、和名以多知久左、一に以多知波世と云ふ。○大和本草に云、連翹、一種は其の枝條柔弱、地に匍ひ一生す。一種は其の莖剛く特立す。花葉同し。皆實有り。中華より來る者と異ならず。二月黄花ひらく。四片有り。但し蔓生の花は其の實稍こ劣れり。

【季題解説】ひひらぎ科、支那の原産で、庭園に栽培する觀賞用落葉小木本である。枝は長くのびて蔓のやうに撓み垂れ、これが地に著けば根を出して著く。關東地方では撓めて垣に結んであるのを見かけることが多い。葉は對生し屢々三小葉に分れて居る。春、他の花にさきだつて、葉の未だ少しも現はれぬ枯木のやうな枝々に、一面に美しい黄色の、四瓣に深くきれこんだ花をつける。この花が咲くともう春だなといふ感じが深い。黄色が濃いので遠くからでもはつきりと連翹だと知れる程である。美事に咲くとあたりが明るいやうにさへ感じられる程である。花が散つた頃葉が出て來、だん／＼と柔かい枝をのばす。漢字連翹は、枝に花の澤山ついた形が、恰度鳥が羽を擴げたやうになるのを形容してから名づけたものであるとのことである。

【例句】

連翹

連翹や黄檗衣の衆の屋敷町　太祇（太祇句選）
連翹や鴟のわらぢのかけどころ　巣兆（曾波可理）
連翹の葉は覺えぬぞ花の時　蒼虬（蒼虬句集）
連翹にさはつては行雀かな　同（同）
連翹に一閑張の机かな　子規（子規句集）
連翹に小さき鳥のとまる哉　青々（妻木）
連翹や徒に伸びて花貧し　蛻骨（懸葵）
泥はねて雨の連翹咲きにけり　映木（同）
連翹の縄をほどけば八方に　青郎（ホトトギス）
連翹に襷かゝりて二三日　京童（同）
連翹のさきが水づきて映りけり　凡秋（續ホトトギス）
連翹の一枝づつの花ざかり　立子（同）
活け古りし連翹をそとぬきとりし　同（同）

漣の下に連翹映りをり　たかし（同）
連翹の枝もつれつゝ吹かれたり　越央子（同）
連翹に見えてゐるなり隠れんぼ　虚子（句集虚子）

【参考】れんげう Forsythia suspensa Vahl.（ひひらぎ科）支那原産にして庭園に栽培する落葉小木なり、枝條長く延びて稍ゝ蔓狀をなし地に着けば根を出す、葉は對生し、通常單一なれども往々三小葉に分るることあり、邊縁に鋸齒あり、早春、黄色にして美なる花を葉に先だちて開く、花冠は深く四裂し二雄蕊あり、果實は尖りたる蒴をなし果皮硬し。

通草（あけび）の花　木通（あけび）の花　山女（あけび）の花　丁翁（あけび）の花

【古書校註】【滑稽雜談】大和本草に云、通草、蔓は木通也。莖葉を通草と云ふ。毒無し。鞍馬の木芽漬は通草也。葉は五葉に分る。三月紫花を開く。花容三つに分る。秋開き子を結ぶ。此の草、山野林中に多し。

【季題解説】細く長い蔓性灌木で、莖に通はゞ、石ころ山の石の上に這ひはびこり、喬木に高く攀ぢ、數本の樹に互り懸りなどして、殆ど全國にわたつて山野に自生するが、村里の垣根などに這ひまつはつてゐるところなどもよく見受けられる。葉は五、六箇の楕圓形の小葉から成る掌狀複葉で、その特異な形狀が目につき易い。冬は葉はすつかり落ちてしまふ。花は四月頃、新しい蔓に、新葉の葉柄の元から細い花軸を出して淡紫色の三瓣花を開く。またバスケットの材料になる三葉通草は、葉が廣卵形で三箇の複葉から成り、花は暗紫色で鐘狀をしてゐる。同じ花軸に澤山な雄花と小數の雌花をつける點は通草に似てゐる。〔參〕秋―通草

【例句】
通草の花
花にほひうち仰ぎゐし湯ざめかな　小提灯（ホトトギス）
葉の下の蔓のおもての花あけび　凡秋（同）
花あけび雄花雌花とこくうすく　青郁（雑ホトトギス）

郁子（むべ）の花　うべの花　野木瓜（つぼび）

【季題解説】木質蔓性の常綠灌木で、通草と同じく山野に自生するが、むべ棚等を作り、庭園に觀賞用として栽培せられるものも少くない。小石川植物園の郁子棚の郁子は、蔓の大きいものは直徑一寸五分くらゐで、末の細くなつた蔓はところどころ二本よれよれになつたところがある。葉は三箇乃至七箇の小葉から成り、掌狀をした複葉で、中央部の葉は大きく、兩端は次第に小さい。葉面は平滑で光澤があり、緣邊は多少波打つてゐる。形は美男葛の葉に似て更に尖つてゐる。蔓葉共に極めて強い感じがする。四・五月頃花軸を抽いて、白色或は帶紫紅色の花を開く。花蓋は六裂して細く尖つて

をり、内三蕊は非常に尖鋭である。【季題】秋―郁子

山帰来の花

がめの木の花　さるとりいばら　かから

季題解説 山野に自生する、とげの多い蔓性の草本である。四月上旬、山野の笹原やそこいらの雑木等に這ひかかつて、蔓のふしぶしに艶のいい嫩葉を出し、同時に花茎を抽いて、緑みを帯びた黄色の細花を、小手毬のやうに集合して開く。秋に赤い實がなる。北九州辺では、五・六月この葉が大きくなつた時、山から採つてきて柏の葉の代用に、この葉で包んでかしわ餅をつくる。がめの葉とか、かからの葉とかいつて、蒸すと香ひのよいものである。この地方でいふ柏餅は皆この山帰来の葉で包んだものである。又或る古老の話では、さんきらひは即ち産嫌ひで、昔は墮胎薬に使用したものであるとか。根は煎じて内服すると、發汗・利尿・解毒等に效があるといふ。

例句

山帰来の花

岩の上に咲いてこぼれぬ山帰来　鬼城（ホトトギス）
ひと葉づつ花をつけたり山帰来　凡秋（ホトトギス）
花つけて松に懸りぬ山帰来　無門（同　）

藤

藤の花　山藤　草藤　白藤　藤浪　藤かづら　藤棚　藤見

古書校註

【山之井】ふぢの棚は、ふさたな、匂ひの棚などいひなし、松にさがれるを松笠のしめを共、姫小松の頼子やかつらかとも見なし、池のほとりにさくを波にまがへ、門口にまつはるゝを藤どもゑ、ふちの丸などいひて、家の紋にもきこえなし侍る。

【御傘】藤は草也。古歌に木に用ひたる事あれども、連誹には惣別かづらは草に用ひる也。

【滑稽雑談】源氏物語に云、此の花のひとり立ちおくれて、夏に咲きかゝる程なん、あやしく心にくゝ、あはれにおぼえ侍る。ある説に云、泉州堺金光寺と云ふ寺の白藤艶なるによりて、後小松院の御宇、禁庭に移されしに、翌の年花を開かず。いかなる故にやと、帝も不思議に思しめし給ふ。御夢に、おもひきや堺の浦の藤浪の松にかゝるべきとは、と藤の精のよめるより、勅して彼の地へかへされしと也。總じて蔓の類を藤と稱する也。本草にも蔓草部に入れたり。たとへば藤の木と、俳諧などにいうても、草とするべし。

【栞草】【大和本草】花、春の末より四月に咲きかゝる。花の長さ三尺に充つる有り。花瓶に花をさすに、酒を加ふれば久しく萎まず。（略）藤波。【藻塩草】波に似たる也。藤波をかりほにつくり、ともよめり。

藤が枝。 きみぞみん若紫に十かへりの花をあらはす松の藤がえ。（文明十六）

藤蔓。 〔玉吟〕 をらすなよかきほにさけるふぢかづらくる山人のかへるかざしに。〇下り藤。松などの梢より咲下りたるを云ふ。

藤樛（コブ）**。** 桑の木の瘤を桑寄生と云ふ類也。沙石集に、藤こぶを薬としたることみゆ。

藤綱。 藤かづらをより合せて綱としたる也。春季として藤三つの内也。

藤丸。 装束の紋なり。○青甑曰、藤綱・藤丸・藤瘤の類を、春季とせんことはいかゞにや。蕉門には雑物として佳ならんか。すべて花のあつかひなくてはしかるべからず。

季題解説 樹に纏つたり架に垂れ下つたりするので、纏繞性木本といはれ蔓性植物と稱される。山野に自生するが、庭園に栽培して其艶美を觀賞される。莖は老いたのになると木のやうで、數丈の高きに攀づるのがある。葉は萩に似て大きく、羽狀複葉である。晩春初夏の頃、蛾形（まめざき）で四瓣の花を總のやうに垂れて咲く。色は淡紫・濃紫が普通であるが、白いのもある。花序の長さは一二尺から、みごとなのになるよ數尺の長さに達するのもある。花の後莢を結ぶ。なたまめに似て硬く毛茸に富む。關東では粕壁の藤が昔から有名である。〔季題〕秋 藤の實（ミ）

例句

藤

松に藤蛸木にのぼるけしきあり　宗因（西山宗因千句集）
お便宜やありしにまさる藤の陰　同（同）
草臥て宿かる比や藤の花　芭蕉（猿蓑）
いつれとも雨のしほ[illegible]ま雨の藤　來山（いまみや艸）
野田過て北の藤なみ寺の松　同（續いま宮艸）
藤咲て菓子干付ぬ花かつら　同（同）
仕舞には花につなぐか藤の錢　同（同）
だん〳〵に藤の雫や持つたへ　浪化（浪化上人發句集）
あぐらかく岩から下や藤の花　丈草（丈草發句集）
山藤のもとのゆがみを机かな　去來（去來發句集）
藤咲て鰹くふ日をかぞへけり　其角（五元集）
水影や鼯（ムサヽビ）わたる藤の棚　同（同）
よそに見ぬ石の五徳や藤の露　同（同）
たそがれや藤植らるゝ扇取　同（同）
藤波や二十七人草履とり　同（同）
ふぢ浪に鶚（ミサゴ）は得たりいらこ崎　嵐雪（玄峰集）
小坊主よ足なげかけん松に藤　同（同）
藤の花さすや茶摘のになひ籠　許六（五老井發句集）
風なくてしづか過たり藤の花　杉風（杉風句集）
影移る松のみどりや藤の花　同（同）

鶯の羽にひるまぬ藤や木の間より　桃隣（古太白堂句選）
藤棚や鶏をとる罠の乗せ所　同（同）
藤の花なかう一連におくれけり　千代女（千代尼発句集）
鶯の聲もさかるやふぢの花　同（同）
おそろしのよりやもどりて藤の花　同（同）
まつかぜに小嵜になるや藤の花　同（同）
あそびたい心のなりや藤の花　同（同）
地にとゞく願ひはやすし藤の花　同（同）
月に遠くおぼゆる藤の色香哉　蕪村（新五子稿）
法然の珠数もかゝるや松の藤　同（同）
藤の花あやしき夫婦休けり　同（同）
人なき日藤に培ふ法師かな　同（蕪村句集）
山もとに米踏む音や藤の花　同（同）
藤の花雲の梯かゝる也　同（落日庵句集）
池のふねへ藤こぼるゝや此夕べ　太祇（太祇句選）
のびよかし藤の若の咲かで先　同（同）
しなへよく畳へ置や藤の花　同（同）
崖路行寺の背や松の藤　同（同）
しら藤や奈良は久しき宮造　召波（春泥発句集）
白藤や御様前のひとき道　同（同）
なつかしき湖水の隅やふぢの花　同（同）
藤棚や小詰役者の草履がけ　同（同）
あさ〳〵の矢に延て藤の花　也有（蘿葉集）
手折ては下におられず藤の花　同（同）
投かけてたのむ色なり松に藤　蓼太（蓼太句集）
立さればまだ日は高し藤の花　同（同）
山寺や一日ふぢの影ぼうし　同（同）
春夏のおぼつかなさよ藤の花　同（同）
春過て夏箕の川や藤のはな　几董（井華集）
藤咲て川中の松も見られけり　同（同）
白藤や猶さかのぼる淵の鮎　同（同）
源氏などにゆかしく藤のあるじ哉　同（同）
謙額そこ造蔵縛りし藤の花　同（同）
葉橋やおもき身を挙ち孕鹿　同（同）
藤咲や鷄の背る末の春　白雄（白雄句集）
物がたり読さして見る藤の花　同（同）
藤さくや人もすさめず谷の家　同（同）
月かすかに人なとがめそ夜の藤　同（同）

しら藤や月ほのかなる山の見　同（同）
筏くむ夕暮藤の落花かな　同（同）
岩端や五六寸なる藤の花　闌更（半化坊發句集）
藤のはなながくもがなとおもふ哉　士朗（枇杷園句集）
山藤の棚はしかけし住居哉　同（同）
腹赤焼家を巻なり藤の花　巣兆（曾波可理）
むかふから旭湧なり藤の花　同（同）
藤咲てゆらつく橋のすがたかな　同（同）
ものいはぬ人も春なりふぢの花　成美（成美家集）
かたげゆくこゝろとなるやふぢの花　同（同）
としよれば見さだめがたし藤の花　同（同）
何ぞ舞へ藤引かつぐ昔笠　一茶（旅日記）
藤さくや一文潮としきみ桶　同（七番日記）
春の日の入所なり藤の花　同（一茶發句集）
棚せずば実とられよぞ藤の花　梅室（梅室家集）
ほそ〳〵と藤の間を降小雨哉　只丸（京水）
藤の花風にはなれてちりにけり　紫女（類題發句集）

井波市といふ所の酒店にやすらひて

こちら向け海老賣女藤白し　白笑（續明烏）
藤を見て戻る山路やつゞらをり　正平（鷹つくは）
濱ながら藤商へる流哉　瓜流（新選）
行過て戻る人あり藤の花　李流（同）

春日祭

年毎に鳥居の藤の苔哉　荷分（あらの）
藤咲て二階座敷の荒にけり　柳水（皮籠摺）
藤散りていよ〳〵春のせわしさよ　渦舟（續の原）
曇る日は一倍長し藤の花　吟江（心の花）
山藤や短き房の花ざかり　子規（子規句集）

法[illegible]に

念佛に季はなけれども藤の花　同（同）
鉢の藤すがるものなく花咲きぬ　錦浦（新俳句）
低き木に藤咲いてゐる山路哉　碧梧桐（同）
藤棚を見下してゐる二階かな　四方太（春夏秋冬）
大和路やしら藤たるゝ宮の跡　虚明（俳[illegible]）
池の面や藤二色に咲き分れ　默禪（ホトトギス）
棚藤や一筋松を縫ひ居り　蔦堂（同）
藤棚や水の中なる一柱　賓水（同）
灯を把れば影谷にあり藤に立つ　禪寺洞（同）
うち向ふ谷に藤咲くゆあみかな　秋櫻子（同）

藤

山宿や藤のこぼるゝ裏庇　素十（ホトトギス）
藤垂るゝ茶店の上の樋の端　東子房（同）
廻廊の屋根をうつなり藤の雨　眉峰（同）
白藤や揺りやみしかばうすみどり　不器男（同）
山藤や篠をたわめて花盛　鄭躅（同）
水舗に藤の落花やな女夜　蕪城（同）
名木の藤の花房短けれ　黄杖（同）
大藤の現れ出たる恐しき　青畝（同）
藤浪に少し遅れて水じわかな　冬湖（續ホトトギス）
庫裏のうら山藤今をさかりなる　山彦（同）
藤棚の下に来てゐる汀かな　京童（同）
藤茶屋の埃まみれの厠かな　風生（同）
三人の莨煙や藤の花　柚史（同）
くらがりに光る茶釜や藤の宿　霞村（同）
おやき店はやつてをりぬ藤の下　花舟女（同）
移されて淋しき藤の咲きにけり　虚子（句集虚子）
又少し小寒くなりぬ藤の雨　同（同）

【参考】

ふぢ Kraunhia floribunda, Taub.（まめ科）山野に生ずる大なる蔓性落葉木本なれども、また屢ゝ庭園に栽培して観賞に供す、莖は高さ数丈に上昇することあり、葉は多数の小葉より成れる羽状複葉なり、四月頃花を總状に下垂す、花序の長さ一二尺なり、蝶形花にして花後莢を結ぶ、長大にして硬く、且つ毛茸に富む、花色は通常紫色なれども又別に白色の品あり、シロバナフヂと云ふ。

やまふぢ Kraunhia brachybotrys, Taub.（まめ科）山野に生じ時に人家に観賞用として栽植せらるゝ纏繞性落葉灌木なり、葉は互生して羽状をなし、小葉は卵形をなし葉裏に細毛多し、花は紫色にして、四月頃開花し花穂は短くして数寸、多数の稍ゝ大なる蝶形花を總状に着く、花後大なる莢を結び、果皮堅硬にして、表面に毛あり、中に扁平なる数箇の種子を入る。花穂の短きと、花の大なると、葉裏に毛多き點を以て、フヂと區別するを得べし。此白花品をシラフヂと云ふ。

木の芽（こだ）

【古書校註】

【滑稽雑談】一切の木の芽皆春なれども、又冬より春芽を生ずる物、又夏に至りて芽を出す樹木有り。これらをよく〳〵心を附くべし。先づは無名の木の芽は春也。今此の書に、梅におくれて記する事（一）其の謂也。めはめぐむの略といへり。

註（一）滑稽雑談には、梅は一月の部に記し、木の芽は二月の部に記してある。

【季題解説】 種々なる木の芽の總稱である。「きのめ」と讀まず「このめ」と讀み、「きのめ」と讀む場合は特に山椒の芽を意味するとの説は別に根據が無いやうである。言海も、兩方の讀み方を同時に兩方の意味に使用してゐる。【參照】 芽立(メダチ) ものゝ芽(ノメ) 草の芽(クサノメ) 時候―木の芽時(ドキ)

【例句類句】

木の芽

大原や木の芽すり行牛の頬　召波（春泥發句集）
野烏の巣にくはへ行木芽かな　几董（井華集）
けしきたつ谷の木のめの曇かな　白雄（白雄句集）
世の木の芽こゝろ鞍馬にかよふ哉　同（同）
桐もやゝ鵯皂角も芽をぞふく　同（同）
倒木の芽を張岸のくづれかな　曉臺（曉臺句集）
階子とるあとは芽になる榎かな　成美（成美家集）
とし寄の鳩によばるゝ木の芽哉　同（同）
木の芽ぐふ小鳥もまてば待れけり　乙二（をのゝえ草稿）
骨柴の刈られながらも木芽哉　凡兆（猿蓑）
大砲のどろ〳〵と鳴る木の芽かな　子規（子規句集）
雷の始めて青き木の芽かな　同（同）
木々の芽や新宅の庭とゝのはず　同（同）
芽美しく杉の籬に雨晴れぬ　三川（新俳句）
嘴をとぐ鳥が落とす木の芽かな　圭岳（同人）
つくばひはまだ薄氷に木の芽かな　折蘆（懸葵）
水亭の木の芽に門を開きけり　明雨（同）
木の芽雨母追うて傘まゐらせぬ　みさ子（ホトトギス）
雨やみてすぐ空青き木の芽かな　櫻坡子（同）
蕊の穢は何時なくなりし木の芽かな　泊雲（同）
三段に瀧濁りたる木の芽かな　靜水（同）
新しき筧枕や木の芽寺　蓼雨（同）
青天に芽ぐみつゝある大樹かな　十七星（同）
憩ひ居れば火桶も來る木の芽かな　手古奈（同）
木々の芽や定山溪も久振り　雨圃子（同）
木の芽噴む鹿伸び上り伸び上り　鯨波（同）
千竿にかけいためたる木の芽かな　柿冷（同）
豆腐切る大俎や木の芽寺　虛吼（同）
額の芽のめだちて青む二つ三つ　素十（同）
額の芽の珠の如きがほぐれそむ　秋櫻子（同）
道端の佛に木の芽花のごと　青邨（同）
雲西へ西へ流れて木の芽吹く　孤杉（續ホトトギス）
わが肩に觸れたる枝の芽ぐみたる　青邨（同）

木の芽

かさゝぎが大事の木の芽こぼしけり　帆影郎（続ホトトギス）
風[illegible]にうゝる木の芽かな　富士子（同）
手箒にも桶にも木の芽摘んであり　活天（同）
谷々のこととなる色や木の芽晴　乙信（同）
大砲のとゞろく昔[illegible]木の芽摘む　[illegible]（同）
呼[illegible]掛きの雑木も芽ぐみをりにけり　拓水（同）
蔦の芽のわかきて萌ゆる雨木かな　[illegible]つほ（同）
くぬぎ原さゝやく如く木の芽かな　虚子（句集　虚子）
風吹いて木の芽ふくらむ思ひかな　同（続ホトトギス）

芽立ち（めだち）

芽吹く　芽組む

季題解説　単に芽立ちといへば樹木のことであつて、草の芽を含まない。芽吹く」また「芽ぐむ」といふ言葉の感じも、草の芽でなく木の芽を思はしめることが深いやうであるが、然し草の芽を指して、萌の芽吹く」とか、蘆芽ぐむとかいふやうに用ゐてならぬといふこともないであらう。〔下略〕木の芽　ものゝ芽

例句　芽立ち

芽をふいてへくそかづらとなりにけり　青畝（ホトトギス）
うたかたのよるべの岸や芽ぐみけり　素風郎（同）
鐵の木といふが芽ふきし[illegible]の内　念腹（ホトトギス）
移民小屋柱が芽ふき初めにけり　一鶴（同）
芽ぐむ枝相交りて濃ゆさかな　虚子（句集　虚子）

若緑（わかみどり）

緑立つ　松の緑　若松

古書校註【御傘】松の緑は雑也。緑立つは春也。若緑同前。或る説に、緑そふも春とあれど、道理あたらず。そふと云ふは、只緑の色の深くなるを云ふ也。立つと云ふは、あたらしく緑の出生する事也。各々別の義なり。信用すべからず。

松の花。百年に一度づゝ咲く者なり。初春なり。正花にはあらず。

季題解説　松の新芽をいふ。四月頃蝋燭のやうに抽ん出る。短かいのは四五寸から、長いのになると尺に餘つて伸びきらずにゐるのを見かけることもある。〔下略〕松の花

例句　若緑

みどり立きしの姫松めでたさよ　鬼貫（鬼貫句選）
のめやうたへ神の連理の若緑　卜[illegible]（俳諧七車）
若みどり神の濱松ひねたれど　来山（いまみや草）

七十や色かへぬ松の若ざかり　也有（蘿葉集）
静さやゆふ山まつの若みどり　闌更（半化坊發句集）
あらしにも直なる松の緑かな　同（　）
美しき砂に小松のみどり哉　士朗（枇杷園句集）
別院やすく／＼のびし松の心　默鳥（ホトトギス）
唐崎の二代の松の緑かな　芳翠（續ホトトギス）
荒れ果てし村雨堂や松の心　五斗女（同）

山椒の芽（さんせうのめ）　木の芽（きのめ）

季題解説　山椒は古名「はじかみ」とも稱する。山野に自生する芸香科の落葉灌木で、幹の高さ一丈餘に達する。庭などにはよく植ゑてある。刺の多い小枝がちの木で、四月はじめ嫩芽をふく。葉は羽狀複葉のこぎり形の小葉が相對してゐる。此の山椒の嫩芽を普通木の芽と稱して頗る香氣よく、田樂その他春先のいろ／＼の料理になくてはならぬものの一つである。同じ山椒でも食用に供せられないものがある。この方は刺が對生でなくて互生である。俗に犬山椒といふ。樹皮はきざんで、つくだにのやうに煮ると中風味のよいものであるし、山椒の實も料理に用ゐられる。〔季語〕木の芽漬（キノメヅケ）　木の芽和（キノメアヘ）　木の芽味噌（キノメミソ）　木の芽田樂（キノメデンガク）

例句　山椒の芽
山椒をつかみ込んだる小なべ哉　一茶（享和句帖）

楓の芽（かへでのめ）

季題解説　春の木々の芽のうちでは早い方である。芽立ちの時から眞紅なものは全く花のやうに美しい。〔季語〕夏　若楓（ワカカヘデ）　秋　楓（カヘデ）

例句　楓の芽
楓の芽燃えほどけゆく小雨かな　圭岳（同人）

楤の芽（たらのめ）　楤の芽（たらのめ）　多羅の芽（たらのめ）　うどもどき　うどめ

季題解説　高さ一丈餘の落葉喬木である。木のめぐりにも葉にも鋭い刺が多いので、「鳥とまらず」などの名がある。原野の濕地などに自生する。春の嫩芽は獨活に似た香氣があり、茹でて味噌和・芥和（カラシ）・辛味噌和などにして食ふ。またこの木の根や幹の皮は、煎じて呑むと胃を強健にする效がある。〔季語〕秋　楤の花

例句　楤の芽
楤の芽やからびしをれて籠の日に　蛇笏（ホトトギス）
楤の芽やつと朔ちかはる鳥一つ　青畝（同）
岨の道くづれて多羅の芽ふきけり　茅舎（同）

参考 たらのき Aralia chinensis L.（うこぎ科）山野に自生する落葉木にして、幹の高さ数尺より一丈許、葉は通常大なる二回羽状複葉をなし、茎葉共に刺を有す、初秋の候、枝間分岐せる複総状花序をなして白黄色の小花を綴り、後小球状の黒色果を熟す、嫩芽はウドの如き香を有し、食用となす。タラ芽と称する。

枸杞（くこ）

枸杞の芽　枸杞摘む　枸杞茶

古書校註

【滑稽雑談】本草に曰、枸杞、春は天精子と名づけ、夏は長生草と名づけ、秋は枸杞子と名づけ、冬は地骨皮と名づく（略）蘇頌の図経に曰、春苗を生じ、葉石榴の葉の如く、軟に薄く食ふに堪へたり。俗呼んで甜菜と為す。其の茎幹の高さ三五尺、叢を作す。六七月小紅紫の花を生じ随ひて便ち紅実を結ぶ。形微長、棗の核の如し。その根を地骨と名づく（略）時珍本草に曰、枸杞は二樹の名、この物の棘、枸の刺の如く、茎、杞の條の如し。故に兼ねて之を名づく。道書に言、千載の枸杞、其の形犬の如し。故に枸の名を得。（略）和産所謂のごとし。いまだ根形犬のごとく成るを見ず。中古の僧慈眼大師、平生枸杞飯を嗜みて延年なりし。林道春が曰、松風道人、この飯を製する事を伝ふといへり。和俗、又春月採りて蔬菜となす。総べて蔬菜の類は花果にかかはらず、おほくは其の採りて食する時をもつて季に許用せり。猶心を附くべし。

季題解説 原野路傍に自生する落葉灌木であつて、茄科に属する。高さ三尺余、多く叢生し、刺を有してゐる。葉は平滑で細長、互生又は束生する。夏日葉腋に淡紫色の小花を開く、楕円形の小赤色漿果を結ぶ。その実は冬までも落ちず、枯の中などに下つてゐるところは甚だ可憐で美しい。枸杞飯といつて飯に炊いてたべるといふことである。又春の嫩葉は摘んで食用としたり、枸杞茶と云つて茶の代用としたりする。或は曰く、有刺者を枸棘（オニグコ）、無刺を枸杞（タウグコ）と云ふと。しかし一般に之れを枸杞と称してゐる。枸杞は虚労を去り、精髄を補ふと云はれてゐる。〔参照〕人事—枸杞飯（秋）　枸杞の実（秋）

例句

枸杞　枸杞垣の似たるに迷ふ都人　蕪村（落日庵句集）

芽ばり柳（めばりやなぎ）

芽柳（めやなぎ）　柳の芽（やなぎのめ）

古書校註

【栞草】めばり柳、早春芽のまさに出でんとする柳也。大子柳を、めばり柳と云ふ人あれど別種也といへり。

季題解説 早春、芽の将に出でんとする楊柳をいふ。春に魁けて楊柳の木肌

がつややかに光をまし、芽ぐんでゐる枝頭が萌え立つやうに色めいてくる。やがて一齊に芽を吹き揃ふのは美しいものである。特に満洲の如き永い間冬に閉ぢこめられてゐる地方では、早春の原野に何も青いものを見ることの出來ない時に柳の芽の吹くのを見ては、春が來たのだといふ喜びを力強く感ずるのである。〔參照〕柳。

例句

芽ばり柳

芽柳の榣ぶ鳥まだ寒げなり　鬼貫（鬼貫句選）
芽柳の眠たかもしき風情かな　同（俳諧七車）
十ヲ五ツ芽より柳の華ぞ哉　支考（蓮二吟集）
見所はきのふをとゝ日柳の芽　暁臺（暁臺句集）
ぽつかりと黄ばみ出たり柳の芽　同（同）
芽柳を見ぬ人がいふさむさ哉　乙二（松のゝえ草稿）
鳩のくふほどになりけり柳の芽　梅室（梅室家集）
芽柳をながるゝ雨となりにけり　薫人（ホトトギス）
柳の芽ふくらみ見ゆる二階かな　迷人（同）
芽柳や水にかくるゝ渡石　清紅子（同）
吹かれては芽柳欄に載るもあり　瑩風（同）
芽柳や澄むことのなき楊子江　平陽（同）
芽柳の姥ケ餅屋の床几かな　史湖（續ホトトギス）
芽柳の春とし言へど風強く　蒼雨（同）
わがねある柳そのまゝ芽を吹きぬ　虚子（同）
芽を吹きて柳もつるゝこと多し　同（ホトトギス誌）

柳

風見草　枝垂柳（絲柳）　白楊（箱柳）　やまならし（蒲柳）　水楊
杞柳　春柳　青柳　嫋柳　垂柳　若柳　姥柳　遠柳　川柳　門柳
柳陰　柳影　柳の絲　柳の雨　柳の月　柳の風　柳畑　柳原

古書校註

【山之井】柳はさほ姫のながかもじ絲櫻の[illegible]の糸などもいひなし、雨の洗ひ、風のけづるけしきをもながめ、川邊になびけるを、氷よりひく眉かと疑ひ、もゆるといひては、火鼠の川柳などもいひかく。猶こぶ柳といふ名によりて、氣力なしと作れるをとがめ、觀音の力がなともいへり。

【御傘】柳に雪を結びても春也。柳ちるは初秋なり。惣別、名木のちるは冬也、名草のかるゝは冬也。

【滑稽雜談】したゞ柳（略）檉の字を、したり柳共、川柳ともいふ。垂絲柳をしだれやなぎともよめり。したりとは下へたるゝの謂なるべし。箱柳（略）これ則ち丸葉柳とも云ふ。楊枝なんどに削り用ふる者也。總じて柳は季を加へて四つ也。

柳絮。（□）初春の比、俗にみどりと稱する者是也。柳の花也。柳絮は茅花の穗のごとし。柳の實也。しかれども柳絮も春也、葉柳は夏也、一葉の柳ちるは秋也。枯柳は冬也。但し句によるべしと古師の說也。

【年浪草】本草に時珍曰、楊は枝硬くして揚起す。故に之を楊と謂ふ。柳は枝弱くして垂流す。故に之を柳と謂ふ。蓋し一類二種也。按ずるに、說文に云、楊は蒲柳也。旄は澤柳也。檉は河柳也。之を觀れば則ち楊、柳と稱すべく、亦楊と稱すべし。故に今南人猶楊柳と稱す。春初柔荑を生じ、即ち黃蘂花を開く。春晚に至りて、葉長成の後、花中に黑く細かなる子を結ぶ。蘂落ちて、絮出づ。白絨の如し。風に因つて飛ぶ。

【季題解說】楊柳科の落葉喬木で、多く水邊に生じ、枝を折つて地に挿しても容易く根を生ずるくらゐ生長力が強い。枝垂柳は樹皮は灰白色で稍々赤味を帶び、枝條細くして下垂する特性がある。葉は細く鮮綠で挿木として繁殖し易い。一般に柳といふのはこの種類を指すのである。

白楊は山地に自生し、幹の高さ十丈余に達し、葉は互生して廣楕圓形で稍ゝ菱形をなし、先端は尖り緣邊は鋸齒になつてゐる。葉柄が長いため風に動き易い。四月頃紫褐色の穗狀花を開く。箱柳・やまならし・箱柳の異名がある。

水楊は原野の水邊に多く、高さ二三尺から十四五尺で、樹皮は帶黑色、葉は披針形で互生し、尖頭にして細鋸齒がある。春日葉に先だつて花を開く。花は雌雄異種、穗狀をなして黃綠色である。

杞柳は水邊に自生し廣く栽培せられる。年々枝條を刈り取るために叢生灌木狀をしてゐる。枝條は皮を剝ぎ、漂白して行李を編む故に行李柳とも云ふ。枝條は長く延び葉は針狀披針形で、對生或は稀に互生し、緣邊に微鋸齒がある。單性異株で春褐紫色の穗狀の花を開く。

猫柳は河邊に生じ、又園藝せられる。高さ五六尺、葉は長楕圓形で稍ゝ厚く、雌雄異株、早春葉に先だつて花を開く。雄花穗はその苞に柔滑絹絲狀の白毛を密生する。花に紅色で黃葯がある。普通挿花にするのはこの雄花で、雌花は果が熟して絮が飛散する。【□□】猫柳ネコヤナギ　柳絮リウジヨ　芽ばり柳メバリヤナギ　夏―葉柳ハヤナギ　秋―柳散るヤナギチル　冬―枯柳カレヤナギ

【例句】

柳

頭をふらぬ柳は行基菩薩哉　宗因（梅翁宗因發句）

池水にみどりを急ぐ柳かな　同（同）

あち東風や面々さばき柳髮　芭蕉（續山井）

餅雪をしら糸となす柳かな　同（同）

うぐひすを魂にねむるか嬌柳　同（虛栗）

はれ物に柳のさはるしなへかな　同（小文庫）

八九間空で雨降る柳かな　同（續猿蓑）

入口は柳にのぼるよし野かな(?)　同　([illegible]讀)

夕霧が塚にて
この塚は柳なくてもあはれなり　鬼貫　(鬼貫句選)
樹の中に只青柳の尾長鳥　同　(同)
あら青の柳の絲や水の流　同　(同)
けふの日を柳にやりて川端に　同　(俳諧七車)
[illegible]たかくし牛の尾戰ぐ柳かな　素堂　(俳諧五子稿)

商亭の主人、池に鵜を愛せられしに[illegible]患けるゆゑなり
池に鵜なし假名書習ふ柳陰　同　(同)
吹あこゝ柳に似たるあらしかな　來山　(續いま宮艸)
雨の柳絲なき琵琶のほこり掃　同　(同)
人ごみの中へしだるゝ柳かな　浪化　(浪化上人發句集)
青空の底といふべき柳かな　同　(同)
如月のこゝろもとけて柳かな　同　(同)
さかなやがはひつた門は柳かな　同　(同)
引よせてはなしかねたる柳かな　丈草　(丈草發句集)
姑の氣に入る人は柳かな　去來　(去來發句集)
塵／＼で人をさかせるやなぎかな　同　(同)
五六本よりてしだるゝ柳かな　同　(同)
青柳のたゝいて遊ぶ板戸かな　同　(同)
青柳や[illegible]びかさなる絲ざくら　同　(同)
師の坊の十年しばし柳陰　其角　(五元集)

[illegible]
乙鳥の塵をうごかす柳かな　同　(同)
青柳に蝙蝠のたふ夕ばえや　同　(同)
さかさまに鷺の影見る柳かな　同　(同)
領域の賢なるは此柳かな　同　(同)
蝸牛豆かとばかり柳かな　同　(同)
柳には鼓もうたす哥もなし　同　(同)
欄干や柳の曲をつたふ狙　同　(同)
燒ケのこる琴に恨みの柳かな　同　(五元集拾遺)
曲れるを曲げてまがらぬ柳かな　同　(同)
風なきに青い雨ふるやなぎかな　同　(同)
貫きさしもわかれて輕き柳かな　同　(同)
青柳の額の端や三ケの月　同　(同)
日前に杖つく鷺や柳かげ　嵐雪　(玄峰集)
亂るべき世の柳をさすの神子　同　(同)
本すぢを尋ねて見れば柳かな　許六　(五老井發句集)
庭人のうしろ向たるやなぎかな　同　(同)

ぬれ色に春のうきたつ柳哉　許六　（五老井発句集）
西風にひがし近江のやなぎかな　同　（同）
笠の緒に柳縮る旅出かな（?）　惟然　（惟然坊句集）
六田のや柳は風に障らぬに　支考　（蓮二吟集）
明ぼのゝ働き見ゆる柳かな　同　（同）
ふり亂すやなぎ神代の姿哉　同　（同）
年ン明けの此頃針に糸やなぎ　同　（同）
立寄て柳に頭痛さすらせつ　杉風　（杉風句集）
長生の思案しでかす柳かな　同　（同）
大井川馬もあやをる柳哉　沾德　（俳諧五子稿）
垣朽てみどりにはぬる柳かな　同　（同）
死るよりましと待日や玉柳　同　（同）
遠乘や鞭は柳の有次第　同　（同）
みよし野に闇一結ひ柳かな　千代女　（千代尼發句集）
晝の夢ひとりたのしむ柳かな　同　（同）
青柳や池の果もなき水の上　同　（同）
うぐひすは起せとねぶる柳かな　同　（同）
なかれては又根にかへる柳かな　同　（同）
青柳やどちらの世話で水の音　同　（同）
おそろしき根を恥入て柳かな　同　（同）
手折らるゝ花から見ては柳かな　同　（同）
根を置てけふもどらぬ柳かな　同　（同）
釣竿の糸吹そめて柳まで　同　（同）

八十の賀

百とせに最一眠り柳かな　同　（同）
一筋も捨たる枝なき柳かな　蕪村　（春慶引）
風吹ぬ夜はもの凄き柳哉　同　（夏より）
出る杭を打うとしたりや柳哉　同　（明和辛卯春興且帖）
一軒の茶見世の柳老にけり　同　（夜半樂）
若草に根をわすれたる柳かな　同　（蕪村句集）
梅ちりてさびしくなりし柳哉　同　（同）
青柳や我大君の艸か木か　同　（同）
君ゆくや柳みどりに道長し　同　（全集書簡）
不二おろし十三州のやなぎ哉　同　（蕪村遺稿）
柳にもやどり木はあり柳下惠　同　（同）
門前の媼が柳糸かけぬ　同　（同）
やなぎから日のくれかゝる野道哉　同　（同）
三尺の鯉くゝりけり柳影　同　（同）

横に降る雨なき京の柳かな　同　（落日庵句集）
青柳や芹生の里のせりの中　同　（名所小鏡）
閑かさを覗く雨夜の柳かな　太祇　（太祇句選）
引寄て折手をぬける柳かな　同　（同）
さし柳五尺の春を見せにけり　召波　（春泥發句集）
五條まで舟は登りて柳かな　同　（同）
青柳や堤の春のいく所　同　（同）
かたり合いかにもそこの柳哉　同　（同）
すかし見て星にさびしき柳哉　樗良　（樗良發句集）
旅人の見て行門のやなぎ哉　同　（同）
菴室や柳をもるゝはなし聲　同　（同）
白雲を日當に野邊の柳かな　同　（同）
もつれツヽ見事や雨の糸柳　同　（同）
はからずも見てもどりたる柳哉　同　（同）
嘸旅の人のこゝろの柳陰　也有　（蘿葉集）
横にして見せふと風の柳かな　同　（同）
武者繪にはあしらひにくき柳かな　同　（同）
折なとの札にはもれて柳かな　同　（同）
今朝うゑて昔から風の柳哉　同　（同）
早い名も遲い名もなき柳かな　同　（同）
どの枝も階子かゝらぬやなぎ哉　同　（同）
屋根ふきにたばねられたる柳哉　同　（同）
西行に居風呂たてむ柳かげ　同　（同）
花の香は佛にありて柳かな　同　（同）
女かと見えて手折れば柳かな　同　（同）
此紙に筆をぬぐへば柳かな　同　（同）
枝はいと糸は枝なるやなぎかな　同　（同）
加減して土へはつかぬ柳かな　同　（同）
琴の糸松にはなくて柳かな　同　（同）
たれこめし柳や鳥も泣に來る　同　（同）
染て見て墨子も泣ぬ柳かな　同　（同）
交て見て梅には寒き柳かな　同　（同）
根はなびく心ならずもやなぎかな　同　（同）
帆につれて走りそふなる柳かな　同　（同）
折ラれぬを合點で垂る柳かな　同　（同）
あはれ柳さそな思はぬ風ばかり　同　（同）
牛のこゝろ柳にそへば角もなし　同　（同）
鳥もなけ柳に其日くりかへし　同　（同）

柳

渡場に茶屋かをしへし柳かな　也有（蘿の落葉）
花に行く人に道〳〵柳かな　同（同）
むつとしてもどれば庭に柳かな　蓼太（蓼太句集）
青柳やとし〴〵老のつまさかり　同（同）
いかづちのはるかにうごく柳哉　同（同）
裾迄はまだ暮きらぬやなぎかな　同（同）
家ひとつ市にしづまる柳かな　同（同）
二間三間影吹入るやなぎかな　同（同）
ゆり分て北枝もはやき柳かな　同（同）
此庭へ能は這入てやなぎ哉　同（同）
柳見て柳ほしいとおもひけり　同（同）
橋にして踏だものから柳かな　同（同）
犬に逃て庭鳥上る柳かな　几董（井華集）
老そめてことにめでたき柳かな　同（同）
しばし見む柳がもとの小鯏市　同（同）
良いたき風のよそ目に柳哉　同（同）
戀々として柳遠のく舟路哉　同（同）
若柳枝空さまにみどりかな　同（同）
わたりふたつ見えて夕日の柳哉　同（同）
青柳やはつ神鳴の雨の後　同（同）
寒かりし月を濁らす柳かな　同（同）
荒につく畠の柳みどりせり　同（同）
やなぎ風に裏おもてなき時節哉　白雄（白雄句集）
おもふ柳見にゆくころとなりに嵬　同（同）
眠るかと鶴見て過る野の柳　同（同）
正月の霜ふりこぼすやなぎ哉　同（同）
月遠く柳にかゝる夜汐かな　同（同）
椎やなぎうめうつろひて青柳か　同（同）
艪うつ門に暮行やなぎかな　同（同）
夕汐や柳がくれに魚わかつ　同（同）
的形の矢落の柳しづかなり　同（同）
柳なをしりそき見れば綠なる　同（同）
二日見ぬ程や柳のおもかはり　暁臺（暁臺句集）
やゝしばし氣ふりをふくむ柳かな　同（同）
のら〳〵と柳見に行つゝみかな　同（同）
太刀の柄に手かけて潜る柳哉　同（同）
吹あるゝ竹の中より糸やなぎ　同（同）
青柳に山路のこゝろはなれたり　同（同）

人去て野中の柳風くらし　同（同）
火燈があぶらかけたるやなぎかな　同（同）
篝火のとほり付べき柳かな　同（同）
暁の星を縮りしやなぎかな　同（同）
しのばるゝ人聞そへて柳かげ　同（同）
青柳や酢賣の潜る門の内　闌更（半化坊發句集）
釣人の蚓掘けり柳かげ　同（同）
舟留て語や島の柳かげ　同（同）
透し見る舟景色よし江の柳　同（同）
二本の柳吹結ぶ風情かな　同（同）
遠里や柳一もと打曇る　同（同）
青柳に浮世の垢はなかりけり　士朗（枇杷園句集）
青柳のあめや小家のひとつ口　同（同）
青柳や暮て啼續淀の犬　同（同）
青柳の東海道は百里かな　同（同）
青空に馴て来ふむ柳かな　巣兆（曾波可理）
傘かりて疎き人見る柳かな　同（同）
待戀の翌日に延たる柳かな　同（同）
青柳ほどけて枸杞の垣根かな　同（同）
稲村を町家にまぜて柳かな　同（同）
家ありてまた柳ありどこまでも　成美（成美家集）
おもしろや柳の間を人のゆく　同（同）
春の柳もたれごゝろになりにけり　同（同）
家はみな春は柳でおもしろし　同（同）
青柳に留主はあつけむ門の鎖　同（同）
くゞりこむ春となりけり門やなぎ　同（同）
魚提て柳がくれにもていりぬ　同（同）
しかられし夢は柳のしもとかな　同（同）
茶の煙柳と共にそよぐ也　一茶（一茶句帖）
我門はしだれ嫌ひの柳哉　同（同）
庵の錠いらぬ事とや柳吹く　同（同）
馬の子の柳潜りをしたり兒　同（同）
青柳やよらずさはらず門に立　同（同）
雨あがり朝飯過のやなぎ哉　同（花見二郎）
行灯におつかぶさりし柳哉　同（旅日記）
身じろぎもならぬ塀より柳哉　同（同）
青柳ややがて螢をよぶところ　同（同）
青柳の髓にみゆる夜明哉　同（同）

庭はきの眉にかけたる柳哉　同（同）
どし／＼と米踏音や糸やなぎ　同（同）
雨一日おのが柳になじみけり　同（同）
撞く鐘の響おさへる柳かな　同（同）
街道にかまはぬ里の柳かな　同（同）
やなぎはみよそにおとらぬみどり哉　同（同）
寝勝手のよさに久見る柳かな　梅室（梅室家集）
人呵る聲に見劣る柳かな　同（同）
旅人と婆ゝと見て居る柳かな　同（同）
橋守の鐘はし姫のゆふ霞　同（同）
上座して柳の雨をかぶりけり　同（同）
根深きを翠に見する柳かな　同（同）
ふり上る杵すれ／＼の柳かな　同（同）
柳見た灯で庵の灯をともしけり　同（同）
柳見て思ひ出しけり酒の債　同（同）
わが庵の草木をかねし柳かな　同（同）
居眠もうまし柳も見に出たし　同（同）
雨ひと日降はことしの柳かな　同（同）
蠣わりのくらい灯で見る柳かな　同（同）
三木あれど森にはならぬ柳哉　同（同）
見おろせし柳見上る泊かな　同（同）
何處そこのせんさく無用遠柳　同（同）
結ぬれば稲にもはいる柳かな　同（同）
青柳や人立こみし居合抜　同（同）
雨そゝぐ花屋の門の柳哉　門瑟（文草）
梅柳いづれもよしや昔はたご　亦醉（同）
只一本白き河原に柳哉　大至（同）
尼寺の軒に淋しき柳哉　蘇仙（同）
風の吹く方をうしろの柳哉　野水（あらの）
風わたる柳の中の柳哉　野梅（我庵）
吹結び吹とく風の柳哉　宗碩（大宗碩句集）
ほんのり（のり）と日のあたりたる柳哉　野坡（泊船）
ふるものゝ空に音なき柳哉　兎明（春道）
青柳に下はら白き雀哉　すま（反故集）
組板の鱗を流す柳哉　曲翠（ありそ海）
川上へ流るゝやうな柳哉　此筋（[illegible]）
町中へしだるゝ宿の柳哉　利牛（炭俵）
五人扶持とりてしだるゝ柳哉　野坡（同）

柳

わらはべの結んで逃る柳哉　紅丸（續[illegible]題）
靜かさに動かして見る柳哉　燕々（[illegible]尾）
老にける柳が枝の柳哉　吟江（古[illegible]姿）
一本は物にさはらぬ柳哉　助叟（京[illegible]水）
川ありと見えてつらなる柳かな　子規（子規句集）
橋落ちてうしろ淋しき柳かな　同（同）
史家村の入口見ゆる柳かな　同（同）
故郷にわが植ゑおきし柳かな　同（同）
大門や柳かぶつて灯をともす　同（同）
東門の外に舍營す柳かな　同（同）
家主の無殘に伐りし柳かな　同（同）

[illegible]

柳垂れて海を向いたる借家あらん　同（同）
傘さして舟をいつれば柳かな　極堂（新俳句）
鳥とんで雨降るしたれ柳かな　雪腸（同）
淺みどり柳の村となりにけり　紅綠（同）
緣側に雨の吹きこむ柳かな　得中（同）
戀々として古郷に住みたき柳かな　句佛（懸葵）

[illegible]

青柳に帆揚げて渡す所かな　黄耳（ホトトギス）
湖の風全く絕えし柳かな　料雪（同）
太幹を馬かじりゐる柳かな　蹄魚（同）
あるだけの並ぶ俥や垂柳　田士英（同）
大江のこゝにせばまる柳かな　三昧（同）
ならびたる柳の絲の間かな　夜半（同）
絲柳垂れて町並つくるかな　烏頭子（ホトトギス）
左右にいづ柳の花に立ちにけり　素十（同）
生きてゐる橋のたもとの垂柳　左右（同）
風吹いて山のやうなる柳かな　壺青（同）
楊柳村水縱橫人は生活に　虛子（句集虛子）

ホトトギス六百號句會席題

故郷の柳がもとにある心　同（同）

【參考】　しだれやなぎ（柳）Salix babylonica, L.（やなぎ科）古き外來品にして今は廣く庭々に栽植せらるゝ落葉喬木なり、水濕の地を好みて繁茂し易し、莖の高さ三四丈、葉は線狀披針形にして邊緣に微鋸齒を有し、枝條細く垂れ、雌雄異株なり、春日、葉に先だちて黃綠色の花を開花す、雄花は通常二雄蕊を有す、果穗は長さ一寸許、普通に街路樹として可なり。

かはやなぎ Salix gymnolepis Lév. et Vnt.（やなぎ科） 原野の水邊に多き落葉喬木にして、葉は互生し短柄を有し、線形にして其長さ二寸乃至三寸、其幅三分許、邊緣に微鋸齒を有し、葉柄の基脚は擴がりて左右に小披針形の托葉を具へ、共に腋芽を擁す、四月頃、單性穗狀の黃綠色の花を異株に生ず。ネコヤナギにも亦カハヤナギの名あり。

こりやなぎ Salix multinervis, Fr. et Sav. var. angustifolia, Makino.（やなぎ科）廣く栽植せられ殊に水邊に植ゑられ成長する落葉灌木なり、枝は長く延び、葉は線狀披針形にして對生或は輪生し、邊緣に微鋸齒を有す、春日、褐紫色の雌雄花穗を異株に生ず、新條の長さ六七尺に伸長せるものを採りて皮を去り、行李の原料として但馬產最も名あり。

やまならし 一名 はこやなぎ Populus Sieboldiana, Miq.（やなぎ科）山地に生ずる落葉喬木なり、幹の高さ一二丈に達し、葉は廣卵形にして先端稍〻尖り、邊緣に細鋸齒を有す、葉柄は長さ一二寸、縱に扁平にして、風のために動かされ易し、四月頃、異株に穗狀の褐色の單性花を開く、材を用ひて箱を造る。先人之れを白楊に充てしも非なり。

桑（くは）

桑（くは）の芽（め）　芽桑（めくは）

季題解說 桑が芽を吹き葉を繁らせるのは、地方によつて相當に相違があり、また早生晚生等桑の種類によつても遲速がある譯であるが、大體仲春頃、毛蠶に與へる嫩芽を吹き、夏から初秋にかけて摘むに從つてあとからあとから新らしい葉が出て繁茂し、夏蠶秋蠶の料となるのである。かやうに桑の葉の青々としてゐる間は隨分長いのであるが、蠶が、特に夏蠶秋蠶と斷らぬ以上、春季として扱はれるやうに、桑も——桑の芽ばかりでなく——春季とするのが一番我れ〳〵の感じにぴつたり來るやうである。丁度蛙が實際最も多く鳴くのは夏季であるに拘はらず、これを春の部に入れて始めて一番しつくり感じが出るのと同樣である。〔參照〕桑の花（クハノハナ） 人事—桑摘（クハツム）

例句

桑

濡桑をかけて暗さや雨の軒　七峰（ホトトギス）

桑日方書き入れもせし句帖かな　鳴庵（同）

桑の荷の馬ふさがれる戶口かな　蕪人（同）

はろけくも鳥居たゝせる桑の中　夜潮（同）

上州や桑一齊に芽立ちける　たけし（同）

毛の國の桑のつぶら芽ほぐれそむ　まつ江（續ホトトギス）

夕闇や桑ゆさ〳〵と擔ひすぐ　雨音（同）

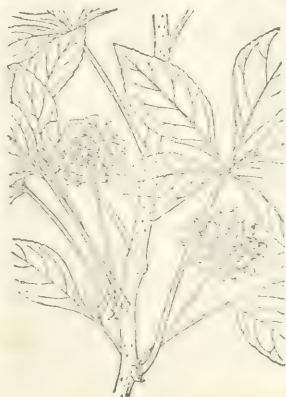
焚きつけて桑籠肩に裏戶かな　長（同）

濡桑を煽ぐ唐箕と大團扇　朴舟（同）

ほどきたる桑の一枚帶を打つ　霞人（同）

桑舟にランプ見せゐる二階かな　一青（ホトトギス）
桑の芽のまた出てゐる畔かな　虚子（同）

五加（うこぎ）　むこぎ　五加木（うこぎ）　五加垣（うこぎがき）　五加摘む（うこぎつむ）

古書校註
【滑稽雜談】纂頭の圖經に曰、五加木、春苗を生ず。莖葉俱に青く叢を作す。赤莖又藤葛に似たり、高さ三五尺、上に黒刺あり、葉五枝を生じ簇を作す。○時珍本草に曰、此の葉、五葉交加の者を以て良とす。故に五加と名づく。譙周が巴蜀異物志に、文章草と名づく　贊有りて云、文章酒を作す、能くその味を成す。金を以て草を買ふ、その貴きを言はざる是也。春月舊枝の上に倏葉を抽づ、山人採りて蔬と爲す。○和産所説のことし、其の木高からず、俗もつて藩籬となす　春月に生ずる嫩葉採りて菜となす、其の賞する時を以て季に用ふ。菜の類、心得べし。【年浪草】雷勒が五花と名づけ、楊愼が丹鉛錄に五佳に作る　一枝五葉の者佳なる故也。

季題解説　いたるところの原野藪褶などに自生する落葉灌木で、高さ六七尺に達する。幹と枝に少し刺があるので、よく生垣にも植ゑられる。葉は五七葉から成る掌狀複葉で、もみじの葉にも似て居る、春小さい花をつける。花の色は黄綠色、實は小球狀で、熟すると黒い。嫩葉は摘んで食用に供する。或は飯に炊き、或は茶に製する　【季題】人事―五加飯（うこぎめし）

例句
五加
五加木垣猫の容を覗きけり　几董（井華集）
家ぬしの摘にわせたるうこぎ哉　同（同）
おもひ出てさし木の五加木摘日かな　白雄（白雄句集）
なまめける内らの聲や五加木垣　巴東（新選）
五加木摘んでよその垣根に居たりけり　青邨（ホトトギス）
東山温泉
白粉をつければ湯女や五加木摘む　虚子（同）

令法（りやうぶ）　はたつもり　令法摘む（りやうぶつむ）　令法飯（りやうぶめし）　令法茶（りやうぶちや）

古書校註
【滑稽雜談】大和本草に曰、外品、山茶科。和名れうほふと云ふ。其の葉

淀川躑躅に似て、葉の先尖る。木も枝も淀川躑躅に似て高し。凶年には飢民葉を取り、蒸して食ふ。京都にも飢歳には賣る。又貧民は平時も煮て飯の上におき、蒸して飯にまぜて食ふ。味美。○私云、藻鹽草に云、令法、はたつもり。夫木集にはたつもりを令法と題す。今俗誤りて、れうぶ、又、びやうぶと云ふ。

【年浪草】（一）按ずるに、波太豆は材木なり、是には非ず。淀川つゝじに似たるといふ説、畿内にれうぶと云ふものに合へり。○枝折萩に曰、はたつもりは、田を守る神なり。つは助（タスク）なり。○老鼠湖十の説に云、令法は田に種をおろす分量を、一反に何程と定むる也、故にはたつもりと云ふ。此の説據あらん、考ふべし。

【栞草】［救荒本草］山茶科（ハタツモリ）、條の高さ四五尺、枝梗く灰白色、葉は皂莢の葉に似て圓く、又槐の葉に似たるも亦圓し。四五葉一處に攅り生ず。甚だ稠り密なり。味苦し。嫩葉を取つて煠熟し、水に淘して洗ひ、油鹽にて調へ食ふ。亦蒸し晒し乾して茶となし、煮て飲む。

註（一）大根本草に對する疑說。

季題の解説　山間などに自生する落葉小喬木、高さ一丈位になり、樹幹茶褐色で葉は互生、長楕圓尖頭、緣邊鋸齒をもつてゐる。花は六月頃白色の小花を開く、總狀花序で多數の花を綴る。花冠深く五裂し、花中に十雄蕊一雌蕊がある。春の頃、嫩葉を摘み、飯に炊き、又は茶に製して飲用に供する。

参考の部　りやうぶ（Clethra barbinervis, Sieb. et Zucc.（りやうぶ科）山林中等に自生する落葉の小喬木なり、高さ一丈許に達し、樹幹茶褐色を呈し、枝は輪狀に出す、葉は廣き倒披針形にして鋸齒あり、枝頭に集り着く、夏日、枝端に長さ數寸の總狀花穗を出し、多數の白色小花を綴る、花冠深く五裂し、花中に十雄蕊一雌蕊あり、花後球形の小蒴果を結ぶ、材は上木炭を造るべく、嫩葉を食ふべし。

藂（ひこばえ）

古書摘註

【御傘】ひこばえ、なにの草にても春になるなり。

【滑稽雑談】葉は木也。貞德は草のこゝろを云ふ。按ずるに、歌に詠ずる所、おほく草也。適ゝ木によめるも侍るべし。然れば草、木と草に二句去

るべき也

季題解説 春先き、樹々の伐り株や根元から新しい芽が簇々と群がり萌え出る、これを蘖といふ。動詞に働かせてもつかふ。語源的には草木いづれにも通ずる言葉で、古歌にも蓬のひこばえなどが詠まれてゐるが、今日普通には、木の株や根元から生ずる芽だけに呼び用ひられるやうである「草の蘖」はいかにも感じがないやうな氣がする。［参照］木の芽

例句

蘖　蘖えし中の伐口眞平　大愚（ホトトギス）

大木の蘖したるうつろかな　虚子（續ホトトギス）

蔦の若葉

蔦若葉

季題解説 葡萄科木本である。晩春赤い芽を出し、つゞいて掌狀に青く葉を擴げ、初めは小さく、次第に廣く發育する。蔦の若葉はいかにも艶やかに美しいものである。莖に甘ずつぱい濃味の液があり、煮て甘蔦煎を製する

蔦には落葉しない種類と落葉する種類とがある。前者を冬蔦といひ、後者を夏蔦といふ。蔦の若葉といふのはこの夏蔦の嫩葉のことであつて、秋になると美しく紅葉する。故に又錦蔦ともいふ。［参照］夏—若葉　青蔦　秋—蔦

葛の若葉

季題解説 四月下旬にはじめて嫩葉が出る。［参照］葛の花　夏—若葉

葎若葉

季題解説 葎には種類がいろ〳〵あるが、普通葎といふのは「やへむぐら」をいふのである。葎は到るところの陰地・畠・道ばたなどに自生する雜草で、細い莖に七八枚乃至五六枚づつ、小葉を一段一段衆合させてゐる。葎若葉の生ひ茂るのは四月中ばからで、莖の高さ一二尺位まで、相集り相扶けて籬根や畠地一面にのびむらがる。花は四月末か五月に入つて白色の小花を叢生する。［参照］夏—葎　冬—枯葎

例句

葎若葉　むぐらさへ若葉はやさし破れ家　芭蕉（後の旅）

春の筍

春筍

季題解説 筍は寒中から盛夏の頃まであるが、冬から春にかけて出るものは主として孟宗竹・江南竹の筍である。これは筍の中で一番肥つちよで、外

皮は黑斑に細い毛が生えてゐる。味もこの種類が最も美味であり、產額も多いやうである。近來筍を掘ることが春の遊びの一として都會人を喜ばせてゐる。入場料を拂つて筍の出てゐる藪へ入れて貰ひ、鍬を借つて自らそれを掘るのである。筍の本場は京都であるから、この遊びも自然京都が最も盛んで、新京阪沿線の大山崎、嵐山電車沿線の御室・鳴瀧、京濱沿線の山科など到る所にある。［參照］夏―筍

竹の秋

古書校註

【年浪草】廣韻藻に曰、竹秋は三月也。蘭秋は七月也。賛寧が竹の譜に、八月を春と爲し、三月を秋と爲す。百穀皆始めて生ずるを以て春と爲し、成熟を秋と爲す。

季題解說　栞草を見ると、「廣韻藻」竹秋ハ三月也、蘭秋ハ七月也「賛寧竹譜」八月爲春、二三月爲秋とある。竹は春季になると古い葉が黃ばんで來る。他の草本が紅くなり黃になるのは秋であるのに、竹に限つて黃色となるのは春である。これを竹の秋といひ、秋の季である竹の春に對稱せしめる。［參照］秋―竹の春

例句

竹の秋

空ふかく蝕ばむ日かな竹の秋　蛇笏（ホトトギス）
竹秋や西日に掃いて古疊　泊月（同）
草庵卽書
竹秋や又鳴きに來し主鵐　軒石（同）
竹秋や僧房古りてつまごめに　綾華（同）
庇裏うつれる水や竹の秋　一白（同）
竹秋や摩耶宿坊の欄のもと　誓子（同）
元政庵
藪中に鐘樓一つや竹の秋　活刀（同）
野々宮へ迷ひ入りけり竹の秋　春王（同）
東山大龍寺
柚が家へけはしき徑や竹の秋　無字（續ホトトギス）
竹秋や山ふところの歡喜天　輝子（同）

山吹

古書校註

面影草　かがみ草　八重山吹　濃山吹　葉山吹

【山之井】やまぶきはつぼみを砂金袋、さかりを金峰山、ちりかゝるを金すなごなど、多くこがねにいひなせり。山吹の衣といひては、みかどのかしこきたばかり姿を思ひ、かんのきみのありさまをも寄す。久くちなしの

色なれば、物いはぬ花ともよみ、實のなきなども哥に見え侍る。

【御傘】　春也。（略）藥の名に款冬と云ふは、蕗のとうの事也。（略）根本、款冬の字をやまぶきと讀むは日本のあやまりなり。されども、上代よりの義なれば、今更あらためずしておく也。

【滑稽雜談】　私云、（一）山吹は實らず　萬葉に之を詠む。款冬の字誤なる者也、嘉元百首によめる歌有り「山吹のたがあやまちに咲き初めて冬をばよその色となしけん　法皇。」長明無名抄に云、井手大臣の堂、一年焼け侍りにき。前に夥しく大なる山吹見え侍りき。其の花の輪は小土器の大いにて、幾重共なく重りてなん侍りし。井手の川のみぎはに付きて、ひまもなく侍りしかば、花の盛りには金の堤などを築渡したらんやうにて、他所にはすぐれてなん侍りし。

【年浪草】　大和本草に曰、棣棠、閩史及び允齋花譜に其の形狀詳か也。疑ひもなき山吹なればこゝに詳かに記さず。日本昔より此の花を賞し、古歌に多くよめり。山州井手の山吹尤も名あり。單葉のもの山中に生ず。（金碗・喜木と漢名を稱す。款冬・酴醾共にやまぶきと訓ずるは誤れり。酴醾はこやをき也。

註　（一）其読の白略。

季題解說　薔薇科に屬する野生の灌木である。溪谷のほとりなどに特に多い。通常園養せられる。花は主に黄色であるが、白いのもある（白山吹）。一重のも八重のもある（八重山吹）。冬枯れて葉が落ちても軸は青々としてゐる。軸の中には燈心にする眞白なものが詰つてゐる。軸の太いところを切つて、箸で押し出すと、中からすぽんと白い心ばかりが出る。晩春花ざかり。重瓣のものは單瓣のものよりも花が遅い。花の鮮黄色と、葉や莖の濃い青さとの取り合せの、これくらゐ美しい花は少い。わが國固有のもので、古く萬葉の中にもその歌が見えてゐる。

例句

山吹

山吹の露菜の花のかこち顔なるや　芭蕉　（東日記）
ほろほろと山吹ちるか瀧の音　同　（曠野）
山吹や宇治の焙爐の匂ふ時　同　（猿蓑）
山吹や笠にさすべき枝の形　同　（芭蕉翁全傳）
山吹は咲かで蛙は水の底　鬼貫　（鬼貫句選）

山吹にさきだつ雨や身のひとつ　同　（俳諧七車）
山吹や折らで渦まく淵の上　言水　（俳諧五子稿）
[illegible]門[illegible]植木や町[illegible]
花に似て山吹草がものいはぬ　来山　（續いま宮艸）
山吹やよく〳〵下は水のおと　浪化　（浪化上人發句集）
鯉の莨は山吹の瀬やしらぬ分　其角　（五元集）
山吹も御の糸のはらみかな　同　（同）
山吹は黄玉青玉露そうき　同　（五元集拾遺）
山ぶきのうつりて黄なる泉哉　嵐雪　（玄峰集）
山吹や水にひたせるゑまし麥　惟然　（惟然坊句集）
山吹や柳に水のよどむころ　千代女　（千代尼發句集）
山吹のほどけかゝるや水の幅　同　（同）
山吹や井手を流るゝ鉋屑　蕪村　（蕪村句集）
山吹や葉に花に葉に花に葉に　太祇　（太祇句選）
山吹や腕さし込て折にけり　同　（同）
折ばちる八重山吹の盛かな　召波　（春泥發句集）
山ぶきや雨水ひかぬ地のひくみ　同　（同）
水越して山吹あるゝわたり哉　樗良　（樗良發句集）
やまぶきの花吹とぢよ雪あらし　同　（同）
山吹や下にも鳴かで雨蛙　也有　（蘿葉集）
山吹やとへばこたへの比丘尼寺　同　（同）
山吹や夜は蛙に晝は蝶　同　（同）
山吹の垣や黄になるつなぎ馬　同　（露の落葉）
山吹の垣ねや蓑をほして有　同　（同）
やまぶきや蛙に足らぬ忘水　同　（同）
山吹や胆のまゝに暮てゆく　蓼太　（蓼太句集）
やまぶきや月も葎て澄あたり　同　（同）
山吹にめで損ひやわるい宿　几董　（井華集）
山吹や胡粉の見ゆる雨の後　同　（同）
山吹やさしぬき濡るゝ歩わたり　同　（同）
山吹を嗅折侍のからすかな　白雄　（白雄句集）
根をたゝで山吹ながるかけ樋かな　同　（同）
山ぶきやあたらかざしのから車　同　（同）
やま吹にくちなはを追旅人かな　同　（同）
しのぶ路のやまぶきかゝる髻かな　曉臺　（曉臺句集）
芋汗に八重山吹の詠めかな　同　（同）
白雛の山ぶきちらす逆毛哉　同　（同）
この別山ぶき鈍くふぢ愚なり　同　（同）

山吹

散ときはやまぶき低きうらみ哉　曉臺（曉臺句集）
おほかたに山吹ちりて起ならひ　同（同）
山吹や終には流す花のかげ　闌更（半化坊發句集）
山ぶきや花ふくみ行魚もあり　同（同）
やまぶきの花の下ゆく芥かな　同（同）
やまぶきや暫しかけ置洗ひ衣　同（同）
山吹は峯入ちかき盛りかな　巣兆（曾波可理）
山吹に蛙のたゝく扉かな　同（同）
山吹に晝なく雞のすさまじや　成美（成美家集）
やまぶきや牛だまされて芹生まで　同（同）
やまぶきやさくらがちれば我もちる　同（同）
山ぶきに日のさす作もいますこし　同（同）
山吹や草にかくれて又そよぐ　一茶（七番日記）
山吹をさし出し貞の垣根哉　同（同）
山吹やまづ御先へとゝぶ蛙　同（同）
山吹や荒鵜に暮を見せに出る　乙二（をのゝえ草稿）
山吹は靜なものよ水ぐるま　蒼虬（蒼虬翁發句集）
山吹や竹を年貢のひと在所　同（同）
家毎に山吹ちるや桶の水　同（同）
山ぶきに一あし遅や人の脊戸　同（同）
山ぶきを入口にして藪の家　同（同）
山吹のしづくの下の小家かな　梅室（梅室家集）
山吹や岸の崩るゝ雨上り　吟江（心の花）
山吹や低う飛び行く鳥の影　荻子（同）
山吹に牛の尾をふる道もなし　同（あゝそ海）
山吹や此水上は家もなし　古道（花七日）

六田選

山吹に川よりあがる雫哉　園女（玉藻）
山吹や鍬洗ふてもまだ暮ず　希因（類題發句集）
山吹や鍋炭流す人は誰　竹也（明烏）
山吹に干つゞけたる手染哉　林陰（卯辰）
山吹や人形かわく一むしろ　子規（子規句集）
山吹に張物乾く日は高し　同（同）
山吹の散るや盥の忘れ水　同（同）
山吹の雨に灯ともす隣かな　鳴雪（新俳句）
山吹と樒とまぜて賣りに來ぬ　戯道（同）
傘さして山吹を折る小庭かな　碧梧桐（春夏秋冬）
水汲んで山吹を折る濡手かな　筐舟（同）

山吹や枝さしかはす蕾がち　圭岳（同　人）
山吹に干菜の繩の下りけり　大春（懸　葵）
山吹やはかる程居る家鴨の子　北莊（同　）
山吹に宇治はあかるき日暮かな　華水（倦　鳥）
山吹の谷底に田や二三枚　岫雲（ホトトギス）
山吹や閉めし積りの壞れ門　寸七翁（同　）
山吹の葉の皺ふかき蕾かな　妙子（同　）
山吹や濛雨の中の奥座敷　風生（同　）
再びの雨脚迅し葉山吹　同（同　）
山吹の雨や佛の日もくりて　素波（同　）
山吹に母子同じき誕生日　せん女（同　）
山吹や水車二軒を持てる寺　稗人（同　）
流れ來る山吹の花もなくなりぬ　蕪城（同　）
袖垣に引きよせてあり濃山吹　泊月（同　）
貴船路や杉の木の間の濃山吹　木皮（同　）
道の邊に伸びし山吹花を了ふ　越央子（續ホトトギス）
山吹の花のこりたる山路かな　素十（同　）
山吹のうつれる水を掬ひけり　椎花（同　）
越して來て掃除好きなり濃山吹　爽雨（同　）
山吹に深山の雲のかゝるなり　虚子（句集虚子）
山吹に流れよりたる纖かな　同（同　）
山吹や喉がふくれて啼く蛙　同（同　）
折りもてる山吹風に吹かれをり　同（續ホトトギス）
山仕事山吹がくれしてゐたり　同（同　）

参考　やまぶき Kerria japonica DC.（いばら科）庭園の觀賞植物なれども、亦山野に自生する落葉灌木なり、莖の高さ四五尺にして叢生し、葉は互生す、春日、新葉を生じて後黄色の花を開く、單瓣花を生ずるものと、重瓣花を生ずるものとあり、單瓣の花は能く結實すれども、重瓣のものは結實することなし、八重山吹と稱せらる。

酴醾（こやかき）　牡丹ばな（ぼたん）　菊棘（きくいばら）

古書校註
【滑稽雜談】　大和本草に曰、外品、酴醾、やまぶきと訓ずるは非也。葉は草いちごに似たり。蔓にはあらず。莖にはり多し。莖方也。三月末花さく。千葉菊の如し。初め開く時少し青色を帶ぶ。後全く白し。京・大阪にてこやをぎと云ふ。江戸にて牡丹ばなと云ふ。筑紫にて菊棘と云ふ。又淡紅色なるあり。黄色の酴（ニゴリザケ）を酴醾酴と云ふ。日本にて山川と云ふ酒の色の如

くならん。〇(一)私云、羅山(二)が詩集、此の者を賦して云、款冬黃茯を兼ぬ、水陸倭名を混ず、といへり。(一)道春は是を以てやまぶきと稱するか。猶考ふべし。

註　(一)其諺の自說。(二)林道春、號は羅山　幕府の儒官。明曆三年歿　年七十五

大根(だいこん)の花(はな)

花大根(はなだいこん)　種大根(たねだいこん)

古書校註

【滑稽雜談】時珍本草に曰、萊菔は春の末高薹を抽き、小花を開く。紫碧色なり。夏の初め角を結ぶ。〇これ又菜の花より遲き者也。

【年浪草】蘿蔔(らふく)、大抵は八月に種を下ろす。彼岸中に苗を生じ、其の繁きを拔きて、稍々長じて霜後其の根肥大、冬月專ら賞して之を食ふ。掘り取らざるもの、年を越えて油菜と同じく薹を抽んで白花を開く、(略)花は見るに足らざる也。

季題解說　大根は十字花科植物であつて、花瓣は四片から成る。土地によつて多少異なるが四月頃開花する。種を採るため畑に殘したものが、越年して花を開くのである。花の色は帶紫白色であるが、或は白色を呈する。菜の花のやうに陽氣ではないが、そこに又變つた趣のあはれさがあるものである。〔參照〕冬—大根洗

例句

大根の花

春もはや一畝うつらふ大根花　浪化(浪化上人發句集)
世の中や大根の花も藤色に　桃隣(古太白堂句選)
まかり出て花の三月大根哉　一茶(發句題叢)
大根の花や淺黃の疊束な　淸泉(聽蘆亭)
雀啼く大根の花やひな曇　子規(子規句集)
一本の大根咲き故麥の中　若芽(新俳句)
末寺こそ心安からめ花大根　句佛(懸葵)
野鼠に喰はれて大根咲きにけり　小蕾(同)
大根の咲き初めなる紫よ　古泉(倦鳥)
花つけて大根肩出す春の土　小提灯(ホトトギス)
長雨や紫さめし花大根　橙黃子(同)
花大根黑猫鈴をもてあそぶ　茅舍(同)
出勤やうすむらさきに花大根　若沙(續ホトトギス)

菜(な)の花(はな)

花菜(はなな)　菜種(なたね)の花(はな)　油菜(あぶらな)

古書校註

【滑稽雜談】諸菜(一)皆二月に花を開く。少しの遲速侍る。すべて菜の花と稱する也。

【年浪草】 其の花黃色世界と、龍麟洲が詩に作りたるは油菜なるべし。畿内も樓閣・山岳の眺望、田野黃金をのべたるが如きは油菜の花也。油菜は凡そ九十日種を下ろし、隨つて生ず。十一月に苗を分け移し植う。春に至りて薹を抽んでて黃花を開く也。

【本草】 時珍が曰、菘は今人白菜と呼ぶ。二月黃花をひらき、芥の如し。四瓣。三月角を結ぶも亦芥の如し。

注（一）薹立・花・薹等をいふ。

季題解説 菜種油を取る爲めに栽培するあぶら菜の花をいふ。もとは京都・近江・名古屋附近に多かつたが、今は少ない。けれども矢張り、菜の花といふと、眞先に四條烏丸から乘る京阪急行の沿線を思ふ。東京近くでは千葉以東の汽車の沿線の、松原があつたり丘や田があつたりする邊の菜の花がみごとである。菜の花の美しく一面に咲き續いてゐるのは、如何にも春らしい感じが强い。曉方、晝間もよいが夕暮時の眺めは殊によい。〔參照〕天文 菜種梅雨ナタネヅユ

例句

菜の花

なの花や一本咲きし松のもと　宗因（梅翁宗因發句集）

菜の花や淀も桂も忘れ水　言水（俳諧五子稿）

かいま見る山吹ねたむ菜種かな　來山（いまみや艸）

野の花や菜種が果は山の際　同（續いまみや艸）

菜の花の小坊主に角なかりけり　其角（五元集）

菜の花や坊が灰まく果はみな　嵐雪（玄峰集）

なの花の中に城あり郡山　許六（五老井發句集）

菜の花や豆の粉めしの朝げしき　同（同）

菜の花の匂ひや蘢の磯畠　惟然（惟然坊句集）

菜の花や感じ入たる寺の前　支考（蓮二吟集）

菜の花をいざ見に行む孫を杖　同（同）

菜の花や月は東に日は西に　蕪村（續明烏）

なのはなや筍見ゆる小風呂敷　同（蕪村句集）

菜の花や鯨もよらず海暮ぬ　同（同）

菜の花や皆出拂ひし矢走舟　同（同）

菜の花に僧の脚半の下りけり　同（新五子稿）

なのはなや昔ひとしきり海の音　同（蕪村遺稿）

菜の花や油乏しき小家がち　同（同）

なの花や法師が宿はとはで過し　同（同）

なの花や遠山鳥の尾上まで　同（同）

菜の花や摩耶を下れば日のくるゝ　同（同）

菜の花や壬生の隱家誰〳〵ぞ　同（落日庵句集）

菜の花や和泉河內へ小商　同（同）

菜の花やよし野下來る向ふ山　太祇　（太祇句選）
なのはなや此邊までは大内裏　召波　（春泥發句集）
菜の花に伶行水の光かな　同　（同）
菜の花の道行人の閑見哉　同　（同）
菜の花はよし名の花の首途かな　也有　（蘿葉集）
菜の花や揚ゆく駕の片簾　同　（同）
菜の花や君がためとて折もせず　同　（同）
菜の花に肌恥かし石佛　同　（同）
菜の花や車の通ふ道ならず　同　（蘿の落葉）
菜の花にのどけき大和河内哉　蓼太　（蓼太句集）
菜の花や雲たち隔つ雨の山　几董　（井華集）
菜の花の紀路見越すや山のきれ　同　（同）
野ごゝろや筐の小菜の花を見て　白雄　（白雄句集）
かさね着や菜の花かほる雨あがり　同　（同）
菜の花のにほひは甘くにがきかな　同　（同）
菜の花や人遠く藪疊はり　曉臺　（曉臺句集）
なの花や牛見え行葬の人　同　（同）
菜のはなに日當の柳風くらし　同　（同）
轍々雨の菜のはななかるなり　同　（同）
山吹の小家なの花の街かな　同　（同）
菜の花や市なくれ行餒烏賊　同　（同）
なのはなやかへり見すれば邯鄲里　同　（同）
菜の花のはつ／＼にみゆる都かな　同　（同）
なのはなやくるればもとの菅ぼらけ　同　（同）
城春にして菜のはなさきぬ外郭　同　（同）
なの花にしのび女の戸出哉　同　（同）
菜の花の春戸を流るゝ雨間かな　同　（同）
なのはなや南は青く日はゆふべ　同　（同）
菜の花や是等も地主の木の間より　同　（同）
菜の花や盃持て畝うつり　同　（同）
山もりがなのはなさきぬ鯨汁　同　（同）
菜の花や遊女わけ行野の稲荷　闌更　（半化坊發句集）
菜の花や千里をくまに咲續　同　（同）
菜の花に大名うねる麓かな　士朗　（枇杷園句集）
菜の花にそめよすゞめの柿衣　同　（同）
菜の花に口ばしそめて啼雀　同　（同）
梅に肥て菜の花咲はぬ鳥もなし　同　（同）
菜の花の舞こんで居る座敷哉　巣兆　（曾波可理）

菜の花や小窓の内にかぐや姫　同（同）
なの花に造り木見ゆる明屋かな　同（同）
小袋のこぼれ花咲菜種哉　同（同）
菜の花や初土器の井堰の里　同（同）
菜のはなに夜のおぼろはやぶれけり　成美（成美家集）
菜の花や行抜ゆるす山の門　一茶（享和句帖）
菜の花の横に寝て咲く庵哉　同（七番日記）
なむあみだおれがほまちの菜も咲た　同（同）
ほの〴〵と乞食の小菜も咲にけり　同（同）
菜の花のとつぱづれなりふじの山　同（同）
喰屑の菜もはら〳〵と咲にけり　同（同）
菜の花も猫の通ひぢ吹とぢよ　同（同）
菜の花やかすみの裾に少しづゝ　同（同）
大菜小菜喰ふ側から花咲ぬ　同（同）
かぢけ菜のそれでも花のつもり哉　同（同）
ちぐはぐの菜種も花となりにけり　同（同）
藪の菜のだまつて咲て居たりけり　同（同）
菜の花や四角な麥もまぜこぜに　同（九番日記）
かるた程門の菜の花咲にけり　同（一茶發句集）
菜の花の中や手にもつ獅子頭　乙二（をのゝえ草稿）
菜の色にくるり〳〵と入日哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
なの花をめぐるや水の跡戻り　同（同）
なの花をあしらふふりや松の風　同（同）
垣こえしなの花いやし松の庭　梅室（梅室家集）
菜の花や屋根に鷄畦に猫　同（同）
なの花や住吉の松を果にして　同（同）
菜の花や奥ある嶋の雞の聲　同（同）
樋をもるゝ水のまばゆき菜種哉　吟江（心の花）
菜の色の一反ばかりさかり哉　東走（明烏）
菜の花に近づく雨の匂ひ哉　士巧（續明烏）
菜の花はしらけて蝶の盛り哉　古山（安永六）

深川木場にて

橋臺に菜の花咲けり舟わたし　宗瑞（古今句鑑）
菜の花や嵯峨を限りの東山　竿秋（新選）
菜の花の四角に咲きぬ麥の中　子規（子規句集）
菜の花や小學校の晝餉時　同（同）
吉原や菜の花見ゆる裏田圃　其村（新俳句）
菜の花に汐さし上る小川かな　碧梧桐（同）

菜の花

菜の花に門の大きなお寺哉　梅堂（續俳句）
菜の花や一日しをるゝ持佛堂　青々（妻木）
夕ぐれの風にもまるゝ菜種かな　壽江女（同人）
菜の花やこの小川まで潮の來る　衣庵（懸葵）
菜の花の匂ふ襟元竈の前　竹後（倦鳥）
菜の花や日燒疊に俳諧師　はじめ（ホトトギス）
時計出して日は十二時菜の花や　石青（同）
菜の花の片平藥師に詣でけり　里石（同）
菜の花の匂の中を通りけり　あふひ（同）
閼伽桶に詩忠の菜種挿しにけり　禪寺洞（同）
三上山菜の花明りある如し　たけし（同）
菜の花や夕映えの顏物を云ふ　草田男（同）
石垣の中一面の花菜かな　きゆう（續ホトトギス）
菜の花の折りてすてあるあはれかな　椎花（同）
菜の花に波の寄せをる興津かな　冬青（同）
桃捨てゝ菜の花挿すや菜壜　露子（同）
菜の花の合羽につける風雨かな　夏山（同）
夕暮の菜の花色となつてゆく　何蝶（同）
光りつゝ堰を越えたる花菜かな　君枝女（同）
なほ遠く塔のうかめる花菜かな　鹿郎（同）
菜の花や驛より遠き桑名町　青坡（同）
菜の花や名古屋の城のよく見ゆる　花蓑（同）
中村や菜の花日和風强し　虚子（同）

參考　あぶらな　一名　なたねな　Brassica (Compestris, L. subsp. Napus, Hook. f. et Thoms. var. nippo-oleifera, Makino.（十字花科）往時より國内に廣く栽培せらるゝ越年生草本なり、莖の高さ三四尺に達し枝を分つ、葉は大形にして綠色を呈し、上部の葉は無柄にして其基脚莖を抱く、四月頃、梢上に黃色花を總狀花序に開く、果實は長角、熟すれば開裂して黑褐色小粒狀の種子を散ず、主として其種子より油を搾取す、ナタネ油と云ふ。

豆の花

季題解說　春咲く豆の花の總稱で、主に豌豆の花・そら豆の花等をいふ。

〔參照〕蠶豆の花　豌豆の花　夏—豆類の花

例句

豆の花

豆の花かくれんぼうが頭出す　伶人（同人）
黑牛のなめちぎりけり豆の花　浦山（同）
車まで藁荷ひ出す豆の花　青旺（懸葵）

蠶豆の花（そらまめのはな）

季題解説 そら豆は秋下種し、仲春の頃花を開く。花は蛾の舞ふが如き形をしてゐる。白いところに眼のやうに黒い斑がある。 **参照** 豆の花（マメノハナ） 夏 ―蠶豆（ソラマメ）

例句 蠶豆の花

そら豆の花のかをりや當麻村　みづほ（ホトトギス）

蠶豆の花の黒瞳のをかしけれ　霞二（續ホトトギス）

参考 そらまめ Vicia Faba, L.（まめ科） 裏海沿岸地方の原産にして、越年生草本なり、莖の高さ二尺内外、方形にして中空し、葉は四箇乃至六箇の小葉より成り、質軟なり、三四月の候、葉腋に短き總狀花序をなして蝶形花を開く、色は白質或は帶紫色にして紫黑斑を具ふ、其莢の尖空に向ふが故にソラマメといふ、夏日種子を收めて食用に供し、莖葉を肥料とす。

豌豆の花（えんどうのはな）

季題解説 豌豆は秋下種し、仲春花を開く。しかし暖かい海岸などでは冬のうちに豌豆の花を見ることもある。花は蝶形で、紫のもあり、白いのもある。莖の姿態などにもよるのであらうが、蠶豆の花よりも感じが優しい。

参照 豆の花（マメノハナ） 夏―豌豆（エンドウ）

例句 豌豆の花

豌豆の花の葉山へ保養かな　格堂（春夏秋冬）

花豌豆虻にだかれてうつむけり　早苗（ホトトギス）

右左海なる路の花豌豆　辛々（續ホトトギス）

菫（すみれ）

紫花地丁（すみれ）　菫草（すみれぐさ）　花菫（はなすみれ）　相撲取草（すまふとりぐさ）　相撲花（すまふばな）　一夜草（ひとよぐさ）　一葉草（ひとはぐさ）　ふたば草（ぐさ）

古書校註

【山之井】 花の紫なるに、すみれといへる名をとがめ、蛸壺・瑠璃の壺などいひなして、壺すみれをも。

【滑稽雑談】 蘇恭が本草に曰、堇菜、野生す。人の種うる所に非ず。葉は蕺菜に似て、花は紫色也。（略）順徳院の野邊のむかし物語に云、昔ある人道に行迷ひ、廣野に日をくらして、草の中にて鳥の子を拾ひぬ。是を袖に入れ、草の枕を引結び、其の野に臥しぬ。夢に拾ひつる卵は前生の子也。此の野に埋むべきよし見て夢さめぬ。夢の如くやがて埋む。其のあしたに見るに、葉ひとつ有る草に、紫の花咲きぬ。いまのすみれこれなり。（略）これらの説によらば、和の菫は別種か。壺菫は俗に壺草といふ。猶尋ぬべし。

【菜草】京都にては相撲取と云ふ。筑紫にては殿の馬と云ふ。小兒其の花に鈎ある處を、兩花交へかけて引く戯とす。相撲の形に似たり。諸にて相撲取と云ふ草は別也。若水が日、紫花地丁、別號菫々菜と云ふ。故に國俗、菫菜をすみれと誤り稱す。菫菜は別也。

季題解説　菫科に屬し、野原に自生する多年生草本であつて、種類が甚だ多い。草の丈けは普通三四寸であす。葉は長楕圓形で、翅のある長柄を有し、叢生する。莖葉共少しく毛茸を有する。初め葉間に數梗を出し、毎梗一花づつ開花する。最下の花瓣には長い距がある。花の色は普通は所謂すみれ色の紫が多いが、或は白もあり、又その二つのぼかしなどもある。香氣がない。これを角力取花と云ふのは、花と花とをひつかけて引つぱりあひ、花のもげた方を敗けとする子供遊びがあるからである。〔參照〕三色菫サンシキスミレ・香菫ニホヒスミレ　地理—菫野スミレノ

例句

菫

山路來て何やらゆかしすみれ草　芭蕉（鶉尾冠）
當歸タウキよりあはれは塚のすみれ草　同（泊船集）
一鍬や折敷にのせしすみれ草　鬼貫（鬼貫句選）
馬のつらくはして行やすみれ草　杉風（杉風句集）
駈出る駒も足嗅ぐすみれかな　千代女（千代尼發句集）
　　和歌三百年御會に
地も雲に染らぬはなきすみれ哉　同（同）
根をつけしをな子のよくやすみれ草　同（同）
坐りたる舟を上ればすみれ哉　蕪村（蕪村句集）
骨拾ふ人にしたしきすみれかな　同（同）
加茂堤太閤様のすみれかな　同（書翰）
とはれけり住はすみれの菴さへも　也有（羅葉集）
人ふまぬ徑わづかに菫かな　蓼太（蓼太句集）
先ゆかし熊野が摘たる菫かと　同（同）
そこらひく牛もなつかし菫草　同（同）
菫踏で石垣のぼる戀路かな　几董（井華集）
すみれ踏で今去馬の蹄かな　同（同）
なか／＼によき衣はぢよ野の菫　白雄（白雄句集）
春ごとの野にのみ見しをつぼ菫　同（同）
末黑野に咲ずともあれ菫艸　同（同）
行や我すみれがくれの濱雀　同（同）
奥山や人住あればすみれぐさ　曉臺（曉臺句集）
菫つめばちひさき春のこゝろかな　同（同）
打ちらす酒千變すはなすみれ　同（同）
竹の葉の花にかさなる菫かな　同（同）

組落て雀はなかむすみれかな　同（同）
なつかしや焼野のすみれ活かへる　同（同）
ぬしや誰垣よりうちも菫のみ　闌更（半化坊發句集）
うつくしき道有世也すみれ草　同（同）
すみれ草けし人形をこぼしけり　士朗（枇杷園句集）
ゆく水に嗅で捨けり（こ）すみれ艸　巣兆（曾波可理）
市女笠すみれ尋ぬと荅へけり　同（同）
くれるまで我もすみれの上にゐて　成美（成美家集）
野の菫しづかにあゆむ鳥かな　同（同）
狼に夜はふまれてはなすみれ　同（同）
今少たしなくも哉菫草　一茶（一茶句帖）
野の菫あの家なくもあれかしな　同（旅日記）
地車におつぴしがれし菫哉　同（同）
菓子畫とる敷居際より菫哉　同（同）
壁土に丸め込まるゝ菫哉　同（同）
大菫小菫菴もむつかしや　同（七番日記）
荅けふや生れん菫さく　同（同）
鍋すみのかゝれ迹しも菫哉　同（同）
にくまれし妹が菫は咲にけり　同（同）
臼と盥の間より菫かな　同（同）
赤人の眼にはすみれか寝る一夜　乙二（をのゝえ草稿）
酒こぼせすみれの外は山のもの　同（同）
腰の法螺菫つむにはむづかしき　同（同）
ちよつぼりと菫影もつ西日哉　蒼虬（蒼虬翁發句集）
眼にしみる色に又つむ菫哉　梅室（梅室家集）
鐡の刃に菫をのせて子を連て　同（同）
尼たちのすみれ摘けんこぼれ米　同（同）
薄すみれ見て濃菫覺けり　同（同）
晝ばかり日のさす洞の菫哉　舟泉（あらの）
草かりて菫選出す童哉　鷗歩（同）
明ぼのや菫傾ぶく土龍　凡兆（千鳥掛）
朽腐る木の切口に菫哉　等先（たてなみ）
いそがしや菫を摘ば土筆　園女（玉藻）
傾城も廓邊りの菫哉　竹裡（續明鳥）
つみくらせ菫や春の花かたみ　省柏（大發句帳）
鼻紙の間にしぼむ菫哉　その（類題發句集）
見付れば只どこ迄も菫哉　吟江（心の花）
下草に菫咲くなり小松原　子規（子規句集）

菫

頂に春遅れたる菫かな　炎天（懸葵）
菫つむ兒に腹這へる教師かな　果采（ホトトギス）
炭焼きしうつろのありぬ花菫　京童（同　）
牧場に松林あり壺すみれ　同（續ホトトギス）
つちくれの小さき日陰に菫かな　虚子（句集虚子）
なだらかな岡に上るや壺すみれ　同（續ホトトギス）

【參考】すみれ Viola mandshurica, W. Beck.（すみれ科）原野に生ずる多年生草本なり、葉は叢生し、長橢圓形にして低扁なる鋸齒あり、翅ある長柄を有す、春日、簇葉間より數梗をぬき、毎梗濃紫色の一花を向側して開く、花後葉は長き三角形を呈し、葉柄の翼著し。

三色菫（さんしきすみれ）

遊蝶花（いうてふくわ）　胡蝶花（こてふくわ）　パンジー

【季題解説】菫の一種であるが、三色菫にも色々の種類がある。花壇用大輪混同種（直徑一寸五分から二寸位、大々輪波狀咲き）、大輪バクノット・ジャイアント等がその重なるもので、色は紫・黄・白ぼかし等が配合されてゐる。三色菫といふのは、紫黄白の三色を交じへた花が咲くからである。花が美しく可憐で、育て易いので、觀賞用として汎く愛育されてゐる。一年で開花し直ちに宿根するから、秋には枝を少し刈込むとよいとされてゐる。別名遊蝶花又胡蝶花と云ふのは、花の狀があたかも蝶の舞ふやうだからと云ふ。【參照】菫（すみれ）

【參考】さんしきすみれ　一名パンジー Viola tricolor, L.（すみれ科）歐洲より移植して、庭園に栽培せらるゝ二年生、若しくは一年生草本にして、有莖種なり、葉は長橢圓形、托葉に極めて大きく羽狀をなす、花大にして、距短く、萼は卵形をなす、此の種は閉鎖果を生ぜず、春夏の候、開花し、黄色・紫色・白色等種々あり、野生種は花小なり。

香菫（にほひすみれ）

山菫（やますみれ）

【季題解説】香菫は通常のすみれと同様に菫科植物である。英國産の舶來が普及してゐるが、日本在來種もある。地に莖を有せず、葉は毛茸を有し、卵圓狀で、緣邊に鈍鋸齒を有し、心臟形をしてゐる。花は白色・紫色・及びそのしぼり等があり直立する。花は大變香氣が強く、香水の原料となる。

【參照】菫（すみれ）

紫雲英（げんげ）

五形花（げんげ）　げんげん　蓮華草（れんげさう）

【古書校註】【菜草】漢名碎米薺。俗に云ふ五行、又蓮華草。〔和漢三才圖會〕春苗を生

ず。其の葉皁莢及び槐の若葉に似たり。兩々相對し、枝莖地に敷きて蔓の如し。節の上に莖を抽んで、頂に花を開く。三月より四月の末に至るまで盛也。其の花淡紫色、もとの間に白き處有り。狀蓮華に似たり。故に名つく。莢を結ぶ、三稜黑色・其の多き處錦を地に敷くが如し。人以て野遊の一興とす。

季題解說 支那原産の荳科の越年生草本で、田野に多く自生する。莖は地に臥して擴がり、葉は羽狀複葉をなして互生し、四月頃紅紫色の蝶形花を繖形に排列し輪狀をなすが、稀に變種の白色の花がある。果實は三角狀の莢をなし、熟すると黑くなる。この草は元來の名は「げんげ」が本當であるが、これは漢名翹搖から來たものといふ人もある。又花形がやゝ蓮花に似てゐるために俗に蓮華草とも謂ふ。田野に栽培せられて良好な綠肥用とせられる。この花が畝々に溢れ、田の面に咲きひろがつた景色は田園の春の趣深いものの一つである。昔詩人蘇東坡はこの紫雲英を極めて甘いものとして推奬してゐるが、これの軟い苗を油でいためて、鹽や胡椒を加へて食べると美味である。

例句

紫雲英

野道ゆけばげん〳〵の束すてゝある　子規（子規句集）
げん〳〵を打ち起したる痩田かな　同（同）
我庭のげん〳〵肥えて色薄し　同（同）
横降りの雨の堤のげんげかな　秋海棠（同人）
げんげ刈る長柄の鎌をとぎにけり　まさを（同）
げん〳〵や風波立ちて光ること　賓水（ホトトギス）
げんげ田や水づきひさしき濃紫　誓子（同）
紫雲英田の濃きも淡きも花盛　同（同）
秋篠寺
紫雲英咲く小田邊に門は立てりけり　秋櫻子（同）
ひや〳〵と素足にふるゝげんげかな　くに女（同）
切岸へ出ねば紫雲英の大地かな　草田男（同）
鋤きのこす土にげんげのあはれかな　椎花（續ホトトギス）
げんげ田に蓆圍ひの温泉あり　一魯（同）
下田までげんげ盛りや畦作る　南蠻寺（同）
げんげ刈る人に燕のひるがへり　楊子並（同）
佐保村の五形花の畦を奈良へ出づ　旭川（同）

參考 げんげ　一名　れんげさう　Astragalus sinicus, L.（まめ科）
支那原産にして田野に多き越年草本なり、莖は地に臥して擴がり、葉は羽狀複葉をなす、四月乃至六月頃、葉腋に長梗を出して蝶形花を繖形に排列し輪狀をなす、紅紫色、稀に白色のものあり、果實は三角狀の莢をなし熟して黑し。ゲンゲは或は漢名の翹搖より導かれし乎といふ人あり。

苜蓿の花　クローバ

季題解説 荳科の越年生草本で田野に自生する。圓い萩の葉のやうな葉が三つ宛塊つて一つの葉をなしてゐる。匍匐莖を有し地上に擴がりのびる。春もやゝ晩く、小さな白い蓮華草のやうな花が、長い莖の先に毬狀に群つて咲く。肥料又は牧草としてよく、競馬場などに一面に緑の絨氈を敷き詰めたやうに美しく生ひ茂つてゐるのを見かける。

例句

苜蓿の花　クローバや傾き立てる道標　德女（ホトトギス）
クローバの花のしとねに坐りけり　乙女（同　）
クローバの原のありけり皆憩ふ　手古奈（續ホトトギス）

薺の花　花薺　三味線草　ぺんぺん草

古書校註 【年浪草】和漢三才圖會に曰、田野多く之あり。葉地に布きて生ず。形、蒲公英の如くにして、微硬く微香氣あり。實を結ぶ。三角、末大きく本窄く、三絃の撥に似たり。小兒共の二を以て相磨すれば、則ち音有り。故に三味線草と名づく。○庖厨本草に曰、本草を考ふるに、一名護生草。又一種菥蓂あり。俱に冬至の後苗を生ず。二三月細白花を開く。

季題解説 薺は十字花科の一年生草本であつて、田園路傍到るところに自生してゐる。根生葉は叢生して羽裂、莖生葉には缺刻や鋸齒がある。春もたけたころ總狀花序、白花四瓣の小さな花をつける。もの古りた境内などに一面に吹き出でなどしたのは、ものあはれに又賑かな趣もある。川べり、垣根などにわづかに見出すなども、もとより哀れ深い。花後、三味線の撥に似た三稜平扁の短角を結ぶ。振ればチヤゴチヤゴと可憐な音を出し、子供たちをよろこばせる。三味線草・ぺんぺん草の名ある所以である。（參照）新年―薺打

例句

薺の花　よく見れば薺花さく垣ねかな　芭蕉（續虛栗）
花咲て鶴もすさめぬ薺かな　蕪村（書翰）
妹が垣根三味線草の花咲ぬ　同（几董初懷紙）

摘み残す薺は花にあらはれぬ　子規（子規句集）
庵を出でゝ道の細さよ花薺　碧梧桐（春夏秋冬）
ふるさとや薺花咲く屋根の上　洛山人（ホトトギス）
あによめ忌ぺん〳〵草は花つけぬ　水城子（同）
花咲いて霜にまぎるゝなづなかな　たつ子（續ホトトギス）
石段にぺん〳〵草や安養寺　華女（同）
蝶とまりぺん〳〵草は靜まりぬ　凡秋（同）
みちのべのぺん〳〵草となりにけり　あふひ（同）

參考　なづな　一名　ぺんぺんぐさ（Capsella bursa-pastoris, Moench.（十字花科）田圃路傍庭園等到る處に多き越年生草本なり、根生葉は叢生し羽裂す、裂片狹長にして耳あるものあり、又長橢圓形のものあり、春より夏にかけ四五寸乃至一尺餘の莖を抽き、分枝して總狀花穗をなし白色花を開く、花は小にして萼四片、花瓣四片より成りて、十字形をなす、後三稜平扁の短角を結ぶ、春の七草の一なり。

葱の擬寶（ねぎのぎぼ）　葱坊主（ねぎばうず）　葱の花（ねぎのはな）

季題解說　葱は本名を「き」といひ、一音なる故に一文字ともいふ。西比利亞の原産で、高さ一二尺に達する百合科の多年生草本である。古來我が國及び鮮滿各地に栽培せられ、最も需要の多い蔬菜の一つである。根は鬚狀をなして絲のやうに細く、莖は短縮して頗る小さく、その上方に葉を叢生する。葉は中空管狀で直立し、頭部が尖り平行脈がある。葱が生長するにつれて寄せ土をすると、白色の部分（白根）が次第に長くなる。根深の名あるはこれがためである。四五月頃花莖を抽いて、頂きに小形白色の花を開き、多數集つて球狀となる。「ぎぼうし」といふのはこれである。花は六花、被があつて鐘狀をなし、その內に六本の長い雄蕊が花被の外にまで出て黃色の葯がある。雌蕊は一本で、球狀の子房には三稜がある。葱坊主が蠢蠢として畝に立つてゐるのを見ると、いかにも春がたけたといふ感じを深くするものである。［參照］冬—葱

例句

葱の花

火を焚けば竈乾きけり葱の花　士栖（懸葵）
二泊して淋しく發つや葱の花　月二郎（ホトトギス）
葱の花廓に近き河口かな　鳳石（同）
花葱に虻尻立てゝ喰ひ入りし　紫水樓（同）
花葱に誰か住まへる舊居かな　一壺（同）

苺の花（いちごのはな）

季題解說　阿蘭陀苺の花　西洋苺の花　草苺の花　蛇苺の花　苗代苺の花

苺は薔薇科の多年生草本で、その種類が極めて多く、山野に自生

するくさいちご・へびいちご等の類から、食用に供する西洋種の苺にいたるまで、あらゆる變種が知られて居るが、一般に皆春、白色五瓣の小花を開く。

現今では食用の洋種の苺の栽培が一般化して居るので、一寸した畑をもつた人はよく〳〵これをつくり、春先開花期には新らしく萌え出た廣い鋸齒のある葉の下へ藁や麥藁を敷いて、咲いて來る花を雨土にいためないやう、又實つた苺をいためないやうに手當をする。藁のうへにひろがつた葉の間々に、眞白な小さな花が暖かさうに咲いて居るのは、春らしい心持の深いものである。【參照】夏―苺ゴイチ

例句

苺の花

草庵

蒲團干す下にいちごの花白し　子規（子規句集）

蒲公英たんぽぽ

たんぽぽ　鼓草つゞみぐさ　藤菜ふぢな

古書校註

【山之井】たんぽゝの花は、さのみもてはやすべき色香もあらねど、小鼓の音に其の名をよせて、鶯の笛の段、胡蝶の舞の内などもいひならはす。

【滑稽雜談】蘇頌の圖經に云、春初苗を生ず。葉は苦苣の如く、細刺有り。中心に一莖を抽き、莖端に一花を出す。色黄にして、金錢の如し。俗呼びて僕公罌と爲す是也。（略）和產又所謂ごとし。たんぽゝと稱するは、鼓草の名より出づるか。此の草生じて地上にある形、鼓面に似たる所侍る。故に白鼓丁と云ふ。鼓草ともいへるならし。

【年浪草】本朝食鑑に曰、俗に藤菜と稱す。或は鼓草と稱す。倶に名義詳かならず。

季題解說

菊科の草本で、野といはず原といはず、何處にでも生えてゐる。薊の座のやうに葉の先がぎざ〳〵に切れて、柔いうす綠した葉が、根元から幾重にも重なり合つて大地にへばりついて生えてゐる。根は牛蒡のやうな一本の根である。

花は黄色が多いが、たまに白いのがある。實は白色の冠毛を生じ、風に乘つてどこまでもとんで行く。根元から、細い管のやうな莖がすく〳〵と出て、それに花がつく。葉でも莖でも折ると何處からでも牛乳のやうな汁が出る。根氣の藥だといつて莖や葉を浸しものにしたり、佃煮にしたりする。

例句

蒲公英

たんぽゝや折〳〵さます蝶の夢　千代女（千代尼發句集）

咲く見つゝ摘まで待て先づつゞみ草　也有（蘿葉集）

たんぽゝや五柳親父がしたし物　几董（井華集）

たんぽゝに東近江の日和かな　白雄（白雄句集）

たんぽゝや一日に見やる莖と花　乙二（をのゝえ草稿）

山吹はなしたんぽゝの小金原　梅室（梅室家集）
日の恩の光りかゞやく蒲公英哉　槑花（月影塚）
馬借りて蒲公英多き野を過る　子規（子規句集）
蒲公英や激浪よせて防波堤　秋櫻子（ホトトギス）
町を出てたんぽゝ摘める娼婦かな　歸宇（同）
蒲公英の群り咲ける水邊かな　北湖（同）
蒲公英をめぐると見しが犬糞す　虛吼（同）
我を見し牛の眼やさし黄たんぽゝ　靜耕（同）
蒲公英や鮫あげられて横はる　秋櫻子（同）
たんぽゝを折ればうつろのひゞきかな　よりに（同）
たんぽゝや老にゆづりし道の邊に　耕衣（同）
たんぽゝの大きな花や薄ぐもり　たかし（同）
手をのべてたんぽゝすてし橋の人　諾人（同）
蒲公英の綿吹き上る草の中　不棲魚（同）
たんぽゝや一天玉の如くなり　たかし（續ホトトギス）
蒲公英や一座々々の花盛　泊雲（同）
たんぽゝを頸輪に飾り供の犬　諾人（同）
たんぽゝの綿のまぶしきゆくへかな　九二緒（同）
風の來てたんぽゝ絮をはなしけり　漾人（同）
たんぽゝの花のいよ／＼黄なるかな　虛子（句集虛子）
蒲公英のほゝけて飛ぶを追ふ雀　同（續ホトトギス）

土筆(つくし)

つくづくし　つくしんぼ　筆(ふで)の花(はな)　土筆野(つくしの)　土筆摘む　土筆(つくし)和(あへ)

古書校註

【山之井】つくづくしは、おほく筆にとりなしていひ侍る。又はかまきる、ほゝくるともいへり。つくづくし摘むにさへ、ほうしひくと名のたつとうたひ侍れば、法師のえんもあめるにや。

【滑稽雜談】毛吹草に云、天花菜。（大和本草に云、和品、土筆。國俗の名づくる所也。春初より其の花先づ生ず。莖立ちて、苗の生ずるが如し。苗にも非ず。其の鋒筆形の如し。是其の花也。節々皮有りて之を包む。俗に袴と云ふ。花は莖ともに早く枯れ、苗は後に生ず。杉菜と云ふ。葉は杉の如し。馬好みて食ふ。此の草、本草及び救荒本草に載せず。羣書に於て亦未だ之を見ず。根土中に深く入る。其の乾きたるを、外醫之を用う。金瘡の深くして、藥力の徹し難きに加へ用ふ。○或は云、天花菜、つくづくしなり。）舊信之を異む。孰れか是なるを知らず。毛吹草に有り。既に之を載す。又據あるか。古歌にも筆津花とよめり。土筆の名出所未詳。

季題解説 杉菜の胞子莖である。日當りの宜い畦や土堤や芝原など、いたるところに生える。頭の先は筆のやうな形をして、一節毎にしやか／＼した黒い袴のやうな皮（これを袴といふ）をつけてゐる。土に在るときは、頭からこの袴が重なり合つてかぶさつてゐる。だん／＼伸びてゆくと、莖の一節々々の間が一二寸の間隔になる、その莖は薄肉色をしてゐる。長けてくると、筆のやうな頭もがら／＼に透き通つてほほけてしまふ。食法は、土から出たての頭の堅いときは吸ものに用ゐたり、又御飯に炊き込む。非常な甘味を持つてをり、濃厚な味のものである。茹でて三杯酢にもする。梅干と一しよに煮る方法もある。［參照］杉菜

例句

土筆

つく／＼したけたは誰も手にあはず　來山（いまみや艸）
見盜りの先に立けりつく／＼し　丈草（丈草發句集）
野ねずみのこれを喰らんつく／＼し　其角（五元集）
黒胡麻でこゝをあへぬか土筆　同（同）
すご／＼と摘むやつまずや土筆　同（五元集拾遺）
つく／＼しほうけては日の影ぼうし　召波（春泥發句集）
土筆經木のかゝる河邊哉　同（同）
日をもつて計ふ盛や土筆　也有（羅葉集）
千代もつむ杖をや國につく／＼し　同（同）
道の記に假の栞やつく／＼し　几董（井華集）
ふせ柴の十日たちしをつく／＼し　白雄（白雄句集）
おもひ入る蛙や摘んつく／＼し　巢兆（曾波可理）
つく／＼し凪の小松もうらやまず　乙二（をのゝえ草稿）
村雨や川をへだてゝつく／＼し　甫盛（蕉尾琴）
撰分ん蓬の中のつく／＼し　眠虹（文車）
つく／＼し摘々行けば寺の庭　野梅（我庵）
あだし野に春も更行土筆哉　白堂（[illegible]陽島）
女ばかり土筆摘み居る野は淺し　子規（子規句集）

不可得庵る

佛を話す土筆の袴剝きながら　同（同）
麻生田にいまだ殘し土筆　同（同）
古草にうす日たゆたふ土筆かな　我鬼（ホトトギス）
膝つけばしめり居る草土筆摘む　みどり女（同）

嵯峨寺百萬之墓

お六とばかりの世の名よ土筆　フクスケ（同）
桶水に浮きて輕さよ土筆　溫亭（同）
土筆屑流れて迅し舟に還る　千路（同）
まゝ事の飯もおさいも土筆かな　立子（同）

みなすはゐ風疲かな土筆とり　清三郎（同　）
つくしんぼ再び小さき侭にして　一壺（續ホトトギス）
白魚茶屋用てつくしつむ藝者かな　清三郎（同　）

薊（あざみ）　花薊（はなあざみ）　まゆつくり

古書校註

【山之井】鬼あざみは、とつてかまふが事にいひたてゝ、おとろしくいひなし侍りし。

【滑稽雜談】此の花婦人の眉作の筆に似たり。俗呼んで名とす。一說に、大薊は葉の上に白斑點有り。故に虎薊・猫薊の名有り。小薊は斑點無し。異と爲す。

【年浪草】本草綱目に曰、大薊・小薊。○蘇頌が曰、小薊は處々之有り。俗に青刺薊と名づく。二月苗を生じ、二三寸の時、根を併せて菜と作して茹食ふ。甚だ美也。四月高さ尺餘。刺心中に多し。花頭を出す。紅藍の花の如くにして青紫色なり。北人呼びて、千針草と爲す。大薊、苗根相似て、たゞ肥大なるのみ。

季題解說　菊科に屬し、稍々水濕ある原野に自生する多年生草本である。三月新苗を生じ、春の末生長すれば高さ尺餘、更に高いものでは六七尺に達するものもある。葉は通常無柄で不整なる羽狀に分裂し、緣邊には非常に尖銳な刺があり、手を觸れることが出來ない程である。葉柄・莖にも亦刺が多い。梢上分岐して紫色の大形な頭狀花序を生じ、常に下垂する特徵がある。一箇の花序は數百の筒狀花を有し、花後白色の冠毛を有する種子を生ずる。花の形が婦人の用ふる眉刷毛に似てゐるところから、眉作り又は眉はきと呼ばれる。嫩苗は食用に供し、又藥用にもなる。薊には多くの種類がある。普通あざみといふのは、のあざみのことである。春から咲くが、しかし薊の多くの種類のものは夏から秋に花を著ける。

姬薊・苦芙　緣邊に刺毛を有するが稍々軟い。八九月の頃、梢葉腋上に長い小枝を出し、多花を著ける。

大薊　往時の舶來に係る品種であるといふ。葉形、缺刻深く、大波紋をなして、一見鰭樣の觀があるので大鰭薊とも云はれる。葉の肋脈白く、脈に沿ふ白斑がある。

羯鼓薊　觀賞用として培養する。葉は廣卵形で、基部は稍々心臟形をなし、緣邊鈍鋸齒を有し、花は淡紅色を呈する。

鬼薊・山薊　高さ六七尺にも達するものがある。葉は硬くて尖端の刺毛は剛直する。秋日一枝に多數著生するところの紫紅色の頭狀花を穗狀に配列する。

富士薊　多く富士山に產するのでこの名がある。日光その他の山地にもある。葉は普通の薊より大きく且つ厚く、刺毛は硬い。八九月頃三尺ばかり

に生長し、帶黑紫色の頭狀花を迹側側向に生ず。富士山地方ではこの根を取り、食用にし、須走牛蒡と稱す。花は非常に大きく立派である。濱薊。地獄薊　海邊の砂地に自生する。葉は肥厚且つ光澤があり、刺毛は鋭い。秋、稍〻大形の筒狀花を開く。白色花と淡紅紫色のものと二種ある。何れも根が長くて牛蒡の如く、濱牛蒡とも云はれる。食用にしてなかなか美味であるといふ。〔[illegible]〕夏―夏薊等。

【例句】

薊

花は其のあにもみえけり鬼（[illegible]）薊　芭蕉（續山井）
石原やくねりしまゝの花あざみ　白雄（白雄句集）
世をいとふ心薊を愛すかな　子規（子規句集）
下萌に一とかたまりの薊かな　茁帖（懸葵）
薊吹く、大同江の渚かな　紅女（ホトトギス）
比叡のあざみ浪花の水によみがへれ　よりに（同）
馬と心合はず耕す薊かな　暮情（同）
母に隱し濡草履干す花薊　南蠻寺（同）
林泉にたけて暮春の薊かな　活刀（同）
たくましき薊に鎌を當てにけり　のぼる（續ホトトギス）
濃薊に足揃へをかためけり　莉花女（同）
みちのくに笠山あり花薊　奈王（同）
大原みちすこしたどりぬ花薊　いはほ（同）
必ずや薊の花に虻のゐる　虚子（句集虛子）

櫻草（さくらさう）　プリムラ

【古書校註】

【滑稽雜談】大和本草に曰、和品。櫻草。三月紫花を開く。櫻花に似たり。又白色あり、淺紅色・黃色あり。高き事一尺餘に過ぎず。葉は蘿蔔に似て小なり。花は錢大の如し。寒暑を畏る。又九輪草あり、七輪草あり、此の類也。陰地を好む。(一)私云、(二)俳書に櫻草の外に、七重花・九輪草共云ひ、二種とせり。此の者一種三名也。三物莖・葉・花各一也。其の葩の形色櫻花に似たる故、櫻草と云ふ。又心の內より一莖を出し、莖に花を開きて重々也。故に七重花・九輪草の名侍るか。又二種と云ふ說、猶、考ふ可し。

【年浪草】此の種、九輪草の屬に非ず。九輪草は溪澗の間山中の水に緣して生ず。櫻草は原野の草地に生ず。今武州豐島村の近野、多く生ず。年々種子自らこぼれて新花を出すこと、凡そ三百種に過ぎたり。好事の者、甚だ愛翫す

註　(一) 其諺の自說。但し、この「一種三名也」の說は誤つてゐる。

【季題解說】花屋の店先に、チューリップやヒアシンスが早くから出たかと思ふと、間もなく櫻草が姿をあらはす。春の草花の最も普及したものの一つ

である。野遊・摘草の頃になると、野生のものを摘みに出掛ける者も多い。以前は荒川のほとりの浮間ヶ原に皆出掛けたもので、櫻草の浮間ヶ原は東京の一名所とされてゐたが、今では採り盡されてしまつて、名所もただ名ばかりとなつてしまつた。現今では埼玉縣浦和在の田島ヶ原が櫻草で有名である。櫻草は庭園にも栽培せられ、その種類は三百種もあるといふことである。〔參照〕九輪草（クリンサウ）

例句

櫻草

我國は草もさくらを咲にけり　一茶（狹蓑集）

さら〱と水そゝぎけり櫻草　みさ子（ホトトギス）

紫になる花のあり櫻草　立子（續ホトトギス）

櫻草の鉢またがねばならぬかな　虚子（同）

參考　さくらさう Primula Sieboldi, Morren. forma spontanea, Takeda.（さくらさう科）原野に自生し、往々庭園に栽培する多年生草本なり、葉は楕圓形にして長柄あり、邊緣は淺く分裂し、裂片低くして毛あり、皆根生す、四月、長さ七八寸の莖を抽きて、其頂端に紅紫色の數花を繖形につく、花冠は盆狀をなし花徑六七分、末五裂す、各裂片はその頭淺く二裂して、宛も櫻の花瓣に似たり、雄蕊五箇筒内にあり、培養せるものは花色花形種々あり。

蘩蔞（はこべ）　鷄腸（はこべ）　百磁草（はこべ）・はこべら　はくべら　みきくさ

季題解說　春七草の一である。「なでしこ」科の越年生草本で、庭にでも路傍にでも原つぱにでも見られる。莖は數寸から一尺餘に及び、地上に近い部分は地の上をはひ、上の方は起き上つて枝わかれをしてゐる。側面に細毛があり、葉は對生し、卵圓形、よく小鳥や兎の餌などに摘んで食はせるのを見る。花は三四月頃咲く。小さな白い花で、花梗があり、五蕚、花びらは深く中央のきれこんだもの五瓣。「うしはこべ」「みやまはこべ」「あをはこべ」「つるはこべ」「えぞはこべ」「しこたんはこべ」「おほやまはこべ」「さははこべ」「はまはこべ」等、皆大同小異の同科植物である。〔參照〕新年―蘩蔞へ

例句

蘩蔞

カナリヤの餌に束ねたるはこべかな　子規（子規句集）

はこべ草畠の溝に一ぱいに　夏山（ホトトギス）

蘩蔞　蘩蔞を踏ん張り食ふよ籠の雛　魚村（ホトトギス）
雛鳥の引張り合へるはこべかな　かつ女（同）
なか〳〵につきぬはこべや鶏の春　不鈞（同）
日當りやはこべ掛けたる小鳥籠　東岡（同）
蘩蔞に札立てゝあり百花園　風竹（續ホトトギス）

參考　はこべ Stellaria media, Cyr.（なでしこ科）隨處に多く生ずる越年生草本にして、春の七草の一なり、莖の長さ數寸乃至一尺餘、莖は下部偃臥し、上部枝を分つ、側面に一道の毛あり、葉は對生し、卵圓形にして、下部のものは葉柄あり、春時、白花を開く、花は花梗を有し、五萼、二深裂せる五瓣、十雄蕊、一子房あり、花柱は三。

九輪草（くりんさう）　九階草（くかいさう）　七階草（しちかいさう）　七重草（なゝへぐさ）

古書校註　【年浪草】和漢三才圖會に曰、山萵苣、俗に九輪草と云ふ。救荒本草に云、山萵苣、此に云ふ九輪草か。萵苣の葉に似て扁く、邊りに細き鋸齒有りて、葉の脚窄く、葉の心、莖淡紫なり。三四月莖を抽んでて小花を開く。櫻草の花に似て、略ゝ大なり。莖の圍に生ず。八瓣各々一樣にして車輪の如し。梢に至りて此の如し。七層或は九層、宛然、浮屠の九輪に似たり。故に名づく。紅・白・紫の三種有り。子を結ぶ、茶褐色なり。云々。京師の人是を七重草と謂ふ。雜談抄に櫻草の種と爲るは誤れり。

季題解説　櫻草科の多年生草本で、山間の濕地に生ずる。葉も花のつき方も、大體普通の「さくらさう」と大同小異である。栽培して觀賞される。葉は長橢圓形で數枚根元に簇り、その中から一尺ばかり花莖が抽ん出て、その尖に紅色の櫻の花のやうな小花が簇生する。花の群は輪生してつぎつぎとのび重なり、七重・九重となり、五重塔の九輪に似るといふので、九輪草といひ、又京都では七重草といふさうである。本邦の櫻草のうちで一番大きいものの一つである。（參照）櫻草（サクラサウ）

例句　九輪草　飛石に殘る伽藍や九輪草　竹茂（類題發句集）

參考　くりんさう Primula japonica A. Gray.（さくらさう科）山間の濕地に自生し若くは園養せらるゝ多年生草本なり、葉は長橢圓形をなして數葉根生し、邊緣に細鋸齒あり、葉柄を有しその下部紅色を呈す、五月頃葉間に尺餘の莖を抽き層をなして紅色の花を輪生す、每花小梗を有し花冠は櫻草に似たり、本邦櫻草中の最大なるものなり。

洲濱草（すはまさう）　三角草（みすみさう）　雪割草（ゆきわりさう）

季題解説　毛茛科に屬し、本州中北部の山野に自生する多年生の草本で、往

往觀賞用として栽培せられる。草丈け僅かに二三寸、葉は質厚くして深綠色を呈し、大さ一寸ばかりの心臟形をなし、淺く三裂する。近緣種にその裂片の先端の鋭尖なものがある。これをみすみさうと稱する。早春數莖を抽いて頂端に各一つの白花をつける。花下には三片の苞があり、萼片は披針形又は卵狀披針形で、六箇乃至九箇あり、中に莓樣に集つた子房と多雄蕊とがある。花は通常白色であるが、又淡紫淡紅色のものもある。花後新葉が出るが、舊葉は久しく殘つた後枯れる。

春日早く雪のあるうちに花が開くので、俗に雪割草とも呼ばれ、新春に梅・福壽草等と配して鉢植ゑとし、床飾りなどにされることも洽く人の知る所である。

翁草（おきなぐさ）　白頭翁（はくとうをう）　うばがしら　しやぐまさいこ　ぜがひさう

【季題解說】毛莨科に屬し、山野に多く生ずる多年生草本である。莖の高さ五寸乃至一尺に及び、根葉は重羽狀に分裂し、上部に二箇の總苞が葉の如くに花莖をかこんでつく。四五月頃、六片からなる花を傾け開く。外部は白毛を以て蔽はれ、内部は平滑で紅紫色である。これは皆萼片で、この花には花瓣はない。花後雌蕊花柱は成長して恰も老翁、銀髮を被むる狀を呈する。これその名ある所以である。芽出しの頃は雪白にして美しい。日を逐うて綠色となる。庭園に栽植して頗る趣あるものである。有毒植物であるが、春の莖葉を採取して乾燥し、煎じて飲めば藥用になるといふ。（因に、翁草の名は菊・松等の異名にも用ひられ、又白頭翁は椋鳥の漢名でもある。）【參照】秋　翁草（ヲキナグサ）

【參考】おきなぐさ　Anemone cernua, Thunb.（うまのあしがた科）
山野に多き多年生草本なり、莖の高さ五寸乃至一尺根葉は重羽狀に分裂し、上部にある葉（總苞）は、二箇ありて無柄、細く分裂す、四五月の頃有色の六萼片より成れる暗赤紫色の一花を頷下す、花の外部は白毛を以て蔽はるれど、内部は平滑なり、花瓣はなく花後雌蕊花柱は成長して、恰も老翁が銀髮を被むれるに似たり、由つてこの名あり。

一輪草（いちりんさう）　一夏草（いちげさう）

【季題解說】毛莨科に屬し、山野の乾地に自生する多年生草本である。莖の高さ七八寸位、葉は莖上葉と根葉とがあり、根葉は二回三出複葉をなし、總苞（花梗の基部に輪生して葉狀をなすもの）は二個あつて柄を有し、各深く分裂する。四五月の頃、總苞の中心に二三寸ばかりの一花梗をぬいて、一花を開くのである。白色で背面に淡紫紅暈があり、ちよつと梅の花に似てゐる。この五片の花は、實は花瓣ではなく萼片なのである。同種に二輪草と稱するものがある。【參照】二輪草（ニリンサウ）

二輪草（にりんさう）　がしやうさう

季題解説　毛莨科に屬し、山野の陰地に自生する高さ三寸ばかりの多年生草本である。葉は掌狀に深く裂けてゐる。長い葉柄を具へて地下莖から叢生する。花莖は複葉の間から抽き出て、頂に通常二箇又は三箇の長い花梗を有つ白色の花をつける。花の下に根葉のやうに裂けた總苞がある。その總苞の間から多く二輪の花を生ずるので、二輪草と呼ばれるのである。この花は花瓣がなく、白色の花瓣は實は萼片なのである。花は四月頃咲く。有毒植物である。〔參照〕一輪草（イチリンサウ）

春蘭（しゆんらん）　ほくり　ほくろ

古書校註　【年浪草】花彙に曰、報春先（ホクリ）秘傳、花鏡（ホクロ）、山中多く生ず。一根叢生す。葉長さ一二尺、冬を歴て凋まず。形短き芒に似て厚く勁し。嫩綠色なり。冬中箭を發し、數籜苞をなす。紅白色。二三月に至りて幹の長さ數寸、梢に當りて花苞中より出で、たゞ一花五出、青黄色。形建蘭花に似て、瓣やゝ濶く、頗る香氣あり。此の物蘭譜に出づ。獨頭蘭、又弱脚蘭・春蘭と名づく。花葉ともに建蘭の如くにして、葉短く立たずしてなびく。霜雪をも恐れず。山中往々に之有り。（略）宗奭が曰、春芳しき者、春蘭と爲す、色深し。

季題解説　蘭科の常綠草本で、山野に自生するが、觀賞用として庭園にも植ゑられる。一根に叢生し、長さ一二尺許りの芒に似て厚く勁い葉を生ずる。四月中旬、五瓣、青黄色の蘭に似た花を開く。花蕾は苞に包まれてゐる。三月末林の木の芽の吹きかける頃、薄黄青の筆の如き蕾をあげる。花は香氣あり、淸逸の趣深く、昔から春蘭秋菊と駢稱せられてゐる。花を鹽漬けにして櫻湯の如く用ふることが出來る。〔參照〕秋蘭（シウラン）

例句

春蘭

春蘭に松の落葉の深々と　龍子（ホトトギス）
春蘭や雜木未だ日を遮らず　青邨（同）
春蘭や雨をふくみてうすみどり　久女（同）
二株の春蘭花をそむけ居り　鴻一（同）
山越えて春蘭を得し誇かな　あふひ（續ホトトギス）
提げ來る春蘭の葉の靡る　越央子（同）
石のせて春蘭浸しありにけり　綠二（同）
春蘭を掘りに出かけて谷の雪　青邨（同）
春蘭の花に逢ひたる山路かな　つや女（同）

參考　ほくろ　一名　しゆんらん Cymbidium virescens, Lindl.（らん科）山林中に普通なる常綠の多年生草本なり、叢出せる鬚根は粗大にして白色を呈し、球狀鱗莖は密接して横に聯なる、葉は多數一株に叢生し狹

長にして剛く、邊緣粗糙なり、春日根際より花莖を抽き多少香氣ある淡黄綠色の一花を着く、莖は淡細白色の膜質鱗片に包まる。

蠡實（ねぢあやめ）　馬藺（ばりん）　ばれん　ねぢばれん

古書校註

【滑稽雜談】順の和名に、多識篇、加木豆波太と和し、多識今按には馬利牟と云ふ。此の草根を採つて刷毛となす。其の外の所說和產に合せり。只順の和名心得がたし。今世措販の墨刷毛を馬連と云ふ。考ふ可し。

【年浪草】蘇頌圖經に曰、馬藺の葉は薤に似て長く厚し。三月紫碧花を開き、五月子を結び角子を作す。（略）多識篇に曰、蠡實（レイジツ）、今案ずるに馬利（ベリ）牟と稱す。

季題解說　日本內地では觀賞用として庭園等に培養せられるが、鮮滿地方では野草として到る所に自生してゐる。殊に滿洲四洮線鄭家屯から玻璃山迄、約十里ばかりの大平原にはこの草が群落を成し、花時には頗る美觀を呈する。多年生草本で、葉はあやめに似て狹く且つ劍背なく、二・三回捩れたものが多い。ねぢあやめの名ある所以である。春日鞘苞間に、白質淡紫色の線條及び淡紫暈を有する花を開く。花蓋筒は細長く、花瓣は狹い。花を了へた後、狹長で長さ二寸餘、横徑三・四分ある蒴果を著ける。

黄水仙（きずゐせん）

季題解說　春まだ淺い中に、早くも花壇に芽を出すものはこの黄水仙である。三四月頃、濃黄色の花を咲かせる。風でどの花もみな搖れてゐるさまなど特に風情があり、剪つて壺に挿して眺めるのも亦趣が深い。南歐の原產種であつて、葉は細い線狀をなし、日本の水仙より大きい。球根は水仙よりも小さい。〔參照〕冬―水仙（スヰセン）

例句

黄水仙　細長き銀の花瓶や黄水仙　水竹居　（續ホトトギス）

參考　きずゐせん Narcissus Jonquilla, L.（ひがんばな科）南歐の原產にして、庭園に培養し觀賞用に供せらるゝ多年生草本なり、葉は地下の襲重鱗莖より叢生して深綠色を呈し、線狀にして甚だ狹く、殆ど半圓形の横斷面を有す、三四月頃葉中より莖を抽き、頂に少數の佳香ある黄色花を着く、花蓋六裂し下は長き筒をなす、下位子房は花後蒴果を結ぶ。

仙臺萩（せんだいはぎ）・千代萩（せんだいはぎ）

古書校註

【滑稽雜談】大和本草に曰、苜蓿、疑ふらくは仙臺萩なるべし。花も葉も

萩に似て頼かに、花黃也。又大豆の花に似たり。嫩き時食ふべし。○私(一)云、和產の者は實を結ぶの者稀なり。

【篗纑輯】今草花肆にあるもの、花は黃にして豆の花の如く、葉は野萩に似てやはらか也。本草菜蔬に載せたる苜蓿に似たり。但しおほひは、滑菜の類にして、夏秋花を開くと云ふもの、異也。

註 (一) 其諺の自說。

季題解說 萩といふが、花の色は黃で、花期は四月。荳科の多年生草本で高さは三尺位になる。葉は野萩に似て柔かで、花は大豆に似た蝶形をなす。海邊などに見うけられるものである。參照 秋―萩。

參考事考 せんだいはぎ Thermopsis fabacea, DC.（まめ科）海邊に生ずる多年生草本なり、莖は高さ三尺に至り三出葉を互生す、其小葉は楕圓形にして尖り、略同形の大なる托葉あり、四月頃莖梢に深黃色の蝶形花を着け總狀をなす、扁莢は長さ二三寸許、内に老褐色の扁子あり。

若紫（わかむらさき）　紫草（むらさき）

古書校註

【御傘】わか紫、春也。紫とばかりは雜也。

【滑稽雜談】蘇恭の本草に曰、紫草、苗は蘭香に似て、莖赤く節青し。二月花を開く。紫白色なり。實を結ぶ。白色なり。秋月熟す。（略）藻鹽草に云、紫かり、あづまに紫をとるを云ふ也。紫の花吹きたる折に、馬に乘りて野に出で、花を見て、弓の筈にておしへてとらすると云ふ也。○(一)私に云、連俳に若紫を春に用ひ、花紫を秋に用ゆ。然れども本草の如き、二三月花開といへり、和にある者は、秋月花開の儀あるにや。考ふ可し。若紫とは春月の嫩苗をいふにこそ。

【年浪草】和漢三才圖會に言ふ所、蘇恭・時珍の二子が說に據る。按ずるに、紫草、薩州より出る者最も佳なり。○花彙に云、大和地方、多く藝ふ。春種を下ろす。長じて苗高一尺以來、葉謝落金葉に類して小なり。又俗に呼ぶ琉璃草に似たり。差互して生ず。三月花を開く。梢葉の間にあり。其の形狀圓き瓣五出にして、內に蕊鬚なし。又瑠璃草の花に異なる事なし。只其の色白し。又粉紅及び黃色のものあり。下に長蔕ありて是を承く。實を結ぶ。其の形圓尖なり。稜子に類して大なり。秋に

至りて熟す。黄白色なり。

註　（一）其諺の自說・（二）蘇恭本草には二月、時珍本草には三月とあるをいふ。

【季題解說】紫草は紫草科に屬する草本であつて、陸州・豫州・奥州その他各地の山野に自生するが、亦園養もせられる。莖赤く節青く、莖の高さ二尺餘に至り、楕圓形の葉を互生し、夏日梢頭に白色の小花を開く。花に梗無く、花冠五裂し、花皆日に向つて開く。故に朝は東よりし、夕には西より山に登つて掘ると云ふ。秋小粒の果實を結ぶ。根は深紫色の皮部を有し、染料又は藥用に供せられる。この染料は德川時代に最も重要視され、江戸附近に盛に栽培使用された。江戸紫といふのはこれである。雜談抄に「連俳に、若紫を春に用ひ、花紫を秋に用ふ。本草等の說のごとく、二三月花をひらくといへり、和にあるもの、秋月花をひらく、一種あるにや考ふべし。若紫は春月の若苗をいふといへり。」云々。【參照】夏―紫草　秋―花紫

【參考】むらさき Lithospermum erythrorhiron, Sieb. et Zucc.（むらさき科）山野に生ずる多年生草本にして、莖の高さ一二尺、葉は互生し披針形にして尖り全邊にして毛あり、夏日梢頭葉間に白色の小花を開く、花冠は五裂し果實は小粒狀をなし、熟して灰色を呈し、光澤ありて堅し、根を藥用とし又染料として紫色を染むるに用ゐらる、往時は根を採る爲に栽培せしことあり。

纈草　鹿子草　はるをみなへし

【季題解說】敗醬科の多年生草本で、山野の濕地に自生する。莖の高さ一二尺。葉は羽狀複葉をなして對生し、莖葉共に汁液に富み柔軟である。四五月頃、莖頭に細枝が出來て鮮紅色の小花を繖形花序に簇生する。根莖は藥用に供せられる。【參照】秋―女郎花

垣通　連錢草　積雪草　疳取草

【季題解說】その蔓が長く長く這ひまはつて、垣根を通すところからかく稱するのである。脣形科の蔓草で多く路傍に自生す。莖は方形で葉と共に毛茸を有し、一種の烈しい香氣を放つ。葉の形は圓くて粗な鋸齒があり、薄くて深綠色を呈し、長い蔕を以て對生してゐる。冬を經て凋まず、春になると別に苗を出す。直立六七寸になり、仲春各葉腋に脣形花を開く。淡紫にして紫の斑點がある。花を終れば莖は地に伏して蔓となり、長さ一丈餘に達し、籬を通して隣まで延びることがある。これを蔭干にして小兒の疳の藥に用うる所があり、かんとり草の名はこれに基づいてゐる。

【參考】かきどほし　一名　かんとりさう Glechoma hederacea, L.（脣形科）路傍に多き多年生の蔓性草本にして、莖葉一種の香氣を有す、莖は上向し五六寸方形にして鈍鋸齒ある圓き有柄葉を對生す、三四月頃葉腋に

淡紫色の唇形花を開く、花終れば地に臥して蔓となり、長さ一丈許に達することあり、蔭干として小兒の疳の藥となすといふ。

紫羅欄花（あらせいとう）　ストックス

【季題解說】十字花科の多年生草本で、歐洲の原產である。草の丈けは尺餘、葉は披針形で厚ぼつたく、全體に白い毛茸を被つてゐる。晚春の頃、紫がかつた赤い色の四瓣の花を總狀花序に著ける。しかし花の色は種類によつて一樣ではない。花屋の店頭でも、また普通の花圃でも屢々見かける花である。香氣が甚だ高く、よく新らしい詩などにも詠まれて愛賞されてゐる。

【參考】あらせいとう Matthiola incana, R. Br.（十字花科）歐洲原產にして、觀賞用として栽培せらるる多年生草本なり、莖は基部灌木樣を呈し、高さ一尺內外、葉は披針形全邊にして、厚く全面に帶白色の軟毛を有す、四五月頃紫赤色の美花を總狀花序につゞる、果實細くして長し。

節分草（せつぶんさう）　いへにれ

【季題解說】山地樹陰等に生ずる「うまのあしがた」科の多年生草本である。地下に小球形の塊莖があり、莖葉がこれから出て三寸乃至五寸に至り、頂に近く總苞が生ずる。この總苞は深く裂けて羽狀をなし、莖に對して水平にひろがり、その中心から花柄がのびて、五萼片の梅花に似た白い花をつける。特色のある形態の草である。寒明け・節分の頃　莖が出て來るので節分草といふのであらう。

藪蕎麥（やぶそば）

【季題解說】藪麻科の宿根草で山野に自生する。葉は麻又は苧麻に似てをり、莖は圓くして淡紅色を帶びてゐる。節每に三葉を生じ、仲春頃、每葉の間に淡紫色の小さい花が簇り開く、小兒等好んでその花を吸ふ。甘い味がある。

化偸草（えびね）　海老根（えびね）　しゝのくびすの木（き）　山（やま）うばら　鈴（すゞ）ふり草（さう）

【古書校註】【滑稽雜談】大和本草に曰、和名、えびね。花、黃・白・褐色數種あり。もとは山に生す。三月花を開く。これを藜蘆なりと云ふ人あり。非也。○和產の者、本草幷びに三才圖會幷びに解の文よく合せり。篤信は和品と云ふまゝ、藜蘆の說を說かず、藜蘆の非を擧ぐるのみ。此の草黃白にて、微に葡萄色に似たり。故に之を名づく。

【季題解說】蘭科の多年生草本で、山地に自生するが、又庭園にも栽培せられる。莖の高さ一二尺、葉は莖際に生じ、白及に似て厚く、廣くして短い。冬凋み、春新芽が出て、四月頃葉が全く展かない內に、莖を抽いて花を穗狀に綴る。花容もほゞしらんに似てゐる。色は普通帶紫色であるが、淡黃・黃色等の變種もある。その根は節が多く、海老の背に似てゐるので海老根と謂はれる。

【參考】えびね（Calanthe discolor, Lindl.（らん科））山林中に生ずる多年生草本なれども、又庭園に栽培せらる、地下莖は節多くして多數の鬚根を發出す、葉は二三片根生し長橢圓形にして柄あり始め縱襞積あり、四月頃其葉未だ全く開かざるに、葉間に花莖を抽き十箇內外の花を總狀につく、花蓋片全開し、唇瓣は大なり、下に距あり、色は淡褐色にして唇瓣は紫色を帶ぶ、花蓋帶綠色にして唇瓣白き一變種をヤブエビネと呼ぶ。

熊谷草（くまがいさう）　布袋草（ほていさう）　ほろかけぐさ　おほぶくろばな

【季題解說】近頃は鑑賞用として盛んに栽培せられ、早いのは三月の初めから、ヒヤシンスなどと共に花卉店の店頭に現はれるが、これは一見洋種のやうで純粹の日本種であつて、叡山や、高野山や、その他筑波山にでも榛名山にでも自生してゐる。陰濕な樹下を好むやうである。自生のものは小さいが、花卉店で賣つてゐるものは大抵一尺位の高さで、頂邊に扇を開いた樣な形の葉が二枚出て、その中間に二三寸の花梗を抽き出し一つの花が咲いてゐる。花は大形で、淡黃綠色に暗紫色の斑點があり、口を開いて舌を出してゐるやうな恰好をしてゐる。それが如何にも熊谷直實が一の谷の海岸で扇をあげて、海中の敦盛を呼び戻してゐる圖を彷彿せしめる。この花の後に出て來るものに敦盛草といふのがあるが、それと比べてつくづく眺めてゐると、如何にもと微笑まれる。【參照】夏－敦盛草（あつもりさう）

鼠麴草（はつこぐさ）　母子草（ははこぐさ）　ははこ　はうこ　御形蓬　おぎやう

【古書校註】

【滑稽雜談】和國にも、鼠麴草を取りて節供に用ひ來れり。是母子を祝ふの義によれり。いつの比より上巳の節供に艾を用ふるにや。

【年浪草】時珍が曰、鼠麴草、麴は其の花黃にして麴色の如くなるを言ひ、鼠は其の葉の形、鼠耳の如くなるをいふ。又白毛有り。蒙茸之に似たり。故に兆人呼びて茸母と爲す。原野の間、甚だ多し。二月苗を生じ、莖葉柔軟にして、長さ寸許り、白茸、鼠耳の毛の如し。小黃花を開き、穗を成し、細子を結ぶ。○大和本草に曰、鼠麴草、又佛耳草、上巳の日之を用ふ。料に和す。近世多く艾葉を用ふ。

【季題解說】到る所の原野に多い菊科の草本であつて、地方によつて名稱がず

ゐぶん違つてゐる。莖の高さ六七寸から尺餘に達し、柔い白毛のある全邊葉を互生する。秋に苗を生じ、その翌春に黄色の頭狀花を梢上に簇生する。春の七草ではこれをごぎようと云ふ。五月頃摘みとり、團子とか餅の中とかに搗きまぜて食べる。蓬よりうまいと云はれてゐる。一體蓬を草餅に搗くことはあまり古いことではなく、古はこの母子草を入れて搗いたものであるが、それがいつの間にか蓬にとつて代られたのである。餅草の名まで蓬にとられてしまつたのは蓬の香氣にまけたわけであるが、その他の點は母子草とて蓬に劣るわけではない。母子草の葉は痰を除き、體内を調へると云はれ、花は又煙草の代用として喫することも出來るのである。【參照】人事―草餅クサモチ

【參考】ほうこゝさ　一名　おぎやう　はゝこぐさ（Gnaphalium multiceps, Wall.（きく科）原野に多き越年生草本なり、基部より枝を分ちて直立し、高さ六七寸より尺餘に至り、柔き白毛ある倒披針形葉を互生す、春の七草にては、春夏の候、黄色にして細小なる頭狀花を梢上に簇生す、之をオギヤウと稱す、又葉を餅に交へ搗く。

一人靜ひとりしづか　吉野靜よしのしづか　眉掃草まゆはきさう

【季題解説】山の日陰地に生ずる金粟蘭科の多年生草本で、形態が特徴がある。卽ち莖は眞直ぐに伸びて五六寸に及び、紫色で節があり、その頂に四枚の葉が四方に對生し、そのまん中から一本花軸が生じて小花を綴り、一寸餘の穗となる。三四月の候に花が咲き、色は白で、紫の斑點と赤黄色の小點がある。吉野靜とも稱するが、靜御前といふ名前は、義經がこの可憐な花の美しさからつけた名だといふ。これと同じ科のものに、葉のつき方はちがふが、「ひとりしづか」の穗の一本に對し、二本の穗を頂に生ずるふたりしづかといふ草がある。一人靜よりやゝ大きい。【參照】夏―二人靜フタリシヅカ

【例句】

一人靜　一人靜二人靜も草の名や　一葉草（ホトトギス）

【參考】ひとりしづか　一名　まゆはきさう　Chloranthus japonicus Sieb.（ちやらん科）山林陰地に生ずる多年生草本なり、莖直立し高さ五六寸二三節を有し紫色を帶ぶ、莖頂四葉相接して對生し、輪生の觀あり、葉緣に鋸齒あり、春莖頂に一花軸を抽き、白色の花をつゞりて一寸餘の穗をなす、花は對生し、萼瓣なくして裸花をなす、雄蕋一箇、葯隔三絲狀をな

し其兩側のものには各葯の一胞を分擔す、一子房あり。

剪春羅　松本草　まつもとせんのう

季題解説　なでしこ科に屬する多年生草本。剪秋羅即ち仙翁花（秋）の一種で、春咲のものである。觀賞用として庭園に植ゑられるが、濕りがちの藪地などに自生することもある。一體が中仙道・信濃あたりの寒い山地に多い花である。莖は叢生して直立し高さ二尺くらゐ、葉は卵圓披針狀で尖り、無柄で微毛を有する。四月頃一寸あまりの花を開く。花瓣は凹頭をなして邊緣に不齊歯があり、花喉には鱗片を具へてゐる。雄蕋十、花柱五、色は紅色其他白色絞等がある。 參照 夏―巖菲　秋――仙翁花

華鬘草　華鬘牡丹　けまん

古書校註

【滑稽雜談】 花鏡に曰、荷包牡丹、一名魚兒牡丹、根分ち栽う可し。梅雨時亦扦す可し。活く。葉牡丹に似て、三月花を發く。淡紫色、千朶を連り開く。○和にある所、所說のごとし。其の形稍々佛家用ふる所の華縵に似たり。故に之を名づく。

【栞草】 華鬘草、高さ尺餘。葉石龍芮に似て小し。三月莖の端に花を開く。淡紅色、房をなす。其の花莖微長く、華鬘を釣る形に似たり。故に名づく。

季題解説　罌粟科に屬する宿根草本で、觀賞用として栽培せられる。草丈けは二尺ぐらゐである。華鬘は云ふまでもなく佛樣の頭飾で、生花も用ひるが、金銀の造花を綴つたのもある。華鬘草は花の形がそれに似てゐるから附けた名前であることは勿論であるが、レビューに出て來る女王がよく斯ういふ冠を頂いてゐる。陽春の頃に、花卉店の店頭を飾る草花で、葉の形がちよつと牡丹に似てゐるから、華鬘牡丹とも言はれてゐるが、花には全然牡丹の感じはなく、支那の提灯を吊り並べたやうな淡紅色の美しい花が幾つもぶらさがつてゐる。その花の一つ一つを仔細に見てゐると、踊子がスカートをからげて春の踊を踊つてゐるやうな形に見られる。

參考　けまんさう Dicentra spectabilis, DC.（けし科）支那の原産にして觀賞の爲め庭園に栽培する多年生草本なり、莖の高さ凡二尺、葉は數回羽狀に細裂し、最終の裂片は稍々楔形にして、鈍頭の二三粗歯又は小裂片をなす、花は淡紅色にして四月頃稍々傾斜する花軸に總狀をなし下垂し、頗る優美なり、其花冠外二瓣は扁大にして囊狀をなし其尖端反曲し内二瓣は前方に斗出す。

雛菊　長命菊　延命菊　ときしらず　デージー

季題解説　菊科の宿根草本である。葉、花共に小さく、二月頃から咲き初め

て、花期頗る長く數ケ月に亙つて咲いてゐる（長命菊とか、延命菊とかの名ある所以である。ときしらずといふ名も同じ意味からの俗稱であらう）。形菊に似て、色は赤・桃色など種々ある。英國人は特にこの花を愛する。詩人は自然の寵兒又は無邪氣の記號として珍重する。分根又播種する。莖の高さは二三寸、葉は菠薐草に似て稍々細長く、一根から叢葉を簇出する。花梗長く、重瓣の白花黃

蕊、白花白蕊、及び紅花があり、又段々咲といつて、一梗に數花を著けるのもある。雛菊といふ名稱は、葉も花も共に小さく可愛らしいからである。

【季題】秋　菊

【參考】ひなぎく　一名　えんめいぎく　Bellis perennis, L.（きく科）歐洲原産の多年生小草本にして庭園に培養せられ、春より秋頃まで、咲き續く、葉は根生し篦狀倒卵形にして、全邊或は多少鋸歯あり、葉間より高さ二三寸の莖を抽き頂に各一頭狀花を着く、秋の彼岸頃分植するときは、能く分蘖して翌春繁茂し、盛に開花す、紅色、紅紫色、或は白色等種々あり。

東菊（あづまぎく）　吾妻菊（あづまぎく）

【古書校註】

【年浪草】大和本草に曰、秋單の碧花開く。蘂黃にして長し。一莖一花、是亦馬蘭の類と。云々。是は東菊に非ず。東菊は春開く。其の葉、初生は蒲公英の葉に似て鋸齒なく、稍々長じて車前子の葉の如し。莖を抽んづる事六七寸、小葉をつく。莖頭に花を開く。一莖一花、形菊に似て色淡碧色、黃心あれども單葉に非ず。細蘂重り咲けども、單葉の形狀あり。三四月、關東の曠野・路傍に往々之有り。疑ふらくは、雜談抄にいふ高麗菊の別種、是か。

【季題解說】菊科の宿根草本である。山野又は原野などに自生する。莖の高さは七八寸から一尺位に達する。葉の形は稍々「よめな」に似て、初めは狹長披針形で、根際に叢生する。莖、葉共に毛茸がある。四五月頃、莖頂に一輪の頭狀花を開く。色は淡紫色、蕊は黃である。【季題】秋　菊

【參考】あづまぎく　Erigeron dubius, Makino.（きく科）山地原野に生ずる多年生草本にして、莖を根出葉の間に抽くこと七八寸乃至一尺許、披針形葉を互生す、根出葉は長柄ありて、篦狀倒披針形を呈し、疎鋸齒あり、

莖葉共に毛を有す、四五月頃莖頂に一輪の頭狀花を開く、周圍の舌狀花は紫色にして中央の管狀花は黃色を呈す。花戸に呼ぶアヅマギクは此の品にあらず。

金盞花　常春花　長春花　ときしらず

古書校註

【滑稽雜談】 時珍本草に曰、金盞草、一名、長春花。金盞は其の形也。長春は久しく耐ふるを言ふ也。夏月實を結ぶ。（略）和產此の說に少しも違はず。又金錢とも俗にいへり。中華又金錢の名あり、一種にや。長春と稱する者、異なれるあり。

季題解說 金盞花は頗る丈夫な草花で、その名の如く樺色又は淡黃色の盞形をした花をまつ直ぐ空にむけて咲く。一重・八重・万重等あるが、朝ひらき、夕ぐれ來ればしぼむ特性がある。菊科の草本で、雪のある頃から殆ど年中咲く長期の花である。長春花とか、ときしらずとかいはれる所以である。葉はいつも青々とむれ生えて、花も格別美しくはない、極くありふれた花であるが、花のない早春や冬季など、お花活の根じめや、切花等にされる。丈七八寸。庭園畠地などにうゑてある。

九州あたりでは、露地のものも早いのは二月頃から咲いてゐるし、冬は十一月頃迄花を見る。

例句

金盞花　くらがりの花屋の桶の金盞花　青　麥（ホトトギス）

金瘡小草　蛇含草　ぢごくのかまぶた　姫きらん草　鬼きらん草　いしやなかせ

季題解說 唇形科の二年生草本で、路傍又は庭園の周圍などに自生する。莖は地に接して簇がり生じ、決して直立することがない。その狀態が恰も蓋をしたやうだといふところから、地獄の釜の蓋といふ俗稱があるのである。葉は長楕圓形で對生し、鋸齒を有し、毛が生えてゐる。深綠色で紫色を帶ぶ。春日殊に晚春に、葉腋上に濃紫色の可憐な唇形小花を開く。葉の搾り汁は毒蟲の解毒になると云ひ、或る地方では民間藥として膀胱病等にも用ひてゐる。

姫きらん草は形の小さい種類のもの、鬼きらん草は大きい種類のものである。

勿忘草　ミオゾチス

季題解說 紫草科に屬し、歐洲亞細亞等に自生する多年生草本である。莖

葉共に毛茸を有し、概形たびらこ、るりさうに酷似してゐるが稍〻小形である。莖の高さ數寸に達し、上部の葉腋より小枝を分岐し、稍〻長楕圓形で全邊の葉を互生する。春から夏にかけて、淡青紫色で黄色の斑點のある合瓣花を卷繖花序に排列する。花姿可憐、廣く栽培愛玩せられる。花ことばからは、「我を忘れたまふな」の意があることは言ふまでもない。

例句

勿忘草　思出の勿忘草や古聖書　波留女　（ホトトギス）
　　　　船室の勿忘草のなえにけり　眉峰　（續ホトトギス）

參考　わすれなぐさ　Myosotis scorpioides, L.（むらさき科）歐洲原産にして人家に閑養せらるる多年生草本なり、莖の高さ一尺内外、疎に分枝す、葉は披針狀長楕圓形にして互生し無柄にして莖と共に毛あり、春夏の候藍色の花を開く、花は小にして蠍尾狀の穗をなし、萼は小梗より短くして五裂し、花冠又五裂す、本品は Forget-me-not と稱するものにして、ワスレナグサは須らくワスルナグサと稱すべし。

貝母（はいも）の花（はな）

季題解說　編笠百合（あみがさゆり）　母栗（はくり）　はるゆり　はつゆり

百合科に屬する球根植物である。早春梅の咲く頃芽を出し、三月初めから咲きはじめる。莖の高さ一二尺、葉は百合に似て細長く、莖の下方にある葉は一所に四五葉づつ群れてゐるが、上部の方には三枚乃至二枚づつの葉が相對し、葉先をくるりと蔓のやうに卷いてゐるのである。花は丁度釣鐘草を小さくした樣な淡綠黄色の六瓣で、海老茶色のあみ目が這入つてゐる。その貝母の花が葉の間から一花づつ垂れて、莖の下方から次第に莖の頂へ咲き登る。至極上品な感じのよい可憐な花である。春咲く花の中では、福壽草、梅に次いで早く咲くのであるし、百合科中最も早く開花するので、春百合とも初百合とも稱する。編笠百合といふのは色の形から來てをり、又古名ははくりといふのは、根の形が栗に似て、母が子を抱くやうであるといふところから來てゐるとのことである。

參考　ばいも　一名　あみがさゆり　Fritillaria verticillata, Willd. var. Thunbergii, Baker.（ゆり科）支那原産にして稀に閑養する多年生草本なり、莖の高さ一二尺、葉は狹長にして多數互生し、葉頭に在る三葉は、最も狹小にして其先端卷曲す、三四月の頃梢葉腋に短梗を出し、各一

花を下垂す、花蓋は六片より成りて鐘狀を呈し、外面は淡黄綠色にして線條を有し、內面は淡綠の線條に紫色の細點を交へて、網狀を呈す。

片栗の花（かたくりのはな）

かたかごの花　ぶんだいゆり　かたばな　うばゆり

古書校註

【滑稽雜談】　萬葉集見安に云、堅香子、花、山百合の花也。此の根を製してかたくりと云ふ也と。云々。○仙覺抄に云、古點かたかし。櫓木にまがふべければ、堅加古と和しかゆべし。云々。○拾穗抄に云、古點を用ふ可し。云々。○大和本草に云、和品、かたかこ、高さ二尺許り、莖紫色、葉面に黒點有り。花は風車の如く紫色也。比叡山にあり。正月の末花を開く。尤も美也。根の形芋の如し。又蓮根のごとし。若水云、本草紫參、下に出でたる早藕なるべし。其の粉米の如し。味甘く、食ふべし。人を補益すと云ふ。○按ずるに、萬葉集・新撰六帖、皆かたかしとよめり。

季題解說　百合科の多年生草本で、山地の樹陰等に多く生ずる。春のはじめ、姫ぎぼしに似てやゝ長い二枚の葉の間から四五寸の花莖を抽き出し、その先に紫色六瓣の、姫百合に似た可憐な美花が首を傾けて咲く。地下莖は澱粉をふくむので、採つて片栗粉に製する。片栗粉は熱湯で溶いて食べると、胃腸のわるい時整腸の用をなす。萬葉集十九卷に「もののふの八十の少女が汲みまがふ寺井の上のかたかごの花」とある。

北九州地方ではあまりこの花を見かけないが、嘗て大原寂光院に詣でる道すがら、山際にむれ咲いてゐるのを見た。

例句

片栗の花

片栗の花咲く藪を拓きけり　　格　（續ホトトギス）

參考　かたくり Erythronium japonicum, Makino.（ゆり科）。山地に生ずる多年生草本なり、早春地上に二葉を出し其間に細長き花梗をぬくこと五六寸、一箇の紫色の美花を下垂す、六花蓋片より成る、地下深く根莖ありて、多くの澱粉を貯ふ、取りて片栗粉を製す、坊間片栗粉として賣るものはジヤガタライモの澱粉なり。

山慈姑の花（やまくわゐのはな）

さんじこの花　あまな　あまいも　南京水仙　はたくわゐ　むぎくわゐ　まつばゆり

季題解說　百合科の宿根草本で山野に自生する。葉は水仙花のやうで、莖は箭簳に似てゐる。高さ五六寸ばかり、その端に花を開く。三四月頃開花する。白もあり紅もあり黄もある。その色によつて金燈花・銀燈花など區別する。尖に長い鬚があり、花は衆花が簇つて一朶を成し、その狀恰も絲を結んだやうで愛らしい。葉と花とが同時に相見えぬから無義草といふ。根

は葉になる。
この花は安藝・四國地方に多く、畿内には石蒜はあるけれどもこの花はない。

いぬふぐり

【季題解説】早春、梅は咲いても風はまだ寒く、菫も蒲公英も咲かないといふ時分に、田舎道や堤などを歩いてゐると、到るところに瓶、群れ咲いてゐる空色の小さな花が目につく。花は五瓣合著、ほたるぐさの花の色に少し胡粉をまぜたやうな色で、花心がちよつぽり白い。しかしよく見ると、その細かい瓣が白いのと、藍の深いのと、藍から白にぼかしになつたのとが集つて一つの花を成してゐるもののやうである。葉は丸形で緣邊にぎざ／＼があり、大きさは花とほゞ同じくらゐの細かいものである。道端や堤でなくても、園の梅の根方であるとか、植木棚のほとりとか、そんなところに自生してゐるのも、いかにもそのところを得たやうに思はれる。あまり人は氣にとめないが、氣がついて注意しだすと可愛い花である。

【例句】
いぬふぐり
　菫より劣れる花や犬ふぐり　すゝむ（ホトトギス）
　見知りゐし草でありけりいぬふぐり　てい子（同　）

茅花（つばな）

針茅（つばな）　あさぢがはな　茅花野（つばなの）

【古書校註】【滑稽雜談】時珍本草に曰、白茅、三四月白花を開き、穗を成す。○これ等の說、和俗のつばな也。和訓義解に云、つは、ち也、其の草血の附きたるやうに赤き所侍る故、茅をちと訓ず。はなは針也。唱へよろしきによつて、つばなと云ふ。又時珍が說は、茅花也。

【季題解説】ちがやの花のことである。茅萱は原野路傍どこにでも簇り生える莎草科の多年生草本で、三月頃葉のまだ伸びぬ先に、錐のやうに尖つた苞につゝまれた花を生ずる。これを針茅といふ。この苞がほぐれて、中から絹絲のやうな白毛の密生した穗が現はれて一二寸になる。ほゝけたものは遠くからよく見え、風に吹かれて美しい。このまだ苞につゝまれた花は、小供などが野遊の際によく摘んで食べるものである。嚙めばこの嫩い白い花から甘い汁が出て來る。茅花を拔くことは古く萬葉などにも詠まれてゐる。一名秋、白茅。

【例句】
茅花
　野の窪み水うちふくみ茅花生　白雄（白雄句集）
　茅ばなぬく小婿が禿いや痩し　曉臺（曉臺句集）
　夜あらしや光偃す茅花原　同（同　）

川しまやつばな亂れて日は斜　蘭更（半化坊發句集）
小鳥らが餌もありげ也つばな原　乙二（をのゝえ草稿）
野に山に春も老てや茅花の穂　吾仲（類題發句集）
荒れにけり茅針まじりの市の坪　子規（子規句集）
おそろしき迄穗に出る茅花かな　同（同）
川風に蕀吹き落ちし茅花かな　好文木（ホトトギス）
しみ〲と夕潮風や茅花抜く　紀春（同）
大洋や潮ノ岬は茅花原　常山（同）
古利根の河原つばなに來て坐る　峡川（續ホトトギス）

シネラリヤ　サイネリヤ　蕗菊(ふきぎく)　菊蕗(きくぶき)　蕗櫻(ふきざくら)　しゆんとう菊(ぎく)

季題解説 阿弗利加カナリー島の原産で、觀賞用として栽培せられ、園藝部・花店・緣日等でよく鉢物として賣られてゐる。また御苑・公園・邸宅等の花壇にも植込として作られる。花期は晩春初夏の交が最も盛りであるが、溫室で育てられるので、早春から見られる。葉は大きくて皺が多く、多少缺刻があり、稍〻三角形をしてゐる。一尺餘の花莖を抽き、分岐して枝頭に野菊を少し大きくしたやうな綺麗な花を澤山つける。八重咲もあるが、一重なのが多い。瓣は細瓣とやゝ廣瓣のものとがあり、花色は藍紫・碧・紅紫・白・白紫の染分等いろ〱ある。この花は喜悦を表はすものとされてゐる。サイネリアともいふのは、病人の見舞などの場合に「シ」の音を忌んで、殊更にかう呼ばれるのであるといふことである。

例句 シネラリヤ
サイネリヤ机に置いて勤めけり　千風（續ホトトギス）

アネモネ

季題解説 毛莨科の舶來植物である。三色菫等と共に最も普通的な園藝觀賞花である。草の丈けは數寸、葉はにんじんに似てゐる。一つの球根から數莖の花梗を抽き、紅白紫等の罌粟に似た美花を著ける。一重咲もあれば八重咲もある。晩春開花する。

例句 アネモネ
アネモネの鮮かなりし日は暮れぬ　晴江（ホトトギス）
アネモネに春の旱のうす埃　杜泉（同）

フリージア　香雪蘭(かうせつらん)　淺黄水仙(あさぎずゐせん)

季題解説 近時切花や鉢花として一般に愛好される。亞熱帶性球根植物で、弱々しい芽は大抵霜除をして冬を越す。四月中頃になれば菖蒲に似て纖細な葉と、同じ根元から眞直に一本の花軸を抽く。花軸の先きが更に一二寸

ばかり斜に上にのびて、それに數個の蕾を立たせる。一つ一つその下の方の蕾からだんだん大きくなつて、百合のやうな形の花筒花を開いてゆく。色は白もあり、白で淡紅の斑のあるのもあり、黄のもある。高い芳香を持つて居る。その婀娜たる花莖、その楚々たる葉姿、その特有の芳香に、どこか蒲柳の麗人かなどを連想せしめるものがある。

例句

フリージア　フリージアの淡き香にある縫ひづかれ　もと女（續ホトトギス）

フリージアを活けてあり湯氣立てゝあり　つや女（同）

チユーリツプ　鬱金香（うこんかう）

季題解説　百合科に屬する球根植物である。草の丈け一尺許り。葉は一寸萬年青に似てゐる。三四月頃、地から抽んでた葉の間に花莖を眞直に立て、頂きに鐘狀六瓣の美花をつける。單瓣と重瓣とがある。色は紅・紫・黄・白・絞り・斑入りとりどりである。凡そ春の花壇といふ花壇に、この花を見ないことはないといつていいくらゐ普及してゐる。植付けは十月頃。阪神沿線蘆屋邊では二月中旬芽を出し、四月十日頃蕾をあけ、十日くらゐ後に花を開く。

例句

チユーリツプ　編物に倦まず撓まずチユーリツプ　みづほ（ホトトギス）

シクラメン

季題解説　舶來の球根植物。葉は心臟形で裏面が紅紫色である。秋に植付け、早春花を開く。花の色は白・紅・薄紅・絞り等があり、反り返つて咲き、やゝ蝶に似てゐる。立派な花ではあるが、美しいといふよりも、やゝグロテスクな感じを伴ふやうに思はれる。

ヒアシンス　風信子（ふうしんし）

季題解説　喜望峰の原産と稱せられる、百合科の球根植物である。草の丈けは五六寸から一尺足らずである。葉は一寸水仙に似てゐる。早春花莖を抽き、その頂の周圍に、赤紫白等の小花を簇り咲かせる。一つ一つの花の形は、たとへば小さい百合のやうである。強い芳香を有し、園藝植物として普及してゐる。植付けは九月十月頃で、花の開くのは三四月である。

例句

ヒアシンス　春雪の周圍は解けてヒアシンス　温亭（ホトトギス）

園丁や胸に抱き來しヒアシンス　元（同）

鉢に敷くドローンウオークやヒアシンス　李江（同）

園丁の唯行き過ぎぬヒアシンス　盧子（續ホトトギス）

スヰートピー

【季題解説】花も莖葉の狀態等もすべて豌豆と變るところはないが、專ら觀賞用に供せられる舶來の草本であつて、豌豆のやうな大きい莢を結ぶことがないだけの相違がある。花圃に栽ゑられたり、鉢植に作られたりする。

【例句】（スヰートピー）
スヰートピー蔓のばしたる置時計　かな女（ホトトギス）

オキザリス　花酸漿草（はなかたばみ）

【季題解説】酸漿草科の草本で一年生と多年生とある。かたばみに似て大きく、草丈け三四寸に達する。花は紅紫黄白等の種類がある。暮春の頃から開花する。昃ると凋む。花容愛すべきものがある。根の白い部分は食用に供せられるといふ。

金鳳花（きんぽうげ）　毛茛（きんぽうげ）　うまのあしがた

【古書校註】【滑稽雜談】大和本草に曰、毛茛は葉に毛あり、ひかりなし。花黄にして河骨の花に似たり。天灸に用ゐる者也。瘧をきる法、今本邦に草おとしと云ふ。○一說に云、毛茛、花黄白二種あり。白き者を銀鳳花と云ふ。一種千葉なる者を金鳳花と云ふ。按ずるに、和茛を金鳳花と稱す、さも有るべしや。多識篇には毛茛を多加良と和せり。猶考ふべし。

【參考】うまのあしがた Ranunculus acris, L. var. japonicus, Max.（うまのあしがた科）原野に自生多き多年生草本なり、莖葉共に毛茸あり、葉は單葉にして掌狀に分裂す、四五月頃根生葉の間に花莖を抽くこと二尺內外、岐を分ちて其頂に黄色花を開く、花瓣五にして光あり、花中に多雄蕊と多雌蕊とを有す、重瓣を有するものをキンポウゲ（金鳳花）と云ふ。

蕗の薹（ふきのたう）　蕗の芽（ふきのめ）　蕗の花（ふきのはな）　蕗のしうとめ

【古書校註】【年浪草】本朝食鑑に曰、順の和名に、崔禹錫食經に云、蕗の葉葵に似て圓廣、莖煮て之を噉ふ可し。今花莖葉俱に蔬と作し茹ふ可し。冬十二月宿根花を開く。正二月最盛なり。初地に出づる時小蓮の如し。其の苔漸く開く、靑黄なり。外に紫苞有り。土を去ること一二寸、亦小蓮の如し。花開きて重々薹を作す。俗に蕗の薹と號す。相重なる貌を言ふ。

【季題解説】蕗は雪解と共に圓い球のやうな芽を出す。芽の色は淡綠色である。その芽がだん／＼のびて一尺位にもなると（四月十五日頃）花を開い

て四五日で散る。花は白黄色の莖の中に多數の蕊がある。五月頃實を結ぶが、實を結んだ後で毛狀樣の實が飛ぶのである。蕗の薹は摘んで食用に供する。苦味があるので、健胃にも效があると云はれる。蕗の薹の老いたのを蕗の姑といふ。蕗のしうとめとは苦いといふ意をとつて、姑にかけていふ語であるとのことである。

蕗には野生のものもあるが、栽培するには肥料をほどこして秋に根を植ゑかへるのである。花が終つた頃新芽を出す。その葉柄を食するのである。

蕗には又早生蕗（青味を帶びてゐる）。秋田蕗などがある。〔參照〕春の蕗（ハルノフキ）夏—蕗（フキ）

〔例句〕

蕗の薹

蕗のめやうめと尋る一つゞき　浪化（浪化上人發句集）
竹の香や柳を尋ね蕗のたう　其角（五元集）
駒とめて雪見る僧に蕗のたう　同（同）
蕗のとうほうけて人の詠かな　嵐雪（玄峰集）
莟とはなれもしらずよ蕗のとう　蕪村（蕪村集）
元船の水波うらや蕗の薹　太祇（太祇句選）
花活に二寸短し富貴の薹　同（同）
梅生てねじめに折やふきのたう　召波（春泥發句集）
酒いたく呑ておかしや蕗のとう　同（同）
苦き手の其人ゆかし蕗のとう　同（同）
晋人の味噌の酒落や蕗の薹　同（同）
物咎ム伏見の畑や蕗の薹　几董（井華集）
欠盆のよし野もゆかし蕗のとう　同（同）
煎鱅に吹や韭花蕗のとう　同（同）
鹿みちや韮に交りて蕗の薹　白雄（白雄句集）
おもはざる瑞籬（イガキ）の内ぞふきのとう　同（同）
藪かげに延過しけり蕗の薹　闌更（半化坊發句集）
付て居て掃すや背戸の蕗の薹　蒼虬（蒼虬翁發句集）
鹿も來る寺のくるりや蕗の塔　孤桐（新選）
傘さして蕗の薹剪る女かな　蜻蛉（新俳句）
鹿垣も繕はず門邊蕗の薹　桃村（懸葵）

塵取に入れて戻りぬ蕗の薹　野風呂（ホトトギス）
老の身に長かりし冬や蕗の薹　豫人（同）
蕗の薹塊がくれ出てゐたり　たけし（同）
爐のはたや串にさしたる蕗の薹　清谷（同）
道ばたの義經神社蕗の薹　風生（同）
姑と早なりにけり蕗の薹　蚊杖（續ホトトギス）
蕗の薹ふみてゆきゝや善き隣　久女（同）
夙くくれし志やな蕗の薹　虚子（句集虚子）

【參考】ふき Petasites japonicus, Miq.（きく科）多年生草本にして雌雄別株なり、往々圃に作らる、莖は極めて短く地上に出でず、葉は根生し葉柄は長さ一二尺許にして、上部に圓狀腎臟形の葉面をつく、初春其根莖より花穗を生じ、大なる鱗狀苞を有す、之を蕗の薹と稱す、花色は雄花は黄白色、雌花は白色、共に冠毛あり、花梗は漸次に伸長し、雌花は花後長さ一尺餘に至る、葉柄幷に嫩穗を食用とす。本種を款冬とするは非なり。

春の蕗（はるのふき）

【季題解説】早春、蕗の薹が花を開く頃になると、すつかり冬の間に消えてしまつたり、或はいぢけてしまつたりした蕗に新らしい芽が萌えはじめ、赤茶けた小さな葉がだん／＼に開いて錢葉となる。蕗の薹の呆けつくして蕗の姑となる時分には、青々と蕗が茂り莖も伸びて、摘んで食膳を賑はすことが出來るやうになる。夏になると、莖が硬くて香りも低くなるが、この春の蕗は柔かくて香も高い。【參照】蕗の薹（フキノトウ）、夏―蕗（フキ）

蓬（よもぎ）　艾草（がいさう）　餅草（もちぐさ）　も草（ぐさ）　やき草（ぐさ）　さしも草（ぐさ）　蓬生（よもぎふ）

【季題解説】菊科の多年生草本で、山野いたるところに見られる。早春嫩葉が萌え出でて、夏秋の候花をつけ、冬枯れてしまふ。葉は互生し、羽狀に甚しく裂け、裏面には白毛を密生して居るので、葉の裏表の色がはつきりと異る。この嫩葉は摘んで茹でて團子となし、乾燥して保存し、又はこれを混ぜて草餅をつくる。薹の立つた成長した葉は乾して石臼で搗き碎き、灸の艾をつくる。陰暦三月三日にとつて作つた艾を上等とし、江州膽吹山・日光山下等、艾の有名な産地である。【參照】牡蒿（ヲトコヨモギ）

【例句】

蓬

裏門の寺に逢着す蓬かな　蕪村（蕪村句集）
蓬の矢餅にする比首途かな　也有（蘿葉集）
餅になる蓬や痲の手もからず　同（同）
枯艸の中の艾のみどりかな　初子（同人）
蓼の骨殘る中洲の艾かな　苔水（同）

蓬

雨の中蓬を摘むや片手傘　萬戸（ホトトギス）
日仰げばさすがに淋し蓬摘　草郎（同）
道端に蓬摘む野を通りけり　たけし（同）
蓬籠とりて座蒲團すゝめけり　田蚊死（同）
吹くからにひれふす風の蓬摘む　茅舍（同）
手拭をかむり出る戸や蓬摘　群橘（同）
多摩の家ゆでし蓬の淺しあり　俳小星（同）
來初めたる大和波多野の蓬賣　亨女（續ホトトギス）
堤防に富士はかくれて蓬摘　湯雨（同）

【參考】よもぎ Artemisia vulgaris, L. var. indica, Maxim.（きく科）山野に普通の多年生草本なり、莖の高さ二三尺に達し、葉は互生し、羽狀に分裂して、裏面に白毛を密生す、香氣あり、夏秋の候、莖梢の枝上に淡褐色小形の頭狀花を穗狀に綴る、春日新苗を採り、草餅の料となす、故にモチグサの方言あり、又艾を製するに用ふ。本種を蓬とするは非なり。

鹹蓬　しほよもぎ　松菜（まつな）

【季題解説】鹽蓬ともいはるゝ通り、鹹水の汀に自生する一年生の草本であるが、栽培もせられないではない。葉は深綠色、針狀で、松の葉の如くである。春の嫩葉を茹で、浸しものまたは汁の實として食用に供する。

【參考】まつな Suaeda glauca, Bunge.（あかざ科）潮水の入り來る砂場に自生する一年生草本なり、莖の高さ三尺に達し枝を分つ、葉は狹長にして一寸餘に及び鮮綠色を呈し、多數莖上に着きて頗る美なり、夏秋の候穗狀をなして綠色の小花を枝梢上につく、五蕚片、五雄蕊あり、果實は宿存せる蕚に擁せらる、春日嫩葉を食ふべし。

牡蒿（をとこよもぎ）

【季題解説】山野に自生する多年生草本である。高さ一二尺。葉は普通のよもぎによく似てゐるが、葉のうら白くなく、形も葉の綠色も、蓬よりずつと猛々しく逞しくて、その名の如く男性的な感じのよもぎである。夏秋の頃、梢頭に、かはらよもぎに似て褐色の小頭狀花を穗なりにつゞる。牡蒿にはみやまをとこよもぎ・ほそばをとこよもぎ等の種類がある。牡蒿をとこよもぎを「蒿蕎（オハギ）」と言つてゐる本もあるが、牡蒿はをはぎとは全然違ふ。「をはぎ」又は「莵芽子（ウハギ）」は共に嫁菜の古名で、萬葉等にもよまれてゐるもの。をはぎと牡蒿を全然切離したいと思ふ。【參照】蓬（よもぎ）　嫁菜（よめな）

【參考】をとこよもぎ Artemisia japonica, Thunb.（きく科）ヨモギに等しく、山野に生ずる多年生草本なり、莖の高さ二三尺、葉は互生し、楔形を呈し、本狹く全邊をなし、末廣くして尖銳缺刻をなす、梢葉は小に

して全邊のもの多し、秋時梢頭に多數の小形頭狀花を穗狀につゞる、淡褐色にして、カハラヨモギの花に似たり。

嫁菜（よめな）　莵芽子（うはぎ）　蒿薺（をはぎ）　よめがはぎ

古書校註

【山之井】よめがはぎは、かの中よからぬ俗語によりて、しうとめごのつみかなぐり、ひきむしるなどもいひ、又しるのこのつまになるとも。

【滑稽雜談】俗に嫁が萩と云ふ。名義未だ考へず。按ずるに、古歌に、をはぎといふものならし。蓋し本草に云ふ拖娘蒿の一名に似かよふところ侍る。秋間に菊花をひらく、又菊菜と呼べり。

【年浪草】本朝食鑑に曰、雞腸草、原野・庭園・下濕の地に多く生ず。二三月苗を生じ、葉は蓍蒿に似て、稍長大、色深青、莖は紫色を帶ぶ。四五月小莖有りて、五出の小紫花を開く。野菊・旋覆の如し。○庖厨本草に、和名抄を引きて、薺蒿の別名と爲す。諸說紛々として、其の佳きを知らず。よめがはぎ・をはぎ・よめな、三名一物か。

よめな。（略）俗に、はぎとも云ふ。秋に至つて花を開く。菊花の如し。單葉にして藥大也。其の色白きが如くにして、黃紫を帶びたりと。云々。今俗に野菊の黃花なるを山菊と云ふ。莪蒿を野菊と云ふ。薺蒿。和に云ふ所の薺とおなじ類也。陶弘景が本草の說にも、薺の類ならし　其の類甚だ多し、といへり。歌にも、七草の內とも外ざまとも聞ゆ。又云、蘿蒿はよめが萩　と云ふ。按ずるに、俗に云ふよめが萩は、古き歌に詠ぜるをはぎと心得べきか。猶考ふべし。

【栞草】時珍曰、二月莖を生ず。葉食ふべし。野圃家園に分つことを用ひずして叢生す。香氣あり。秋花をひらく、野菊に似たり。○よめがはぎ、よめな同物なるべし。をはぎは似たれども別なり。薺蒿（ヲハギ）。（略）崔禹食經・狀芥草（ヨモギ）に似て香ばし。羹となしてこれを食ふ。

季題解說　菊科の宿根草で、田野にどこにでも見られる。春になるとこの芽が地上に萌え出で、莖が一二尺に伸び、秋になると菊花に似た淡紫の小花を開く。葉は披針形で互生し、粗い鋸齒を有し、葉脈は下部の三脈やゝ明かである。春この若い葉を摘んで、煠でては嫁菜飯或は浸しものとし、食膳に供せられる。菊に似た輕い香氣がある。秋、野菊といふもののうちに

は、いろ〳〵この種屬の植物が混同され、この嫁菜も野菊の一に數へられてゐるやうである。〔[illegible]〕牡蒿註

【例句】

嫁菜　春の野に落馬せよとて嫁菜かな　也有（蘿葉集）
嫁菜つむわらべの中の媼かな　文惠（ホトトギス）
炊きあげてうすきみどりや嫁菜飯　久女（同　）

【參考者】よめな Aster indicus L.（きく科）田野に普通なる多年生草本なり、莖の高さ一二尺綠色にして殆ど平滑なり、葉は互生し、披針形にして、粗鋸齒を有し、光澤せず、下部の三脈やゝ認むべし。秋日梢上數枝頭に各一個の頭狀花を着く、帶藍紫色にして冠毛なし、春日其嫩葉を取り、煠でゝ之を食す。馬蘭は本種の漢名にして之れをコンギクとするは非なり。

萵苣（ちさ）

苣（ちさ）　ちしや　かきぢさ

【古書摘註】

【滑稽雜談】　和訓義解に云、其の根、餘菜より長少さし。略して、ちさと稱す。

唐苣。（略）和に云ふ唐苣・雉の尾など稱する者ならし。白苣、又薹あり。皆夏也。

川苣。澤苣。（略）和產又小流水邊に生ず、故に川苣と稱す。多識篇には、水苦蕒、加波知左と訓ず。然れども本草を披閱するに、王不留行の說、和產にあたらず。此の者、春月嫩苗を採りて酢菜とす。

【菜草】　二月彼岸に種を下ろす。三四月に苗を生ず。葉を採る。蔬として食ふに足る。五月黃花を開く。初めて綻びたる野菊のごとし。一花、子を結ぶ。

【季題比較】　菊科の越年生草本で、廣く菜園に栽培せられる。莖の高さ三尺内外、梢に枝を分つ。根生葉は橢圓形、莖生葉は短く、梢葉は底部箭形である。春夏の交、黃色の花を開くが、春未だ花をつけないとき、下葉から缺きとつては食用に供する。一種の香氣があつて生食に適してゐるが、和えたり煮たりもするやうである。下葉を缺かれてひよろりと畠のへりなどにあるのも興深いものである。花の若いのは、刺身のつまなどに最も普通のものである。萵苣には靑い葉のと、赤い葉のとある。赤い葉のは絞つて梅酢の色をつける料に供せられる。〔[illegible]〕水苦蕒（かはぢさ）

【例句】

萵苣　苣のうね藜の徑なりにけり　乙二（松のゝえ草稿）

行春やかゝれ〳〵て苣の丈　文岡（類題發句集）

花烏賊を買ふたびかきて萵苣の丈　楊童（ホトトギス）

【參考】ちさ　一名　ちしや　Lactuca Scariola, L. var. sativa, Bisch.

（きく科）歐洲原産の越年生草本にして、廣く菜園に栽培せらる、莖の高さ三尺内外、梢に枝を分つ、根生葉は橢圓形、莖生葉は短く、梢葉は底部箭形にして莖を抱けり、夏時枝上に黄色の頭狀花を開く、冠毛は軟質にして白色なり、普く葉を食用に供す、葉を漸次に搔き採つて食ふ故にカキヂサとも呼ぶ。

水苦蕒（かはぢさ）　川苣（かはぢさ）　川萵苣（かはぢさ）

【季題解說】玄參科の二年生草本で、好んで流水或は水濕の地に生ずる。ちさといふ名ではあるが、ちさとは種類の違つた草である。莖は圓く柔かく、葉は披針形で對生し、その形かはやなぎに似て薄く、尖らずに細かい鋸齒を有する。寒中には紫色を帶ぶ。春日嫩葉を摘みちさの代りに食用に供する。春の末には高さ一二尺に至り、枝頭及び葉間に三寸許の穗を生じて淡紅色又は淡紫色の總狀の花を開く。その大きさは一分許りである。圓い實を結ぶ。【參照】萵苣（チサ）

菠薐草（はうれんさう）

【古書校註】

【滑稽雜談】冬月より賞するも侍れど、春蔬を以て正とす。和俗の婦女、黑齒の者、是を食せず。錢漿と相反するか、いまだ知らず。ほうれんさうとは、菠薐の訛言、又西國の者なるべし。是和訓にあらず。

【年浪草】此の物、本、西國より出でし僧有り。其の子を將ゐて來る。是頗陵國の種なり。語訛りて菠薐と爲す。本朝食鑑に曰、俗に波宇禮牟と訓ず。此の訓、音の謬か。

【季題解說】藜科（アカザ）の草本で、一根に叢生する。莖の高さ一二尺で葉は互生し、三稜で恰度鏃のやうな形をしてゐる。莖及び根は赤くて美しい。九月に下種したものは冬期の食膳に上ぼすべく、浸しもの、和へものとし、又煮て喰べておいしい。四月頃、薹を抽いて小花を開く。和種洋種の二種類がある。日本ほうれんさうは雌木・雄木とあつて、雄木の花はすかんぽうに似て小さく、雌木には花が咲かず、菱に似た二分ぐらゐの實がなる。西洋はうれん草は、花は日本種に似てゐるが、實は麻に似たものである。菠薐草の中には、吾々の營養に缺くべからざるヴイタミンA・B・C、殊にAを多く含んでゐる。又菠薐草の粉末は食慾亢進劑に用ゐられる。そのエキス

も亦同様である。

【例句】

菠薐草　肥きゝて赤きが悲しはうれん草　　濱人（ホトトギス）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　俄百姓

【参考】 はうれんさう Spinacia oleracea, Mill.（あかざ科）西亜細亜邊の原産にして、廣く栽培せらるゝ一年生或は二年生草本なり、草質柔にして、根は紅色を帯び、莖は直立し高さ二尺内外に達す、葉は互生三角狀卵形にして、基部の兩側に尖部を有す、夏日黄綠色の花を開く、雌雄異株にして雄花は穗をなし、雌花は葉腋に集る、共に小形なり、果實に刺あり、形ち菱の實に似たり、其葉を食用とす。

鶯菜（うぐひな）

【古書校註】【滑稽雜談】これ又、菘菜譜にいふ春菘にして、和俗の云ふ春菜の一種也。鶯菜と稱する者、至つてちひさく、其の苗・茎、黄なる所あり。其の黄を帯ぶる故に、鶯菜と稱するよし也。是、鈴菜の類也。

【年浪草】其の生じて二三寸なる者を採つて蔬と作す。此を鶯菜と號す。此の言ふ心は、鶯の飛啼く時に生ずるか。

【季題解説】 四五月頃、小松菜の三寸内外に成長したものを引いて、盛んに市中に出すが、それは小松菜とはいはず鶯菜と呼ばれてゐる。小松菜の五分か一寸ぐらゐなものは、摘み菜として八百屋に出るが、春から初夏にかけては、専ら鶯菜として市に出す目的で栽培される。その後は五・六寸くらゐに成長させ、小松菜として商はれ、更に薹を立たせて「のぼり菜」と稱し、漬菜にされる。要するに鶯菜といふのは、小松菜の或る期節、或る成長程度のものに對し與へられた別名に外ならない。鶯菜は播種から二十日くらゐで採取する程になる。畑には藁や麥稈など敷いて、跳土を防ぐ向もある。葉は一株に三・四枚ついて居り、莖は細くて一寸くらゐ、葉は二寸くらゐの細い橢圓形をなし、緣邊はなだらかで光澤がある。主として雜煮の青味・お浸し・胡麻和・味噌汁などに用ひられる。柔かで灰汁がなく、味に癖を持たないので喜ばれる。それから京菜（水菜）や、蕪の三寸くらゐな若い頃を、鶯菜といつてゐる地方もある。【参照】三月菜（サングワツナ）

【例句】

鶯菜　それ一種で野邊の宿かせ鶯菜　　宗因（梅翁宗因發句集）
　　　摘そへよ膳のむかひの鶯菜　　白雄（白雄句集）

水菜（みづな）

京菜（きやうな）　水入菜（みづいりな）　水灌菜（みづかけな）　浮菜（うきな）　絲菜（いとな）　千條菜（せんすぢな）　壬生菜（みぶな）

【古書校註】【滑稽雜談】多識篇に云、菘（シヤウ）、今按ずるに、宇幾那。○和名又、うきなと

は、此の者水田に植ゑて水に浮ぶの義なるべし、是俗に云ふ水菜也。此の種今餘國になし、山城國洛南九條の産を第一とせり。今世においても、禁裏・院中・公方家なんどへも獻るよし也。雍州府志に曰、勢田判官が家領九條に在り。每年水菜を臺に載せ、梅花を其の上に挿して、禁裏・院中に獻ず。

【年浪草】 水入菜は洛の近郊畦間に水を貯へて以て滋養する者、水入菜と號す。莖葉甚だ柔脆、味美也。以て洛の野珍と爲す。

季題解説 白く細い莖が叢生し、葉は端が尖つて缺刻がある。全體に軟く味も淡白でうまい。京都近郊で畦の間に水を貯へて作るのが名高い。早春之を市場に出す。水灌菜は富士山麓の瑞穗・福地・明見の三村が主な産地で、この地方では八月中旬に播種するものと、十月中旬に播種するものとあるが、普通食用として專ら賞美せられるものは後者である。これは到る處にある清冽な湧水を菜の二三寸位に伸びた頃から、寒明け三十日後まで間斷なくどんどん灌け流しに灌けつづけて作るのである。肥料は播種の際一度やるだけで、その後は全くやらないのが特色の一つである。肥料を用ひないで水だけで育つから水入菜とも言ひ、山城壬生村が有名な產地であつたので、それから轉訛してみづなと言ひならして居り、東京では京都から產するといふので京菜と呼んでゐる。 **參照** みづな

例句

水菜　水菜積んで水たらし行く車かな　青岳（同　人）

みづな

赤車使者(みづな)　みづ　うはばみ草

季題解説 溪谷の濕地に生ずる多年生草本である。莖一尺ばかり、葉に淡綠色、鋸齒を有し、互生する。四五月頃葉腋に淡黃綠色の花を開く。東北地方では莖を摘み、茹でて、ひたしものとして食する。一寸風味がある。

參照 水菜

例句

西鉛温泉

みづな　でゆの主みづといふ菜を土產(つと)にくれし　虛子（ホトトギス）

莖立(くくだち)　くきだち

古書校註

【滑稽雜談】 蘇頌が圖經に曰、蕪菁、夏心を食ふ。又之を薹子と謂ふ。○此の說、和に云ふ莖立なり。所說は夏といへども、和產また春月に薹を起す。古來より春に許用せり。

【栞草】 【本朝食鑑】 莖立は久久多知と訓ず。蔓菁也。春二三月に至りて、莖肥大、高く立ちて薹をなす。

季題解説 春三四月の頃、蕪菁や菜類が花を咲かうとして、薹を高くぬきい

でることをいふ。つまり苔をつけた莖をのびたたせることをいふのである。
特に芸薹の一種である菁菜の莖をいふといふ說もあるが、大根・菜類すべての莖の立つのを廣義に解した方がよいと思ふ。德川時代の類聚名物考には「今江戸の俗にはくき立菜ともしんたち菜等いへり云々」の記事がある。又同書によれば、萬葉に云ふ「佐野のくくだち」といふのは、下野國佐野の名產といふわけではなく、「しの原や佐野のくくだちさかなとて旅ゆく人をしひとどめばや」といふ萬葉の歌から、普通の菜の薹をかく稱へただけであるといふ。

例句

莖立

莖だちに春の地勢を見する哉　白雄（白雄句集）
井のもとや莖だち摘ん寺泊　同（同）
莖だちや五條あたりは安もの　百里（其袋）
くゝだちや花も咲さで折て居る　松舟（類題發句集）
蕪一つ畝にころげて莖立てる　泊雲（ホトトギス）

芥菜（からしな）　青芥（あをがらし）　菜芥（なからし）

古書校註

【菜草】〔本朝食鑑〕 菘に似て柔毛あり。葉深青なるものを青芥と云ふ。これ常に用ふるところの芥なり。

季題解說 十字花科に屬し、葉はあぶらなに似てゐるが、鋸齒細かく皺が多い。四月頃に黃色の花をつける。葉に辛味があり、鹽漬とし又煮て食用に供せられる。種子は調味料のからしとなる。青芥といふのはその葉の深綠なる一種である。

參考資料 からしな　一名　ながらし Brassica cernua, Hemsl.（十字花科）蓋し支那原產、通常多く栽培せらるゝ越年生草本なり、高さ四五尺に達す、葉は缺刻及齒牙を有し、葉面常に皺縮して白色を帶び、多少粗糙なり、花は黃色總狀にして四月頃開き小にして花瓣稍ゝ幅狹し、果實は瘦長なる長角にして、種子は黃色、辛味あり、これを粉末にして芥子と稱する辛味料とす、又藥用に用ゐらる。

三月菜（さんぐわつな）

古書校註

【滑稽雜談】 大和本草に曰、晚菜（オツナ）あり、其の葉の色深青にして光あり、三月に薹出づ。他菘よりをそく、終に味勝れざれども、久しく有りてよし。（略）此の者、（一） おほくは羹とならず、只俎と爲して食する也。

註 （一）「此の者」以下は、其著の自說

季題解說 早春蒔いて、三四月頃わかい中に引ぬいて食用に供する菜類の

稱。そだちの早い鶯菜などの類である。(尤も鶯菜については、鶯菜といふ菜の別種があるわけでなく、小松菜を鶯の鳴く頃摘みとる故に名づけるのであるといふ説がある。) 参照 鶯菜(ウグヒスナ)

例句 三月菜　よし野出て又珍らしや三月菜　蕪村 (新五百題)

三月大根(さんぐわつだいこん)　二年子大根(にねんこだいこん)　春大根(はるだいこ)

古書校註

【滑稽雜談】 江陰縣志に曰、蘆菔一種、暮春の時之有り。形細長し。味鬆脆也。名づけて楊花蘆菔と云ふ。○大和本草に曰、今按ずるに、楊花蘿蔔、これ三月大根と稱する者なるべし。

【年浪草】 和漢三才圖會に曰、春に至りても亦葉を採りて食ふ可き者を、三月大根と名づく。

季題解説 大根の一種であつて、秋蒔いて翌年の三四月頃收穫する大根である。二年越しであるから二年子大根ともいふ。普通の大根より味も劣り、細く短いけれど、普通の大根が薹だち、絶える頃であるから、大根おろしや漬物に珍重される。 参照 野大根(ノダイコン)　掘入大根(ホリイレダイコン)　冬―大根(ケイコン)

野大根(のだいこん)　秦野大根(はたのだいこん)　細根大根(ほそねだいこん)

古書校註

【年浪草】 大和本草に曰、野蘿蔔。救荒本草に、平陸に生ず。蔓菁に匪ず。蘆菔の如し。之を求むるに難からず。云々。　今按ずるに、西土の小大根、相州の波多野是なり。別物一類なり。江戸に多く出づ。共に野圃に生ず。○雜談抄に、野大根を自然薯漬とす。誤れるにや。

季題解説 大根の一種であつて、根も細く葉も小さい種類である。田野に自生する大根であるとも云ひ、あまりはつきりしないが、普通には相模邊で秦野大根又は秦越大根とか云ひ、西國で小大根とか細根大根とか云ふのがこれだと云はれてゐる。 参照 三月大根(サンガツダイコン)　冬―大根(ケイコン)

例句 野大根　掘捨てあとでひらふや野大根　蒼虬 (蒼虬翁發句集)

掘入大根(ほりいれだいこん)　掘入(ほいれ)　活大根(いけだいこん)

古書校註

【年浪草】 和漢三才圖會に曰、其の根の株見(アラハ)れて地上に在る者を、上出(アガリ)と名づく。冬月多く之を食ふ。根の地上に見れざる者を、掘入と名づく。正二月之を食ふ。云々。　關東に此の種なし。蘆菔の別種也。

【季題解説】大根の一種であつて、根が地上に上らずに深く地中に隠れてゐるものを云ふ。二三月頃に採る。関東にはこの種のものがなく、京都附近に多く栽培せられるといふことである。【参照】三月大根（サングワツダイコン）　冬—大根（ダイコン）

獨活（うど）　土當歸（うど）　芽獨活（めうど）　山獨活（やまうど）　もやし獨活（うど）

【古書校註】

【滑稽雑談】和訓うとは、うごくの轉語也。此の者、和國にも黄・紫の両種あり。山州葛川より出づる者、青うして黄を帯び、尾州より産して名護屋獨活と稱する者、紫色也。此の外諸國より産多し。

【年浪草】本草別録に曰、此の草風を得て搖れず。風無ければ自ら動く。故に獨搖草と名づく。

【季題解説】五加科植物であつて山中に自生するが、又多く培養せられる。大形の多年生草本で、莖の高さ四五尺に達する。葉は二回羽狀複葉で大形である。夏秋の候白色の小花を複繖形狀に排列する。春三月芽を出す時、籾ぬか・土等を寄せ軟化せしめる。山に生ずる山獨活は、大體普通の獨活と同一であるが、この方が香が高い。食用に供するのはもやしうどなどと云つてゐる。又根を水に浸して乾燥せしめ、これを煎用すれば、痾氣及び頭痛に效があると云はれる。【季題】石刀柏（ウド）（マツバ）　夏—獨活の花（ウドノハナ）　秋—獨活の實（ウドノミ）

【例句】

獨活

里人を相まつところや獨活蕨　宗因（西翁宗因発句集）
雪間より薄紫の芽獨活哉　芭蕉（蕉草）
香を持て掘おこさるゝ芽うど哉　来山（いまみや艸）
山里の名もなつかしや作り獨活　其角（五元集）
せはしなき身は痩にけり作り獨活　嵐雪（玄峰集）
玉うどの美し苣の早苗の薄緑　杉風（杉風句集）
花よりもなを芽うどの春の紅は　同（同）
なきあともなを鹽梅の芽獨活哉　沾徳（俳諧五子稿）
山獨活に木賃の飯の忘られぬ　太祇（太祇句選）
俎ばしやかづき上ゲしはうどの線　召波（春泥発句集）
うどの香や岨に下駄はく山の兒　白雄（白雄句集）
獨活賣の聲さゆる日や屋敷町　蒼雨（古今句鑑）
山獨活の香もすてられぬ宿り哉　馬光（馬光句集）
薄月の雨夜の底の芽うどかな　小洒（杉の實）
獨活晨りて俄にさむし谷のさま　石鼎（ホトトギス）

雨だれに置かれし獨活の香かな　眉峰（同）
笊の上にのせわたしある長き獨活　花蓑（續ホトトギス）

（以下略）

石刀柏（いつばうど）

季題解說 西洋獨活（せいやうどう） おらんだきじかくし アスパラガス

歐洲原產の百合科、多年生草本である。食用又觀賞用として畑地に栽培される。莖の高さ四五尺に達し、分枝が多い。葉は小形で鱗片狀をなしてゐる。俗に葉と呼ぶのは實は枝である。冬は莖葉が枯れ、春暖と共に發芽し來り、夏日枝上に黃綠色の小花を開く。株の上に數寸の高さに土を盛り、軟白したる嫩芽を食用に供する。肉類と共に煮、又は酢漬として喰べるが、最も滋養に富むと稱せられる。 參照 獨活

例句

石刀柏 うつくしき雪いたゞくや松葉獨活　白泉 (續ホトトギス)

參考 おらんだきじかくし 一名 まつばうど Asparagus officinalis, L. var. altilis, L. (ゆり科) 歐洲の原產にして、畑地に栽培する多年生草本なり、莖の高さ四五尺に達し、分枝多し、葉狀枝は狹細にして絲狀をなし「テンモンドウ」より更に細し、夏日枝上に黃綠色の小花を開く、雌雄株を異にし、雌株は花後球狀紅色の果實を結ぶ、其嫩莖を採りて食用に供す。

春菊（しゆんぎく）

茼蒿（しゆんぎく） しんぎく 高麗菊（かうらいぎく） 菊菜（きくな）

古書校註 【滑稽雜談】或は高麗菊ともいへり。花葉共に茹づる可し。また六月菊として侍る。一名野春菊。葉蘭蒿（ヨメガハギ）に似て、莖の高さは一二尺、花の形茼蒿　如し。淡碧色、三月に開く。是を高麗菊と云ふ說あり。篤信は六月菊は馬蘭の類也と云ふ。

【菜草】俗に云、高麗菊。春菊、春花を開く菊に似たり。故に名づく。同蒿、莖葉を煠（ユ）でゝ食ふ。脆く美也。然れども百菊未だ開かざる時之有り。故に花を賞して蔬とせず。一たび刈りて後、おのづから秧（ワキバ）を生ず。六七月花を開くも亦美也。

季題解說 訛つて「しんぎく」といふ。秋蒔いて春に嫩葉を食膳に上す。浸しもの、和へものとし、又煮てもたべるが香氣があつてうまい。尤も斑猫がつき易いから能く洗つて喰べる必要がある。四月頃花を開く。單瓣の菊

花に似てゐて、黃もあれば白いのもある。胃腸を調へ、風氣を動かし、心氣を滿たすといふので、藥用に供したこともあるといふ。又年中播種して發芽成長するので、無盡草の異名もある。［參照］秋—菊

例句

春菊　春菊や根分もせずに咲出る　布舟（類題發句集）

春菊に身寄少き忌日かな　和香女（ホトトギス）

參考　しゆんぎく（Chrysanthemum coronarium, L. var. spatiosum, Bailey）（きく科）越年生耕作植物なり、莖の高さ二三尺、葉は互生し二回羽狀に深裂し、菊の葉より細く分れて稍ゝ柔軟なり、花は夏日開き、黃色なれども時としては瓣の上部白色のものあり、其頭狀花序は筒狀花の外圍に舌狀花を整列す、春初生の嫩苗を食用に供す。

韮（にら）

かみら　みら　ふたもじ

古書校註

【滑稽雜談】和訓義解に云、にらとは、にはにほひの略、らはきらふの上下略也。其の臭氣嫌ふべき者也。古歌には、くゝみらとは、莖也、みらはにら也。萬葉十四。伎波都久乃乎加能久君美良和禮都賣杼故爾毛乃多奈布西奈等都麻佐彌。（一）仙覺抄に云、くゝみらは莖立ちたる韮也。

【采草】時珍が曰、葉青く翠也。根を以て分つべく、子を以て種うべし。葉の高さ三寸、剪るに日中を忌む。一歲五たび剪るに過ぎず。子を收むるものは、只一たび剪るべし。八月花をひらき叢をなす。九月に子を收む。

註（一）東歌。「きはづくの岡のくゝみら我摘めどこにものたなふせなと摘まさね。」

季題解說　山地に自生することもあるが、普通は畑に栽培されてゐることは人の知る通りである。百合科の多年生球根草本。葉は線形で扁平、綠色で質が柔かである。夏になると白色にほのかな紫を包はした花をつけるが、春の嫩葉は雜炊などに混ぜて煮たり、或は和へて食用に供する。にらといふ名は匂ひ嫌ふの略語であるくらゐで、臭氣が強く、食後の口臭は他人の嫌忌するところであるが、美味であるので好むものが多い。韮は直接その畑に行つて剪つて貰つて買つて來ることが他の野菜より多いやうであるが、興趣もあり、美味でもある。葉の濶く大きいのを大韮といひ、細く狹いのを小韮といふ。一名ふたもじといふのは、葱をひともじといふのに對した名稱である。［參照］蒜ニンニク

【例句】

韮

物あれて韮にかくるゝ烏孤つ　蕪村（全集）

霜あれてにらを刈取翁かな　同（蕪村句集）

喜人見訪

韮剪つて酒借りに行く隣かな　子規（子規句集）

柿の木の幹の黒さや韮の雨　石鼎（ホトトギス）

馬賣りしその夕韮を切りなどす　楊童（同）

破甕を以て墻とす韮の宿　日想子（同）

【参考】にら Alium odorum, L.（ゆり科）山地に自生すれども通常畑に栽培さるる多年生草本なり、葉は線形をなし扁平にして綠色を呈し質柔なり、夏日葉間より綠莖を抽くこと尺餘、莖頂に白色有梗の數十花を着く、葉を食用とす。

蒜（にんにく）　葫（にんにく）　ひる　大蒜（おほびる）　獨子蒜（ひとつびる）

【古書校註】

【滑稽雜談】和訓義解に云、にんにくのにはにほひ也。にくはにくむの下略。其の臭にくみつべし。ににくをにんにくと稱す。上二つ（一）は、皆春蔬とする也。

【栞草】八月種ゑて、春苗を食ふ。夏薹を食ふ。秋種を收む。

註（一）上二つとは、韮と蒜とをさす。

【季題解説】百合科の多年生草本で、畑に栽培されてゐる。地下に大きな鱗莖を有ち、葉は細長く扁平である。初夏花莖を抽いて薄紫色の小花を綴り、花叢間に新芽を生ずる。鱗莖、葉ともに臭氣極めて強いが、仲春の嫩葉は食用に供せられる。またその根は吐血・吐瀉を治し、血液を清淨にし、體を温める效ありとして薬用に供せられる。夏日蒜を食するときは暑氣中りを防ぐと言つて、都鄙共にこれを用ふる習ひがあるが、朝鮮ではキムチ（漬物）に於ける調味として缺くべからざるはもとより、種々の調味料としてなくてはならぬものである。初めて朝鮮の膳に向ふものはこの蒜の香と唐辛子の辛さに驚くのであるが、馴るれば左程にもないらしい。尚朝鮮人は强壯劑として誰しも服用するが、馴れぬ内地人はその口臭に辟易する。近來は鱗莖を刻みアルコールに浸して臭氣を消して服用することが案出されたといふ。冬宿根から

芽を生じ、春日みどりの葉を延べる。【参照】韭・野蒜

【参考】にんにく Allium Scorodoprasum, L. var. viviparum Regel.（ゆり科）畑に栽培する多年生草本なり、地下に大なる鱗莖を有し、葉は細長くして扁し、夏日葉間に花軸を抽きて、白紫色花を繖形に綴り、花間通常珠芽を交へ、全然珠芽のみのものあり、臭氣强き植物なり、地下の鱗莖を食用並に藥用に供す。

野蒜（のびる）　山蒜（やまびる）　根蒜（ねびる）　澤蒜（さはびる）　小蒜（こびる）

【古書校註】【滑稽雜談】時珍本草に云、茖葱は野葱也。山原平地皆之有り、野人皆之を食ふ、白花を開き實を結ぶ。小葱頭の如し。〇これ俗に云ふのびる也。此のもの五葷の隨一也。夏月花實あり。春月は蔬菜となして賞する也。

【季題解説】山野路傍等に自生する百合科の多年生草本である、葉は細長い管狀で微稜がある。葱に似た臭氣があるが、春嫩葉を摘んで食用に供する。春の川べりの雜草の中によく見出すのであるが、實際摘み取つて食用にする人は案外少ないかも知れぬ。夏に一尺許りの莖を抽き、その頂に黑紫色、球狀の小肉芽を生じ、これから淡紫の小さい花を開く。小蒜といふ名稱は大蒜（オホビル）に對するものである。【參照】蒜の

【参考】のびる Allium nipponicum, Fr. et Sav.（ゆり科）山野に自生する多年生草本なり、葉は細長き管狀をなし、微稜を有す、臭氣ネギに似たり、夏日葉間に一二尺の莖を抽き、莖頂に黑紫色の小肉芽を球狀に生じ、之に交りて往々淡紫色花を生ず、地下に白色の鱗莖を有す、食用に供すべし。

胡葱（あさつき）　絲葱（いとねぎ）　千本分葱（せんぼんわけぎ）　せんぶき

【古書校註】【滑稽雜談】和訓義解に云、あさつきとはあさはやせ、やせとあさと通ず。是、やせたきと云ふ心也。〇葱の類すべてきといふ。きたなしの略也。其の臭穢し也。此の者、餘の葱より根莖細くやせたるもの也。

【菜草】時珍が曰、八月種を下ろす。葉葱に似て、根は蒜に似たり。其の味ひ、韭の如くして臭からず。

【季題解説】ねぎ・にら・らつきやう等皆これと類似の百合科の球根植物である。葉は葱に似、根は蒜のやうで、味も匂ひも皆よく似通ふ。地下に大きな鱗莖を有し、夏日葉の間に花がつく。花は繖形で、らつきやう、のびる等に似て、往々花間に珠芽を交ふ。地下莖を食用及び藥用とする。近來肺病の藥として誰も彼もこれを食べるらしい。【參照】冬―葱（ネギ）

【例句】胡葱

胡葱や小野の小町が物このみ　蓼太（蓼太句集）

あさつきやとう結ても女文字　同　（同　）

【参考】　あさつき Allium Ledebourianum, Schult.（ゆり科）山野に自生品ありと雖も、多くは畑地に栽培せらるゝ多年生草本なり、高さ凡一尺餘、地下にラッキヤゥに似て小なる鱗莖を有す、葉は細長くして圓筒狀をなし、淡綠色を呈す、初夏花軸を抽きて淡紫色の花を繖形に開き、稍々球狀を呈す、葉と鱗莖とを食用となすべし。

防風（ばうふう）　濱防風（はまばうふう）　はまにがな

【古書校註】
【滑稽雜談】大和本草に云、和品。濱防風、葉は防風に似て莖紫也。海濱沙地に生ふ。園に植ゑても茂る、芳潔にして味辛く、甘くて美し。二三月に採る。毒なし。
【菜草】其の嫩き時、醋未醬に和して食ふ。極めて口さはやかなり。五月、花をひらき子をむすぶ。

【季題解説】　繖形科の多年生草本である。早春、海邊の淸らかな砂地を歩いてゐると、鬼芹に似たかたい防風の葉が、一葉二葉づゝ砂にはりつくやうにわづかに生ひ出てゐるのを見出す。砂をかきわけると、白い長い莖や紅色の美しい葉柄、黃色を帶びた嫩芽が砂深くひそむのを見る。これを摘んで生のまゝ刺身のツマにしたり、或は茹でて酢に浸して食べると、香氣もよし、誠に美しい感じのよいものである。晩春になると、砂上に莖も葉ものび、やがて一尺五寸位にのびて、夏秋の候、莖の先に白色の小さい白花を（花火線香のやうに）著けはじめる。根は牛蒡の如く、煎じて驅風劑としたり、又味噌漬などにもして食べる。眞正の防風は日本になき藥草である。

【例句】
防風
防風ゆるく吹て青酢漸喰り　杉風（杉風句集）
防風や犬が掘り出す烏賊の舟　一哉（同　人）
防風の砂淸る籠を提げて立つ　十水（ホトトギス）
掘りあげし砂すぐ乾く防風かな　淸三郎（同　）
美しき砂をこぼしぬ防風籠　風生（同　）
砂山にかくれ去りたる防風掘　靑邨（雜ホトトギス）
うちあげし藻屑がくれの防風かな　橙黃子（同　）

靑麥（あをむぎ）　麥靑む（むぎあをむ）

【古書校註】
【年浪草】今式に曰、靑麥は三月也。云々。按ずるに、大小麥凡そ九・十月種を下ろし、冬生じ、春長じて穗を抽きんで、初夏黃熟す。然れば則ち三月穗に出でて、未だ黃熟せざる者、之を靑麥と謂ひつ可きか。

季題解説 大麥・裸麥・小麥等の種類があり、大陸地方には小麥が殊に多い。普通莖の高さ三尺ばかりで、明瞭な節がある。葉は細長くして先端が尖り、下方は鞘狀をなして莖を包んでゐる。五月頃花莖を抽いて二三寸の穗を出し、六月頃黄熟する。青麥とは、この將に穗を出さんとする時の麥であると普通の歳時記には註されてゐるが、しかし麥青むといふ言葉から受ける感じには、葉が漸く繁って眞青に畑を蔽ふやうになった時分の麥の狀態で、必ずしも穗を出すやうに高く伸びきった頃の麥の氣持ではないやうに思はれる。（→（植物）夏―麥、冬―麥の芽など）

例句

青麥

青麥や物に倦く日の夕曉　支朗（たこなみ）
青麥に引く浦風の光りかな　月船（懸葵）
富士晴るゝ原吉原や麥青む　放也（ホトトギス）
風の日に來れば青麥吹かれをり　富士子（續ホトトギス）
青麥に走り穗一つ見ゆるかな　虛子（句集虛子）

種芋（たねいも）　芋種（いもだね）　芋の芽（いものめ）

季題解説 冬を越して春植ゑつけるために貯藏した芋である。もとは里芋の種芋に限っていったのであるが、今は馬鈴薯・長芋・甘藷などの種についてもいふやうになった。

里芋は九月末十月はじめ頃、芋の柄を親芋の首から切り離し、母芋に子芋のついたまゝ掘りおこして置く。これを霜等に侵されず、日の當らない穴倉などに逆さに並べ、淺い土をかぶせ、その上にも同じく並べては土をかぶせして越年させる。翌年三月彼岸頃に、これを穴倉から出して母芋から子芋をとり離し、最良の形の病氣にかからぬものを選んで、日光に半日ばかり當て、路次に巾三四尺の畦をつくって、平面に子芋だけ芋頭を上にして少しづゝの間隔で並べ、肥えた土を覆ひ、三週間後、慈姑のやうな芽が出たら掘りおこして定植する。

馬鈴薯などだと、水一斗に對して石灰二貫目を溶かした液の中に浸した後、乾かし、俵に入れて屋根裏など煙の通ふ温い場所に吊して置く。同じく春三月半ば頃、中形のものを選び、直徑一寸餘のもの、或は大形のものは縦の平切にして切口に木灰を塗り、本畑へ植ゑつける。芽が出ると、二三芽をのこしてあとは剪除する。

長芋・自然薯などは十月中下旬掘り、そのまゝ藁などにつゝみ、なるべく暖かなところに越年させ、四月末四五寸位に切って木灰をぬり、すぐ本畑に植ゑる。どんなに小さく切ってもこれは必ず芽が出るが、小さすぎると收量が減少するので、なるべく長く切る。

甘藷は穴倉に貯藏し、春芽出しを行ひ、苗として本畑に芽だけえぐりとったものを定植する。（→（植物）秋―芋）

例句

種芋　芋種や花のさかりを賣りありく　芭蕉（已が光）
芋の芽や塊ぼかとわかれたる　泊雲（ホトトギス）
種芋と知りつゝ食つてしまひけり　雨意（續ホトトギス）

茗荷竹（めうがだけ）

古書校註

【滑稽雜談】春月、初生の者を蘘荷竹と稱す。末夏、根中の者を茗荷の子と稱す。皆食に充つ。花は夏より秋にいたる。茗荷の花は秋に賦す。以上三季にわたる。又花も夏也と云ふ。考ふ可し。

【年浪草】和漢三才圖會に曰、蘘の莖葉及び竹の葉に似て、嫩き時莖も亦噉ふ可し。俗に茗荷竹と稱す。

季題解説　四月中旬過ぎ、地を抽んでる茗荷の嫩芽のことをいふ。みどり色を帶びたその芽は、まるで竹か生姜の芽のやうに尖つてゐる。匂ひがいいので、吸物やさしみのつまに用ゐる。又市場で早春から賣つてゐる、もやしの茗荷竹は、薄紅色がかつた長い白い莖のものであるが、これは恰度獨活（ウド）を圍ふ樣に籾殻を厚く被せ、藁で周圍を高く圍つて、生えさせたものである。この方が色も美しく瑞々してゐる。しかし四月中旬、地生えの茗荷竹の方が風味がよい樣である。〔參照〕夏ー茗荷の子（めうがのこ）

例句

茗荷竹　茗荷たけ葉生姜の上にたゝんことを　杉風（杉風句集）
古川の藪に殘るや茗荷竹　竹水（淡路嶋）

參考　めうが Zingiber Mioga, Roscoe（めうが科）山地樹陰に自生すれども又畑地に或は屋後に栽培する多年生草本なり、高さ二三尺に達す、葉は二列し披針形にして先端尖り、質軟にして長さ一尺餘に達することあり、地下莖より地面に接して一箇の肥厚せる花穗を出し多數相層りたる苞を有し、夏日苞間より大なる淡黄色の花を出す、花後時として實を結び後開裂す、果皮赤色なり、花穗並に嫩芽を食用とす。

酸模（すいば）

すかんぽ　すいすい　あかぎしぎし

季題解説　春二月頃から、道ばたや畦等の枯草の中に、紫がかつた紅色長卵

形の美しい一陣をその叢生がむれ生えてゐるのを見る。これが即ち酸模であつて蓼科に屬する。春先、たんたん葉が出て莖をぬきんでると、葉の紅みは次第に失せてゆくが、四月初め頃から七八寸位にのびた莖の頂きに小枝をわかち、淡綠に紅みがかつた穗狀の小花をもみつける。花は雌雄異株である。

すいばとぎしぎしは頗るよく似てゐるが、ぎしぎしの方が葉がまつ青で莖も高く、穗狀の花も高くいつぱいもみつけるに反し、すいばの方は紅みがかり一體にやせてゐる。酸模の嫩葉は子供らがすいすいと言つてとつて食べる。又すいばは漬といつて藥用にもする。俗この草の液は疥癬・痔血・吐血・赤痢等に效があるといふ。［參照］ぎしぎし

【參考】すいば 一名 すかんぽ Rumex Acetosa L.（たで科）原野に多き多年生草本にして雌雄異株なり、地下莖は短くして肥厚し黄色にして叢生す、莖は細長にして高く直立し往々紅紫色を呈す、葉は長橢圓形或は披針狀長橢圓形にして底部箭形を呈し根生葉には長柄あり、莖と共に味酸し、初夏莖頂に數枝を分ち、圓錐花序をなし六花蓋片の淡綠色の小花をつゞる、雄花には六雄蕊あり、雌花の花柱紅紫色なり、果實は三片の翅狀をなせる宿存萼に包まる。

虎杖（いたどり） さいたづま

【考證】

【滑稽雜談】清少納言枕草子に曰、いたどりはまして虎のつゑと書きたるとか、杖なくともありぬべき顏つきを云々。○大和物語に曰、ある人のむすめ、虎杖を摘みに出で、うたゝ草のうつくしきにすゝめでけん、明日にまた來るなんど約束して、袋をきせ置きて歸りぬ、行きて明日見れば、一夜の間に葉びろになりて、きのふ見しかたちはなかりければ、袋をとりて歌をよめり。きのふみしさはの虎杖けふははや葉びろになりぬ衣たべ君。是よりさいた妻と云ふか。○八雲御抄には、さいた妻、只春の草也、と侍る。又只草の心ともいふ。歌に、冬來れどなほ霜枯れぬさいた妻こほらぬ水のぬるきあたりは。和名いたどりとは、此の者皮にいとを生す。嗽ふに糸を取る。いとどりを轉じていたどりと云ふ。

【年浪草】虎杖の和名、此のものの皮に糸を生ず、是を嗽ふに糸を取る。糸取を轉じていたどりといふ。○春耕の糸切齒に云、師傳には歌物がたりに、澤の虎杖と契りしゆへ、澤虎杖、共を略していふよし也。

【栞草】これを、さいたづまといふこと、其のもとたしかならず。年浪草に擧げたる說どもおぼつかなし。○虎杖・さいたつま一種二名也。其の萌出づる時をさいたつまといひ、既に長じたるをいたどりと云ふ

註（一）年浪草で糸切齒の說を採用してゐるのに對して、栞草では更科の說を採用してゐるのであろ。

季題解説 蓼科に屬する宿根草で、山野路傍いたるところに自生する。高さは一二尺から五尺位を普通とするが、北海道等では一丈餘に達するものもある。莖は中空で節があり、筍のやうな赤い斑點がある。皮を剝いて生で喰べる。少しく酸味がある。又根は通經劑・痳病藥として煎じ用ひる。葉は卵形で尖り、葉身基部は截形をしてゐる。夏時、葉腋に帶黄白色の小花を穗狀に開く。果實は三稜で、薄い翅のやうな宿存蕚がある「深山いたどり」といふのは深山に自生する種類で、その形は小さい。

例句

虎杖

虎杖を銜へて沙彌や墓掃除　茅舍（ホトトギス）

虎杖や草の中なる石工小屋　木人（同　）

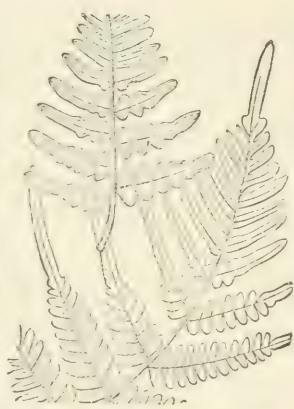
虎杖のむしばめる葉のてんと蟲　虹谷（同　）

虎杖のみち熔岩となつてくる　同（續ホトトギス）

参考 いたどり Polygonum Reynoutria, Makino.（たで科）山野に多き多年生草本なり、雌雄異株にして莖の高さ一二尺乃至三四尺少しく斜上する傾向あり、略ぼ截形の葉底を有する卵狀圓形の有柄葉を互生す、夏日葉腋に白色小花を穗狀に開く、實は三角形にて宿存蕚翅の如し、宿存蕚の紅なるを明月草と云ふ、筍狀をなせる嫩莖を食用とし、地下莖を民間藥とす。イタドリの語原を痛取りの意とするは非なり。

蕨（わらび）

岩根草（いはねぐさ）　山根草（やまねぐさ）　蕨手（わらびで）　銹蕨　早蕨（さわらび）　老蕨（おいわらび）　蕨狩（わらびがり）　蕨汁（わらびじる）

古書校註 【山之井】詩には紫塵と作れるを、俳諧にはあくのはいにもいひなし侍る。又蕨手を折添へて、かゞみ草の簪にも、花のこだちのかうがいにもいひなし、猶かぎわらびの鎰にいひかけて、びくにのあつらへしふる物語、盗人にあづけぬ世のをしへをも取出で侍りし。

【菜草】［本朝食鑑］春の初め先づ生ずるを早蕨と號す。云々。○時珍が曰、二三月芽を生ず。拳曲として、狀小兒の拳の如し。云々。［朗詠］紫の塵嫩き蕨人手を拳る。（註）序に云、この朗詠の句、塵と嫩との二字は莖と嫩との誤のよし下學集に辨じたり。さも有るべきこと也。但し、この誤いとふるし。堀川百首　紫の塵うちはらひ春の野にあさる蕨はものかげにして、とよめり。心得おくべし。

季題解説 水龍骨科に屬する多年生羊齒植物で山野に自生する。ぜんまい

に似て、芽は薄い綿をかぶり、固まつて土から萌えて出て來る。二三寸位に伸びると少しづゝ葉らしい物がほぐれかゝる。そこを折つて來て喰べる。日あたりの宜い芝山などによく萌え出る。大きくなると、ぜんまいと殆ど同じやうに葉が擴つて堅い木の樣な莖になる。この莖で菓子箸とか、煙草盆などがこしらへてある。根莖を碎いて製した蕨繩はよく水に耐へるといふ。調理法は、葉のまだ擴がらない時にとつて來て、桶の中に入れてその上に灰をのせ、熱湯を注いでぴつたり蓋をして置く、さうするとあくが脱けて柔かくなる。これを三杯酢にしたり、だしを入れて味をつけて煮る。淺い春の氣のきいた煮物である。又鹽漬にしたり、干蕨として貯へもする。根から澱粉をとり蕨餅にも製する。早蕨は蕨の芽ざしたばかりのをいふ。蕨の芽は形が小供の拳に似てゐるので、蕨手又は鍵蕨などの言葉がある。―[illegible]　薇（ゼンマイ）

例句

蕨

菜刻みの上手を握る蕨かな　其角（五元集）
狗脊の塵にゑらるゝわらびかな　嵐雪（玄峰集）
早蕨の笙美しや指の跡　支考（蓮二吟集）
早わらびの何かは握る袖の内　同（同）
一尺の蕨の外や松かしは　沾徳（俳諧五子稿）
折もてる蕨しほれて暮遲し　蕪村（蓮句會草稿）
わらび野やいざ物焚ん枯つゝじ　同（蕪村句集）
蕨採て筐にあらふびとりかな　太祇（太祇句選）
奉る花に手ならぬわらびかな　同（同）
野の河や蕨さはしてひたしもの　召波（春泥發句集）
葉になれば京で見しらぬ蕨かな　也有（蘿葉集）
足柄の山に手を出す蕨かな　同（同）
小松野の蕨葉廣に成にけり　几董（井華集）
土を出て市に二寸のわらび哉　同（同）
めぐる日や指の染までわらび折　白雄（白雄句集）
早蕨や一日路ならつくばやま　同（同）
負ふた子に蕨をりては持せける　曉臺（曉臺句集）
わらび折に來ばこよ巷は叩鉦　同（同）
鎌倉の見える山也蕨とる　一茶（享和句帖）
鐵釘のやうな蕨も都哉　同（七番日記）
受折れといふ節のたつ蕨哉　梅室（梅室家集）
寢てゐる歟早蕨つむか岨の人　同（同）
もえ出る蕨を消すな春の雨　俊英（犬子）
行尊の侘しきみねのわらび哉　由之（つゝきの原）
干ならふ蕨の箸や陸の奥　江南（淡路島）

行春や蕨ほうけてつねの草　野水（卯辰）

又來よと蕨うる子を撫にけり　支鳩（新選）

箱根

早わらびや捨松明にやしなはれ　馬光（馬光集）

藤の皮剝いで括りし蕨かな　柳水（同人）

裏悪那の雪田の見ゆ蕨折り　牧童（懸葵）

蕨さげて吉野下りゆく女づれ　虚明（倦鳥）

常よりも遲れし夕餉蕨汁　偉邦（ホトトギス）

干蕨山家の春は盡きにけり　橙黄子（同）

道ばたに早蕨賣るや御室道　素十（同）

留守の戸に干されてありし蕨かな　行野（同）

落ちそめし華嚴の瀧や初蕨　霞風（同）

浸け蕨躍りて筧溢れ居り　夜潮（同）

洋燈つる泊り重ねぬ初蕨　秋櫻子（同）

吸物に薄くれなゐのわらびかな　皷乃女（同）

家づとの蕨を賣れる與瀬の町　青邨（同）

そゞろ出て蕨とるなり老夫婦　茅舍（同）

百穴を箭弓へ廻る蕨山　奇北（同）

眞下なる天龍川や蕨狩　風生（同）

紫に干しあがりたる蕨かな　雀人（續ホトトギス）

早わらびや徑つけかへし鞍馬山　いはほ（同）

尼が居や筧に蕨打たせつゝ　ながし（同）

淺茅ヶ原

鹿の來てみな立ちあがる蕨採　冬男（同）

大雄殿はどかりもなく干蕨　砂村（同）

干蕨たまりたまりし湯治かな　杢堂（同）

塀ぎはに萌立し蕨をそだてけり　久女（同）

早蕨を誰がもたらせし厨かな　虚子（句集虚子）

参考　わらび Pteridium aquilinum, Kuhn.（うらぼし科）山野に自生する多年生羊齒なり、地中に長き根莖を引き、早春之より新葉を出して直立し、其未だ開帳せざるものは上部卷曲し、全面褐色綿様の毛茸を以て被はる、成葉は全形三角様をなし、羽狀に分裂して凡三回に及ぶ、葉緣裏面に折れかへりて子囊群を包む、子囊は赭褐色を呈す、嫩葉を採つて食用とし、根莖より澱粉を取り、蕨粉を製す、之を取りたる後纎に製す。

薇（ぜんまい）

紫蕨（むらさきわらび）　おに蕨（わらび）　いぬ蕨（わらび）　せんまい蕨（わらび）

古書校註

【滑稽雜談】大和本草に云、紫萁はぜんまい也。味苦し。狗脊は別物也。

中夏より來る也。〔…〕或記に、狗脊は俗にいふぜんまいにあらず。他物也。食經に云、紫萁又薇といふ皆、ぜんまいなりと云ふ。いづれか是非をしらず、識者に尋ぬべし。和産往々にあり。只、北越・東國より上品をいだす也。

【年浪草】蕨類圖説ニ曰、狗脊、苗生ニ一叢作、青色、高さ一尺以來花なし。其の葉莖、貫衆に似て細く、其の根黒色、長さ三四寸、岐多く、狗の脊骨の如し。

【季題解説】羊齒科の多年生草本に屬し、蕨の屬である。春四月頃、山路や高燥な原野などを歩いてゐると、薇のうす紫紅色の太い莖がさきをくるりと渦卷き、？字形に二三本或は四五本づつ簇り生えてゐるのを見出すのである。その薇のくるまは、むく犬の毛のやうなうす茶色の綿をかぶつてゐるが、莖がのびて來るに從ひ、綿帽子を脱いで、美しい紅みを帶びた嫩葉がほぐれ初める。薇は大きいのは一尺位に成長する。羊齒に似た羽狀複葉、紅色をした柔い葉を莖高く伸べるのである。嫩葉について綠色の子囊群を出す。薇は嫩芽の開かぬ中に折り採つて、山家ではよく庭などに干し擴げてあるのを見る。干薇は水に浸し、茹でて浸しや煮ものに用ゐるとおいしい。又綿樣の膜は綿に代へて織物の料としたり、手毬の心とする。因に薇を俗に狗脊と書くのは誤の由である。（一三）蕨は

【植物解説】ぜんまい（Osmunda japonica, Thunb.（ぜんまい科）山林原野に自生する多年草本なり、其嫩葉の卷縮する樣わらびに似たり、葉は再羽狀に分裂しつゝ葉柄上に、楔形にして鈍頭又は稍圓頭なる小葉を排列し、小葉は微鋸齒を有す。時常葉に先ちて春日、別に胞子葉を生ず、嫩葉の柄を食用となす。

鶯茸（うぐひすだけ）　彼岸茸（ひがんだけ）

【季題解説】春の彼岸前後、日當りのよい端山の傾斜した小篠原などを搔きわけると、しめじ茸位の大いさの紅い美しい鶯茸が、或は三四本づつ或は簇生しつつあるのを見出すのである。傘の表は鮮紅、傘の裏及び足は黄色であるが、煮ればこの赤も黄も色褪せて、全部白色となる。秋彼岸頃に生えることもあるが、春が主である。紅茸の一種なのであるが、秋の毒紅茸と

遊つて食用に供せられ、醋味噌或ニ酢物などにすると美味である。料理する時は、一度煮出して白色にした上用ひる方がよい。〔参照〕秋—茸

下萌(したもえ)　草萌(くさもえ)　草青(くさあを)む

古書校註

【御傘】下もえ、春也。下萌と計りはせぬ事也。野か原か園山か庭か、是等の文字を入れてするなり。（略）新式に下萌と計り出して、植物に打越を嫌ふとあるは、野か原を入れずしても、下萌と云ふ詞、春に成ると云ふにふかき心有り。草やらん木やらん、何の差別もなく、春に青々生ひ出づる物のあるを興じて、下萌と云ふ詞出来たると見えたり。野か原かに限るとおもふは、末世の小智の分別か。いづくも、大地をはなれたる所なければ、道の傍・岩のはざま・壁のくづれ・山・岸・海・川の邊にも、下萌は有るべきものなるに、野か原かなくてはいはれまじきと云ふ説は、かへりて愚かなる説なれば、誹には、新式のごとく、下萌とばかりもすべき事と相定め侍る者也。此説、疑ひ給ふべからず。

【滑稽雜談】月令曰、孟春の月、草木萌動す。○樂記註に云、屈生は句芒と曰ひ、直生は萌と曰ふ。（略）是則ち歌にも下萌などいへる義也。私に云ふ、下萌は草にあるべからず。猶師説を請ふべし。○續拾　今よりは春になりぬとかげろふの下萌いそぐのべの若草　よみ人しらず。

季題解説

もう冬枯の中から春氣は動いて、草が萌えつゝある。これを下萌といふのである。〔参照〕駒返る草　草の芽　草の若葉　若草

例句

下　萌

下萌もいまだ那須野のさむさかな　惟然（惟然坊句集）
下萌や水仙ひとり立しざり　千代女（千代尼發句集）
下萌や土の裂目の物の色　太祇（太祇句選）
下もえのうちは艾も進かな　也有（蘿葉集）
垣添や猫の寢る程草青む　一茶（七番日記）
ひとはなに憎れ草の青むなり　同（一茶句帖）
まん丸に草青みけり堂の前　同（同）
やす〳〵と萌こむ草や家の内　乙二（松窓乙二發句集）
下萌の野へや汐みつ磯の草　宗春（三韓人）
下萌や寐れはふくる、鹿の腹　買山（春泥句集）
白鷺に萌うつくしき野原哉　闌水（反古衾集）
下萌を催す頃の地震かな　子規（子規句集）
下萌や飛鳥わたりの畑の土　虚明（倦鳥）
下萌の明るき窓に鳥青かな　零餘子（ホトトギス）
下萌に餌を押しつけて鹿の口　釋寺洞（同）
下萌や莖石置きしところより　ながし（同）

病床に上げし面や下萌ゆる　たかし（ホトトギス）
傘干せば地草明るく萌ゆるかな　素鋒（同）
松の梢をねぶる鹿あり草萌ゆる　石鼎（同）
むらがりて萌ゆる草あり籬結ぶ　渓洞（同）
點々と萌ゆる草見てゴルフかな　水竹居（同）
一冬の榻を移すや下萌ゆる　風生（同）
炭がまのめぐりの草の萌え初めぬ　水歩（同）
草萌や女の如くに尉と嫗　遊鷹（同）
閒かにも名草萌ゆる花壇かな　あふひ（同）
下萌ゆるおもひまどかに籠りけり　つや女（續ホトトギス）
下萌や何ともわかずいつくしむ　あい子（同）
下萌ゆとかんばせよする二人かな　烏頭子（同）
下萌えてゐると思うて掃きにけり　子鴨（同）
石一つ抜けしあとあり草萌ゆる　泊雲（同）
草萌や雪解の水にひたりつゝ　手古奈（同）
炭俵敷きあり左右に萌ゆるもの　東子房（同）
舟の棹立てゝありけり草萌ゆる　鴨石（同）
草萌や錦木が下梅が下　虚子（句集　虚子）
草萌えて落葉漸くなかりけり　同（同）

草の芽

名草の芽

季題解説　春萌え出づる諸草の芽をいふ。名草の芽といふのは總て名ある草の芽をいふのである。たとへば菊・朝顔・桔梗・菖蒲・芍藥・百合・芒・萩、蘆、蔦など。**参照**　春の草（ハルノクサ）　若草（ワカクサ）　駒返る草（コマガヘルクサ）　草の若葉（クサノワカバ）　下萌（シタモエ）　木の芽（コノメ）

例句

草の芽

水のほどとく角くみしかきつばた　白雄（白雄句集）
門の草芽出すやいなやむしらるゝ　一茶（一茶句帖）
芽出しから人さす草はなかりけり　同（發句集）
古株の底やもや〳〵薄の芽　子規（子規句集）
病間あり
足の立つうれしさに萩の芽を検す　同（同）
萩の芽に犬ころ愛す小庭かな　同（同）
牡丹の芽ひたぶる霜を恐れけり　同（同）
萱草やこゝに芽をふく忘草　同（同）
草の芽や汚れ休める撰炭婦　月華（ホトトギス）
ともかくも圍して置く草芽かな　田路女（同）
甘草の芽のとび〳〵のひとならび　素十（同）

潤ひて庭の牡丹の芽ぶきけり　沼蘋女（同）
牡丹の芽當麻の塔の影とありぬ　秋櫻子（同）
年々の牡丹の芽や圓照忌　ゝ石（同）
　註　圓照忌は三月九日女賞生九郎翁忌日なり
それ／＼になつかしき名やぼたんの芽　もと女（同）
古株の苔のみどりや牡丹の芽　橙黄子（同）
大池の閑かなる端や菖蒲の芽　みさ子（同）
菖蒲の芽色やはらかく尖りゐし　夢仙（同）
青みどろもたげてかなし菖蒲の芽　素十（同）
藤棚の影もあるなり菖蒲の芽　吉人（同）
さゞなみのよせて隱さう菖蒲の芽　いはほ（同）
見るうちにまろばひろげし草芽かな　躑躅（續ホトトギス）
チューリップ錐芽たちまち葉となりぬ　帆影郎（同）
むらさきの厚き袴やぎぼしの芽　みづほ（同）
葱玉芽吹きて夫婦暮しかな　鏡川（同）
庭荒れて名草の芽のおのがじし　楞童（同）
芽牡丹の既に苔のきざしかな　眼堂（同）
芍藥の芽のほぐれたる明るさよ　立子（同）
二色の菖蒲の芽あり畦に沿ひ　同（同）
菖蒲の芽見てゐるところせゝらげり　あふひ（同）
この池の日に日に青み菖蒲の芽　默禪（同）
やはらかに鋏をなせる菖蒲の芽　秀好（同）
　川　茲
この池の水の滿干や菖蒲の芽　煤六（同）
藍水に染まりてそだつ菖蒲の芽　迷子（同）
百姓家にして別墅かな牡丹の芽　虚子（句集虚子）
野を行きて這入りし茶屋の牡丹の芽　同（續ホトトギス）

ものゝ芽（め）　芽（め）

季題解説 春萌え出るいろ／＼の芽の總稱である。萩の芽とか、菊の芽とか、それ／＼草の芽を指したり、またはやゝ廣く名草の芽といつたりするのに比して、これは最も廣い名稱である。かういふ總括名をもつて表すのが最も適當である場合があることは實作上常に經驗するところであり、また言葉としても整つてゐる。草の芽といつても意味には變りはないが、言葉の感じは必しも同一でない。別に題として掲ぐる要ある所以である。

［參照］芽立ち（メダチ）　草の芽（クサノメ）

例句

ものゝ蕪　物の芽に類相寄せうづくまり　泊雲（ホトトギス）

ものゝ芽

（伊吹に登る）
ものの芽の蓉しくほぐれし峠かな　青邨（ホトトギス）
物芽出て揃ひたる天の眞中かな　たかし（同）
大鐘のひゞきの中の物芽かな　湯雨（同）
文部大[illegible]などと芽生え出り　暮雨（同）
茄子の外大方の芽の出揃へり　里人（同）
青き[illegible]の物芽かな　草田男（ホトトギス）
ものの芽を見て柴折戸を出でにけり　富士子（同）
芽生えして雨のしづくのとまりをり　同（同）
ものの芽はほぐれほぐるゝ朝寝かな　たかし（同）
ものの芽の一つ〳〵にものがたり　夢城（同）
大いなる二葉もたげ[illegible]最中　凡秋（同）
鉢の芽の[illegible]影[illegible]を落さんとす　蜆兒（同）
ものゝ芽のあらはれ出でし大事かな　虚子（句集　虚子）

草の若葉（くさのわかば）　草若葉（くさわかば）

【古書校註】

【年浪草】俳諧活法の書に、正月の部に、若草・新草・初草を出せり。又二月に、草の若葉あり。稍々長じたる心にや。（略）春の草の長くなれる心にや。

【季題解説】諸草の芽が漸く嫩芽となつたのをいふ。樹々の若葉は初夏であるが、草の嫩葉は四月上旬から五月へかけてである。草は單に野外の雑草をはじめ・菊・萬・萩・萱・芒・野菜・などなど名ある草の嫩葉をもふくんでよいと思ふ。若草と草の若葉とはおなじ項に扱はれてゐる書物もあるが、少し感じがちがふ様である。馬琴の栞草を見ると「草の若葉」の項に「鹿文が日本俳諧活法の書に、正月の部に若草、新草、初草を出せり、又二月の部に草の若葉有、稍と長じたる心か」とある。【例句】若草　春の草　駒返る草、草の芽、下萌　夏—若葉

若草（わかくさ）　嫩草（わかくさ）　初草（はつくさ）　新草（にひくさ）　若草野（わかくさの）

【古書校註】

【山之井】わか草は、まだ初春の若ばえなれば、しひて摘めどもかすけなきさま、雪に萌黄つうはじらけしたる気色などもいひなす。

【滑稽雑談】御傘に云、若草、春也。古草に若々生ひ出る也。枯生草といふも同前也。草のかうばしきも春也。新草又同じ。

【季題解説】春の草と殆ど同意。たゞ言葉の感じの相違は、草に對した心の相違を表現する。【例句】春の草、駒返る草、下萌、草の若葉

草の芽（クサノメ）

例句

若草

前髪もまだ若草の匂ひかな　芭蕉（翁草）

若草やきのふの簡見も木綿うり　其角（五元集）

わか草にあれたる駒であらけなき　杉風（杉風句集）

わか草や駒に鞍起もうつくしき　千代女（千代尼句集）

送別

若草や歸り路はその花にまつ　同（同）

若草や尼のあらはるゝ雉の聲　同（新選）

若草ややがて田になるやすめ畑　太祇（太祇句選）

若くさや四角に切し芝の色　同（同）

若草や野へときいたる麥の菌　也有（蘿葉集）

若草やもふなびくかと吹て見る　同（同）

わか草やけふは餅にも枕にも　同（同）

若草やまだ井筒にも脊のたらず　同（同）

やすらひや鬼も能れる若草野　几董（井華集）

若草や菜にむすぶ古すゝき　白雄（白雄句集）

若草の中にこもれしをみなへし　曉臺（曉臺句集）

わかくさやくづれ車の崩れより　同（同）

若草や臼をころがす翁有り　闌更（半化坊發句集）

われに句なし若草みゆる塘哉　士朗（枇杷園句集）

むくむくと若艸はゆれ艸の庵　巣兆（曾波可理）

わか草や鍬のさわりし小笹道　同（同）

若草や山風かこふ垣の内　同（同名所）

わか草に御裾引ずり給ひけり　一茶（旅日記）

草々も若いうちぞよ村雀　同（七番日記）

世につれて菴の草もわかいぞよ　同（同）

わか草にどたどた馬の灸かな　同（同）

わか草ののうのうとする薬ぶり哉　同（同）

かくれ家や日に日に草は若くなる　同（同）

わか草に背中をこする野馬哉　同（同）

若草をむざむざふむや泥わらぢ　同（一茶新集）

若草や北野参りの小供講　同（嘉永版發句集）

若草や野に立る木もないところ　乙二（たのゝえ草稿）

若草や日に日に人のむつまじき　蒼虬（蒼虬翁發句集）

わか草の志賀も過しぬ舟の者　同（同）

わか草のぬくみ通るや一重壁　梅室（梅室家集）

若草に初音かましや朝鳥　野坡（消船）

若草

若草や節賣の傘あそこ爰　子羽（恒誌）
若草の頃習志野を通りけり　子規（子規句集）
春日野や草若くして鹿の糞　同（同）
若草や子供集まりて毬を打つ　同（同）
てら〳〵と若草の上の朝日かな　戯道（新俳句）
若草や本伏せて海高く見る　うしほ（ホトトギス）
若草や日に〳〵濃ゆき三笠山　木風子（同）
若草や並びて鹿のつき來り　白江（同）
若草の利根の堤や垣越に　玉虬（同）
若草に轉べばそこに三笠山　滲子（同）
若草を食べつゝ鹿の鳴いてをり　艷女（續ホトトギス）

春の草(はるのくさ)

春草(しゆんさう)　芳草(はうさう)　草芳し(くさかんばし)

古書校註

【山之井】　春秋の草木に、えもしられぬ名ども侍るを、わざと題などに用ひんは、よからぬわざにや侍らん。さはいへど、又調菜のあいさつ、野遊びの折ふしなど、いともめづらかなるに堪へぬ口すさびなどはいかゞはせん。

【滑稽雜談】　梁武帝纂要に云、春草を弱草・芳草と云ふ。○八雲御抄に云、さいた妻、草の名也。範兼説、春の草と云ふ。○藻鹽草に云、さいたづま、くさの名也。範兼説、春のくさと云ふ。又云、わかく生ひたる草の名也。○私云、(略)すゞめがくれ、(略)是春の草也。草のながくなる心也。

季題解説　春になつて競ひ出た草をいふ。**參照**　若草(ワカクサ)　草の若葉(クサノワカバ)　下萌(シタモエ)　雀隱れ(スズメガクレ)　駒返る草(コマガヘルクサ)　草の芽(クサノメ)

例句

春の草

誰が家の醬油むすふ春の草　鬼貫（鬼貫句選）
春草の姿持たる裾野かな　同（同）
むしつては〳〵捨春の艸　來山（いまみや艸）
はる草の橋をかぎりて酒屋なし　同（續いま宮艸）
草すでに八百屋の軒に芳し　杉風（杉風句集）
里の子や髮に結なす春の草　太祇（太祇句選）
刈ほどはなし摘程の春の草　也有（羅葉集）
一に俵二に又ふまは春の草　同（同）
一色にいろ〳〵艸の青きかな　白雄（白雄句集）
青艸の上につもれる日數かな　曉臺（曉臺句集）
ふうはりと鷺は來にけり春のくさ　士朗（枇杷園句集）
へたと置鍋のめぐりも春の艸　巣兆（曾波可理）
春の草ひきむしりても喰ふべし　成美（成美家集）

よくいねて今朝目にかゝる春の草　同（同）
はや誰か扇すてたるはるの草　同（同）
はるの草心さぶさを抱きけり　同（同）
はる艸によきゆめ見るかはなれ家　乙二（をのゝえ草稿）
春草にそつと置たし我いほり　同（同）
春の草ふむも命の薬かな　梅室（梅室家集）
春の草喰べる限は畳へよき　同（同）
春もはや十色にあまる小草哉　青蘿（新五子稿）
牛の子に角出てうれし春の草　呂杣（ホトトギス）
毛氈に坐りくぼみや春の草　和香女（同）
春草に流れ落ちたる吹矢かな　筑紫郎（同）
消えのこる鹿の寝跡や春の草　源治（同）
春草に横へあるや獨木舟　岬人（同）
芳しき草一掴み椽の上　掠鳥（同）
砂山やほつりほつりと春の草　涼雨（續ホトトギス）
芳草にねころびあひぬ啄木碑　草火（同）
くちなはと見えたるものや春の草　虚子（同）
春の草水車の下に生ひそむる　同（同）

雀隠れ

季題解説　春、草の芽が伸びて、漸く雀の隠れ得るくらゐになつたのをいふ。作例は多くないやうであるが、言葉としては趣が深い。かういふ季題は、名吟が出さへすれば、季題としての生命が長く續くであらうと思はれる。新六帖に「萌えいでし野邊の若草けさみればすゞめがくれにはやなりにけり」といふ歌がある。〔参照〕草の芽　春の草

駒返る草

若返る草　草駒がへる

季題解説　老いてまた若返ることを「こまがへる」といふ。草駒返るとは、冬の間枯れたやうに見ゆる草が、早春になつて大地の底から再び青々と萌え出してわかがへることをいふのである。〔参照〕下萌　春の草　若草　草の若葉　草の芽

古草

季題解説　前年の草が枯れることなしに、若草の中に交つて殘つてゐるのをいふものであらう。〔参照〕若草

例句

古草　古草やはるをりをりは雪の露　曉臺（曉臺句集）

若芝（わかしば）　春の芝（はるのしば）

【季題解説】 芝は蕃殖し易いもので、芝の生へるところには必ず廣い芝生を見る。地肌を見せて枯れがれになつた芝生も、春になつて若芽が出揃うと眞青に毛氈を敷きつめたやうになる。若芝と云へば、おのづからさういふ廣い春の芝生を思はせることになる。若芝の美しさはこれを庭園に取入れて手入を加へる場合に、一層その美しさを發揮する。近代の莊園に若芝はなくてはならぬものとなつてゐる。

【例句】

若芝

若芝の塔の前なる茶店かな　言人（ホトトギス）

若芝に髮結ふ莫蓙を敷きにけり　等子（同）

若芝やそらよりさがり雨の絲　きよたみ（同）

眞中に雀一羽や春の芝　虛子（續ホトトギス）

罌粟の若葉（けしのわかば）　芥子の若葉（けしのわかば）

【古書校註】 【年浪草】 蘇頌圖經に曰、罌粟今處々に之有り、人多く蒔きて花を以て飾と爲す。紅白二種有り、微腥き氣あり、其の實の形餅子の如く、髇箭の頭に似たり。米粒極細なる有り。圃人年を隔てゝ地に糞し、九月子を布く、冬に涉りて春に至り、始めて苗を生ず、極めて繁茂す。云々。是若葉也。採りて蔬と爲す。

【季題解説】 芥子は罌粟科に屬する越年生草本である。葉の形は卵形、長橢圓形、線狀などであつて、或は分裂し且つ鋸齒を具へるものがある。前年九月十五日前後下種したものが、翌年三月頃淡綠色の芽が出て成長する。これを芥子の若葉といふ。この若葉は採つて食用に供する。その後更に二尺三尺と成長し、六月の中旬ころ花が開くが、花の色は深紅、白、淡紅、紫等いろ〳〵ある。蕾は下を向き、花梗長く、花は概ね四瓣で美しくて甚だ散りやすく、一日もたない。芥子の原種は小亞細亞及び波斯であつて、我國に傳來したのは數百年前である。薊頭はけし坊主（芥子坊主）といはれ未熟のときこれから阿片を製する。【參照】夏―罌粟、若葉。

菊の若葉（きくのわかば）　菊の二葉（きくのふたば）

【古書校註】 【年浪草】 本草に蘇頌が曰、初春地に布きて、細苗を生ず、是皆宿根より生ずる者也、又種子は立春種を下ろす。二月驚蟄の節種て、始めて芽を生じ、二候を經て葉始めて分る。○沈莊可が菊譜に曰、春分の前、根中、苗蘗を發出するを以て、手を用ひて枝柯を逐ひ、劈開して、一柯毎に一株を

種う。

【季題解説】 菊の古い（去年の）鉢が、白つぽい茶色の枝を土近くに短かく切られたまゝ、一隅に片寄せられてゐる。そろ〳〵暖かになつて來ると、小さな草が菊の大きな鉢の枝のまはりに萌え出て來る。雜草もあるが、その中に美しい菊の芽が萌え出て、やがて若葉になる。また鉢に限らぬ毎年の菊の花壇などでも、同じやうに萌え出て來る。その色は柔かさうな淡い綠色である。菊の若葉が漸く茂りはじめて來ると、菊の根分をすることになる

【參照】 菊の苗（キクノナヘ）　草の若葉（クサノワカバ）　人事—菊の根分（キクノネワケ）　夏—若葉（ワカバ）　秋—菊（キク）

菊の苗（きくのなへ）

【季題解説】 晩春、根を分けて移植し得る頃の菊の苗を云ふ。菊を分けるには宿より出るものと、種子より出るものと、挿木よりするものとがある。宿から出たものの根分けには、冬至分けと彼岸分けの二種がある。數十本も枝を立てる大作り、六七尺もある懸崖大作り、又は多數の株を作るには冬至分けが必要である。一本立、三本立、又は二三尺の懸崖作なら彼岸分けで結構である。彼岸分けの方が季候がよいので、苗を育てるに樂である。

種子は花によつて多少の遲速はあるが、雨霜を避け日當のよい處に置けば十一、十二、一の三ヶ月間に實つて熟するものである。これをよく蔭干にして、四月上旬にこまかい砂土に蒔くと、一週間位で發芽する。子葉二つの外、本葉が二枚出た時に一本づゝ移植し、その後は宿からのものと同一の育て方でよろしい。

挿芽は五月上旬から中旬までに行ふ。挿芽前、一二回薄水肥を施して苗に勢力をつけ、愈ゝ作業に取掛る前日、殺蟲液を噴霧して挿穗から害蟲を驅除する。挿穗は一寸五分位に、開展葉は凡て短く切縮め、挿した時葉が砂面を覆うて風通しを妨げないやうにする。約三週間すれば充分發根する。直ちに小鉢又は他に移植するがよい。餘り長く苗床に放置するなどは無益有害である。【參照】 菊の若葉（キクノワカバ）　人事—菊の根分（キクノネワケ）　秋—菊（キク）

【例句】

菊の苗　異草もつまぎり捨じ菊の苗　沾德（俳諧五子稿）

難波の庵を立出るとて　いやはかな捨る庵の菊の苗　路通（類題發句集）

殘れるも人にはくれず菊の苗　瓜流（新選）

杉菜（すぎな）

【古書校註】 【年浪草】 大和本草に曰、春月先づ花を生ず。筆の如し。嫩き時喫ふ可し。

佳蔬と爲す。別に營葉を生ず、杉菜と名づく。漢名未詳。

[illegible]　雜草の生ひ茂つた中や、野原の溝川べりやなどには、きつと杉菜は生えてゐる。木賊科の多年生草本であるが、實際木賊の柔かい小さいやうなもので、土筆はその花である。土筆の終つた頃からそろそろ生えはじめる。青みどろを被つたまゝ、菖蒲田に生えてゐるのなどもよくある景色である。杉菜がぼうぼうと繁つたところを見ると、春も終りだといふ感じがいかにも深い。（[illegible]）

土筆ツクシ

例句

杉菜

路々は束ねても散る杉菜かな　治徳（俳諧五子稿）
花訪む杉菜を門のしるべとも　也有（蘿葉集）
杉苗に杉菜生そふあら野哉　白雄（白雄句集）
聞からにしりぬ杉菜は土筆　同（同　）
三囲の鳥居とそだつ杉菜かな　巣兆（曾波可理）
苗松のひとつに育つ杉菜哉　同（同）
一鐵の土塊にある杉菜かな　辰之介（春ホトトギス）

參考　すぎな Equisetum arvense, L.（とくさ科）到る所の荒地に多き宿根草本なり、胞子莖と營養莖との別あり、何れも根莖の節々に生ず、胞子莖は通常ツクシと稱する筆頭狀のものにして、三四月の頃營養莖に先ちて生ず、營養莖は通常スギナと稱せらるゝものにして、多く枝を輪生し退化せる葉を有することトクサに同じ、綠色を呈す、ツクシは採て食用に供せらる。

末黒の芒（すぐろのすすき）　黒生の芒（くろふのすすき）　燒野の芒（やけののすすき）

古書校註　【滑稽雜談】　袖中抄に云、すぐろとは芒の末黒しと云ふ也。萬葉抄云、せきのをすぐろにとは、所の名也。今云、春山の闇といふまでにぞ、所にてはあるべき。すぐろは、すこし末くろきを云ふべきなめり。荻とも薄とも草ともいはで、只すぐろと計りいはん事心得ねど、萬葉の歌はさのみ侍る也。（一）はだれ雪をも只はだれといひ、さゞれ石をもたゞさゞれと讀めり。○拾穗抄に云、堀川院百首、基俊歌、春山のせきをすぐろにかきわけてつめる若菜に淡雪ぞふる、と詠まれたれば、せきのと云ふを用ふべし。○此

の説のごとく、芒の初生も黒き物也。

註（一）萬葉卷八、尾張連の作「春山の開のすぐろに若菜つむ妹が白紐見らくしよしも」

季題解説 早春堤や畦の枯草、枯芒などを焼いた後から、芽ごしらへをして居る芒が、末の方が黒く焦げながら萌えてゐるのをいふ。古く萬葉以來歌に詠まれてゐる。〔参照〕地理—焼野（ヤケノ）　秋—芒（ススキ）

例句

末黒の薄　曉の雨（アメ）やすぐろの薄はら　蕪村（蕪村句集）

髢草（かもじぐさ）　雛草（ひなぐさ）　鬘草

古書校注

【滑稽雑談】 本名未詳、考ふ可し。私云、此の草の形麥門冬に似て、草莖頗か也。又觀音草に似て、稍〻細小也。女兒春月之を採る。髪に結びて壇を組みて之を賞す。故に名づく。

季題解説 禾本科の越年生草で、よく路傍に見られる。莖二、三尺に及び、莖も葉も稍〻紫赤色をしてゐる。晩春初夏に六七寸の穗を抽いて垂れる。穗には長い芒がある。この草は葉がぼさ〳〵してゐて髪結遊びにはならない。東京地方、四國、九州などで一般に髢草と呼んでゐるのは、路傍などによくある草で、美しい綠色（根の方は白い）の幅二分か二分五厘くらゐ、長さ一尺五寸くらゐの細長い葉が、同じ株から髪を振り亂したやうに叢生する草である。葉は手觸りがよくて縦に細く裂ける。晩春、初夏の頃、子守や女の子達がこの草を採つて、根元を揃へて結へ、三寸くらゐのところから葉を細く裂き、毛髪に擬へて島田や銀杏返等に結び、紙の手から簪を掛けたりして遊ぶ。何回も結うてゐる内に、草が馴れて段々結びよくなるといふ。この草は冬でも藁塚の下などに、淺綠色をして散らかつてゐることがある　木の下蔭に生えたのが葉が揃つて、色も美しいさうである　東京邊では雛草とも呼んでゐる。

參考 かもじぐさ Agropyrum semicostatum, Nees.（禾本科）路傍に普通なる越年生草本なり、莖の高さ二三尺、莖葉稍紫赤色を帶び、稍白狀を呈す、葉をもめば一種の香あり、五六月の候穗を抽く、穗は長くして六七寸に達し、小穗は數個の花より成り、長き芒を具ふ、其穗の帶紫色なるをカモジグサと呼び、綠色を呈するものをアヲカモジグサと稱す。

芹（せり）　根白草（ねじろぐさ）　つみまし草（ぐさ）　根芹（ねぜり）　田芹（たぜり）　白芹（しろぜり）　芹田（せりた）

古書校注

【滑稽雑談】 冬月より出で、和俗、嚴寒の間ことに賞翫す　然れども芹は春の部也。和名にせりといふ。其の生ずる事、一所にしげくせまり合ふ也。せまり中略してせりと稱す。異名を根白草、又つみまし草、又惠々と

同じ。

【栞草】源順が曰、水芹、一に水英。水旱及び赤白の二種有り。水芹は水中に生じて根多く、旱芹は平根に生じて根少し。赤芹は味惡くして用ひず。白芹は味美にして常用す。處々の陂澤・田川に多く有り。或は水田・水園にこれを滋養して、四時ともに有りと云ふ。其の莖節稜ありて中空し。其の根細長く、肥えたるものは素麪の如し。春に晩く、其の氣亦芬芳、愛すべし。五月小さき白花を開く。

【解說】繖形科の宿根草で、田や溝のやうな濕潤の地から、否、殆ど水の中から生ひ伸びて來るのが常である。春の七草の一として知られてゐる。秋から新苗を生じ、冬を越えて早春萌えはじめ、春期に最もよく繁る。根生葉が叢生し、莖葉は互生し、重羽狀の複葉や莖は高い香氣を有するので、三葉などと共に早春摘みとつて浸し物などとし食膳に供せられる。初夏に莖を抽き、梢上に小さな複繖形のにんじんの花のやうな花をつける。毒芹、みつばぜり、ばうふう、にんじんなど皆同一科目に屬し、同じやうな香りのある草である。【同】三葉芹など

【例句】

芹

我ためか鶴はみのこす芹の飯　芭蕉（續深川）
我事と鰌の逃し根芹哉　丈草（丈草發句集）
沐ふ鷺芹椛る流れかな　其角（五元集）
うすら氷やはつかに咲る芹の花　同（同）
芹とる翁碧潭に望んでこはいかに　杉風（杉風句集）
これきりに徑盡たり芹の中　蕪村（蕪村句集）
古寺やほうろく捨るせりの中　同（同）
古道にけふは見て置根芹哉　同（新五子稿）
芹の香や摘あらしたる道の泥　太祇（太祇句選）
あふれ越野澤や芹の二番生　几董（井華集）
誰人ぞ芹をさけこむ竹の門　曉臺（曉臺句集）
蛭肥て芹ふしたちぬ日向水　同（同）
芹提て出たりな鷺のすみかより　乙二（をのゝえ草稿）
鷺は放し飼なり芹薺　乙由（麥林集）
芹つみの古菅笠を流しけり　如思（文車）
十錢を得て芹賣の歸りけり　小春（卯辰）

泥鰌逃げて鰕の手長き根芹かな　碧玲瓏（新俳句）
芹摘んで袂の端をぬらしけり　格堂（春夏秋冬）
機窓に芹籠置いて話しけり　零餘子（ホトトギス）
芹摘むや濁の中の濃き濁　濁水（同）
日に透かし見て櫛をさす芹田かな　かな女（同）
朝も早氷らずなりし芹田かな　金蓮花（同）
門川に見ゆる芹摘母らしや　止有（同）
芹の水ふるはして來る目高かな　富女（同）
芹の葉の紫なるも交り居り　吉人（同）
俎に綠の芹の長さかな　星城（同）
利根べりやこぞりて芹の花盛　玉虬（同）
いつとなく濁りし水や芹の花　北湖（同）
あぜ越しに流るゝ水や芹の花　手古奈（續ホトトギス）
芹摘や畦ふみ崩しふみ崩し　斗汐（同）
洗ひたる芹の籠ある噴井かな　陽射（同）
毒芹を捨つれば早き流かな　夢漾（同）
洗ひゐる芹をとられし流かな　くに女（同）
佐保の子のてんでに提げし芹の籠　九園（同）
芹を摘む袂むすんでやりにけり　凡平（同）
芹の水[illegible]く廣くなりにけり　夏山（同）
泥落ちてとけつゝ沈む芹の水　同（句集　虚子）
芹引けば源五郎蟲浮み出し　虚子（續ホトトギス）

植物考

せり Oenanthe stolonifera, DC.（繖形科）水濕の地に自生する宿根草本なり、長き匐枝を引て繁殖し秋より新苗を生じ、冬をへて春最も盛なり、根生葉叢達し、莖葉は互生し、重羽狀複葉にして佳香を有す、夏日莖を抽き一尺内外に達し、梢上に白色の小花を複繖形花序に開く、嫩葉を食用に供す、時に栽培さるゝことあり。

三葉芹（みつばぜり）　みつば

古書校註

【滑稽雜談】救荒本草に曰、野蜀葵、春宿根より生ず、葉は苦蕒の如くにして大也。葉は蜀葵に似て頗く光有り。香味亦た苦蕒に似たり。□大和本草に曰、稻若水、野蜀葵を以て三葉芹とす。春月、莖を取り葉を去り、煎り豆油を和して食ふ。
【栞草】二月苗を生じ、一本叢生して、莖の梢に三葉を附く。今江戸の市中に鬻ぐものは自然に生ずる處に非ず、みな人の作り設くる故、中冬の頃よりあり。

季題解説

山地に自生し、又庭に蔬菜として栽培せられ、殊に近頃、地方で

は農家が温室でもやし栽培をし、白い柔かい莖のものを大量に生産して市場に供給するやうになつた。芹などと同じ繖形科の多年生草本で、高さは一二尺に達し、葉は互生し、三枚づつ集つて葉柄の尖に品の字形について居るので「みつば」といふ。莖も葉も香氣高く、或は浸し物、或は吸物として日常食用に供せられる。花は夏で、小形の複繖形排列をなす。〔参照〕芹

〔例句〕
三葉芹　つみし跡忍ぶやはたに三葉芹　也有（蘿葉集）

山葵（わさび）

土山葵　葉山葵

〔季題解説〕
【滑稽雑談】 大和本草に云、山葵、今按ずるに、辛温發散の性有り。補益すべからず。其の葉賀茂葵に似たり。其の根の形・味、生姜に似たり。故に山葵・山薑の名あり。中華の書に未だ之を見ず。故に漢名は未だ知らず。高山寒き所によろし。里に植うる、土よろしきによるべし。或は云、陰地の岸の側に植うべし。魚毒を殺す。佳品也。○古来より此の者、春の季に用ふ。其の初生の時を云ふ也。總じて蔬菜類は、初生或は嫩苗茹づる可き時を季に用ふる者多し。花實の時を賞せず。これ爾然の理也。此の者夏月花を開くといへり。

【年浪草】 處々山中水近き石間に多く之有り。人家にも亦之を移し種う。二月種を下ろし、三四月苗を生ず。葉蕗及び葵の葉に似て、葉厚く圓し。深青色にして細毛有り。六七月穗を作す。一二三寸細く黄白の花を著く。細き子を結ぶ。其の根、味辛辣、之を鮓し、煎酒に和し截膾を食す。

〔季題解説〕 十字花科の多年生草本であつて、山中溪間にも生じ、又園圃に栽培される。東京近くでは天城山の山葵澤など最も有名である。地下に圓柱狀の地下莖を持ち、根生葉は長柄を有し、大形で圓形、緣邊に不齊の微鋸齒を有してゐる。四月頃、莖、中莖をぬき、莖梢に總狀花序の四瓣の白花が咲く。根莖は辛くて香氣があり、食味の調理として重用される。山葵としての特長はこの調味料にあるが、山葵漬としても賞美せられること、人の知るところである。

〔例句〕
山葵　泥鰌の腕とおもへば土わさび　其角（五元集拾遺）

春わさび蟹か爪木の斧の音　杉風（杉風句集）
山葵ありて俗ならしめず辛キ物　太祇（太祇句選）
蕎麦打テば山葵ありやと夕かな　召波（春泥發句集）
おもしろうわさびに咽ぶ泪かな　同（同　）
山葵酢に肝をねらふや丸炙　几董（井華集）
駿河なる山葵越るや箱根山　巣兆（曾波可理）
よく見れば捨し山葵の芽になりし　成美（成美家集）
頬時雨ゆくりなかりし山葵かな　青畝（ホトトギス）
山葵田の砂に埋めし筧かな　嵐子（同　）

參考　わさび Eutrema Wasabi Maxim.（十字花科）山中溪間に生じ又往々栽培せらるる多年生草本なり、地下に圓柱狀の地下莖を有し、味辛し、根生葉は長柄を有し大形にして圓形を呈し、其緣邊に不齊の微鋸齒を有す、春日葉中莖をぬき莖梢に總狀花をなし白色花をつく、果實は彎曲す、地下莖を辛味料とす。

慈姑（くわゐ）

古書校註

【滑稽雜談】和訓義解に云、くはゐぐりの略也。はゐは物のわかきを云ふ。此の者、味栗に似たる也、○私按ずるに、烏芋は黑くはゐなり。是も慈姑の類也。烏芋は蘭草の如く、其の根子を採りて食ふ。故に黑き蘭を謬りてくはゐと云ふ說侍る。得否を知らず。慈姑諸國に産す。殊に和州は甚だ大也。河州の産至つて細小也。古歌多く詠めり。

【年浪草】本朝食鑑に曰、慈姑。於毛多加と稱す。根を白久和井と稱す。淺き水中に生ず。或は亦之を種う。三月苗を生ず。青き莖にして中空、稜有り。燕尾・箭鏃の如くにして、前尖り後岐く。五月小白花を開き、穗を作す。霜の後、葉枯る。根乃ち顆を結ぶ。小羊魁の如し。冬及び春初、掘りて以て果と爲す。（略）○烏芋。黑久和惠と訓ず。和名、久和井。俗に不登伊と稱するの根也。鳧茈と曰ひ、葧臍と曰ふ。水田湖澤の中に生ず。其の苗三四月土を出づ。一莖枝葉無く、葧心草に似て肥大なり。高さ二三尺、之を刈りて席を造る。其の根白蒻、秋後顆を結ぶ。大にして栗子の如く、臍に聚毛有りて累々として下れり。泥底に生じ、自ら生ずる者は、黑くして小に、食して滓多し。種ゑて生ずる者は紫にして、大いに之を食へば毛多し。冬春堀收めて果と爲す。生食・煮食、皆佳なり。

季題解說　澤瀉科の多年生草本で、沼だの川だのに自生し、又水田に栽培もする。花は夏秋の交であるが、根を採つて喰べるのは春である。關東が本場で、青慈姑といふ丸型の中粒のものは、東京近在が最も多く、味もいい。正月の組重に使はれるのは多くこれである。さつと煮上げたのを、糸で睡蓮の花のやうな形に切つて組重に入れる。京都には壬生の慈姑と云つて、

小指の尖位な小粒のものがあり、味も青慈姑より美味であるが、産量が非常に乏しいので普通的ではない。大阪にも吹田慈姑と云つて、それと同じものがある、一番不味いのは朝鮮から来る慈姑で、苦味が強く、質も硬い。慈姑は火傷の薬で、大根おろしで摺り卸して塗りつけて置くとすぐ癒る。

【例句】

【一二】烏芋

慈姑　泣つきてゆかしくはゐは何の玉　乙二（たのゝえ草稿）

【參考】くわゐ Sagittaria sagittifolia, L.var. sinensis Makino.（おもだか科）支那原産にして多く水田中に培養せらるる多年生草本なり、肥大なる葉柄二三尺に及び、葉は末尖り末二つに分れて箭形を呈す、地下の球莖は圓くして青く又白きものあり、複目稀に葉間に花軸を描き、白色花を輪狀又は複輪狀に開く、三蕊にして一穂上に雌雄花あり。

烏芋（くろぐわゐ）　くわゐづる　えぐ

【季題解説】新潟地方によく産する。新潟の方言では「ごゐ」といふとほり、莎草科の水草の地下に結ぶ小塊莖を云ふ。地上に出て居る葉は、太藺に似て中は空、いくつかの節にわかれてゐる。春生えて秋うす青い花だか穂だかわからぬものが咲く。泥中の地下莖を冬掘りとつて食用にするのだが、黒慈姑といはれるやうに、形はくわゐにそつくりである。肉は純白色、ただ色があくまで黒く、黒褐か紫褐の色艶をして居るのが特徴である。肉は淡白色、味は淡白で、シヤキシヤキと齒ぎれよく、いくら煮てもくわゐのやうに柔くはならぬ吸物、煮〆などとして珍重する。【一一】慈姑ヲ

ていれぎ

【季題解説】十字科に屬する草本で、オホバタネツケバナと云ひ、水邊に自生する。莖は細く、冬節から葉を簇生する、葉は圓い心臟形で、緣邊に鈍鋸齒を具へ、葉柄が長い。刺戟性の辛味があり、刺身のツマ等として生食する。伊豫の名産であつて、現に伊豫節の一節にも「高井の里のていれぎや」とある。

【例句】

ていれぎ　ていれぎや川より低き西林寺　素　水（ホトトギス）

惠具（ゑぐ）　女蔞（ゑぐ）　ゑご

【古書摘註】【滑稽雜談】萬葉集には惠具と書きたり。藻鹽草には芹の異名と決定して、俊賴の惠具の歎の返しに、仲實のあらふせりと云ふを證歌に引きて、又女蔞と書きてゑぐとよむ由侍り。然れども芹に女蔞の異名なければ、別

の物なるべし。和歌六帖なんどにも、芹と惠具と別に題侍る也。猶識者に尋ぬべし。顯昭云、ゑぐとは女菜と書きてゑごとよめり。くとこと同音也。花すはうにさく。草野・水邊に育る也。或はゑぐとは芹をいふと云ふ義あれど、六帖に芹の外に別にゑぐをばあげたり。但し、若き文には委く明らめずして、物の異名を正さず。名のかはりたれば別にかける事もあれば、一定にあらず。俊頼朝臣はわかなをゑぐとよめり。(一)

【栞草】[藻鹽草] 芹の異名也。云々。顯昭が曰、ゑぐとは女蔞と書きて、ゑごとよめり。くとこと同音也。或は芹を云ふといふ義あれども、六帖には芹の外に、別にゑぐをもあげたり。云々。ゑぐのわかな・ゑぐのわかばえ・ゑぐのわかたちとも云ふ。

註 (一) 詞花集卷十に、「女どもの澤に若菜摘むを見てよめる」と詞書して、源俊頼の歌に「賤のめがゑぐ摘む澤の薄氷いつまでふべき我身なるらむ」と見えてゐる。

季題解説 萬葉卷十に「君がため山田の澤に惠具つむと雪解の水に裳のすそ濡れぬ」とあり、古歌にも「えぐの若葉」「えぐの葉」等とよんであるが、實物はよくわからない。舊說には芹のことだともいひ、又一說には、東北でヨゴ、土佐ではエグといつて、葉は薊に似て小さく、葉のもとは赤黑い毛で包まれ、球根は慈姑に似て白く、味がえぐいのでエグと呼ばれるものだともいふ。(萬葉新講、次田潤氏の說による。)

菰菜

季題解説 春の末、菰に白色の芽が出來る。これを菰菜または菰筍、茭白といふ。眞菰の嫩莖が菌類に冒されて膨大したものである。臺灣や支那で多く出來るが、内地ではあまり見ないやうである。[illegible] 若菰は 夏—眞菰刈る 秋—眞菰の花

蓴生ふる　蓴菜生ふる

季題解説 蓴は睡蓮科に屬する水草である。湖澤池沼に生ずるが、水が古くないと生へぬといふことである。嫩葉及び莖はぬら〱した粘液をもつて被はれてゐる。これを採取して、羹に浮かしたり三杯酢に入れたりして食用に供する。關東では下總邊の沼澤の名物となつてをり、驛でもその壜詰を賣つて居る。この蓴が春の長けるにつれて地下を走つてをる莖から芽を上げるのを蓴生ふるといふのである。[illegible] 夏—蓴菜

水草生ふる　みくさ生ふる　萍生ふる

季題解説 水草類の生ひ初むるのは大概三四月の頃である。主な水草を擧げると次のやうなものである。きんさよも、うきぐさ(何れも微細な花を生ずる)。くろも、ひるむしろ、

ばいかも、えびも、せきしやうも（何れも水中に沈生するもの）。あかうきぐさ、さんしやうも（何れも水面に浮び生ひ、その根が水底に達しないもの）、ひし、ふさも、あさざ、じゆんさい、ひつじぐさ（何れも水底に根を下すもの）。かうほね、はす、くわゐ、みづあふひ（何れも水上に抽き出づるもの）。【[illegible]】萍生ひ初む　夏　水草の花

【例句】

水草生ふる

生ひ出でてきのふ今日なる水草かな　秋櫻子（ホトトギス）
渡舟場の絶えて人無し水草生ふ　水竹居（同）
ひねもすのきら〳〵と水草生ふ　草亭（同）
波たちて波たちて生ふ水草かな　たけし（同）
水底のかたむき生ふる水草かな　凡秋（[illegible]ホトトギス）
水草生ふこゝの板橋いつかなし　すゞゑ（同）
水の面に一葉とゞきし水草かな　豐城（同）
浮草のそゞろに生ふる古江かな　虚子（句集 虚子）

萍（うきくさ）生ひ初む

【季題解説】萍は浮萍科植物の代表的名稱である。浮萍科には三屬凡そ二十四種あるが、我國に自生するものは三屬凡そ六種ある。氣候の相違により土地によりその時期は異るが、大概三四月の頃に生ひ初める。偏平綠色の葉狀體が通常三片相連つて水面に浮垂し、一乃至多數の鬚根を垂れる。稀にこれを缺く種類もある。花被を具へない單性花であつて、夏期或は夏秋に開花し、淡綠色を呈する。主な種類は次のやうなものである。うきぐさ（「紫背浮萍」「水萍」などの文字を充てる。紫背浮萍はうきぐさの葉の裏面が紫色であるところに由來してゐる。細根が多い。）あをうきぐさ（「青萍」、葉の下面が淡綠色で、根が一本だけ著生する。）ひんじも（「品字藻」、葉が品の字の如くに著生するものである。更に枝狀部も伸長して左右に枝部を生ずる。根は一本づゝ著く。）【傍題】水草生ふる（ミクサフル）

【例句】

萍生ひ初む

やよい廿五日云々
芽を出すや心をたねに無根草　鬼貫（俳諧七車）
萍や生そめてより軒の雨　白雄（白雄句集）
萍や池の眞中に生ひ初むる　子規（子規句集）

田芥子（たがらし）　鬼（おに）の田芥（たがらし）　おにぜり　うまぜり

【季題解説】東京の植物園の池に密生する紫色の水草をみづがらし（オランダ芥子）といひ、又田圃の水邊にもあるし山の谷川などにもある「やまがらし」といふのがあるが、いづれも刺身のつまや洋食のつまに用ひられる。

これはどちらも十字花科のものである。同じ「からし」でも田芥子は「うまのあしがた」科の越年生有毒植物である。俳句をつくつてゐるとこんな似た名前をいつか混同してしまひ勝のものである。

田芥子はやはり水田又は濕地に生じ、莖は太く空洞で一二尺の高さに達し、葉は單葉で芹の葉の形に似て居る。「うまのあしがた」「きんぽうげ」など皆同屬で、互によく似た植物である。

わかれた枝のさきに、四月頃から田植時に多數の小さな黄色の五瓣花をつけ、花びらは「きんぽうげ」などと同じく光澤がある。この實は穎粒のあつまつたやうな圓又は橢圓形である。「きんぽうげ」には特有な金米糖形の實がなる。俳句では、きつとこれ等は混同されて居るだらうが、植物の分類では皆はつきりと異るものである。

銀鳳花、深山金鳳花、絲金鳳花、こきんぽうげ、きつねのぼたん等皆似たものである。重瓣の「うまのあしがた」を金鳳花といふのがほんとうらしい。【參照】金鳳華

【參考】 たがらし Ranunculus sceleratus, L.（うまのあしがた科）水田又は濕地に生ずる越年生有毒草本なり、莖は太く空洞をなし、高さ一二尺あり。葉は單葉にして掌狀に分裂し、光澤を有す、春日多く枝を分ち多數の黄色小五瓣花を開き、花瓣に光あり、碎小なる果實は多數相集りて毬狀をなす。

へご　蛇木　桫欏(台灣)

【季題解説】 桫欏科の植物、普通蛇木と稱んでゐるもので、臺灣到る處の山地に自生する木狀羊歯である。高さ丈餘に達し、羊歯類中で一番大きい。葉は蕨に似て長大、四方に開展し、毎葉の裏面に二三箇づゝの子嚢を生じてゐる。葉柄が脱落すると、その痕跡の斑紋が恰も蛇の鱗の如き模樣となるので、蛇木の名があるのである。春、黄毛を被つた新葉が拳狀に、恰もぜんまいの新芽の如く、且つ拳大に大きく捧げ出て來て開くのも奇である。

蘆の角　蘆の芽　角組む蘆　蘆の錐

【古書校註】 【滑稽雜談】 直指抄に云、あしはは し也。はじめの略也。草木の始め也。神代の說によれり。(一)仙覺萬葉抄に云、あしかひとは、蘆の角ぐみ生ずる也。云々。(一)新古今抄に云、蘆のはえ出づるは牛の角に似たり。組むはめぐむ也。

註 (一) 以下を栞草には支考曰として擧げてある。

【季題解説】 早春、汀邊などに蘆の鋭い芽が角のやうに生ひ出づることをいふ。蘆の角がやがて蘆の若葉となり、更に青蘆となつてゆくのである。葉

草に「変考曰、あしのはえいづるは牛の角の如し、組はめぐむ也」とある。からいふ呼び方自身にも、俳諧獨特の面白さがあるやうに思ふ。［參照］角組む荻（ツノグムヲギ）　蘆の若葉（アシノワカバ）

［例句］

蘆の角

我かへせ蘆に角生イ魚白く　言水（俳諧五子稿）
されば社とがりもとけず蘆の角　來山（續いま宮艸）
見へ初て夕汐みちぬ芦の角　太祇（太祇句選）
江をわたる漁村の犬や芦の角　同（同）
蘆の芽に鵰の古巣なつかしや　曉臺（曉臺句集）
　上巳
芦の芽も二葉に成てけふの海　芙雀（淡路嶋）
また寒い濱のやうすや芦の角　三惟（有題發句集）
埋め殘す濠や昔の蘆の角　素香（新俳句）
船上下して茶屋の二階や蘆の角　零餘子（ホトトギス）
やゝありて汽艇の波や蘆の角　秋櫻子（同）
小鱗の見えては失せぬ蘆の角　泊雲（同）
潮退きて簇る芽蘆こゝかしこ　王城（同）
四五本にめぐれる水や蘆の角　蘇甫（同）
蘆の芽に小蝦すいすい流れ來し　晃麓（同）
水底に映れる空や蘆の角　樂天（同）
蘆の角一葉はねたるもの二三　秋津（同）
芦の芽や水尾をひろげて渡舟　梅史（同）
寺島は町となりけり蘆の角　東子房（同）
蘆の芽や杜の多き浮御堂　不釣（同）
浮御堂うつれる水の蘆の角　都穗（續ホトトギス）
蘆の芽の萌え出しもありそゞろゆく　新吉（同）
蘆の角怪しき蟲ののぼりくる　京童（同）
ぐるぐるとまはる芥や蘆の角　王衣（同）
廣澤や落花の中の芦の角　漾人（同）
艀にちらりちらりと芦の角　王城（同）

蘆の若葉（あしのわかば）　若蘆（わかあし）

［季題解說］蘆は禾本科に屬する宿根草本で、水邊に自生する。春、舊根から尖つた角様の芽を出し、やがてみづみづしい葉となる、その若葉をいふのである。概形は芒の大きなもののやうで、高さ一丈位である。蘆の若葉がだんだん繁ると青蘆となる。青蘆は夏である。秋になると、莖頂に大きな穂が出て、圓錐花序をなして多數の花をつけ、後實を結ぶ。實は白毛によつてその撒布を助けられる。蘆の莖は葦簾に作られる。［參照］蘆の角（アシノツノ）

夏―青蘆

例句 蘆の若葉　若蘆の葉に潮滿ちて戰ぎかな　虚吼（ホトトギス）

若蘆や屋根ふきかへし鴨の小屋　春梢女（同　）

角組む荻

荻の角　荻の芽

季題解説 早春、荻が水邊に角の如き芽を現はすのをいふ。參照 蘆の角

荻の若葉　地理―荻の燒原

荻の若葉

若荻　荻の二葉

古書校註

【年浪草】王安石の字説に曰、蘆之を葭と謂ひ、其の小なるを萑と曰ふ。荻之を蒹と謂ひ、其の小なるを葦と曰ふ。荻は強くして葭は弱し（略）荻の初生、蘆筍の如く生じ、漸く葉の狀分たるゝを若葉と云ふべし。

季題解説 荻は水邊及び原野に生ずる宿根草本である。その匍匐根は地中に蔓延して毎節に莖葉を抽き、高さ五六尺に達するのがある。晩春荻の角がのびて嫩葉を出す。葉は芒に似て濶大であるが、鋭齒は持つてゐない。

參照 角組む荻

例句 荻の若葉　物の名を先とふ荻の若葉哉　芭蕉（笈日記）

芭蕉植　ばせを植てまづにくむ荻の二は哉　同（續深川）

芽張るかつみ

かつみの芽　眞菰の芽

季題解説 古歌に詠まれてゐる「はながつみ」については諸説があるが、まこもの花であるといふのが通説である。芽張るかつみは即ちその眞菰の芽をいふのである。眞菰の嫩芽は食べられるといふことである。參照 菰菜

若菰　夏―花かつみ

若菰

菰筍　菰角

古書校註

【滑稽雜談】和歌によめる若菰は、たゞ初生の角ぐめるをいへるなるべし。俳には筍の如き者をも亦作るべし。此の者女の黛とし、又禿髮に之を傳ふ。

【年浪草】本朝食鑑に曰、菰、麻古毛と訓ず、古は古毛と訓ず。江湖池澤の中に生ず。二三月白芽を生じ、筍の如し。是、菰筍・茭白・菰菜也。之を

若菰と謂ふか。

【季題解説】まこもの苗芽のことである。春古い根から新芽を生ずるが、この芽が伸びて間のないころのもので、丁度筍のやうである。芽張るかつみといふは即ちこれである。牛久沼邊に行けば見ることが出來る。【參照】芽張るかつみ　菰菜

鷺苔（さぎごけ）　はせばな　白鷺苔（しろさぎごけ）　蔓鷺苔（つるさぎごけ）

【季題解説】田圃の畦や堤塘の邊りに、盛んに生えてゐる玄參科、多年生の匍匐草で閑養せられることもある。春から夏へかけて、淡紫色、時には白色の假面狀の可憐な花が吹く。萼は五裂し、花冠は脣形をなして花脣が大きい。雄蕊四の中、二は長く二は短い。雄蕊の柱頭が兩裂してをり、物が觸れる、忽ち運動を起して閉合する。

【參考】さぎごけ　Mazus stolonifer, Makino.（ごまのはぐさ科）畦畔等に多き多年生草本にして、莖は短く花後匍匐枝を出して長く引き繁殖す、葉は對生し倒披針形をなし、邊に鋸齒あり、花は淡紫色の總狀をなし每花小梗を有す、萼は五裂し、花冠は脣形をなし、花脣は濶大なり、春より夏に亙りて開花す、一種白色のものあり、サギスゲと云ふ。即ち本種の異品なり。

水芭蕉（みづばせう）

【季題解説】山間の沼澤などに自生する天南星科（テンナンシヤウ）の多年生草本である。葉は芭蕉に似て長さ二尺餘、幅一尺位の大きなものもある。葉の短い莖が根もとで相抱き叢生する。春四五月頃、葉門から莖をぬき出し、淡綠がゝつた白色の佛焰花（佛焰花といふのは、すべて海芋（カイウ）の如く漏斗形、即ち佛にさゝげる灯の焰のやうな形をした苞を、あふむけに咲く花のことをいふ）を咲く。この佛焰苞は薄茶色の、土筆の穗先のやうな雌花を一本、包むやうに抱きかゝへてゐる。水芭蕉は主に北國の沼澤などでなくては咲かない。樺太近幌（チカホロ）附近の、沼とも澤ともつかぬ濕地には、この水芭蕉が二尺位の高さに二三町位一面に生え茂つてゐる所がある。この鐵道沿線一體は殆どこの水芭蕉で埋められてゐるさうである。又松本から信州戸隱山へゆく途中、飯綱山麓の湖水のほとりの濕地にも、ざぜん草とこの水芭蕉が非常に多い

さうである。北地では、四月はまだ雪があるので、五月以降六七月にならねば花は咲かないといふことである。

鹿尾菜（ひじき）　鹿角菜（ひじき）　羊栖菜（ひじき）　ひじき藻（も）

古書校註

【滑稽雑談】和俗つねに鹿角菜をひじきとせり。按ずるに、つのまたと云ふもひじきの類也。和産にある物、又一種也。伊勢より出づるは鹿角菜也。西海に産する所、鹿尾菜なるべし　其の形わらびの如く長し。尤も鹿毛なるべし。鹿角は、股ありて牡鹿の角のごとし。（伊勢物語に云、昔男有りけり、けさうしける女のもとに、ひじきもといふ物をやるとて、思ひあらばむぐらのやどにねもしなんひじきものには袖をしつゝも。（一）

註（一）有原業平の歌

季題解説　海中の岩石上に附着して成長する食用藻類であるが、ふのりの如く水上に露出された乾いた岩面には生えずに、高潮時潮の達する高さ以下に生える。春發芽し翌年の夏に至つて枯死する。色は若い時には黄褐色であるが、長ずるに從つて黒褐色に變ずる。長さは通常一二尺ではあるが時に人の丈にも及ぶのもある。幼時の葉は短くて太く、袋の形をなし、中に空氣を含み、水面に浮く。これをふくろひじきと云ふ。成長したひじきの葉は棒狀である。ひじきの發生は非常に密であつて、岩と岩との間の狹い水面などは、浮いてゐるひじきの爲めに全く蔽はれることがある。浪が引くと共に、密生したひじきが岩に垂れる狀は眞に壯觀である。紀州串本邊では鹿尾菜は春の央ば頃に採刈される（ひじき刈）。鹿尾菜採取の初日は各部落によつて定められる。この日以前に採取したものは咎められる。この日をひじきの口明けと云ふ。定刻になれば區長の使丁が海岸に來て法螺貝を鳴らし、待機した採取人はこれを合圖に一齊に刈りはじめる。但し、初日以後は餘り取締りは嚴重でない。ひじき刈は又、村の者に取つては一種の遊樂の日で、小舟に、鍋釜・米・味噌醬油などを積み込み、一家中磯に出て鹿尾菜を刈り、午休みには岩上で飯を焚き、魚を釣つて行厨を作る。採取期間は一定せられ、若干時日の禁採期を置いて、二度三度と舉行せられる。これを二番口・三番口などと云ふ。採取した鹿尾菜は蓆の上に擴げこ乾燥すると、黒色に變ずる。これを俵に入れて市場に送り、また自家用として貯藏する。通常味噌汁の實として、または鹿尾菜飯として食ふのである。

例句

鹿尾菜

戀よらんひじき干たる蜑が門　其園（續虛栗）
刈りためし鹿尾菜の山や置き忘れ　臼晉（同　人）
籠に早滿ちて淋しき鹿尾菜かな　夏山（ホトトギス）
流るゝと鎌にかけたる鹿尾菜かな　十馬（同　）

鹿尾菜　ひじき刈風の挨拶かはしけり　今夜（續ホトトギス）
波の上に現れそめしひじきかな　刺花（同）
ひく波に出でし鹿尾菜を刈りにけり　樹沙丘（同）

[illegible]　ひじき Turbinaria fusiforme, Yendo.（褐藻類）淺所の岩礁上に生ず、幼時は黄色にして劍狀の肉厚き葉あり、後之を失ふ、長ずるに從ひ褐色に變じ、高さ二—三尺に達し、細き軸部の周圍に短き棒狀の枝を生ず、春日發芽し、翌年の夏に至りて枯枝す、枝は單條にして内部中腔となり、其の雨端に細きか又は上部膨れるものあり、之を「ふくろひじき」と云ふ、食用とす。

海雲　水雲　海蘊　海雲汁

古書校註
【滑稽雜談】（一）和語、海雲の字を用ふる儀あれば、相近きか。雲氣の散ずるに似たり。又薀に音相通ずる故也。此の者諸國に產す。殊に紀の若浦、又阿波・讃岐の物上品とす。一說、これ海藻の嫩苗なりといへり。本草にも海藻の次下にならび記せり。氣味の說も亦相似たり。猶考ふべし
【年浪草】和漢三才圖會に曰、海溫・水雲。俗に海雲の二字を用ふ。狀亂絲の如く、青黑色、柔かに滑り、長さ數石、石上に生じて水上に浮ぶ。將に之を採らんとすれば、滑りて得難し。鮑の空貝を用ひて之を刮け取る。阿波の鳴戶・泉州の岸和田及び對州の產、肥え太るを佳と爲す、薑醋に和へて、之を食す。
註（一）和名抄に「水雲」となつてゐるに對する其彦の說。

[illegible]　褐色藻類であつて、通常淺海の岩石などに著生する。線狀をなして細長く、多數の枝を不規則に出し、全體極めて粘滑である。だからこれを刮取るには鮑の殼を用ゐるといふ。色は青、赤、黑などがある。春季搾取して、三杯酢、酢味噌和へ、汁の實などとして食用とし、又これを鹽藏する。

例句
海雲　貫之も精進の友よ海松海雲　許六（五老井發句集）
しほ染て心もかろし海雲賣　笠凸（其袋）
松籟や蜑のとぼその海雲桶　氐人（ホトトギス）
波立てば逆立ちもする海雲かな　耿陽（同）
山陰道但馬海岸
波の色變りてなびく海雲かな　晨雨（續ホトトギス）

若布　和布　にぎめ　稚專　若布汁

古書校註
【御傘】春也。かるは夏也。

【滑稽雜談】本草に曰、海藻。○萬葉集、雅海藻。○順和名に曰、海藻。和名、邇木米、俗に和布を用ふ。○これ俗に云ふわかめ也。是又、伊勢・志摩・三河・若狹、其の外西海の産多し。阿波の鳴門の者、殊に多くして、其の布甚だ大也。
石蓴(賀多布)。藏器本草に曰、石蓴、南海に生ふ。石に附きて生ず。紫菜に似て色青し。○按ずるに、和産の者おほくは紀州賀多浦に産す。故に俗呼んで稱す。是裙帶菜の一種也。本草に云ふ石蓴、凡そ此の者なるべし。

【栞草】麁布に對して弱布といふ。

季題解說 昆布に似た緑褐色の海藻である。全國の近海で産するが、關西では加太浦が有名である。

加太浦では、三月初め(年によつては二月末)から五月二十日頃迄若布を刈る。舟に乘り、箱目鏡で覗きながら、一丈程の細い竹の尖に小さな鎌をつけた若布刈竿で刈る。刈つた若布は繩に吊り掛けて干す。一日で乾くが、水洗ひせぬ故濕氣の多い天氣にはじめじめする。ひら若布(のし若布)と云ふのは、若布の緣の柔い所をつまみ採り、簀の上に四角に並べて干したもの。海苔の代りに卷鮓をつくる、これを若布鮓といふ。普通汁に刻み入れるのをかもじ若布といふ。古は三月中浦人苅りて玄ケ島の歳上のものを江府へ獻上す、と名所圖繪に記してゐる。

例句 若布

神主の和布にそへものや貝抄子　沾徳(俳諧五子稿)
草の戸や二見のわかめもらひけり　蕪村(新五子稿)
霖雨に生かへりたる若和布哉　同(落日庵句集)
春深く和布の鹽を拂ひけり　召波(春泥發句集)
しづくせし今朝の眼にあり燒わかめ　乙二(をのゝえ草稿)
一浦は若和布に黑む日和哉　一柳(類題發句集)
春既に若和布の骨のかたきかな　月斗(同人)
ほつれ毛を嚙むもあはれや若布賣　萬戸(ホトトギス)
をりからの若布賣かや去來抄　水醒(同)
風埃かぶり消ぬめり若布賣　青畝(同)
干されある若布のひまの海の色　行々子(續ホトトギス)
舟べりにかけ流しある若布かな　憲郎(同)
舟べりにかゝりて光る若布かな　白檜(同)

若布

屋根の上に若布干したり伊良湖村　耿陽（續ホトトギス）
若布賣山には雪のありにけり　櫻坡子（同）
來る波にひつかけ拾ふ若布かな　何蟬（同）

【参考】　わかめ〔Undaria pinnatifida, Sur.〕（褐藻類）北海道東海岸を除ける全國近海に生ず、長さ二三尺、葉の中央に縱に走れる扁平にして稍厚き一條の中肋を有し、其の左右に羽狀に缺裂せる多數の柔軟なる裂片を有す、下部は扁柱狀の莖となる、春、莖の兩側に成實葉と稱する厚き襞を生じ、中に生殖器を藏す、此を俗に「みゝ」又は布蕪と云ふ。此の外ヒロメ、アソワカメの二種あり、食用とす。

海苔

紫菜　紫海苔　甘海苔　淺草海苔（淺海苔）　淺草海苔　品川海苔　葛飾海苔　十六島海苔　隠津海苔　仁保海苔　市海苔　狸々海苔　瀨戸海苔　索麪海苔（海索麪）　頭髪海苔　伊豆海苔（以上同）　岩倉海苔　富士海苔（芝川海苔）　和歌海苔　水前寺海苔　壽泉海苔（以上同）　生海苔　海苔の香　海苔場　干海苔　燒海苔

【古書校註】【滑稽雑談】　海苔は鹽のりの類、河苔は水のり也。和名に云ふ、河菜また同じ。古今集の秘傳とするかはな草は、のりにあらず。是は蟾と云ふ物といへり。河蟾をかはなと略する由也。猶口傳有るべし。

青苔。（略）和産伊勢浦の者上品とす。

甘苔（略）和に生ずる紫菜も種類多し。其の中に下總國葛西浦の產上味也。是を武州淺草に一製するは云、多くは淺草苔と稱す。其の色正紫也。其の外甘苔類諸國より出づる也。然れども葛西の者に及ばずと謂へり。願の和名なんどに兼名苑を引きて、紫苔と別種にのせられたり。然れ共皆甘苔の類なるべし。

鷄冠苔。（略）牡鷄の頭にある肉冠に似たり。其の色赤し。故に和名を鷄冠菜と稱するならし。志摩の浦の者上品とす。

於期苔。（略）其の外に産する地多し。富士苔・日光苔・肥後の菊池苔、これらは川苔也。安房に小湊苔・はどのり・生家の紐苔、能登に絓の紐苔、出雲に十六島海苔、備前に瀨戸苔、肥前に五島松苔、肥後の百足苔、對馬の昆布苔、長門の向津奥苔、其の外有名無名の苔類諸國より出づる。

【註】○なほ年浪草には、櫻苔・紫苔等の記載がある。

【季題解説】　海藻の一種で、多く風波靜穩なる內灣の淡鹹水の混和する所に生ずる。産地として品川灣は最も有名である。關西では和歌浦が名高い。和歌の浦の海苔について少し記して見よう。先づ「海苔粗朶」は約一丈の女

竹を舟で運び、干潮時に檜の様な棒で川岸に穴をあけ、二三本づゝ一束ねにして植付けてをく。これに海苔が着くのである。採取の期間は十一月中旬から四月上旬までであるが、採取開始から二月上旬までに採れるのが良質で、二月以降は次第にあをそが交る。故に海苔採の最盛期は十二月以降一月末日までである。小舟に籠二つ三つをのせて海苔場へ出掛ける。海苔採りは殆ど女で、それも年の行つた女が多い。そして皆ネル或は布で顔を包んでゐる。和歌の浦人は北風よりも西風の吹き荒ぶのを喜ぶ。採取の時間は干潮の前後四五時間である。潮が満ちてくるに從つて、籠を満した海苔舟が戻り始める。採取を終へた舟は粗朶の間に作られた舟の通路や、観海閣から不老橋へかけての汀で海苔を洗ふ。幾十艘の海苔舟が芥やあをそを選り分ける光景はまことに賑かである。洗ひ終へた海苔は籠のまゝ持ち歸る「（昨今盛に使用される海苔繰機で、細かく刻んだ上で、持歸るものもある。）かくて海苔漉場では、この海苔を直徑二尺乃至三尺の海苔砧に置き、菜刀で叩いて刻む。それから海苔漉きとなる。大盥に水を一杯湛へ、刻み海苔を少しづゝ入れて攪拌する。舟の淦汲みに似た杓を以て大盥の海苔を掬ひ、簀の枠（縱七寸、横六寸）へ流し込む。この海苔簀は次々に干板ノ針へ引掛けてゆく。この漉加減は非常に手練を要し、下手にやれば厚薄が出來たり、一方へ偏つたりする。海苔簀で一杯になつた干板は直ちに干場へ運ぶ。干場の一隅に漉場があるわけである。海苔干場は北側に高さ一間位の藁垣を設備し、これに海苔簀を凭せて乾かす。二三時間もすれば乾き上り簀から剝がす。午前中に採取した海苔は午後に乾燥を終へて取り入れる。午後採取の分は大概翌朝漉く。〔同類〕黑海苔ノリ　鶏冠菜ノリ　青海苔ノリ

人事―海苔掻カキ

〔例句〕　海苔

鯛よりは海苔をば老の賣もせで　芭蕉（[illegible]）

海苔汁の手ぎは見せけり淺黄椀　同（[illegible]）

おとろへや歯に喰あてし海苔の砂　同（今日の[illegible]）

行く水や何にとゞまるのりの味　其角（五元集）

諏訪に海苔の中行小舟哉　蕪村（落日庵句集）

柴にとる海苔大分も見えぬ也　召波（春泥句集）

生海苔の波打際や東海寺　同（同）

此比の朝夕やすし海苔二枚　蓼太（蓼太句集）

えりわけむ眞蘇枋の小貝海苔の屑　几董（井華集）

海苔たゝく家とて枚を入やすし　成美（成美家集）

海苔のよるなぎさも過ぬ馬のうへ　乙二（をのゝえ草稿）

松風や時うつりして海苔の寄る　同（同）

山深く來て海苔の香はまさりけり　梅室（梅室家集）

海苔の香や障子にうつる僧二人　同（同）

海苔

のりの香を掃ても殘る一間かな　梅室（梅室家集）
わりなしや海苔に纒るうつせ貝　二柳（續明烏）
門々に海苔干頃や梅の花　擧遠（花笠）
淺草寺
浦里の櫻咲けり海苔の味　士川（花櫻帖）
交りの海苔引裂てくはせけり　夜梧（天狗問答）
行德や汐みちくれば葛西のり　破扇（玉子酒）
海苔買ふや追はるゝ如く都去る　釋寺洞（ホトトギス）
海苔干すや町の中なる東海道　羽公（同）
海苔乾く音を樂しむ日和かな　秋風人（同）
海苔粗朶の見えわたりけり不老橋　泊月（同）
緣先を海苔篊下けてゆきゝかな　孤山（續ホトトギス）
和賀の浦
鹽釜の岩に立てかけ海苔を干す　奇[illegible]（同）
海苔干場花のともしき梅のあり　京童（同）
海苔干して古き浦曲のつゞきけり　夜潮（同）
おもむろに遠ざかりけり流れ海苔　七里峽（同）
上ゆくと下ゆくとあり流れ海苔　自得（同）
古粗朶に寄せかけてあり海苔障子　拓水（同）
居殘りて一人すくへり流れ海苔　一魯（同）
海苔を買ふ三斷橋のたもとかな　盧子（同）

【參考】あさくさのり　總稱　あまのり　Porphyra tenera, Kjellm.（紅藻類）灣内干滿線間に洪をたて培養せしむるを常とすれど、滿潮線の波浪の達する岩石に十二月頃より三四月頃まで盛に發生す、廣披針形又は橢圓形にして分岐すること少し、色は暗紫色又は紅紫色を呈し、長さ六—七寸、幅五—六分より四—五寸に達す、これを採りて所謂、乾海苔を製す、此の外各地沿岸に生ずる種類極めて多し、普通岩ノリと稱す。

黒海苔（くろのり）

【季題解說】荒海の巖に生ずる黒い海苔を云ふ。味ひ美である。紫菜（アマノリ）の一種で、若狹の海に產するといふ。【季題】海苔ル

鶏冠菜（とさかのり）

鶏冠海松（とさかみる）

【季題解說】外洋に面した稍深い海底の岩石に生ずる。伊豆七島や九州など產額が多い。形は扁平で角又を幅廣くしたやうなもので、その緣邊に無數の小さい副枝が派出してゐる。鮮紅色で美しい。春先、時化のあと、激浪にちぎれて波打際に打寄せるので、暴風の後の濱は鶏冠菜拾ひで賑ふこと

がある。三杯酢にして、よく法事等の精進料理に使用せられる。美味といふ程ではないが、味に癖がなくてよい。煮凝らしていろ〳〵の調味料を加へたり、それを更に味噌漬にしたりして食べる地方もある。鶏冠菜は乾して永く貯蔵することが出來る。［參照］海苔（ノリ）

海髪（うご）　おご　江籬（おごのり）　なごや

［季題解説］　紅藻類の一種であつて、全體暗紅綠色を呈する。形狀、亂髪によく似てゐる。長さは普通一尺くらゐ、枝の表面に疣狀の小突起を生ずるものがある。沿海各地の靜穩な海底の岩礁に生ずる。春採つて刺身に添へたり、酢味噌で喰べたり、又晒白して糊料に供する。［參照］海苔（ノリ）

［參考］　おご　一名おごのり、なごや Gracilaria confervoides, Grev.（紅藻類）靜穩の灣内の淺所に生ず、紅褐色の紐狀をなし、直徑一厘、上部に至るに從て細し、枝は不規則にして少しく縊る、全長五―六寸、二―三尺に達するものあり、表面滑澤なり、夏季枝の表面に半球狀の疣狀の隆起を生ず、多く熱湯を投じ、綠色に變じたるを刺身のツマに用ふ、寒天原料及糊料ともなす。

白藻（しらも）

［古書校註］　【滑稽雜談】　多識篇に云、龍鬚菜、加古乃利。○これ又、和俗に云ふしら藻也。紀伊國若浦・丹後久美・若狹青井などにて堅苔と稱す。伊豫來島・備前堅浦など白藻と稱す。異名一種也といへり。

【年浪草】　時珍曰、龍鬚菜、東南海中の石上に生ふ。叢生して枝葉無く、狀柳根の如し。鬚長き者尺餘、白色なり。醋を以て浸して之を食ふ。○王氏彙苑に曰、莖は繒（キヌイト）の如く、長さ僅かに尺許り、色始め青し。居人之を取つて水に沃（ソソ）くれば乃ち白し。

［季題解説］　淺海の岩石に生える食用藻の一つである。丸い多數の枝を持ち、色は黄綠色で半透明である。春採つて生食したり又は寒天に作る。また枝が乏しくつて一尺五寸くらゐに伸びる鮮紅色をした「蔓白藻（つるしらも）」といふのがある。これも食用とせられる。

［參考］　しらも Gracilaria compressa, Grev.（紅藻類）外海に近き靜かなる淺海に生ず、概形オゴノリに似るも所々に叉狀の處あり、全體圓柱狀をなし、普通黄綠色を帶び、半透明狀を呈す、不規則の多數の枝を分ち、基部縊ることとなし、質比較的脆く容易に折るるも、乾燥する時は彈力性を帶ぶ、オゴノリと同じく、枝の側部に半球形をなせる褐紫色の疣狀隆起を生ず、食用とし又寒天用とす。

青海苔（あをのり）　いとあをさ　長青海苔（ながあをのり）　笹海苔（さゝのり）

【季題解説】綠藻類の一種で、內灣、河口などに繁生する。圓盤狀根狀物があつて、それより澤山の細管狀體を發生する。長さ二三寸から七八寸であつて、名稱の示すやうに鮮綠色である。乾燥せしめ、火に炙つて手で揉み、米飯の上にかけ又は煎餅などに混入して食する。（一[illegible]、海苔）

【例句】

青海苔

青のりも和光の塵のひとつ哉　許六（五老井發句集）

青海苔をとゞけて白し磯の波　夢太（夢太句集）

青海苔や石の窪みのわすれ汐　几董（井華集）

青海苔や葭簾に付し蜑が軒　闌更（半化坊發句集）

青海苔やまことしやかに粗朶の尖　清三郎（ホトトギス）

【參考】あをのり Enteromorpha sp.（綠藻類）全國到る處の川口の如き所に生ず、其形種々あれども概ね細管狀をなす、鮮綠色にして太さ一樣ならず、長さ二、三寸より七、八寸に及ぶを常とす、乾して食用とし、香氣を愛す、又原色のまゝ、又は染色して[illegible]紙等に抄き以て模樣とす。

（兩角製本）

昭和八年十一月十六日印刷
昭和八年十一月二十日發行

俳諧歳時記（春の部）

編者　山本三生

發行者　山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者　村尾一雄
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

東京市芝區新橋七丁目十二番地

發兌　改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一二一一－二四

（株式會社秀英舍印刷）